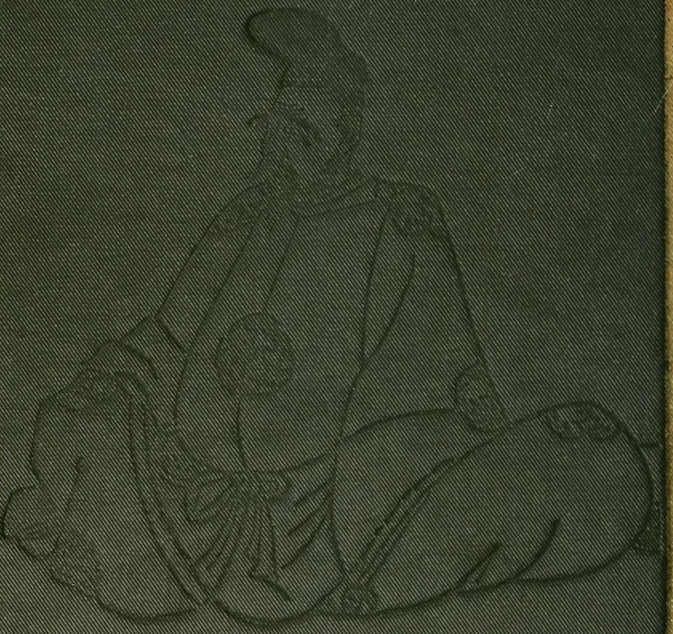
國文註釋全書

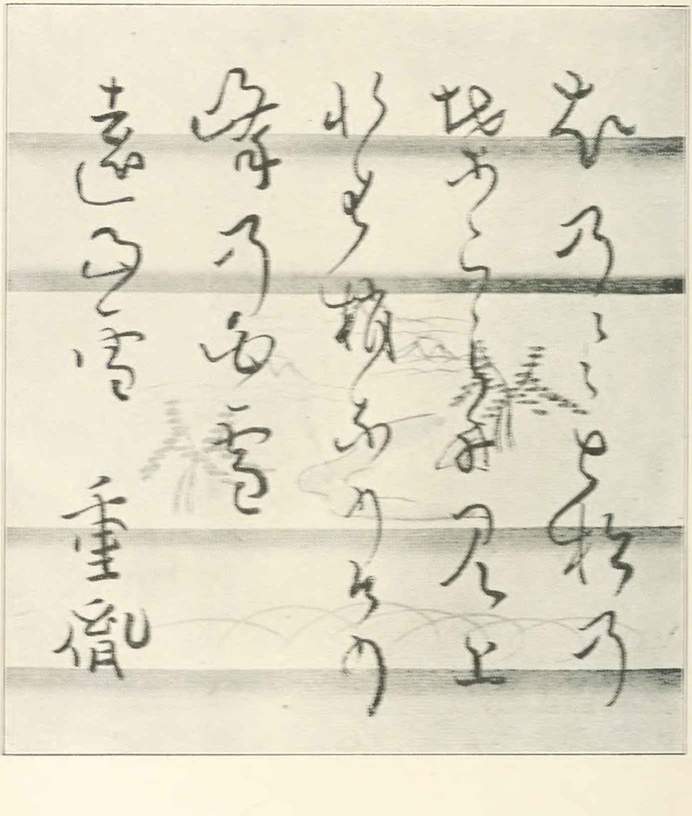


文學博士本居豐穎
文學博士木村正辭校訂
文學博士井上賴圀

國文註釋全書

東京
國學院大學出版部

鈴木重胤翁染筆



山形縣秋野庸彦氏ヨリ室松岩雄ニ寄贈セラル

祝詞講義

下


國學院
大學出
版部

延喜式祝詞講義十一之巻

嘉永三年三月七日

淡路國　鈴木重胤　著
薩摩國　竹内經成
出羽國　石田常成　按

○鎮火祭（ホシヅメノマツリ）

神祇令に季夏鎮火祭と有る義解に謂在二宮城ノ四方ノ外角一卜部等鑽レ火而祭爲レ防二火災一故曰二鎮火一と見え四時祭式大祓御贖に次て鎮火祭と有り其細書に於二宮城四隅一祭ると見えて上に同し齋宮式にも野宮鎮火道饗祭有て齋宮此に準せらるゝ由所見たり年中行事秘抄六月晦日條に鎮火祭道饗祭を並べ載たれば決く六月十二月晦日の夜に至て祭らるゝなり（但秘抄には鎮火を鎮花と誤れるを今は正して引けり此は火と花と同音なるを以て混れ込だる者なり倍鎮火ノ字は保志豆米と訓べし比志豆米とは訓べからず大同類聚方三十一に保鎮と作り）公事根源抄（六月卅日ノ條）には鎮火祭卜部氏の人火を打て宮城の四隅にて祭事有り火災を防がむ爲とかや」此祭禮の間秘術多く侍る由承侍り」と見え又同書（正月條）に火災御祭と有て此も月毎の事なり火事を防ぐ功能有る由云々と見えたり斯在ば月毎にも行はれ二季の晦日には其大祭を行るゝ事と見えたり其は同書にも見えたる如く毎月に七瀬御祓と云事有て然て二季の大祓を修せらるゝと同じ事なり（但右の火災御祭ノ條に云々と有る文は蒼仲行事の祭書と云物に見えたりーと有れども精無き御にな り彼に與たる事の有りとて其と定めむには未だ見て本た失ふなり年中行事秘抄にも禁中子日月晦日竈神上レ天白二人罪状一大者奪レ紀々者三百日也小者奪レ算算者一日也云々と有れども彼は別なる事なり）

宮城とは内裏の外廓にして謂ゆる外重（トノヘ）なり（京城とは異なり思ひ混ふ可からず京の外廓を申て京城と云て道饗祭は此にて行はる）四方外角は禁秘御抄階梯に按公家被レ行二四角四堺祭一之時云々其四角者宮城四維是也と有るが如し但令に在二宮城四方外角一と在ノ字の有を以て見れは宮城の四維に定まれる祭處有るなり（但社と云ふには有る可からず其時に當りて祭壇を構ふる定りたる處有るを云ふ）卜部等鑽レ火而祭レ之と有るは今日大祓を行はれて天下の罪穢の除こり清まる時に當りて更に清火に鑽改め易らるゝを云也（卜部の此を主り仕奉る所由は下に云ふ可し）爲レ防二火災一故曰二鎮火一は上に引る公事根源抄も此文に依て火災を防がむ爲とかや」と記れ且火災御祭と云名の有るなど此祝詞に依て此彼參考るに神祇令の傍注に鎮火は軻遇突智神也と記せる如く祭神は同じ火産靈神に御在れども常に忌火庭火祭などに祭らるゝとは意味異りて失火の災異を

防がむ爲は云も更なる事なるが猶其も末にて其本を云ふ時は伊邪那岐伊邪那美二柱神の御靈に資て風火金水土の五元神成坐て萬物を造化し給ふ其風は氣なり火と最親しくして不測の妙用を施し給ふ事にて氣は火に資て動き火は氣に資て神（クシビ）なる所にして風と爲り聲と爲り光と爲り形と爲る所此に根據（モトツカ）ざる者有る事無く又全世界の間に於て火許り清淨なる物有る事無く又至純なる物有る事なく外物を受ずして能く外物に透入りて變化窮極無き神物たり神代紀に草木沙石自含レ火と有る古傳此也 外物を受ずと云るは外物を火中に受て保つ事能はず燒盡すを云ひ外物に透入とは草木沙石の自火を相容れ相受るを云ふ譬へば潮水の夜明なるは火氣を其中に存つが故也雲霧の上下し雷電を發す如きは氣中に火を存つが故也金石の相激（キシ）りて火を出す如きは土中に火を存てるが故也此等を以て餘は准へ知べし 偖此天地間に在ゆる火に於て異なしと雖も其相容れ相受る所の器に依て清火も忽に穢火と成竟る事也此を以て正親町公通公御說に水の穢は見え易くして火の穢は見え難し其火を用るに心す可しと宣り 火の器に依て清濁の分別有る耳ならず氣も亦然り同じ虛空を吹風も東西に依て生殺の差あり南北に依て寒暖の異有るを思ふ可き者なり 清火は造化を爲す顯國の火なり穢火は生物を亡ふ黃泉國に屬る火なり火に異無しと雖其觸るゝ物に依て清濁を殊に爲る事にて火產靈神の甚く惡み嫌ひ給ふ所なり 或云火に異無しとならば穢火と雖も同じ火產靈神の恩賜なり其を惡み嫌ひ給ふことも心得ず答曰屎尿は人の體內より出る物なるが其本は戴き食たる物の渣滓なり然るを屎と爲り尿と爲る時は我ながら手も觸れがたく惡み嫌ひて人若我屎尿を以て我身體に塗らば其本我に出たる物なりとて許さむや此も同一理なり 是を以て伊邪那美命は其火神を生坐し御祖神に坐せども伊邪那岐命の黃泉國に追往坐し時に悔哉不二速來一吾者爲二戶喫一と答白給へる悔哉の御言甚悲しく想像り奉らるゝを思ふべし此に依てぞ忽に御性を易させ給ひて其夫神をさへて追窘め奉らむとは物爲給へりける伊邪那岐命は其黃泉戶喫は爲させ給はざりしかとも其大御身に着給へる物は其穢に塗（マミ）れざるは非ざれは其脫棄給ふ物に成れる病神と禍神と有るを何れも其黃泉に屬る神なるが故に火產靈神の御靈幸へる顯國の清火は甚く畏み怖るゝ事人の能く知れるが如し 然る禍神に交これる盜人害夫などの白晝には得物せず闇夜灯を消て物爲るは勿論妖鬼の人を惑はせ病着せなど爲るも天日の光を憚りて其御光の及ばせ給はぬ隈處に在て事とは夜行ふなど此なり 然ども世人其火忌を嚴重に愼しみ物爲るに非ざれば火產靈神甚く惡み嫌ひ坐が餘りに御怒坐して其家をも身をも守護給ふ神を率て去給ふ此に於て彼黃泉國に屬る神等入交りて益々相交こらしむ是を以て物も事も成る事無くして損ひ亡ぶる耳なり 刀工の穢火に依て成らず物を染るに穢火を用ふれば光澤無く其色變るなど穢火の現に物を損破る證なり 所以に高天原に事始て皇祖天神の

此天津祝詞の太祝詞事をしも皇御孫命に事依し奉給へる也所以に六月十二月晦日に大祓を行はせ給ひて其穢の事を兼て罪咎の限りを悉く祓ひ却はし給ひ皇大宮の四角の外重にて鎮火祭を爲し給ふとして更に忌火を鑽改めさせ給ひて其神氣を充滿せ奉らせ給ひて穢火を遠く退方の極みに追却はせ給ふ大御政なむ此鎮火祭也ける 然るは其黄泉國に屬る穢火の有る時は火產靈神一連び荒び坐て國の殃災出來ればなり 所以に鎮火道饗の二祭並行はれて常にも此を四角四堺の祭と云由公事根源抄に見えたり西宮記に四界祭陰陽寮向二四界一祭以二藏人所人一爲レ使四角祭陰陽寮宮城四角祭有レ使所ノ人以上天下有疫之時陰陽寮進二支度一料物官宣 と有るは天下疫癘の行るゝ時の事にて常例とは異なりと雖四角鎮火祭四界道饗祭と相並び行はるゝ證なり 但此二祭共に卜部の職掌たる所なるを其頃既く陰陽寮に移れるなり然ども公事根源抄には此二祭を卜部氏の行ふ由記せるは神祇令に依れるか但當昔尚卜部の行ふ事にて有りしか東鑑二十六に疫癘流布時被レ行二四角四境鬼氣祭一と有り 此を以て見れば令義解に爲レ防二火災一故曰二鎮火祭一とこそは有けれ唯に失火の災を避ぐ爲のみには非ず火の穢に依て起る所の殃災を防ぐ爲なりけり卜部等鑽レ火而祭と有るに思を潛めて考ふ可し猶鎮火道饗二祭相並び行はる可き所由有て少緣ならぬ事共なむ有る其は道饗

祭八衢比古八衢比賣神の下に云ふ可し○幣物は四時祭式六月祭條に鎮火祭於二宮城四角一祭五色薄絁各四尺倭文四尺木綿五兩麻一斤庸布二段鍬四口米酒各四升鰒堅魚各一斤五兩腊四升海藻一斤五兩鹽二升瓱坩坏各四口檞四把匏四柄藁四圍と見えたり此は四所に分配る可きを一に都たる員數なり 齋宮寮式なる野宮鎮火祭料物此に同じ但此に米酒各四升と有るを酒四升と有て米の事なきは脱たるならむ其の藁を寮式には薦一枚と有る耳異なり 考道饗祭條に此式は令本に大祓鎮火道饗と次てゝ書しは古の書體を知らぬ者の態也故令大祓道饗鎮火と爲り何ぞと云はゝ神祇令の古本には一神衣二三枝祭 三大忌祭四風神祭と書て右左右左と横に讀事にて一月並祭三鎮火祭二道饗祭と有其讀べき次序を義解に凡讀二此四祭一者先讀二神衣一其次三枝其次大忌其次風神與二公式令連署一同以下諸祭並准二此例一と云るにて著し令も今本此次序を誤りぬ 此式の祭共の次も同晦日の中に先大祓次に道饗其夜に入て鎮火は行ふなれば例を待ずして著かりけり と有て此次序を改られたれども大祓鎮火道饗と次序たる事獨此祝詞式耳には非ず四時祭式も然にて先大祓次に鎮火祭於二宮城四隅一祭云々道饗祭於二京城四隅一祭云々と見え齋宮式なる野宮の六月祭十二月准レ之にも大祓鎮火道饗と次でゝ全く今本の誤とも見えざれば從ひ難きに依て今は本の任に闕つ然れば考に令も

今本には此次を誤りぬ」と云れたる今本の方却て正しくて古本の方に錯亂有むも知べからざるなり後には出來れゝども公事根源抄にも鎭火祭は大祓の次にして道饗の前に在り

高天原爾神留坐皇親神漏岐神漏美能命持氐皇御孫命波豐葦原乃水穗國乎安國止平久所知食止天下所寄奉志時爾事寄奉志天都詞太詞事乎以氐申久

高天原爾神留坐云々已に上に云り但皇御孫命波豐葦原乃水穗國乎安國止平久所知食止天下所寄奉志時爾と云るに深き意味有る事なり然るは皇祖天神の詔命を以て皇御孫命に事依し奉給へる所は大地萬國にて下に國能八十國島能八十島と云る此にて青海原潮之八百重とも葦原中國とも天下とも云る物是なり然れども此詞に限らず佗祝詞及記紀共に何れも此御言依しの事を云るには大地萬國の中にて此豐葦原乃水穗國を耳云るは如何なる事と思ゆるに此詞に至りて甚明らかなる事なむ有ける但大殿祭詞にも大八洲豐葦原瑞穗之國乎安國止平氣久所知食止云々天降利賜比志食國天下登云々出雲神賀詞に皇御孫命爾天下大八島國乎事避奉之時云々天下乎見廻氐云々と有るなども皆其差異な立たる文體に下此と同じ 然るは右の大地萬國の内に此大八島國はしも伊邪那岐伊邪那美命の御子と爲て崇給ひ其同時に生坐る蛭子と粟島は同じく二柱神に成れる者から祥はしからぬ所有て御子の員に列させ給はざる事神典の傳の如し此御子と有ると御子の員に列ざると合せて此詞には國能八十國島能八十島と云て一様なる如くなれども御子は君なり其列に充ざるは臣なり國の尊卑の由て起る所此に在り此即神典の學を爲る最第一に先心得置べき事なり中古以來此事に闇かりし故に天地の眞理を見認たる人有る事なし 然れば其君と有る大八島國を安國と平けく所知食せと事依し奉り給ふに臣と有る大地萬國は悉く附屬て有る事云も更也豐葦原乃水穗國乎云々と云て下に天下所寄奉志と有る文の狀を考ふ可きもの也新年祭第六詞に生島能御巫能辭竟奉云々皇神能敷坐島能八十島者谷蟆能狭度極鹽沫能留限狭國者廣久峻國者平久島能八十島墜事無く皇神等能依左志奉云々同第七詞に伊勢爾坐天照大御神能大前爾白久皇神能見霽志坐四方國者天能壁立極國能退立限云々と有て島國耳ならず悉く大地萬國を合たるを見べし水穗國乎安國止平久所知食と有るは此大八島國を都城と爲給ひ天津日繼の瑞穗を聞食せと云ふ事にて大地萬國を漏し遺せるには非ず大殿祭詞に天津日嗣乎萬千秋乃長秋爾大八洲豐葦原瑞穗之國乎安國止平氣久所知食止云々と有るを合せて思ふ可し若て其下に食國天下登天津日嗣所知食須と見えたるは此に天下所寄奉志と有ると同じく該羅めて大地島國を統御す御事を丁寧に證せる文也此語脈の照應を詳に見分つ時は必天津神の御言依しにも然宜

ひ分たせ給ひて打混るまじく物爲させ給はでは叶ふ可からざる所なり大地萬國の皇國に臣從する事は今云ふまでも無く誰も神典の寶典に依て窺知り居る事なるが如此く高千穗宮の昔より詳なりとは心着ずて根無き說を爲めり○事寄奉志は皇御孫命を天津朝廷より筑紫日向宮に天降し奉らせ給ふ時に天下を安國と平けく所知食むには第一に火を淸く物爲させ給ふべき爲に此鎭火の天津神語を事依し奉給へるを云也輕く見過す可きならずなむ○天都詞太詞事乎以申久次なる道饗祭詞にも云々の文を記して終に天津祝詞乃太祝詞事乎以氐稱辭竟奉止申と所見たるを此は云々の事を云む料に始に如此云るながら其義同じく天津神の太祝詞を以て事依し奉給へるを此國にて天都詞と云ふ語を上に冠て天都詞太詞事とは云へるなり鈴屋大人說に此は能理登と云に祝ノ字無きは省き過たる書體なり然るを考に祝詞と書むよりは中々に宜(ヨ)し」と云はしたるは心得ず如此一向に祝詞ノ字を甚く嫌はるゝは能理登碁登を詔賜言(ノリタマヘコト)なりと云ふ自說を立むとての僻事なり」と云れたるは然る言なり但此は大祓詞後釋に云る所を抄出たるなり下に擧る所皆然り　偖其天都詞太詞事は神伊佐那伎伊佐那美乃命と云より以下水神匏埴山姫川菜乎持氐鎭奉禮止事教悟給支以上の文なり此を皇祖天神より御口移しに皇御孫命へ事依し奉給へるなるが此前後の文を成して鎭火祭を行ひ始給ひしは高千穗の大朝廷にてなる事云も更なり然れば五伴緒と爲て仕奉

り給ひし天兒屋命の神語に成れる事云ふも更なり神祇令義解に卜部等鑽レ火而祭レ之と有るは其祖業を繼來る證なり但祝詞式の首に御殿御門等祭の祝詞は齋部氏の宣る以外諸祭中臣氏祝詞と有るを合せて思ふに中臣氏も祝詞を宣る爲に交り仕奉れりしか又中臣卜部共に出自同じき故に已くより卜部の職と成れるか

神伊佐奈伎伊佐奈美乃命妹妹二柱嫁繼給氐國能八十國島能八十島乎生給比八百萬神等乎生給比氐麻奈弟子爾火結神生給氐美保止被燒氐石隱坐氐夜七夜晝七日吾乎奈見給比曾吾奈妹乃命止申給比支

神伊佐奈伎伊佐奈美乃命の神は稱辭なるが奇靈なる謂なり下に就て某ノ神と云るは常なるを上に冠らせたるは耳こそ有れ其義に於て異無し然れば上に神某と云る下は某命と云て某神とは申さゞる例ならむか神素盞嗚尊或は神直毘神大直毘神など見えたる神大市比賣神阿多都比賣など下に命とも神とも有ざるを思ふ可し但高御產巢日神神產巢日神と申す御名の高に對たる神は別義有るなり予已に定說あり　偖此二神は大地の初の時俱に生坐し男女の御祖ノ神に在して漸々に國土の成就るに隨ひ漸々に形體も成整ひ坐て已に夫婦遘合の事に及ばせ給へる大御名なり隱身より顯身と爲給へる其運びは古事記神代紀共に國之常立神豐雲野神と申す二柱御在り此は國稚く浮膏の如くなる大古より終古に至る迄天日の周圍を公運し私運する事を主宰す神等

に坐して皇祖天神の造化を幽賛給ふ事なり公運とは天日を中心に爲て一年三百六十餘日に巡るを云ひ私運とは一晝夜に一動有るを云なり師説に此二神は所謂る黄泉神と云れたるは甚(イト)も忌々しき僻事なり黄泉神とは豫母都志許賣を云る事次なる道饗祭祝詞備來物の下に註せるが如し但此二柱の御事は日本書紀傳古始太元考神世眞言等に説盡す所なり　古事記に右の二柱に續けて次成神名宇比地邇神次妹須比智邇神次角杙神次妹活杙神次意富斗能地神次妹大斗乃辨神次淤母陀琉神次妹阿夜訶志古泥神次伊邪那岐神次妹伊邪那美神と有て下に次雙十神各合二一神一而云二一代一と見えて伊邪那岐伊邪那美二神の先に男女俱生神八神有て四代有るに上なる別天神又國之常立神豊雲野神までは隱身(カクリミマシマス)也と一一(ソレ〴〵)に記されたるを此四代には其文無れば脱たるらむかと思ふに此間に右の如き語を加ふ可き所しも無きは本より非りけるなり然らば顯身の神かと思ふに伊邪那岐伊邪那美二神に至て顯身に成坐る紀記の明證有れば然は云難し是を以て思ふに此四代八神に伊邪那岐伊邪那美二神の隱身より顯身に成整ひ行く間の御德功又其御有狀に依て如此く負坐るなり尚云はゞ此八神共に小しも御事實の傳無く又諸國式内の社々にも似番はしく其と所思しき御名は全に所見ず且夫婦は伊邪那岐伊邪那美二神に始れるに其より先の神等の各夫婦相並び坐るなど此彼思合するに右の二神の御名なる事決き者なり桂譽重云く右の隱身字は幽身(カクリミ)の意なれば今物に記さむとなれば然書べきなり古くも然記されたらむには御身乎隱志給比伎とは訓誤る可きにあらず且御功業を終て後に御身を何處にか隱し給ふ狀には說誤るまじきなり　男女二柱神最初の御名宇比地邇神次妹須比智邇神と申す御名は古事記に於是天神諸命以詔二伊邪那岐命伊邪那美命二柱神一修二理固成是多陀用幣流之國一賜二天沼矛一而言依賜也故二柱神立二天浮橋一而指二下其沼矛一以畫者鹽許袁呂許袁呂邇畫鳴而引上時自二其矛末一垂落鹽之累積成レ島是淤能碁呂島と有る此時に成れる者也天神は素より隱身に坐れば其御言を承給ふ二柱神亦其御靈より分りて隱身なり天沼矛は幽冥の神物なり天浮橋は神代紀に高天原とも天霧とも有れば神靈の乘て天地に往來ふ氣脈(ハシ)なり其畫成し給ふ間に元は浮膏成せる質漸くに合凝て泥土と爲り沙土と爲りて乾燥て一土塊と成る是自凝島なり此に於て天沼矛始て鐵質を見(アラハ)し大地の天柱と成るに至れりしなり偖宇比地は稚土(ツヒヂ)にて泥土の生れる任なるを須比智は窄土(スヒヂ)にて天日に蒸凝されて漸く沙土と爲るを云ひ邇は根にて地盤を云ふ稱なり神代紀に泥土煮尊沙土煮尊と有るは正字なり煮とは物を煎(イ)る事にて此の御事實に允當れり又泥土根尊沙土根尊とも見えたり偖此に日神の生坐ざるに天日を云事人の不審しみ思ふ事なれども天日に已に在て後に日神は其を主宰(シロシメ)す大御神と成給なり　次に角杙神生杙神と申す御名義角(ツヌ)は聯伸にて草木の生初るを云ひ生(イク)は氣凝にて動物の成始るを云ひ杙は組と同

じく物と物との質を相結びて形を生すを云也上件泥土と沙土の地盤立定りては未稚々しながらも其水涯に相應せる植物の生る理なれは先葦菰菅などぞ生出けむ世の始の狀を譬へて如葦芽之初生泥中と云ひ又蛭子を入葦船而流去とも云るを以て此物の珍らしく初て生初たるが名高かりし事を知べし又斯在る水土各半の地には又相應せる動物は因て生る可し神代紀に遂將合交而不知其術時有鶺鴒飛來搖其首尾二神見而學之即得交道と有るを見る可し此時未だ大木は生立つ可からず大禽は出來まじきが漸々に國形の備はるに隨ひてぞ動植共に其地に應じては成める（神代紀には此二神の名無くして國常立尊豊斟野尊の間に國狹槌尊在るは誤なる事先達の已に云れたるが如し一書には角樴尊活杙尊と御名は出たれども大戸之道尊大戸之邊尊の御名を脱せれば古事記の世數ぞ正しきなり偖角杙神の男神に坐し活杙神の女神に在すに就て又奇しき事有り動植の二共に男女牝牡有るが中に動物に限りて母胎を借ざれば生れ出來ぬを植物に其種子を地中に下して後生出るは土中を母胎と爲るが故なり此等の事を云むも餘りに強説めきて思ゆれども眼前に在る物の道理を云ずして有べからざればぞ）

次に意富斗能地神大斗乃辨神と申すは古事記に上に引る文の續きに於其島天降坐而見立天之御柱見立八尋殿と神代紀に二神降居彼島化作八尋之殿又化豎天柱と見え亦名を大戸摩彦尊大戸摩姫尊亦曰大富道尊大富邊尊と有るを合せて思ふに意富は大にて常には物を極め盡す義なるが上より覆ひ渡る意にて此にては屋根なり斗は處の義にて美斗能麻具波比また久美度などの斗度共に同じきを以て思ふに八尋殿を化作て共に住給ふ由なり亦名を大戸摩と申すも大殿眞にて其住給ふ所の大きなるを美稱たるなり大富と云も大殿眞に同じ事なり實器本記に心御柱を富物代と云ひ顯宗天皇御紀（室壽御詞）に取葺草葉者此家長御富之餘也と有るを屋根を富の餘なりと云るにて住む處を富と云るなり地は主なり辨は群なり男を主として女の隨順ふ狀なり（猶天富命と申すも神武天皇の大宮造の司仕奉れりしに依る御名なるべし古今集にも此殿は諾も富けり三枝の三端四端に殿造り爲りと有を見れば中古迄も此古意は失はざりしなり偖此大戸摩彦大戸摩姫二神を古事記に大戸惑子神大戸惑女神と有るに此に此なるも其より混れ込たる由に云れたるは當らぬ事なり彼は彼此は此なりける者なりや）

淤母陀琉神阿夜訶志古泥神と申すは大地の成立に因准ひて天氣と地質の混成て始て形體成り又其作業の出來る由也淤母陀琉神は神代紀に面足尊と見えて古事記に於是問其妹伊邪那美命曰汝身者如何成答曰吾身者成々不成合處一處在爾伊邪那岐命詔我身者成々而成餘處一處在故以吾身之成餘處刺塞汝身不成合處而以爲生成國土奈何神代紀一書にも陽神問陰神曰汝身有何成耶對

曰吾身具成而有下稱二陰元一者一處上陽神曰吾身具成而有下稱二陽元一者一處上思下欲以二吾身陽元一合中汝身之陰元上云々と有て同じ傳說なるが此意の御名なり女神の成合ざる處の凹きに對へて男神の成餘れるが凸きを以て實に面足と稱申べき狀ぞかし阿夜訶志古泥神の阿夜とは物事を聞て速に諾ひ感くるを云訶志古は心聰く納受るを云ふ根は彼陽元陰元と云る者なり古事記なる右の文に次に以三爲生二成國土一奈何伊邪那美命答曰然善一と有を以て右の御名を曉る可し稱云はゝ二柱神夫之御柱を行巡て夫婦遘合し給はむと爲し時にも女神の方より先に御言を發し給ひて阿那邇夜志愛袁登古袁」と宣へるも御心利きに起れり然るは神も人も女の性計り物に速く感け動く物無ければ男神の御言を發し給へる間なたに得しも待敢奉らせ給はざるに依れり男女の根な云ふ例は古事記に生二女島一亦名謂二天一根一と有り終に伊邪那岐命伊邪那美命と定れる御名の所由は古事記に伊邪那岐命詔然者吾與レ汝行二廻逢是天之御柱一而爲二美斗能麻具波比一如此云期乃詔二汝者自レ右廻逢我者自レ左廻逢一約竟以廻時云々於是伊邪那岐命先言二阿那邇夜志愛袁登賣袁一後妹伊邪那美命言二阿那邇夜志愛袁登古袁一如此云竟而御合生子淡道之穗之狹別島云々と有て神代紀も亦此と同じく此詞に妹妋二柱嫁繼給ふと有る此なり伊邪は誘ふ意那は汝なり吾與レ汝行二廻一逢是天之御柱一と有る時の御言に伊邪汝と宣ひ合させ給ひけむ岐は生なり男根の稱美は那なり女陰の稱凸き物と凹き處と睦び合て夫婦の契大同へるが此に依て國土を生給ひ神等を生給ひて大地を修理固成し給ふ大御功立て皇祖天神の御事依しを成就給ふを以て此を大御名とは負坐るなり然れば宇比地邇神須比智邇神より以下四代八神は此二神の前の御名と心得べき者なり此即予が隱身より顯身に移り行く御德功と御有狀の運びに依れる御名也と說成し奉る所以也古事記傳及古史傳の說と雖も初より顯身と見たる說なれば違ふ所多かり況て其餘の人共の說は云にも足ずなむ

〇妹妋二柱今本に妹背と有るを如此改たるは鈴屋大人の說に從り玉勝間稱卷に鎭火祭祝詞に伊邪那美命の御言に伊邪那岐命を吾奈妋乃命亦吾奈妋乃命と其上文に妹背二柱と有る背ノ字も書紀釋元々集などに引るには妋と有れば古き本に然有しなる可し倭名抄備中國賀夜郡の郷名に庭妹と書て爾比世と訓したる有り今世に庭瀨と云所なり此妹字も妋を誤れるなり又同國下道郡に曳妹(クレセ)下野國芳賀郡に廣妹達妹(ヒロセトホセ)と云郷名有り此等は讀を記さゞれは如何ならむ知れども妹ノ字なるに伊毛と訓ずして勢と假字を附たる實に世なる可く聞ゆる名共なり其に取て又備中國下道郡に弟翳と書て勢と訓む郷名も有れば此翳も妹と書て勢なるにやとも思はるれど古男女の兄弟の間にて女は男をば弟をも勢と云し例なれば彼弟ノ字は然る由など有て負たる名とせば云れたるを妹と書て勢と訓むべき由は更に無れば皆妋ノ字を寫誤れる事著し又源平盛衰記に平家の侍に妹尾太郎と有り此も同じ妋字は見馴ぬ故に皆斯く妹に誤れるなり又平時忠卿の事を云る所に故建春門院の御妋(セウト)にて御坐し在しかばと此には兄人(セウト)に妋ノ字を書たり抑此字は夫兄(セセ)の意に皇國にて古造れる字と見えたり然る類外にも多し字書を考るに此字漢土にも在れども夫兄な

どの義には且て無き字也と見えたり〇嫁繼給氐は御合坐す事を云也神代紀一書に遂將合交而不知其術時有鶺鴒飛來搖其首尾二神見而學之即得交道と有を見て知べし或人嫁繼は陰衛なりと云るは信難しと雖此交道を敎奉れる鶺鴒を私記に止豆木乎之閇止里と有るを以て見れば捨難き狀なり尙下に委しく云を見合すべし偖妹妋二柱嫁繼給氐は上に引る古事記に伊邪那岐命詔然者吾與汝行廻逢而爲美斗能麻具波比と有る美斗は御所にて其下に久美度邇興而生子云々と有る久美度は隱處にて夫婦隱寐る身屋を云るにて此二共に彼八尋殿の用を云るなれば嫁繼の斗も其を云る事著ければ就處の意なる事云も更なり此は記傳の說を本に取り予が今按をも雜へて云ふ所なり神代紀一書に同宮共住而生兒と有れば此說は動くまじき者なり但此は顯の意にて其幽に今一義有り其は右の美斗能麻具波比を神代紀に欲共爲夫婦產生洲國とも遘合爲夫婦とも爲夫婦とも合爲夫婦とも記されたるは唯に義理を以て當られたるならむと思ふに然らず其は古事記大國主神段に美刀阿多波志都と有るも此と同意の言なるに神代紀天孫降臨段第二ノ一書に幸之と訓み雄略天皇元年御紀に脫與一宵而脤と有を合せて思ふに美刀阿多波志都は與共身の義也然れば美斗能麻具波比に共身之眞咋合の意幽に在べく所思たら應神天皇十三年御紀に得夫と有を類史には得交と作て共に麻具波利氐と訓り斯在ば嫁繼は共繼にて夫婦の合る狀なり御紀には遘字を然訓り夫婦の合るには男の身を以て女に繼(ツ)け女の身を以て男に繼けるなればなり遘遇を止豆木乎之閇止里と云ひ學之即得交道と有るなども思ふ可し偖斯る義に泛說をば逆せるを人に從たりとや思ふらむとは思へども此ぞ神代の眞心の狀也ける玉勝間卷ノ下葉卷に登都具は嫁ノ字を訓む故に唯女の男に逢事に耳用(ツキ)へども然に非ず男女逢事に何方よりも云ふ事なり古今著聞集に天野遠景と云ふ者の事を云る條に渡邊にて番(ツカフ)が妹に登都岐にけりと男の方にも云り其頃迄此言古意を失はざりしなりと有り」〇國能八十國島能八十島乎生給比は已に祈年祭生島神詞に委しく云れども事の因みに猶云はゞ古事記神代紀共に二柱神の御子として生坐る國は大八島の外は非ざる如見ゆめり然れども其は甚麁き說にこそ有なれ古事記に天地初發之時云々神代紀に古天地未剖とも天地初判とも天地混成之時云々とも天地未生之時云々とも見え天之常立神國之常立神など相對へる天地をば如何に見るらむ天國をば如何に心得らむ予は甚不審しくこそ所思たれ天は天の總てを云るに此大地の中にて大八島耳を對はせたりと爲むか天地の地は大地の全なる事は人能く知て有る事ながら此國生の故事を御國限りの事と見ても猶は心行ぬが故に神代紀に所々小島皆是潮沫凝成者矣と有るを捉へて外國の始を說き其にても猶心行ねば故に事を外國

に索て闕典を補ふと云ふ見解を立めり其も然る事には有れども未此方に大地萬國の古傳慥に在るを見認ぬからの事なり（予も先には此に因て古傳に疑の起りし事も有て身に思え有る事なるが故に後學の爲に斯云なり）天神諸の命以て此漂在る國を修理固成せよと詔給へるも萬國の地方は然らずして此の大八島國の漂在て在しと云むや大八島國のみ二柱神の生成し給ふ所にして外國は神の產靈の及はせ給はざりし地と爲むや今世人の說く所思ふ所にしては皇國限りの天地に爲て萬國は又萬國の天地の如し斯ては天神の事依し給へる處と二柱神の其御命を奉て御德功を立給ふ所の相違有て神代紀に伊弉諾尊功既至矣德亦大矣於レ是登レ天復命仍留二宅於日之少宮一矣と有る文を何とか爲む此天は萬國の戴く天也天神は萬國の全に係る天神なり（且師も說れたる如く外國に各傳はる古說の有るも國初に二柱神の功用有しが故なり功用無きに說の傳る可くも非ぬ事なるに非ずや）然れば國生坐の古事などを始として諸神の功用に於ても皇國のみの事には非ず大地萬國の全に亘る事なり此方より西戎と賤しむる國々にすら古說有るに萬國の大元と有る皇大御國の大御傳說に豈無らむや此を無しと思ふは識の及ばぬにこそ有けれ傳はらぬにはあらざるなり（是を以て予は此皇御典の古語を說明し仕奉りて皇御孫命の大朝廷に恐けれども貢奉りて遺をば天下後世の人に幸へむとは爲るなり其數多の人の中には此方斯く細しき美說の有るを萬國に傳へ弘めて天津日繼の高御座雲居に遠く仰奉らしめむとす此ぞ予が天賦の所業なりける）大八島の事は暫く措きて大地萬國の始の古說は古事記に伊邪那美命先言二阿那邇夜志愛袁登古袁一後伊邪那岐命言二阿那邇夜志愛袁登賣袁一各言竟之後告二其妹一曰二女人先レ言不レ良雖然久美度邇興而生二子水蛭子一此子者入二葦船一而流去次生二淡島一是亦不レ入二子之列一と見え神代紀一書にも於是二神云々遂爲二夫婦一先生二蛭兒一便二葦船一而流レ之次生二淡洲一此亦不三以充二兒數一と有て同じ傳也（又一書の中にも二神合爲二夫婦一先以二淡路洲淡洲一爲レ胞と有る淡洲は衍也又生二淡路洲一次蛭兒と有る淡路洲は淡洲を誤れる也）神代紀正書には日神月神の生坐るに次て次生二蛭兒一雖二已三歲一脚猶不レ立故載二之於天磐櫲樟船一而順風放棄と見え又一書にも日月既生次生二蛭兒一此兒年滿二三歲一脚尚不レ立伊弉諾伊弉冉尊巡レ柱之時陰神先發二喜言一既違二陰陽之理一所以今生二蛭兒一と有る傳は然る言なれども此を記紀共に神と爲る傳は悉く誤なり其初天神の二柱神等に是漂在る國を修理固成せと宣へるを奉て云々而以三爲二生二成國土一奈何と宣ひて御合坐るに神を棲しむ可き國土を生成さずして其より先に其國土に棲む神を生べき理無ければ上古の言傳に葦尚不レ立（アシスラタヽズ）など有け

むを文に記すとては葦を脚の事と取違へたる誤を延(ヒキ)て其餘の傳々も共に誤れる者也(成る皆年滿三歳ニと云ひ不レ先ニ見敷ニなど云ふ時は如何にも神の如く聞ゆれども事實に合ざる事違き者なり此を以て神代紀正書には全く御子等の列に充られたるに一書には同じ次序には記しながら尚然らぬ心着にて初伊弉諾伊弉冉命巡レ柱之時云々の文を成したり然れば古事記及一書に國生の中に事は誤ながらも出されたるならむ古傳の任なるべき)予が說く所は女神の御言先立の御過に依て生出(チリイヅ)るを以て生坐(ウミマセ)るとは宣はず放子(ヒルコ)とぞ宣はしけむ御子の列に入給はざるを思ふ可し宇牟とは稱辭なるを以て避給へる也斯て然は宣ひつゝも土毛(キクサ)の生立つ事もやと三年の間待試み給ひしかども葦侚に未立しかば流るゝ順に放ち遣り給へるにて其漂ひ著たるぞ蝦夷島なる可き蛭子の字を俗に延比須とも訓來れる事はしも古くも實說の民間などに傳りたるが在し爲なりと所思ゆ(蛭兒の比流は屁比流なとの比流なり今俗に犬猫などの子を成したるを卑しめて子を閉流と云るなど此意味に通ひて聞ゆ)次に淡島は記傳に御親神の淡め惡み賜ひし故に然は號けしなるへしと云れたる眞に其義なるが粒々と幾千萬に別れたるらむも知べからず淡の阿波に彼者(アハ)の意を含み今世に粟と云る穀も其量の粒々と數多なるなど此名の據なり(下に伯耆風土記を引て云ふを待てよ)然るに此島の所在は紀伊國と淡路國との間に苫が島と云有り古くは粟島とも云て神名式なる加太神社に其島

に在しゝを今の加太浦には移し奉れるにて粟島社と云て祭神少彥名命なる由諸書に詳なる所なり萬葉三卷四卷に背に見つゝと詠る粟島此なり七卷に在るは記傳に淡路の西北方に在る島と見えたりと云れたるは然る言なり又仙覺抄に讃岐國屋島北去百步許有島名曰二阿波島一と有るは九卷に粟小島と詠る此なる可し」と同書に云れたり又十五卷に安波之麻と詠る二首有るは周防の海に在るかと聞ゆとも有り出雲風土記に島根郡粟島周二百八十步高一十丈と見え粟島と云名計りは意宇郡出雲郡にも有り又伯耆風土記に會見郡粟島有り神名式に志摩國答志郡粟島坐伊射波神社(並大)同島坐神乎多乃御子神社など見えたるを思ふに何れしを其と定む可き樣無し此等を以て考合するに粟島とは小島を云稱なりけり(大瀧光憲云く越後國磐船郡の沖に周回七里許の小島有り今寺島と訛れゝども古く粟島と云りと云り又竹内粹成も我大隅國にも粟島と云小島有りと云り此等の今見聞して予か心に叶す者合せて十一なり此餘にも幾箇も猶有る可く思ゆ)此等を推亘して見るに二柱神の生給へりし所は猶多かるを其は何れならむと思ふに此は決く常世國の始也先に生坐る程は小き島なりけめども其に潮沫水沫の合凝結て大きくも小さくも大地萬國と各々に成れる者也神代紀に處々小島皆潮沫凝成

者矣亦曰ニ水沫凝而成一也と有るを鈴屋大人說記傳五卷に處々小島と有るは必しも小き島耳には限る可からず大八島の外なるを皆凡て如此は云るなれば其中には大なるも有ぞかし然れば皇國屬る島々耳ならず諸の外國をも大きなる少きを云ず皆此の內と爲す可きなり」と云れたるは眞に萬國を見徹し坐る說也今予が淡洲と云へるぞ其が種子にて然しも成れるなると云ふを聞さば然こそ悅給ふらめと此を書記すにも大人の天翔り國翔り來坐て此大業を幽賛け御在らむとこそ所思ゆれ然らずは予が不敏なるに若しも老の及ぶまじければ予が識神を借て此を思はしめ予が手を借て此を記さしめ給ふ所にて我功に非ず故翁また師の恩賜なる事云ふも更なり神典の古傳に大地萬國を皇國を除て外をば常世國と云る其常世國の粟島なる事は神代紀なる大己貴命少彥名命國作段に其後少彥名命至ニ淡島一而緣ニ粟莖一者則彈渡而至ニ常世鄕一矣」と有るを伯耆風土記に相見郡郡家西北有ニ餘戶里一有ニ粟島一少日子命蒔レ粟莠實離々即載レ粟彈渡ニ常世國一故云ニ粟島一也と有れば此島より渡坐し事決し借外國の粟島なる由は少彥名命の故事に依れりと聞えて彼赤縣州に粟の地に相應ふ事皇御國の瑞穗國なるが如し又印度の地方などにも專と殖る由なる此一二を以て汎く萬國に亘る名なる事を知るべし說文に禾ハ嘉穀也以ニ二月一始生八月熟得ニ之中和一故謂ニ之禾一禾木也木王而生金王而死从ニ木象ニ其穗一凡禾之屬皆从レ禾と見えたる凡禾之屬皆从レ禾と有るを以て其主々しき物なるを知る可し禾は粟也但外國の皆は右の淡島の小島に潮沫水沫の相凝成て素より淡島の古名を存したるに亦少彥名命の渡り出坐る事有てより又粟島の義を成したる者也粟は粒々と外の穀よりは數多く小さく其味の淡くして膏腴の地よりは地性の淡き處に宜しきなど偶然とは云難く奇しきまで妙なり借此蛭子は三年試給ひしかども葦倘生立ざる國なれば顯見蒼生を棲しむ可きに非ずとて放棄給ひ淡島はた瑞穗を殖べき美地に非ざれば潮沫水沫の凝成るに任せて此大八島國をば宜しく生成し給ふ大八島國の御子と崇給ふ所以是なり外國を御子の列に入給はざる所以是なり然るは女神の御過有ると御次序能く宣交し給へるとの差異こそは有けれ御子と列へても員まへずとも何れにしても生成し坐るに相違なき御事なるを斯しも物爲給へるは如何にと云に子は親に亞く所なれば君也御子と雖も御子の列に漏ては臣也如此して國の尊卑を定め君臣の別を物爲させ給ふ事は深き幽契有ることになむ卷二生島神詞の下に云る事共を合せ讀むべし國に君臣の別有る事は此詞の始に委しく云りき是を以て國能八十國島能八十島と云るは大地萬國の全を該羅めたる古言なる事を知る可く又

皇國の古傳は大地萬國の古説にして其委しく詳密なる事外國末書の能く及ぶ所に非る事を曉りて外國の訛傳には心を留むる事無く此方の眞説をなむ天下萬國には弘む可く有べ〇八百萬神等乎を生給氐古事記に既生レ國竟更生神云々と見え神代記正書に生ニ大八州國及山川草木ニ又一書に生ニ大八洲國ニ然後云々悉生ニ萬物ニ焉なども見たれど八百萬神と云に當る事見ず鈴屋翁の髻華山蔭に右の生ニ萬物ニと有るを論ひて上下の例皆其神を生と有ば此も萬物の神成可ければ神ノ字有まく欲しにと云れたる實に尤なる説也斯れば此詞に八百萬神を生給ふと有るや右の萬物を生と有る其なる可きと一應(ヒトワタリ)りは見ゆる事なれ共其も猶未盡る所有り（此外には記紀共に記して漏されたれば八百萬神に充つべきの文無し）古事記に生ニ某島ニ亦名謂ニ某々ニと有る此亦名と云者を世人は如何に心得らむか知ねども予が思ふ所は某島と號たるは神代を經て後の名にて亦名と云ぞ其國號を兼て國魂神名とは思えたる人間より呼ぶ所こそ某國某島とは云へ決めて幽冥にて稱ふ所は譬へば壹伎島をば天比登都柱と云ひ日女島をば天一根と云に定りなりし故に斯は傳はれるなる可き事云も更なり（古事記訶志比宮段末羅の條に其河名謂ニ小河ニ亦其礒名謂ニ勝門比賣ニと有るたも思ふ可し）大八島國の外なる佗國々の末迄も其國其地の出來るに隨ひて其國魂神も倶に成坐す可き事人の生るゝ時に精神も倶に其體に合(ヤド)りて成れるが如し然れば神名式に山背大國魂神尾張大國靈神淡海國玉神など有るを其國作りに功有し故なンめりと誰も思ふ事なる可れども其國々には限らず國と倶に生坐て其御魂と坐す神の御在す可き事云も更なり（但此國魂神と申す御名二柱神の國生坐し時に取れると後に國土經營の事に取るとの二有り右の天比登都柱天一根などは國生坐し時よりなり大國主神の亦御名な大國魂神と申すは國土經營の事に依れり能々條理を正して辨ふ可くなむ）然れば此詞の八百萬神は御紀に悉生ニ萬物ニと有る其萬物の祖神等も其中の一にては有る可きが總ては國の八十國島の八十島の百千萬に支派たる國々の國魂神になむ御在しける偖其長子は少彦名命に御在るなる可し此神の粟島に國魂神たらむと所思しければ也偖此神は古事記に神産巣日神之御子少名毘古那神と見え神代紀に高皇産靈尊聞之而曰吾所産兒凡有ニ一千五百座ニ其中一兒最惡不レ順ニ教養ニ自ニ指間ニ漏墮者必彼矣宜愛而養レ之此即少彦名命也と有る證文共に混れ無れば決く高皇産靈神皇産靈二神の御子なる事論無れど予姓氏錄を讀て萬神の出自を此神に係たるを見るに其條理を分別

て其系を作り統を正す時は悉く伊邪那岐伊邪那美二神に歸(オツ)る事多し（此を以て彼書神別天神の出自は皇別天孫に判然(キハヤカ)に分たれて混るまじき爲に其大元と坐す皇產靈神に係たる者なりけり）且右の二神は隱身の神にして顯身の全く起りは伊邪那岐伊邪那美二神に坐せば眞には其御子ならでは叶はざる者なり倩此少彥名命に限らず諸神の本源を皇產靈神に係たるは其產靈の太元を以て云故也此も少彥名命より御名乘の有むには粟島の國魂神なる可きを其事の非ざりける故に天上に白上給ひて其皇產靈神の隱身の指間より漏落て伊邪那岐伊邪那美命の粟島を生給ふ時に中て粟島の國魂と成給へる事の知られたるなり不順教養と有ると女神の御言先立給ひしと熟符(ヨクアヘ)るは奇異なる事なり（神祇書に高皇產靈神之長子少彥名命と有るに依て師は宇麻志阿斯訶備比古遲神と定められたれど然らず眞には二柱神の長子と爲て當る可きなり其は最初に成れる淡島の國魂神に在せればなり）倩少彥名命は其粟島の國魂神として二柱神の長子と在せれば幽より御靈を分給ふ皇產靈神にも長子と坐る事右に云るが如し倩其粟島の百千萬の國としも成れる其國魂神も八百萬神と多かるらむこと勿論なり（倩此說はしも餘りに奇說めきて如何なれど予は人目を驚すにあらず眞に必ず如此、有る可き者と思定めて記るなり但仰希くは皇祖天神の玄監を請奉くのみ）此を何故に記紀共に記されざるを云ふに二柱神の生坐る所は國なり其國に倶(ツキ)て國魂神は成坐るにて其地の大小に依り長短に依り又其形勢に依て各自に成別りて八百萬神と生出給ふを一々に傳ふ可くも非ねばなり倩其國と倶に自然の如く成坐る神に坐せば其を皇產靈神の御子と宣給へるなれども其は幽より出す上の事にこそ有けれ此詞に二柱神の生給ふ所と爲ふは顯に生るゝ所なれば是を以て予は二柱神の長子と云ふ見識を立たる也千載の後鬼神に貫く識神(マナオトコ)有る人有ば此說に知已たる可し○麻奈弟子は眞弟子にて最末(スヱ)ノ子を云なり（萬葉歌に最愛子（マナゴ）とも又父公爾吾者眞名子（マナコ）叙妣刀自爾吾者愛兒（マナゴ）叙とも有るは眞子也此は季子なるが故に眞弟子とは云るなり尙神賀詞の下に云ふ可し）神代紀一書に伊弉諾尊與二伊弉冉尊一共生二大八洲國一然後云々悉生二萬物一焉至二於火神軻遇突智之生一也其母伊弉冉尊見レ焦而化去(サカリマシキ)と有るは此に熟符へり古事記にも此傳有て故伊邪那美神者因レ生二火神一遂神避坐也と有て此に至て二柱の相共に爲て生坐し御子の終なるが故に眞弟子とは云なり（此より後に生坐る神等は御在せども御夫婦の間にて生坐るには非ず何れにか屬て生坐す事古傳說の如し）○火結神乎　生給氐　神代紀一書に伊弉冉尊生二火產靈一と作る其字の義なり此神の生坐の傳は古事記に生二火之夜藝速男神一亦名謂二火之炫毘古神一亦名謂二火之迦具土神一と見え火結神と申す御名

は神名式に伊豆國田方郡火牟須比命神社見え貞觀元年御紀に大膳職從五位下齋火武須比命神從五位上とも有り（此は式には火雷神社と有り）火は字の如く火なり保と訓べし中間に之ノ辭無くして下ノ語へ直に聯なる時は如此く上の言を轉ろはす例なり其は下に連く結の言は火に就て其用を云るながら其用言の方主と成るが故なり火影火中火瓮火處などの例を思ふ可し（舊事記に火之產靈と有る之ノ字は衍也誤なる事著し火之夜藝速男神火之炫毘古神火之迦具土神などの火之は肥能と訓べき由記傳に云れたるが如し）結は神代紀に火產靈と有る其意なり此を武須毘と云ふ字鏡に宇牟須比と有るを以て見れば武は全く產の義に其幽は大聚なる事云も更なり須は作爲の義比は合の義也抑武須毘と云ふ事は高皇產靈神神皇產靈神其太元の大神に御在して他神等は武須毘は其中の一端に就て德功を建給ふ事なるが其大略右の如く氣と質と相結ばり質と神と相結ばり神と氣と相結ばりなど相引き相聚り相散り相重りなど屈神變化究極無き妙用を施し給ふを云ふなり天地萬物品庶と雖も此武須毘の神機を仰がずして何物なる事を得む偖天地萬物の元質風火金水土の五元神の恩賴に賴る所なれば自餘の神等にも武須毘と申す御名の有るべきを然らず此神に局て火結神と御名に負坐る所由は御母神の神避り給ひし御怒に依て御父神に所殺給へるは止事を得ぬ時勢の自然に出たりと雖も其所斬給へる血天上に燃上りて天日の光輝愈々清明るく成り後に天照日大御神の天日を所知食すに至ては幽より輔相ひ奉給ふ事にて天地間に在と有ゆる萬物の造化は悉く此天日の御光を資て成る是を以て此神の火結神と稱られ給ふ由緣明らか也ける者ぞ（神代紀に草木沙石自含レ火と有るは此神の恩賴の至り盡さぬ隈無きを知るの明文なり偖如此く斬給ふも被殺給ふも共に其御上に取てこそ禍事の如くなれども如此く成行て其奇靈に奇き御所業の顯るゝなむ皇祖天神の幽より預相籌造らせ給へる所なりける）偖比とな ふ言義は物に經ると歷るとも云と同じくして此の神物の何處迄も沖り透る由にぞ有べき（連語の狀に依て保と云も秀と云ひ穗と云る如く其所在を超て遠く進む由なり又重りて熠とも云り）故火結神と申すは此神の本ッ御名なれば上の說にて其義を盡せりと雖も因みに其亦名を說む火之夜藝速男神は舊事紀に火之燒速男神と有り物を燒く事の速き由なり（御母神を燒き給はむとは所思し懸給はぬ事ながら然有しも燒速と申す計り一速く坐るが故なり亦同紀に火之燒彥神と申す亦名もあり同じ義なるなり）火之炫毘古神と申すは御光の遠く及ばせ給ひて物を照映し給ふ由なり（記傳に炫は迦賀と訓べし靈異記に炫を加々也計利と訓り字書にも耀光也とも火光也とも明也とも注せり」と云れたりき）火之迦具土神記傳に迦具は赫と云意其は迦々とも迦藝とも迦具とも迦宜とも活きて同言なり古事記（若櫻宮段）に

火を加藝漏肥と詠給ひ萬葉にも香切火之燎流荒野爾など詠る是なり迦宜は影と云是也」と有り上の都は之に通ふ辭知は主なり男也大斗能地神などの知是なり記傳に云く神名式に紀伊國名草郡香都知神社有り又丹波國桑田郡阿多古神社も此神を祭となり即京西の愛宕也阿多古とは御祖を燒給ひし故に仇子と云意にや上に云る大膳職坐火雷神社を三代實錄に齋火武須比命神と有て決く同神なるが火雷は山神を山雷など申が如く御稜威の嚴めしく御在す由の御名也此事已に卷五春日祭詞ノ下に云り神名式に山城國乙訓郡火雷神社名神大月次新嘗大和國廣瀨郡穗雷命神社忍海郡葛木坐火雷神社二座並名神大相嘗新嘗○重胤云二座の内一座は埴山姬神なるべし彼阿多古神社にも伊弉冉尊火産靈神埴山姬神三柱を祀れる由諸書に所見たり宇智郡火雷神社和泉國大鳥郡火雷神社など見えたり其中に山城國なるは彼古事記に火山咋神者用ニ鳴鏑ー神者也と有る鳴鏑に化坐し神にて玉依日賣を娶て片山御子神を令生給ひし火雷神に坐り其御子を別雷神と云るは大山咋神の亦名なるを忘竟たる近世人の誤なり予山城風土記の異本及諸書に引るをも悉く參考して大に得る所有て別に記せる書有り備其御子の吾夫神[illegible]子と宣ひ屋甍を穿て天に升坐と有るを以ても火産靈神は顯國にて所殺給ひしかども天上に升坐て其御靈の天日の御光耀と共に天地の底際の内に幸在す事を知べし○美保止の美は尊稱保止は元處にて男女の根に亘る名なり保は且々物の始る狀を云言なり此は神代紀正書に因問ニ陰神ー曰

汝身有ニ何成ー耶對曰吾身有ニ一雌元之處ー陽神曰吾身亦有ニ雄元之處ー思ド欲以ニ吾身元ノ處ー合ャ汝身元之ノ處上と見え一書には陽元陰元と有て男女の根を元と云る事保止の元處なる謂なり男女を分つ事は右の元處を以て物爲る事已にも云りき如此く其由來に就て言義定る上に其成立つ後の義は異なり凸凹と名は一にして意に別有り故男根を保止と云るは鎗鉾稻穗などの如く成餘れる由也古事記に迦具土神の所殺坐す下に於ㇾ陰所成神名闇山津見神と有るを以て知べし記傳にも此陰ノ字をも富登と訓べければ男にも亘るか和名抄には陰玉莖玉門等之通稱也と有て和名は載ず中卷に敵火山之美富登と山にも云り小腹(ホカミ)は陰上(ホトカミ)の意かと見えたり女陰を保止と云は記傳に師云含處なり萬葉に保々萬留とも布保隱とも云る同じ類も物を含む故の名なり」と有り但此は祝詞に有る訓なるを再此に引たるなり又武烈天皇御紀に不淨(ホトトコロ)と有るも女陰を云り」と見えたり平田翁は火處ならむと云れき○被燒氐此を古事記に見炙と有る其傳に夜加延と訓ぞ古言なる凡て彼炙被炙などの類の禮と流とは古は延と云ひ由と云り齋明天皇御紀大御歌に倭須羅庾麻耳耶忘らるまじになり萬葉一二十六丁に家之所偲由五十丁に可久由既婆比登爾伊等波延可久由既婆比登爾適久麻延嫌はれ疎まれなり又十三八丁禰蘆尾志奈加由三十三丁に衣爾須良由奈十五二十丁に伊能禰良延奴爾など此餘も多し」と有り○石隱坐氐は穴を掘り石を刺塞ぎて入坐るにて後に道反大神の

成坐る所由已く此に出たり借此は火神を生給へる其火徹を避給はむと爲て現御身ながら石隱り坐るにて此神の崩御(カムアガ)り給御亡體を葬奉れるに非る事此祝詞の文にて炳焉し　此は此の初て見出られたる言なるが此に因て神典、を伺ふに記紀と雖も此詞の如く傳はれりけむと所思しきを其頃外國の書典の追突ひて渡參來る國也しかば何事も此方に在る物事は彼の字に渡して心得る事也けむ故に石隱た葬ノ字に豫美都國を黃泉ノ字に當たりなど爲る内に何時となく其字面の方に混む樣に爲りて御正史を記さるゝにも其字面の都合に依て終には神退矣（カムサリマス）また神退矣（カムサリマス）も崩御の事と變り或は殯斂之處或は猶如生平など記きては見たれど元來然る傳に非ざれば前後に齟齬ひ出來て後には頭所謂泉津平坂者不復別有ニ處所一但臨死氣絶之際是之謂歟など云すては濟ぬ事と成たるなり此を以ても其葬地を云るなども其頃の杜撰に出來らむも知べからず委しくは古史徴第十四段に云れたる言に予が說を見合て心得べき者なり借其石隱坐し處を古事記には出雲國與ニ伯耆國一堺比婆之山と見え神代紀に紀伊國熊野之有馬村と有る此二の内何れが是ならむと攷るに紀伊國なるなむ其なると所思る由有り其は伊邪那岐命の御涙に成坐る泣澤女神の在せる大和國香山の畝尾木本にも遠からず神名式に紀伊國名草郡香都知神社靜火神社名神大と有るも同國なる内に靜火は此鎭火と同じくして伊邪那美命の御事に依れりと所思しければなり但何れにしても葬地と見るは誤なる事上に云るが如し其内にも比婆之山は在所さへぞ詳ならざりける　熊野は隈野とも神武天皇東征の時の大熊の事に依ても熊野と見る事なるが予が今思ふ所は熊野は隱野(コモリヌ)にて彼石隱れの故事などに因れるならむ通證に引る那智三巻書に有馬村有ニ産田宮ニ乃伊弉冉尊神退之地而其東有ニ隱窟ニ亦曰ニ逢立窟ニ亦曰ニ花窟ニ所レ葬ニ伊弉冉尊一岩窟也云々」と有る所葬など云ることそ例の誤には有けれ較ては非事に非ず石の産田宮の下に今按開ニ之新宮神ノ人ニ合ニ祭伊弉冉尊軻遇突智命一也と有るは然も有るべき事也　記傳に云く貴人伯伎國の比婆之山に在しを後に本國には改葬り奉れるぞなど云るは誤なり」と有り此は通證に出たり備前には此石隱の地は出雲國の伊賦夜坂ならむと云りしに古語に本音て云れども此は能くも非さりけり此は其黃泉國より歸り來坐る穴なるをや　此時の石隱れは右の如く現御身にて物爲させ給ひし事なれども此に因て伊邪那美命は顯國に止り給はず下津國に幸行るなるに取て後には貴人の罷坐るを然云りと聞ゆ萬葉二に明日香乃眞神之原爾久堅能天津御門乎懼母定賜而神佐扶跡磐隱坐」と有り此事耳ならず凡て此段の事を身罷る事に云るは常なり　泣澤女神は夫婦の御別を悲み坐る御涙に成坐る神なるに人の命乞を爲る神と成給ひ又死たる人の蘇生を黃泉返るなど云ふ事皆多し然りと雖も人死して後其國に至るには非ず實には天に上るなり　○夜七夜盡七日考に今本夜七日と有るは例無し又理も無し偽日を夜に改つと有るは然る言なり　鈴屋大人云く夜七日の日ノ字妙に夜に改られたる然る言なり元々集に引れたるにも夜と有り　此は産後の血荒の日數を云ふなり後に月水の有る女の七日七夜を穢と爲る事の起なり平田翁說に此七日を經れば御

産の事も全く調ひて火神の神性も能く靜まる由の有て如此く日數を限りて告給ふならむ其は物忌は火を改め清むるが本にて此七日七夜の數を經れば其時まで身に受入たりし古たる火と改たる火と入交りて火の功の齋ひ回り身も何も能く清まり竟る由有て上代より如此く日數の定りたるらむ」と云れしは諾なる説なり 山城風土記に玉依日賣の生る子の火を知まく思ひて外祖父建角身命造二八尋屋一竪二八戸扉一醸二八腹酒一而神集々而七日七夜樂遊と見え神功皇后紀に皇后選二吉日一親爲二神主一云々逮七日七夜又靈異記に栖輕卒也天皇勅留二七日七夜一誅二彼忠信一又雷の落て栖輕が碑に攝りたるを捕へて七日七夜留在又古事紀に饒速日命の薨坐し時に日七夜七爲二遊樂一又空穗物語藤原君卷に凡て七日七夜豊明り爲て打擧遊ぶ卜など見えたり又考に引れたる萬葉十に七日四零者七夜不來哉同十三に久有者今七日計同十七に等保久安良婆奈奴可乃宇智なども有り此外にも七日七夜に限て物を爲行ふ事多し此は人の知る所なり ○吾乎奈見給比曾古事記黄泉國段に莫二視我一神代紀一書一にも請二勿視之一又請二勿臨之一また勿以看之など多かり考に吾を見給ふ事勿れと云言にて其莫を上に先云ふ事古書に例多し」と有り借下に見給布奈と有るは現在を禁止る奈なるを此は未來を係て云ふ奈也奈の上に就くと下に屬くとにて如此く意別になる也又考に云く今本に吾奈乎と有るは奈を辭と思ひ誤りし者也○吾奈妹乃命は女より男を指す稱にて男より女の方を我那邇妹命と云ふ對なり 此事記傳六卷我那勢命の下に委し 神代紀一書一に吾夫君尊とも吾夫君此云二阿

我儺勢ニとも有り奈は汝にて我と對へる物に云稱なり 食に添て喰ふ物を奈と云るも其食に對ひて離るまじき由に云るなり 妹は御夫の由妹は御婦の由にて兄弟の義に非ず 考の説當らず鈴屋翁も此を拂かれたりき

此七日爾波足不氐隱坐事奇止氐見所行須時爾火乎生給氐御保止乎所燒坐支如是時爾吾奈妹乃命能吾乎見給布奈止申乎吾乎見阿波多志給比津止申給氐

此七日爾波不足氐は其契り聞え給ひし七日七夜には滿ざる間に其日數を得しも待敢させ給はざりしが故也

○隱坐事奇止氐見所行須時は上に火結神生給氐と有れば其神を生給ひし事は所知食つゝも此まで數多の御子は生せれども然る事の無りしかば此度に限りて吾乎奈見給比曾と申給ひ有隱坐事を又不審しみ所思し坐て其日數を得しも待させ給ひ難く所思し成りしものなり 古事記なる海宮段に豐玉毘賣命云々白其日子言凡他國人者臨産時以本國之形産生故妾今以本身爲産願勿見妾於是思レ奇二其言一竊伺其方産と有て神代紀の趣も同じきも此と事は別ながら其狀に於て待衞たり凡物の顯に露るをば何ひ見まく欲くは非ぬを其幽す所に於て其を見知まく欲するは物の情なる者ぞ ○火乎生給氐は上に火結神生給氐美保止被燒氐は此詞の地より云るにて其次に夜七夜晝七日云々は伊邪那美命の御言也斯て此は實事を見給へる所にて火と有は其火結神の御事なりが實に天地萬有に含有せる火産靈大神に在せば其御形體火にて御

在るなるべし先に此を黄泉国に有る穢火ならむと云りしは此文を熟く得ざりし說にて其は悪かりき火に二は無れども其謂る物に依て替るなり一條禪閤の御說に水火是天生之物無分染淨而神事忌火何也自鑽火淨用之故云々と有は尤なる御說なり然れば火神の穢を悪み給ふは其穢に觸れず穢火と爲るか故に太じき御忌共は有るなりけり ○御保止乎所燒坐支は記紀共に黄泉段に膿沸蛆流など有る御有狀にぞ有けむ此文に依て見るに記紀二典共に黄泉國の事に當有り多くは顯國の事を黄泉國に混へしたる所多かりと見ゆればなり○如是時爾云々と有る趣を以て考るに竊に伺見こせ給へるを始は女神の知食さりしを漸々に心着て知此は宜へるなり然らずば如是時爾と其意に讀みを持せて如此とも云べきに非ればなり ○吾乎見給布奈止申乎は神代紀は伊弉冉尊恨曰何不用要言今吾恥辱云々と有る此に當れり見給布奈は今現に見る所を尤めて云也未見ざる前より警むるは上に謂る奈見給比曾なり萬葉十五に和須禮多麻布奈とも有り考の說宜しからず鈴屋大人云く凡て古言にても其義に隨ひて勿を上にも云ひ下にも云事にて必しも上に耳云に定れるに非ず上文には吾乎奈見給比曾と云ひ此に斯く云るは上と此とは少か異にて此は勿見給ひそと云ては宜しからざる所なればなり此等を以ても古文に今人の思ひ及ばぬ所有る事を知べし上と此と異なる由は上は其申給へる御言を直に擧たる所此は前に申給ひし事を申給ふを云ふ所なればなり」と有り此說宜しけれど猶叢雜しければ上に云ふ如く心得べし ○吾乎見阿波多志給比津止申給氏は古事記に令レ見レ辱レ吾と見え神代紀にも上に引る如く見えたる其義なり阿波多須は劇しく不意より出て人を驚す意にて其阿波は淡め悪むなどの阿波にて物の見劣する樣の言なり記傳四淡島條に源氏物語帚木卷に爪彈を爲て云む方無しと式部を阿波米悪て少し宜しからむ事を申せと責給へど云々と有を河海抄に淡悪ヽ釋れたる其意なり尚阿波米てふ言明石卷蓬生卷總角卷又紫式部日記にも見えたりむともむるとも活用く言なり○考に荒碊(アラシヤル)てふ言にて阿婆禮阿婆良阿婆久など云類なり仍て婆を濁りぬと有るは僻事なりと見えたり師說に此伊邪那美命の豫母都國に往坐るは其御產の後の甚じき御有樣を妹神の御覽し給へる事を恥給ひて御面を合はせ給はじと所思食し妹神の御許を離れ避りて現身なから往坐るなり」と云れたるは此事なり

吾名妹能命波上津國乎所知食部志吾波下津國乎所知牟止申氏石隱給氏與美津枚坂爾至坐氏所思食久吾名妹命能所知食上津國爾心悪子乎生置氏來奴止宣氏

上津國とは顯國を彼黄泉國より云稱なり亦海神宮よりも然云る例有り古事記に海神云々今天津日高之御子虚空津日高爲二將出二幸上國一誰者幾日送奉云云と有り 下津國とは其黄泉國を顯國より云ふ稱なり根國と云ひ底國と云なども此國を上と爲るに對へて云稱なるを思合す可きなり如此く宜別給へるは其御子生の狀を見淡められ奉給へるに辱らひ給へる也偖此は絕妻之誓の起元因也下に悉しく說くを見るべし欽明天皇二年御紀に上遂二雲際一(オホソラ)下及二泉中一(シタツヽニ)と有るも下津國即泉國なるが故なり萬葉五に之多敝乃使と有るも泉路の事にて下方使と云ふ事なり 與美

津枚坂は記に黄泉比良坂と書き書紀に泉津平坂此云二余母都比羅佐可一と有る此也黄泉國と顯國との境なる事記紀の明文有り偖枚坂を御紀に平坂と書るを以て倩事の狀を思ふに黄泉國とは下津國とも云計りの地なれば大地の根核なる所にて我等が居る地の中心の少し片倚たる國なる事根之堅洲國と云るにて著し（此事大祓詞なる根國底之國の下に說り見合せて曉る可し）然れば其行くにも直降りに降り行く事なる可きを其は穴内ながらも地の外表に就たる處々回り行く事にて其境に至る迄の峻嶮しからぬ所なるを枚坂と云りとは聞えたる平とは云へども廣の義ならぬ證を千引石を以て其戶を塞ぎ給へるを云ふなる可し偖其を古事記に故其所謂黄泉比良坂者今謂二出雲國之伊賦夜坂一也と見えたるも由有る事也（神代紀一書に或所謂泉津平坂者不三復有二別處所一但臨レ死氣絶之際是謂之歟と有るは先師等も云れし如く中古の博士の攙入なりしが混ひて本文と成れるにて類聚國史にも出たる事なれば古き事とは聞えたれども云にも足ぬ僻事なり）上にも云る如く紀伊國熊野より石隱坐て地下より傳ひ出坐るが出雲國邊迄は平にして直下するには非る故に然は云るにぞ有べき著て後に伊邪那岐命の追幸行て返給ふ時に其より右の伊賦夜坂には出坐りけむとぞ思えたるに（此て古事記の文も明らかに成り又神代紀に熊野の有馬村より隱坐ると有る傳の趣も混れ無く聞ゆめり）○心惡子は已命の御陰を所燒給ひし故耳には非ず此火神の御心のまゝ縱に物爲させ給はむには甚じき禍事しもぞ出來らむと危ぶみ所思し坐也此は師說に此は皇祖天神の御言を重みし奉らせ給ふが故也と云れたるは眞に然る言にて此に幽深き致有る事なり（下に委しく云ふて待て曉る可し）返坐氐更生子水神匏川菜埴山姬四種物乎生給氐此能心惡子乃心荒比曾波水神匏埴山姬川菜乎持氐鎭奉禮止事敎悟給支

返坐氐更生子は其與美津枚坂よりなり（古事記に生國竟更生レ神と有るは此と同じ例なり）偖態と生給ふ所は此神等なれとも其間に金山毘古神金山毘賣神は生坐り古事記に生二火之夜藝速男神一云々因レ生二此子一美蕃登見レ炙而病臥在多具理邇生神名金山毘古神次金山毘賣神次云々神代紀一書に伊弉冉尊且レ生二火神軻遇突智一之時悶熱懊惱因爲レ吐此化二爲神一名金山彦次小便云々抔見えたり然れど此は火神を生給ひて夜七夜日七日吾を勿見給ひそと申給ひて其石隱坐る間にこそは出來給ひけめ更生レ子と有る列には非ず（記傳に名義を釋れたるに金山は枯穢しなり腦は痿病なり書紀に悶熱懊惱因爲レ吐と有る意なり中卷末に其見三在二之間一干萎病枯と有る意なり哀憔悴の加懈（ヘツカルこ）の加留々など皆此なりと有るは此の御惱みの有狀に熱符へればなり但今一義を包たり下に云ふ可し）偖金は今しも人の見知れる如く巖石の

間を深く穿ち入て取る事なるは其を司坐す神の其石隱れの時に成坐ればなり若て其が掘る者など年三十には滿らずして多く亡るが何れも吐を爲て暫時枯惱むも又神代の故事に由有る一奇事なり迦禰は處根にて大地の締りと成る謂なり若て此神決く天香山に由有り其は神代紀に其山を天金山と云ればなり神名式に河内國大縣郡金山孫神社金山孫女神社美濃國不破郡仲山金山彥神社名神大と有り又美作國苫東郡中山神社名神大と有も決く同神なり伊賀風土記に敢國神社所祭少彥名與金山彥也と見ゆ但此に就て土金の傳など云ふ事も有るなるは皆後世の杜撰なり○水神は古事記に於尿成神名彌都波能賣神と有て波邇夜須毘賣神の次に在り神代紀に其且終之間臥生土神埴山姫及水神罔象女と有る此に同じ又同紀に金山彥次小便化二爲神一名曰二罔象女一次大便化二爲神一名曰二埴山媛一と見え又伊弉冉尊云々其且二神退一之時則生二水神罔象女及土神埴山姫一又生二天吉葛一と有る此は此詞の傳と同じきが川菜を脫せり且二神退一は下津國へ出坐むと爲る際に當てなり身罷る山にて記る文にはあらず名義彌都は水なり波は速なり火神の一速ひ坐すを鎭給はむ料に生せ給ふ所なればなり記傳波は早の意か萬葉十二に石走垂水之水能早敷八師と有る是波の一言を早き意に取て續けたり」と云れしは眞に然る言なり若て其幽に榮(ハエ)の義を保てる事下なる埴山姫の下に云るが如し但此は記傳の一說にて允も當らずと云れたる說なから甚允當れるに依て引出たるなり偖又無數の水脈地中に在て其伏道(ミチ)より水を運ひて用に充る事は其涌る事の甚速きに因れり阿波國美馬郡彌都波能賣神社有り波爾移麻比彌神社と並坐る事由有げなり○匏は神代紀口訣に天吉葛者匏也と有り偖考に神代紀一書に生二天吉葛一と有て天吉葛此云二阿摩能與佐圖羅一と云る此にて水を汲む匏なり」と云れたるが如し上に擧たる鎭火祭料物の中に匏四柄と有は此に由有り又冠辭考に萬葉七に青角髮(アヲミヅラ)依網原と有るは此天吉葛と同じ偖此吉葛は匏の蔓にて莖も葉も世に青ければ青眞蔓(アヲミヅラ)と云て云係たり和名抄に防已を阿乎加豆良と訓たれど此は防已に非ぬ事明けし」と云れたり記傳五十一四十天之久比奢母智(クヒザモチ)神國之久比奢母神の名義を此詞に依て說れて汲匏持なり和名抄木器部に杓和名比佐古斟二水器也一瓢和名奈利比佐古匏也瓠也瓠匏也匏可二爲二飲器一者也と有り奈利比佐古とは草の蔓に生たる杓と云ふ意なり外宮儀式帳に木匏二十柄匏(ナリヒサゴ)廿柄と有りと云れたるは然る事にて此二神は諦しく此時に成れる匏神ならむと所思たり如何と云に古事記の此段なる水戶神の御子等は外より混れたるには非しかと年頃疑へる由有り天之水分神國之水分神と申すは靈神の傳の混れ込たる事已に卷四水分神詞に云るが如くなれは此天之久比奢母智神國之久比奢

母智神も決く此なる匏神の混なる事著し然るに水分神も此匏神は水神の御子の如くして其功用を祐奉給ふ傳の有けるを水戸神の事と心得誤り其より因河海持別而生神云々とは記し載たる者也（倘沫那藝神沫那美神と申すも神代紀には沫蕩尊生二伊弉諾尊一と有て此も混たる傳なるを思ふに其頃も詳ならざりし神也けり然れども此二柱と頬那藝神頬那美神の四柱は水戸神に似着しければ眞に御子なるにも有るべし古事記に水戸神之孫櫛八玉神と申すも有るを思ふ可し）○埴山姫は土神なり古事記に於屎成神名波邇夜須毘古神次波邇夜須毘賣神と有て男女二柱と有るは誤也神代紀に軻遇突智娶二埴山姫一と有れは女神一柱耳なる事決し（古史徴に云く古事記に次波邇夜須毘古神と有る八字は刪去るべし此詞又神逹生坐段第二第三第四の一書共に生二土神埴山姫一と有て一神なり第六の一書にも土神號二埴安神一と有て一神に坐ばなり神名式にも土神の社は此賣神耳有れども此古神の社とては一だに有る事なし案ふに波邇夜須毘古神と云ふ名は孝元天皇の御子建波邇夜須毘古命の名を傳誤れるにぞ有るべき又舊事紀に大倭化爲レ神名曰二埴安彦埴安姫一と有り此は古事記に依書る妄説なり）記傳五（五十七丁）に波邇は埴夜須は黏なり字鏡に挻謂レ作二泥物一也禰出須と有り（倘書禹貢に厥土赤埴墳と有る埴を古訓に禰延と有り史記も同じ漢文に埴黏土也と有り禰夜須は令レ黏（ネヤス）なり令レ肥を許夜須と云と同樣なり）神武天皇御紀に宜下取二天香山社中土一以造中天平瓮八十枚上云々又前年秋九月潜取二天香山之埴土一以造二八十平瓮一躬自齋戒祭二諸神一遂得レ安二定區宇一故號二取レ土之處一曰二埴安一と有る此にて心得べし屎の形狀の埴を黏したるに似たれば也（神名式に大和國十市郡畝尾坐健土安神社大月次新嘗と見ゆ畝尾は香山の畝尾にて地名と成れり此神社號に依れば此神名は香山なる地名より出たるに似たれども然るは非じ彼地名は返て此土安神の鎮坐より出けむを其紀の説は一傳にも有るべし○今此埴安の地名は右の神武天皇の御事に依るも其に健土安神は後に祀祭らせたまへる物ならむ其と天香山の土を取に遣はされしを以て思ふに本より此の神の顯幣なる爲なりと見えたり）要撰 今按ふに新具蘇比賣神と申す赤名も有て此御屎より埴はしも成出て埴黏とは其器を作る埴の狀に似たるに依れる故なれど其夜須は令レ殖にて此神の其埴を愈々製造らせ給ふにて彌爲の義なる可し山は彌聚にて其義異らず（波能賣神の波に通と賣と紫の義とを兼て含めるに心を着く可し）神名式に阿波國美馬郡彌都波能賣神社 波爾移麻比禰神社並坐るも此詞に合せて由有げなり（同郡に伊射奈美神社天椅立神社など有るは御祖神と思しきをもおもふ可きなり）○川菜神代紀（一書）に生レ海生レ川と有るは川神と坐す此水神彌都波能賣神の司り坐す川と其御靈とを生坐る傳にて此草は其に始て生出たるらむ事云も更なり考に川菜は和名抄に水苔一名河苔（和名加波奈）と書り今も水苔と云ふ物有て水を能く含む者故に植木の根を此水苔して繞ひて遠き所に贈るめり殿舍などに此苔の形を彫は即鎭火の爲ぞと云も熟符へり古今集（物名）に加波奈具佐と云も同じ物なり（風俗通と云る漢籍に堂殿上作二藻井一井藻以厭レ火と有るは此古傳の後に傳はりし者なり水苔は本草に陟釐と云る物にて側梨とも水衣とも石髪とも石衣とも水綿とも苔とも云る物にて池澤の腐水に生る俗に青苔（アヲサソ）と云へるは即此れなる可し）○四種物（乎）生給（氐）は火神の御荒びる鎭めむ

料なり偖火結神の神性く健く剛く清く亮(サヤ)けく在して薪だに在ば何處迄も燃行く所なるが漢籍にも水を潤下と云て火を炎上と云る如く其性天に達らむと爲る物なるが其元清淨なりと雖其觸るゝ物に依て其氣を易る事譬へば沈麝に觸たるは馨はしく朽木に燃るは惡臭有るが如く其物に依て清濁相易る事なり所以に少かも穢はしき事有れば忽に一速び怒り坐す事にて萬の殃災も先其火の穢たゝ所より起る事なり（此を直に黄泉國の火を穢給ふと見るに甚かりけり顯國の火と雖も穢に交こる時は黄泉國の火なる事譬へば世の人草は天の益人とも云ひ天下の大御寶には在れども禍神に相交る時は又禍神に屬き其身顯國に在ながら黄泉國に屬く理を思ふ可し）火の性の天に向ひ上らむと爲るを却て黄泉國に屬むと爲るを惡ませ給ひて火の災を行給ふ事なれは其穢火の火先を打消つ時は其にて盡て清く改る事なる故に其火を制する此四種の物は生成し給るにぞ有ける（世中に火災有る状を聞くに清火の忌清まはりたるより然る禍事の起れるは無く皆穢忽に爲る穢火よりて起れりける此を以て火忌の事の等閑に心得べからざるを曉る可し）○心荒波此曾は下に一速比給止波志爲氐と有る其にて少かも穢はしき物に觸る時は速に御怒を發し給ひて甚しく神荒びに荒び給ふなり但此神の御荒びと申すは彼禍神の荒びの類には非ず餘りに清く眞清なる大神に坐すか故に穢を惡ませ給ふ事の甚しき也（然以に一時の御怒にこそ家なも有なも燒給へれ其後迄を延かざる事は其物を燒盡せば其御怒の念と共に消盡る也但忌火を清めざる間は此神の御字無く又其害に黄泉國の禍神所を倚て荒ふる事有り恐る可し偖禍神の荒びは然らず一事を竟れば其次に移り何時迄も去る事無し此と自然に反せり）又諸の穢惡は悉く黄泉國に屬る物なる故に其に觸たる穢火を着れは清き物も穢く爲る此即天地神祇の穢火を忌避け厭給ふ所以なり（此に反して諸の清く善しき事の天上に屬る事を知べし萬葉十五に也伎保呂煩散牟安米能火毛我毛と有に天火と云語の有を證るなり）心荒波此曾の曾は爲字(セノ)の義なり師の古史に此文を取られたるには心荒則と成文(オキトヘ)へられたるは允當れるなり（然るを考に曾は奈か勢などの誤ならむ」と云れたるは如何曾を勢の如く用(ツカ)ふ一種の古言なめり則字を字書に然後之辭とも承レ上起レ下語助とも不定之辭とも有るか何れも則其任と字を引かさず云事なり）○水神匏は水神を匏を以て水を掬(スク)ひて火を消せとなり水神の下に備ノ辭を加へて心得べき所なり 四時祭式及齋宮式鎮火祭料物に匏四柄と有る此なり（師云く今も田舍には厠の傍に此物を植る事にて此蔓をその厠(カハヤ)に這ひ度らしめむは火伏と爲ると云り」神代より自然なる世の習俗にこそ」と云れたり）○埴山姫川菜乎持氐は土神は川菜を取持て火を鎮めとなり神の下に備ノ辭を加へて曉る可き事上の例なり（醫證に湯火瘡に川菜の生なるを取り其汁を絞り點れば究て功あり又頭痛などの時にも如此くして功多し」と有り）○鎮奉止禮は水神には匏土神には川菜を以て其火神の御荒びを鎮奉れと事敎へ曉し給へるなり此語に就上文を倚考るに此心惡子とは宣へれども火神を惡ませ給ふ狀には非す御稜威の究めて健く剛き神に坐す故に其神性

を畏み給へるなり所以に四種の物を生給ひて其荒び坐む時には云々して其を和め鎭奉れと事敎給へる也鈴屋大人說に考に上件の文の如くならば水神又埴山姬なも祭給ふ可き事なるに唯火神耳を忌給ふは如何とやうに疑はれたる實に然る事なり四種物を主と祭らでは文に叶はざるが如し然れど又思ふに伊邪那美命も後世の火の災を甚しく心苦しく所思して其を鎭む可き物を生給ひて是を以て鎭めよと懇到に敎置給ふ詞の事なれば火神も御妣命の其御心を思して荒び給ふなと云ふ意と爲は叶はずしも非じか」と有れども覺束無き說にて當らず偖此は伊邪那美命火結神を生給ひて御陰を所燒給ひ其に依て石隱坐て其火穢を避給はむと其日限を以て妹神に御暇を乞賜ひけるを未其日限も立さる間に妹神の奇しと所思て見行しゝを甚く辱恨み給ひて汝命は上津國を所知食す可し我は下津國を所知むと申給ひて其國に往坐しける時に其往坐る下津國の形狀と火神を生置坐し顯國の事とを思し合せさせ給ひて其與美津枚坂より返らせ給ひて右の四種物は生坐るなり此は妹神の所知食す顯國に甚く御心を留給ふ故耳には非ず皇祖天神の事依し給へる大御命を甚く畏み坐るが故なり其は前に二柱神等共に此國土を修理固成す可き大御命を蒙給へるな下津國に往坐るは已事を得ざる由縁の有るが故にこそは皆爲給へるなりけれ已命の御心に素より非りしかとも上津國と下津國とに別れ住せ給はむと申給へる此も此方の過に因れるが故なり若て終には絕妻之誓の事には至れり偖火結神はしも下津國をば悉く嫌ひ給ふ御性に坐す事は火は下へは燎る事無く上へ耳晉む物なるは後に御父大神に所殺給へるにも悉く天に上りて天安河の磐石と爲り天香山と爲りなと爲るを以ても著明き所なるが究めて淸み明らかなる神物なるが故に假にも黃泉國より起れる物事觸るを惡みて許可し給はず甚く怒らせ給ふ御心に坐が故に已に生奉給へる御母神と雖も御陰門より出給ふ當然の事ながらに悶熱懊惱め奉給へり此は心惡子と宣ふ所以也故大人等も此說無きは思ひ漏されしなり若て已命の故を以て御母神の下津國へ入らせ給ひ其事に依て御父神に斬られ給へるが故に黃泉國の事とたに云へは必惡ませ給ふ事常なり此は師の云れたる事なるを此に用有て引く所なり然れど此は其一端なるなり偖火の燃度る形狀はしも燥ける物に就て其燒く事の神速なる事一速びとも謂つ可き狀なるが神性の速きが任に淸き物は更なり穢き物と雖も燒遺さず是を以其穢き物に觸れは其火の體を汚すが故に火結神の甚じき御荒び共は有なりけり一度穢るゝ時は其穢を以て延く事なるが故に向ふ所之く所悉く其穢れに染ずと云事無し此の穢火の食合ひ又相火の穢を延く有狀なり其中にも火葬の穢麁火の穢などは尤其中の穢の重き物なり死穢產穢月水の穢など此際にも云知ず多かり然れども其火消盡れば其穢も隨ひて盡く火を消す者は水なり如何なる猛火と雖も土を覆へは即消え匏川菜も同じく

火徵を避るの器也此を以て伊邪那美命此四種の物を生置給ひて其穢火を盡し清火に改て此神の御德を加へ、穢火の禍事を除給はむ爲に水神土神を以て其行事を爲て火結神を祀り鎭奉れと敎給へるにて此心惡子乃心荒比曾波云々は其二神に示給へる神語になむありける此惡子と宣へるは其穢火に就て宣へるにて全體の火結神に係れる語ならず其は心荒比曾波と若も然る事の有むには云々爲せとの御言なる者なり令義解に卜部等鑽レ火而祭とあるを以て上件予が說の誣ざるを知る可し大瀧光憲云く伊勢にては此火忌の事の嚴重にして更に犯す可からざる事は天下古今能知る所なれば今云ふ限に非ず予若き程荒木田末壽神主の許に伊勢在つる間其兩宮の神人等は更なり其地の人の行狀を見るに先穢有る人其定りの日限を竟て清火に革むる時には必其間に煮炊きたる物は勿論食はざる事なるが當日迄の火は悉く消し灰迄も取改めて火を鑽易る事なり今此師說を聞くに至て不知々々も天神の御法の違はざるを畏る ○事敎悟給支此迄彼御母神より水神土神に事敎悟給へる所なるが天都詞乃太詞事も亦此にて結と爲るを一に合せて終たり所以に皇祖天神より皇御孫命の御天降に就て天下を統御む御業は人草を靖くし給はむ御爲也其には此鎭火祭なむ斯在る由緣有る事にし有れは皇御孫命の大朝廷に爲て天下公民の爲に云々爲て行はせ給へと事敎悟給へるとの二を總たるなり如此く二を一に結て一事なるに體に二を合せて括りたるが見ゆるは然才がに高千穗宮にて天兒屋命の物爲給へる故にて人心の遠く及ざる所なり ○借上件の如く火結神を鎭給はむ爲に水神土神を生成坐るに就て又幽深の旨有り神代紀に即軻遇突智娶ニ埴山姬ー生ニ稚產靈ーと見えたるは伊邪那美命其火神の御荒びを鎭奉ら令給はむと所思せる御心の享れるにて火神は御父神に屬給へる神に坐るに御母神に屬る土神の其后神と配給ふ事奇異に靈しき所なり五元神の中に風神火神は御父神に屬給ひ金神水神土神は御母神に屬坐りと迄は師も云れたるが尙其深義を予已く見出たり下に云む此に資て稚產靈神は生坐るが古事記には彌都波能賣神に次て此神を列ねて次和久產巢日神此神之子謂ニ豐宇氣毘賣神ーと有るは右の火神土神の御合坐る事を記し漏されしにて眞には右の一書の傳の如くなむ有るべき然るは天日火神の光輝大地土神に蒸通りて水氣水神を含む時は地中に草木牙發る可きの一元氣を釀成す稚產靈神の生坐る本緣此なり神代卷口訣に稚產靈草木牙發之元神也と有るは說得て妙なりとも妙なり和久とは虫の湧(ワク)水の涌など云ふ如く物の已に發り初るの謂なり太元考に割來(ワク)と云るは此義なりき已に生發むとする牙有て地上に出る物は草木なり豐宇氣毘賣神の恩賴に在り此物に資て衣食住の整有て天下萬民の命を續く事と成れるを以て思ふに火神を生給ふに依て御陰所燒坐る禍事に依て其を鎭むる物成り其に依て天地造化の神機全く成就ふなど其事の因みに依ては愛憎と爲りなどの事も有つれど幽には皇祖天神の預相鎔

造給ふ事なれども二柱神の御上に取て偶然如くなれど然に非す皆其幸魂奇魂の所爲なり（此天地造化の神穢た何奉る予が眞說なり容易く心得べからず）○倍又此詞に吾名妹能命能上津國乎所知食倍志吾波下津國乎所知牟止申氐石隱給氐云々は事戸の本なりと云るは此時に女神の御方よりこそ然は宣別給へるなりけれ妹神の未許し給にさゞる所なり若て妹神の御心には火神を生給へりし御惱みに依て下津國には入せ給へると所思し成しかは其妹を慕給ふ御心の深きに依て其御怒りなむ强かりければ（人は更にも云ず凡て夫婦ばかり世に親しく善はしき者有事無れば其妻の爲に怒る事の甚しきは止事を得ざる自然の性なるを恐けれど思合す可也）愛しき汝妹命や子の一本に易つる哉と宣ひて其御歎の餘りに火結神を斬給ひて其御怒には和む方は御在つらめども猶得堪させ給はすて其下津國へは幸行りし也於是宣はく吾汝と作れりし國未作竟有れは可還と宣ひ入たるに悔哉速來坐すて吾は黃泉戸喫爲つと宣へる上津國に返らせ給ふ事の當惑（ナリガテ）なる御狀也（黃泉戸喫の事を以て申させ給ふを以ても火詰神を甚く畏み坐る御心坐が故也倍返らせ給はじと所思し、諾は與二黃泉神一相論と宣ひながら其殿內に御寢坐るを以て明らけし）伊邪那岐命一火燭して其醜國の醜めき狀を見發し給へるに依て汝已に我情（アガコヽロ）を見つ我復汝情を見むと宣へるは其別る可き由有るが故に避れるを其慕坐るが拙しとなり神代紀に伊弉諾尊亦慙焉云々族離と宣へる御言を察（サトル）ふ可し（見二我情一と我內心とを見發せりとなり汝情とは同紀に始爲レ族悲及思哀者是吾之怯矣と有る其を宣へるなり）是に於て種々の御爭の事共有りて黃泉比良坂に到坐て事戸を建給ふ此は二柱神の御族離れて上津國と下津國とに所知し別るゝ御誓にて此時に至て先に女神の申給へる信全く族神の御方より立て顯國と黃泉國とに別住給ふ事と成れりしなり（女神より一日に千頭絞殺むと白給ひ妹神より千五百產屋立てむと宣へる因緣にも深き子細有る事なり其は下に云べし）此時ぞ伊邪那美命の本心發れたりける其は神代紀に伊弉諾尊曰始爲レ族悲及思哀者是吾之怯矣時泉津道守者白云有言矣曰吾與レ汝已生レ國矣奈何更求レ生乎吾則當レ留二此國一不レ可二共去一是時菊理媛神亦有二白事一伊弉諾尊聞而善之乃散去矣と有る此傳簡易なりと雖も甚正しき傳說也其餘記紀共に筝の事蒲萄の事桃實の事などの有るは伊邪那美命の御許より追來れる醜女共と其出雲の伊賦夜坂にて相鬪給ふ間の事なりしを文の續に依て彼國の事と見ゆるなり然れは其醜女共を追却し給ひて其黃泉戸には千引磐を以て塞給へるにぞ有ける（出穴の中に物の生ざるを以て思ふ可し況て地中を深く沖る隈路に草木の出來まじき理なり然れば古事記に追二到黃泉比良坂之坂本一時取下在二其坂本一桃實三箇上待撃者悉逃返也と有るは決く伊賦夜坂の坂本を取誤たるなり決て比良坂にては非じ此を以考るに其比良坂は其伊賦

夜見ノ根底に當れる所なればと思ふ右の文に吾與レ汝已生レ國矣と有るは古事記に伊邪那岐命語詔之愛我那邇妹命吾與レ汝所レ作之國未ニ作竟一故可レ還と有る其御答にて此時已に伊邪那美命の御心に解得給へる所有て仰上させ給へるなり其次に奈何更求レ生乎と有るは妹命は然宣はせとも已に國を生れは歸給ふには及まじとの御答なり但求レ生乎は例の記者の儀辭にて兆辭へる如く思ひ取て書る者なり歸は生を字牟と訓れたる然は有たき事ながら其義には非じ吾則留ニ此國一不レ可ニ共去一是時菊理媛神亦有ニ白事一伊弉諾尊聞而善レ之乃散去矣と有るは黄泉段第一の幽深の理有る所なり其は吾與レ汝已生レ國矣とあるを按ふに風火金水土の五元神成坐て二柱神の國土經營は此神等に依て成整へる事を云ふ也凡宇宙に在ゆる萬物の全は此五元の産靈に資て成すといふ事無きか萬物の中に人は最靈なる所なり人を以て云はゝ風火は氣と神との二なり金水土は骨幹となり皮肉と爲り血液と爲れる物にて此三を合せて形體と爲る所なり若て風火は伊邪那岐命の上津國に屬き金水土は伊邪那美命の下津國に引るゝ所なるが故に形體は地心に向ひて立ち氣と神とは天上より此を引給ひて此上下より相保有給ふに依て世に長存する所なるが此に至て別處を建給ふ事は伊邪那美命の一日に千頭絞殺むと申給へると伊邪那岐命の一日に千五百産屋立てむと宣へると各々一理有る事にて生殺の本始造化の機關を知る可き秘蘊なり其機密を少か漏さは金水土を以て形體を爲す者は地中に沈む性有り伊邪那美命地心に在て引給ふ所に因なり風火を以て氣と神とに成れる者は天上に伸る性有り伊邪那岐命天極に在て引給ふ所に因れるか此二方に二別れて相保給ふ所なる中に其相對の所に依て死とも生とも又界を分つに至るなり此即此詞に上津國下津國云々の事を申させ給ふ結にて凡天下に有る限りの事物の理悉く此に全備て在る所なる由委しくは古始太元考及日本書紀傳に註るか如し此黄泉國の事に至ては古來少しも尤なりと思はるゝ說を聞ず予此を思ひ此を推ひて大に考得る所有りと雖も事長ければ此には盡し難し

依此氏稱辭竟奉者皇御孫能朝廷爾御心一速比給波志止爲氏進物波明妙照妙和妙荒妙五色物乎備奉氏青海原爾住物者鰭廣物鰭狹物奧津海菜邊津海菜爾至萬氏爾御酒者瓱邊高知瓱腹滿雙氏和稻荒稻爾至萬氏爾如横山置高成氏天津祝詞乃太祝詞事以氏稱辭竟奉久止申

依此氏稱辭竟奉者は上なる天都詞乃太詞事を受て云ふ文なり新年祭詞に故皇吾睦神漏伎命神漏彌命登皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣と有ると事の狀相同しきを思ひ合す可し凡ての神事は悉く皇祖天神の詔命を奉て物爲させ給ふ中にも此詞などは殊に懇到に御傳坐る太祝詞なれば其を詳に擧たるなる故に依此氏と言に大に力有り今行ふ所即神の御敎の任なる由を強く聞え上させ給ふ御事なり○皇御孫能朝廷爾大祓詞には皇御孫之命乃朝廷と有り此例に依らは命字は脱たる可かと思ふに然らず本より無りしなり其は天皇を須賣良美許登と申す可きを須賣良とも常に申奉ると同じ例なり已に神代紀に皇孫と書たるをも命字を添て訓べきなれは如此云も古言の一格なり○御心一速比給止波志爲氏は考に一速は借字にて稜威疾なり」と云れたるは然る言なり此火結神に係て御心一速比と云る續に依て考有り其は此神を斬給へる御刀の名を伊都之尾羽張神とも稜威之雄走神とも申す伊都を稜威と書れたる其意ならむとは誰も思ふ物から其言の此に起れりとは心着ぬ事なめり未其說有るを聞す世に火の燃る計り猛く嚴々しき物有る事無く人の怒る計り猛く嚴々しき物も亦非りけり此二を合せ見るに何れも内に蘊む所の氣勢の外に晋み長るに出たり稜威之雄走神と申すは伊邪那岐神の火神を殺し給はむと鋭る御心の一速び坐るに依て成坐して武甕槌神の御祖と在して武道の祖とも仰奉る可き神なるを思はゝ思半に過む者なるぞ然れは伊都とは出と云に異ならす氣勢と云ひ怒ると云ひ太くと云ひ痛むと云なども共に類語に其事の彼に至り及ふを云也然れは稜威之道別稜威之嘖讓など云も此に同しく神靈の威嚴の猛く立延て至り盡さゝる所無を云なり此事大祓詞伊頭乃千別爾千別氏の下に委しく云れは見合す可し火の晋み燃る勢を此に一速比と云る事は右の所由に因れる者なり又火計り物の淸く明るき物なき故に伊豆幣伊豆乃眞屋なとも云事なり此等の語を假字の淸濁を以て別たれたる先師等の說は然る事なれども言語の本より云ふ時は共に一なり神代紀には稜威と有るを大祓詞には伊頭と書き外書には伊豆と濁る言を神武天皇御紀に嚴と書るなど淸濁に就て其差別の無き故ならし但稜威の方には伊都と淸み淸淨の方には伊豆と濁り用分たるを惡しとには非ず今は其言義を釋く爲に云なり給止波志爲氏は不給止爲氏なり此自と云辭は將來に然る事は非じと云意にて已に有る事に受と云る不とは少異なり志字濁りて訓む可し近く云はゝ此は勿レ給(タマフナ)と云て禁止ると同し狀なるか若もやと危ぶむ意有るは今火を鑽てこそは改るなれ神の見行さむには猶淸まり竟ぬ所の有むも知べからぬ故に斯はいふなり借一速比給止波志爲氏

は右に說る如くなるが猶云はゝ火の蘚に就て速に燎度の狀は實に然云べき勢なる事は誰も能知れるか如し然るに上に此能心惡子乃心荒比會波と有るに引合せて說へきが如くなれども荒比は一速比たる上に有る事業なれは此は其迄には至らす其上彼は天津祝詞此は其祭祀の事に就て云なれは然る御荒びの末有ぬ間に其を云へくも非ねは此は唯火神の御心利き御事と見て宜しき也 欽明天皇五年御紀に譜陣覽(イチハヤシ)と見え伊勢物語に昔人は斯る一速き風雅たなむ爲ける大和物語に平中思からず思ふ事なるの時に將て來て置たりけり此妻一速く云ければなど有り〇師の古史徵なる神代系圖津速產靈神御末系を閲れは津速產靈神 亦云神速魂命 此者火產靈神之御靈神也と有るに先には驚たりしが其後に鐵胤が古史傳の講說爲るを光胤が聞來て云を聞くに津速は一速なり天上にて一速び給ふ神は火產靈神を除て何れか有む決く天に坐す御靈の御名なり」と云るを予深く疑ひて一速びとは道速振荒振神なども云て善からぬ神の御上に云事にこそ有けれ何てか津速產靈神は然る由ならむと云消て其說は取らずてなむ有ける 此に師も一速びた荒ぶる事と見られたる說なるを予も其心にて受たりし故に是非し細論有て齟合さりしなり且其時の心には一速びは假有(タトヒ)天に坐ても常の宜しき邊に非す其產靈を御名には〻惡き事を產靈し給ふ神なるべく爲むや御古書に[illegible]產靈と云ふに[illegible]と各其坐ス產靈は其用を云るにこそ有けれ高とか神とか火とか[illegible]其體と爲へき事有て其下に有る產靈なれば一速び〻荒ぶる由なるむには眞に協さる事なり 然るに此を思惟て漸く其說を得て合ふ所有り又合さる所有に至れり其は津速產靈神と申すは天地の初時に葦牙の如く萌騰つる引道(ヒコチ)有り可美葦牙彥舅神の隱身にして神留る所なり此に火產靈神其御父大神の御怒に依て所殺給へる血其天霧なる氣脉(ヒコチ)より引導き上せられて天日の光輝淸明く成れり此に因て成坐る神なり然れは可美葦牙彥舅神と火產靈神の御靈の相合ひ相混りて成坐る神也 斯在る故に其二神は各其二神にて各々其々の御功用也此神は右の二神の御靈に資て成坐る所にして又一つの御功用有り 姓氏錄 主條 思智神 に高魂命兒伊久魂命と有るは諦しく此神の御事なゝめり伊久とは生活の謂なるが天日の自轉せる大地の旋轉せる皆其氣脉有て其度有が如く人の形體も其に則る所に爲て心臟は天日也神此に位す頭惱は天極(ヒシワカミヤ)也精此に在り神靈と精氣とを合て氣脉(イクチ)の循る事猶環の端無が如し此を津(ツ)と云 漢人の津液と云ひ洋西に神經と云る者此也素問に氣和而生津液相成神乃自生其五氣和化而津液方生津液與氣相副化生神氣乃能宜也其[illegible]注云於津[illegible]々是以[illegible]然は此に當れり 然は津の氣脉を循る故に存する身體なる事天地の大氣の中に載れると同し伊久魂命と申すは實に尤なる御名也 但此は御名義を釋て合たるに非す姓氏錄に思智神主高魂命兒伊久魂命之後也と有思智神社は中臣鎌祖大田命津臣神に在せるか其出自を云時は伊久魂命なるが故に如此傳へたる也思智と云るも生津と云が如くなむ聞えたる

津速と申速は榮の義成が又迅速の義をも兼たり其は其津の氣脈に乘て榮巡るか故に目此を視て心に識し耳此を聞て心に思ひ一身の衆務を悉に感稽ざる事無に至也此即津速產靈神の御恩賴なるが可美葦牙彥舅神の氣脈に資り火產靈神の一速き御靈に依る所也如此見時は一速は荒る事に非ず心利き事を云なれば此を一速產靈神と亦心得て僻事ならざる也然れど予が先に思し如くにては叶ず○進物波云々置高成氐此は首に四時祭式を引て載る所の料物を云り但其中に藁四圍と有は卜部鑽火而祭と有其鑽火を燃て必燒上たる者ならむ此を神實と爲て祭り自餘の品物其幣帛と爲て奉る也置高成の置は奉る事也大祓詞置座の下に云り萬葉四に白雲之多奈引山之高々二我念妹乎云々と有高と此高と相似たり十五にも多可多加爾麻部夏乎伎美と詠り○天津祝詞乃太祝詞事以氐稱辭竟奉久止申は次なる道饗祭詞此に同じ此は上に安國止平久所知食止天下所寄奉志時爾事寄奉志天都詞太詞事乎以氐申久と有る其結なり鈴屋大人說に考には種々の疑共の有に依て擧られさりしかども凡ての文共美たくこそ聞ゆれ大凡事を記す古文の手本とも爲つべきは此祝詞祭ては龍田祭の祝詞なとなりしと云れたるは考の說には勝れゝとも此詞の天神の御言なるに未だ心着れさりし者なり偖上に云る如きは天下を安國と統御む爲に鎭火祭の神事を天神より傳へさせ給へるを下に至りて皇御孫能朝廷爾御心一速比給止波志爲氐と云ては此にては朝廷の事耳に爲て如何なる如くなれども已に註る如く祈年祭詞には天下百姓の農業を始る事を今年二月爾御年初將賜登爲而とも皇神等能依志奉牟奧津御年乎云々など皇御孫命に係て申せるにて其と此と同じく佗祝詞の例悉く然り實に一人の天下に爲て天下の天下には非ることと此を以て見つ可し此の事已に首卷に委しく云り偖此には如此く麁く云へれども道饗祭詞には皇御孫命乎云々又親王王等臣等百官人等天下公民爾至萬氏爾と云り此等を思合す可なり

天照皇大御神の豐葦原瑞穗國は吾子孫の可王む國なりと仰せ給へる大御言の如く天下は悉く我皇御孫命の御有なり然して天下の人民は其御有を區別けて遠祖より預仕奉り其身に着る事に因准て修理固成すの道を以て仕奉る所なれは何物かは己か私物ならむ何事かは己か私の爲に爲む天皇朝廷の御爲にこそ海行かは水漬く屍山行かば草生す屍と大君の故に功は立べかりけれ此に背き奉らは一日一夜も有得ましき理をなむ思ふ可かりける此は此の文意を釋たる事の因みに云事なから古典を拜讀む每に忘れては叶ふまじき事故に例の言擧爲つ

○道饗祭

神祇令に季夏道饗祭と有る義解に謂卜部等於京城四隅道上而祭之言欲令鬼魅自外來者不敢入京師故預迎於路而饗遏也と有て其本文に季冬同之

と見えたり四時祭式に上の鎮火祭に次て道饗祭と有る細書に於二京城四隅一祭と見たり（但臨時なるは別なり其は下に云ふ可し齋宮式にも野宮齋宮共に鎮火道饗祭を並載たり）年中行事秘抄六月晦日條にも鎮火祭道饗祭と相並載られ公事根源抄にも此に同じ其文に云く是は疫神の祭なり毎年に必行はる可き事なり近頃は絶て侍るにや是も卜部の人京城の四角の路にて鬼魅の他方より來るを京路に入ざら令むる爲に路上に供物を奠て祭る也鎮火道饗の祭をは四角四堺の祭とも申なり」と有る此は右の義解の文を釋て宣る者なり（同抄正月終條に代厄御祭と云有て火災御祭に次られて其文に是も月毎に行はる云々と見えたるに月毎に行れたる神事にて此祭の小き者なる事と思ゆ火災御祭と云は鎮火祭の小きにて月毎に行れ其大なるは季夏季冬に行るゝと全く同じ仁明天皇御紀に承和六年正月己亥令郷邑毎レ季敬二禮疫神一と有は決めて此代厄御祭の類なり）偖右の義解に京城四隅と有るは京都の總外廓を云なり臨時祭式に宮城四隅疫神祭と有る宮城とは異なり相混ふ可からず（此事已に鎮火祭の下に云りき）鬼魅とは此詞に根國底國與里麁備疎備來物と有る其なり師說に和名抄に醜女を鬼魅部に收たる意にて豫母都國より荒來る物を始め總て世に禍事を爲し疫病を流行する類の妖物を弘く指言へり」と有る其なり（此事下に委しく說るを見る可し齋宮式に鎮火祭道饗祭を行はせ給ふ由見えたり此は大御神の御杖代と仕奉らせ給ふ御事なる故に然る鬼魅に宮中の人等の交こられては太しき穢と爲る事なる故に朝廷と同じく行はせ給ふ所也）自レ外來は

此詞に麁備疎備來と見えたり塞神三柱の守り在せども猶其間隙を常に伺居ふ鬼魅の事なり（下行者下乎守理上往者上乎守理云々と有るは此事なり鬼魅の中に迷神と云も有り宇治拾遺に三條院の八幡の行幸に云々長岡の寺戸と云處の邊行けるに人共の此邊には迷神有なる邊ぞかしと云つゝ渡る間に僕信も辛くとはなくて行程に過もやらず暮々下れば今は山崎の邊に行着ぬ可きに怪しう同じ長岡の邊な過こ訓川の野邊なと思へば又寺戸の岸を上る云々九條の程より迷はし神の着て出來るを知らでけるなめりと思ひて西京には歸來にける云々と有り此等の魅物を避る爲なり）欲レ令レ不三敢入二京師一は此御祭を爲て其御靈を京城の四隅の道上に鎮め祀ひて鬼魅の外より來るを過め給ふとなり預迎二於路一而饗遏也は師說に鬼魅の入來て禍を行はざる豫に此神等を四隅の路に迎へて御饗を献り祈願て鬼魅の外より來るを防ぎ過め令給ふ由なりと有が如し此即道饗祭と云事の本なり此を以考るに鬼魅は此障神等に屬る者なる故に其堺に來て障神の御所爲を仰ぐなる可し此文を以見るに障神を祭て鬼魅を饗遏る事と通えたり（師云餘の神等は某々の社前か或は神祇官にて祭らるゝを此神等は其時々に如此く衢にて御饗を進りて祭る故に此祭名を道饗祭とは云なり皇太神宮建久行事記に二月十二日條に饗土(ド)を云所有り此を今橋姬と云り或說に元來橋姬と云は後世の事にして鬼魅を都中に入ざら令る饗所なりと云るは此事に能合へり又刀禰祝等引率而守圍山路饗行向道祖神祭と有も此の道饗に同じ）聖武天皇御紀に天平七年八月乙未勅曰如聞比日大宰府疫死者多思欲三救二療疫氣一以濟下民命上云々又其長門以還諸國守若介專齋或道饗祭祀と有は其疫死する者多きに依て臨時

に諸國に令て令行給ふ事なるが此文の上を味るに同祭式なる疫神祭と云者決く此なり（亦此を疫神祭とも云事なり委しく下に云可し）備其幣物は四時祭式に道饗祭（於京城四隅祭）五色薄絁各一丈倭文四尺木綿一斤十兩麻七斤庸布二段鍬四口牛皮二張猪皮鹿皮熊皮各四張酒四斗稻四束鰒二斤五兩堅魚五斤腊八升海藻五斤鹽二升水盆坏各四口槲八把匏四柄調薦二枚と有り但此は四所に分配る可きを一に都たる員數也（齋宮寮式野宮道饗祭料物此に同じ但此に麻七斤と有を彼には七斤十兩と見え此に牛猪鹿熊皮各四張と有を彼に各二張と見え此に酒四斗と有を彼に米酒各四斗と見え此に槲匏有を彼には見えず調薦二枚と有を彼に藁四圍薦一枚と見えたる耳異なる所なり）〇臨時祭式に疫神祭と云事有り此は右の道饗祭と同じき由は上に續紀を引て云る如く成が其尋の物に見えたるは同紀に光仁天皇寶龜二年三月戊午朔壬戌令天下諸國祭疫神亦同四年秋七月癸未祭疫神於天下諸國亦同六年六月癸亥朔甲申遣使祭疫神於畿內諸國亦同年八月癸未云々是日祭疫神於五畿內また同八年二月庚戌遣使祭疫神於五畿內また同九年三月癸酉大祓云々以皇太子不平也又於畿內諸界祭疫神云々と見えたる此也（仁明天皇御紀に承和六年正月乙亥令下五畿七道諸國奉祭疫神上と見えたる此は天下一統の事と見えるなり公事根源抄に六月十二月に代厄御祭と云有て月毎に行はるゝ由なるに決く此なり三代實錄に貞觀七年五月十三日癸亥令佐比寺僧惠照修疫神祭以防災疫とも有り）此は朝廷の恒例に行はせ給ふ六月十二月の外なるが疫病などの行はるゝ時に當て祭給ふ御事なり疫神と云は疫癘神を防禦め給ふ神と申す事也疫を行ふの謂には非ず思誤る事勿れ（右の文中に皇太子の不平（ヤクサミ）給に依りて行はせ給へる杯を思ふ可也猶日本紀略に正曆五年六月廿七日丁未爲疫神修御靈會木工寮修理職造神輿二基安置北野船岡上とも長保三年五月九日於紫野祭疫神號御靈會依天下疾疫也云々此社號を今宮と有は社を建て祀らるゝなり）

右の於畿內諸界祭とは臨時祭式に畿內堺十處疫神祭と有る下に山城與近江堺一山城與丹波堺二山城與攝津堺三山城與河內堺四山城與大和堺五山城與伊賀堺六大和與伊賀堺七大和與紀伊堺八和泉與紀伊堺九攝津與播磨堺十と見えたる此なり但帝都の所在に依て其地方に從ふ可き事勿論にて此は今京の御定也仁明天皇御紀に承和元年四月丙戌勅云々又如有疫癘處各於國界攘祭云々又九年三月庚戌勅云々昔有天行之處國司到境下令防祭疫神と有を以て堺神は疫神なるを知べし（朝野群載十五に四角四堺祭と有る下に四角とは宮城の四角の事を云ひ四堺とは和邇堺會坂堺大枝堺山崎堺と有るに右に十處には當る可けれども四堺には叶はず四堺は京城の四堺を云る事上に云ふ如くなれば也傳考有り下に云ふを見る可し）西宮記に四界祭陰陽寮向四堺祭以藏人所人爲使四角祭陰陽寮宮城四角祭有使所人以上天下有疫之時陰陽寮進支度（料物官宣）と見え左經記に寬仁四年六月十九日云々參關白殿令

御覽四角四堺御祭料ニ請奏陰陽寮奉ニ請奏一今日侍從中納言於ニ左仗一被レ定と見えたり公事根源抄に鎭火道饗の祭をば四角四堺の祭とも申なり」と有る其四角四堺は四時祭なるとは異れるが如し然るは日本紀略に時々見えたる四角祭は道饗祭を云るにて鎭火祭の事とは通えざるを以てなり禁秘御抄に四堺御祭所衆瀧口各四人爲レ使也八人と有る楷梯に二中歷云四堺付四角會坂關戸大枝龍花今按會坂東在ニ近江國一關戸南在ニ攝津國一大枝西在ニ丹波國一龍花北在ニ近江國一按公家被レ行ニ四角四堺祭一之時四堺者如レ上其四角者宮城四維是也天暦六年六月廿三日四堺祭和邇堺會坂堺大枝堺山崎堺實德二年五月二日會坂大枝龍花山崎公事根元抄六月卅日鎭火祭道饗祭鎭火道饗の祭をば四角四堺祭とも申なり」と見えて又異ならざるが如し此に就て深く此を思惟に臨時の疫神祭にも必鎭火祭をも共に行るゝ事なるが故に彷彿しく爲て見え難き者なりけり偖右等の四堺は上なる十處を云ひ四角は臨時祭式畿內堺十處疫神祭の前に並載れる宮城四隅疫神祭若應レ祭京城四隅准レ之と有る此を云事明らけき者也此れを朝野群載には宮城四方巽方鬼氣御祭また宮城四方坤方鬼氣御祭なども記せり疫神祭と云も同じ事なり東鑑二十六にも疫癘流布時被レ行ニ四角四境鬼氣祭一對治と見えたり鬼氣祭と云事は義解に欲レ令ニ鬼魅自レ外來者不ニ敢入ニ京師一と有る其意なり日本紀略に村上天皇天曆元年八月十四日乙未於ニ建禮門前一修ニ鬼氣祭一と有て十五日の下に爲レ攘ニ除疱瘡一於ニ紫宸殿建禮門朱雀門三箇所一大祓と有れば疱瘡の事に依て有し也偖其十處は延喜の當昔の御定也けるが後には右の四堺に成れゝども又事と有る時には延喜の舊制を用させ給ふ事申すも更なり萬葉十三に相坂山爾手向草絲取置而云々又近江道乃相坂山丹手向爲吾越往者など其外にも逢坂に手向を詠る事多在り會坂に關明神とて今も立て給ふは此障神なる關戸山崎に一所なる可し此に疫神社有り拾遺集に源公貞が大隅國に罷下けるに關戸院にて云々平家物語に時忠卿山城國關戸院にて輿を昇居させなど云る此なり大枝に今酒呑童子首塚とて有るは鬼魅を遮る障神社の其所に在に大枝陵の有とを打混(マキラ)して僻事なりつる者なる可し龍花は近江國志賀郡なり天安元年御紀に四月始置ニ近江州大石龍花二所關一と有處此なり貝原篤信が諸州廻に近江國龍華橡生(トチフ)と云所有り此湖水は近江の龍華へ落る故に叡山と比良と高峰の間續かず云々此龍華越なりと云る所なり此等は右の四堺の事なるが右の十處祭ニ疫神一の舊跡外にも有て石清水の疫神など此なり神名式に和泉國大鳥郡開口神社今も堺津と云に在て此を社傳に飽咋神と云由なるは此に疾病の神なれども岐神を祭るに就て合せ祀れるにて彼饗遏と云義なり其外猶他處にも此類なる社有べきなり

臨時祭式に宮城四隅疫神祭若應レ祭京城四隅准レ此五色薄絁各一丈六尺等分ニ四所一已下准レ此倭文一丈六尺木綿四斤八兩麻八斤庸布八段鍬十六口牛皮熊皮鹿皮猪皮各四張米酒各四斗稻十六束鰒堅魚各十六斤腊二斗海藻雜海菜各十六斤鹽二斗盆四口坏八口匏四柄櫑十六抱薦四枚藁四圍楉棚四脚各高四尺長三尺五寸裲一枚と有り此は右に云る四角祭に當れり又同式に畿內堺十處疫神祭山城與ニ近江一堺一山城與ニ丹波一堺二山城與ニ攝津一堺三山城與ニ河內一堺四山城與ニ大和一堺五山城與ニ伊賀一堺六大

（和與伊賀堺七大和與紀伊堺八和泉與紀伊堺九攝津與播磨堺十）堺別五色薄絁各四尺倭文四尺木綿麻各一斤二兩庸布二段金鐵人像各一枚鍬四口牛皮熊皮鹿皮猪皮各一張稻四束米酒各一斗鰒堅魚海藻滑海藻各四升雜海藻四升腊五升鹽五升水瓫一口坏二口匏一柄槲四把薦一枚藁一圍輿籠一脚杓一枚擔夫二人（京職左差備充之）と見え左右京職式に毎年九月神祇官畿內堺祭差擔夫五人以上送之と有る此也俗此は後の四堺祭に當れる者也四角四堺と云ふ所を以て見れば別なるが如くなれ共京にて祭らるゝと京外にて祭らるゝとの差に依て然は云なれ此も彼も共に疫神祭にて四時祭式に道饗祭と云者なり（凡ての祭料物と道饗祭に准らへたる員數共なり）俗此詞に高天之原爾事始氐皇御孫之命止稱辭竟奉云々と見えたる如く此も皇御孫命の御天降の時に皇祖天神より天津祝詞の太祝詞事以て授り給へる神事に在れば恒例六月十二月に行はれて鬼魅の外より來る物を豫て障過るが主にて臨時なるは天下に疾病なせる時か何れに爲ても事の變に臨みて行るゝ所になむありける然れども其恒例なるをば道饗祭と云ひ疫癘には疫神祭と云ひ人事には障神祭と云ひ別つ事と

通えたり（又御贖會とも岐神祭なども云事なり下に說を見るべし）○臨時祭式唐客入京路次神祭條の次に蕃客送堺神祭五色薄絁各四尺倭文二尺木綿麻各二斤庸布四段鍬四口牛皮熊皮鹿皮猪皮各二張酒二斗米四升鰒堅魚各二斤海藻四斤腊八斤鹽四升稻十二束水瓫二口坏四口匏二柄薦二枚藁四圍槲八把（已上祭料）木綿四兩麻一斤酒六升米四升鰒堅魚各一斤雜海菜二斤腊一斤鹽一升水瓫坏各二口匏一柄食薦二枚槲十把輦籠一口杓一枚夫二人（已上祓料）右蕃客入朝迎畿內堺祭却送神其客徒等比至京城給祓麻令除乃入と有る畿內堺は蕃客の過る道路なるにて先に擧たる畿內堺十處の中の山城與攝津堺また攝津與播磨堺と有る其にて山崎須磨の二所なるにぞ有べき却送神とは蕃神なるを道饗神の祭に屬て此を祭り外國人に屬來る蕃神を却送りて京城に入ざら令給ふ神と云事なり祓麻を給はる事は外國は素より醜き國なり皇國の比に非ず人物此に因て穢れたり是を以て其穢を令除給ふ事なり思ふに此は其頃人心良女々しく成て儒佛に淫れたる當昔の心に非ず足姫神の御世よりの御定なりけむかし（今世人は漢國に似ざる事を非と爲るを古人には格別なる所有て此方の御制を以て彼に仰がする事然すがに神氣の盛なる所有るに依れり此事遣唐使時奉幣條に委しく說るを見合すべし此は事の序

に云る耳なり　其次に障神祭五色薄絁一丈二尺倭文一丈二尺木綿麻各十二斤庸布八段熊皮牛皮鹿皮猪皮各四張鍬十六口米酒各四斗稻十六束鰒堅魚海藻各八斤腊鹽二斗水瓮四口杯八口匏四柄槲十二把薦四枚（五色薄絁以下四所等分）右客等入㆑京前㆓日京城四隅爲㆓障神祭㆒と有るは恒例の道饗祭の所に於て行ふ事にて異なる事無れ其此には蕃客共に屬來らむ蕃神の畿內の堺を超て若も來らむかと未然に障神を祭給ひて其を塞遏め令給ふ御事也（師も此神事の事に就て古昔外國々な根國底國に準へて穢き物とし其神な厭ひ給ふ古義を思ふ可し」と云れたるは然る言ながら未委しからず此も亦遣唐使奉幣の條に云り）此二を合せて四角四堺の祭成事上なる疫神條に引合せて心得可き者也（又祭料物なども道饗祭疫神祭に準へ物させ給ひて少しも異ならざる狀なるを見よ）　○偖此疫神祭を中世に御靈會と云る事は扶桑略記天慶元年九月の下に近日東西兩京大小路衢刻㆑木作㆑神相對安置女形對㆓丈夫㆒向立之兒童猥雜禮拜慇懃捧㆓幣帛㆒或供㆓香花㆒號㆓岐神㆒又稱㆓御靈㆒未㆑知㆓何神㆒時人奇㆑之と有を師說に此は塞神等の鬼魅をさへ遏め疫病を逐ひ幸ふる御德を仰ぎて下樣にても如此く廣く祭れる事と成れる也」と云れたる如くにて御靈會と云事は此に始れり（此は辻祭の始也下に委しく云べし但仁明天皇御紀に承和六年六月巳亥又令㆓郷邑每㆑季敬㆓禮疫神㆒と有て其本着く所古なり）　此より今宮御靈會祇園御靈會と云事も出來れり今宮なるは玉勝間（橋巻）に日本紀畧云正曆五年六月廿七日丁未爲㆓疫神㆒修㆓御靈會㆒木工寮修理職造㆓神輿二基㆒安㆓置北野船岡山㆒屈㆑僧令㆑行㆓仁王經之講說㆒城中之人招㆓伶人㆒奏㆓音樂㆒都人士女齎㆓持幣帛㆒不㆑知㆓幾千萬人㆒禮了送㆓難波海㆒此非㆓朝議㆒起㆑自㆓巷說㆒また長保三年五月九日於㆓紫野㆒祭㆓疫神㆒號㆓御靈會㆒依㆓天下疾疫㆒也是日以前瑞垣等木工寮修理職所㆑造也又御輿內匠寮造㆑之京中上下多以集會此社號㆓之今宮㆒と有り」と見えたり但當社の祭神諸書に疫癘を行ふ神を鎭祭たる如く云事なれども當らず疫癘を遏給ふ塞神に御在る事勿論なり然るに大倭社注進狀に園韓神々社と有る下に件神等素戔鳴尊之子孫守㆑疫神也云々　紫野今宮三社々家者流如㆑右と有れども疫神に園韓神を合祭れるを誤れるなる可し（又朝野群載を引て天承二年閏四月八日散位中原師光勘文に正曆五年六月廿七日被㆑安㆓置疫神於船岡㆒長保三年五月九日被㆑安㆓置疫神於紫野㆒京師衆庶行㆓御靈會㆒件年々天下不㆑靜仍有㆓此儀㆒と見えたりと云れたり但此勘文は右の紀略と同じ事なり公事根源抄頭書に引る諸神記にも古文有て京師衆庶行㆓御靈會㆒の下に被㆑遷㆓此所㆒依㆓靈夢之告㆒也と有り偖此例年五月九日に行はるゝ由同抄に詳なり）　公事根源抄に六月十四日祇園御靈會有り二十二社注式に圓融天皇天祿元年六月十四日始御靈會自㆓今歲㆒行㆑之と有り此は人の能知る所なれば今記す

に及ばず但當社に在す八王子と聞ゆる神は此詞に云ゆる八衢比古八衢比賣神なる故を以て行ふ事なれど誰も然は心着ずて蘇民將來が事などを引出るは當らぬ事なり神名式に河內國大縣郡常世岐姫神社を今八王子社と云も由有事なり其は本文の下に云はむとす右の略記に出たる如きを辻祭と云も古き事と聞えて五代帝王物語仁治三年正月主上崩御條に內裏へ人の馳參るを御覽じ出したりけるに西方より辻祭などの音して囃し罵りて來れば此程の世中に唯今何態なれば如此は在ぞと御覽じけるに正に門前を過るを見れば辻祭の田殖と云事の樣に態と烏帽子結びて着たる物玉襷を舉て或は編木サヽラを摺り鼓を打ち或は拍子を叩きて嬉しや水と囃し懸て東に通ける」云々と有る此は幼の然見えたるなれども其頃の辻祭の狀想像る可し此は主上の崩御にも及ばせ給ふ程の事なりしかば疫癘を行ふ神の神荒びに荒たりしが偶姫宮の御目には見えたるなり師翁の玉襷に引れたる天野信景が鹽尻に古昔辻祭の御靈と云しは道祖神の事なり御靈會と稱して六月に疫を送る祭を爲し神輿を渡して種々の風流を盡し付物を渡せしなり冠服を心に任せて貴介の有貌を爲す故に放免と稱す又故事を作物なと爲り此は加茂祭に此事有しより御靈會にも移れるにて今諸國にて天王を祭るに似たり〇今云天王は祇園神を祭るなれば尤御靈會なるなり木偶男女の形を作居ゑ又其男女の神像を石に彫て道衢に置たるか此を後に石地藏と混じて舊像は其像分り難ければ多くは石地藏とて寺院に崇め有り正禮一變して信を失ひ又附會して外の物と爲る類少からず」と云りと有り但此は京邊より美濃尾張邊までの風俗に就て云るなり　偖今予が見聞く所の較略を一二云むには國處に依て祖神サヘノカミとも幸神サイノカミとも庚申とも道祖神とも天王とも申して其神體に石を建て祭るなむ右の塞神には御在しける　又石地藏を建たるは上に云る如く京大阪邊に多き事なり每年七月廿四日に種々の作物を爲て會式と云は上に云る御靈會より轉たる者なり又廿三夜と云ふ石碑を立たる國多く東北の國にては羽黑山湯殿山月山の三名を刻みたる碑多かり國處に依て異は有れども衢神を祭るに於ては同じ事也　祖神と正しく稱ふは餘國は知ず我が淡路國育波鄉來馬鄉などに多かり中にも予が生れたる仁井村と云には村境なる所に三處有て大なる杜にて神威も又甚神々しく度らせ給へり　但同じ淡路國と云へども舉國皆然るに非ず就中仁井村と云邊は山中にて甚邊僻の地なるが故に古風の猶存在せるにや右三所の祖神を又幸ノ神とも云て岡坊井內柏と三所に立せ給へり然るに此村に限て外に聞えぬ一奇事有り餘り佛法の行はれぬ所なるが正月の內に念佛と云て阿彌陀と云者の名號を假にも唱ふれば忽に禍事有る事にて甚く愼しみ怖るゝ事にて三歲の小兒と雖此を犯す者なし偖二月の朔日に至て其所の鎭守と坐す俗に天王と申す園韓神の御前に村中の老若打集ひ酒宴の事有て醉の混れに大皷鐘を以て阿都摩美陀（アツマミタ）とも須都波美陀（スツプミタ）とも云て四方の村境迄至て其祖神を祭る事なるか此より後には誤て念佛は云とも御祟無き事なるが念佛と云者を甚く穢として先は年中余り唱ざる事也予十歲の春姉婿なる岡部保敎が許に至て其楠本村と云邊に正月に念佛せるを訝り告めたるに彼村人亦予を訝り告めたるは互に其義を解らざりし爲也予は斯在る所に生れたる故に自然に其性を稟て始より佛と云者は好まずて有けれ偖右の天王と申すは鎭守神に在して產土神は石田村と云に立せ給へる廣幡之八幡大神に在すが產土大神の嫌はせ給ふ所にて皮羽織と云者を着る事叶はざるなり此に準へ

（て其邊の風俗に古風多かるを知べし）又師說に右の塞神と申すを心得誤つて幸神と稱し幸神と云より爲て印度に云ゆる大自在天に附會して男根の形を造備へて金精神などゝも稱し又猿田彥神の皇孫邇々藝命を天八衢に迎給ひし事に附會せり此は和名抄に誤て塞神に唐土の道祖神を當たるより起れる事なるが又猿てふ言に思附て道家の庚申祭を牽强して衢に庚申塔と云物を造立し佛者又其弊に乘じて天台宗の一心三觀とて不見不聞不言と云事有を附會して石塔に目を塞ぎ耳を塞ぎ口を塞げる三匹の猿を彫附て建たるに眞言家より其即靑面金剛なりと牽强して其石塔を建る事となりぬ」と云れたる如きは國々所々の風にて何れも古義に相協ざる事遠しと雖も已に扶桑畧記に號二岐神一又稱二御靈一未レ知二何神一と云程なれば其後に至ては愈然もあるべき事ながら天神の事依し奉給る事の奇しきは未レ知二何神一と云計に至れる世にも其事の行はれて亡ず廢れず世と共に傳りて不知々々も其塞神の御祭を爲し其恩賴を蒙奉る事也豈奇しき事ならざらむやは然れば其建たる石には地藏なるも庚申なるも有べけれど豈外國の小鬼の預る所ならむや八衢比古神八衢比賣神久那斗神三柱神の彼龍ひ踈び來物を防遏め給ふ勿來處なれば愼み畏みて拜奉る可きなり（今しも建ることは有め古來より有來る所は必其心して拜奉る可きなり然れ共古の任の神像ならむには佛者の方人には處るまじきを其神の御像を一度變て地藏などに彫む時は勅使の伊勢に參向の時は眞の佛像と共に破藏に繞び隱され給ふ事然とては畏き御事也歷々遠々（イデトク〱）古に復されむ時もがな）偖又國々に八幡とも八王子とも天王とも天神とも申す社の數多なる中には必塞神なりしが然は成ぬるも有りと通えたり八幡は八衢より混れ天王は疫神より混れ天神は少彥名神の病を療る神なるに紛れて然成れる者なり（山緒無て右の社々を祠れる小祠は始は塞神の心得にて祀れりしも後世右の諸等の社の多く立せ給へるに何時と無く混れ入し者なり）○臨時祭式（行幸時祭條）に堺祭堺別倭文一尺木綿五兩麻八兩鍬二口米酒各四升鰒堅魚各二斤腊二斤海藻二斤鹽二升甈坏二口柏四把食薦一枚と有る此堺祭は決く此なる塞神なる事已に上に云るを以て知べし齋宮式なる群行條に六所堺川にて御禊有り次に山城近江堺近江伊勢堺及勢田鈴鹿下樋多氣川等の六處にて各堺祭有も此同例なり又齋王三時祭に神宮に參向給ふ時も二處堺祭を被行るなど皆此八衢祭を行を云ふ（但行幸時祭の分注に若不レ得レ當不レ祭と有を以て見るに上に云る如き十處堺神なるが堺を超させ給はざる時は祭らせ給へる事と見えたり）

偖和名抄に道祖神岐神道神と並載て道神（和名太無介乃加美）道上祭一云道神也と有るは旅行の時には必幣を手向て

此塞神を祭る事なるが其意を以て手向神とは云なり三代實錄に元慶二年五月廿八日癸卯授二越中國正六位上手向神從五位下一と有る此に同じ萬葉三(廿四丁)に佐保過而寧樂乃手祭(タムケ)爾置幣者云々など詠る此なり此は菅家此度は幣も取敢ず手向山と詠せ給へる地なるが此は大和の京なりし時に堺神祭爲給へる所なるを以て寧樂乃手祭と云ひ後には手向山の名とも成れりし者なり又六(廿六丁)に八十氏人乃手向爲跡恐乃坂爾云云など集中甚多き事なり手向とは神に幣を奉る事を云れども唯神社に參て奉るをば手向とは云ず陸行舟行の時に奉るを云れば此道饗祭に限て云ことなり萬葉十三に葦原笑水穗之國丹手向爲跡天降座兼と有も天八衢に手向爲給ひけむ故事を取て今の手向に云なり其は下に新夜乃好去通牟と有にて明らけし又源氏物語住吉詣の所に色々の麻袋を調る由なるも此手向の料也(歌枕に逢阪山の一名を手向山と云りと有るは萬葉六に大伴坂上郎女奉レ拜二賀茂神社一之時便レ超二相坂山一望二見近江一而晩頭還來作歌木綿疊手向之山乎今日超而云々と詠るに依れるか此は上に引る畿內堺十處の內なるを思合す可き者ぞかし)岐神の海上にて船路を守給ふ御靈を船玉神と申す岐の布奈を取れるに非ず船靈と申す意也續紀天平寶字七年八月の下高麗に遣はされたる使人海中にて風波の暴急成時に祈曰幸賴二船靈一平安到レ國必請二朝廷一酬以二錦冠一至レ是緣二於宿禱一授從五位下云々と見えたり神名式に攝津國住吉郡船玉神社有り住吉大神に並在す事大に由有て所思ゆ(先には神功皇后御紀に神有誨曰和魂服二王身一而守二壽命一荒魂爲二先鋒一而導二師船一云々則撝二荒魂一爲二軍先鋒一請二和魂一爲二王船鎭一と見え古事記同段なる住吉大神の御言に我之御魂坐二于船上一而眞木灰納レ瓠亦箸及比羅傳多作皆々散二浮大海一云々と見え又御紀成住吉大神の御誨に吾和魂宜居二大津渟中倉之長峽一便因看二往來船一と有るに依て船玉神は住吉神と定たりしかども住吉大神の船路を守らせ給ふ事は萬葉五に海原乃邊爾母沖爾母と詠る如く凡ての事を知食すにて岐神の其船中の御靈と在して彼鹿び踈び來物を防遏るとは別なり此事遣唐使奉幣の注に云り今世にも船玉神の御靈形には彼双六の釆(サイ)と云ふ物を以て物爲るな塞(サヘノ)神より附會せるなり)此船玉神の知夫利神とも申すにや土佐日記に「滄海の知夫利の神に手向爲る幣の追風間無く吹なむ」と詠る知夫利は道守(チモリ)なる可し住吉の末社に道守社と云も有り此亦和泉國堺津に在る所なれば由有り此に就て思ふに神名式に隱岐國知夫郡比奈麻治比賣命神社有る比奈は岐神の布奈にて麻治は待防給ふ謂ならむか郡名も此神に依て知夫(チブリ)と云なる可く思ゆればなり類聚國史に延暦十八年五月丙辰前遣渤海使云々言歸鄕之日海中夜暗東西製曳不レ識レ所レ着于時遠有二火光一尋二逐其光一忽到二島濱一訪レ之是隱岐國智夫郡其處無レ有二人居一或云比奈麻治比賣神常有二靈[]商賈之輩漂二宕海中一必揚二火光一賴レ之得レ全者不

レ可ニ勝數ニ云々と有る此神は決く岐神なり（此は今燒火權現と稱する神に坐て靈驗著明き事人の能く知る所也知夫利神の道守神なるに就て思ふに神代紀に泉道守者と云るは此の塞神に當れるが甚能く理に叶ひて所思ゆ守（モル）とは境界を分ちて保つ事なり萬葉六に大王之界賜跡山守居と有にて知るべし）此に依て見るに陸行にも海路にも悉く人の行至る處の限り此神を祀りて行先の無難を祈奉る可き天津神代の御定なる所なり三代實錄に貞觀十四年十一月廿九日授ニ阿波國正六位上船盡（フナト）比咩神從五位下ーと有は決く船靈神なる可し岐神を常世岐姬神と云に同じきを此は船靈の意に取て字を船盡と書るならむ萬葉一に對馬乃渡々中爾幣取向而八に白浪乃高荒海乎島傳伊別往者留有吾者幣引齋作云々十二に荒津海吾幣奉將レ齋廿に須美乃延能安我須賣可未爾奴佐麻都利など有も船路を守給ふ住吉神船中を守給ふ船玉神に係て手向の幣を奉る也土佐日記にも手向する所有り楫取々て幣進するに幣の東へ散れは楫取の申て奉る詞此幣の散方に御船速に令漕給へと申て奉る」と有も船靈神を指也

○上に引る令義解に卜部等於ニ京城四隅道上ニ而祭レ之と有るは鎭火祭と同じく共に皇祖天神より天兒屋命に授給へる神事なるの謂なるが此に就て今世にも辻占と云事を傳たるは卜部氏の其御祭に兼て卜事をも爲し事の有に依れるなり萬葉十六十三丁に戀ニ夫君ー歌左耳通良布君之御言等玉梓乃使毛不來者憶病吾身一曾千磐破神爾毛莫負卜部座龜毛莫燒曾云々百不足八十乃衢爾夕占爾毛卜爾毛曾問應死吾之故また反歌に卜部乎毛八十乃衢毛占雖レ問君乎相見多時不知毛と有る千磐破神爾毛莫負は待つ人の來ざるは道速振る惡神の障るならめと其にも負すな憶病む吾身一の故に爲て今は卜部に令て龜卜をも爲ざらましと然すがには思絶たれど若て死むよりはと八十の衢に出て夕占を雖問も疏と便宜とも成る可き因（ヨスガ）をも得ずとなり偖此夕占は辻占を云なり八十之衢を同六三十七丁に八衢と有も同じ此は八衢比古神八衢比賣神に思ひ合す可き事なり（反歌の義に右の事を打返して卜事の龜卜にも夕占にも其驗見えずと云るなり十一に事靈八十衢夕占問占正謂妹相依と有を始て集中尚多かれど煩しければ擧ず此にて大略を知べきなり）同三四十五丁に石田王卒之時丹生王作歌名湯竹乃十縁皇子狹丹頰相吾大王者云天地爾悔事乃世間乃悔言者天雲乃曾久敝能極天地乃至流左右二杖策毛不衝毛去而夕衢占問石卜以而云々と有る杖策毛不衝は彼神代紀に即投ニ其杖ー是謂ニ岐神ーと見えたる其意を含みて詠る者也（石卜は景行天皇御紀に次ニ于柏峽大野ー其野有レ石長六尺廣三尺厚一尺五寸天皇祈之曰朕得レ滅ニ土蜘蛛ー者將蹶ニ茲石ー如ニ柏葉ー而擧焉因蹶之則如レ柏上ニ於大虛ー故號ニ

其石ニ曰ニ蹈石一也云々と見えたる此を云ふ猶萬葉に多く見えて四五十一丁に月夜爾波門爾出立夕占問足卜乎曾爲之行乎欲焉十一十三丁に玉桙路往占々相妹逢我謂同二十三丁に夕卜爾毛占爾毛告有云々同二十五丁に不相爾夕卜乎問常云々同三十一丁に夜占問吾袖爾置白露乎云々十二十八丁に月夜好門爾出立足占爲天など其外にも多く見えたるが夕占は身の吉凶を占ふよりは人を待つに其來へき頭を卜問ひ人を戀ふとて其逢ふ事に多く卜問るなり上田百樹が夕占は夕來經にて塞神に卜問ふ事なりと云るは事實に合ひて然も有べくぞ所思たる足占の事は神代紀海宮段の一書に初潮漬レ足時則爲二足占一と有る是なり或說に步の數を豫て定め置て其奇偶を以て是非を知る事ならむと云るは然も有る可し拾芥抄に問二夕食一歌布那度佐問夕食之神爾物問聞婆道行久人與占正爾爲與レ兒女子云持二黃楊櫛一女三人向二三辻一問レ之又午歲女午日問レ之今按三度誦二此歌一作二堺散米一鳴二櫛齒一三度後境內來人答爲二內人言語一聞二推吉凶一と有り但此布那度佐問印本に布都登佐夜と片假字にて作る其は誤にて今一本及清輔の袋草紙に依て上田百樹が改たるに從へり同人說に布那度佐問は岐神なり神代紀一書に岐神此本名號二來名戶之祖神一焉と見えたる此なり夕食之神云々は夕方に其處に來經る人に岐神の託りて諭給ふ由にて夕來經之神とは云るなり境內來人答爲二內人言語一聞二推吉凶一と見えたるは此なり黃楊櫛は神の告る義に取なり續後拾遺集名物に刺櫛も黃楊の齒無て吾妹子が夕食の卜を問ぞ煩らふ」と有り又實治百首にも前內大臣「慰めて占問ふ橋よ正しかれ連なき巾を待も渡らむ」此は橋上にて來る人の言を伺ふなり女三人向二三辻一問レ之と有るは後に出來る狡意なる可し必一人一處に向ひて卜問へりし事萬葉歌にて著し或書に辻占の術とて四辻に出て手に黃楊櫛を持心に道祖神を念じて歌を唱ふ其歌は「辻や辻四辻占の市の辻古正しかれ辻占の神」此を三返唱へ其處に來る人の言語を聞て吉凶を定むと有り此に三辻と云よりは古風なり作二堺散米一は其占處と定めたる術を堺を卜て米を散して祓清むるなる可し鳴二櫛齒一三度は岐神を迎る法に爲て彼祓清たる境內に入來經る人の語を神の諭と爲て卜合する事なる可し答爲二內人言語一とは實は道行ぶりの人の言語なるが此方には卜に答給ふ神の御諭と爲る由なり此等を考合せて古の狀を知べし」と見えたり此は百樹が甚く心を盡して考得たる說なるを後に其草稿伴信友が手に入しより彼が說と爲て正卜考と云に記せるを餘りに腹惡き事なるが故に今は其要と有る所を抄て記し載る著なり辻占の要略は此にて盡せりと云べし此說を得て右の萬葉集の歌に立復り倚考合するに古の狀は甚簡易なる事にて在し趣なり其は其卜問ふ可き事の出來るに隨ひて其邊の十字街又十字街無き所は人の往來繁き地に至り其地を祓清め岐神を招奉りて心に其卜相申す

事を演べ黄楊櫛齒を三度鳴して其時に其所を通り合する人の言語を聞取り其を神の御諭と受賜ふ事なりしにて拾芥抄なる歌などは後に出來れる物にて定れる咒文の如き物は無りしが其時に臨みて其卜問ふ由を明亮に聞え上る事にて在しなる可し（凡て斯在る事に種々の道理を附會して云ふは皆後世の私事に出たり）○十二月晦日夜に行はるゝ追儺の事は諸書に其元由を記さゝれども決く寒神を祭奉て疫鬼を攘ふ事なるが此は同日に行るゝ道饗祭より出たる者なり貞觀儀式に已に十二月大儺儀と出たれは其古き事知べし此は陰陽師の職と爲る所なれは漢土の事にて周禮なる方相の事を其始に取る事なれども事の狀を同じきを以て本末を取誤れるなり（方相の事は周禮夏官方相氏掌下蒙二熊皮一黄金四目玄衣朱裳執戈揚レ盾帥二百隷一而時難以索レ室毆疫注に方相猶レ云二放想一今魌頭是也と見えたると此の追儺と同じ事なれども彼は彼此は此にて自然の事也）延喜式に親王以下隨レ次入立二中庭一陰陽寮儺祭畢親王以下執二桃弓葦箭桃杖一儺二出宮城四門（東陽明門南朱雀門西殷富門北達智門）と見え公事根源抄（十二月卅日追儺）に今日は儺逐ふ夜なれば大舍人寮鬼を勤め陰陽寮祭文を以て南殿の邊に就て讀む上下以下此を追ふ殿上人其御殿の方に立て桃弓葦箭にて射る仙花門より入て東庭を經て瀧口の戸に出づ今宵御前に灯を燈多ゝす東庭の朝餉臺盤所の前の砌に灯臺を隙無く立て燃す也追儺と云は年中の疫氣を祓ふ心也鬼と云は方相氏の事也四目有て恐ろしげなる面を着て手に盾戈を持つ又侲子とて廿人紺の布衣着たるものを卒して內裏の四門を廻る也慶雲二年十二月に始る此年天下に百姓多く疫癘に惱され侍りし故也」と見えたり（年中行事歌合にも此事有て大略同し右の文に依るに此の事と彼の方相の事とを合せて出來れる法なり公事根源抄頭書に四目有て云々延喜式其方相假面一頭黄金四目と有は周禮の方相氏掌二蒙熊皮一黄金四目云々と有るに當り又侲子とて廿人云々延喜式侲子廿人紺布衣と有るは周禮に帥百隷而時儺と有に當れるが斯在る事に至ては實に彼方相の事を取れるも有べけれども凡ては道饗祭に依て成れる者也）儀式に陰陽寮儺祭と有るは右の陰陽寮祭文を以て南殿の邊に就て讀むと有る此也儀式十卷なる十二月大儺儀及朝野群載十五に載る追儺咒文に今年今月今日今時々上直符時上直事一人一事時下直符時下直事及山川禁氣江河谿壑二十四君千二百官兵馬九千萬人（已上音讀）位置衆諸前後左右各隨其方諸定位可候大宮內爾神祇官宮主能伊波比奉里敬奉留天地能諸御神等波平久於太比爾伊麻佐布倍志登申事別天詔久穢久惡伎疫鬼能所々村々爾藏里隱布留乎波千里之外四方之堺東方陸奧西方遠値嘉南方土左北方佐渡與利乎知能所乎奈牟多知疫鬼之住加登定賜比行賜氏五色寶物海山能種々味

物乎賜天罷賜移賜布所々方々仁急爾罷往登追給爾狹奸心氐留里加久波良大儺公小儺君持五兵氐追走刑殺曾登聞食止詔布と有るは陰陽師の手に成れる詞ながら事の狀は古風也（但前後に此方の事ならぬ文も交れゝども素より有來る例を以て製り改たるなり朝野群載には其文に次て請殊蒙天裁因進先例云々と有るを以て見るに古くより如此く云來れるを宜しき程に取捨して天裁を仰げると聞えたり）桃杖など桃を用ひらるゝ事は古事記黃泉國段に即遣二豫母都志許賣一令レ追云々後者於二其八雷神一副二千五百之黃泉軍一令レ追云々追到二黃泉比良坂之坂本一時取二在其坂本一桃子三箇待擊者悉逃返也爾伊邪那岐命告二桃子一汝如レ助レ吾於二葦原中國一所レ有宇都志伎青人草之落二苦瀨一而患惚時可レ助告賜レ名二號意富加牟豆美命と見え神代紀一書に是時雷等皆起追來時道邊有二大桃樹一故伊弉諾尊隱二其樹下一因採二其實一以擲レ雷者雷等皆退去矣此用レ桃避レ鬼之緣也時伊弉諾尊乃投二其杖一曰自レ此以還レ雷不二敢來一是謂二岐神一此本號二曰來名戶之祖神一焉と有る遺風なり偖御紀の文に依るに乃投二其杖一と有るは元より杖（ツキ）給へりしならず其桃木の枝を折取り棓と爲て待擊給ひし者なり偖此を賀茂翁說に「桃子などを投給ひしは道饗祭の本なり」と云れたるは實に謂れたる說にて追儺は又其より出たる事上に說る如くなれば也（谷川士淸が通證に且璞曰風俗通曰黃帝書ニ稱ク上古之時有ニ兄弟二人一荼與レ鬱用ニ度朔山桃樹一以制ニ百鬼一於レ是縣官以ニ臘除一飾ニ桃人一垂ニ葦索一歲時記桃者五行之精厭ニ伏邪氣一制ニ百鬼一本草經云梟桃有レ樹不落殺ニ百鬼一謂ニ之仙木ニ山海經曰東海度朔山有ニ大桃樹一蟠屈三千里其東北曰ニ鬼門一萬鬼出入也有ニ二神一曰ニ神荼一曰ニ鬱壘一黃帝象レ之立ニ桃枝於戶一淮南子曰羿死ニ於桃棓一註云棓大杖以擊ニ殺羿一由レ是鬼畏レ桃今人以ニ桃梗一作代歲且植レ門以避レ鬼漢禮儀志曰代有レ所レ尙周人木德以レ桃爲レ梗言ニ氣相梗一梗更也揷桃枝於戶童而不レ畏而鬼畏レ之桃之制レ鬼見ニ傳記一者不レ一而六經亦自可レ考禮弓曰君臨ニ臣喪一以ニ巫祝桃茢一傳曰楚人使ニ公親ニ襚公使下巫以ニ桃茢一先祓ニ殯周禮戎右贊レ牛耳ニ桃茢一鄭司農於喪祝云喪祝與レ巫以レ桃厲執戈在ニ王前一以レ桃茢除レ難ニ聖人一不レ廢レ例以ニ巫家之說ニ而鄙レ之可乎と見えたり此等は此の故事の彼れにも傳はり誂れる者也能々撰び取可し度朔山と云るは出雲の伊賦夜坂ならむと師は云れたり）

追儺の事を河海抄（紅葉賀條）に除夜に儺を追事也鬼逐ひと云ふ追字を夜良布と訓也又儺の一字をも鬼夜良比と訓なり始レ自ニ禁中一迄ニ于何家一行レ之と見え活板節用集に追儺（オニヤラヒ）節分夜於ニ禁中殿上一侍臣以ニ桃弓葦矢一驅ニ惡鬼一謂ニ之追儺一と見えたり鬼とは疫癘を行ひ殃災を爲す物にて此詞に謂ゆる麁備踈備來物と云る是なり（朝野群載に四角四堺祭の事を鬼氣御祭と云ひ日本紀略及東鑑等に鬼氣祭と云るをも思合す可し）此祭は右の如く漢土の方相氏の事に似たるを以て彼なる事も交れゝば決めて中古に出來りし事ならむかと思ふに非らず河海抄に始自ニ禁中一迄ニ于何家一行レ之と有を見るに誰が始たるとも無く天下一般の風にて自然神世より傳はれる者なり然るを公事根源抄年中行事歌合等に慶雲二年十二月に始まると有るは類聚國史に文武天皇

慶雲三年是年天下諸國疫疾百姓多死始作ニ土牛ニ大儺に依られたる御說なるが予が心には天下諸國の疫疾に依て疫神祭を行はれたるが其に彼方相氏の事を附會せられし始ならむと思ゆるなり御紀には同年正月乙丑勅令レ禱ニ祈神祇ニ由ニ天下疫病ニ也と見えたり土牛とは月令に季冬之月命ニ有司ニ大儺旁磔ニ出土牛ニ以送ニ寒氣ニと有る此なるか公事根源に大寒日立ニ土牛童子像ニと云者なり此に就て今思依れる事有り山城國祇園社は素盞嗚尊を主と爲て祭て其八王子と云るは上に說如く塞神に在て故に今宮と共に御靈會を修せられて人能く知る所なり然るに公事根源抄及世諺問答等に素盞嗚尊の童部にて牛頭天皇とも武塔天神とも申なり」と有る童部にての文土牛童子の事に思合さるゝなり若くは陰陽家の輩など祇園社に疫神を祭と云より土牛童子の事に打混かし終には須佐之男大御神をして牛頭天王と稱奉れるに至れりし者なり諸書に牛頭天王と云名の出所無し簠簋內傳と云書にも云るなりとは妄誕也 ○高天原に事始給ひし皇祖天神の詔命以て皇御孫命に天下を事依奉給ひし天津祝詞の太祝詞事を以て授奉給へる天下の大御政の有が中には神等を天社國社と祀奉給ふ事を主と事依奉給ひ其が中に尤も重みし給ふ所は大祓の神事なり其大祓は凡天下に在と有ゆる大御寶に已に在來し罪穢を解除へ給ふ事なるが此大祓の大御政有て天下の人の罪穢の除こり淸まれらむ時に當て卜部等に火を鑽改て鎭火祭を行はせらるゝ偖其淸火は黄泉國なる妖物の甚く畏れ避る所也其を度と爲て道饗祭を行はる其は其塞神の守在す境界を超て妖物の依來まじき爲にて寔に天津神の天津神量に依ずしては得しも思依まじき事にて其事の次序に毛を容るゝの間隙無き事靈しとも奇しとも言語にだに出難き程の事なり然れば大祓は已然の祓除なり鎭火道饗等は未然の防ぎなり如此く懇到に爲て天神の御事へ坐るも深き由緒有る事なるを世人は大祓の事にも誰も古人の說に蛇足を添て言騷ぐ事なれども其境を超たる說無き故に此天津祝詞に然る次第の有と迄には心も着ぬげなるは甚拙劣き見解なり憐れむ可し 若て其上に大殿御門の二祭有り此等を合せて云時は屋船神の宅內の事を守らせ給ひ御門神は門內の事を守らせ給ひ塞神等は境內の事を守らせ給に鎭火祭は右の三に亘て火を忌淸め禍事を避給ふ元神にて家神門神衢神共に其御靈に依て成坐るが故に何ノ神も右の火ノ産靈神の御稜威を負坐る所由有り其は家神門神の事は已にも說るが此なる塞神に火神の御所緣有むとは誰も思ひ依らざる事なれど八衢比古八衢比賣神は彼黄泉坂に塞れりし千引石に成坐て有る其御靈に在す故に此詞に大八衢爾湯津磐村之如久と其磐は火産靈神に成れる物也又御杖に依て成坐る久那斗神坐り御杖は彼桃にて桃は豐宇氣毘賣神の御靈に成れる物なれば是を以て火産靈神の御所緣とは云るなり今しも石と金とを打合すれば火の出るなど火神の御靈の石に在す證なる上に根國底國より麁び疎び來物の畏み恐るゝ者は火産靈神の御稜威なるなど思ひ合す可き者なり 若て宅內は屋船神の守給ふ

に依て安く門内は御門神の防在すに依て平く其境内は塞神等の鎮り立せるに依て平穏しかるなり上に引る追儺呪文に穢久悪伎疫鬼乃所々村々爾藏利隱良布乎千里之外四方之堺云々と有る如く追逐ふ神は此塞神等に非ずして何れの神か能及ふ所ならむや思可き者なり（神代紀に故經津主神以二岐神一爲二郷道一周流削平云々と有を以て云ふ）借人は各々其々の稟賦有る者にて其心は相共に同じかるまじきを禍神に交これる悪事に限りて案外に相容れて或は一郷の惱みと爲り或は一村の惱とも成る事の能く出來りて終には其地の人情狡意に爲りなど爲るは何れも塞神の御守護に漏奉るが故に悪神處を得て荒振るが故なり又一里擧りて水火の難に遇ひ或は疫癘を病みなど斯る類の悪事其其地其處に普きは皆其御守護無が爲なり此を以塞神を祭奉り妖鬼は堺を出し却くるなむ（又家神の御守無き時は其屋内に殃災有り門神の御守無き時は其門内に殃災有るな）神世の御定なりけり

（どの事已に大殿祭詞の首に云るを見合す可し）

高天之原爾事始氐皇御孫之命止稱辭竟奉（タカマノハラニコトハジメテスメミマノミコトヽタヽヘコトナヘマツル）

高天之原爾事始氐中臣壽詞にも皇孫尊波高天原仁事始天云々と見えたり此は祈年祭詞に高天原爾神留坐皇睦神漏伎命神漏彌命以天社國社登稱辭竟奉と有と同し事なるを切めて云へるなり（考に如此省きに過たるは古に非ず奈良朝に至て古雅な失へる者なり」と云れたるは何事ぞや如此く事を簡古（ツヾマヤカ）く云ども事理貫きて明亮なるは古雅なる古文にて中々に奈良朝などの人の思及ふ可き所ならず）遷却祟神詞に高天之原爾始志事乎神奈我良毛所知食氐と云るも同しく此は此道饗祭の事を事依し授給へるを云なり此に就て今思ひ寄事有り神代紀正書國避の所に大巳貴神云々乃以二平國所杖之廣矛一授二二神一曰吾以二此矛一卒有二治功一天孫若用二此矛一治國者必當二平安一今我當於百不足之八十隈將隱矣言訖遂隱と見えたる廣矛は尋矛にて御杖なりしには非るか同紀一書に大巳貴神報曰云々吾所レ治顯露事者皇孫當レ治吾將ニ退治ニ幽事一乃薦ニ岐神於ニ二神一曰是當ニ代レ我而奉ニ從也吾將ニ自レ此避去一即躬披ニ瑞之八坂瓊一而長隱者矣と見えたるも同じ傳なるを正書には神體と爲る御杖を以て云ひ一書には其神體に寄る御靈を以て云るならむと所思ゆればなり（但大倭注進狀に傳聞八千戈神者大巳貴命以二廣矛一爲レ杖令レ撥二平豊葦原國之邪鬼一是時大巳貴命號曰二八千矛神一云々此矛亦上古在二天皇大殿之內一其藏齋爲二八千矛神之神體一と有る時は現に大巳貴神の御靈形に爲て岐神には由無きが如くなれども然らず須佐之男神より草薙劍を天照大御神に奉らせ給へば大御神の天津璽と爲て天降し奉らせ給へるを須佐之男神の御靈も共に其劍に坐て祀はれ給ふに同じ）若て其一書の續きに故經津主神以二岐神一爲二郷導一周流削平有二逆命一者即加二斬戮一歸順者仍加二褒美一と見えたるは其御杖に着る

御靈の功用也若て常陸風土記に天地權輿草木言語之時自天降來神名稱二普都大神一巡二行葦原中津國一和二平山河荒梗之類一大神化導已畢心存歸レ天即時隨レ身嚴杖（谷曰伊川惠）甲戈楯劒及所レ執玉珪悉皆脫履留二置玆地一即乘二白雲一還二昇蒼天一と有るは此方にて用給ふ所の調度等の形體を玆地に遺給ひ其靈容を携て天に上坐るなるが此嚴杖（谷曰伊川惠）と云者は正しく平國の廣矛ならむと所思たり（天は靈容を以て形體とし地は形體を以て形體と爲る事にて大に相反せる差別有る事なり常に忘る可からず） 若て二神天に昇りて復命し給ふ大巳貴神の岐神を鄕導と爲て奉給ふ事及其御功用を奏上させ給ひ即其平國之廣矛を奉給ひしかば皇祖天神の天上に於て此道饗祭の事を定させ給ひ其廣矛を賜ひて皇御孫命の長御世の遠御世に此祭を物爲させ給ふ可き由を仰傳させ給へる天津祝詞の大祝詞事此なる事高天之原爾事始氐皇御孫之命止稱辭竟奉の文にて詳に知られたり（此時天上にて靈容なりし廣矛即形體と成て此地に止まれる事云も更なり）○皇御孫之命止稱辭竟奉は祈年祭詞に上に引る文有て其結に故皇吾睦神漏伎命神漏彌命登皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉登久宣と有る如く今行はせ給ふ道饗祭は高天原にて事始給へる皇祖天神の御言の任に取行はせ給ふ義にて祝詞の例大旨皆然り（鈴屋大人說に此文更(ムゲ)に聞えぬ事なり後に多く脫失なるにや」と云れたれど祝詞を熟く曉られざりし說にて委しからず又考には高天原爾神留坐神漏岐神漏彌命乎以事依賜志皇御孫命止志氏と云べきを省るなりと云れしは然る言の如くなれども大に意に違へる所出來て文意拙くなるなり此を以鈴屋大人も猶聞え難しとは云はれたり）

大八衢爾湯津磐村之如久塞坐皇神等之前爾申久八衢比古八衢比賣久那斗止御名者申弖辭竟奉波

大八衢とは京師阡陌の巷を云て道路の四方より行合ふ所に云て萬葉四（廿三）に珠桙乃道能去相爾と咏る此なり衢は古事記に道俣と書て唯に岐道の事なるが八と云ふ時は彌の義と爲りて十字衢を云て俗に四辻と云る此なり（一條兼良公御說に爾雅曰四達謂二之衢一八達倍而言レ之と宣へれども必然細かに云るならず汎く岐路の事を云るにて此は京中の坊間なる辻々を云るなり） 萬葉に八十乃衢とも八衢とも詠るは皆京師阡陌の大路小路の衢を詠るなるが京師耳ならず何處に在れ道路の俣と爲り十字衢を爲す所の限を汎く云なり（師說に此三柱神等豫美戸に塞坐して彼國より荒び來る物を防ぎ守給ふ所由より其御靈を移して京を始め諸國にも四隅の衢にて祭給ふを道饗祭と云れしは然る言なり） 其は上に引る御紀共に祭二疫神於京師四隅畿內十堺一とも畿內諸堺祭二疫神一とも見え四角四堺祭と云るなどを思合す可き者なり

○湯津磐村之如久塞坐皇神等之前爾白久此は上（祈年祭詞）及御門祭詞條に註れども其は御門神の本御名天石門別神と

申して石戸破る手力坐る由に依て然申せるなるが此なるも其旨同じと雖も又深義の別に在るなりけり御門（神は石戸を開給へるに依て湯津磐村の如く塞坐て御門を守給ふ御德を爲し給ひ此神は黄泉戸を塞閉坐し由に依て其を御德と爲給ふ事にて奇異に妙なる所なり）古事記（黄泉國段）に最後其妹伊邪那美命身自追來焉爾千引石引二塞其黄泉比良坂一其石置中各對立而度二事戸一云々亦所レ塞二其黄泉坂一之石者號二道反大神一亦謂二塞坐黄泉戸大神一と見え神代紀（一書）にも此同じ傳有て伊弉諾尊已至二泉津平坂一故便以二千人所引磐石一塞二其坂路一與伊弉冊尊相向而立遂建二絶妻之誓一云々所塞磐石是謂二泉門塞大神一也亦名道反大神矣と有るを師說に此詞に校合せて八衢比古八衢比賣神と申すは此道反大神を二柱に稱別たる御名也と云れしは實に然る言にて大八衢（衢）湯津磐村之如久塞坐云々と有るに熟符へり（此は記傳道俣神の下に一神を比古比賣と分ても申し其二神を合せても申例多し」と有に依られたり）其黄泉比良坂を古事記に今謂二出雲國之伊賦夜坂一也と有る事なれども此は決て傳を失ひたる者也其は黄泉比良坂は此の地下に在る潛道にて黄泉國に至る堺なるが伊邪那岐命の豫母都志許賣に追れて戰給ひし間の事を致るに彼黄泉軍には顯國まで追れ給ひし也けり桃子を投棄給ひしを記に追二到黄泉比良坂之坂本一時取下在二其坂本一桃子三箇上云々と有は傳の混れにて此二の坂本に子細有べし故倩思ふに其黄泉比良坂の坂本も右の伊賦夜坂の坂本に在て堺を攝れるから右の如くは傳たるにて桃樹は伊賦夜坂の坂本に在けるとの事也（偖比良坂の坂本とは比良坂に至る本（ハジメ）の處と云事にて登る坂路を云とは異なり記傳に伊賦夜坂の黄泉比良坂なる事は當時伊邪那岐神の黄泉より還給ふ時此地にぞ出給ひけむ」と見えたり）然ば黄泉比良坂の坂本より伊賦夜坂の坂本に出給ひ戰勝て其千五百の黄泉軍を黄泉門より彼國に悉く逐却し給ひ千引石を以て其戸を閉給へる時伊邪那岐大神の彼國の往來を斷給ひ別處を建給へる御靈の天地に貫徹りたる處より千引石に就て成坐る御靈即道反大神と申して其國の邪鬼を追却ひ給ふ御德坐し又塞坐黄泉戸大神と申して其黄泉戸に塞在して其國を往來はせ給はざる偉（イミ）じき御靈を四方八面に幸坐て山にも野にも海にも河にも人の往來ふ所の限に湯津磐村の如く塞在して其往來を安泰（ヤス）から令給ひ其に合せて邪鬼の往來を防遏給ふ事なるが其御名を八衢比古八衢比賣神と申して皇祖天神の齋かせさせ給ふ所なりけり然れば其千引石を以て塞給へる黄泉門は出雲國の伊賦夜坂とは傳たれども其所在は神の幽（カク）して見せ給はざるなれば深く

索む可きに非ず所以に風土記にも出雲國意宇郡に伊布夜社を載たれども其平坂の事など無きは已く神世より幽に入れるが故なり延喜式神名帳に揖夜神社と有る地なり（然れども古事記に傳たる事の虚しからざる所有て齊明天皇五年御紀に是歳命二出雲國造一修二嚴神之宮一云々狗嚙二置死人手臂於言屋社一と有て分注に言屋此云二伊浮琊一天子崩兆と見えたる事の有など神世の傳說の眞實を徵すに足れる者なり倩又風土記出雲郡宇賀鄕の下に出たる黄泉の穴は右なるとは異なり思ひ混ふ可きに非ず）倩如此く黄泉門に塞坐す御德を延て大八衢に湯津磐村の如く塞坐（サヤレル）が故に障神とも申す事なり萬葉十三に風吹者浪之塞海道者不行と有り（障は障遮むる意也天武天皇御紀に發二美濃師三千人一得レ塞二不破道一と有る塞（サエ）此也神武天皇御紀に道路絕塞無處可通と有る塞は閇と訓べき所なるが此文の續き此なる塞坐の事狀を知るに足れり萬葉七に水底之玉障（サヘ）清云々と障を辭に用ひたり障を佐閇と訓む證也）○八衢比古八衢比賣は上に註せる如く道反大神の亦名なるが此は決て天上にて皇祖天神の號させ給ふ所なり上に高天之原爾事始氐と云ひ下に天津祝詞乃太祝詞事乎以氐と有るを思ふに高天原にて此御祭を起し給ふ時に皇祖天神等の神量を以て黄泉門に塞坐す道返の御德を天下に在と有ゆる大路小路の道の隈々八十隈遺ず主領き在して大き小さ衢々を御在所と鎭り給ひ彼黄泉門に塞れりし湯津磐村の如く塞給ひて根國底國より麁び疎び來る邪神を防遏め給へと事仰給ひ即其由を以て八衢比古神八衢比賣神とは稱させ給ふ者なりけり（此は先達の未思ひ寄さる事なるが必斯く非では高天原にて事始め給ひし事の首尾調はざる者なり）賀茂翁說に古事記御禊段に見えたる道之長乳齒神道俣神共に此同神也長乳齒を神代紀に長道磐と書るは此詞に湯津磐村之如久塞坐と有ると同意にて即此八衢比古八衢比賣神を申なり」と云れたるは甚た美き說にて此神の成坐る事を記には於二投棄御帶一所レ成と見え書紀にも投二其帶一是謂二長道磐神一とも有れども混れたる者にて眞には御帶に成坐るは時置師神に在せる事紀傳及太元考に記すが如くなれば此長道磐神は道反大神の亦名なるを傳誤れる者也（其誤れりと見出たる由は記に於二投棄御裳一所レ成神名時置師神と有を記傳に裳は女の着る物にこそ有れ男の裝束に云る事古書に凡て見えざれば此に御裳の事を云るは甚不審し」と云れたるは然る事にて決く古く御帶と傳たるを御帶を長道磐神に配たるよりの混れになり此時置師神と云神名を如何ぞやと云て師の古史徵に取られざりしかども此は右の混れどもを正し取られざるより如何にぞやとは見えたるにこそ有れ僻事に非ず）又賀茂翁の道俣神を同神と見られたるも然る言なり記傳六卌九丁にも道俣神は此詞に謂ゆる八衢比古八衢比賣なる可し」と云れたる二翁の說打合て其正しきを得たるが此神の成坐の事を記に於二投棄御褌一所レ成神名道俣神とは記されたる事なれども此は神代紀に又投二其褌一是謂二開囓神一と有る方正しくて古事記なる傳は誤なり師說（古史徵）に然れば古事記に謂

ゆる道俣神は此塞神の大八衢に塞在して守給ふより三神を總て衢神と申せるが混れて別に道俣神と云神の成れる由に語傳たる事疑無き者なり」と云れたるは眞に然る言なりかし（倩此に賀茂翁說とて出せるは此祝詞考に出たる說なれ共餘りに愛たく思ゆる任に今は其名を擧たる者なり深く味ふ可し）久那斗神は神代紀（神達生坐段第九ノ一書）に伊弉諾尊驚而走還是時雷等皆起追來時道邊有二大桃樹一故伊弉諾尊隱二其樹下一因採二其實一以擲レ雷者雷等皆退走矣此用レ桃避レ鬼之緣也時伊弉諾尊乃投二其杖一曰自レ此以還雷不二敢來一是謂二岐神一此本號曰二來名戸之祖神一と見えたる此甚た正しき傳なり然るを同紀（第六一書）に建二絕妻之誓一に續けて因曰自レ此莫レ過即投二其杖一是謂二岐神一と有れども自レ此莫レ過と宣へるは黃泉國の雷等の事にこそ有れ伊弉冉尊の事ならねば叶はず且御身に着させ給ふ物を投棄給へるに依て成坐る御禊段の神等に並たるは錯亂たる事決き者なり又古事記に到二坐筑紫日向之橘小門之阿波岐原一而禊祓也故於二投棄御杖一所レ成神名衝立船戸神と有などは愈誤なる事著き者なり（師の古史成文は第六ノ一書に依られたるは此御杖即其桃の楮なりける事を思ひ漏されたるなり此を以て見るに久那斗神は道反神には其先立て成坐る所なり）倩御紀に此本號曰二來名戸之祖神一焉と有れば此詞に久那斗神と申すも共に岐神と云よりは本なる可きが記傳に久那は莫來（クナ）斗は處にて此より莫來と障留る處に坐神と云意なる可しと云れたるは御紀に自レ此莫レ過と云ひ雷不二敢來一など有るに本着れたる說にて實に然る事なるが今一ツ別に含める義有り上に大八衢と有るに依るに決く回處（クナド）なり倩回處と云は道路の横たはり回る處を云なり（今も東北の國々に十字街なる處を回（クネ）り處と云ひ道を直に行ざるを久禰留と云ふなどは古言の遺れる者なり頑な久那多布禮と云ひ如多久那と云へる久那も直ならざる由なり古今集序に女郎花の一時を久禰留にも」と有るも女の形の早く老衰る事に云て橫たはると同じ源氏物語夕貌卷に先久禰々々しく恨る人の心や紅梅卷に生久禰々々しき事も出來る竹川卷に久禰々々しきこと出來などして東屋卷に此を思ひ分たる事を久禰利云ふ事有て又實ならぬ事をも久禰利云など云るも皆同じ事也記傳三に師說に東國の方言に垣を久禰と云るは限の事なる由なれども然に非ず家の外邊に回をなす由なり）又岐神と申すは神代紀（第六一書）に岐神此云二布那斗能迦微一と見えたり記傳に此詞の久那斗神と同義に說れたる其說に布は經久は來なり中卷（美夜受比賣の歌）に阿良多麻能登斯賀伎布禮婆（來經者也）云々都紀波伎閇由久（來經行也）如此く來と經とを重ても云ひて同意になるなり師說に布那斗とは物を衝立て是より莫來そと留る意の御名なりと云々と有りと云れたるが如し但布那斗は莫經處（ナフト）にて大八衢に此神の守在して妖物を逐給へる御名なる事申も更なり（此云々と云る文は上なる久那斗神の下に引れに立復りて此に見合す可し）倩古事記に於二投棄御杖一と見え

御紀に投ニ其杖ーと有るに衝立船戸神と云ふ御名有る事少か心行ぬ事なる故に記傳にも衝立は人の爲意ならば都伎多都琉と訓へけれど此は自然なる意なれば多都と訓べし」の説有て都伎多都と訓れたるが實に然る言とは聞ゆれども其御杖を投棄給へるに依て黄泉國の邪鬼は怖れて逃去しかば此時伊邪那岐命其神威を奇しく所思して彼桃を意富加牟豆美命と稱坐し引續きに其黄泉國の邪鬼共堺を犯して入來まじき爲に其處に衝立給ひて其衝立船戸神と云名を賜ひけるなるべし然れば伊邪那岐大神に係て多都流とは訓べき也考頭書に御杖より衝立と云ば道に標を立て限を示すなり」とは善も云れたりけり然るを後に校訂されたる古訓古事記には都伎多都琉と訓れたれば其頃に至て傳の説を改られたる事著し出雲風土記に意宇杜爾御杖衝立なども有りて自爲る事に云るは此例と同じき者なり又來名戸之祖神と申す祖神は臨時祭式に障神と有る其に同じ此詞に湯津磐村之如久塞坐と有る此なり和名抄に道祖和名佐倍乃加美と見えたり然るを來名戸之祖神と申すは回處之障神と申す御名にて殊に理著き所なれば實に御紀に此本號と有るは謂れたる事なりけり師の古史徵に此本號云々を師は後人の書加たる僞事なり本號を闕きて後號を擧べき由無き者なりと云れつれど今本に祖神を岐能加微と訓るは非訓にて實は佐倍乃加美と云に假て書れたるなり其は漢籍に途の神を道祖と云より書れたることなる可しと有るは尤なる説なり倭名抄に風俗通云共工氏之子好ニ遠遊ー故其死後以爲レ祖と有る祖ノ字の音を假て佐倍と訓るにて祖ノ字に意有に非ず又神名式に河內國大縣郡石神社常世岐姬神社と相並べる石神は右の衢神なる可く常世岐姬神は決く此岐神に在すなる可し此石神と云に就て説有り嘉永三年五月伊勢參宮の時荒木田弘運が見せたる增補參宮順路記と云物に石神子良殿の小柴垣の內に在り」八王子の遙拜所なりと云り八王子とは上に云る如く八衢比古八衢比賣神の事なれば相並坐事其謂有と云べし建久行事記二月條に八王子祭黄葉遊今月吉日を撰み祭る由見えたり此黄葉遊又上に云る御饗會の狀などに思合せられ侍り此社中村の西北に在り此神の女神なるに就て猶思ふに神代紀神達生坐段第十ノ一書に伊弉諾尊曰始爲レ族悲及思哀者是吾之怯矣時泉守道者白云有レ言矣曰吾與レ汝已生レ國矣奈何更求レ生乎吾則當レ留ニ此國ー不レ可ニ共去ー是時菊理媛神亦有白事伊弉諾尊聞而善レ之乃散去矣と有て水濱の前に在るを見るに此は決て別處を立たる後に二神の御問答を爲させ給へるを岐神の御中取て申し給へる事此詞に根國底國與利麁備備疎備備來物爾相率相口會事無氏と有を以て知られたるが其泉守道者と云る者誰か在む決く岐神也然らば其次に菊理媛神と有るは別神なるかと思ふに然らず彼は黄泉門を守る意此は黄泉門の總括クヽリと成て塞在す意にて此別處を建給ひし後は凡て顯國と彼國とに預る事は悉く此障神の司坐す所なり神名式に加賀國石川郡白山比咩神社は此菊理媛神を祀ると

云り泉守道者の此神ならむ事は已に上に知夫利神の說に云り又神名式なる隱岐國知夫郡比那禮知比賣神社は上に坐べきことも上に云るが如し倭日吉客神宮に祀る所は其白山神なるに八王子社は衢神なるなど思合す可し又右ㇾ河内國の岐姫神社なども八王子と今云ふ所也若て岐神の御事跡は上に註せる如く大國主神の國避の所に見えたれば著きを八衢比古神八衢比賣神の御事跡は物に所見たる事無きを以て倩考ふるに其御杖を投棄給ひし由と其千引石を引塞給へると事は別々なれども伊邪那岐大神の其女神をさへに率こらせ奉つる黄泉國の邪鬼を深く忌避給ふ御心に依て成坐れば共に御心を一に合せ給ひ相共に守給ふ事なれば岐神の御事跡の著明も衢神の幽賛有と見えたり然れば此詞に久那斗神までを係て湯津磐村之如久塞坐と有に深く心を著べき者也且大巳貴神の岐神を經津主神武甕槌神に薦給へるは一柱なるに此詞に高天之原爾事始氏云々と三柱の御名を顯はしたるにも又思ひた潜む可き所なり○倩道反大神に就て又思寄れる事有り其は十種神寶の中なる死反玉道反玉と云るは此神の表物なる可し其は古事記に最後其妹伊邪那美命身自追來焉爾千引石引ニ塞其黄泉比良坂ㇾ其石置ㇾ中各對立而度ニ事戸ㇾ之時伊邪那美命言愛我那勢命爲ニ如此ㇾ者汝國之人草一日絞ニ殺千頭ㇾ爾伊邪那岐命詔愛我那邇妹命汝爲ㇾ然者吾一日立ニ千五百產屋ㇾ是以一日必千人死一日必千五百人生也故號ニ其伊邪那美命ㇾ謂ニ黄泉津大神ㇾ亦云以ニ其追斯伎斯而號ニ道敷大神ㇾ亦所ㇾ塞ニ其黄泉坂ㇾ之石者號ニ道反大神ㇾ亦謂ニ塞坐黄泉戸大神ㇾと見えて御紀の趣も此に同じきが道反大神と申すは道敷大神と相反對へる御名也敷とは書紀に及之其有る如く其所に至り及べるを云る也然るな同紀又投ニ其履ㇾ是謂ニ千數神ㇾと有るは混へる傳なること著き者なり倩其追及給へるは如何と云に千五百の黄泉軍を引て伊邪那岐命を窘め奉給はむとての御心なりけるが已く千引石を黄泉門に取塞られ給ひしより此顯國の方に出させ給ふ事叶はず其御志を中途にして得しも遂させ給はぬ御怒の餘に一日に千頭絞殺むと申させ給へるは追及て此國の人草を殺し給はむとの事なるを神代紀には伊弉冉尊曰愛也吾夫君言ニ如此ㇾ者吾當縊ニ殺汝所ㇾ治國民日將千頭ㇾ伊弉諾尊乃報ㇾ之曰愛也吾妹言ニ如此ㇾ者吾則當ㇾ產ニ日將千五百頭ㇾと有り伊弉那岐命の我早一日に千五百產屋立てむと宣ひ勝給へるに依て成坐る神なるが故に道反大神と申して人の必死るをなむ生返らせ給ふ神成ける古事記に是以一日必千人死一日必千五百人生也と有は此事なり斯在れば人の靈は黄泉國に行かと云に然らず鎭火祭詞の所に云るが如く人の形體は黄泉國に就き精神は高天原に屬る所なるが伊邪那美命の宣へる意と其形體と精神とを放離さむとなり伊邪那岐命是に於て其形體には精神を鎭めて生し活かせむとの事々能々思ふ可し然れば人の死亡る事はしも此道反大神の御暇賜はるに非では無き事と見えたり此を以て皇祖天神の御

許にて此神の御靈形を齋ひ置せさせ給へるが十種神寶の中に加はりて天降らせ給へる者なりけり此詞に皇御孫命乎堅磐爾常磐爾齋奉茂御世爾幸閇奉給止申云々と大御世の永からむ事を乞祈申給ふ趣なるは由有る事なりかし尙此事は下なる鎮魂祭詞の下に委しく說可し

根國底國與利麁備疎備來物爾相率相口會事無氐下行者下乎守理上往者上乎守理夜之守日之守爾守奉齋奉禮止。

根國底國與利 大祓詞の下に云る如く黃泉國にて鎮火祭に下津國と云る是なり上にも說る如く彼國は不須也凶目醜めき汚き國にして世中の惡しき事の輻湊る處荒振る邪鬼の寄聚へる所なるが其往來ふ黃泉門には衢神の守在す事なるが故に其境を犯して出來る事能はずと雖も彼伊邪那岐命の御身に着給ふ物を脫棄給ひしに依て成れる疾病神に時置師神飽咋神煩神有り禍害神に奧疎邊疎神奧津那藝佐毘古邊津那藝佐毘古神奧津甲斐辨羅邊津甲斐辨羅神有り此は皆彼國の穢惡に依て成れる神なるに依て顯國にては成れゝとも彼國に屬く所緣有る神等なれば此に因て彼國の邪鬼は顯國にも來りて疾疫を行ひ禍災を導く也此即此詞に物と云る其にて古事記に豫母都志許賣とも八雷神とも神代紀に泉津日狹女とも和名抄鬼魅に此を分て鬼とも餓鬼とも瘧鬼とも邪鬼とも窮鬼とも魑魅とも魍魎とも醜女とも天探女とも云る類皆黃泉國より出來る所の魔物なり人の善事を見ては惡事に易へ人の壯健なるを以ては疾病を齎ましむる邪鬼なり然るに是亦皇祖天神の御心にて善事有る者は邪念に誘入ざるの用心有り壯強なる者に疾域に登らむの養生有り此等事と云ふ事の有に依て其防ぎ有て德の立日有るものなり此理を忘る可からず御門祭詞に四方四角與利疎備荒備來武天能麻我都比登神乃云々と有と同じ事の如くは見ゆれども然らず其と此とは呼ふ物と應ふる物との差別有る事なり其は彼には四方四角と有り此には根國底國と有るを以ても其出來る處に素より差異有り天能麻我都比登云神は神直毘神大直毘神の人身に附添て物事を和め直し給ふとは事異りて其直毘神の御靈と人心と一なれは此を禍らせ給はず其狹意の漸心に浮び出るを求て其を罰め給ふ御心坐が故に其心穢く其行曲れるは已く身心共に汚穢て其人其任に黃泉國に緣有るなれは此を許容し給はず此詞に謂ゆる根國底國與利麁備疎備來物を引て交こらせ給ふ事なり彼詞には上より來る所を以て自レ上往波上護利自レ下往波下護利と云ひ此詞には下より應るを以て下行者下乎守

理上往波上乎守理と云る此即其差異なり此は人作に出たる文ならばこそ有め天津祝詞の太祝詞なるが故に云知ぬ奇く妙なる理有る物になむ有ける（然るを鈴屋大人說に御門祭と此と同じ事にて此禍津日神は世中の凶事を成行ふ神にて黃泉國の穢より成坐る神なり故根國底國とは云なり」と云れたるは非ぬ說なり師も禍津日神は穢を見て怒給ひ荒び給ふ神にて禍事を成給ふ神に非ずとは見られたれど此御門祭詞などには其說に窮れりと見えて其說の著明なるは非ず）○穪備踈備來物爾祈年月次祭等詞には踈夫留物と有り彼詞は同じ御門神を祭る詞なるに天能麻我都比登云神を載ざるは此と同じく黃泉國の物を云るなり借其物と云は師說に物狂（モノクルヒ）とも物怪（モノノケ）とも憑物（ツキモノ）とも云類の物にて汎く神を云」と云れたる其如くにて總て物とは何に依ず其名を指ず廣く云事なれども此なる物は黃泉國の醜女及雷等なる可き事は此衢神の御事實に依て所知たり所以に和名抄には醜女を鬼魅類に載られたるが古く鬼魅を物と云りと聞えて神代紀に葦原中國之邪鬼と有を私記に妄之岐毛乃と云るなどは措て萬葉集中の辭に鬼を母能と訓み又鬼を麻と訓るなど多し此は古に鬼を物とも魔とも云りしが故なり（萬葉四に義之鬼尾（テシモノヲ）十一に應死鬼（シスベキモノ）乎また情者妹爾因西鬼乎（コヽロハイモニヨリニシモノヲ）また一目見之兒爾戀鬼香（ヒトメミシコニコヒナムモノカ）また不相鬼故（アハヌモノユヱ）など其餘にも甚多かり又十三に吾戀八鬼目（アガコヒヤマメ）と鬼を麻の假字に用ひたり鬼は禍神の屬なる故に古く麻とも云りし故なり彼に魔と云るも此鬼魅の事ながら彼は此の言を取れるに非ず此は彼の字を取れるに非ず自然の事なり）借此に云る物は彼疾病と禍害とを行ふ神を始て諸の鬼魅を汎く云るが此物の始て成れるは醜女にて黃泉神と云る物此也古事記に欲レ相二見其妹伊邪那美命一追二往黃泉國一云々伊邪那岐命語詔之云々爾伊邪那美命答白悔哉不二速來一吾者爲二黃泉戶喫一然愛我那勢命入來坐之事恐故欲レ還且具與二黃泉神一相論莫二視我一如此白而還二入其殿內一之間甚久難レ待故刺二左之御美豆良一湯津々間櫛之男柱一箇取闕而燭二一火一入見之時云々拜八雷神成居於是伊邪那岐命見畏而逃還之時其妹伊邪那美命言令レ見レ辱レ吾即遣二豫母都志許賣一令レ追と見えたる其逃還坐す時の事を神代紀には時伊弉諾尊大驚之曰吾不意到二於不須也凶目汚穢之國一矣乃急走廻歸于時伊弉冉尊恨曰何不レ用二要言一令吾恥辱乃遣二泉津醜女八人一（一云泉津日狹女）追留之と有て其黃泉國の事を古事記（御禊段）に伊那志許米志許米岐穢國とも穢繁國其云ひ神代紀（一書）にも不須也凶目汚穢之處と見えたるを記傳に志許は志許賣の志許と一にて醜也と云れたるは然る言にて其黃泉國の汚く穢はしき狀を以て志許米岐國と宣ひ其國神の汚く穢はしきを以て豫母都志許賣と號りたる所な

れば黄泉神と云者決て志許賣也能々上下の文脈を讀通りて見べき者なり記傳に此神は如何なる神にか傳無れば知べきに非ず唯黄泉に坐神等なり此時は顯國の初時なれば夜見國はたゞ此伊邪那美命ぞ初神なる可く思はるれども如此有は既に他神も有しなり」と云れたるは黄泉神一を離して見られし故に其説を得られざりしなり又師の此を國之底立神豊雲野神は黄泉國の初の神なれば黄泉神と申すと云れたるなどは云に堪ざる僻事にて且忌はしく且は畏き事なりかし偖右の文に與二黄泉神一相論と有て其殿内に還入坐るに八雷神成居と有る八雷神は神代紀に泉津醜女八人と有れは豫母都志許賣なる事疑無き者なり師説古史徵に伊邪那岐命の夜見國より逃返給ふ事の傳は神代紀に二有るを一ノ傳には遣二泉津醜女八人一一云泉津日狹女追留之と有て八雷神の居たる事も無又其に追れ給へる事も無く又の一書には伊弉諾尊乃擧二一片之火一而視之時伊弉冉尊脹滿太高上有二八色雷公一伊弉諾尊驚而走還是時雷等皆起追來時道邊有二大桃樹一故伊弉諾尊隱二其樹下一因採二其實一以擲レ雷者雷等皆退走矣と有て此傳には醜女の事無し故倩考るに八色雷と云は即八人の醜女の事になも有ける醜女を雷と云事は猛く嚴しかりし故に稱るなるを一ノ傳には醜女八人と傳へ一傳には八色雷と傳たるにて實は一物にぞ有けると云れたるは眞に然る言也但黄泉神即八雷神にて豫母都志許賣なる由は思ひ漏されてぞ有ける但八雷神の名を記紀共に記されたるは傳の誤なり師説に古事記に於ノ頭者大雷居於レ胸者火雷居於レ腹者黒雷居於レ陰者折雷居於二左手一者若雷居於二右手一者土雷居於二左足一者鳴雷居於二右足一者伏雷居并八雷神ヵ居と見えて神代紀にも所謂八雷者在レ首曰二大雷一在レ胸曰二火雷一在レ腹曰二土雷一在レ背曰二稚雷一在レ尻曰二黒雷一在レ手曰二山雷一在二足上一曰二野雷一在二陰上一曰二裂雷一と有れども此は決て神代よりの傳ならで漸後に古傳を心得誤れる世と成て押當に雷神の名を種々拾集めて語れる傳なるべし神代紀に所謂八雷者と有る所謂の字を熟思ふ可し後の説なる事疑無き者にて且八色雷とは云へど唯に多くの雷と云事ならむを八色の名の悉く有るも信難し又古事記には八雷神成居と有れども書紀には上有二八雷公一と有る方を取べしと云れたる悉く然る言なり但古事記に成居と有る處は借字にて中巻橿原宮段に生レ尾土雲八十建在二其室一待伊那流と云ると一にて字鳴居(ウナリヲリ)しにもや在む

右の神代記第九一書に是時雷等皆起追來時道邊有二大桃樹一云々因採二其實一以擲レ雷者雷等皆退走矣此用レ桃避レ鬼之緣也と有るは雷を鬼と云る也鬼ノ字を於邇と訓み欽明天皇五年御紀に鬼魅の二字を於邇魅鬼の二字を於邇とも又志許賣と訓る於邇は和名抄に鬼和名於邇或説云隱字音於爾訛也鬼物隱而不レ欲レ顯レ形故俗呼曰レ隱也と見え又人神周易云人神曰レ鬼和名於邇或記云於邇者隱音之訛也鬼物隱而不レ欲レ顯レ形故以稱也と有る或説は中古の人の杜撰にて必隱の字音を訛れるならず言義を思ふに於邇は大去なる可し然云ふ故は右の退去矣又古事記に待撃者逃返也と有る如く此衛神に追逐るゝ由に依れるにて此詞に衛備疎備とも云ふ狀なる義なり然れば雷とは猛く嚴しきを以て云るを鬼(オニ)とは其反語を用ひたる者なり叢を與志と云ひ月蝕を波由流と云て柴(ハエ)の義に取直せるなど古に多き事なり又記傳に豫母都志許賣は書紀に泉津醜女と書て醜女此云二志許賣一一云泉津日

狹女と有り私記に或説黄泉之鬼也と云ひ和名抄には醜女（和名志古女）或説云黄泉之鬼也世人爲レ恐二小兒一稱二許々女一者此語之訛と有て鬼魅部に載たり欽明天皇御紀に魖鬼（シコメ）と有も其意なり名義形の恐しく見惡きを云なり（万葉に鬼乃益卜雄鬼乃志許草志許霍公鳥鬼之四忌手之許都於吉奈など云る皆其物を惡み罵て志許とは云也取意）と見えたり其日狹女とは借女（ヒサメ）と云事にて跡び居て物の間隙を伺ふ由ならむか通證には䁧目也與醜女義通と見えたれど信難し度會延經神主云三代實錄出雲國陽坐志去日女命疑陽上脱二筑字一即神名式所謂意宇郡筑陽神社而列二之揖夜神社後一則志去日女謂二醜女一也明矣と有るは其御靈を祭和めたる社なる可し借此詞に依るに根國底國より飈び跡び來る者は決めて右の豫母都志許賣に屬る物共也と聞えたるが尙思合せらるゝ事は欽明天皇御紀に五年十二月越國言於二佐渡島北御名部之碕岸一有二肅愼人乘二一船舶一而淹留春夏捕レ魚充レ食彼島之人言非レ人也亦言二鬼魅一不二敢近レ之島東禹武邑人採二拾椎子一爲欲熟喫著二灰裏一炮二其皮一甲化二成二人一飛二騰火上一一尺餘計經レ時相鬪邑人深以爲レ異取二置於庭一亦如前飛相鬪不レ已有レ人占云是邑人必爲二魃鬼（シコメ）一所二迷惑一不レ久如レ言被二其抄掠一於是肅愼人移二就瀬河浦一々神嚴忌人不二敢近一渴飲二其水一死者且半骨積二於巖岫一俗呼二肅愼隈一也と有る邑人必爲二魖鬼一所二迷惑一不久と云るは志許賣は下津國より來て迷惑（マガコト）を爲すの謂にて古傳に合り（通證に禮緯曰魖魃鬼愣嚴經曰貪レ色爲レ罪是人罪畢遇レ風成レ形名爲二魃鬼一と云る字に依る時は肅愼人の渴死せるを魃鬼と云と聞えたれども志許賣と云言を立て云へば肅愼人を渴死せしめ邑人を迷惑せしむる所志許賣の所爲なりと云ふ事なるなり）若て世にも人にも醜めき事穢き事の有の悉其由て生れる始は伊邪那美命の黄泉國に往坐るに在て其を成せる物は黄泉神（亦云豫母都志許賣）なる事云も更なり然るに黄泉神の屬神は顯國に在て疾病と禍害とを行はむと爲るを速佐須良比咩神は顯國の神に坐せども彼國に在して其疾病と禍害とを本の根國に祓却ひ坐す事奇しとも妙なる事なり鈴屋大人の「世中は吉事凶事行交る中よぞ種々（チヾ）の事は成出る」とも「善事に惡事射繼き惡事に善事射繼く世間の道」と詠れたるは尤なる事共なり（委しくは大祓詞の下に云るを見る可きなり此は容易に思過す可き事には非す）〇相率相口會事無氐上に出（御門祭詞の下に云り）但家には屋船神在し門には御門神在し衢には塞神等在して其境界を保ち守護せ給へば其御德の及はざる所無き害の事なるが其にても世に疾病と禍害との二は必無ては得有ぬ者なり然らは此神等の御

徳を以ても猶邪鬼を制し盡し給はぬ所有に似たれども此ぞ此神等の恩頼の大なる所なりける如何にと爲れば人の如此して世を經る間に惡しき事の邂逅に在る其即禍事と見ゆめるこそ却て禍事と云者尋常の事に比べては甚稀少なるが故なりけれ（若然らずば世中に惡く常夜往く世と成なましかば彼も禍事此も禍事と其分別る可き樣は無からましな禍事の在て其禍事と見ゆるこそ此方に我知ず身に吉事の有る其に對へ見るが故なりけれ）若て家にも身にも禍々しき事の有などは其身に其禍事を迎ふべき由緣有るか又其先に伸たるを今屈め給ふか後に伸ぶ可きを今屈へ給か何れに在れ凡人の得しも測知れぬ所に深き致の有りて然有しめ給ふ禍津日神の御心にて家神も門神も衢神も共に許諾して俺備踈備來物を使はせ給ふ事と思ゆ然らずは縱や衢神の御守は勿らむにも門神在せり門神も共に御幸ひ無らむにも家神在せり家神も共に御防護有ざらむにも此身は皇祖天神の造化し給ふ身なれば中々に彼黃泉神の類なる者の假にも犯して災爲べき所に非るを然ら有難き本より然る可き由有る事成可し（其守護者ふ神等の御德に依て其司坐す境界にこそは差別も有るなりけれ各一神の孤獨（ヘハナレ）て守給ふ由無れば一神の御守即八百萬神の御守八百萬神の御守は一神に在を思べし）此を以て此を思ひ此を惟ひて今しも思得たる所は上にも引る神代紀に泉守道者白云有レ言

矣云々菊理媛神亦有ニ白事ニ云々と有る右の二神は已に說置りし衢神に坐て其黃泉門を堅め在す故を以て彼國神より言事の有を受繼給ふ御功用坐るを以て見るに譬へば何某は斯る禍事を行へり其には如此して交こらむ何某は斯る禍心を包藏り此には然して相口會むと其黃泉國の事に由緣有る者は又彼黃泉神に任ねさせ給ふ事と見えたり（佛家の徒の魔緣と云事の有る彼に云時こそ已かえなれ此所に證すべき語なり）然れは神祇令義解に謂卜部等於ニ京城四隅道上ニ而祭ニ之言欲ニ令ニ鬼魅自レ外來ニ者不ニ敢入ニ京師ニ故預迎ニ於路ニ而饗遏也と有るは已に云る如く鬼魅の入來て禍を行はざる以前に此衢神等を四隅の路に迎へて饗を獻り祈願て鬼魅の外より來るを防遏め令る由なる者から其鬼魅を入ると入ざるとは此神等の御心に在る事を思はせて書れたる文にて必當昔受る所有りしなる可し（然れば傳の此文の書樣惡き故に心得無く見ては其饗を鬼魅に供ふる如く聞ゆ云々と云はれたれど表立ては塞神を祭鎭め奉り又其に就て鬼魅を饗し遏る意味も全に無に非ず）○下行者下乎守理上往者上乎守理は祈年祭詞月次祭詞等に自下往者下乎守自上往者上乎守と見え御門祭詞に自上往波上護利自下往波下護利と有など自ノ字有るよりは其意に大に急成所有り備上なべ祈年月次等に踈夫留物と有と此なる根

國底國與利麁備踈備來物とは精麁の差こそ有れ共に同じ物なるが故に下の方を前に云て上を後に爲り心を着べき事なり考御門祭詞には天能麻我都比神を云故に上の方を前にして下を後に爲たり此事御門祭の下又此詞にも云り考に下は地の底上は天つ空を云りと云れたる其意味無には非ねど此は後釋に下上は唯下方上方と云る耳也」と云れたる方廣く亘りて宜し〇夜之守日之守爾守奉齋奉禮止此なる齋奉禮は義解に饗遏也と有る遏字に當れり齋は物事を忌清る意にて少しも隈々しき所無きを云なれは考に其邪鬼を此塞神等の忌放遣給なり」と云れし如くにて甚雅びたる言狀也然るは彼黄泉國は醜めく穢き國にて其國神は醜めく穢き神なれは其國の事に交こり其國の神に相口會て曲る時は國も家も身も穢惡るゝ事なるが故に其事の無きを齋と云事は甚々忓怜き事なりかし奉禮止と有は塞神に令す御命なれはなり禮止は俗に云々爲よと誂へ附ると同じ事なり此例甚多かり

進幣帛者明妙照妙和妙荒妙爾備奉御酒者𤭖邊高知𤭖腹滿雙氏汁爾母穎爾母山野爾住物者毛能和物毛能荒物青海原爾住物者鰭乃廣物鰭乃狹物奧津海菜邊津海菜爾至萬氏爾橫山之如久置所足氏進宇豆能幣帛乎平久聞食氏

進幣帛者云々進宇豆能幣帛乎如此云例は春日祭詞に貢流神寶者云々獻流宇豆乃大幣帛乎大忌祭詞に奉流宇豆乃幣帛者云々如此奉宇豆乃幣帛乎風神祭詞に奉流宇豆乃幣帛者云々奉此宇豆乃幣帛乎平野祭詞久度古開祭詞等に進流神財波云々獻流宇豆乃大幣帛乎鎭御魂齋戶祭詞に奉御衣波云々獻流宇豆幣帛乎遷却崇神詞に進幣帛者云々奉留宇豆之幣帛乎など豫に進と云て終に其詞を用ひて結ふ古文の格なり此は世人の古文に疎きに示なり此中に種々の別有り此詞と遷却崇神詞と一種なり春日平野久度古開の三共に一種なり大忌風神共に一種なり鎭魂祭なるも一種なから此なると同例なり幣物の事は上に引る四時祭式の如し〇御酒者𤭖邊高知𤭖腹滿雙氏上なる鎭火祭詞にも如此出たり𤭖邊の邊は訓を借て上字の意に用へるなり考に春日祭詞に𤭖上他詞皆閇と書るを以て此の邊も假字と爲て閇の如く淸て唱ふ可なり濁りて邊の如く思ふは言の例も違ひ意も誤れりと有が如し〇汁爾母穎爾母此汁は上なる御酒者云々の事也穎は初穗を云るなれば鎭火祭詞に御酒者云々氏和稻荒稻爾至萬氏と云ふ事の有を脱たる如く見ゆれ共旁は省ける古文の例なり考に此穎も不意に出たり或は御酒者或は山爾住物などの如く皆其本を擧て云る文例に違へり云々と尤められたる事なれども然柱に膠せる如く窮屈なる物に非ず〇山野爾住物者毛能和物毛能荒物と有る此れは四時祭式なる幣物の中に

牛皮二張猪皮鹿皮熊皮各四張と有此を云ふなり臨時祭式なる宮城四隅疫神祭條牛皮熊皮鹿皮猪皮各四張と見え畿內十處疫神祭條に堺潮云々牛皮熊皮鹿皮猪皮各一張と見え蕃客送堺神祭條に牛皮熊皮鹿皮猪皮各二張と有るに山崎と須等となる故に各一張宛也障神祭條に熊皮牛皮鹿皮猪皮各四張と有は道饗祭と同じく京城四隅の故也古事記水垣宮段に初令貢男弓端之調女手末之調云々と見えたるこれを御紀に十二年秋九月甲辰朔己丑始校人民更科課役此謂男之弭調女之手末調也是以天神地祇共和享而天下太平矣故稱謂御肇國天皇也と有り此は同紀六年條に百姓流離或有背叛其勢難以德治之と有る結なる事云も更なるが人民に課役を科せ男女の貢調を令獻給へるに天神地祇の共に和享て天下太平矣と云事には考を加ふ可き所也古語拾遺に六年祭八十萬群神仍定天社國社及神地神戸始令貢男弭之調女手末之調今神祇之祭用熊鹿皮角布等此緣也と有る是也但六年には神に祭らせ給ふ料に態と召給へるなるを年々の恒祀定れる上は十二年よりは課役と爲れりし者なり文を互は挨合せて曉る可し然れば男弭之調の中なる熊鹿皮等は盾に製る料なる可し此に就て考るに御紀に九年春三月甲子朔戊寅天皇夢有神人誨之曰以赤盾八枚赤矛八竿祠墨坂神亦以黑盾八枚黑矛八竿祠大坂神四月甲子朔己酉依夢之教祭墨坂大坂神と有を古事記にも於宇陀墨坂神祭赤色楯矛又於大坂神祭黑色楯矛と有るに續けて又於坂之御尾神及河瀨神悉無遺失以奉幣帛也因此而疫氣悉息國家安平也と見えたる此には楯矛の事は記されざれども又と重ねたる所に上に準へられたる事を聞せたる也然て其墨坂神は水分神大坂神は山口神なれば下に疫氣悉息迄には係る可からず其に預らぬ事也墨坂神大坂神の委しき由は大忌祭詞風神祭詞に委しく云れば見合せて曉る可し若て此坂之御尾神は山神には有べからず河瀨神は河神には有べからず古事記大國主神段に追避其八十神之時每坂御尾追伏每河瀨追撥と有る追伏は誅戮せる事なる可けれども追撥は堺を追出しめたる事上に追避（オヒサクル）と有にて著き所なるが此に因時は坂御尾は山坂の至り留る極み河瀨は道路の行留る限と云事にて物の境目を云るなれは臨時祭式なる畿內堺十處疫神祭の類にて障神祭を行はせ給ふなり如此く見る時は因此而疫氣悉息國家安平也と有る文も能落着て聞ゆるなり但御紀に五年國內多疾疫民有死亡者且大半矣と見え七年の下に今當朕世數有災害云々と有を古事記に此天皇御世疾病多起人民死爲盡爾天皇愁歎而坐神牀之夜大物主大神顯於御夢曰是者我之御心故以意富多々泥古而令祭我御前者神氣不起國安平云々と見えたれば其災害の事は疫病なる可きか御紀に十一月丁卯云々即以大田々根子爲祭大物主神之主又以長尾市爲祭倭大國魂神之主云々於是疫病始息國內漸謐云々と有る此時は未坂之御尾神河瀨神は祭らせ給はざりし也古事記に依決るにく大坂神墨坂神と共に祭給へ

りと見ゆれば御紀の九年の下に有るべきを漏たる也右の古事記の文に坂之御尾神河瀬神に盾を進らるゝ事無れども又於と續けたるに依て幣帛の中に盾に爲る料物の有る事を思はせたる傳なり此を以て考ふるに此詞に山野爾住物者毛能和物毛能荒物と見えたるも青海原云々の文に對はせたる耳こそ有れ料物に皮を用らるゝ上は素より食用には非りけり此事大忌祭風神祭の下にも云べかりしを漏せる故に此には擧たる也○事の次序なれば思出る隨に書附く神祇令季春鎭華祭義解に謂二大神狹井二祭一也在二春華飛散之時一疫神分散而行レ癘爲二其鎭遏一必有二此祭一故曰二鎭華一と見えたるは上に引る道饗祭詞に彷彿たり其大神は神名式に大和國城上郡大神大物主神社名神大月次相嘗新嘗と見えて官より祭らるゝ所は一座なれとも大三輪三社注進次第には奥津磐座大物主命中津磐座大己貴命邊津磐坐少彥名命と見えたる此なり狹井は神名式に同國同郡狹井座大神荒魂神社五座鍬靫と有て釋紀にも大神之麁御靈也と有れは大物主神は荒魂の如く古來云來る事なれども大倭社注進狀に狹井神社傳聞狹井神者大己貴命之荒魂大國魂神即常社別社也と見え大三輪三社注進次第記にも狹井社大己貴命之荒玉也と見えたれは大國魂神なる事著き者なり大倭社注進狀に相殿神四座大物主神姬蹈鞴五十鈴姬命勢夜多良比賣事代主命と記せり倭大神は大物主命の幸魂奇魂を祀へるならず幸魂奇魂を祀れるは神坐日向神社大月次新嘗と有る社なり宇陀郡に神御子美牟須比命神社と有は此神の御子にて大物主神の御子に非す幸魂奇魂と申は神にも人にも神靈の德を修めて功業を令遂給はむ爲に天神等の預相守給ふ御名を申なり四時祭式に鎭華祭二座大神社一座狹井社一座と有れは其二社の中にて大物主神大國魂神二柱の預らせ給ふ所也然るに此本御靈と坐す大國主神は神代紀に大己貴命與二少彥名命一戮レ力一レ心經二營天下一復爲二顯見蒼生及畜產一則定二其療病之方一又爲レ攘二鳥獸昆虫之災異一則定二其禁厭之法一是以百姓至レ今咸蒙二恩賴一と見えたる如く醫藥の祖神なる事人皆知る所也此に因て園韓神と申す御名有り大倭社注進狀に傳聞園神者大己貴命之和魂大物主神也按此神園華飛散之時發二疫病一守二護之一鎭二止之一仍云二園神一歟園殖二草木一之處也云々韓神大己貴神少彥名命也云々或抄云大己貴命少彥名命神記曰昔造二葦原中國一乾去往二東海一今爲レ濟レ氏更亦來歸因以號二兩神一云二韓神一歟古語外國云レ韓也云々と見えたれは疫病を守給ふ事は然も有べき事なるか神祇令なる鎭花祭と道饗祭との義解の文意の彷彿たるには心を着べき事なり園韓神の事を師は神祇本源に引る大宗秘府略記に韓神者伊猛命號二韓神曾保利神一と有を取られたれと此は神代紀の此段一書に是時素戔嗚尊帥二其子五十猛神一降二到於新羅國一居二曾尸茂利之處一云々と有に依て杜撰(ツクレ)る說なり且內侍所御神の式に韓神之事素戔雄尊子也と有には驚く可からず大己貴命即素戔嗚尊の御子と有る御紀の正書の傳正しければなり大國主神の幽事を所知看す御事は暫く除て塞神等に御由

緒坐と思ゆる事は神代紀に大己貴神ニ云々薦ニ岐神於二神ニ曰是當ニ代レ我而奉レ從也云々故經津主神以ニ岐神ニ爲ニ鄕導ニ周流削平有ニ逆命ニ即加ニ斬戮ニ歸順者仍加ニ褒美ニと有を以て見るに大國主神の此國を平げ給ふより始て萬事は岐神の御幸ひに依て滯る處なく成れりし故に此に神名を表はして云るを正書には其靈形を以て大己貴神云々乃以ニ平レ國時所レ杖之廣矛ニ授ニ二神ニ曰吾以ニ此矛ニ卒有ニ治功ニ天孫若用ニ此矛ニ治レ國者必當ニ平安ニ矣とは語傳たるなり然れば彼大神の興言(コトアゲ)に夫葦原中國本自荒芒至ニ及磐石草木ニ咸能强暴然吾已摧伏莫レ不ニ和順ニと宣へる其本自荒芒たる者は其詞に謂ゆる根國底國與利麁備疎備來物の所爲なれば岐神の本より預かる所なり又爲ニ顯見蒼生及畜產ニ則定ニ其療病之方ニ又爲レ攘ニ鳥獸昆虫之災異ニ則定ニ其禁厭之法ニと有る其病は彼黃泉國の起來る者なり災異は黃泉神の所爲なる者なり合せて岐神の功用ならては此を療め此を攘ふ事は出來まじき者なり然れば其廣矛を奉給へるは此神の御靈の幸ひを仰がせ給ひて天下を安く統御せと仰上させ給へるなるが此即天上にて天津祝詞の太祝詞事の因て成れる所由なり（然れば伊邪那岐命の黃泉平坂の所にて岐神は成出坐つるを全く其御德は大國主神の御功業を輔け給へるより顯れ給へるなるが大國主神又其岐神の御幸に依て大造の功績を立給へる故に其を皇御孫命に薦奉らせ給へる者也）然れば平國之廣矛は岐神の表物なるが大國主神より奉らせ給ふに至ては皇孫以ニ此矛ニ治レ國者必當ニ平安ニ矣と申させ給ひて皇御孫命の長御世を守奉給はむ御心を藏させ給へるに依て大國主神の神靈と爲て天降らせ給ひ崇神天皇六年と云迄は大殿の內に在しつるが其年大國魂神と共に大倭神社に齋かれさせ給へる者にぞ有ける注進狀に大倭神社在ニ大和國山邊郡大倭邑ニ蓋出雲杵築大社之別宮也云々在ニ大倭豐秋津國ニ守ニ國家ニ因以號ニ曰倭大國魂神ニ亦曰ニ大地主神ニ以ニ八尺瓊ニ爲ニ神體ニ奉レ齋焉と見え相殿神二座の下に傳聞八千矛神者大己貴命以ニ廣矛ニ爲レ杖令レ撥ニ平豐葦原中國之邪鬼ニ是時大己貴命號ニ曰八千矛神ニ云々此矛亦上古在ニ天皇大殿之內ニ其後齋爲ニ八千矛神之神體ニと見えたりこゝを以て廣矛は荒魂の御靈には非ず全體の御靈形なる事を明らむ可し（廣矛の實は借字にて尋矛ならむと所思ゆ其は以ニ廣矛ニ爲レ杖と有を思ふに國中の邪鬼を討平る事は更にも云ず凡ての事に臨むには必此杖を執りしと見ゆ然るに岐神の御靈なる物にて其身の長に比べたる者なる故に尋矛とは云なる可し且其木は桃ならむ事巳に上に云るが如くなり）皆其注進狀園韓神ノ條に舊記に云件神等素盞嗚尊之子孫守レ疫神也と有にて鎭花祭義解

に疫神分散而行レ癘爲二其鎭遏一の文は悉く氷解せりと云べし又古事記（水垣宮段）に此天皇之御世疫病多起人民死爲レ盡爾天皇愁歎而坐二神牀一之夜大物主大神顯二於御夢一曰是者我之御心故以二意富多々泥古一而令レ祭二我御前一者神氣不起國家平と有るを旦と見ては疫病多起て人民の死盡なむと爲るは神の御祟の如く見ゆれ共然に非ず我之御心ぞと詔給へる鎭遏むると鎭遏めざるとは是我之御心也との御諭也此事を御紀には殊に委しく有て五年國內多二疫疾一民有二死亡一者且大半矣六年百姓流離或有二背叛一其勢難二以レ德治一レ之云々七年春二月丁丑朔辛卯詔曰云々今當二朕世一數有二災害一恐朝無二善政一取二咎於神祇一耶蓋命二神龜一以極二致レ災之所由一也於是天皇乃幸二于神淺茅原一而會二八十萬神一以卜二問之一是時神明憑二倭迹々日百襲姫命一曰天皇何憂二國之不一レ治也若能敬二祭我一者必當二自平一矣天皇問曰敎如此者誰神也答曰我是倭國域內所居神名曰二大物主神一時得二神語一隨敎祭祀然於レ事無レ驗天皇乃沐浴齋戒潔二淨殿內一而祈之曰朕禮レ神尙未盡耶何不享之甚也蓋亦夢敎レ之以畢二神恩一是夜夢有二一貴人一對二立殿戶一自稱二大物主神一曰天皇勿二復爲一レ愁二國之不一レ治是我意也若以二吾兒大田々根子一令レ祭レ吾者則立平矣亦有二海外之國一自當二歸伏一（古事記には故以二意富多々泥古一而令レ祭我御前一者神氣不レ起國安平云々と見えたり）秋八月癸卯朔己酉倭迹速神淺茅原目妙姫穗積臣ノ遠祖大水口宿禰伊勢麻績君三人共同夢而奏言昨夜夢之有二一貴人一誨曰以二大田々根子命一爲レ祭二大物主大神一之主上亦以二市磯長尾市一爲レ祭二倭大國魂神一之主上必天下太平矣云々（大國魂神の大を脫せるな補て引けり其下なる之字も今加たる所なり通證に疑倭下脫二大字一神下脫二之字一と有に依れるなり）十一月丁卯云々即以二大田々根子一爲レ祭二大物主大神一之主上又以二長尾市一爲レ祭二倭大國魂神一之主上云々於是疫病始息國內漸謐五穀已成百姓饒之と見えたる此は五年國內多二疫疾一云々の結有此を以て此時の較略も疫病の行はれしより人民困窮し世中平穩ならざりける者也此を以て注進狀に引る四記に守レ疫神也と旨を曉る可き也（此頃よりぞ又鎭花祭は年々に行るゝ常例と爲れりけむ事をも思ふ可し但此事共の挽ては古事記傳に委しき所なるが其說樣に至ては或は同じく或は同からざる者也）但御紀の文に於是疫病始息と有るは悉く除こり盡ざる者なり上に云る如く九年四月に至て墨坂神大坂神を祭祀らせ給ふ時に至て坂之御尾神河瀨神を共に祭らせ給へる此に因て疫氣悉息たる事前條に說るが如し此即畿內十處堺神祭の起る所以なるが右の疫を守

る大神狭井二座の神と此障神を祭り整給へるに依て十二年御紀に天神地祇共相享而風雨隨時百穀用成家給人足天下太平矣と有る如くには成れる者になむ有ける（斯く考定めて思ふに右の大神狭井二神と岐神と共に納受（キコシメ）すに非れば悉くは清まるまじき物になむ）又此考に成る因に云ふ同十年御紀に以二大彦命一遣二北陸一云々壬子大彦命到二於和珥坂上一時有二少女一歌之曰（一云大彦命到二山背平坂一時道側有二童女一歌之曰）瀰磨紀異利寐胡播揶飯迺餓烏塢志齋務苫農殊末句志羅珥比賣那素寐殊望（一云於朋耆妬庸利于介伽卑氐許呂佐務苫須羅句塢志羅珥比賣那素寐須望）於是大彦命異之問二童女一曰汝言二何辭一對曰勿レ言也唯歌耳之重詠二先歌一忽不レ見矣大彦乃還而具以レ狀奏於是天皇姑倭迹々日百襲姫命聰明叡智能識二未然一乃知二其歌怪一言二于天皇一是武埴安彦將謀反之表者也云々と見えて古事記には山代之幣羅坂と云るが何れに爲ても此の童女神人なり和邇坂は臨時祭式畿內堺十處の中なる山城與大和堺と云る所にて朝野群載（四角四堺祭條）に和邇堺と云る是なり然れは去年坂之御尾神を祭られし所なれば障神等の鎮坐て鬼魅の外より來るを防遏給ふ莫來處なり岐神を常世岐姫神とも申て女神なれば決く其神の現形れ給へる事著く右歌に飯迺餓烏塢志齋務苫を古事記には意能賀袁々奴須美斯勢牟登と有れば農殊瀰の言脫たるなるが己緒乎竊と云事にて三代實錄に偷兒開二神祇官西院一盜取主上結二御魂緒一と有と同じく御魂緒を竊て調伏し奉るなり倩其は十種神寶に象りて御續命の太切じき神物なるが十種神寶の中なる死反玉道反玉は衢神の神寶なるなどを合せて思ふに此の御諭は岐神なる事疑無き者也此等の事よりや辻占など云ふ事も盛に成以て來つらむとさへ思はるゝなり且右の倭迹々姫命は御紀に爲二大物主神之妻一と有れば此歌に就て武埴安彦が叛逆の志を顯し給へるなど岐神とは上に說る如く殊に親しく御在る幽契有が爲なり（此は餘りに推量の說に似たれども如此く切（セム）る時は斯計の神事も神隨に爲て心に浮び來る者なれば記置く者なり此印可（ミタヽシ）は人の是非に任ぬ可くも非ず我幽冥に入らば神明に此を正むと爲（ス））

大八衢爾湯津磐村之如久塞坐氐皇御孫命乎堅磐爾常磐爾齋奉茂御世爾幸閇奉給止申又親王王等臣等百官人等天下公民爾至萬氐爾平氣久齋給部止神官天津祝詞乃太祝詞事乎以氐稱辭竟奉止申

大八衢は今本に大字を脫せり然れども此は上に大八衢と云出たるを請て其事を重復云て其事實の落着を

着る所ならずはこそ有め必無ては得有まじき所なるが故に補ひつ必善本有べきなり神名にも大字は無く常にも八衢と耳云事なれば無ても事は足れる如くなれども語の續きも若ては善はしからず聞ゆれば何れに爲ても脱たるなり○湯津磐村之如久塞坐氐上なるは本よりの所在を云ひ此は其御守を祈願に就て如此云るなり○皇御孫命乎堅磐爾常磐爾齋奉は祈年祭詞を始て其餘の祝詞共に皇御孫命御世乎手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉云々と有と同じく皇御孫命の大御壽の事なり伊勢の六月々次祭詞に天皇我御命爾坐御壽乎手長乃御壽止湯津如磐村常磐堅磐爾云々と有を合せて知べき者なり偖古き祝詞の例を以て見るに此も其御壽の方に預り給ふ神ならぬには猥（ミタリ）雜に申さぬ事と通えたり今其を一々に云てむ先祈年祭詞第三なる神祇官西院坐八柱神等は人身を造作より始て世を終る迄に總ての事を悉く所知看す神に坐が故に皇御孫命御世乎云々の語有り又同祭詞第七大神宮のに有るは今更に云には及ばぬ事ながら彼天壤無窮の神勅は更也天地の底際の內に在と在ゆる八百萬千萬神の德功も此の大御神の御恩賴に賚では出來ぬ程の事は石屋段にて著く且保食神の身に化れる陸田種子水田種子を見行して是物者顯見蒼生可ニ食而活レ

之也と詔へる事有れば人民生活の事は此大御神の大御心なるが故也春日祭詞に今母去前母天皇我朝廷乎平久安久足御世乃茂御世爾齋奉利常石爾堅石爾福閇奉利云々は古の例と同じ狀なれど此を所知看す御代を守防ぎ平けく安けく守給へと祈申させ給ふにて御壽の事に非ず朝廷の御事を云なり平野祭詞久度古閇祭詞に天皇我御世乎堅石爾常石爾齋奉利伊賀志御世爾幸閇奉氐萬世爾御坐令在米給と有るは平野の今木神は彼布都主劒大神に坐て神武天皇の熊野の荒坂津にて不平給へるを祐奉給へれは大御壽の守護の神たり久度神は物を煮炊きて性命を保護せ給ふ神古閇神は十種神寶の御魂に坐せば共に御壽命の事は祈らせ給ふ可き條理也又大嘗祭は彼可ニ食物活レ之也と詔へる齋庭の瑞穗を聞食て長御世の遠御世に榮給はむ大御祝事なれば瑞穗の事に係て其事有り鎭魂祭詞に在るは此は御壽命の長く御在む爲耳の御祈なる故に其趣の事を云り大神宮の六月々次九月神嘗等の詞に見えたるは上に云る如し齋內親王奉入時詞に皇御孫之尊乎天地日月止共爾堅磐爾平久安久御座坐志米武止云々共見えたり出雲神賀詞に天皇命乃大御世乎手長能大御世止齋止爲氐云々汝天穗日命波天皇命乃手長大御世乎堅石爾常石爾伊波比奉云々と有も大御壽の事を云る也其は白玉能大御白髮坐赤玉能御阿加良毘坐云々天皇命能手長大御世乎御横刀廣爾誅堅米云々耳能彌高爾天下乎所知食牟左云

々倭文能大御心モ多親爾云々彌若叡爾御若叡坐云々彌乎知爾御袁知坐麻蘇比乃大御鏡乃面乎など皆大御身の事なるを以見る可し此は熊野杵築二大神を祀ひて物爲る事なるが幽事を所知看す神なるを以なり偕此詞に皇御孫命乎堅磐爾常磐爾齋奉云々天下公民爾至萬氏爾平久氣久齋給部止と云るは障神と在して黃泉國の疫神を防遏給ふ御功に耳係て云ならず彼伊邪那美命の一日絞ニ殺千頭ニと宣給ひ伊邪那岐命の汝爲レ然者吾一日立ニ千五百産屋ニと宣給ひて別處を立給へる其黃泉門に塞坐す千引石の御靈神に坐が故なり然れは此神の御守護厚き時は大御壽の世に永らへ御在するに定りたる神事なるが故に如此は云るなり道反大神とも申し且十種神寶なる死反玉道反玉の此神等の神寶なる由などをも思合せて曉る可き者なり上に引る五代帝王物語に仁治三年正月五日より主上御不豫の事有て九日寅時に崩御云々即御惱着せ給ひて取敢ず御大事に及びけり併天魔の所爲なり然れば禁中に種々の物現じて見えけるとかや又二條烏丸と北の側(ツラ)に烏丸より西には野依の姫宮の御在けるが主上の御事とて世中ひめけれは姫宮も哀れに淺ましく思して二條の南門に向たる所にて内裏へ人の馳參るを御覽じ出したりけるに西方なり辻祭などの音して離し罵りて來れば是程の世中に唯今何事なれば如此は有ぞと怪しく御覽じ着るに正に門前を過るを見れば辻祭の囃と云事の世に盛とて皆たる物狂集て或は編木(サヽラ)を擂り鼓を打ち或は拍子を叩きて嬉しや水と鳴し懸て東へ通ける此は如何に祈ふし不思議の有狀かなと見けるが東過て後は音も爲ざりけり天魔の能く來たるにや有らむと有る此天魔は即禍日の邪鬼なるが如此計り荒るゝをも障神の防遏め給はぬは其頃の世中なれば守る可き神も守給はぬにて淺ましなど云も愚なり然れば人命の永らへむ祈は障神等に物爲て根國底國の邪鬼を防ぐべき事なり此ぞ天津神隨の道なりけるはや○茂御世爾幸閇奉給止申は上なるには大御壽を云ひ此には大御代の大御榮坐む事を乞申せるなり此も世に禍事を爲行ふ邪鬼を湯津磐村の如く塞給ふ神に在せば其御守護有る時は必善事の無ては得有ぬ所なれば必如此しも有べき事なり但此は外にも常に多く云事ながら今は此障神の御功用に當て說く所なり奉給は鈴屋大人說に總て如此く奉と給とを重ねて云事中昔の文には常の事にて是兩方を尊みて云言なり此の文にて云はゞ奉は天皇の御方を尊める言給は神の御方を尊める言なり此は實に如此云べき理に聞ゆるを如何なればか古文には此る重て云る事無く唯奉と耳云り祈年祭詞の辭別に天照大御神に申す詞にすら云々如レ斯皇大御神能寄奉波また皇御孫命御世乎云々幸閇奉故など有が如し斯る類必寄奉給波また幸閇奉給故など有べく聞ゆる言なるを然は云ぬぞ古文の例なると云れたるは眞に然る言なり但中昔の文には常の事にてと云れたるを以見れは上古には無しとの義なる可けれども已に大殿祭詞に言寄奉賜氏と見え此又古事記國遷段なる事代主神の御父大神へ仰上させ給ふ御言に言ニ恐之此國者立ニ奉天神之御子ニと有る立奉などは記傳に立奉給幣と訓附られたる如くならでは語の勢に叶はず此給ノ字を離しては訓難き所也此を以て考るに彼祈年祭詞の如く寄奉波また幸閇奉故と樣に云も一格又此詞の如く奉給と云も一格なる者

なり然れば鈴屋大人の又説に此詞又平野祭齋戸祭などに如此有るは後の文なるが故なり此祝詞にも上文には守奉齋奉禮止進幣帛者云々と有るは古文の例なり」と云れたるも僻なる論なり且此詞を後の文と見られたるも天津祝詞なる事に心着れざりし者にて甚々誤なり〇又親王王等臣等百官人等天下公民爾至萬氏爾此に一の説有り其は道饗祭は神祇令義解にも於京城四隅道上而祭之言欲令鬼魅自外來者不敢入京師と有れば天皇は申すも更也親王諸王諸臣及百官人等始て京師に住ふ限の人の為耳の事なる可かめるを天下公民を載たるは京城四隅の外なるを以て推時は打合ざる心ちの為る事なれ共此なむ此祭の深旨を明む可き處なりける然るは何れの祝詞にも天下公民の總ての事を悉く天皇御一己の御上に歸て申す古の格なれども又委曲には如此も云事にて此を以て其略ける所にも天下公民の事迄も含有る事を知可也已にも云る如く祈年祭詞に天下公民の農作を始る事を天皇の御事と為て申せるを思合せて曉る可き者なり此事を常に心に留めざれば古文は解得る事の難き者也但佗祝詞の例とは様異りて此詞には鬼魅の外より來る者をして京師に入ざる事なれば其境内の人民は共に安く其界外の人民は惱されむを天皇の御上よりは天下に在と有ゆる人民を該羅めて大御寶と為させ給ふ所なれは何れか愛き何れか愛からざると云ふ差別の本自有べき御事ならざれは京城の四隅には限らず普く其御祭は及ぼさせ給ふとも又は天下の堺々の障神を一に神祇官などに集めて祭らせ給ふとも有ま欲き事なりと予も年頃其疑有しを此所に至て悉く其意を見認たり右の義解の文を以て云時は右の如くなれどもこの詞に天下公民爾至萬氏爾と有を以て此道饗御祭の朝廷耳の御事には非ず天下公民に至る迄も凡て外より來らむ鬼魅に相交こり相口會ふまじく其為に行はせ給ふなれば其堺に坐る障神等の次々追送り出し更に來らむは悉くに防遏め給ふ御事になむ有ける掛卷も甚も畏き祖皇天神の高天原に事始て皇御孫命の天下に敷行給ふ大御政は厚く尊き御事にて天下公民の有の悉知ると知ざると共に其御惠の御蔭に漏るゝ所は無き者ぞかし此外年中行はせ給ふ恒例の神事臨時の神祭共に悉く天下公民の為なれば日々夜々に其御恩頼を思ひて天下の為世中の為に少かも上の御治教を助仕奉らむと及ばぬ迄も心を懸べき事ぞよ〇平久齋給部止は上に夜之守日之守爾守奉齋奉禮止と有る齋にて諸の殃災無く平安なるを云ふ事也萬葉十五に伊波比麻都良牟とも久左麻久良多妣由久比等乎伊波比之麻云々と詠るも道中の恙無を伊波布と云也此の然る意也今俗にも諸の殃災などの無く成れるに祝フと云も凶事を避て吉事に移る謂なり又物事の始に其終を係無事ならむ諍事を為るを祝フと云も同じ事なり〇神官は神祇令道饗祭義解に卜部等於

城四隅疆上二面祭之と有る此也考に四隅同時に祭らるれば卜部四人を用ひらる仍て等と云か」と有り公事根源抄に是も卜部の人京畿の四角の路にて鬼魅の他方より来るを京路に入ざらん為に供物を供て祭る」と有るに其の文を以て云るなり上は萬葉集歌を引て云る如く夕衛の占事などの事い有るを以て見るに決めて卜部の職掌と為る所成が此は決めて天津祝詞の太祝詞事はしも天兒屋命より次々彼氏に傳はり来る所なる可し然るに右の夕衛の占などの故にや已く此職掌陰陽寮の所掌とは成れりけり卜部の此職掌を失へるも古き事と聞えて宮主秘事口傳抄は北山後光嚴院天皇の康安二年に筆記せる書なるに鎭火祭と此とを載るに無し公事根源抄にも道饗祭條に是は疫神の祭なり毎年に必行る可き事なり近頃は絶に侍にやと有り江家次第西宮記北山抄などにも此祭の事見えず朝野群載に四角四堺祭使等の歴名を載たるには何れも陰陽寮の官人等にて卜部の事の見えざるは古くより彼寮に移轉れる者なる可しと雖も此は本自卜部の職と為る所なれば此に神官と有るは卜部等なる事云も更なり○天津祝詞乃太祝詞事乎以氏云々の天津祝詞は上に大八衢爾湯津磐村之如久と有より以下夜之守日之守爾守奉齋奉禮止と有る以上の文にて其より下なるは當今行はせ給ふ祝詞の文なる者なり上なる鎭火祭詞の下に云る例を以て見合せ、言る可き者なり然るを考に文を書列ねしは後世なれど事は天津神代より傳はれる業なれば大祓の事を續日本記に神語と書しも此類なり」と云はれたるは委しからず

○臨時祭式に八衢祭と云有り此も亦此障神等を祭るならむと所思るに其は下に遷却崇神詞有る其幣物を爲たるなり此は予始に見定たる所有て其詞の下に云が如し然るに鈴屋大人説に此道饗祭詞は考に此道饗祭は令義解に鬼魅の来るを道にて饗遏と云れば下の遷却崇神祭の如く其惡神を饗し和して帰すことも云ふ可きに此文衢神を祭る事耳有るは如何と云はれたる如く道饗祭には叶はず今思ふに此は臨時祭式に八衢祭と云ふ見えたれば其れなりけむを取混はして道饗の名と爲るなり備遷却崇神と通したるぞ道饗祭詞にはありける」と云はれたるは言ぎき備事なり上に委しく論註せれば贅るに及ばず然るに彼詞に皇御孫之尊乃天御舍之内爾坐須皇神等波云々と有て障神等の所知食す所に非るが如くなれども其堺を出して遷却ふ事はしも衢神の預給ふ事云も更なり又其詞に山川能清地爾遷出坐氏吾地止宇須波伎坐止云々と有るも彼古事記水垣宮段には障神を坂之御尾神とも河瀬神とも申せる此二其に境界を遠く究盡す義なれば甚能く符へり然るは何の神に坐せとも甚荒び給ふ御靈は衢神の防ぎ拒み給ふ所なればなり此事猶委しくは其詞の下に云り其八衢祭と云名より混れ易き事なる故に少く驚し置く者なり

延喜式祝詞講義十二之卷

嘉永三年三月二十一日

淡路國　鈴木重胤　著
出羽國　庄司昭良
同國　羽田俊彦　按

○大嘗祭（オホニヘマツリ）

四時祭式には新嘗祭と出たり同じ事なり後世には天皇の大御位に即坐る新世の始に行はせ給ふを大嘗と稱ひ毎年に行はせ給ふを新嘗と稱ふ事に成たる故に貞觀儀式延喜式及其餘の書等には其名目を唱別られたれども古の唱は等しかりつるなり宮主秘事口傳抄公事根源抄等には代の始には大嘗會と云ひ毎年のをは新嘗會と申なりと有る如く後世には稱呼の違有て紛らしからず　但四時祭式に凡踐祚大嘗祭爲ニ大祀ニ新年月次神嘗新嘗賀茂等祭爲ニ中祀ニ云々と有れば古は本自にて其後々と雖も大祀中祀の差別有て混れざる事今世の狀の如し今世の狀の如しとは神世より以來許多の御世々々數多の年月を經れども少しも異る所無きを云なり　然るに神祇令仲冬恒例の祭祀祭には大嘗祭と記し此詞をも此に大嘗祭と記せるからは一世一度なると同じ唱にて其差別無きは如何なる狀なれど毎年に行はるゝ恒例なるは唯大嘗祭と稱ひ一世一度なるは踐祚大嘗祭（ミヨハシメノオホニヘマツリ）と云別つ事と見えたり此事皇極天皇御紀に已に出たりて此は儀式及式に據て云所なり唯此も其頃よりの事なるにや北山抄にも踐祚大嘗祭と有て毎季なるを別に云ニ神祇令ニ凡大嘗毎レ世一度國司行事以下毎年所司行事と見えたり義解ニ謂ニ所司ニ者在京諸司ニ其事ニ者也と有り毎世一度の大嘗は悠紀主基の國有て國司に事を行ふ所なるは毎年なるは然らず在京の官人にて事を行ふとなり　已に神代より相通はし云りと聞えて天照大御神の聞看しを古事記には大嘗と傳へ神代紀には新嘗と記されたるは更なり淸寧天皇御紀には一世一度なるを大嘗とも新嘗とも記され皇極天皇御紀にも同じ事を踐祚大嘗とも新嘗とも書れて其稱を通はせ云り此は記傳に已に說れたる事なり北山抄にも踐祚大嘗祭毎季大嘗祭と同名を記せり　然れども御紀の例大御世の初に大嘗の大御政を行はせ給ふ其年を大歲と記さるゝ文法なるを以て見るに其唱こそは同じからめ毎年のとは格別なりし事云も更なり神武天皇御紀より始めて御世々々の大御史に是年也大歲云々と有て即位元年と同年なるも同年ならさるも有を以て考ふ可き者なり此事は中臣壽詞考に委しく云りき但此考は予已に前に著はせる所なりと雖も今此を訂正して此祝詞講義の附錄と爲す　右の如く天皇の大御代始なるをも毎年のをも相通はして大嘗とも新嘗とも云事なるは大祀中祀の差別こそは有るめれ其趣意

同じければなり備此は有が中にも甚も々々重き大御政にて天皇の天津日嗣高御座の御大事此に勝る事有事無く又此に比ぶ事有る事無ければ今其起より委しく説成し奉る可し（斯る御事は古學爲る徒の誰も々々然思ひ寄る筋にて今更に云むも事舊にたりと雖も其天津神代の宋源より明らめ云に非ずでは根無き浮説と爲る故に凡庸の徒の思ふ所は云はず予が立意を以て述る者なり）神代紀に天照大神在ニ於天上ー曰聞葦原中國有ニ保食神ー宜ニ爾月夜見尊就候レ之月夜見尊受レ勅而降已到ニ于保食神許ー保食神乃廻レ首嚮レ國則自レ口出レ飯又嚮レ海則鰭廣鰭狹亦自レ口出又嚮レ山則毛麁毛柔亦自レ口出夫品物悉備貯ニ之百机ー而饗レ之是時月夜見尊忿然作色曰穢矣鄙矣寧可ニ以ニ口吐之物ー敢養ニ我乎廼拔レ劍擊殺然後復命具言ニ其事ー時天照大神怒甚之曰汝是惡神不レ須ニ相見ー乃與ニ月夜見尊ー一日一夜隔離而住と見えたるは天照坐日大御神天上に在て磐戸押張り照臨ませ給ふ大御光に依て和久産巣日神の御靈の殖作も物の生出る神氣大地に充滿せりし故に其御子保食神の御靈も大成ひて既に草木の形を生じ生出來る時運と世中には成れりしかば大御神の遠く御照し坐る大御光を大地に受る度量は如何也や又其二柱神の其御惠を布給ふ有狀は如何也や其に所知看まく思ほして月夜見尊（亦名須佐之男命）は大御使に天降し給へるなり此を以て思ふに同紀に是時天地相去未レ遠と有るを大御神の天柱を以て天上に擧り坐し後に漸々に天地相去る事今の如く遠く成定れりしかば本自天日に就て巡る大地なり天日に依て易る晝夜なり天日の光を受て成れる草木なり各々其度を得て出來る事なるが故に眞に大御神の御上に取ては最所知食まく所思す可き御事と恐けれど思測り奉らるゝ事なり（弓を射に其矢の行方の知まほしきが如く六合に大御光を放せ給ふ大御心は必しも如此くなむ有るべき事なりける但此等に係りに奇説めく、皆から皇神の我心た開きて断しと思ひしあれへるた空しく、隆まむ事本意なき事なるか故に[illegible]德本る者也如此く見ざる時は神代紀に[illegible]遇突智[illegible]山[illegible]二神[illegible]見て古事記に和久産巣日神此神之子[illegible]有る所々のなく且神代紀に是時天地相去未遠と有るは何時の間に今の如く、に離て天地位を定たると云事も知れず、其余にも諸[illegible]せぬ所多くして天地造化の神事を伺奉るに由なき者なり此な古事記には石屋戸の後に見えたるを前に出せるは錯事也御紀の傳正し）若て御紀の右の續の文に是後天照大神復遣ニ天熊人ー往ニ看之ー是時保食神實已死矣唯有ニ其神之頂ー化ニ爲牛馬ー顱上生レ粟眉上生レ蠶眼中生レ稗腹中生レ稻陰生ニ麥及大豆小豆ー天熊人悉取持去而奉ニ進之ー于時天照大神喜之曰是物者則顯見蒼生可ニ食而活ー之也乃以ニ粟稗麥豆ー爲ニ陸田種子ー以稻爲ニ水田種子ー又因定ニ天邑君ー即以ニ其稻種ー始殖ニ于天狹田及長田ー其秋垂穎八握莫々然甚快也又口裏含レ繭便得レ抽レ絲自レ此始有ニ

養蠶之道ニ焉と有る此亦大御心に思し合させ給ふ御事の有て大御使を降させ給ふなり天地の未遠さりし程は草木の榮枯も天地の遠く相去る後とは狀異なる可し此を以て其保食神をも往看がてらの大御使なりけるに保食神の御靈に依て天紀に氣候順正なる皇國の美地に相應ひて成れる種々の物の中にも顯見蒼生の食て活へき稻穗の瑞々しく成出たるは即瑞穗國の由來なり（但保食神は眞に身死坐ると云ふ紀記二典の傳は誤れり攝津國風土記に有レ事不レ可レ已塗還ニ於丹波國比遲乃麻奈草ニと有る此ヰ說なり然れば事有て還らせ給へるが其御屍より物は生れると見えたるにこそ有けれ彼漢籍に昔盤古氏の死也云々毛髮爲ニ草木ニなど云める樣の浮たる事に非ず保食神は天上に昇坐りと聞えて其御靈形の天降坐て伊勢に祀れ給ふを見よ）　天熊人其を悉く取持て大御神に献上る時に是物は顯見蒼生の食て活へき者ぞと喜び詔給ひて始て天狹田及長田に令殖給ひ天香山に桑木を殖て養蠶の事を起し給へるは其保食神の身に化れる物を試用ひ始給ひ猶其物を善く成整へて皇御孫命の御天降り坐む時に天降し給ひて顯見蒼生を養育て給はむ御下搆なりし也其皇太子の大御名を天之忍穗耳命と申奉る忍は大（オホ）と生とを兼ね穗は稻穗耳（ミミ）は御看にて其事を統御す由なるを思ふ可し君上の御職と申すは民に衣食の道を善くし授け賦與給ふ御業を普く布施らし給ひ其日繼を聞看し納させ給ふ神隨の道も亦此に始れり祝詞に高天原爾事始氏云々と有を思ふ可し（天之忍穗耳命を皇太子と稱奉る其皇太子の字は日繼之御子と訓へき言なると天邑君を定させ給へると顯見蒼生可食而活之と有ると此三を合せて思はゞ予が說の謬さるを知れむ）　其稻穗の秋の垂穎を八握に莫々然びて其快き秋に當りて天照大御神其新穀を始て聞食し齋はせ給ふと爲て齋服殿を建給ひて天衣織女に神御衣を令織給ひて御給（メシ）ふ是即大嘗會の齋服の始なり古事記に天照大御神云々於下聞ニ看大嘗ニ之殿上云々　神代紀に及レ至下日神當ニ新嘗ニ之時上云々則於ニ新宮御席之下ニ云々と有る大嘗とは續紀六に大新嘗と有る如く大に新稻の御饗を物爲させ給ふ由なり是は唯に新嘗と云時は當年の初穗の義に取れるなり若て其新宮と聞ゆるは其大嘗聞看す爲に悠紀主基の二宮の始なり此を齋庭と云事次に引神代紀（御天降段）に出たり踐祚大嘗會式に凡在京齋場者預分設ニ兩處ニ悠紀在レ左主基在レ右と有る是れなり（此事は已に新年祭五詞及大殿祭詞等の下に委しく說置る事なれども彼と此と少か心得に異なる所有が故に又更に說を爲すなり）　然れば此は天照大御神の大御身自天津宮に爲て新稻の大御食及新釀の大御酒を聞食し始させ給へるなるが此時に諸の天神等も相嘗に預らせ給へりし者なり中臣壽詞に月內仁日時遠撰定弖獻留悠紀主基乃黑木白木乃

大御酒遠大倭根子天皇我天都御膳乃長御膳乃遠御膳・止汁毛仁實毛仁赤丹乃穂仁所聞食氐豊明仁明御坐弖天都神乃壽詞遠稱辭定奉留皇神等母千秋五百秋乃相嘗仁相宇豆乃比奉利堅磐常磐爾齋奉利弖伊賀志御世仁榮志女奉利云々と有るを考るに天皇の御聞食す御方を主と爲て神等の相嘗に預給ふを客と爲るなれば高天原にて事始給へる任に其則を改易させ給ふ事無を知べし備其黑木白木の大御酒も此時に始て釀給へる者なり其證は神宮にて三節祭と有止事無き大御祭の有が中に月次祭は神今食神嘗祭は新嘗祭なるが共に朝夕の大御饌供奉るを以て主と爲る事なるが其を由貴と云も大嘗の悠紀に同く清酒作内人の白酒酒作内人の黑酒を奉など大嘗新嘗の大御政に少かも異ならざるを以知べきなり下なる六月月次祭九月神嘗祭等の下に云を見べし古事記に於下聞二看大嘗一之殿上屎麻二理散故雖然爲天照大御神者登賀米受而告如レ屎酔而吐散登許曾我那勢之命爲二如此一と有る其時に酒始て成れる證也若て天照大御神の天津日繼を天之忍穂耳命に事依し授奉らせ給へば此命は天降り給はざりし事なれども天上にて大嘗の大御政を行はせ給ひて天津日繼に瑞穂を聞食し其御子邇々藝命を天降し給へる事の大較も皇祖天神と相共に取擬ひ物爲させ給ひし事著し其は古事記御天降段に天照大御神之命以豊葦原之千秋長五百秋之水穂國者我御子正勝吾勝々速日天忍穂耳命之所知國言因賜而天降也と有る水穂國の名は天降坐し後に稻穀の美はしく出來れるを以號たる後の名を前に及ぼせりとも云はば云へけれども御天降より以前に大國主神の申給ふ御言に如下天神御子之天津日繼所知之登陀流天之御巢上而云々と有を思ふに已く水穂國の號定りて其天津日繼の瑞穂を所知食す御任を受賜へるを指たるなり又其より下文に太子正勝吾勝々速日天之忍穂耳命と有る二處共に太子の言を冠らせたるを以ても著き所なるを神代記には高皇産靈尊因勅曰吾則起二樹天津神籬及天津磐境一當爲二吾孫一奉齋矣汝天兒屋命太玉命云々乃使下二神陪二従天忍穂耳尊一以降上レ之是時天照太神手持二寶鏡一授二天忍穂耳尊一而祝之曰云々又勅曰以二吾高天原所御齋庭之穂一亦當レ御二於吾兒一と詔給へるなど彌々大嘗の大御政有し證也其は此文に齋庭之穂と有るは上にも云る如く大嘗の齋場の事成を思ふ可し然れば其下文に以二高皇産靈尊之女號萬幡姫一配天忍穂耳尊爲レ妃降之故時居二於虚天一而生レ兒號二天津彦火瓊々杵尊一因欲下以二此皇孫一代親而降上故以天兒屋命太玉命及諸部神等悉皆相授且服御之物一依前授然後天忍穂耳尊復二還於天一故天津彦火瓊々杵尊降二到於日向槵日高千穂之峯一と見えたる古

事記も大旨此と同じ狀なるが此文を讀味ひて天忍穗耳尊より天津日嗣を受給ひて瓊々杵尊の天降坐る事を知べき者也 次に邇々藝命は筑紫の大朝廷に爲て大嘗の大御政有けり中臣壽詞に皇孫尊波高天原仁事始天豐葦原乃瑞穗乃國遠安國止平介久所知食天天都日嗣乃天都高御座仁御座天天都御膳遠長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穗遠平介久由庭仁所知食止事依奉云々と見え大殿祭詞に皇我宇都御子皇御孫之命此乃天津高御座爾座氏天津日嗣乎萬千秋乃長秋爾大八洲豐葦原瑞穗之國乎安國止平氣久所知食止言寄奉賜比氏と有など天降座し後に在し證なり此ぞ此顯國にて大嘗の大御政を行はせ給ふ初なりける 師說に皇御孫命の御天降は庚申歲にて翌年酉歲に御即位有り大嘗會有て此大歲より御世の數は計ふる事なりと云れたるは然る言なり此事中臣壽詞考に云り又事の因なれば云ふ天宇受賣命の鰭廣物鰭狹物を追聚て天神御子に仕奉らむやと問答有しは此大嘗の年ならむか是以御世々々島之速贄獻之時給二猨女君等一也と有るも由有け也速贄とは後に云ふ初物の事なれども新嘗の意にも通へればなり 又毎年の新嘗祭も其より以降絶ず行はれけむ事云も更也其は何を以て知ぞならば祈年祭詞に高天原爾神留座皇睦神漏伎命神漏彌命以天社國社登稱辭竟奉皇神等能前爾白久今年二月爾御年初將賜登爲而云々と有るは御天降の時の神勅に依れる趣なるに同詞に皇神等乃依志左奉牟奧津御年乎手肱爾水沫畫垂向股爾泥畫寄氏取作牟奧津御年乎八束穗乃伊加志穗爾皇神等乃依志左奉者初穗波乎千穎八百穎爾奉置氏𤭖閇高知𤭖腹滿雙氏汁爾毋穎爾毋稱辭竟奉牟とも又大御神宮詞に皇大御神能寄奉波荷前者皇大御神乃大前爾如橫山打積置氏殘波乎平聞看止と有る此荷前即初穗の事なり又水分神詞にも皇神等爾初穗波穎爾毋汁爾毋𤭖閇高知𤭖腹滿雙氏稱辭竟奉氏遺波乎皇御孫命乃朝御食夕御食能加牟加比爾長御食乃遠御食登赤丹穗爾聞食故とも有て此初穗を奉せらるゝは新嘗祭なる由其詞の下に證せるか如くなれば 大忌祭詞風神祭詞に初穗者云々秋祭爾奉牟と有も新年の例にて秋祭は新嘗の事を云なり漢國にて秋祭を嘗と云るに此字允當なり 毎年に祈年祭を行はれて其年の豐登を祈願せ給ひ新嘗祭を行はせ給ひて其秋の豐熟を賽謝(カヘリマヲシ)を爲行ひ給ふ筑紫の朝廷以來の例なるを以て知れり此大嘗祭詞に高天原爾神留坐皇睦神漏伎命神漏彌命以天社國社登敷坐留皇神等前爾白久云々と有る文法まで祈年祭詞に等しかるを見る可し然れば御紀には毎年の例なるを以て別に異事の添れるならぬは記されざる者にて本自其傳も非ざりし者なり 此新年祭詞の終に故皇吾睦神漏伎命神漏美命止御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣と有るを以て當今天皇の執行はせ給ふ其即皇祖天神の詔命を受繼せさせ給へる御旨なる事を知べきなり新年新嘗は稻穀一年の首尾に就たる御祭なり已に新年の祭事の年々に有る上は新嘗の祭事も年々に必有來れる事云も更なり大嘗祭式に齋院に於て祭神八座の中にも御歲神の主と立給ふなど新年祭詞の故實に甚熟く叶へる者なり公事根源抄に用

明天皇二年四月より新嘗の事は始まる云々と有るなどは何に據る事にか取に足らず　若て彥火々出見尊
嘗不合尊の殘祚大嘗祭の事は御紀及記に所見無しと
雖も必有りし事は論無く其皇統は五瀬命ぞ受給へり
ける其は神武天皇元年は辛酉なるに其より八年以前
の御船發しの條に是年也太歲甲寅と見えたるは大嘗
の大御政有しが故なり但十一月は筑紫の岡田宮に坐
し程なれば其にて行はせ給ひつらむ師說に皇御孫命
御天降坐し元年辛酉より神武天皇御即位元年辛酉ま
で二千四百年なるに建子の正月なれば十一月は建寅
の正月より數ふれば今の九月にて神宮の神嘗祭は太
古の例に依て九月を以て行はれ朝廷の新嘗祭は神武
天皇以來今の十一月を以て行はせ給ふ由に云れたる
は然も有べく所思たり　此事師の天朝無窮曆及弘仁歷運記考に詳なれば就て見る可し然るに[illegible]の斯在る事に迄貫測せられたるを妬忌する輩有て此を打破らむと爲る說も世に多かりと雖も悉く破り得たる事なし　五瀬命痛矢
串に中て崩御しかば神武天皇天統を繼せ給ひて畝火
橿原宮に初國所知看しかば此天皇を俗に人皇の最初
に計奉り五瀬命は天津日繼の御次序には立さりしな
り偖神武天皇御紀に外に大歲の事見えされば辛酉元
年に在けむと思ゆ綏靖天皇御紀より以來の例を見る
に御即位元年の所に是年也大歲云々と有る定りにて

延喜式に凡踐祚大嘗七月以前即レ位者當年行レ事八月
以後者明年行レ事　此據ニ受讓即位一非レ謂ニ諒闇即位一　と有る後の御定とは異
なればなり然れば神武天皇御紀元年の下に是年也大
歲辛酉と記さるべきに文に辛酉年春正月庚辰朔天皇
即ニ帝位於橿原宮一是歲爲ニ天皇元年一と御世始の事な
れば殊に如此記されたるに依て大歲の事は後の御世
々々の例に讓りて省れたる者なりけり色葉字類抄に
新嘗祭本朝事始云磐余彥天皇代中臣連祖天原坐神名
神魂命曰迮大御倉持命奉レ供ニ新嘗之事一と有は事の
始を云に似たれども其祖なりし人の其事に預仕奉れ
るを云ふなり大御倉持命は大御食津臣命なる可し此
の曰迮の二字心得ず　然るに綏靖天皇御紀に大歲の事二所に出たるは子細有る事也神日本磐余彥天皇崩云々其庶兄手研耳命云々威福自由苞ニ藏禍心一圖ニ害二弟一于時也大歲己卯冬十一月神渟名川耳尊與ニ兄神八井耳命一陰知ニ其志一而善防之云々と有は神武天皇の崩御しければ諒闇の間なるをも顧ずして自天皇の大御位を僭し大嘗會を行へる也威福自由と有るに心を着べし序に云ふ神代に天稚彥が新嘗爲る事有るは當年の新穀を始て嘗たる由にて此例に非ず　此より後には高橋氏
文に景行天皇五十三年安房浮島宮にて聞召し大嘗の
事を記せるぞ古かりける但此は殘祚大嘗には非ず每
季の大嘗にて今云所の新嘗祭なり尙正史に大嘗新嘗
の事の出たるを云はゞ仁德天皇四十年御紀に是歲當ニ
新嘗之月一以ニ宴會日一賜ニ酒於內外命婦等一と有も上

世より十一月は新嘗之月と定れりしが故なり宴會日は豊明節會の事を云るにて新嘗の卯日に在る其翌辰日也（古事記明宮段に天皇聞看豊明之日於髮長比賣令握大御酒柏賜其太子と有は御紀に據に十三年是以天皇宴于後宮之日始以髮長媛因以上坐宴席時爲大鷦鷯尊以指髮長媛と有れば其年の新嘗の月に在し事成可又古事記高津宮段に大后爲將豐樂而於採御綱柏幸行木國云々と有を御紀に三十年秋九月乙丑遊行紀國到熊野岬即取其處之御綱葉云々と有れば此も其冬の設也大嘗會式に午日造酒司人別給柏即受酒而飲訖即爲盞即罷と有も新嘗祭の豊明節會には其事廢れて大嘗會の午日の公事に耳傳遺れる也）清寧天皇御紀元年の下に是年也大歳庚申と有て其翌二年の所に冬十一月依大嘗供奉之料遣於播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯於赤石郡縮見屯倉首忍海部造細目新室云々と見え顯宗天皇御紀にも同じ事を白髮天皇二年冬十一月播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯於赤石郡親辨新嘗供物（一云巡行郡縣收斂田租也）適會縮見屯倉首縱賞新室以夜繼晝と見えたる播磨國は此時の悠紀か主基か何れ其一方なり顯宗天皇御紀に趣にては新嘗の供物を辨ふる爲に其國に下り適縮見屯倉首が許に至れりし狀なれと清寧天皇御紀に依時は態と縮見屯倉首が新室を指て遣はされたる也然れば縱賞新室以夜繼晝と有は其勅使を招請（ヒキイル）る料なる事著きか未此頃迄は其齋郡に齋院を建る事は無して其國造等の構内に新室を作りて齋院の事には充つる者也と見ゆ偖此御紀に大嘗とも新嘗とも通はし書るは古の狀なり但元年の下に大歳と有て大嘗の二年なる事珍らし此程よりぞ後の御定の如く成つらむ（但齋院を齋郡に建らるゝ事は孝德天皇御世より郡縣の御定と成れりしより朝廷より建させ給ふ事と成つらめとも古封建なりし御世は其國造等の供奉る事にて在しなり能々考可き者なり但京にての悠紀主基の宮等は朝廷にて作らせ給ひけり古事記朝倉宮段歌に爾比那閇夜と有は新嘗屋にて其には有へからず毎年の料にて今云はゝ神嘉殿なとの如し）舒明天皇御紀に十年冬十月幸有馬温湯宮十一年春正月乙巳朔壬子車駕還自温湯乙卯新嘗蓋因幸有馬以闕新嘗歟と有は大御病の事に依て延引の例也先是用明天皇御紀元年の下に是年也大歳丙午と有て翌二年の下に夏四月乙巳朔丙子御新嘗於磐余河上と有るは前年なるが延引せるに依て行はせ給ふとも聞えず縱ひ延引の例也とも舒明天皇の如く卯日を用させ給ふ可きに子日なるも不審しき事なり此は外の祭事の混れならむも知べからず（谷川士淸も此には困れりと見えて通證に延喜大嘗祭式曰凡天皇十一月下旬臨幸河上爲禊依神祇令孟夏爲神衣祭と有れとも共に當らず御紀の右より下文を見るに是日天皇得病還入於宮群臣侍焉天皇詔群臣曰朕思欲歸三寶卿等議之群臣入朝而議物部守屋大連與中臣勝海連違詔議曰何背國神敬他神也由來不識若斯事矣蘇我馬子宿禰大臣曰可隨詔而奉助詎生異計於是皇弟皇子引豐國法師入於內裏物部守屋大連耶睨（ニラミテ）大怒云々と見えて此程の事怪しき事耳多き世中也しかは若くは前年に行る可き大嘗會を延引せられ又四月に行はせ給ふ即日御病と稱して行しめ奉らじと馬子なとが工めりし謀にて終には神國を佛界に爲むとの結構也假有馬子に欺れ給ひしとは申なから天皇にも御罪坐ます故に神慮此を怒給ふと見えて大御病轉盛に成て其九日癸丑に崩御しけり甚切畏々）

皇極天皇御紀に元年十一月丁卯天皇御新嘗皇太子大臣各自新嘗云々是年也大歳壬寅と有れば此は踐祚大嘗會なりけり然れども臣下の私の新嘗も當日物爲へき詔なとぞ有けらし此を以違例と爲て載られたるなむめり然らずては唯に常例の事を殊更に記されたる古書の例なればなり　孝德天皇御紀に大化元年秋七月丁卯朔庚辰蘇我石川麻呂大臣奏曰先以祭鎭神祇然後應レ議ニ政事一是日遣ニ倭漢直比羅夫於尾張國忌部首子麻呂於美濃國一課ニ供神之幣一と有る尾張美濃は決て悠紀主基の二國を云なり其終に是歳也大歳乙巳と有り此より前の御紀に二國相並ひて記せる事は無きを此より下天武天皇持統天皇御紀共に二國を並擧たるは御紀を撰ばせ給ひし當時より近き御世なりしか故に傳はれりしなり其より前代は事有し國名耳傳はりしなり　天武天皇御紀を閲るに元年は所謂壬申の亂なりしかば二年二月帝位に即せ給へり同年十一月大嘗會を行はせ給へり其は十二月壬午朔丙戌侍ニ奉大嘗一中臣忌部及神官人等并播磨丹波二國郡司亦以下人夫等賜祿因以郡司等各賜ニ爵一級一と見えたるは大嘗の解齋に在る事なるに是年也大歳癸酉と有れば著き所なり然るに同五年御紀に九月丙寅朔丙戌神官奏曰爲ニ新嘗一卜ニ國郡一也齋忌齋忌此云ニ踰既一則尾張國山田郡次次此云ニ須岐一也丹波國訶沙郡並食卜と有は一御世に二度行はせ給へる如聞えて如何なる事なれども次に冬十月乙未朔丁酉祭幣帛於相新嘗諸神祇十一月乙丑朔以ニ新嘗事一不ニ告朔一と有を考合するに是は毎年の新嘗なりけるが神官の奏請に任せて齋郡を定められしが異なるに依て此記文こそは有けれ前後に亘る例には非るなり但毎年の新嘗にも右の如く齋忌次の國郡こそは踐祚大嘗の如く定められぬ新嘗會の御拔穗の國郡を立らるゝ事なり宮主秘事口傳抄なる應長元年の文書に十月一日大炊寮申ニ新嘗祭御稻田ニ云々と見え又大炊寮粟卜定新嘗會供御拔穗御粟國郡等事河內國石川郡供御拔穗參十束山城國宇治郡供御粟三斛云々と有り粟とは籾と爲たる稻を云也二年に行はせ給へるが踐祚大嘗會に違無き事は大嘗祭式午日ノ條に神祇官中臣忌部及小忌侍從以下番上以上左右分入ニ造酒司一人別給レ柏酌レ酒而飲云々皇太子以下五位以上給レ祿各有差又諸司六位官以下及兩國郡使丁以上給レ祿云々と有るに合へるを以てぞ知られたる持統天皇五年御紀に十一月戊辰朔辛卯大嘗神祇伯中臣朝臣大島讀ニ天神壽詞一壬辰賜ニ公卿食一乙未饗ニ公卿以下ニ至ニ主典一并賜ニ絹等一各有差丁酉饗ニ神祇官長上以下至ニ神部等一及供奉播磨因幡國郡司以下至ニ百姓男女一并賜ニ絹等一各有レ差と有を谷川士淸說に延喜式曰凡踐祚大嘗七月以前即位者當年行事八月以後者明年行レ事此據ニ受レ讓即一レ位非レ謂ニ諒闇登極一今按天武

天皇二年二月其年行レ事此是四年正月即位則當レ在二其年一而明年行レ之蓋有レ所レ避也と云る實に然る說也然れば元年の下に是年也大歲丁亥と有は例に違へり又御紀には十一月戊辰と有を右の如く改引るは士淸說に恐脫二朔辛卯三字一辛卯廿四日也と有に從へり否らざれば次文への續きも如何に成て正質を失ふが故なり　此は御紀に就て大嘗新嘗等の有ゆる事迹を注す所なるか猶續紀より以下の例其をも載（ミル）さ將欲（マホシ）かれと餘りに褻瀆（クダクダ）しければ略きつ上件每世一度なるをも一年一度なるをも大嘗とも新嘗とも通はし云來る事にて畢竟は同じ事なるが故なり職員令に大嘗と有る義解に謂嘗二新穀一以祭二神祇一也朝則諸神之相嘗祭夕則供二新穀於至尊一也と有る如く天宮にて皇大御神の聞食し始させ給へり天津神代より事始て皇御孫命の天津日繼と彌繼々に天地と日月と共に長く遠く易るまじき大御政になむ有ける　倚立復りて祈年祭條又大殿祭詞なる天津日繼の下に說言せるを合せ見る可く又中臣壽詞考に云ふ所を見合せて曉る可なり　○貞觀儀式に云く新嘗會祭儀　若有二朔日冬至便行二叙位一　前一日諸司裝二飾豐樂院一構二舞臺於庭前一　自二殿南階一去十一丈七尺高三尺方六尺　設二樂人幄於舞臺東南角一　南去八許丈東去二許丈　高御座東第二間設皇太子座　西面　第三四間少南大齋參議以上座　南北面西上　南廂小齋參議以上座　北面西上白二大齋參議以上座一差西進　顯揚承歡兩堂五位以上座觀德明義兩堂六位以下座式

部丞率二史生省掌等一立レ標　自顯陽堂北第四柱西去十五丈立南折二丈立二親王標一次大臣標次大納言標次中納言標三位參議三位四位參議少退在二此列一次臣四位參議標次王四位標次五位標又自二觀德堂北第四柱東去十五丈南折七丈五尺王四位五位標次臣四位標次五位標二又當二觀德堂第三柱南去十五丈一立二六位以下標一自二明義堂一東去及二當柱一亦准レ此並以二一丈三尺一爲レ間　當日寅刻掃部寮設二式部輔以下省掌以上座於顯禮門以西壇上一　南面西上　輔以下就レ座點二撿五位以上一丞且掃部寮敷二調薦於舞臺上一內藏寮以兩面敷二薦上一鐵爲二鎭子一次中務省舞臺以二北四丈一置二宣命版一南去一許丈置二尋常版一先レ是皇帝廻レ自二神嘉殿一御二祭殿一記大齋相替退出　大齋入自二日華月華兩門一小齋相替向二宮內解齋所一　所司預備二御膳一幷群臣座饌時尅乘輿幸二豐樂院淸暑堂一　諸衞服中儀　式部丞錄率二史生省掌一東西相分入レ自二禮成崇賢兩門一列二立豐樂門以內一　東列以西爲レ上西列以東爲レ上史生省掌相分隨レ之　彈正忠疏率二史生臺掌等一東西相分列立　東西各以レ北爲レ上史生臺掌相分隨レ之　式部史生二人各持二大札一左右相分進　左西面右東面　唱二計五位以上一稱唯列立　左西面重行右東面重行　六位以下亦東西相分列二立禮成崇賢兩門外一于時乘輿御二豐樂殿一御座定內侍臨二東檻一喚二大臣一　若無二大臣一者參議以上得レ之　大臣到二左近陣西頭一　○今云乘輿以下大字二十五字小字十一字は荷田在滿說に依て補へり其校本頭書に云々于時下依二元日七日六日等儀一蓋脫二數行文一雖二其文不一レ可二必知一而在滿私補レ之と有り　謝レ座昇レ自二東階一就座　凡昇殿者皆用二此階一　次皇太子昇レ自二同階一到二座東頭一西面謝レ座謝レ酒就レ座諸司開二豐樂儀鳳兩門一　大臣昇殿閤門不二必待二皇太子一就レ　闈司

二人出自青綺門分居逢春門南（掃部寮預設座）大臣喚大舍人二聲舍人共稱唯（預候建春門外）少納言入自逢春門就版大臣宣喚大夫等少納言稱唯出自儀鸞門東戶立屛幔外而北面喚之親王以下五位以上共稱唯次六位以下稱唯（小齋先發聲大齋幷群臣相承稱之）參議以上列入自儀鸞門東戶北至門諸杖共起次小齋大齋五位以上東西相分參入（小齋用西扉大齋分用東西扉但神祇官為上）式部（錄）進立屛幔內左右稱容止親王以下各就標大臣宣侍座親王以下共稱唯謝座（未入之前造酒正以下預立罇所）訖造酒正把空盞來授貫首者（謂小齋第一人）跪而受之受之共再拜（造酒司正還却三許丈北面而立）親王以下謝酒訖造酒正進跪受復罇所參議以上依次就殿上座次五位以上六位以下東西相分就坐（待參議以上列三人昇殿卽四位以下依次就坐不必待參議昇畢凡東西堂者諸王五位以上及諸臣四位者用第二階餘用第三階）訖諸仗共居爰式部錄二人左右相分各執大札昇顯揚承觀兩堂正左位以上左次史生等左右相分錄諸司六位以下見參訖內膳司羞供御膳（左右各五人著當色）昇自中階至第一階而留授采女降階退初內膳司擎御膳進時近仗起（饌畢乃居群臣亦同）訖主膳監羞供東宮饌大膳職羞賜群臣饌一觴之後吉野國栖在儀鸞門外供御贄奏歌笛訖大歌別當大夫率歌者參入就座々定奏大歌舞五節（若有零雨於殿上舞）其五節妓一行下自西階垂雨敷上南行昇臺導引姫四人以上兩行在前到舞臺階下東西分座（掃部寮預設草墪於階東西頭）舞訖皇太子先避座而立次小齋五位以上先避座下階立（昇殿者下殿向左近陣南三丈更折西一丈西面北上不昇殿者立堂前去堂一丈大齋親王以下准之）次大齋親王以下降立皇太子先拜舞復座次大臣以下亦拜舞復座訖治部雅樂率工人等參入奏立歌（或有勅停之）掃部寮立祿臺於庭中大藏省積祿辨大夫奏祿數其詞云絹若干疋綿若干屯進申于時外記以見參幷祿法文進大臣內記亦進宣命文受之復坐又群臣下殿就版（儀同上）宣命大夫下版宣制云天皇我詔旨止（其辭）宣大命衆聞賜止宣皇太子以下稱唯再拜（皇太子先稱唯再拜親王以下次之）更宣云今日波新嘗乃直相乃豐樂聞食日爾在故是以黑伎白伎乃御酒赤丹乃穗食惠良波退止爲（天奈常毛）賜御物賜波久宣皇太子以下稱唯拜舞訖賜祿（六位以下後日賜之）小齋人等集宮內省解齋（其儀具踐祚大嘗會式）

と見えて次に大歌幷五節舞儀を載られたり然るに此に新嘗會祭儀とは有れども此は大嘗會辰日儀と同じく此は新嘗の直相を聞食し臣下にも賜ふ儀式にて所謂豐明節會にて神事に非ず神事に就て行はるゝ事なり此に依て江家次第には右の事共を記せるに節會次第と題されたり然れば卯日は神事にて新穀を諸神に

奏られ今日は新穀を至尊の聞食す事にて有なり此を以て中和院にて行はるゝ新嘗の御神事とは異るを知べし公事根源抄豊明節會の事に是は今年の稻を神に奉らせ給ひて今日君も聞食し臣下にも賜ふ故に節會行はる新嘗祭に參たる上卿宰相辨小忌を着る夜へは諸司の小忌を束帶の上に着たるを今日は云々と有るは此事なり四時祭式新嘗祭條には神事に用らるゝ料物の事有て節會の事の見えざるは神事に非るが故なり偖祭式等祭料並准ニ神今食ニと見えて此料物と供ニ神今食料ニに供ニ新嘗ニ料云々右依ニ前件ニ其御贖大殿忌火庭火と員數大較同じきを以て中和院儀も全く其と同じき事著き所なるが同式供ニ神今食料ニ條を見るに右供御雜物各付ニ内膳主水等司ニ神祇官々人率ニ神部等ニ夕曉兩般參ニ入内裏ニ供ニ奉其事ニ所レ供雜物祭訖即賜ニ中臣忌部宮主等ニ一同ニ大嘗會列ニと見えたり此等を合せて思ふに新嘗は神今食に准ひ神今食は大嘗に倣ひ行はれて彼此の差異無き者なりけり年中行事秘抄に新嘗會停止之時新穀御飯十二月神今食次供レ之延喜十五年十二月十一日例と有を思ふ可し但上にも説る如く大嘗と新嘗とは大祀中祀の差別耳こそ有けれ其式に異無ければ神今食の大嘗に倣ふと有は聞えたるを新嘗の神今食に准ふ事は旦(ヘフ)と見ては心行ぬ事なれども然らず神今食は月次祭に屬る物にて其中次も新嘗も共に四時祭式に載られたる所中祀なれは其式同じかる可事云も更なり旦右の神今食は六月祭にて新嘗の前に在り其前に在て同じからむには前なる方に讓る可き者なりかし江家次第中和院神今食御裝束條の細書に新嘗祭幷十二月神今食同と有て其六月神今食と儀式作法等に至まで異ならさる由を知せたるは然る物にて本朝月令に引る高橋氏文なる延暦十一年三月十九日官符に六月十一月十二月三度神事と記されたるも神今食は月次祭に攝して新嘗祭と全く一なるを以也伊勢大神宮式に三時祭謂ニ六月九月十二月ニと有て其六月十二月は月次祭也九月は神嘗祭なるも上の例也建暦御紀十一月中卯日新嘗祭條にも自ニ一日ニ至ニ其日ニ辰日解齋神事樣同ニ神今食ニと記させ給へる等を彼此思合するに新嘗祭の神事は全く神今食と同じきが爲に儀式には態と省かれたる者にて節會は神今食に亦非るを以て載せられたるなり然らば儀式に六月十一日神今食儀十二月准此と有る下に江家次第の如く新嘗會同などの文有るべきを記滿されたるながら却て當昔世に着明き處なるが故になむ有ける年中行事秘抄に新嘗會停止之時新穀御飯十二月神今食次供レ之延喜十五年十二月十一日例と見えたるなと其神事の狀の全く同じきを以て次に行はせ給へる者也けり此を以ても神今食は六月十二月月次祭に就て天皇の今摺の大御食を聞食す大御政なる事を知べし此事委しく六月々次祭詞條に云るを見る可し古來の識者何れも月次祭と神今食とを別々の事に離して見る故に其說を得ざるなり如何となれば新嘗祭は四時祭式なる中祀の其一なり月次祭と別る時は神今食は小祀にも載されぬ所なり其小祀にも當らぬ物に准ふと云事有なむ

者か能々思ふ可事なり月次祭こそは中祀に載られたる所なれば其に同じきも所謂有る事ならずや　右の如く思定たるを以て今新嘗祭儀を神今食儀を借て注さむと為るなり其は右の儀式に六月十一日神今食儀 十二月進此 前祭三日中務省差定可ニ供奉一内舍人前一日早朝輔丞錄各一人率史生省掌等就ニ神祇官南舍座一 坤部寮預設レ座 點撿次侍從以上就中小齋十人 親王一人納言以上一人參議一人若納言以上不ニ卜食一者定ニ參議二人一少納言辨中務宮内兩省少輔各一人次侍從以上三人若參議以上不足二人者定ニ侍從四人一 于時錄執レ札喝計諸太夫隨喝稱唯訖錄執親王封名就レ廳卜レ之 中務省親王三四人名密封卜之定乙合以上合ニ省掌告ニ卜食者一其參議及外記名簿各一枚太政官召ニ神祇官一喝レ之 還ニ本座一次輔率諸太夫就ニ同廳一卜大臣以下 若有レ不ニ卜食一替之 訖各退出 若有ニ觸障一者立ニ官北門一令レ申ニ此由一 當日平旦主殿寮供浴湯辰刻輔若丞一人就ニ小齋次侍從以上名簿一付ニ内侍一奏レ之月次祭等 ○今云ふ此にては新嘗の幣の畢る所と暫く見て有るべきなり 神祇副若佑各一人 用ニ中臣官一下同レ之 率ニ宮主及長上卜部向ニ宮内省一卜定可レ供ニ小齋一 六位下上 其儀副若佑先進就ニ廳坐一 東面 次宮主以下就坐 南面西上 座定神祇官捧ニ版庭中ニ其兆人參ニ集南門一命婦以下就ニ東舍座一次中務丞錄各一人宮内丞錄各一人就ニ西舍坐一 中務北上宮内南上並東面史生各在ニ其後一 座定二省々掌共持レ版各當ニ丞前一置之訖縫殿寮屬進就レ版可供ニ奉小齋一内侍以下名簿進ニ中務省一其詞云兆人女刀禰乃名簿進止申錄讀申訖丞錄押レ署訖

立ニ出南門一執簿率ニ文武官人一就宮内省版申云兆人乃名簿進止申丞命云進レ之諸司共稱唯轉取最下人摠取進錄讀申訖丞云レ縱諸司共稱唯退出于時宮内錄就ニ神祇版一申云宮内省申久司司乃兆人乃名簿進畢止申副命云八社男八社女御膳司並色々人等次第令ニ參進一錄稱唯復座即告レ丞丞命云令レ喚ニ省掌一錄稱唯即喚ニ史生之名一一聲史生稱唯錄命云喚ニ省掌一史生稱唯喚ニ省掌ニ一聲省掌稱唯進就版丞命云八社男八社女御膳司色々人等次第令ニ參進一省掌稱唯退出仰ニ八社男以下一依レ次令ニ參進一 先八社男次八社女次典膳以下次中務省丞錄内舍人○八社男（ヤチトコ）八社女（ヤチトメ）は高橋氏文に是時上總國安房大神乎御食都神止坐奉云々令ニ火鑽一弖此乎忌火止爲天伊波比由閇天供ニ御食一進大八洲爾像天八乎止古八乎止咩定天神嘗大嘗等供奉始支と見えたる此は其年の新嘗の時に取用ひさせ給るを神今食にも用給ふ事也此も神今食と新嘗祭と何事も相異らぬ一の證なり 訖宮主起レ座西面跪申云立ニ御兆竹一副云立レ之稱唯進於卜部前別折立即申云畢狀還就ニ本座一卜食人等列進就版副命云兆竹折著畢祓淸供奉共稱唯退出 ○兆竹は御體御卜なとに用らるゝ占兆の具なり平兆竹丸兆竹小兆竹等種々に有るなり 其八女及女官立ニ廳上東壁下一其西面丞令ニ退出一事了散去神祇官參ニ神今食院一 謂中和院 内膳造酒主水等司受備供御物參ニ祭所一供奉神祇官受レ下取大膳木工大炊等職寮所ニ進供一神物上擇ニ神部卜部等堪レ事者二人一令ニ辨供一 ○以上神祇官にての儀式なり

戌一刻十二月卅二日一刻一〇江家次第には戌一點と見ゆ乘輿御二神今食院一爲卜丁八人用二卜食物一供二
主殿寮預設二浴湯一供レ之神祇官中臣齋部引二御巫一供二
奉大殿祭一近衛開レ門大舍人叩レ門闈司問二何誰一大舍人
答云御疊參入止官姓名中務親王以下參議以上御門候闈司進就版奏
云御疊參入止官姓名叩門故爾申勅云參入闈司稱唯傳
宣云姓名等參入中務率二內舍人及大舍人一供二奉御疊
事一親王以下次侍從以上相扶供奉左右近衛少將以上各一人相副掃部
寮允以上女孺等神殿敷二御疊一訖退出閇レ門主殿寮供二
御口具一掃部寮賜二女官疊於寢門一十二月縫殿寮賜二衾男女卅人一膳伴
造鑽燧即炊二御飯一安曇宿禰吹火內膳司率二諸氏作部
及采女等一供二其職一料二理御膳雜物一亥一刻薦二御膳一
其行立次第最前膳伴造一人執二炬火一以レ盆懸レ承二其灰燼一次采女朝臣
二人左右前行次宮主一人着木綿鬘襷執二竹枝一次水取連一人執二海老鰭槽一次
水部一人執二多志良加一次典水二人一人執二巾筥一一人執二刀子筥一次采女八
人並執二供神並供御雜物等一次內膳司高橋朝臣一人執二鰒汁漬一次安曇宿禰一
人執二海藻汁漬一次膳部六人並執二供神並供御菜物一次酒部四人執二御酒案一神祇
祐以上一人史一人與二宮內丞錄一相双立於戸內撿察
御膳次第四剋撤二御膳一內膳主水官人各一人進申云夕
御物乎供奉宮內丞命云縱ヨシ寅一剋供二曉膳一其次第如
レ初四剋撤御膳近衛開レ門大舍人叩レ門闈司奏云御疊撤
止官姓名叩レ門故爾申勅云參入闈司稱唯傳宣即隨參
入撤二御疊一卯一剋換二御服一還二御本宮一訖祭二大殿一訖
辨大夫率二小齋人等一到二宮內省一就二解齋座一坐定辨大
夫喚官掌二聲稱唯趍二立庭中一辨大夫命云喚二宮內省一
官掌稱唯趍出喚レ之錄稱唯趍立辨大夫命云御飯早速
令レ賜レ錄稱唯趍出喚レ之膳部五六人共稱唯錄仰云賜二
御飯一膳部共稱唯大膳進屬以下共起先賜二神祇官一次
分頭賜二辨大夫以下一訖屬趍立申云御飯賜了諸司共拍
手三段前稱後唯酒盞三行亦拍手一段各依レ次散去と見え
たり猶此事江家次第にも出たり彼此校合せて曉る可き爲に下に其全文を引て注す可し
但貞觀と當時と甚しく時世も後れたれば全くは同じきも有り全く同じからざるも有り　神今食次第に云く
戌時御二腰輿一幸二中和院一內侍司印櫃並鈴韓櫃不持候
如常但大刀不候〇頭書云內侍司印櫃北山云內侍所印櫃以レ此稱二契櫃一之由見二天德四年御記一腰輿自二里內一行幸時駕葱華也小
忌公卿供奉諸衛不レ稱二警蹕一乘輿出二陰明門一之間候二
大忌幕一王卿北面西上及諸司諸衛皆立二各幕前一比レ入二中和
門一左右近衛各一人趍入自二掖門一開二中門一御輿輟二於
神嘉殿南階上一王卿立二西炬屋南方一西宮記云列立炬屋北邊云々可尋〇頭書云
中門神嘉殿之南中門也天皇下二御輿一入二南廂西戸一親王以下着二小
忌座二西屋北壁前設二親王座一南面其南相對設二納言參
議座納言西面一其南絕レ席設二辨少納言中務輔宮內輔座一

西面若有二五位内記一者著二此列一侍從東面東廂設二外記史中務丞錄内記内舍人等坐一造酒司候二巽角一南妻張レ筥爲二侍從厨家候所一〇此屋北壁前より以下九十一字今本に細字なるを一本に據て本行に書改めたる所なり 近衞開レ門近仗候二南階東西一右東主殿寮儲二御浴於寢側一縫殿司獻二天羽衣一〇頭書云天羽衣御衣也 供神物辨備畢近衞開レ門大舍人叫門闈司奏内裏式有二勅答一今儀之中務丞可レ置レ版而近代不二必置一 近仗陳二階下一小忌親王以下五位以上出レ自二右掖門一立二南中門西掖御棚東邊一帶劔者解レ之只把レ笏還著時又帶レ之衞府人不レ脱レ被 大舍人叫レ門闈司奏今無勅答 即傳宣後親王取二打掃筥一〇頭書云打掃筥掃部式云打掃布二條長一丈三尺柳筥二合納拂布一料 納言參議昇二坂枕一納言東參議西〇頭書云坂枕式云白布一端坂枕一枚長三尺廣四尺 辨少納言以下侍從内舍人内豎大舍人等昇二御疊一參入〇頭書云御疊神座南枕敷レ之先一丈二尺帖其上六尺疊四帖南方二帖有レ裏其上九尺疊七帖其上八尺疊敷レ之九尺疊一帖御衾東面二打掃筥一也坂枕置二八重疊下南方一也 掃部官人四人相副參入左右近衞次照脱二兵具一昇開二神殿戸一親王以下昇レ自二南階一跪二於戸外一掃部官人候二戸内一傳取供レ之此間王卿以下轉立二階東西一王卿立西掖 供畢引還各復二本座一次將退下近衞開レ門縫殿司供二御寢具一〇頭書云御寢具御衾御單御扇御履等也内侍持參置レ之 亥一尅采女申二時至一供二御膳一儀見二内裏式一〇頭書云供二御膳一儀如二大嘗會神膳一中或亦有二異同一 丑一尅采女奏レ時供二曉膳一訖采女申二御膳平供奉之由一勅答云々近衞開レ門闈司奏レ之撤二御疊等一如レ初王卿人レ自二西掖門一經二屏幔南一列二立炬屋南一天皇易二御服一還二御本宮一〇頭書云御上神膳之時帛御裝束夏冬生縫殿司獻レ之御饗膳並行幸還幸之時帛御裝束夏生冬練内藏獻レ之 乘輿出二中和門一之間左次將問之大忌王卿侍從稱レ名御二南殿之後小忌王卿名對面如レ常未二還御一之間神祇官供二奉御殿祭一明日所司供二解齋御手水御粥一其後不レ令二小忌一侍臣等參入と見たり今此を此所に引出るは上に擧る儀式の神今食儀は新嘗祭儀に當り下に載る新嘗祭次第は此神今食次第と少かの異同こそは有りけれ大較等しきを示さむ爲に出せる所なれは熟々相照して上に注る事共を曉る可也 此を以て上に引る儀式の新嘗會祭儀は豐明節會儀にて神今食儀は新嘗祭儀なる事を明らむ可し世人新嘗祭と新嘗會とを混同して心得るかたも有ぬ僻説耳多かり江家次第新嘗會裝束の頭書に新嘗會毎年十一月中辰日行レ之豐明節會是也正子日新嘗ニ祭致日新嘗會也大嘗會時辰ノ巳日午日三箇日會也と有るを以て知る可し 江家次第新嘗祭中院儀條に云く上卿奉レ勅仰二外記一催二諸司一仰二裝束司一奉二仕裝束一前一日令レ卜二殿上侍臣令一不レ差二小舍人一遣二神祇官一出納書交名 藏人頭御厨子所別當並可レ供二奉御湯一殿上人不レ入二卜串一交名卜近代藏人 或中務省就二神祇官一令レ卜二小忌侍從以上一云々當日輔若丞傳二内侍一奏云々〇前一日以下の事儀式神今食儀には前一日早朝中務輔丞錄各一人率二史生省掌等一詣二神祇官一南舍座點二檢次侍從以上就レ中小忌十人一云々と見えたり 當日早且令レ卜二供奉内侍女藏人等一藏人書二女藏人交名一云々至二内侍一不レ卜由見二西宮記一以二女官一夾名或諸司六位下今日同卜云々 遣二内膳司一以二兆人簡一付二内

侍介ス 女官ニ舉返給（内侍不候者主殿藏人）供忌火ヲ南殿ニ 云々（早日戌
兢殿司供替忌火（在仁壽殿露臺下其後不昇殿）行事藏人令頒小
忌於殿上侍臣官行事所頒主卿辨少納言以下料（以上新嘗
會中百日蔭鬘）藏人催御物等取物内豎女官等仰内藏寮令
持御物設御輿於日華門（掃部敷下敷布設之）戌一點天皇御
南殿（着帛御衣無文純方玉帶）近衛次將等向日華門（左近出自敷政門右近自階下率御輿
長等向日華門）內侍持璽劒等立左右 小忌王卿列庭（東邊）
倚御輿（左近立右方右近立左方公卿中將若大將爲小忌離列副輿）掃部官人敷筵道女
官豫持大刀契櫃置殿西南緣（四條記契櫃并鈴櫃持候如常但大刀不候云々貞信公日傳亦大刀不候云々）左右近將監昇殿昇下（大舍人持云々）主殿官人取御輿
帊（判官以上）內侍進御劒乘御（諸衞不稱警蹕）內侍進御璽東豎
取御挿鞋 御輿長等持御輿 次將等立直王卿前行
下臈爲先（納言少將言外記等在其前近例不供奉其列）女官降自西階扈從 御藥陪
從所衆並御厨子所等依例祇候 經月華門出陰明門
大忌王卿立幕北（西上北面件幕在中和門東面南披先是大忌王卿入自待賢門經春華門着件幕或自左仗經階下向之衞府公卿皆帶壷胡籙大將從弓箭使別由牟新鈔四條記云諸司諸衞皆立幕前件公卿座對盃少納言大臣參時雖四位取纛等）入御中和門 左右近衞各一人開中門（趁入自掖門開之）小
忌王卿立西炬火屋北（北上東面四條記列立於炬火屋南云々）倚御輿於卿
嘉殿南階（昇御輿於階簀子由見九條殿天慶三年記并四條記等近代御輿居於階下地下御此間左近陣右右近陣）
左寢儀降輿 入自南廂之西戶 母屋南面戶御西隔

大床子（御輿居西廂）小忌王卿着西屋座（西屋北壁副設親王座南面相對設公卿參議之座納言西面在第二間其南少納言之座西面四間中務宮內輔五位同記同着此座永侍從東面東廂北三四間設外記史中務丞錄內記大舍人等之座造酒司候異角南妻張幔侍從厨家候所件等各使等同着酒司坐東上北面以上侍從厨家備爼上）納
言以上用東北戶 參議以下自東南戶出入（參議坐末可着）侍從
若納言不卜合者 參議二人着納言之座 行事若事
可及大忌差外記令申 神嘉殿東南有西間屋（南方神其
官辨備供神事中間大膳計度其貌如中取雨積神供神物北方宮內采女祇候）南門前立臺（降可立門中）
坐 主殿寮供御湯 縫司供天羽衣 次御湯殿 次闈司
就版（無勅答）開門 近仗陣階下 小忌五位以上掃部官人
執神坐等參上（納言執打掃筥參議與辨昇東枕辨在西云々白敍昇御貼四人昇短帖六人昇長貼云々以上出自右掖門立南中門西掖即衞東邊先洗手帶劍者解之只近衞府人解弓箭劍等不放衣假揩笏）左右次將各
一人脫兵具昇開神殿南戶 納言以下昇自南階
跪於戶外 掃部官人候戶內（神坐一本）傳取供之 此間王卿以
下暫立階東西 公卿立西 供畢引還復本坐 次將退
下 近衞閉門 內侍率縫司供寢具於神坐上退出（御衾也）
亥一剋采女付內侍申時至 縫司供神事御服 內藏司
供幘（案式可令引廻御顱而引廻御巾子給）主水供御手水（女藏人傳供近代頭藏人供之）寢
儀開中戶入御東方（入御之後閉戶件戶內事攝政見之關白不見云々）經神坐
北邊着神坐以東御坐給（已後事等在別）事畢更儀還御所
內侍撤寢具 丑一刻采女奏時（作法皆如夕）采女申御膳辛

供奉由一（進二殿戸西戸一申レ之詞曰阿佐女主水夕暁乃御膳平々供奉止申）勅二答與之一次改二御衣一近衛開レ門闈司奉撤二御帖等一進二初儀一可レ知レ之王卿入レ自二西掖門一經二屏幔南一引二立炬屋南一寅一尅還レ宮出二中和門一問左次將問レ之（誰曾）大忌王卿侍從稱レ名御二南殿一後次將問二名謁一（誰々加侍留）小忌公卿名謁未二還御一間神祇官供二奉御殿祭一明旦供二解齋御手水御粥等一其後 大忌侍臣 等參入と見えて上に引る神今食次第に少も異なる所無きなり公事根源抄神嘗祭條にも神嘗祭は神今食に同じ葉手の數十三なり其外は替らす是は今年の初稲を神に奉らせ給ふ義なり云々と見え同抄神今食條に大較は大嘗會の神饌の義に同じ云々伊勢天照大神を勸請申されて天子御身自神饌を供せさせ給ふにや」と見えたり此等を以て月次（神今食）の式は新嘗祭に比按せて其委曲なる由を知べく新嘗祭の儀は神今食に比按せて曉る可き者なりかし（同抄神嘗祭の祭字を今本二所共に會に作るは誤なり今は一本に依て改引つ然るは上に云る如く新嘗祭と新嘗會と其差別有るを以てなり）右の新嘗祭次第の細書に「已後事等在レ別」とは 公事根源抄神今食條に中和院に行幸成て神嘉殿の大床子の御坐に着せ給ふ御湯の後內侍時を申す內侍髮上て神殿に參て寢具を供す是より前左右近衛府殿の東西に陣を引き開門闈司など竟て上卿以下神殿の前に列り立つ左右近の中將各一人進て靴を脱ぎ弓箭を解て南ノ戸の左右の帳を褰く打拂ノ筥坂枕などを上卿參議辨少納言外記史次第に是を供す內へ取入ぬれは掃部頭參て神座を敷く南枕にして先一丈二尺の疊其上に六尺の疊四帖枕の方二帖は裏有り其上に九尺の疊七帖其上に八重疊敷く九尺の中一帖を少か東に引出て打拂ノ筥を置く坂枕は八重疊の下に枕に敷く內侍參て御衾を八重疊の上に奉る御檜御扇側に置て御沓御後に置也內侍退きて神殿に入御有り神座の東に巽向に半疊を敷て御座とす主上御面を正しくして着せ給ふ此間の儀は人知ぬ事共なり神の食薦（スゴモ）御食薦など敷く神膳を供せらるゝ儀有り白黒の御酒參て本柏にて注く直會の御飯御酒參りぬれは宮主祝と申す御手水は事始らぬ前と事終てと二度有り」と有る此等の事を云る也（但行幸無き時は神今食新嘗祭共に神祇官廳にて行はるゝなり此事右の二書に詳なる所なり）脩職員令義解に大嘗謂下嘗二新穀一以祭中神祇上也朝則諸神之相嘗祭夕則供二新穀於至尊一也と見えて朝には神祇の相嘗夕には至尊の新嘗なる由なれと卯日中和院にて行はせ給ふは神祇の相嘗にて至尊の聞食す新嘗に非ず辰日豐樂

院にて行はせ給ふは至尊の新嘗にて臣下にも昨日の直會を賜ふにて神祇の祭祀には非ず又其稱をも新嘗祭と云ひ新嘗會と云別たるゝ事なるを熟思ふに卯日は天皇の新嘗聞食す爲に先神祇を祭祀らせ給ふ事なるが故に新嘗祭（ニヒナメマツリ）なり辰日は神祇に新嘗を供らせ給ふに就て天皇の聞食し又臣下にも賜ふ事なれば唯に新嘗會なり然れども其は中古よりの御定にこそは有けめ上古には決て同じ卯日を用させ給へるから義解の文の如く朝則神祇之相嘗祭夕則供ニ新穀於至尊一也と云る狀なる事御世々々の正史の趣にて著明なる所なり（若て右の豐樂院にて行るゝ新嘗會の狀など其々後世めきたる事將交らずしも非ずなむ有る）○江家次第に云く中和院神今食御裝束（新嘗祭幷十二月神今食同）前二日令ニ左右衞門府掃ニ除神嘉殿前後庭並南門前東西一又令ニ右近衞府掃ニ除以南修明門以北一當日神嘉殿七間內中央母屋三間塗籠內上張ニ信濃布承塵一其內敷ニ滿廣筵一南北東西戶懸ニ絹幌一（如小一條大將圖者東西一丈二尺五寸南北一丈七尺可ㇾ爲ニ神座一歟仍左右一間餘也）西塗籠二間內上張ニ同布承塵一其北南戶懸ニ同幌一其中央東西行立御床一（白木）其上敷ニ白端御疊一西廂東隔ニ小戶一懸ニ同幌一其內敷ニ滿弘筵一北戶外庇內敷ニ小筵二枚一爲ニ御裝束所一（御裝物所在庇西第二間歟近代在ニ第一間一）西庇戶內供ニ御湯槽御床子等一御床子敷ニ小疊一御湯槽（東西妻）床子二脚並立ニ其北一（東西）妻御槽南又置ニ打板一枚一（白縁小帖）伴御湯槽（無ㇾ）杓（御湯殿西壁設ㇾ樋傳ニ御槽一樋口壁外居ㇾ斗御船能登生絹）執柄被ㇾ候南庇西第一間一（同庇歟不ㇾ見可ㇾ尋也其座可ㇾ敷ニ白端疊一面近代用ニ兩面端ニ可ㇾ尋）東塗籠二間內敷ニ美濃長筵三枚一南戶懸ㇾ幌爲ㇾ供ニ奉神事一內侍以下候所ㇾ（東塗籠二間撤ニ西宮抄一供奉采女坐有ニ其謂一內侍可ㇾ候ニ北廂一歟）中央塗籠北戶東西外掖對坐敷ニ葉薦一爲ニ女官候所一（中央塗籠北廂可ㇾ爲ニ內侍以下座一）殿西廂南面中戶東掖引ニ廻班幔一爲ㇾ供ニ奉御湯一主殿寮官人候所ㇾ灯樓八本預儲供ニ奉御在所並神殿內一（主殿寮供奉）伴白木燈爐在ニ神殿並御所四角一（立ニ白木床子ニ其上居ㇾ之）殿後屋南庇東西行結ニ管貫一引ㇾ幔其內傍ㇾ幔敷ㇾ坐殿上侍臣着ㇾ之坐東御樂隣從坐西御廚子所自ニ殿東西廂南頭柱一引ㇾ幔各南行與ニ東西舍南頭柱平頭ニ各東西折（西幔東折東幔西折）當ニ殿中央一曳ニ竟（ヒキワタス）班幔一內東西相對搆ニ短帖（ヒキトマ）一（立ㇾ斗木工寮苫菅掃部寮並炬火處）西舍身屋內設ニ小忌親王以下弁以上坐ニ親王南面納言西面參議東面（以上以ㇾ机居ㇾ饌）但參議差南退着（以ㇾ北爲ㇾ上）弁少納言公卿坐末絕ㇾ席對ㇾ坐（以大盤居饌）同屋東廂敷ニ外記史座一（西面北上以ニ大盤一居ㇾ饌）南妻張苫木工掃部等供ㇾ之其內爲ニ侍從廚家候所一東舍內設ニ供ニ奉祭一大膳大炊等官人並采女座ニ南門外西掖東西行立ニ五丈幄（ツカヤ）一宇一其內敷ㇾ坐爲ㇾ小忌少納言弁外記史內記等候ニ天臨一之

間候所ト當ニ同門南方東第一柱南北三許丈東行至ニ于中和門南掖ニ結ニ管貫懸レ幔中門外南北行立ニ五丈幄一宇ニ其内四間設ニ大忌親王公卿坐ニ（南北行對坐親王西公卿東）其末設ニ弁少納言坐ニ（西上北面）其南方東西行懸レ幔其南設ニ弁少納言坐ニ爲ト候ニ上卿ニ之間候所ト次南設ニ外記史坐ニ次南敷ニ外記官史生坐ニ（東西對坐）其南敷ニ官掌召使坐ニ（北面東上）並官厨家備ニ饗饌ニ左右近小忌幄在ニ神嘉殿前東西ニ（左西右東）殿東立ニ內藏幄ニ中門南左右相對立ニ左右兵衛幄ニ（左西右東）左近衛在ニ中和門北掖ニ右近衛在レ南相對其北左兵衛幄右兵衛陣用ニ本陣ニ云々と見えたり（但或に蟇子冬といふ人の校正せる本に依れり今本と全く同じからず其心して見るべき者なり備此も神今食新嘗祭相易らぬ證と爲べき文なり）〇大嘗祭の事は故翁（說大祓詞後釋附錄大嘗祭條）に凡て大嘗新嘗は天皇の聞食すを主と爲る事にて神に奉給ふも天皇の聞食むと爲るに就て先奉給ふなり故に古書に大嘗をば聞食と耳云り是天皇の聞食すを主と爲る故也然れば神々に幣帛を奉らせ給ふも天皇の大嘗を聞食むと爲るに依て奉給ふにて此祝詞は其由を申させ給ふ祝詞にこそ有れ神に大嘗を奉給ふ祝詞には非ず大嘗に依て幣帛を奉給ふ祭と云事なり抑世人大嘗新嘗は唯神に奉給ふを耳主と心得たるは古意に非ず古書共に此事を云る詞を心を著て能見ば曉る可し即此祝詞に皇御孫命乃大嘗聞食牟爲故爾と有にても知べし」といはれたるは實に然る言なり（新嘗祭と新嘗會との差別已に上に辨たるが如し）中臣壽詞に皇御孫尊波高天原爾事始天云々天都御膳遠長御膳乃遠膳止千秋乃五百秋爾瑞穗遠平介久安介久由庭爾所知食止事依奉云々獻留悠紀主基乃黑木白木乃大御酒遠大倭根子天皇我天都御膳乃長御膳乃遠御膳止汁仁毛實仁毛赤丹乃穗仁所聞食豆豊明仁明御坐豆天都神乃壽詞遠稱辭定奉留皇神等母千秋五百秋乃相嘗爾相宇豆乃比奉利堅磐常磐爾齋奉と有にて著明き所也然れども祈年祭（伊勢大神宮）詞に荷前者皇大御神能大前爾如横山打積置氐殘乎波平聞食と有る荷前は同祭（祈年神）詞に初穗乎波千穎八百穎爾奉置氐云々と云る其と同事なれば必上に引る令義解の文の如く朝には神祇に奉り夕には至尊の聞食すにて有べき者なり此を以て按ふに古事記書紀に見えたる高天原なる天照大御神の大嘗は彼保食神の御身より始て顯見蒼生の食て活べき物の成れるを嘉し給ひて大御身自其新稻を聞食すより及びて自餘の神等に進らせられたるに決きを皇御孫命の大朝廷にしては先天照大御神を始奉て天社國社の皇神等に相嘗を奉ら

せ給ひ然後に直會の新嘗は物爲させ給ふ御事なりけり（但諸社へ秋祭の新嘗を奉らせ給ふ中にも伊勢大御神の大宮度會宮の神嘗は九月に在る事は殊に重みし奉給ふ御擧なり又四時祭式九月祭條なる伊勢大神宮神嘗祭條の次に御巫奉齋神祭御門巫奉齋神祭座摩巫奉齋神祭生島巫奉齋神祭の三條有て其終に右御巫以下所祭神並於ニ神祇官齋院ー祭レ之と有る此は神名式に神祇官西院坐御巫等祭神二十三座と載られたる甚も此事無き神等に御在すが故に此時に祭らるゝ事なり若て十一月新嘗祭に預給ふ大社三百四座の中に右の伊勢の兩宮及び神祇官に坐神等も其列に祭られ給ふは彼は彼此は此にて古より有來る例なり）然れば踐祚大嘗祭毎季新嘗祭共に十一月中卯日に行はるゝ神事にて翌辰日に至尊の新嘗にて臣下にも賜ふ御事なりける（此事已にも云れど尚能思ひ誤る人の爲に髄に又も云るなり）偖大嘗と云大は殊に神今食等より事の大(イミ)しく有る故に添たるなり新嘗といふも大嘗と同事ながら此稱は朝廷ならぬ下々にも云事なれとも下樣の物爲る事に大嘗とは云ぬ例なり（天若日子が新嘗せる事記紀共に載て人の知れる如し常陸風土記には福慈神筑波神の新嘗爲給ふ事見えたるなど天皇の御事に局れる稱ならぬを思ふ可き者なり）記傳八六丁に意富爾閇の爾閇は新饗（ニヘアヘ）を約たるにて新稻を以て饗するを云名なり其は萬葉十四（下總國歌）に爾保杼里能可豆志加和世乎爾倍須登毛曾能可奈之伎乎刀爾多氐米也母（顯昭袖中抄十六に可豆志加和世とは下總國に葛飾と云處有り其處の早稻を云なり爾倍須登毛とは田舍に始て早稻を苅て物爲て里隣の者集て食をは爾倍須といふなり云々と云り歌意は彼饗を爲る節は甚しく齋愼て門をも刺て外人をも固く入ず然れども哀しく思ふ男の來なば門外に立せては置たらし內へ入てむと志の切て深き山を咏る也書紀に齋庭之穗と有も新嘗は甚しく齋愼む故に云なり家特家集と云物に我宿に早田刈上て爾倍すとも君が使を唯には遣し」と有は右の歌を直したる者なり○今云常陸風土記に福慈神筑波神の御祖神の國巡給ふ時に福慈神に宿を乞給へるに今夕は新嘗の由を申給ひて宿し奉らざりしかば筑波神の許に往坐しけるに今夕は新嘗の節なりと雖も他人こそは有め御祖神の來坐るを何てかは宿し奉らざらむと申て宿奉れりし狀を以て其齋愼める事共の大凡ならぬ趣見えたり）と咏る如く元は朝廷耳ならず下々まで並（ナベ）て爲事なり又後世には專神に祭る事と耳思ふめれど然に非ず神にも奉り人にも饗へ自も食ふ事也（贄苞苴（ニヘニヘイケニ）なども本此新嘗より轉れる名なり）と見えたるか如く今も民間にて作初穗と云を必先神に奠り家內の者共は更なり相互に親族を饗し合ふ事の有るは必此遺例なり皇神の道は如此く天下百姓の心に在て古より今に改易らざる者なるを人は如何に見るらむ危し（世人如此き神髓の道有て民心に存るを知らず外籍に禮を求ると云は拙しとも劣しとも云に堪ざる愚なる事なるぞかし）○幣物等の事は四時祭式下に新嘗祭奠幣按上神三百四座（並大）社一百九十八所坐別絁五尺五色薄絁各一尺倭文一尺木綿二兩麻五兩四座置一束八座置一束楯一枚槍鉾一竿社別庸布一丈四尺裹葉薦五尺前一百六座々別幣物准ニ社法ー但除ニ庸布ー右中卯日於ニ此官齋院ー官人行レ事（諸司不ニ供奉ー）但頒レ幣及造ニ供神物ー斯度中臣祝詞斯准ニ月次祭ー（○新年祭は宮にて行るゝ所右三百四坐の神々の外に不レ奠ニ幣案上ー新年神四百卅三坐及國司祭新年神二千三百九十五坐をも祭らるゝ事なるを月次祭と此祭と其二は省かれたり踐祚大嘗祭の時と雖も天下の諸社に遍く官幣を進らるゝ事は無き古例と通えて大嘗祭式にも卯日平明神祇官班ニ幣帛於諸神ーと有る細書に謂新年奠幣案上者と記されたり神名式に大四百九十二坐と有て三百四坐並預新年月次新嘗等祭之案上官幣と區別たるをも思べし）忌火炊

殿祭五色薄絁各四尺倭文二尺木綿五兩麻一斤五兩鍬四口米酒各四升鮑二斤堅魚海藻雜海藻各四斤鹽二升瓶四口坏四口食薦一枚庸布二段右新嘗祭時先新造炊殿依件鎭祭宮主行レ事其舊殿者壞却給二宮主一○大嘗祭式に所謂大炊屋なる可し同式に大嘗御饌祭炊殿鎭等之例與二尋常新嘗祭一同と見えたり齋宮式なる新嘗祭の下を見るに亦新造炊殿祭新造炊殿忌火庭火祭等の事有て此に粗同じ此祭を新稻を炊きて神に奉給ふが主なる故に殊に此等の祭は有なり神今食此に同じ供新嘗新紵一丈二尺絹二丈二尺絲四兩調布三端一丈晒布一丈二尺細布三丈二尺木綿三斤十兩䤾柄御刀子二枚長刀子短刀子各十枚筥十四合麁筥二合明櫃三合御飯並粥米各二斗粟二斗陶甕五口平居瓱六口都婆波酒垂各四口匜八口水埦八口洗盤六口菌坏廿口多志良加四口鉢八口叩瓮四口臼二口土片埦二口盞十口小坏十口高盤廿口火爐二口陶坏八口案十二脚切机二脚槌二枝砧二枚槲四俵匏十八柄小匏二柄日蔭二荷魵鰭槽二隻油三升內膳司供二雜味物一右依前件其御贖大殿忌火庭火等祭新並准神今食○四時祭式六月祭條に御贖祭云々始レ從二六月一日一至二于八日一日別御巫行レ事と有に同じ但此は踐祚大嘗祭の度に當ては川上に臨幸して御禊有と同じき心ばへなりと有り○新嘗の雜事は臨時祭式に云く凡新年賀茂月次神嘗新嘗等祭之前後散齋之日僧尼及重服奪レ情從レ公之輩不レ得レ參二入內裏一雖二輕服人一致齋並散齋之日不レ得二參入一自餘諸祭齋日皆同二此例一と有り類聚三代格なる寛平五年三月二日の太政官符に應下殊加二檢察一敬中禮四箇祭上事と有る符文に右撿二案內一二月祈年六月十二月月次十一月新嘗祭等者國家之大事也云々と見えたる此を以て右の四箇祭の殊に重かりし事を知べし四時祭式に右の四箇祭を中祀と記されたるか神祇令には三日齋爲二中祀一と見えたり然れども致齋散齋に拘らず當月の一日より御齋有る事と思ゆ禁秘御抄に十一月中卯日新嘗祭自二一日一至二其日一辰日解齋神事樣同二神今食一と見えたるか二季月次神今食條にも自二一日一至二十一日一也十二日朝解齋仍自二一日一僧尼重輕服等人不參云々中祀作法皆同レ之と有るを合せて考ふ可し然るに同抄二月四日新年祭條に前後齋白河院仰也佗說自二一日一不レ用レ之と記し給へるを階梯に引る或書に天仁二年二月十一日今日院仰云新年祭齋三日也從二二月一日一有二齋之條一不レ可レ然云々と有は白河院天皇の御心にて抄に中祀作法皆同之と有にに違ひて省略（コトツキ）たる御事なり又臨時祭式に云く凡新年月次神今食新嘗等祭斵楯板置座木等之類仰二五畿內諸國神戶百姓一令レ採二進之一云々○月次神今食とは有れども別々ならず月次祭に屬て神今食は行るゝにこそ有けれ四時祭式を閱るに楯板置座木は月次祭料耳記されたり○神事の沿革を云む其は先神代紀なる御天降の所に天照大神勅曰以二吾高天原所御齋庭之穗一亦當二御於吾兒一と見えたる齋庭は天宮の新嘗屋の事

なるを其を事依し奉給ふは其齋庭に在して瑞穗を聞食せと也中臣壽詞に皇孫尊波高天原仁事始天豐葦原乃瑞穗乃國遠安國止平久介所知食天天津日嗣乃天都高御座仁御坐天天都御膳遠長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穗遠平久介安久介由庭仁所知食止事依志奉と有る此なり此事已に此卷首にも委しく注へれども再用有て此にも云也其時大御神の天璽を授賜へる文に吾兒視ニ此寶鏡一當レ猶レ視レ吾可三與同レ床共殿以爲ニ齋鏡一と見えたる如く天宮より筑紫宮に天降坐て初國所知食す新世に始て此顯國にて出來る瑞穗を齋庭に所聞食すに就て皇大御神を始奉て天社國社の神等を相嘗に祭らせ給ふ然れども古語拾遺橿原宮段に當ニ此之時一帝之與神其際未遠同殿共床以此爲常と有る如くなるを況て御天降の初などは甚近かりけむ事云も更なれば同殿に坐す皇大御神に奠らせ給ふ御床にて共に皇御孫命も聞食けむと所思ゆ其は大同本紀水取文に皇大神及皇孫命天降坐時云々天忍石乃長井之水乎取八盛氐誨給久此水持下氐皇大神之御饌爾八盛又皇孫尊御饌爾八盛獻云々と有る趣を考ても曉る可き者也然れば中世以來より謂ゆる神事と公事とを混同して共に別々に爲させ給はざりしなり拾遺にも右の齋庭之穗云々の詔命を記せるに續けて宜下太玉命率ニ諸伴神一供中奉其職上如中天上儀上と記されたるは古傳に根據て深意有る也けり然れば新穀を神に奉らるゝ神事と天皇に奉る公事とを離ちたるは決く水垣宮の大御代也其は御紀六年條に先是天照大神倭大國魂二神並ニ祭於天皇大殿之内一然畏ニ其神勢一共住不レ安と有なむ神と帝と其際遠く成れりし初なれば也然れども其故實に非るか故に祝詞には今年十一月中卯日爾天都御食乃長御食能遠御食登大嘗聞食牟爲故爾云々中臣壽詞には今年十一月中都卯日爾由志理伊都志理持恐美恐美母清麻波利仁奉仕利云々と上古の任に十一月中卯日に聞食す事と爲たり此祝詞の高千穗宮にて成れる由は祈年祭の下に委しく說るが如く中臣壽詞將其と同じく出來れる所由の中臣壽詞考に別に說たるが如し職員令大嘗の義解に謂下嘗ニ新穀一以祭ニ神祇一也朝諸神之相嘗祭夕供ニ新穀於至尊一上也と有るを思ふに十一月中卯日一日にして事足れる狀なり今此を按ふに卯日平明に幣を諸神に頒るゝ時に神祇の相嘗は進られ然後に天皇の新嘗は有けるなり但十一月上卯日に官幣を進らせ給ふ七十一座の神々の相嘗祭とは其唱同じく爲て事異なり此は神祇令に仲冬上卯相嘗祭と有る義解に神主各受ニ官幣一而祭と有る如く幣物を受賜はり其社にて祭る事なり故思ふに朝廷の御嘗に預給ふ可き神なるを其社にして令祭給ふなり或云四時祭式に此祭の幣物社毎に異なる中に酒稻幾束と云事のみ社毎に悉有て酒料稻者用ニ神稅正稅一と有を以て思ふに新稻を以釀れる酒を嘗るゝにやと云るは實然るなり今此を判ちては上卯なるは相嘗祭と云べし其は天皇の新嘗聞食すに就て其相嘗に祭給ふ心を以て其社へ幣帛を賜り祭らるゝ所なればなり中卯なるは相嘗と云べからす其は新嘗祭と云の本立たる名目なればなり儀式延喜式及其餘の諸抄の較略を

閱るに卯日平明に頒幣なり其夜亥刻と其曉寅時とに神膳の儀式有て其辰日なむ至尊には供るなり此等の事は已に上にも各本書を引て云ひ又人も知る所なれば委しく記すに及ばず然れども當時の取捨こそは有けれ其嚴重なりし事如此くありしなり然るを中古より世の亂も打續て有ける故にや次第に省略(コトソ)きたる事なむ多かりける康安二年に記せる宮主秘事口傳抄に云く中卯日 新嘗祭夕膳之儀亥 時曉膳之儀寅時也〇此は上に云る例なれば怪しからず但近代上卿參議辨少納言以下參集之後一度被レ行レ之〇例に違へり內膳司神膳並諸 司所役等催具に〇上に引る江次第神嘗祭條合せ讀べし次采女供神膳次不撤以前宮主向二巽方一二拜申二詔戸一〇是盡く事者(コトツキ)たる事也新嘗祭式に右中卯日於此官齋院官人行レ事と有て此は新年月次の例の如く神祇官に於て頒幣の事に依れる詞にして中臣の宣る宣命なり神主祝部の其を奉(ウケタマハ)りて其社に幣物を納る時にこそは祝詞なりけれ此處にては宣命なるを宮主の巽方に向て詔戸を申と有るこそ心得ぬ向巽方は神祇官を指て向ふならめども此は供二神膳一の詞ならず頒幣の詞なる物なや

集侍神 主祝 部等 諸聞食止宣高天原爾神留坐云々皇御孫乃宇豆乃幣帛乎明妙照妙和妙荒妙爾備奉旦朝日豐榮登爾稱辭竟奉久乎諸聞食止宣事別忌部乃弱肩爾云々事不落捧持旦奉止宣〇以上此大嘗祭詞なり少か異有り本文の其所々に云べし倍同書々入に今年乃十一月乃中卯日依レ例天朝御食乃夕御食遠長御食乃遠御食登新嘗聞食牟爲爾掛毛畏伎皇神達乃宇豆乃比奉給布此口遠大直日神直日仁受二免給天天皇朝廷寳位無動久夜守日守仁守幸陪天千秋乃五百秋乃茂御世爾平久安久常盤堅盤爾守仁給陪止恐美恐身毛申と有て次に此祝詞參入記紀分明也子孫可レ用レ之應永十年十一月廿四日記之今日此祭也神祇大副卜部兼敦と有今思ふに頒幣の事も無きに此詞を申せらむは何とかや心落居さりし故に其頃より如此くは省れるなる可し次宮主拍手兩段次采女撤二神膳一次有二夕膳儀一如二曉膳一但近代只以二一度一合通用歟次事畢八重疊者宮主卜部取レ之と見えたり如此其儀式に至ては其時の宜しきに從はせ給ひて正しく古風ならぬ事も且は有と雖も大旨神代より有來し事の上の少なる違目にこそは有けれ總ては甚々愛たき天津宮事の天地と永く久しく傳はれるなり天照皇大御神の御事依しの尊き御事仰ぐに猶餘有りかし

集侍(ウゴナハレル)神主祝部等(カムヌシハフリトモモロ〱)諸聞食止宣(キコシメセトノル)

新年月次祭例此に同じ但新嘗祭式に諸社の頒幣を記されたる終に右中卯日於二此官齋院一官人行レ事諸司不供奉と見ゆるを以思ふに新年月次等の如く大臣以下諸司の共に預るにては無く唯神祇の官人耳にて供奉れりし者なり但右頒幣に預給ふ神々の神主祝部の參集する事に於ては右の二祭に異ならず倍新嘗祭は新年祭に謂ゆる四箇の大祭なれば何れを勝れりとし何れを劣れりと爲へからぬ重き神事なるを唯此頒幣の事に至ては省略(コトソ)きたるなむ審しき事なりける儀式大嘗祭條にも卯日平明神祇官班幣帛於二諸神一謂二新年祭案上神一と有て諸司の供奉る事無し依て思ふに大嘗新嘗共に神

膳を供せらるゝが本にて頒幣は却て末なるが故なり然れば新年月次祭などの頒幣が本なるにて宮中の神事の末なるとは同じ中祀たりと雖も少か異有る者なりけり

高天原爾神留坐皇睦神漏伎神漏美命以天社國社登敷坐留皇神等前爾白久

文例新年月次等詞に同じ但彼二詞には神漏伎命神漏美命以と有を此詞に神漏伎の下なる命字無し佗詞の例此に同じければ此を以て正しと爲へきに似たりと雖も其實は彼が衍なるにも非ず此に脱たるにも非ず同じ事なり（此事已に新年祭條に委く辨たり）○天社國社登敷坐留を新年月次共に稱辭竟奉と有り但彼如きは此方より天社國社を定めて齋奉る由なるが此は其天社國社と神等の鎭り在す方を指て云るにて主客の相違有り（然れど事狀に於ては異なる所なし風神祭詞に皇御孫命詔久神等乎波天止國止忘事無久遺事無久稱辭竟奉止思志行波須乎と有る文法と比挍て熟く思ふ可なり）敷坐とは宮殿を建て其所に鎭り坐事を云ふ萬葉一（十八丁）に花散相秋津乃野邊爾宮柱太敷座波（六卷讃久邇新京歌に宮柱太敷奉高知爲布當乃宮者云々）同（十九丁）に芳野川多藝津河内爾高殿乎高知座而（同卷藤原宮役民作歌に都宮者高所知武等と有も此例なり）同（二十一丁）神長柄神佐備世須登太敷爲京乎置而（二十七丁）に飛鳥之淨之宮爾神随太布坐而云々宮柱太布座御在香乎高知座而（同三十五丁）に定之水穗之國乎神隨太敷坐而云々吾大王皇子之御門乎（三十八丁）に皇神祖之神乃御言乃敷坐國之盡（同五十四丁）太皇之敷坐國爾内日刺京思美彌爾（六十四丁）に眞木柱太高敷而食國乎收賜者（同四十二丁）に八隅知之吾大王乃高敷爲日本國者など見えたり知と敷と同意なる由已に首卷（新年祭條）に說たるが如し僣職員令義解に敷ハ陳也と有を以て思ふに敷とは宮殿を建陳るを云なりけり（家藏を建陳る地を屋敷と云など思ふ可し又大君の敷坐國など云るも元は殿舍を建陳れ御在して天下の事共を知食し及ばせ給ふ由なり）

今年十一月中卯日爾天都御食乃長御食乃遠御食登皇御孫命乃大嘗聞食牟爲故爾

中卯日は中臣壽詞に中都卯日と有に依て訓べし師說（天朝無窮曆及弘仁歷運記考）に皇孫邇々藝命高天原より天降り給ひて天下知食ける元年（辛酉歲）より神武天皇元年（辛酉歲）迄二千四百年の間は建子月を以て正月と爲させ給へば十一月は今の建寅の正月より計れば九月に當るなり此古式に依て大御神宮の神嘗祭は今に至迄九月に行はせ給ひ大嘗新嘗等の祭は建寅の正月より計へて十一月に行はせ給ふ事神武天皇より以降の例なりと云れたるは然る言なり（然も有は神宮の神嘗は建子の十一月を用られて天降以來の例なり朝廷の新嘗は建寅の十一月を

用られて■■朝ノ來の例なり諸進ノ正月なりし神代には正月二月を比登月布る月と有の任に隨けむを建寅正月の御代より正月二月を年月依従具岐なこそ呼事とは成ぬらむ卯日を用らるゝ事如何なる由にか思得ず天孫本紀に神武天皇元年十一月庚寅日鎮魂祭を物爲られたる由なるに後世其日を用らるゝを思へば決く天孫降臨以來の例なり（如此く干支を用る事は漢土の暦法に傚る事と誰も思ふ事なれども實には大國主大神の事始め給へるが漢土に傳り得たるなる由委しき師說有て且々著述られたるが如し）○天都御食乃長御食乃遠御食登は中臣壽詞にも大倭根子天皇我天都御膳乃長御膳乃遠御膳止汁仁毛實仁毛赤丹乃穗仁毛所聞食弖と有り同事なり（但同詞に天都御膳遠長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁平介久安介久由庭爾所知食云々と有る遠辭と乃辭との異にて大に其心同しからず混ふる事勿れ其由次に云べし）天都御食乃とは今此大嘗に當りて皇御孫命の聞食し初る大御食を直に天都御食と申成て祝給ふなり（中臣壽詞に天都御膳遠云々と有は高天原にて由庭の瑞穗を皇御孫命に事依し授奉給へる所なる故に此物即天都御膳たり是以て遠辭を用たり玉襷開初若菜卷に云れたる事は皆言にて委からず中臣壽詞考に云を見よ）長御食乃遠御食の例祈年祝詞月次同上大忌祭風神祭等の詞に出たり但彼に天都御食と云事無く此詞及中臣壽詞に見えたるは故有る事なり已にも說る如く此は神代紀に以ニ吾高天原所ノ御齋庭之穗ニ亦當御ニ於吾兒ニと見えたる天照大御神の御事依しを受て如此は云るなり俺略に見過し奉る可に非す○皇御孫命乃大嘗聞食牟爲故■は天皇命の大嘗聞食むと爲るに就てなり鈴屋大人說（大祓後釋附錄）に此詞に新穀を唯皇御孫命の聞食す事を耳云て神に奉給ふ事の無は未古意を得られざるなり（○今云考に右祭の事は朝には皇神に奉り夕には天皇の聞食すと古より云て上の祈年祭にも初穗は皇神等に奉り遺をば皇御孫命の聞食す由有り然るを此に皇御孫命の聞食事を云るは若何に強て思ふに此は諸社へ幣を奉給ふ事な事とあるにば皇神の營給ふ事をはたるにやて も猶事遺ぬ心らは爲らる」と有を辨られたり）凡て大嘗新嘗の天皇の聞食すを主と爲る事にて神に奉給ふも天皇の聞食さむと爲るに就て先奉給ふなり故古書に大嘗をば聞食と耳云り是天皇の聞食すを主と爲る故なり然れば神々に幣帛を奉給ふも天皇の大嘗聞食と爲るに依て奉給ふにて此祝詞は其祝詞にこそ有れ神に大嘗を奉給ふ祝詞には非ず故大嘗祭ノと記されたる祭ノ字も唯に大嘗を指て云には非ず大嘗に依ニ幣帛を奉給ふ祭なり（押世人大嘗新嘗は唯神に奉給ふを耳主と心得たるは古意に非す古書共に此事を云る語を心を着て熟見は曉る可し即此祝詞に皇御孫命乃大嘗聞食牟爲故爾と有にても知べし）と云れたるぞ明辨なる然れど上に說る如く當年の新穀を必先天照大御神を始奉り其餘の神々に進せられて其遺をば聞食す意にては有なり全體に取ては天皇の聞食に依て此祭は有る事なれども如此く神祇を敬奉給事はしも專皇祖天神の大御心に因准せ給ふ御事にて甚々忝き遺風なり（備祈年祭詞の下に云る條々を合せ讀て曉る可くなむ）

皇神等相宇豆乃比奉氐堅磐爾常磐爾齋比奉利茂御世爾幸閇奉牟止依志氏

此は中臣壽詞に皇神等毋千秋五百秋乃相嘗爾相宇豆乃比奉利堅磐常磐仁齋奉利伊賀志御世仁榮志女奉利云々と有に相同くして皇神等の皇御孫命を守奉給ふ御事を云るなり（是ぞ彼神代紀なる齋庭之穗を事依し奉給へるに當て心得べき所なりける）○相宇豆乃比奉は續紀（天平寶字二年）詔に天日嗣高御座乃業波天坐神地坐神乃相宇豆奈比奉相扶奉事爾依氐之云々と見え萬葉十八（二十丁）に天地乃神安比宇豆奈比皇御祖乃御靈多須氣豆ともも有り（右の二例宇豆奈比と扶と並云るに心を着て味ふ可し）此言義は古事記に三貴子と見え神代紀に珍子と有る共に大殿祭詞に依て宇都御子と訓べき例なるが尚萬葉六（二十五丁）に天皇朕宇頭乃御手以又祝詞に宇豆乃幣帛など有る共に同じくして珍貴ふ意と憐愛しむ意と物を盡し極めたる意と有て皆同類の言なり（奈比は商(アキナイ)兇(マチナヒ)卜(ウラナヒ)などの例にて物の重累る狀の時云ふ辭なり此を乃比とも云は音通なり調(トヽノフ)償(ツクナフ)などの例有て奈比に同じ）偖皇神等の相宇豆乃比奉給ふ事狀は何ぞと云に祈年（大忌風神祭も此に屬く）月次等の詞に見えたる御所の事共を聞食給ひて當年大に年有て豐饒なるを云也けり○堅磐爾常磐爾齋比奉利云々は中臣壽詞に與天地日月共照志明志御坐事爾云々と有に同じ○茂御世爾幸閇奉止依志氏は神代紀なる大御神の御詔に以吾高天原所御齋庭之穗亦當御於吾兒ともも葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可王之地也宜爾皇孫就而治焉行矣寶祚之隆當與天壤無窮者矣とも有る大御命を指て心得べし又祈年祭には御年初め給はむ事を天社國社の皇神等に申給ひ又御年皇神等能前爾白久皇神等乃依左志奉牟奧津御年乎云々八束穗乃伊加志穗爾皇神等乃依左志奉者（又水分神詞にも有り又大嘗祭齋郡に於て祭らるゝ八神の中に御歳神の主と祭られ給ふ事を思ふ可し）又大御巫乃辭竟奉皇神等能前爾白久云々皇御孫命御世乎手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉茂御世爾幸閇奉故云々又生島乃御巫能辭竟奉皇神等乃前爾白久云々島能八十島墮事無皇神等能依左志奉故云々又伊勢爾坐天照大御神能大前爾白久云々遠國者八十綱打掛氐引寄如事皇大御神能寄奉波云々又皇御孫命御世乎手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉茂御世爾幸閇奉故云々（月次祭詞も此に同じ但御年祈詞も無きなり）又大忌祭詞に皇御孫命能長御膳能遠御膳止赤丹乃穗爾聞食牟云々奧都御歳乎八束穗爾皇神乃成幸賜者又（同詞別）天下乃公民乃取作禮留奧都御歳乎惡風荒水爾不相賜汝命乃成幸波閇賜者云々又風神祭詞に皇御孫命乃遠御膳乃長御膳止赤丹乃穗

爾聞食須五穀物乎始氐天下乃公民乃作物乎云々天下能公民能作作物乎悪風荒水爾不相賜皇神乃成幸閇賜者云々と見えたるを始て其餘の諸祭共に稻穀の御祈を主と爲給ふ事なるに此は其天社國社の神々の御守護に因れる事を云るなり然れば祈年月次等祭に其御祈有て報賽の爲に執行はせ給ふ此新嘗祭にし任れば必其事を引出て幸閇奉牟止依氐志とは宣る事なり依志賜布爾依氐と云ふ意味なり次句千秋五百秋爾平久安久聞食氐云々と有に對照して曉る可し　本に奉牟止と有を出雲本には爾に誤れり又賀茂翁の考に奉牟爾依氐と改られたるは甚しき誤なり卜家の宮主秘事口傳抄なるは賀茂翁本と同じけれど覺束無き事なり中古の人の本に任にて意味髓に通れる事を得知ざりしに依て私に改けるにこそ後抄に後にこの詞ぞあつためたるが其劣きを以てもおもふべきなり

千秋五百秋爾平久安久聞食氐豐明爾明坐牟皇御孫命能宇豆乃幣帛乎明妙照妙和妙荒妙爾備奉氐朝日豐榮登爾稱辭竟奉久乎諸聞食登宣
（チアキノイホアキニタヒラケクヤスラケクキコシメシテトヨノアカリニアカリマサムスメミマノミコトノウツノミテクラヲアカルタヘテルタヘニギタヘアラタヘニソナヘマツリテアサヒノトヨサカノボリニタヽヘゴトヲヘマツラクヲモロ／＼キコシメセトノル）

千秋五百秋云々は中臣壽詞に皇孫尊波高天原仁事始天豐葦原乃瑞穗乃國遠安國止平介久所知食天天都日嗣乃天都高御座仁御坐天天都御膳遠長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穗遠平久介安久介由庭仁所知食止事依志奉豆云々皇神等毋千秋五百秋乃相嘗爾相宇豆乃比奉利堅磐常磐仁齋奉利豆伊賀志御世仁榮志女奉利云々と有る此にて千秋五百秋の大御言は皇御孫命の大御世の常しへに御隆坐て年毎に由庭の瑞穗を天津日繼と所聞食む御事を言壽き宣給へるにて此壽詞の趣にては千秋五百秋に神と君とに奉る由なり　大殿祭詞にも同大御命を載て皇我宇都御子皇御孫之命此乃天津高御座爾坐氐天津日嗣乎萬千秋乃長秋爾大八島豐葦原瑞穗之國乎安國止平氣久所知食止云々と有り天津日嗣とは即瑞穗の事を云るなり此事九巻其詞の下に委しく說り○平久安久聞食氐は上に皇御孫命乃大嘗聞食牟爲故爾と有る其大嘗を千秋五百秋に平けく安けく聞食となり○豐明爾明坐牟は天皇命の大嘗を聞食て大御顏の麗しく照明らひ坐を云ふ此は職員令なる大嘗義解に朝者諸神相嘗祭夕者供新穀於至尊也と有て諸神の相嘗も至尊の聞食も同日の事なりけむを中古より卯日は神事にて辰日豐明節會なり續紀廿六に今日方大新嘗乃猶良比乃豐明聞行日仁在三十にも今日方新嘗乃猶良比乃豐乃明聞許之賣須日仁在て此全く儀式などの狀なり然れども中臣壽詞に今年十一月中都卯日仁由志理伊都志理持恐美恐美清麻波利仁奉仕利月内仁日時遠撰定豆獻留悠紀主基乃黑木白木乃大御酒遠大倭根子天皇我天都御膳乃長御膳乃遠御膳止汁仁毛實仁毛赤丹乃穗仁所聞食豆豐明仁明御坐豆云々と有る文に依に辰日に豐明節會は行れつゝも詞は

猶古の隨に改られざりしなり然るは後世に儀式なとの事繁く成る故にこそ辰日には物爲らるれども實には卯日に必有べき事なるか故なり但月内仁日時遶撰定弖献留と有は十月の中に黑木白木の大御酒を釀る日を云るにて天皇の聞食す當日の事には非るなり思混べからず（如此く卯日神事辰日公事と別られたる事は天武天皇の御世などにや有む慥なる所見無しと雖も江談抄に淨御原天皇之時五節始之云々と見え年中行事秘抄に本朝月令云五節舞姫者淨御原天皇之所製也云々と有る此は五節舞姫の起元を云るなれども其附會も此事の始れるに就て出來れりと思しければなり）記傳三十二（五十七丁）に豐明は登余能阿迦理と訓下卷（若櫻宮段）に坐二大嘗一而爲二豐明一之時云々又記中に豐樂とも書萬葉十九に豐宴とも書り（明は言の任に書るにて字の意にかゝはらず樂又宴などは義を以書る字なり）書紀には宴又讌宴樂宴會宴饗肆宴など有を訓り豐は例の稱辭（豐之と之を添たる例も萬葉に豐之年と詠み後に豐之御禊なども云へり）明は元大御酒を食て大御顏色の赤らみ坐るを申せる言にて祝詞に（此詞及中臣壽詞を引て）豐明爾明坐と有る是なり又赤丹穗爾聞食と有も同事にて御酒を食て御顏の赤るを申せる事續紀廿六に黑紀白紀能御酒乎赤丹乃保仁多末倍惠良伎（儀式大嘗祭儀新嘗會儀又三代實錄四十六などにも如此有り）と有を以知るべし此は常の御顏を申すには非ず御酒を食て赤らみ坐由なり右の續紀の文にて知べし又大嘗祭詞には御食と耳有て御酒の事は云ざるにも豐明爾云々と有は如何にといふに凡て御食と云は御酒も其中に具る內に大嘗は殊に御酒を重く爲給ふ事云も更なり中臣壽詞の文を以知べし（倭御倚坐すして赤らかに坐も御酒を食て赤らみ坐も御顏の赤く坐事を申すは同くて又顏の美麗をも赤るといひ此の髮長比賣を阿迦良嬢賣と詠し給ひ萬葉にも丹穗面など有り是將顏の赤き由を云事は同じ○今云豐明の豐は唯稱辭耳にも非るか然云ふ由は酒は眞食(サケ)にて食氣の純粋なる、聚りて實を爲か故に腹中に入て一速く身體に其氣の流動(ウゴキメグ)るを以て思ふに豐は動む義ならむと所思たり又祈年水分神詞に皇神等能依志奉牟奥都御年乎云々皇御孫命能朝御食夕御食能加牟加比爾長御食能遠御食登赤丹穗爾聞食牟云々大忌祭詞に皇御孫命能長御膳能遠御膳止赤丹能穗爾聞食云々奥都御歲乎風神祭詞に皇御孫命乃遠御膳乃長御膳止赤丹乃穗爾聞食須五穀物乎始氏なと唯に御食の事にも赤丹穗と云るは酒に限れるに非ず凡ての食物に云るなり）然れば豐明爾明坐と云は元彼登余本岐本岐或は神集爾集又伊都乃千別爾千別氐なと云格の語なるか即其宴の名とは成れるなり（抑顏の赤きは面の榮にて神代の歌に朝日の咲榮えと有朝日の赤根刺出る如くと云るなり云々）と云れたるが如し（以上要を摘て記せり委くは本書に任れて）○皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎云々は大嘗聞食すに就て宇豆の幣帛を進せらるゝとの義にて上にも云る如く祈年に御祈有けるが其感應に依て當年の新穀の豐登(ヨクミノ)る事を得たり其天津日繼を聞食すに就て其報賽を物爲させ給ふと也（委しく上に祈年祭の條々に云るを合せ讀て曉り辨ふ可し）○明妙照妙和妙荒妙爾備奉氐の爾辭の下に至迄爾の字を加て心得べし

中別(コトリケテ)忌部能(イミヘノ)弱肩爾(ヨワカタニ)太襁(フトダスキ)取掛氐(トリカケテ)持由麻波利(モチユマハリ)仕奉禮留(ツカヘマツレル)幣(ミテ)帛乎(クラヲ)神主祝部等(カミヌシハフリ)請氐(トモツケテ)事不落(コトオチス)捧持氐(サヽゲモチテ)奉登宣(タテマツレトノル)

凡ての文祈年月次等詞に同じ○事別は右の二詞には辭に作れり辭は正字事は借字なり○事不落右の二詞には事不過と有り同事ながら言樣に依て其義に少異有り此は其幣帛を主と云ひ彼は其祈言を主と立たるなり併ながら幣帛と祈言と二に亘して云る事云も更なり

鎭御魂齋戸祭（オホミタマシヅメイハヒドノマツリ）中宮春宮齋戸祭亦同

四時祭式十一月祭に鎭魂（オホミタマフリノマツリ）祭と又十二月祭鎭御魂齋戸（オホミタマシヅメイハヒドノ）祭（マツリ）との二有あり其鎭魂祭は同式大祀中祀小祀と三段に物爲られたる中の小祀ノ部に在る此にて新嘗祭の前日寅に行るゝ神事にて職員令神祇令共に其名目出る所何儀式四時祭式江家次第を始め其餘の書典に載る所何れも右の鎭魂祭にして此鎭御魂齋戸祭は此祭式に出たる耳にして餘に所見無し此鎭魂祭の事を此に記し載まく所思ゆれども斯ては此復入混ひて中々に紛雜しく成る故に此巻末に附録として別條に委しく擧るを披見る可なり此條ノ末に右於二此宮齋院一中臣行レ事一と有を以考るに彼鎭魂祭の如く諸司の預る所に非ずして神祇官にて其官人耳の行ふ所なるが故に殊に其式をも載出されざる也けり又其日を何日と載られざるも其宜しき日を十二月の中に定て行るゝ事なるが故なる可し右の外にも朝廷の御神事ながら本宮限にて行るゝは儀も計も有へけれども他に拘らざるゝ事に儀式ゝ式などに載ねは有べきなり此も朝近祝詞の有と留すを渡さるゝとの事有に依て四時祭式には記されたる者ならむかし　鈴屋大人説に大祓後釋附録　齋戸は伊波比度と訓べし戸は借字にて處の意なり此は神祇官齋院の事にて八柱神等を齋祭る處なる故に齋戸と云なり○今云三代實録四に神祇官西院齋戸神殿と有を是と爲べし後撰集世紀藤方片樋宮に采女忍比賣我作之天平瓫八十枚持而伊波比戸爾仕奉支と有は皇太神を齋奉る所を指て齋戸と云る也　斯て此祭は彼處にて行るゝ故に齋戸祭と云ふ○今云右に引る四時祭式に右於此宮齋院中臣行事と有る此なり　抑此祭に限て其行ふ處を以て祭の名と爲る事は彼十一月に宮内省にて行る鎭魂祭有る故に其と分む爲に處の名を以云なる可し偖其十一月の鎭魂も有る上に又此祭も有る故は此祭は御座所に平かに坐坐む事を祈給ふを主と爲る祭にて鎭二御魂一と云も御坐所に鎭る由也然れば此祝詞初に大殿の事を云ひ終に平久御坐所爾令御坐給止云々と云り　考に御魂と云事を云ざるは題に叶はず文の拙き如云れたるは然る事なれども卒御魂を鎭るは彼十一月の事にして此齋戸祭は御坐所を主と爲る故に御魂を鎭る事は分ては云ざれども御座所爾云々と云るに其意も含みて足なむかし　と云れたる此説にて甚分別しきが如くなれども粗きなり其は彼鎭魂祭は御靈を招殖（ナキフヤ）すの神事此齋戸祭は其鎭魂祭に結たる御魂緒を齋戸に鎭祭るにて御坐所にと有も彼齋院に坐は神殿になる事下に云るが如し必別々の事ならず同事の前後の序なる者なりけり　美多麻布理と云と美多麻志豆米と云と其言に異有なるも思ふ可きなり　然れば右の鎭魂祭には御巫以下の人

人に種々の所作有て祝詞無く但鎮魂歌等は有れども此は其所作に就て有る事なり此鎮御魂齋戸祭本官にて中臣の執行ふとは雖も尋常の神事の如くなる故に祝詞耳有て異れる所作無也偖此詞の體凡ては古からず今京以降の語格も且々に交り分及び儀式共に此事を載られず唯此四時祭式に耳記されたるを以て當時殊に故有て出來る神事ならむを猶行れずして延喜以後には絶たるらむかと思ふに然らず深山御紀長寛二年十一月十六日條薩戒記應永廿三年十一月條なとにも鎮魂祭の事有れば後々迄も此祭は有しなり詞に自此十二月始來十二月爾至萬氏爾と有れば申す迄も無く恒例の神事なるに其跡の全に物に見えざるに就て考るに十一月宮内省にて行る丶鎮魂祭の魂匣（ミタマハコ）を十二月に當て神祇官齋院に鎮め替るなむ此齋戸祭には有べき然思ふ由は三代實錄四巻十七丁に貞觀二年秋七月廿七日甲辰偷兒開神祇官西院齋戸神殿盜取三所齋戸衣並主上結御魂緒等と有にて魂匣を收奉る所在なる事著明ければなり三所齋戸衣とは天皇中宮春宮の御事を申せりと通ゆ然れども十一月なるが主たる祭にて十二月なるは其を齋戸に鎮祭給ふ事にて事輕さに似たり是を以て諸史共に十一月なるを耳記されて十二月なるを省る丶例と見えたり十二月とは雖も定れる日とても非されば官事の暇ある節を以て行はる丶なる可し然れば

鎮御魂齋戸祭（オホミタマシヅメイハヒドノマツリ）と古來訓來る事には有れ共鎮御魂齋戸祭（シヅムルオホミタマチイハヒトニマツリ）と訓改む可きなり偖其御魂とは彼鎮魂祭の御魂匣を云也鎮祭御魂と云事舊事記に出たり但其書なるは十一月鎮魂祭に就て云るなり故思ふに上古には鎮魂祭有て直に其御靈を彼八神の御許に鎮祭られけむを中古以來宮内省にて行る丶事と成れりしより八神殿に收る祭は十二月の事と成けむ然るは中寅日鎮魂祭有て卯日新嘗祭辰日豐明節會と續き行ばれて年に依ては右の寅卯辰の日十一月の末に在て神祇の官人などの事繁きに依て十二月には送りたる可し○細書に中宮春宮齋戸祭亦同と有は神名式に依て稽るに神祇官西院坐御巫（ミカンコトモノ）等祭神廿三座並大月次新嘗と有る中に御巫祭神八座並大月次新嘗中宮東宮御巫亦同と有て八柱神の御名を載られたり此御巫を祝詞には大御巫と有り右社々は何れも御巫の齋奉る中に殊に此八神は鎮魂の神に坐が故に中宮よりも東宮よりも御巫を附進せられて分祭給ふ也然れば天皇の御は大御巫此を守り中宮東宮のは各其御巫有て此を主る事也と所見たり故祭式なる此條下にも中宮准之と見え又別條に東宮鎮御魂齋戸祭とは有也けり又鎮魂祭下にも中宮准之又巳日晡時供東宮鎮魂とも見ゆ○幣物の事は四時祭式に鎮御魂齋戸祭中宮准此絁一尺五色帛各一尺絲一絇綿一屯倭文一尺調布三端庸布三段木綿麻各二斤米酒各一斗鰒堅魚腊海藻各六升鹽二升𤭖水瓫各一口坏八口匏一柄槲十把食薦一枚東宮鎮御魂齋戸祭絁三丈五色

帛各一尺絲六兩綿一屯倭文一尺調布一端庸布一段木綿麻各一斤米酒各五升鰒堅魚腊海藻三斤鹽二升𤭖水瓮各一口坏四口匏一柄槲五把食薦一枚右於ニ此官齋院一中臣行事と見えたり ○右の中臣行事と云事の起元を考るに古語拾遺（橿原宮段）に爰仰ニ從皇天二祖之詔一建ニ樹神籬一所謂高皇產靈神皇產靈魂留產靈生產靈足產靈大宮賣神事代主神御膳神（以上今御巫所ニ奉レ齋也）云々と見えたる此は神代紀（天孫降臨章第二ノ一書）に高皇產靈尊勅曰吾則起ニ樹天津神籬及天津磐境一當下爲ニ吾孫一奉上レ齋矣汝天兒屋命太玉命宜下持ニ天津神籬一降ニ於葦原中國一亦爲ニ吾孫一奉上レ齋焉と見えたる此御命に依れる事なるが右御命を傳て天降坐る神々の代を歷て後迄此事を忘給ひて神武天皇の御世に事始め行る可くも非ねば上（新年祭條）に說る如く邇々藝命の御天降の當時より筑紫の大朝廷に物爲給へる事云はでも著明き事なり（但神武天皇の御世の條下に載られたるは大凡朝廷の儀式作法共に此大御世に大に成整へれば其所に附たる者なり） 然れば其御世に天兒屋命は祝詞を主り太玉命は幣物を掌給ひ初し遺風有て此鎭御魂齋戶祭は中臣行事也（幣物の事に齋部の物爲る由も非れど此は佗例に准へ知べし） 又拾遺に凡鎭魂之儀者天鈿女命之遺跡然則御巫之職應任ニ舊氏一而今所選不論佗氏所遺九也と見えたり斯れば右の八柱神に仕奉る大御巫は舊猿女君なりし也然れは高千穗宮にして右の天津神籬天津磐境を起樹られしは天兒屋命に坐し其祭祀を掌れりしは天鈿女命に在しゝなり（但右の鎭魂之儀者云々は其祭の起源を云文なり其起源とは此鎭魂祭の儀式は天鈿女命の神業に成初たる由を云文なれども此は右の御巫の事に就て引出たるなり思混ふ可からず右等の委しき所由は此卷のゝゝゝ委しく云べし） 但此祭はしも高天原に事始り高千穗宮に成り橿原宮に定れりと雖佗祝詞の例の如くは非ず文法も何も今京以來の格なるは世を逐て改れるなり惜むべしと雖も其大旨異なる可からず（賀茂翁の例の誤と見られたるは取に足ず） 偖鎭御魂齋戶祭の較略を云む抑此祭に主と齋奉らるゝ神は右の八神に大直日神を加て九座に坐るが大直日神は右の鎭魂祭に依てこそは祭られ給へれ常は八柱ぞ齋戶には鎭座なる偖十一月中寅日宮內省にて鎭魂祭を行給ひて御魂緖を結び御魂匣に收め十二月に至て其を右の齋戶に鎭奉り去歲の舊に易ふ此を鎭ニ御魂齋戶一祭とは云也偖鎭魂祭に御靈を殖したるを御魂匣に收に齋戶に鎭祭る事はしも右の八神は祈年（祝詞）祭の下に說る如く天皇を始奉り天下人類の身體を守護給ふ神に坐故に其神等の齋戶を御魂の御坐所と爲給ふ事なり（神皇產靈と云書に立靈畤於鳥見山中一用祭皇祖天

神ニ爲任ニ皇天嚴命ニ齋ニ八柱靈神ニ而式爲ト鎭御魂ニ神ト爲ノ天皇玉體ヲ春秋二季齋祭也云々と有はに然る言なり　猶大己貴命の國土經營の時に大神を幽贊給ふ幸魂奇魂神の現坐るを倭之青垣東山上に治奉給ひて後に和魂大物主神の御魂を其御許に三諸山に鎭め給へるに同じ 此幸魂奇魂とは右の八柱の中なる高皇産靈神皇産靈神に坐す事も首巻祈年祭三詞の下に委しく説記るが如し此の鎭魂祭に和魂直日神を合祭らるゝ事奇しとも異しとも妙也　偖如此く鎭御魂の事を物爲給へらむには大御心安く大坐々す耳ならず守護坐す神の御勢を得給ひ大御身剛健に大坐々て內外の殃災無く大御壽は手長の大御壽と堅石に常石に坐む皇神等の御定有る事と所知たり 門人今井繁次云我が越後國蒲原郡村松里に坐す住吉大神の我妹の四五歳計の頃より屢神託給ふ事の有る中に生御魂勸請と云事有り其は右の如く絲を結て箱に收め封じて其を神棚などに上て祭る事なるが如此く物爲る時は其心安く其身全く能長生を得る事なりと傳給ふ由云り然るは此齋戸祭の事なるが其人に相應へて出來易き樣に傳給へる者なり

高天原爾神留坐須皇親神漏伎神漏美能命乎以氏皇御孫之命波豐葦原能水穗國乎安國止定奉氏

此は皇御孫命の顯國を所知し初て大御世の定れる初を云るなり安國止定奉氏にて文勢落着して下へ聯かず此迄は天皇の御事以下は八神の御在所にて所謂齋戸の事なり思混へからず 考に安國と所知食と云ては右の命乎以氏と云事能も通らず況て御孫之命波と云る波の辭治らず古人の略言は能見れば皆理有り後人の略言は誤耳多なりと云れたるは例の古言を能も説れざる謬論なり

○命乎以氏は佗例命以氏と有を乎の辭の添れるなり

中臣壽詞にも命遠以氏と云り例有る事なり○皇御孫之命波豐葦原能水穗國乎安國止平久所知食止定奉氏と云意味なり 其句は脱たるらむかとも思ゆれども然に非ず本の任にて其義に能聞ゆるなり 如此く省に過たる狀なるは此は鎭魂の事にこそ專と要有れ此國所知食す事の委しきには及ぶまじければなり

下津磐根爾宮柱太敷立高天之原爾千木高知氐天之御蔭日之御蔭止稱辭竟奉氏

此は彼神祇官西院坐御巫祭神八座の鎭坐す宮居の事を云なり 上より聯けて見る時は非ぬ物擬ひ有り 如此云例は春日祭詞に下津石根爾宮柱廣知立高天原爾千木高知氐天乃御蔭日乃御蔭止定奉氏貢流神寶者云々と有る此なり 平野祭詞久度古開神詞共に大旨同格の文法なり 此の稱辭竟奉氏より次段なる奉御衣波云々と有を以も天皇の御上を云には非る事著きを猶天皇の宮殿の御事に稱辭竟奉と云例無などをも思可なり 然るを考に此一段を論ひて此の御蔭と云下にも又言の省過て理通らす何ぞと云はゞ云々御蔭など云ては上の如く隱坐など云て且遠長く御國所知食べき天津日嗣など云て倭今日祭奉る皇神等の事を申て奉る御衣云々と云べし右に云如く淺りに略きける故に言を成さるなりと云るも例の謬なり ○稱辭竟奉氏は祈年月次等詞に天社國社登稱辭竟奉と有る如く神の宮殿を嚴めしく美好しく搆て鎭坐しむるを云事次々上より辨たるが如し

此を天皇大宮の事と思ふはいふにも足ぬ僻說なり又句の脱たるらむと云も拙き說なる者そ 下に云々 止平久
聞食氏皇我朝廷乎常磐爾堅磐爾云々と有を對照さは此
文の天皇大宮を云るならぬ由をぞ知べからむかし
奉御衣波上下備奉氏宇豆乃幣帛波明妙照妙和妙
荒妙五色物御酒波𤭖邊高知𤭖腹滿雙氏山野物波甘
菜辛菜青海原物波鰭廣物鰭狹物奧津海菜邊津海菜爾
至萬氏爾雜物乎如横山置高成氏獻留宇豆乃幣
帛乎安幣帛能足幣帛止平久聞食氏
奉御衣波上下備奉氏は上なる稱辭竟奉氏より續けて
心得べし彼八神殿に奉らせ給ふなり上に引る三代實
錄に三所齋戸衣と有を以て思ふに天皇中宮東宮共に
大御身自召せ給ふ大御衣を結御魂緒と共に齋ひ納ら
るゝなりけり然れば此の幣物には漏されたる可し下
に宇豆乃幣帛波云々と條目を別られたるに心を着て
考ふべし 但縫一疋と有や上下の御服の料ならむも知へからず但其は何にまれ其御方々の御衣と爲て儲備らるゝ事云も更な
り上下とは天皇東宮の御は御衣と御袴なり中宮の御
は御衣と御裳なり備奉と有る上は袍 下 衣 單 衣
表裙下裙袴單 袴 帔髮髮襪領巾等に至迄も男女共に
悉く不事足無く備たるを云也然云由は古事記 明宮段 に
其兄謂其弟云々若汝有レ得ニ此孃子ー者避ニ上下衣服ー

量ニ身高ー而讓ニ甕酒ー亦山河之物悉備設爲ニ宇禮豆玖ー
云爾爾其弟如ニ兄言ー具白其母即其母取ニ布遲葛ー而一
宿之間織ニ縫衣褌及襪沓ー云々と有にて上下と云事著
明ければなり記傳卅四 三十五丁 に上とは衣を云ひ下とは
袴を云り後にも吉部秘訓抄に著ニ白兩面上下ーとも
着ニ赤色上下ーとも見え其他の書等にも或は淺黃上下
或は赤色上下など云る事多し皆上とは狩衣直垂素襖
など何に在れ上に着る服を云ひ下とは袴を云り」と
云れたるを以て知べし 考にも此文を引出られながら彼御裳なこそ下と云べく所思ゆれ此も後ながら神に奉なれば裳なる可し」と云れたるは一概の論なり此も神に奉るには違無れど自餘の祭の幣物の如く其所祭の男女に依て奉る御衣服の異るとは異にて此は祭らせ給ふ御方々の御衣を上下備て奉らせ給なれば別なり ○宇豆乃幣帛波云々
は上に擧たる幣物を云事常の如し○𤭖邊高知云々邊
は借字にして上の義なる事祈年祭條に說るが如し 考に邊字宜からぬ由に云れたれど然迄(サマデ)は非ず ○如横山置高成氏平野久度鎭火
等詞の例なり 訓字の如く訓へし
皇我朝廷乎常磐爾堅磐爾齋奉茂御世爾幸閇奉
給氏
此は新年祭月次祭共に載られたる八神の祝詞に皇御
孫命御世乎手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉茂御世爾
幸閇奉云々と有る如く大御壽長く御在む御祈なる鎭

魂祭に御靈を殖し御魂匣に納め其を此祭に齋戸に鎭祭る事は大御世の長く久しく御在む料なり　考に此は御魂鎭を本なれば御在所を申し又猶云べき物こそ有め右の言共にては次へ能も續かずと云れたれど總ての事状を知られざりし説なれば當れりとも所思ず○皇眞我朝廷乎は皇御孫命乎と云に同じ　鈴屋大人云く考に皇眞我と云事を略に過たりと云れたるは中々に古言を能考られざるなり皇眞我某(ナニ)と云こそ古言にて例多けれ天皇命我と云事は古言に有事無し

自此十二月始來十二月爾至萬氏爾平久御坐所令御坐給止今年十二月某日齋比鎭奉止申
（コノシハスヨリハジメテキタランシハスニイタルマデニタヒラケクオホマシトコロニオホマシマサシメタマヘトコトシノシハスノソレノヒイハヒシヅメマツラクトマヲス）

此段は彼鎭魂祭の御魂匣を天皇中宮東宮の御魂と爲て八神の御坐所の齋院(イハヒド)に平げく令大坐給へと祈申させ給ふなり○自此十二月始は去年の舊きを當年の新しきに改て納替るを云なり○來十二月爾至萬氏爾は當十二月に鎭祭るは來年のなり是以て來十二月爾云々とは云る也偖此に就て思ふに古は庶人に至迄も皆此魂祭をば物爲けるにや詞花集に曾根好忠　魂祭る年終に成にけり今日にや又も逢はむと爲らむ」と咏るなど亡魂を祭る事とは聞えざれば也一首の意は魂祭爲る十二月に成ぬ此事を物爲るは眞幸くて又來年の今日に逢むと爲ならむと云事なるを思ふに究て此鎭御魂齋戸祭を見擬び行ふが故也　若て其人の死亡る事有れば其魂匣を神主と爲て祭る事にて年暮には其生存(イケ)りし日の如く亡人の爲にも祭る習俗と思ゆ後拾遺集十二月晦日の謌に亡人(ナキヒト)の來る夜と聞けど君も無し我が住宿や魂無の里」と咏る此なり此歌に依て右の詞花集なるを思誤るべからず　又奥義抄なる曾丹が歌に暇無み詮無き身さへ急ぐ哉御魂の殖(フエ)と諸も云けり」と殖と冬とを係て咏るなるが此を古來亡魂を祭る意に取成す事には在れども然らず歌意は勤仕の暇無が上に所詮(イツカヒ)無き身にも魂祭の急ぎは物爲るよ冬と云言の御恩賴(ミタマノフユ)と云に通へるは諧なりける事哉とは云るなり　古來の注者古意を探索るに心無が爲に曾丹が意をも了解さりけるは尤なる事ながら偖々速無事なり　○御坐所は天皇の御坐所を云には非ず彼謂ゆる齋戸にて八神殿の御事なり上に下津磐根爾宮柱太敷立高天原爾千木高知氐天之御蔭日之御蔭止稱辭竟奉氐と有る其也　考に職員令神祇官條鎭魂の義解に謂鎭安也人陽氣曰レ魂〃運也言招ニ離遊之運魂一鎭ニ身體之中府一故曰ニ鎭魂一と云るに事は同じ然れども此文に御魂ちふ言無ては如何御坐所云々と耳云ては標の言無き時は何の事共聞ゆべからず此も拙也」と云れたるは誤也此詞は鎭魂祭なるには非ず鎭魂祭爲る御魂匣を彼八神殿の齋戸に鎭祭らるゝ神事なる事を思得られざりし故に誤られたるなめり　○今年十二月某日は月の中に吉日を擇び用らるゝなり○齋比鎭奉止申は十一月鎭魂祭の御魂匣を右の八神の御坐所の齋處に鎭祭らせ給ふとなり伯家部類鎭魂祭條に八神殿は天皇皇后の聖壽を祈し玉體安穩を祈らるゝ爲に設給ふ者なれば大内に於て尤玉體に近かる可き事勿論なり云々此八神は天皇の御身に於て親切なる大功德有る御神なる故に殊に神殿を建て鎭魂祭を爲給ふな

り」と有は此齋戸祭の事を云るなり因に云同書神祇官八神殿正遷宮御裝束並雜事等之事條に八神殿の次に祝部殿と云有り此に御ある齋戸にて右の御魂匣を鎮る所なるやに有む猶能正す可き事なりかし

○鎮魂祭

神祇令に仲冬寅日鎮魂祭と見え四時祭式十一月條に鎮魂祭神八坐と有て神魂高御魂生魂足魂魂留魂大宮女御膳魂辭代主と其御名を擧て次に大直神一座と有て都て所祭九神なり然るに舊事紀及令集解に所謂十種神寶を以て神體と爲し祭らるゝを併攷るに右の大直神一座と有は神直日神大直日神二柱を合せて一座と爲るにて其實は都て十柱なり十種神寶の員數に脗合て必然る可き事なり此は下に其本文を擧たる所に委しく云事なれども今要に其事を心得置ざれば始終の趣を貫く事難きか故に少し述る所なり職員令神祇官ノ條なる鎮魂の義解に謂鎮安也人陽氣曰レ魂々運也言招ニ離遊之運魂一鎮ニ身體之中府一故曰ニ鎮魂一と有は全く漢文い樣なれども決く我古傳なり今先此文を說へし鎮安也とは其離遊の運魂を身體の中府に招安るをいふなり然るは新年祭三頁詞の下なる玉留魂神の解に云る如く人の精神を神に稟賦て生るゝ所は即賜の義なるか我有と定れるを心とは云なるか不知々々も魂振て天神の御魂を迎へ睦靈合ふ事の良久しきを待て身と共に長りて太く高く整ふ者なるか其は彼八神の御所爲に在か故に神代より此御祭の有來れるなるを名目には鎮魂祭と云るを此には鎮字を釋して安也とは云るなり下に此名義を說く所を合せ考ふ可し布理とは神に稟て我魂の整ふ所を以て云ふ日本紀に振を登々乃布とよめるを見べし漢籍史紀に修レ德振レ兵と有を正義に振整也と有なも思べきなり安は鎮り定るの意を以てなり安心など云安の意を以見べし人陽氣曰レ魂とは陽氣とは天氣と云事なり天とは日月星辰を戴る大虛にて氣とは其中に充塞れる物を云なり曰レ魂とは其中に含蓄る奇異なる精神を指て云るなり神名に天之御中主神高皇產靈神神皇產靈神と申す御とも皇とも書されたる美と云物は宇宙萬有の精又神にして天地の元始萬物の本根なり宇宙に充實て遺ざゝるに依て眞と云ひ氣と相離れず爲て相感應けて不測の妙用を成す是以て神と申し相交結て萬物を作成す故に皇產靈と申し物に施爲て各一箇の神と爲る此に依て魂と云ひ靈と云て其末に守る事多しと雖も其本元を云時は右の三神の御所爲に賴て其德の大に成れる物なりけり魂運也は天中の大氣に精眞を孕みて循環り運送ふ內に人にも物にも賜有て其精神と爲しむるを云なり萬葉十五三十六丁に多麻之比波安之多由布敝禰多麻布由杼

と有は魂は朝夕に雖ニ魂降一と云事にて神より賜ひ殖れどもの意なり魂運也と云るなどは我古傳に依らずては知盡し難き甚々重事也招ニ離遊之運魂一を離遊の字に泥みて我魂の離散する事と古來説來り已に鈴屋大人も玉留魂神の解言に浮れ行く魂を留むる神なりと云れたる事なれども予が見解は首巻新年祭條に云へる如く此神名も人身中に魂を充實る神と云義なり其義を以て此文を説時は離遊は天中の大氣と共に運旋て有る意なり尤人の精神の離散するも其中には還る事なれども其實は我身に元來神より稟賦たる魂の有上に猶天神の御魂を招て太く高く爲す由なり其中には我魂の離散するを招返す事もなしとは云べからねど此は變彼は常なるを思惟べし其上運魂と云字を書るも彼に運旋て有る義なり若然も無くば此句讀招レ離ニ遊之運魂一と訓すては聞え難きを然訓ては次句に對はず鎭ニ身體之中府一とは我身體の中府に元より神在て此に主たり其上に天中の神靈を招鎭めて天神に靈合ふ由なり但中府とは臍下丹田の邊を云なり尚此を委しく云時は津速産靈神より千魂神興台産靈神八意思兼神と各々相併て其用を神給ふ奇異なる説も有事なれども此首巻に云へは省きつ故曰ニ鎭魂一は四時祭式に鎭魂祭を意富美多麻布理能祭と訓み古語拾遺にも右の二字を意富美多麻布理と訓み天武天皇御紀には招魂之を美多麻布理須と訓れば然訓むぞ古言なる又神代紀なる恩賴字をも景行天皇御紀なる皇靈之威をも共に美多麻能布由と訓る皆同意の言也下に引る年中行事秘抄なる鎭魂歌に美多麻我理と有る其反對の言なり魂上りは魂の身を放るゝを云ひ魂布理は彼より此に來り整ひて自然に其大なる爲を云なり記傳卅三丁須惠布由の解に布由は振なり記に拔ニ所ニ御佩一之十拳劒上而於ニ後手一布伎都々と書紀に背揮と書れたるに同じ布久を布由とも云ひて布流の義なりと説れたるは實然る言にて此の布理布由は離遊へる運魂の天中を行歷るか人體の中府の降て其觸る魂を殖し整へる由なり降とは神より降す時を以云ひ威とは内に整たる精神の殖弘ごり利用を爲を云ひ振とは内に整たる其餘韻の佗に及至て其威勢の加りて神々しく成る事を云にて其成整ふ所識神聰明く身體剛健く壽命長遠の神術なる者なりけり然れば鎭魂祭とは魂を神より受賜り殖し留めて身と心と相共は令其心をして神明に令至る祭になむ有ける下に擧る布瑠之言本の所以をも思合す可し古書に振を整と訓るに心を任ねて考ふ可し此は美多麻志豆米とは訓べからず鎭御魂齋戸祭を美多麻布理とは訓べか

らず共に其究る所は同じきなから其運ひに異有る故なり借其美多麻は一物の名なから此を委しく云時は又大に差別有る事なり美は常に腦に寓りて頭に在て一身に彌綸ひ多麻は常に心に位て一身に彌綸ひ乍も美より多麻を生じ神より精を成て迭に相產靈び成して其用を利す所にこそは異も有けれ外より云時は一に爲て其差別有事無し今其用を云別たば譬へば此を視む此を聽むと爲る者は神の出るなり己に此を觀此を聽く者は即精の入るなり故其神は精に生り精は神に成る理を思はゞ其義著明からむ是以て其二を合せて美多麻布理とは云なり其八柱神に靈合て其德の神明に貫く時は其靈威天地に感亨りて妙に奇しき功も立て成る事の難きに非る可き者なるをや〇鎭魂祭の所由は古語拾遺に凡鎭魂之儀者天鈿女命之遺跡と有り然れば其權輿は何時か有む天石屋戸隱の故事を指る事舊說の如し然るに舊事紀に神武天皇元年十一月庚寅宇摩志麻治命初齋㆓瑞寶㆒奉㆓爲帝皇㆒鎭㆓祭御魂㆒祈㆓請壽祚㆒其鎭魂之祭自㆑此而始矣と有れば其權輿二途有に似たり今此を辨ふ可し古語拾遺の右の文を立て舊事紀なる此古傳を忘說の如く云貶す說も有れども其は大凡の事情を知ぬ說なれば取に足ず故思ふに皇御孫命の筑紫に天降坐し大御世に天鈿女命の仕奉られしより始て三御代の間に猿女君の仕奉れりし狀は後世御巫の仕奉る如くなりけむを神武天皇の大御世に十種神寶を奉れるより又其饒速日命に傳れる儀式を合せ此を混同に爲りけむか如何なる事や添れると思ふに後に神祇伯の職掌と爲る事をそ宇摩志麻治命は行給ひて其即其氏人の職なるを良其家の衰ふる運に當て神祇伯と云職の出來れるより終に物部は其家業を失ひて伯の職掌とは成れるなり此心を得て見れば下に擧る儀式祭式江次第等に見えたる作法悉く此は猿女君に始り其は物部家に出れりと甚々分明しく見え分るゝなり借此祭の起は古事記天石屋段に天宇受賣命手㆓次繫天香山之天之日影㆒而爲㆑鬘㆓天之眞拆㆒而手㆓草結天香山之小竹葉㆒而於㆓天之石屋戸㆒伏㆓汗氣㆒而蹈登杼呂許志爲㆓神懸㆒而掛㆓出胸乳㆒裳緒忍㆓垂於番登㆒也爾高天原動而八百萬神共咲於是天照大御神以㆓爲恠㆒細㆓開天石屋戸㆒而內告者吾因㆓隱坐㆒而以㆓爲天原自闇亦葦原中國皆闇㆒矣何由以天宇受賣者爲㆑樂亦八百萬神諸咲爾天宇受賣白言益㆓汝命㆒而貴神坐故歡喜咲樂云々故天照大御神出坐之時高天原及葦原中國自得㆓照明㆒と見え又神代紀正書に猿女君遠祖天鈿女命則手持㆓茅纒之矟㆒立㆓於天石窟之前㆒巧作㆓俳優㆒亦以㆓天香山之眞坂樹㆒

為レ蠱以レ蘿為二手繦一而火處燒覆槽置顯二神明之憑談一
是時天照大神聞レ之曰吾比閉二居石窟一謂レ當三豊葦原
中國必為二長夜一云何天鈿女命嘘二樂如此一者乎乃以二
御手一細開二磐戸一窺レ之とも有る此なり古語拾遺傳事紀等に出たるも大旨右の二典の狀なり
記傳八五十六丁伏汗氣の說に此物後世鎭魂祭儀
に遺れり貞觀儀式に大藏錄以二安藝木綿二枚一實二於
筥中一進置二伯前一御巫覆二宇氣槽一立二其上一以レ桙撞
レ槽毎二一度一畢伯結二木綿一訖御巫舞訖次諸御巫猿女舞
畢江次第に神祇官雅樂寮神樂次御巫衝二宇氣一次神祇
官一人進結二糸於葛筥一自レ一至レ十此間女官藏人開二
御衣筥一振動神琴師彈二和琴一衝二宇氣一神遊之儀也神代卷宇氣船不美止々呂賀須義也以二賢木一衝二槽上一也結レ絲自レ一至レ
十宇摩志麻治命十種神寶授レ之返死之縁也用レ糸自レ一至レ十計レ之也四時祭式彼祭料物に宇氣
槽一隻と有り鎭魂に此石屋戸段の儀を被用るは日神
の隱り坐るを招奉りし意味を以て遊散する魂を招鎭
る也以上取意と云れたる實然る言にて古語拾遺に凡鎭魂
之儀者天鈿女命之遺跡と有る此なり故今事の因みに
右の二紀を說て鎭魂の義を明らむ可し故今は鎭魂の儀に用有て說が故に少
か石屋段の諸注とは異なり其心して見る可し右の伏二汗氣一而踏登杼呂許志は天
宇受賣命茅纏之矟を以て俳優為つゝ踏動響し給ひけ
るか其響きに高天原の動るに至れるは豈唯俳優の故

耳ならむや天地の間に御照し坐る掛卷も甚も畏き皇
大御神を招出し奉らむと為る御心の天地の底際の內
に充實たるが故なり為神懸と有るは其極に至りて神
の憑着給ひて其事の當に應へる由を合言給へる物に
して其神明之憑談は所謂一二三四五六七八九十の歌
にて言義は人蓋を見よ神威炎々成々彌心の足にて人
とは神なり其所に集會給へる八百萬神等を云蓋、は
天石窟の御戸なり神威とは大御神の六合に照徹る大
御光を申せり炎々とは火の燃る狀に明るく成れりと
なり成々は祈禱の徵驗有りて御戸を開て出御す時に
成々れるなり彌心足は八百萬神等各も各も招奉らむ
と其御祈に仕奉れる其所詮有て彌々心足ひに有むそ
と云事にて大御神の今應に出給はむ兆を神懸り為て
宣ひ顯はし給ふ所也記傳に今此段の神懸は物の着て正心な失へる狀に得も云ぬ剖戲(ソレ)言を云て
俳優を為を云なり正心にては其人の得云まじき事を包ます言ふ神懸
とは云なり今俗に着(ツキ)物の為たる如く口走ると云ふ狀也」と云れ
たるは恐らくは僻事ならむ此は私記に此神明之憑談興二他處一爲二少
異一也諸神欲レ令三日神深見二奇特一故俳優萬態云々然則是作爲之言
未三必有二神所一託也と有に泥ましたるなめり此私記の言は外を云て
內を思はざるなり如何と成は諸神の日神をして奇まれ奉らむ為に俳
優萬態を物為られし事は然る事なれども其見奇むと為の心の充實して
通徹さる時は豈其感應有むや此神懸は天宇受賣命の如何も為て出し
奉らむと思疑し給へる御心の滿極る所より正心を失ふに至れる其
所に依憑て神の着給ひ(カヽリタマ)一二三四五六七八九十の言を以
て其神集に集給へる八百萬神に御諭し有ける也或問然らば何神の着
れりと為む答云大御神也又或云然らば天照大御神詢思レ寄の文に依れ

ば大御神の外にて在事は所知看ぬ趣なるを何と爲む予云天兒屋命の大占に卜相給ひし時に其兆有るは全く大御神の大御心なる物から御自御誨坐るとは知看ず爲(シ)て其兆に出る所即大御誨なると同事なり（師說古史徵三）に天孫本紀に凡厥鎭祭之日猨女君等主ニ其神樂ー擧ニ其言ー大謂ニ一二三四五六七八九十ニ而神樂歌儛と見えたり此を上に引る貞觀儀式江次第の文と考合せて御巫の宇氣槽に立て桙以て撞時に一二三四五六七八九十と云事知られ其一と云ひ二と云毎に綵を一結づゝ結ふ由なり其即天鈿女命の然宜へるに據れる儀なる事鎭魂之儀者天鈿女命之遺跡と有に思合せて知れたり」と有は然る言なり但此は共めて百千萬と云語も六言內句の神言に誨坐る謠なるを此に依て大御神は石屋戶を出御べき事の極なる故に天上にて常に囀居たりしも言靈に終に致ひ印とは爲たりけむ云々と云れしかども數名は天地初りてより以來有來れるなり但日文に在如く比布美用伊牟那夜許登毛知呂などと云けむも此時の神ことに此登布多美用伊都牟由那々夜許々能多理と有しは天宇受賣命の桙なを以て宇氣槽を衝給へる數に合せて右の如く石屋戶出坐の御言とに咲れりしぞかし然れば百千萬の言は殿乳宜(モ、チヨロ)ことも云て此時の事とも爲べけれども上より云下せる文に賣(ツ、)かず此は唯掛ニ出胸乳ー裳緒忍ニ垂於富登ーと有る事を八百萬神の見て共に咲ひ囂りつる語と爲べし右の一より十に至る數は十種神寶の綵に自然合應へるにて深き幽契有事なり　偖其氣の充々て徹達る所より神明之憑談の有る所以はしも眞に深き意味有事なり抑數の一は十の始なり十は一の終なり共に太一(オホモト)の一に歸りて天地の數の極を盡す是以て天宇受賣命大御神を招出し奉らむの一を執て其心天地の底際の內に至れり盡せり所以に石窟を開て深く幽居(サシコモリ)坐す大御許迄も其響き至れるが故に大御神の今出御むと爲る大御心の既く神懸り憑看て彼一二の御言を合宜給へるか其即天地の氣數を身體に員へ聚るにて後世胎息と云事の起なり呼吸を漫に外に出す時は神氣散て其精神衰へ倦て內に引時は神氣聚て其心靈なり其心靈なる時は天地神祇と合一なり古語に靈合と云は此なり又多麻布流とも云なり凡て天業に人立つ者の心は其底す時に行直て有る者なるか故に其事の上に完く側より得測り知ぬ奇靈なる事の成來る者なるも其は其心の天地に充實るより其神明の所在に至るが故に我が爲むと爲る志と神の合爲むと爲給ふ奇靈と相感して出來る業にて其神明の憑談と云者なり然れども其志怠む時は神亦此に逆放り其心敬ある時は神亦此を罰給ふ已に幸魂の下にも見る如く事の極は天地を通徹造る神の恩賴を背に負奉にまでは物も事も成得べき事なり此亦鎭魂祭の義なり　此祭を美多麻布理と云も我魂の彼に充實頼るに隨て其天神の御許に行觸れ其御靈に睦靈合て我身に降り鎭る故に奇靈なる神明之憑談を得て其言も行も正しく直く有て世にも人にも又勳功しかるべき者なり右の八神に大直日神を合せ祭る所以を思ふ可き者なり又次に擧たる布都之言本をも思合すべし但此は魂に就て布留なり彼は物を以て布留なり末は同義に歸めれと少か異あり倩布留と云は物の振動く事と耳思ふは委からず言は經有とにて此より彼に至るを云雨の降など云を思ふ可し又舊事紀（天神本紀）なる饒速日命天降の所に天神御祖詔授ニ天璽瑞寶十種ー謂嬴都鏡一邊都鏡一八握劍一生玉一死反玉一足玉一道反玉一蛇比禮一

蜂比禮一品物比禮一是也天神御祖敎詔曰若有二痛處一者令二玆十寶一謂二一二三四五六七八九十一而布瑠部由良々々止布瑠部如此爲レ之者死人返レ生矣是則所レ謂布瑠之言本矣と有を職員令集解にも饒速日命自レ天降時天神授二瑞寶十種一云々と有て右の文を載たれば究て古傳なる可し（其は下に云べし令二玆十寶一の令字を集解には合に作れり又右の天神本紀に饒速日命稟天神御祖詔乘二天磐船一而天二降坐於河內國河上哮峯一則遷二坐於大倭國鳥見白庭山一所謂乘二天磐船一而翔二行於大虛空一巡二睨此鄕一而天降坐矣所レ謂虛空見日本國是歟と有り其外に種々載せる事もあれども妄說に近ければ皆省きつ）又舊事紀（天孫本紀）に宇摩志麻治命以下天神御祖授二饒速日命一天璽瑞寶十種上而奉二獻於天孫一天孫大喜特增二寵異一矣ト有る此は古事記（橿原宮段）に故爾邇藝速日命參赴白二於天神御子一聞二天神御子天降坐一故追參降來即獻二天津瑞一以仕奉也と有ると同物なるか父子の間に傳の異なるなり（追參降は記傳十九に邇々藝命の御跡を追て天より降來るなり天より降るを參と云るは常の例に違へれども此は邇々藝命已に此國に降居坐る故に其方を尊て參とは云なり」と云れたる如くなるか追參降とは邇々藝命に天神の御使と爲て其天璽十種神寶を獻らむ爲に天降坐りとなり然れば饒速日命の此天璽を中州に齋きて其都を開給はむ運を待せ御在けむを神武天皇の大和國に入給ふ節を得て其天津瑞を奉りて天に復命し給へるなり舊事紀に身罷給へる狀に書せるは記者の謬なり）又天孫本紀（神武天皇即位元年條）に宇摩志麻治命十一月丙子朔庚寅初齋二瑞寶一奉二爲帝后一鎭二祭御魂一祈二請壽祚一其鎭魂之祭自レ此而始矣詔二宇摩志麻治命一曰汝先考饒速日命自レ天受來天璽瑞寶以レ此爲レ鎭每年仲冬中寅爲レ例有司行レ事永爲二鎭祭一矣所謂御鎭祭是也凡厥鎭祭之日猨女君等主二其神樂一擧二其言大謂二一二三四五六七八九十一而神樂歌儛尤緣二瑞寶一蓋謂レ斯歟と有り此文意を案ふに初齋二瑞寶一とは筑紫朝廷より以來天鈿女命の遺跡を逐て猨女君の仕奉來れるは彼桙を以て宇氣槽を撞て一二三四五六七八九十の言を擧て歌儛の所作耳なりしか此時に當て其十種神寶を神體と齋ひて彼死者も返生（カヘシイケ）てむと天神の誓（ミタメ）宣へる隨に十種神寶を振奉て帝后の奉爲に御魂を鎭祭り壽祚を祈請ふ事始れりとの義なる可し此に於て猨女君の所傳と物部氏の所傳とを合せて今の鎭魂祭の儀式は成整へりし者なりけり（尙事を分て云はば猨女君の傳る所は離遊の運魂を招續るを主と行ひ物部氏に傳る所は大御病坐す大御壽永く久しく坐む術なるべし宇摩志麻治命の名の宇摩志は例の可美にて麻治とは兒の由ならむ然れば此鎭魂の神術に依れるなり）偖天神の饒速日命に瑞寶十種を授て天降し給ひ皇御孫命に令獻給へる事は先に彼天津神籬天津磐境を起樹て事依し給へれども其は主と大御身の御守耳ならす天津日繼の御事にも萬事にも兼て事依し坐る所なるか此十種神寶は唯に大御身の御守に耳事依し奉給へるなり若有二痛處一者云々と仰給へるを以見べし其羸都鏡邊都

鏡は大御面を照し看行て御榮坐との表物八握劒は凶邪を罰平給はむ表物生玉は生活く爲死反玉は死者をも蘇生の爲足玉は御形體の具足ひ給はむ爲道反玉は浮れ行く魂を反し留む爲め蛇比禮蜂比禮は這虫飛虫を攘ひ又其か害ひをも治す爲品物比禮は諸の惡鳥惡獸は更にも云す凡ての妖を攘ひ邪を退けむか爲にて此十種の御守を得る時は更に疾病無く壽命長遠かる可き筈也（若て此十種の神寶は彼齋戸の八神と神直日大直日神の御靈形なる事云も更なるも生玉は生魂神足玉は足魂神死反玉は玉留魂神の御と所思しきな其他は何れを何れとも定難かり猶後人能く考ふべき者なり）故神武天皇の大御世よりは天皇の大殿の内にて齋祭らせ給ひ事と有ては其神寶を直に振て其術を行へりしを崇神天皇の大御世に至つて石上神宮に齋奉らせ給へり所レ謂布留御魂大神此なり天孫本紀（伊香色雄命條）に磯城瑞籬宮御宇天皇云々祭二八十萬群神一之時遷二建布都大神社於大倭國山邊郡石上邑一則天祖授二饒速日命一自レ天受來天璽瑞寶同共藏齋號曰二石上大神一以爲二國家一亦爲二氏神一崇祠爲レ鎭則皇后大臣奉齋二神宮一と有る此なり此よりそ朝廷にて右の鎭魂祭を行給ふにも十種神寶を直に用させ給はず其神寶の名目を呼けむを後には一より十の數に易て彼天鈿女命の故事に合せ謡ひ物爲られけむと所思たり（其は右の天孫本紀に至鎭祭之日猿女君等主二其神樂一擧二其言一大謂二一二三四五六七八九十一而神樂歌舞尤縁二瑞寶一蓋謂レ斯歟と有にて所知たり其は天鈿女命の天石屋戸前にて神懸有し一二の歌の數量の十數に叶ひたるに十種神寶の相叶ひて其數十なる右の二事を兼て一二三四五六七八九十と歌ふの事を存して神寶を寛々に振るの實無が故に縁二瑞寶一謂レ斯歟とは云る也）借上に引る江次第の本註に衝二宇氣一神遊之儀也神代卷宇氣船不美止々呂賀須義也以二賢木一衝二槽上一也と有は猿女君の神代より職と爲て仕奉しを右の續文に結レ絲自レ一至レ十宇摩志麻治命十種神寶振レ之返死之絲也用絲自レ一至レ十計レ之也と有は神武天皇御世より以來右は衝二宇氣一一二三四五六七八九十の數に合せて十種神寶を振し遺制にて絲を結ぶは物部氏の職なるを神祇伯の職掌とは成れりし者なりけり（若て其御魂匣を齋戸に鎭祭る事は天兒屋命より相承て中臣の職と仕奉る所なり猶下に引儀式以下の書共の事實を上なる言に合せて知るべし）故此祭は壽命を長く續くる神術なるが故に此事より及して人の世に在る事を生緒とも魂緒とも云り

古事記（水垣宮段）に大毘古命罷二往於高志國一之時服二腰裳一少女立二山代之幣羅坂一而歌曰古波夜美麻紀伊理毘古波夜意能賀袁々奴須美斯勢牟登斯理都斗用伊由岐多賀比麻幣都斗用伊由岐多賀比宇迦々波久斯良爾登美麻紀伊理毘古波夜於是大毘古命思レ怪返レ馬問二其少女一曰汝所謂之言何言爾少女答曰吾勿レ言唯爲二詠歌一

耳即不レ見二其所一如而忽失故大毘古命更還參上請二於天皇一時天皇答詔之此者爲在二山代國一我之庶兄建波邇安王起二邪心一之表耳と有る此歌は建波邇安王の邪心を起せるを神の少女に託りて天皇に諭奉給へるなるか歌意は此はや美麻紀伊理毘古はや己が緒を竊み殺むと後戸よ射行き違ひ前戸よ射行き違ひ窺はく不知と美麻紀伊理毘古波夜と云意なるか意能賀袁とは天皇の鎮魂して齋戸に鎮祭り置給へる御魂緒を竊取り殺奉らむと前戸後戸より行違ひ窺奉るを知食さるよとなり其御魂緒を窺奉るは大御世を傾奉らむと兇謀奉る業なるを神の驚せ給ひて天皇に令申給へるなり此を御紀には十年秋九月丙戌朔壬子と有り十五日なり幣良坂を和珥坂上とも一云山背平坂とも有り歌も少相違有り彼紀を見て知べし其次に吾聞武埴安彦之妻吾田媛密來之取二倭香山土一裹二領巾頭一而祈曰吾倭國之物實一則反レ之是以知レ有レ事焉と有るも兇謀なるを思合す可し因に云右の我之庶兄の我を記傳に汝之を誤れる者と見ゆ」と云れたれど師の書入に猶本の任に有べし俗に人を指て和とも和禮とも云即此也」と云れたるぞ宜き此御魂緒の說如此く定れるに就て猶深く此を思ひ惟ふに古事記御身滌段なる天照大御神の大御生坐の所に此時伊邪那岐命大歡喜詔吾者生二生子一而於二生終一得二三貴子一即其御頸珠之玉緒母由良邇取由良迦志而賜二天照大御神一而詔之汝命者所レ知二高天原一矣事依而賜也故其御頸珠名謂二御倉板擧之神一と有る其御頸珠の玉緒も瑲々に取動して大御神に授賜はせる大御父大神の御心は天壤と共に大御生緒長く大坐々て世中を御照し給ひ常しへに御恩頼を蒙らせ坐と授賜へる御表物なるが故に大御神の御倉の棚に大切に齋奉らせ給へる凡ての事の樣全く鎮魂の謂也齋戸に御魂匣を鎮祭らせると同儀なるを思ふべく且彼布瑠部由良々々と布瑠部と饒速日命に授坐る事も此より起れるならむと所思ゆ又同書御誓ノ段に天照大御神先乞二度建速須佐之男命所レ佩十拳劒一打二折三段一而奴那登母々由良爾振二滌天之眞名井一而云々所成神名云々速須佐之男命乞下度天照大御神所レ纒二左御美豆良一八尺勾璁之五百津之美須麻流珠上而奴那登母々由良爾振二滌天之眞名井一而云々所レ成神名云々此は事異なるに似たれども書紀に瓊響瑲々と有は同じく玉緒を振動かしたる也此に依て神等の成坐るは即御靈の殖るなり此れ亦鎮魂の縁を出さるなり伯家部類八神殿御正體之事條に御神體御筥之事二重筥一御殿五色絲縛葉八枚內筥の外大和錦包平結にて十文字に結內々水晶御玉御鏡御劔二御殿內筥同斷縛葉八枚五色絲御玉三御殿以下同上如此有る中には後世の樣なる事も交れゝども全くは魂緒の較略なり此を以て神代の有狀をも思像ふべき

者なりかし此御筥に玉を納るを以て思出たる事有り萬葉十五に到壹岐島雪連宅滿忽遇鬼病死去之時作歌に伊敝妣等能伊波比麻多麻可多太未可毛安夜麻知之家牟と詠るは此魂筥を家人の齋て待ざるか又は其筥に納る所の手玉を過せるに依て邪鬼に交こりて命死るかと云事なり此を以て古昔に此事の廣く世に被行し事を知へし旅立などには殊更に祭れると所見たり萬葉二十に始春の波都禰乃家布能多麻波波伎手爾等留可良爾由良久多麻能乎と有を始て人の命を玉緒と云ひ身死る事を玉緒の絶ると云など皆古の故事共より言れる言云も更なり此由に縁て我魂の離るを招返すを魂結と云ふ伊勢物語に思餘り出にし魂の有ならむ夜深く見えば魂結せよと詠る此なり此を以て見れば天照大御神に始まり天鈿女命に成り饒速日命に定れりと云へからむ鎭魂歌に豊日女と申す亦御名の出たる所由を思ふべくなむ此云まの欲き事も多かれど此に悉く說盡すべくも非ねば予が凡ての書共を見て知べし予は深く思ふ所有て此魂の事に心を任せて日々に爲る事成す事皆此穿鑿耳なり僧此を行へる事の跡の物に所見たるは天武天皇御紀なれども却て殊更に記されざるこそ恒例と爲て被行る徵には有けれ然れば同紀に十一年十一月發卯朔丙寅法藏法師金鐘獻白朮煎是日爲天皇招魂之又十四年十一月癸卯朔丙寅法藏法師金鐘獻白朮煎是日爲天皇招魂之と二所見えたる此は鎭魂の日に當て法藏僧の白朮を以て招禱の由に寄て招魂の禮代に獻れるか一の異事成を以て態と記されたるにこそ有れ是日爲天皇招魂之と有とは素より別々なる也是日と斷り別てるを以て知べし谷川士清が通證に四季物語云追儺の夜は白朮の餅薶(ソゲミ)鳥など燒奉り御餉の御迴りに奉る」今按朮餅見歲時記今五條天神宮從神米勝餅李時珍日搗疫及歲旦人家往々燒蒼朮以避邪氣稗鳥見今上下爲衞物叢取斷身之義也と有り公事根源抄鎭魂祭條に此祭を如法に被行れば殊勝の御祈と成べきにや然れば白河院は御脫屣の後も院中にて猶被行侍りき東宮中宮にても年々有事なり天安二年に停止られ侍りしを興行せられて貞觀元年十一月神祇官にて被行る今は年々の事に成れりと有り此天安二年に停止られしことは三代實錄十三丁に十一月廿日丁丑停園韓神祭自此之後鎭魂新嘗等諸祭皆停止と有を見誤らせ給るなり其は丑日園韓神祭寅日鎭魂祭卯日新嘗祭と引續て被行る神事なるを觸穢などの事に依て停止られしなるを自此之後を年々の事と思誤られし者なり同錄翌貞觀元年條に十一月十五日丙寅於神祇官修鎭魂祭と有を如常など記されざりし故に再興の事と見られたりけめども御代始の事なると神祇官にて被行たるとに依る故に修字を書れたるなり同二年十一月十四日庚寅於宮內省修鎭魂祭と有る此は此省にて行

れ來りし事を前年には神祇官にて行れつるか此度に本省に復りし故に態と記せるなり江次第に宮内省有レ穢於神祇官行之天慶八年と有を考ふ可し其より以後は異儀も非りける故に鎮魂祭如常とは記されたり伯家部類に十一月中寅日鎮魂祭レ之尤御代々奉レ始ニ主上院宮御方ニ御魂鎮之御祈禱執ニ行之一尤奉レ祭ニ念八神殿一云々と見えたり薩戒記應永廿三年條に御巫小童結髮着青闕服袍表袴云々御巫以ニ梓柄一合ニ琴笛音一突ニ續上ニ云々事體有レ若レ亡近代如此云々と有る以上深山御記長寬二年十一月十六日今日鎮魂祭也云々の文なり此を以て上古より連綿として傳れる事を知べし○貞觀儀式に云々鎮魂祭儀十一月中寅日中宮祭準レ此但東宮用ニ巳日一其日所司預敷ニ神座於宮内省廳事一○所祭は四時祭式に謂ゆる神八坐と大直神一坐と合せて九坐なり神座は江次第に東第一間立ニ楉棚一置ニ祭物一と有此なる可し次大臣以下坐於ニ西舍南一○廳事に神坐を設るが故に西舍南に着也江次第には上卿以下入レ自ニ宮内省南門一着ニ曹司廳須ニ先着ニ西細殿一と有此也少西設弁大夫座其南外記史座其南太政官及左右史生座共東面絕席其南少東官掌北面東舍有坐三列北第一間設外記式部丞錄座第二間太政官弁左右史生式部史生座第三間官掌省掌座北面西上○以上行事の人々の坐席を擧るなり酉二點大臣以下就ニ西舍座一神祇伯以下率ニ琴師御巫神部卜部等一着ニ榛摺衣一令レ持ニ供神物一左右相分入立ニ庭中一神部升レ自ニ東階一置ニ神寶於堂上一次昇ニ神机一升御巫從レ之次神部四人各持レ琴左右相分升置ニ堂上一神祇五位已上官人升レ自ニ西階一六位以下升レ自ニ西側階一就レ坐伯以下使部以上東面南上御巫南面東上○以上諸司の參入の次第なり大膳職造酒司供ニ八代物一縫殿寮率ニ媛女一升レ自ニ東側階一就レ座次内侍令レ齎ニ御衣匣一自ニ大内退出升レ自ニ東階一就レ座○御衣は天皇及中宮の御なり後に齋戶に鎮祭らるゝは此なり治部省率ニ雅樂寮歌人歌女等一升レ自ニ西側階一就レ座喚ニ召使一二聲召使稱唯趨就レ版大臣問ニ阿誰一召使稱ニ姓名一大臣宣レ喚ニ式部一召使稱唯趨出立ニ南外一喚レ之丞巳上一人入就ニ版位一大臣問ニ阿誰一丞稱ニ官姓名一大臣宣奉レ入ニ刀禰一丞稱唯出復ニ本列一仰云令レ奉レ入ニ刀禰一錄稱唯喚ニ省掌名一省掌稱唯仰云奉レ入ニ刀禰一省掌稱唯 少進云ニ大夫等參拜一五位已上先入就ニ堂上座一外記史率ニ史生官省等一出レ自ニ西舍一立ニ於屏下一待ニ式部省相引入ニ就ニ東舍座一訖大臣喚ニ召使一二音召使稱唯趨レ版大臣問ニ阿誰一召使稱ニ姓名一大臣宣喚ニ大藏省一召使稱唯退出喚レ之丞稱唯進就レ版大臣問ニ阿誰一丞稱ニ官姓名一大臣宣レ賜ニ鬘木綿一丞稱唯退丞率ニ錄史生藏部等一賚ニ木綿於筥一入先賜ニ神祇官人一次丞賜ニ大臣一錄賜ニ五位已上一次史生賜ニ判官以下主典已上一藏部賜ニ史生已下一主典已上安藝木綿史生已下凡木綿○以上諸司裝束の條目なり訖神祇伯喚ニ琴師名一二人共稱唯次喚ニ笛工名一二人共稱唯伯命ニ琴笛相和一詞云

美許登能布曳安波也 四人共稱唯先吹レ笛一曲次調二琴聲一訖琴師彈レ弦與二神部一歌二一成次雅樂歌人同音歌二一成神部一人候拍子御巫始舞每レ舞巫部擧レ舞三廻 擧云阿奈〻缶○此は古語拾遺天石屋段なる阿波禮阿那於茂志呂阿那佐夜憩飫憩」と有る此歌より出たるなり 大藏錄以二安藝木綿二枚一實二於筥中一進二置伯前一御巫覆二宇氣槽一立二其上一以レ桙撞レ槽每二十度畢一伯結二木綿鬘一訖御巫舞訖次諸御巫猨女舞畢次宮內丞一人次侍從二人次內舍人二人次大舍人二人舞訖復二本座一 ○以上神事なり 辨大夫喚二官掌一二音官掌稱唯趨就レ版大夫問二阿誰一官掌稱二姓名一辨大夫命レ喚二宮內省一官掌稱唯退喚二二音丞稱唯就レ版辨大夫問二阿誰一丞稱二官姓名一辨大夫命二御飯早速令賜丞稱唯退出喚二膳部一五六人共稱唯丞仰云賜御飯膳部共稱唯大膳進屬以下共起賜二神祇官一次大臣以下訖大膳進就レ版申云御飯賜畢共拍レ手三度 先後稱唯 觴三行亦拍手一度 不稱唯 訖各退出」と有り此中には中古より出來つらむと所思る事も無には非れども凡ては上世の遺風なり 猶下に總てを合せて論ふ ○四時祭式に云く鎭魂祭 中宮准レ此但更不給衣服 神八座 神魂高御魂・魂足魂々留魂大宮女御膳魂辭代主○御高魂は美都牟須毘と訓へし珍しき御名なり實に此御膳部神の正實は豐受大神に坐せば如此き御名を負給ふ可きになり必魂を誤字など〻思惑ふ可からず首卷の三詞の下に云り 大直神一座 ○神直日神を合せて一柱に祭らせ給へるなる可し十柱神實の負坐に計るに決く二柱なり 大刀一口弓一張箭二隻鈴廿口佐奈伎廿口絁一疋木綿五斤麻十斤筥一合瓫筥一合明櫃一合供二御飯一笥一合御食薪稻二束案一脚宇氣槽一隻臼一口杵二枝槲四把薦一枚韓竈一具杓四柄瓮二口堝四口褁葉薦一枚右其日御巫於二官齋院一舂レ稻簸以二瓫筥一炊以二韓竈一訖即盛二槲笥一納レ櫃居レ案神部二人執向二祭所一供レ之 ○祭所は宮內省を云ふ 官人以下裝束料 中宮准レ此 伯已下史已上七人宮主一人 已上纂摺袍 絁卜長上二人彈琴二人巫部神部一人各賜二靑摺袍一領袴一腰一史生四人神部十三人卜部十二人使部三人各靑摺布衫一領 已上縫殿縫賜 御巫一人 中宮東宮御巫准レ此 御門巫一人生島巫一人各靑摺袍一領 表裏別帛三丈 綿二屯下衣一領 表裏別帛三丈 綿二屯單衣一領 帛三丈 表裙一腰 表裏別帛三丈腰料一丈 袴一腰 帛三丈五尺 綿二屯單袴一腰 帛二丈 帔一條 帛二丈 褶一條 緋帛四丈 紐一丈 絹三丈 髻髮幷襪料細布一丈領巾紗七尺 櫛二枚履一兩座摩巫一人靑摺袍一領 表裏別帛二丈五尺 綿一屯下衣一領 表裏別帛二丈五尺 綿一屯單衣一領 帛二丈五尺 表裙一腰 表裏別帛三丈腰料一丈 綿一屯下裙一腰 表裏別帛三丈腰料一丈 袴一腰 帛一丈五尺 綿一屯單袴一腰 帛一丈 帔一條 帛一丈 褶一條 緋帛一丈五尺 紐一條 絹一丈 領巾六尺襪料細布五尺履一兩右中寅日晡時 中宮鎭魂同日祭之 五位已上及諸司官人參二集宮內省一式部依レ例檢列大臣若參議已上就二西舍座一神祇官人已下神部已上着二靑摺衣一 官賀

（受備領給）率御巫等人就廳上座（御巫南面伯以下使部已上東面西上）內侍持御服自內退出大膳職造酒司供八代物同時參（中宮東宮）（進此）縫殿寮令猿女參入即大臣昇就座（北面東上）喚召使宣喚式部召使稱唯退出喚之即判官已上一人進就版位大臣宣諸司令參入即稱唯退出令參入（五位已上就廳座北面六位已下分就東西舍坐）坐定大臣命召使令喚治部令歌女參入又喚大藏省令賜蠶木綿并如上儀訖神祇伯召御琴彈某甲（二人共稱唯）次喚笛工某甲（二人共稱唯）又命云御琴笛會之（四人共稱唯○儀式に云く琴笛相和詞云美許登爾布曳安波世）先吹笛一曲節調御琴歌者始奏神部於堂上催拍手御巫及猿女等依例舞訖即神祇官五位六位各一人（中臣忌部）及侍從五位以上二人宮內丞一人內舍人二人大舍人二人以次進舞於庭訖就本座辨官命宮掌喚宮內省令賜酒食行酒三坏以後拍後手退出（○以上當日の式にて上に載る儀式を約記せるなり）巳日晡時供東宮鎭魂と有り宮主秘事口傳抄に后宮鎭魂祭被付行と有りて天皇后宮同日なるが東宮の鎭魂は巳日の例なり（然るは次の卯日新嘗祭辰日豐明節會なるが故に其日をはらるゝなりけり）○江家次第に云く鎭魂祭（十一月中寅若有三寅下寅行之有例云々而新嘗會可行之由見式）上卿以下入自宮內省南門著曹司廳須先著西細殿召外記問諸司具否召辨問祭物具否後

著曹廳也而近代彼省無一屋仍曹司廳跡立平張行之東第一間立椅棚置祭物又倚付鈴賢木其西安木槽（覆置）上卿座第三間辨座第四間神祇並治部雅樂座西第一間上官不著座在幄外若辨參著之後上卿參辨暫隱廳西方後著上卿並辨北向自餘西向內侍乍乘車立幄北（雖須著幄座近代無件）女官持御衣匣置東第二間（須五位藏人奉仕也然而近代無件）次上卿召召使（二音）召使稱唯進立庭中上卿宣誰曾召使申官姓名上宣刀禰入末津利禮召使稱唯出召之諸司須此後著座也上卿召召使如前上宣大藏省召（世）召使稱唯出召次大藏丞立庭中名謁如例上宣蠶木綿給（開丞獻）上卿上卿取之結冠纓（近代結巾子）錄獻辨史生分諸司次神祇雅樂神樂（神琴師彈御琴）次御巫衝宇氣槽上也（衝宇氣神寶儀也神代上卷宇氣船布美止々呂加須義也以賢木衝槽上也[illegible]糸自一至十[illegible]十種神寶振之返死之緣也用糸自一至十計之也）次神祇官一人進結糸納於葛筥（自一至十）此間女官藏人開御衣筥振動畢神祇官著座次諸司供膳（居葛筥蓋）次造酒司獻盃三獻上卿不擬飲之次後宮行之（上儀同）宮司居膳（用棚机二人舁之）次盃酌三獻次神樂畢次有倭舞事南庭敷筵（東西妻）其前置机々上置賢木神祇官一人史一人宮內丞一人侍從二人內舍人二人大舍人二人中宮進一

舍人二人次第舞次辨召官掌官掌立庭中辨問曰誰曾官掌申官姓名辨宣宮乃內乃省召世官掌出召宮內丞立庭中辨宣誰曾丞申官姓名辨宣御飯多良加仁給丞稱唯出次大膳屬進庭中申云御飯多个良加仁給畢次上卿以下退出と有り右の儀式に大旨異りも非れども大に又精粗有なり能々挨合せて曉る可し○宮主秘事口傳抄に云く十一月中寅日鎭魂祭宮內省儲幄二棟以東西爲妻次上卿辨參着上卿北面辨其西方北面內侍幄北方南面西上先內御方次后宮鎭魂祭被付行旨宮御壇之時事也內御方御衣藏人女官相具次上卿召召使稱唯召人召使於南壇下召織部司次上卿召召使仰云召大藏省吹召使如先召大藏省次大藏丞參南壇下仰云誰申上姓名次可進綿木綿由被仰其時廻西方入西幄門自北方進緩木綿先上卿次辨以下次辨召官掌官掌參辨後仰云誰官掌申姓名次諸司可着座之由被仰次中臣官人宮主同着幄西東面南上次御巫女參立次雅樂司參着始御神樂次宮主取內御方御玉結糸置上卿座前次歸着本座次中臣官人進寄十合結手時神琴師引琴計一二三四五六七八九十十結也中臣歸着本坐也近年中臣官人不參之間宮主此役此間女官御衣筥置八足上此八足對坐上卿坐取員之間女官立筥蓋少開進令動振也但近代此儀有名無實也○薩戒記にも御巫以倭琴合琴音突槽上云々此體有若亡近代如此と有り神事の疎略に成行く事歎息に堪す內御方事畢宮主進寄取件糸返給史生次宮主取后宮御方糸同置之此儀如先度是云一二三四五六七八九十而結也后宮內侍取入幄各別也於北砌御玉結畢賜后宮內侍○此にてはの內御方后宮御方の御玉結糸を后宮の內侍に賜ふ事と見えたり上世以來御玉結絲は神祇官の齋戶に納置給ふ御定なるを甚々有まじき御事なり次辨召辨侍可居饗之由被仰三獻畢辨召官掌官掌參仰云誰申姓名次召宮內省官掌召宮內省參仰云誰申姓名仰云可候此地稱唯各退出と有り作法の漸々省略たる程見つべきなり文に內御方と有は天皇の御事を恐みて然申せるなり

○年中行事秘抄實所雜事條に云く舊記云天照大神閉天岩戶隱坐之時忌部遠祖太玉命根掘天香山眞賢木以賢木祭神之由此也種々幣取垂持時中臣遠祖天兒屋根命禱申猿女君遠祖天鈿女命日影爲縵取竹手球櫟石屋戶伏覆槽置而踏登動搖爲神樂十一月鎭魂此由也八百萬神共咲之于時天神語吾今隱居天下將闇天鈿女命何以爲歡樂八百萬神亦何咲之天鈿女命白汝命勝貴神坐焉故歡喜咲樂耳太玉命出鏡映之天神大怪臨見

之手力雄神在前隱立石屋戸掖取御手曳出奉倚出端繩控度御後出端繩此由也請曰莫復入坐○以上文なり以下記者の語なり于見觀之新嘗會神態之前寅日供奉件鎭御魂祭其神所行事○神所とは上に祭所と有此なり立廻賢木其中伏船御巫登此船上以金付木○以金の金は鈴には非るか上に引る江次第に付賢木と有と同物と通ゆればなり歌合儛猿女亦儛唯以彼義良有以也と有る舊記は全く舊事紀を本と爲て佗の古書を合せたる文なるか上に記紀を引る文に甚能合て愛く又立廻賢木と有は儀式に敷神座於宮内省廳事と有る神座の大網をも知へく且神籬の故事にも合せて思ふ可き文なり江次第にも立諸棚云々の事は有れども此状見えず又同書に載れる鎭魂歌合せて八首なり其句の終に略注を爲て界(サカヒ)とす 阿知女度一於々於々度三阿米都知爾伎由良加須波佐由良加須迦微和賀母加微許曾波伎禰伎許宇○阿知米於々於々は内侍所御神樂次第なる阿知女法にも見えて警蹕の詞なり下此に倣ふ可し次なる阿米都知爾より以下歌なるなり伎由良加須は杵令動にて杵を以て槽を突事なり此に天地の氣を動搖し活かす義を兼たり佐由良加の佐は眞にて宇宙大氣中に充滿せる神靈なるを其を動かすとなり迦微和賀母は神も我もなり迦微許曾波は上なる天地に云々へ返るなり伎禰伎許宇は杵音聞ゆならむと謂ひ訛れるなる可し神も我も靈と氣と相共に覺き榮ゆる意なる可し 阿知女度一於々於々度三伊曾能加美布留能夜斯呂能多知賀母登禰賀布曾能古爾曾禮多氐麻都留○此は杵の歌なり石上振社は神名式に大和國山邊郡石上坐布留御魂神社なり多知賀母登は大刀之本にて當社に在す布都主劔大神に坐り禰賀布は祝なりけむを如此唱誤しならむ曾能古は右の石上神宮の御巫なるべし巫を加本能古と云を思可し曾禮多氐麻都留は其御祭を行ふ由なる可し此等も天神本紀なる十種神寶の事に由縁有事なり等閑に思過す事勿れ

阿知女度一於々於々度三佐都袁良我母多紀能麻由美於久夜麻爾美迦理須良志母由美能波受美由○此は琴の歌なり佐都袁良我は狩人等これ也母多紀能麻由美は所持木之眞弓なり由美能波受美由は弓弭所見にて弓を云て琴の事と爲るは天石戸段に弓を張を並て彈(カきつろか即琴の始なるを以なり 阿知女度一於々於々度三能保理麻須登用比流賣我美多麻保須母登波加那保古須惠波紀保古○此は杵の歌なり能保理麻須は下に日神の事を申す料の發語なり登用比流賣とは大御神の亦名也美多麻保須は御魂欲すにて彼石屋隱の時に招奉らし、を云なり倩此歌は天鈿女命の宇氣を衝給ひしを云なり

阿知女度一於々於々度三美和夜麻爾阿理多氐流知賀佐乎伊麻佐賀延傳波伊都迦佐迦延牟○此は日影の歌なる可し知賀佐は如何に考ても得難し若くは遠賀佐にて猿(サル)遠賀世のことなるべし今不榮ては何日か榮むと今日を大に祝稱たるなり倩遠賀佐乎の乎は用と云に同じきなり記傳阿那邇夜志愛袁登古袁の下見可し 阿知女度一於々於々度三和藝母古我阿奈志能夜麻能夜麻毘登々比登母美流賀爾美夜麻加豆良世與○此は蔓の歌なり和藝母古我は神樂歌に卷向之と有しを誤れるなるべし穴師山大和國城上郡なり山人は樵夫を云に非ず其山に長存せる神人を云なり神界の八の字に蔓を掛御在すを云ひ且頭魂祭なる故に長生を祝ふ義をも包たり 阿知女度一於々於々度三多麻波古爾由布登理志傳氐多麻知登良世與美多麻我理多麻我理麻志々迦微波伊麻曾伎麻世留○此は御魂返の歌也一二の句は魂筥に木綿取垂てなり上に引る伯家部類なるは神殿御正體の筥を本緒にて十文字に結なるは此事に似通ひたり多麻知登良世與は魂津取らせよならむか津は津速產

靈神の津にて魂を繋むる靈々なり御鬼上り魂離坐し神は今ぞ來坐るなり又と云ふ事にて我身を離散し放れたる精神を今神の作ひ來坐るなり又天氣の中に充滿せる神の魂の身に添ざりしも寄來る由なり阿知女一度於々於々三度美多麻美爾伊麻志々迦微波伊麻曾伎麻世流多麻婆古母知氐佐理多留美多麻多麻賀幣志奈須夜〇此も右の一連なり此は謂魂の身を去りて往坐し神は今ぞ返來坐る魂筥を我が持て先に去りたる御魂を魂返しなすよと云ふ事にて今御玉緒の御魂筥に藏る事を云るなり能く爲すは混ひぬ可し次一二三四五六七八九十〇此は上に說り天照大御神の石屋隱に天鈿女命の神樂を奏させ給ひし時今出坐むとする事を神託爲て八百萬神に令聽給へる歌なる故に此鎭魂祭に取て此は無く彌き神呪とは爲れり十度讀レ之毎度中臣玉結也と見えたり何れも此を當日の神事の次第に配當て試るに此を以て又大に得る所少しと爲す其は下に云を見べし〇此鎭魂祭は四時祭式には小祀の部に收られたり小祀齋宮齋者內裏不レ齋と有此なり然れとも職員令神祇官條には大嘗鎭魂と並擧て他事を記さず天孫本紀神武天皇御世條に宇摩志麻治命藏二天璽瑞寶一以爲二天皇鎭祭之日一天皇寵異特甚詔曰近宿二殿內一矣と有など彼此を思ふに上古より以來殊に此事無き御政事には有けるなり天石屋戶の時の神樂の狀を始て凡ての儀式を用らる此亦甚重き證也古語拾遺に凡鎭魂之儀者天鈿女命之遺跡然則御巫之職應レ任二舊氏一而今所レ選不レ論二他氏一所レ遺九也と有も獨御巫に他氏を用らるゝ故耳ならむや其本は此御政事の漸々故實に違ひ行に任せて然る事も有けるなり臨時祭式に凡御巫取二庶女堪レ事充レ之と有り此を以て此祭の衰へたりし程想像る可き者なりかし已にも引る宮主秘事口傳抄にも近世此儀有名無實なりと見え薩戒記にも事體有レ若レ亡近代如レ此と有などを思可し甚惜しき事ならずや抑此祭の起元はしも然る少縁の事には非す天地の元始の時より八百萬千萬年と永く世を經て次々に整ひ成れる者なりけり天地世界の立るも神人萬物の成れるも此鎭魂に依ずては事として立事無く物として成事無き理なり其は天中に神積坐す天之御中主神の御靈二柱に殖り別れ坐て高皇產靈神神皇產靈神と成出給ひ其產靈を以て天地萬物を天中に結成し給ふ此則天之御中主神の御靈の幸はひなり此二柱神等の天中に御靈を振して相結はり合給て天地萬物を生成給ふ事神典の古傳に著明なり色葉字類抄に幸字を注して吉而免レ凶也と云るは然る言なり神の幸魂の相預ふ時に何なる凶事の寄來らむ若てこの二柱の產靈に資て天中に一物を成給へるが其淸陽の氣の上れるは天と爲り重濁れる質は下りて地と成る此を天地開闢と云ふ而して天に就て宇麻志阿斯訶備比古遲神天之常立神成坐て此を鎔造結ひ地に就て國之常立神豐雲野神成坐て鎔造給へるか其は顯露に成る事にして實には幽冥より皇產靈神の御力を添給へるなり顯宗天皇御紀なる日神月神の御託言に我祖高皇產靈神神皇產靈神は

天地を預鎔造し、御功坐りと有此なり預字に深く心を留む可き者なり此亦彼幸魂奇魂の謂にして亦此鎭魂の基本たり此を美多麻布理と云は人の德を令立給ふ爲に天神の世に幸へ給ふ御魂の降下り預して其人の素より魂を太く大きく齋鎭め給ふ由なり萬葉十六に物部乃八十乃心呼天地爾念足橋玉相者君來坐八跡と有るは我心の太く高く思至れらむには彼方の人の心にも入て靈合と云事なり此古傳を仰ぎて今も行はむに天地の底際の內に何れか至り及ばざらむ又十五に多麻之比波安之多由布幣爾多麻布禮杼と詠るも靈性の殖る義なり此を唯歌詞と思ふべからず然る傳有て詠る所と聞ゆ又顯宗天皇御紀の室壽御詞に御心之鎭也とも御心之林也とも御心之齋也とも宣給へる鎭は心の體なり靜にして動かざるを祝き林は榮々しと爲て哀しむ所無を祝き齋は不足事無く美好しく成就ふを云て何れも此鎭魂の謂なり（此神典中の甚しき一大事なるを昔より曉り得たる人無きは甚(イトヽ)も拙き事なり今世と雖も弓馬鎗劒の術を心着る武士は更なり諸の技藝に亘る者と雖も其術の神に入る妙處を得る事は全く鎭魂の神助有て其意氣天に貫通(ツラヌ)き精神宇宙に充滿るが故に然るなり然るを文事に係る耳此理を知れる者一人も非るは全く漢籍の小理屈に惑へる故なり儒者の口に仁義を[illegible]て一身に不仁不義を行ふ徒は其[illegible]氣書典より外に通はず精神亦彼聖賢と云る小賢(コサカ)しき者に相交こりたればなり然れば鎭魂第一義なる神典を學びながらその[illegible]を得ざる輩などは不急く漢意の迷闇て有る）

なり若て國之常立神豊雲野神の御靈殖て大地に伊邪那岐命伊邪那美命二柱坐り此に於て天神の命以て此漂在國を修理固成と詔ごち給ひ天沼矛を授けて事依し給へり此時二柱神其天沼矛を以て滄溟を探給ひて淤能碁呂島を得給ひ此所を天之御柱と見立八尋殿を化竪給ひて大八島國を始て國の八十國島の八十島を生み給ひ世中に在と有ゆる萬物及八百萬神を生成給ひて[illegible]既に至り德亦大に成れり此を以て復命し給ひて日之少宮に留り給ふ如此く御靈威の尊く成給ふも右の預鎔造る皇產靈神の御所業なり若て其神は神にも人にも御魂を分り預御在して其事業は令成給ふと雖も其自此を思ひ此を惟ひて心を盡し力を究むるに非れは此方に招魂り爲る本體無が故に御恩賴を蒙ふ事無じ我大きく招けば神大きく降り我小く招けば神小く降る事影の形に隨ひ響の聲に應が如し然らざれば火の薪無きに燃ず水の湿ざるに流ざると等し豈此を少緣に思過す可しやは彼石屋戸段にて天鈿女命の宇氣伏て矛を衛れしは此吉事の狀を擬ばれたるなるを可く所思ぬ（二柱神の太古に卜相て天神の御心を卜問奉給へる事は有石屋戸段に天兒屋命の鹿の御卜を行ひて大御神の大御心を卜問奉給へるに同じく皆受る所有て其に本就(ツキ)けむ事云も更なり）然して伊邪那岐命の御

身滌の時に當て三貴子を生給へるが其時大神大く歡喜給ひて我は御子生々て三貴子得たりと宣ひ其御頸珠の玉緒瑲々に取動搖して天照大御神に賜ひて汝命は高天原を所知食せと事依し奉給ふ此玉は天神より天沼矛を授かり賜へるに因准て授奉り給ふ御賜物にて鎭魂の象物なり又己命は天神の御恩頼を蒙坐て功至り德亦大に成給へるに習はせ奉給はむとの御事にて後に十種神寶を振ふ事の起なり其は布瑠部由良々々とは一を伸て十に衍すなる者なりと思ゆればなり又御魂結の本緣なり若て天照大御神の其を御倉板擧之神と齋ひ給へるは御魂實を齋戸に齋奉らせ給ふ神事の始なる事云も更なり鎭魂歌八首の中に能保理麻須登用比留賣我美多麻保須云々と有も全く石屋隱の時の事耳に非ず此故事に依る事なりかし〔[illegible]〕若て天安河の件に至ては須佐之男命の御玉天之眞名井に振動搖し濯[illegible]ひて噛五男三女の神を生坐て天津日繼の事定れる此亦御靈殖なる事上に云るが如し也〔其は其御子生坐むとの所思に[illegible]し給へる大御心の寛々に清明くせる故也〕天石屋戸段にては天照大御神を招奉る爲に八百萬神等神議り坐てその斬奉る中に五百枝賢木の上枝に玉を著中枝に鏡を繋下枝に木綿を取垂たる此は御衣の料なるが此を太玉命太御幣と取持して天兒屋命太祝詞事壽白されたるが凡て神に獻らるゝ幣帛を左右へ振て奉る例なるを以思ふに必此時に始れるにて鎭魂祭に御衣を筥中に入て振奉る事の本緣と聞えて鎭魂歌に多麻婆古[illegible]由布登理志氐々と有は此事也又鎭魂歌に佐都賣良我毛多紀能麻由美と有は天香弓六張を並て御琴に爲りたる故事を賦る事著明く儀式に琴笛相和と有に通ひ又木綿鬘を大臣以下に賜る事も何[illegible]昔此時の故事に據さるは無を後々少の異差の出來る迄の事なり又猿女御巫の桙を衡て舞なとは云迄も無く彼謂ゆる天鈿女命の遺跡なる者なり〔[illegible]〕若て天神御子降臨の時に及て彼五伴緒神供奉にて天降り給へる中に天鈿女命は其神樂を以て天皇の御魂を齋奉られ天兒屋命は神籬を齋給ひ太玉命は太玉串を捧奉るなど天上の儀の如く供奉り來れりしなり〔[illegible]〕然に天孫降臨の後に天神御祖より饒速日命を御使にて十種神寶を天降し奉給へるに彼命中州に降着坐て大神御子の萬代に不易る大宮所を定給はむ

期を待御坐しけるが神武天皇東征の運に當て此を奉て神退去給ひ天に復命し給ひければ其子宇摩志麻治命其神術を傳て天皇元年十一月庚寅日始て天皇皇后の御爲に鎮魂祭供奉られたり此年よりぞ天鈿女命より傳れる術と饒速日命より傳れる術と一に合せ行ゝ事と成たる也（凡て神事の大旨天石屋戸に始て備れるに何の不足る所有て饒速日命に命令を傳て天降し給けむと思ふに天鈿女命の傳る所は尋常の鎮魂祭なり饒速日命の行ふ所のは若痛む處有は此十寶を振て鎮めよ如此せば死人も生返らむと宣るに表物にて常と變との差別也此を打合せて其より後の祭式は定れるにて儀式以下の書共に見えたる中に其石屋戸の時ならぬ手振の且々交れるは饒速日命の後より加はれるに又世を逐て革まれる事も有るなりけり）此に依て饒速日命の子孫に傳て此鎮魂祭の事を統領（スヘフサネ）て仕奉る狀は彼中古以來に神祇伯の行ふ職掌なりし事云も更也偖此十種神寶は石上に坐布留御魂大神に坐り社說に建布都大神中央大室布都努斯神左第一室宇麻志麻治命左第二室白河天皇左第三室布留御魂神右第一室五十瓊敷命右第二室市川臣右第三室と有りて合せて七座なれども式にては一座古書に見えたる所は二座なり布都御魂神と布留御魂神と別なる事は平野祭詞の下に云るが如し（然るを後に彼家も甚く衰へ且別に神祇官を置るゝ世に成て神事と公事と遠く成れるが爲に此祭さへぞ年緒絕ず行るゝとは云へども上古の大（イミ）しきに計較れば形計りと云迄には成れりける）○拾芥抄（諸頌部）に見ニ人魂一時歌魂は見つ主は誰とも知ねども結留めつ下（シタ）交（カヘ）の褄（ツマ）」誦ニ此歌一結ニ所著衣妻一と有り此は簾中抄にも此事有て男は左の下交の褄女は右の下交の褄を結ぶ事なるが人魂とは我知ず離魂せるか時として人眼に著（カヽ）るを云ふ此歌こそ後世凡人の作ならめども衣の褄を結ぶ事は全く上に說（イ）ふ玉緒の事より出でたる也（此は完て功驗有る事なる由今世と雖も人も行ひ見て能知る所なり）此も無下に近世の杜撰には非ず蜻蛉日記に或著女神（サヤ）には衣縫て奉るこそ宜なれ然爲給へよと寄來て進めけば厭乞（イデ）試むとて縑（カトリ）の雛衣三縫たり下交（シタカヒ）共に云々白妙の衣は神に讓てむ隔ぬ中に返し成す可く」唐衣馴にし褄を打返て我が下交に成す由も哉」云々と有る歌の狀など鎮魂の由と通えたり（鎮魂は神の御魂を招きて我魂を太く爲ると亦我魂の放れ散るを招返し留るとの祭なる事上に說る如くなれば右の意を含める事著きを思可し）源氏物語葵巻に歎き餘に空に亂るゝ我魂を結返せよ下交の褄」と有も我魂の放るゝを結返す由なるなど皆此鎮魂の術より出たるなり（狹衣にも魂の通ふ當（アタリ）に非ずとも結や爲まし下交の褄」と詠り）

延喜式祝詞講義十三之巻

嘉永四年正月十一日

淡路國　鈴木重胤　著
出羽國　大瀧光賢
丹後國　稲葉太訓　挍

○伊勢太宮（イセノオホミカミノミヤ）

此に載れる伊勢太神宮の祝詞合せて九條なり然れども上に出たる新年祭六月十二月月次祭詞も有る上は重復せるが如きも有り思ふに上なるは御天降の始より崇神天皇の大御世に至る迄同大殿に坐し間も用ひ來られし詞なるを垂仁天皇二十五年に伊勢に鎮坐し後も素より有來し任ながらに伊勢の地名を加て用られし者なり其は右の新年月次の詞共に皇祖天神の詔命を奉て高天原より天降坐し初御世より有初つる事已にも云る如く高天原爾神留坐皇睦神漏伎命神漏彌命以天社國社登稱辭竟奉と有には大御神の御事も其中に收て申せる事著明なり其は其大御神の詞に辭別伊勢爾坐天照大御神能大前爾白久云々と有を以て知れたり又右の事を結て故皇吾睦神漏伎命神漏彌命登宇事物頸根衝抜氐皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣と有る此は今献らせ給ふ幣帛の事は皇祖天神の詔命なる由なるを其献らせ給ふ始は御天降の當今より云續く事に非ず爲ては云まじき文なるを思ふ可し（此は已に其詞の下に云れども又此に主と有る事なるが故に再出なり其心得有べし）偖此九條の詞の體裁の右の詞には異りて甚古くも非りけるに就て考有り前なるは神祇官にて諸祝部共に宣る詞なるが儀式（新年月次祭條）に神部執レ幣頒レ之と有る本注に太神宮幣帛者差レ使進レ之と見えたる如く御使を奉らせ給ふ事の有るに依て後に更に作られたる者と見ゆ（然れども神祇官にて宣る所は諸社と一に在る事にて唯辭別の文の添れる耳別なり）此に出たる六月十二月月次祭詞九月神嘗祭詞共に其體裁こそは後れたゝめれ詞に天照坐皇大神乃大前爾申進留天津祝詞乃太祝詞乎云々と見えたるに殊に神嘗祭の方には大中臣太玉串爾隱侍天今年九月十七日朝日豐榮登爾天津祝詞乃太祝詞辭乎稱申事乎云々と受結たれば其中間に在るぞ天津祝詞なるに如何なる事を然云ならむと見るに天皇我御命爾坐御壽乎手長乃御壽止湯津如ニ磐村一常磐堅磐爾伊賀志御世爾幸倍給比阿禮坐皇子等乎毛惠給比百官人等天下四方國乃百姓爾至萬天長平久護惠美幸比給止

云々と有る何の事も無く今京以降の語なるを天より傳來つる太祝詞の如云るは事の狀違へるに似たり然れども中古の人と雖甚も恐き大御神に對奉て已が杜撰を以て天津祝詞乃太祝詞を云拵ふ可き事無ればは必受る所有るべしと思定て彼祈年月次の古祝詞を見るに其文中に皇御孫命御世乎手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉茂御世爾幸閇奉と有を長く衍たる迄にて古文の簡易なるを今體の繁雜しく云易たる文字遣等を少しく改たる迄の事なり然れば右の古祝詞即天津祝詞及太祝詞なるが故に少か時世に合せて其語は易ても猶古き稱の任に然は呼るなり是を以て此の詞其の今京に至て更に物爲られたるなる可き事を知るべし但今京にして更に作り加らるゝ事には在れども必古きに根據(モトヅ)きて物爲られたるが故に事實に於て少か誤れる所無き事云も更なり譬ば古祝詞に御前者皇大御神能大前爾如ニ横山ニ打積置氏奉乎波平聞看と有は九月神嘗の事なるを此の其詞に二三郡國々處々寄奉禮留神戶人等能常毛進留由紀能御酒御贄懸税千税余五百税乎如ニ横山ニ置足成天と事を委しく云ると同事なり如此く更に作加られたりと雖も古きは古きにて此を棄(ハフラ)さす用させ給ひて天地と日月と共に遠長く被行るぞ然は云へ神の斯文を喪ひ給はざるには有べきなる偖又四月九月神衣祭九月神嘗祭等も其始天石屋戶隱の時に起れゝば上古より有來る神事なる事云も更なるが其詞い甚古くも聞えねば世を歷て後に改れりと雖古例に倣ひ物爲られたる者なり○伊勢の御事は已に第三卷(祈年祭第五語條)に說れども尙此を記奉る可し神名式に伊勢國度會郡大神宮三座(相殿座神二座並大。預ニ月次新嘗等祭ニ)と見え伊勢大神宮式に大神宮三座(在ニ度會郡宇治鄕五十鈴河上ニ)天照大神一座相殿神二座と有る相殿坐神二坐は皇大神宮儀式帳天照坐皇大神(所稱天照意保比流貴命)同殿坐神二柱(坐ニ左方ニ天手力男神ニ御形乃弓坐右方ニ萬幡豐秋津姬命ニ也此皇孫之母御形劍坐)と有此なり此は倭姬命世記に御戶開神二坐天手力男神拷幡千々姬命と有る如く天石屋戶を開奉て功坐神等也但古事記には大御神の御像鏡の事を記して次思金神者取ニ持前事ニ爲レ政此二柱神者拜ニ祭佐久久斯侶伊須受能宮ニと有れども其は一神を漏せる傳也神代記に復劔ニ天兒屋命太玉命ニ惟爾二神亦同侍ニ殿內ニ善爲ニ防護ニと有るに相照し見て知るべし又右の思金神は天兒屋命の亦名なる事は古史徵百三十三段に說れたる如くなれば此二柱神者と有る一柱は決く太玉命を脫せるなり此二柱は甚も古より大御神の相殿に坐しを豐受大神を令坐奉給けるより皇御孫命に屬奉給ひて右の二柱を外宮に傳給ひて其時迄佐那社に坐し御戶開神を迎取給ひて大御神の相殿とは定め給へるなり此は平田翁の說なるが此事の甚美き考なるを取て予も更に思寄れる說をも合せて第三卷第五詞の下に云へり又此下なる豐受宮の下にも云を見よ偖右の天手力男神の御戶開神に坐事は古事記書紀の趣にて明亮なれば今辨るに及ばず拷幡千々姬命の御戶開神なる事は世記上代本紀及神宮の古書ならでは全に所見無しと雖も此亦深き故有事なり右の拷幡千々姬命を諸書に天之忍穗耳命の后神にて邇々藝命には御母なる由に傳たれど然に非

ず師說古史徵開題記三十七段の如く其兒玉依姫命亦名は丹舄姫命ぞ天之忍穗耳命の后神に坐せば其御母に坐り然ば何神を姨と爲て其丹舄姫命は生給へると云に其姨神は天兒屋命に坐り此事予櫁に見定たる說有て第三卷大神宮相殿條五卷春日社相殿比賣神條八卷平野社相殿比賣神條九卷大宮賣命條に委しく云る如く賣には天鈿女命と同神也其は古書に天鈿女命の天石屋戸の前に俳優して招奉られし事は有れども此神の御戸開に功有し事の見えざる故に誰も然は心着ざる事なれども事體を考ふれば天手力男神は石戸を推開き奉られし事は云も更なれど其御手を取奉に豈暇有むや天鈿女命の俳優も大御神の窺ひ見坐ぬ間こそは不審まれ奉らむ爲に物爲給はめ已に御戸を開奉に至ては何事は打棄ても大御許に速き近寄奉り其御手を賜はりて引出し奉らるべき事なりけり御戸開と申に心な深め力を盡して參る人無は如何なる事ぞ古語拾遺に令天手力雄神引啓其扉遷座新殿云々令大宮賣神侍於御前と有る大宮賣神即天鈿女命に坐事を思ふ可也偖右の儀式帳に天手力男命靈御形弓坐萬幡豐秋津姫命靈御形劔坐と見えたるを同書に相殿坐神御裝束囊二口員八種坐レ東神御形納奉生絁囊一口長七尺二寸廣二幅坐レ西神御形納奉囊一口長四尺二寸廣二幅と有り此を以て其長の大凡思察る可し此亦大御神の御に相並て少緣の物には有べからず必天上より降し給ふ所なる可し續紀に寶龜十年八月五日夜丑時大神宮正殿東西寶殿幷外院殿舍等皆悉燒亡[illegible]左右相殿御[illegible]中夜[illegible]裏御[illegible]火中[illegible]乃上[illegible]世利[illegible]至る迄も[illegible]僞造二假殿一奉レ安二置御體一云々と[illegible]時の御事也又延曆十年八月五日夜[illegible]西寶殿[illegible]々御門及外院殿舍[illegible]燒亡爰[illegible]御正殿左右相殿[illegible]以レ從二燒火之中一奉レ出御天御前乃[illegible]山頂放ニ光[illegible]利云々[illegible]急造二假殿一奉レ遷[illegible]云々と有て此度共に同日なるは所由有る事なる可し然も有ば右の御弓は天石屋戸隱の時に金鵄命の天香弓六張を並べて御琴と爲給へる其には非ざるにや又其御劔も其時天目一箇命の雜刀を作と有る其一ならむも知べからず如此く言痛き迄に穿鑿奉る事甚々畏き事なれども其條理を以て測り得べき限は尋奉らずば有べからず然は有れども甚畏し

○二月祈年六月十二月月次祭

神宮の例年中三節祭と云て殊に重み爲るは六月十二月月次祭と九月神嘗祭と合せて三節なり此には齋內親王も參向ひ給ふなど其式嚴重なること其因々に說か如し委しくは其月次祭神嘗の下に云べし然るに朝廷に於ては二月祈年六月十二月月次共に同等の神事なり其は貞觀儀式に二月四日祈年祭儀六月十二月十一日月次祭儀亦同と見え四時祭式には其月を逐て記さるゝ爲に祈年祭と月次祭とを別條には載られたれども其月次祭の下には准二祈年一の文有を以其差異無き事を察らむべし若て右の三祭に

は伊勢の大宮と雖も幣帛等の事諸社に異り有事無し其は此詞の中に堂毛進流二月祈年大幣帛乎云々と有る下に四時祭式を引て擧るを見よ　伊勢大神宮式に大神宮三坐云々荒祭宮一座云々右二宮祈年月次神嘗神衣等祭供レ之伊佐奈岐宮二座云々月讀宮二座云々瀧原宮一座云々瀧原並宮一座云々伊雜宮一座云々右諸別宮祈年月次神嘗祭等供レ之就レ中瀧原並宮伊雜宮不レ預二月次一云々具上此は神名式に摂るに何れも大月次新嘗と有り其中瀧原並宮と伊雜宮は式外なれば此を摂る所無し伊雜宮は式に志摩國答志郡粟島坐伊射波神社二座並大と有とは別なり　諸社丗座大神宮所攝廿四座云々右諸社並預二祈年新嘗祭一と見えたり同式に凡二月祈年幣帛者幣色目在二四時祭式一朝使到日太神宮司引二使者一先參二度會宮一次大神宮奉レ獻二幣帛一並如二常儀一高荒祭宮使自進奉餘宮令二禰宜奉一其二宮所攝諸社幣者座別絹三尺木綿麻各二兩二分大神宮司分充禰宜撿領就レ社奉レ班と有は其諸社丗座の神々に進らせらるゝなり此を四時祭式に稽るに不レ預二幣案上一新年神四百三十三座は畿內の神故に厚く祭られ給へるにて其中七十の神社は大社は各座別絁三兩綿三兩に小社は各座別絁二兩綿二兩と有を此の四十座は太神宮に攝る神々なる故に格別の事なり　儀式帳例二月に云く以二十二日一年祈幣帛使參入坐弖　幣帛進奉時行事幣帛使與二太神宮司一共神宮外院參入侍弖○今云進久行事記に祭主宮司各束帶着被所之砌而在レ被但祭主一鳥居左南柱西北向宮司右此柱西南向而立勸レ被大麻五尺計之枝木綿付御鹽湯小土器入二白鹽一以二榊枝一獻之奉仕內人等各衣冠其後次二參先宮常神馬次祭使祢承一人御火一人次宮司祢承一人御火一人玉串行事所御鹽湯取參禰宜各束帶清衣木綿着作座白長官請預と有り　即禰宜內人等候侍弖　山向物忌父我造奉留大玉串宇治大內人二枚捧弖大神宮司仁　給即宮司手拍給弖禰宜生絹乃明衣並冠著左右肩仁　木綿多須岐懸弖　太玉串四枝手拍弖給弖捧持弖左方立宇治大內人　太玉串八枝捧持右方立其發

○今云此玉串行事なり行事記に于時玉串大內人進寄自二山向內人之手二靈木綿請取使御奉仕先レ笏手一端請取着用之後笏拔持而拜之後本所被レ着後宮司引レ着進寄靈木綿同レ前同自二山向內人之手一御玉串二枚請取奉二宮司一又手一端請取左右之手各一枚請取互禮座退而進參南屏垣前北向立次一座引レ着件宮司並在跪玉串大內人自二山向內人之手一御玉串四枚請取奉レ之于時禰宜進レ笏一端先左二枚左取右二枚右取一拜而自レ右立進參南鳥居內辺下南向立神主以下西列立次玉串內人自二山向內人之手一御玉串八枚請取禰宜之次立云々と有り又久勅使記にも外宮神事宮司禰宜等取二賢木一枚一用二之玉串一內宮取二玉串一枚一不レ取二替左右手一也と見ゆ　禰宜先進左方立宇治大內人右立次大神宮司次幣帛捧持內人等立次御馬飼內人御馬曳立次驛使次內人等立如此立列參入第三重告刀之版位就令レ進レ之東端御馬進二一丈許一立次驛使次大神宮司次禰宜次宇治內人次二大內人以上六人正殿向跪列就二版位一內物忌子等御門腋東西頭侍內物忌父四人諸內人物忌等以二西玉垣門一二丈許內方進向レ東跪列侍即大神宮司從二版位一進告刀申畢時波仁　返就二本座一○今云行事記に於二內御門一在二御鹽湯一云々各參列之時石壺着座宮司東禰宜東神主西方東上其次玉串大內人三色物忌父等西方以レ北爲レ上云々と見ゆ　即宮司之手捧持太玉串二枚波　宇治大內人小綱自二版位一　發受取弖　自就二本座一而捧持即禰宜召二大物忌父一令レ進第三御門之左右置進次召二宮守物

忌父一其禰宜捧ニ持太玉串四枚一進同御門右方衛進置次召ニ地祭物忌父一此宇治大内人加捧持太玉串分ニ四枚一分レ進同御門左方衛進置（〇今云行事記に今日者宮司無ニ詔刀一と有り此玉串を進る作法六月々次祭に云り然れば茲には引す）即玉串進畢四段拜奉旦短手二段拍一段拜又更四段拜奉短手二拍旦一段拜奉畢即罷出旦荒祭宮版位就レ座四段拜奉短手二段拍畢即使弁大神宮司外直會殿就レ座即禰宜内人荒祭宮參入供奉行事宇治大内人太玉串四枝捧持旦先其宮物忌父御鎰持前立次其宮内人立次宇治大内人立次禰宜立次二人大内人並諸内人等立即正殿幣帛奉入畢即罷出旦使並宮司直會給手二段拍物給畢旦後手一段拍旦罷出御厨に以ニ十三日一大神宮廻神百廿四前祭始所レ管所々宮並社神奉行事（具所宛神税大神宮司）と有り此即神宮に於て被行る祈年祭の式なり但齋宮式に所見たる祈年祭は別にて其は齋宮限にて被行る事故に神宮の神事にては非ざるなり（此中に宇治小内人物忌と有は當事の人名を出せるなれば泥む可からず儀式帳に宮内人物忌等職掌行事條に宇治大内人宇治土公磯部に…と有人なり）然して朝廷の御神事は諸社と共に二月四日なり儀式（新年祭條）に大神宮幣帛者差レ使進レ之と見え四時祭式には大神宮幣帛者置ニ別案上ニ差レ使進レ之と有り大神宮も奠ニ幣案上ニ神三百四座の列にて東海道伊勢國十四座の中に在り（然れども雜例集二月條に四日新年祭使發遣事九日新年祭事勅使内宮…供給大司勤レ之と有れば中古以來は二日ならず九日に在る也建久行事記にも九日新年祭次第行事祭使外宮參著之由有ニ告知ニ時供…八等…用ニ云々と有れば兩宮共に同日に在る事と見ゆ…記に祈年祭貴神事也仍…火…レ之雖レ然近代入レ夜之間…一人…遣レ之と有れば其日は夜…宮に參向ふ故に夜に入なンめり）然れども此事を（トガメ）て古語拾遺に夫尊レ祖敬レ宗禮教所レ先故聖皇登極受ニ終文祖ニ類ニ于上帝ニ禋ニ于六宗ニ望ニ于山川ニ徧ニ于群神ニ然則天照太神惟祖惟宗尊無ニ與二一自餘諸神者乃子乃臣孰能敢抗而今神祇官班レ幣之日諸神之後叙ニ伊勢神宮ニ所レ遺一也と有は然る言なり此を以見れば既くも此頃より如此き謬は有なりけり（言…抄に式神祇官祭神七百三十七座並ニ幣案上ニ神三百四…先宮中次畿内次東海道伊勢在ニ東海道中ニ故云諸神之後叙ニ伊勢神宮ニ也式只白レ道次レ選也此書尤レ不レ分ニ…畢ニ也と云るにて能分明なり）抑伊勢坐皇太御神と申奉るは皇御孫命に授奉給へる謂ゆる八咫鏡に坐ば天宮に坐す顯御前に少かも替り坐事無なり古事記に此之鏡者專爲ニ我御魂ニ而如レ拜ニ吾前ニ伊都岐奉と見え神代紀に天照大神手持ニ寶鏡ニ云々祝之曰吾兒視ニ此寶鏡ニ當レ猶レ視レ吾可ニ與同レ床共レ殿以爲ニ齋鏡ニと有を合せて知べし是以て大同本記に皇太神宮皇御孫命天降坐と有を始て神宮の古傳凡て如此し（此を詔刀師沙汰文には天照大神皇御孫命御降臨の昔云々と有り）備其御天降の始より皇御孫命の同大殿の内に被齋させ御在しける故に古語拾遺に天照大神

本與レ帝同レ殿故供奉之儀若神一體と有が如くなりしなり同書（神武天皇段）に當ニ此之時一帝之與レ神其際未レ遠同レ殿共レ床以レ此爲レ常故神物官物亦不ニ分別一宮內立藏號ニ齋藏一と有は此なる所以に人臣の仕奉る事も何も神と君とを隔てず同じ意味を以て仕奉れりし事著明し（漢人の祭如レ在など先けく云るは遲き談なり此方の古より神に仕奉る状は直に顯御前と爲て持斎き仰奉りしなり斯る由に依れりと聞えて太神宮式に凡王臣以下不レ得ニ輙供ニ太神幣帛一其三后皇太子若有レ應レ供者臨レ時奏聞と有は尊崇敬の極と謂つ可なり）神天皇六年御紀に先是天照大神倭大國魂二神並ニ祭天皇大殿之內一然畏ニ其神勢一共住不レ安故以ニ天照大神一託ニ豐鍬入姬命一祭ニ於倭笠縫邑一仍立ニ磯堅城神籬一と有は神と君と漸く相分るゝ始なり此事を拾遺に至ニ于磯城瑞垣朝一漸畏ニ神威一同レ殿不レ安故更令下齋部氏率ニ石凝姥神裔天目一箇神裔二氏一更鑄レ鏡造上レ劍以爲ニ護身御璽一是今踐祚之日所レ獻神璽鏡劍也と有り（倭姬命世記にも凡神倭伊波禮彦天皇已下稚日本根子彥大日々天皇以往九帝歷年六百卅餘歲當ニ此時一帝與レ神其間未レ遠同レ殿共レ床以レ此爲レ常故神物官物亦未ニ分別一焉御間城入彥五十瓊殖天皇即位六年乙丑秋九月就ニ於倭笠縫邑一殊立ニ磯城神籬一奉レ遷ニ天照大神及草薙劍一令ニ皇女豐鍬入姬命奉ニ齋焉と見えたり此在纏例集に神武天皇以後九代之間書皇太神手天ニ同宮內相殿合共奉齋也崇神天皇御代劍波宮中大庭穗掠作令ニ出坐一奉レ齋皇女以ニ御覽鏡一、姬命ニ供奉と有り然れば笠縫之邑と云は後の名にて宮中の大庭に小祠（ホクラ）を建て齋はせ給ふ也けり是即畏所の始とも云べき也此時新に模造たるは大殿內にあり此等の事已に第三卷に云り）若て垂仁天皇二十五年に此伊勢の國には鎮り定り給ひけるに皇女をして御杖代と奉らせ給ふ事など[illegible]久代の如くなれども神宮と朝廷と相別れさせ給ふ上は往古の神勅に違はせ給はざる中にも數多の御世を歷る內には自然と神宮の御事なども疏略に成ける故に廣前主の歎申されしは然る言なり同書に天照大神本與レ帝同レ殿故供奉之儀若神一體始レ自ニ天上一中臣齋部二氏相副奉レ祷ニ日神一猿女之祖亦解ニ神怒一然則三氏之職不レ可ニ相離一而今伊勢宮司獨任ニ中臣氏一不レ預ニ二氏一所レ遺三也と有を思ふに當時已く故實に違る事など多かりけむかし（此は然しも要無き事なるを思ほえず長々しく疏にたり然るは神宮の御事に於ては猶不足事耳多かるに依て得默止し難ければなるぞかし）

天皇我大命以氏度會乃宇治乃五十鈴川上乃下津石根（スメラガオホミコトモチテワタラヒノウヂノイスズノカハカミノシタツイハネニ）稱辭竟奉流皇大神能大前爾申久（タヽヘコトヲヘマツルスメオホミカミノオホマヘニマヲサク）

祈年祭詞は已に上に出たる天社國社のと朝廷にては等しき此に又此詞有は諸社のは神主祝部も召上せらるゝを神宮には御使を以て奉らせ給ふが爲に後に此詞は作られたるなり所以に體裁も甚古くは非るなり若て凡ての事等は其辭別の文に盡されたる故に此は其御使して幣帛を贈奉らせ給ふ由耳なり（但古と雖も太神宮の幣帛を御使を以て奉らせ給ふ可ければ其御使の神宮に詣て申されし詞の有つらむ事云も更なり然れば此詞などの祝詞の古例に違へるも其時世

の詞に轉れるなり 考の頭書に被引たる儀制令にも天子祭祀所レ稱と有る儀解に謂二天子一神祇二爲二天子一凡自二天子一至二車駕一皆是書紀所レ用至二風俗所一レ稱別不レ依二文字一假如皇御孫命及須明樂美御徳之類也と見たるは唯文字遣の上の論耳には非ず神に告るには皇御孫命と稱給ふ御令にて古祝詞の例皆然り然るを此詞に天皇我御命以と有は例に違へり儀制令に天皇詔書所レ稱と有を以て知べし考に此は殊に皇御孫命と有可に臣民に宣坐る大命の如く有は甚嫌無し と云れたるは然る言なり（此事春日祭詞の下に云り考にすべし考の頭書に古き祝詞を右の令文に合せ見るに神に告るには皇御孫命と有なり然るに今京に書る春日平野なとの古き祝詞に此太宮へ奉給ふ詞には天皇と書れたるに朝廷なる事にかゝ有けむこと有り の儀制令に至二風俗所一稱別不レ依二文字一云々と有に依て書く古へ天皇と云字を須明樂美御徳と訓ても我と云詞に續けて然る例なれば此は天皇の字を須賣良我と訓べく書る也）神に申さを給ふに天皇と御名乗坐し賜ふの物に所見たるは後紀延暦二十四年二月條に石上大神へ奉らせ給ふ詔に天皇御命爾坐と有が始にて其より後例悉く天皇詔旨爾坐なと云出す事とは成れり唯其中に續後紀なる天長三年五月に春日神に進せらるゝ詔に皇御孫命爾坐四所大神爾申給久云々と有は撰者の甚く心を用たるなゝめり（但此も給ふ大人說の如く時々の詞の傳心なれば更に難め奉る可き事には非れども斯る論事に迄心を深く任れざれば古を探索る事能はざるが故に此事を得ざるなり）○度會乃宇治乃五十鈴川上爾云々神功皇后御紀なる御譲には神風伊勢國百傳度逢縣之拆鈴五十鈴宮と有り此を垂仁天皇御紀に故隨二太神教一其祠立二於伊勢國一因興二齋宮于五十鈴川上一と有り此は詞と文との異なり（無非詞はる事には…るなり）世記に御鎮座の事を記せるに爾時皇太神倭姫命乃御夢爾誨給久我高天原仁坐見戸押張原如見見志眞伎志國宮處是處也鎮定給止覺奉支云々于時大幡主命悦白久神風伊勢國百船度會縣佐古久志呂宇治五十鈴河上鎮理定理坐皇太神止國保伎奉支と見え儀式帳に天照坐皇太神乃伊勢國度會郡宇治里佐古久志留伊須々乃川上爾御鎮坐時云々次百船乎度會國佐古久志呂宇治家田々上宮坐支爾時宇治土公等遠祖大田命乎汝國名何問賜支是川名佐古久志留伊須々乃川止申云々と有り（又倭姫命世記度會乃宇治乃五十鈴河上之云々大山中…と有り）然れども祝詞には然委しくは云ずして京にては彼祈年祭詞の如く伊勢爾坐天照大神能大前爾云々と宣ひ神宮に至ては右の世記儀式帳及此詞其の如く申せりしと所思るを如此く定れるは何の大御世なりけむと正史に所見たる宣命の文を次々推考るに太御神に奉らせ給ふ天長元年九月詔には唯に天皇詔旨爾坐掛畏支太神乃大前爾申給止申

久と有て省略たる云樣ながら祈年月次等詞に合せ見るに古風なる狀なりと雖も此時齋宮の御事を申させ給ふ事なるゆゑに神嘗祭詞に附て令申給ふが故也（齋内親王奉入時詞に進ニ神嘗幣ニ詞中華次中云辭別氏申給久今進流齋内親王波云々と有りて御世々の例必しも齋宮の御事を申させ給ふは九月なれば其地名を稱などの委しき事は本詞に讓れる也）同四年九月詔に天皇我大命爾坐度會乃五十鈴之川上爾坐皇太神乃大前爾申給久云々同五年二月詔に天皇我大命爾坐五十鈴乃河上爾稱辭定奉大神乃大前爾云々同八年六月詔に天皇我詔旨止掛畏支伊勢度會乃五十鈴之川上爾坐大神乃廣前爾云々と有て此迄の策命に宇治とは未レ云りしなり右の内に（天長五年二月詔なるは度會乃の三字無し脫せるか元より無りしか尋べし）貞觀八年七月詔に天皇我詔旨止掛畏岐伊勢乃度會宇治乃五十鈴乃川上乃下都磐根爾大宮柱廣敷立高天原爾千木高知天稱辭定奉留天照坐大神乃廣前爾云々同年十二月詔此に同じく同十三年九月詔も此と同じきか云々高天乃原爾千木高知天天皇孫乃尊乃稱辭竟奉留天照太神乃廣前爾云々と有を此詞に比挍（クラベアハ）するに太體今の如くは淸和天皇の大御代に定れるなりけり然れども祝詞は古例を逐來れるが故に然改れる中にも大前と云て廣前とは云ず太敷立と云て廣敷立とは云ず舊を存して甚正しき事云も更なり（但貞觀十一年六月と元慶元年二月との告文には宇治の事を云漏せれど其頃加もし省きも爲しなり）

○宇治は和名抄に伊勢國度會郡宇治鄕有り此なり此稱（ナ）倭姬命の當時より有しなり世記儀式帳共に其名出たる事上に引が如し神名秘書に載る風土記に宇治鄕者伊勢國度會郡宇治村五十鈴川上造ニ作宮社一奉レ齋ニ太神ニ是内以ニ宇治鄕ニ爲ニ内鄕ニ也今以ニ宇治二字ニ爲ニ鄕名ニ以爲レ名と有り此に因れば太神を齋奉れるに就て内鄕と爲る由なれども予が思ふには廻りを山以て取繞（トリカコミ）て其中に隱（コモ）れる境區（オクカ）を云なる可し山城國宇治郡宇治鄕有り古事記に山代内臣と見え又綴喜郡に内神社二座と神名式に出（イヅ）たるも宇治は内なる証なるが其地理を察るに諦しく内と云べき地形なり又大和國宇智郡有り建内宿禰なども其地より出たる名なるなどを思合す可し（其餘國々の地名に河内山内など某内と云が多かるも皆外に籠める處有て其内に在を云なり）古事記に登由宇氣神此者坐ニ外宮之度相ニ神者也と有て外宮と云稱は有つれども未内宮と云事は非りしなり神名秘書に村上天皇御宇祭主公節之節皇太神者與座之故號ニ内宮ニ度會宮者外座之故申ニ外宮ニ始出レ自ニ此時ニ也と有を以知べし然れども此より以前延曆に記る止由氣宮儀式帳祈年祭條に内宮參入時云々と有は

内宮の稱も古くより有來る事なり右の公節祭主の始て内宮外宮の稱呼を成せるには有べからず内宮外宮の説を成たる者なりけり 外宮の事は次なる度會宮の條に云べし此は元天照大御神の鎮宮(トツミヤ)なりし所に鎮奉れりしに依れり又同書に垂仁天皇即位廿二年戊午歳受太神度會山田原仁鎮坐之後名曰ニ二所太神宮ニ亦號ニ內宮外宮ニ矣と有り此方尤に聞ゆ 〇五十鈴川上(イスズノカハカミ)は五十鈴川の河上なる地と云義なり儀式帳に宇治土公等遠祖太田命乎汝國名何問賜支是川名佐古久志留伊須々乃川止申是川上好大宮地在申と有れは川上は川の上方を云り 考に加波良と訓て川原の意と爲られたるは宜しからず右の儀式帳を證と爲べし 五十鈴は磯渚(イソズ)の義には非るか垂仁天皇二十五年御紀 太神宮御鎮座條 に故隨ニ大神教ニ其祠立ニ於伊勢國ニ因興ニ齋宮于五十鈴川上ニ是謂ニ磯宮ニ則天照大神始自レ天降之處也と所見たるに神功皇后御紀なる御諭に折鈴五十鈴宮所居と有れば五十鈴宮と磯宮と同事なり尚明文抄に載る大倭本記に天皇之初天降來之時共副護齋鏡三面子鈴一合也の本注に一鏡者天照太神之御靈名ニ天懸太神ニ今伊勢國磯宮崇敬拜大神也一鏡者天照大神之前御靈名ニ國懸大神ニ今紀伊國名草宮祭敬拜大神也云々と有る磯宮は五十鈴宮なるを思ふ可し 此文釋紀にも引れども誤字脱字等有て讀なしざるを幸に明文抄に全く存せるを今引出たり 然れども此に一混らはしき事有り倭姫命世記に天皇即位二十五年丙辰春三月從ニ飯野高宮ニ遷ニ幸于伊蘇宮ニ矣于時倭姫命問給久大若子命汝此國名何白久百船度會國玉掇伊蘇國止白と有は儀式帳に玉岐流磯宮と有る其にて此は五十鈴宮に御遷幸の前なるなれば別なり然れども此事に依て右の垂仁天皇御紀なる磯宮を誤れりと云説などは又誤なり他神こそは有め皇太御神の鎮り定り給へる大宮の名を其頃朝廷にて誤らせ給ふべき理無事を思ふ可し且興ニ齋宮于五十鈴川上ニと有る齋宮は齋內親王の宮には非ず神宮の御事なる事云も更なり其は萬葉二 三十五丁 に渡會乃齋宮從神風爾伊吹惑之と咏るを以知れたり此を以見るに神代紀なる猿田彦神の狹長田五十鈴川上と宣へる狹長田と云ぞ受張たる其邊の地名なりしを大御神の右の磯宮に鎮坐し後は其古名は亡て五十鈴川とも五十鈴原とも云名の存せるなり 然るを谷川士清が通證に倭姫世記曰宇治機殿是一名號ニ磯宮ニ也神名帳考曰磯宮倭姫命齋宮ニ也或以爲ニ神宮別名ニ者甚非也殿舍考證曰儀式帳所レ謂ニ内親王川原殿院ニ是古磯宮之地云々と云るなどは全に云にも足ぬ異説也 師は五十鈴の伊は發語鈴は借字にて篶なり伊篶原の義なりと云れたり成程倭姫命世記に今年倭姫命詔ニ大幡主命物部八十支諸人等ニ五十鈴原乃荒草木根苅掃比大石小石造平豆遠山近山乃大峽小峽爾立並木乎齋部之齋

斧乎以天伐採天本末波乎山祇爾奉祭氐中間乎持出來豆齋鉏乎以天齋柱立一名心御柱高大原爾千木高知利下津磐根爾大宮柱廣敷立天天照大神並荒魂宮和魂宮止奉鎮座と有に依れば伊蘇原と云も理めきては聞ゆれど荒草木根と有に叶はず唯五十鈴原は磯渚原にて有べきにや川に磯と云事は如何なれど大和國山邊郡石上を布留川と云水流有て其邊の地なる故に磯之上と云るなり又同書に今歳猿田彥神裔宇治土公祖大田命參相乃曰南大峯有二美宮處一佐古久志呂宇治之五十鈴之河上云々有二靈物一照耀如二日輪一惟少縁之物波爾不在志定主出現御座哉倭姬命對曰云々惟久代太神誓願給天豐葦原瑞穗國之內爾伊勢加佐波夜之國波有二美宮處一止利止定給比自二上天一志投降坐志天之逆太刀逆鉾金鈴等是也止天倭姬命大乃平手乎拍天云々と見えたるは酒殿に納奉れる神寶の事にて古說と聞えて有を御鎮座傳記にも擧たるが此に附會して右の金鈴五十口日之少宮之圖形文形等是也と有る此に依て五十鈴を右の金鈴五十口に依れりと云などは有まじき僻說也且日之少宮の圖形など覺束無き事也此を山崎垂加が說に天逆大刀等此皆神道之表物金鈴五十口五十鈴河之名由此而出と云る愚說妄言有り信む可からず○下津石根稱辭竟奉は下津石根に齋奉ると云事也天長五年の告文に五十鈴乃河上爾稱辭定奉と有より始て其後は

必しも稱辭竟奉と云例の如くに成れり此にて事も無く能通えたるを賀茂翁の考に石根の下に[illegible]言を略過して理無しと有は如何有む○皇太神能大前爾申久續後紀以下の皇典に所見たる告文の文法凡て太神乃大前爾申久或は皇太神云々と云例にて貞觀八年の告文より以來天照坐太神とも天照大神とも大御名を直稱奉らせ給へり委しくは上に御世々々の詔書を引出たる所を合せ考ふ可きなり然れば大御名を直に稱奉らず古くは皇太神とか大神とか申せりしかと云に然らず已に云る如く祈年月次祭詞などは高千穗宮より以來傳來れる古文なるに天照太御神能大前爾白久と有れば古昔は猶大御名を稱奉るを以て敬ひの至極とは爲りしぞかし此事大忌祭詞廣瀨能川合爾稱辭竟奉流皇神御名乎白久の解に委しく言へ置りき

常毛進流二月祈年月次之辭一相換次祭唯以二六月一大幣帛乎某官位姓名乎爲使天令捧持氐進給布御命乎申給久止申

常毛進流とは齋內親王奉入詞に依二恒例一氐と有如く常住不斷の事に成て有を云り此詞より始て伊勢に幣帛を進らせ給ふ詞には皆有也四時祭と臨時祭とを分別れたるに其心しし○二月祈年大幣帛乎ば上なる祈年祭詞に今年二月爾御年初將賜むと爲而皇御孫命宇豆能幣帛乎朝日能豐逆登

稱辭竟奉登宣と有は神祇官にて御使の中臣に宣詞なるを其を受賜はりて太御神に奏出す所なるが故に祈年大幣帛を云々とは云り續紀二に在山背國乙訓郡火雷神宜入大幣及月次幣例と有り大幣とは、祈年祭を云なれば此も其意ならむか　但彼詞の始に集侍神主祝部等云々と有るは御使に奉らせ給ふ中臣にも宣也二月四日の儀式に寵て諸社の神々の幣帛と共に頒るゝを心得置べし　若て太御神宮は神名式に太神宮三座相殿坐神二座並大と有て社一所前二座也其大幣帛と云は四時祭式祈年祭條に見幣案上神三百四座社一百九十八所座別絁五尺五色薄絁各一尺倭文一尺木綿二兩麻五兩庸布一丈四尺倭文纏刀形倭文三寸絁纏刀形絁三寸布纏刀形布三寸各一口四座置八座置各一束楯一枚槍鋒一竿弓一張靫一口鹿角一隻鍬一口酒四升鰒堅魚各五兩腊二升海藻滑海藻雜海菜各六兩鹽一升酒坩一口褁葉薦五尺前一百六座々別絁五尺五色薄絁各一尺倭文一尺木綿二兩麻五兩倭文纏刀形絁纏刀形布纏刀形各一口四座置八座置各一束楯一枚槍鋒一竿褁葉薦五尺と有り太神宮も東海道伊勢國十四座の中にて右の幣帛也但右の奧書に太神宮幣帛者置別案上差使進之と有如く諸社とは幣帛の式は同事に行るゝ中にも此如き差異有　又太神宮度會宮各加馬一匹一段と見えたり　六月十二月々次祭例此に同じ其下に云ふ可し　○某官位姓名爲使氏は神祇令に凡常祀之外須向諸社供幣帛者皆取五位以上卜食者充唯伊勢神宮常祀亦同と有て古くは異姓の人をも雜用られたれども後には中臣一姓の人を以て祭主に補せられて他姓を用られぬ事と成れる續紀二十一十二丁に天平寶字元年六月乙未始制伊勢太神宮幣帛使自今以後差中臣朝臣不得用他姓人と有る神代の昔より天兒屋命は殊に大御神に親しく仕奉給へれば寔に如此く有べき者なれども他姓と雖も止事無きも有れば雜用らるべき筈なるを此頃は孝謙天皇の大御世にて甚く神代よりの風儀を改させたまふ事の多在りける虚に乗て中臣姓の人より内奏の儀被行て斯りけむも知べからず所以に古語拾遺に又勝寶九年左辨官口宣自今以後伊勢太神宮幣帛使專用中臣勿差他姓者其事雖不行猶所載官例未見削除所遺十一也と云れたり（此は西宮記に天平勝寶九年六月十九日と爲り天平勝寶九年八月十八日に改元有て天平寶字元年と成れるを續紀には改元の方を用られ拾遺には舊時の年號を記せり）大神宮諸雜事記に天德二年十二月祭主神祇少副從五位下大中臣朝臣公節任三年　同三年九月廿三日亥時内裏燒亡同年十月中務宮燒亡天下旱魃疾癘

幟也仍公家驚御下二宣旨於神祇官陰陽寮一被二卜食一之處勘申云若異姓人供二奉神事一歟因之異方太神依二其違例一御祟歟者而間本官幷大中臣氏人等奏狀云祭主公節朝臣既橘氏人也即付二公節之自筆之消息一具也又宮司氏高是清原氏豐之男子也氏高之母前宮司邦光之女子也仍請二母方姓一號二大中臣氏之子一由也以二如此異姓之輩一被レ補二祭主宮司一之故天下不レ靜也被三始二置祭主職一之後於二大中臣氏之外一以二他姓者一未被補任之例乎者依二件奏聞一以二天德四年十月三日一公節宮司氏高等之釐務停止之後以二同十一月十日一永停止了と有り心行ぬ事ながら實に太御神の大御心なりけむも亦知べからず然れども拾遺に天照太神本與レ帝同レ殿故供奉之儀君神一體始レ自二天上一中臣齋部二氏相副奉レ禱二日神一猿女之祖亦解二神怒一然則三氏之職不レ可二相離一而今伊勢宮司獨任二中臣氏一不レ預二二氏一所遺三也と有も一理有て云れたる心ちす但祭主宮司共に異姓を用ひず中臣一姓に局在（カギレ）る事も其故有と聞ゆれば此是非は神の御定を仰ぐの外無し（言舒抄に伊勢宮司獨任二中臣氏一者孝德天皇御宇以二香積須氣一始任二大宮司一以降或大杼連或村山連或津島朝臣菅生朝臣等交二中臣氏一爾自二中臣朝臣比登一以後不レ任二他姓一中臣氏任焉大宮司比登者寶龜比八祭主廣見七男廣見者意美麻呂三男既而中臣一姓定二其任一後若有二異姓者任一レ之爲二天下之凶事一也天德二年云々由レ是觀レ之除二中臣氏人一不レ任二異姓一良有レ以也且不レ被レ定二中臣一姓一以前雖レ有二香積大杼等諸氏一未レ聞二齋部猿女任レ之者一哉と有れども上古に中臣齋部猿女等の氏に相並て神と君とに仕奉れる故其を傚し云るなれば拾遺の言云れたりと謂べし）伊勢大神宮式に其年中四度使祭主供レ之若有レ故者取二官幷諸司官人及散位中臣氏五位以上一充レ之五位以上有二故障一者六位亦得（齋王初參之時必用二五位以上一）と有り四度使とは二月祈年六月々次九月神嘗十二月々次等の祭を云ふ祭主とは二所太神宮例文（祭主次第條）に第一御食子大連公（天兒屋命廿一世孫云々推古天皇元年任在任十六）と有て中納言伯意美麻呂卿の所に至て本註に始爲二祭主一改二祭官字一爲レ主者也と見えたるを思ふに此職は推古天皇の大御世に始て被定たる所なるが其頃より祭官（マツリノツカサ）と云て其家に傳承（ツタヘ）たるを官字を主字に改て祭主（マツリヌシ）と謂りと云事なる可し太神宮式に使中臣と有は此祭主の事を云るなり委しくは六月々次祭に祭主の事の沿革を云る所有り合せ考ふ可き事なり（大宮司とは別なり例文に大宮司次第と云一條有て第一は中臣香積連須氣より始りて大杼連村山連大家中臣津島朝臣真比連宮朝臣菅原朝臣菅生朝臣など有て強チに中臣一姓にも局在（カギラ）ざりし也偖祭主は神宮の祭祀の事を統テし大宮司は神宮の雜務を主と預知れけしなり太神宮式に凡太神宮司者准二國司一交替云々と有り）太神宮式に二月祈年幣帛者朝使到日太神宮司引二使者一先參度會宮次太神宮云々と有る朝例は右に云る祭主の事なり又同式に凡祈年月次祭使參入者太神宮司卜部祇二候多氣河一解除若

有二闕怠一奪二其衣服一とも有り（但卜部を延喜の當時太神宮司に任職へる事無ければ太神宮司に卜部の隨行て多氣河に祗候するなる可し神嘗祭使給祿の下に六位以下卜部四人と見ゆ）○令捧持氐進給布は御使の中臣に幣帛を令捧持るを云ふ此は上なる祈年祭詞に皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉登久宣と有る其を指る事云も更なり（太神宮は別の案上にて奠りて同じ時に神祇官にて祓行る中にも又辭別の御會釋有る事なりかし）○御命は上に天皇我大命以氐と有る對照なり然れば上の如く訓べし（考に美許登と訓れたるは當らず）○申給久止申は考に上の大前爾申より下迄の三の申は御使の中臣の申由なり」と有は然る言なり今按ふに御命乎申給と有る御命は此詞なる常毛進流二月祈年大幣帛乎云々と見えたる其と爲て事無き狀われど猶足はぬ心ちす此御命と云は例の祈年祭（第一詞）と其辭別とを指て云なる可し然らざれば彼に宇豆乃幣帛と云ひ此に祈年大幣帛と云ては事二に爲て別々なるが如くなれゝばなり（月次祭も亦此に准ふ可し）太神宮式六月々次祭條に先使中臣申二詔刀一次宮司宣二祝詞一と有を思ふに使中臣申二詔刀一とは此詞を幣帛に附て申し宮司宣二祝詞一とは彼祈年月次共に在る詞と辭別とを宣て禰宜内人等に其由を承（ウケ）諸（タマ）はら令め彼詞は禰宜内人より大前に令申給ふ事諸社の例に等在る可し但上に引る儀式帳祈年祭の條宮司從二版位一進告刀申と有るは其例共違へる如く也（新年月次等詞の始に集侍神主祝部等諸聞食登宣と有は天下の諸社に該羅めて宣る所なるを思ふ可し）

豊受宮同祭（トヨウケノミヤノオナジマツリ）

延喜式には度會宮と有り止由氣宮儀式帳には止由氣宮とも度會宮とも見ゆ已に續紀二十八にも止由氣宮と有り上古より相通じ云るなり雜事記には豊受神宮と云り（太神宮を五十鈴宮とも云ると同じく御名を以て宮號と爲ると地名に依れるとの差異なり）同祭の二字は九月神嘗祭の例に依て補へ（クハ）つ考に其說有に依れり○神名式に伊勢國度會郡度會宮四座（相殿坐神三座並大月次新嘗）伊勢太神宮式に度會宮四座（在二度會郡沼木郷山田原一去二太神宮一西七里）豊受太神一座相殿神三座云々右祈年月次神嘗等祭供レ之と見えたり止由氣宮儀式帳に今稱二度會宮一在二度會郡沼木郷山田原村一と有り神宮の古記に豊受太神一座靈御形鏡座相殿神三座大一座左天津彥々火瓊々杵尊靈御形鏡座前二座天兒屋命靈御形笏座天太玉命靈御形瑞曲玉座と見えたり（此御靈形の事など次條に其神々の御傳を擧て委しく云を見る可し下に相殿神の事を註る條有り合せ見るべし）倭古事記（御天降段）に次登由宇氣神此者坐二外宮之度相一神者也と有て其御靈形の事を記さずと雖も此は寶鏡開始に謂ゆる眞經津鏡に坐り元々集に載る所の古說に御饌都大神高天原より淡路國三山嶽に天降り

給ひ其より布久良宮に移らせ給ひ八輪島宮八國嶽に移らせ給ひ寂後に丹波國比沼乃眞名井宮に鎮坐と有に就て考有り此御靈形も天璽と共に高千穗宮に所齋させ御在し坐し事は云も更なるが皇太神の始て伊勢國狹長田五十鈴之川上に先天降り著給ひて後に筑紫の皇大宮に遷幸坐て崇神天皇の大御世迄鎮坐ると同じ例を以云はゞ必豐受太神の始て御天降坐るは淡路國なり其三山嶽は今は先山(センサン)と云なるが古く其大神の古說に依て饌山(ミケヤマ)など云けむを後に字音に唱へ旦字をも先山と替たるなり然云由は萬葉六十五丁 御食都國日之御調等淡路乃野島之海子乃云々と有は淡路國より大御食の御贄を貢る由にて此御食都國は用に云るなれど反歌に朝名寸二梶音所聞三食津國野島乃海子乃云々と詠るは淡路國即三食津國と云るにて體なり然れば彼國を古く然云つるにこそ 又元々集なる氣比宮は今慶野村と云て三原郡に在り萬葉三に飼飯海乃庭好有之と詠るは此地なり偖越前國氣比神社を始て國々に氣比神社とて有る其祭神は保食神なるは又豐受太神の御事なり古事記に伊奢沙和氣大神之命云々亦稱ニ其御名ー號ニ御食都大神ー故於レ今謂ニ氣比大神ー也と有る伊奢沙和氣大神は神功皇后の御歌に依に決く小彦名命なり御食都大神は易名の幣を海濱に寄せ給へるにて本より鎮坐る保食神に坐て謂ゆる氣比大神の御事なり此氣比神社の事は故大人等も明亮には見認られざりし故に其說悉く允當ざるに依て事の因に聊驚かし置なり 御鎮座本緣御井神條に引る大同本記なる水取文の 終に又從ニ日向高千穗宮ー移ニ丹波國魚井原ー矣又豐受皇太神御鎮座之時自ニ魚井原ー而移レ之云々と有と右の元々集の古說とを合せ今其中を執て云はゞ水と雖も人の食用と爲て性命を續ぐ所は又其豐受太神の司坐御事なるが故に右の御井社も其神の鎮坐す宮地に移したるなり然れば豐受太神の御靈形は其始淡路國に天降給ひ其より高千穗宮に移ろひ御在けるが其後右の高千穗宮の御井と共に丹波國には遷幸せ奉給ひけむ但大同本記に依に宇佐島に坐す女神を爲て祭らしめ給ふ由なれば其三女神等の御靈形に添仕奉らせ給ふ事太御神の御言に昭なれば其女神の現身と現來坐て丹波國には移ろはし奉ヘ給ひけむと所思ゆ 然れども何時に其御井を移されたりと云事は知られずながら御天降の始より崇神天皇の大御世に至る迄に皇大宮に坐しには有べからず外宮の書共に此太神を水德神なりと云も御饌都神を合せて水の事と爲は惡けれど僻事と云には非ず 倭姬命世記御鎮座本緣及神宮の古書共に御間城入彥五十瓊殖天皇三十九年壬戌三月三日遷ニ幸拾丹波與佐宮ー矣今歲止由氣大神結ニ幽契ー天降坐○今云此は御靈形の座地へ天より現身にて降らせ給へる也中川忠與の順國志に比治の眞名井原邊に礒砂山笛原寺と云寺有り此後山を比 山又足占山と云ふ豐宇賀能咩命天降の山なる故に如此云なり」と有り又土人の傳には御饌都神天降の地は丹波郡咋岡神社有り今赤坂村に在と云り式には咋岡神社と有なれども國人は咋岡と云り 于時共從之神中臣祖大御食津臣命 號ニ御食社ー坐ニ度會郡ー 屋船命 墓本靈今度相郡坐淳野井庭神社是也 宇賀之御魂神

今號ニ小俣神社ニ是也宇須乃女神五穀靈號ニ宇須野社ニ須麻留賣神如今號ニ須麻留賣社ニ是也宇賀乃大土御祖神號ニ山田地護神ニ是也若雷神今號ニ北御門社ニ是也彦國見賀岐建與束命號ニ度相國見社ニ是也建御倉神中臣之祖天日起命伊勢大神主祖神也振魂命玉串大內人祖相從以戻止矣 ○今此御供の神等の事など甚怪く思ひしかども思ひ猶重らざりけり此中には國神も有り又人世の人も有れども皆稻穀の事に就て天上なる豐受大神の御許に仕奉らるゝ神なり大御食津臣命は中臣氏の上祖にて天兒屋命四世字佐都臣命の子なれども御食の事に功有て然名に負るなる可し此故を以て遷去の後此大神の御許に仕奉て有なり屋船神は此火神の家宅の事を掌給ふ御名なる事卷九大殿祭詞の下に說るが如し宇賀之御魂神は須佐之男神の御子にて農事に功坐神なれば此太神に從奉給ふ可き理なり宇須乃女神は天鈿女命には非るゝ然らば此太神を大殿祭に大宮賣命と申に大宮比咩命と申して仕奉給へりと思ゆる事有て大殿祭詞の辭別に云るが如し須麻留賣神に天棚機姫神と通ゆれば此大神の衣食住に幸給ふ御功なるを以思ふに必屬奉る可き事なり土御祖神は豐受太神の神物を生する土地の神なれば此亦從奉る可く天日起命は天村雲命の子なれば水取の故事に依て從奉る可し其餘の神々も皆由縁有てこそ此太神に從奉給ふらめと思ゆるが上に師の古史徴に豐受太神を衣食住の神に坐と云れたる說の闇に爲ひて甚愛たし皆て此御靈形も後に伊勢に御遷幸の時供奉にて出坐り 爾時天照皇太神與ニ止由氣太神一合レ明齋レ德居焉如ニ天上之儀一一處雙座矣○今云後に二所太神と相並坐事の緣なり但此は素より高天原なる事云も門の儀式なる事云も更なり 和久產巢日神之子豐宇賀能賣命生ニ五穀一而善醸レ酒奉ニ御饗一○今云此は止由氣太神と豐宇賀能賣命と同神なるを記者の別神のごとく心得てかけるなり唯豐受太神の御酒を醸して皇太神に奉らせ給ふなりと心得べし 御炊神氷沼道主宰ニ竈神一而朝大御氣夕大御氣乎炊備氏奉ニ御饗一留○今云此は下に引る大同本記に謂る三女神の御事を申せり丹波道主貴爲ニ御杖代一氏品物備ニ貯之百机一而奉ニ神嘗一焉道主貴は開化天皇の皇子彦坐王の子丹波道主命なり之子の二字脫たる可し大同本紀に道主王子八乎止女乃齋奉御饌都神と有此にて大物忌子の始なり 諸神所レ作祭

レ神之物五穀既成百姓饒矣其功既辭竟氏天照皇太神復ニ向於倭國一比止由氣大神復ニ昇於天上一氏日之少宮座矣○今云皇太神の御靈形を天より止由氣大神の天降給ひて御饗を奉らせ給ふ較略如此なり此程の事凡て奇異なりける事耳なりければ更に疑ふべきには非ず 于時以ニ吾天津水影乃寶鏡一留ニ居於吉佐宮一給即起ニ樹天津神籬於魚井原一秘ニ藏黃金樋代一氏道主貴備ニ御饌一奉レ齋焉○今云道主貴の下に天日起命豐宇賀能賣命と有れども此は大神の天に復昇坐て後なれば誤なり道主貴にて事の儀能く通ゆ 于時高貴大神勅宣以ニ皇孫尊靈一宜レ祟ニ止由氣大神之前社一仍爲ニ相殿神一靈形鏡坐也と有り此は決て古傳なる可く所思たり此傳を惡しく見ては崇神天皇三十九年と云は此時魚井原に鎭奉れるが若くなれども然らず又或說に天照太御神と共に皇御孫命の大殿內に坐しを太御神と共に幸行て其時に留坐を如此いへりと有も信られず然るは神宮の古傳に御井社の水は高千穗宮に在しを丹波國に移せる由なるを或說の如くならむには其御井を御世々々の皇大宮に遷都の事有る時每に移し易られ崇神天皇の御世に丹波國に移されたる趣になれゝ共然る傳も無く又事の狀を思ふに必然は出來まじければ古く豐受大神と共に其御井も移有しと心得べし 但神名式宮中神卅六坐の中に主水司坐神一座鳴雷神社と有は右の御井の事に由有て祭られ給ふ神には坐せども水取の古事に依れる御井は豐受大神に屬てこそ有けれ皇大宮

に在し傳無ければ一には爲難かり偖右の傳の趣は皇太神の丹波國吉佐宮に遷幸す時に天上より止由氣大神天降來坐て大御餐を奉らせ給る事の有し事の較略を豐鋤入姬命の見認坐し故事の傳れる也若て此時其豐受大神の御靈形をも皇太神と共に合祭て天上の儀の如爲りしを皇太神は倭國に復向はせ給ひければ豐受大神の天津水影の寶鏡を留めて吉佐宮に齋奉り天津神籬を魚井原に定て此には丹波道主命を始奉り又其御女等は仕奉られしなり偖太御神の復向はせ給ふ時に高皇產靈神の勅宣有て此迄皇太御神に添御在し皇御孫命の御靈形を離ち奉て豐受大神の御許に令大坐給へる也皇御孫命の副御在事幽深き旨有べし然るは常に說く如く皇御孫命の天下所知食す大御位を高御座天津日嗣と神世より以來申奉る御事にて其高御座とは天神の御子と坐て無上至尊の謂也天津日嗣とは天下の御貢を聞食す御事なるが其中に寢勝れて止事無き物は豐受大神の御恩賴に成れる稻穀なり是以て此大神の御靈威を猶も令仰給はむ爲なる天津神量なる所なり此の天津日嗣の御事に至ては豐受大神の保せ奉給ふ神代の幽契有る事委しくは大殿祭詞の註に云るを見べし記傳十五四十三丁に豐宇氣大神は高天原にして天照太御神の常に拜祭賜ふ御食津神に坐が故に己命の御靈鏡に屬添て此御靈をも降し奉賜ふなり此葦原中國に降坐て此神の御靈實は丹波國に鎮坐けるを朝倉朝御世になむ伊勢には遷坐ける」と有は然る言ながら天照太御神の常に拜祭賜ふと有は委からず其は神樂採物幣の謌に美天久良波和加仁波阿良須阿女仁末須止與遠加比女乃美也乃美天久良と見え又杖篠鋒等の歌にも同じく止與遠加比女乃美也乃云々と有などは豐宇氣毘賣を誤まれるものにして其宮は高天原にして天照太御神の此神を祭賜ふ宮なる由に心得られたる說なれど止與遠加比女は梁塵秘抄に天照太神也と有る此正說にて止與遠加は止與宇氣を訛れるには非ず彼天石屋戶隱の時に八百萬神等の神樂を奏して大に招奉らしゝ由に依れり抑神樂の起は彼時の古事を悉く擬び物爲る事なるに其幣杖篠鋒の皆を悉く豐受大神に係て申む事は如何なる由有て然りとも知難き事なれば天照太神と爲る事穩に所聞たり然れば豐受大神と申は太御神の御食津神に坐て終古に天宮にて仕奉らせ給ふ大神と坐て天下の人民に其御恩賴を蒙らせ御在す甚も尊き御功德坐神なり但太御神に大御饌を奉らせ給ふとて

膳部神ぞなど既しめ奉る説は妄なり大御饌の事を掌給ふは此大神の極て貴き御功なる物を何ぞ臣列の神など﹅既しめ奉る事を得む二所太神宮と相並て尊み奉らせ給ふ事に深く心を著べし又鈴屋大人の割竹の辨の説も右の如くなれば允當り難かり荒木田末壽が割竹辨難にも右の止與遠加比女を豐受大神の事に心得て難じたる故に悉く難破し得られざりけり止由氣宮儀式帳に天照坐皇太神始巻向玉城宮御宇天皇御世國々處々大宮處求賜時度會乃宇治乃伊須々乃河上乃大宮供奉○今云此は垂仁天皇二十五年に御鎮坐有し事を云るなり爾時大長谷天皇御夢爾誨覺賜天吾高天原坐弖見志眞岐賜志處爾志都眞利坐奴然吾一所耳坐波甚苦加以大御饌毛安不聞食坐故爾丹波國比治乃眞奈井爾坐○今云比治は比沼を誤るならむかとも思へれども今も丹後國にて比治山と云れば誤とも定難し雜例集にも比治と有り治と沼と相近き字なれば何れとも定難けれども古事記裏書に引る丹後風土記に比遲乃眞奈韋と有れば治の方によむべきなり尙神名式に伊賀國伊賀郡比地神社伊勢國多氣郡火地神社有るは比治の例なるが豐受大神に係て思ふに比は飯(ヒ)治は主(チ)りたるにもや有むと考らるゝなり我御饌都神等由氣大神乎我許欲止誨覺奉支○今云我字を鈴屋大人は我祭の意に見られたれど然らず都て某都と有は某處(ナニト)と云と同事なる由已にも云るが如くなれば我御饌都の神と申義なり下文に御饌殿造奉弖天照坐皇大御神乃朝乃大御饌夕乃大御饌乎日別供奉と有を思合すべき者なり雜事記には此事を奉二迎彼神一可レ奉レ令レ調二備我朝夕御饌物一と有にて愈明らけし爾時天皇驚悟賜弖即從二丹波國一令二行幸一弖度會乃山田原乃下石根爾宮柱太知立高天原爾知疑高知弖宮定齋仕奉始支是以御饌殿造奉弖天照坐皇太神乃朝乃大御饌夕乃大御饌乎日別供奉と見えたり記傳に云く是に御饌都神と有て其宮にて天照大御神の朝夕の御饌を仕奉と有を以て大御神の御食の神に坐事を知べく又其御靈鏡に屬添て降奉賜ひし神なる事を知べし此同事を神宮雜例集に載る大同二年二月十日太神宮司二宮禰宜等本記に是後雄略天皇御夢爾皇太神乃敎覺給久高天原爾坐我見志末岐宮處爾鎮理坐天後經二年間一吾一所耳坐禮波御饌安不二聞坐一吾高天原爾在時素戔嗚尊乃帶十握劔乎索取三段打折弖爲レ所レ生三女神乎葦原中國宇佐島降居二道中一奉レ助二天孫一而爲二天孫一所レ祭止詔之須勢理姬乃齋奉留禮神今丹波國與佐乃比治乃眞魚井坐弖道主王子八乎止女乃齋奉御饌都神止由居乃神乎吾坐國欲止誨覺賜支○今云古史徵に此文を引て云く須勢理姬乃齋奉留禮の九字無き本も有れど今は一本に從れり度會延經の神名帳考證に丹後國餘佐郡須代神社の下に大同本記云素戔嗚尊三女神奉レ助二天孫一而爲二天孫一所レ祭止詔之神丹波國與佐乃郡比治眞名井坐須勢理姬云々と有り爾時天皇驚給度會神主等先祖大佐々命召天差使布理奉止宣支仍退往布理奉支是豐受大神也即度會乃山田原爾荒御魂宮和御魂宮造奉天令二鎮定理坐二其宮之內艮角御饌殿乎造立天其殿內爾天照坐皇太神御坐奉二東方一止由氣大神御坐奉二西方一又御伴神三前御座下奉流大佐々命乃定奉拔穗田乎從二春始二神主等勞作天拔穗爾拔天神主乃女子等未二夫婿一乎物忌爾定令二舂炊一戴持神主御前追天物忌子乎御饌殿

奉入天土師物忌之造進御器爾令ニ盛奉一奉了天物忌去出神主物忌乎率其殿前侍祈禱白久朝廷天皇常磐堅磐爾護幸奉賜比百官爾仕奉人及天下四方國人民平爾愍給止申拜ニ奉天照坐皇太神八度止由居大神八度御伴神八度一毎日朝夕爾供奉又三時祭波毎レ官夕朝供奉此乎由貴奉夜止號也と此は儀式帳の方よりは委しく且其義を解釋せるが如き者なり此傳に依る時は須世理姬命と申は彼三女神の御事なるが皇御孫命を幽より助奉て其天津日嗣の御爲に豊受大神を所祭（イツキマツレ）とて先立て天降し給ひ皇御孫命と共に彼御靈の天降らせ給ふ時を待奉らせ給へるが添御在るにて此は神ならぬ身は聞見すまじき幽事なるを此大神の由に縁て皇太神の宣ひ顯はし給ふ所なるが顯には丹波道主命の御女八少女の齋奉れりとの趣なり又此傳に依て其御饌都神と坐す狀も窺ひ奉らるゝなり此時は太神宮諸雜事記に雄略天皇即位廿一年丁巳天照坐伊勢太神宮乃御託宣偁我食津神波坐ニ丹後國與謝郡眞井原一須早奉レ迎ニ彼神ニ可レ奉レ令レ調ニ備我朝夕御饌物一也託宣賜既了仍從ニ眞井原一奉迎支伊勢國度會郡沼木鄉山田原宮仁奉鎮給（倍利今號ニ豊受大神宮一是也）其後皇太神宮重御託宣偁我祭奉仕之時先可レ祭ニ豊受神宮一也然後我宮祭事可ニ勤仕一也云々彼宮禰宜仁八天村雲命孫神主氏乎別定置令ニ供奉一也即依ニ託宣一豊受神宮之艮角造ニ立御饌殿一毎日朝夕御饌物調備令ニ捧費一令レ參ニ向太神宮一爾時大神宮禰宜天見通命孫神主氏乃禰宜請預供奉之例也但皇太神宮天降御在之後經ニ四百八十四年一然後彼天皇即位廿二年戊午七月七日豊受神宮乎波被レ奉レ迎也と有が如し（但天皇の御夢に諭奉給ひしは十月朔日なり此事上代本紀次第記傳記本緣等に所見たり若て伊勢に御鎮座は九月望なる由見えたり偖此傳に丹後國と有は丹波丹後と別れたる今を以て記せるが故なり）偖儀式帳大同本記雜事記の趣にては右の如く天皇の御夢に耳御託言有し由なれども神宮の書共には倭姬命に御託有けるを天皇に奏上させ給ひけるに天皇も然御言を受給へる由にて御夢合の事有けるなり倭姬命世記を始て神宮の古書に泊瀨朝倉宮大泊瀨稚武天皇即位廿一年丁巳冬十月朔日倭姬命之御夢爾教覺給久皇太神吾一所耳坐波御饌毛安不ニ聞食一丹波國與佐之小見比沼之眞井原坐道主子八乎止女乃齋奉（○今云與佐之小見と有は其邊の總名なるべし道主子を本緣に道主之裔と有る實に然るべし道主命の裔等其國造と有て其部內の神に仕奉られしなり）御饌都神止由氣太神乎我坐國欲止誨覺給支爾時大若子命乎差使朝廷爾令ニ奏上一天御夢狀乎令レ申給支即天皇祥御夢則天皇今日相夢（ユメアハセ）

シタマフ矣〇今云祥御夢以下十一字上代本記及本縁に依て補へり然らざればば上に引る儀式帳以下に所傳と甚事の狀乖(タガ)へるが故なり能考ふ可し又此大若子命を大同本記及次第記には大佐々命と有り然れども二所太神宮例文度會遠祖奉仕次第に依に大若子命は垂仁天皇御代奉仕と有り倭姫命の此御世迄長く御在りしかば其にても宜しけれども其例には定難し大佐々命は雄略天皇御世奉仕と有れば大佐々命と有方允當(アタ)れりと云べし 汝大若子乎使罷往天布理奉止禮宜支故率手置帆負彥狹知二神之裔以齋斧齋鉏等採山材搆立寶殿而〇今云上代本記本條等には今歲物部八十氏之人等率手置帆負彥狹知二神之裔と有り世記にては大若子命の摠裁し給へる趣なるか物部の八十氏人と有は違へり世記皇太神御鎭坐條に今年倭姫命詔大幡主命物部八十友諸人等五十鈴原乃荒草木根苅掃比大石小石造平且遠山近山乃大峽小峽爾立並木乎齋部之齋斧乎以天伐採天云々と有を考合す可し 明年戊午秋七月七日以大佐々命天從丹波國余佐郡眞井原志天奉迎止由氣大神度會山田原乃下都磐根爾大宮柱廣敷立且高天之原仁千木高知且鎭理定理座止稱辭定奉云々と有り尙御遷幸の委しき事は上代本記及御鎭座本縁に明年戊午秋七月七日以大佐々命奉布理留于時大佐々命小和志理命奉載御正體利興魂命道主貴之孫子大物忌之祖也奉載相殿神皇孫天津彥々火瓊々杵尊也共從神大御食津臣命屋船命宇賀之御魂神宇須乃女神宇賀乃大土御祖神若雷神彥國見賀岐建與束命建御倉命天日起命振魂命〇今云大御食津臣命以下其々に細注(コガキ)有れども上に引る丹波の與謝宮に天降給ひし條に悉記せれば省きつ偖此神等の御神體は次に擧る事代命以下の人々の振奉るなり 又其相從人事代命佐部支命御倉命屋和古命野古命乙乃古命河上命速御倉命興魂命各前後左右爾相副從奉仕末社之正體乎奉布理各前後左右爾相副從奉仕〇今云太神宮例文度會遠祖奉仕次第に舊るに小和志理命は天牟羅雲命裔にて彥和志理命の代は絕たれども實は弟にて爾佐布命の二男なり事代命は爾佐布命の三男なり大佐々命は彥和志理命の二男にて其三男は御倉命也佐部支命は彥和志理命の長男阿波良波命の一男なり乙乃古命は阿波良波命の四男なり河上命未考速御倉命與魂命二柱は必上なる建御倉命振魂命の亦名の再出たるなり上件上代本記は文に錯亂有に依て本縁に依る 瑞仙蹕(ミサキハラ)比錦蓋覆日繩曳氐天御翳日御翳屏奉行幸爾時若雷神天之八重雲乎四方爾薄靡氐爲御垣氐從丹波國與佐宮遷幸倭國宇太乃宮御一宿坐須次伊賀國穴穗宮爾御二宿坐于時朝夕御饌箕造竹原幷箕藤黑葛生所三百六十町亦年魚取淵梁作瀨一處亦御栗栖三町國造等貢進留仍二所皇太神之朝大御氣夕大御氣之料所爾定給支〇今云丹波より宇太宮迄の御宿を記さゞるは先與佐宮より雄略天皇の皇大宮に迎取り奉給へるなり此時の都は長谷朝倉なれば其より宇太に遷幸坐て御一宿有べき御道の順次なり 次伊勢國鈴鹿神戶爾御一宿次山邊行宮爾御一宿今號壹志郡新家村是也次遷幸渡相沼木平尾興手行宮氐三箇月坐焉今號河原社祭之〇宇太乃宮より以上御五宿なり三箇月坐は七月より九月迄を計へたるなり 號爾處氐名離宮也夜々天人降臨而供神樂留今世號豐明其緣也來目命之裔屯倉男女小男童神宴焉〇今云上代本記延佳が頭書に非禁裏豐明之緣離宮院豐明神事之緣也と有り然る言なり離宮院は雜例集に所載る延曆十六年丁丑八月三日官符に從度會郡沼木鄉高川原移造於同郡湯田鄉宇羽西村と見えたる此なり 戊午秋九月望從離宮遷幸山田原之新宮奉鎭御船代御樋代之內以天衣奉飾之如日小宮之

儀也依天照太神御託宣（于時託御于白髮内親王宣給是也〇今云白髮内親王と申は雄略天皇の皇女にて稚足姫皇女の御事なり倭姫命にて有べきを如何）太神第一攝神多賀宮乎奉傍止由氣宮也亦天照太神御託宣相殿坐神二前（天兒屋命　天太玉命）止由氣宮相殿神皇孫命爾奉陪從留故號止由氣宮相殿而東西座給支自爾以往以天手力男神萬幡豐秋津姫命天照皇太神乃爲相殿神坐（元是號御戸開神也）云々と見えたり此豐受大神御鎭座の較略なる者也（多賀宮乎奉傍止由氣宮也は元此宮荒祭神と同處に左右に在しゝを高宮の地に移し奉れるなり元より其地なりしを其任に奉らせ給ふには非ず實基本記に天平十九年丁亥九月諸別宮遷宮事荒祭宮任假殿造立之舊跡奉遷于東宮地也于時本宮西宮地座豐受宮御鎭座以往荒祭宮與高宮學左右二所爾御鎭座以中間爲假殿之地故也と有を以知べし）〇豐受大神御靈形の事倭姫命世記に靈御形鏡坐と有て上に引る文に以天津水影乃寶鏡留居於吉佐宮給と見えたる此なり上代本記に在昔天鏡神鑄造三面眞經津鏡是也と有て其一面は荒祭宮の御一面は多賀宮の御なる由なるは究て古傳なるべし右の天鏡神は石凝姥命なるべき事云も更なり（其餘神宮の書共に此鏡に就て種々云る事共有れども悉く妄說にて取に足ず寶鏡開始元々集神祇本源等に出たるも其本着く所同じければ皆信用ひ難し）右の天鏡神鑄造三面と有に就て考有り次に引る大倭本記雜事記雜例集日本紀略等に三面と有る鏡とは其員に入ながら又別なる子細有り右の書共に云る所は伊勢の御と日前の御と此豐受大神の御

とを合せて三面にて荒祭宮多賀宮の御は其數に充ずと雖も右の二宮は皇太神の荒魂和魂神に坐せば彼三面を鑄造らるゝ時共に所成りし事論を竢ず然れども内侍所には右の三面有て荒祭多賀神のは素より非る事と見えたり（然れば天石屋戸段にて成れる所合せて五面なり其を御正史に記されざるは主と有る御を耳擧られたるなり古語拾遺に矛玉自從と有が例なり尙下に云事を見合せて曉る可し）大倭本記に天皇之初天降來之時共副護齋鏡三面子鈴一合也と有る本註に一鏡者天照大神之御靈名天懸大神今伊勢國磯宮崇敬拜祭大神也一鏡者天照太神之前御靈名國懸大神今紀伊國名草宮祭敬拜大神也一鏡及子鈴者天皇御食津神朝夕之食向夜護日護齋奉大神今卷向穴師社宮所坐拜祭大神也と所見たる一鏡は伊勢太御神に坐て御靈形の御名を天懸大神と申し一鏡は紀伊國に坐す國懸大神に坐し一鏡は天皇の御食津神と祭らせ給ふ豐受大神の御靈形子鈴は大和國城上郡卷向坐若御魂大神に坐りとなり合せて鏡の數三面なるは内侍所に坐三面鏡の數に合へり（此は明文抄に載る方を取れり釋紀にも引たれど誤多し故翁も師も其に依られたる故に說損はれたり師の古史徵に右の三面の内二面を日前大神國懸大神二柱と爲て伊勢の御とは思及ばれざりけるは本文に伊勢の事を漏せるが故なり記傳には此御食津神は此記と合せて思ふに此豐宇氣神の御靈代と聞えたるに穴師社に坐と云るは不審し故思ふに此は鏡と鈴と二に坐せば若穴師社に坐者ならば彼社必二座なる可きに一座なれば彼社は子鈴の方にて鏡は別に此伊勢の外宮に坐由を云べきに其方は漏て一に

穴師社に混たる傳にや有む」と有れど古史徴に一鏡及子鈴者云々は甚紛はしき書紫なれど熟見れば天皇云々齋奉大神は一鏡に係り今卷向云々拜祭大神也は子鈴一合に係れる義なり云々と云れしにて甚能く聞えたり 日本紀略天德四年十月三日條に去月廿四日依宣旨御二坐内裏一賢所三所奉レ遷二御縫殿寮一之間内記奉レ納二威所三所一一所鏡件鏡雖レ在二猛火上面一不二涌損一即云伊勢御神云二所眞形無二破損一長六寸許一所鏡已涌亂破損紀伊國御神云々と有るは二所の内に眞形は破損無く其一は破損せりとの義なり年中行事秘抄にも此文を載たるに賢所三所一所鏡件御鏡雖レ在二猛火上一而不二涌潰一即云伊勢國御神 一所眞形無レ損長六寸許也 一所鏡已涌亂紀伊國御神 と有を以知べし釋紀に引る天德御記にも此時の事を記して瓦上在鏡一面其徑八寸許頭雖レ有二小瑕一專無レ損二圓規幷蔕等一云々伊勢太神一所云々長六寸許也一所鏡云々紀伊國御神云々と有る此より出たるなり但小右記に恐所云々鏡三面伊勢國大神紀伊國日前國懸と有は誤なり日前神即國懸神なるを右の二面にわたる事佗古書に合ざれば其心得有べし上件の事實を右の大倭本記に合せ稽るに其數已に合るが伊勢の御は謂ゆる八咫鏡にて神宮の秘記に云る八頭花崎にて中臺圓形の八葉鏡此にて寶鏡開始に日矛鏡と云物此に近し次に一所眞形と有は圓鏡にて謂ゆる眞經津鏡にて豊受大神の御靈形即此なり書紀正書に已に八咫鏡一云眞經津鏡に混れて有れども此一云は決く後人の八咫鏡を然る物と解りて書入たるが本文に列りたるなり未其頭誤るべき時ならぬを思ふ可し眞經津とは此に眞形と有は圓形なるに同しく圓縁といふ義なればなり次なる一所鏡は二所眞形と有る其一にて紀伊國日前大神に坐が圓形にして其中に八頭花形有るなり寶鏡開始に出たる八咫鏡圖と有る物此なり予由縁有て御鏡師青天正丸が秘傳を聞たるに常御殿にも内侍所御撰造の三面の御鏡有り此は崇神天皇よりは遙に後の御世に出來れる白銅鏡なるが伊勢の御は八頭花崎にて亘八寸眞形は圓形にて亘六寸日前の御は圓鏡の内に八頭花形有にて亘八寸弱なりと云り此にて右の三面の數にも合ひ且其狀を知に至れり伯家の類に御鏡御拜所被レ用之御鏡三品の圖に一は八頭花形一は八稜鏡なるに何れも八寸口傳と有り但此は御拜の時に被用るにこそ有けれ右の類に非ず 但神代より所傳三面なるに就て中古より誤來る事有り太神宮諸雜事記及雜例集所引神宮記に寛弘二年乙巳十一月十五日内裏燒亡而去天德四年以來内裏燒亡之間不二被レ燒給一留佐 内侍所神鏡今度燒亡爾被二燒損一給因レ玆件神鏡可レ被レ奉二鑄替一由且被レ行二陳定一且可レ被レト二筮吉凶於神祇官陰陽寮一之由公卿詮議之間各勘奏云件神鏡者是非二人間之所爲一天地開闢之時於二高天原一天鏡作遠祖天香山命乃鑄造之神鏡也件鏡元三面也廣皆以二ケ尺一而已一面坐二伊勢國一

須一面坐二紀伊國一須一面坐二內侍所一須是件鏡也〔子細具見二于日本紀一〕と有る此一面坐二內侍所一と有は誤なり此なるは伊勢の御摸造にこそ有れ神代よりの事ならず瑞籬朝御世に出來る所なれば其員數には加難き事なり右の紀略に眞形〔長六寸許也〕と有に當れゝば必豐受大神の御なるを其頭傳を失へる者なる可し但此御摸造の事は崇神天皇の御世迄皇太神と共に皇大宮に在しゝならねば雄略天皇御世に丹波より御遷幸の道次にて皇大宮に御宿坐ると所思しき事上に引る世記の小註に云るが如くなれば其時にや成つらむ又豐鋤入姫命の吉佐宮に皇太神を齋御在しゝ間に其御圖象を物爲て朝廷に奉らせ給ひ其時より威所に齋はれ給ひけむ此二より外に考る所無れども今定め難かり如此く內侍所三面の內に豐受大神の事は大倭本記の外は其傳を失へれども伯家部類なる每朝御拜御作法に伊勢內侍所兩段再拜と見えたる如く伊勢內侍所並云ふ事常の事ながら例幣齋籠中遙拜之事條に伊勢兩宮內侍所兩神神祇官八神殿と有て伊勢兩宮に內侍所兩神と相對たるを以て天照皇太御神豐受大神と相並はせ給ふ傳を失はざるは甚尊し〔但內侍所には日前大神を合せて三柱なれば三神とこそは拜ませ給ふべきに兩神と爲る事は大倭本記にも見えたる如く彼御鏡は皇太神の前御床に坐せば同神に坐か故に一柱と爲奉る事なり同書に御即位由奉幣御祝詞天照大神ト計有之時且雖二以有一不審二天照太神を天子豫レ奉レ敬御心則豐受宮可籠歟以上口傳但伊勢を兩宮と申し內侍所を兩神と申し奉ること傳受候事也と有は然る言なり必受る所有べし〕猶右の大倭本記に齋鏡三面子鈴一合と有を以思ふに右の三面共に石屋戸の時に所成るなり其は神代紀一書に故即以二石凝姥一爲二冶工一採二天香山之金一以作二日矛一又全二剝眞名鹿之皮一以作二天羽鞴一用此奉造之神是即紀伊國所坐日前神也と有る日矛は天鈿女命所持れし著鐸之矛なる可き事右京大夫紀俊範記に以二日御像一爲二日前大神一石凝姥命思兼命爲二左右相殿一以二日矛一爲二國懸大神一天鈿女命玉屋命爲二左右相殿一と見えたるを思ふ可し右の子鈴一合と有は決て此日矛に着たる鐸なる事決し〔平田翁の古史徵に此一書の日矛を取られざりしは着鐸の矛と別物と見られたる誤なり又日前神の御鏡を二面と心得られたるも右の大倭本記の全きを見られざりしが故なり我黨小泉康敬云神名式に紀伊國名草郡日前神社國懸神社と別々なれども元は決めて一社なりしなりと云るは然る言なり天武天皇朱鳥元年紀に幣を頒るゝにも紀伊國國懸神と云て日前を云ず持統天皇六年御紀に紀伊大神と有を通證に據二朱鳥元年紀一則指二國懸社一と云る如く上古より一社の如く會釋なるを思ふに式の如く二社には其後に別れたる者なり然らざれば國懸大神と申す御鏡の却て日前宮に在し日矛の國懸宮に坐す可き理無ればなり紀俊範說に日前宮所祭二座西爲二日前大神一東爲二國懸大神一と有は故實と謂つ可し猶右の國懸社は日矛なるに相殿に玉屋命の在すを思ふに子鈴と玉とを飾りて物爲しなり矛に玉を飾る事天瓊戈などの例多かり此は事の因に云なり〕古語拾遺に於是從思兼神議令三石凝姥神鑄二日像之鏡一初度所レ鑄少不レ合レ意〔紀伊國日前神是也〕次度所レ鑄其狀美麗〔伊勢

太神是也と有る此趣にては伊勢と日前と二面の如くなれども少不レ合レ意と有る上は幾計も造れりけむ事體を思ふに最初のは眞形（カタ）の長六寸許なる故に小きと圓きとにて意に合はざりし其一なるが正史には漏たるなり此眞經津鏡にて後に豐受大神の御靈形と定り坐るなり神宮の古書に天鏡神鑄造三面眞經津鏡是也と見え大倭本記に天皇之初天降來之時共副護齋鏡三面と見え紀略に威所三所と有など彼此思合せて正史の缺漏を恐ければ補奉る可き也（然るを師の古史徵に少不レ合レ意と有る少を大小の小の義に説れしたるは誤なり其は彼眞形長六寸と有を日前の御と思ひ誤らたるなれば信ひ難し太體其時の事を測るに先に眞形を造られたれど猶意に合はず次も八頭花形なるを造れりしかども猶意に合はず此は日前大神なり次に八頭花崎に造られたるぞ其狀甚美麗しく有て太御神の御靈とは定め坐るが猶此外にも有つらむを伊勢と日前と主々しき二を云て餘は傳漏せるなる可し上代本記に天鏡神鑄造三面と有に豐受大神の御と荒祭宮多賀宮の御とを合せて三面と有るは違へるに似たれど其も此も天石屋戸の昔在に成れる古説の傳はるも有なり又相殿に坐す皇御孫命の御靈形も此時のなるべき事佗相殿神等のも皆其時の物なるに思合す可し）〇相殿神及多賀宮の事記傳十五（四十九丁）に倭姬命世記に豐受大神一座相殿神三座大一座天津彥々火瓊々杵尊形鏡坐前二座天兒屋命太玉命形笏坐寶玉坐大左方坐前右方坐と有る式には相殿坐神三座並大と有を此世記に大一座と云るは餘二座は差後に大に成奉り賜へるにや又は本より並大ながら其中にも尊卑さ差異有る故に分て大と云ひ前と云るにや」と有は倭姬命世記は式文を撰ばれし延喜より上世の書なるが故に合はざる也神名秘書なる右相殿神の下に件神延喜十一年正月廿八日官符預二四度案上幣一太神宮相殿神與同日符也と有る同書內宮相殿神條にも此事の官符を載て度會宮相殿三座と有る三座は心得ぬ事なり豐受太神と共に遷幸坐る皇御孫命の此時迄小社の神の列に案下幣なるべき所謂無れば世記に右の相殿神を大一座前二座と有ぞ往昔の狀なる可き（但延喜式の功成て奏上せられしは延長五年なれば神名式にも並大と記され太神宮式にも度會宮四座多賀宮一座右二宮祈年月次神嘗等祭與レ之と有は此に依れり）　左相殿　天津彥々火瓊々杵尊の相殿と鎮り定り給ふ事は豐受大神丹波國與佐宮に坐し時高貴大神の勅宣に依れる事上に云るが如し天津日嗣の御上に就て殊に親ませ給ふ義なり御鎮坐次第記に皇御孫尊御靈形金鏡坐二面大西小東以レ西爲レ上同御船代內座是神代靈異物也（以二一面一爲二一座一居）道主貴奉齋神是也大物忌內人奉仕其緣也と有る以二二面一爲二一座一居は本緣に右二面の事を記して今一面是皇孫荒魂御靈形也とあるが如し神官秘傳問答に瓊々杵尊の荒魂を天上玉杵尊（アメノホルタマキ）と申て瓊々杵尊と同じ御船代に一座して御神體の御形は二體御在す此を五神四座

の秘事と云ふ」と有は物に所見ざれども神宮に傳ふる所なる可し偖此皇孫命ぉ雄略天皇の御世に豐受大神と共に度會宮には遷幸坐る也上代本記に其時の事を記せる次に亦天照太神御託宣相殿坐神二前止由氣宮相殿神皇孫命に奉ニ陪從一留故號ニ止由氣宮相殿一而東西座と有は右の二柱を皇御孫命に傍奉給へるなり師說（古史徵）に往古の神勅の如く甚上代には右の二柱は太御神宮の相殿に拜祭り給へりし也其は世記に天照太神一座（御形八咫鏡坐也）相殿二座（左天兒屋根命右太玉命）と記して別に御戶開神二座天手力男神拷幡千々姬命と有以て知るべしと云れたるは然る言なり（又右の世記に天兒屋根命太玉命と云傳は雄略天皇の御世より以前の傳手力男神千々姬命と云ふ說は其より後を云る傳なり」と云れたるなど甚愛たき說なりかし）右相殿神天兒屋命天太玉命二柱は元より皇御孫命の御靈形に副御在けむを皇太神と共に皇御孫命の與佐宮に遷幸る時高貴大神の御託宣に依て御靈形を離ちて豐受太神の相殿に奉らせ給へるは右の二柱は皇太神に陪從ひ奉て伊勢に鎭坐しを豐受大神の度會宮に遷幸るに就て又皇御孫命に附奉らせ給へるなり神代紀（一書）に所見たる天照太神の御命に復勅ニ天兒屋命太玉命一惟爾二神亦同侍ニ殿內一善爲ニ防護一と有る如く皇御孫命の御爲には

甚も止事無き神等に坐るが故に上代本記なる上に引る號ニ止由氣宮相殿一而東西座と有る細註に東天皇孫命一座西天兒屋根命靈形笏天津賢木靴副坐太玉命靈形瑞曲玉坐但東御靈常西相殿並座給也と有る如く皇御孫命は東に御坐を定させ給ひながら西方に坐事は御補佐の神々に防護られ給はむが爲なる事云も更也天兒屋命の靈形笏坐は同書石屋戶の故事をいへる所に木々合々（キトキトツチアハセ）而備ニ安樂之聲（ソナフアツビノコヱ）一と有る此にて謂ゆる笏拍子の事なり太玉命の靈形瑞曲玉坐は次第記本緣等に八坂瓊曲玉奉藏圓宮也と有る如くなるべきが此も天石屋戶段の物なる可し（然るを其書共に是天祖吾勝尊所化寶玉是也とも天磐戶開之時天太玉命奉レ懸ニ眞賢木枝一之玉也など云るは八坂瓊曲玉と云より然る附會の妄說を起せる者なり）因に云ふ多賀宮の御事は神名式に伊勢國度會郡高宮（大月次新嘗）太神宮式に多賀宮一座（豐受大神荒魂去ニ神宮一南六十丈）右祈年月次神嘗等祭供レ之と見えたる此なり然るに上代本記には依ニ天照太神御託宣一太神第一攝神多賀宮奉レ傍ニ止由氣宮一也と有を倭姬命世記皇太神御鎭座の事を記せる條に下津磐根爾大宮柱廣敷立氐天照太神並荒魂宮和魂宮止奉ニ鎭座一と見えたる同傳を本緣には天照太神幷荒魂（荒祭宮也）和魂（多賀宮也）奉ニ鎭座一と有て寶基本記に荒祭宮高宮者云々

謂二荒魂和魂一是也と有にも打合ひて此傳の如く素より皇太神の和魂神と坐しを豊受大神に傍進らせられて其荒魂と爲給へる皇太神の奇異なる神量なり其は下に云べし然るを古史徴に儀式帳及延喜式にも多賀宮を豊受大神荒魂と有れど元は決めて皇大神和魂と有しを書改たる由に云れたれど其は荒魂和魂の活用を知られざる説なれば予は信（タノ）まず世説に多賀宮一座豊受荒魂也伊邪那岐大神所生神名伊吹戸主神亦名神直日大直日神是也と見え又度會宮鎮座の件に皇太神第一攝神多賀宮波平豊受大神に奉副從給者也と記し其は傳記にも多賀宮則伊吹戸主神天照太神第一攝神也依二神誨一奉レ傍二止由氣宮一也とも有て何れの傳も此に同じ師說古史徴にも此等の事を記して太御神の和御魂と坐て第一の攝神と坐す神を放ち奉りて豊受大神に傍奉れる事如何にも太御神の御託宣に依ては得爲まじき事なれば此傳說允に然る可しと云れたるは實に然る言也但右の世記の豊受荒魂也を皇太神和魂也と作て見べしと云れたる其は會宮に傍奉られし後の文なれば本の任にて有べし但内宮に坐し時は皇太神和魂也と有べき也倍皇太神の和魂を豊受大神に傍奉給ひし所以は神代記に軻遇突智娶二埴山姫一生二稚產靈一と有て火神十神の御間に萬物を生々し給ふ稚產靈神を生給へり又古事記に和久產巢日神此神之子謂二豊宇氣毘賣神一と有て豊宇氣毘賣神は火神土神には御孫なるが此に就て幽深き致有り凡大地に在と有ゆる萬物の生出る其根元は天日の光輝大地に蒸徹る時に已に物と成て生出むと爲る一種の神氣を結び成す此稚產靈神の生坐る由縁に因れり斯て其地方に隨ひ物と成て生出る此豊宇遇氣毘賣神の其神の御子として生坐る由緣に因れり倍天日は宇宙に炎光を放ちて產靈の神德を成すの域也八百萬千萬と神も多在るに天照太御神の殊に豊受大神と御力を合せ給ふ幽契有の本緣也又須佐之男大神は御父大神に此大地を依され奉給へる神に坐に此大神高天原より天照太御神の大御使として天降り給ひ保食神即豊受大神是也の御許に到着給ひ其時の事に依て陸田種子水田種子など天下蒼生の食て活べき萬の物等成れり此全く豊受大神の御靈物と有る草木の大地に養て成る本緣有り此と彼とを合せ考れば火神土神にて稚產靈神を生成し給ひ天照大御神と須佐之男大神にて豊受大神の御功德を彰し坐るを其本末相整へる神事也然して天照太御神と須佐之男大神と御誓の御間に天之忍穗耳命の生出給ひ其大御末にして天津日繼を保ち給ひ天地と無窮く御隆坐事奇異し其微妙也其云も得難く號けも爲難き御事也

（已にもみる如く天津日繼と申奉るは天照太神の給(ツギ)依し給ふ瑞穗の御貢を天下より奉給ふ御事なるに其瑞穗は豐受大神の恩頼なるを思可し）偖荒魂和魂の事を今俗に云ふ善惡の義に說成すなどは皆粗き論なり抑荒魂とは其靈威(タマノイカリ)の佗に及て其物をも事をも成就に用く魂なり和魂とは內に居て其の魂の饒び整ふを云ふなり神功皇后御紀に神有レ誨曰和魂服二王身一而守二壽命一荒魂爲二先鋒一而導二師船一即得二神敎一而拜二禮之一と有るを以知べし其下に既而則撝二荒魂一爲二軍先鋒一請二和魂一而爲二王船鎭一と有にて愈明けし尚其證は雜事記を閱るに皇太神の御自御託宣有べき事を其は何時も荒魂神を以て物爲させ給ふ事にて我皇太神宮第一別宮荒祭宮也而依二太神宮勅宣一天云々所二託宣一也と有て凡て佗に及ぼせ給ふ御事業は善惡に拘はらず荒祭神の御所爲なると彼荒魂爲二先鋒一と有と事體の同じきを思ふ可し（尚此事は卷三第五詞の下に委しく註へれば今は唯其要領を摘て云のみ）若て皇太神の和魂神を豐受大神に傍奉らせ給ふ事は其御身に服て壽命を守り其御靈(ミタマ)を鎭めて尊く貴(タカ)く廣く厚く齊へ奉給ひ大神の御靈威の彌益々に令幸奉給はむとの大御心なる事相殿に坐す皇御孫命の御方に天兒屋命天太玉命を傍奉り給ひて令防護させ給へると事は同じからねど其御神德を幽

贊け奉らせ給ふに等しきなり然れば皇太神より傍奉らせ給ることそは其和魂神に坐れど豐受大神の其の御靈を資て世に幸給ふ御神德は皇太神の神量り坐る如く成就る幽契(コトワリ)なるを以て儀式帳及延喜式其佗の古書にも右の多賀神を指て豐受大神の荒魂と申には至れりし者也けり此は甚も奇異なる幽深き致なる故に此等の條理の明亮き久代ならでは得も云まじき事なるが故に予は如此く思定たり（已に神代に大國主神の荒魂大國魂神は天下經營の事を成し大造の績を進給へるが和魂大物主神は皇御孫命の近守神と爲て御靈を御諸山に鎭給へるなどの事有を思ふ可し）偖然御靈を傍て其神威を加す事は顯宗天皇御紀なる日神月神の御託言に我祖高皇産靈尊有下預二鎔造天地一之功上と有る預鎔造と同じく皇太神の大御威力を添て豐受大神の御靈物を國も繁々(シミ)に蕃息らせ給はむ大御心にて其歸る所は此神の御身より成れる物共を見行して是物者則顯見蒼生(ウツシキ)可二食而活一之也と宣給へる大御旨の外には出ずなむ有ける○此大神の天照太御神の御食津神に坐事は已に第三卷なる太神宮祈年祭詞の下に其由來を說置又九卷大殿祭詞の條に委しく說言しつれ其猶云べし抑天宮にして天照太御神の大御心と思はし立して須佐之男命を大御使と爲て天降し給ひ保食

神の消息を令見給ひけるに此神種々の味物を鼻口又尻などより取出て種々作備て進られしを須佐之男命其所業を立伺ひて打殺し給へる趣なるに古事記裏書に引る攝津風土記に昔豊宇可乃賣神常居二稲椋山一而爲二膳厨之處一後有レ事不レ可レ已遂還二於丹波國比遲乃麻奈韋一と有は諦しく此時の事なる可く思ゆるに皇御孫命の御天降に至て御靈形を天降し奉らせ給へるなどを思ふに須佐之男命は打殺し給へりと所思して天上に復命し給へれども其實は其事有る時に當りて忽に其御身を種々の種子(モノ)と化して現御身は丹波國に還らせ御在しけるを天熊人を遣して見認させたまひけるを實に已に死坐し狀に其御身に種々の種子成て有しを今般は其物耳を取持去て奉れるが後には其正身をも天宮に迎させ給ひしより常に天宮にて御食津神と仕奉らせ給ひ御殿には屋船神と申し大宮賣神とも申て御饌御酒の事等に至る迄も悉く掌り御在しなり（此神の大和國廣瀬に在す御名を大忌神と申も天照太御神の御饌を主り給ふ神なるか故なり儀式帳に御炊物忌御鹽燒物忌なと凡て其物忌と云が多在るは皆供物に係れる人の職なるを思ふ可し此事大忌祭詞の下に已に云り）然らざれば皇太神の我御食津神と詔給へるに協はず又我高天原に坐て見し覓給ひし所の五十鈴宮には鎮坐れども我一柱耳坐して若し大御饌も安く聞食す坐故に其神を我許に奉迎れと仰給へるも天宮の儀の如く爲よとの御命なり此を以ても世と共に現御身の天宮に坐す御事を曉る可し世記及諸書に彼吉佐宮に天照太御神の坐し程に止由氣大神の御天降坐る條々を記して天照皇太神與止由氣大神云々如二天上之儀一一處雙坐と有をも思ひ捨まじき者なりかし（此等の事も大殿祭詞の下に委しく註れば考合すべし然るを先輩等の說に豐受大神は天照大御神の重く祭らせ給ふ神なる由に云れたるに彼神樂歌耳を所據と爲られたるにて事實に協はざるは時に考漏されたる者なりけり）倭止由氣宮儀式帳に即從二丹波國一令二行幸一弖度會乃山田原宮定齋仕奉始支是以御饌殿造奉弖天照坐皇太神乃朝乃大御饌夕乃大御饌乎日別供奉と有は止由氣宮に御饌殿を造て其にて調進せる大御饌(モノ)を日毎に運奉る事なれども其實は豐受大神を奉らせ給ふ義なり其は雜事記に載る其時の皇太神の御託言に早奉レ迎二彼神一可レ奉レ令レ調二進我朝夕御饌物一也と有を以知べきなり此を下に引る皇太神宮儀式帳とを合せて御食津神と申す其大體を曉る可きなり然れば世記を始諸書に天照皇太神重託宣久吾祭奉レ仕之時先須レ祭二止由氣太神宮一也然後我宮祭事可二勤仕一也故諸祭事以二止由氣宮一爲レ先是也と有を考るに豐受大神は

御食津神と坐し相殿の皇御孫命は御子孫と坐て共に太御神の齋れさせ給ふ可き神々なれば先其大神にて試させ給ふ其御祭を享させ給はむとなり熟々前後の事共を照し合せて味ふ可し此を以て内外兩宮の尊卑を定むるなどは甚も賤しく俗ひたる論なり此も彼も取るに足べき説有を未聞す又雜事記に即依ニ託宣ニ豊受神宮之艮角造ニ立御饌殿ニ朝御饌夕御饌物調備令ニ捧賫ニ令レ參ニ向太神宮ニ爾時太神宮禰宜天見通命孫神主氏乃禰宜請預供奉之例也と有る如く日每に度會宮の御饌殿より皇太神宮に送り備奉る例なりしなり但雜例集にも右の文有に其宮之内艮角御饌殿乎造立天其殿内爾天照坐皇太神御坐奉ニ東方ニ止由氣大神御座奉ニ西方ニ又御伴神三前御座下奉流云々日每朝夕爾供奉と有には日每に内宮に送り備る事を云ず神龜以後御饌殿にて祭らるゝ趣に異ならず下に引る儀式帳に合考ふべし然るを其送り奉る事は止て豊受宮の御饌殿に於て皇太神の朝夕の大御饌を奉らせ給ふ事は同書に聖武天皇神龜六己巳年正月十日御饌物依レ例於ニ豊受神宮ニ調備從レ彼賫ニ參於太神宮ニ之間字浦田山之迫道死男爲ニ鳥犬ニ被レ喰ニ之肉骨ニ分ニ散途中ニ然而依レ無ニ遁去之道ニ件御饌乎賫徹天合期供進已了爰同年二月十三日天皇俄御藥仍令レトニ食神祇官陰陽寮ニ勘ニ申巽方ニ太神宮依レ觸ニ死穢ニ不淨之咎ヒ所ニ崇給ニ也者即下ニ賜宣旨於國司 大神宮司ニ被ニ搜勘ニ之處件浦田坂之死人之條依レ實注申云々其後依ニ宣旨ニト定豊受神宮新建ニ立御饌殿ニ可レ令レ供ニ奉大神宮朝夕御饌ニ之由神祇官陰陽寮共申既了仍宮司千上蒙ニ別宣旨ニ致ニ不日功ニ豊受宮外院建ニ立御饌殿一宇瑞垣一重ニ自爾以降於ニ件殿ニ供ニ進朝夕御饌物ニ今號ニ御饌殿ニ是也永停ニ止賫參之勤ニと有が如し此に依る時は又更に御饌殿を建立られたる由なれども彼雄略天皇御世に艮方の角に造立られたるは太神宮に送備奉る御饌炊殿なりしを此の所にて皇太神豊受大神相殿神の御饌を備奉る爲に造改られたる者なり儀式帳に二所太神朝御饌夕御饌供奉行事條に御饌殿一宇用物四種調絹貳疋御幌幷二所太神及相殿神御坐料調布捌端殿内天井壁代二所太神及相殿神坐下敷幷敷布御巾内等料麻席參枚二所太神御床土代敷料幷相殿神御料麻席二枚二所太神御饗相殿御饗料云々と有る如く造裝ひ奉給へるを建ニ立御饌殿ニとは記るなり同書大宮條に御饌殿一宇長一丈廣一丈高一丈と有是なり齋館條に御饌炊殿一間長二丈二尺廣一丈二尺高八尺と有り此にて炊て御饌殿に奉備るなり偖右雜事記に載たる事を皇字沙汰文に依宣旨注進二宮供奉神事上代本記拾肆箇條狀云々豊受神宮新立ニ御氣殿ニ供ニ奉二宮朝夕御饌ニ本記聖武天皇即位乃時神龜九年正月十日依レ例豊受宮與利天照皇太神宮乃朝御饌調備天先天村雲命孫乃令ニ捧賫ニ天參入流處爾途中宇治山乃谷道爾死人乃有乎乍

レ見贄參志天挾渡天見通命孫荒木田禰宜爾任レ例且供奉己丁天以後經ニ三箇月程一天皇乃御藥急御坐事ニ崇給件死穢一乃由云々同年三月十五日依ニ宣旨一並御占丙合新立ニ御饌殿一供ニ奉御饌一爲レ例太神宮開捧贄不參と見えたり（師云右の五年の五は六の誤か訂す可しと云事記の頭に書入られたり荒木田末壽か宮雜事記と云に有の事を供奉緋事本記と云書にも有と云へるは今書の傳はれるか又は皇字沙汰文に其名目有を以て然る書世に有と所思て記るか何れにても康しき者なり借此は所謂る大同本記なり）其より以降此御饌殿にて朝夕の御饌を二所太神宮に奉る事と成れり止由氣宮儀式帳ニ所太神朝御饌夕御饌供奉行事條に供膳物天照坐皇太神御前御水四毛比御飯二八具御鹽四坏御贄等止由氣太神御前御水四毛比御飯二八具御鹽四坏御贄等相殿神三前御水六毛比御飯三八具御鹽六坏御贄等右大物忌父我佃奉拔穗乃御田稻乎先穗波拔穗爾拔弖九月神嘗祭八荷供奉（一荷縣ニ八把一）然所レ遺稻乎以弖將來至ニ于九月十四日一御炊物忌爾令ニ舂炊一弖御鹽燒物忌乃燒奉御鹽并志摩國神戸人夫等奉進御贄乎持弖御炊物忌爾令ニ頂持一大物忌御机副弖禰宜大内人等御前追弖御饌殿乃前爾持參入弖大物忌御炊物忌乎奉入弖日別二度奉畢時三八遍拜奉罷退（此御饌器造奉土師物忌并度會郡丁）と見えたり太神宮式に凡度會宮禰宜内人等依レ例供ニ進太神宮及度會宮朝夕御膳一と有るは此なり（此拔穗乃御田は雜例集に載る大同本記に度會宮御鎮坐の事を記して大佐々命乃定奉世倍田乎白ニ春始一神主等勞作天被爾拔天神主乃女子等未ニ夫一乎物忌爾定ニ炊戴持一神主御前追天物忌子乎御饌殿奉入天土師物忌之造進御器爾令ニ盛奉一奉丁天物忌去出神主物忌乎率其殿前侍祈禱白久云々申拜奉天照坐皇太神八度止由居大神八度毎日朝夕爾供奉と有り然れば神龜に新に御饌殿を建立らるゝ其以前の儀式も大旨同じく爲て此にて二所太神宮御作神の御饌をも共に奠れりしなり但皇太神の御は豐受大神の奉らせ給ふ味なる事は云も更なり）右等の事を以て惟ふに皇太神の朝夕の御饌は度會宮御遷坐有し雄略天皇廿二年より聖武天皇神龜六年迄二百五十二年の間は外宮より日毎の朝夕に送り備奉れりしなるを其年より永贄參の勤を停止られて其より以降右の如く豐受宮外院の御饌殿に於て朝御饌夕御饌を供奉る事なるが其は彼儀式帳に謂ゆる彼宮の禰宜内人物忌等の供奉る事には在れども其實は豐受大神の御自物爲させ給ふ事は皇太神の御託言に早奉レ迎ニ彼神一可レ奉レ令レ調ニ備我朝夕御饌物一と有にても著明く且皇太神宮儀式帳にも供ニ奉朝大御饌夕大御饌一行事條に御贄淸供奉御橋一處（長十丈弘二尺高八尺）石疊一處（方四尺）太神宮正南御門在ニ伊鈴御河一當ニ此御門一流ニ二供一也此中島爾造ニ奉石疊一常造宮使營作奉此止由氣太神乃入坐御坐也（○今云此石疊は豐受大神入來坐て大御饌を調理給ふ御座所也入坐とは三節祭の朝夕の御饌の事に就て度會宮より豐受太神の此に入來坐なり日毎の朝夕の御饌は彼宮の御饌殿にて調奉らせ給ひ即御作神と共に御自も聞食す事には在れども三節祭は其も重き御神事なる故に其朝大御饌夕

大御饌は豐受大神の此石疊に入來坐て殊更に調備奉らせ給ふ義なり 御橋者度會郡司以二黒木一造奉三節祭別禁二封其橋一人度不二往還一則齋敬供奉○今云三節祭とは六月九月十二月三度を云ふ右の御橋は齋敬て常に往還を禁止らるゝ由なり 十六日夕大御饌十七日朝大御饌爾並御笥作內人造奉御贄机爾忌鍛冶內人造奉御贄小刀乎立弖志摩國神戸百姓供進鮮鮑螺等御贄乎机上爾備置弖禰宜內人物忌等御贄御前追弖持立弖開二封御橋一弖參度弖止由氣大神乃御前跪侍弖則御河爾淸奉弖御饌料理畢則如レ先持弖御贄御前追弖天照皇太神乃大御饌供奉と見えたり彼止由氣宮儀式帳に載たる皇太神の御言に我御饌都神等由氣大神とは天宮にて此行事(ワザ)を以て供奉給ふが故なり尙建久年中行事記 六月十六日條 に正權神主至二南御門外一留於二物忌父等一者圍崎神戸所レ進鮑奉二差料一事及机忌刀自御饌奉二取出一豐受宮奉レ祝石疊刷奉二昇居一物忌父等暫祗候但三色物忌父兄部等者西方東向列立申二云御搔鹽分レ成御侍也者彼御刷 祗候內外物忌 父等成御侍答 ○今云兩宮弁略解に此文を引て御搔鹽とは堅纔を削り懸るを云ふ令成とは豐受大神に削懸給へと申なりと云り 其後各於二件御坐所一彼鮑以二忌刀一奉レ切差レ串奉レ削二懸干御鹽一其後參二入內院一と見えたるも同事なり荒木田末壽說に彼儀式帳に止由氣大神乃御前爾跪侍弖と有と此行事記に暫(シバシサモラヒ)祗候て御搔鹽分レ成侍御と申すと全同事にて今世も違ふ事無く如此く爲る例にて御饌を淸むる御川に豐受大神を合坐奉り如此申して御饌を料理奉る事なり是皇太神の御饌都神に坐ゝて豐受大神の御自調理給ふ意味に非ずして何ぞ是を以て每日朝夕の御饌の事をも推察る可しと云るは謂れたる說也けり然れど二所太神宮と並給ひて朝廷より行はせ給ふ年中の神事も何も天下の諸社の上に立せ御在が上に皇太神の大御末と在す皇御孫命を倚(スラ)に屬奉り給ふなどを以ても此大神の甚も尊く坐す御事を思ひ明らむ可くなむ有ける 但末壽が右の說は宜しけれ共餘りに外宮神を云貶し奉て天照太御神の御食を掌る膳部神にて臣列の神の如く云るは鈴屋大人の此豐受大神は高天原にして皇大神の常に拜祭賜ふ神なりと云れたるよりは宜しけれど餘りに可畏き御事なり凡て神典を說者の心得は我が固陋なる私意を弃捐(ステ)て神の隨々直く正しく論定め奉るべき者也 ○此大神を御饌都神と申し又止由氣大神と稱奉る事抑御饌都神など申す都(ツ)は之(ノ)に通へる辭にて天之神を天津神國之神を國津神と申す例に依る時は此も御饌之神といふ事と心得べきが如くなれども其は一概の說にて未其義を盡さゞりけり彼都(ツ)は辭(テニヲハ)の之(ノ)の義には非すして處(ト)と云ふ言なる者なり然れば此都(ツ)の言は天とか地とか山(ノ)とか野とか皆其處(トコロ)在に就て云ふ格にて徒の言語に之の

辭の如く屬て用ふ可きならず　然れども禍津日神の禍などは虚在を云るならず直日神に對ふ御名なる如き故に曲直の對なれば予が説は協はぬが如くなれども古事記遠飛鳥宮段に甘白檮之言八十禍津日前と云は地方に就て云なり此に依て考ふに禍津も禍處なり何處を云ぞとならば御門祭詞に四方四角與利疎備荒備來武天能麻我都比登云神乃言武惡事爾云々と有る四方四角の踈々しき曲處(クマト)なる處其即禍處なるを知れゝば津は處在ならでは云ぬ事なり　然れば御饌都神と申奉るは高天原なる日宮にして天照坐皇太御神の所聞食す朝夕の大御饌を此大神の調備へて奉らせ給ふ齋庭即御饌處にて其を掌る神と申す義也齋庭の御饌殿なる證は御紀に以吾高天原所御齋庭之穗亦當ニ御於吾兒ニと有を中臣壽詞に皇孫尊波云々天津高御座爾御座天天津御膳遠長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穗遠平久介安久介由庭仁所知食止事依志奉弖天降坐と見えて其由庭は大嘗祭の悠紀主基の御殿なるを以て所知たり若て其天照太御神の齋庭と詔給へる處は古事記に聞ニ看大嘗ニ之殿と有る其なる事云も更也　然れども聞ニ看大嘗ニ之殿に豐受大神の仕奉給ひし證無が如しといへども已に上に云る如く天熊人の其種子を取持て奉れりし後間も有せず彼神を迎取奉給へるなり儀式帳なる御託宣に吾一所耳坐波甚苦加以大御饌毛安不ニ聞食ニ坐と有るも天上の儀の如く爲よとの御事なるを思ふ可し且其齋庭之穗を事依し奉給ふに屬て豐受大神の御靈也を天降(クタ)し奉給へるも其神の正身は天宮に留居を以なり神眼を活用せて熟讀味ふ可し　此齋庭之穗の御事に就て皇御孫命の大朝庭にしても天上の儀の如く大嘗の御政事を行はせ給ひ又常にも御饌都神を稱て神祇官及大膳職に持齋らせ給ふ事は膳夫の手にて成れる供御(ミケツモノ)を日々に所聞食す事には在れども其神の調理させ給へるを受賜はらせ給ふ由なり高橋氏文に彼蛤膾を献れる所に此時勅久誰造可レ進レ物問給爾時大后奏此者磐鹿六獦命所レ献之物也即歡給比譽給天勅久云々斯天坐神乃行賜倍留物也云々阿禮子孫乃八十連屬爾遠久長久天皇我天津御食乎齋忌取持天仕奉止負賜夫云々如是依賜事波朕我獨心耳非矣是天坐神乃命叙云々是時上總國安房大神乎御食都神止坐奉天云々神齋大嘗等仕奉始　支但云安房大神爲ニ御食神ニ者今大膳職所レ祭なり　と有も其人より献る所なるを天坐神乃行賜倍留物也と宣ひ御自御食の事に任給ふを是天坐神乃命叙と宣へるも御食の事を掌れる神坐が故なり又安房大神を御食都神と其料理處に令坐奉るを以て御食都は御食處なる事を思定む可し尚上に引る大倭本記に一鏡者天皇御食津神朝夕之食(カムカヒ)向夜護日護齋奉大神と有る食向は祈年祭詞に朝御食夕御食乃加年加比と有る其にて天皇の御膳に就給ふを云なれはこれも御食處神と云義に違はざるなり　諸人の献る御膳を神の調備ふ意にて受賜はらせ給ふ事に新年祭御門神詞に朝者御門開奉夕者御門閉奉と有る此御門の開閉の門部の仕奉る職なれども御門神を齋奉て其人事は神の御蔭に依る事なる故に然云ると等しく天皇の大御膳も人の謂進るなれどもに其實は神の奉せ給ふなる故に齋祭らせ給ふ也　又豐宇氣毘賣命

と申すは大忌祭詞大殿祭詞の注に云る如く豐は豐饒なる由宇氣は衣食住の養なるが人の稟て性命を續くる義なる事云も更なるが彼儀式帳に止由氣宮と云ひ又皇太神の御託言に我御饌都神等由氣大神と宣給へる其を登用宇氣の用字の切りて等由氣なりと云ても事は濟事ながら此には別意有べく所思たり若同意ならむには其正しく徐らかなるを以てこそ詔給ふ可き筈なるに然も非ざるは必別義有が故なり續紀廿八神護景雲元年詔にも等由氣宮と見えたり（此を雜事記に豐受神宮と書せるは記事なるが故也舊例集にも御饌都神止由居乃神と有せならず世記を始其餘の書共にも此時の事を記るには何れも止由氣大神と爲り誤れるならぬを思ふ可し）等由氣の等は處にして御饌殿を云ふ又は豐の意と見ても有む由氣は齋饌にて常に宇氣と云とは少しく異なり此大神を廣瀨にて大忌神と申奉るに思合すれば何れも唯に食物を掌る神の謂耳には非ず皇太神の御饌都神と御在る由を以稱奉給へる御名也踐祚大嘗會式に神語號二雜贄一爲二由加物一と見え皇太神宮儀式帳に湯貴神贄共湯貴大御贄とも朝夕御食之湯貴之神祭物とも湯貴神清酒とも湯貴之御饌とも見え止由氣宮儀式帳にも三節祭湯貴進御笥とも湯貴乃御鹽とも二所太神湯貴乃大御饌とも湯貴備奉とも此は三節祭は殊に重き神事なるが故に云所なるが倚種々に云る湯貴に相同じ意なるを思ふ可し此に因て見れば大嘗祭の神殿を悠紀主基と云ふ悠紀も此に同じければ彼此思合せて止由氣と申す御名は皇太神の御饌都神と申と同意同義の言なりとは云なり（但神宮にて湯貴と云々と云は六月九月十二月三節祭に限れる稱也此祭は有が中にも重き神事なる故な以て然は云也又止由氣宮儀式帳菅裁物忌條に湯鍬持ち東向耕レ御湯草湯種下始と有り湯草とは苗をいふなる可し）然れ其止由氣大神と申は皇太神の御饌都神と申意にて狹きを受張たる御名は豐宇氣毘賣神に在す故に倭姬命世記には豐受大神一座と記し太神宮式に度會宮四座豐受大神一座と記載られたり（此大神の御事祈年第三祠大忌祭詞大殿祭（）詞等の下に委しく云るを考合す可し）此大神を酒殿神と申せり倭姬命世記を始神宮の書共に酒殿神倂神者和久産巢日神子豐宇賀能賣神靈石坐亦酒造天之瓺一口大神靈器以敬拜祭也古語吉祥甕腹滿甘露酒名曰二神酒一獻二三節祭一也亦甕名二賀多普器一と有て此次に丹後國風土記を引り其は下に云べし倚已にも引る同書丹波國吉佐宮の條に和久産巢日神之子豐宇可能賣命（屋居稻靈神也）生二五穀一而善釀レ酒奉二御饗一と有は此神の天より天降來坐て御饗を奉らせ給ふなるが此に依て思ふに此酒を釀事は此國土にて豐受大神の事始させ給へる

を天上に昇坐て後に天宮にて供奉らせ給へるなり天宮に酒の有し證は古事記に如尿醉而吐散登許曾我那勢命爲如此も宣給へる大御神の大御言の有以て著明し但此は大嘗の殿に屎放り給ひしを宥坐るなるが其大嘗は御饌と御酒とを相並て仕奉る常例なるを思へば此所に仕奉り始たるなり（然るを神功皇后の御歌に久志能加美登許余邇伊麻須伊波多々須々久那美迦微能と詠せ給へるは酒之神常世國に所在す石立す少御神と云事にて記に少彥名神是造酒神なりと有如くなれども此は國土經營の間此土にて釀給へるなれば豐受大神の天宮にて仕奉給へるが始なる事云も更なり又此酒賀ひに少御神と詠せ給へるは伊香沙和氣大神と太子の御名易給へるを兼ての祝歌なれば此を以ては定難し伊香沙和氣大神と申は少御神の御事と通えたるなや）

丹後風土記に比沼山頂有井其名曰魚井今既成沼此井天女八人降來浴水于時有老夫婦名曰和奈佐老夫和奈佐老婦此老等至此井而竊取藏天女一人之衣裳即有衣裳者皆飛上于時無衣裳女娘一人即身隱水而獨懷愧居爰老夫謂天女曰吾無兒請夫女娘汝爲兒天女答曰妾獨留人間何敢不從請許衣裳老夫曰云々遂許即相副而經宅相住十餘歲爰天女善爲釀酒飲一盃吉萬病除之于時其家豐而土形富故云土形里云々後老夫婦等謂天女曰汝非吾兒暫借住耳宜早出去於是天女仰天哭慟俯地哀吟即謂老夫婦曰妾非以私意來是老夫婦所願何發厭惡之心忽存出去之痛老夫增發瞋願去天女流淚微退門外謂鄕人曰久沈人間不得還天復無親故不知由所居吾何也吾何哉拭淚嗟歎仰天歌曰阿麻能波良布理佐介美禮婆加須美多智伊幣治麻土比天由久幣志良須母遂退去至荒鹽村即謂村人等云思老夫老婦之意我意無異亦（[illegible]ある）至丹波里哭木村據槻木而哭故云哭木村復至竹野郡船木里奈具村即謂村人等云此處我心奈具志久乃留居此村斯所謂竹野郡奈具社坐豐宇賀能賣命是也とあるは全くは信難き事ながら此大神の御德の未全く著給はざりし程には斯りし事も有しなりけり大國主神の未稚く御在し間八十神の爲に甚く害られ給ひ又其禍事に依て終には御名に負せる如く國土經營の尊き貴き御德を成し給へるに思合せて此風土記の狀も實に然る可くこそと所思るなり神名式に丹後國竹野郡奈具神社今も奈具村に立せ給ひ丹波郡荒汐里と云も今存して神名式なる波美神社其地に在て天酒大明神と申す由彼國人の著へる丹後舊事記と云に記るは由有て所思ゆり（但風土記に其家豐富土富故曰土形里此自中古至于今（ヒヂカタ）時曰比沼里と有は如何なる事也此は比沼里に奈具神社の立せ給へる其地な土形里と云より後人の所會せるなり比沼は比治なる可き事）

已に云へりき　但古事記に粟國謂二大宜都比賣一と有る　其は豐宇氣毘賣神の御名なるを以思ふに彼國は其神の生坐し地なる故に其神の御名を以て國名とは成せりし者なり然るに神名式に阿波國那賀郡和奈佐意富曾神社有り此を據と爲て攷るに彼國に在し丶間に斯る事の有て後に丹後國に移坐し其より攝津國稻掠山には至坐けむと所思たり然も有ば彼風土記の和奈佐夫婦の事は阿波國にて在し事なりけり其社に隣りて宇奈爲神社有も未豐宇氣毘賣神の少女に在し程の事に由有て聞えたるをや（同國美馬郡波爾移麻比禰神社有も御祖母の由なり又伊射奈美神社天椅立神社など有なも思合す可し今も那賀郡に大宜山と云有り大宜都比賣神社有り式には載られざれども其社の神體は飯匕を持る女神の左衽なる古き木像なる有は大に據有なり）但右の事は風土記に就て云るなるが此神の酒を掌給ふ事は已に大殿祭詞別の下にも云る如く神名式に造酒司坐神六座大宮賣神　四座（並大月次新嘗）云々と有を丹後國丹波郡大宮賣神社二座（名神大）　と見えて社傳に豐宇氣持命豐宇賀能咩命と傳へたるに大宮賣命と申すは豐宇氣姬命の亦名なる事大殿祭詞に著ければ甚體なる事也且右社今も主基村と云に立せ給ひ往昔何れの世にか大嘗の齋郡也けむを中臣壽詞に　悠紀主基乃黑木白木乃大御酒乎　云々と主と酒を稟る例なるなど思合されたり（尙祈年祭第三詞大宮賣神の條をも熟く見合せて其云る說共を曉る可き者ぞ）○又此大神に屬て御井神社有る由緣を云べし抑豐受大神と申奉るは稻穀を耳掌給ふ神には坐ず顯見蒼生の食て活べき物は大野原に生る物は甘菜辛菜山に住物は毛の荒物和物海川の物は鰭の廣物狹物興津藻菜邊津藻菜は更なり堅鹽御水等に至る迄も悉くに總守り給ふ大神に坐り次に引る水取調に有如く往昔此國の水は未熟して荒き上に且海潮なりしを皇御孫命御天降の始に水取の事有て天津水を加つるに淸き眞水と成れり此御井高千穗宮に在しを大神の鎭坐す比沼乃眞名井に移しまた度會宮に移されたるは此大神の掌給ふ所なるが故也古史徵に引れたる二十一社記に水天孫降給時諸神申葦原中國者潮也可何仍供奉神中天叢雲命云神天上還皇祖申給即琥珀甕入給之と有此なり（但水は彌都波能賣神の御德に依て有る所なるが水の吞て身を養ふ所に至ては此大神の所知食行はせ給ふ事なり此に依て水神ぞ水德神ぞなど云むは甚々幼稚き說なりかし）其詞に云く皇太神宮皇孫之命天降坐時爾　天牟羅雲命御前立天　天降仕奉時爾　皇御孫命　天牟羅雲命乎召詔久　食國乃　水波　未熟荒水爾　在利介　故御祖御許爾　參上此由申天　來止　詔（○今云上代本紀傳記本緣等に故御祖天御中主神之御許爾と有は狡意に加たるなり此に御祖命と申せるは天照太御神高皇產靈神等を指たる事記紀の御天降段を讀て曉る可し思ふに此書入は外宮の御神を貴く爲むと工みて其神を天之

御中主神とも國之常立神とも忘説せるより此豊受大神の御井の事をも掌給ふに合せて僞れる者なり

命參上天御祖御前爾皇御孫命乃申上給事乎子細申上時御祖命詔久 ○今云神名秘書に神宮本記とて載るも此に同じ上に本記本緣共に御祖天照皇太神天御中主神正哉吾勝尊云々と見え傳記には御祖天照坐太神天御中主神神魯伎神魯美乃尊詔久と有り共に忘也 雜爾奉牟政波行奉レ下天在止甘水取政遺氐在介利 ○今云本記傳記本緣に天下復飢饑久在利の語有れども究て猍意に後人の加たるなり今省く 何神乎加奉レ下止牟思間爾勇天乎志參上來止詔天天忍石乃長井乃水乎取八盛天誨給久此水持下天皇太神乃御饌爾八盛又皇御孫命乃御饌爾八盛献天遺水波天忍水止云天食國乃水於本ノマヽ爾灌和天献初又御伴爾天降奉仕神等八十友乃諸人仁毛斯水乎令飲止詔天下奉支 ○今云傳記に御伴爾天降奉仕五伴神三十二神八十友乃諸人云々と有は例の加たる也本の任にて有なむ 即受賜天持參下天献時仁皇御孫命詔久從ニ何道ー曾參上止志問給申久大橋波須賣太神並皇御孫命乃天降坐乎恐天後從ニ小橋ー參上止支申時詔久後仁毛恐仕奉事勇止乎志 詔天天牟羅雲命天二上命後小橋命止三名賜也 ○今云本緣には即受ニ斯水於琥珀之鉢ー持參下氏獻と有り然る事も有しなる可し已に引る二十一社記にも琥珀盆入給之有り但琥珀の字に泥むべからず多廉の意なり神代紀に去來之淳名井の名有も其淳は瓊を云なればば由有り 即時日向高千穗宮乃御井崇居焉奉仕矣自爾以降丹波國魚井原爾鎮移居水取神奉仕岐其後豊受太神御鎮座之時從ニ魚井乃原ー遷ニ于止由氣宮乃御井ー居止焉 ○今云此件は雜例集神名秘書共に所見ざるを上代本記と本緣に依て文は其宜しきに隨て出しつ其心して見べきなり 又云其

後豊受神宮乃坤方乃岡片岸爾新掘ニ御井ー邑天忍井水乎入加邑當朝之水爾和合邑末之世乃御膳調料爾移置給水也 ○以上雜例集なる大同本記の文なり雜事記にも抑皇太神天降御之時始天御饌乎備進乃水非ニ當朝之水ー天村雲命太神乃詔勅乎蒙天高天原乃天忍石乃長井水乎持下天其上分乎八盞盛備進天發乃水以天忍井水宣天豊受神宮乃坤方乃岡乃片岸爾井乎新掘天其御井底天忍井水乎入加天當朝之水爾和合而末世乃御饌備進料移置給水也仍以ニ彼水ー天自爾以降所レ奉レ調ニ御饌ー也と有り 二所太神乃朝大御氣夕大御氣度八盛移居毎日二時供進矣 ○今云上に引る止由氣宮儀式帳に朝夕の大御饌ハ御水なる二所太神及相殿神に獻るは此なり と見えたり此を唯に天村雲命の裔と有る度會神主の仕奉る由に縁れりと思ふは委しからず人の飲て身を養ふ所即豊受大神に御恩頼に依る事成故に此大神の鎮り坐地に所屬て高千穗より眞名井に移り後此度會宮には移せる也又度會神主の此大神に仕奉る可き本緣此に依て起れり已上にも云る如く皇太神の吉佐宮に遷幸しゝ時に豊受大神の御天降坐る供奉の神の中に天日起命の仕奉れる此は天村雲命の子天日別命に坐なも思ふ可くこそ上代本記に亦止由氣大神一度御鎮座乃今令ニト筮事ニ天皇勅曰宜下本ニ已宗神之緖ー以ニ神皇產靈神苗裔大佐々命ー兼ニ行二所皇大神之大神主職ー奉ニ仕矣と有を思可し ○豊受宮新年祭の事凡內宮に同じ太神宮式に度會宮四座云々多賀宮一座云々右二宮祈年月次神嘗等祭供レ之と見え度會宮所攝十六座云々右諸社並預ニ祈年神嘗祭ーと見えたり又同式に凡二月祈年幣帛者 幣色目在ニ四時祭式ー 朝使到日太神宮司引ニ使者ー先參ニ度會宮ー次太神宮奉レ献ニ幣帛ー並如ニ常儀ー 高萊祭宮使自進奉餘宮令ニ

禰宜等ニ云々と見ゆ 委しくは太神宮の條に云り見合て明らむ可し 止由氣宮儀式帳ニ月例に云く年新幣帛使參入弖幣帛進時行事幣帛使與ニ太神宮司ニ共神宮外院參入來禰時即禰宜內人等玉串所候侍弖營裁物忌父造奉留太玉串乎禰宜捧弖太神宮司爾給短手一段拍受取禰宜毛共同被給弖即發先前禰宜立次太神宮司次幣帛捧持大內人御馬飼內人牽ニ御馬ニ次驛使諸內人等如此立列參入致ニ中重ニ太神宮司禰宜正道雙分頭跪侍使中臣東方石疊跪侍物忌者第二御門西方向北侍大內人小內人物忌父等四御門內方進向レ東列跪侍即太神宮司上ニ版位ニ告刀申々畢時大物忌發太神宮司稱宜乃捧持留弖太玉串乎受取第二御門奉レ置先向ニ太神宮司東方禰宜西方然即四段拜奉弖短手二段柏一段拜奉又更四段奉拜短手二段拍畢時後手一段拍罷出內宮參入時々時使幣帛使參入弖幣帛奉進行事乎月次幣帛進時行事同但幣帛物等波正殿開奉弖進入月內取ニ吉日ニ所管諸社十六處幷宮廻神二百四前御井二所神御田神所々小社九所神乎春祈年祭供奉至ニ于二月上旬ニ禰宜內人等勘ニ挍供奉用物四種ニ絹五丈一尺木綿四斤麻十斤薦一延と見えたり

天皇我御命以氐度會乃山田原乃下津石根爾稱辭竟奉流豐受皇神爾申久常毛進流二月祈年月次祭唯以ニ六月月次之大幣帛乎某官位姓名乎爲レ使天令ニ捧持ニ辭ニ相換進給布御命乎申給久止申

度會は古事記に登由宇氣神此者坐ニ外宮之度相ニ神者也と見えたり記傳十五四十七丁に度相は和名抄伊勢國郡名に度會和多良比と有る是なり 偖五十鈴宮の御事を垂仁天皇御紀に渡遇宮と云ひ神功皇后御紀にも百傳度逢縣之と有れば度相は上代より廣き名と聞えたるに萬葉人麻呂の長歌に渡會乃齋宮と詠るは五十鈴宮を云るか將二宮を兼たるか○今云此は五十鈴宮を指り天武天皇御紀に吉野より不破に御遷幸の御事を記せる道次に丙戌且於ニ朝明郡迹太川邊ニ望ニ拜天照太神ニと有を思ふに天統の御事に於ては皇太神の大御心なる可き者なり且垂仁天皇御紀に與ニ齋宮于五十鈴川上ニと有も皇太神の五十鈴宮を云るなり齋內親王の齋宮は多氣郡に在て別なり思混ふ可からず皇太神宮を齋宮と云は神祇官に坐八神殿を齋戸と云るに其意味異ならず 此には五十鈴宮に對へて外宮をしも如此云るを思ふに猶其初は外宮の邊の地名にこそ有つらめ故二宮を並言時には良後さへも外宮をなむ度會宮とは云りける 類聚國史大同三年の勅に伊勢太神宮度會二宮云々と見え延喜式などにも常に如此樣に云り○今云上に已に豐受宮の條に云る如く古くは止由氣宮と申しゝを後に度會宮と申すか豐受大神宮の事に限りて成れり其は儀式帳に等由氣大神宮今稱ニ度會宮ニと有を以て著明し 倭姬命世記の奥に風土記曰夫所ニ以號ニ度會郡ニ者畝火橿原宮御宇神倭磐余彦天皇詔ニ天日別命ニ覓レ國之時大國玉神遣レ使奉レ迎ニ天日別命ニ因令レ造ニ其橋ニ不レ堪ニ造畢ニ于時到令下以ニ梓

弓ニ爲レ橋而度上焉爰大國玉神資彌豆佐々良比賣命參來迎ニ相土橋鄉岡本村ニ云々度會焉因以爲レ名也」と有り（土橋鄉は和名抄に繼橋鄉有る是也岡本村は今も山田の坊名に呼處なり）此を以見るにも本は外宮の邊の地名なりし事著し（以上採要）と有が如し○山田原は延曆儀式帳に等由氣大神宮（今號ニ度會宮ニ在ニ度會郡沼木鄉山田原村ニ）と有て村名なり太神宮式には度會郡沼木鄉山田原と有れば本は山田原なりし所に此宮を興建(タテ)られたるより村名とは成れるなり（儀式帳を始て諸書に度會乃山田原宮云々と見えたり）○豐受皇神九月神嘗祭詞には御名を申さずして皇神前爾申給久と有り抑此宮には相殿に皇御孫命も坐れば皇太神と稱申す可きに然は申さず唯に大神と申し又大前と申させ給ふべきに前と申す例也（但御名の下には皇太神とも太神と申すとも御名を離ちて唯に申す時は天照太御神の御事と成也）此を歷世に攷るに止由氣宮儀式帳に天照坐皇太神等由氣大神と並記し倭姬命世記に天照皇太神豐受大神と有など豐受太神と有て未皇太神とは云ず（太神宮式には天照太神一座豐受太神一座と有て此には太御神の方にも皇字を云ず然れども五十鈴宮の御事は太神宮と記されて受張たる書法なり）然るに神宮の書共に豐受皇太神と記せるは彼書多くは外宮の神人の手に成れるが次に加筆せるものなり然るに文中に多くは止由氣大神と有る所が古傳にて皇字の加はりたる所に私意を挿みて書る事鏡に懸て見る如くなれば也（皇字沙汰文などに云る事共も有れど此も彼も當れるは無し）雜例集に所載る天仁三年五月廿六日の宣命に天照坐須豐受大神乃廣前にと有て珍しき御名なれども皇字は加はらず但此も亦所據有る事なりけり皇太神の御事に就て御功坐神には天照某と申例無には非ず山城風土記には天照高美牟須比命と見え天照御門神天照御魂神天照麻羅建雄神天照高日女神など古書に所見たる皆皇大神を申奉るには非す佗神ながら其御由緣に因て冠らせる也然れば天照豐受大神と申御名も有けむを坐の字は中古に何心無く添たるなゝめり（此外にも豐受大神の由に就て宇迦之御魂神とも宇賀之御魂大年神とも宇賀之御魂大土神なども申が多在るを思合す可なり）皇太神宮建久年中行事を閱に月讀皇大神とも瀧原皇大神とも伊雜皇大神とも風日新皇大神とも詔刀に申す由なるは已く其頃より內宮より例を亂りしなり其頃なとや豐受皇大神とは申初たりけむ（然れば天仁よりは以後建久よりは以前の事と見えたり）然れども此亦神の御心にや有けむ此時迄皇神と申しを皇大神と稱奉る事悉く其所謂有り此大神は皇祖の神には坐々ざれども天照太御神の御饌都神と坐が故に彼御諭言にも等由氣大神と宣給ひ式にも二所太神宮と記されたれば其御貴さの限無く高々御在

す事言に絶たる事なればなり（然るを內宮外宮の神人等の互々に貶しめ奉り合て此皇字などの論の尤けきは彼御玉串を兩宮より配る時は我方の得分薄きが故に云爭ふ事にて神の御心にも恐奉るべきの甚しきなり己が一箇の身を富さむとて神を誣るの罪少からず）皇祖ならぬ神に皇太神と朝廷より稱奉らせ給ふ例は春日祭詞平野祭詞久度古開詞等に所見て其件々に註るが如く正史には貞觀十一年二月八日春日社告文同十二年六月廿二日賀茂御祖別雷兩社告文同十五年十月十六日賀茂松尾平野大原野等社告文に其神々を指て皇大神と申させ給ふ事有れば此豐受宮に皇太神と稱奉る事の何かは苦しからむ○大幣帛は上に已に太神宮詞の下に四時祭式を引たれば其を見るべし幣物の外に太神宮度會宮各加二馬一疋一（籠頭料庸布一段）と有て凡ての員數太神宮に異なる事無し○御命乎申給久止申は止由氣宮儀式帳に即太神宮司上二版位一告刀申と有る此なり（上に引る儀式の狀を以て此神事を思ふ可なり）偖皇太神宮には此祭にも辭別の文有を此宮に然ることの無きは如何と云に彼太前に申させ給ふ辭別等は已にも云る如く彼御祭は高千穗宮より有初て其詞も其頭よりのなるを伊勢に遷幸し後は其地名を加て申させ給ふ耳の事なるが故なり、所以に彼宮六月月次九月神嘗等祭詞にも天津祝詞乃太祝詞と有て其を見るに右の辭別文を本に取て物せる詞なる事著明ければ、其辭詞即天津祝詞乃太祝詞なるが故也（此事已に卷三に委しく云ひ又此次々にも云ふを見合す可し）然るに豐受大神將高千穗宮にて祭初させ給ふと雖も佗神の並に異處に御在ければ自餘の天社國社の神々も共に祭られ給ふ故に其詞とて別には無りし故なり

○四月神衣祭（ウヅキノカムミゾマツリ）（九月准レ之）

此祭四月九月共に十四日に在り神祇令孟夏神衣祭の義解に謂二伊勢神宮祭一也此神服部等齋戒潔淸以二參河赤引神調絲一織二作神衣一又麻績連等績レ麻以織二敷和衣一以供二神明一故曰二神衣一釋云伊勢太神祭也其國有二神服部等一齋戒淨淸以二參河赤引神調絲一御衣織作又麻績連等麻績而敷和御衣織奉臨二祭之日一神服部在レ右麻績在レ左也敷和宇都波多也此常祭也と有る此なり續紀に大寶二年八月癸亥勅伊勢太神宮服料用二神戶調一は此三河神戶を以定給へるなンめり釋に其國有二神服部等一は和名抄に三河國八名郡服部（波止利）と有も此鄕に在なる可し赤引絲の名は持統天皇六年御紀に出たり未練ざる生絲を云なり（或說に赤引は地名なりと云り和名抄鄕名に同國寶飯郡赤孫安加比古と有り若くは其地なりや然も有ば右の服部鄕の神服部等赤孫鄕にて絲を取ならむ儀式帳職掌行事條禰宜大初

位上神主公成の下に又毎年九月己之家仁養蠶乃赤引生絲九絢織奉太神御衣仁供奉と有を見れば赤引は絲の名にて地名に非ず太神
宮式に四月九月神衣祭太神宮和妙衣廿四疋八疋廣一尺五寸八疋廣
一尺二寸八疋廣一尺並長四丈髮絲頸玉手玉足玉緒絁襪緒等絲各一十
六條縫絲六十四條各長五尺長刀子一枚短刀子錐針鉾鋒各
十六枚著絲玉串二枚韓櫃二合一合盛衣一合盛金物筥一合盛絲幷雜緒
荒妙衣八十疋四十疋廣一尺六寸四十疋廣一尺並長四丈刀子針各廿枚韓櫃一合
盛衣幷刀子荒祭宮和妙衣十三疋髮絲頸玉手玉足玉緒絁襪
緒等絲各八條縫絲四十條刀子錐針鉾鋒各八枚著絲
玉串一枚韓櫃二合筥一合荒妙衣四十疋刀子針各十
二枚韓櫃一合右和妙衣者服部氏荒妙衣者麻績氏各自
潔齋始從祭月一日織造至十四日供祭○今云下に所見たる縣
織戸廿二烟麻績戸廿二烟と有る其人々前一月晦日に祓除して本月朔日より始め十四日に奉るに至るなり其儀太神宮
司禰宜內人等率服織女八人並著明衣各執玉串
陳列御衣之後入太神宮司宣祝詞訖共再拜兩段短拍
手兩段膝退再拜兩段短拍手兩段一拜訖退出即詣荒
祭宮供御衣如太神宮儀但再拜兩段短拍手兩段退
出○今云儀式帳に太神宮御衣供奉時禰宜宇治內人等加行事波二月々次驛使告刀與同と有り此二月々次と有は祈年月次と云と同じ此文上なる祈年祭條に引が上に此下に儀式帳を引る下にも云り見合す可し是日笠縫內人等
供進蓑笠太神宮三具荒祭宮一具伊佐奈伎宮二具月
夜見宮二具瀧原宮二具瀧原並宮一具伊雜宮一具朝

熊社二具園相社鴨社田乃社蚊野社伊佐奈彌社各一具
度會宮八具及所攝宮並社各一具○今云笠縫內人は今宮外宮共に在り皇太神宮儀式帳に
同日以御笠縫內人造奉御蓑廿二領御笠廿二蓋即散用太神宮三具荒祭
宮一具大奈保見神社一具伊加津知神社一具風神社一具瀧祭社一具月
讀宮五具小朝熊社一具伊雜宮一具瀧原宮二具園相社一具鴨社一具田
邊社一具蚊野社一具と有て式とは少異同有り倍此員を數るに都合廿
一具也小朝熊社一具と有は二具を誤れるならむか又止由氣宮儀式帳
四月例に以二十四日御笠縫內人作奉禮留御笠御蓑進奉太神宮高宮次
諸所管神社廿四處奉進とも見ゆ服部等造二時神衣機殿祭幷雜用料絲一
百絢倭文二丈一尺是一種請官庫木綿麻各十三斤四兩二分
以上祭料絹四疋四丈二尺綿四屯調布九端一丈商布七十九
段鐵六廷砥四顆是一種請官庫油一斗鹽一石稻六百五十六束
九月祭料防壁四枚席四枚神部二人八折日米一升二合麻績等
機殿祭幷雜用料麻卅斤圍二尺爲襲絹四丈倭文三丈木綿十
三斤四兩二分已上祭料商布七十九段砥二顆油八升鹽一石
稻三百九十七束九月祭料右織造神衣料所須雜物皆以
服織戸廿二烟麻績戸廿二烟調庸及租各便分充太神
宮司檢校若所輸有欠者附帳申上如有損斥者太神
宮司量充凡四月神衣祭預前一月晦日祓除九月准之と見
えたり皇太神宮儀式帳四月例にも以十四日神服織神
麻績神部等造奉太神御服供奉時禰宜玉串行事太神宮司
幷禰宜宇治內人等加行事波二月月次驛使告刀與同但
神殿織々女八人已上八人波明衣者皆悉玉串給即行列

參入即宮司當例告刀申畢且即持參入二東寶殿一奉上罷出訖就レ座且拜奉二月行事司荒祭宮御衣奉行事二月驛使時乃行事與同しと有る如く此は皇太神宮と荒祭宮とに限て被行る神事なり和名抄に伊勢國多氣那鄕名麻續美乎宇と有る此なり神名式に同郡麻續神社服部伊刀麻神社服部麻刀方神社二座と有り 考に神服部が織は絹なり赤引絲即蠶絲にて參河の神戶より獻りて伊勢國多氣郡の服部等服部鄕に在て織なり又麻續連等は同郡麻續村に在て麻を以て織なりと有は然る言なれども和名抄に然る鄕名無し 右の服部氏は姓氏錄 大和國神別天神 に服部連天御中主神十一世孫天御梓命之後也と見え神宮雜例集に載たる少神部神服連公俊正大神部神服連公道侑等が嘉應二年解狀に於神御衣勤者掛畏天照坐皇太神御二坐天原一之時以二神部等遠祖天御梓命一爲レ司以二八千々姬一爲二織女一奉レ織之間御垂迹之後于今其勤誠以嚴重無雙也と有が如し 但姓氏錄攝津國神別天神に服部連熯之速日命十二世孫麻羅宿禰之後也允恭天皇御世任二織部司一總領二諸國織部一因號二服部連一と見え河內國神別天神に服部連熯之速日命之後也と有は別なり但天御梓命は建御雷神の亦名には非るか然も有ば熯之速日命之後也と云事甚所謂有と云べし 麻續氏は古語拾遺に長白羽神伊勢國麻續祖と見え姓氏錄 右京神別上天神 に神麻續連天物知命之後也と見え天神本紀には天八坂彥命伊勢神麻續連等祖と見えたり 又天神本紀は天乳速日命廣湍神麻續遠祖と有も決く同氏なり此長白羽神と申は天日鷲命か又は御子なる可し 偖服織戶麻續戶と云は其服部連麻續連

等が率る神戶の百姓を云なり三代實錄に伊勢國多氣郡百姓外少初位下麻續部廣永等十六人復二本姓一中麻續公恩麻呂等自款云豐城入彥命之後也と有を以知べし 其を統領する人と其統領する人に附屬ふとの差異有り儀式帳に土師器作物忌無位麻續部春日女父無位麻續部倭人と云人見ゆ 建久年中行事記四月十四日神衣神事勤行次第に云く今日內院南面番垣幷玉串及四御門合三重玉垣御榊奉レ差是公候氏之勤也 ○今云續紀天平勝寶九年三月于部安萬呂言二吉美候部一と有り姓氏錄右京皇別下に吉彌候部上毛野朝臣同祖豐城入彥命六世孫奈良君之後也と見えたり上なる麻續部條思合す可し因に云姓氏錄攝津國皇別に車持公上毛野朝臣同祖豐城入彥命之後也と有に上野國神名帳を見れば群馬西部に伊勢明神車持大明神とて有り神名式に伊勢國奄藝郡久留眞神社淡路國津名郡伊勢久留麻神社有り其淡路國の傳に稚日女命を祭る由なるは此は拷幡千々姬命に坐事已に卷二十七詞の下に云る如くなれば上野者の子孫の麻續部と有も由有る事なり 又八重榊奉レ差其員數百卄七枚也是山向內人之役也又荒垣鳥居幷一二鳥居輿玉榊等同今日所レ奉レ差也荒祭神拜所レ差榊彼宮下部役也又玉串料榊山向內人之勤也總御榊奉レ差事年中四箇度也四月六月九月十二月御祭度也但九月神御衣之時奉レ差榊以二十七日一御祭者所レ行例也近代二月祈年御祭同所奉レ差也 ○今云儀式帳山向物忌條に擎太玉串幷天八重榊〆備供奉齋掌忌敬供奉齋內親王二枝太神宮司二枝禰宜四枝宇治內人八枝並枝別木綿懸レ之即與三重御門東方一列八枝八重數六十四本右方亦如二左負一並高四尺枝別木綿懸レ之と有り 年　時許地祭物忌父自二出納所一請二取北御門鎰一仟御門奉レ開參入瑞垣御門奉レ開又自二外幣殿一請二戶帳一瑞垣玉串

幷四御門等懸○今云以上御門を開奉るの轉略を云なり神服部神麻續兩機殿神部織子人面等御衣御唐櫃二合奉二相具一參宮在二祗承一檢非違使二人在二警蹕一先彼等於二河原殿西稜所一稜勤仕其後於二件所一在二酒肴一次宮司參宮在二祗承一官掌自二例所一勤レ之人數不レ定御衣御唐櫃兩織殿神部人面織子等奉二相具一列參在二御麻御鹽湯於二列所一勤レ之送御鹽湯所在二警蹕一御唐櫃四合內於二一合一者荒祭宮神拜所有二留置一是彼宮御料也至二一合一者御鹽湯所石疊副奉二昇居一宮司與二神主一左右列立在二答拜一又兩機殿神部人面織子等石橋隔左右列立左服部方右麻續方于時兩機殿案主等相並各御衣送文持進向物忌父一人行向請取大物忌父兒部給○今云儀式帳には大物忌父兒部と云者無し脩此兒部は上に公役と有と一なり件大物忌父笏差取レ之一神主奉其後笏抽一拜本列歸立一神主件文披見後官掌大內人召則一人參一神主前揖立一神主命云服部麻續兩機殿大少神部織子等任二職數一參哉參哉者官掌大內人以二此旨一尋二問祗承檢非違使一者任二職數一參候之由申官掌大內人又此旨以一神主申其後大物忌父一神主前進二笏差立其時一神主彼送文返給于時物忌父給笏拔一拜本列歸立抑玉串大內人並大物忌父列立所例所也其後宮司手水用次著木綿着幷玉串行事等如二新年御祭時一仍委不レ記○今云此事上なる新年祭條に儀式帳を委しく引記せれば其に見合す可し次內院參次第前陣神主幷玉串次宮司次御唐櫃也外物忌父等衣冠着奉レ持於石橋固一在二御鹽湯內人勤一又如二恒例一各參入着左右石壺一宮司與二神主一中強也但近代無二中強之儀一宮司以レ東爲レ上着御唐櫃八重榊東方奉二昇居一三色物忌父兒部等西方石壺以レ北爲レ上東向着次鎰取內人着大物忌父兒部一人東帶其外皆衣冠也大物忌父笏指詔刀文大宮司獻宮司所帶御玉串前置請取大物忌父笏拔一拜之後本座歸着大宮司立座八重榊前進參西方石壺跪詔刀申云々抑二季神御衣祈年御祭六月御祭十二月御祭夜祭主被申詔刀文幷六月九月十二月御祭宮司讀進詔刀文等者自二本官一所二書進一也而大物忌父兒部給預所レ進也九月例幣幷臨時宣下宣命也祈年幷臨時祭讀時宮司詔刀無レ之○今云此に云々と有る所には此四月神衣祭祠を載たり詔刀畢後宮司本座歸着所置御玉串命二捧持一其後玉串行事次第如二新年祭時一仍委不レ記○今云詔刀を申して後に各其所持る玉串を奉置くを云なり但御衣之時玉串大內人所レ帶御榊玉串御門右方石疊上奉之後件御門南留南向祗候其時四御門北方祗候兩機殿大小神部等所帶御玉串並各方々織子人面等所帶榊取聚彼御門持參玉串大內人々前跪候于時玉串大內人件御玉串請取同御門左右脇石疊上奉服部左方麻續右方但兩大神部者所レ帶御玉串計持參兩少神部者所帶御玉串之上織子人面等御榊取加持參也又服大神部木綿糸疊

所レ帶榊懸也〇今云以上玉串行事なり木綿糸襞は太神宮式神衣祭條に著緌玉串二枚荒祭宮一枚と有る此を云なり又玉串大内人其後倚件御門祗候正員禰宜並宮司相待于時鎰取内人座立御鎰櫃宮司所ニ付置一封解宮司向御鎰櫃御封開申被之宮司以レ笏揖次彼内人東寶殿御鎰自ニ件櫃一取出捧持立其時神主并宮司等座立爲ニ御衣奉レ納内院參一禰宜笏差彼御鎰請取鎰取内人持寄奉其後神主前參次宮司次御衣也各自ニ瑞垣御門一參入御寶前候宮司東神主西中强也在レ拜無レ手其後各自御殿東方東寶殿前瑞垣副祗候神主南宮司北方皆西向中强也于時一禰宜進參東寶殿奉レ開先御戶封解鎰取内人給鎰取請取宮司向東寶殿御封開申破レ之其後御衣御唐櫃奉納玉串大内人大物忌父兄部相副也次御戶奉レ開鎰取内人硯并封紙持宮司前進向宮司封紙三筋取封書鎰取給鎰取請取一筋一禰宜奉一筋荒祭宮物忌給一筋御鎰櫃料置ニ一禰宜件封付ニ御戶一之後本列祗候鎰取内人宮司向東寶殿御封畢申宮司以レ笏揖其後各退出前後如ニ參入時一御殿向在レ拜無レ手〇今云此封紙三筋の内禰宜に奉と有は東寶殿の料なり荒祭宮物忌父給と有るは彼宮の料なり於八重榊西御鎰々取内人給之後各石壺着鎰取内人御鎰櫃入封付宮司向御鎰櫃御封畢申宮司以笏揖次拜八度手兩端〇今云以上太神宮に神御衣を奉らせ給ふ行事なり

次玉串大内人早立荒祭宮大内人大物忌父相具自ニ西御門一退出於ニ忌火屋殿垣外長方ニ御衣唐櫃奉ニ昇居ニ神主并宮司等彼宮料相具各御玉串持立件御唐櫃荒祭神拜所留置御唐櫃也兩内院神事間當宮下部所ニ請取一也宮司者從ニ南御門一退出神主自ニ西御門一罷出各有祗承荒祭宮神拜所行合答拜次荒祭宮拜八度在ニ手兩端一其後玉串大内人并件内人物忌御唐櫃奉ニ相具一參又兩機殿大少神部織子人面等同列參玉串大内人詔刀申彼宮下部俄石壺造玉串合レ居狀跡大略同レ前仍不レ記〇今云此迄荒祭宮の神衣祭なり狀跡大略上なる皇太神宮條に有が如し宮司神主等拜之後退立神主於ニ酒殿後ニ蠶木綿解明衣脫宮司蠶木綿解後各一殿着宮司自ニ後戶一參入自ニ件戶一東方南向以レ東爲レ上着神主南方北向以レ東爲レ上着内物忌父等西座東向以レ北爲レ上着也其次山向内人着次御鹽湯内人着次御麻内人着也於ニ外物忌等一者不ニ着座一饗代白米等取請預也于時荒祭宮奉納以後玉串大内人并彼宮大内人及物忌父等歸參件物忌火此殿前立荒祭宮御封畢申又神服部神麻績兩機殿大少神部等同列立服部大神部任ニ職數一神部織子人面等參由申宮司以レ笏揖其後玉串大内人并物忌父等着次瀧祭大内人物忌等着南方居廻也仍上首者北向末座西向也司中下部等前石橋參候也御封申後

在レ手其後各饗膳預陪膳役神部等也但内物忌并司中主典及別宮下部司中下部等之陪膳神部等之所レ從也又供奉官掌大内人等此件殿東砌酒肴預鋪設敷自兩織殿少神部等勤也各領知内戸勤云々九月御衣時兩大神部勤云々○今云此は宮司以下直會殿にて直會を賜はる較略なりと見えたるが如し但此建久行事記は文も何も甚拙き者には在れども潤飾らず唯有の任に書る故に其事實に於ては甚分明しく少かも隱るゝ所無ぞかし凡て文章を立て事實を誤る事多き者なれば如此く有の任に書たるなむ甚宜しきを然ばれ文字の錯置有て甚讀取難きを如何に爲む ○神御衣祭及齋服殿の起元は神名秘書に引る機殿儀式に舊記云皇太神宮御二座高天原一之昔八面等之遠祖天八千々姫殖二桑葉於天香山一以二所レ蠶之御絲一織二供進御衣於大神一と有る此時は何時か有む師說古史徵に云れたる如く神代紀一書に保食神云々眉上生レ繭云々又口裏含レ繭便得レ抽レ絲自レ此始有二養蠶之道一焉と有る其時なる事云も更なり此時の新嘗は朝廷の大嘗神宮の神嘗祭の起なるを合せて思ふ可し神祇本紀にも此條を載たるに有二養蠶之道一の下に乃起二絍織之業一者也の字有り此は神代紀より取れる文なれば往昔然る本有しなり倭其也に絍織之業一と有は次なる齋服殿の事を云り 絍織の始は右の保食神に起れる事にて天照太御神の天宮にて定物爲させ給ふは彼須佐之男命の事に依て起れるなり古事紀に天照太御神坐二忌服屋一而令レ織二神御衣一之時穿二其服屋之頂一逆剝天班馬剝而所二墮入一時天衣織女見驚而於レ梭衝レ陰上而死と有を神代紀一書に稚日女尊坐二于齋服殿一而織二神之神衣一也素盞嗚尊見レ之則逆二剝班馬一投二入之殿內一稚日女尊乃驚而墮レ機以二所レ持梭一傷レ體而神退矣と有て此齋服殿は皇太神の御なり神御衣は皇太神の御なり天衣織女と稚日女尊とは其神御衣を織奉る神にて機殿儀式に謂ゆる天八千々姫命に坐事下に云が如し然るを正書には見下天照大神方レ織二神衣一居中齋服殿上則剝二天班馬一穿二殿甍一而投納と有に依て皇太神の御自物爲させ給ひて其御神衣は皇祖天神を齋奉らせ給ふ料なりと云れたる先師等の說も有事なれども後世に至迄に右の齋服殿にて織らせ給ふ神御衣は皇太神も荒祭宮に限て奉る御定なるを思漏されたるなりけり本より神宮の神衣祭は天石戸隱の時に定れる例なる事は云も更なれど其由て來る所必此時に齋服殿にて神御衣を令織給へるが須佐之男命の御荒びに依て其事の全く成整はざりけるを彼招奉る時に當て全く成整へるが永世の例と成れる事已に卷九大殿祭詞の首に註るが如し 但古事記に衝二陰上一而

死と有る死字は古傳に織事也とか有けむを後には生死の死字なら然聞ゆるを以て思誤れるにて凡て此に限らず古語を後の文字に泥すとては斯る誤多き事なりし事も古史傳に稚日女命と云に即栲幡千々姫命と同名たり天上の御名なるは妄誕なる可きなをふ然かく云々と云れたるは然る事なから天孫降臨の前に神避と相分るゝ以前に本時事に死と云事の非る由を思はれたり此も其しき説有て別にも爲り　倩右の神代記に稚日女尊と有を神祇本紀にも擧て一說織女稚日女尊云々其稚日女尊者天照太神之妹也と有る織女稚日女尊は天衣織女と同神なる古說などの有て記せるならむを天照太神之妹也と有は日女を大日女命の比流賣と同訓と心得誤れるより斯る人識はしの妄說は杜撰れるなりけり神名式に出たる山城國葛野郡天津石門別稚媛神社名神大月次新嘗と有ると同神なる事云も更なるが天津石門別と御名に負坐るは其石戸開の御功に依れるなるを此巻首にも云る如く神宮の古傳に御戸開神天手力男命栲幡千々媛命と有れば稚日女尊決く千々媛命に坐を駿河風土記に安倍郡志津機神社日本武尊云々以二栲幡千々媛一祭二此山一令レ之以二稚日女尊一と有る此も兩神の如くなれども栲幡千々媛と云は女功に依れる御名稚日女命と申すは其御本名を以祭れるなり尊字を書るは書紀の撰者此神の出自を正し誰されざりし故に書れたるに依て何れの書も皆然り　右の風土記の御書に志津機之名者本二女功一依二兩神名一其功業二之也と有に則文なれども予が云如く古事を以て書る者なり向此千々姫命の名は……所年太神宮司……五位日……比賣神……駿集に……云……り見合せて曉る可し　倩古事記の天石戸段に天香山之五百津眞賢木矣根許士爾許士而於二上枝一取二著八尺勾璁之五百津之御須麻流之玉一於二中枝一取二繫八尺鏡一於二下枝一取二垂白丹寸手青丹寸手一而と有も白丹寸手青丹寸手を神代紀正には下枝懸二青和幣白和幣一と有て此を製造る事を古語拾遺に令下長白羽神伊勢國麻續祖種レ麻以爲中青和幣上令下天日鷲神以二津咋見神一穀木種殖之以作中白和幣上是木綿也已上二物一夜蕃茂也と有て是は麻と木綿との二種なり和幣は和衣の意なれども此同じ物を神宮にて麻と績蓮の奉るには荒妙衣と云り此を以て思ふに麻と木綿と對たる時には青和幣白和幣と云ひ絹に對ては倭文をも合せて何れをも荒妙衣と云ふ格なりけり　麻と木綿と並たる時には何れも同じ物にて粗密無が爲に外に和衣と對ふ物無が故に和幣とは云ども他に對ては云ぬ事なり踐祚大嘗會式にも和妙荒妙有り服を穢る日の服を荒妙とは云へども阿波國忌部所織荒妙服……是なり……和妙なる事云ても著し儀式の大嘗祭條に阿波國所レ献麁布荒妙と所見て古語拾遺に天皇践祚に天日鷲命之孫造二木綿及麻并織布一仍令三天富命率二日鷲命之孫一求二肥饒地一遣二阿波國一殖二穀麻種一其裔今在二彼國一當二大嘗之年一貢二木綿麻布及種々物一と有り　又拾遺に令下天羽槌雄神倭文遠祖也織中文布上令下棚機姫神織中神衣上所謂和衣古語爾伎多倍と有を伯家部類に載る主上大嘗會降神御祝文に是禮朕我本留神衣乎羽槌雄留文布棚

機殿乃所織留和衣能神衣登云々奉獻留青筋乃文布乃荒妙乃神服白綸絹布乃和妙乃神衣と有て荒妙和妙なる事云も更なれど右の細書に引ぬ拾遺に天日鷲命孫造ニ木綿及麻幷織布ニ古語阿良多倍と有るは所謂荒妙の字を脱せるなり其は上に引る文の對なればなり此を天皇本紀には織布の下に奕字有て下に古語云ニ荒妙ニなりと有るは古本より取れる故なり右の木綿及麻幷織布を以て共に荒妙と云りしなり倭文を織布と云は青筋の織文有の謂なる可し但右三種共に荒妙と云中に木綿と麻とは御衣料文布は御帶料御袴及御裳にも所用るなる可し正中豊受太神宮御餝記に倭文御裳一腰と見え武烈天皇御紀歌に於裒枳瀰能瀰於寐能之都波柁夢須寐陀黎萬葉三に古昔有家武人之倭文幡乃帶解替と有などを以知べし又十一に去家之倭文旗帶乎結垂と有を一書歌古之狹織之帶乎結垂とも有も賀茂翁說冠辭考の如く帶に用る料には態と細く狹く織れりしにて今世も帶紐等に爲る物に眞田と云る其にて狹之織なるに同じ釋紀に延久斎宮祭具有之時大蔵省年中賦有青倍文二之布也と有る其なり齋時祭式に倭文二端長各一丈四尺廣二尺二寸と見え伯家部類に青𥿻文布の丈量一尺二寸と有を合せて思ふに御裳の御帶などの料には廣く御帶料は狹く織りしなり但同書に太神宮荒妙同レ之と有ども太神宮の荒妙は麻なれば謙實し思ふに麻續機殿の中にて織せりし間は文布を以て神衣祭に奉りし事有しにや右の命ニ棚機姫神織ニ神衣ニ所謂和衣と有は彼雜例集に載る少神部神服連公倭正大神部神服連公道街等が嘉應二年解狀に於神御衣勤者掛畏天照坐皇太神御坐天原之時以ニ神部等遠祖天御梶命ニ爲レ司以ニ八千々姫ニ爲ニ織女ニ奉レ織と見えたる其にて太御神の石屋戸隱の時に仕奉れりし由にて即其神の職掌とは所成る者也此に依て師の古史に八千々姫命亦名天棚機姫命と文を成されたるは實に然る言也けり但倭姫命世記に與ニ齋宮于宇治縣五十鈴河上大宮際ニ云々即建ニ八尋機屋ニ令ニ天棚機姫神孫八千々姫命織ニ太神和妙御衣ニ猶在ニ天上ニ之儀よと有は古傳にても有べけれども天棚機姫神孫八千々姫命と有は異なり古說には天棚機姫神孫織女と有けむを八千々姫爲ニ織女ニ奉レ織と有より混じたりけむと所思ゆ其は八千々姫は天宮にこそ機女と爲て仕奉れ倭姫命の在世に在む事は決て無事なればなり然れば神衣祭の起は保食神の事に依て出來始れるを須佐之男命の御荒びに依て中間に事止たるを皇太神を招奉る時に至て成整る事決きを皇御孫命の御天降の始より崇神天皇の大御世に至る迄は天照皇太神も同大殿に坐しかば神物官物其差別無りし故に太神に仕奉る所を以て天皇に仕奉り天皇に仕奉る所を以て太神に仕奉り來れるを其大御世に大御神を離ち奉る迄は服部麻續の氏々の八等も朝廷に仕奉りながら其事に預りて皇太神の神衣祭仕奉れるを垂仁天皇

の大御世に至る迄は未皇太神の宮處定らざりしかば朝廷より仕奉り贈進られけむを倭姫命記に同天皇廿五年丙辰春三月伊勢國百船度會郡玉掇伊蘇國に入座即建神服織社令織太神之御服麻績機殿神服社是也と有る此時なとや天皇に御る御衣と神衣と別々に仕奉る事とは成れりけむ（但儀式帳には此機殿昔纒向珠城朝廷倭姫皇女世奉太神齋ニ年飯野之高宮ニ于時機殿立ニ長田郷ニ也屋立社號ニ麻績社ニ亦名ニ河時社ニ是太神御衣也と有れば此時ならむも知るべからねど此に朝廷より奉らぬ事を云ふ所なる故に委しき方を取れり）此より天皇の大嘗祭に仕奉らせ給ふ荒妙和妙と伊勢の神衣祭に仕奉る荒妙和妙と同氏同族にて別れたるなる可し何を以て知ぞならば世記及神宮の古書に令天富命之孫作神寶鏡大刀小刀矛楯弓箭木綿等備神寶太幣矣と見え率手置帆負彦狹知二神之孫以齋斧齋鉏等始採山材云々宮柱太敷立など有と神物官物と分れたる後迄上代の由緣に依て供奉る氏々の人等の神と君とに仕奉る事等しきを思ふ可し備拾遺に令長白羽神（伊勢國麻續祖）種麻以爲青和幣令天日鷲神以津咋見神穀木種殖之以作白和幣と有るを其末（神武天皇段）に天日鷲命之孫造木綿及麻并織布仍令天富命率日鷲命之孫求肥饒地遣阿波國殖穀麻種其裔今在彼國

當大嘗之年貢木綿麻布及種々物所以郡名爲麻殖之緣也と有て儀式（大嘗祭儀）なるは阿波國所造備十二種の中に麻殖部忌御服布二丈一尺木綿三斤と有て阿波國忌部所織麁妙服（神語所謂阿良多倍是也）預於神祇官辨備納以細籠置於案上四角立賢木阿波忌部一人執著木綿賢木前行四人舁案並著木綿鬘と見えたる如く後迄此例なるを思ふに伊勢國の麻績氏は必其國より忌部の支族を別て進らせけむと所思たり姓氏錄（右京皇別）なる神麻績連は天社國社に奉る爲に京に在て仕奉れるなり（此儀式に忌御服布二丈一尺木綿三斤と有を以考るに大嘗會にも御衣料は麻にて木綿は賢木に著らる〻迄の事なり此を以ても荒妙と云事を知べし神宮にて麻績氏の奉るを指て荒妙衣と云事其古義を存せるなり然るを伯家部類に倭文を荒妙と云る說も荒妙の一種には在れども右の儀式に叶はず）右の如く大嘗祭の事は天上の事に根據き橿原朝の遺跡に因准ふ事なるに儀式に載る參河國司に被下る大政官符に應進上服部女三人服長一人神調絲五約使其位神服某甲右爲供奉大嘗祭其所遣件人充使所喚如件國宜承知使齎調絲依例進上と有て儀式大嘗祭式共に凡織神服者九月上旬神祇官差神服社神主一人給驛鈴一口遣參河國召集神戸卜定織神服長二人織女六人工手二人と訖率長以下十人將當國神服部所

レ輸調絲十絇歸ニ向京齋場ニ先祭ニ織屋ニ然後始織云々其神服殿者南國各一宇神服男女憩屋各一宇祝部憩屋一宇（長寶隨レ宜）並以ニ黑木及草ニと見えて神服社は攝津國島上郡神服神社にて和名抄郷名に服部（波止利）と有る此地にて今も服部村と云所なり右神主は姓氏錄（攝津國神別天神）に出たる服部連なる事云も更なり遣ニ參河國ニ召ニ集神戸ニは右の神服神社の神戸なり和名抄に八名郡服部郷此なる可し若て其地に神服部は世々住へるなり借此神服部が所輸る調絲を以て神服殿にて令織給へる和妙を以て神に獻らせ給ふ事は神宮の神衣祭に彼國の赤引の絲を以て和妙を織て供奉ると一致なるを以見れば右の服部社神主と服部連と伊勢國は神服連とは其出自同じきが二方に支流たる事云ふ迄も無き事なりかし（但姓氏錄の服部連條に允恭天皇御世任ニ織部司ニ總ニ領諸國織部ニ因號ニ服部連ニと有るを思ふに心得ぬる時は疑ふる可し本より神服部なりける家なるも故に織部司の職には任りしにて此迄他氏なりし人を服部連に任たるには非る也）右は神服連神麻續連二氏の朝廷と神宮とに仕奉り分流たる由緣を說るなるが彼嘉應二年の解狀に人面重次（八千々姬孫）と有れば神機に仕奉る人面は右の八千々姬命の裔孫なりけり機殿儀式帳に舊記云皇太神御ニ座高天原ニ之昔人面等之遠祖天八千々姬殖ニ桑葉於ニ

天香山ニ以ニ所レ蠶之御絲ニ織ニ供進御衣於太神ニ御垂跡之刻從神達奉レ戴ニ面具御機具ニ天降御座之以降人面職掌人等爲ニ其末葉ニ以ニ女子ニ者號ニ織子ニ以ニ男子ニ者稱ニ人面ニ職掌不レ違ニ天宮之例ニ以ニ四九兩月十四日ニ所調進之御衣也と有る以著き所なるが此文に人面等之遠祖天八千々姬と有れども血脈の裔孫には有べからず猿女君などの如く職掌を以て受繼ぐ事なりけり其は人面職掌人等爲ニ其末葉ニと有にて所知たり且其天八千々姬は所レ謂栲幡千々姬命に坐て其御女玉依姬命の御母と在し皇孫邇々藝命の御外祖母に坐せば決く右の如くなる可し借奉レ戴ニ面具御機具ニと有天宮にて八千々姬の用給ひし器にて面具は人面の用ふる所御機具は織子の用ふる所と所聞たり人面と云事未思得ずと雖も必假面を同じ狀に製造て當るを以の名なる可し若然も有ば人面は同面の謂なりけり（借此八千々姬命の事神は天兒屋命に坐事委しくは卷九春日祭詞北野の條下に云りき）神名秘書神服麻續兩機殿條に神服機殿（在ニ[illegible]村ニ）麻續機殿（在ニ同郡井手郷ニ）と有る事なれとも流田鄕は和名抄には多氣郡に出たれば其より以前の古記を取れるなる可し神名式に流田神社流田上神社有り風土記に難波長柄豐崎宮御宇天皇內

年竹連磯部直二氏建此郡焉と有り此は孝德天皇御世の事也(井手郡は麻績郷の古名なりしにや和名抄多氣飯野兩郡に見えず) 機殿儀式帳に其機殿昔纏向珠城朝廷倭姫皇女傳(カシヅキ)奉太神齋奉飯野之高宮于時機殿立長田郷是處立社號麻績社亦名河崎社是太神御靈也于後機殿遷於岸村是處立社號稱岸社是太神宮御靈也と有る此は世記に廿二年癸巳遷飯野高宮四箇年奉齋(于時造進飯高神戸) と有る此時なり(和名抄に飯野郡長田郷有り此地なる可し岸村の機殿は此より伊蘇宮迄の間に在しなり) 上にも引る世記に廿五年丙辰春三月伊勢國百船度會郡玉掇伊蘇國仁入座即建神服織社令織太神之御服麻績機殿神服社是也(從此遷始在號伊蘇宮焉) と有は神名式に伊勢國多氣郡麻績神社服部伊刀麻神社此なる可し(伊刀麻は絲麻にて和妙荒妙を兼たる御名なるべし但同郡に服部麻刀方神社二座と有は此より次に云べし) 同書皇太神五十鈴宮御鎮座の事を記せる結に天皇即大鹿島命乎祭官止定給比大幡主命乎神國造兼大神主止定賜支神舘造立率物部八十友諸人等雜神事取摠奉氐太玉串供奉留因以興齋宮於宇遲縣五十鈴河上大宮之際令倭姫命居焉即建八尋之機屋使天棚機姫命之孫八千々姫命織太神之御衣譬如在天上之儀止焉と見えたる(風土記に機殿號八尋一者倭姫命奉齋大神日作立也と見ゆ) 此を神名秘抄には丁巳年冬

十月甲子奉遷太神於五十鈴川上之後覓淸麗宵地天和妙之機殿乎興于五十鈴川側令倭姫命居焉于時天棚機姫神令織太神和妙御衣給倭利 今名號磯宮矣と有り斯れは倭姫命の居(マシマ)す齋宮にて此和妙御衣は令織給へるなりけり此を以考るに上件飯野高宮伊蘇宮にて供奉りし神衣は皆麻績氏の供奉る荒妙なりけむを此に至て和妙の神衣を供奉るに至れるなり(但世記には使天棚機姫命之孫織太神之御衣とも有べきを八千々姫命の織れる狀なるは衍れるなり天上にて太神に供奉りし神の此に仕奉る可くも非るが上に右は同神異名なる事を思混せる中古人の攙入の文なるが混ひて本文と成れるなり又秘抄には天棚機姫神之後と有べきを之後の二字を脫せり) 又同書に卷向日代宮御代日本武尊比々羅木乃以八尋鉾根天奉獻皇太神宮留即倭姫皇女彼八尋鉾根波納緋囊天皇太神乃貴財止爲天八尋機殿(圓方機殿是也) 隱收天爲皇太神御靈天奉崇祭留令天棚機姫神裔八千々姫命毎年夏四月秋九月織神服以供神明故曰神衣祭也總此御世定神地神戸崇祭天神地祇年中神態蓋始今時矣と有る此は世記より出たる文なるが此御世に至て宇治機殿を圓方には移されしなる可し神名式に多氣郡服部麻刀方神社と有る是なり世記に景行天皇廿年庚戌歲倭姫命年既老耆不能仕吾足奴止宣且齋內親王爾可仕奉物部

八十氏人定給互十二司祭宮遷波奉レ移ニ五百野皇女ニ給倍利奉レ祀ニ日神ニ無レ倦焉と有れば此時に當て凡ての祭祀の事等を授させ給ひ御次の齋皇女の永世の御掟も定れる趣なれしは圓方機殿も此に成れるなりけり但倭姫命の齋王の御職を五百野皇女に傳させ給ひ年も曾に長存坐しなり右の續きに至ニ于大泊瀬幼武天皇ニ而薨と見え秘抄にも雄略天皇廿三年己未春二月自退ニ尾上山峰ニ石隱坐と有り 秘抄に垂仁天皇廿六年興ニ齋宮于宇治五十鈴川上之大宮際ニ云々謂ニ宇治機殿ニ是也雄略天皇廿三年云々倭姫命石隱坐以來清寧天皇御宇遷ニ于神服社ニ焉と有は右の多氣郡の舊に復れるなり此を以見れば圓方機殿には移さるゝと雖も尙宇治機殿にて和妙御衣は供奉れりしなりけり機殿儀式帳に難波長柄豐前朝廷有レ格以留レ上ニ太神御衣ニと有を以見れは清寧天皇より孝德天皇に至る迄に十五代の間傳はりつるを此時に至て神機殿より皇太神の神衣祭供奉る事を禁止られしなり御紀に尊ニ佛法ニ輕ニ神道ニ爲レ仁柔仁好レ儒と有る如き大御心に坐が故なり凡て此大御世には神代より以降美く好はしく傳り來つる此等無き物をも事をも改易させ給ひて漢樣僞樣に成り下れる事多き由古大人等の已に言はれたる如くなれば今云す 但其は御一世の私事にて絶ず行れしなり其は機殿儀式帳に天智天皇卽位七年八月三日夜依ニ兩機殿燒亡ニ所レ造ニ假殿ニ九月御衣勤仕依ニ宣旨ニ也と有を以知べし同書に然後飛鳥淨御原朝廷大來內親王齋ニ奉太神ニ此時始而立ニ此機殿ニ更發供ニ奉太神御衣ニ于時更始立ニ此機殿ニと有は右の神服機殿在ニ飯野郡流田鄕服村ニ麻續機殿在ニ同郡井手鄕ニと有る此にて今に傳る所是なり以上機殿の沿革皇太神の飯野高宮に坐時は河崎社岸社に有り伊蘇宮に坐時は神服社に在り五十鈴宮御鎭座の時は宇治機殿圓方機殿にて供奉り清寧天皇御世には右の神服社に復り孝德天皇御世には中絶て天武天皇御世に形の如く麻續服部二社にて供奉る例と成れる由なり 此を以考るに天智天皇御世に機殿燒亡と有は別處に在と聞えたり其に飛鳥淨御原朝廷云々始而並ニ此機殿ニ更發供奉と有るを以て然也と知ゆ 此天皇の天津日繼所知食の始終壬申亂に依て皇太神の大御稜威を仰ぎ請せ奉給ひつるに其大御助を戴奉らせ給へるに依て廿年に一度神宮御造替の御定など出來つるに准へて其餘の事の絶たるを繼ぎ廢れたるを起し給ふとしては此機殿をも以興し奉らせ給へる者なりかし續記ニに麻續服部二氏に氏上と助と有るは其官次官の差異迄も嚴重に被立たる故なゝり 齋宮と申せども用明天皇の皇女酢香手姫皇女より後天武天皇の皇女大來內親王に至る迄中間七御代許り奉られざりし此に抗べて神宮の御事の疏略に成し事を知べし 此より以來連綿て四月九月神衣祭供奉り來る事上に引る

建久行事記の如く其式嚴重なる事共なりしかども足利尊氏と云る忠ならぬ頑愚有て掛卷も甚も恐き皇大朝廷の御敵と成つる枉事より天地の神祇の惡み思ぼす所や有けむ彼が世中の政申す間は何時も亂世なりしが神宮の御造替も何も後れ勝なるに混れて日々に神事なども麁略に耳なり行く間に此兩機殿も廢れ神衣祭も所行ず成しに近頃其同國阿濃津の城主として其邊り知れる藤原朝臣（藤堂和泉守）此を再興成し奉れるは朝廷の御爲にも神宮の御爲にも比類無き忠節と云べき者なり（此事師の古史徵開題記に詳記せられたり必見べし）

度會乃宇治五十鈴川上爾大宮柱太敷立天高天原爾千木高知天稱辭竟奉留天照坐皇太神乃大前爾申久服部麻續乃人等乃常毛仕奉留和妙荒妙乃御衣乎進事乎申給止申荒祭宮毛如是申天進止宣（内）八稱唯

服部麻續二氏の事は上に云り（麻續は麻績ならむを今は更なり延喜式等に至る迄も續と書例なり續と績とは通用の事ながら其義違はざれば誤とは云難し）○常毛仕奉留和妙荒妙乃御衣とは上にも引る太神宮式に和妙衣廿四疋荒妙衣八十疋其外種々の物をも添て奉れるなり右和妙衣者服部氏荒妙衣者麻續氏各自潔齋始レ從二祭月一日一織造至二十四日一供齋と有る此なり（委しく上に說り立復り讀む可し）○申給止久申は儀式帳に宮司常例告刀申と有る此也○荒祭宮は神名式に荒祭宮（大月次新嘗）と見え太神宮式に荒祭宮一座（太神荒魂去太神宮北二十四丈）内人二人物忌父各一人右祈年月次神嘗神衣等祭供レ之と見えたり此を倭姫命世記に荒祭宮一座皇太神荒魂也伊邪那岐大神所生神名八十枉津日神一名瀨織津日咩神是也と見えたるは決めて古傳なり（但本緣には亦稱二荒魂神一之時是八十枉津日神大枉津日神也と之時の二字無て宜し）神功皇后御紀に先日教二天皇一者誰神也願欲レ知二其名一逮二于七日七夜一乃答曰神風伊勢國之百傳度逢縣之拆鈴五十鈴宮所居神名撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命焉と有は此荒祭神に在せり其は下に新羅より凱陣し給ふ時に天照大神誨之曰我之荒魂不レ可レ近二皇居一當レ居二御心廣田國一と有に照應せて所知たり但撞賢木嚴之御魂と申すは天照大神坐し天疎向津媛命と申すは其荒魂の御名に坐せり此事委しくは卷三（祈年太神宮祠）卷九（大殿祭祠別）に云り（先日教二天皇一者誰神也と皇后の問奉らせ給へるは同紀一書に天皇に論給へる神名に昔名者向匱男聞襲大歷五御魂速狹騰尊と宣給へるを不審しみ奉らせ給へるなり其御答に天疎向津媛命と名乘らせ給へるを思ふに上なるも決く同意の御名なる可く所思て其說を得たり九卷を見る可し）偖荒祭宮の御靈形は豐受大神の御靈形

と共に所鑄作れりし眞經津鏡にて天石屋戸隱の時に出來れる所也上代本紀に依ニ天照太神御託宣ニ太神第一攝神多賀宮奉レ傍ニ止由氣宮ニ也と有る本註に御形靈鏡坐在昔天鏡神鑄造三面眞經津鏡是也一面者御饌都神寶鏡一面荒祭神御靈坐也と有にて柄焉し但本には御饌都神を天御中主神と有事なれども其は此神を皇祖神に混らさむとて工める外宮神人の改替たる事人の知る所なるが故に今改て引り凡て豐受神宮の事を記せる文共は第一に此意を得て讀ざれば其誣に所欺る事多かり龍忽なる事勿れ（太田命傳記にも此事を記して一面者[illegible]止由氣宮所坐也云々一面荒祭宮御靈坐一面多賀宮御靈坐也云々と上三面の有て本様及寶基本記共此に同じければ古傳なる事[illegible]但[illegible]多けれど其併（ニキ）ルべき也）○如是申天進止宮人[illegible]内は上なるは宮司の直に神宮に向ひて申なるが故に申給へ申と云の此なるは宮司其詔刀を申て後に太神宮の禰宜内人に宣て其宮に各申奉る事なる故に此に於て禰准有より建久行事記に玉串大内人詔刀申[illegible]と有るは此なり（考に此禰宜上には脱しあらむと云ひたるは此式本に宮司[illegible]刀申と有るを見誤られたるなり但其[illegible]禰宜に宮司宣ニ詔刀ニと有は此詔には申ニ宣上の二字[illegible]に宮司申ニ詔刀ニに有如くに云るは[illegible]なり）○禰宜内人の事は次に云（六月月次祭）○同に云建久行事記に此文を載たるには云々高天原爾千木高知天皇御麻命稱辭定奉と有て少異れり其も儀事には非れども今私に改難し（祝詞式に然る本の有しには有べからず此時世の文に據れるなり）

○六月月次祭（ミナヅキツキナミマツリ）十二月（シハス）准レ之（ナラフコレニ）

二所太神宮の例六月十二月々次祭九月神嘗祭を三時祭と云て年中數多の神事の中にも殊に止事無き大祀なり其三時祭共に齋内親王此に向はせ給ひ其儀甚嚴重なり齋宮寮式に云く齋内親王三時祭禊料五色絁各六尺安藝木綿十一斤[illegible]枚凡木綿麻各三斤庸布六段布衣裳各三具（[illegible]）鍬十二口筥三合鰒堅魚各六斤海藻雜海藻各六斤腊鹽各一斗二升米酒各三斗稻十二束瓮十二口坏六口炭十八把笥三柄輿籠三脚食薦六枚黄蘗十五兩（已上禊日料）五色薄絁各九尺倭文九尺安藝木綿廿七枚凡木綿麻各六斤布衣裳九具（[illegible]）鐵人像十八枚筥九合鰒堅魚各九斤腊鹽各九升海藻雜海藻各九斤雜鹽九籠米酒各二斗七升稻九束薬三圍（已上三日禊井祓祭料○今云[illegible]の禊月の晦日の禊井祓料なり此に參日[illegible]井祓料と有は三時祭は二度の禊を[illegible]にて淨衣の料なり）右五月十一月晦日臨ニ近川頭ニ爲レ禊八月晦日臨ニ尾野湊ニ爲レ禊其三時祭月十五日齋内親王向ニ離宮ニ行路之間有ニ二處堺祭ニ（神宮司并禰宜[illegible]宮東堺外及多氣度會兩郡堺祭之供物色目在上）到ニ着離宮ニ（[illegible]供奉裝束）主神司中臣

爲レ禊 新物神宮司儲レ之○今云太神宮年中行事に十五日離宮院大祓事齋王御着祭使下着宮司列ニ參於祓殿ニ行レ之と有は此なり

太神宮司奉ニ齋王膳一兼賜ニ酒肴勅使以下一次主神司

供ニ奉內院大殿祭一 所レ用雜物神宮司儲レ之 然後齋王遷ニ內院一 裝束雜具

一同ニ奉ニ夕膳一 祓殿一 神宮司以ニ新物一附ニ所司 但男女宮供給辨備行レ之 十六日朝饌之後齋

王參ニ度會宮一路邊窮者賑給如レ常禊ニ度會河一參入神

宮○今云太神宮式に十六日平旦齋內親王參ニ入度會宮一と見えたる此なり 至ニ板垣門東頭一下レ輿

入ニ外玉垣門一就ニ東殿一 禰宜幷接帶司供ニ奉裝束一 神宮司執ニ蘰木綿一

入ニ外玉垣門一而跪命婦出受以奉齋王拍レ手而執著レ蘰

又神宮司持太玉串入ニ同門一而跪命婦亦轉奉齋王拍

手而執捧入ニ內玉垣院內一就ニ座席一 命婦若女官二人陪從 避レ席進

レ前再拜兩段訖玉串授ニ命婦一受轉授ニ物忌一受執立ニ瑞

垣門西頭一齋王還就ニ本座一宮司宣ニ祝詞一 ○今云此間の事を太神宮式に齋內親王還就ニ本座一然後禰宜乃著ニ明衣一太神宮司著ニ當色一並各ニ太玉串ニ禰宜立レ前次宮司次雜幣物並馬鞍行陳列吹朝使進入ニ外玉垣門一並皆跪先使中臣申詔刀次宮司宣ニ祝詞ニと有り此を以て見れば此に中臣申ニ詔刀ニの五字脫たるらむ心ち爲るに就て止由氣宮儀式帳を閱に爾時太神宮司登上ニ版位一祭告刀申と有りて中臣の事は無し皇太神宮儀式帳にも即太神宮司進ニ版位一跪告刀申と有り然れば當時未古風にて使中臣は幣帛使にて宮司に神祇官にて宣る所の祝詞を傳へて宮司より令申たりし也此齋宮式にも齋王は其事に預らせ給はざる故に略成る可し 訖物忌內人奉ニ幣帛案一齋王幷衆官以下再拜拍ニ

八開手一次拍ニ短手一再拜如レ此兩遍既而衆官退出就ニ

解齋殿一給ニ酒食一 ○今云太神宮式には此衆官退出の下に即使及宮司以下向ニ多賀宮一不向齋王再拜兩段拍ニ短手一兩段退就ニ解齋殿一と有り倩此解齋殿は直會所の事なり止由氣宮儀式帳に此事を諸司人等幷刀禰等皆悉直會殿就レ座給ニ大直會一と見たり 訖入ニ外玉垣門一供ニ倭舞一先神宮司以下及主神司

寮官次第舞次齋宮女孺四人供五節舞訖給祿有レ差

其後齋王還ニ著離宮一主神司中臣候ニ南門、奉ニ御麻一

○今云止由氣宮儀式帳に即內親王離宮還座祭後禰宜內人等酒殿院侍且後直會仕奉と有り 十七日參ニ太神宮一

禊ニ御裝洗河一自餘之儀同ニ度會宮一 事見ニ太神宮式一 是日神宮司

獻レ物即賜レ祿又奉幣使同賜レ祿並各有レ差十八日齋王

還レ宮主神司中臣候ニ南門一奉ニ御麻一兼供ニ奉大祓祭一

祇承國司賜レ祿と見えたり 年中行事に十八日離宮院豐明神事有り 此三時祭

には齋內親王の向はせ給ふに就て卜庭神祭等其餘にも種々の式有て式に所見たるが如し偖二所太神宮年中度々の神事の中に此三時祭を殊に重みし給ふ由は朝廷に於ても祈年月次新嘗等を四箇神事と云て重み爲させ給ふ中に祈年祭は天下の諸社に祈年の幣帛を奠らせ給ふを主と爲て天皇の御神事の方は輕きを月次新嘗等祭にも幣帛は頒せ給ふと雖も月次には今揩の大御饌を供られ新嘗には新穀を供られて共に天皇も聞食し祝はせ給ふ御事なるが故に神祇宮の式に於ては異無しと雖も天皇の御方には無上も無き御政なる由已に月次祭大嘗祭等の條下に云るが如し又大殿祭にも此事に就て云べき事少からざるが故に其因々に委しく說る事有を見合す可し 久代皇太神の皇

御孫命の同大殿の内に大座坐し頃は神物官物其差別無りし事上に說る如くなる故に朝廷と神宮と別れたる後も神代以來有來れる神事に於て悉猶相同じきは當時其本一なりしが故なり然れば朝廷の諸祭は皇大神の同大殿に在し〻其側の遺れるなり神宮のは久代朝廷にて祭らせ給ひし時の儀式の傳はれる也如此く其本一なるが故に心に留めて彼此を比挍るに寔に高千穗宮にて天上の儀を移されしは斯なる可しと所思る事其甚少からずなむ有ける然れども朝廷には諸司の職掌に沿革有り神宮には祭官以下の變易有て彼此別なるが如く成れる事其多かりと雖も其源より推時は條理明亮にして少も神代の盛典を失はず（此予が上代を明らむる秘式なり世の古學者の根無し言な說とは本火水炭の相違有り）備朝廷にて行はせ給ふ六月十二月月次の幣帛は本神今食を被行るに就て頒たる〻なり十一月新嘗の幣帛は新嘗祭を被行るに就て頒たせ給ふ所にして事の極みは天皇大御身自齋戒爲させ給ひて朝夕の大御饌を以て皇太神を始奉て天社國社の神等に供進らせ給ふなり但神宮の古例神嘗祭は九月に被行る御定なるが其儀朝廷の新嘗とともに一なる事下に其詞の下に云るが如し所以に條社にては新嘗と云べき事を大神宮式には右新年月次神嘗祭供之と有を以知べきなり（然れども十一月新嘗の頒幣な〻奉らせ給ふが故に神名式には太神宮度會宮以下に六月次新嘗と記されたり此は月次新嘗等祭に預らせ給ふ天下諸社と共に並擧らる〻が故なり但内宮外宮儀式帳共に載る十一月例を見るに新嘗の幣帛を京より奉らる〻事無は延暦の當時未有ざりしなり此を以て神宮の新嘗は朝廷の新嘗と同じきなるべし但時祭式新嘗祭頒幣には二所太神宮も三百四座の内にて渡らせ給へども此は後の事なりけり大神宮式に神嘗の事を記されたるは伊勢に限れる事なる故に殊に記されたる者なり因に云齋宮式に右三時祭は三時祭にて六月九月十一月十二月と並擧たるは如何と云ふに同宮にては十一月に新嘗祭有が故なり然れども此は齋宮の神事にて太神宮の神事には非るなり思混ふ可からず）止由氣宮儀式帳に六月々次祭云々始亥時至于丑時朝乃大御饌夕乃大御饌二度間量供奉（此謂由貴）と有て九月神嘗祭條此に同じく皇太神宮儀式帳六月々次祭條に以十六日夜此禰宜內人物忌等從湯貴御倉下宛奉朝夕大御饌二時之料御田苅稻乎以云々件御饌稻乎云々湯貴御饌祭供奉云々十七日平旦朝御饌毛如上件云々供奉と有て神嘗祭條にも右祭太神宮御饌祭同と有て右の月次祭に准らる〻事なるが已にも引る同書供奉朝大御饌夕大御饌行事御贄淸供奉御橋一處石疊一處云々此止由氣太神入坐御坐也云々三節祭十六日夕大御饌十七日朝大御饌備云々禰宜物忌內人等御前追豆持立豆御封御橋豆參度豆止由氣大神乃御前跪持豆則御河曽淸奉豆御饌料理畢則御前持豆御贄御前追豆天照

皇大神乃大御饌供奉と見えたり此三時祭共に朝夕の大御饌を供奉る事此祭の主たる事彼神今食神嘗祭に於るが如くなむ有ける且由貴御饌と申も大嘗の悠紀と同じ事なるを思ふ可き者なり（但三時祭の中にも殊に神嘗祭の重きは朝廷にても神今食よりは新嘗祭上に在て踐祚大嘗祭に至ては外に又比類非ると同事なり）○六月十二月々次祭共に朝廷の御神事は十一日なり儀式祭式共に大神宮幣帛者置ニ別案上一差レ使進レ之と有り然して其使の到著て十六日は度會宮十七日は太神宮の御神事なる也太神宮式に使中臣申ニ詔刀一次宮司宣ニ祝詞一と有を以見るに使は中臣氏の人を任るゝ御定なる事已に新年祭條に云り然るに上に引る如く兩宮共に儀式帳には宮司の告刀申す事こそは見えたれ使中臣の詔刀申す由は見えず斯れば當時使中臣は唯幣帛を奉る爲耳の御使にて中臣は詔刀を申事は非りしなり（內外宮儀式帳を見るに右月次祭に朝使の列に加はる事無を以見るに延暦よりは後延喜よりは以前に此式の改れるなり下に云る條々を見て曉る可し）然れば宮司の宣る所と中臣の申す所と何れか其異有べきに就て考るに宮司の宣るは上に出たる六月月次祭條に出たる天社國社詞と太神宮辭別と此二にて在けるが宮司の宣る所は古くして中臣の申す詞は後に成れるなり（其は延暦より延長迄の間なるべき事云も更なり然る故にや甚も畏き申事ながら伊勢の祝詞に限りて詞も意も調も何も中古の風にて天津神代よりのに比ぶれば甚く見劣なむ爲らるめる但新年月次祭の辭別は古かり）今此を比按るに六月々次祭詞集侍神主祝部等諸聞食登宣高天原爾神留坐皇睦神漏伎命神漏美命以天社國社登稱辭竟奉皇神等前爾白久今年六月々次幣帛明妙照妙荒妙和妙備奉氐朝日乃豐榮登爾皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣と有は神祇官より幣帛を頒るゝ案上案下の神々へ令申給ふ詞なるを太神宮度會宮と申せども東海道伊勢國十四座の員なれば其詞も即太神宮度會宮にも令申給へ詞なり神祇令に凡天神地祇者神祇官皆依ニ常典一祭レ之と有る義解に謂天神者伊勢云々等類是也と有を以其然る由を知べし四時祭式に太神宮幣帛者置ニ別案一差レ使進レ之と有る如く其中に御會釋に別なる所有て御使を被立て令進給ふ事なり但其御使の伊勢に至ては太神宮司に令傳申る例なりしを使中臣申ニ詔刀一と云に至て宮司は其辭別を耳宣る事と成れりしかば其辭別は辭別にて此に出たる六月々次祭詞は其より出て又一同じ事を易て成れるなり（此に依て見れば右の古き月次祭詞並辭別共に其時右の如く作法の改れるよりは被用ざるなるべきか其は神宮にての易りにて朝廷の頒幣は時に宣るは右の古き詞を其往に被用たるなゝめり）惜古くは右の天社國社の詞にて幣帛を進らるゝ由を宣り辭別にて御祈の事共を令申給ふな

るが其此一聯の文なる事辭別と云るにても著く且高天原爾神留坐云々の結文は辭別に在て故皇吾睦神漏伎命神漏美命登鵜事物頸根衝拔氏皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宜と有を照し應せて著き所なり且此辭別に宇豆乃幣帛乎云々と有れども文中に其事を云ざるも上に今年乃六月々次幣帛明妙照妙和妙荒妙備奉氏朝日乃豐榮登爾云々と有を其を受たる文なる事著明き所なり尙立復りて祈年祭詞月次祭詞の下に云る事共を合せ讀べき著なり然れども右の月次祭詞並其辭別共に神祇官にて太神宮に令申給ふ詞を使ノ中臣に宣る所にして有けれ中臣は伊勢に向ひ大宮司をして禰宜以下の人々に令宣て其々に皇大神の御前に申す事なりしかば其詞を用ゐ內にも其取捨無くば有べからず所以に右の月次祭詞を御前にて申す時には何れの社と雖も各其異り有べきなり然れば上に出たる二月祈年六月十二月々次祭詞の如きは必古來より用來る所なる可きなり然れども其辭別に至ては文を甚く被換て神宮にては其句を採て天津祝詞乃太祝詞と云て其詞の中に加たりし事此の六月々次祭詞の如し然れど此二詞共に延暦以後に定れりと聞えて體裁甚古くも非ざるは式に使中臣申ニ詔刀ニ宮司宣ニ祝詞ニと有る如く成れる頃の所業なり是以て上に六月々次祭詞と辭別と有て此に六月々次祭詞と辭別と同じ事の二有るなりけり斯れば此詞は辭別の文なる事云も更なり

○六月十二月々次祭幣物の事は四時祭式に出たると太神宮式に出たると二種にて其條理別なり四時祭式に月次祭奠ニ幣案上ニ神三百四座並大社一百九十八所座別絁五尺五色薄絁各一尺倭文一尺木綿二兩麻五兩倭文纏刀形絁纏刀形布纏刀形各一口四座置一束八座置一束弓一張靫一口楯一枚槍鋒一竿鹿角一隻鍬一口庸布一丈四尺酒四升鰒堅魚各五兩腊二升海藻滑海藻雜海藻各六兩堅鹽一升酒坩一口裹葉薦五尺祝詞座新短疊一枚前一百六座々別絁五尺五色薄絁各一尺倭文一尺木綿二兩麻五兩四座置一束八座置一束楯一枚槍鋒一口裹葉薦五尺右所祭之神並同ニ祈年ニ其太神宮度會宮各加ニ馬一疋ニ但太神宮ニ加ニ籠頭料庸布一段ニと有りて此は使中臣して令進給ふ所にて彼官にて宣る月次祭詞に今年乃六月々次幣帛十二月者云ニ今年十二月月次幣帛ニ明妙照妙荒妙和妙備奉氏云々皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉と見え伊勢の二月祈年六月十二月月次祭詞に常毛進流六月々次大幣帛乎某官位姓名乎爲使天令捧持氏進給布御命乎申給久止申と有るにて太神宮式に先使中臣申ニ詔刀ニと見えたる此なり是以て使中臣神宮に向ひて其詞を

申す事とは定れりしなり度會宮此に同じ然れど延喜の今は中臣申ニ詔刀ニ宮司宣ニ祝詞ニと云ふ様に成れりと雖も古くは中臣より其詔刀を宮司に傳て令宣たる所なり偖太神宮式に六月々次ニ祭十二月准レ之太神宮赤引絲卌絇木綿大七斤麻大十二斤酒米十石米三石三斗神酒廿缶缶別三斗當國十五缶伊賀國二缶尾張參河遠江等國各一缶並以神税釀造雜贄廿荷副レ酒所レ供雜供新米十五石鹽一石四斗鐵一延度會宮亦引絲卌絇木綿大四斤麻大十斤酒米十石米二石神酒八缶當國三缶四國如レ上雜贄八荷雜供新米十五石鹽一石四斗鐵一延其所攝神宮祭者亦用ニ同物ニ右月十六日祭ニ度會宮ニ十七日祭ニ太神宮ニ云々と有る此は太神宮司國々の神田所々の神戸より令獻て宛奉る所なるが故に此詞に三郡國々處々爾寄奉禮留神戸人等能常毛進留御調絲由貴能御酒御贄乎如海山置足成天云々とは云り偖此は太神宮式に次宮司宣ニ祝詞ニと有る是なり上の例を以て攷るに彼月次祭辭別に故皇吾睦神漏伎命神漏美命云々皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉と有は其ならむかと思ふに然らず已にも云如く此詞は決て上古より有來ると所思しければ其迄には有べからず彼此を別たず唯神宮に所進る物に云るなる可し偖太神宮には彼祈年月次共に辭別有り此にも月次祭神嘗祭等に辭別有て其奠る幣物と祝詞と打合て不足事無きを度會宮に至ては其月次神嘗祭共に御使を以て令獻給ふ幣帛の詔刀有て彼太神宮司の宛奉る國々の神田所々の神戸の獻物に就ては別に祝詞有事無し成程儀式帳の趣にては太神宮司登ニ上版位ニ祭告刀申とは有事なれども已に式の頃に至ては使中臣申詔刀次宮司宣ニ祝詞ニと云事先太神宮式に度會宮條に所見て十七日參ニ太神宮ニ其儀一同ニ渡會宮ニ拜ニ荒祭宮ニ同ニ多賀宮ニと有を以思ふに必其辭別有し事決きを其詞の傳はらぬは甚遺憾きに就て此を惟ふに度會宮の萬事は太神宮に准行はるゝ御定なれば此詞に度會乃宇治五十鈴乃川上爾云々天照坐皇太神乃大前爾申進留と有を度會乃山田原乃下津石根爾稱辭竟奉流豐受皇神乃前爾申進と換へ下に荒祭宮月讀宮爾如是久申進止宣と有を多賀宮爾如是久申進止宣と換用られし也其は此詞上なる伊勢太神宮二月祈年六月十二月々次祭詞の次に有べきを豐受宮を隔て此に在り又下なる九月神嘗祭豐受宮同祭同神嘗祭と有る此同字は豐受宮に係たる同なる事を知せむ爲に書ると所思しければ必換用られたる事を脱せるなり雜例集に引る大同本記御饌殿條に其禱言を記せるに天皇朝廷常石堅石爾護幸奉賜比百官爾仕奉人及天下四（象カ）方國人民平爾慇給止申拜奉天照坐皇太神八度止由居太神八度御伴神八度每日朝夕爾供奉と有は兩宮へ係たる詞なるに此詞の天津祝詞乃太祝詞に

天皇我御命爾坐御壽乎手長乃御壽止湯津如二磐村一常磐堅磐爾伊賀志御世爾幸倍給比阿禮坐皇子等乎毛惠給比百官人等天下四方國能百姓爾至萬天長平久云々と有と全同じきを思ふ可き者なりかし（然れば古昔は如何にも在れ此式の今と成ては共に辭別の有し事太神宮式に詔刀と祝詞と二に差別られたるにて著明き所なり）〇倭姫命世記及諸書に雄略天皇の大御世爾豐受大神鎮座の段に云皇大神重託宣久吾祭奉仕之時先可レ奉レ祭二止由氣太神宮一也然後我宮祭事可二勤仕一也故則諸祭事以二此宮一爲レ先也と有は外宮は皇太神の御饌都神に坐故に先其神を令祭給ひ其神より被祭給ひて皇太神は其御祭を受させ給はむとなり此に依て右三節祭を始て諸祭共に先豐受宮次に太神宮と云ふ順次なり（此事止由氣宮儀式帳に載ざれども猶も[illegible]記にも出たれば決て然る託宣有しなり）此に依て先豐受宮の六月十二月々次祭の事を云べし太神宮式に六月々次祭（十二月准レ此）度會宮赤引絲卅約木綿大四斤云々（此事上に引たれば今記さず）右月十六日祭二度會宮一十七日祭二太神宮一其儀十五日黄昏以後禰宜率二諸内人物忌等一陳二列神御雜物一訖亥時供夕膳丑時供朝膳禰宜内人等奏二歌舞一十六日平旦齋内親王參二入度會宮一至二板垣門東頭一下レ輿入二外玉垣門一就二座於東殿一門内東西各有二一殿一東殿設二齋内親王座一左右設命婦等座西殿設女孺等座訖即神宮司執二鬘木綿一入二外玉垣門一北向而跪命婦若女孺出受以奉二齋内親王一拍レ手而執著レ鬘神宮司又持二太玉串一（著木綿賢木是名二太玉串一）入二同門一而跪命婦亦轉奉二齋王一拍レ手而執捧入二内玉垣院門一就二座席一（命婦若女孺二人陪從）避レ席進レ前再拜兩段（命婦不レ拜）訖玉串授二命婦一命婦受轉授二物忌一受執立二瑞垣門西頭一齋内親王還就二本座一然後禰宜乃著二明衣一（衣冠一[illegible]用二木綿一）太神宮司著二當色一並執二太玉串一禰宜立レ前（太[illegible]宮[illegible]宜立レ左宇治内人立レ右）次宮司率二幣帛雜物並馬一單行陳列次朝使進入二外玉垣門一當二内玉垣門一並皆跪先使中臣申二詔刀一次宮司宣二祝詞一訖物忌内人等昇二幣帛案一入奉レ置二瑞垣内財殿一齋内親王並衆官以下再拜拍二八開手一次拍二短手一再拜如レ此兩遍既而衆官退出即使及宮司以下向二多賀宮一（齋主不レ向）再拜兩段拍二短手一兩段退就二解齋殿一給二酒食一記入二外玉垣門一供二倭舞一先神宮司次禰宜次大内人次幣帛使次齋宮主神次寮允以上一人（酒立女一人持レ柏一人持酒毎二舞了一人令レ飲二柏酒一但作酒立女齋王參レ祭之日采女供奉或用二女孺一不參之時用二禰宜内人等妻子一）次禰宜大内人妻訖齋宮女孺四人供二五節舞一次島名子舞一と見えたり（上に齋宮式を引たるに比校せて其委しき由を明らむ可し右の朝使と云るは使中臣の事にて一なり）此事を止由氣宮儀式帳に六月々次祭爲二供奉一太神宮司宣奉雜用物酒米十

斛神祭料二石供給料米廿五石鹽一石麻十斤大木綿四斤大神酒十二缶鐵一延炭六籠 ○今云上に引る太神宮式に此挨るに供給料米廿五石なるた十五石と見え神酒十二缶なるた八缶と見え炭六籠の事無して雜贄八荷と有り但此は下に度會郡志摩國の進れる御贄の員なる可し式に赤引絲卅絇と有た此に無きは下文に多氣度會二箇神郡所進明曳調絲と見え□□日條に開東寶殿御調糸進入自卅絇と記せるに依て省る者也 以十五日先所々戸人夫并二箇郡鄕々人夫等所進榊爾木綿作內人之作奉禮留木綿等太神宮司乃所レ進木綿乎持弖宮饌奉畢 ○今云太神宮司乃所進木綿は右に見えたる木綿四斤大と有此也木綿作內人職掌條に三節祭供奉木綿度會宮一千五十枚祭用三百五十枚と有り 然即志摩國神戸人夫所レ進雜贄又度會郡鄕々所進御贄又禰宜內人等我戸人夫乃志摩國與伊勢國神堺島々仁罷行弖仕奉禮留雜御贄又御鹽燒物忌乃仕奉禮留御鹽等取進畢時爾禰宜內人等皆悉自二宮北一河原罷出弖大贄留淨乃米大祓仕奉 ○今云御巫內人職掌條に每年三節祭仕奉時湯貴御贄祓淨仕奉と有此なり 然湯貴備奉所爾持參入 然所々神爾分奉弖 ○今云九月條には所々乃枝神爾分奉弖と有り 大物忌父御炊物忌父御巫內人等御井爾參向弖祭仕奉畢弖更內院乃御門爾持參入弖御炊物忌父我造奉御筥並陶土師內人等加造奉禮留器爾盛滿弖 ○此御井は御巫內人の職掌條に朝御饌夕御饌爾仕奉留御井並高宮御井神祭仕奉年中六度と見えたる此にて謂ゆる天忍穗井なり二所太神朝御饌夕御饌供奉行事供膳物條に天照坐皇太神御前御水四毛比止由氣太神御前御水四毛比云々と有て尤も重き供進物なり 始亥時至丁丑時朝乃大御饌夕乃大御饌二度間量供奉此號ニ由貴ニ 次大物忌個奉禮留拔穗乃御田稻乎火無淨酒造奉弖供奉次太神宮司乃所ニ宛奉ニ二箇神郡人夫乃所レ進庸米乎火向神酒造奉弖供奉畢即四段拜奉 ○今云九月條には四段拜奉弖內院御門立奉弖外院罷出云々と有り 然罷出弖外院侍弖禰宜內人物忌等直會被レ給此時禰宜物忌新年申物食始 ○今云以上太神宮にては十六日儀なり催太神宮式に亥時供ニ夕膳ニ丑時供ニ朝膳ニ禰宜內人等奏歌舞と有れども此に歌舞の事無は右の直會に含たるなる可し 以十六日朝國々處々神戸人夫等所進神酒並御贄等乎自ニ御厨ニ進入 ○今云御厨とは太神宮司の神館の事なり皇太神宮儀式帳初太神宮司所レ稱ニ神宮司ニ(カムツカサ)中臣香積連須氣仕奉支是人時爾度會山田原造ニ御厨ニ弖改ニ神宮司ニ云名ニ號ニ御厨ニ即號ニ大神宮司ニ支と有るな以て知る可きなり 次齋內親王參入坐致ニ板垣御門ニ弖御輿留弖下輿爾移坐弖參入坐致中重殿即御座 ○今云中重殿は太神宮式に謂ゆる東殿にて儀式帳に齋內親王殿壹宇長四丈廣二丈高一丈と有る此なり其西に西殿有り儀式帳に女孺侍殿壹間長四丈廣二丈高一丈と有る此なるが共に外玉垣門の內にして內玉垣門の外に在る所にして東殿西殿と其所在たるを以て號たり 即太神宮司御蘰木綿並太玉串乎捧持弖第三御門內爾侯即命婦罷出弖其御蘰木綿並太玉串乎受取弖內親王乃御在所爾持參入候侍 ○今云第三御門は式に外玉垣門と有る此なり後には玉垣御門と云り 爾時內親王御蘰木綿奉弖發內重御門爾參入坐弖就ニ席座ニ然即命婦乃捧持留太玉串乎受取給弖捧持弖四段拜奉 ○今云內重御門は式に內玉垣院門と有り後に玉串御門と云此なり 然即還去給弖就ニ本御坐ニ ○今云就本御座は東殿に還らせ給ふな云なり 爾時菅裁物忌父造奉留太玉串禰宜捧弖太神宮司爾給短手一段拍受次禰宜毛共被レ給弖其發弖列立先禰宜次太神宮司次多氣

度會二箇神郡所レ進明曳調糸乎内人等持立如是立列弖參入致ニ中重一〇今云中重は式に謂ゆる玉垣門の内を云り此第二御門なり 太神宮司並禰宜正道就ニ石疊一跪侍大物忌父諸物忌等乎率第二御門西方侍内人物忌父等波内玉垣御門内方列東方向跪侍齋宮諸司等波第三御門東西分頭跪侍〇今云第二御門は内玉垣御門を云ふ第三御門は外玉垣御門を云ふ此は第四重にて板垣御門の内なるなり 爾時太神宮司進ニ上版位一祭告刀申〇今云式には先使中臣申ニ詔刀一次宮司宣ニ祝詞一と見えたり此の事已に上に云り 告刀畢即大物忌父發太神宮司並禰宜二人所ニ捧持一留太玉串乎受取弖第二御門内方進置先太神宮司次禰宜持西方 即禰宜發御鑰所レ給弖大物忌乎先率立弖内院參入〇今云内院とは内[illegible]垣御門の内を云ふ 次太神宮司次大内人三人明曳御調絲持參入然太神宮司波内院御門内跪侍禰宜波開ニ東寶殿一御調絲進入員卅絇見二十八絇高宮[illegible]分二絇 奉入畢即罷出先太神宮司禰宜次太物忌次大内人等然就ニ本版位一即諸刀禰等共發〇今云諸刀禰とは太神宮司齋宮司などの主々しきを除て其以下此神事に預る人々を云ふなり 四段拜奉弖八開手拍次短手一段拍弖一段拜祭又更四段拜奉弖八開手拍次短手一段拍弖一段拜奉又更四段拜奉弖八開手拍次短手一段拍弖次一段拜奉〇今云式には此所を齋内親王并群官以下再拜拍ニ八開手一次拍ニ短手一再拜如此兩遍と有り然るを此に合せて三度なるは術なり神嘗祭條にも四段拜奉弖八開手拍次短手一段拍弖一段拜奉又更如上拜と有れば以上二度なり八開手拍は大嘗會式に拍手四度度別八遍神語所謂八開手是也と有り 然罷出先太神宮司次禰宜次内人等向高宮四段拜奉弖短手二段拍一段拜奉但内親王不レ向ニ高宮一〇今云式には再拜兩段拍ニ短手一兩段と有り 然畢諸司人等諸刀禰等皆悉直會殿就レ座給ニ大直會一短手二段拍先向[illegible]拍太神宮司次齋宮司官人以上次諸刀禰等、〇今云式には此事を就ニ[illegible]一給ニ酒食一と有り同じ事なり 饗給畢時後手一段拍即二箇郡歌人歌女等發板垣御門内西方侍弖先御饌歌供奉次伊勢歌次倭歌仕奉〇今云倭歌を本に舞歌と有は誤なり式に依倭舞と有に依て改つ神嘗祭條にも共に誤れり御饌歌は皇太神宮儀式帳直會歌に佐古久志呂伊須々乃宮仁御氣立止宇都奈留比佐婆美也毛止々侶爾と有る此なり伊勢歌は同書に毛々志貴乃[illegible]保美也入乃多乃志美止宇都奈留比佐婆美也毛止々呂爾と有る此なる可し倭歌は古語拾遺に立磯城神籬云々遷祭之夕宮人皆參終夜宴樂歌曰美夜比登能於保與須我良爾伊佐登保志由伎能與呂志毛於保與須我良爾と有る此也但[illegible]延久年中行事記に出たるは六月乃大[illegible]衣[illegible]附而萬代迄爾[illegible]將[illegible]と誦れり若如此ならむには其祭りに當て初句を換用るにや 然太神宮司請宮人等更發第三御門參入就レ座〇今云第三御門は外玉垣御門なり式に訖入ニ外玉垣門一供ニ倭舞一と有は此なり 即儛仕奉先太神宮司〇今云延久年中行事直會條に宮司舞時御歌當月者ミナヅキノオホヨソニロモヒ一ツキテヨロヅヨマデニカナテアソバム次察中臣舞倚同御歌也と有り 次禰宜次大内人〇今云同記に次禰宜舞其時御歌六九十二月同歌也ミヤヒトノサセルサカキヲカザシテヨロヅヨマデニカナテアソバムと有り 次齋宮神司〇今云此は主神司の中臣を云り同書宮司舞時御歌云々次察中臣舞倚同御歌也と有り但儀式帳には所見されども式には大内人の次に幣帛使を載たり行事記に次祭使舞御歌云ホホミヤノトカリニキヰルホキノトリソレヲミテソラノタカトヒカケルメリと有り 次諸司官人等共儛〇今云同書に次察官舞其時御歌六九十二月同歌也オホミヤノチキニオヒタルヤマカサギヨロヅヨマデニツカヘマツヲムと有りヤマカサキは山檜なる可し 直會酒采女二人侍御網柏盛人別捧給訖齋宮不坐時禰宜内人等妻儛次齋宮采女五節舞畢〇今云式には齋宮女嬬四人供ニ五節舞一と有り五節舞は天武天皇より奉始給へるなる可し續紀詔に掛

毛具々飛鳥浄御原宮御大八洲所知志聖乃天皇此舞乎始賜云々と見えたり　即禰宜大内人物忌等幷祿給禰宜大物忌女酒人各御衣一領給小物忌五人各給二綿一屯一大内人三人調布一端○今云太神宮式に凡三節祭畢會日禰宜内人等祿法云々在齋内親王參祭之日以二祭庫物一給レ之不參之時以二神封物一給レ之と有り　給畢即内親王離宮還坐然後禰宜内人等酒殿院侍弖後直會仕奉と所見たり但太神宮式には供二五節舞一次鳥名子舞の事有れども内外宮共に儀式帳に被載ざるは漏せるなり太神宮式に凡三節祭並解齋直會之日鳥名子舞童男童女十八人彈琴二人笛生二人歌長三人と有り延久行事記に云次自二舞姫候殿一鳥名子取下部等相具鳥名子等於下齋王候殿與二舞姫候殿一中間上謌二歌吹レ笛又此職掌人之中二人自二四所職掌人之手一請二取御琴一持參會其時搔奉レ仕二御歌十二首一第一アメナルヤ、ヤカリカナルヤ、ソレヒトノコ、サアレドモヤ、ヤカリカナラナレヤ、ソレヒトノコ、第二ミチノヘノ、コタチハナチフサタチリモツハ、タガコナミラム、第三トホトホミ、イナサノヤマノ、シヒガエダナ、フサチリモテバ、井マソモドル、第四イヨ、トゾ、イフキミガヨハ、チヨトゾイフ、チヨトゾイフ、ムラサキオビヲタレテ、イマゾアゾバム、第五オホミヤノ、マヘノアラレスダレ、アラレムカヒハ、カヨヘバゾ、ツマモソロフ、第六オホミヤノ、マヘノカハノゴト、カソノナカサ、イノチモナカウトミモミタマヘ、第七ヤマガハニ、ハムヤラチシノ、メドリマシヤ、コノヨニナタビ、ツマゴヒヤスル、第八ヤマガハニ、タテルクロメスコソ、マサフクヤ、ヨキコテチ、チドリカケテ、イザヤアソバム、第九ミナミナキ、トリハカリニゾアル、アラレフリ、シモオクヨモヨトモサダメス、第十オホカハヤナギハ、ヒロクテタテル、オホカハヤナギヨキカコ、ニテ、チドリカケテ、イザヤアソバム、第十一ハマニイデ、アソブチトリナク、アヤモナキ、コマツゲワヘニ、アミナオロシソ、第十二タチバナガ、モトニミチフミテ、カツバシヤ、ワガカヨヘバソ、ツマモソロフ以上十二首次第舞レ此畢之後アマノオヒアマノオヒト三度申と見えたり　其翌日に多賀宮御祭有り同帳に以十七日高宮祭供奉告刀申物忌父禰宜内人等妻子皆悉參集拜奉然即大直會被給其直會人給レ飯者宮炊諸内人刀禰等給又禰宜内人等妻子各熟食備人別被レ給畢時倭舞仕奉先高宮物忌父次禰宜次大内人小内人等次諸刀禰等仕奉畢即更宮地神幷神酒一缶供奉畢即禰宜内人物忌諸刀禰等直會被給と有り此拜式は皇太神宮儀式帳荒祭宮祭に稽ふるに向正殿四拜奉弖短手拍又再拜奉と有る如くなる可し雜例集に十七日高宮御祭事其事之禰宜申詔刀各衣冠と見ゆ又年中行事に外宮伊向神事一禰宜申二詔刀一從北御門内玉垣外參入先行也次朝御饌仕奉と有て此も同じと十七日に在る事也　又同帳に以二十八日一月夜見神祭供奉禰宜内人等參集奉祝仕奉其直會料米者祝受作熟食參集禰宜内人並諸刀禰給又六月々次幣帛使參入幣帛奉進時行事二月々次幣帛進奉時同二行事一と有り年中行事に當日此宮神事の事所見たり　月夜見神は神名式に度會郡月夜見神社と所見て所管十六社の一なり儀式帳に月讀神社正殿貳區長各六尺廣各四尺高各三尺玉垣壹重長八丈高八尺御門一間長八尺高六尺と有て未當昔宮號宣下の事有ざりしなり神名秘書に在沼木郷大河原座承元宮號と見え古本倭姫命世記書入に承元四年爲レ宮と有れば其より後は月讀宮と申奉る御事なり諸書に新月讀宮と申せるは當宮なり雜例集に十八日月讀社祭事外宮攝社禰宜衣冠御坐内人於御竈屋申二詔刀一打レ手直會了打レ手と有り但社字は誤也宮に作る可し雜例集の頃は土宮風宮共に宮號を進せられたる後に書る者なれば等しく月讀宮と有べき事云も更なり　○皇大神宮月次祭の次第は太神宮式に十七日參二太神宮一其

儀一同度會宮（拜乾祭宮同多賀宮）と有が如し然れども其前後
の行事に至ては大に異なる所有り是以て今儀式帳行
事記を合せて神事の次第を擧げ又其沿革を論す可し
皇太神宮儀式帳（六月月次祭條）に云く以十五日夜乃亥時第二
御門仁御巫内人仁太御事請弖以十六日從宮西河
原爾退出之御巫内人乎即禰宜内人物忌等之後家之
雜罪事令申明解除並諸大祓此日建久行事記に御占
神事自西御門參入正員禰宜玉串御門外方軒下御前
向東上祇權任神主八重榊南參集候清酒作并御笥作
陶土師忌鍛冶荒祭宮大内人同大物忌父副物忌瀧祭大
内人大物忌父副物忌如此下部等着玉垣御門西方玉垣
南集會候内物忌父等件御門内東方各祇候于時御巫内
人（衣冠）自外幣殿鷄尾御琴請件御門外東方候御殿向先
詔刀申其詞云申今年六月御祭十五日今時以掛畏天照
坐皇太神廣前恐々毛申國々所々依奉部神戸御厨等忌
齋奉御神酒御贄並禰宜神主内外物忌色々職掌供奉人
等疑於御前御占清淨介古定給倍々毛申次以笏搔琴
搔三度々別在警蹕天奉下神乃御遺阿波利矢遊波須
度萬字佐奴阿佐久良仁天津神國津神於利由志由阿
波利矢遊波須度萬字佐奴安佐久良仁於智伊賀津千毛

於利萬志萬世阿波利矢遊波須度萬字佐奴安佐久良仁
上津大江下津大江毛摩比利太萬閇其後大物忌父正權神主
（衣冠）向一禰宜候其巫又向西候于時大物忌父兄部
不信不淨輩以人別姓名爲某神主若有不淨事（キトリ）申御
巫内人以同詞又申御琴搔内嘯音鳴以清知以不鳴
不淨知也其後御饌供備之輩内外物忌父並荒祭瀧祭
大内人物忌忌刀御笥櫃桶杓御机閣土師御器又可
供用所々御贄等不淨疑占定也丙合輩悦不合輩成恐
其後又御巫内人三度御琴搔警蹕之後奉上神御歌如
本但所奉下神御名申今度歸御止申云々次又詔刀申
其詞云例依禰宜神主内外物忌色々職掌供奉人等並國
々所々依奉部神戸御厨人等依例常毛奉流神酒御贄等
不淨事疑御前御占清淨介古定給六日早旦以神館爾
齋奉御竈戸志天清淨祓清天六日夕部七日早旦神事供奉
清淨勤令奉仕給止恐々毛申天神事爾悅攀令賜給詔
給其後拜八度手兩端自西御門退出於荒祭神拜所拜
八度在手畢各退出不丙合輩歸宿館之後以御巫内
人一敢請也其祭物不絶酒一瓶干魚一候散米少々雜紙
也と見えたり同様御巫内人行事條に六月十五日夜
以亥時第一御門令侍木綿鬘御琴給而請太神御

命と見え神嘗條に以十五日夜亥時御巫内人乎第二門爾令侍弖御琴給弖請天照坐大神乃御教弖云々と有るは此なり但建久行事記には此より前に輿玉神態有り十五日戌尅輿玉神態並御占神事勤行次第御占神事可被參之由清酒作内人正權神主並玉串大内人宿館催正禰宜不冠權任布衣中道經一殿參列東上南面各參集時忌火屋殿北鋪輿玉御前參在鋪設南上東向玉串大内人衣冠北座南向大物忌父兒部衣冠白餘布衣南座西上北向地祭物忌父副物忌等北座東上南向荒祭宮大内人狩衣南座内物忌次西上北向各在神殿于時地祭物忌父等供件御酒御贄等正禰宜各一瓶一候所進又地祭物忌父等御神酒散供米所進云々于時御巫内人衣冠詔刀申申今年六月御祭十五日今時以輿玉廣前恐々毛申地祭物忌子忌齋奉御神酒御贄等清淨間食宮中平神事藝(ツトメ)令奉仕給禰宜神主内外物忌色々職掌人等長久勤令令奉仕給恐々毛申于時拜八度手兩端云々と有て此次に御占神事の事を載たり　同帳に以十六日從宮西河原仁退出云々の事を右の御巫内人行事條に以十六日朝所崇出罪事自禰宜館始内人物忌四人館乃種々罪事祓即西河原爾弖禰宜内人物忌等皆悉召集而此從宮西方川相之川原各奴佐麻令持而先宮東方皆悉令向侍而人別宮房並後家穢維事令申明然於御巫内人各所持之奴佐麻一條分(ワケ)授即御巫内人管集取持其人別所申穢事細久令傳申明即於川皆悉立退於西方下向侍各令申明解除云々と見え神嘗條も出て有り此を行事記十六日條に御巫内人早旦衣冠著從正員禰宜宿館始權神主並玉串大内人宿館至迄祓清但從政所之宿館清始件祭物於正員禰宜宿館者酒一瓶于魚一候散供米少々雜紙少也權任神主並玉串大内人至于魚一候散供米少雜紙少許也云々被勤仕禰宜笏持平手兩端其後御巫内人清宮預退出號禰被　云々同日爲清酒作内人役各宿館參河原御祓可被參之由催巡仍正員衣冠著權任神主並玉串大内人以下皆布衣著引率字河合淵東河原以東爲上向北各著正權別座也無鋪設人別前榊二枝立置但御巫内人件榊著座以前置之　内外物忌父等並荒祭瀧祭内人物忌等者神主西方以南爲上東向也件鋪前每同榊二枝置各件榊一枝置令一枝取笏取副指以葉摘切次御巫一人兒部一人衣冠　一禰宜前御前方向詔刀申其詞云申今年六月御祭十六日今時以國々所々依奉禮留郡神戸御厨人等忌齋奉御神酒御贄並禰宜神主内外物忌色々職掌供奉人等不淨事疑清淨祓清六日夕部七日早旦由貴御饌神事供奉清淨令勤奉仕給神事悅聲令賜給詔給次拜八度在手兩端次御巫内人等正權神主玉串並内外物忌父等持摘切榊枝等皆請取兒部給兒部得立座向河居正權神主玉串並色々内人物忌等所置令一枝榊取各立座同向河又葉曳切次御巫内人被勤仕神主等各中臣祓祭文讀其後件榊枝河流手洗後如元歸居在神酒坏云々畢次正權神主等又立座於河洗

レ手正自禰宜計物忌父手水ヲ紙ヲ渡（物忌等[illegible]者各[illegible]以用也捧今明祭[illegible]所神田在殿ニ大神宮御田ニ其上正殿）宜各酒一瓶費一候進例也 次正權禰宜玉串等引ニ率件色々
職掌人等ニ自西御門參内院在ニ禰拜ニ云々と見えたり
此は十六日夕十七日朝の大御饌供奉るに就て禰宜以下の人々の清祓を奉るなり 儀式帳の上の續きに
諸大祓畢然即以ニ同日ニ此禰宜内人物忌父等引ニ率正殿
院參入御内淨供奉畢由向物忌之天八重佐加岐令ニ差
立林傍奉ニ並宮之御垣之巡令ニ差立林傍奉レ之即此從ニ
宮司ニ宛納木綿令ニ掛附ニ奉（○今云由向物忌行事に云く即東三重御門東方ニ宛八枝八重榊末十四本右方ニ宛ニ左貢ニ並ニ[illegible]内尺枝別ニ着懸レ之）以ニ同日ニ夜此禰宜内人物忌等從ニ湯貴
御倉ニ下宛奉大御饌朝夕大御饌二時之料御田苅稻平
以是禰宜内人四人仁大物忌並物忌父引率宮司所給明
衣服縫服又木綿鬘多須岐爲レ之ニ御饌稻平 大物忌子
請旦土師物忌作奉淨御碓並杵箕持備奉之大物忌々
竈仁炊奉御笥作内人作進上御饌笥仁奉レ納備進 ○今云行事記に出請二人開御稻御倉所レ出御稻方々奉レ下一御物大物忌父請ニ御物宮守物忌父請左相殿御料三前御物地祭物忌父請右相殿御料荒祭御方彼宮大内人大物忌父等瀧祭御方以前白御饌料清酒作内人請黒御饌料酒作内人請四至神御饌料御座内人請云々方々御稻者之中一前方者於ニ忌火屋殿ニ奉等大物忌子其先奉仕母良相日也至ニ二三荒祭御方御稻者於ニ主神司殿ニ奉レ若宮守子等地祭子荒祭子等各屬ニ方々ニ先奉仕云々然後各於ニ忌火屋殿ニ奉レ炊酒造及瀧祭御方御稻者於ニ九丈殿ニ春御稻御塩内人同前也其後白御饌者清酒作内人於ニ忌火屋殿ニ調進瀧祭御饌者宮内人物忌同北殿而調進四至御神料御座内人同前黒御饌造内人於前河北方岸豊受宮奉レ祝石疊御方而奉レ炊例也と有は此事也但白御饌黒御饌は黒酒白酒の事にて饌は酒の借字なり 又禰宜内人等以ニ祭之月十五日ニ退ニ入

志摩國ニ神堺海雜貝物備滿生御雜贄漁 ○今云行事記に十五日朝禰宜一同各神拜之後大馬[illegible]部等引率爲奉仕荒祭宮御贄ニ參ニ河原木神崎ニ先於ニ國村河原ニ在祓云々[illegible]禰宜以下荒祭宮御贄奉レ仕之間供奉人不淨事之除所ニ參清也次自ニ[illegible]禰宜乘レ船二艘之中ニ一艘禰宜ニ乘一艘厨所也下部等乘之海路之間於ニ小[illegible]前ニ禰宜乘レ船在禰拜到着岡原木神崎ニ祭ニ神々ニ御刀ニ刀禰申其詞云[illegible]石赤加布良古前並浦々崎々坐進仁申止云也又或云伊介神ニ岡原木[illegible]於木止ニ皇神前云々次假屋着件假屋在ニ[illegible]ニ東方ニ宇西方ニ宇先東假屋着禰宜[illegible]預云云次西方假屋着[illegible]御贄預奉仕之後件御贄船奉入本宮鯖參於ニ海路ニ在ニ[illegible]首ニ一艘云[illegible]々島着ト島毛（ケ）奈（ナ）志（シ）加（カ）毛（ケ）夫（テ）八（ハ）[illegible]刀禰祝詞刀三度申後船入祝部等所ニ[illegible]也次歌二首和加矢古久伊千乃[illegible]乃宇[illegible]云花乃佐伊太賀和加君乃於波志萬左牟古止[illegible]奈利天古讃乃牟須乃夫但於ニ字小島進ニ[illegible]之[illegible]別ニ度自ニ[illegible]御贄ニ神主荒馬本宮參於御贄者祝部等奉レ持由貴贄方ニ迄ニ十六日夜ニ奉レ之例也と有る即此なり 並
從ニ志摩國神戸百姓ニ進上于生贄及度會郡進上贄平 此
御笥作内人作進上御贄机爾置レ之忌[illegible]治内人之作奉
御贄小刀持切備奉御鱐燒物忌之燒備進上御鹽平 會備
奉土師物忌陶内人作進上御坏爾奉ニ納滿ニ備進又酒作
物忌清酒作物忌陶内人作進上御酒缶爾酒釀清奉酒
平 土師陶之御坏爾奉納滿備進レ之 ○今云以上十六日夕由貴御饌を供奉る事を止山氣太神の御饌都神として調奉らせ給ふ料に[illegible]置事也又建久行事記に今日物忌父等自ニ陶土師御[illegible]之手ニ不[illegible]供用料御器並大小堝及土高坏等[illegible]料等ニ一殿而請[illegible]並[illegible]内人陶土[illegible]相副見知又忌物[illegible]作忌[illegible]以レ柏[illegible]依レ有恐不レ注ニ其色目ニ自ニ荒祭瀧祭御器長手[illegible]下部等大内人大物忌[illegible]御[illegible]忌物等ニ其次使長等堝二口大小[illegible]禰宜并宮政所宿舘[illegible]進云々と有は此なるべし但忌物とは大御饌に供進る御贄なるが當日已ヽ其色目を注す事を憚て然は云るなり[illegible]等なる年中行事に十五日内宮禰供ニ荒蠣御饌ニ事早旦禰宜進ニ向字[illegible]神所ニ祓ニ給彼御饌ニ臨ニ晩頭ニ歸ニ參本宮ニと有り 此以月十六日夜湯貴御饌祭

供奉又宮守物忌並地祭物忌及酒作物忌清酒作物忌等
合四人毛大物忌並父等如此之間其供奉行事具同日夜
半仁人別令備滿侍㠯朝大御饌夕大御饌禰宜大內人四
人並物忌五人及物忌子五人合十四人當參入內院供
奉然即於大神御前爾共列四度拜奉手四段拍又後兩段
拜奉手四段拍畢退と有り九月神嘗條此の所に四段拜
奉㠯內院御門開奉㠯外院罷出と見ゆ委しくは行事記
に同十六日夜及深更內外物忌父等自酒殿菓子贄
並御鹽及國崎神戶所進鮑等請取又正員禰宜例進人
別七篋御贄請取御饌奉調之後爲瀧祭下部二蘿役
御饌可被參之由催正權神主並玉串大內人宿館仍
各著衣冠參集忌火屋殿前石橋列立其時內外物忌父
等衣冠自作殿奉舁出御饌暫奉居手案上御鹽湯
內人衣冠勤仕作祓其後荒祭瀧祭御饌役內人物忌等作
宮々持參在警蹕次正員禰宜前陣在一座役次御饌奉仕
內外物忌父並清酒作及酒作內人等次權任神主並玉串
大內人然即正權神主南御門外留於物忌父等者參入
瑞垣御門內御饌行之中國崎神戶所進鮑奉差料串及
机忌刀白志乃御饌奉取出豊受宮奉副石疊副奉舁居
物忌父等暫祇候但三色物忌父兒等皆西方東向列立

串六御搔鹽令成侍也者彼御副祇候內外物忌父等令
侍答其後各於件御座所彼鮑以忌刀奉功差串奉
削懸堅御鹽又清酒作內人白志乃御饌御河而水入合
奉其後參入內院次正權神主玉串大內人等同參候禰
宜瑞垣御門祇候也外方權任神主玉串御門候物忌父等御
殿下灯火三箇所次供御饌之後大物忌父兒部瑞垣
御門東向一禰宜御饌調進侍中一禰宜以音讀 又物忌
父以音讀 其後件物忌父詔刀乎申度會宇治五十鈴河上
下津石根大宮柱太敷立高天原爾千木高知天皇御孫命
稱辭定奉掛畏支天照坐皇太神乃廣前爾恐美恐美毛申久
常毛奉今年六月十六日乃由貴御饌並國々所々部神戶
人等乃忌齋奉神酒御贄等如海山置所足天奉狀乎平
聞食天朝廷寶位動無久常石堅石爾夜守日守爾護幸奉
給比阿禮坐皇子達乎毛慈給比百官爾仕奉留人等乎毛天下
四方國人民作食五穀豊稔植幸給止恐美恐美毛申在御
神酒三獻在度別拜手四度其後一座申云宿直令候
侍者令侯侍大物忌父申其時一禰宜以音揖申又物
忌父揖申然後正權神主自西御門退出於荒祭神拜
所拜八度手兩端次各於廳舍前石橋先著蘰木綿在
瀧祭拜八度手兩端其後各著一殿預直會饗膳六々

今夜在會畢之後撰御前石橋西敷設其上正權禰宜
並玉串大内人以北爲上着于時清酒作内人作立詔刀
乎申中久今年六月十六日今時乎以撰皇神廣前爾恐美恐
美毛申久常毛奉仕由貴御饌乃國々所々部神戶忌齋奉
御神酒御贄等如横山置所足奉狀乎平安久聞食止申
其後在神酒坏鋪設並陪膳役清酒作内人等也次物忌
父等請取御琴奉仕御歌搔之其時先清酒作内人
舞其後敷半疊一枚次正員禰宜次權任神主次玉串大
内人舞大和舞也件御歌美也比登乃佐世留佐加紀乎和
禮佐志氐眞呂豆余乃傳加奈傳阿曹婆牟正權禰宜
等並玉串大内人等舞時地祭物忌御人召立件役皆副
物忌也而六箇日祭方九月大物忌方十二月宮守物忌方
勤也云々抑御琴者自去十五日御占夜迄十八日忌火
屋殿外方自御戶西方壁面寄掛奉立置例也と有が如
し但儀式帳の昔と行事記の今と少しく異なる所の有
は次々に其式の簡易なるに改れるなりと雖も凡て
は右の狀より沿革れるなれば甚美好き者なりかし
右の撰御前の事は儀例集に撰皇神祭事賢殿不在清酒作内人作立串
詔刀と見えたる此也行事記に豊受宮奉祀云々の事に儀式帳に供奉
朝大御饌夕大御饌行事事御贄清供奉御橋一處石疊一處在太神宮正
南御門伊鈴河云々三節祭十六日夕大御饌十七日朝大御饌備進御
笥作内人造奉御贄机備供御治内人造奉御贄小刀乎立豆志[illegible]神戶百
姓供進鮮鮑螺等御贄乎御机上備儲天禰宜内人物忌等御贄御前追立

皆立御門二封御膳一參宮下止由氣太神乃御前進弖一同御河[illegible]奉仕
御膳供奉畢則如先侍ノ御贄御前追ヒ天照皇太神乃大御膳供奉と見え
たる此を云なり 儀式帳に云く以十七日平旦朝御饌と如上件
引率具備供奉又荒祭宮並瀧祭合二所御饌波其當宮物
忌内人等此太神宮之如御食同日夜具令備此禰宜
内人四人引率參入祭供奉拜奉行事大神宮同然從其
瀧祭之地於太神宮奈保良比所爾參入來以同日夜御
食奈保良比禰宜大内人並諸物忌内人等及物忌父母等
戶人男女等皆悉參集侍然則奈保良比御歌仕奉其歌
波佐古久志侶伊須々乃宮仁御氣立止宇都奈留比佐婆
宮毛止々侶爾次儛歌合仕奉其歌波毛々志貴乃意保美
也人乃多乃志美止宇都奈留比佐婆美也毛止々侶爾右
仕奉御儛自禰宜始内人物忌父等と有り朝夕の大
御饌共に荒祭瀧祭をも被祭るゝ事此條と前條に引る
行事記とを合せて所知る儀式帳神田行事條に荒祭宮
湯貴清酒料稻六十束祭別廿束瀧祭奈保良比料稻自廿束
祭別四十束と所見たり但此段の較略は行事記に十七日曉
又可參御饌之由催正權神主玉串大内人宿館仍各
參候如夜前物忌父等參酒殿請取御贄菓子等參也
諸事如夜前但於獻御饌者夜前取分置而尚進例也又
清酒作並酒造内人等自瑞垣御門左右膳供御神酒並

荒蠣御贄等ニ一人、柏持敷一人大杓御神酒入件柏懸一
人荒蠣御贄散供也其次第先自ニ御門左右脇ニ迄ニ巽角ニ
副瑞垣供進次自右方脇巡迄巽角供進高聲由貴奉由貴
奉申也其後清酒作內人御橋左右男柱副白御饌供酒作
內人右方男柱黑御饌供也抑件御神酒諸神戸缶之中
一口以供進也但於ニ神戸缶ニ者納レ物供進之後進ニ由貴
殿ニ也謂ニ之伊牟氣缶ニ但九月度根倉缶一口加供進也
其後大物忌父如ニ夜前ニ詔刀申但十七日今時以止申也
在ニ御神酒三獻度別拜四度手ニ云々次櫻宮神態云々其
後內人大物忌父兒部御琴獻于時清酒作內人各申則
舞其後禰宜荒木田神主申于時大物忌父琴搔物忌父等
一同件歌奉仕一返畢後一座次座禮起座沓穿御前於ニ
鋪設ニ舞拜次第如ニ詔刀時ニ舞右左右具神宮法有ニ其
謂ニ先右袖纏ヒロゲ地付背廻次左次右也頭者不レ廻御遊每度
乍レ穿レ沓也玉串大內人迄舞畢大物忌父警蹕于時一同
手一端拜其後彼役人御琴上と見えたり以上十六日夕
大御饌十七日朝大御饌を供進る次第なり太神宮式に
亥時供ニ夕膳ニ丑時供ニ朝膳ニ禰宜內人等奏歌舞と有る
此なり　右の諸神戸缶と云は太神宮式に神酒卅缶々別三斗當國十五缶伊賀國一缶尾張三河遠江等國各一缶並以ニ神税ニ釀造と有るを指なり伊牟氣缶は或說に外宮內人今調有り令伊吹調と云ひ又伊吹神事と云ふ其告刀に依レ洲國々所々余利奉寄留神戸人夫等乃常毛奉

御神酒御贄等乎如ニ海山ニ置足志弖今年某月某日朝日乃豐榮登爾伊向乃御膳奉仕之狀乎云々と有る伊向にて忘（イ）以（ム）缶（ケ）なりと云り根倉缶は太神宮式神嘗祭條に度會宮根倉物忌一缶と有る此なり拜舞は舞踏レ事なる可し拾芥抄に舞踏事再拜置レ笏立左右左居左右左取笏に拜立再拜と見えたり舞右左右是神宮法有ニ其謂ニと云は朝廷と神宮と其作法の替るを云なる可し　儀式帳に云
く齋內親王以ニ十七日ニ午時參入坐　川原殿輿留ニ手
輿仁移坐ニ參入到ニ第三重東殿ニ就御坐即西殿波女孺
等侍○今云太神宮式に午旦と有れども此祭も神嘗祭も午時なり齋宮式に十七日參ニ太神宮ニ云云ニ御襆洗可ニと見えたる此なり行事記に齋內親王御參宮之間次第事先御祓件御祓所自ニ御襆須賀河渡瀨ニ上自瀧祭御前北中間自レ河東也御祓畢之後令ニ參御ニ之間陪レ自ニ祭頭ニ次第祭官等皆御供步行也於ニ三所曹司ニ者乘車迄ニ河原殿ニ也其外者同步行於ニ參御火ニ者於ニ一鳥居北畢齋內親王河原殿與ニ二鳥居ニ中間而腰輿移御齋王候殿御著道之間若有ニ天光ニ時祭官等頃加ニ御止ニ總不レ燭レ火之間也件腰輿者從ニ齋宮ニ取放擔持參於宮中所設備也と有此三曹司は明野群載に內侍宣旨女別當以上三曹司也と有り齋宮の女官の長を云ふ　即太神宮司以ニ御蘰木綿ニ
參入互正道同重跪向ニ太神宮ニ侍○今云正道同重は第三重外玉垣御門內を云ふ太神宮式に神宮司執ニ蘰木綿ニ入ニ外玉垣門ニ北向而跪と有り　即命婦退出受以奉ニ親王ニ爾即親
王拍手互取木綿蘰着太神宮司復執太玉串互參入互跪
司侍即命婦亦出受取奉親王ニ爾即親王拍手互自執互捧
○今云行事記に御祭使一疊南向に敷ニ筵一枚ニ官幣等各三人宮司直御鹽湯內參御ニ內人內人之內於ニ二人ニ者此時留令ニ二人宮司相具也於御贖湯內自玉串大內人之手大司齋內親王ニ者用御蘰木綿請取備大司御玉串二枚請ニ取小司御鹽湯析自鹽小齋人相具ニ二土高坏居持各相伴齋王候御殿西向立于時次宮司請取件殿內進次宮司歸ニ參御鹽湯所ニと有　參ニ入內玉垣御門ニ就ニ座席ニ命婦
二人從レ之即避レ席進前再拜兩段訖命婦一人進受ニ太玉
串ニ授ニ大物忌子ニ跪大物忌子受立ニ瑞垣御門西頭ニ進
置畢即親王還ニ本坐ニ就ツク○今云太神宮式には再拜兩段命婦不拜と有り止由氣宮儀式帳にも兩段拜奉と

見えたり行事記に此所を次齋内親王玉串御門御着自ニ齋王候殿ニ迄此
御門御參行也其間作法委不記ニ禰宜着蕃垣御門西方副柱本向南參着
大物忌子良相具母良瑞垣御門候一禰宜子良參侍止申其時大物忌子良
母良申具齋王御拜御戸前迄參候其時一禰宜御玉串先左次右御拜間良
御後手又御拜四度御後手止申于時子良先左手ニ出御玉串給次右手指
出御玉串給云々子良退立奉仕御玉串於瑞垣御門然後内親王還ニ御齋
王候殿ニ一禰宜自ニ玉串御門西脇ニ西面門退出云々次宮掌大内人一人
參ニ祭使ニ許察御玉串畢之由申と有り神嘗條には再拜兩段と見ゆ
然後禰宜著ニ明衣冠ニ木綿多須岐左右肩懸テ宇治大内
人爾毛又如ニ禰宜ニ裝束即護木綿並太玉串捧持太神宮
司跪手一段拍給次禰宜毛同給宇治大内人毛同給留以
上三人波太玉串給時爾人別拍手弖給先禰宜左立次宇
治大内人右立次太神宮立次赤曳御調糸乎諸内人等
持立氐參入致ニ三重ニ弖御調進版位ニ丈許就レ列如ニ祈
年ニ ○今云如祈年とは其條に云々列參入第三重告刀之版位就令レ進
ニ之東端御馬進ニ一丈許立次驛使次太神宮司次禰宜次宇治内人次
大内人以上六人正殿向階列就ニ版位ニ侍内物忌子等御門東西頭侍内
物忌父四人諸内人物忌父等以西玉垣門ニ丈許向レ東隣列侍と
有る此なり倭神宮式には次宮司次祭使進物官馬並行陳列次驛使進人ニ外
玉垣門ニと有れども一所太神宮式其に奉使の到る事も見えず又
其京より進ぜらるゝ幣帛の事も見えず唯調糸を進る事なるは其頭迄
諸社の列に月次の幣例には祈年はなくして神宮は神嘗限りにて御鎮座の
月次祭を供奉りしなる可し倭行事記に察御玉串畢之由申昔其時御於ニ
御贄遣所ニ向ニ神主宮年並玉串行事次第父ニ内院之御門ニ手祈年祭
時ニ仍委不レ記神如此内院神事時御門ニ懸レ帳也但ニ三色調物忌父
懸由瑞垣御門副宮守物忌父ニ御ニ門御門副地祭物忌父役也各出人之
時役華卷上也云々と見えたり此間
は儀式帳にも式にも漏たる事共也 即太神宮司進ニ版位ニ跪告
刀申畢即返ニ就本坐ニ ○今云此由蕃宮儀式帳にも太神宮司營ニ上
版位ニ祭告刀申と有るを式には先使中臣
申ニ詔刀ニ次宮司宜ニ祝詞ニと有る事なれども當昔は幣帛使より太神宮
司に任ねて爲しせける故に使中臣には其事に預らざりしなりけり
儀式帳祈年祭條を見るに此は使有れども告刀は太神宮司の申せる
を以て曉る可し行事記に於ては石壺之後大物忌父差レ勞持ニ詔刀文ニ

奉ニ祭使ニ次皆後物忌父抽レ勞一拜之後着ニ本座ニ宮立レ座八重榊前東方
丸石壺跪詔刀申但詔刀爲レ申參之時皆不レ申也度會宇治五十鈴川上爾
云々皆毛遣流六月々次大幣帛使祭主菜甲令ニ捧持ニ弖云々詔刀畢
之後使一拜歸ニ着本座ニと有る此は式に先使中臣申ニ詔刀ニと有るを云て
其詔刀は彼ニ月祈年六月十二月月次祭詞なるが大同少異有り次大物
忌父又差レ勞立レ坐持ニ詔刀文ニ大宮司奉ニ其宮主ニ玉串前置請取物忌父
抽勞一拜之後歸ニ着本坐ニ次宮司立レ座八重榊前西方丸石壺十跪詔刀申
云々詔刀畢之後宮司一拜ニ歸ニ着本座ニと有る有る此は式に次宮司宣ニ祝
詞ニと有り云ふなり但此
詞六月月次祭詞なる也 宮司之手捧持玉串宇治大内人立太
神宮司太玉串取本坐侍即禰宜召ニ大物忌父ニ乎即太玉
串給立ニ御門東頭ニ進置還ニ本座ニ侍又宇治大内人立
禰宜太玉串受本坐還侍即禰宜召ニ宮守物忌父ニ乎太玉
串給即立ニ御門西頭ニ進置畢本坐返侍禰宜又召ニ地
祭物忌父ニ即宇治大内人太玉串四枝給即立ニ御門東
頭ニ進置還ニ本座ニ侍又宇治大内人捧太玉串乎自進ニ御
門西頭進置畢本座返侍 ○今云此は謂ゆる玉串行事なり此を祈
年祭に合せ考るに宮司の玉串は宇治大
内人受取本坐に侍り禰宜大物忌父なり次て御門の左方に立しめ次に宇
治大内人禰宜より太玉串を受て本坐に還侍るを禰宜宮守物忌父を召て御
門の右方に立しめて又祭地祭物忌父を召して宇治大内人の太玉串四
枝を執ひて左方に立しめ又後に宇治大内人自太玉串四枝を右方に立
る事にて宇治大内人は玉串八
枝なるを分て二度に進れる也 即禰宜御鎰給大物忌乎先率立
弖内院參入次太神宮司次大内人等明曳御調絲持參入
然即大物忌父開東寶殿御調絲進入畢即罷出就ニ本座ニ
○今云式には物忌内人等昇ニ置幣帛案ニ入奉レ置ニ瑞垣内財殿ニと見え儀宮
式にも物忌内人等ニ幣帛案ニと有り行事記に云く玉串行事畢之後宮司
禰宜等率レ各赤引曳荷前絲並寶殿奉納大物忌開ニ御倉ニ之時ニ仍不レ記
但於ニ東寶殿ニ者赤引曳荷前御絲之内三六所別宮進營比奈乃淺々
木御料分進ニ奉レ納物忌ニ日代可レ申一々讀也
其後各歸ニ着本座ニ次ニ取内人衣冠御封と有り訖即四段拜奉八開

手拍て短手一段拍拜奉又更四段拜奉八開手拍て短手一段拍即一段拜奉て罷出〇今云太神宮式齋宮式共に齋內親王短手一再拜如此兩遍訖而衆官退出と有り然れども兩宮式にも儀式帳に此時は齋內親王候殿に退居給間の事なれば後殿より拜奉らせ給ふなめり然れば衆官と女儀とを混へにまじき爲なる可し其後は右の二式共に齋王還就二本座一と記して其後に拜の事を云るを以て知られたり倭行事記に御封畢拜八度手兩端と有は此に段拜奉八開手拍を二合せて記せるなり鈴鹿大人云く此內に二の一段拜は唯敬の爲りに屈伏するにて拜の數には非ず拜の數は四段と四段となり八開手と云は手を八拍也但止由氣宮儀式帳に四段拜奉て八開手拍次短手一段拍て一段拜奉又更云々又更云々と有て都て三度成は同帳神嘗祭條に二度成に務せて思ふに此二の又更の內一は衍れるなンめり

向二荒祭宮二四段拜奉短手二段拍一段拜奉〇但內親王不レ向二荒祭宮一今云太神宮式に即使及宮司以下向二多賀宮一再拜兩段拍短手兩段拍短手二兩段と有止由氣宮儀式帳高宮拜條に四段拜奉短手二段拍一段拜奉と有て此の拜法に同じ行事記に玉串大內人爲奉荒祭宮御前御調糸立坐次第如二御衣之時二祭使宮司等自二南御門二退出西御門二退出於荒祭神拜所祭使並與二宮司二著拜々八度手兩端次玉串大內人並荒祭宮內人物忌等參二彼宮一と有り其大略神衣祭條見べし

然畢時諸司衆官人等並諸刀禰等皆悉直會殿付坐大直會被給畢時後手一段拍〇今云太神宮式に退就二解齋殿一給二酒食一と有る此也行事記に云く荒祭宮內人物忌等參二彼宮一也次二一禰宜相二具御火祇承一從二西御門一歸參祭宮申其次三所曹司並祭頭幣申傳官禰宜於二酒殿後一脫二布衣一著二蘰木綿一侍一禰宜祭使著二一殿一從二後戶一東也而レ皆在二件殿一立二南穴一宮司主神司殿中間以レ西爲レ上著于時祭官等參彼殿史生等六人燭レ火祭員一段降坐向二祭主著東方次助等參著又坤方同史生等向レ北祇候祭中臣主神司殿宮司坐西方坐闕置著又同忌部次宮主大占部次宮主代著也皆東帶也其次北副向レ南祭神祇神部等參著布衣中臣後向北祇承檢非違使二人著次司中下部等著布衣同向レ北參著在二件殿北方宮司前立二火抑一禰宜祭幣申時自二祭入之手二物忌父請取一禰宜渡三所曹司並頭幣向前件取次役物忌父巡向勤仕云々又祭幣者長串也祇候也而奉幣後狹虎二舞姬分配二六禰宜等每祭任巡向預例也云々一禰宜祭幣申之後解二脫蘰木綿明衣一相二伴傍官禰宜一一殿參東座北爲レ上向レ西也抑祭使並宮司等之後坊九丈殿也于時荒祭宮奉レ納二荷前御調一之後彼宮大物忌父宮司前立二明火一副也荒祭宮御封畢申古封乍レ立被去又其後二以立明火副而司掌刀禰申乎勤仕其詞云都司申久御下酬々古今利刀兩正五位下十十一從六位上十十三合七位無刀自世余例又百刀七參於斎於利給申申其後二主神司殿二祭中臣始司二又一殿占次郎大歸二本二之後宜合饗宣也階時人祭宜大司酌盃三宜也其後祭主二宜內人也畢二主司殿二宜始後手一殿水二人其外者六位宜大內人也畢一主司殿宜始後手一殿兩前也其各立レ於二次者一殿艮方在二手水二宮司於主神司殿東二用例也祭頭一殿巽方在祭主手水後以任水屋也今度手水役者陪膳人也

即太神宮司諸司官人等更發弟五重參入就レ座〇今云九月神嘗祭條には第五重御門參入就レ坐即進二四重一と有り一重瑞垣御門二重內玉垣御門後に玉串御門と云ふ三重外玉垣御門後に玉垣御門と云ふ四重板垣御門五重蕃垣御門也止由氣宮儀式帳にも板垣御門內西方侍云々更後參二三御門一入就レ座と有れば太神宮も必同式なる可き也然れば此に脫文有りと思ゆ其上式にも入二外玉垣門一供二倭儛一有とれば此も必止由氣宮の如くなるべきなり行事記に各手水之後參二內院一次第先祭主宮司自二南御門一參入在御火祇承次祭頭同自二御門一參入次神主自二西御門一參二西御門西脇一平張內宮司座西以レ東爲レ上也其次祭中臣著宮司與二神主一中也其外祭官祭使東著也所歌人等宮司與二神主一後祇候と有れば太神宮は後迄も四重にて在也けり倭此の四所歌人とは琴生笛生歌長鳥名子など云成可し

即倭儛仕奉先太神宮司次禰宜次大內人次齋宮主神司諸司官人等其儛畢入別直會酒采女二人侍御綿帛爲給然男官儛畢即禰宜大內人等妻儛次齋宮女孺等儛〇今云式に與二倭儛一先神宮司次禰宜次大內人次幣帛使次齋宮主神次祭主以上二八次禰宜大內人其記齋宮女孺四人供五節二舞次鳥名子二舞と有り行事記には主祭使參入之時先吹レ笛各着座之後無レ歌吹レ笛自二忌火屋殿一請二取御琴一播レ祭宮二三度無二儛唯一又司掌云酒立運尚不レ當次敷二半疊一故二齋主候殿典二雖頃候殿二中間北方副敷也件半疊跪在二大和舞一先大司次宮司次少司也各座二大和舞一勤仕立レ舞之時司掌二云各官位宮司舞時御歌六月者ミナヅキノオホヨソゴロモ、ヒヅツキテ、ヨロヅヨマデニ、カナデアソバム次祭中臣舞向御歌也宮司並中臣左右舞也先半疊跪一拜之後著レ笏一拜而歸也次神主舞其時御歌六九十二月同歌也神主右左舞也ミヤビトノ、サセルサカキヲソレサシテ、ヨロヅヨマデニ、カナデアソバム、神主大和舞奉仕之後司掌召二祭掌一三度云度爾禰唯申也司掌云御半疊直侍二祭掌大內人答二祇候一次祭使舞御歌云オホミヤノ、トカゲニキヰル、オキノトリ、ソレヲミテソラノアラタカ、トビカケルメリ、次祭官舞其時御歌六九十二月同歌也オホミヤノ、チギニオヒタル、ヤマサカキ、ヨロヅヨマデニ、ツカヘマツラム、各舞畢之後云々司掌云直會院侍祭掌

大内人客ニ度侍ニ云々各[illegible]奉レ仕歸等[illegible]御門内東腋ニ津乃佰及酒手請天口平寄天[illegible]佰寄取副立ニ御前ニ[illegible]南[illegible]着[illegible]本[illegible]之酒立ニ件取敷ニ小筵一枚ニ女官二人[illegible]レ[illegible]著之[illegible]立[illegible]入作[illegible]各[illegible]歸女官奏而一人女[illegible]請取今一人女官[illegible]上[illegible]酒入[illegible]請也其時[illegible]後佰上灑也次司掌ニ祭掌三[illegible]下レ[illegible]云ニ御前進ニ手[illegible]ニ齋王侍殿ニ着ニ[illegible]座[illegible]女房二[illegible]指ニ[illegible]相[illegible]ニ作[illegible]出御實[illegible]向拜之後侍殿歸參也次自ニ[illegible]侍[illegible]名手[illegible]等[illegible]齋王侍殿與[illegible]侍殿中[illegible]掌人之中二人自ニ[illegible]掌八之手ニ請ニ共御琴ニ持參會[illegible]其時[illegible]作レ仕ニ[illegible]十二首ニ云々以上十二首次第如此畢之後アマノオヒ、アマノオヒ、ト三度申鳥名子等組レ手廻々後各頭一所聚伏其後[illegible]各手合後退出也作[illegible]掌人畢即禰宜内人物忌忌火屋殿御琴上退出也次祭[illegible]退出云々と見ゆ等爾祿給ㇵ(一令云太神宮式に凡三節祭[illegible]會日[illegible]宜内人等[illegible]五位一禰宜ニ[illegible]一條[illegible]一疋一丈三尺[illegible]五屯六位[illegible]宜[illegible]一領新絹一疋[illegible]一屯大内人[illegible]宮内人[illegible]忌[illegible]彩[illegible]一領五節[illegible]人二人絹各一疋酒立女[illegible]人[illegible]各[illegible]有齋内親王[illegible]祭之日以ニ寮庫物ニ給レ之不參之時以ニ神封物ニ給レ之と有り即内親王離宮還坐と見えたり此を以考るに六月々次祭に就て最重きは朝大御饌夕大御饌にて此は豐受太神の御饌都神と爲て天皇の依奉れる神戸御厨の種々物以御饌に調供進らせ給ふ神事也其次には赤曳御調絲を供進るなり天皇の御杖代と爲て齋内親王此を奉らせ給ふ事にて此二ぞ古來より仕奉來る月次祭には有けれ然れば朝廷にて行はせ給へ六月々次の幣帛と雖も倚此に亞事にて有しかば儀式帳には主と記されざるなる可し然りと雖も朝廷にしては御許より奉らせ給ふ方を主と爲る事故に其幣帛の事を主とは記されたるなり然れども下に擧たる瀧原宮伊雜宮條に朝御饌夕御饌幷朝廷幣帛供奉告刀申と有れば誨しく四時祭式に載る所の月次幣帛を供進られたる事著明くなむ有ける然れども儀式帳の當時迄御使を進らるゝ事は無りしと見えたり但祭主の參向は在しかども儀式には列ざりしが倚能考ふ可き事なり倚朝廷[illegible]御[illegible]も朝廷にて調させ給ふと神宮にて令調給ふとの二有が故に四時祭式と太神宮式とに各記別られたり倚三節祭共に十八日十九日廿日廿三日廿五日に被行る別宮攝社の神事有り儀式帳に云く十八日行奉以ニ同日辰時ニ神宮廻神祭百廿四前祭新下レ從ニ外幣殿ニ神酒二缶神贄二荷右祭御巫内人幷物忌父等四人共舉班祭云々以ニ同日ニ荒祭宮仁祭供事云々此を行事記に十八日神事令朝御巫内人等四至神幷天津神國津神八百萬神達祭件日朝[illegible]祭宮云々同朝內外物忌父等衣冠着同自ニ由貴殿ニ神戸所進缶二口菓子贄請預宮比矢乃波々木神祭也内物忌父等宮比神祭外物忌父等矢乃波々木神祭宮比神御在所興玉[illegible]御前乾玉垣角也矢乃波々木神御在所御前巽方玉垣角也先祭ニ宮比ニ次祭ニ矢乃波々木ニ云々正權禰宜幷玉串大内人着ニ衣冠ニ參ニ内院ニ各奉拜之後參ニ着齋王侯殿ニ敷ニ鋪設ニ正禰宜南坐西上權任神主玉串大内人東座南上物忌父等西座南上但物忌父[illegible]詔刀畢而坐着也件殿前平柱左右赤良曳荷前御調絲結付也是宮比矢乃波々木御料也内物忌父等幷御巫内人御前不疊後以レ西爲レ上列祇候但上座御巫内人也御巫内人乍ニ列座ニ詔

刀申其詞云申今月六月御祭十八日今時以宮比矢乃波々木廣前恐美恐美毛申久國々所々依奉郡神戸人等常奉荷前御調絲幷由貴御神酒御贄等如横山置所足奉狀乎安聞食宮中平爾神事禁令奉仕給禰宜神主内外物忌色々職掌供奉人等長久勤令奉仕給止恐美恐美毛申次拜八度手兩端次神酒坏云々之後自西御門退出於荒祭神拜所之前在手水次著鬘木綿又荒祭子良同著鬘木綿參于時正權神主玉串大内人彼子良前居神拜八度手兩端云々直會後於櫻宮前在倭舞云々と有て詔刀の文體上なる十五日興玉祭詔刀に全く同じきは故有る可し同記正月條に十一日旬神拜事云々次に朝熊社坐前　次興玉宮宮比矢乃波々木宮神宮比荒垣内乾角矢乃波々木荒垣外巽角坐次櫻宮皇神次天津神國津神云々と有り斯れば興玉神と申は此の二柱を鎮奉る稱なりけり斯れば同し神には坐せども御名を異にして鎮り別り給へる故に乾角と巽角と二處には在せるなり荒木田經雅神主の儀式解に宮比は宮邊矢乃波々木は婆比支神にて座摩巫の齋く大宮處の靈神なり興玉神と申すは全く神宮地靈神にて此に同じく興は尊稱なり四面悉く此御靈なるが故に四至皇神とも宮廻神とも申せり抑興玉神を猿田彥神

と云誤る事は此神は宇治郷の地主神たるより宮地神の事と心得誤て附會せる者なり偖宮比矢乃波々木神は大宮地の靈たるに依て御調絲を奉て別宮よりも尊重なり地祭物忌父等專此を職掌りて地祭の名此に依て負ひ遷宮地鎮祭も此物忌の所掌なり而るに中古に猿田彥神と云よりして玉串大内人專職掌る事と成れゝども目に其謂無し行事記に十五日夜興玉神事有れども儀式帳に無し十八日宮廻神祭と記して有れども興玉の名無し太神宮を十七日祭り直に十八日宮廻神祭次荒祭宮祭なり最尊むべき神なり以上摘要と有は甚々美き考なり但宮比神は宮邊神にて大宮賣神の御事矢乃波々木神は屋之咀岩神（ヤノソキノカミ）にて婆比支神とは別なり大殿祭詞に大宮賣命登御名乎申事波皇御孫命乃同殿能裏爾塞坐氐云々と有に同意の御名なるを思ふ可し然れば四至神と申し宮廻神と申すも其四至以外は御門神の掌る所なれば其内を守給ふ意なるなり興玉とは靈を大宮地に鎮置て守給ふ由にて興は尊稱と云に非ず若て此興玉神四至神の詔刀共に宮中平神事禁令奉仕禰宜神主内外物忌色々職掌供奉人等長久勤令奉仕給と有は大殿祭詞別の文に其意異ならざる

に心を著べき者なりかし(並に依て思ふに大殿祭仕奉ハ儀式に巽方に向て祭る事の有なども此神等は所在の乾と巽なるに由有り備十六日夕輿玉祭は太神宮の御祭に就て行はれ十八日の此祭は荒祭宮の御祭に就て行るゝには非ざるかしに引る行事記に宮北矢乃波々木神を拜畢て後直に甕木綿を著て荒祭宮に拜に向ふを見る可し若然らば並ずも神今食新嘗祭レ前後に必大殿祭を被行ると全同じ事なり出雲風土記に所レ造二天下一大神大穴持命云々キ八雲立出雲國者我靜坐國青垣山廻賜而玉珍(タマ)置賜而守と有る玉珍は借字にて靈の事なれば此レ輿玉の意も此を以てやるべきなり然るを神宮の書共に猿田彦神の重言として吾能久二魂魄一之故號輿玉と云へるは甚と招となだに得知ぬ人の妄託にして取に足ざる也)荒祭宮御祭の事は此詞の下に委しくいふ可し又儀式帳に云く以十九日巳時瀧祭直會行事右祭二荒祭宮一直會與同但不レ仕二奉儛一と見え瀧祭物忌所酒一缶贄一荷宛班と有り又瀧祭物忌并父等有て最重き所なり行事記には瀧祭宮と記して其次第伊雑宮の下風宮の上に在り同記に十九日神事次第早且瀧祭御神態次第先内人物忌等自二由貴殿一請二取缶一口一持參供進之後彼下部等於二御前一各預二神直會一其後件下部之中一人自二宮廳一請二取權官差符一催二各宿館一仍正權禰宜并玉串大内人著二衣冠一參被取(自河原東西也)但宮大内人大物忌等著二衣冠一正權神主并玉串大内人鬘木綿給各手一段後請取著用次拜八度(手兩端無二詔刀一)其後各著二一殿一(有二寄戸勤也)正員禰宜爲レ上也と見えたり此瀧祭神は倭姫命世記に無二實殿一在二下津底一水神也一名澤女神亦名美都波神と有て式には載られざれど儀式帳に所管廿五處の中に瀧祭神社在二太神宮北川邊一無二御殿一と有て止事無き列なり此記の頃は已に内人物忌をさへ附奉れりしなり然れども儀式帳の此酒云々の文に宮とも社とも云ず瀧祭物忌所と有を以考るに決て清祓の所なる者なり然れば世記の説も依難かり又宮守物忌地祭物忌など相並びて瀧祭物忌も太神宮物忌九人の其一なるを以て別神を祭る所ならぬを知べし(今思ふに河原御祓を被行る河合淵の東河原に近きを以思ふに古昔河原御祓を此所にて被行しなる可し瀧祭と申すも祓戸神に由有て聞由)同帳に云く以二同日未時一月讀宮祭行事云々(此事は祝詞に月讀宮仁毛云々と有る下に云べし)又同帳に云く以二廿日一大歲神社祭行事右祭瀧祭神祭直會行事與同大歲社酒一缶贄一荷宛班此を雜例集行事記共に廿日小朝熊社祭事(一禰宜申二詔刀一)と見えたり此二を合せて立復り儀式帳を閲に所管神社四十處の中なる小朝熊神社一處稱二神櫛玉命兒一大歲兒櫻大刀自(形石坐)又苔虫神(形石坐)又大山罪命子朝熊水神(形石坐)倭姫内親王御世定祝正殿一區(長一丈四尺弘一丈一尺高八尺)御床一具玉垣二重(長七丈各高一尺)御門二門(高各一丈弘各八尺)御倉一宇(長一丈四尺弘一丈三尺高八尺)前一處(長一丈二尺弘五尺)坐地八町四至(東大山南公田西宇治河北御竈島)と有て神名式に朝熊神社と載られたる此なり此文にては少心行ぬを世記に朝熊神座櫛

玉命鹽石坐保於止志神石坐櫻大刀自神花木坐若蟲神石坐大山祇神石坐朝熊水神石坐寶鏡二面と有て合て六座なるが櫻大刀自神と若蟲神と力を合せて坐神にて一座とし凡て五座也然るを同記に又別に大歳神一座國津神子形石坐と有は伊雑宮と共に祀ひたる大歳神にて其より先の事也小朝熊社神鏡沙汰文に載たるに小朝熊祝礎部時次解狀に抑當社幷御前社寶殿者共在高山之上其山下坤方隔江河二十餘丈水邊岩上作御鏡二面自往昔之當初所御座也と有れば小朝熊社と前社と二社有也けり行事記卯杖條に小朝熊奉祭禮石疊爾二筋立之と有は此也同記正月十一日旬神拜條にも小朝熊坐前社と並舉たるを思ふ可し然れば小朝熊社と申は右の大歳神を祭り前社は餘の四座を合せて所祭なるが卯杖祭此祭には右の本社に就て祭るには非ず石疊二を構て彼神を祭祀する所有なり下に引く此祭條に忌火屋殿荒垣坤角彼神祭祀所石疊と有を以知べき也同記に云く廿日小朝熊御神態勤仕次第早且彼社祝侍自由貴殿請預而忌火屋殿荒垣坤角彼神祭祀所石疊爾持參御神酒贄菓子供進正權神主並玉串大内人著衣冠主神司殿參（東方）上正禰宜次權任神主玉串大内人着（但於玉串大内人者宜立西蕃着坐任神主不請件坏）祝部着黃衣木綿持進寄始從一禰宜迄權官玉串大内人大物忌父兄部冠衣賜之各手一端之後請取着用其後前石橋而禰宜詔刀申申今年六月廿日今時乎以小朝熊皇神乃廣前爾恐美恐美毛申久國々所々爾依奉郡神戸乃人等乃常毛進留由貴乃御酒御贄等乎如海山置所足弖奉狀乎平久安久聞食弖朝廷寶位無動常石堅石爾夜守日守仁護幸奉給比阿禮坐皇子達毛乎慈給比百官仕奉人等毛天下四方國乃人民乃作食留五穀乎豐饒爾惠幸給止恐美恐美毛申前乃皇神毛爾如此申弖進止詔其後歸著本座云々又彼社頭參祝等奉祭と有り斯れは此石疊に彼神を招奉て此を祭り然後其本社に就て被祭るなり此は彼穗落の故事に依て三節祭朝夕大御饌に功坐す神なり（倭姫命世記に云く垂仁天皇廿七年戊午秋九月鳥鳴聲高聞弖晝夜不止囂此異止宣弖大幡主命舍人紀麻呂良止差使遣令見彼鳥鳴處羅行見波島國伊雜方上葦原中有一稻一基生本波一基爾為弖末千穗茂生彼稻白眞名鶴咋持廻乍鳴支此見顯其鳥鳴聲止支止返事申支爾時倭姫命宣久恐志事不問奴鳥須良田作皇太神爾奉物乎止詔弖物忌令給弖彼稻伊佐波止美神乎為弖拔穗爾令拔弖皇太神御前懸久眞爾懸奉始弖則其稻大幡主女姫爾令酒作御饌奉始支千稅奉始事因此也彼稻生地千田號支在島國伊雜方上其處伊佐波登美之神宮造奉皇太神乃為攝宮伊雜宮此也其鶴眞鳥號止大歳神同處奉也又其神皇太神之坐朝熊河後之葦原中爾石爾弖坐此神小朝熊山峯社造奉祝令坐大歳神爾是也と有り此にて大歳社の伊雜と小朝熊と朝熊山の三所に在と分明なる者なり此より後に其山上なる社を小朝熊には祀れるなり尚下なる佐美長神社の下に云るを見べし）又儀式帳に云く以廿三日瀧原宮祭供奉

行事右宮祭波朝御饌夕御饌幷朝廷幣帛供奉告刀申中畢即直會被給儛仕奉月讀宮行事與同じと見え瀧原宮酒一缶贄一荷と所見たり此朝廷幣帛とは太神宮式に瀧原宮一座太神遙宮云々右新年月次等祭供之瀧原並宮一座太神遙宮在瀧原宮地内不レ預二月次一其宮別各内人二人其一人用二八位已上并蔭子孫一物忌父各一人と有る瀧原宮六月々次の幣帛なり神名式に度會郡瀧原宮大月次新嘗と有て並宮は載られず但瀧原宮に本より攝するが故なる可し儀式帳に瀧原宮一院伊勢志摩兩國堺大山中在太神宮以西相去九十二里稱二天照太神遙宮一御形鏡坐正殿一區長一丈五尺弘一丈高八尺御船殿一宇長一丈五尺弘四尺高六尺御床一具長八尺弘四尺厚二寸半瑞垣一重長廻十二丈高一丈御門一間長八尺高一丈玉垣一重長廻廿丈高九尺御倉一宇長一丈一尺弘九尺高八尺並宮一院正殿一區長一丈五尺弘一丈一尺高八尺御床一具長八尺廣四尺厚一寸半瑞垣一重長廻十二丈高一丈御門一間長八尺高一丈玉垣一重長廻廿丈高九尺と見えたり神名秘書に並宮一座瀧原並宮御形鏡如二瀧原宮儀式帳一者雖レ不レ載二御形一據二神宮本記一御鏡坐也と有り僣此瀧原宮並宮の太神宮の遙宮と爲り別宮に成れる其始は倭姫命世記に從二大川瀬一指二河上一幸行云々美地到給奴眞名胡神貢國名何問給支大河之瀧原之國止白支其處爾宇太之大宇禰奈乎爲天荒草令二苅掃一天宮造令坐支と有る此時の宮處を遺して太神の遙宮とは定奉給へるにて並宮も必此例なる可し世記及神宮の書共に右兩宮を速秋津日子神速秋津比賣神と爲るは其邊に鎭坐る緣などを以て附會せる也儀式帳太神宮式を以證と爲べし行事記に云く廿一日朝巡向神主爲二祭使一奉レ相二具官幣並御鎰一參二詣瀧原宮一今夜相可瀬館宿廿二日參宮廿三日曉申二行御祭一例也抑當月度六月六七神主九月度二三神主十二月度四五神主瀧原與二伊雜一年交所二參詣一也委者不記云々神事廿三日寅剋也役人等御饌進之後裝束之告參予時着二布袴一御火之後人相待而參進二一鳥居内着坐在二舗設一先手水在レ紙次内人御贄勤仕次玉串獻則取之事如レ常次瀧原御前之鳥居之外着坐有二舗設一又手水在レ紙次木綿麻獻則以二手着用如レ常于時役人給二御鎰一之後參二候瀧原御前一荷支御封等加判兩宮内人等給レ之御門開並宮亦同時同前于時御前之清薦敷而詔刀申度會乃河上乃瀧原村乃下津石根爾太宮柱太敷立旦高天原爾千木高知旦皇御孫命稱辭定奉留掛畏支瀧原宮止太神乃廣前爾恐美恐美毛申給久常毛奉留六月々次御幣帛乎皇太神宮禰宜位階姓名乗人乎差使旦天津詔刀乃太詔刀事乎以稱申事乃由乎内人物忌等諸聞食止詔給皇御孫命乃大命爾坐大

御壽乎手長御世止如ニ湯津石村ニ常磐堅磐爾伊波比與
佐志給比百官爾仕奉人等毛乎平久安久天下四方國乃百
姓乃作食留五穀豊稔爾恕幸給比八郡國々所々乃神戸
人等乃常毛奉仕荷前御調絲由貴乃御酒御贄等乎如ニ海
山置所足弖今年六月廿三日朝日乃豊榮登爾稱申事乃
由乎平久安久聞食止恐美恐美毛ニ申給久止申並宮爾毛如此申
弖進止禮詔給年號六月廿三日其後内人等兩宮同時御鎰
之御封開由申御戸開令ニ參昇ニ荷文荷前御調絲奉レ納
之後各御戸閇御鎰堅御封附而御戸納之由兩宮同時申
後拜八度手兩段之後蠶木綿解而並宮參奉レ拜之後又
鳥居前鋪設着坐于時役人等謌歌則於ニ瀧原御前清筵ニ
倭舞奉レ仕先内人勤レ之次祭使舞姫レ恒ニ角柏神酒預
其後神拜先瀧原次並宮次河島次長由氣次天若宮次下
向と有り十七日條に於ニ東寶殿之前ニ件赤良曳荷前御
調絲之内六所別宮並宮比矢乃波々木御料分進と有る
此を進るなり（此を以見るに並宮は此祭に就て祭らるゝなり右の巡囘神主は禰宜の中より祭使として交々參赴くと以云なり荷文とは進納の物の總目録を記して神宮司レ連署せるなり）又儀式帳に云く以廿五日
伊雜宮祭供奉行事右宮祭波朝御饌夕御饌并朝廷幣帛
供奉告刀申々畢直會儛等瀧原宮行事與同云々伊雜宮
酒一缶贄一荷と有り太神宮式に伊雜宮一座（太神遙宮在ニ志摩國）

（答志郡ニ去ニ太神宮南ニ八十三里）右新年神嘗等祭供レ之不レ預ニ月次ニ内人
二人（其一人用ニ八位以上幷蔭子孫ニ）物忌父一人と有て神名式には載ら
れずと雖も別宮の其一なり志摩國答志郡粟島坐伊射
波神社二座並大と有は別なり儀式帳に伊雜宮一院稱ニ天
照太神遙宮（御形鏡坐）正殿一區（長一丈五尺弘一丈二尺高八尺）御床一具瑞垣一
重（長八丈）御門一門（長七尺高九尺）玉垣一重（長十二尺高九尺）御門一間（高九尺弘八尺）幣
帛殿一間（長二丈四尺弘一丈六尺高八尺）御倉一宇（長一丈三尺弘一丈一尺高八尺）と見えた
り右本に御形鏡坐の四字脱たるを神名秘書及世記に
據て加へつ然るを右二書共に伴神天牟羅雲命裔天日
別命子玉柱屋姫命是也と有は佗事の混入たるなり儀
式帳太神宮式共に稱ニ天照太神遙宮ニと有ぞ正說なる
世記に垂仁天皇廿七年戊午秋九月鳥鳴聲高聞弖晝夜
不レ止囂此異止宣弖大幡主命舍人紀麻呂良止差使遣令
レ見ニ彼鳥鳴處ニ罷行見波島國伊雜方上葦原中在ニ稻一
基ニ生本波一基爾爲弖末千穗茂也彼白眞名鶴咋持廻
乍鳴支地見顯波其鳥鳴聲止止支返事申支爾時倭姫命宣
久恐志事不レ問奴鳥須良田作皇太神爾奉物止乎詔弖物忌
始給弖彼稻乎伊佐波登美神乎爲弖拔穗爾令レ拔弖皇
太神乃御前爾懸久眞爾懸奉始支則大幡主女子乙姫爾
清酒令レ作支千税奉始事因ニ玆也彼稻生地千田號支在ニ

鳥國伊雜方上ニ其處爾伊佐波登美之神宮造奉皇太神乃爲ニ攝宮ト伊雜宮此也と見えたり此事を本緣に伊雜宮皇太神遙宮云々依ニ神託ニ倭姬命使ニ伊佐波止美神造レ宮爲ニ皇太神之攝宮ト而崇ニ奉之ト と有は然る事なから玉柱屋姬命と爲るは僻事なり世記の文を熟考るに彼稻穗の瑞に依て皇太神の遙宮を造奉れりし狀なる者をや行事記に云く廿五日朝巡向神主爲ニ祭使ト奉ニ相ニ具宮幣並御鎰ヲ參ニ詣伊雜宮ニ有ニ宙立之饗膳ヲ臨ニ深更ニ所レ申ニ行祭ヲ也委不レ記云々御門開乎時於ニ石壺ニ詔刀讀進志摩國答志郡伊雜村乃下津石根爾大宮柱太敷立弖高天原爾千木高知弖皇御孫命稱辭定奉留掛畏伊雜皇太神乃廣前爾恐美恐美申給久常毛奉留六月々次御幣帛乎皇太神宮禰宜位姓名乎差使弖天津詔刀乃太詔刀事乎以稱申事乎內人物忌等諸聞食止詔給皇御孫命大命爾坐云々今年六月廿五日乃朝日乃豐榮登爾稱申事乃由乎平久安久聞食止恐美恐美毛申給止久申年號六月廿五日次御封開由申御戶開參昇而荷文荷前御調絲奉納之後御戶閉御鎰指固御封付退下而御戶納之由申子時拜八度手兩端次西方進大歲拜次本座歸著預ニ神酒ニ之後於ニ石壺ニ在ニ大和舞ニ一度舞レ之各如レ常次又

大歲拜其後退出云々（此詔刀に云々と云るは瀧原宮のと同じきが故に略なり又この文中に大歲日の事有り此は此に引る倭姬命世記に神宮造奉皇太神乃爲ニ攝宮ニと有に續きて彼鶴ノ島乎號ニ大歲ト同處ニ奉也と有る此社にて共に志摩國答志郡に在り此下に佐美長神社の事をいへるに合せ考ふ可し）又儀式帳以ニ廿五日ニ伊雜祭云々の文に續きて亦佐美長神社一處御前四社此三節祭使爾宛奉從ニ太神宮ニ供奉調度合十種但御饌稻波伊雜宮乃稻廿束下宛奉右神祭波一事以上伊雜宮祭與同供奉と有る是供奉調度合十種は同帳三節祭造備雜器事なる結机板机机代折櫃中折櫃魚机高机中取木杓匏交易土師雜器合て十種なれば此をいふ也右神祭波一事と有は伊雜宮と共に朝夕御饌を供進する由なるが伊雜宮の神稅を以供奉ると云るなり又同帳御裝束條伊雜宮云々の次に佐美長神社祭行事御饌稻廿束（從伊雜宮下宛事）木綿一斤麻一斤天枚瓮一口酒缶一口酒坏一口竈戶一口已上物從ニ太神宮ニ宛行と有は其に有べき文ならず必九月神嘗祭廿五日伊雜宮條に有しが錯亂たるにて此と同じ樣なり然るに佐美長神社所見無し強て思ふに此は必大歲神に坐り佐は苗を云ひ美は穗を云ひ長は其稻穗の豐饒なる狀を云るにて上に引る世記に在ニ稻一基ニ生本波一基爾爲弖末千穗茂也と有る此なり且佐美長神社一處御前四社と有て合ヽ五座なるも已に廿

日大歳神社祭條に云る如く朝熊社祭神五座の數に合ひ神鏡沙汰文に小朝熊社幷御前社と云るに合へるは決て同神なる證なり此に就て考るに世記に云々伊雜宮此也彼鶴眞鳥乎號二稱大歳神一同處祝奉と有は此佐美長神社を云なり又其神皇太神之坐朝熊河後之葦原中爾石亘爾坐と有は小朝熊神社にて廿日大歳神社祭と有は此なり又彼神小朝熊山嶺社造奉祝令レ坐大歳神止稱是也と有は小朝熊社神鏡沙汰文に抑當社幷御前社寶殿者共在二高山之上一と有にて朝熊神社此なり合せて三所共に大歳社と申す故は彼鶴眞鳥を祀れるにて主なり其餘四柱は御前社に坐神なる事上に云るが如し偖官より祭らせ給ふ所は其中に朝熊神社一座なりと雖も神宮の取行ひ獨小朝熊社を以爲るは共に同神に坐せばなり故此鶴は決めて大歳神の化れる所なる可し神宮の古傳に宇賀御魂大年神とも申て一神なるに山城風土記に稻荷社の事を秦公伊侶具積二稻梁一有二富裕一仍用レ餅爲レ的者化二成白鳥一飛翔居二山峯一遂爲レ社と有をも思ふ可く又山神の御族神等と共に坐事は御父須佐之男命大山津見神の御女神大市比賣命に娶て生坐る所なれば稻荷社にて宇迦之御魂神須佐之男命神大市比賣命相並坐るにも符へり偖其佐美長神社の事を行事記に考合するに右の伊雜宮祭條に于時拜八度手兩端次西方進大歳拜次本座歸着預二神酒一之後於二石壺一在二大和舞二一度舞レ之各如レ常次又大歳拜其後退出廿六日早旦大歳御前參神拜衣冠乘馬今朝直會饗膳云々件米殘飯炊レ之今朝飯殘其山中進持參役人在レ之一瓩相副と有る此廿五日のは伊雜宮の拜の序に西方に進み物爲るにて遙拜也廿六日早旦なるぞ其大歳社に詣て直に供御を進り拜奉れるにて是其祭には有ける右の儀式帳に伊雜宮祭與同供奉と有は其大歳神祭より外に思合す可き者無れば佐美長神とは大歳神なる事更に疑無る可き者なりかし

世記皇太神此遷幸條に二見瀆御船留給天皇時佐見都日女參相支云々從二其處一幸行亘五十鈴河後之江入坐支時佐美都日子參相支云々其處江社定給支と有は處も違ひ名も別なれば此の佐美長神社の事には非ず[illegible]此佐美都日子佐見日女は大歳神の夫婦にて稻穀の御功に依て負坐る御名にはあるべく儀式帳江神社の下に大歳御祖命又宇加乃御玉倭姫内親王定祝と有るを合考るに決く同神也又湯田社一處專ら鳴(ナル)震(イナ[illegible])(ツ[illegible])又大歳御社命云々と有る儀式帳も然なり湯田は忌[illegible]藤山[illegible]るに[illegible]は[illegible]にて大[illegible]の亦名なるなど此大歳御社の所々に多在に[illegible]御靈を高く貴く成奉給はむ恐き[illegible]太神の神[illegible]に成れるなり又神嘗祭[illegible]に佐々牟江社の事を云る[illegible]も思合す可き者なり　又行事記廿五日條に風日祈宮祭禮次第日祈內人長官[illegible]參詣刀荷文御封紙木綿麻請預又自二由貴殿一御鎰給[illegible]衣冠著經二中道一參二列廳舍一東上南向于時祇

承衣冠御火内人衣狩彼宮下部也于時出レ自二東間一參二向彼
宮一鳥居前列立北上西向于時役人御鹽湯獻之次御前參候
上于時日祈内人衣冠物忌衣狩木綿座獻如レ常各着用之後又
荷文御封自二一座一日祈内人給レ之後又禮如レ此次第畢
之後一座詔刀文獻レ之御門開于時御門前進參詔刀文
讀進レ之度會乃宇治乃五十鈴乃河上乃下津石根爾大宮
柱太敷立弖高天原爾千木高知弖皇御孫命稱辭定奉掛
畏支風日祈皇太神乃廣前爾恐美恐美毛申給久常毛奉六
月々次御幣帛乎皇太神爾宜云々年毎六月廿五日其後
御封開由申御斤開荷前御調糸荷文奉レ納之後御斤開
御饌堅而退下之後御封納之由申レ之于時各開手両端
奉レ拜之後豐木綿解起レ座鳥居前着座云于時大物忌父
兄部御歌奉仕無二御琴一二返于時一座御前半疊參進大和
舞如レ常各同前舞畢一兩警蹕一同一端之後退出と見
えたり抑風宮の御事は帳には四月御饌御笠を供奉
る神の中に風神社と見え式には七月日祈の所に風神
と有耳にして太神宮所管四十座の中にも入給はねば
況て神名式には有べくも非ずを儀式帳に日祈内人職掌
行事條に以二六月祭日之夕一御饌進時調宜宇治内人
共爲二惡風雨不レ吹祈申告刀申と見えたり月毎に四日年

中祈祈赤引調糸二絢神部度會郡右從二七月一日一始迄二八
月卅日一日祈内人申二惡風一天下百姓五穀助給止祈申
と記せり但此は四月例なるを混れたるなり尚又七月
例に以二朔日受司幣帛一祈二日中行事右禰宜率二日祈内
人一月一日起盡二卅日一朝夕風雨旱災爲レ止祈申と見え八
月例に祈二八月風雨一幣帛絹二丈五尺麻八斤大木綿八
斤大以上禰宜舉二風日祈内人一爲二風雨災鎭一祈申と見
えたり尤太神宮式に凡毎年七月日祈内人爲レ祈二平風
雨一所須絹四丈太神宮五尺度會宮五尺荒祭宮月讀宮荒御玉伊佐奈伎伊佐奈彌瀧原小朝熊多賀久具風神已上十座各三尺木綿麻十五斤五兩六分太神宮三斤度會宮二斤十座神四斤度會宮神四十座六斤五兩六分各二兩二分並神宮司充レ之と有て風神を限て祭るには非れ
ども此神を祭らるゝに就て其餘神をも祭らるゝなり
此を以て此神の重き御事知れたり雜例集にも四月四
日風日祈祭事云々十四日内宮風御社祭事日祈内人申二詔刀一七月
四日風日祈祭事云々次風宮祭直會事と見ゆ但此時未
宮號ならざるは其より以前の書なるが故なり偖上の
詔刀文に風日祈皇太神と有る皇字は如何なれども後
に風日祈宮などゝ受張る稱號有る此神を主と崇奉
て祈申さるゝ事廣瀬龍田神祭に於るが如し世記に風
神社志那都比古神と有は然る事なり彼神代紀に生二

日神號大日孁貴此子光華明彩照徹於六合之內云々故以天柱擧於天上也と有る此御由縁を以て殊に皇太神と此風神とは親昵しく御在す事弟五詞幷風神祭詞の下に註るが如し宮號を進せられて別宮と定奉る事は彼蒙古襲來の御祈の御加護に依れり度會元長の神祇百首自注に初は社にて坐けるが弘安年中に勅使を被下御宮號を風宮と申奉りき此宮に風日祈とて神態有り云々と云るが如し然るを此建久行事記に風宮とも風日祈宮とも記せるは一禰宜氏經神主寛正五年に當時の作法を加記さるゝとして改物爲られたるなり 按又儀式帳四月十四日以御笠縫内人造奉御蓑廿二領御笠廿二蓋即散用太神宮三具云々風神社一具云々と有て式の此祭條には此神は漏給へれども雜例集に四月十四日二宮供御笠事云々内宮風御社祭事日祈内人申詔刀と見えたれは神宮にては儀式帳の如く被行しなり按此御笠神事は風日祈の神事なり其は行事記に十四日風日祈宮祭禮號御笠神事と有て皇太神を始奉て別宮攝社をも共に被祭る事なれども元來風神祭を主と立て其幣帛の佗神に及べる者なりけり

度會乃宇治五十鈴乃川上爾太宮柱太敷立天高天原爾千木高知天稱辭竟奉留天照坐皇太神乃大前爾申進留天津祝詞乃太祝詞乎神主部物忌等諸聞食止宣 禰宜內人等共稱唯

此詞は上なる二□祈年六月十二月々次祭詞を御使の中臣申畢て後に太神宮司の宣る所なり此を宮司より神主部物忌等に宣聞すれば此に於て稱唯有て共々に皇太神の大前に其天津祝詞乃太祝詞を申なり此詞を宣畢へ其幣帛を進納め然後に齋內親王幷衆官以下再拜拍八開手次拍短手再拜如此兩遍と有は唯〔一〕拜奉る耳ならず其祝詞を申す心得なる事云も更也若其然らずと爲は太神宮に向て申す詞に禰宜內人等稱唯と有を如何に云解むとか爲る 式に先徒中臣申詔刀次宮司宣祝詞と書別られたるも此差異有を以なり然れども延曆儀式帳には內外宮共に太神宮司の告刀を申と有て宣とは無し ○天津祝詞乃大祝詞とは次なる御壽乎手長乃御壽止湯津如磐村云々以下の文を云也 中進留とは此を云なり神嘗祭條云るが如し 但其眞の天津祝詞は此に非ず其は上なる六月々次祭詞諦しく此なり其は高天原爾神留坐皇睦神漏伎命神漏美命以は其天津祝詞を云むと爲る序にて其以下の詞に總て係る言なれは辭別伊勢爾坐天照太御神乃大前爾白久云々の上にも冠る事著明し其は其詞の終に云々故皇吾睦神漏伎命神漏美命登鵜自物頸根衝拔氐皇御孫命乃宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉と有れば其中間に在るぞ神漏伎神漏美の御命にて所謂る天津祝詞乃太祝詞には有ける 此事は已に祈年祭詞同第三詞第五詞の下に褻雕しき迄も委しく辨へたりき 然れば此は延曆よりは

後延喜よりは前の頃に使中臣と太神宮司と二方にて申す御定と成れる頃ほひに其古き月次祭詞より取て其詞は當時の文に換作も其意を存して天津祝詞とは云るなり朝廷にて宣る所は古くして神宮にて申す詞の今めかしきは如何と云に神宮にてこそは御使と宮司に職掌は別れたれ朝廷にては唯其御使耳に令せ給ふ事なる故に古きを用ひて事足れゝはなり（如此く古言と云へども其時せに隨て訓の改るは譬へば萬葉一卷なる藤原宮御宇天皇御製歌春過而夏來良之白妙能衣乾有天之香來山と有を新古今集夏部に春過て夏來にけらし白妙の衣干すてふ天の香具山と少異出來る如く其意は存しながら其詞も體も別歌の如くなる例なり古人の歌すら如此し詔刀は今神に向て其事實を申事なる故に宣る人も申す人も心に落着む事を專と爲るが故に異れるなり然れど其は本より諾なる事には非るぞかし）今此詞の古祝詞より出たる由を徵す可し天皇我御命爾坐御壽乎手長乃御壽止湯津如磐村常磐堅磐爾伊賀志御世爾幸倍給比阿禮坐皇子等乎母惠給比百官人等天下四方國能百姓爾至萬天云々は古祝詞に皇御孫命御世乎手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉茂御世爾幸閇奉と有て簡易なるを云延たるなり又此に天下四方國能百姓爾至萬天長平久作食留五穀乎毛豐爾令榮給比護惠比幸倍給云々と有は古祝詞に皇神乃見霽志坐四方國者云々狹國者廣久峻國者平久遠國者八十綱打掛氐引寄如事皇太御神能寄奉波と有を約たる成が此には古きは貢調の豐饒ならむ事を云て五穀の豐（ヨクミノ）祭らむ由を祈申し今のは五穀の豐登らむ事を云て貢調の豐饒ならむ事に云る其極は同じきに至ると雖も此計の異は有なり（如此く文には精粗も有る事なれども其統一なるが故に其義相同じき者なり）偖右の古祝詞は高天原に神留坐す神漏岐神漏美命以て皇御孫命に事依し授奉給へる天津祝詞乃太祝詞なるを高千穗宮より以來磯城瑞垣宮に至る迄皇太神の皇御孫命と同大殿の內に鎭坐りし間も此を用ひさせ給ひ來れるを伊勢に鎭定り給ひ三節祭の神事定りて後も尙天上の儀を改易させ給ふ事無して用ひ來る所なり其は倭姬命世記に亦年中雜神態三節祭定賜御贄島爾神主等罷御贄漁天島國々前潛女取奉玉貫鮑鷄倉樋栖島神戸進堅魚等御贄國々處々寄奉神戸人民乃奉留大神酒御贄荷前等遠如海山久置所足天神主部物忌等忌愼天聖朝大御壽乎手長之大壽止湯津如石村久常磐爾堅磐爾天津告刀乃太告刀事乎以天稱申終夜宴樂舞詠歌音乃巨細大小長短久國保侍奉（十二詠在別卷云々）と有る此は後の狀なれども其古き天津祝詞を用ひさせ給へる據なり然れども此詞出來て後は此詞に因准ひ改るは常の事にて譬へば古書の文法日本紀に改れる後は其よ

り古きも猶其に因准ふが如し所以に儀式帳の如きも此詞及世記と同じ状にて此事を聖朝大御壽乎手長乃大壽止湯津如ニ石村ニ久堅ニ有爾常石爾伊波比與佐志給比伊加志御世爾佐岐波閉給比阿禮坐皇子等乃大御壽乎慈比給比百官仕奉人等天下四方國乃人夫爾至萬天長平久作給倍留五穀物乎慈備給部止朝夕祈申と有など本は一の天津祝詞ながら其の世を免るゝ事を得ざるなり又雜例集に引る大同本記にも天皇乃延常石堅石爾護幸奉賜比百官爾仕奉人及天下四方國人民乎爾惠給止申拜奉云々と其同じ事ながら云樣の種々に成れるなり ○神主部は禰宜は更なり內人物忌共に荒木田氏なる部を云ふなり下に禰宜內人等共稱唯テラシアハと有を照應せて曉る可し然れは物忌にて神主姓なるは上の二に屬る者なり所以に稱唯せざるにや有む禰宜、神主と內人神主と物忌神主三種有が故に部と云り部は其群を云ふ儀式帳に禰宜一人大內人三烟物忌十一烟と有り太神宮式には禰宜一人從七位官大內人四人物忌九人童男一人童女八人父九人に內人九人と有て其より次々多く成て今は太神宮の禰宜已に十員に至れり委しくは太神宮例文を引て下に云り後紀大同三年九月條に伊勢太神宮度會二宮大內人各三人と有り儀式帳の數に同じ 但禰宜內人等は職名にて神主は朝臣宿禰等の姓の如し皇太神にては荒木田氏の人々悉く神主なり其は儀式帳に禰宜大初位上神主公成內人外正八位上荒木田神主家守內人無位神主廣山等有り禰宜內人ならぬも荒木田氏の人は神主姓にて大物忌無位に清女父無位同黒成御鹽燒物忌無位神主稻自女父從八位上神主牛食日祈內人無位神主宮守など有て姓を記さずして神主某と云るは皆其同氏なり度會宮の禰宜も然にて度會氏の人は神主某と云ふ姓を云ざるは儀式帳の文法なるなり ○物忌等

物忌の事は雜例集なる大同本記皇太神宮御鎮座條に大若子命乎大神主止定給天其女子兒比女乎物忌定給天宮內爾御饌殿乎造立天其殿爾爲天拔穗田稻乎令ニ拔穗拔ニ天大物忌大宇禰奈止共爲天令ニ舂炊ニ供奉始支云々自爾以來大神主爾仕奉氏人等以ヨ女子乃未ニ夫婚ニ物忌止爲天令ニ仕奉ニと有が如し未幼少なるを以て其父も共に仕奉るなり故此は物忌子と父とを合せて云ふ儀式帳に載る所大物忌大物忌父宮守物忌宮守物忌父地祭物忌地祭物忌父酒作物忌酒作物忌父清酒作物忌清酒作物忌父瀧祭物忌瀧祭物忌父御鹽燒物忌御鹽燒物忌父土師器作物忌土師器作物忌父山向物忌山向物忌父と有る物忌と其父となるが此中に宮守物忌と山向物忌と二員は男なるゝ其餘は皆女なり太神宮式に在る如く何れも童男童女なるが故に其父も共に相

副て同じ職掌に仕奉るなり太神宮式に物忌父死者目子解任子死者父亦解任並非復任之限と有りて父子相共に仕奉る例なるなり後には此を子良と云ひ其忌館を子良館と云り（建久行事記に見たり借物の両忌合せて九人父九人にては其の内には含へれども童男一人なる可きを二人有り童女八人なる可きを七人なり）借物忌とは廣瀬大忌祭條に云る如く神を祭るとして供進る御饌以下の物を齋清め作り供奉るの職なり世記に倭姬命宣久恐志事不問奴鳥須良田作皇太神爾奉物乎詔弖物忌始給弖彼稻云々皇太神御前懸久眞爾懸奉始云々乙姬爾清酒令レ作御饗奉始支と有を以て其義を知べし借物忌と定れる職は彼比禮懸伴緒の如し然れは皇太神の皇太宮に坐し頃は其比禮懸伴緒で仕奉りけむを御許を離れ奉て後は別に物忌を定られたるなり倭姬命世記に崇神天皇五十四年丁丑遷二吉備名方濱宮一四年奉レ齋于時吉備國造進二采女吉備都比賣一と見え六十年癸未遷二于大和國宇多秋篠宮一積二四箇年一之間奉レ齋于時倭國造進二采女香刀比賣地口御田一と有る采女は比禮懸伴緒なる事已に大殿祭詞別に云る其即物忌なる證は同記右の續きに於レ此倭姬命乃御夢爾高天之原爾坐弖我見之國爾吾乎令レ坐奉止悟敎給支從レ此東爾向而乞宇氣比止詔久我悉刺弖往處吉有奈良波未レ嫁レ夫童女相止祈禱幸行爾時佐々波多我門爾童女參相則問給久汝誰答曰奴孫者天見通命之孫八坂支刀部（一名伊已呂比命）之兒宇太乃大采禰奈支白支亦詔二日御共爾仕奉哉一答二日仕奉一即御共爾從奉仕件童女乎大物忌止定給比氐天之磐戸乃鑰領給弖無二黑心一志弖以二丹心一天清潔久齋愼美左物乎不レ移右須右物乎不レ移左弖志左レ左右レ右左返右廻事毛萬事違事無志弖大神奉仕留元レ元本レ本之故也又弟大荒命同奉仕從二宇多秋篠宮一幸行而佐々波多宮坐焉と見えたる（儀式帳大物忌條に天照太神朝夕御饌供奉此初太神乎頂奉レ齋倭姬內親王[illegible]延還參上時爾今[illegible]宜神主公成[illegible]先祖天見通命乃孫川姬命倭姬乃御代仁大物忌爾弖以二川姬命一大物忌乎令二傳奉一弖從二其時一始太神乎專手附奉弖傳奉仕レ從齋內親王大物忌於二太神一傳奉晝夜不レ避從二今世一[illegible]と有り此を倭姬命の[illegible]上坐時より代奉る事なるには誤傳なる可し大同本記に皇太神宮倭姬命奉レ齋云々大物忌大宇禰奈云々有とれば此世記の傳の如く大和より仕奉れる事次し）此大采女禰奈は大采女と云事にて髫髮なるを大物忌に定させ給へる者なり雜例集なる大同本記に大物忌大宇禰奈と云り是を以て彼此と相同じきを曉る可し右件國造の女を以て采刀に奉る例は止由氣宮の與佐に坐し頃ほひは道主命の御女物忌と爲て仕奉られしに等し此等を對考て采女物忌相分れざるを思ふ可し然りと雖も朝廷神宮別々に成り神物官物相分れたる後は物忌に非ず神宮

のは釆女に非るなり 然れば神宮の物忌は朝廷にて釆女なるを其形容を以云と其所作を以て呼との異有が故に各々別々なるが如く成れる也立復りて大殿祭詞別なる比禮懸件緒の注を讀味はへて其然る所以を知るべき也又皇太神尾張國中島宮に坐時釆女忍比賣を奉る事を載たり此土師器作物忌麻續部氏の祖也なる尾張神戸の所に云る事を思合す可し ○諸聞食止宣は太神宮司なる人朝廷の大御命を受賜はりて其天津祝詞を自も此を申て進り又神主部物忌等にも令ニ傳申一る由なり 宣は俗に申聞ける申渡するなどの意なる事已に祈年祭條下委く云り 偖此太神宮司は京より任され下りて二所太神宮の神封神戸を奉行し禰宜以下の衆官を進退する職掌なり太神宮式に凡二所太神宮禰宜大内人以下 禰宜職事大内人以下番上 考文者宮司勘造九月廿五日以前進ニ神祇官一と有を以知べし偖太神宮司は餘社の宮司の列に非ず同式に凡太神宮司二員大宮司一員正六位官少宮司一員正七位上官其季祿以ニ神税一給レ之云々凡太神宮司者准ニ國司交替一給ニ稻一千束一毎年賜絹五十疋米一百斛 若任ニ權司一者以ニ件絹米一内平均充レ之 と有て太神宮司權太宮司少宮司等なり 雜例集行事記を始め諸書に神主等連署せるには大司權大司少司と有り臨時祭式に凡諸神宮司未レ滿ニ六年一遭喪服任不レ得ニ補替一令ニ祝部行事一服闋之日滿限云々と有れば六年を限る御定なり 凡三箇神郡幷六處神戸及諸國神戸調庸田租者依ニ國司所移之調文租帳等一宮司勘納云々凡三箇神郡校班損不堪田及計帳疫死等政宮司與ニ國司一共行レ之を有は類史に弘仁八年十二月庚辰伊勢國多氣度會二郡雜務悉預ニ太神宮司一交替付領一同ニ國司一以ニ國司一不レ獲レ行ニ決罰一也と有る御定に依れり又凡神祇官等無ニ祭主署一者神宮司等不レ得ニ奉行一云々凡三神郡神社溝池堰驛家官舍若致破損及桑漆等不ニ催殖一者拘ニ宮司解由一凡齋宮寮官舍者預ニ太神宮司一と見え又雜例集に載る弘仁十二年八月廿二日格に令ニ伊勢太神宮司撿ニ納神郡田租一と有り是職掌の較畧なるか凡ての趣國司に異ならず偖此宮司を所置たる始二所太神宮例文 大宮司次第 に第一中臣香積(ヤメ)連須氣孝德天皇御世任と有れば此御世に國造を罷て國司を所置たれば國司と宮司を任給へるなり但此時督造(カミノミヤツコ) 助造(スケノミヤツコ)とも督(カミスケノ)領助(チサ)督とも云て大凡令條の守介等の如くなりしなり 其は儀式帳に難波長柄朝廷御時仁初太神宮司所レ稱神庤司中臣香積連須氣仕奉支是人時仁度會山田原造ニ御厨一弖號ニ神庤止云名一號ニ御厨一即號ニ太神宮司一支と有にて著明し 偖伊勢國造は國造本紀に橿原朝以ニ天降天牟羅雲命孫天日別命一勅定ニ賜國造一と有て度會神主の遠祖なり世記に垂仁天皇十四年乙巳遷ニ幸于伊勢國一桑名野代宮四年奉レ齋于時國造大若子命 一名大幡主命 參相御供仕奉國内風俗令レ申支と有て此時より仕奉初て有けるを皇太神の鎭り定り給へる件の大幡主命神國造兼大神主定賜支神館造立物部八十

友諸人等攣雜神事取總捧ニ太玉串供奉と有を以見ればば國造にて大神主を兼たる故に全く大宮司の狀なるを孝德天皇の御世に至て國造の職を停られし故に終に度會神主とは成て國內の政務は國司此を統領し神宮の管領は宮司此を奉行る事とは成れるなり雜例集に又云難波長柄豐前宮御世立レ郡時爾以ニ己酉年一始立ニ度相郡一以ニ神主奈波一任ニ督造一以ニ神主針間一任ニ助造一皆是大幡主命末葉度會神主先祖也と有る此に至て督造助造の出來れるは全く國司の狀なるを思ふ可し但此大神主の事を又其下に豐受宮鎭座條に又依ニ勅宣一以ニ大佐々命一兼ニ行二所太神宮大神主職一仕奉と有て詔刀師沙汰文にも雄略天皇卽位廿一年丁巳依ニ內宮御託宣一明年戊午秋七月從ニ丹後國與佐郡一被レ奉レ迎ニ豐受太神一之時大佐々命爲ニ御使一奉ニ布理一御ニ鎭座山田原一後大佐々命爲ニ大神主一兼ニ二宮一奉レ仕と見えたり大同本記にも皇大神宮倭姬命載奉天五十鈴宮令ニ入坐々鎭理給時爾大若子命乎大神主止定給と有れば雖に垂仁天皇御世の事なるなり二所太神宮例文一員禰宜補任次第に天武天皇元年停ニ大神主一始被レ置ニ禰宜職一志己夫初レ之也と有り志己夫は大神主吉田の三男にて度會神主の遠祖なり然れば孝德天皇御世に國造は停止られ年も大神主の職は傳られしなり雜事記聖武天皇條にも度會郡大領神主乙丸と有て其頃尙彼氏人を以て郡司には補せられしなり　○祭主は太神宮司の上に在り太神宮式に凡太神宮司云々初到レ任年給ニ稻一千束一云々中臣任ニ祭主一者給ニ稻一萬束一と見え太神宮司は正六位上なるを祭主は其年中四箇度使祭主供レ之若有レ故者取ニ云々中臣氏五位已上一充レ之と見え又凡神祇官符無ニ祭主署一者神宮司等不レ得ニ奉行一と有る如く其任重き事宜に宮司に超たり二所太神宮例文祭主次第に第一御食子大連公天兒屋根命廿一世孫推古天皇元年任と有て此其權興なりと雖も其より京官にて任給へるこそは有め尙古かりけり雜事記に景行天皇卽位三年癸酉始令レ祀ニ神祇一仍定ニ置祭官職一人一今號祭主是也と見えたり此事色葉字類抄祭主條に記云とて引り此を倭姬命世記に稽るに垂仁天皇廿六年皇太神御鎭座の事を倭姬命より奏上給へる件に爾時天皇聞食ニ即大鹿島命祭官爾定給支大幡主命神國造兼大神主定賜支と有り然るを儀式帳には同じ此時の事を爾時大神宮禰宜氏荒木田神主等遠祖國摩大鹿島命孫天見通命乎禰宜定ニ倭姬內親王朝廷爾參上坐天自ニ此時一始ニ禰宜氏無ニ絕事一ニ職掌供奉と見えたり然れども此時に未禰宜の號非れば後號を前に及ぼして記せるなり倭姬內親王朝廷參上坐支と有は景行天皇御世に五百野皇女に齋宮の御職を讓給へるこそは有けれ伊勢に留坐し事已に古事記景行天皇段に倭建命太神宮に拜向はせ給ふ時御姨比賣命に見え奉給へるにて著明し凡て儀式帳には後より前に及ぼせる事多かり倭姬命を內親王と記し祭官を禰宜と記せる如き事甚多なりその心して見べし雜例集に垂仁天皇卽位廿五年丙辰歲五十鈴宮爾鎭御于時國摩大鹿島命天兒屋命十世孫中臣遠祖天見通命天兒屋根命十二世孫荒木田神主遠祖大若子命天牟羅雲命七世孫度度會神主遠祖御共供奉と有は事は委からねども右の書

共に據に大鹿島命は祭官に供奉り天見通命も同じく祭官と爲て供奉り大若子命は國造にて神主を兼仕奉れりし也（例文に天見通命天見屋根命十一世孫大狹山命子と有り然れば其中に大狹山命は京に留居て仕奉られたる也）斯れば荒木田氏其祭官の職を傳たりし事著明し是以て思ふに大鹿島命の職を天見通命に授けて京に上り給ひ見通命より始て其家の職掌定れるを以て景行天皇御代に此職を置とは云る也然れ共後の御定の如くに祭主宮司禰宜內人などゝ際々しく判れたるには非れ共荒木田の遠祖は度會の遠祖の上に在て世々仕奉り來りし故に其職掌自然に後の祭主の如くなりしを推古天皇御世より祭官を京にて任れし故に其職雖に太神宮の神主とは喚れりし也（予が說の如くならざる時は度會の遠祖は二所太神宮の大神主を兼行たれば荒木田は畢竟（ツマリ）其下風に立るが如く成て事に打合ざるなり）其より以降祭主職は御食子大連公の子孫の中臣にて亞りしを意美麻呂に至て始爲二祭主一改二祭官字一爲レ主者也と例文に見えたり○禰宜內宮は荒木田外宮は度會の氏人なり其荒木田は天見通命の裔度會は大若子命の裔なりけるが垂仁天皇御世より雄略天皇御世迄の間二氏の遠祖相並で仕奉れりけるを豐受宮御遷座の後は神代水取の由緣に依て大若子命の裔大佐々命丹波國より布理奉

し由に緣て始て豐受宮の大神主にして二宮を兼仕奉れりしかば禰宜志巳夫の代迄然有けむ彼例文に天武天皇元年停二大神主一始被レ置二禰宜職一志巳夫初レ之也と有れば此時よりぞ度會の氏人は全く豐受宮の禰宜に定れりける荒木田は始より太神宮の神主たりしかば然る沿革の論は非りけらし（度會氏の事は上なる太宮司の下に委しく云り例文に叫レ定二置禰宜職一始飛鳥淨御原宮御宇以後或本宮舉奏レ之或以自解と有を以見れば當時已く荒木田度會二氏の中快からざりし故に此を奏し上て兩宮と二方に別仕奉れるゝなめり）彼天見通命の事を儀式帳以下の諸書に垂仁天皇御世に禰宜に任れたる由なれど其は後の稱を上に及ぼして記せるなれば據難かり然れども其職掌後の禰宜なりしなり彼遠祖大鹿島命祭官（マツリノツカサ）と爲て仕奉られし其職を傳承て天見通命より以來仕奉り來れるを推古天皇御世より祭官の職は京官の中臣に移れり其は荒木田黑人の代なり例文（荒木田遠祖奉仕次第）に荒木田神主首麻呂黑人子賜二神主姓一齋明天皇御世奉仕と有ればば其頃より始て神主の姓なり此故を以て荒木田の氏人は禰宜ならぬ內人物忌に至迄皆共に神主姓なる事豐受宮にて度會氏の凡て神主姓なるに同じ天武天皇御世に至て始て禰宜の號有れども職掌の改革れるには非ず其稱呼の異なる耳なり（神主（ウシ）とは皇太神宮に仕奉る人十人の主と云事禰宜とは皇太

神宮に仕奉て朝廷より御進せらるゝに御祈事も願仕奉る由なり後に詔刀師などの出來れるに同き也 祝詞考に太神宮式に凡二所太神宮各禰宜番大內人每旬寄物忌父并小內人戶人等分番宿直と有り禰宜は職事內人は番上なりと有り儀式帳年中行事并月記事なる每月朔日條に宮守護奉宿直歷名進宮司番畢事申宮司禰宜長上番上宿直人大內人一人番長諸內人六人戶口三人中番下番宿直並如上番皆以十日為一番仕奉如件と有て荒祭宮以下別宮には以十五日為一番と有り止由氣宮儀式帳にも此事有り以十箇日為一番宮守護宿直仕奉と有り旬とは朔日十一日廿一日也儀式祀典式天皇條に宮宜長番直日長番之上企守六色之忌云々とあり 太神宮式に太神宮禰宜一人從七位官度會宮禰宜一人從八位官と有事なれ共恩詔有て次第に加級すれば五位にも至るめり太神宮并豐受宮禰宜帶五位者位祿同○今云司寺太神宮司也以神税給之資人以神部人補之と有り又凡禰宜內人神部祝等恩詔位記者式部省錄數送於神祇官官則付四度祭使下之使等神祇官史一人先申叙位之由即就直會院第一殿南面坐以位記置案上喚名給殿前南向喚之名了宜內人共東面退行訖則奉拜太神拍手兩段次北向朝拜但度會宮西向行事餘儀同太神宮其禰宜給五位々記者於中重給之と有り中重は外玉垣御門內を云ふ凡二宮太神宮神部禰宜大內人以下考文者宮司勘九月廿五日以前進神祇官々則押署進太政官乃移式部省と有て大宮司其勤勞を勘造して官に進らするを云なり 儀式帳延喜式に至る迄二所太神宮共に禰宜一人なりと雖も今現に內宮に十員外宮に七員なるは次々加はれるなり太神宮例文に二員禰宜一禰宜行眞以後 興忠村上天皇應和元年十月廿四日加補二員三員禰宜以後茂忠 秋眞圓融天皇天延二年二月五日加補三員四員禰宜以後氏長 厚賴一條天皇正曆五年十二月十一日加補四員五員禰宜以後重頼 顯光同天皇寬弘三年六月十一日任六員禰宜三禰宜重頼以後 同天皇寬弘三年六月十六日任七員禰宜以後二貫定 貴岐天皇保延元年六月八日加任八員禰宜以後守定 懷成天皇承久三年三月廿三日加任九員禰宜以後八忠世 後二條天皇嘉元二年十月十八日任十員禰宜以後八忠世 泰定同天皇嘉元三年十月日加任と有て十員の數此時に成れり其より以來位階も次々に高く成て今世の狀なり度會宮も大旨此に同じ但少宛の前後は有なり例文にては十員なれども今現に七員なるは其後に被減たるなる可し○內人等太神宮式に大內人四人小內人九人と有る此なり荒木田宇治二氏を以て補せらるゝ定りなり齋宮式正月拜賀條には內舍人と云るは小內人の事なり其中に玉串大內人は宇治土公の家の職掌と為て世々仕奉り來る所にて此始なる可く思えたり偖玉串大內人其姓は磯部なり姓氏錄に右邊公大物主命子久

斯比賀多命之後也と有て其族なり其は世記に垂仁天皇十四年遷ニ幸于伊勢國ニ桑名野代宮四年奉レ齋十時國造大若子命（一名大幡主命）參相御供仕奉又國造建日方命參相支汝國名何問給答曰神風伊勢國止白弖進ニ舍人弟伊爾方命又地口神田並神戸ニと見えたる是始なり伊爾方と云語非れば伊志部ならむと所思えたり地神本紀に素盞嗚尊四世孫健飯勝命と有は決く此建日方命なり然ならむと所思る由は其五世孫健甕尻命の下に此命伊勢播主女賀具呂姫爲レ妻と見えたる播主は此大幡主命に坐せばなり但其境に入坐し故に其共に其國造等參迎奉られしなり是より其建飯勝命の弟伊爾方命を舍人と爲て仕奉らしめたるにて此内人の始なり下に云を見べし（度會神主氏本系帳に彦久良爲命子大若子命一名大幡主命と有り大幡主命健飯勝命と其同時なるを思ふ可し備大幡主命レ領ける地は今の度會田の邊より度會の方を係たるなる可し其は大若子命爾汝國名何問賜白久百張蘇我乃國五百枝刺竹田之國止白支其處御杖代給支其處乎竹田止給十田社定賜支と有を始め其より五十鈴宮に至る迄の地名大凡は此命に間定め給へばなり）同記廿五年の下に家田々上宮遷奉支云々五十鈴河後江爾天奉ニ御饗ニ于時猿田彦神裔宇治土公祖參相支汝國名何問給爾佐古久志呂宇遲之國止白弖御止代神田進支倭姬命問給久有ニ吉宮處ニ哉答白久佐古久志呂宇遲之五十鈴之河上者是大日本之國之中爾殊勝靈地侍奈利其中翁世八萬歲之間仁毛未ニ視知ニ留有ニ靈物ニ照曜如ニ日月ニ惟少縁之物爾不レ在支定主出現御坐爾時可レ獻止念弖比彼處爾禮祭申世利即彼處爾往到御覽波介禮惟昔太神誓願給天比豐葦原瑞穗國之內爾伊勢加佐波夜之國波有ニ美宮地ニ止利見定給比從ニ上天ニ天志投降給比天之逆太刀逆鋒金鈴等也甚喜懷弖比言上給支比と有る此事を儀式帳に次百船乎度會國佐古久志呂宇治家田々上宮坐支爾時宇治大內人仕奉ト宇治土公遠祖大田命乎汝國名何問賜支白久百船乎度會國是河名波佐古久志留伊須々乃川上止申須是川上好大宮地在申云々と有る此方正しく有て世記なるは疑しきに似たれども然らず古語拾遺に泊于卷向珠城朝ニ皇女倭姬命ニ奉ニ齋天照太神ニ仍隨ニ神敎ニ立ニ其祠於伊勢國五十鈴川上ニ云々始在ニ天上ニ預結ニ幽契ニ衢神先降深有レ以矣と有る其事の較略なるが故に世記の傳の棄難きなり借其衢神とは猿田彦神に坐し大田命は其子に坐せば皇太神の遷幸む期を此に待奉りし者なりけり（又此世記の傳を掠めて杜撰ける妄説を傳記及本緣等に載たり欺るゝ事勿れ又有の二書共に猿田彦命と大田命を打混らして猿長ト之猿田彦大神齋內親王神主部物忌等訓悟白云々吾是天下之土君也故號國底立神也吾是爲レ時從レ機比化生出現之故號ニ氣神ニ吾亦根國底國與利麁備來物爾相牽守護之故名ニ鬼神ニ吾復爲ニ生氣ニ仁授ニ與壽福ニ之故名ニ大田神ニ吾能返ニ魂魄ニ之故號ニ興玉神ニ云々と有る悉く妄説なり事の因に辯すはあるべ

からず一に吾是天下之土也と云事心得ず此神宇治の地主神なる故
に其裔の姓に宇治土公と負るにて此神に預る事には非ず且國之底立
神は國之常立神なるを附會せる事甚きなり二に應時從機云々は全
く意なり且音の穢と謂の氣とを打混らしたるは拙し三に根國底國
與利云々は此を書紀拾遺共に衢神と有る其は天八衢にて皇太神皇御
孫命を待迎奉られたる時の事に就て云るにこそ有れ道路の衢を守る
神ならぬを此は道饗祭詞を牽強て謂たり又鬼神と云り如何四に太田
命は其子に坐を亦名に定たる妄也五に興玉神は宮比矢乃波々木神
を鎮めたるを招魂の山に取たるは如何成僻事ぞや此猿田彦神の事は
俗神道者流此欺託宣を祖述して種々に杜撰れる妄說少からず取に足
ざる事ながら
其用心有べし

偖其猿田彦神と申すは卷三（祈年太神宮條）に委し
く正し辨たる如く事代主命に坐し大田命と申すは事
代主命三島溝抗女活玉依姫に通ひて令生給る天日方
奇日方命に坐て神武天皇の大后五十鈴姫命綏靖天
皇の皇后五十鈴依姫命の御兄に坐り皇太神此國に鎮
坐す頃は其子健飯勝命此國造たりしかど未長存御在
しゝか又は幽界より太神の鎮坐む爲に現給ひ其大宮
地を示導給ひて隱り給ひしにも有べし（此委しき由は卷三に云れば見合す可し今此に降る時は褻雜しく成る故に漏しつ猿田彦神の狹長田五十鈴の川上に皇太神を待奉給へる幽契其御女に五十鈴依姫命と其地名を負たるが二柱坐るなど甚々憶なり）然れば宇治土公の祖は諸書に大
田命と記せれ共建日方命の弟伊爾方命（イシベ）ぞ始なるべき
此命は地神本紀に稽るに天日方奇日方命の子健飯勝
命の弟健甕尻命の叔父也桑名野代宮より大若子命乙
若子命と共に伊爾方命も御供に仕奉られたれば伊爾
方命ぞ宇治土公の始祖なりける（地神本紀に伊爾方命の名の脫たるは賀茂君大神君等の
正統を立て庶流の方は省ける者也）然れば姓氏錄なる石邊公は伊爾方命其
出自にて即其名の姓とは成れるなり若て姓の石邊は
五十鈴宮を磯宮と云ふ其より出たりと所思ゆ又雜例
集に飯野郡磯部河有れ共此姓に負るは五十鈴川なり
然れども共に此氏の出自たる處なり然れば彼左京神
別山城國神別なる石邊公は伊勢の磯部の支流なる事
著明し續紀に和銅四年三月辛亥伊勢國人磯部祖父高
志二人賜二姓渡相神主一と有て神主姓なるも有なり
けり但此は內宮の磯部より支流たるなンめり（儀式帳を閱るに內宮のには磯部と書き外宮のには石部と書たり鴨縣主賀茂縣主と記して別ちて其下上社に置く方を知せるに同じ）偖世記には
建日方命進二舍人弟伊爾方命一と有を雜事記（垂仁天皇段）に
宇治土公遠祖大田命神當土乃土神也然而爲二玉串大內
人一即與荒木田氏禰宜相並供二奉於祭庭一之例也と有
れども此時未內人の號有べからねば後の稱を始に巡
らして記せる常例にて珍しからず古くは舍人とぞ云
けむ後世にこそ內舍人大舍人など云ふも出來て其の
品輕かりけれ天皇の御許近く仕奉る人を刀禰と呼ふ
常例なる事上なる大忌祭詞の下に說る如くなれば此
古名を用來れるを內人は職原抄に孝德天皇御宇始
爲二內臣一天智朝擧爲二內大臣一と有を以考るに朝廷に

此號出來れるより取て神宮にも始て內人の號は有初けむ天武天皇元年に始て禰宜の職を任し事例に合せて思ふに其頃舍人を改て內人とは成されけむ然れば大田命の遠裔なる人の磯部は氏にて宇治土公は其土の長を云事にて其氏に就たる姓にて內人は其職の號なりけり類史に平城天皇大同三年九月辛巳勅伊勢太神宮并度會宮二宮大內人各三人元是白丁自今以後宜下預外考并把ㇾ笏と有を以其舍人なりし事を察らむ可し（其より上つ御世には萬事素朴にして誰何と差別つ事も無く舍人と耳云へりしなり舍人乙若子命舍人紀麻呂などゝ太御神の御許に親しく仕奉れる人を然ぞ呼けむ）鈴屋大人說（玉勝間忘草卷）に伊勢神宮に大內人小內人と云職有る內人の義如何と或人の問けるに答けらく書紀に中臣鎌足公を內臣と爲給へる事有り續紀の天平勝寶元年又天平寶字元年の宣命に大伴氏を內兵と被稱たる事有り同紀に內物部と云稱も見えたり此等內とは殊に親しみ給ふ由也然れば內人も太御神宮に殊に親しく仕奉る由の稱なる可し」と云れたるは實に然る事也借宇治大內人は上件の如き所由も有る事なる故に內人の上首たる荒木田神主姓なるも有れど同じ內人には在ながら職掌同じからず祈年月次神嘗の時に當て玉串行事に預る是以て玉串大內人共云て世々其一家に相傳る事なり（度會宮は然らず大內人たる人皆度會神主の姓なる人なり儀式帳に右大內人以下御馬飼內人以上皆是太神宮臨ㇾ興二其土一建二大宮一初八十友部卜食補任自後家被請訖ㇾ今也と見えたり）又儀式帳を考るに宇治大內人無位宇治土公磯部小紲內人外正八位荒木田神主家守內人無位神主廣川此二人は其職號を記さず御笥作內人忌鍛冶內人陶器作內人御笠縫內人日祈內人御馬飼內人等合せて大內人一人小內人九人なり（然るを儀式帳に大內人三烟小內人十三人と有は戸數（カマトカズ）を記せるなり式に至ては大內人四人小內人九人と見えたり故此には合ざるなり）

天皇我御命爾坐御壽乎手長乃御壽止湯津如ニ磐村ニ常磐堅磐爾伊賀志御世爾幸倍給比阿禮坐皇子等乎惠給比百官人等天下四方國乃百姓爾至萬天毛長平久作食留五穀毛豐爾令榮給比護惠比幸給止

此は上に天津祝詞乃太祝詞と云る其文なり（其事上に已に委く云り）天皇我御命爾坐は二月祈年六月十二月々次祭詞に天皇我御命以氐云々稱辭竟奉と有とは異りて其御詔を述る所に云語なり故春日祭詞平野祭詞久度祭詞等の例天皇我大命爾坐世云々乃廣前爾白久云々と有り（此事春日祭の條見る可し）建久行事記に此詞の載れるには皇御麻命乃

大事爾坐と有り（大事に大命なり儀式帳大寄定禰天に伊冶乃御田乃稻末近ニ波當■不レ■豆■■止大御壽乃乗給布と有り）○御壽乎手長乃御壽止世記儀式帳共に■爾大御壽乎手長之大壽と有は全く此詞を取れるなれば其に據て御壽を大御壽と訓べし（本にも御壽をオホムイノチと訓たるに■■より■オホミイノチと■来るが■なり■■■■乃大■世止云々と有るになれども古祝詞に皇御孫命御世乎手長御世と有る如くならでは叶はず）○湯津如ニ磐村ニ常磐爾堅磐爾は古祝詞に堅磐爾常磐爾齋比奉と有より出たるなるが此文の如くにては事足はず儀式帳及行事記には常石堅石爾伊波比與佐志給比伊賀志御世爾云々と有り此方にて能通えたり（然るは此詞なるは常磐■堅磐爾伊賀志御世爾云々と續けて聞ゆるに似たれども右■詞には堅■磐爾■■比奉と有て此處に■上よりの事一段落着き然して又伊賀志御世と云思せれは此に事足はずと云るなり）○阿禮坐皇子等乎惠給比儀式帳には阿禮坐皇子等乃大御壽乎慈比給比と有り○百官人等天下四方國能百姓爾至萬天長平久此所迄は天皇々子等を始奉り百官人等及天下百姓の壽命を新奉る事なるが此に所謂有り其は人は更にも云ず凡世中に生とし生ふ草木一本に至ぬ迄悉く天照坐日大■神の大御恩頼を■蒙ずては且ても出来まじき理なる事已に云るが如くなればなり（巻一新年祈三詞巻三祈年太■■■の下に委しく説るが如し）○作食留鈴屋大人説に都久理多夫留と訓べし故留字有なり多夫留と云事續紀の宣命などにも有て古言なり今世の言にも多倍留と云ふ是なり」と云れたるは然る言にて行事記に餘多此詞の出たる中に作食倍留と有り全く多夫留と唱たりし證なり（考に食をは乎須と訓ぞ古言なる今本の訓は誤れりと云れたるは當らず乎須は下より上に召す由■多夫留は上より下へ■る由にて其■相■けり備此の作は自作なり食に■■より■■■るなり）○五穀乎豐穏爾令榮給比護惠比幸倍給止行事記には五穀乎豐穏爾想奉給とも五穀豐饒爾恤幸奉給なども有り以上五穀の御祈なるが古祝詞には皇神能見霽志坐四方國者云々狹國者廣久峻國者平久遠國者八十綱打掛氏引寄如レ事皇太御神寄志奉波云々と有る此に同じ（但古きには■國を貢く■■を下けく作■て國を弘め其御■■■■なしむ■を云て五穀豐饒の事に■せたるを此詞には唯五穀豐饒の事を云て貢調の事には■しきに心を■せり上に云るを見べし）貢調は天下の百姓の天皇の御國に住て天皇の御田を佃食て長く久しく世に在住ふに事と爲て天皇の御惠ならぬは無く物と爲て天皇の御愛しみならぬは無れば御貢を供進か事全く天皇の大御趣に恐み靡き信服奉る表にして天下の泰平なる事も五穀の豐饒なる事も其先る所此に在る事なれば古祝詞の趣旨に天地に貫通て甚々美好く尊き御事なりかし皇御孫命の天降り坐時に寶祚之隆當下與ニ天壤ニ無ニ窮矣一と授依し奉給へる天津祝詞此也（此事此處に盡さず此書の凡ての大旨なれば今云ふ所に非ざるなり）

三郡國々處々爾寄奉禮留神戸人等能常毛進留御調絲由貴能御酒御贄乎如海山置足成天大中臣太玉串爾隱侍天今年六月十七日乃朝日乃豐榮登爾・稱由事乎神主部物忌等諸聞食止宣（神主部共稱唯）

三郡は式に三神郡とも三箇神郡とも有り雜例集に本記云皇太神御鎭座之時大幡主命物乃部八十友諸人等率云々大宮奉定支爾時大幡主命白久已先祖天日別命賜伊勢國內磯部河以東神國定奉（飯野多氣度會評也）即大幡主命神國造幷大神主定給支又云難波長柄豐前宮御世飯野多氣度相惣一郡也云々と見えて未此時三郡ならず延曆儀式帳に初神郡度會多氣飯野三箇郡本記行事右從纏向珠城朝廷以來至難波長柄豐前宮御宇天萬豐日天皇御世有爾鳥墓村造神庤弖爲雜神政行仕奉支而難波朝廷天下立評給時仁以十郷分弖度會乃山田原立屯倉弖新家連阿久多督領磯連牟良助督仕奉支以十郷分竹村立屯倉麻續連廣背督領磯部眞夜宇助督仕奉支同朝廷御時仁初太神宮司所稱神庤司中臣香積連須氣仕奉支是人時仁度會山田原造御厨弖改神庤止云名號御厨即號太神宮司支近江大津朝廷天命開別天皇御代仁以甲子年小乙中久米勝麻呂仁多氣郡四箇郷申割弖立飯野高宮村屯倉評督領仕奉支即爲公郡之右元三箇郡攝一處太神宮供奉支所割分由顯如件と有り然れば其元一なりし處を孝德天皇御世に分ちて度會多氣二郡と爲し天智天皇三年甲子に其多氣郡を割て飯野郡を置たりしなり合せて此を三箇神郡と云ふ（雜例集にも此事有り難波長柄豐前宮御世飯野多氣度會總一郡也其時多氣之有爾鳥墓立郡時爾以己酉年始立度相郡以神主奈波任督造以神主針間任助造と有る己酉年は大化五年なり其より天智天皇三年迄凡十六年なり然るに此事儀式帳に合ず思ふに始は伊勢國造の所縁を以て神主奈波を督造に神主針間を助造に召しなして郡縣の御定に被成るゝに就て舊氏を任るゝ事を不足（アカズ）思ほし召て又更に新家連阿久多磯連牟良を任けるにや有む例文を考るに奈波針間等の人度會遠祖奉仕次第に所見ず孝德天皇御世に仕奉れるは神主吉田神主知加夏の二人耳なれば其支流の人なる可し雜例集に皆是大幡主命末葉度會神主先祖也と有は其神主姓の氏人を云るなり故思ふに大神主吉田に至て國造を被罷ても大神主如故くなりしかは其氏族の内にて度會郡の督造助造には任され奉りしなる可し）然れども右三郡の內飯野一郡は神郡の員にして公郡なり其は天智天皇御世に二郡を割て三郡と成し而して其一郡は公郡に召しかども然すがに憚思召す所の有けるなる可し持統天皇六年御紀に神郡とも二箇神郡とも云名出たり雜例集に載る寶龜五年七月廿三日大政官符に多氣度會二箇郡堺內授受寺田幷王臣位田及佗郡百姓口分田事上件三色田割出神郡應授他郡田但禰宜祝位田者

不レ在ニ此限ニ二箇神郡逃走百姓口分田地子國司徴納混ニ合官稻ニ事上件地子稻應レ收ニ神税ニ右二條事國司依レ件施行と有て又寛平九年九月十一日官符に應下以ニ伊勢國飯野郡ニ寄中太神宮上右郡依ニ去仁和五年三月十三日勅ニ一代之間奉レ寄ニ彼宮ニ大納言正三位兼行左近衞大將藤原朝臣時平宣奉レ勅自今以後永以奉レ寄と有て此より全く神三郡に成れりし者なり然れば儀式帳記されし延暦の頃は未二郡なりし故に止由氣宮儀式帳には二箇神郡人夫乃所進庸米乎云々多氣度會二箇神郡所進明曳調糸乎など有て紛れ無き皇太神宮儀式帳に度會多氣飯野の三郡を云るは其元三郡共に一に攝(フサネ)て太神宮の御縣なりしを其割分れたる所以を云むとてなり此を以て見るに天智天皇御世に飯野は公郡に召れしかども表立たる事こそは有め尙其郡の神地なりしを以て二箇神郡と相並び仕奉れりし故に儀式帳にも態と其由來を載せるなる可し然れば天智天皇三年甲子より仁和五年迄凡二百廿六年の間中絶て舊きに復れるなり甚々畏き御事なり倍行事記に此詞の載れるには此三郡を八郡と爲り其は延喜以後文治迄に五郡を増加奉給へるなり雜例集に伊勢國神郡八郡事度會郡多氣郡飯野郡已上謂ニ之神三郡ニ又云ニ道後ニ封戸九百七十二烟度會郡四百四十七烟多氣郡三百十五烟飯野郡二百十烟員辨郡天慶三年八月廿七日符二百烟三重郡應和二年二月廿三日符二百一烟安濃郡天祿四年九月十一日符三百八十九烟朝明郡寛仁三年九月十一日符員辨三重朝明謂ニ之三前三郡ニ安濃謂ニ之東西郡ニ飯高郡文治元年九月九日符南北兩郡と有りて合せて神郡八郡なり戸數合せて千七百六十二烟なり朝明安濃飯高三郡は戸數を記さず續紀卅六寶龜十一年五月壬辰伊勢太神宮封一千二十三戸云々所レ食復レ之と有は件好の天皇等の削給ひしを舊に復し給へるにて甚々愛たき御事なり然れども其より後は其に合せては何事も増れざりけり ○國々は諸國を云ふ伊勢大和伊賀志摩尾張參河遠江以上七箇國の内伊勢を除て六箇國なり太神宮式封戸條に當國云々諸國大和國十五戸伊賀國廿戸志摩國六十六戸尾張國四十戸參河國廿戸遠江國四十戸と有る此也雜例集神封事條に神戸四百十三戸七箇國在廿一箇處三百五十三戸本神戸御鎭坐之昔國造供進卅戸新神戸天慶三年八月廿七日符卅戸新神戸文治元年九月九日符と見えたり此本神戸は右太神宮式に出る所なり尙雜例集に七箇封戸二百九十戸有て右の外に近江美濃信濃上野等の四箇國有り何れも天慶三年以後の事なり大寶二年七月八日壹云詔伊勢太神宮封物者是神御之物宜唯供ニ神事ニ勿レ令ニ穢ニとも延暦廿年四月十四日格云太神戸封戸非ニ改減之限ニとも有り大和國宇陀神戸十五戸儀式帳皇太神御遷幸條に彼時宇太乃阿貴宮坐只次佐々波多宮坐只其爾即大倭國造等神御田幷神戸進只と有り神田は雜例集に大和國宇陀郡二町と有る此なり世記に崇神天皇六十年癸未

遷二于大和國宇多秋宮一積二四箇年一之間奉レ齋于時倭國造進二采女香刀比賣地口御田一と有り伊賀國伊賀神戸二十戸帳に次伊賀穴穗宮坐只次阿閇拓植宮坐只其爾即伊賀國造等神御田并神戸進只と有り神御田は雄例集に伊賀國伊賀郡二町と有る此なり帳に供二奉朝大御饌夕大御饌一料地祭物本記事朝夕御饌箕造奉竹原并箕藤黒葛生所三百六十町在二伊賀國名張郡一亦朝夕御饌供奉年魚取淵梁作瀬一處亦御栗栖三町在二伊賀郡一右五處此伊賀國造等之遠祖奉地注顯如レ件と有り世記に六十六年己丑遷二于同國穴穗宮一積二四年一奉レ齋爾時伊賀國造進二箕山葛山戸并地口御田一鮎取淵梁作瀬等朝御氣夕御氣供進焉と有り然るに上代本記豐受大神御遷行條に伊賀國穴穗宮御二宿坐一于時國夕御饌箕造竹原并箕藤黒葛生所三百六十町亦年魚取淵梁作瀬一處亦御栗栖三町國造等貢進仍二所皇太神之朝之大御氣夕之大御氣之料所爾定給支と有りて全く儀式帳と同じきは少し有れども強て思ふに此の時に至りて如此く巨細に定れるなる可し世記に伊賀國は天武天皇庚辰歳七月割二伊勢國四郡一立二彼國一と有り白鳳九年なり志摩國六十戸伊雜神戸國崎本神戸鵜倉神戸慥柄神戸右伊雜神戸者別宮伊雜宮御鎮坐之地國崎鵜倉慥柄等島者朝夕御饌御贄之所也と有は世記に垂仁天皇二十七年秋九月云々島國伊雜方上葦原中在二稻一基一云々千稅奉二事因レ此也云々と見え廿六年條に倭姫命御船乘給御二御贄處定奉二行島國一國崎島爾朝御饌夕御饌止詔而湯貴潜女等定給云々と有る此也國崎本神戸とは御贄のもとなりし故に本神戸とはいふならむ猶下なる御贄の下に云はむ尾張國六十戸本神戸四十戸號二中島神戸一新神戸十戸新加神戸十戸世記に垂仁天皇十年辛丑遷二幸于美濃國伊久良河宮一四年奉齋次遷二于尾張國中島宮一座天倭姫命國保伎給于時美濃國造等進舍人市主地口御田并御船一隻進支同美濃縣主角鏑作之而進二御船二隻捧二天船者天之曾己立放船者天之御都張止白而進支采女忍比賣又進二地口御田一故忍比賣之子繼天平瓮八十枚作進留と有る此時の事なり神名秘書にも次遷于尾張國中島宮座于時造進尾張神戸と見ゆ然れば采女忍比賣は其處の造の女なりけり此を儀式帳に考るに陶器作内人有て天比賣加を作れども其は磯部氏にて尾張に由無し土師器作物忌有り麻績部氏なり此忍比賣の末なる可し三代實錄に伊勢國多氣郡百姓外少初位下麻續部廣永等十六人復二本姓二云々豐城入彦命之後也と見え倚見部氏等有て同族たれば此時より供奉れる也けり世記廿六年の下にも采女忍比賣造二天平賀(カ)八十枚一と有り參河國廿戸本神戸廿戸號二渥美神戸一新神戸十戸號二飽海神戸一新加神戸十戸と有る渥美神戸よりは赤引生糸を貢くなる可し此事四月神衣祭條に云り遠江國六十戸本神戸卅戸號二濱名神戸一新神戸十戸號二中田神戸一新加神戸十戸と有る濱名神戸よりは神御衣を織て奉る事なり玉勝間卷思草に遠江國人内山眞龍が云るは彼國の濱名郡神戸鄕岡本村と云に機殿有て每年に四月と九月と神御衣を織て伊勢內宮に奉る其機殿は彼村に神氏日大夫と云者世々相傳て每年に新しく造る萱葺の屋なり神庫も有り古めきたる

製樣なり神御衣は三河國の大野村と云ふより生糸を此岡本村に送奉るを件の機殿にて織て奉る和妙なりと云りきと有り思ふに此は神戸より調絹を織て古より奉りし遺制ならむが儀式帳太神宮式に載る神御衣の員には非ず又雜例集年中行事に四月十四日内宮供種蘘於櫻御前事申詔刀ニと有た行事記に比挍るに抑遠江神戸所レ進種蘘今日ニ進と有れば此も濱名神戸より進るならむ内藏式に遠江國交易所レ進干蘘小一百斤蘘種十石と見え民部式に交易雜物遠江國種蘘と有り右の內尾張參河遠江三箇國共に新神戸と有は天慶三年八月廿七日新加神戸と有は文治元年九月九日に寄奉給ふ所なり又伊勢國百五十二戸六處飯高神戸卅六戸壹志神戸卅八戸安濃神戸卅五戸鈴鹿神戸十戸川曲神戸卅八戸桑名神戸五戸と有は皇太神の御遷幸の時に其造等の奉れるにて神三郡の外なから往古より有し所なり但後の神部八郡と混同に爲る事勿れ偖此の故由をも記さまほしく思へども儀式帳世記等に出たる所なるか故に今云す○處々爾寄奉禮留神戸人等能常毛進留今本に寄奉禮留神戸人等能常毛進留の十三字を脫せり祝詞考に補はれたる實に宜し九月神嘗祭詞にも然見えて行事記なる此詞にも國々所々依奉禮留神戸人夫常毛仕奉と有なとを證として諸ふに足れり但考に其補はれたる由を記されざるは思ふに然る善本有しなるべし出雲本にも此十三字[illegible]は校合の[illegible]なンあり偖此は右の三神郡神郡ー後ニ八は更なり大和伊賀志摩尾張參河遠江の國々の神封を除て雜例集に載る七箇國神戸及國々の御厨御園共に二宮御領なる有り內宮御領なる有り外宮御領なる有り其等の封物に係て云るなり續紀に大寶二年六月癸酉詔伊勢太神宮封物者是神御之物宜准供ニ神事ー勿レ令ニ濫穢ーと有る如く其封物は神宮に貢進る耳ならず常の事にも忌愼む事なり但延喜の古と雜例集神鳳抄の今と次々に增如（マシノヤ）に奉れるが上に其後にも增減有れば其心得有べし延曆廿三年四月格に太神宮封戸非ニ改減之限ーと有る御定なれば此御領耳は減（ヘラ）し給ふまじきを世の亂の打續きて絕たる所も多かるぞ心苦しき太神宮式に神田卅六町一段大和國宇陀郡二町伊賀國伊賀郡二町伊勢國卅二町一段桑名鈴鹿兩郡各一町安濃壹志兩郡各三町飯高郡二町飯野郡十一町六段度會郡十町五段右神田如レ件割ニ度會郡五町四段ー二町四段太神宮三町度會宮令ニ當郡司營種ー收ニ獲苗子ー供ニ用太神宮三時祭之料ーと見えたり儀式帳神田行事に見佃御田二町四段荒木田一町宇治田一町並二町御膳料四段荒祭宮料苅稻一千六百八十束以ニ六把ー爲レ束所用之稻一千六百八十束用ニ盡之ー九月神嘗供奉拔穗稻四十束三節祭湯貴神清酒料稻二百四十束祭別八十束宮四方地祭料稻六十束祭別廿束湯貴御贄採海往禰宜內人小內人及祝部等幷伊勢國與ニ志摩國ー堺戸島神祭奈保良比料稻百五十束祭別五十束瀧祭奈保良比料稻百廿束祭別四十束祭每月十六日川原禰宜內人物忌等身祓所奈

保良比料稻六十束（祭料卅束）嵩祭宮湯貴酒料稻六十束（祭料卅束）正月朔日散料四十束七日料十四束十五日料十三束六把三月三日料四十束五月五日料卅五束禰宜内人物忌等祭時食給稻二百卅一束四把と有て合せて二町四段の稻の用途なり豐受宮のは儀式帳二所太神朝御饌夕御饌供奉行事の終に右大物忌父（我）佃奉拔穗乃御田稻乎先穗乎波拔穗備拔旦九月神嘗祭八荷供奉（一荷ニ八把ニ）然所遺稻乎以旦將來至于九月十四日云々日毎二度奉ると有る如く兩宮の御饌を其宮の御饌殿にて供進る故に三町なるなり（太神宮式に凡度會宮禰宜内人等依例供ニ進太神宮及度會宮朝夕御饌と有る此にて豐受宮にて皇太神の朝夕の大御饌を調て祭奉る事上に云るが如し）神戸は太神宮式封戸條に當國云々諸國云々右諸國調庸雜物皆神宮司檢領依例供用其當國地租收ニ納所在官舍ニ隨事支料若遭ニ年不ニ登損田七分以上免徵ニ租稻ニ並注帳申ニ送所司ニと有り神戸は朝廷にに奉る調庸田租を神宮に奉る戸を云也調は戸令に廿一爲丁六十一爲老と有て中年四十年の間正丁也賦役令に凡調絹絁絲綿布並隨ニ鄉土所出正丁一人絹絁八尺五寸六丁成疋美濃絁六尺五寸八丁成疋絲八兩綿一斤布二丈六尺並二丁成約屯端（調絲十六兩曰約也綿二斤曰屯也布五尺二寸□□曰端）其望陀布四丁成端若輸ニ雜物ニ者云々次丁二人中男四人並准ニ正丁一人ニ其調副物正丁一人云々十四丁櫓一枚受ニ三斗ニ二十一丁櫓一枚受ニ四斗ニ三十五丁櫓一枚受ニ五斗ニと有り庸は賦役令に凡正丁歳役ニ十日ニ若須收庸者布二丈六尺一日二尺六寸云々次丁二人同ニ正丁一人ニ中男及京畿内不在ニ收庸之例ニ其丁匠役云々と有り田租は同令に凡封戸者皆以ニ課戸ニ充ニ調庸全給其田租爲ニ二分ニ一分入官一分給主と有れば封戸の田租を二分に爲て一分は官に入れ一分は神宮に奉らせ給ふなり右に引る太神宮式に其當國地租收ニ納所在官舍ニ隨事支料と有は此なり（賦役令に凡土毛臨時應用者並准ニ當國時估價ニ用ニ郡稻ニと有る義解に謂割ニ量田租ニ以充ニ雜用ニ是爲ニ郡稻ニ也云々凡官稻之源出自ニ田租ニ既分爲三一曰ニ大税ニ二曰ニ郡稻ニ三曰ニ郡稻ニ也と見えたる此郡稻を收ニ納所在官舍ニ隨事支料と有と相同じ）同式に凡三箇神郡並六處神戸及諸國神戸調庸田租者依ニ國司所移之調文租帳等ニ宮司勘納其勘納之狀附ニ國司ニ移ニ送主計主税二寮ニと有り俗雜例集七箇國封戸條を見に調庸共に或は正物を輸す有り或は代米を以送るも有と雖も其定は令條の任也代米畑別所當調絹一疋庸米一石二斗中男作物油七合租穀四石封丁廿五烟一人と有り今一例を出さば近江國五十戸國司支配郡鄉有ニ其沙汰ニ代米三百六十六石二斗（久安主税寮勘文定）調絹五

十疋代二百石疋別四石庸米六十石別一石二斗中男作物油三斗五升畑別七合升別二斗五升代十石五斗升別三斗租穀二百石畑別代四石八十五石五斗二升石別四斗二升七合六勺封丁二人但廿五畑一人代十石人別五石と見えて此中古の法なり　右畑別に絹一疋は正丁六人に當るなり庸米は庸布の代米なり布六也に當る中男作物油七合は賦役令次丁二人中男四人並准二正丁一人一其調副物云々胡麻油七勺と有り七合にては正丁十人に當る其胡麻油なる事は尾張國參河國條に所見たり租穀は田租なり封丁は賦役令に中男及京畿内不レ在二收レ庸之例一を有て京に赴べ可きを赴ざる故に庸を輸すなり其外種功米と云も有り尾張國本神戸種功米三十六石と有り一戸三石六斗なり　〇御調糸は太神宮式に太神宮亦引絲四十絢木綿大七斤麻大十二斤と有儀式帳に御調荷前供奉行事亦引生糸四十斤　神部并會部調先糸〇今云調先の事は下に止由氣宮儀式帳を引たる其編書に云り度會宮儀見べし　右以二五月卅日一御ノ調專當郡司并調書生及郡長服長等爲二大解除一忌愼侍亦郡内諸百姓等人別私家解除淸旦御調糸持參二向太神宮司一仁即太神宮司卜定旦糸遣令編定御調櫃入旦鹽湯持旦淸旦御調倉進納畢以二六月十七日朝時一從二御調倉一下旦預度會多氣郡司并調書生服長等御前追持二參入太神宮一供奉行事波神服織神麻績御衣供奉行事同亦御調荷前絹一百疋右絹調備奉行事亦引糸奉時止同又荒祭宮月讀宮瀧原宮伊雜宮供奉荷前絹其注二月記條一と見えたる荷前絹一百疋は神戸の調絹にて神嘗祭料なり備此御調糸を行事記に載る此文には赤良曳荷前御調糸と

有り度會宮は赤引糸卅絢木綿大四斤麻大十斤と太神宮式に見えて儀式帳には御調糸進入卅絢と有て小注に見レ進二入廿八絢一高宮御料分二絢一と記せり　神祇令には三河赤引神調糸の事有れども式及儀式帳には度會一部の由見えたり　止由氣宮儀式帳五月例に月内取二吉日一禰宜内人等養蠶乃糸先乎神宮并高宮及宮廻神奉進次所管諸神社夏祭仕奉禰宜内人等率二祝部一仕奉次取二吉日一郡内人夫乃所進年祈料明曳糸一絢乎捧持天下百姓乃佃食五穀乎平慈備給部止禰宜告刀申旦供奉と有は別なり皇太神宮儀式帳にも五月例に年中祈料赤引調糸二絢神郡度會郡右從二七月一日一始迄二八月卅日一日祈内人朝夕止二惡風一旦天下百姓五穀助給止祈申と有りて同祭なるが六月例に禰宜并宇治大内人日祈内人巳上二人己之家養蠶之糸一絢乎備奉旦祭乃日禰告刀申天下百姓作食五穀平助給祈申と見えたる此祈は右の七月一日より八月卅日に至る迄稻の實を生ぶ時なるが爲の御祈にて度會宮のも共なり　禰宜行事條に又毎年六月祭仁己之家仁養蠶乃絲一絢捧持旦祭之日告刀申旦祈年御調進とも日祈内人等に已家養蠶糸一斤以二六月祭日之夕御饌進時一禰宜内人共爲二惡風雨不レ吹祈申告刀申進と有此なり右の度會宮のにも年祈と云ひ此にも祈年と有を以思ふに六月々次も猶祈年の御祭なりけり祝詞も二月祈年と同じきを其混れざらむ爲に月次とは云別てるなりけり　〇由貴は御酒と御贄とに係たるなり二所太神宮共に年中齋愼しみて供奉る

中に殊に此三節祭は重き御祭なる故に朝大御饌夕大御饌以下の供進(タテマツ)り物を總て由貴とは云なり止由氣宮儀式帳例六月に始ニ亥時一至ニ子丑時一朝乃大御饌夕乃大御饌二度間量供奉と有る本注に此號ニ由貴一と記し其仕奉る所を湯貴備奉所と云ひ皇太神宮儀式帳にも此以十六日夜湯貴御饌祭仕奉と記し其料の稻を收るを湯貴御倉と云り此則大御饌を本と爲て其を佗へも及ぼせる也（太神宮年中行事には十六日夕供ニ由貴御饌一事と十七日曉供ニ御饌一と有り由貴と云事の打任せては御饌の上に係れるを思ふ可し）大嘗會に悠紀主基と云ふ悠紀を天武天皇御紀に齋忌と記されたる此字の意にて齋愼み清まり竟たるを云なり此亦天皇の初て知食す御世の新穀を齋清めて御饌に炊き御酒に釀りて神祇に供進らせ給ひ御自も聞食す事なるが故に悠紀主基とは云るにて主基亦清々しき由にて悠紀と云るに其意相異らず所以に大嘗會式に神語號ニ雜贄一爲ニ由加物一と見え其を盛る器を由加と云なと神宮にて由貴某と云る相同じきは重き御神事故に殊更に神語を用させ給ふとは申ながら全く神物官物未相別れざりし古義の傳はれるなり止由氣宮儀式帳に大贄乃淨米乃大祓仕奉然湯貴備奉所爾持參里云々と有て大嘗大贄其語相同じきを思ふ可し（凡ての御神事の上には此事多かり儀式以下の書を容易く見過し奉る可からず偖齋忌は齋(ユ)と云言より活きて忌と云る成事由加物など云を以知べし上に云る止由大神の條見る可し）偖三節祭共に朝大御饌夕大御饌供奉るを主と立たる御祭にて御酒も御贄も此に屬たる者なり其は儀式帳神嘗祭條に亥時始至ニ子丑時一朝御饌夕御饌二度供奉畢云々黑白二色酒毛大御饌相副供奉と有を以て知べきなり然るに此に御酒御饌を云さるは如何と云に此詞なるは其朝夕の大御饌に就たる酒作物忌清酒作物忌等の釀りたる御酒及禰宜內人等の供奉れる御贄を云ふには非ず諸國神戸の所進れる御酒御贄也所以に朝大御饌夕大御饌の度每に告刀有り建久行事紀に所見たり（其は上に引たるが如し其詞に今年六月十六日乃由貴乃御饌并國國所々郡神戸人等乃忌齋奉神酒御贄乎云々と有て十七日朝此に同じきを十七日の御祭に至て此詞に御調糸由貴能御酒御贄と云ては同じ物を幾度も稱申になるなり）○御酒は世記に國々處々寄奉神戸人民乃奉留大神酒と有に依て大御酒と訓べし大同本記に大若子命云々又御酒殿を造立處々神戸人夫進神田以稻神酒作天先太神供奉次倭姬命奉殘者仕奉物部人等給支と有は由貴奉るとて直會に給はるとをいへるなり太神宮式に神酒廿缶と有て其本注に缶別三斗當國十五缶伊賀國二缶尾張參河遠江等國各一缶並以神稅釀造と有る此なり儀式帳此に同じ酒米十石と有は其

料なる可し下に云を見べし（但右の卄缶の內宮廻神二缶荒祭宮一缶月讀宮瀧原宮伊雑宮瀧祭宮大歳社に各一缶を供進らるゝ由見ゆ太神宮式に其所レ攝神宮祭者亦用二其物一と有り同式に度會宮神酒八缶當國三缶四國如レ上と見ゆ此にも同じく酒米十石と有り）偖朝夕の大御饌に就て供進る神酒は大嘗祭に黒白の大御酒を奉る如く神宮にも黒白の大御酒の事有り儀式帳に酒作物忌云々陶內人作進酒甕三口仁酒釀備供奉と有り此は行事記に黒乃志御饌と云る此なり清酒作物忌云々職掌陶內人作進甕三口仁碓舂白御酒備設供奉と有は行事記に白乃志御饌と有る此也儀式帳神田行事に三節祭湯貴神清酒料稻二百四十束（祭卅八十束）荒祭宮湯貴清酒料稻六十束（祭別卄束）と有る湯貴清酒とは白御酒の事にて止由氣宮儀式帳に火無淨酒と云と同物なり彼宮にても大物忌偁奉禮留拔穗乃御田稻乎火無淨酒造奉豆供奉と有て皇太神宮に神田の稻を以て湯貴清酒供進る同じきは黒酒よりは重みし給故なる事下に云が如し（然るを儀式帳神嘗祭條に酒作物忌乃供奉白酒清酒作物忌乃作奉黒酒并二色乃御酒毛云々と有は其職掌條に合ず究て清酒作物忌乃作奉白酒酒作物忌乃作奉黒酒と有つらむ事云も更なり）行事記十六日夕大御饌條に御饌奉仕內外物忌父并清酒作及酒作內人等云々白乃志御饌奉二取出一豐受宮奉レ祝石疊副奉二昇居一云々清酒作內人波白乃志御饌爾御河豆爾水入合奉留其後參二入內院一と此度には黒乃志御饌の事を記さず但

儀式帳には十五日條に又酒造物忌清酒作物忌陶內人作進上御酒缶爾酒釀清奉酒乎土師陶之御坏爾奉レ納滿進レ之と見え十六日條にも酒作物忌清酒作物忌等仕奉る由見えたれは行事記には漏せるなる可し（此の御饌は御酒の事なり偖御河の水は入合するは堅く釀りたるを此にて水以て解くなり今世の甘酒と云者此類なり予が淡路國なる本生の里近き所にては神祭の事に當ては必甘酒と云を物爲て神に奉り始て郷黨と共に呑む事なるが白御酒と云と云り古言の遺れる也予が仁井村にては正月七日天王祭九月廿日田神祭などに在り）同記十七日朝大御饌條に至て白黒相並べ記せり黒酒は今云ふ清酒にて止由氣宮儀式帳に火向神酒と云に同じ在る可し行事記に清酒作并酒造內人等云々清酒作內人御橋左方男柱副爾白乃志御饌乎供酒作內人右方男柱副黒乃志御饌供也抑件御神酒諸神戸缶之中一口以供進也但於二神戸缶一者納物供進之後進二由貴殿一也謂二之伊牟氣缶一と有り斯れば此黒酒は神戸口封物を召て酒作內人の作るなりけり其は度會宮儀式帳の上に引る續きに次太神宮司乃所二宛奉一二箇神郡人夫乃所レ進庸米乎火向神酒造奉豆供奉と有と皇太神宮儀式帳（六月例）に祭料太神宮司宛奉雜用物酒作米十石云々神酒卄缶と有を以思ふに伊勢伊賀尾張參河遠江國より奉れる庸米を太神宮司より酒作內人に宛て令レ釀る所なりけり大同本記に又御

酒殿乎造立處々神戸人夫進ニ神田ニ以レ稻神酒作天先太神供奉と有り中臣壽詞某本白本の下見合す可し然れども白酒は神田の御稻を以て醸り黒酒は封戸の庸米を以て醸れるなど少か等差有り借火向と伊牟氣と言相近きは本同言なりしにや伊牟氣と云より齋缶ならむとは思にゝれども火向を誤れらむも知ず○御贄は大贄と訓べし御饌は更にも云ず海山の味物を凡て云也儀式帳神嘗條に宮西川原爾大贄乃清乃大祓仕奉と見え又止由氣宮儀式帳月次祭神嘗祭條に志摩國神戸所進雜贄又度會郡郷々所レ進御贄又禰宜内人等云々仕奉禮留雜御贄云々禰宜内人等皆悉自ニ宮北河原ニ罷出弖大贄乃淨米乃大被仕奉然湯貴備奉所爾持參入と有を以てなり酒なも大御酒と云に進へて必此も大贄と訓べきなり且此の訓なも古くより意富遲帑と訓來る者なや　太神宮式に雜贄廿荷副レ供酒所度會宮雜贄八荷と有り但儀式帳には御贄廿五荷と有て其員數同じからず其は其時々の御定なれば敢て深く拘る可に非ず此亦御酒と同じく宮廻神荒祭宮月讀宮瀧原宮伊雜宮瀧祭社大歳社等に奉る例なり　同帳六月例に禰宜内人等以ニ祭之月十五日ニ退ニ天人志摩國神堺海ニ雜貝物爾滿生御雜贄漁幷從ニ志摩國神戸百姓ニ進上子生贄及度會郡進上贄乎此御笥作内人作進上御贄机爾置レ之忌鍛冶内人之作奉御贄小刀持功備奉御鹽燒物忌之燒備進上御鹽乎會備奉土師物忌陶内人作進上御坏爾奉ニ渊滿ニ備進と見えたる此なり　神田行事條に湯貴御贄採海往爾宜内人小内人及諷部等牟伊勢國與ニ志摩國ニ堺戸島神祭并奈保良比料稻百五十束祭料五十束と有はこの御贄の事なり度會宮にも此事有り儀式帳に又禰宜内人等我戸人夫乃志摩國與ニ伊勢國ニ神堺島々爾罷行弖仕奉禮留御贄と見ゆ行事記には此を忌物と云り神封の戸より奉る御贄よりは此上無く重き所なり

世記ニ垂仁天皇廿六年條に倭姬命御船乘給御膳御贄處定幸行島國國崎島鵜倉樋柄等島爾朝御饌夕御饌止詔而湯貴潛女等定給天還坐時神界定給支戸島志波倚佐加太岐島定給而伊波戸居而朝御氣夕御氣處定奉然倭姬命御船留而鰭廣魚鰭狹魚貝滿物息津毛邊津毛依來爾海鹽相和而淡在留介故淡海浦止號支伊波戸居島名乎戸島止號支波刺處名柴前號從レ其以西之海中爾在ニ七箇島ニ從レ其以南海鹽淡口支其島乎淡良岐之島止號其鹽淡滿溢浦名乎伊氣浦止號久其處參相弖御饗仕奉神乎淡海御子神止號久社定給支其處乎朝御氣夕御氣島止定支還幸行其御船泊留在志處乎津長原止號支其處乎津長社定給支と有る此其始なり　伊波戸居は岩上に居坐て御贄の處を見行し給ふを云なり此文雜例集に大同二年二月十日太神宮司二宮禰宜等本記十四箇條内朝夕御饌條云皇太神宮倭姬命戴奉天五十鈴宮爾令ニ入坐ニ々ニ須理紀時爾大若子命乎大神主と定給天其女子兒比女乎物忌定給大宮内御饌殿乎造立云々又御酒殿乎造立處々神戸人夫進ニ神田ニ以レ稻酒作天先大神供奉次倭姬命奉幾著仕奉物部人等給支其時御船乘給云々と續きて有り　亦年中雜神態三節祭定賜御贄島爾神主等罷御贄漁弖島國々前潛女取奉玉貫鮑鵜倉樋柄島神戸進堅魚等御贄國々處々寄奉神戸人民乃奉留大神酒御贄荷前等乎云々と見えて此三節祭の御

贄は倭姫命の定させ給ふ所なり此右の儀式帳なる志摩國神戸百姓進上于生贄及度會郡進上贄の本着く所なり（儀式帳太神宮四至に以二北比奈多島佐島（ヘシマ）志婆埼酒瀧島阿婆良岐島大島牟島歌島都久毛島石島牛島小島等一爲二海堺一と有り右の石島雜例集には名島と見ゆ栄島の意なり以上度會郡なり以南志摩國鵜倉山云々一と有り雜例集に志摩國々崎鵜倉鑓柄等島者朝夕御饌御贄之所也と見ゆ）○如海山置足成天は佗の例如二横山一云々と云ふ定格なるを此詞及神嘗祭詞共に如此有り但此は古祝詞に荷前者皇太神乃大前爾如二横山一打積置氐殘乎波平聞看と有より出るが此詞を製るに臨みて然改つる者なり（尚此撰者の心には御酒と御贄に對へて海と云ひ山と云るなる可し世記に云々奉備大神酒御贄荷前等遠近海山久置足天と有は此より取れるか本より の文ならば此に隨ていたるならむ）置足成は世記に置足天と見え行事記に載るには置所足氐と有れば例の如く多良波志氐と訓べきなり此は置滿て海山の如くに爲すを云事己に註るが如し（鈴屋大人說に此は心得ぬ書樣なり足波志と有と成と有とを合せて書るなる可し多良奈志と云言有べくも非ず」と云れたるは然る言ながら此訓の足波志と一なる事を思ひ漏されたるなれは依難し）○大中臣は太神宮司を云り考に御使の中臣を云れたれど然に非ず太神宮司古くは孝德天皇御世に香積連を任しゝより以來大楉迎村山連大家朝臣津島朝臣高良比連揩冝朝臣菅原朝臣菅生朝臣などを中臣朝臣に交へて任れしかども光仁天皇寶龜元年中臣朝臣比登を宮司に任しより其終に中臣氏一家の職掌と成れり但此中に菅原菅生の二氏を除ては全く中臣の支流なりと雖も其も任れぬ例と成れり其は此より十四年以前天平寶字元年六月乙未始制二伊勢太神宮幣帛使一自今以後差二中臣朝臣一不レ得レ用二佗姓人一と續紀に所見たり此時の御定に因て愈其家の職掌定れり（古語拾遺に始レ自二天上一中臣齋部二氏相副奉レ禱二日神一猿女之祖亦解二神怒一然則三氏之職不レ可二相離一而今伊勢宮司獨任二中臣氏一不レ預二二氏一所遺二也と有は此を云るなり）雜事記（天德二年條）に異姓人の神事に供奉するに依て御祟有て停止給ふ文に祭主公節朝臣既橘氏人也云々宮司氏高是清原氏豊之男子也云々請二母方姓一號二大中臣氏之子一由也以二如此異姓之輩一被レ補二任祭主宮司一之故天下不レ靜也被レ始二置祭主職一之後於二大中臣氏之外一以二佗姓者一未レ被レ補二任一之例乎者依二件奏聞一公節宮司氏高等之釐務停止と見えたり宮司も猶大中臣姓を以て補せらるゝ事を見つ可し然れば此の大中臣は此祝詞を宣る太神宮司の自稱る大中臣なり太神宮式に先使中臣申二詔刀一と有る其御使も大中臣なれども其には非ず太神宮司神封の荷前御酒御贄を禰宜內人以下の人を率ゐ捧參て太玉串の前に蹲居て其由を申進る事を此に云なり○太玉串は太神宮式に著二木綿一賢木是名二太玉串一と有る此なり儀式帳山向物忌職掌

に太玉串幷天八重榊取備供奉職掌忌敬供奉齋內親王二枝太神宮司二枝禰宜四枝宇治內人八枝幷枝別木綿懸レ之卽第三重御門東方一列八枝八重數六十四本右方亦始ニ左員ニ並高四尺枝別木綿懸レ之此太玉串幷天八重佐加岐乃元發由者天照坐太神乃高天原御坐時爾素戔鳴尊依ニ種々荒惡行事ニ天磐戶閇給時爾八十萬神會ニ於天安河邊ニ計ニ其可禱之方ニ時仁天香山仁立弖握ニ眞坂樹ニ弖上枝懸ニ八咫鏡ニ中枝懸ニ八尺瓊乃曲玉ニ下枝懸ニ天眞麻木綿ニ弖種々祈申支此今賢木懸ニ木綿ニ太玉串止號レ之以レ此天乃八重佐加岐幷禰宜捧持太玉串仁大中臣穩侍弖天津告刀乃太告刀乃厚廣事遠多々倍申と有り此は禰宜を爲て太玉串を捧しめ宮司大中臣氏其前に侍ひて此祝詞を申を云なり儀式帳の當時未使中臣詔刀を申事非りしがは此に大中臣と有は太神宮司の大中臣の事を云るなり蓋中臣氏の太玉串の前にて祝詞を宣る事天石屋戶の故事に由れる者なり宇治大內人職掌條に三節祭幷春秋神御衣祭及時々幣帛驛使時太玉串幷天八重榊儲備供奉と有り此に因て玉串大內人とも稱て山向內人共に同族にて磯部氏なり偖諸祭に玉串行事と云事有り神代紀に使山雷者採ニ五百箇眞坂樹八十玉籤ニと有は彼玉鏡を懸る料の八重榊と神等の進れる太玉串との料なり古史成文に此を五百枝と改たるは僻事なり新年祭條に幣帛使與ニ太神宮司ニ共神宮外院參入侍弖卽禰宜內人等候侍弖山向物忌父我造ニ奉留太玉串ニ宇治大內人二枝捧弖太神宮司仁給卽宮司手拍給弖禰宜生絹乃明衣幷冠着左右肩仁木綿多須岐懸弖太玉串四枝手拍弖給弖捧持弖左方立宇治大內人太玉串八枝捧持右方立共發と有る此太玉串を捧るなり卽太神宮司從ニ版位ニ進告刀申畢時仁波返ニ就本座ニ卽宮司之手捧持太玉串二枝波宇治大內人自ニ版位ニ發受取弖同就ニ本坐ニ而捧持卽禰宜召ニ大物忌父ニ令レ進第三御門之左方置進次召ニ宮守物忌父ニ共禰宜捧持太玉串四枝進同御門右方進置次召ニ地祭物忌父ニ此宇治大內人加捧持太玉串分ニ四枝ニ令レ進同御門左方爾進置卽宇治大內人捧持四枝參進同御門右方進置卽玉串進畢云々と有て太玉串は大前に進る止事無て重き大御幣なり、此事已に新年條月次條共に云り上には月次例を引たれば今態と新年例を同じ事ながら引出たり新年に左方右方と有を月次には東頭西頭と云り偖度會宮にては太玉串は菅裁物忌此を造り玉串行事は禰宜の行ふ所作なり九月神嘗條にも出たれど事を甚く略き過たり右の太玉串は山向物忌父此を作り宇治大內人此を行事奉る事なれども其始を思へば斯る可くなむ非ぬ御鎭座の當時より度會宮御鎭坐の時迄は天牟羅雲命の神胤なる度會神主の遠祖

より受賜り傳へ所なるを二所太神宮の神人相分り仕奉る頃より宇治大内人の職掌と成て其造奉るも其同姓磯部氏より山向物忌と成て供奉り度會神主より菅裁物忌と成て供奉る事と成たるなり（但し菅裁は度會宮にて供奉る例なり其儀式帳木綿作内人條に三節祭供奉木綿作儲員二千二百五十枚太神宮一千二百枚度會宮一千五十枚祭別三百五十枚と有て太神宮には木綿作内人度會宮より調進奉る事なり備此木綿作内人は石部氏にて宇治大内人山向物忌等の其なる之役宮にて二所太神宮に供奉る事は度會神主に職を受たるなり）其は神名秘書に八重榊太玉串の由來を彼石戸段を集記せるに掘ニ天香山之五百箇眞賢木一而上枝懸レ玉中枝懸レ鏡下枝懸ニ青和幣白和幣一（伊勢太神宮寶前奉レ立之近八重榊[illegible]也載ニ大日本紀一[illegible]）令ニ太玉命捧ニ持幣帛一令天牟羅雲命捧持太玉串亦令ニ天兒屋命以ニ廣厚稱詞一祈ゝ啓矣と有る此本注を閲に此は大同本紀の傳と通えたるか儀式帳の趣にては太玉串八重榊同物なるを手に捧ると庭に立るとを以て云別てる狀なるか其玉を懸け鏡を懸け青和幣白和幣を懸たるを八重榊と云て又一種太玉串と云が有は同帳に此今賢木懸ニ木綿一太玉串止號レ之と有る如此くの物有しならけん此を以見に八重榊は神等の御靈を寄給はむ料太玉串は神の御前に捧る幣なりけり其は秘書に御天降の事を云るに天兒屋命（中臣遠上祖也）以ニ天津諄辭之太祝詞一令レ掌ニ解除一太玉命（忌部首上祖也）捧ニ太幣天牟羅雲命ニ（度會氏上祖也）取ニ太玉串一天三十二神相副從云々天降と有る此太幣は八重榊に皇太神の御形代を懸奉て布理奉り太玉串は其に覆ひ隱し奉りて供奉仕奉れる由也（此は世記に在る傳なるが兩部習合者の加筆等有て全くは取難き所なり師の古史徵神名學書に引る或書に云々天下坐爾時天押雲命以ニ天津[illegible]辭ニ解除清淨而天八重雲出之道別道別天下坐を有り此は天兒屋命の事なを其子天押雲命の事と爲るにて別也）右の如く太玉串の事に於ては度會神主の遠祖天牟羅雲命の供奉れる神事にて其家に傳ふる職なり止由氣宮儀式帳度會神主職掌條に三節祭並時々幣帛使參入時爾太玉串捧持齋敬供奉と有は其本末打合て動くまじく思ゆるなり是以て玉串内人山向物忌職掌は度會神主の家業なりし事を知れり又太神宮に木綿作の内人物忌無て度會宮の木綿作内人より二所太神宮に供奉るなとも其本度會神主に傳りたる遺意を存せる者なりけり（大神宮式に著ニ木綿一賢木是名ニ太玉串一と云る其木綿の太玉串に取て最重き所なるを思べし）備此說定るに就て備考るに右度會神主遠祖は天牟羅雲命に坐か阿波齋部に由有る神には坐さるか神名式に同國麻殖郡忌部神社（名神大月次新嘗或号ニ麻植神一或號ニ天日鷲命一）と有る相並て天村雲神伊自波夜比賣神社二座と見えたる一柱は后神に坐と思えたるに同國板野郡大麻比古神社（名神大）有り此麻は奴佐と訓べくして其祭神を神名帳頭

注に猿田彦命と有は誤れる傳なから然誤る可き所以有り其は太神宮の太玉串に預る宇治大内人は其神の裔なるに就て其太玉串を始て供奉るは其神ならむと思僻めて天牟羅雲命の事を然傳誤れる者なりけり且此神は天石門別神の末なるに同國名方郡に天石門別八倉比賣神社大月次新嘗と有に名方郡佐那河内村と云に在り其地名は伊勢國多氣郡佐那神社有る其より出たるなる可き[illegible]太神宮[illegible]別の下に云るが如くなる上に天石門別豐玉比賣神社有り並て[illegible]能[illegible]比古神社有り天石門前神の亦名[illegible]間戸命[illegible]間戸命とまうせるにもかくまた麻殖郡に天水沼間比古神社有り此は水取の古事に由有り並て天水塞比賣命神社有に其后神ならむと思えたるに立復りて考れば彼伊自波夜比賣命と申も石榮（イシハヤ）にて去來之眞名井などにも由有て思ゆ天村雲命の姓氏錄右京天神に額田部宿禰明日名門命三世孫天村雲命之後也と有此を豐受太神宮禰宜補任次第に天牟羅雲命云々天曾巳多智命子天嗣杵命子天鈴杵命子天御雲命子也と有る此に依れは天底立命の四世孫也又同錄山城國天神に額田部宿禰明日名門命六世孫天由久富命之後世と有る此は下に云ふ彦由都久禰命なる可し此を數るに三世天村雲命其子天波與命天日別命但此は別人に非す度會系圖に天村雲命子天波與命と見え例文に天牟羅雲命子天日別命と有り此二を合せて知らる詔刀師沙汰文に天日別命彦國見賀岐建與東命彦由都久禰命と有る此にて明日名門命より六世の數合り以上天村雲命より下つ方の定めなり又伊勢朝臣條に天底立命孫天日別命之後也と見えたり但此は師説の如く孫は裔の意に見る可し天底立命より明日名門命は出坐りと見て其系を見下すに天嗣杵命有り天鈴杵命有り其次なる天御雲命は天牟羅雲命の父なる由例文に所見たれは師說に天嗣杵命と云るは即手力男命の亦名なりと云れたるは諾ふに足れり然れども此に說有り此に就て思ふに雜例集なる神服部等か嘉應二年解狀に以神部等遠祖天御桙命爲レ頭以二八千々姬一爲二織女一と有は此手力男命なる可し八千々姬の栲幡千々姬命なるに合せて思ふに姓氏錄に服部連天御中主命十一世孫天御桙命之後也と有るに次なるは同じ服部を熯之速日命之後也と注せり此熯之速日命は火産靈神より成坐し所にて建御雷神の御祖なり然らは天御中主命十一世孫天御桙命と有は如何と云に例文度會遠祖奉仕次第に天御中主尊十二世孫天牟羅運命と有る其家の系譜を被召たるより其命の父たれは十一世とは云るなり其氏々より奉る所を錄されたれば斯る事も有べきなり此に依て予は天御中主命高皇産靈神皇産靈命父天底立命に係たる度會神主の系記は取ず其服部連の出自を熯之速日命と云るに纜（カタツケ）して必火産靈神の裔ならむと思ひ取れり其は同神の統にして末は別なれど

同錄佐伯造條に天雷命孫天押人命之後也と有る其天押人命の父は石門別神に坐ば其祖父は天雷命に坐り天雷命は亦名天鳴雷神とも申して謂ゆる大雷神も坐せは此より系記を起すべきなり然は天底立命は何れの神にも御祖たれは措く第一天雷命にて第二天御梓命にて謂ゆる天手力男命亦名は明日名門命に坐り天闢梓命とも天鈴梓命とも申すは其亦名なり此は其體用に依て異なるが如く聞ゆるなり第三天村雲命なり天御雲命と申すは其亦名なる可し彼水取の事に依て鳴雷命と御名に負るも此天鳴雷神に對給へるに依てなり師說に此を天忍雲根命の亦名と爲るは非ず 此は甚々紛はしき事なれば其心して見べきなり大凡人の容易く語る可き所に非ず 斯れば天太玉命天押日命天日鷲命等は皆此天村雲命の御兄弟なる所なれば尤齋部に親しき由緣有る事なりけり 但此は太玉串の起元を云むと爲て思えず長々しき譚言を爲てけり然るは彼家の系記已に中古と雖も如此き亂有て天村雲命より以上の事は悉くに妄記せるが虞かりてその誤反て朝廷の典故に迄及べるが著しきに得堪難ての事なり ○隱侍天は太玉串を捧たる形容なり鈴屋大人說に隱とは捧持て其枝に覆はれたる樣を以云なり笠を著るをも笠に隱ると云にて心得へしと云れたるが如し 上に引る玉串行事の所に心を附て見べし實に其捧たる形容現に見るが如し然るを祝詞考に此玉串齋王の御手に取て給ふなれば黃小枝なれど隱と云は文なり云々と云れたれど虛文を飾るは外國人の事也○今

年六月十七日乃朝日乃豐榮登爾稱申事乎行事記に出たる此詞には此に續きて天津詔刀乃太詔刀事乎以稱申事乎と有り 九月神嘗祭詞にも然有り此には脫たるが又は本より無りしにや無ても聞ゆ 考に外宮にては十六日に日を換て用るなりと云れたるは古今の發明なり然らは儀式帳にこそ有め延喜の頃は兩宮共に先中臣申二詔刀一次宮司宣二祝詞一と有に此に度會宮には中臣の申す耳有て宮司の宣へき者無きは此詞を換て用ふる例なるが故なり ○神主部物忌等諸聞食止宣 神主部共稱唯 と有は此詞を宣畢たる時禰宜內人以下稱唯する事上なると此と二段なり 上には禰宜內人等共稱唯と有れども共に同じ事なり

荒祭宮月讀宮乎母如是申進止宣（アラマツリノミヤツクヨミノミヤ爾カクノゴトクマヲシタテマツレトノル） 神主部（カムヌシベ）共稱唯（トモニオヽトマヲス）

此は右二宮にも此天津祝詞を申て幣帛を進れしと太神宮の禰宜內人等に宣なり 度會宮にても高宮爾毛云と云言を補て申なる可し 若て此詞を其祭日に持參りて其大前にて申す事なり儀式帳には記さすと雖も止由氣宮儀式帳に以二十七日一高宮祭供奉告刀申と有にて所知たり太神宮年中行事に十七日高宮御祭事 堪ル事之禰宜申二詔刀一各在座 十八日荒祭宮御祭事 玉串大內人申二詔刀一 と見えたる此なり 凡ての事共に荒祭高宮相同じき事人の知る處なれば此を以定むへし 但皇太神宮儀式帳當日太神宮に御調糸を納奉て拜奉

れる事を云る次に向二荒祭宮一四段拜奉但内親王不レ向二荒祭宮一と見えたり太神宮式に既而衆官退出即使及宮司以下向二荒祭宮一齋主不レ向と記し建久行事記にも玉串大内人爲レ奉レ納二荒祭宮御調糸一立座次第如二御衣之時一祭使宮司等自二南御門一退出神主從西御門退出於二荒祭神拜所一祭使並宮司與二神官一答拜々八度手兩端次玉串大内人並荒祭宮内人物忌等一參二彼宮一と有て祝詞の事を載ざるは今日は御調糸を彼宮に納て拜有る耳なるが故なり行事記の神衣祭條には當日玉串大内人詔刀申事見えたれども其は太神宮も荒祭宮も共に同日の祭にして別日を立されぱなり此は十八日荒祭宮祭十九日月讀宮祭と其祭日各々別々に在を思ふべし○儀式帳十八日條に荒祭宮神酒一缶神贄一荷と有て次に以二同日一荒祭宮爾祭供事禰宜内人並物忌父妻子皆悉參集仕奉行事向二正殿一四段拜奉旦短手拍又再拜奉畢先其宮内人等儛仕奉次物忌父儛次禰宜儛次大内人儛次諸内人物忌等人別次々儛畢即後手拍二一段一罷出と見え神田行事條に荒祭宮湯貴清酒料六十束祭別廿束と有て外の別宮の列に非ず止由氣宮儀式帳に以二十七日一高宮祭供奉告刀申物忌父禰宜内人等妻子皆悉參集拜奉然即大直會被レ給其直會人給飯者宮炊諸内人並刀禰等給又禰宜内人等妻子各熟食儛人別被レ給畢時倭儛仕奉先高宮物忌父行次禰宜次大内人次小内人等次刀禰等仕奉と有ども見合せて悟べし行事記十八日神事條に今朝御巫内人等四至神並天津神國津神八百萬神達祭件日朝荒祭宮下部等自二由貴殿一

神戸所進缶一口菓子贄請取供二進彼宮之後於二御前一各預二神直會一例也同朝内外物忌父等着二衣冠一同自二由貴殿一神戸所進缶一口菓子贄請預宮比矢乃波々木神祭也云々於二荒祭御神拜所之南一在二手水一彼宮下部役在二手水紙一次著二鬘木綿一又荒祭子良同著二鬘木綿一參于時正權神主玉串大内人彼子良前居神拜八度手兩端其後於二子良一者退出至二正權神主玉串大内人等一者解二鬘木綿之後著二一殿一正員禰宜南坐北向次玉串大内人着權官者北坐南向各東上也物忌父等西妻東向祗候也南上在二直會饗膳一寄二戸勤一也陪膳役彼宮内人物忌父等也直會後於二櫻宮前一在二倭儛一物忌父等自搔二御琴一御歌奉仕其次弟如二由貴夜一と有宮比矢乃波々木神祭の事は已に上に云り○月讀宮は太神宮式に伊佐奈岐宮二座去二太神宮一北三里伊弉諾尊一座伊弉冉尊一座月讀宮二座去二太神宮一北三里月夜見命一座荒魂命一座右祈年月次神嘗等祭供レ之其宮別各内人二人其一人用二八位已上并蔭子孫一物忌父各一人但月讀宮加二御巫内人一人一と見えたり儀式帳に月讀宮一院在二太神宮以北一相去三里正殿四區之中三間長各一丈七尺丈弘一丈高八尺一間長八尺弘六尺高六尺此一稱二伊弉諾尊一次稱二伊弉冉尊一以上奈良朝廷御世定祝次稱二月讀命一御形乘レ馬形着紫御衣金作帶二大刀一佩レ之次稱二荒魂一以上内人物忌定

供奉御床四具御倉一宇（長一丈六尺弘一丈四尺高八尺）玉垣四重（長廻卅二丈）御門二間（弘七尺高九尺）と有て此は伊佐奈岐宮は社號なる時に記さるに依て式文には合さる也右四區の中二區宛東西に支分たり其は同帳（六月例）此祭條に四神殿在西宮二殿（一殿坐伊佐奈岐命靈一殿坐伊佐奈美命靈）東方二神殿在レ之中（一殿坐月讀命靈一殿坐同荒魂）と有が如くなり此を管て月讀宮と申す事は伊佐奈岐宮は後に祀給へるにて即其宮に屬か故なり所以に年中の諸祭等には此四神を凡て月讀宮とは被記たり（然るを世記以下の書に別條に記せるは右の式文に倣ひ云るなり神名秘書に仁壽二年八月二十八日依二洪水一神殿流損云々齊衡三年九月廿日云々急造二御殿一奉レ遷二兩宮御體一供奉也伊佐奈岐神與二伊佐奈美神一又月夜見命與二同荒魂命一正殿洪水之時御同殿之間奉レ任二御憲一奉レ遷二于同殿一也貞觀九年改二社號一可レ稱二宮之由一四人員三同十年始二作寶殿一但伊弉冉社月夜見命之社無二別作一也と有て此より二社とは成れり）偖月讀宮御鎭坐の始は倭姫命の御世に在る可し其は儀式帳の首に掛畏天照坐太神月讀之神所レ稱二伊弉諾尊伊弉冉尊共爲二夫婦合一所レ生御形鏡坐供奉行事天照坐皇太神乃伊勢國度會郡宇治里佐古久志留伊須々乃川上爾御幸行坐時儀式云々と有此は皇太神御遷幸の事耳を云が如くなれども其中に月讀命の御事の孕りて聞ゆるは必皇太神と共に垂仁天皇御世に鎭仕奉給ひし者也然るは世記なる月讀宮の下に飛鳥御宇丙寅年十一月十一日遷二于魚海神社一也と有此は允恭天皇三年なる事云も更なり此を以其古き事知べし（飛鳥宮にて丙寅の干支有は此御世ならでは有事無し天武天皇飛鳥清御原宮には非ず神名式に伊勢國多氣郡魚海神社二座と有は月讀命荒魂命二柱なる可し神名秘書に引る儀殿儀式帳に魚海社三前是月讀命豐玉彦命豐玉姫命合三社神靈也と有を以見に此豐玉彦命豐玉姫命二柱を合せて荒魂命と申すと通えたり就世社記に云書に飛鳥宮御代丙寅歳十一月十一日月夜見命荒魂命靈鏡奉レ遷二于魚見社一是神託也と有を以見に儀式帳なる御形鏡坐と有るも月夜見命に係て聞ゆめり然れば其御鏡は魚海神社に被移て此には馬乘人形の御靈代を留め給へるなり偖世記御遷幸條に皇田社定賜支從二其處一志天御船乘給白支幸行其河後江爾到坐于時魚自然集出天御船爾參乘支爾時倭姫命見悦給白支其處爾魚見社定賜支と有る此社に右の御鏡を遷奉れるなり）續紀二卅寶龜三年條に八月甲寅幸二難波内親王第一是日異常風雨拔レ樹發レ屋卜レ之伊勢月讀神爲レ祟於是毎年九月准二荒祭神一奉レ馬又荒御玉命伊佐奈岐命伊佐奈彌命入二官社一又徙二度會郡神宮寺於飯高郡度瀬山房一と有る此は雜事記に天平神護三年十月三日逢鹿瀬寺永可レ爲二太神宮寺一之由被レ下二宣旨一と有る其因醜き事を怒給へるなるが此より僧寺の我意を振ひて神人を輕蔑しめたる事見えたり此に因て同七年條に左大臣宣奉レ勅永可レ停二止神宮寺一飯高郡可二破越一宣旨と同記に有は此月讀神の御祟等の事に思し合させ給ふ御事などの有けるなんめり（神宮は更にも云ず別宮の神に至る迄も佛法を嫌ひ給ふ事如此と稱德天皇の佛を御自御崇信の餘に太神宮寺を定させ給へるも其は己命の好ませ給ふ所を以神にも請申させ給へるなり僅に五六年ならでは其神宮寺の保たぬこそ愛たけれ然れども寺地を[illegible]給へる御罪は責去所無き心ちす）然れは月讀神の宮號は此時に起れるなり此より

前に瀧原宮同並宮伊雜宮等は在れども其を超て荒祭宮に准へ奉る事此に始まれり但宮號の事を載すと雖も准二荒祭神一と有にて所知たり若て荒御玉命伊佐奈岐命伊佐奈彌命等の三前も始て官社に列り給へるなり儀式帳に奈良朝廷御世定祝とは其を云るにて本より月讀神と共に坐し者なり同帳榛原神社の下に稱二天須婆留女命一云々奈良朝廷御世定祝と有も官社に列なりしなる可し（神名秘書に貞觀九年八月改社稱宮以來月夜見命與二同荒魂命一靈御形同殿坐也と有れども此度のは下に三代實錄を引たる如く伊佐奈岐宮の御事なり思ふに荒御玉命此時に宮號有し者なる可し）三代實錄十四に貞觀九年八月二日戊辰勅二伊勢國一伊佐奈岐伊佐奈彌神改レ社稱レ宮預二月次祭一並置内人一員と有る此即神名式神宮式の如く伊佐奈岐宮月讀宮と相並坐す所以なり（太神宮式は内人二人と有は此兩神に一員宛を奉られたる數なり）此よりは伊佐奈岐宮其上に居給ふと雖も月讀宮に屬給ふなり其は此詞に荒祭宮月讀宮云々と有れは一に含たるかと思ふに然らす年中行事に十九日朝月夜見伊佐奈岐兩宮御祭事と有り本注に東月讀宮一禰宜申二詔刀一西伊佐奈岐宮詔刀無と見え建久行事記に載る彼宮月次祭詞にも伊佐奈岐宮（爾毛）如此申奉止詔と有て凡ての狀瀧原宮と並宮との如き差異は有なり然れども其神の尊卑有る

事なる故に伊佐奈岐宮の未宮號有ざりし延暦の昔も先其神を拜て後月讀宮に向ふ事なり（然るを雜事記に載る天安元年九月八日官符に應レ預二把笏荒祭月夜見伊佐奈岐瀧原並宮伊雜多賀宮宮掌事と有て此時已に列宮の列なりしは不審しき事なから儀式帳にも已に西宮と有れば官よりこそ奉らざりけれ内々には宮號を以會釋奉しなり）倩當宮祭の事は儀式帳に月讀宮酒一缶贄一荷宛奉と有て以十九日未時月讀宮祭行事四神殿在西宮二殿（一殿伊佐奈岐命 一殿伊佐奈彌命）東方二神殿在之中（一殿坐月讀神 一殿坐同神荒魂）此先西宮拜奉畢即退東方宮向禰宜告刀申々畢朝廷幣帛並御馬等波即其宮内人（爾）預供奉但御鎰波同内人持治亦朝御饌夕御饌並直會人賜即儺仕奉事波荒祭宮行事與同と見えたり延喜の今と同じからす其心して見べし（延暦の當昔は四神殿なりしかども二殿に坐る事上に云り此に朝廷幣帛御馬等の事は式文には非れども當時月次神嘗共に常に奉れりしなり神嘗祭にも御馬の事有を式文には見えず彼神衆有て近き頃なりし故に未停止しなり）行事記に云く十九日月讀伊佐奈岐兩宮御神態次第朝件兩宮内人物忌參二宮廳一請二取兩宮加文並權任神主差符一歸二參彼宮一（謂二加文一者御糸奉納文也件文與書二禰宜判所一）次彼宮下部一人以二件差符一催二權任神主並玉串宿館一仍各着二衣冠一企二參詣一于時一禰宜布袴其外皆衣冠引率參詣前陳彼宮御鎰（件御鎰本宮酒殿奉納而彼出納二人所レ奉レ持也）在二警蹕一件御鎰持之役也於彼宮先手水（件役人二人也桶入レ水以レ杓懸一次入以二手水觚一入別爾分給レ之）次先參二月讀宮一東爲レ上列候次着二木綿鬘一正權神主並玉串大内人

手一端之後得之者ニ用之一又下部假石壺造一禰宜被石壺覽詔刀申度會乃宇治乃河原田村乃下津石根爾大宮柱太敷立氐高天原爾千木高知良皇御孫命稱辭竟奉留掛畏支月讀皇太神乃廣前爾云々今年六月十九日乃朝日乃豐逆登爾稱申事乃由乎平久安久聞食止恐美恐美毛申給久止申伊佐奈岐宮爾毛如此申奉止詔給天在一年詔刀畢之後著ニ本坐一加署吹二禰宜退立伊佐奈岐宮參候兩宮內人物忌著衣冠奉レ解ニ御戶封一兩宮物忌各於ニ御門外一向ニ神主一月讀宮御封開申破次奉レ開ニ兩宮御戶一荷前御調糸奉レ納次奉レ閉ニ御戶一次著ニ衣冠一下部一人封紙二筋並硯等持來一禰宜判申者進著之後件封兩宮并殿役人給即奉レ付ニ御戶一之後又兩宮物忌如レ前向ニ南各御戶御封畢之由申其後神主等先伊佐奈岐宮參拜八度手兩端次月讀宮歸參而拜八度下兩端其後解ニ豐木綿一著ニ一殿一在ニ直會饗膳一件饗膳兩宮內人物忌等皆ニ御戶一勤也隋膳者ニ衣冠ニ內人物忌等也畢之後於ニ月讀宮御前ニ大和舞奉仕有ニ名告一各殿位中也舞之後必各參ニ伊佐奈岐宮御前ニ拜四度無レ手畢後正權神主並玉串大內人御鎰奉ニ相具ニ歸ニ參本宮一直於ニ爲居邊一洗レ手之後神拜例也と見ゆ儀式帳の古と行事記の今と兩宮の御上に異りは有れども其拜禮は伊佐奈岐宮を以先とし祭は月讀宮を以專ら爲る事上世の定の如し

○九月神嘗祭

二所太神宮共に年中諸祭の中に三節祭を重とし其三節祭の中に此神嘗祭を以殊に重く爲る所なり續紀に延曆九年九月甲戌奉ニ伊勢太神相嘗幣帛一と見えたり朝廷に於ても其式甚嚴重なり幣帛使を被立る大內の御神事の新年月次神嘗新嘗と共に中祀の一なり諸司此爲に齋し又廢務なり此を以て今日の御神事の他に殊なるを知るべし全く皇太神を尊奉り給ふの餘に今日は此兩宮に限れる御祭なり然るは貞觀儀式に九月十一日奉ニ伊勢太神宮幣一儀前四日外記錄ニ王氏五位已上四人歷名一封之令ニ神祇官卜一五世者不レ須神祇官卜畢注合否進外記執ニ之於大臣前一開レ封令レ覽訖喚ニ卜食一者仰レ之亦告ニ神祇官一○令云太政官式に其使者太ニ官點ニ五位以上王四人一卜定用ニ卜食者一人ニ大臣奏聞と見ゆ又太神宮式に凡神嘗祭幣帛使取ニ王五位以上卜食者ニ充之云々と見えたり五世者不レ須とは繼嗣令に親王五世雖レ得ニ王名ニ不レ在ニ皇親之限ニと有此なり其日昧爽掃部寮於ニ八省院小安殿東三間中央ニ鋪ニ御座一東面其後施ニ屏風一東壁下鋪置レ幣案薦レ南豐受宮幣在ニ太神宮幣在ニ北一西第一間北壁外置一枚第二間鋪ニ裹幣葉薦一其左右鋪ニ長席一爲ニ裹幣者座一第三間北壁下鋪ニ內侍座一其南少東鋪ニ長疊一爲ニ閣司等座一東廊鋪ニ參議以上座一西面南上北廊鋪ニ少納

言辨座一南面東上其西少後鋪二外記史座一其後舗二史生官掌坐二同レ面上位平旦内藏寮官人一人率二藏部二人一將二幣物一候〇今云内藏寮幣なり同式に九月十一日祭官一人率二史生一人藏部二人一執二件幣物一於二大極後殿ノ下一候レ之云々と有り内侍以下四人從二大内一出レ裹備官人執置二葉薦上一〇今云内藏寮式に内侍已下四人從レ内退出依レ例裹修訖案取置二案上一立二葉薦上一臨時幣帛亦同と有り西宮記には内侍女藏人向二八省一裹レ幣と有り中務錄率二省掌一入置二版於小安殿東南庭一自二小安殿東南廉一斜去二丈二尺向レ乾置レ版是爲二前版一也又斜去一丈更東北去四尺向レ乾置レ版是爲二後版一也乘輿御二殿座一〇今云西宮記に云く當日供二御湯一上卿奏二其由一王卿着二北廊一主水供二御手水一天皇出御と有か其本注に御屏風東面端二一間一并置二内外御幣一太神宮幣北外宮南各立二小案一置レ之式文云天皇先拜二御幣一次召二舍人一外記奏式云御座在二中央一幣在二東二間一今此儀不レ用と在り勅召二舍人一二聲舍人四人共稱唯少納言代人後勅レ喚二中臣忌部一少納言稱唯退出云喚二中臣忌部一共唯入各就レ版中臣就二前版一忌部就二後版一後執者一人以二卜人一先レ之隨二忌部一入立〇今云西宮記に中臣前著二木綿二忌部後取二懸木綿榊一と見えたり江次第に中臣前版忌部卜部後版と有り勅二忌部參來二忌部稱唯升レ殿跪拍レ手四段先執二幣受宮幣一授二後執一太神宮幣拍レ手如レ元自持復レ版毎レ執レ幣拍手一段訖勅二中臣參來一中臣稱唯升レ殿跪侍勅好申天奉禮中臣稱唯訖相引還出先忌部次後執者次中臣少間乘輿還レ宮蹕而不レ警即日使等從二神祇官一發向廿日使等就二内侍一復命と見えたり偖御使實は上に所見たる如く王氏を任るゝ事なるに儀式に其事無く少間乘輿還レ宮と有は不審しき事なり此少シバラクアリテ間と云程にや

其式は有ならむ其は西宮記に中臣忌部退出上卿令レ召二使王大夫一給二宣命一王大夫退出内記取レ筥上卿着二本座一使等遠去天皇歸御今日左右奉レ馬二走内藏寮進レ幣と見え江次第にも中臣退下忌部卜部後取次第出上卿召二使王方座前一賜二給宣命一自二昭訓門一往反宸儀入御云々と所見たれば必如此く有べき者なり但儀式に上卿の事無しと雖も太政官式に凡九月十一日行二幸八省院一奉二幣於伊勢太神宮一其使者太政官預點二五位已上王四人一卜定用二卜食者一人一大臣奏聞宣命授二使王一其神祇官中臣忌部發遣事見二儀式一と有を倚考るに此太政官預よりト定迄は前祭四日の事大臣奏聞宣命授二使王一は當日の事なりけり然れば此儀式にも上卿有りし事著き者なり但儀式及式共に未上卿の號無し大臣と記せるを今は人の能知れる後の號を用て通く悟さむとなり右の王大夫と云るはト食に合る五位の王氏を云り江次第十一日小安殿行幸次第に云く入レ月藏人奏二下内藏寮請奏一下二第一大臣一此次不レ行幸有無一前四日外記錄二五位以上四人一令二卜下一大臣開レ之云々前一日御装束如二記文一装束司〇今云此より前に十一日小安殿行幸二装束條有り此を如二記文一と云るなり當日遣二内侍以下女藏人女侍等一爲レ令レ裹レ幣也主殿寮供二御湯一内藏進二新御幣一公卿參陣無文玉帶蒔繪劍上卿奏二宣命清書一出二御南殿一内侍執二劍璽一候二左右一無二御反閇一左右大將立二南階左右一平胡籙淺履公卿列二立櫻樹南邊一西面北上別當平胡籙近衛引レ陣開レ門開二左腋門一少

納言率大舍人出鈴印（無奏）寄御輿（參議次將離列著之）掃部供筵道主殿撤帊參議中將進開御輿戶傳內侍劒置御輿中御前次乘御（東面東堅子執御履鞋無警蹕）次置御璽於輦中左次左右將監昇西階昇契下次開承明建禮等門無張御綱之仰公卿前行諸衛侍衛御大極殿後房（謂小安殿）入御後早開昭慶門公卿跪地寄御輿於北壇下（有雨筵道供於馬）道東內侍來執劒璽如前上卿問使幷幣具不於外記幷辨供御手水打敷宸儀出御於御屛風東御座藏人進御笏次御拜各兩段再拜次天皇召舍人（二音高長）少納言跪版（先之率舍人四人候幔外）勅中臣忌部召此間上卿聞少納言稱唯聲（二音）起座向東福門（先召內記見宣命返給內記々々立右階南）次率內記幷外記史經廊內向之衞府解弓箭上卿着門外西掖（南向）辨着門內東掖（南向）外記史着其東中臣忌部卜部立版（中臣木綿鬘忌部着木綿縵又中臣前版忌部卜部後版）勅忌部卜部參來忌部稱唯昇自小安殿南階拍手取外宮幣下授卜部（不替左右手）卜部復本座次又取內宮幣下復本座勅中臣參來中臣稱唯進昇階候巽角壇上勅如常能久申天進禮中臣退下（忌部卜部後取次弟出）上卿召使王於座前軾給宣命（自昭明門往反）宸儀入御內記取筥辨以下出立光範門內（西向南上）上卿下尻揖過（辨以下隨之）復昭慶門東座外記進壇上申使王申御馬由上卿令藏人奏之（往反自嘉慶昭慶等門）勅許之後即仰外記次還宮（以幣物之不見爲限）至承明門內（左右近次將相替立本方）次下御（無鈴奏警蹕名謁）と有り右の儀式に比較す可き者なり右等の事共を考亘すに忌部には幣帛を捧しめ中臣には詔刀を令申め王氏には宣命を令賫て被遣る事なるが中臣忌部に耳は勅有て其幣帛使たる諸王に却て大臣を以て令宣給へる事少く心行さりしかども熟思へば神代の故事に依て中臣忌部の祝詞幣帛を主る事にて此は今々の事には非ず上古より成來る任の所作なるを王氏を被遣る事は却て後なる故に其を主とは立給ひながら其儀式は改させ給はざるなり（中臣忌部卜部等を統領して王氏を被任る事は太神宮を殊に御崇敬有せらるゝより出たる事ながらも猶神世の遺風を重みし給ひて改易させ給はざりけり凡ての事神事より外に古を考る所は無き者ぞかし）四時祭式神嘗祭條に右當月十一日平旦天皇臨大極後殿奉幣（事見儀式）其使諸王五位已上及神祇官中臣忌部官各一人給當色執幣五人使從者三人各給纁衣布一端但齋王初參入之時設御座於大極殿（事見儀式）と有て齋內親王伊勢に赴かせ給ふ年には大極殿にて行はれ八省院に障有る時は神祇官廳にて被行る事なり江次第行幸神祇官被立伊勢幣儀に早旦內侍參神祇官用行事藏人車入自東院北門於

宮東門下車差北帳到正廳西第二間行事辨忌部內藏寮官人相共裹幣立高案其上置斗於其內裹之裹畢女官授內侍內侍懸手其後置幣案上行幸以前內藏官人守護之時尅行幸帛御裝束（若御里內裏路遠有往反間御位退御悤華於神祇官改帛御裝束○今云建武年中行事に御輿悤花を用ふ闈司領奏無しと有り）入御之後開北門御座定（後）開之女房六人先參在內侍座（如內侍定）以藏人被問事具否於大臣次供御手水（主水司自北面前第二間獻之頭藏人役之打敷御手洗杉手拭臺貫簀等如恒）次出御屏風東御座藏人頭獻御笏（於御屏風前獻之）次御拜兩段再拜次召舍人（二音）大舍人四人於東幔外稱唯少納言替蹕版膝行二度（揖）天皇宣中臣忌部召（世）少納言膝行退三度揖稱唯又揖起左廻還出次中臣忌部卜部立版天皇宣忌部參來忌部著木綿襷進取外宮幣退立壇上卜部參受幣復列忌部又進取內宮幣復列天皇宣中臣參來中臣進候天皇宣常毛奉（留）長月乃神嘗乃御幣（曾）汝中臣能申天奉（禮）中臣微音稱唯退即忌部卜部依次退出自東門中臣等進之間大臣著東屋內記捧宣命在後召使王於膝突給宣命王取之出自東門次大臣還幄屋辨以下出立幔西（南上一行）大臣還幄令藏人申（申）使王申御馬之由次還宮（今度寄御輿於壇上）左右大將列立幔內公卿列立

幔外に如し（初於内裏閤門內近衛府相撲并本殿無鈴奏名謁）と有か如し（次なる參內親王參入時詞の注に着王群行の事を云る其下に合せ見る可き者なり）其外主上行幸無き時は攝政參小安殿に被遣伊勢幣儀有り公事根源例幣條に「一日より今日に至る迄僧尼重輕服の人參內せず是は大神事なる故なり例幣とは伊勢太神宮へ御幣を奉らせ給ふ毎年の御事なるに依て例幣とは申なり昔は神祇官へ行幸成て此事被行る祭主中臣忌部卜部など參て御幣を請取て出づ使の王御馬申事など常の奉幣の如し此事朱雀院の御時より始らる」と有り斯れば其後は神祇官耳にて被行れたりしにこそ（同書藏人頭昔に建武年中行事を引て云く十一日例幣行事有り出御の儀常の如し內侍劍璽を持て前後に候す近衛次官若くは藏人扶持す御輿悤花を用ふ闈司鈴奏なし神祇官に行幸成て北廊に御輿を寄す幔內なり內侍二人候す近衛の次將劍璽を取傳へ如常下御なりて半敷の御座に渡らせ給ふ大障子も裝へり所々に布の衛立障子を立て間とす東の端の蔀の間に御幣を裹て案に置く巽に向たり次間に御座の御中を設く常の如し御湯殿の事有上卿寶の座に就て宣命を奏す帛の御衣を奉て內藏寮御前の御坐に着せ給ふ御笏を取て先御拜有り次に舍人を召す二聲少納言參て版に着く中臣忌部召せと被仰る少納言跪きて御を奉て高く稱唯して拝して出中臣忌部を召す忌部參て外宮の御幣を取て卜部に傳ふ其後內宮の御幣を忌部拍手して取て高く捧持て版に這行く次中臣を召す祭主此を畏む參て御幣奉る案の下に跪く能申して奉れと御らる中臣稱唯して出つ使の王御馬申事など例の奉幣の如し神祇官の東門を出て二條大路に到る程に御座を立せ給ふ警蹕の聞ゆるなり竟て還御常の如しと見えたり此はわに引る神祇官の次第に異なる所無きなり）但同書養老五年九月十一日に始て官幣を奉る」と有こそ疑はしけれ此は續紀に養老五年九月乙卯天皇御內安殿遣使供幣帛於伊勢太

神宮ニ并以ニ皇太子女井上內親王一爲ニ齋內親王一と有を云はゝ事始と云べきに似たりと雖も例幣の事は其後の紀文とても被載ず此は齋內親王を被進るに就て其例幣の事を云るなれは此を立て始とは定め難かり已に其より以前に出來たる大寶令に季秋神衣祭神嘗祭と相並べ記されたるを思ふ可し 後の御紀にも九月に御使を伊勢に參らせられたる事を記されたるには何か別なる子細有に依てなり其心して見るべきなりかし凡て公事根源に物の始を被記れし事如此き類多かり此は甚も久しき神代に起りたる事にて中々人世に定むる所ならず天皇の同大殿に在しゝ間は天皇の新嘗と皇太神の神嘗と同じ時に在て被行たるなり神宮を伊勢に被定たるより九月と十一月と相分たせ給へる事已に大嘗祭條に注るが如し 「但此事の神代より有來し事を心得むには祈年祭月次祭大嘗祭等ノ詞の下に注るを悉く讀見されば右の公事根源などの如き淺き處に落入めり然れば斯拜奉るは甚畏くは有れども道の爲には此事を得々すなむ 伯家部類に例幣事後花園院文安五年迄有レ之而其後斷絕與後光明院御代年中初度公卿勅使翌年より四姓輩勤ニ仕之一と有り然れば彼足利の凶賊か朝廷に滋蔓りし間は世も甚騷がしかりつる故に例幣の事なども一旦は中絕たるを世治りて後も未復古の時至らざりけらし後光明院天皇の大御世に當て舊儀に復れるは甚々愛たき御世の御榮なる者なり 文安五年より後光明院天皇承應元年迄は凡百九十七年計に至る可し四姓輩とは王氏中臣忌部卜部等を云るなり此天皇の萬に殊く坐御事は誰も知奉る事なれど此一大盛事を云書無ぞ遺憾しき」幣物の事は四時祭式に九月祭伊勢太神宮神嘗祭幣帛二箇 內藏寮供設 絁三疋絲八約倭文一端席二枚鞍二具馬四疋龍頭料布一端一丈四尺右當月十一日平旦天皇臨ニ大極後殿一奉レ幣事見ニ儀式一云々と有り 此なる云々の文は上に已に引る故に省しつ文德天皇實錄に嘉祥三年九月乙酉云々使レ例奉レ幣別獻ニ細馬五疋一以充ニ神嘗寶幣一と有れば定れる事年にや但三代實錄九に奉ニ伊勢神宮御馬二疋一と有れば右の五疋と有ぞ當昔の定なるに似たりける此絁と絲とは幣にて倭文席は異料なる事內藏寮御幣の例なり但止由氣宮儀式帳を見に馬斥奉進幣帛一箇絹一疋糸一屯と有れば絹二疋絲六約は太神宮御料なり賦役令集解に糸十六兩曰レ約也二斤曰レ屯也と有ば一屯は二約なり 其內藏寮幣は其式に伊勢太神宮祭錦一疋 寮物 兩面一疋深紫綾淺紫綾緋綾中縹綾黃綾各一疋 已上五綾若無者用ニ生綾一 白綾一疋 以上太神宮幣料 緋中縹黃皂帛各一疋 已上度會宮幣料 盛ニ裹料柳筥二合 各方一尺四寸宮別一合餘祭宮准レ此 庸布二段木綿小二斤葉薦一枚 分ニ用兩宮一已上官物 右件幣預前依レ例擬備九月十一日平旦寮官一人率ニ史生一人藏部二人一執ニ件幣物一於ニ大極後殿下一候レ之內侍已下四人從レ內退出依レ例裹修寮取置ニ案上一立ニ葉薦上一臨時幣帛亦同と有り以上太神宮式に朝廷幣と云る此なり 其太神宮式に所載る幣物は朝廷より寄奉らせ給ふ御封及神戸の荷前なり此祭使と宮司と二方より詔刀を奉る所以なり 江次第例幣條に早旦先裹ニ內宮料一 內侍典忌部內藏官人二人 錦一匹 藏人所進レ之 兩面一匹綾五匹 五色青赤黃白黑 以ニ調布一結ニ其上一入ニ柳筥一 以ニ木綿一結 以ニ葉

薦ニ裹レ之付ニ短冊ニ又裹ニ外宮料ニ五色絹次居ニ小安殿ニ東第一間薦上外宮料在レ外內藏寮護レ之圖寮書ニ送文ニ次神馬事四匹左右各二疋二匹置レ鞍二疋不レ置レ鞍云々と見えたるは即右に引る式文の幣帛の事なり此馬四疋の内三疋は太神宮一疋は度會宮御料なり行事記に神馬三疋之內一疋鞍置云々と見え又今度御祭之神馬之中二疋引ニ立內院ニ一匹留ニ置御鹽所ニ如ニ傳言ニ者一匹太神宮御料一匹荒祭一匹月讀宮御料歟と有り實に然る言なり下に云るを見べし此詞に常毛進流九月之神嘗乃大幣帛乎某官某位某王中臣某官某位某姓名乎爲使氐忌部弱肩爾太襁取懸氐持齋波理令ニ捧持ニ氐進給布と有は此を謂なり太神宮式に使中臣申ニ詔刀ニと有は此なる事儀式に好申天進禮と有にて所知たり江次第には如レ常能久申天進禮とも常毛奉留神嘗乃御幣曾汝中臣能申天奉禮と有る事上に引るが如し○太神宮式に九月神嘗祭と有る幣帛は太神宮司の宛奉る所にて其詞は此次に所見たり宮司宣祝詞と有る此也儀式帳に云く供奉御衣料糸壹拾二絇○今云太神宮式に太神宮御衣三疋禰宜預九月收ニ封戸調糸ニ潔齋所ニ[illegible]備ニと有り儀式帳禰宜職掌條に毎年九月巳之家仁養[illegible]乃赤引生糸九絇織奉太神御衣仁供奉と見え行事記に自ニ十一日朝ニ迄ニ十七日夕ニ於ニ御稻御倉ニ母良並織女一人所レ奉[illegible]也於ニ料糸ニ[illegible]正[illegible]宜所レ進也と有るは此れ也供ニ奉太神宮ニ絹一百七疋二丈調絹荷前料一百疋御ノ料三疋五色料一疋御幌料三疋二丈御門四間々毎五丈○今云絹は式に調荷前絹一百十三疋一丈二尺太神宮ニ百六疋所攝六宮各一疋廿四社料一疋一丈　尺と有て五色幣料絹一疋門幌料絹三疋二丈と此二は別條に出たり式の頭に神戸の加增たる故に如此くなるなり所管四處神宮調荷前絹四疋荒祭宮　疋月讀宮ニ一疋瀧原宮ニ一疋伊雜宮一疋○式文に至ては此外伊佐奈岐宮瀧原竝宮二宮共に神嘗に祭らる供奉太神宮處々神戸荷前物絹二疋白一赤一○今云式には此を載す絲三絇綿五十

三屯神衣料白布一端麻六斤○式云十八斤木綿二斤○式云十斤以上伊賀尾張參河遠江四箇國神戸供進腊魚卅斤○式云廿斤熬海鼠十五斤○式云十二斤鹽二石○式云六石堅魚卅斤○式云十四斤油六升海藻根卅斤○式云廿斤鰒八十斤○式云十二斤と有り式には凡てを此に終めて以上諸國封戸調荷前と見ゆ此は右の四箇國の外なり伊勢國司供進荷前絹一疋中男作物雜魚腊九十斤大○今云式には此二條見えず祭日料物酒米十石神祭料三石三斗供給料米三十五石○式には雜供料米廿五石と有り木綿十斤麻廿六斤○式には此二條見えずして鹽一石と有り諸國封戸調に籠たる可し神酒貳拾參缶伊勢國神戸十五缶神服織神麻績二缶度會宮櫟倉物忌供奉一缶伊賀國神戸二缶尾張參河遠江三國神戸各一缶御贄廿七荷○今云今本には小字に作れども止由氣宮儀式帳に擬ひて大字に改引つ懸税稻一千四百卅七束之中細税二百卅束以ニ一把ニ號ニ一束ニ○今云式に小税二百卅束と有此なり神麻績一百束神服織八十束飯野郡封戸十束伊賀國封戸卅束と有て伊賀に十束多きが故なり大半斤百八十束以ニ五把ニ爲ニ一把ニ○式に大税と有り神麻績百束神服織八十束と下に有る此なり大斤千卅七束○式には斤税一千二百廿二束と有り度會郡九百廿束多氣郡廿束神麻績百束大半斤細税百束神服織八十束大半斤細税八十束飯野神戸十一束大斤十束細税十把○今云十把即十束にて右の二百廿束の內なり飯高神戸六束壹志神戸六束　乃神戸六束鈴鹿神戸六束河曲神戸六束桑名神戸六束伊賀神戸卅束細税○今云斤税三束に當る尾張神戸廿束三河神戸十束遠江神戸十束○今云度會多氣飯高壹志安乃桑名尾張三河遠江を合せて斤税千卅七束なり散用太神宮千三百十七束荒祭宮五十束月讀宮卅束瀧原宮廿束瀧祭社十束小朝熊社十束右

當ニ祭之日ニ懸ニ御垣ニ蕃畢〇今云此に細税大半斤斤税を合せて散用する■なり式には斤税一千二百廿二束太神宮一千八十二束荒祭宮五十束月讀宮卅束瀧原宮卅束瀧原並宮卅束瀧祭十束伊雑宮十束並用ニ祓税ニ下條准レ此と有りて上なると通はて小税大税斤税の■太神宮に千四百九十二束なり舗設長畳廿張短畳廿張麻席四張繩席廿張麻簀三張前簀廿張蒲立薦三張以上宛ニ太神宮司ニ以ニ祭日ニ敷用〇今云式には帖廿枚短帖廿枚席廿四枚食薦廿三■防壁■枚と有り一白瓼二口陶水眞利三具〇式に■■三口と有り陶酒坏三具〇式に酒盞三口各加ニ酒臺ニと有り菓子佐良三具酒壺二口〇式には高臺。枚臺。酒壺各三口と有り食單料調布一端〇式に布一端と有り鐵一延忌砥一面鹽五斗已上宛ニ太神宮司ニ以祭祀用レ之〇式に■見えず下に案十脚著レ足行櫃八十合行櫃二百合切案十脚高案八脚大案十脚杓廿柄匏廿柄雑土器四千五百口とあり此は■には年中三節祭時供給備進■作雑器等と云る一條有て其に出たり薗二枚敷簀二枚以上神服麻續二氏神部仕奉〇式に此事見えず賜ニ禰宜内人物忌衣服ニ絹六十疋綿五十二屯〇式には■宜内人等明衣と有り此絹六十疋は次なる文より混れ誤れり此は次條なる員數を合せたる所なれば必大數にて在べき筈なれば誤なり今十字を補ひつ禰宜並大物忌二人賜絹六疋人別三疋綿六屯人別三屯大内人三人絹六疋人別二疋綿六屯人別二屯〇式には大内人四人なるは其頭一人を被加しなり宮守物忌一人地祭物忌一人御鹽燒物忌一人並三人賜ニ絹四疋三丈ニ人別一疋三丈綿三屯人別一屯大物忌父一人宮守物忌父一人地祭物忌父一人山向物忌一人父一人瀧祭物忌一人父一人御鹽燒物忌父一人御笥作内人一人忌鍛冶内人一人陶器作内人一人御笠縫内人一人日祈内人一人土師器作物忌一

人父一人御馬飼内人二人御巫内人一人並廿二人賜ニ絹廿二疋人別一疋綿廿二屯ニ人別一屯〇今云今本に大物忌一人父一人と有は誤なり今は太神宮式に依て削去て引つ荒祭宮内人物忌ニ人父一人并三人賜ニ絹四疋三丈内人一人二疋物忌一人一疋三丈父一人一疋綿四屯ニ内人二屯物忌并父各一屯月讀宮内人物忌一人父一人御巫内人一人并四人賜ニ絹五疋三丈内人一人二疋物忌一疋三丈物忌父一人御巫一人各一疋綿五屯ニ内人二屯物忌一人父一人御巫内人一人各一屯伊雑宮内人一人物忌一人父一人并三人賜ニ絹三疋人別一疋綿三屯ニ人別一屯瀧原宮内人一人物忌一人父一人并三人賜ニ絹三疋人別一疋綿三屯ニ人別一屯〇今云式には荒祭宮以下内人二人宛也其荒祭宮月讀宮等の内人二人絹三疋各一丈三尺綿三屯各一屯半と有り瀧祭宮の事は且ても見えず禰宜并大内人四人妻賜ニ祭日儛裝束料絹五疋ニ禰宜妻二疋大内人二人妻三疋〇今云大内人四人の内二人を出す事なるにや此事式に見えずと見えたり太神宮式に九月神嘗祭云々と幣物の事を記せる終に右月十七日祭ニ太神宮ニ禰宜大内人各着ニ明衣ニ分ニ頭左右ニ宮司立レ中次使忌部捧幣次馬次使中臣次使王入ニ就内院版位ニ使中臣申ニ祝詞ニ訖亦神宮司宣ニ祝詞ニ餘儀同ニ月次祭ニと見えたり右は幣物の例なりと雖も太神宮に寄奉る三箇神郡并六處神戸及諸國神戸の調庸田租を貢奉る其御祭なり荷前と云は其先荷を先奉る事にて新年月次祭詞に荷前者皇太御神乃大前爾如横山打積置氐波平聞看ニと有此にて皇太神の

神嘗は九月を以奉らせ給ひて天皇の大嘗は十一月に聞看す御事なり 此九月と十一月に定れる事は師說に神宮のは古建子の正月なりし頃の十一月を以祭られ朝廷のは建寅の正月を以て數ふる十一月を以聞看す由弘仁歷運紀考に云れたる實に然る事なり 田令義解に凡田租准國土收獲早晚 謂收獲者收は斂也獲者刈也晚者以九月爲早十一月爲晚也 九月中旬起輸十一月三十日以前納畢と見えたる以九月爲早と有る其最早き荷前を以神宮に奉らせ給ひ其最晚なる十一月を以新嘗は聞看す御定有に引る祝詞に甚暇合へる者なりけり 太神宮の荷前は右の如く九月に奉りて神嘗祭有を十二月に至ては諸所に荷前の御調を分ち參らせ給ふ事有荷前使と云る此なり右の如く太神宮を御敬信有せ給ふ事は神代の遺風なるを此に合へる條々は令條と云へど彼外國の制には非す 又賦役令に凡調庸物每年八月中旬起輸近國十月三十日中國十一月三十日遠國十二月三十日以前納訖其調糸七月三十日以前輸訖と有り神嘗祭九月に在り荷前と云ふ所以なり然るは荷前とは先荷と云て其土物を早く奉るを云なれは此に八月中旬起輸と有に合へり 又儀式帳御調荷前供奉行事に赤引生糸四十斤神郡度會郡調絲布五戶卅日調云々と有を其急ぎて奉るか故なり 同令義解に凡調皆隨近合成 謂二郡以上合成之內也 絹絁布兩頭及絲綿囊 謂以紙裹兩頭爲囊也 具注國郡里戶主姓名 謂若一戶合成者可注兩戶主 年月日各以國印印之と有り此事太神宮式に凡三箇神郡并六處神戶及諸國神戶調庸田租者依國司所移之調文租帳等宮司勘納と所見たり此神封物を以て三節祭及年中諸祭に被用る所也就中神嘗祭は其所々の神戶の荷前を奉貢る祭なる故に朝廷の幣帛も此荷前も異り無に似たりと雖も荷前は太神宮の神封物を被用るを以て詞も別に在て其文にも三郡國々所々寄奉禮留神戶人等能常毛進留由紀能御酒御贄懸稅千稅餘五百稅乎如橫山久置所足天云々とは有なり 此由氣宮儀式帳に佃奉拔穗乃御田稻乎先穗乎波拔穗爾拔旦九月神嘗祭供奉然所遺稻乎以旦將來至于九月云々又別一度供奉と有て九月神嘗に其稻を收て來年の神嘗に至る迄用る由なり此先穗は初穗を取事なるか荷前と云に同じ ○神祇令義解に季秋神衣祭 謂與孟夏同 神嘗祭 謂神衣祭日便即祭之 と有其神衣祭は儀式帳に神服織神服麻續神部等造奉太神御衣服并荒祭宮神御衣服供奉時乃太玉串并告刀種々行事四月御衣服供奉同と有り建久行事記に神御衣祭次第儀式行事如去四月但今度者詔刀文中爾和妙荒妙乃御衣并國々所々神戶等奉留荷前御調乃絹等乎平久安久聞食止恐美恐美毛申給久止被申其外皆如四月と有り 此を以見るに祝詞に御酒御贄懸稅の事有て御調絹の事無は此便に附て奉れしにや[illegible]神嘗祭[illegible]に謂神衣祭日便即祭之と有も其祭のなるか故なり此由[illegible]儀式[illegible]に以十[illegible]日[illegible]多氣度會二神郡國々所々神戶人夫等所進御調荷前[illegible]奉[illegible]五十[illegible]寶殿奉上と有は十四日神衣祭に就て其日[illegible]なれは決く十四日神衣の使に荷前調絹は被收るなりけり ○儀式帳神田行事條に九月神嘗供奉拔穗卌束と有を神嘗條には守御田苅拔穗稻乎云々自御倉下宛奉と有此は雜例集なれ太神宮年中行事に十

四日神田拔穗事と有本注に朝長官并目代神主及大少刀禰作丁等相共進レ自ニ宇治郷ニ御常供田拔穗即令レ持ニ祝部ニ歸參之間有警蹕ニと見ゆ行事記も然り但十六日御饌料也と見えたり 同書に云く件拔穗神事當時作法一禰宜不參者家之禰宜參衣冠出納飼丁等從ヲ致所布衣乘馬而前陣於岡橋辻西ニ在ニ直ヲ[illegible]云々其後參ニ御常供田ニ自ニ所之御社前ニ下馬歩行着ニ坐拔[illegible]町下[illegible]ニ鋪設ニ爲ニ致所沙汰ニ令レ呑レ酒ニ役人等ニ次權長詔刀申之後禰宜拔ニ初[illegible]後宇治郷大小刀禰等奉レ拔レ之ニ[illegible]三代宛十八束也[illegible]ニ見御田[illegible]後御稻差レ榊捧持權[illegible]者等而前陣[illegible]所[illegible]禰宜[illegible]居ニ參ニ于本宮ニ於ニ石壺ニ拜興玉之拜荒祭遙拜在手欘宮拜於ニ酒殿前ニ諸神拜如レ恒御稻者奉レ納ニ御倉ニ是來十六日御饌料也 ○儀式帳に云く以ニ十六日ニ先ニ神郡所々神戸人等加所レ進禰宜木綿作内人乃作奉禮留木綿并太神宮司乃申進留木綿乎以豆宮餝奉畢志摩國神戸人夫等所レ進湯貴御贄又度會郡諸郷百姓等所進雜贄禰宜内人物忌父等志摩國與ニ伊勢國ニ神堺島村々罷行豆漁雜御贄物等御鹽燒物忌乃燒進留御鹽等乎禰宜内人等悉進集自ニ宮西ニ川原爾大祓乃清乃大祓供奉幣帛殿進納畢即供ニ奉御饌ニ ○今云本には以十六日を十五日に誤れり今改む然れども此文疑はし此は止由氣宮儀式帳の文を書入たるが混ひて本文と成り其に就ては前後に打合ぬ事の有に依て次々なも以十五ト亥時と有を同日と改たるなり且度會宮にて清乃大祓と云は皇太神宮にて川原御祓なるを同事の二つ有べくも非ねは決く後人の手に成れる所なり 十五日夜亥時御巫内人乎第一門爾令侍豆御琴給弖請ニ天照坐太神乃神教ニ弖即所教雜罪事乎 ○今云月次條には此迄十五日夜亥時の文なり年中行事に十五日内院御卜事と有る此なり然るを今本上なるを以十五日とし此なるを同日と作れども全くの誤なり尤月次祭の如く此文此に有べくも非ぬを錯亂せるなり

自ニ禰宜館ニ始内人物忌四人館別解除清畢即禰宜内人物忌等皆悉自ニ宮西方ニ川原爾集侍豆先向ニ神宮ニ人別罪事令ニ明申ニ畢即向レ川御巫内人解除告刀申 ○今云此は十六日朝に在り川原御祓なり 畢皆悉率正殿院參入掃清奉畢即罷出之 ○月次祭に以ニ十六日ニ云々大祓畢然即以ニ同日ニ北禰宜内人物忌父等引率正殿ニ參[illegible]御内淨[illegible]畢出向ニ忌之天八重榊令ニ差立ニ[illegible]奉之即此自ニ宮司ニ宛[illegible]奉と有を以ておもふに上に在る所のをは決く後人の書入たるが混雜たれるなり 宇治御田苅稅穗稻乎大物忌宮守物忌地祭物忌并四人爾自ニ御倉ニ下宛奉御笥器忌鍛冶内人作ニ忌小刀ニ陶内人作ニ奉陶器ニ土師内人作ニ法器御鹽燒ニ物忌燒備奉御鹽等乎種々物忌等爾下宛奉又志摩湯貴大御贄種々下宛奉 ○今云此は月次條に以ニ十六日夜ニ此禰宜内人物忌等從ニ湯貴御倉ニ下宛奉大御饌[illegible]大御饌ニ時之料[illegible]稻乎以是禰宜内人四人仁大物忌并物忌父引率宮司所レ給衣[illegible]縫[illegible]又木綿[illegible]多須岐[illegible]之件御饌稻乎大々忌請豆[illegible]物忌作奉淨[illegible]捧持奉レ之大物忌々[illegible]奉御笥作内人[illegible]進上御饌[illegible]仁奉[illegible]進又禰宜内人等以ニ祭之月十五日ニ退ニ入志摩國[illegible]御贄[illegible]志摩國百姓ニ進上于[illegible]及度會[illegible]進上[illegible]備置レ之忌鍛冶内人之作奉御贄小刀[illegible]物忌之[illegible]作内人進上御酒[illegible]忌陶内人作進上御酒[illegible]坏[illegible]奉ニ[illegible]ニ進之ニと有を略き記せる也 上件器盛滿豆内院御門爾持參入豆亥時始至ニ于丑時ニ朝御饌夕御饌二度供奉畢又清酒作物忌乃白酒々作物忌作奉黒酒并ニ色御酒毛大御饌相副供奉畢次根倉物忌乃仕奉留神酒供奉畢 ○今本に酒作物忌乃白酒作物忌作奉黒酒と有は誤なる事月次祭由貴御酒條に云るが如し行事記に由貴御饌云々其朝即ニ六月御祭時ニ[illegible]御饌者[illegible]米也[illegible]祭ニ也とあり 即四段

拜奉弖内院御門閇奉弖外院罷出○今云月次祭條に四段拜奉手四段又後四度拜奉手四段打畢退と有り此に必脫文有る可きなり禰宜内人物忌等大直會被給畢倭儛仕奉畢歌詠六月祭大御饌歌同以二同夜一瀧祭行事右祭太神宮御饌祭同直會人給畢但禰宜宇治内人新稻酒飯食始但不レ爲レ儛○今云此を月次祭十七日條に平旦司御饌毛如二上件一引奉且備供奉ヒルヨル荒祭幷瀧祭二所御饌波其當宮物忌内人等此太神宮之如二御食一同日夜具合二備持一此禰宜内人四人引率參入祭供奉拜奉行事太神宮同然從二其瀧祭之地一於二太神宮奈保良比所爾一參入來以二同日夜一御食奈保良比禰宜大内人並諸物忌内人及物忌人等戸人男女等皆悉參來侍云々と有り此同日夜とは朝夕の大御饌の事を云なり此文を按合するに荒祭の御事を脫せるなり倭神田行事二に荒祭宮清酒料稻六十束祭別廿束瀧祭奈保良比料稻百五十束祭別四十束と見ゆ十七日辰時國々所々神戸人夫等所レ進神酒幷御贄等乎自二御厨一奉レ入次二箇神郡幷國々所々神戸所レ進懸稅幷神服織神部等所進懸稅乎内外重玉垣懸奉畢○今云其儀式止由氣宮儀式帳に以二十六日朝一國々所々神戸人夫等所二仕奉一御酒幷御贄等乎自二御厨一奉レ入ハ二箇神郡國々所々神戸所レ進懸稅等乎千稅余八百稅爾懸奉其奉時禰宜太玉串捧持弖懸稅先立參入大内人大物忌父等並戸人夫等懸稅稻乎百八十荷持參入弖拔穗稻乎波内院持參入弖正殿下奉置懸稅稻乎波玉垣爾奉と有る態に如此く有べき者なり以二同午時一齋内親王參入坐二川原御殿爾御輿留弖手輿坐弖致二第三重東殿一就二御坐一○今本第四重に作るは誤なり月次條に第三重と有に依て改つ外玉垣門の内に在ばなり即太神宮司御蘰木綿捧向レ北跪侍内侍罷出弖受弖轉親王奉即親王手拍受○今云月次條に著二木綿蘰一とあり宮司又太玉串捧持向北跪侍又内侍罷出弖受弖轉親王奉即親王手拍受弖即内親王自發内玉垣御門就二座席一命婦又從レ之即避レ席進レ前再拜兩段○今云月次條には四拜四段と見え止由氣宮儀式帳には此の御拜の事に太玉串乎捧持四段拜と有り訖即命婦一人進受二太玉串一轉授二大物忌子一即大物忌子受立二瑞垣御門西頭一即親王還二本席一坐二○以上祭之御玉串幷御神拜行事と云る此なり畢即山向物忌作奉太玉串乎太神宮司給次禰宜給次宇治大内人給○今云以上太玉串を捧る人三人也月次條には此事を然後禰宜著二明衣冠一木綿多須岐左右肩懸弖宇治大内人爾毛又加二禰宜一裝束即木綿幷太玉串捧持太神宮司跪手一段拍給次禰宜毛同給宇治大内人毛同給以上三人波太玉串給時爾人別拍レ手弖給と見えたり行事記には祭御玉串幷御神拜之後祭使等各進二參御鹽湯所一列立次第王中臣忌部卜部大司權大司少司也神主各拜次用手水先王次中臣次忌部次卜部次大司次權大司次少司也云々次官幣拜見非別宮分進之間之行事如二六月御祭時一其後中臣參寄御鹽湯所不疊副一半疊上跪手一端之後自二玉串大内人手一請二取鬘木綿一着用之後立二本列一次中臣侍持二參宣命一而自二後之方一奏二手中臣一中臣請取之後立二王上一王其時立下也次忌部進參手一端之後從二玉串大内人之手一請二取鬘木綿一着用次木綿太須岐得而歸之後不レ歸二本列一件不疊副向二祭使一爾二石橋一立也次三人宮司並神主等玉串行事云々と有先禰宜前左立次宇治大内人右立次太神宮司次忌部幣帛捧持立次御馬次驛使中臣次王次内人等次齋宮諸司等但齋宮諸司者板垣御門内分頭侍如レ此立列參入然致二第三重一就○太神宮式神嘗祭條に右月十七日祭二太神宮一禰宜大内人各著二明衣一分二頭左右一宮司立レ中次使忌部捧レ幣次馬次使中臣次使王入就二内院版位一云々と有は此を云なり列位の事は止由氣宮儀式帳に致二中重一就二正道不疊一並雙分頭跪侍東一使王次中臣次太神宮司次禰宜並大物忌波率二諸物等一矣第二御門西方列侍大内人並物忌父小内人等四玉垣御門内東向列跪侍齋宮諸司等第三御門西分頭跪侍と見えたるが如し訖從二版位一一丈許進忌部大幣帛捧跪侍即驛使中臣進二版位一跪告刀申○今云止由氣宮儀式帳にも爾使中臣登二上版位一幣帛告刀申と有て此に同じ式には使中臣申二祝詞一訖亦神宮司宣二祝詞一と見えたり行事記に云く參二内院一之時忌部者官幣絹綾奉レ置案爾付參入而八重榊前御鎰櫃東方並レ案奉レ立而其案懸レ手跪而宣命被二讀上一之門侯也神馬者玉串御門東脇向レ北曳立其外不壹座次祭主等以レ西爲レ上王

次中臣次忌部之室并置次卜部者也宮司以レ東爲レ上者神主同前也三色物忌父等西方石壺向レ東以レ北爲レ上者次取内人祗候也中臣立レ座進參讀ニ上宣命ニ之後[illegible]者本座ニ々忌[illegible]退立中臣次ニ立[illegible]者自ニ北御門ヲ退出次大[illegible]忌父差[illegible]詔文ヲ宮司渡レ之後抽[illegible]者本座ニ次宮司進ミ詔刀申と有り然れば宣命と云るは此度中臣の宣る詞を云なりけり即禰宜召ニ大物忌父ニ

宇治大内人立テ宮司乃太玉串乎給返ニ本座ニ侍大物忌父給即受御門東頭進置本座還侍禰宜即召ニ宮守物忌父ニ玉串受御門西頭進置即本座還侍禰宜即召ニ地祭物忌父ニ宇治内人玉串四枝受御門東頭進置還ニ本坐ニ侍即宇治大内人捧ニ太玉串ニ自立ニ御門西頭ニ進置還ニ本坐ニ侍○今云此事月次祭の初に帳を引て云ひ同詞太玉串爾隱侍の下に委しく辨たり禰宜先ニ立御鎰大物忌子持テ前ニ率立テ内院參入次宇治内人次太神宮司次大内人參持物波忌部乃進留朝廷幣帛并御馬鞍具然禰宜開ニ正殿ニ且幣帛物奉入畢次織御衣服此禰宜仕奉織ニ御衣ニ絹一疋又宇治内人織御衣絹一疋次大物忌父闢ニ東幣帛殿ニ御馬鞍具進上畢時罷出テ致ニ付本坐ニ○今云止由氣宮儀式帳には宮司[illegible]御馬[illegible]調度進上と有り行事記には鎰取内人[illegible]坐[illegible]鎰櫃封ニ御封申之後[illegible]出御鎰ニ正殿御鎰渡ニ[illegible]宜ニ東寶殿御鎰渡ニ[illegible]宜ニ西寶殿御鎰渡ニ三[illegible]宜也各請[illegible]奉相ニ[illegible]官幣[illegible]參入[illegible]垣[illegible]門内ニ忌父[illegible]官幣ニ次如ニ六月御祭之時ニ於ニ[illegible]寶[illegible]奉レ拜[illegible]亦[illegible]鎰取内人[illegible]參禰宜令ニ捧持ニ[illegible]御鎰[illegible]禰爲ニ押付ニ放ニ宮司封之[illegible]向[illegible]司御鎰御封開由申[illegible]之[illegible]後一[illegible]宜ニ大物忌子[illegible]相ニ[illegible]參一禰宜相並[illegible]殿而指ニ入[illegible]鎰於御戸鎰ノ口ニ其時子良[illegible]手件鎰ニ[illegible]下也母良御橋ノ本祗候ス相且而[illegible]也其後一[illegible]宜奉レ開ニ御戸ニ[illegible]之鎰并[illegible]鎖拔而高欄東脇ノ桁上置則鎰取内人參寄取ニ件御[illegible]鎰ニ而御階[illegible]柱之東本北ニ寄而[illegible]封[illegible]于方寸許押ニ件[illegible]鎰崎ニ而又[illegible]ニ封紙一筋ニ而相ニ具硯筆ニ進ニ寄宮司前ニ[illegible]時宮司書レ封宛[illegible]ニ付御鎮崎ニ紙次一筋搔具タル志テ也件封者付ニ御鎰櫃ニ料也押御戸被レ開之後傍官禰宜等各开殿白ニ殿内ニ取ニ[illegible]宮ニ入ニ[illegible]之錦綾[illegible]又於ニ[illegible]稻御倉ニ爲ニ神主沙汰ニ織奉御衣絹亦同奉。納之後奉レ閉ニ御戸ニ罷下也於ニ御[illegible]前ニ拜無レ手云々拜畢之後宮司神主各罷下と有り訖即諸刀禰等共四段拜奉テ八開手拍即短手一段拍テ一段拜奉又更四段拜奉テ八開手拍次短手一段拍一段拜奉○今云太神宮式齋宮式共に齋内親王以下衆官共に拜奉る趣なり然れば齋王候殿より御拜有ゆなるべし畢即罷出テ向ニ荒祭宮ニ且四段拜奉短手一段拍奉レ拜畢但親王不下向ニ荒祭宮給上即驛使并齋宮諸司等皆悉就ニ食坐ニ○今云月次祭に然即時諸司衆官人等并諸刀禰等皆悉直會殿付坐と有る此なり太神宮式に退就ニ齋宮殿ニ給ニ酒食ニと有り但禰宜内人等波荒祭宮正殿開且朝廷幣帛并神衣絹一疋進上○今云驛使并宮司以下悉く荒祭宮に參向ひて拜奉り退きて大直會に就るを禰宜内人等は幣帛を奉納るに依て遺在るなり畢即還且大直會被給畢後手一段拍更發ニ第五重御門ニ參入就レ坐即進ニ第四重ニ倭儛仕奉先勅使中臣次使忌部次王次太神宮司次禰宜次大内人次齋宮主神司次諸司等直會酒波采女二人第四御門東方侍テ御角柏爾盛テ人別捧給然男官儛畢即禰宜大内人等加由儛次齋宮女嬬等儛畢即禰宜大内人等爾祿賜[illegible]内親王御輿離宮還坐○以上六月々次祭に同じき事見合せて曉るへし儀行事記に押今度御祭之神[illegible]三疋之[illegible]二[illegible]立[illegible]院二疋者[illegible]留[illegible]傳[illegible]一疋太神宮[illegible]一[illegible]荒祭宮ニ一疋月讀宮御料[illegible]とし[illegible]せり

以ニ十八日巳時ニ宮[illegible]神祭酒二缶贄ニ荷瀧祭酒一缶贄一荷荒祭宮酒一缶贄一荷月讀宮酒一缶贄一荷瀧原宮酒一缶贄一荷伊雑宮酒一缶贄一荷大歳社酒一缶贄

一荷〇宮廻神は宮乇神矢乃波波木神なる事已に云り以二同日午時一荒祭宮祭供奉行事右如二六月祭行事供奉一〇今云朝廷より奉らせ給ふ神馬三疋の中一疋は當宮の御料なる由右に引る行事記に所見たり續記に寶龜三年云々伊勢月讀神爲レ祟於是毎年九月准荒祭神一奉レ馬と有るは素より神馬を奉來りし證なり餘は下なる荒祭宮條に云ふ可し以二十九日巳時一瀧祭行事右如二六月祭行事供奉一〇今云六月條に瀧祭直會行事と見え神田行事一條に瀧祭奈保良比料稻百廿束祭別四十束と有以二同日一月讀宮祭供奉行事右祭如二荒祭宮供奉一但神御衣絹一疋又朝廷幣帛御馬一疋又糸一絇供進如レ件〇今云御馬一疋と此に在て式文に載さるは太神宮御馬三疋の中なる事右に云へる如し行事記に一疋鹽湯所留置と有や此御料ならん以二廿日一大歳神社祭供奉右如二六月祭供奉一〇行事記に廿日に朝熊神態同二六月勤一と有り以二二十二日一瀧原宮祭行事右如二六月祭供奉一但神御衣絹一疋朝廷幣帛糸一絇幷供奉如レ件〇太神宮式に瀧原幷宮新年神嘗等祭供レ之と有れば此時に就て幷宮も被祭るなり然れども此に酒をも贄をも載さるを見れば未無りしなり以二廿五日一伊雑宮祭行事右如二六月祭供奉一但神御衣絹一疋朝廷幣帛糸一絇幷供奉如レ件〇六月祭には佐美長神社と被祭る由見えたるを此に漏せるは如二六月祭一と云ふ中に含れる所なる可くや以二廿七日一班二管神社廿四所料一絹一疋一丈五尺社別三尺木綿麻如二二月祭一右神社供奉禰宜自親率二祝部一即社別巡供奉〇本に如二六月祭一と有は誤なり二月新年條に以二十二日一云々所レ管處々宮幷社神祭行事具レ宛二神税一と有るを云へ此廿四所は月次祭に預る社なるを太神宮式に太神宮所攝廿四座右諸社並預二新年神嘗祭一と見え其新年幣帛條に右二宮所攝諸社幣者座別絹一尺木綿麻各二兩二分太神宮司分充禰宜祝等就レ社奉レ班と有と此と同じきなる可なり朝大御饌夕大御饌御田一二町四段二町太神宮料四段荒祭宮料右御田者毎年郡司專當佃苅供進即禰宜預勘積二御倉一供二奉御膳一〇此は九月十七日朝大御饌より翌年九月十六日夕大御饌迄供奉る料なり此事月次祭詞國々所々依奉禮留云々の下に云るが如し見えたり六月月次祭條々能々按合せて其委しき事實を知べき者なり年中行事に十五日以後至二廿五日一二宮神態如二六月一内宮今月無二贄海神事一と有が如し但贄海神事は建久行事記に當時贄海神事參向次第と有る當時は寬正の頃なるに無二贄海神事一と有は不審しき事なり又同記に廿五日風日祈宮祭禮其次第如二六月勤一云々と見えたり風日祈宮の御事は六月月次祭條に委しく註りきかし

皇御孫命御命以伊勢能度會五十鈴河上爾稱辭竟奉流天照坐皇太神能大前爾申給給常毛進流九月之神嘗乃大幣帛乎某官某位某王中臣某官某位某姓名爾爲使氐忌部弱肩爾太襁取懸持齋理令捧持氐進給布御命乎申給久止申

皇御孫命御命以は源齊恒朝臣の校本に依れり此詞を三代實錄に貞觀十三年九月十一日甲申遣二使者於伊勢太宮一奉二例幣一兼賽二宿禱一告文曰天皇我詔旨止掛畏岐伊勢乃度會宇治乃五十鈴乃河上乃下津磐根爾大宮柱廣敷立高天乃原爾千木高知天天皇孫乃尊乃稱辭竟奉留天照坐太神乃廣前爾恐美恐美毛申賜止申久常毛奉留九

月乃神嘗乃太幣帛乎王大監物從五位上奧我王中臣神祇大祐正六位上大中臣朝臣常道乎差使天忌部神祇權大祐正六位上齋部宿禰高善我弱肩爾太襷取懸天持齋利波令ニ持捧一天奉出賜布此狀乎聞食天天皇朝廷乎寶位無動久夜守日守爾護助給倍止申賜止波久申と有り此は別に宿禱を賽し給へる時のなる故に文例違へるを以御記に載たる所なり天皇孫乃尊と有は珍らし行事紀に載る詞には右の文の如く何所も大宮柱太敷立廷高天原爾千木高知廷皇御孫命乃稱辭定奉と有を例と爲て改つ今本に皇御孫能御命以と有は鎭火祭詞に皇御孫能朝廷爾とも有て例無には非れども此所には脱たる可し考證書に皇御孫命能御命と有べきに命一字脱しならむと有は然る事なり但能字を本文には補はれたる先例に依て然有べき所なれど無くても聞ゆ○九月之神嘗とは神封神田等より神宮に貢奉る當年の新物を以祭奉るが中に新穀を以て始て大御饌に忌炊き供奉り又白酒黑酒に釀し供奉る神事なるが故に神嘗と云て朝廷の新嘗と其事相異ならずは神嘗の神衣など云ふ時に同じ朝廷の大嘗新嘗に事は同じけれども其嘗を替へ新嘗とは云なり新意有にはあらず六月九月十二月三節の大御祭の中に此神嘗の大御祭を以て有が中に重しと爲す此度は大御使にも王氏中臣忌部卜部等を被立る事は殊に如此有べき故有けり其は上なる大嘗祭條にも註る如く此祭と神衣祭と云は天宮にて皇太神の御自親聞食し始たる大御政なるが連綿と遠く久しく傳へ來るにぞ有ける但此神の新嘗等の事を太神の佐神たるを祭らせ給へりげに謂淺すなそは甚々事實を見誤れるなれば從舍然説の趣と雖も信し此大御祭の起元は皇太神の天宮に坐て須佐之男命に大御命御せて葦原中國に天降し給ひ保食神の消息を令見給ひける時此神鼻口又尻より種々の味物を取出て奉らせ給へば穢物を以吾を養ふと思ほし坐て終に事有り此を殺給へりと爲る紀記の傳共に依難き事已に丹後風土記を引たる如し即復命し給ふ時に大御神怒らせ給ひて汝は惡神なり相見欲しからずと宣ひ天熊人を遣して令見給ふに實に已に退去れり然れども其身より化出る所の種子有けり取持去て奉る時に甚く喜ばせ給ひ此物等は顯見蒼生の食て活べき物なりと宣ひ天狹田長田を令殖給ひけるに其秋垂穎八握に實生りしかは大嘗の新宮を建給ひ其新嘗を聞看す時に須佐之男命の神荒び有しかは大御神は天石戸を開て刺隱り坐けり神荒の事も大御神に依て事止つると相同じ状なり是を以て八百萬神等神集坐て招奉れる事正史に所見たるが如し但正史に漏たる事一條有り彼御荒びは、太御神の保食神の靈物を賽て天下蒼生の爲に食物衣類住宅を營み初させ給ふ所

なるが其事を妨奉る事を憤り給へるなる故に八百萬神の御祈い中に此三物を成整供奉る事を專と爲られたり然るに紀記及拾遺共に神衣の事と新宮供奉る事との二有て食物を供進る事は其作に所見ずと雖も已に皇御孫命御天降の時の大御命に吾高天原所御齋庭之穗亦當ニ御於吾兒ニと所見たる齋庭は其由貴を聞食す大殿の名なる事大嘗祭の悠紀主基に於るが如し又雄略天皇に諭し奉らせ給ふ神勅に御饌都神等由氣太神と詔給ふも我御饌所神と申す義なり其御饌所何所か在む右の齋庭なる事云ふも更なり又等由氣太神と申も豐由氣太神と申事にて由氣は由貴なることと上に云るが如し又御天降の時に其太神の御靈形を天降し奉らせ給へり此其太神の天宮に坐て御饌都神と爲て皇太神の大御饌を供奉らせ給ふ所なるが何れの時に天上に參上らせ給ふと云事傳無れば知難きに似たりと雖も其石戸隱の時に八百萬神と共に神集ひ坐列にて參到り給ふ皇太神の大御饌を供奉らせ給つらむと所思ゆ其は何を以云ぞならば神宮朝廷共に傳來る所の神事年中諸度の神祭の事は悉く此石屋戸隱の時に定りて永世の常典と成れるを以て其然る事を知れゝはなり譬は彼玉鏡を懸たる榊は天八重榊の本元五百箇眞賢木之八十玉籤は太玉串の本縁なるなどを思合せて曉る可し

偖皇太神宮儀式帳に三時祭の朝大御饌夕大御饌は神宮の物忌內人の物爲る事なれども止由氣太神の御手代に仕奉るなれば其大神の御所置なる事著明きを止由氣宮儀式帳には御饌殿造奉天照坐皇太神乃朝乃大御饌夕乃大御饌乎日別供奉と見えたる如く日々の供御迄も其太神の御饌都神と坐て供奉らせ給ふ事皆此彼天上の儀の如く物爲させ給ふ事なり是以て此神嘗は天宮にて止由氣太神の行ひ定給へる神事なる事を知れり此は雄略天皇御世に此太神の伊勢に鎭坐る後の事と思ふは甚麁き說なり彼御諭言に吾高天原坐弖見志眞岐賜志所爾志都眞利坐奴然吾一所耳坐波甚苦と仰給へる大御言を考ふ可し高天原より見定坐し五十鈴宮には鎭り坐せとも我御饌都神と放り在しては甚苦し其等由氣太神を天上の儀の如く我御許に令在て大御饌を令進給へと乞給ふなり但如此く云へは其太神を貶し奉るに似たりと雖も然に非ず此太神稻穀の事を主り給ひ家宅衣食等に至る迄御靈を幸ひ給ふ中に特に御饌の事を所知看す御功坐るに依りて天宮にて供奉らせ給ふなり然るを後世にして膳夫陪膳等の職を卑からざるに引競べて有し事を賤しく思ふは俗意なり已に大殿祭詞大祓詞に比禮掛伴男手襁掛伴男など諸伴の上に置たるを人は如何に見るらむかし偖上世の景迹（アリサマ）神物官物の差別無在し故に皇太神の皇太宮に大坐し間は天皇の大嘗と共に奉り來れるを朝廷神宮相各別に成しより朝廷には大嘗とも新嘗とも稱ひ神宮には神嘗と唱別られたるなゝめり祈年月次等詞に荷前者皇太御神能大前爾如横山打積置氐殘乎波平聞看と有る天津祝詞の故實に依て神宮には九月朝廷には十一月と定

させ給へり（然れども朝廷の新嘗祭にも天照太御神を請奉らせ給ひ其大前の大御祭をも奉り給ひ畢て天皇其當年の新穀を聞看す御例なるは猶神物官物と分れざりし上古の遺風なるなり續紀に延暦九年九月甲辰奉二伊勢太神宮相嘗幣帛一と有は朝廷にて被祭し時の古名を以なしめり）倭姫命世記に廿七年戊午秋九月鳥鳴聲高聞弖晝夜不止囂此異止宣弖大幡主命令人紀麻呂良止差レ使遣令レ見ニ彼鳥鳴處ニ罷行見波島國伊雑方上葦原中在ニ稻一基ニ生本波一（其本爾爲弖）末千穗茂也彼稻白眞名鶴咋持廻乍鳴支地見顯世波其鳥鳴聲止支止返事申支爾時倭姫命宣久恐志事不問奴鳥須良田作皇太神爾奉物乎止詔弖物忌始給弖彼稻乎伊佐波登美神乎爲弖拔穗爾令拔弖皇太神乃御前爾懸久眞爾懸奉始支則其穗大幡主女子乙姫爾清酒令レ作御饗奉始支云々彼鶴眞鳥乎號ニ稱大歲神一と有り此文を以考るに已に崇神天皇御世に遷幸坐しより以來所々の行宮にて形計の神嘗は供奉らせ給へりけむを此度に至て御酒御贄懸稻の事全く整備れりと見ゆ（大幡主命は大若子命の亦名なるが兒此女乙姫二人共に物忌に供奉れりしなり例なる大本同神御夕御饌祭に皇太神宮乎倭姫命戴奉天五十鈴宮爾令入坐々須時爾若命乎大神主止定給天其女兒此女乎物忌止定給天宮內爾御饌殿乎造立天其殿爾爲天拔穗田稻乎令ニ拔穗ニ拔天大物忌大字奈止其爾天令ニ舂炊ニ供奉始支又御酒殿乎造立天造々酒戸人夫進ル神田ノ以レ稻神酒ヲ天先太神供奉次倭姫命爾奉賚者仕奉物部人等給支と所見たり此も右と一時の事と聞ゆ）偖右の文に解樣有べきなり倭姫命の恐志事不レ問奴鳥須良田作皇太神爾奉物乎云々と宣へるは未其大歲神に化れることは所知看ずして宣へるなるが大歲神と號稱給爾に至てぞ神の御諭などの有て所知看たりけむ然らずば外の名稱こそ有め神代に大歲神と申すが御在して其名高きを奪ひて其鶴に號給はむ事有べくも非るなり大歲神は宇賀之御魂大年神とも申して同神に坐るが白鳥に化れる事稻荷社の故事にも見えたるところ也偖大嘗祭の時其悠紀主基の祭郡にて祭らせ給ふ八神の最初に御歲神を齋かせ給ふ御旨に契合て愛しとも妙なりとも知らずなむ有ける月次神嘗の三節祭に就て大歲神を被祭る事故有かな（此を穗落神の意と爲る傳も有れど後人の定むる所にして云にも足ずなん）○大幣帛乎此は神宮の神嘗祭に就て奉らせ給ふ內藏寮御幣なり其は此始に式の本文を擧たるが如し此內藏寮の事に就て予が考保てる臆說有り神世の御制誰も知る如く中臣は祝詞忌部は幣帛の事を掌る職なるに其幣物を寮にて調進する事忌部の名有て實無に似たりと雖も如此く轉來る可き所以有けり（職員令に內藏寮掌ニ金銀珠玉寶器錦綾雜綵氈褥諸蕃ノ貢獻奇瑋之物年料供進ノ御服及別勅用物事一と有る其掌に依れりと雖も此は外に子細有ることなり）古語拾遺（神武天皇段）に當ニ此之時ニ帝之與レ神其際未レ遠同レ殿共レ床以レ此爲レ常故神物官物亦未ニ分別一宮內立レ藏號ニ齋藏一令ニ齋部氏永任ニ其職一又令下天富命率ニ供作諸氏一造中

作大幣上と有る齋藏より供奉來し所なるが內藏に移れるなり其は同書（履仲天皇段）に至二于後磐余稚櫻朝一三韓貢獻變レ世無レ絕齋藏之傍更建二內藏一分二收官物一と所見たれば此時の內藏は其出納をこそは阿知使主百濟博士王仁に令掌たれ此二を總て猶忌部氏の掌る所なりしなり然るを後に百官の制出來て內藏寮を置る此に於て其齋藏內藏二を合せて其寮に管領する事右の細書に職員令を引るが如し此より以後忌部は唯其御使に立耳に名有て其幣物を調進る實は失へるなり續紀に大寶元年十一月丙子始任二大幣司一と有り斯る事などにや依けむ彌々忌部の職掌神代の例に違ふ事と成れりきかし廣成宿禰の古語拾遺を奏上せる勢ひ應に止事を得べからざる所此なり（神祇官より奉るべきを寮より奉る事は天皇の大御手物を奉らせ給ふ意味なれども其も此も合て忌部の供奉れりしなり）〇某官某位某王太神宮式に凡神嘗祭幣帛使取二王五位已上卜食者一充レ之云々と見え又凡神嘗幣帛使者給二祿四位王絹十二疋（從者八疋）五位王十疋（從者六疋）中臣忌部並准レ此云々と見えたる如く其幣帛使と云中に王氏は宣命使なる事上に云るが如し然して宣命を告は中臣の預る所なり太政官式に凡九月十一日行二幸八省院一奉二於幣伊勢太神宮一預點二五位已上王四人一卜定（用二卜食者一人一）大臣奏聞宣命授二使王一共神祇官中臣忌部發遣と見えたり續紀に天平二年閏六月甲午制奉二幣伊勢太神宮一者卜二食五位已上一充レ使不レ須二六位已下一と有は此五位以上を卜定給ふ始なるにや（西宮記に上卿令レ召二王大夫一給二宣命一と見え江次第にも上卿召二使王於座前一給二宣命一と有り）諸王を伊勢に御使に被進る事は和銅元年御紀に冬十月庚寅遣二宮內卿正四位下犬上王一奉二幣帛于伊勢太神宮一以告下營二平城宮一之狀上也と有る此は臨時のながら諸王を以幣帛使に任給ふ事の物に所見たる始なり神嘗の幣帛使は天平十二年御紀に九月乙未遣二治部卿從四位上三原王等一奉二幣帛于伊勢太神宮一と有る是始なり其後の御紀を閱に或は立事も有り他姓の人を被任る事有て一定ならずと雖も王氏を被遣る事十にして八なり是以て何時と無く王氏を被任る常典とは成れるなり天平寶字二年御紀に八月戊午遣二攝津大夫從三位池田王一告二齋王事于伊勢太神宮一又遣二在大舍人頭從五位下河內王散位從八位下中臣朝臣池守大初位上忌部宿禰人成等一奉二幣帛於同太神宮一以二皇太子即位一故也など王氏を以使實と爲させ給へる事見つ可し（儀式に五世者不レ須とあるを以見れば正しき皇親の限を以被遣るなり後には花山院源氏にて白河家世々神祇伯に被任る時諸王に被

成て其御使を受賜る事なり〇中臣 某官某位某姓名 續紀以下に唯正使を記して遣ニ中臣齋部等ーとも又其姓名を擧記されたるも有り倩想此く中臣を官位姓名の上に置事は上古より中臣齋部卜部共に其職掌の名なりけるを其家に傳て既く氏と成り卜部も又後に氏となれゝども上に在は職掌の稱下に大中臣朝臣某と有は其氏なるなり某姓名乎爲レ使氏と有る正使は諸王にて此宣命を捧奉り中臣は此を讀申が故に王氏中臣二人を合せて斯は云るなり 後世伊勢奉幣の宣命に王某官位某王中臣某官位姓名齋部某官位姓名と被連署るゝなり但王は職名に非れば古は官位の上に置事は非りしなり 忌部 弱肩爾 太襁 取懸氏 持齋理令ニ捧持ー氏云々は祈年月次大嘗等詞には辭別忌部能弱肩爾太多須支取掛氏持由麻波利仕奉留幣帛乎神主祝部等受賜氏事不過捧持奉登宣と有は神主祝部を神祇官に召て幣帛を被班る爲に然云るを此は忌部の御使に參て奉る所なる故に如此は申せるなり日本後紀天長四年四月の宣命に參議正四位下眞世王中臣散位從五位下大中臣朝臣笠作乎差使天禮代之大幣帛乎忌部弱肩爾太手次取掛持齋波理捧令持弖進給布云々と見えて此と同し文例なるを正しくは忌部の官位姓名をも稱ふ例と所聞て同五年二月宣命には散位從五位下三繼王中臣神祇大祐正六位上大中臣朝臣天品忌部少史正八位上齋部宿禰友主等差使弖申給止久申と其より後には三代實錄貞觀元年六月十七日の告文に大舍人頭從五位上礒江王中臣主殿權助大中臣朝臣國雄等差使天忌部神祇少祐從六位下齋部宿禰伯江加弱肩爾太襁取掛云々と有て其より以來の例必然なり 但右の天品は決て誤字なる可し例文を見に大中臣毛人有り此人なるべし此人神祇大副にて天ー五年在任と有れども五年には未神祇大祐にて在しなる可し忌部友主の姓を脫せり例に依て忌部宿禰友主と改む大中臣朝臣國雄の官位の上に中臣の二字を脫せり此亦例に依て改引く處なり 凡て神宮に被奉る幣帛使には中臣齋部を相副て被遣る例なれども唯何と無きに幣帛を被進るには忌部耳を御使と爲給ふ例有り續紀に大寶元年十一月庚寅遣ニ從五位上忌部宿禰子首ニ供ニ幣帛鳳凰鏡窠子錦于伊勢太神宮ーと所見たり

〇豐受宮同祭（トヨウケノミヤノオナジマツリ）

太神宮式九月神嘗祭條に右月十六日祭ニ度會宮ー十七日祭ニ太神宮ーと所見たり朝廷にて幣を被班進る時も先度會宮次太神宮と有て六月々次祭條に註る如く此は全く皇太神の御託宣に依て度會宮を必先祭奉ハ御定に依れる者なり上なる太神宮神嘗祭條に註へるを見つ可し同式に度會宮四座多賀宮一座右二宮祈年月

次神嘗等祭供レ之度會宮所攝十六座右諸社並預ニ祈年神嘗祭ニと所見て三節祭の中に此祭の最重き事凡て太神宮の例に異る事無し四時祭式に伊勢太神宮神嘗祭幣帛二筥（内藏寮供設）絁三疋絲八絇倭文一端一丈席二枚鞍二具馬四疋籠頭料布一端一丈四尺右當月十一日平旦天皇臨ニ大極後殿ニ奉レ幣云々と有は合せて二宮の御料也（右馬四疋の内三疋は内宮御料なる事上に云るが如し其一疋鞍置と行事記に出されば此宮の御料は一疋に鞍置て被進るなり儀式帳に勅使の奉幣畢て西寶殿に鞍具を被納る事所見たり）其幣帛二筥の内一筥は内宮の御料一筥は當宮の御料なり其筥中に收る所は内藏寮式に緋中縹黄皂帛各一疋（已上度會宮幣料）盛裹料柳筥一合（一方尺四寸）庸布一段木綿小一斤云々と有此なり（此事上に已に云れば此には委しく解ず）右は神宮の神嘗祭に就て朝廷より王氏中臣忌部を以て奉らせ給ふ例幣なり○九月神嘗祭は神封神戸の調庸田税を以て奉祭る所なり是以て幣帛雜用悉く太神宮司其神封神戸の貢調を以宛奉る所なり其員數太神宮式に詳なりと雖條理を亘細に區分（ワカチ）たる事儀式帳に如ず所以に此を本文に引き式に依て異同を云事左の如し（但儀式帳は延暦の例式は延喜の例なれば其後に異れる事議論も有べけれども其沿革を云ふ迄には非ず唯古の定格を説を本より意と爲れば先は近代の例は措くなり）止由氣宮儀式帳九月例に云神嘗祭爲ニ供奉一太神宮司宛奉雜用物絹一疋調布八端麻席三枚麻簀三枚（已上御饌殿餝奉料用物○今云同帳二所太神朝御饌夕御饌供奉行事條に御饌殿一宇用物緋裲調絹二疋御幌並二所太神及相殿神御坐料調布捌端御殿内天井壁代二所太神及相殿神坐下敷並敷布御巾内筥料麻席參枚二所太神御床土代敷料並相殿神御料並簀三枚二所太神御簀相殿御簀料右件用物太神宮司年別九月祭所ニ宛奉ーとく此なり式にも其御饌殿年料所レ須絹二疋布八端食單布二端食薦三枚神宮司充レ之と所見たり麻席は東席（アツマムシロ）麻簀は食單布に當る可し）御衣料絹二疋（○今云太神宮式に禰宜收ニ封戸絲ー齋織レ上と有は太神宮御衣の下に禰宜預五月收ニ封戸調絲ー潔齋所ニ織備ーと有を云なり奉幣條に禰宜織奉乃太神御衣絹二疋と所見たり又禰宜職掌條に又九月祭乃織乃大御衣織儲弖正殿奉レ上此度會郡調先玆織奉と有り調先とは荷前と云如く其絲の初穗を云なる可し皇太神宮儀式帳にも御調荷前供奉行事に神郡度會郡調先糸と見ゆ）御門御幌料絹二疋三丈（○今云式に御饌殿料絹二疋と有は行なり上に御饌殿年料條を引たるが如し）高宮御衣料絹一疋五色料絹一疋（○式には五色幣絹とあり）所管諸神社幣帛料絹五丈一尺（○式には十六社料四丈八尺と見ゆ）御酒米十斛神祭料米貳斛供給料米卅五石（○式に云く廿五石）木綿四斤（大○式に云く六斤此は下に二斤有と合せたるなり次條見べし）麻十斤（大○式に十五斤と有は下に神戸人夫所進荷前物の中に麻五斤と有其を合せたるなり）鐵一廷忌砥一面炭二斛（○式文に無し）鹽一斛（○式に祭料五斗有り）神酒十二缶（○式には神酒廿缶當國十二缶餘國同ニ太神宮一と見えたり）敷布料調布一端長畳廿枚短畳廿枚（○式に短帖廿枚と有此也上なる敷布料調布は此に用えなり）縄席廿枚（○式には食薦廿三枚と云り）麻簀三枚（○式に見えず）前簀廿枚（○式に席廿枚と有此に當る）蒲立席三枚端裏畳一枚（○此二條は式に見えず）陶水眞利三具陶酒坏三具菓子佐良三具（○式には陶埦盤酒壺高盤と合せり）葦簀四枚（○式に見えず）麻筵三枚（○此は式に防壁と有此なる可し右に引る御饌殿の麻席三枚二所太神御壁土代敷料と有と同物と思しければなり）酒壺三口甕二口（○式には酒甕各三口）神酒缶十口（○式に見えず）懸税稻六百七十束（伊勢國神戸六百十束伊賀尾張三河遠江四神戸六十束○今云式に斤税八百束神宮

七百九十束高宮十束と見えたるは追々神封の加増れる故なり以二十三日一多氣郡度會郡二
神郡國々所々神戸人夫常所進御調ノ荷前進奉貢五十
疋奉レ上二東寶殿一其行事二月月次幣帛進時行事同
○今云式に調荷前絹五十五疋四丈八尺神宮五十四疋高宮一疋十六社料四丈八尺と有り十三日を以て奉納る事は十四日內宮神衣祭に屬て
調絹を收奉る事なるが故に例の如く一日前なり賜禰宜內人物忌絹廿九疋二丈綿
廿七屯スペ○太神宮式には加はりつる人も有て通計て絹三十五疋三丈綿三十三屯なり禰宜給二絹三疋
綿二屯一大內人三人○式云四人大物忌一人並四人給二絹八
疋人別二疋綿八屯人別二屯御炊物忌一人御鹽燒物忌一人高宮
物忌一人○式には高宮內人二人有り根倉物忌一人菅裁物忌一人○今云式には
此二人共に絹一疋綿一屯の列なり並五人絹七疋三丈人別一疋三丈綿五屯人別一屯大物
忌父御炊物忌父御鹽燒物忌父菅裁物忌父根倉物忌父
高宮物忌父木綿作內人御巫內人忌鍛冶內人御笠縫內
人御馬甘內人並十一人絹十一疋人別一疋綿十一屯人別一屯○式には
此十一人にも各綿一屯を賜ふ例なるを本に脫たるに依て今補ふ此外に土師器作物忌土師器作物忌父陶器作內人御笥作內人等四人各賜二絹
一疋綿一屯一高宮內人二人各賜二絹一疋三丈綿一屯半一と式に所見たるは次々に加れるなり賜二禰宜並物忌粮
稻九十八束三把二分禰宜一人四月六月合五十九箇
日食料廿三束六把日別四把大物忌一人御炊物忌一人御鹽
燒物忌一人並三人起二正月一日一盡二十二月卅日一食料
百七十四束七把二分人別日一把六分○太神宮式に凡二所太神宮禰宜四月六月日別食米二升餘月不レ給
物忌度會宮三人給二年中食料一日各米八合と有此なり右の稻四把は田令義解に稻レ束舂得二米五升一と有れば一把に米五合を得合せて二升な

り一把六分の米は八合なれば能合り四月六月合五十九箇日は一月は大一月ハ小の積なり此を此度より宛行ふ由也太神宮司
奉進伊賀尾張三河遠江志摩國等神戸人夫所進荷前
物絹二疋糸二約綿五十二純荒太倍一端木綿二斤麻五
斤雜腊廿斤鹽四斛熬海鼠十斤耽羅鮑十斤堅魚十五斤
海藻根卅五斤○太神宮式に御贄殿料絹二疋絲二約綿五十二屯布一端木綿六斤麻十五斤雜腊廿斤熬海鼠八斤堅魚十
斤鰒八斤鹽四石海藻根十九斤と見えたり此は御贄殿に收て年中祭料に宛る所なり但此絹は奉幣條に太神宮司進御衣料絹二疋五色料絹一
疋と有る其と聞ゆ若然も有は此奉る絹は二所太神宮御料に宛て內院に收る事にや又神服織神部等奉進
物六種神酒一缶御贄一荷懸稅大半稻卅束細稅稻卅把
茵一枚下敷簀一枚○式に小稅神服織卅束大稅神服織卅束と見え太神宮條に當國十五缶と有る外に服織麻
續各一缶と出たる此なり茵及下敷簀は皇太神宮儀式帳にも茵二枚敷簀二枚已上神服麻續二氏神部仕奉と見ゆ又神麻續神
部等奉進物六種神酒一缶御贄一荷懸稅大半稻卅束細
稅稻八十把茵一枚下敷簀一枚○式に小稅神麻續八十束大稅神麻續卅束と見えたり但此小
稅は一把を以て一束と爲し大稅は五把を以て一束と爲る由太神宮條に詳なりと所見たり太神宮式に
も右等の貢數を被記たる其終に右月十六日祭二度會
宮一禰宜大內人各着二明衣一分二頭左右一宮司立レ中次使
忌部捧レ幣次馬次使中臣次使王入就二內院版位一使中
臣申二祝詞一訖亦神宮司宣二祝詞一餘儀同二月次祭一と被
書たり其詳なる事は此下に儀式帳を擧て注るが如し
儀式帳神嘗祭供奉時行事に云く以十五日先所々神戸
人夫並二箇神郡鄉々人夫等所レ進神嘗木綿作內人乃作

仕奉禮留木綿並太神宮司乃所ニ宛奉一留木綿乎以宮餝奉○皇太神宮儀式帳六月十六日條に禰宜内人物忌父等引率正殿院參入御内淨仕奉畢山向物忌之天八重加岐令ニ差立一林餝奉井宮之御垣之廻令ニ差立一林餝奉之即此從ニ宮司一宛ニ納本綿一令ニ掛付一奉と有に同じ又度會郡郷々所レ進御贄又禰宜内人等我戸人夫乃志摩國與ニ伊勢國一神堺島々爾罷行弖仕奉禮留雜御贄又御鹽燒物忌乃仕奉禮留御鹽等取進畢時爾禰宜内人等皆悉自ニ宮北一河原罷出弖大贄乃淨米乃大祓仕奉○内宮川原御祓此に同じ六月條に云りき然湯貴備奉所爾持參入弖所々乃枝神爾分奉弖○今云高宮月讀社等所々乃枝神に御贄を分進するなり大物忌父御炊物忌父御巫内人等御井爾參向弖祭仕奉畢弖更内院御門爾持參入弖御炊物忌父加造奉禮留御筥並陶土師内人等我造奉禮留器爾盛滿弖○御炊物忌行事條に御井掃淨奉又御井與ニ御炊殿一往還間道百廿丈橋十五丈此月每修理掃淨仕奉又三節祭湯貴進御筥卌具造祭別十具とあり餘は六月條に云り始ニ亥時一至ニ于巳時一朝乃大御饌夕乃大御饌二一度間置供奉○今云六月條に此の本注此號ニ由貴一の四字有り夕乃大御饌に去年の稻を奉畢朝乃大御饌に當年の新穀を奉始る事已に記せる皇太神宮の例の如し次大物忌父我佃奉禮留拔穗乃御田稻乎火無酒造奉弖仕奉次太神宮司乃所宛奉二箇神郡人夫乃所進庸米乎火向神酒造奉弖供奉次根倉物忌乃作仕奉禮留御酒供奉畢即四段拜奉弖内院御門立奉弖外院罷出弖禰宜内人物忌等大直會被給此時禰宜大物忌二人新年飯酒食始○今云火無酒は六月條に火無淨酒と見えたり此は白酒なる事其詞御酒の註に云る如し火向神酒は黑酒なり四段拜奉弖は必其に手四段有べきも略たるなゝめり内宮儀式帳六月條には四段拜奉乎四段拍又後四段拜奉乎四段柏畢退と見え九月條には四段拜奉と耳有れども六月條に讓たるなれば其同じき事所知たり内院御門立奉弖ハ内宮のには内院御門閇奉弖と有り以ニ十六日朝一國々所々神戸人夫等所仕奉御酒并御贄等乎自ニ御厨一奉レ入次二箇神郡國々所々神戸所進懸稅稻乎千稅余八百稅爾懸奉其奉時禰宜太玉串捧持弖懸稅先立參入大内人大物忌父等並戸人夫等懸稅稻乎百八十荷持參入弖拔穗稻波乎内院持參入弖正殿乃下奉レ置懸稅稻波乎玉垣爾懸奉○今云拔穗稻は太神宮式神田條に割ニ度會郡五町四段二町四段太神宮三町度會宮云々備ニ用太神宮三時並度會宮朝夕之饌一と有此なり此を皇太神宮儀式帳神田行事條に見レ佃御田二町四段云々九月新嘗供奉拔穗稻卌束と有此に准らへ度會宮にも然なる事を思ふ可き者なり同宮儀式帳二所太神朝御饌夕御饌供奉行事に右大物忌父我佃奉拔穗乃御田稻乎先穗乎波拔穗御拔弖九月神嘗祭八荷供奉一荷懸ニ八把一然所レ遺稻乎以弖將レ來至ニ于九月十四日一云々日別二度奉と見えたる此にて大物忌父職掌條に每年拔穗御田乎從ニ春時ニ至ニ于秋時一齋敏佃奉と所見たり因に云儀式帳の趣こそ使中臣登ニ上版上ニ幣帛告刀申と見え皇太神宮の儀式も然にて使中臣進ニ版位一跪告刀申と見えて太神宮司の祝詞を宣事は所見ざりけれ古は如何にも有れ太神宮式に使中臣申ニ祝詞一訖亦神宮司宣ニ祝詞一と有上は式の頃度會宮にても宮司の宣る祝詞有しなり其即次なる六月々次祭と有る詞なるべき事此に擧たる懸稅稻乎千稅余八百稅爾懸奉云々の祝詞と然しも異ならざるを思べし爾時齋内親王參入坐致ニ板垣御門一爾御輿留爾手輿爾移坐弖參入坐致ニ中重殿一就ニ御坐一即太神宮司御縵木綿並太玉串乎捧持弖第三御門内爾候即命婦罷出弖其御縵木綿並太玉串乎受取弖内親王乃御在所爾持參入候侍爾時内親王御縵木綿奉弖發内重御門爾參入坐爾就席坐即命婦乃捧持太玉串乎受取給弖捧持四段拜奉然即還罷出給弖就ニ

本坐ニ御座〇今云皇太神宮儀式帳にも太神宮式にも此の御拜を再拜兩段と有を此にも六月條にも四段拜奉と有は右の兩段再拜を合せて記せるにや儐太神宮式に再拜兩段訖玉串授ニ命婦ニ命婦受轉授ニ物忌ニ受執立ニ瑞垣門西頭ニ齋内親王還ニ就本座ニと見え皇太神宮儀式帳六月九月條共に此と同じく再拜兩段訖即命婦一人進受ニ太玉串ニ授ニ大物忌子ニ即大物忌子受立ニ瑞垣御門西頭ニ進置畢即親王就ニ本座ニと所見たるを此にも必其事有けむを記し漏せる所なり　爾時營裁物忌父造仕奉太玉串乎禰宜捧弖太神宮司爾給司短手一段拍受次禰宜毋給弖共發弖列立先禰宜ニ次太神宮司次忌部捧ニ幣帛ニ立次御馬次使中臣次使王次大内人等次齋宮諸司等如是立列參入〇今云皇太神宮儀式帳六月九月例共に先禰宜前左立次宇治大内人右立と有は宇治大内人の任重きが故なり度會宮にては禰宜に相等しからざる故に禰宜一人前みて先に立事なり　然致ニ中重ニ就ニ正道ニ石疊並雙分頭跪侍東一使王次中臣次太神宮司次禰宜等〇中重は今謂ゆる玉串御門玉垣御門の間にて齋王侯殿の前なる所なり東一とは正道を除て其より東方に使王次に中臣次に太神宮司次に禰宜と北面するを云り　西上大物忌波率ニ諸物忌等ニ次第二御門西方列侍〇今云玉串御門西方より北に向ふなり東を上とす　大内人並物忌父小内人等西玉垣御門内東向列侍齋宮諸司等第三御門西分頭跪侍〇今云齋宮諸司は第三御門外にて板垣御門内なる由皇太神宮條に見ゆ　爾使中臣登ニ上版位ニ幣帛告刀申〇今云太神宮式には使中臣申ニ祝詞ニ訖亦神宮司宣ニ祝詞ニと有れば後には太神宮司の宣る祝詞も出來れりしなり此を以ても此次なる詞は度會宮にも申せるなる事決し　畢即大物忌父發太神宮司並禰宜乃捧持太玉串乎受取弖第二御門内進置先太神宮司東方次禰宜西方〇今云此は謂ゆる玉串行事なるが皇太神宮にては宇治大内人の職掌なるを此宮にては禰宜の行事也儀式帳禰宜職掌條に三節祭亦時々幣帛使參入時衛太玉串捧持齋敬仕奉と所見たり此事六月々次祭太玉串の註に云るが如し　然即禰宜發御鎰被給弖大物忌乎前率立弖内院參入次太神宮司次大内人等參入勅朝廷奉進幣帛一筥絹一疋糸一屯〇今云此は上に引る内藏寮の幣帛なり次に絹一疋糸一屯と有は四時祭式に所見たる九月神嘗祭の幣物なる事上に云り　又太神宮司進御衣料二疋五色料絹一疋禰宜織奉織乃太神御衣絹二疋又御馬鞍一具受〇今云御馬鞍は朝廷幣帛なる事上に云り三代實錄九に以ニ充御馬二疋ニ充ニ飼内人一人ニと有れば延暦より延喜の間に二正奉られし事も有けるにや又度々の御馬の積れるを以云るにや此は事の因に云なり　太神宮司波内院御門内跪侍禰宜波正殿乎開奉弖件幣帛進入大内人從西寶殿開弖御馬鞍調度進上畢即閇ニ殿戸ニ罷出〇今云閇殿戸の閇字を開に誤れば正し引　先太神宮司次禰宜次大物忌次大内人等皆悉罷出弖就ニ本版位ニ即諸刀禰等共發四段拜奉弖八開手拍次短手一段拍弖一段拜奉又更如レ上拜拍〇今云太神宮式に齋内親王並衆官以下再拜拍ニ八開手ニ次拍ニ短手ニ再拜如レ此兩遍とあれば齋王は侯殿の内より共に拜奉給ふなり　畢即罷出先使王次中臣次忌部次太神宮司次禰宜次大内人等如此罷出弖高宮四段拜奉弖短手二段拍一段拜奉但内親王不レ向ニ高宮ニ　畢即始レ使並齋宮諸司等及至ニ于諸番上ニ皆悉就ニ直會殿ニ給ニ大直會ニ先短手二段先太神宮司並齋宮主神司次驛使以下齋宮諸司已以下次諸司番上已上並諸刀禰等被給畢時後手一段拍〇今云後手は四時祭式鎭魂祭條に行酒三坏以後拍ニ後手ニ退出と有る如く直會畢て退く時に拍を云なり外宮嘉祿三年山口祭記に宮掌宗親季綱云々三獻畢爲ニ作所沙汰ニ一殿前左右立ニ續松燈火ニ事訖可レ有ニ御後手ニ之所無レ之とも高宮假殿

迂宮北御出次第にも在ニ倭手一と所見たり倭手は往迎ふべき事師說に詳なり 爾二箇郡歌人 歌女等被垣御門內西方參入弖先御饌歌仕奉 次伊勢歌次倭歌仕奉○皇太神宮儀式帳には第五重御門參入就レ座即進ニ第四重ニ倭舞仕奉云々と有れども其は勅使以下の事にて此歌人歌女等の事を載す 然更太神宮司驛使並齋宮諸司官人等發第三御門參入就レ坐即倭儛仕奉 先幣帛使中臣儛次忌部次使王次太神宮司次禰宜次大內人次齋宮主神司次諸司官人等其直會酒波采女二人東方侍弖御角柏爾盛弖儛畢人別捧給但齋宮不レ坐時禰宜內人等妻子仕奉然男官儛畢時禰宜內人等妻儛次齋宮采女等五節儛畢即禰宜內人物忌等爾祿給禰宜大物忌儛人並三人各御衣一領大內人三人各調布一端小物忌五人綿一屯○太神宮式に云く凡三節祭直會日禰宜內人等祿者五位禰宜被一條料絹一疋一丈三尺綿五屯六位禰宜襖子一領料絹一疋綿一屯大內人諸神宮內人物忌汗衫各一領五節儛人二人絹各一疋酒立女四人絹各三丈云々と見えたり給畢則內親王御輿離宮還坐然夕時更禰宜內人等御酒殿院侍弖後直會仕奉此は二度目の直會なり前なるは直會院にて在したるが今は御酒殿院にて在なり偖齋內親王は離宮院に還らせ給ひて翌十七日に皇太神宮に參らせ給ふ儲有り以ニ十七日ー高宮參供奉告刀申物忌父禰宜內人等妻子皆悉參集拜仕奉然即直會被給其直會人給レ飯宮炊給ニ禰宜內人等妻子等ニ各熟食備人別被給畢即 倭儛仕奉 先高宮物忌父次禰宜次大內人次小內人次諸刀禰等仕奉畢即更大宮地神爾 湯貴神酒一缶仕奉畢即禰宜內人物忌等並諸刀禰等大直會被レ給○今云大宮地神は六月々次祭に宮地神と見え二月々次祭條に宮廻神とも有と同じく爲て皇太神宮にて興玉神と申し宮北神矢乃波々木神と聞ゆるは此神なり又當日伊向神事被行る事六月例の如し以ニ十八日ー月夜見神祭供奉禰宜內人等皆悉參集奉祝仕奉其直會料米者祝受熟食作弖參集禰宜內人並諸刀禰等給○今云年中行事に十八日土宮御祭事禰宜ノ申ニ詔刀ーと見えたり又當日に外宮御氣殿御裝束事所見たり月 日取ニ吉日ー所管神社及宮廻神御田神處々枝神祭仕奉禰宜內人等巡勘其供奉但諸社祝告刀申宮廻神御田神處々枝神御巫內人告刀申用物三種絹五丈一尺木綿四斤麻十斤○今云太神宮式に度會宮所攝十六座云々右諸社並預ニ新年神嘗祭ーと所見たり二月新年祭條に月內取ニ吉日ー所管諸社十六所並宮廻神二百餘前御井二所御田神所々小社九所神乎春年新祭供奉至于二月上旬ニ禰宜內人等請ニ被供奉用物四種ニ絹五丈一尺木綿四斤麻十斤鐵一延とあり ○年中行事に九月十八日外宮御饌殿御裝束事と有り此は儀式帳に二所太神朝御饌夕御饌供奉行事御饌殿一宇用物四種調絹二疋御饌並二所太神及相殿神御坐料調布捌端殿內天井壁代二所太神及相殿神坐下敷並數布御巾內等料麻席參枚二所太神御床上代敷料並相殿神御料麻簀三枚二所太神御簀相殿御簀料右件用物太神宮司年別九月祭所ニ宛奉ーと所見たる此なり太神宮式には其御饌殿年料所ノ須絹二疋布八端東席三枚食單布二端食薦三枚神宮司充レ之と有り己に此文を別て上に云り 偖同帳 等由氣太神鎭坐の條に是以御饌殿造奉弖天照坐皇太神乃朝乃大御饌夕乃大御饌乎日別仕奉と有る如く皇太神の日々の大御饌は專豐受太神の御饌都神と爲て供進らせ給ふ所なり然るを神龜の頃より其御饌殿に於て朝夕の大御饌を

奉る事と成れり此後の例二所太神を共に崇奉る例なるは此より前に皇太神宮に朝夕に運備奉られし程にも必先皇太神宮に送奉り然して豊受太神に供進る古例に依れりと聞えたり但已にも云る如く豊受太神の皇太神に大御饌を供奉らせ給ひ其相嘗を聞食す意味なる事云も更なり此に依て止由氣宮儀式帳の例三節祭の外に御饌の事を云には必二所太神と云格なり（三節祭には皇太神宮に於て朝大御饌夕大御饌仕奉れる事なる故に皆るなり但此も止由氣太神た御饌調進る所に請し奉る事なれば此宮度會宮より奉らせ給ふ意味なる事上に委しく註るが如くなり）同帳二所太神朝御饌夕御饌供奉行事條に供膳物天照坐皇太神御前御水四毛比御飯二八具御鹽四坏御贄等止由氣太神御前御水四毛比御飯二八具御鹽四坏御贄等相殿神三前御水六毛比御飯三八具御鹽六坏御贄等右大物忌父我佃奉拔穗乃御田稻乎先穗乎波拔穗爾拔弖九月神嘗祭八荷供奉（一荷懸三八把一）然所遺稻乎以弖將來至于九月十四日一御炊物忌爾令三舂炊一弖御鹽燒物忌乃燒奉御鹽並志摩國神戸人夫等奉進御贄等乎持弖御炊物忌爾令三頂持一大物忌御机副弖禰宜大内人等御前進弖御饌殿乃前爾持參入弖大物忌御炊物忌乎奉入爾日別二度奉畢時三八遍拜奉罷退（此御膳器造奉土師物忌並度會郡信丁）と所見たり此御饌殿に爲て皇太神の日々の供御を奉らせ給ひ其相嘗に就せ給ふ證なり（同帳禰宜職掌條に率二諸物忌等一二所太神乃朝乃大御饌夕乃大御饌日別齋敬令三仕奉一と記し大内人條に率二番小内人並物忌等一朝乃大御饌夕乃大御饌乎番別催供奉と有る番とは其日當番にて宿直爲るを云なり大物忌條に他人火物不レ食宮大垣内立三忌庤一造り不レ歸二後家一宮侍弖拔穗御田稻乎御炊物忌爾令三舂炊一弖御鹽燒物忌燒仕奉留御鹽並志摩國神戸人夫進御贄乎土師物忌造儲備奉雜器爾盛奉弖著三明衣木綿手次一前垂懸弖天押比蒙弖洗手不レ干之弖二所太神乃朝大御饌夕大御饌乎日別齋敬供奉とも大物忌父條に明衣著木綿手次懸弖朝御饌夕御饌持參入御前追仕奉とも御炊物忌條に立三忌庤一造大物忌父佃奉禮留拔穗乃御田稻乎舂奉炊奉弖御鹽燒物忌乃燒奉禮留御鹽並志摩國神戸人夫進御贄乎禰々儲備奉弖頂持弖與二大物忌一共副奉乃御饌夕乃御饌乎日毎齋敬供奉とも御炊物忌父條に大御饌爾供奉御枚手五十六枚日別仕奉と有り此は二所太神御飯三十二具相殿四二十四具合て枚手五十六枚なり御鹽燒物忌條に立三忌庤一造即御鹽殿仕奉弖御鹽燒弖朝御饌夕御饌爾日毎仕奉同父條に御鹽山木乎御鹽殿爾切進弖御鹽爾燒儲弖御鹽堝作儲弖物忌爾令燒弖朝御饌夕御饌爾日別奉レ進と有て上に引る文に皆能合り此日別の大御饌に至ては度會宮の神人の職等にして重き事如此し）此大物忌父の佃奉る御田は太神宮式に神田卅六町一段云々割度會郡五町四段（二町四段太神宮三町度會宮）令三當郡司營種一收二獲苗子一供二用太神宮三時並度會宮朝夕之饌一と有て此式の如きは度會郡司を爲て營種ら令る如くなれども然らず郡司此を奉行して大物忌父に令佃るなり借太神宮三時とは六月九月十二月三節祭の御料度會宮のは右三節祭をも兼て日毎に供奉る朝夕の大御饌に供奉るが故に其田數も多きなり（皇太神宮儀式帳神田行事條に見レ佃御田二町四段荒木田一町字治田一丁並二町御饌料四段荒祭宮料云々と有て日別の御饌料を云す三節祭に供御る事な旦云るは度會宮にて供進る故なり）所以に止由氣宮儀式帳には御田の事を二所太神の御料なる由に記奉れり此日

別の大御饌の事の重きに依て御田佃の事も此上無く嚴重なり事の因みに依て今此を記す可し（但此は皇太神宮の御方を主と立て記奉る可きなれども御田の事御饌の事に就ては度會宮の事に止事無き子細有が故に度會宮の式と本文に立て彼宮のを傍に注す者なり見る人審る事勿れ）二月例に以二先子日一二所太神乃朝御饌夕御饌供奉御田種下始行事禰宜內人等率二營裁物忌一湯鍬山爾參登爾時忌鍛冶內人加造奉留金人形鏡鉾並種々物持弖山口神祭然弖櫟木本祭奉（祀物如二山口祭一）然其木本乎營裁物忌々鋒以弖切始弖然即禰宜內人等我戶人夫等爾令レ切湯鍬爾造持弖諸禰宜內人等波眞佐支弖蘰爲弖自二山下一來弖二所太神乃御饌所乃御田爾致立弖先營裁物忌湯鍬持弖耕始弖湯種下始然即其御田乎令爲耕作殖狀畢即諸內人等田儛仕奉弖直會被給留云々と見え營裁物忌職掌條に別二春始一二所太神宮乃大御饌所爾佃奉扳穗乃御田始奉時爾禰宜率二營裁物忌並諸內人等乎一湯鍬山爾參上時爾山口祭供奉其祭物金人形廿口鉾廿柄鏡廿面木綿麻纏贄海菜酒等以弖祭供奉畢時告刀申御巫內人祭畢即深山祭弖櫟木本到弖木本祭供奉物如二山口祭一其告刀申營裁物忌父申畢時營裁物忌淨鋒以天其木切始然後禰宜內人等我戶人夫等祭時共起一時令レ切天湯鍬爾造持弖眞佐支乃蘰乎人別給弖營裁物忌乎前率立弖諸禰宜內人等下來弖二所太神乃御饌所乃御田爾下立弖先營裁物忌湯鍬持弖東向耕レ佃湯草湯種下始然畢時諸內人等我戶人夫以令レ爲二耕殖狀一即營裁物忌父田儛仕奉次大物忌父次小內人等儛畢然即禰宜內人等皆悉集侍弖大直會被レ給然畢時歲實蘰給畢皆悉罷去然後禰宜內人物忌並諸百姓等私田耕始レ之と見ゆ此二を合せて大略を伺知べき者なり右の山口祭は祈年及大忌祭に山口神を被祭ると同じく木本祭は其櫟木を伐取て湯鍬に造る爲なり借子日に湯田を下種る事故實と聞えたり（皇太神宮儀式帳二月例に先始來子日太神宮朝御饌夕御饌供奉御田種蒔下始禰宜內人等率二山向物忌并二湯鍬山爾參登時波忌鍛冶內人乃造奉留金人形並鏡鉾種々物持弖山口神祭然到櫟木本一即木本祭祀物具如二山口祭一然其木本乎山向物忌仁令レ以二忌鉾一弖切始弖然即禰宜內人等加戶人夫等爾令レ切弖湯鍬仁造侍弖諸禰宜內人等波眞佐岐蘰爲弖下來太神乃御饌所乃御田仁致立酒作物忌父仁忌鍬令レ採弖太神乃御刀代田耕始即田耕歌弖田儛畢然即諸神田耕始並諸乃百姓乃田耕始又秋收時爾小內人祝部等乎率弖太神乃御田乃稻乎拔穗爾拔弖長椋乃末爾就弖御田乃頭爾立弖臨二九月祭日一弖酒作物忌父爾令レ搗弖太神宮乃御倉爾奉レ上三節祭朝御饌夕御饌供奉と有り後には此を鍬山伊賀利神事と云て內宮は一日外宮は上亥日より子日に係て被行るなり其作法建久行事記に委しければ就て見る可し）此より四月七月四日に風日祈神事等有て當年穀の豐登を祈り九月に至て先稻を拔穗に拔て神嘗祭供奉り其より更に新穀を以て朝大御饌夕大御饌日別に二度供奉る事永世の例なり

天皇我御命以氐度會能山田原爾稱辭竟奉流皇神前爾（スメラガオホミコトモチテワタラヒノヤマダノハラニタヽヘコトヲヘマツルスメカミノマヘニ）

申給久常毛進留九月之神嘗能大幣帛乎某官某位某王中臣某官某位某姓名乎爲レ使氐忌部弱肩爾太襁取懸持齋理令ニ捧持一氐進給布御命乎申給久止申

此は此神嘗祭に就て朝廷より王氏以下の御使を立られ幣帛を奉らせ給ふ詔刀にて中臣の申す所此なり神嘗祭詞は次に被載たる其なるが其言を換て申べき由は被記ねども先に九月神嘗祭と有て太神宮の詞を擧げ次に豐受宮同祭と有て此詞を記せる次に同神嘗祭と有る詞の前後は太神宮の詞なれども此同字は太神宮豐受宮二宮を係たる同なる事太神宮詞には聯けず却て豐受宮同祭の次へ廻せるを以著明くなむ有ける如此思定めて太神宮式を閲に九月神嘗祭云々右月十六日祭ニ度會宮一十七日祭太神宮云々使中臣申ニ祝詞一訖亦神宮司宣ニ祝詞一と有る文の兩宮に亘るに疑ふ所更に無に至れり（尙六月々次祭より以下條々に云るを思合す可し但儀式帳にては兩宮共に中臣の申す告刀の事有て宮司の宣る事無しと雖も延喜式に至りては別に次なる辭別出來りて如此く二方にて在る事なり）○天皇我御命以氐と太神宮のには皇御孫命御命以と有を相並べる此宮に爲て如此く異れるは後れて出來るらむかとも思へども然に非ず左にも右にも云る其頃の習俗に依れるなり（然を深く心有て爲るならず）○山田原爾稱辭竟奉流二月祈年六月十二月々次祭詞には山田原乃下津石根爾と云り（太神宮のにも此祭のには下津石根爾を被略て度會五十鈴河上爾稱辭竟奉と有り是に於て是非の論有に非ず）○皇神前爾申給久上なるには豐受皇神前爾云々と有を如此も申す事は後紀天長三年太神宮へ奉らせ給ふ告文に度會乃五十鈴之川上爾坐皇太神乃大前爾申給久と有を始と爲て枚擧に暇有ず○神嘗之大幣帛は內藏寮の御幣と神祇官より供進ると二種なり（其は上に四時祭式內藏寮式を擧て云るが如し）

○同神嘗祭

此は二所太神宮に通じて申す詞なる事六月々次祭に於るが如し此なる同字は上の二を合せて受たる事已に云り六月々次祭共に同祭の祝詞なるを別條に被出たる事は上なるは使中臣の申す所に爲て唯幣帛の事を稱へり此文は太神宮司の宣る所に爲て御酒御贄懸稅とを擧て神嘗の由を云るなり（以上太神宮式の趣此なり）然れど二所太神宮共に儀式帳には使中臣の告刀申す事耳有て宮司の祝詞を宣事の見えざるを以て思ふに上代より此二を兼て中臣の申も宜も爲られけむを後に此詞の出來てより式文の定の如く中臣は申し宮司は宣る事と成れりしなり（此等の沿革已に新年月次條に云り但此詞には古祝詞新年月次等祭詞の辭別より出たり）

度會乃宇治能五十鈴乃川上爾大宮柱太敷立氐高天原爾千木高知天稱辭竟奉留天照坐皇太神乃大前爾申進留天津祝詞乃太祝詞乎神主部物忌等諸聞食止宣（禰宜內人等共稱唯）

申進留は儀式（九月十一日奉伊勢太神宮幣儀）に好申（天奉禮）と大御命宣し給へる其を指なり江次第には如常能久申（天進禮）とも常毛奉留長月乃神嘗乃御幣會汝中臣能申（天奉禮）とも有り（此時に限らず伊勢に勅使を進せらるゝ時には必然申す例なり西宮記に伊勢使當日早旦沐浴次修レ禊云々次參レ內依レ召參二御前一近二龍顏一給二震筆宣命一使捧レ笏給レ之挿二懷中一勅曰能久申進禮稱唯云々と見えたり但此は唯後の例と成れるなり）右の如常と有を以見るに決めて此天津祝詞乃太祝詞を奏請せとなり故此に於て其を宣申す故に然は云るなり

天皇我御命爾坐御壽乎手長乃御壽止湯津如二磐村一常磐堅磐爾伊賀志御世爾幸倍給比阿禮坐皇子等乎惠給比百官人等天下四方國爾百姓爾至天長毛平久護惠美幸倍給止三郡國々所々寄奉留神戸人等能常毛進留由紀能御酒御贄懸税千税餘五百税乎如二横山一久置足成天大中臣太玉串爾隱侍天今年九月十七日朝日豐榮登爾天津祝詞乃太祝詞辭乎稱申事乎神主部物忌等諸聞食止宣（禰宜內人等稱唯）荒祭宮月讀宮如是申進止宣（神主部共稱唯）

常磐堅磐爾伊賀志御世爾云々建久行事記に此詞の載るには常石堅石爾伊波比與佐志給比伊賀志御世爾恤幸給比と有り（六月々次祭も此例なり其下見る可し儀式帳に此と同じき文を載たるも行事記の如くなるは古くより其如く云傳たるなンめり）○護惠（美幸倍給止）鈴屋大人說に諸本に幸比と有る比字は衍字なり倍と有べきなり此にては自佗の相違有り上の六月々次祭詞に倍と有ぞ正しき」と云れたるは然る言なり儀式帳にも伊加志御世爾佐岐波閇給比云々と有は此と同文なり（今按ふに諸本何れも此と有り此にも伊賀志御世爾幸倍給比と有を以見に決めて古く倍字なりけるが誤れりしなり）○天下四方乃國乃云々を行事記なるには天下四方國乃人民乃作食留五穀乎豐稔爾恕幸給止と有り六月々次祭詞も然り然れども月次祭には然もこそ新申さめ此神嘗は其御守護に依て成就る新穀を奉り且其報賽をも申聞ゆる所なるが故に無ても有なまし（朝廷の大嘗祭にも其御祈は無して其聞食す事を耳云續けたるに思合す可し委しくは新年祭大嘗祭條を讀亘して曉る可し止由氣宮儀式帳十二例には六月々次祭の事を六月新年とも云り此を以て月次祭の新年なる事を知べし）三郡國々所々の事は上の六月々次祭條に云り行事記には荷前御調絹の事を云り○懸税は世記に謂ゆる懸久眞なり皇太神宮儀式帳に細税太半斤太斤と云ひ止由氣宮儀式帳に細税稻太半稻懸税稻と云ひ太神宮式に小税大税斤税と有て合せて三等なり（細税細税稻小税同じく大半斤大半稻）

大税同じく太斤懸税稻斤税同しき事合せ見て知べし下に條目を別て云てん懸久眞と云は右の二等の差別を立ずして云稱なり倭姫命世記に垂仁天皇廿七年戊午秋九月鳥鳴聲高聞ユ晝夜不止囂此異止宣ユ大幡主命舍人紀麻呂良止差テ使遣合テ見ニ彼鳥鳴所ニ罷行見淡島國伊雜方上葦原中有ニ稻一基ニ生本淡一基爾爲ユ末千穗茂也云々爾時倭姫命云々物忌始給ユ彼稻伊佐波登美神乎爲ユ拔穗爾令拔ユ皇太神御前爾懸久眞爾懸奉始支云々千税奉始事因ト其也と所見たる此なり懸久眞とは懸米と云事ならむ和名抄淡路國郷名に神稻久萬之呂と有も何れか神封の田地に就て號たるなる可し此に依て思ふに儀式帳に久麻良比神社有る久麻は稻良は助辭比は飯なる可くや稱ニ大歲神兒千依比賣命ニ坐彩石と有も由有て思ゆる也此考は思ふに古事記ニ山神段に蘇賓國神ニ進日別一と有る進日別は進御別にて蘇は稻なる可し舊に大國魂神云霊より出て大歳神を祭て古へ御饌なり備此蘇は稻なりと云は天より始て降来坐て千代宮に天津日嗣を定させ御て其日嗣ら當徳を其地方より事始て天下に悉く顯弘しめ給へる趣なればなり細税大半斤大斤等は右の懸久眞を細分して云稱なり世記に又明年秋之比眞名鶴皇太神宮當天翔從テ北來天日夜不レ止翔鳴支云々罷到見淡彼鶴佐々牟江宮前之葦原中還行鳴使到見ニ葦原中ニ生レ稻一基爾爲天末八百穗茂也昨捧持鳴支疑使到見顯時鳴聲止天翔事止支于時返事白支爾時倭姫命詔久恐皇太神入坐淡鳥禽相從草木共相隨奉稻一本千穗八百穗茂止詔利詔天竹連吉比古等爾仰給先穗乎拔穗爾令拔天半分大税ニ令テ苅皇太神御前懸奉拔穗淡號ニ細税ニ號ニ大苅大半ニ止御前懸奉仍天都告刀申千税八百税餘止稱白天仕奉也因其鶴住所爾八握穗社造祠也と見ゆ此趣にては此一基に爲て千穗八百穗に茂れるを拔穗に令レ拔て細税と號け其を一束ニ爲て大苅と云ひ其半分を束分て大税とも大半とも號けたる由なり遠天皇祖の神代より嚴重にも其田租の法立ち束把等の定有て古より所行る事觀つ可し八握穗社は神名式に伊勢國多氣郡竹佐々夫江神社有る其地なる可し此に佐々牟江宮と有は皇太神の行宮なりし名を存るなり世記に佐々牟江爾御船泊テ此其所爾佐々牟江宮造奉支大若子命白鳥之眞野國止白支其戸に佐々牟江社定給支と有り如此く白鳥之と稱申せしを以見に鶴の來より多く群り居し地なるべし佐々牟江の佐々を苗を佐と云て稻の事なる事六月々次祭佐美長神社の事に就て云る知し然れば元は名も無き葦原なりしを白鳥之眞野國と稱へ後に此稻穗を見出つる所以て佐々見江と稱たるには非るか尚ぐ前後の事に就て考合す可き者なり　細税は皇太神宮儀式帳及太神宮式共に以ニ一把ニ號ニ一束ーと有り斤税ニ束を十分たる一なり其は懸税條に飯野神戸十一束と有る註に大斤十束細税十把と有にて著同し但本に大斤を大半斤と寫る半字は衍なり大半斤は神嘗祭百束御饌八十束合せて百八十束を除て外に非れば決めて大斤なり其に小斤と有に依て讀べし大半斤又は大税とも云ふ細税に對せるなり帳及太神宮式共に大税以ニ五把ニ爲レ束と有て此を二合すればニ束と成なり

細稅五束を合せて大稅一束と成るにて斤稅一束の半分なり考に賦役令義解に凡官稻之原出自二田租一即分爲レ三一曰大稅二曰級穀三曰部稻也と有を引出られたれど此大稅と同じからず小稅大稅斤稅共に神宮限の名目にて相混じ難かり　大斤は止由氣宮儀式帳に唯に懸稅稻と有り打任せて世に云ふ一束なるが故に別に名目を立ざれども細稅大稅と云に對て大斤とは云初たるなる可し田令義解に束稻舂得二米五升一也と有は此大斤なり然れば大半斤には米二升五合を得細稅には米五合を得る積りなり　式に斤稅と有は字音の任に訓べきにや斤字集韻に權二輕重一之器と有て權衡の名なり然らば斤稅は懸稅と訓を同しく爲べし　偖懸稅は內外の玉垣に懸奉る事二所太神宮儀式帳共に所見たる所なるが神田の御稻は拔穗の任に正殿の下に置奉り御倉に納奉る例なり其は皇太神宮儀式帳二月例條御田に秋收時爾小內人祝部等乎率豆太神乃御田乃稻乎拔穗爾拔氐長楉乃末爾就豆御田乃頭仁立豆即臨二九月祭日一豆酒作物忌父爾令レ捧豆太神宮乃御倉爾奉レ上三節祭朝御饌夕御饌供奉と見えたる此にては直に御倉に上奉る如くなれども止由氣宮儀式帳神嘗祭條に拔穗稻乎波內院持參入豆正殿乃下奉レ置と有て此には御倉に收る事無を合せ讀て其詳なる由は所知るなり此拔穗稻は御饌殿行事に右大物忌父我佃奉拔穗乃御田稻乎先穗波拔穗爾拔豆九月神嘗祭八荷供奉一荷懸二八把一とも有此なり但此神田の拔穗稻は右の細稅大半斤大斤の外なり皇太神宮儀式帳神田行事に九月神嘗祭供奉拔穗卌束と所見たるは右の酒作物忌父が捧奉る員數なるなり　右の長楉の末爾就豆云には類聚二代格に應レ設二乾稻器一條に如レ聞諸國百姓所レ營二稼穡一偏特二陽景一輙忘二霖雨一云々置二稻庭中一見(ミス)之(ミス)且飢云々大和國宇陀郡人田中搆レ木懸二曝種穀一其穀之燦(カハク)似レ當二火炎一俗名謂二之稻機一今往々諸國所レ有在焉宜仰二諸國一廣備二此器一事緣レ利レ人不レ得二麁略一承和八年閏九月二日と有り既く此稻機の事太神宮の御田に在て上古より用來る事彼長楉乃末爾就豆と有を以所知たり　稅は力と訓事は決めて古語なるべし其は凡天下に在と有ゆる田地は悉く天皇の御有なり其田地は稻穀の生て立べき域なり此を耕作る事天下百姓の務なり其百姓は天皇の御民なり其稼穡を以て租稅と供奉る事宮人の雲上に在て仕奉る意味に異ならず是即田租を以力と稱す所以なり天皇は調役を科せ令獻給ふを以て此を天津日繼と稱奉り天下百姓は調役に供奉るを以て力と爲る事天照太御神の御定なる所を仰奉て號たる所なり　庸布を力布と訓も同じ意味なり崇神天皇御紀に十二年秋九月甲辰朔己巳始校二人民一更科二調役一此謂二男之弭調女之手末調一也云々と見ゆ力役を以て百姓の仕奉るを云ふ和名抄に主稅寮知加良乃豆加佐と見ゆ職員令に主稅寮頭一人掌倉廩出二納諸國田租舂米一とあり知加良と云て直に田租の名なる事を思ふ可き者なり○千稅餘五百稅は唯數の多きを云り行事記なるには千稅餘八百稅と云り此は止由氣宮儀式帳に二箇神郡國々所々神戶所レ進懸稅稻乎千稅餘八百稅爾懸奉とも懸稅稻乎百八十荷持參入豆云々玉垣爾懸奉とも有る此此千稅八百稅百八十

荷共に定りたる數量を云には非ず其物の夥多(サモダヽ)きを大凡に云なり 上に引る世記に千槭奉始事因レ茲也と有は右の千槭とは違ひて千は唯添たる耳に爲て此は田税を供奉る事耳を云るなり混ふ可らず ○如ニ横山ニ久置所成天云々を行事記には如ニ海山ニと有事なれども良はしからず此は二月祈年六月々次等祭詞の辭別に狹國者廣久峻國者平久遠國者八十綱打掛氐引寄如レ事皇太御神能寄奉波荷前者皇太御神能大前爾如ニ横山ニ打積置氐殘乎波平聞看と有る其御祈の徵驗有て當年の新穀の豐熟(ヨクミノ)り國々の荷前を貢奉る秋に至れるを以て其荷前の初穗を皇太神宮に此神嘗に奉らせ給ひ殘をば天皇の新嘗に聞食むに依て如此は申させ給ふなり 六月々次祭にも此語を用ひたれども此には右の古語の結と成る所なるが故に殊更に重く見る事なり祝詞考に此祭には新稻の穎を束ねて竹に着て數多奉ると云り然らば其懸て奉れるを大前に立置たるも如ニ横山ニと云べし」と云れたれど此は御酒御贄以下に係て如ニ横山ニとは云る者なりさし ○今年九月十七日朝日豐榮登爾は考に云れたる如く度會宮にては十六日と日を換て申なり○天津祝詞乃太祝詞辭乎、稱申事乎は上に申進留天津祝詞乃太祝詞乎云々と有る結なれば必如此有べき者なり鎭火祭詞にも上に天都詞太詞事乎以申久ニと有て中に其事を云ひ下に天津祝詞乃太祝詞事以氐稱辭竟奉久上申ニと云終めたり 行事記に載るには六月々次祭にも此にも天津詔刀乃太詔刀事乎以稱申事乎云々と有は甚宜し如此く伊勢の祝詞は如ニ式文に載るよりは神宮に傳る方決めて正しと所思る事の多在るは朝廷にて改りたるも神宮にては舊きを存(ノコ)して守れる故にこそ

齋内親王參入時(イツキノヒミコノマヰイルトキ)。

本に奉入時と作れども今は出雲本に從へり齋宮式に卜ニ定吉日ニ臨レ河祓禊參ニ入於伊勢齋宮ニとも九月神嘗祭使云々當ニ齋王參入之時ニ即陪從參入とも書る例有ればなり 但同式に入ニ野宮ニとも入ニ齋院ニとも入ニ太神宮ニとも齋内親王の御自入坐す由には記せれども佗より奉レ入と書る例非れば決めて誤なり ○此は神嘗祭詞の辭別なるが故に齋内親王參入時詞とは記さず次へ直に續けて有つるを何時の頃よりか別行に分ちて終に此詞の題號の如く成れるにより故今も本の任に爲て改めず 然るを考に此を奉入ニ齋内親王ニ時詞と改其下の細註に進ニ神嘗祭幣ニ詞畢即申也と作れたり如何にも如此に有ま欲き者なれども中々なる辭事なり然計り古書中に在事の悉く己が心に叶へらん樣には得有まじき者なるをや ○齋内親王と聞え奉るは皇御孫命の御手代と爲て掛卷も甚も畏き天照坐日太御神を齋奉らせ給ふ由に緣れる稱なり其始皇太神皇御孫命同大殿に同御床に在して神物官物未分れざりし間に皇女等の其御祭祀を主り御在し、故を以て崇神天皇の大御世より以降皇女を託奉らせ給ふ常典とは成けるならし然有すは皇太宮に齋かせ給ふ時こそ有め御許を離奉て別所に令坐奉らむには皇子(ヒコミコ)をしも御杖代には奉らせ給ふ可きに皇女を爲て令齋給へる事斯る由

緣無てやは有べき猶日本大國魂神には渟名城入姫命を託遣せられ太物主神の御心を卜問せ給ふには倭迹々日百襲姫命を以定させ給へるなど同御紀に所見たり皇女を以て神祇に祭らせ給ふ事如此し齋宮式に凡天皇即位者定ニ伊勢太神宮齋王ー仍簡ニ內親王未レ嫁者ートレ之云々と有て種々の公事神事等の事有り其式文の御定はしも世々に有來し例を以て被立たる所なるが故に歷世の事を先知ずては其詳なる事を得しも曉るましければ崇神天皇御世より延喜の頃迄の沿革を示す可し然るは式文の御定はしも彼御世より次々に有來し例の是(ヨキ)を採用られたるが次々多く成以て來し者なる故なり崇神天皇御紀に六年云々先是天照太神倭大國魂二神並ニ祭於天皇大殿之內ー然畏ニ其神勢共住不レ安故以ニ天照大神ー託ニ豐鍬入姫命ー祭ニ於倭笠縫邑ー仍立ニ磯堅城神籬ー神籬此云ニ比莽呂岐ー云々と有る此始なり倭姫命世記には此事を御間城入彥五十瓊殖天皇即位六年己丑秋九月就ニ於倭笠縫邑ー殊立ニ磯城神籬ー奉レ遷ニ天照太神及草薙劍ー令ニ皇女豐鋤入姫命奉レ齋焉と見ゆ此文古語拾遺に同じ儀式帳には磯城島瑞籬宮御宇御間城天皇御世以往天皇同殿御坐而同天皇御世爾以豐耜入姫命爲ニ御杖代ー出奉支と有り御杖代の名稱此時に出來れるなり垂仁天皇御紀に二十五年春三月丁亥朔丙申離ニ天照太神於豐耜入姫命ー託ニ于倭姫命ーと有れば御

杖代に仕奉らせ給ふ事凡八十年計にて其は疑無物から御紀の傳にては倭姫命の御事に疑有り此皇女の御母は日葉酢媛命に御合坐て生坐る御子中の四柱に當給ふ御子なるが御母の皇后に喚れ奉りしは垂仁天皇十五年二月なり此より廿五年迄を四柱に配賦ても二歲三歲には過ごさせ給ふましかれば必此は誤傳にて古語拾遺に天皇第二皇女母皇后狹穗姬と有方正しく且世記に崇神天皇五十八年辛巳遷ニ倭彌和御室嶺上宮ー二年奉レ齋是時豐鋤入姫命吾日足止白伎爾時御姪倭比賣命爾事依奉利御杖代止定弖從レ此倭姫命奉レ戴ニ天照太神ニ而行幸と有ど正しく在る可き此時垂仁天皇は皇太子に坐し間なりしかども三十歲計にて渡らせ給へ、ば凡十歲程の皇女は御在ず可ければ豐鋤入姫命の御杖代は此年迄凡五十五年なり但同天皇六十年宇多秋篠宮に遷坐迄を計たるなり然るを諸書に倭姫命の立給へるを垂仁天皇の御世と爲るは同天皇の御爲に立せ御在し坐つればなり所以に儀式帳には豐鋤入姫命御形長成支只レ次[illegible]向珠城宮御宇活目天皇御世爾倭姫內親王遣爲ニ御杖代ニ齋奉支と有り古事記に豐鋤比賣命拜ニ祭伊勢太神之宮ー也と有は此時未伊勢に坐しには非れども伊勢に御坐す後の名を以て前に遡らし記せるなり偖右の垂仁天皇廿五年三月は世記を見るに飯野高宮より伊蘇宮に遷幸の時なり然れば此頃伊勢國に美宮地有べき由を倭姫命より奏上給ひしかは驛使

為て阿倍武渟川別命和珥彦國葺命中臣大鹿島命物部十市根命大伴武日命等五人を被下し事を記誤れるにや御紀に同年二月丁巳朔甲子詔して右の五人に我先皇御間城入彦五十瓊殖天皇惟叡作聖欽明聰達深執謙損志懷沖退綢繆機衡禮祭神祇剋己勤躬日愼一日是以人民富足天下太平也今當朕世祭祀神祇豈得有怠乎と有て次に上に引る倭姫命の事有と世記廿六年皇太神鎭坐の條に于時遞驛使朝廷還詣上と有に思合せられ侍り　儀式帳にも從美和乃御諸宮發豆命出坐支衛御遞驛使云々五柱命等爲使氐命入坐支と有り備御紀一書に天皇以倭姫命爲御杖貢奉於天照大神是以倭姫命以天照太神鎭坐於磯城嚴橿之本而祠之然後隨神誨取丁巳年冬十月甲子遷于伊勢國渡遇宮と有る此も違へり嚴橿之本に皇太神の坐し程は御姪豊鍬入姫命の仕奉給へれば此事は誤てれども倭姫命の既くより仕奉らせ給へる證には成なり（然れば古語拾遺に倭姫命の御母を狹穗姫命に坐と有そ宜る可き古事也と書紀と同じく倭比賣命を氷羽州比賣命の御子とも有るを拾遺に右の如く異說を出せる事其頃迄然る古傳も有し故なり）　儀式帳に纏向珠城宮御宇活目天皇御世爾倭姫内親王遣爲御杖代齋奉支と有は書紀に本就るなるへし古事記には倭比賣命者拜祭伊勢太神宮也と有て例の此記の習にて何時と云事を載ず拾遺に泊于卷向玉城朝令皇女倭姫命奉齋天照太神云々因興齋宮令倭姫命居焉と有も唯倭姫命を垂仁天皇に當て云耳なり御紀に因興齋宮于五十鈴川上是謂磯宮と有と合せ讀て五十鈴宮の地に倭姫命の齋宮を興て磯宮と謂となり（但此卷の前に五十鈴宮も磯宮にて齋宮とも云りし由を考竟せる如くなるも其五十鈴は齋宮の意を以號け齋内親王の坐しは儀式帳に齋内親王川原殿一院と有其地なる可し此は實に本宮に近きを以て磯宮と後に區別たるなる可く思ゆ）　儀式帳に皇太神御鎭座の事を記して爾時太神宮禰宜氏荒木田神主等遠祖國摩大鹿島命孫天見通命乎禰宜定豆倭姫内親王朝廷爾參上坐支とも同帳大物忌職掌條に此初太神乎頂奉倭姫内親王朝廷還參上時爾今禰宜神主公成等先祖天見通命乃孫川姫命倭姫乃御代仁大物忌爲豆以川姫命太神乎令傳奉云々と有此二を以見れは皇太神を鎭奉り置して倭姫命は京に還參上らせ給ひし趣なれども其は天下に又比無く甚も尊く厚き皇太神の御靈實の鎭り定り坐し御事を聞え上させ給ひて再下り御在して太神宮に傅き御在しゝなる可し其は景行天皇御紀に二十八年冬十月壬子朔癸丑日本武尊發路之戊午枉道拜伊勢神宮仍辭于倭姫

命ニ曰今被ニ天皇之命ニ而東征將レ誅ニ諸叛者ニ故辭レ之於是倭姫命取ニ草薙劒ニ授ニ日本武尊ニ曰愼之莫怠也と有を以所知たり（此事古事記にも出たり爾天皇亦頻詔ニ倭建命言ニ向ニ和ニ平東方十二道之荒夫琉神及摩都樓波奴人等ニ云々故受レ命罷行之時參ニ入伊勢大御神宮ニ拜ニ神朝廷ニ即白ニ其姨倭比賣命ニ者云々倭比賣命賜ニ草那藝劒ニ亦賜ニ御嚢ニ而詔若有ニ急事ニ解ニ此嚢口ニと有に如此く御事跡の髓なる上は右の儀式帳の文は其心有て讀べきなり此は皇太神の鎭坐し垂仁天皇二十六年丁巳より凡百二年許に成べし御紀の趣にては二十五年一書及世記の傳を是とす）同御紀に二十年春二月辛巳朔甲申遣ニ五百野皇女ニ令レ祭ニ天照太神ニと有れども其より後に日本武尊の參向はせ給ふ時に猶皇太神を齋き御在しゝ事上に引る文の如し但此事を世記に大足彥忍代別天皇二十年庚寅歲倭姫命年既老苟不レ能レ仕吾足止奴宜天齋内親王爾可ニ仕奉ニ物部八十氏人定給天十二司寮官(ツカサヅカサ)等遠波奉移ニ五百野皇女久須姫命ニ即春二月辛巳朔甲申遣ニ五百野皇女ニ皇太神乃御杖代止志弖多氣宮造奉天齋愼美令レ侍給支伊勢齋宮群行始是也爰倭姫命宇治機殿乃磯宮坐給倍利奉ニ日神祀ニ止古無レ倦焉と所見たり此は倭姫命御年高く日足り坐るに就て五百野皇女を申下し給ひ十二司寮官を傳(ツケ)て初めて多氣の齋宮に令坐て齋王の御職を委任給ひ己命は本より在しゝ五十鈴川上なる磯宮に止住給ひ自若(モトノマヽ)に皇太神を祀奉らせ給ふ事を倦給ふ事無く御在けるとなり世記を見るに雄略天皇御世迄長存(ナガツ)へ御在し由なるは然も有べく所思たり此事下に云べし僣五百野皇女は古事記に五百木之入日賣命と見(ゆ)久須姫命と申すは亦名なる可し例文には久須姫命（景行皇女）と耳有りて五百野皇女と無を思ふ可なり（五百野は齋主(イホヌ)五百木は齋祀(イホヤ)にて共に皇太神に仕奉給ふ御名なるを以思ふに久須姫命と申すは御幼名なりけるや僣太神宮諸雑事記には景行天皇即位廿八年戊戌九月十三日差ニ遣五百野皇女ニ奉レ令レ戴ニ祭伊勢天照坐皇太神宮ニ也齋内親王供奉之始也と有は日本武尊の參向給ひし前月の事にて年紀違へり思ふに廿年に參給ひし程は幼くて御在して三節祭には出向はせ給はざりしを此九月の神嘗祭より始て神宮には仕奉らせ給へるなるべし齋宮十二司は舍人司藏部司膳部司主神司酒部司水部司殿部司掃部司釆部司藥部司等なり此外に齋宮寮有て有の十二司を統領するなり令集解神龜五年七月二十一日格に所見たり玉勝間忘草巻に此を引れたり此諸司の名目朝廷の百官に比ぶれば此上(コヨ)なく古きは古に定れる故なンめり）太神宮例文に伊和志眞内親王（冲哀皇女）と有て久須姫命の次に在れども冲哀天皇の御子は大中津比賣命の御腹に香坂王忍熊王息長帶比賣命の御腹に應神天皇合三柱より外記紀共に見えず五百野皇女の立給ひし景行天皇二十年より此天皇元年迄凡百年餘にも成れゝは必然有へき筈には在れども伊和志眞内親王更に所見無を如何に爲む（然れども御史に漏たりとて神宮に然る傳有を決に無とも定難し凡て神宮の御事は正史よりは却て神宮に傳る所に髓なる事も有て予が因々に論ひ定るが如し如此く正史を論奉る事は甚々畏き御事にて其罪去所無しと雖も能々事實を正し明め奉りて皇御孫命の永御世に貢奉むこそ却て朝廷の御爲には祥はしからめとてなり然れども甚々畏しき我等が申事には畏くなん）此より後正史に見えざる中には歷世の中に記し漏せるも有べし雄略天皇御紀に元年

春三月云々是月立三三妃一元妃葛城圓大臣女曰三韓媛一生三雅足姫皇女一更名栲幡娘姫皇女是皇女侍三伊勢太神祠一と有れども前年八月眉輪王の事に依て其外祖父圓大臣を燔死し給へる其穢も除こり竟ぬに奉らせ給ひし故に皇太神の大御慮に叶はせ給はさりしと見えて同三年阿閉臣國見が爲に被譖給ひて經死給へり此は天皇の未皇子に御在ける時の御子と聞えて即位元年に齋王に立給へり人に汚（ケガ）され給ふ樣に破譖給へるも御年頁長て御在しゝ故なり古事記には若帶比賣命に作り例文には白髪内親王とあり此は白髪天皇と御一腹に坐が故なるべし如此く御世は數多に經にたりしかども倭姫命は猶長存へ御在しゝと見えて世記に泊瀬朝倉宮大泊瀬稚武天皇即位廿一年丁巳冬十月倭姫命夢教覺給久皇太神吾一所耳坐波御饌毛安不三聞食一丹波國與佐之小見比沼之魚井原坐云々御饌都神止由居太神乎我坐國欲止誨覺給支爾時大若子命乎朝廷仁令三參上一天御夢狀令申給支と有る此同事を止由氣宮儀式帳に大長谷天皇御夢爾誨覺賜久云々と有は天皇の大御夢と倭姫命の御夢と打合たるなりけり偖廿二年戊午秋七月に其太神を鎭奉給ひ翌廿三年巳未春二月に石隱り給ひし由同書に記せるは然も有ぬ可き事なり斯計り止事無き齋王を此迄の御世々々に奉らせ給はぬも此倭姫命の御在るが故なる可く所思たり崇神天皇五十八年より雄略天皇二十三年に至る迄五百十九年計なり已に景行天皇廿年に既老耆不レ能レ仕吾足奴止宣と有より以來許多の年を累れ御在しゝ事常の人ならばこそ疑奉らめ皇太神の大御心に叶はせ御在し坐て甚もゝ奇異に神々しく御在しゝ此命の世に長存へ坐事の何どか怪しからむ此石隱り坐し御靈の行方天宮に神上らせ御在して然こそ皇太神の顯御前に愛たく喜しく仕奉て御在すらめ但世記に倭姫命召三集於宮人及物部八十氏等一宣久云々と有は漢意佛意の御喩言にて此は後人の杜撰れる僞物なり儀式帳にも亦種々事忌定給支云々と有て式に謂ゆる内七言外七言の事忌も此命の御定なる趣に記せれども此亦後人の託言にて此時未非る事辨を竢ず

繼體天皇御紀に荳角皇女荳角此云三娑佐礙一是侍三伊勢太神祠一と有る此は元年の下に出たれども御紀の例此にて后妃を被立たる事を記し偖其生奉る皇子皇女の御名を擧られたるなれは其御世の内の何時に齋王に立給ふとも云難し古事記にも佐佐宜王者拜三伊勢神宮一也と所見たり又記には佐々宜郎女と有り例文に荳角姫内親王と有るは倭姫命を倭姫内親王と神宮の書に載たる例なり欽明天皇元年御紀に磐隈皇女更名夢皇女初侍三祀於伊勢大神一後坐レ奸三皇子茨城一解と見え又敏達天皇御紀に七年春三月戊辰朔壬申以三菟道皇女一侍三伊勢祠一即奸三池邊皇子一事顯而解と有る此二柱の枉事に遇給へるぞ甚々遺憾しき事なりける古事記には石坰王宇遲王共に拜三伊勢神宮一とも何とも無は右の事に依てなる可し齋宮式に凡寮官諸司及宮中男女私奸密婚者科三中祓一と有る如く其仕奉る男女の官人尚如此きを況て齋王の御上に於てをや淺ましとも何とも云はん

方無き拝事也かし　例文に磐隈内親王と菟道内親王と二柱の間に宮子内親王大神主小事女在任廿九年と有る内親王は僻事なれども齋王の御在し坐ぬ間は大神主小事が女宮子の仕奉りたりしと云ふ已に引る儀式帳大物忌職掌條に倭姫命の朝廷に參上給ひし時天見通命の孫川姫命大物忌と爲て皇太神に傳奉る由見えたれば此も然る例にて此事度會の遠祖二所太神宮の大神主を兼て在しかば其女を以て今仕奉たるなり倚在任廿九年と有れば菟道皇女に代り奉りしなる可し其敏達天皇七年戊戌より廿九年遡上れば欽明天皇十一年庚午に當る然れば磐隈皇女の齋宮を退給ひしは其年なるにや　用明天皇元年御紀に酢香手皇女歷ニ三代一以奉ニ日神一と有る此は前年敏達天皇十四年の下に九月甲寅朔戊午天皇即ニ天皇位一云々壬申詔曰云々以ニ酢香手姫皇女一拜ニ伊勢神宮一奉ニ日神祀一と有如く既に定置せさせ給ふ所なり　其細書に是皇女自ニ此天皇時一逮ニ于炊屋姫天皇之世一奉ニ日神祀　自退ニ葛城一而薨見ニ炊屋姫天皇紀一或本云三十七年間奉ニ日神祀一自退而薨と見ゆ　用明天皇元年丙午を齋宮に　立給ふ初年と見て其三十七年は推古天皇三十年壬午に當る可し　見ニ炊屋姫天皇紀一と有れども此皇女の事見えず此皇女を古事記には須賀志呂古郎女と有り通證に平氏太子傳暦作ニ菅手女王一曰爲ニ入鹿一被レ害と見ゆ　其より以來久しく齋王の御事も聞えざるを天武天皇の大御世に至て此を再興し給ひ永世に傳給へり色葉字類抄に本朝事始云云々日本紀云天武天皇四年乙亥依ニ所願一以ニ御女子一被レ奉ニ天照太神齋女一自ニ此天皇御時一始レ之云々と有り此事今傳はる御紀に載ざる所なれども決て然る可し凡神宮の御事多

くは此天皇の御大慮に出たる事多在るは故有る事なり其は雜事記に白鳳二年壬申太政大臣　大伴皇子企ニ謀反一擬レ奉レ誤ニ天皇一于時天皇之御内心仁伊勢太神宮令ニ祈申一給必合戰之間令レ勝御者以ニ皇女一天皇太神宮御杖代可レ令ニ齋進一之由御祈禱有ニ感應一彼合戰之日天皇勝御世利云々と有るを以著き所なり此御内心仁伊勢太神宮令ニ祈申一は御紀に元年六月辛酉朔甲申將レ入レ東云々丙戌且於ニ朝明郡　迹太川邊一望ニ拜天照太神一と有る此なる可し　御感應有し事は萬葉二人麻呂歌に渡會乃齋宮從神風爾伊吹惑之天雲乎日之目毛不令見常闇爾覆賜而定之水穗國乎云々と咏るにて明かなり　因に云同卷天皇崩御の後に大后の夢裏に習はせ給ふ御前に明日香能淨御原乃宮爾天下所知食之八隅知之吾大王高照日之皇子何方爾所念食可神風之伊勢能國者奥津藻毛靡足波爾鹽氣能味香乎禮流國爾味凝文爾之寸高照日之御子と有る此歌を誰も々々解難て誤脱を云事なれども予は其意を得たり天皇崩御の後に伊勢國を云者は其御靈の大御許に仕奉らせ給ふが故なり文に乏寸と有を以其義を解べし　其以ニ皇女一天皇太神宮御杖代可レ令ニ齋進一云々は其御紀に二年夏四月丙辰朔己巳欲レ遣レ侍ニ大來皇女于伊勢太神宮一而令レ居ニ泊瀨齋宮一是先潔レ身稍近レ神之所也と有る此にて即齋宮式に謂ゆる野宮齋院の事なり同三年冬十月丁丑朔乙酉大來皇女自ニ泊瀨齋宮一向ニ伊勢神宮一は後世に云ふ齋宮群行の事なり

齋宮式に凡齋内親王定畢即卜ニ宮城内便所ー爲ニ初齋院ー祓禊而入至ニ于明年七月ー齋ニ於此院ー更卜ニ城外淨野ー造ニ野宮ー云々至ニ于明年八月ー齋ニ於此宮ー九月上旬卜ニ定吉日ー臨レ河祓禊參ニ入於伊勢齋宮ーと有る事の本就く所已に此に出たり此齋宮の古趾初瀨の氣波比坂の下に在と云り　例文に大來内親王 天武皇女在任卅七年 と有れども持統天皇御紀に朱鳥元年十一月丁酉朔壬子奉ニ伊勢神祠ー皇女大來還ニ至京師ーと有れば野宮に坐し共に在任十三年なり此は同母弟大津皇子謀反の事に依て十月戊辰朔庚午死を賜へる故なり齋宮式に凡齋王相代聽レ歸レ京者遣レ使奉レ幣亦准レ初若遭ニ國哀及親喪ー者云々と有る其御父天皇の國哀と御弟大津皇子の親喪とに依て被罷たるなるが此は殊に大津皇子と一腹なるを以て被召たるなり齋宮式齋王還京條に若有レ遭レ故還者不レ用ニ初入之道ーと見ゆ 萬葉二に藤原宮御宇天皇代大津皇子薨之後大來皇女從ニ伊勢齋宮ー上レ京之時御作歌二首云々移ニ葬大津皇子屍於葛城二上山ー之時大來皇女哀傷御作歌二首云々など見えたる事の狀を以ても所知るゝ事なり續紀に大寶元年十二月大伯内親王薨年四十一と有れば齋明天皇七年辛酉に生れさせ御在し坐て十四歲にて伊勢に參赴給ひ廿六歲にて退給へるなり　又例文に多基子内親王 天武皇女 阿閇内親王 天武皇女 と二柱を大來内親王の次に載たれども心行ぬ事なり此は御紀に白鳳四年二月乙亥朔丁亥十市皇女阿閇皇女參ニ赴於伊勢神宮ーと所見たる其を僻心得爲るなり萬葉一に明日香清御原宮天皇代十市皇女參ニ赴於伊勢神宮ー時見ニ波多横山ー云々作歌と有は此度の事なり雜事記に白鳳四年 甲戌 秋九月十三日仁多基子内親王參ニ入於太神宮ー給利倍と有は前年十月大來皇女の參入給ふ事と御紀に朱鳥元年夏四月庚午朔丙申遣ニ多紀皇女山背姫王石川夫人於伊勢神宮ー五月庚子朔戊申多紀皇女等至レ自ニ伊勢ーと有とも混同(ヒトツ)に爲る僻事にて其實は大來皇女の事を云誤れる者なりけり 此十市皇女の齋王に成る起元は御紀七年の下に是春將レ祠ニ天神地祇ー而天下悉祓ニ禊之ー竪ニ齋宮於倉梯河上ー夏四月丁亥朔欲レ幸ニ齋宮ー卜レ之癸巳食レ卜、仍取ニ平旦時ー警蹕既動百寮成列乘輿命蓋以未レ及ニ出行ー十市皇女卒然病發薨ニ於宮中ー由レ此鹵簿既停不レ得ニ幸行ー遂不レ祭ニ神祇ー矣と有る齋宮は天武紀に[illegible]と云事にて神功皇后御紀に造ニ齋宮於小山田邑ーと有と[illegible]齋心得し又十市皇女の薨ニ於宮中ーと有は[illegible]太宮にての事なるを其齋宮にての事と思誤れる後人の猿意なり齋宮式に簡ニ内親王未レ嫁者ー卜レ之と有る是常典なるを此皇女は已に大友皇子に嫁給へる趣懐風藻に葛野王者淡海帝之孫大友太子之長子也母淨御原帝之長女十市内親王と所見たりける者をや阿閇皇女は日並知皇子尊に嫁給ひ後に元明天皇と仰奉るは此に坐り　續紀一に文武天皇二年九月戊午朔丁卯遣ニ當耆皇女ー侍ニ于伊勢齋宮ーと有は天平九年正月同廿一年四月天平勝寶三年正月の下に出たる多紀内親王の御事かとも思へども此は文武天皇の皇女に坐せば是ぞ上に出たる多紀皇女なる可し此内親王も慶雲三年伊勢に參給へり例文に當耆内親王文武皇女と爲るは例の漫りなる事なり 文武天皇は幼く坐て天皇位に即給へれば其二年に未御女の齋宮に立給ふ計りまだ(オトナ)び給へるは御在し坐まじきを其上同天皇慶雲三年に伊勢に侍はせ給へる同じ女王に爲て再任し[illegible]くも非れば別人なり且當耆と多紀と清濁の字に於ても異なりける者なるをや但當耆皇女も天武天皇二年御紀には託基に作り朱鳥元年條には多紀に作れり　同紀二に大寶元年二月己未遣ニ泉内親

王一侍二於伊勢齋宮一と有れは當耆皇女の立給へるより四年に當れり慶雲三年條に閏正月癸酉泉内親王參二于伊勢太神宮一と有は心得ぬ事なり參字は退字の誤なる可し其は同年八月庚子遣三三品田形内親王一侍二于伊勢太神宮一と有は其任に代給ふと所思しければなり引續きて十二月辛未朔丙子遣二四品多紀内親王一參二于伊勢太神宮一と有り此は唯詣させ給へる事かとも思へども例文にも田形内親王多紀内親王を並擧たれば齋宮の列にて御在しけるなゝめり以上同御世に齋王の事四度なり 泉内親王は天平六年二月薨給へる下に天智天皇々女と有り大寶元年より慶雲三年迄凡六年の齋王なり田形内親王は神龜二年三月薨給へり其に天武天皇々女と見ゆ多紀内親王に天平勝寶三年薨給へり文武天皇々女と見えたり 同紀七元正天皇養老元年夏四月乙亥遣二久勢女王一侍二于伊勢太神宮一とあり斯れば右の田形内親王等の在任は去年迄凡十年計なりしなり齋宮式に若無二内親王一者依二世次一簡二定女王一卜レ之と所見たる例此に出づ 例文に久勢内親王元正皇女在任六年と有れども養老五年に井上内親王をせ御在しゝかは在任五年なり元正皇女と云事心得ず此は日並知皇子尊の御女に坐て文武天皇の御姉に坐は皇女御在し坐べくも非れば此は其御世に立坐りと云事なる可し下に引る酒人内親王を稱德皇女と記せるに同し 同八卷に五年九月乙卯天皇御二内安殿一遣レ使供二幣帛於伊勢太神宮一並以二皇太子女井上王一爲二齋内親王一と有は神嘗の幣帛使を被進るに就て定させ給へるなり内安殿は儀式九月十一日奉二伊勢太神宮幣一儀に謂ゆる小安殿四時祭式及齋宮式等神嘗祭條に謂ゆる大極後殿の事なりけり同紀十に神龜四年九月壬申遣二井上内親王一侍二於伊勢太神宮一焉と有れは齋王に定り坐て七年京にて物忌爲させ給ふ程も未幼く坐し故に長かりし者なりけり 爲(サダム)二字と遣字とを能見別つ可し例文に此内親王の在任廿一年と有事なるが養老五年より天平十八年迄凡廿六年なり然れども縣女王の條に先レ是と有れば其より已く退給へるなる可し令集解に神龜五年七月廿一日格を載て齋宮寮及十二司の階位の事を被定たり其は此井上内親王の立給ふ當年なり 同十六卷に天平十八年九月庚戌朔壬子先レ是縣女王爲二齋王一至レ是發入大臣以下送出二門外一諸司亦送至二京外一而還と有を十七卷に天平廿一年閏五月甲午朔甲辰伊勢齋王爲レ遭二親喪一自二齋宮一退出と見えて在任四年なりし也先レ是縣女王爲二齋王一と有れば己く京にて齋(モノイ)みし給へる也けり下に引る延暦四年の度なるにも伊勢に向はせ給ふ事有て其卜定の時を記さず爲て齋期既畢と有は齋宮式に載る三年の齋にて此も彼も定れる例なるを以て省るなり延暦四年の例には百官陪從至二大和國堺一而還と見ゆ 例文には縣内親王聖武女在任三年と有るは其前年迄の數なり二親喪は去年四月に太上天皇の崩御(カクリマシ)し其には有るべからず御母などの事なる可し 例文に小宅内親王 孝謙皇女在任七年天平勝寶二年 と有れども

御紀には載ざる所なり次に安陪內親王（大炊皇女天平寶字五年）と有は同紀廿一に淡路天皇天平寶字二年八月戊午遣ニ攝津大夫從三位池田王ニ告ニ齋王事于伊勢太神宮ニ云々と見え廿三に同五年八月癸丑朔辛己晦大祓以下齋內親王將ㇾ向ニ伊勢ニ也と有る此齋內親王の御事なり此大祓は齋宮式に凡齋王將ㇾ入ニ太神宮ニ八月晦日朝廷大祓云々と所見たる此なり（大炊天皇と申奉るは淡路天皇の大御諱なり此天皇の御位を廢（オロ）されさせ給ひし事有に依て俗に廢帝とも淡路廢帝とも稱奉る事は甚々悲しく恐懼き事なり假令廢され給ひしにも有れ天平寶字二年より八年迄七年の間天下を知食し天照大御神の天津日嗣を受保たせ御在し坐せば受張たる天皇命に坐り然れば淡路天皇とも大炊天皇とも稱奉らむに何の憚る所か有む此は事の因みに云なり）同卅二に光仁天皇寶龜三年十一月丁丑朔己丑以ニ酒人內親王ニ爲ニ伊勢齋ニ獲ㇾ居ニ春日齋宮ニと有は野宮の齋なり卅三に同五年九月齋內親王向ニ于伊勢ニと見えたり例文に此次に御還內親王と所見たれども御紀には載されず其卜定ありし耳にて伊勢には向はせ給はざりけるなどにや（此より前に寶龜二年十一月癸未朔庚子遣ニ散位從五位下氣太王ニ遣ニ齋宮於伊勢國ニと見ゆ例文に在任二年と有り但其に稱德皇女と爲るは妄なり）同卅八に桓武天皇延曆四年八月癸亥朔丙戌天皇行ニ幸平城宮ニ先ㇾ是朝原內親王齋ニ居平城ニ至ㇾ是齋期既畢將ㇾ向ニ伊勢神宮ニ故車駕親臨發入と有る平城齋宮は春日齋宮とは別なる可し齋宮式に凡齋內親王發日所司預設ニ御座於大極後殿ニ天皇御ニ後殿ニ云々時剋御ニ大極殿ニ齋內親王云々入就ニ殿上座ニ事訖向ニ太神宮ニと有る如く此は八省院に於て行はせ給ふ御業なれども其時巳に都は去年十一月山城國長岡に被遷たるを以て天皇の行幸は有けるなり同九月己亥齋內親王向ニ伊勢太神宮ニ百官陪從至ニ大和國堺ニ而還と有て此時の群行には百官悉陪從せるなり後には此を送齋內親王使とも勅使とも云て京外迄送至て長奉送使に代るなり（上に引る天平十八年九月の群行には大臣以下送出ニ門外ニ諸司亦送ニ京外ニと有るは勝れり此は古語拾遺に擧ㇾ白ニ神代ニ中臣齋部供ニ奉神事ニ云々齋宮寮主神司中臣齋部普充同七位官而延曆例朝原內親王奉ㇾ齋之日殊擢ニ齋部ニ爲ニ八位官ニ于今未ㇾ復所ㇾ遺六也と有る此時の事なり令集解に載る神龜五年七月廿一日格に已に主神司中臣從七位官忌部從八位官なり然れども此時迄被ㇾ行ざりしなる可し例文に朝原內親王桓武皇女在任十二年延曆元年と有る元年は卜定有し時にて此に先ㇾ是と有に當れり雜事記に延曆丙乙丑年九月[illegible]宮也而依ニ大風供水難ニ以ニ二十八日ニ[illegible]ㇾ奉ㇾ還也即齋內親王奉仕件以ニ二十九日ニ[illegible]宮[illegible]明年ㇾ仕也即日[illegible]と有り）日本後紀に延曆十五年二月癸亥朔乙亥齋內親王欲ㇾ歸ㇾ京遣ニ頓宮於大和國ニと有は故無して還坐に依て初入の道を被用るなり丁丑遣ㇾ使奉ニ幣於伊勢太神宮ニ以ニ齋內親王退ニ也と見ゆ此は式に凡齋王相代應ㇾ歸ㇾ京者遣ㇾ使奉ㇾ幣亦如ㇾ初云々と有例なり三月丙申遣ニ從五位上守左少辨兼左兵衛佐橘朝臣入居等ニ迎ニ齋內親王ニと有は齋宮式に凡齋王還ㇾ京者（若有ニ遭故還者不ㇾ用ニ初入之道ニ）遣ㇾ使奉ㇾ

迎五位六位各一人近江與伊勢堺上祗候辨一人率史生官掌各一人參齋宮撿挍歸發云々と有此なり但此に入居等と有る等字にて其[illegible]の[illegible]向たる後宮の事なるも含たるなり迄[illegible]頓宮於大和國には大同元年布施內親王歸京の下に令大和伊賀兩國造行宮と有例なり同十六年夏四月癸酉以布施內親王爲伊勢太神宮齋と有は卜定を云ふ同年八月甲戌齋內親王祓于葛野川即爲入野宮と見ゆ此ぞ嵯峨の野宮の始なる可き齋宮式に據に四月より八月に至る迄は宮城內の齋院に在しゝなり八月上旬卜定吉日臨河祓禊即入野宮自遷入日至于明年八月齋於此宮と見え又凡齋王將入于齋院臨河頭爲祓陰陽寮擇定日時入野伊勢齋宮之時准此云々など有に合り同十八年秋七月癸列朔庚午遣使祓畿內七道諸國以下齋內親王將入伊勢也と有る此は齋宮式に凡齋王將入太神宮在前七月若八月同時遣大祓使左右京一人五畿內一人七道各一人と見えたる此なり其次條に凡齋王將入太神宮八月晦日朝廷大祓と有り此時必被行しなる可し同年八月丙申奉幣帛於伊勢太神宮以齋內親王將入齋宮也と有る[illegible]式に見えされとも齋王卜定時に又遣使奉幣[illegible]宮告卜定齋王之狀也[illegible]祭使と有る此式の本着く所なり同年九月甲辰齋內親王發野宮赴伊勢遣侍從從四位下中臣王參議正四位下藤原朝臣乙叡等送焉此は式に凡齋內親王臨行預定監送使參議一人或以中納言充之辨一人史一人六位以下官人一人云々と所見たり元慶三年條に長送伊勢齋內親王使と云は此なり同月乙丑是月禁京畿百姓奉北辰燈以齋內親王入伊勢齋宮也此は前月の事なる可し其は式に凡齋王將入太神宮之時自九月一日迄卅日京畿內伊勢近江等國不得奉燈北辰及舉哀改葬と有ればなり平城天皇大同元年三月癸巳令大和伊賀兩國造行宮爲齋內親王歸京也夏四月甲午朔戊申遣左兵庫頭從五位下佐伯王左衞士從五位下敎俊等迎齋內親王於伊勢國己酉遣使奉幣於伊勢太神宮以齋內親王歸京也と所見たり以上當御世に齋王を奉らせ給ふ事二度なり又秋七月癸[illegible]朔己酉[illegible]伊勢太神宮[illegible]使七月祭と有は[illegible]有て[illegible]年[illegible]止られたるなるべし上には[illegible]にて[illegible]も被行る由見ゆ[illegible]廿二年春正月癸丑[illegible]伊勢[illegible]生[illegible]と有て共に布施內親王の在任の[illegible]に[illegible]內親王元仁[illegible]女在任七年延暦十六年[illegible]は十[illegible]なるべし大[illegible]十年に[illegible]宮る[illegible]には[illegible]天皇の[illegible]に[illegible]せ[illegible]ふ可し平城天皇大同元年十一月壬寅以大原內親王爲伊勢齋內親王己酉遣近衞權中將從四位下[illegible]原朝臣眞夏等於伊勢太神宮告以易齋內親王事也と有は全く右に引遣

使奉ニ幣太神宮ニ為レ告ト定ニ齋王ニ之狀ト也の式文に合り二年八月己卯齋内親王禊ニ於葛野川ニ即移ニ入野宮ニと有は前朝の例に同じ式に凡齋内親王定畢即卜ニ宮城内便所ニ為ニ初齋院ニ祓禊而入至ニ于明年七月ニ齋ニ於此院ニ更卜ニ城外淨野ニ造ニ野宮ニ云々　即入トニ有は此なり同三年八月乙亥齋内親王禊ニ於葛野川ニ即移入ニ野宮ニと有は式文に　凡齋王出レ自ニ野宮ニ入ニ太神宮ニ臨ニ於川頭ニ在前為レ禊（定ニ日時ニ方同レ上）と見えたるに同じ移入ニ野宮ニは其宮に還(カヘラ)御せ給ふなり九月癸未齋内親王向ニ伊勢ニと見ゆ　同四年六月甲申令ニ攝津國造ニ顛宮ニ以ニ伊勢齋内親王歸レ京也とあり此顛宮は一先此に解齋(イミホドキ)し給ふ宮なり譏子内親王元慶五年下にも赴ニ難波宮ニ三所祓除と所見たり（例文に大原内親王桓武皇女在任二年大同元年十一月壬寅と有り當年平城天皇大御位を嵯峨天皇に讓らせ御座し年にて大同四年は嵯峨天皇元年に當る）嵯峨天皇大同四年八月甲戌朔甲申定ニ仁子内親王ニ為ニ伊勢齋ニ弘仁元年夏四月庚午朔戊子遣ニ使於伊勢太神宮ニ告下定ニ齋内親王ニ之狀ト也同二年八月辛卯齋内親王禊ニ于葛野川ニ諸司陪從如レ常と有て此に野宮に入坐し事滿たり諸司陪從は齋宮式河頭祓條に前レ禊二日辨官率ニ院別當以下並陰陽寮及諸司ニ到ニ河邊ニ點ニ定其地ニ奏レ之至ニ于期日ニ

齋王駕レ車赴向走[illegible]十二人　車副廿四人取物十人云々膳部六人舍人二人荷頭十四人戲人所陪從六人内侍及院女別當已下並從ニ車後ニ勅使參議一人院別當一人四位二人五位二人六位四人並前驅左右近衞左右兵衞各二人左右門部各二人左右火長各十人供奉左右京職官人率ニ兵士已上ニ迎候山城國司率ニ郡司ニ候ニ京極路ニ辨一人史一人史生二人官掌一人率ニ供奉諸司ニ就ニ禊所ニ行レ事齋王到レ幕臨レ河而禊神祇官中臣進レ麻宮主讀ニ祓詞ニ云々と見え又齋王還ニ入野ニ河頭禊條に云々（自[illegible]之儀大略同ニ初齋院ニ）と有る此事を謂なり同年九月乙未齋内親王入ニ伊勢ニ諸司陪從如レ常と有る此諸司陪從は上に引る監送使の事なり此時にも九月壬辰朔禁下今日祭ニ北辰ニ擧レ哀改レ葬事ト以ニ齋内親王入ニ伊勢ニ也と有事延暦の例の如し同十四年淳和天皇即位有り六月丙戌天皇御ニ大極殿後殿ニ獻ニ幣帛于伊勢太神宮ニ以レ停ニ定齋内親王ニ也と所見たり（例文に有智子内親王嵯峨皇女在任十二年弘仁元年と有り然れども紀に仁子内親王と有ては例文に從難し）淳和天皇天長元年八月丁丑朔庚寅任下伊勢齋内親王入ニ野宮ニ次第詞ニト有は心得難[illegible]り思ふに此時宮城内の齋院に入給ひ翌二年八月に野宮には移らせ給へりけむを餘りに省略(コトソキ)たる記し狀なる故に例

に違へるが如く見ゆるなり爾らざれは直に入ニ野宮一と云例無事式文の如くなれはなり元年九月乙卯詔曰天皇詔旨爾坐掛畏岐太神乃大前爾申給止閉申久多氣乃齋宮太神宮止離遠天每事爾無レ便因茲天度會乃離宮乎常齋宮止須倍岐狀申出事乎恐美恐美毛申給止久申云々と有り此は多氣齋宮を離宮院に移易させ給ふ由を申させ給ふなり三年九月乙亥天皇御ニ八省院一奉ニ幣帛于伊勢太神宮一と有る此時にぞ伊勢には參入せ給へりけむを其齋內親王參入の事をば記漏されたるなり既に伊勢に御在し事は同四年春二月己酉制曰天皇恐々毛奏賜止閉白天云々今月廿七日云々又伊勢乃齋內親王本病屢發天奉齋之事爾不堪止所奏流爾依天京師爾還參上倍岐事遠中納言從三位淸原眞人夏野大舍人頭從四位上藤原朝臣淨本等乎使差天恐々毛奏賜止久白と見え又夏四月癸巳御ニ大極殿一奉ニ幣帛于伊勢太神宮一勅使參議左大辨正四位下眞世王中臣散位從五位下大中臣朝臣笠作制曰天皇我大命爾坐度會乃五十鈴之川上爾坐皇太神乃大前爾申給久今侍留齋內親王波本病屢發弖奉齋爾不堪爾依天令退出狀乎云々乎差使天禮代之大幣帛乎忌部爾肩爾太手次取掛持齋波理捧令レ持弖進給布御

命乎申給止久申辭別天申給久齋內親王波今卜食定天卜爾合武內親王乎進可レ進狀乎申給止久申と有を以て炳焉き所なり此は氏子內親王に坐事次に引る文に見えたり例文に氏子內親王淳和皇女在任二年天長元年と有れども今考るに天長三年四年合せて在任二年なり元年は其卜定の時なり類聚國史には今侍留を令レ侍留と作(カ)き今卜食定天を令ニ卜食定一天と有り何れにても聞ゆれども其今と令との內一は誤ならむ此齋宮は承和六年火災に依て再多氣齋宮に復れり大御心に叶はずや有けむ天長五年二月戊子朔己亥宜子女王奉レ定ニ齋王一壬子御ニ小安殿一遣ニ使散位從五位下三繼王一奉ニ幣太神宮一其詞云天皇我大命爾坐五十鈴乃河上爾稱辭定奉太神乃大前爾申給久氏子親王乎太神御杖代止之弖奉入留多親王爾在而今身安爾依天退留替爾中務卿四品仲野親王乃女宜子女王乎散位從五位下三繼王中臣云々忌部云云等差使弖申給止久申云々と有は先に卜爾合武內親王乎進可進と有る其をト食給へる由を令申給ふなり同七年八月戊辰齋女王爲レ參ニ入伊勢太神宮一禊ニ賀茂川一云々と有は例の河頭祓なり辛未大ニ祓於建禮門南庭一爲レ參ニ入伊勢太神宮一也と有は齋宮式に凡齋王將レ入ニ太神宮一八月晦日朝廷大祓と出たる此なり同乙亥於ニ建禮門前一大祓依ニ掖庭犬死一也と此に於て再大祓有しなり九月丁丑天皇御ニ大極殿一奉ニ幣帛伊勢太神宮一依ニ齋女王參入一也と見ゆ斯れば六年八月齋

王野宮に入せ御在つらむを定れる例なるを以記されざる事前朝より然り（女王にて齋王に立給ふ事元正天皇に久世女王聖武天皇に縣女王と當代に宜子女王都て三度なり借此策命なる氏子親王を頻りに宜子内親王に作るは恐くは誤ならむ其にては文達え難し親王爾在而今身安爾依天の女字は思ふに天長八年十二月賀茂齋王の事を其宮に申させ給ふ策命に内親王齡毛安美毛有爾依氏と有れば齋宮式第七に病稱夜須美齋院式及大嘗會式の忌詞に病稱息（ヤスム）と有る忌詞を用られたるにて今身安爾依天は今身病爾依天と云事なり例文に宜子親王仲野親王女恒式[illegible]在任四年云々と有れど此齋王は女王也）續後紀記に仁明天皇天長十年二月即位有て三月戊子朔癸丑以久子内親王爲伊勢齋宮夏四月戊午朔甲子遣内匠頭正五位下楠野王於伊勢太神宮告下齋宮宜子女王之替定久子内親王之狀上と見え承和元年八月乙巳久子内親王爲可侍伊勢齋宮先禊賀茂川始入野宮同二年八月甲戌朔乙亥且禁京畿之内來月供北辰燈以下齋内親王可入伊勢也辛丑齋内親王禊于賀茂川爲可入伊勢齋宮也九月癸卯朔丁未天皇御大極殿發道齋内親王於伊勢太神宮上と有て違例の事無し同六年十一月巳卯朔癸未災于伊勢齋宮燒官舍一百餘宇遣左衛門佐從五位下田口朝臣房富賚絹百疋綿三百屯調布五十端存問齋内親王云々十一月巳酉朔庚戌遣參議從四位上行春宮大夫兼右衛門督文室朝臣秋津奉幣於伊勢太神以齋宮燒損也又去天長九年

九月依多氣齋宮遠離太神宮每事無便卜定度會離宮以爲齋宮焉今依火災卜定多氣宮地可爲常齋宮之狀同令此使祈申於太神宮と有此迄八年の間離宮院を以齋宮と爲給へり此齋内親王退去の事文徳天皇實錄に嘉祥三年五月己卯遣侍從從五位下島江王云々等向伊勢太神宮迎齋内親王大祓建禮門前と所見たり天安二年の例を見に此大祓は使の將向と爲て物爲る事にて此迄諒闇なりし故なり（承和二年八月朔甲戌を本に甲辰と有れども當月は小にて九月癸卯朔に合ざれば誤なる事明き故に今改めつ又九月癸卯朔乙未と有れども九月に乙未無ければ乙は丁の誤なる事を知て改つ例文に久子内親王仁明皇女在任十四年と所見たり）文徳天皇實錄に嘉祥三年秋七月丙子朔甲申皇女晏子内親王爲伊勢齋云々大祓於建禮門前同八月癸丑遣散位正五位下楠野王神祇少副正六位上中臣稗守等向伊勢太神宮告以晏子内親王爲齋同九月庚子是日伊勢齋内親王禊於鴨河勅遣從四位下右中辨藤原朝臣氏宗從修禊事と有り此從修禊事は齋宮式に凡齋王將入于初齋院臨河頭爲禊前禊二日辨官率院別當巳下云々到河邊點定其地奏之云々と有を云也仁壽元年八月庚子朔乙丑伊勢齋内親王禊於鴨川即日入於野宮同二年閏八月甲子朔丁亥大

祓於建禮門前伊勢齋内親王將參太神宮故有此祓戊子伊勢齋内親王祓於鴨川癸巳大祓朱雀門前伊勢齋内親王將參太神宮故重有此祓と見えて如此く二度の内建禮門なるは内裏大祓朱雀門なるは齋宮式に謂ゆる朝廷大祓にて下なる貞觀二年の度も此例なるなり次に九月庚子伊勢齋内親王參太神宮帝御大極殿遣之自餘如常儀中納言正三位安陪朝臣安仁右中辨從五位上橘朝臣海雄等爲長送使と有り長送使は式に謂ゆる監送使の事なり三代實錄に清和天皇天安二年九月廿日戊寅遣正六位上大中臣朝臣良人於伊勢太神宮以齋内親王退出也冬十月八日乙未遣散位從五位下内宗王從五位下守左少辨丹墀眞人貞岑等迎伊勢齋内親王大祓於建禮門前而發使焉と見ゆ使發遣の前に大祓有は前年天皇崩御に依れるなり（前にも此大祓の事有り其例を擧たるなり但式文には此を載ず例文に宴子内親王文德皇女在任六年云々と見ゆ）清和天皇貞觀元年冬十月五日丁亥卜定恬子内親王爲伊勢齋云々十二日甲午大祓於朱雀門前以定伊勢賀茂齋内親王也と有り伊勢賀茂齋内親王を同日を以被定し例は此より先に天長十年三月久子内親王の度と嘉祥三年七月晏子内親王の度と二例有り大祓を共に被行る事は天長十年の度よりなり十月廿五日丙午伊勢齋恬子内親王於鴨水邊六條防門末修禊云々並入初齋院こゝに有て此も伊勢賀茂同日なり同二年八月廿四日辛丑大祓於建禮門前爲明日伊勢齋内親王將行禊也廿五日壬寅伊勢齋恬子内親王臨鴨水大修禊事即日入野宮同三年八月十八日己未大祓於建禮門前以伊勢齋内親王可入太神宮故也廿四日乙丑伊勢齋内親王臨葛野河修禊勅遣中納言從三位兼行左衞門督藤原朝臣氏宗監禊事廿九日庚午大祓於朱雀門前以伊勢齋内親王九月一日將入太神宮故也と有る二度の大祓の事仁壽二年條に云る如く宮中の大祓と天下の大祓との差別なり九月壬申朔遣右大臣正二位兼行左近大將藤原朝臣良相尚侍從三位源朝臣全姬向八省院發遣伊勢齋内親王と有る此は天皇幼少坐し故に八省院の大極殿に出御無く右大臣を上卿と爲て令行給へる所なり次なる元慶三年も此例を以て攝政事を奉り行ひしなり此事神嘗祭條に引る九月十一日奉幣儀に所見たるが如し陽成天皇元慶元年三月壬寅朔遣刑部大副從五位上弘道王右中辨從五位上藤原朝

臣保則一迎ニ前伊勢齋內親王一と有り　此より先に貞觀三年六月九日壬子任ニ伊勢齋宮裝束司一と裝束使の日初て出たり齋宮式に凡齋內親王三年齋竟四月上旬任ニ裝束司一五位一人六位以下四人諸司史生六人使十人雜工十人其作廿八女孺二十人直丁二人同旬於ニ神祇官ニ院ニ修行ソ云々と有此なり同廿一日甲子下ニ近江伊賀伊勢國奉幣司ニ從夫二百八十二百九十五疋來九月四日伊勢齋內親王將レ入ニ太神宮ニ仍須ニ經過ニと見ゆ此は式に見從行群ニ並下給レ馬主神司中臣忌寸宮主各二疋五疋判二疋諸司主典以上各二疋以上各一疋其命婦一疋乳母并女孺各二疋二人二疋駿守各一疋其餘四疋長官丁女丁宮主卜部ニ家口不レ在ニ限ニ其侍從四位六疋五位五疋六位四疋以ニ乘馬數ニ品官不レ要者在前幾道と有…數なる可し次に九月九日重陽節天皇不レ御ニ前殿一云々…依ニ…其入ニ太神宮ニ由ニ無レ用ニ宣命ニ不レ樂音ニ云々と有る此は…式…に…之月云々不レ作ニ音樂ニ不レ預ニ職掌之事ニ云々と有る…なる六…忌なるが故に…ふなり不レ用ニ宣命ニは宣命ににに…在る事も非れども其に譜有て此を讀の響の巨細長短有は譜を音樂に取れるか又に忌避…ふなる可し古くも宣命譜と云書日の有を以即らむ可し備太神宮例文に恬子內親王文徳皇女在任十五年と有れども年數合はず　陽成天皇元慶元年二月十七日己未卜ニ定伊勢賀茂齋內親王一伊勢齋識子內親王云々並卜食

此を類史に貞觀十九年に作るは當年七月改元有しが故に前年を以記せるなり　廿三日乙丑遣ニ使伊勢太神宮一告以ニ天皇即位並卜ニ定齋內親王一告文曰天皇我詔旨止掛畏岐伊勢度會乃宇治乃五十鈴乃河上乃下津石根爾大宮柱廣敷立天高天原爾千木高知天天皇御命乃稱辭竟奉流天照之坐皇太神乃廣前爾申賜倍止申久云々又今侍恬子內親王波太上天皇乃太神乃御杖代止之奉入賜倍流奈利今舊例乃任爾相替天可レ令レ奉レ仕岐物止奈利爲シテ奈毛識子內親王乎卜定天進入流云々恐美恐美毛申賜止波久

申と有るいま舊例云々より爲奈毛迄大字小字廿一字は類史に據て補引るなり又類史に元慶二年八月廿日癸未任ニ伊勢齋內親王行禊前後次第司一式部少輔兼文章博士從五位下菅原朝臣道眞爲ニ前次第司長官一判官主典各一人兵部少輔從五位下兼行伊勢權助平朝臣季長爲ニ後次第司長官一判官主典各一人と見ゆ廿六日己丑伊勢齋內親王欲下以ニ明日一入中野宮上仍於ニ建禮門前一修ニ大祓一廿八日辛卯伊勢齋內親王出レ自ニ雅樂寮假宮一禊ニ於鴨河一即日入ニ野宮一と有る此雅樂寮假宮は式に卜ニ宮城內便所一爲ニ初齋院一と有る其なる可し類史に同三年八月十九日丙子任ニ伊勢齋內親王行禊前後次第司一以ニ云々一爲ニ前次第司長官一判官一人主典一人云々爲ニ後次第司長官一判官一人主典一人以ニ云々等一爲ニ送伊勢齋內親王使一云々爲ニ長送伊勢齋內親王使一と有る送伊勢齋內親王使は天平十八年例に諸司亦送至ニ京外一延曆四年例に百官陪從至ニ大和國堺一など有如きを如此く被約たるにて京外に送至る勅使を云なり長送伊勢齋內親王使は例の監送使にて送伊勢齋內親王使に代て京外より伊勢に送奉るなり九月三日庚寅停御齋燒燈之事以下伊勢齋內親王可上

入齋宮也此此は三月九月三日に燈を黜して北辰を祭る〻を停止られたり御燈の事諸書に出たり八日乙未大祓於朱雀門前以明日伊勢齋內親王可進發也此より前に建禮門大祓の事無りしにや以前の例に異なり九日丙申齋內親王入齋宮是日早朝臨葛野河以修禊事即使參入豐樂院天皇御豐樂院令發內親王天皇喚中臣神祇大副大中臣朝臣有本稱唯昇殿跪侍右大臣代天皇勅曰常毛奉進留九月神嘗幣帛曾汝中臣如常久申天奉禮止宣有本稱唯又勅今奉進留齋內親王波此依恒例天三箇年間波齋清天天照太神乃御杖代爾定天奉進留內親王曾中臣宜爾告介申天奉進禮止宣有本稱唯降殿退出是時天子幼少右大臣攝政故行此事齋內親王駕輿出自朱雀門掖門東向就路乘輿還宮廿日丁未遣伊勢齋內親王使參議在原朝臣行平復命此幼帝の時は攝政此を奉行ふ始なり貞觀三年に右大臣の奉行せるとは同事にて少差ふ所なり且此時大極殿無りし故に豐樂院を以其代に被用る所なり元慶四年十二月七日丙戌下知大和伊賀伊勢等國造行宮以伊勢齋內親王可出宮歸京也此は太上天皇崩御に依て被罷る故なり五年春正月十三日甲子太政官下符山城攝津等國備前伊勢齋內親王來二月廿二日首途自大和道經山城河陽宮到攝津難波海解除而後可入都凡其供具依例準擬云々十九日戊辰下符山城大和伊賀伊勢等國備前伊勢齋內親王入京陪從二百十九人宜行宮飮食乘馬擔夫辨設供給又下知河內攝津兩國備齋內親王擬出神宮從河陽宮取水路赴難波宮依例三所祓除每度經一日即便取三島道還向河陽宮其陪從一百八檢校幷奉迎等使六十三人酒食夫馬等之類事々祇供時屬諒闇莫用魚鳥と有る此三所祓除は大原內親王大同四年歸京の度に令攝津國造頓宮と見えたる所なり此三所は江次第齋王歸京條に三津濱下方禊三津濱禊安曇口禊と見えたり元慶五年正月廿八日丁丑遣散位從四位下恒基王左少辨正五位下兼行大學頭巨勢朝臣文雄等齋葉輿賫其等向伊勢太神宮迎前齋內親王云々と見えたるは太上天皇の諒闇なるを以て幣帛を奉らせ給はざるなり（同史に此より前に廿三日壬申賜綿二百屯調布三百六十端齋宮寮元命婦女孺等入京裝束料と有て其に貞觀に満たる所なり例文に識子內親王清和皇女在任二年と見えたり此齋王は清和天皇の皇女に在すを去年崩御の事有し故に歸京有るなり）元慶六年夏四月七日己卯是日卜定伊勢齋內親王無品揭子內親王卜食五月十

五日丙辰遣レ使奉ニ幣伊勢太神宮一告以レ定ニ齋內親王一也云々七年八月廿二日乙卯大ニ祓於建禮門前一以ニ廿四日丁巳伊勢齋內親王可レ入ニ野宮一也廿四日丁巳伊勢齋揭子內親王臨ニ鴨河一修レ禊入ニ野宮一云々所司供奉如レ式と見え光孝天皇元慶八年二月十三日甲辰先レ是伊勢齋揭子內親王在ニ野宮一是日還ニ本家一と有り此は陽成天皇去年御讓位有し爲に被廢たるなり類史に七年十一月五日戊辰定ニ減下定遣ニ伊勢齋內親王野宮一工夫數上元工三千十五人夫一萬五百卅五人今定工一千四百六十五人半夫五千二百七十二人半云々今所作殿舍之數頗倍ニ於先一雖ニ構之功合期而成減ニ定單功一既過ニ半分一望請頗減ニ功當時一遣ニ例後代一者依レ請立爲ニ恒例一と見えたり野宮の造功如レ此くなるを以其宮の大略を知るべし翌八年三月二日癸亥先レ是修ニ遣伊勢太神宮一是日下ニ知伊賀伊勢尾張參河遠江等國一曰廼者有ニ太上天皇遜位之事齋內親王出ニ於野宮一暫停下ニ送神宮一之工夫上と有り例文に揭子內親王文德皇女白ニ野宮一下座と所見たり揭子揭子何も同唱なるにや　同三月廿二日癸未喚ニ神祇官於左仗頭一卜ニ定齋王一其伊勢齋皇女繁子卜食と有る此は江次第齋王卜定條に左仗座と有る此なり四月九日己亥以ニ皇女伊勢齋繁子一爲ニ內親王一十日庚子遣ニ云々等一奉ニ幣於伊勢太神宮一告以レ定ニ齋內親王一也天皇御ニ朝堂院小安殿一發使と所見たり八月十三日辛丑伊勢齋內親王臨ニ鴨水一修ニ禊事一即便入ニ初齋院於雅樂寮一公卿陪從如ニ常儀一此雅樂寮初齋院の事は已に識子內親王も其なりしなり仁和元年八月十日伊勢齋內親王將レ修ニ禊事一而典藥大屬蜂田岑範去十一日夜於ニ寮中一頓死邪穢延ニ染供奉所司一仍停止九月十八日己亥伊勢齋內親王臨ニ鴨水ニ修ニ禊事一即便入ニ野宮一と有は雅樂寮中の穢に依て延引たるなり二年六月廿一日己巳伊勢齋內親王應下取ニ近江國新道一入中於太神宮上仍下ニ知伊勢國一又停ニ伊賀國舊路頓宮一下ニ知伊賀國一と有は齋宮式に凡頓宮者近江國々府甲賀垂水伊勢國鈴鹿壹志總五所と有る事の始なり廿三日辛未任ニ伊勢齋內親王裝束司一云々八月十四日庚申任ニ伊勢齋內親王行禊次第司一と有て御前長官判官主典御後長官判官主典等有り此は元慶の度に前次第司後次第司と云る此なり於ニ式部省除一と見ゆ中納言從三位兼行左衞門督源朝臣能有以下八人を爲ニ行禊陪從一と見え又送齋內親王使長奉使等の日有り元慶に送伊勢齋內親王使送伊勢齋內親王使と云る此なり廿日丙寅勅以ニ從四位上行兵部大輔四友王云々等四人一爲下齋內親王入ニ伊勢太神宮一前驅上と有る此を以見るに右の長奉使は其行啓の列外なりと所思たり廿九日乙亥晦大ニ祓於朱雀門前一以ニ齋內親王來月應レ入ニ伊勢太神宮一也九月丙子朔三日戊寅停ニ御潔齋燒灯之事一此を元慶

の度には御齋燒燈之事と有り北辰燈の事なり　四日己卯辰時雷雨伊勢齋内親王明日可レ修ニ禊事ニ大藏省損ニ於ニ葛野河邊ニ裝束ニ帷幄ニ不レ風不レ雨忽然裂ニ就而見レ之爲レ雷所ニ震裂ニ也五日庚辰停ニ齋内親王行禊之事ニ以ニ去二日中務省犬死穢來レ滿忌限ニ也七日壬午齋内親王今日修ニ禊葛野河ニ九日擬レ入ニ太神宮ニ内親王忽有ニ月事ニ然太政大臣堀河邊第犬死觸穢之人參ニ入内裡ニ由レ是停不レ行十七日壬辰内裡犬死齋内親王今月十九日欲レ修ニ解除ニ依レ穢而停公卿於ニ左衞門陣ニ召ニ神祇官陰陽寮ニ占ニ定吉日ニ更廿四日爲レ期と有て此時の事凡て御手違の事耳なるは神慮にも叶はせ給はざりしにや凡て甚畏き事共なり　廿三日戊戌詔齋内親王行禊改ニ廿四日ニ定ニ廿五日ニ廿五日庚子天皇御ニ大極殿ニ發ニ遣伊勢齋内親王ニ卅日乙巳奉レ送ニ伊勢齋内親王ニ使中納言藤原朝臣山蔭廿八日奏狀今日申時到來偁今日巳時王輿出レ自ニ近江國垂水頓宮ニ酉時到ニ伊勢鈴鹿頓宮ニ戌時西垣之外一借屋火内親王乘ニ更衣滋野朝臣直子車ニ出ニ於頓宮ニ即遣ニ守藤原朝臣繼蔭看督近衞等ニ救止不レ能ニ撲滅ニ西風差扇火勢甚熾遂及ニ寢殿匣殿等延燒四屋ニ以ニ垣外借屋ニ爲ニ寢殿ニ安ニ置内親王ニ召ニ問寮使ニ申ニ火發レ日ニ舍人長磯部豐瀧宿舍ニ也賜ニ山蔭手勅ニ曰須下過ニ七箇日ニ入中齋宮上若有ニ物煩ニ不レ可レ過ニ七箇日ニ者解謝早可レ入と有り此は齋宮式に凡隍中有ニ失火穢ニ者隨レ之祓淸其宅人七日不レ得レ參ニ入宮中ニと有る御定に依られたり　右の仁和元年八月十日の事を實錄に誤て二所に出たり此より前元慶八年八月十九日丁未伊勢齋内親王欲レ修ニ禊事ニ而典藥大屬蜂田峯範去十一日夜於ニ寮中ニ頓ニ卒部磯延ニ染供奉所司ニ仍停止と有事なれども已に十三日辛丑條に臨ニ鴨水ニ修ニ禊事ニと有れば二度有べき樣無れば衍なり此事類史にも出たれども從ひ難し仁和元年なる可き事は九月十一日條に以ニ典藥大屬蜂田峯範染穢未ニ滿ニ三十日ニ也と有を以所知たり但八月十日は誤にて廿日などなる可し其は十日に去十一日と云へば七月の事になるを九月十一日に未レ滿ニ三十日ニと有りては合ず八月を小と見れば九月十一日にて三十日に當れるを以て例幣使を發せざりしなり十六日丁酉於ニ建禮門ニ大祓と有るも其事に依れるなる可し例文に繁子内親王光孝皇女在任二年と見ゆ　以上齋王の始て仕奉給ふ豐鋤入姫命より繁子内親王迄の事實を國史より摘出て擧る所なるが餘りに叢脞しきに過たるに似たりと雖も彼齋王の御事を記せる齋宮式に出たる所の式文は歷世に有來りし事を次々に改も易も爲て定させ給ふ所なれば其出來始の事を知て其沿革の事共を逐一に辨へ知ずしては其式文をも讀得る事難き業なるが故に今煩はしき迄に此を擧るを此下に出せる齋宮式に合せ讀て能々其據を正し辨ふ可き者なり否らざれば延喜の朝廷に更に此式を勘造て此を後代の龜鑑と被爲たりと思ふも有べく又太神宮式の

儀式帳と相異らざるを見て上古より齋宮の次第は式文の如き物と思ふも有べく共に其事を誤つ可きが心苦しくて如此なむ（尚下に云る事共を立復りて此件に見合せずば誤半になむ有でかし）

進二神嘗幣一詞申畢次即申云（タテマツルカムナメノミテクラノコトバマヲシヲヘテツギニスナハチマヲシテイハク）

此迄題號なり其詞は次に擧たるが如し此詞者に齋王改り立給ふ時は九月の初の間に齋宮へ下り着坐て此神嘗祭に初て仕奉り給へり備齋王に立給ひて初齋院及野宮に坐事三年其三年に當る八月の末に京を立坐て九月の初に到給へる事後の御紀共に見ゆ入給ふ日は卜食て定む仍て朔日或は四日なども有し然れども此は後の定にて古天武天皇の御時は十月元正天皇の御時は四月聖武天皇の御時は九月ぞ伊勢齋宮には入給ひし」と有が如し（但本に初野宮に坐事三年」と有は非なり初齋院野宮に御坐つる三年に當るなり若くは傳寫の誤ならむと所思て今此には此を改引たるなり備此事の說は西宮記齋宮條裏書に天武天皇二年冬十月丁丑朔乙酉大來皇女自二泊瀬齋宮一向二伊勢神宮一元正天皇靈龜二年乙亥遣二久勢女王于太神宮一聖武皇一神龜四年九月壬申遣二井上内親王侍一於太神宮一自二此以後九月下向歟と有を含みて云れたる說なり）備此詞を神嘗の辭別と爲て奉始たるは元慶の度にや有けむ然ればこそ儀式には載ざるなりけれ三代實錄に元慶三年九月九日丙申伊勢齋内親王入二齋宮一是日云々天皇御二豐樂殿一令レ發二齋内親王一天皇喚二中臣一云々右大臣代二天皇一勅曰常毛奉進留九月神嘗幣帛乎汝中臣如常久申天奉進止宣云々又勅令奉進留齋内親王波此依二恒例一天三箇年間波齋清天天照太神乃御杖代爾定天奉進留内親王曾中臣宜爾告介申天奉止宣云々と有は神嘗の幣帛使に齋主を託し給ふ事の物に所見たる始なり（此等の事共九月神嘗祭の奉幣條の下にも云り其に引る記實錄に云る合見べし又此下なる割行な能々合せ考ふ可き者なり）然るを西宮記に引る清涼記に聞食齋内到門之由御二大極殿一（藏人□□臣小□）中臣奉二大麻一天皇拜二御幣一次令三藏人仰二齋王可レ參之由一齋王於二殿東北隅一下レ輿入レ自二南東戶一就レ座勅召二舍人一云々了少納言進版蹤云々召二中臣一勅常爾奉進留九月神嘗幣帛汝中臣如レ常爾申天奉禮止宣中臣稱唯又勅令レ奉二進齋内親王一者此依二恒例一天三年間波齋清天天照太神乃御杖代爾定天奉進内親王曾中臣宜爾吉久申豆奉進止禮宣中臣稱唯下レ殿云々了天皇召二備刺一其筥内侍取置二御座前一内侍進二齋王許一申下可二近候一之由上親王進二御前一天皇以二備刺一刺二其額一此間大臣給二宣旨於使王一云云王與二中臣一許可（此レ不見レ誤）還御と所見たるは全く元慶の例なるなり然れば儀式九月十一日奉二幣伊勢太神宮一儀には其事を被載ざるは、當時未レ此一を混同に爲られざりし故なり元慶より例を延（ヒキ）て然る御定とは

成しなり齋宮式に事見二儀式一と有は其奉幣儀の時を被用る故を以其に任ねられし也是以て儀式に漏たる所を凡齋內親王發日所司預設二御座於大極後殿一天皇御二後殿一（不レ警）神祇官五位中臣進二御麻一史一人行二御麻於侍從五位以上一時尅御二大殿殿一齋內親王下レ輿入就二殿上座一事訖向太神宮（事見二儀式一）如此く被記たる者也是等の事を以て貞觀の昔に此二を兼ざりし事を曉る可なり（又元慶の御紀に其式を委曲に被記たるも此迄然る例非りし故なり若其常例にて有ましかば如此くは被載ざらまし者なるをや）元慶に右の新式定りつるより十一日の奉幣を九日に換て仁和の度にも被用たれども江次第齋王群行條は右の清涼記と同じ文なるに神嘗幣帛の宣の下に依過十一日不レ可レ有二件詞一歟とも又一處には若十一日爲二奉幣次一加二常字一と記せるを見に此二を兼る事略儀なるに似たり

辭別氐申給久今進流齋內親王波依二恒例一氐三年齋比清麻波理弖御杖代止定氐進給事波皇御孫之尊乎天地日月止共爾常磐堅磐爾平久安久御座坐武止御杖代止進給布御命乎大中臣茂桙中取持氐恐美恐美毛申給久止申

辭別氐申給久は上の九月神嘗祭詞を申畢て次に此齋內親王を奉らせ給ふ事を申させ給ふなり（但宮司の宣る詞の辭別には非ず中臣の申す詞のなる事上に引る元慶の御紀及西宮記の文を以て曉る可きなり）○今進流は齋內親王初て神嘗の祭場に參入給ひて其儀式に預り仕奉らせ給ふ其現在奉進ると云義なり（此詞以下上に引る元慶の御紀に出たる所なれども尙其よりは古かりなむ中には當昔の詞も交れゝども凡て狀甚古かり）齋內親王波依二恒例一氐三年齋比清麻波理弖は三代實錄西宮記江次第共に三箇年間波齋清天と有り（西宮記江次第等に令レ奉二進齋內親王一者と有は御使を以令進る故なり又江次第に令二伊毛比齋清一天と有る伊毛比は齋（イハヒ）字の訓に附たる後人の所爲なり一本に此三字無きぞ宜しき）此三年齋比清麻波理弖の事は齋宮式を悉擧て其大略を云べし又正史に徵を取て其事跡をも喩す可きなり其式に云く齋宮凡天皇即レ位者定二伊勢太神宮齋王一仍簡二內親王未レ嫁者一卜レ之（若無二內親王一者依二世次一簡二定女王一卜レ之）訖卽遣二勅使於彼家一告二示事由一神祇祐已上一人率二僚下一隨二勅使一共向卜部解除神部以二木綿著賢木一立二殿四面及內外門一（賢木木綿所司儲之解除料祓米酒肴等本家儲レ之）云々と有は齋王卜定なり其は江次第に上卿參議若陣藏人奉レ仰問二諸司具不一於上卿一藏人仰乙可レ令レ勘下申卜二定伊勢齋王一日時上由甲上卿仰レ辨令二勘申一入二外記筥一令二藏人奏一（上卿乍レ居レ陣令レ奏）返給之後上卿下レ辨次藏人奉レ仰仰二上卿一曰以二某內親王一（若某女王）可レ爲二伊勢齋王一哉由

令卜申（與用長嫁人若無內親王依世次簡女王）上卿仰辨令敷座於軒廊次仰外記令召神祇官官率僚下參自日華門着軒廊座上卿仰外記令進硯紙等外記入紙於覽筥進之與硯筥相並進之次上卿目書某子内親王五字更加懸紙一枚上卿召外記外記持小刀副之笏參上卿給文令封之外記進於上卿上卿取之其上書封字外記退出上卿召中臣給之次卜之了（封上書乙下合若丙下合等字若不合者只可注其由）中臣入於柳筥蓋進之上卿取之返筥蓋次神祇官退出（所司撤座）次上卿召外記筥入卜文（不開封）即令持外記就御所奏聞藏人取之先内覽（執柄讀開封）次奏聞（卜方留御所其筥後日外記於藏人所請之）藏人仰上卿曰御覽即被仰可差遣神祇官人幷可令成承知符由上卿復左仗座令外記召中臣官人中臣參入上卿仰以其親王爲伊勢齋王由中臣退出率僚下參彼家上卿召辨仰可令成官符由辨退出仰史此間自殿上差近衛次將遣彼内親王家（多用[illegible]藏人頭）次被仰（上卿仰史等）下行事次被仰下初齋院別當上卿被仰辨次被仰可令勘申奉幣幷大祓日時由次上卿仰辨令陰陽寮勘申入外記筥奏聞（乍居座令奏）藏人奏聞後返給（上卿下外記）次上卿至奉幣者仰上卿可奉行由被

申次公卿相引參初齋院と有て右の式文を注解せるが如く甚詳なる事共也（式文に遣[illegible]と有は此に謂ゆる[illegible]次將なり[illegible]と有り上卿次第又說に次仰[illegible]上卿以[illegible]某子[illegible]可爲伊勢初齋院別當[illegible]と有り上卿[illegible]官於復左仗座は上に引る光孝天皇元慶八年三月廿一日[illegible]左仗頭卜定齋王と見え仁和二年九月十七日[illegible]に於左衛門陣召神祇官陰陽寮[illegible]卜定吉日と有も共に同所にて[illegible]る事なるなり倘文[illegible]なも此に見合す可し）其後擇日時百官爲大祓（同二季儀）祓料云々（已上同前送大祓所）と有が二季大祓は朱雀門前にて被行る事なるが嘉祥三年七月晏子内親王の時は建禮門前にて有しを貞觀元年恬子内親王の度に朱雀門前にて被行たるより其式定れりと見えて其後の御紀には載られず（同二季儀とは右の朱雀門前にて被行るより始て凡て其式を被用るが爲なり大祓講義に云り）又遣使奉幣太神宮爲告卜定齋王之狀也（其儀同[illegible]祭使）と淡路天皇御紀に天平寶字二年八月遣攝津大夫從三位池田王告齋王事于伊勢太神宮と有を始と爲て其後の正史には唯遣使共又王氏中臣忌部等を擧たるも有り必其正使は王氏を以て被任るゝ御定なり（此同神嘗祭使と云也以なり但大同元年大[illegible]内親王の度には遣[illegible]衞權中將從五位下藤原朝臣眞夏等於伊勢太神宮告下以[illegible]爲齋内親王事也と有る日を異なる例なりける）凡齋内親王定畢即卜宮城内便所爲初齋院祓禊而入至于明年七月齋於此院更卜城外淨野造野宮畢八月上旬卜定吉日臨河祓禊即入野宮自遷入日至于明年八月齋於此宮九月上旬卜定吉日臨

レ河祓禊參ニ入於伊勢齋宮一と有る此謂ゆる三年の齋也初齋院は元慶二年條に伊勢齋內親王出レ自ニ雅樂寮假宮ニ云々入ニ野宮一とも同八年條に伊勢齋內親王臨ニ鴨水一修ニ禊事一即使入ニ於初齋院於雅樂寮ニ云々と有り宮城內の便所を被用る例なれは此寮には限る可に非れども物に所見たるは此寮なる耳なり其にて卜食給へる時の事は江次第なる本宮次第に先御浴殿了著ニ新御衣一給其後御裝束幷御調度一物以上皆被レ改次御所御裝束御座撤レ舊敷レ新但疊更反御禊後展レ之晝御座二間云々公卿座設中門北殿上人座設侍廊上神司座饗十前設ニ中門南廊一勅使參入ニ立中門一敷ニ勅使座於對南唐庇當ニ母屋四間一逼ニ長押一敷之云々其上敷菅圓北面次勅使著レ座以ニ四位家司一示下可レ被ニ著座一由上次居ニ肴物一二合衛車次勸盃或無ニ勸盃一只給レ祿一獻殿上四二三獻公卿勸レ之次給レ祿公卿取之女裝束一具勅使下レ座再拜次御禊此間位上卿以下當ニ晝御座間前庭一敷ニ菅圓座一爲ニ宮主座一其南立ニ下レ地八脚机一東西妻其傍立ニ大床子一次齋王先洗手著ニ御禊座一巽面中臣官人取ニ御贖物一二高坏一進ニ菅子敷下一乍レ立レ地傳ニ之中臣女一次中臣捧ニ大麻一乍レ立レ地傳ニ於女房一返給後下ニ卜部一卜部取レ之著レ座修ニ御[illegible]一了捧レ麻退出次中臣參入撤ニ御[illegible]物一撤レ座次大殿祭云々神祇官八奉ニ仕御井祭一[illegible]神祇官捧ニ賢木一以ニ木綿一繫ニ其木一云々次神祇官八等著ニ中門南廊座ニ云々次給レ祿次官八等列立再拜退出列ニ於庭中一次立ニ內膳屋木工寮次度ニ大炊寮御飯一當給ニ宣旨一次立ニ陣屋一左右衛門並仰下衛門可ニ宿直一之由上次立炬火屋修理職次掃ニ除初齋院四面幷近邊汚穢一仰ニ左京一次上卿以ニ勅別當一令レ申ニ事由一了召ニ別當於御前一被レ問ニ子細一次自殿上瀧口一人藏人所衆二人可レ參ニ宿彼院一之由被レ仰レ之若有ニ雖者一不レ可レ差レ之と有り此にては卜定有て即初齋院に渡らせ給ふ事にて式文に祓禊而入と有と故齋宮式齋王は少相違へれ共凡ての模樣ナモブキは分明に被知たり卜定條に遣ニ勅使於彼家一告ニ示事由一神祇祐已上一人率ニ僚下一隨ニ勅使一共向卜部解除神部以ニ木綿著賢木一立ニ殿四面及內外門一云々の事は其齋王の本家にて在る事なるを江次第なるは次公卿等相引參ニ初齋院次本宮次第と有れば初齋院にての儀式なる事云も更なり然れば河頭祓は略れたるかと思ふに然らず群行條にも載られざるを以思へば事は別なる故に記されざりけらし尙能考ふ可き事なり凡齋宮諸門當立下著ニ木綿一賢木上一斤[illegible]一斤八兩月別立替所レ須木綿と有は此より前に卜定條にも神部以ニ木綿著賢木一立ニ殿四面及內外門一と有る此を合せて其違を知べし上に引る江次第本宮次第に次神祇官捧ニ賢木一以ニ木綿一繫ニ其木一先掃ニ御在所屋巽角次艮角次乾角次坤角次神殿戶當ニ中央一次內膳屋次井次中門次門掃ニ件賢木一後人不レ登ニ御在所板敷上一又掃ニ賢木一間公卿以下下レ地件掃ニ賢木一之神司不レ渡ニ御前一云々と有る此著ニ木綿賢木は齋宮に謂ゆる太玉串なるが故に重み爲る所也[illegible]に神殿と有は齋王の御在所に皇太神を齋かせ給ふ神殿にて式に凡齋內親王於ニ[illegible]年[illegible]日著ニ木綿鬘一參ニ入齋宮一と有る齋殿の事[illegible]齋院式相嘗祭條に設ニ上件一

神座於齋殿」と見ゆ何れも齋王の其仕奉る神を齋給ふ所なり　凡忌詞內七言佛稱中子經稱染紙塔稱阿良々岐寺稱瓦葺僧稱髮長尼稱女髮長齋稱片膳外七言死稱奈保留病稱夜須美哭稱鹽垂血稱阿世打稱撫宍稱菌墓稱壤又別忌詞堂稱香燃優婆塞稱角筈と所見たる內七言外七言の內外は其部を合せて云るにて別意有に非ず大嘗祭式にも凡散齋一月（十一月自朔日至晦）致齋三日（自丑至卯）其齋月者預告諸司及下符畿內不得預佛齋清食其言語者云々と有て此の外七言を出せり故思ふに皇太神宮儀式帳及世記に倭姫命亦種々乃事忌定給支云々亦被法定給支と有て其事忌は內七言外七言なるは此時に外七言は被定しなる可けれとも其時未佛法渡參來らざりしかば內七言は後より書加たる文也神祇令に凡散齋之內云々不得弔喪問病食宍亦不判刑殺不決罰罪人不作音樂不預穢惡之事と有る謂ゆる六色禁忌の事を載たるに未佛法の事を云ざるは彼素より其穢惡の巨魁なれども神事に混らしこそ爲給はざれども然計り皇太神の嫌はせ給ふ事とは所知食ざりし故に聖武天皇は東大寺と云ふ香燃を物爲させ給ふ僻事をさへに神宮に命申給ひ孝謙天皇は伊勢太神宮寺と云へる瓦葺をしも其神郡の內に置せ給へるなどの事有しを御紀に寶龜三年八月甲寅云々伊勢國月讀神爲祟云々徙度會神宮寺於飯高郡度瀨山房同十一年二月丙申朔神祇官言伊勢太神宮寺先爲有祟遷建佗處而今近神郡其祟未止除飯野郡之外移造便地許之と有を以て思ふに此間の御祟如何に甚じき事なりけむ身毛も彌立計に畏くなむ有ける然れば此時などぞ神祇官にて此內七言を製り大政官の處分を經て勅裁を以恒久の御掟とは定め被下し者なりけり已に延喜の儀式帳に此名目の出たるを以見るに此時の擧なる事著明し是より漸々に佛法の穢惡の事に類へる由を所知食し始より彌々神事に打混らす事は堅く停止られし者なり諸社と云中に殊に神宮にては彼中子を忌事にて其事に依て皇太神の御祟有し事枚擧るに遑有ず齋宮式に凡齋官諸司及宮中男女修佛事私密婚者科中祓と見え類聚國史に弘仁七年六月丙辰伊勢太神宮司從七位下中臣朝臣清持有犯穢幷行佛事神祇官卜之有祟科大祓解見任と有り甚々恐き事ならずや此に依て天長五年の宣命には病の事を安備依天と申させ給へり忌詞の犯す可か

らざる事此を以て曉る可し病すら如此し況て穢き佛事をや　齋院式にも凡忌詞死稱口病稱口泣稱ニ鹽垂一血稱レ汗宍稱レ菌打稱レ撫墓稱レ壤と有て外七言耳なる如くなれども尚內七言をも堅く愼たるにや玉勝間橋卷選子內親王賀茂の齋と聞えける時に西に向て詠給へる「思へ共忌とて云ぬ言なれば其方に向て泣(ネ)をのみぞ哭く」詞花集に入れり凡て伊勢賀茂の齋王の宮にては甚しく佛を忌て其筋の事は詞に云をだに禁(イマ)しめられたる御定成き云々然れど神に仕奉給ふ方(スヂ)の思やりに御在せむには其忌嫌ひ給ふ筋をば懸ても思し寄へき業ならぬを西に向ひて泣に哭給ふ計成しは云む方なき枉事にぞ有ける然ては御容貌の限り皇神の齋にては御在し坐て御心は專極樂の阿彌陀の齋に社御在し坐けれ然るにても御心の內にこそは自然然思す事も有むにても公の重き禁しめなれば歌などに詠顯はし給ふ可に非ず又假令詠出給へりとも必人に語などは爲給ふまじき業なるを御耻とも思さずや有けむ云々と云れたるは魂しひの入たる言なりけり日月の鎭な波延とも波山流とも云て映の義とし中古の言に年始には病を歡樂と云など皆此忌詞の例を用る所也玉勝間山吹卷に引れたる園大曆貞和二年正月の下に予風氣相侵仍歡樂之間不レ及ニ出座一と有を以知べし則を清處と云など皆其言を忌て反語を用ひたる所なり然れば此御定を仰て假にも忌はしき言機はしき言は云まじき者なり　凡齋王將レ入ニ下初齋院一臨ニ河頭一爲レ被令ニ陰陽寮擇ニ定日時一入ニ野宮伊勢齋宮ニ之時准レ此　前禊ニ一日辨官率ニ院別當已下並陰陽寮及諸司ニ到ニ河邊ニ點ニ定其地ニ奏レ之至ニ于期日ニ齋王駕レ車赴向走嬬十二人車副廿四人取物十八人供膳韓櫃三合同雜器物ニ荷盥器韓櫃裝物韓櫃各一人衣服韓櫃二合祿物韓櫃六合擔夫並用ニ衛士ニ膳部六人舍人二人荷領十四人藏人所陪從六人內侍及院女別當已下並從ニ車後ニ內侍已下藏人已上乘ニ私車ニ乘女女嬬已下乘ニ馬寮車ニ勅使參議一人院別當一人四位二人五位二人六位四人並前驅左右近衛左右兵衛各二人左右門部各二人左右火長各十人供奉左右京職官人率ニ兵士已上ニ迎ニ候山城國司率ニ郡司ニ候ニ京極路ニ辨一人史一人史生二人官掌一人率ニ供奉諸司ニ就ニ禊所ニ行レ事齋王到レ幕臨レ流而禊神祇官中臣進レ麻宮主讀ニ祓詞ニ訖即賜ニ勅使已下饌幷祿ニ辨官錄ニ見參ニ付ニ院別當ニ給レ之既而廻歸ニ入初齋院」

即卜ニ定供膳井ニ立ニ賢木ニ祓料云々と有は西宮記齋宮三度禊條に初入諸司便所調ニ度裝束ニ云々在レ式卜定年迫レ期明年入院司行事所陰陽寮點ニ禊地ニ奏聞上卿於レ陣定ニ供奉人ニ外記進ニ例文ニ勅使參議一人左右中將一人左右兵衛佐一人左右將監二人左右衛門尉一人次第司馬助允一人藏人所六位已上和鞍勅別當騎馬京職典侍或掌侍諸衛步陣扈從向ニ東河ニ解除宮主中臣候諸司給レ祿左右衛門府陣衛と有る此なり文德天皇嘉祥三年九月癸子內親王の度には禊ニ於鴨河ニ勅遣ニ從四位下右中辨藤原朝臣氏宗ニ從ニ禊事ニと見え淸和天皇貞觀元年十二月恬子內親王の度には於ニ鴨水邊六條坊門末ニ修レ禊云々入ニ初齋院ニと有耳にて其餘に見えざるは野宮に入給ふ時及群行の度なるよりは甚く省略(コトソ)きたる故也　齋王入ニ初齋院ニ祓ニ淸其院ニ云々此は已に引る江次第なる本宮次第に次御禊次齋王先洗レ手着ニ御禊座ニ巽面次中臣捧ニ大麻ニ乍レ立レ地傳ニ於女房ニ返給後下ニト部ニ卜部取レ之着座修ニ御禊ニ了捧レ麻退出次中臣撤ニ御贖物ニと有る此御禊なる可し野宮條にも齋王遷ニ入野宮ニ祓ニ淸其宮ニ料云々と有は此と全く同じ事を被行るなり　大殿祭野宮伊勢齋宮准レ此云々と有は江次第に御禊の事有て次大殿祭家司一人捧ニ脂燭ニ前行神祇官二人懸ニ玉御所四角柱御湯殿進物所等ニ也或

於御湯殿後祭御厠然而件事無之其御湯殿幷進物所等皆四角懸之と所見たり（野宮齋宮祈年祭條に大宮賣神四座と有は屋船命屋船久々遲命屋船豐宇氣姫命大宮賣命と同じ神ながら御名の四有を以四柱と爲て被祭るならむ同神を別名の方を以祭別たるは大和社に八千矛神と大國魂神とを祭れる例にて外にも多き事なり大宮賣神四座御門神八座云々と相並べるに心を着べき所なり）忌火庭火御竈井神祭（遷入野宮之初所祭每月朔祭三竈料亦准此云々已上井神祭料）と有は前なる河頭御禊條に即卜定供膳井立賢木と見えたる此を被祭るに准らへて忌火庭火御竈等神は亜にて祭らるゝなり唯井神耳を被祭るには非ず江次第にも次神祇官人奉仕御井祭と見え又内膳屋炬火屋等を被立る事所見たり（斯れば忌火庭火神は内膳屋に所祭なる可し中右記なる内膳司御竈神三所の中に一所云々一所庭火皇神是尋常御飯奉仕神也一所忌火是則十一月新嘗六月神今食祭奉仕神也と有を以知べし御竈神は新年祭條に二座と有り此炬火屋に坐なる可し江次第に渡大炊寮御飯と有は此所に渡すなりけり三代實錄貞觀元年正月條に大炊寮從五位下大八島竈神八前齋火武主比神並從五位上と有ば大八島竈神八前を一柱と爲し齋火武主比神一柱と合せて此も二柱を祭るなり）朔日庭火祭（野宮齋宮准此）云々此は上に引る中右記に庭火皇神是尋常御飯奉仕神也と有る日々の供御を此内膳屋に爲て仕奉る故に朔日每に此祭は被行るなり（前條に每月朔祭三竈と有は炬火屋にて大八島竈神齋火武主比神を被祭るなりけり）晦日解除料（野宮齋宮准此）云々は公事根源に謂ゆる神祇官獻御贖物と有と同じ在る可し（其文に云く是は每月晦日に奉る御麻をも同じく供ず贖物は身の災を贖ふ物と云心也人像を作て身の代と爲事同じ云々今此なる解除料物の中に鐵人像二枚有り思合す可き事なり）初齋院別當以下員別當五位一人命婦一人中臣一人忌部一人宮主一人内舍人一人大舍人二人宮舍人十人膳部三人殿部三人炊部一人水部三人酒部一人掃部三人采女二人內女孺二人乳母三人宮女孺十四人戶座一人火炬小子二人今良四人仕丁十二人女丁八人但遷野宮者加內舍人一人大舍人二人神部四人（中臣連部二人忌部連部二人）卜部三人宮舍人十人炊部酒部各二人采女四人官女孺廿五人洗人二人厠人二人女丁八人食法云々と有は男女の供奉人の員數なり膳部殿部炊部水部酒部掃部等は食法條に諸作部と出たり（戶座火炬は新造炊殿忌火庭火祭條に卜戶座一人取山城國愛宕郡鴨縣主氏童子火炬二人取同國葛野郡秦氏童女と見えたり）鎮野宮地祭（後鎮准此）云々と有は上に更卜城外淨野造野宮と有る其時の祭なり祈年祭廿一座の中に地主神一前と有は何れの地にも有れ其地の神を以地主神と定め被祭なり西宮記三度禊條に奉幣松尾（祭官神祇官供爲使）と有は多く其神の鎮座す嵯峨の邊なりし故に定りたる地主神と成給へるにも有べし火炬二人取同國葛野郡秦氏女と云るも其社に仕奉る氏人なるも由有けなり（皇太神宮儀式帳造宮條に取吉日地鎮謝云々右祭告刀申地祭物忌父仕奉所侍と有て其爲に地祭物忌と云職見え止由氣宮儀式帳にも取吉日宮處鎮謝云々と有て其式甚嚴重なり此を以て思合す可なり）造野宮畢祓料云々此は次なる遷入野宮祓清其宮とは事異りて唯野宮を造れるに就て被行る所

也（前の齋王卜定條に遣ニ勅使於彼家ニ云々卜部解除神部以ニ木綿著賢木ニ立ニ殿四面及内外門ニと有る如此き狀と思えたり）齋王遷ニ入野宮ニ河頭禊其日齋王駕レ輿（輿者主殿官人率ニ史生ニ前レ禊ニ一日設供）輿長八人駕輿冊人駕馬女卅八（乳母二人藏人六人釆女四人童女四人掃部二人御厠二人）勅使大納言中納言各一人參議二人四位五位各四人禊事既畢賜饌幷祿（勅使已下五位已上内藏寮饗レ之六位已下大膳職）訖即廻歸便留ニ野宮ニ更賜レ祿（白絲之儀大略同ニ初度禊ニ）祓料云々と有る此は正史に延暦十六年八月布施内親王の時祓ニ于葛野川ニ即爲レ入ニ野宮ニと見え大同二年八月大原内親王の時此と同じく弘仁二年八月仁子内親王の時禊ニ于葛野川ニ諸司陪從如レ常と有れば定れる例已に有しなり天長元年八月氏子内親王の度に任下伊齋内親王入ニ野宮ニ次第司上と見え承和元年八月久子内親王の時に先祓ニ禊賀茂川ニ始入ニ野宮ニ仁壽元年八月晏子内親王の度此に同じく貞觀二年八月恬子内親王の禊も此に同じきか大修ニ禊事ニと所見たり元慶二年八月識子内親王の度には兼日に行禊前後次第司を被任たり同七年八月揭子內親王も臨ニ鴨河ニ修レ禊入ニ野宮ニ中納言從三位兼行左衞門督源朝臣能有參議正四位下行皇太后宮大夫藤原朝臣國經陪送所司供奉如式と見え仁和元年繁子內親王のは八月ニ禊に依て九月十八日に在り大納言正三位兼行右近衞大將太皇太后宮大夫藤原朝臣良世率ニ參議已下ニ奉レ從行レ事と有て凡て式文の如し（此を以見るに延暦大同弘仁の三度耳葛野川に在て其以來賀茂川にて有る常例也氏子内親王のは何れの川なるか其傳無し但葛野川は上は大井川にて下は謂ゆる桂川也西宮記三度禊の下にも先向ニ東河ニ解除と有れば後には賀茂川と定れるなりけり右の行禊前後次第司は前次第司後次第司の二員にて各長官判官主典有り西宮記に入ニ野宮ニ上卿着ニ陣定ニ供奉人々ニ奏聞二省輔丞已下一員爲ニ次第ニ除目給ニ式部ニ云々と有り二省とは式部兵部を云なる可し元慶二年の例然り又西記に除ニ諸陵囚獄修理雅樂司ニ之外云々供奉と有る諸陵囚獄は不淨の吏なり修理は職掌行禊の假屋等に預る故に供奉の列を除れたるなる可し雅樂は六色禁忌の其一なるを以被省たり）齋王遷ニ入野宮ニ祓ニ淸其宮ニ云々は初齋院條に云が如し其例續紀に大寶二年三月己卯鎭ニ大安殿ニ大祓と有り倭齋王の宮城外に齋し給ふ事は天武天皇御紀に二年夏四月云々欲レ遣ニ侍大來皇女于伊勢太神宮ニ而令レ居ニ泊瀨齋宮ニ是先潔レ身稍近レ神之所也と有る斯文に潔レ身と云るは皇大宮にては天下の大御政を執行はせ給ふが故に年中諸度の神事に就て散齋致齋の時にこそ有れ自餘は平生の事にて齋と云ふにも非る爲に宮城外の便所を卜て齋王の居處とは定給へる也光仁天皇御紀に以ニ酒人內親王ニ獲レ居ニ春日齋宮ニと有は平城宮の時は春日にぞ有つらむ桓武天皇御紀に朝原內親王齋ニ居平城ニと有は右の春日なるを惣名を以て平城と云るにや今詳ならず又は異處なるにも有べし（元慶七年實錄に十一月五日戊辰是日減下定遣ニ伊勢齋內）

見王野宮ニ工夫數ヒ元工三千十五人夫一萬五百卅五人今定工一千四百七十五人牛夫五千二百七十二人牛云々と有り野宮に黒木の鳥居にて丸木造の齋儀なれ共其大なる事此を以見つ可し 二月新年祭廿一座 大宮賣神四前御門神八前忌火神一前庭火神一前竈神二前御井神二前地主神一前〇今云廿一座と有れども此に擧る所十九座なり齋宮儀に就て稱るに決く卜庭神二前の五字を脫せり 座別絹五尺五色薄絁各一尺倭文一尺庸布一丈木綿二兩麻五兩稻鎌一口鍬一口酒四升鰒堅魚海藻各六兩腊二升鹽一升坩坏各一口右供神料物如レ前但宮賣神加ニ馬一疋一其總祭所レ須缶二口匏二柄裹調薦四枚一丈短帖一枚祝詞料庸布五段造レ幣忌部三人明衣料調布一段三丈五尺と有る齋宮式にも此事を載たるに大社十七座在ニ齋宮內一大宮賣神四座御門神八座御井神二座卜庭神二座地主神一座と有て忌火庭火竈神等の事無して小社九十八座在ニ多氣度會兩郡一を被載たり六月祭十二月准レ之月次祭右供神調度准ニ新年祭一但除ク鎭大殿祭右供料并中臣等祿并准ニ上例一但減ニ筥一合一と有る此時必御門祭も被行る常例なる事予が大殿祭詞の講義に云るが如し大宮賣神四座御門神八座と何時も並擧たるに心を著べき者なり御贖料云々野宮六月晦大祓 十二月准レ此 云々野宮鎭火祭云々野宮道饗祭云々と有る此四時祭式なる朝廷のに異ならず十一月祭新嘗祭廿八座 大殿忌火庭火御竈神各一前御膳部忌火庭火神二前卜戸神一前御川水神一前酒殿神一前膳部御食神一前大炊寮神一前自餘供ニ新年祭月次ニ神是 座別云々

右供神物如レ前但預ニ新年神ニ云々と見ゆ此廿八座は上なる新年神廿一座と今の炊殿神水部神を各一座と爲て都て七座なるを合せたる數なり中には同神なるも多在れど社にて被祭ると各其官舍に祭る所とを被祭別る故に重複せるが如くも見ゆるなり齋宮には大十七座小九十七座凡て百十五座なる事新年祭の如し大殿祭 上に注 此は新嘗祭に就て被行るなり此新年祭神の中に必卜庭神二座有べし野宮主神司所請月料紙廿張筆一管龜甲一枚波々可五枚 龜甲波々可者神祇官所レ行 と有る此は齋宮條に毎月晦日卜庭神祭云々と有る此と同じく其朱櫻(ハヽカ)龜甲(カカメノホネ)は御卜料なる事云も更なり是を以て上の細註に云如く新年祭神廿一座の中に卜庭神二前の有しを脫せる也と我云說の謬ざるをも思合す可し且下に引る毎朔日御遙拜の條に別當大夫以下卜食者と有は毎晦日此卜庭神を祭て定むる所と聞えたり次に鎭ニ新造炊殿一祭云々は大殿祭に同在る可く又新造炊殿忌火庭火祭云々卜戸座一人 取ニ山城國愛宕郡鴨縣主氏童子一 火炬二人 取ニ同國葛野郡秦氏童女一 と有は其野宮の新嘗祭に就て祭らせ給ふ所なり齋宮新嘗條に但鎭ニ炊殿一并忌火庭火大殿祭等並准ニ在京一と見えたれ偖此野宮條の終に右始ニ自ニ初

齋院ニ至ニ于參ニ入太神宮ニ奉仕其齋王入ニ伊勢齋宮ニ即各退却と有て以上は初齋院及野宮にての年中行事也齋宮にても此に同じき故に新年祭條に右祭二月四日供祭其六月十二月月次鎭火道饗大殿御贖大祓并朔日忌火庭火等祭供神物及明衣祝詞料皆准ニ在京ニ但月次祭加ニ火雷神一座ニと所見たり初齋院野宮齋宮三處共に四時の諸祭朝廷の四時祭に相同じきは倭姫命の古昔より行來る常例に依が故なり 凡齋內親王三年齋終四月上旬任ニ裝束司ニ五位二人[神祇副以上一人左右少辨以上一人]六位以下四人[諸司主典以上]諸司史生六人雜使十人[散位六人雜位子四人]雜工卅人[簡ニ取內匠木工隼人等寮司長上以下諸部等ニ爲レ之]共作廿人[取ニ仕丁ニ充之]女孺廿人直丁二人同旬於ニ神祇官西院ニ始行レ事五位以下給ニ明衣ニ史生以上各絹四丈五尺女孺各布二丈六尺共作及直丁不レ在ニ給限ニ其食依ニ常例ニと有る裝束司は齋王の伊勢に赴せ給ふ御調度を調進る職也次條に造ニ備雜物ニ云々と有は此なり神祇官西院にて被行るは神事に准らるゝ故なり但古くは六月に此を被任たり貞觀三年恬子內親王の度に六月九日壬子任ニ伊勢齋內親王裝束使ニ大ニ祓於建禮門前ニと有て此司を任(メス)に依て大祓をも被行し者なりけり仁和二年繁子內親王の時も六月廿三日辛未任ニ伊勢齋內親王裝束司ニ正五位下行神祇大副大中臣朝臣有本左近衛少將正五位下兼守左中辨行備前權介藤原朝臣有德六位以下六人と有て此も四月ならざるは式の頃の御定と聞えたり神祇官より輔大政官より辨此二人を官長と爲て諸司より六位以下四人を任ろゝなり但此仁和の度には六位以下六人と見ゆ其後に二人を減されたるなめり太神宮式に營ニ造神寶并裝束使を被任たる時にも於ニ神祇官西院ニ始行レ事と見えたり 凡齋內親王在京潔齋三年即每朔日著ニ木綿鬘ニ參ニ入齋殿ニ遙ニ拜太神ニ時先供ニ御麻ニ次鬘木綿其料安藝木綿四兩麻二斤[別當已下料在ニ此內ニ]別當大夫已下卜食者共再拜兩段但九月六月十二月不レ參至ニ十六七日ニ參入再拜兩段長拍手兩段齋王不レ拍レ手齋終之後乃向ニ伊勢太神宮ニ此は三年御潔齋の間の御行事なり參ニ入齋殿ニと有は其院內なる神殿に參向はせ給ふを云ふ齋宮にて內院神殿と云此なり每朔日の御遙拜に別當大夫以下卜食者共再拜兩段と有は每晦日に卜庭神を祭て定る所なる可し又此式に凡遷ニ入野宮ニ之後及レ到ニ齋宮ニ當月下旬雜色及仕女已上名薄移ニ送主神司ニ隨即卜レ之亦至ニ六月九月十二月ニ更亦卜レ之預ニ供齋事ニ[但野宮不レ爲ニ齋卜ニ]其寮吏諸司卜食已訖行列就ニ版位ニ于時中臣官人命云此竹折著事祓淸供奉其稱唯退出內侍采女女孺已下在レ座承レ命不ニ卜食ニ者不レ得レ參ニ供宮中ニ[野宮者內院忌之齋宮者宮中皆忌]と見えたるを思合す可なり九月六月十二月不參は其十六日度會宮十七日皇太神宮の御祭なるが故に其當日を待て物爲給ふ故なり長拍手は謂ゆる八開手にて常の二拍を短拍手と云に對たる名なり江次第齋王卜定條に凡行事以下潔齋日每月一日十一日廿一日六九十一十二月十八日以前近代四月加レ之以上幷二日廿八日幷臨時伊勢奉幣三箇日と有り右の一日十一日廿一日は謂ゆる三旬日なり六九十二月は三節祭なり十一月は新嘗の幣帛を被進る故なる可し但不審しきは

廾一日廿八日なり一日は十日などを誤れるも善本を得て正す可し廿八日は一古本に依れり今本には廿六日と有り今廿八日を以て齋日と爲に依て暫く廿八日の方を是として改引つ此廿八日の事を種々に云説有れども據無き事共なり 凡齋王出レ自ニ野宮ニ入ニ太神宮ニ臨ニ於河頭ニ在前爲レ禊（定ニ日時方ニ如レ上）祓料云々は上に擧る入ニ初齋院ニ時及入ニ野宮ニ時共に河頭禊有る此に同じ西宮記に當日西河禊（先例禊後日有ニ群行ニ在ニ十一日前ニ例幣付ニ此使ニ）所ニ御出請ニ寮印ニ（仰ニ山城主神司ニ御ニ請神官ニ）依ニ本宮ニ申ニ遣臨時客ニ（饗ニ）車（公卿出）典侍候ニ白ニ野宮ニ著ニ西河ニ（供奉公卿留ニ八省寮頭供奉云々）齋王著レ幄水部供ニ手水ニ中臣奉レ麻（節折傳）御禊供膳（山城獻物或止）御前著ニ幄前ニ（有レ突重給レ祿）奉幣松尾（寮官神祇官共爲レ使）云々と所見たるが如し此に西河と有は葛野川の事なり大同三年大原內親王弘仁二年仁子內親王の度は葛野川に在り承和二年久子內親王仁壽二年晏子內親王の時は賀茂川にて在しを貞觀三年恬子內親王の度より以來復葛野川にて被行る事と成れりきかし（備此恬子內親王迄は伊勢に入給むと爲る當日に被行たりけるを元慶三年識子內親王の御紀に九月九日丙申伊勢齋內親王入ニ齋宮ニ是日早朝臨ニ葛野川ニ以修ニ禊事ニ即便參ニ入豐樂院ニ令ニ奉ニ內親王ニ云々と見え仁和二年繁子內親王の時にも九月七日壬午齋內親王今日修ニ禊葛野河ニ九日庚入ニ太神宮ニと有て此は二日前に在れども西宮記江次第等は有り元慶の例也此時も行禊次第使を被任たる由御紀に往々見えたるが如し）凡齋王將レ入ニ太神宮ニ在前七月若八月同時遣ニ大祓使ニ（左右京一人五畿內一人七道各一人）此事の御紀に所見たるは酒人內親王の時寶龜五年八月庚午遣レ使祓ニ淨天下諸國ニ以ニ齋內親王ニ將レ向ニ伊勢ニ也と見えて布施內親王の時延暦十七年七月庚午遣ニ祓使畿內七道諸國ニ以ニ齋內親王將ニ入ニ伊勢ニ也など有り（其後の御紀に載られざるは定れる常例を以なる可く且次なる八月晦日大祓に一に爲て省れたるも有べきなり）凡齋王將レ入ニ太神宮ニ八月晦日朝廷大祓云々は朱雀門前にて被行る大祓なり安陪內親王の時淡路天皇天平寶字五年八月辛巳晦大祓以ニ齋內親王將レ向ニ伊勢ニ也と有を始と爲て晏子內親王の時仁壽二年閏八月癸巳大ニ祓於朱雀門前ニ云々恬子內親王の時貞觀三年八月廿九日庚午大ニ祓於朱雀門前ニ云々識子內親王の時は元慶三年九月八日に在り此は觸穢などの事に依て延引せるなる可し繁子內親王のも仁和二年八月廿九日乙亥晦大ニ祓於朱雀門前ニと有て何れも朱雀門前なるは天下の大祓なるが爲なり左右京畿內及七道に大祓使を被遣たるは此大祓に緣ての事也（建禮門前にて被行るは內裏の觸穢或は百官の大祓などにて普く天下に拘らざるを此朱雀門前なるは其事を兼て天下の大祓なるなり六月十二月晦大祓に其儀相同じ）凡齋王將レ入ニ太神宮ニ之時自ニ九月一日ニ迄ニ卅日ニ京畿內伊勢近江等國不レ得下奉ニ燈北辰ニ及擧ニ哀改ニ葬上と有は延暦十八年九月是月禁ニ京畿百姓奉ニ北辰灯ニ以ニ齋內親王入ニ伊勢齋宮ニ也弘仁二年九月壬辰朔禁下令月祭ニ北辰ニ擧レ哀改レ葬事上云々承和二年八月乙亥朔禁ニ京畿之內

來月供二北辰燈一云々仁和二年九月丙子朔三日戊寅停二御潔齋燒灯之事一など見えたる此四を合せて此式は定る所なり此北辰燈は三月九月三日に物爲らるゝ御潔齋燒灯とも御燈とも云事なるが此も漢土の道士の手に成て佛事めかしき所有に依て皇太神の禁せ給ふ子細有を以停止らるゝなり擧哀改葬と等し並に擧たるを以其禁はしき事を曉るへし然れば中古より正月元旦の四方拜に屬星の名を唱させ給ふなどは天神御子の御行と爲ては實に祥はしからざる御事なり 公事根源北山抄御燈條に是は天子北斗に燈明を奉給ふなり昔は北山靈岩寺など云所にて高き峯に火を灯して北辰に供せられける由云々今は御燈の儀に絶て其の御祓計りぞ侍る御殿に北向に御座を敷て三度御拜有り云々と有り此は吉備大臣など漢土より傳來られたるが弘れるならむ此も佛事を皇太神の禁忌坐て御祟坐る如き嚴き御喩などの有けるより禁(イマ)はしき事と所知食て群行の月には停止らるゝに至けむ 凡頓宮者近江國國府甲賀垂水伊勢國鈴鹿壹志摠五所並國司依レ例營造云々と有は仁和二年六月廿一日己巳伊勢齋内親王應下取二近江國新道一入中於太神宮上仍下二伊勢國一知又停二伊賀國舊路頓宮一下二伊賀國一知と有る此時に出來る頓宮なり此迄朝原内親王の度に桓武天皇大和國に幸行て平城齋宮より介出立給ひし任に其舊路を改易させ給はざりし者也右の新道は各其五所の頓宮に宿らせ給ひ六日に爲て齋宮に入給ふ道次なり 舊路の頓宮は江次第齋王歸京次第に壹志頓宮川口頓宮以□伊勢國なり河保頓宮此は伊賀國なり大和都介頓宮山城相樂頓宮有り京より相樂頓宮迄一日にて此も合せて六日の日數にて到らせ給ふ道次也鈴鹿新道は仁和二年九月繁子内親王の群行の時始て渡らせ給ふ由見ゆ近江國府は江次第群行條に至二勢多頓宮一と見え又伊勢公卿勅使條に至二勢多驛一の本注に國分寺前勢多橋不レ下馬一と有れば勢多の事也和名抄に近江國國府在二栗本郡一と見え同郡勢多郷有り垂水は同次第に於二外白河一被と有る此處なる可し 凡齋內親王臨行預定二監送使一參議一人 或以二中納言一充レ之 辨一人史一人六位以下官人一人卽使及齋宮官人以下皆賜二裝束一使四位布十段五位布五段六位絁一疋綿一屯布一段唯忌部布三段齋宮頭絹十疋綿廿屯布廿段助絹八疋綿十五屯布十五段主神司中臣忌部寮允舍人司長膳部司長各絹四疋綿六屯布五段寮屬藏部炊部酒部水部女部殿部藥部掃部門部馬部長及二司判官等絹三疋綿五屯布四段宮主舍人藏部膳部門部主典各絁二疋綿四屯布三段史生大舍人寮舍人及諸司番上等各絹一疋綿二屯布二段寮使部各布二段飯丁今良各布一段其命婦者雜色綾廿疋綿卌屯布廿段乳母各雜色帛綾十四疋綿廿屯布十三段一等女孺各雜色帛十疋綿十屯布五段二等女孺各雜色帛八疋綿七屯布四段三等女孺各絹六疋綿五屯布三段殿守各雜色帛四疋綿四屯布二段女丁各雜色帛二疋二丈五尺貲布一段綿四屯戸座火炬小子各絹二疋二丈綿四屯布二段縹布一丈五尺と有る監送使は晏子內

親王の仁壽二年九月には中納言正三位安倍朝臣安仁右中辨從五位上橘朝臣海雄等爲ニ長送使一と見て識子內親王の度は元慶三年八月十九日丙子參議從三位行治部卿兼備中守在原朝臣行平正五位下守權左中辨兼行木工頭藤原朝臣春景右大史正六位上興道宿禰春宗中務大丞正六位上藤原朝臣高處爲ニ長送伊勢齋內親王使一と見え繁子內親王の度は仁和二年六月廿三日辛未以ニ中納言從三位藤原朝臣山陰左近衞少將正五位下兼守左中辨行備前權介藤原朝臣有穗右大史正六位上惟宗朝臣安兄中務少丞從六位上藤原朝臣高用等四人一爲ニ長奉送使一と見えたり然ば右の監送使を長送使とも長送伊勢齋內親王使とも長奉送使とも云し也けり江次第群行條に次長奉送使令レ奏下路次間非違濫行任レ法可ニ糺彈一由上勅許開食と見えたり如此く長送としも云るは齋王を京外迄送奉る送齋內親王使に分ちたるなり西宮記江次第等に送內親王使を勅使と云り江次第に次親王乘輿出レ自ニ昭訓門一勅使公卿以下相從云々齋王至ニ京極一勅使等留云々長奉送使相代奉仕と有を以て送しと長送との差別を辨ふ可し使四位云々五位云々六位云々忌部云々と云るは神嘗祭使にて王氏中臣忌部等を云なり仁和二年八月廿日丙寅勅以ニ從四位上行兵部大輔四友王云々等四人一爲下齋內親王入ニ伊勢太神宮一前驅上と有る此四人の中に中臣忌部等は載ざれ共必其中に在て供奉る常例□事今云迄も非す唯布勢內親王の度延曆十八年九月甲辰齋內親王發ニ野宮一赴ニ伊勢遣侍從從四位下中臣王參議正四位下藤原朝臣乙叡等一送と有は監送使と例幣使とを兼たるか詳ならず齋宮諸司は令集解に載る神龜五年七月廿一日格に齋宮寮頭一人從五位官助正六位官舍人司長官一人從六位官藏部司長官一人從六位官膳部司長官一人從六位官少允一人從七位官主神司中臣一人從七位官酒部司長一人從七位官水部司長一人從七位官殿部司長一人從七位官掃部司長□□從七位官膳部司判官一人正八位官大屬一人少屬一人從八位官主神司忌部一人宮主一人已上從八位官采女司長一人從八位官藥部司長一人從八位官舍人司主典一人大初位官藏部司主典一人大初位官膳部司主典一人大初位官勅依ニ前件一と出たり此等も京にて被定て供奉の列なり然れば此式の下にも凡齋王歸京者寮印授ニ山城國一令レ納寮司任後申レ官請用云々と出て齋王出京の時に被任て供奉し其歸京の時に至て其職を罷らるゝ也仁和二年齋王群行供奉の中に舍人長藏部豐瀧と云人名見ゆ齋宮頭は初齋院及

野宮等の別當に當るなり此の命婦亦右の女別當に當るなり仁和二年群行の供奉に更衣滋野朝臣直子と云も有り戸座に火炬齋宮式に凡齋王到レ國之日取二度會郡二見郷礒部氏童男一卜爲二戸座一其取二火炬一當郡童女一卜用但遭レ喪及長大即替レ之と見えたり在京の時の戸座火炬の事は已に云り戸座は御贄物を炊く物忌火炬は火を焼く物忌の如き物と見ゆ戸座は三代格に神戸座阿波國阿曇部壬生中臣部右男帝御宇之時供奉備前國壬生海部壬生首壬生部右女帝御宇之時供奉備中國海部首生部首笠臣右皇后宮供奉云々天平三年六月廿四日と見えたり此に同じ九月神嘗祭使右尋常之例十一日參入而當齋王參入之時一即陪從參入其幣并明衣絹與二尋常一同更差二使中臣一人一遣近江伊勢二國在前祓清」と有は定りて十一日に令出立給ふ御使の例幣を齋王群行の時は其を兼て供奉の列に加はるを云ふ中臣を差遣て在前に祓清らるゝ事は齋王群行の道を豫に清むるなり此には先に記せる畿内七道に大祓使を被遣る時共に差遣し給ふ事なり西齋宮記に遣二五畿七道近江伊勢祓使一と有て一に記せるを以知べき也十八箇日右尋常齋三箇日當二此時一自二一日一至二十八日一齋但擧哀改葬限月內忌レ之」と有る尋常齋三箇日は四時祭式に神嘗祭は中祀諸司齋之と有り神祇令に三日齋爲二中祀一と有る其御定を被用るなるが齋王群行の月は十八日の齋なる由也但此は朝廷御齋の日數にて中祀は諸司共に齋する例なり臨時祭式に凡神嘗祭前後散齋之日僧尼及重服奪レ情從レ公之輩不レ得レ參二入內裏一雖二輕服日一致齋並散齋之日不レ得二參入一と有て其臨行の日致齋にて眞忌なり其前後の日散齋にて荒忌なり又同式に凡宮女懷姙者散齋日之前退出行二月事一者祭日之前退二下宿廬一不レ得レ上レ殿其三月九月潔齋預前退二出宮外一と有て其物忌嚴重なる事如此し其三月と云は新年月次新嘗の月を云なり又同式に凡觸二穢惡一事應レ忌者人死限二卅日一產七日六畜死五日產三日其喫レ宍三日と有て神祇官は尋常に此を忌み祭時には諸司共に此を忌事なり又凡弔レ喪問レ病及到二山作所一遭二三七日法事一者雖二身不一レ穢而當日不レ可レ參二入內裏一凡改葬及四月已上傷胎並忌二卅日一其三月以下傷胎忌二七日一と見ゆ 凡齋內親王發日所司預設二御座於大極後殿一天皇御二後殿一不レ警神祇官五位中臣進二御麻一史一人行二麻於侍從五位已上一時翹御二大極殿一齋內親王下レ輿入就二殿上座一事見二儀式一と有る此は江次第齋王群行條に前一日小安殿裝束如二常儀一云々早旦御湯殿內侍以下向二八省一令レ裝レ幣次行幸召仰奏二宣命一草并清書一云々次申下齋王出二野宮一了由上自二職人所一遣二小舍人一令三案內一申レ之云々次行幸無二鈴奏一不二警蹕一云々御裝束前例御二大內一時着二常御衣一云々至二宮城一經二待賢昭慶等門一御二小安殿一六位於二待賢門一下馬五位以上於二八省東北一下座次改二着帛御裝束一次齋王西川禊畢入レ自二藻壁門一御二於嘉吉門外一是先於二藻壁門外一奉二御麻一上卿以下下馬女騎不レ可レ留二立八省乾角一次行事辨奏二齋王候由一此門東川勅使并長奉送使等起二昭慶門東座一着二昭訓門外座一次主上御二盥此間閣司著二大極殿座一次宸儀（スメラミコト）渡二御大極殿一筵道上鋪二兩面一藏人持候御笏式并齋王額櫛筥等此筥先御二作物所一以二黃楊木一令作長二寸許入二蒔繪筥一方四寸松折枝并鶴等蒔レ之御坐定後召二御笏一次中臣

取御座候北面東戸外內侍於戸內傳取奉獻宸儀一撫一吻返給內侍中臣受之退出次宸儀端笏拜（云々奉）御幣（兩段再拜）次令五位藏人仰下齋王可參給由（仰向嘉吉門召之）次齋王入自嘉吉門（御前井察頭助相扶內侍及乳母二人侍者二人童女四人從）女房（察頭仰之云々）次王輿登自殿北面東第一階登候同戸下（下自昭慶門）闈司開戸齋王入自同戸著座（著羅地摺給襠(アハセハカマ)長同日染(ヒツメ)裳著玉鬘候未成人不可上髮著櫛又御乳母可奉抱女房三人取几帳隱玉座東南西三方云々）闈司開戸歸著東戸座王輿暫留東軒廊北面西第二間（駕丁等滅火暫退出）先是著及昏黑者供燈於高御座北又主殿官人供炬火（南庭）次天皇喚舍人二音大舍人四人稱唯（於昭訓門內壇下屏幔稱之）少納言代趨就巽角北版跪候天皇勅中臣忌部召世稱唯退出召之中臣忌部就版立（中臣就一版忌部就二版下部在後）次勅忌部參來稱唯昇自東福門南階自東軒廊南砌上進御座前膝行拍手取外宮幣退出授後取者又參入拍手取內宮幣退下復本位勅中臣參來稱唯昇自同階膝行候御座巽方許丈（乾面）勅常毛奉進（留）九月神嘗幣帛（曾）汝中臣如常久申天奉（止禮）宜（依過十一日不可有作詞敷）中臣稱唯又勅令奉進齋內親王者此依恒例（豆）三箇年間波齋清豆天照太神乃御杖代仁定奉內親王（曾）中臣宜久（吉久）申弖奉（止禮）宜次中臣稱唯下就版

位次忌部捧幣與中臣退出次天皇召額櫛筥次藏人頭執件筥付內侍內侍取筥開蓋置御座左方席上（蓋置北身置南）內侍奉仰進齋王許申可近參給由親王近候御前（御乳母奉抱女房捧几帳祗候）天皇以櫛刺加其額勅京乃方仁趣支給奈（不）次內侍以櫛筥給親王乳母（作櫛今夜刺之至勢多頓宮納筥云々）此間大臣就東福門南面西掖座（內記置宣命）召使王給宣命次大臣令奏可給使王御馬由勅許畢仰外記次長奉送使令奏路次間非違濫行任法可糺彈由勅許（闈食）次闈司開東面戸次王輿入自東福門寄於件戸下次親王出自東戸乘輿出自昭訓門（勅使公卿以下相從女房等候之）行事辨令奏王輿可出宮城門可用何門由門依某年例云々多經八省東路南行出都芳門又南折至二條東行至京極云云次還小安殿次親王去許斷（以不見為限）後改御服還宮（不稱警蹕無奏）次齋王至京極勅使等留（或於東河邊留）寮頭仰云自是還參豆平（甫）仕（止川）申世長奉送使相代奉仕と見えたる此勅使は送伊勢齋內親王使にて京極に留り其より長奉送使相代て伊勢に供（ミトモツカヘマツ）奉る事已に云るが如し西宮記にも勅使等留京極の文有て其本註に寮頭仰云自是還參天平（甫）仕勅使以下再拜諸司或自京極時或

白ニ會坂一歸と所見たり此文傳注等の無耳用無は省きて引り其な悉く擧たらむには中々に煩はしくて有て得曉るまじきが故に甚く約て出せる所なり凡ての事九月神嘗祭例幣の儀に異在らざれば其下に引る儀式以下の文を能々讀合す可く且此の始に御紀及西宮記を引て云るをも見合す可し六所堺川供奉御祓山城近江勢多川甲賀川伊勢鈴鹿川下樋小川多氣川御蔫服六具云々と有る山城の地名の脫たるは何れなるらむ知難し西宮記に勅使等留ニ京極一次於ニ白河一有レ祓と有は若くは白川の二字を脫せるなる可し江次第公卿勅使儀にも到ニ白河一修祓卜部祓詞中臣傳ニ大麻一云々と有を以愈著明き所なり又到ニ野洲川一祓と有は勢多川に易たるにや第二日外白河第三日鈴鹿川第四日多氣川下樋小川及宮川等にて各御祓有る由なり齋王還京の時も第一日多氣川御祓下樋小川御祓四日名張橫川祓五日和禰川祓七日三津瀆下方三津瀆安曇口等にて在る事なり必一日一所とも見えず凡齋內親王在レ路毎レ至ニ山城近江伊勢等堺勢多鈴鹿下樋多氣川等一遣ニ神部卜部各二人一在前鎭ニ祓之一所レ須云々又其路次社幣云々又頓宮五處大殿祭云々亦路間儲幣云々並主神司請領祭レ之其鎭祓等料者請ニ受京庫一と見えたる堺祭の數合せて六處なり山城近江堺は會坂近江伊勢堺は鈴鹿山中にて勢多鈴鹿は驛所下樋多氣は神郡の堺なるを以てなり此事道饗祭條に註る如く謂ゆる手向祭なり又其路次社幣及頓宮五處大殿祭此三は天皇行幸の時も然り臨時祭式に行幸時祭若不レ經レ宿不レ祭路次神幣云々堺祭云々大殿祭云々と所見たる常例に依れる者なり其中に亦路間儲幣云々は御卜の事の儀なり云々て卜串さる可き事無時は其幣物を穢用さるなる可し其新中に卜龜甲一枚と有を以曉る可なり齋宮祈年祭神百十五座大社十七座在ニ齋宮內一大宮賣神四座御門神八座御井神二座卜庭神二座地主神一座座別云々但加ニ宮賣神馬一疋一御門神各楯二竿小社九十八座在ニ多氣度會兩郡一云々右祭二月四日供祭其六月十二月月次鎭火道饗大殿御贖大祓幷朔日忌火庭火等祭供神物及明衣祝詞料皆准ニ在京一但月次祭加ニ火雷神一座一と有て大凡在京の時に同じ右の小社九十八座は神名式なる度會郡五十八座の內大十四座は朝廷より新年幣帛使を以祭にせ給ふを以此を省き殘四十四座の外に荒御玉命社伊佐奈岐社伊佐奈彌社の三社齋宮式には加はりたるに神名式なる官舍神社齋宮式に非るを除て通計(スベテ)四十六座と多氣郡五十二座を合せたるなり齋內親王參ニ三時祭一祓新云々已上晦日禊新云々已上參日禊幷堺祭新右五月十一月晦日隨ニ近川頭一爲レ祓八月晦日臨ニ尾野湊一爲レ祓其三時祭月十五日齋內親王向ニ離宮一行路之間有ニ二處堺祭一宮東堺外及多氣度會兩郡堺祭レ之新物色目在レ上到ニ著祓殿神宮司幷掃部司裝束主神司中臣爲レ祓新物神宮司儲レ之太神宮司奉ニ齋王膳一兼賜ニ酒肴勅使以下一次主神司供ニ奉內院大殿祭一所須祭物神宮司儲レ之然後齋王遷ニ內院一裝束雜具一同ニ祓殿一奉ニ夕膳一神宮司以ニ新物一附ニ所司一但男女官供給辨備行レ之十六日朝饌之後齋王參ニ度會宮一云々十七日參ニ太神宮一云々是日神宮司獻レ物即賜レ祿又奉幣使同賜レ祿各有レ差十八日齋王還レ宮主神司中臣候ニ南門一奉ニ御麻一兼供ニ奉大殿祭祇承國司賜

レ祿と有は六月十二月 月次祭九月神嘗祭に參赴かせ給ふに就ての御禊又堺祭大殿祭等なり其十五日の祓を大祓と云事此下に所見たり此は主神司中臣の掌る所なり大殿祭は主神司忌部の掌る可き事云も更なり齋王御參宮の事等三時祭條に儀式帳を引て委しく述る所なれば今云限に非ず祇承國司は國司日以上の名簿齋宮に移して令卜め其最合者一人祇承する事次に出せるが如し太神宮式に凡齋内親王三時祭時參二神宮一及向二四度祓所一者三箇神部司供給之其主米幣司以二公廨正稅一春精運レ之夫馬者三箇神部司儲備度每夫五十人馬八十疋と有り四度祓とは右三節と十月晦日新嘗に就て祓給ふと合せて四度なるを云ふ毎月晦日卜庭神祭齋王參二三時祭一卜庭神祭准レ此云々と有は上なる在京の野宮主神司所レ請月料條に云る如く此式の下に凡遷二入野宮一之後、及到二齋宮一每月下旬雜色及仕女已上名簿移二送主神司一隨即卜レ之亦至二六九十一月十二月一更亦卜之預二供齋事一但野宮不レ爲二祭卜一其祭吏諸司卜食己訖行列就二版位一于時中臣官人命云兆竹折者事祓淸供奉其稱唯退出内侍釆女女孺以下在レ座承レ命不二卜食一者不レ得レ參二供宮中一野宮者同院忌之齋宮者宮中忌レ之と有る此卜食の爲に卜庭神を被祭るゝ也又凡齋内親王參祭之禊國司日已上名簿在前移二齋宮一令レ卜其最合者一人祇承其三時祭月十五日大祓處中二刀禰數一祇承官五位已上令二史生申一六位已下自申と

有も卜事に依て被定る所なり其兆竹は龜甲と共に御卜に用る具にて平兆竹丸兆竹の名目有て宮主秘事口傳抄御體御卜條に云るが如し卜食の事は神祇令義解に謂凡卜者必先墨畫レ龜然後灼レ之兆順食レ墨是爲二卜食一と見えたるが如し在京條每朔日御拜條にも別當大夫以下卜食者共再拜兩段と有も此晦に卜食なり 凡十月晦日被新同二三時祓一と有は新嘗祭に就て被行るゝなり其六九十二月の三時祭は神宮の御祭に就て齋王參給ひ十一月新嘗祭は齋宮の御祭にて神宮の神事に非と雖も其宮中に就て重き事三時祭に異ならざるを以此祓有なり但三時祭の中にも神嘗祭は殊に重き所なるが故に其祓は尾野湊に臨て行はれ六月十二月月次祭には其よりは輕き故に近川頭に臨て行るゝなれば此も必月次の例なる可なり 新嘗祭神百十五座大十七座小九十八座 右供祭雜物並准二新年一但鎭二炊殿一幷忌火庭火大殿祭等皆准二在京一供二新嘗一新卜二八男十女一云々と有て次に主神司膳部炊部酒部殿部掃部等の所請料物の事を載たり偖二所太神宮合せて十四座の大社は朝廷より新嘗の幣帛を奉らせ給ふ故に被祭ず其宮中大社十七座の神と多氣度會二郡九十八座の神等を被祭る事上の新年祭條に云るが如し然れば朝廷の御と同じく此にても卯日新嘗祭長日直會する也此下に凡新嘗解齋日太神宮主等二禰宜内人御厨案主三郡司神部歌人等一參會各賜二宴祿一各有レ差寮頭已下亦賜レ祿と見えたり偖二所太神宮に新嘗の幣帛を被進る事は延暦廿三年に出來たる儀式帳には

其に十一月例に無は神嘗祭耳なりしなる可し然れ其齋宮のは古かりけり後紀に延暦十八年七月己酉停ニ伊勢齋宮新嘗會ニ但以ニ歌舞伎ニ供ニ九月祭ニと有は其迄に已く有けるを此時にこそは停られけめ後には又行はせ給ふに至れりしなり然れば其より後に神宮にも其新嘗の幣帛を被進るに至れりし者なりけり然ればこれそ儀式帳なる九月神嘗祭條に右祭ニ太神宮ニ御饌祭同直會人給畢但禰宜宇治内人新稻酒飯食始と有て朝廷の新嘗には拘らず神宮の神嘗を本に立たりけれ江次第齋主卜定條に十一月中卯日以前不レ食ニ新年穀米ニ事と有は朝廷齋宮の新嘗を憚奉れる甚々愛く有ま欲き行ながら此は良後の事なり右の鎮ニ炊殿ニ幷忌火庭火大殿祭等は四時祭式新嘗祭條に忌火炊殿祭云々右新嘗祭時先新造ニ炊殿ニ依レ件鎮祭宮主行レ事其舊殿者壊却給ニ宮主ニと見え又其御贖大殿忌火庭火等祭云々と有る此朝廷の儀式を即齋宮の式と爲て用來るか故に此に限らず年中の諸祭の趣大に同じきなり諸司春祭秋祭進レ此膳部神祭云々炊部神祭云々酒部神祭云々水部神祭云々氷室神祭云々竈炭竈山戸御川池等神祭云々は齋王の御神事に非ず諸司人の各其幣物を寮に請て其司々に齋奉る神を春秋二度に主神司を爲て祭るを云なり其は此件の結に右主神司請供レ之と有を以著明くなむ有ける膳部神は野宮新嘗祭條に膳部御食神一前と有り炊部神は同條に大炊竈神一前と有り酒部神は同條酒殿神一前と有り神名式に造酒司坐酒殿神社二座並小酒彌豆男神酒彌豆女神と有れば二柱を合せて一前と爲る也其由細注に云べし水部神は同條に水部忌火庭火神二前と有り氷室神は水部に在すなる可し此は朝廷の主水司に當れるを彼司に氷室を掌る事有ればなり但此は祈年新嘗に祭る所ならず竈神は殿部竈神一前と有なる可し御川水は同條にも出たり此は朝廷にては座摩坐神なると同じき事祈年祭詞の註に云り炭竈山戸神は若くは阿須波神波比岐神に坐なる可し御川水神と並坐に心を着べきなり池神は宮中の池神なる可し酒部神を二柱と定たるは炊部神の幣物に五色薄絁各三寸倭文三寸と有を此と水部神とは各此二共に六寸と有て其倍せるを以て二柱の御料なる事見ゆるが故なり炭竈山戸神を阿須波神波比岐神と云るは阿須波神は柴薪を主り波比岐神は灰木にて炭竈などに預り給ふと聞ゆるが故也猶野宮條に炊殿忌火庭火神と有は炊部神に非ず此は野宮にても齋宮にても新嘗の時に新く炊屋を建て其にて御饌を調させ給ふ也

十一月供ニ二所太神宮幣ニ宮別絹一疋絲一絇綿一屯庸布一段木綿麻各一斤右主神司請供レ之齋宮内十七座幣云々は二所太神宮に主神司を爲て令奉給ひ又宮中の大社十七座の神々にも幣帛を奉らせ給ふなり但儀式帳に見えざるを以思ふに宮中の儀式には拘らず申さば内々の御事の如きなりけり其奉る日も何日と云事今知る可に非ず

凡齋内親王月新及節新等皆准ニ在京ニ其官人主典已上廿六人番上一百一人命婦一人乳母三人女孺卅九人御厠人二人御洗二人別米二升鹽二勺仕丁十五人駈使丁廿五人飼丁八人取ニ神部幷神戸仕丁ニ充レ之今良八人別米二升鹽二勺女丁十人將從二百七十三人別米一升五合鹽一勺五

撮）戸座一人火炬小女二人（別米一升四合 鹽一勺四撮）宮主并卜部家口四人（別米一升五合 鹽一勺五撮）と有り此齋宮男女供奉人の員數なり（主典以上廿六人は寮及十二司のなる可く思ゆ初齋院別當以下員を上に記せるよりは其勝れる事如此し）凡元日齋內親王遙ニ拜太神宮ニ訖開ニ宮南門ニ頭以下拜ニ賀齋王ニ其祿法云々命婦准レ頭云々三日太神宮司等拜賀給御衣一領禰宜被一條郡司布一段內舍人各絲一絇云々と見えたる此元日御遙拜は內院神殿にて物爲させ給ふ事なり在京條に每朔日參ニ入齋殿ニ遙ニ拜太神ニと有に同じ拜賀は朝拜に異ならず太神宮式に太神宮司率ニ諸宮禰宜內人及神郡司等ニ云々三日早旦拜ニ賀齋王ニと所見たり皇太神宮儀式帳には齋宮參向內親王拜奉と有は止由氣宮の には殊に委しく以三日參ニ向齋宮ニ拜ニ奉內親王ニ之畢即大饗給之畢時祿給禰宜大內人三人各調布一端御衣一人小內人十一人各絲一絇給畢時各太神宮宿所還レ之と有り（此を以見るに此に內舍人と有と小內人は同じ者也けり委しくは上なる內人の註に云を見べし倚大內人は郡司に同じく布一段なるを其に合(コメ)て記せり）凡齋王相代應レ歸レ京者遣レ使奉レ幣亦如レ初若遭ニ國哀及親喪ニ者遣ニ中臣一人ニ告ニ其狀ニ不レ奉ニ幣帛ニと有る 如レ初は齋王卜定條に遣レ使奉ニ幣太神宮ニ云々と見えたる細註に其儀同ニ神嘗祭使ニと有を云なり 其例延暦十五年遣レ使奉ニ幣於伊勢太神宮ニ以ニ齋內親王退ニ也延暦廿五年四月己酉遣レ使奉 幣於伊勢太神宮ニ以ニ齋內親王歸ニ京也など有弘仁十四年六月丙戌天皇御ニ大極殿ニ獻 幣帛于伊勢太神宮ニ爲レ停ニ定齋內親王ニ也此は卜定と還京との事を兼たる御使也天長四年夏四月癸巳御ニ大極殿ニ奉ニ幣帛 幣帛太神宮ニ勅使參議左大辨正四位下直江王中臣散位從五位下大中臣朝臣笠作御白云々と有て齋王歸京の事を令申給告文有り天長十年四月甲子遣ニ內匠頭正五位下楠野王於伊勢太神宮ニ告ニ齋宮宜子女王之替定ニ久子內親王ニ之狀ニと有る此は上に停定と云例なり此は或は天皇御位の內に在り或は御位は遜給ふと雖も御在世の內に在が故に奉幣使は卜定の時の如く奉らせ給ひけむを右の中に唯延暦廿五年桓武天皇崩御の即なるに奉幣の事有て相も異らぬ趣なるは當昔然有しなり（若遭ニ國哀及親喪ニ者遣ニ中臣一人ニ告ニ其狀ニ不レ奉ニ幣帛ニと有は嘉祥三年五月己卯遣ニ侍從從五位下島江王云々等ニ向ニ伊勢太神宮ニ迎ニ齋內親王ニと有て奉幣の事無きは國哀及親喪に遭るが爲なり天安二年九月廿日戊寅遣ニ正六位下大中臣朝臣具人於伊勢太神宮ニ告以ニ齋內親王退出ニと有ぞ此式文に合る陽成天皇元慶五年正月廿八日丁丑遣ニ散位從四位下恒基王云々等ニ齎ニ韓輿腰輿資具等ニ向ニ伊勢太神宮ニ迎ニ前齋內親王ニと有て天皇御在世と雖も幣帛を奉らせ給はざるは正月十九日の官符にも齋王入京の事を云て酒食夫馬等之類事々祗供時惡ニ諒闇ニ莫レ用ニ魚鳥ニと有て諒闇の式を被用ゐる爲也此は去年清和天皇崩御に依る故也）

凡齋王遷京者（若有レ遭レ故遷者不レ用ニ初入之道ニ）遣レ使奉レ迎五位六位各一

人近江與ニ伊勢ニ堺上祇候辨一人率ニ史生官掌各一人ニ
參齋宮撿挍歸發其齋王衣服輿輦之類官使便附使送レ之
皆堺上而脫易 衣服之類給ニ忌部ニ輿輦之類給ニ中臣ニ又各加ニ鞍御馬一疋ニ 其頓宮及供給
准ニ向レ國之例ニと見えたる 一に齋王還京は伊賀大和
を經て還らせ給ふ事なれども仁和二年六月に近江國
新道を定させ給へるを以て其新道より還らせ給ふ事
なり此より伊賀國舊路は停止られたり 延曆十五年二月乙亥齋內親王欲レ歸レ京造ニ頓宮於大和國ニ又同廿五年三月癸巳令大和伊賀兩國造ニ行宮ニ爲ニ齋內親王歸ニ京也など有は其舊路なりし間の事なり 二
に若有レ遭レ故還者不レ用ニ初入之道ニと有る 遭故は上
に謂ゆる國哀及親喪に遭を云なり然る時には近江國
新道を被用ずして伊賀國舊路より還らせ給ふ例なり
大凡齋王の還京は天皇の御讓などの愛たき事にて還らせ給ふは少く爲て多くは諒闇などの時に在る故に後には伊賀國舊路は定れる還京の道の如く成れり天平勝寶元年閏五月甲辰伊勢齋王爲レ遭ニ親喪ニ自ニ齋宮ニ退出と有る其より後にも此例なるが多在れども其頃は伊賀の舊路用なりしいば道た易たる由見えず思ふに式文の頃の定なるにや 三に遣レ使奉レ迎五位六位
各一人近江與ニ伊勢ニ堺上祇候は行事辨などの如く齋
宮迄は到らず神國の堺迄至るなり江次第齋王歸京條
に到ニ伊賀堺屋ニ神祇官奉ニ仕堺祭ニ供ニ御浴ニ行事辨
召ニ官掌ニ官掌召ニ寮官等一人ニ立レ版引 參寮官 參入辨
仰云停ニ釐務ニ寮官置ニ笏於榼棚ニ 寮官等退或猶相從 と有る如く寮
官等の釐務を停られて令退る故に此より寮官に代り
て供奉るなり偖右の字を今本に勅務と有勅字は誤な
り釐務の字雜事記に出たり此次に王中務丞內舍人參
入新輿到來 齋王御也 と有れば王氏は伊勢の國堺迄御迎に
參るなり 但此を唯使と耳云るは辨官は行事に行向ひ此五位六位は神國の堺迄寮官以下の送奉れるを其にて釐務を停られて寮官は退く故に其に代りて齋王の供奉するなり 四に辨一人率ニ史生官掌等各一
人ニ參ニ齋宮ニ檢校歸發と有る辨は謂ゆる 行事辨なり
延曆十五年三月 遣ニ從五位上守 左少辨兼左兵衛佐橘
朝臣入居等ニ迎ニ齋內親王ニと有て 次々皆然り唯同廿
五年四月戊申 遣ニ右兵庫頭從五位下 佐伯王左衛士佐
從五位下 百濟王敎俊等ニ迎ニ齋內親王 於伊勢國ニと有
る耳辨官ならざるは其官名を脫せるにもや有む嘉祥
三年五月己夘遣ニ侍從從五位下 島江王左少辨 從五位
下文室朝臣助雄中務少丞正六位上百濟王忠岑內舍人
正六位上八多朝臣湊從八位上淸瀧朝臣岑成等ニ向ニ伊
勢太神宮ニ迎ニ齋內親王ニ大ニ祓於建禮門前ニ天安二年
十月八日乙未遣ニ散位從五位下內宗王從五位下守左
少辨丹墀眞人貞岑等ニ迎ニ伊勢齋內親王ニ大ニ祓於建
禮門前ニ而發レ使焉 貞觀十九年三月壬寅朔 遣ニ刑部大
輔從五位上弘道王右中辨從五位上藤原朝臣保則ニ迎ニ
前伊勢齋內親王ニ元慶五年正月廿八日丁丑遣ニ散位從

四位下恒基王左少辨正五位下兼行大學頭巨勢朝臣文雄等ニ齎ニ輦輿腰輿資具等一向ニ伊勢太神宮ニ迎ニ前齋內親王ニ云々と有り王辨中務丞內舍人等共に行向へ八例なり但辨官は使に非ず 此中に王氏一人副て行向ふ由なるは幣帛を奉る由なれども思ふに然らず江次第齋王歸京條に依に其伊勢の國堺迄行向ひて齋王を迎奉るなり王中務丞內舍人參入とも王氏とも有を以て其使と云は王氏なる事を明む可し此王氏を使と云ご辨を以行事辨と云別ちたる所以なり 五に其齋王衣服輿輦之 衣服之類給ニ忌部ニ輿輦之類給ニ中臣ニ各加ニ 類官使附ㇾ使送ㇾ之皆堺上而脫易 鞍馬一疋ニと有る附ㇾ使送ㇾ之は右に引る元慶五年實錄に齎ニ輦輿腰輿資具等一向ニ伊勢太神宮ニ迎ニ前齋內親王ニ令ㇾ下山城大和伊賀三國充ニ夫八十人擔夫輦輿等物ニ遞送前所と有る此なり皆堺上而脫易は伊勢の堺迄は齋宮の御服にて還らせ給ひ其より大內の御服に被改るを云なり尋常の還京には伊勢與ニ近江ニ堺なるが還故の還京の時は伊賀堺屋にて改易させ給り 江次第齋王歸京第三日到ニ伊賀堺屋ニ條に神祇官奉ニ仕堺祭ニ供ニ御湯ニ行事辨召ニ官掌ニ官掌召ニ寮官等一人ニ立ㇾ版引參寮官參入辨仰云停ニ齋務ニ寮官退勿於樣棚ニ寮官等退出輿給ニ主神司ニ御服辛櫃持參辨ニ於谷ニ給ニ忌部ニ辨ニ六舊衣ニ新衣ニ王中務丞內舍人參入輿到來齋王御也と有が如し に頓宮ニ供給准ニ向ㇾ國之例ニと有る頓宮は舊蹟には山城國相樂大和國都介伊賀國阿保伊勢國川口壹志の五所なり新道にては近江國國府甲賀垂水伊勢國鈴鹿壹志都て五所なるが猶此外に難波河陽の二宮有り大

同四年六月甲申令ニ攝津國造ニ頓宮ニ以ニ伊勢齋內親王皈ㇾ京也元慶五年正月十五日甲子太政官下ニ符山城攝津等國ニ云前伊勢齋內親王來二月廿二日首途自ニ大和道ニ經ニ山城河陽宮ニ到ニ攝津難波海ニ解除而後可ㇾ入ㇾ都凡其供具依ㇾ例准擬 十九日戊辰下 知河內攝津兩國ニ僃齋內親王擬下出ニ神宮ニ從ニ河陽宮ニ取ニ水路ニ赴ニ難波宮ニ依ㇾ例三處祓除每處經ニ一日ニ即便取ニ三島道ニ還向河陽宮ニと見えたる所なり倩伊勢齋宮より京に還らせ給へ御事は江次第齋王歸京次第に勅使參着ニ前日給ニ辨以下祿ニ一日分配夫馬ニ 大宮司國司等充ㇾ之 給ニ撿校使以下祿ニ云々 ○今齋宮式に云凡一人率ニ史生官掌各一人參ニ齋宮ニ檢校而と有り 出御ㇾ次供奉 寮官齋司依 多氣川御禊 主神司獻ニ御座ニ 下樋小川御禊著ニ壹志頓宮ニ 供給國司寮官分配 二日供給分ニ配夫馬ニ給ニ祿國司ニ 或不ㇾ給 祭主申ニ事由ニ歸向離女 女房自ㇾ巡ニ頓宮ニ相分京上出御著ニ川口頓宮ニ 供給伊勢 賜ニ辨以下祿ニ 或不ㇾ給 三日供給夫馬等用ㇾ昨給ニ國司祿ニ出御 召ニ加寮國司ニ令ㇾ候 到伊賀堺屋ニ神祇官奉ニ仕堺祭ニ 料物於ㇾ京請取也 供ニ御浴ニ 國司預儲ㇾ之 行事辨召ニ官掌ニ官掌召ニ寮官等一人ニ立ㇾ版引參寮官參入辨仰云停ニ齋務ニ寮官置ニ勿於樣棚ニ 寮官等退或猶相從 ○今云停ニ齋務ニは齋王に仕ふる事を停よとなり此字今本に神務とも一本に勤務とも作るは共に事なるも知ずして誤れる者なり神務は神務と云ふに同じ 舊輿給ニ主神司ニ御服辛櫃持參辨ニ於谷ニ云々御衣給ニ

忌部二人弁二舊衣一着二新衣一王中務丞內舍人參入〇今云齋宮式に遣レ使奉レ迎五位六位各一人近江與二伊勢一堺上祇侯ト有は此を云り新輿到來齋王御也〇今云同式に其齋王衣服輿輦之類官便附レ使送レ之と有は此事なり伊勢堺常御膳伊勢國司献物主膳司供レ之伊賀堺以後國司調備着二阿保頓宮一供給四日供給分二配夫馬一近江國騎幷夫各七十疋給二宣旨一給二王辨國司以下祿一出御名張横川禊卜部給祿御衣或匹絹就二大和都介頓宮一供給五日供給給夫馬近江馬自二木津一可レ歸由仰レ之國司給祿出御和爾川禊卜部給祿御衣過二大安寺邊並奈良坂一至二山城相樂頓宮一在二木津川南一供給六日饗饌國司献レ船一艘給二國司祿一御船廻二船於北岸一自レ御至レ岸敷二莚道一舊輿丁等候二御船一船等召二於國司一着二河內茨田眞手御宿所一江口上方齋王不レ可供給七日饗饌給二國司祿一解レ纜舊例者向大江儲所而近代先遣二此所一行レ禊後着向二禊所一舊例三日有二三所禊一近代同日行レ之三津濱方下禊擬二住吉一三津濱安曇口禊卜部每度給祿御各衣更歸二大江御厨儲所一〇今云此難波頓宮なり給二國司祿一三津寺風誦綿五十屯導師十屯供給國司設之齋王不レ下八日供給國司給祿辨レ纜進發著二眞手御宿所一攝津國供給須二河內奉仕一而如レ此九日河內供給王辨以下國司祿解レ纜至二河陽宮一供給山城國國司請二寮印一〇今云齋宮式に凡齋王歸レ京者寮印授二山城國一令レ納云々撿挍使以下給祿船進發十日入京本齋王者一月可レ經二河陽一然而近代密々入レ京也〇今云元慶五年符に自二大和道一經二山城河陽宮一到二攝津難波海一解除而後可レ入レ都云々と見ゆ參着日初出レ宮時到二伊賀堺一令レ整レ務時辨束帶自餘衣冠と所見たるが如し但齋王還京は近江國新道よりの常例なれども遭故の時の還京は伊賀國舊路より歸らせ給ふ事なるが大凡齋王の退給ふは吉事にも非れば其伊賀路より還らせ給ふ事常多きなり又て折々の堺祭禊の事は上に出たる如く、頓宮の大殿祭等所々にて被行けむを其迄は載られざるなり〇御杖代止定氐進給事波は御杖代ツヱシロなり垂仁天皇御紀一書に天皇以倭姫命爲二御杖一貢二奉於天照大神一是以倭姫命以二天照太神一鎭二坐於磯城嚴橿之本一而祠レ之と有る此にて能通えたり倩御杖とは皇太神の御杖代と申事にて天皇の御杖代の意には非ず此は其御手に附て傳カシツキ奉る事を云なり儀式帳大物忌職掌條に此皇太神乎頂奉レ齋倭姬內親王朝廷還參上時爾云々以二川姬命一太神乎令二傳奉一弖從二其時一始弖大神專手附奉弖令二傳奉一と有を以て其御杖代の意を思ふ可し然れば代は物實モノシロ禮代ヰヤシロなどの如く其下に添云にて御杖は皇太神に係り代は齋王に係たる事明らけし今中古より通音に神名式大和國宇陀郡御杖神社風土記曰宇[illegible]御杖[illegible]祭[illegible]天照太神二[illegible]御杖一[illegible]此[illegible]仍尋二[illegible]宮地一[illegible]云々と見えたり姓氏錄に榎室連火明命十七世孫吳足尼之後也山部子連等仕二奉上宮豊聰耳皇太子御杖代一云々と有はさ昔に所ゆる東宮の職の如く其奉る長を云て皇太子乃御杖代と云も同じ意なる也天皇本紀に景行天皇々子武國凝別命添御杖君祖と有は添御縣坐神社に仕奉れる氏人ならむ齋內親王發遣の時の大御命に今奉進留齋內親王波此依二恒例一天三箇年爾波齋清天天照太神乃御杖代爾定天奉進留內親王曾と詔給へるは天照太神の御手に附奉らせ給ふ由にて賀茂齋內親王を定給へる告文

に皇大神乃阿禮乎止賣爾云々乎卜定弖進と有も傳仕奉る意なると同じきなり然れば天皇の御手代と爲て仕奉給ふには非ず天照太神の御杖代に令仕奉給はむ爲に天皇の御方より定めて奉らせ給ふなり斯れば神に仕奉る人なるに依て御杖代とは云ならず神の仕はせ給ふ方に就て云名なり齋王群行の時の大御命に京乃方爾趣支給奈不止宣給へるも天皇の御方の人には非ず皇太神の御杖と坐が故より能々此差別を思ひ混ふ可からず 神代紀大物主神請願の條に代ニ御手ニ以祭ニ此神ニ云々と有に其祭らせ給ふ皇御孫命の御手代と爲て仕奉る事にて謂ゆる神主なり姓氏錄に御手代首天御中主命十世孫天諸神命之後也と云も見え續紀天平廿年七月條には大倭國手代連麻呂女賜[illegible]とも有り此等は神祭にも限らず何事にか天皇の御手代と仕奉れる氏なる可し因に云神代紀に又當レ主ニ汝祭祀ニ者天穗日命是也と有て出雲國造は世々大日隅宮に仕奉れる事即神主なるか近頃其國造の書る物を見に天日隅宮御杖代と有には最も宛き事なから偽りに飾りたる事なり國造に爲て其出雲大神の祭祀を主るを何そ御杖代と云むや甚々畏多き事なりかし ○皇御孫之尊乎 天地日月止共爾 常磐爾堅磐爾 平久氣久 安久云々と有る此の常磐の二字はしも出雲本に依て補へる所なり考本に安久の二字無は筆者の誤なる可し 考に祝詞には古の任に命の字を書しを此に尊字を書しは如何に云々と有を鈴屋大人說に美許登に命字を書は古は無りし事なれども書紀に書始られてより後は此を書も常の事にて其ゝ何も若しからむ然るを考に此字有る度毎に咎めらるゝは味氣無き事なりと有り 此は齋宮式に凡天皇即位者定ニ伊勢太神宮齋王ニと有る如く天皇の大御位に即給ふ始に齋王を定て奉らせ給ひ御世の限り令仕奉給ふ事なるが故に天津祝詞の言を取て天地日月止共爾常磐堅石爾云々とは令申給ふなり天皇の大御位を皇太子に傳させ給へば先帝の齋王に易て新帝の皇女を奉らせ給ふ事なるが其御世所知食す間の長ければ齋內親王の仕奉らせ給ふ間も長く久しき故に其天皇の大御身の平けく安らけく坐む事を祈申させ給ふなり 但倭姬命の如きは御世を歷て仕奉らせ給ふは格別の御事なれば今云ふ限に非るが用明天皇の皇女酢香手皇女は三代を歷て仕奉り給へれば古の定には非ず天武天皇御世よりて此式は立させ給へりけむ ○御座坐武止志米は下に爲弖の二字を加へて聞へき也鈴屋大人說に意富麻志麻佐志米武登と訓べし大坐々と云語古書に例多く有事なるを考に座字衍れりと云れたるは如何にぞや頭書の說も甚く違へり 中昔よりの言に御在(オハ)しますと云も大坐々の約りたるなり古今集の端詞には御坐々(オマシマシ)とも有る其も大坐々なり と有が如し備世は天皇の御世の平けく安く御在む爲に齋內親王を奉らせ給ふ事なるが其齋王の長く太神の御杖代と仕奉り給はむは天皇にも御世の長く御在す事なるが故に如此く申させ給ふなり 考に崇神天皇御紀に天照太神ニ託豐鍬入姬命ニ祭ニ於倭笠縫邑ニ云々此は[illegible]仁天皇の御時倭姬命に託て齋奉り給ふも[illegible]大御[illegible]なり其み給ふ故に齋王は[illegible]に其由は無て直に天[illegible]代御[illegible]に齋王も仕奉らせ[illegible]ふ 且有は事違へるにすを一と云れたれ共其は[illegible]御杖代と爲て皇女を奉らせ給ふ御事は天皇の[illegible]大殿內に在しゝ[illegible]仕奉らせ給ふ其[illegible]儀に依らせ給ふ事にて此より上に畏み奉らせ給ふ事は齋宮の事なり此にゝ少しも心得ぬ可ある也 ○御杖代止進[illegible]布御

命乎は上に齋内親王波依恒例氐三年齋止清麻波氐御杖代止定氐云々の結なり　因に云鈴屋大人説に齋内親王波の波てふ辭はい乎と有べき事なり齋内親王乎云々御杖代止定氐と續く語なり波にては協はず」と云れたれど元の任に波にて有なり齋王群行の時の御命に齋内親王波云々と有て此と同じきも乎波の意に見れば妨無し　御命は群行の時に天皇の中臣を喚て仰給へる御命にて已に引る江次第に又勅令奉進齋内親王者此依恒例三箇年間波齋清氐天照太神乃御杖代仁定奉進内親王曾中臣宜久吉久申氐奉止禮宜と有る其を受賜りて中臣の此詞を以皇太神の大前に申すなり　此は已に上に引る元慶五年御紀及両宮記抔にも見えたる所也其件々を見合すべし　○大中臣茂梓中取持氐は考に茂梓は嚴矛なり借矛は柄の中間を握持なるを以て神と君との御間を事宜しく執成し申に譬たる言なり舒明天皇御紀に亦大臣所遣群卿者從來如嚴矛嚴矛此云伊箇之保虛取中事而奏請人等也故能宜白叔父云々斯て中臣の神に仕るも神と君との中取よしなり」と云れたるは然る言なり但中臣を中津臣の義と爲られたるは非ず鈴屋大人の中取臣と云れたるぞ宜しき此は已に大祓詞大中臣の註に云りきかし　此御紀の語は先帝崩[illegible]の後に或は弘業（アマツヒツギ）を田村皇子に遺勅有と云ひ或は山背大兄王に有しと云時大臣蘇我臣より阿倍臣中臣連紀連等八人を山背大兄王の許に奉りて事を令啓たる時の御答の語なり　茂梓は今云杖の如き棒にて其製は橿木を以爲るなり此を思ふに伊箇之の伊は發語にて橿梓なり本末共に等しき故に其中間を取て傾ざる譬に云て嚴は其畏惶き形狀を以て當たる字なり茂は橿の莚を以造る爲に當たるなり其は武智麻呂公傳に武智麻呂義取茂榮故爲名と有に同じ　此事已に新年祭詞及御世の註及大祓詞天津金木の下にも云り凡て斯る杖梓の類には橿木を以製る事なる故に和名抄祠具に[illegible]久比加之橿犬加之橿岡之加之などとも云る皆其用ふる木名を取て號たる所なり此を以て茂梓の又[illegible]なる事をも思ひ明む可し　中取持氐云々は天皇の大御命を受賜りて皇太神の大前に申上るを云り中臣壽詞に與天地月日共照志明志御坐事仁本末不傾茂槍乃中執持氐奉仕留中臣祭主云々とあるも此と同じ事に用ひたり中臣本系帳に高天原初而皇神之御中皇御孫之御中執持伊賀志梓不傾本末中良布留人稱之中臣者と有る中良布留は神と君との御中間を執申と云義也其は鎌足公傳に其先出自天兒屋根命世掌天地之祭相和人神仍命其氏曰中臣と有を以て其義を知に足れり　然れば中臣の職は本末相傾す其中を執申に在り大祓詞に大中臣天津金木乎本打切末打斷氐云々天津菅曾乎本苅斷末苅切氐と云るも其中執持に似通ひたる言なり相和人神と云に深く心を留めて見べし

遷奉太神宮祝詞（ツツシマツルオホミカミノミヤヂノノリト）豐受宮進此

垂仁天皇御紀に廿五年三月丁亥朔丙申離天照太神

於豐耜入姬命一託二于倭姬命一爰倭姬命求下鎮二坐太神一之處上云々到二伊勢國一時天照太神誨二倭姬命一曰是神風伊勢國則常世之浪重浪歸國也傍國可怜國也欲レ居二是國一故隨二太神教一其祠立二於伊勢國一因興二齋宮于五十鈴川上一是謂二磯宮一則天照太神始自レ天降之處也と有て其大宮仕奉て鎮奉れりしは其翌廿六年丁巳九月なり其は一書に天皇以二倭姬命一爲二御杖一貢二奉於天照太神一云々然後隨二神誨一取二丁巳年冬十月甲子一遷二于伊勢國渡遇宮一と有にて著し但冬十月は傳の誤にて其實は秋九月なる可き者なり 谷川士淸說に冬十月當レ作二秋九月一谷川氏曰以二長曆一推レ之此年十月無二甲子一九月十七日當二甲子一至レ今內宮祭日也と云るは然る言なり然れば世記を始め其他の書共に冬十月甲子と爲るは御紀の誤を取れる者なり 此時の事を倭姬命世記に廿六年丁巳冬十月甲子奉レ遷二于天照太神於渡遇五十鈴河上一爾今歲倭姬命詔二大幡主命物部八十友諸人等一五十鈴原乃荒草木根苅掃比大石小石造平豆遠山近山乃大峽小峽爾立材乎齋部之齋斧乎以天伐採天本末乎波山祇爾奉レ祭豆中間乎持出來豆齋鉏乎以天齋柱立 一名天御柱 一名心御柱 高天原爾千木高知利下都磐根仁大宮柱廣敷立豆天照太神并荒魂宮和魂宮伴神等乎奉二鎮座一と所見たり 神名祕書には神宮神祇本記下は倭姬命世記等と有て此文有り神宮神祇本記は謂ゆる大同本記と聞えたり立材乎たる其本及御鎭座本紀寶基本記等には立並木と有り 偖此文大殿祭詞に似たるは由有る事なり其遷宮の事は齋部氏の預りて仕奉る所なるを以此のにも其を取れるなる可し伴神等乎の字ノ寶基本記に依て補へり然らは皇太神宮儀式帳別宮攝社條に倭姬內親王御世定祝と有が多在るを以て其字有る事著明さが故なり 此より後の御世々々の事は如何に有けむ正史に載られざれば如何に在けむ今知べからねども寶基本記に此を傳たれば今其に依の外無し 但此書は兩部習合家の手に成れる物にて卷中悉く妄說耳なり然れども其[illegible]を見に日本紀倭姬命世記及其他の古書をも抄誅せる者なれば下に擧る文の如き：然る古書に有けむを抄出せりと所見て兩部習合の臭氣も非ねば此は正しき傳なる可し種々の異說を云にこそは附會說(ヒキツケゴト)も出有め斯る紀年の事に迄も妄りに杜撰り出べくも非る可ければ今此に引つ斷る妄說を傳たる中にも撰分れば古書の遺文を存せる事全く皇太神の斯文を喪び給はざる所にて尊しとも辱しとも云む方無くなむ有ける 纏向日代宮十五歲九月十五日伊勢天照皇太神宮假殿遷宮事 奉レ渡二正體於假殿一 黑木板葺 同日夕奉レ遷二正體於寶殿一已終依二宣旨一充二用當國正稅官物等一也寶殿修補之間奉レ渡二於假殿一行幸道長九十五丈爾時伊己呂比命乙若子命大物忌大阿禮命奉レ頂二正體一諸內人及妻子等人垣立豆衣垣曳豆蓋刺羽等捧豆令二行幸一給者也と有る此に伊勢天照皇太神宮としも記せるは京に在し記錄を抄出しゝなめり例文荒木田遠祖奉仕次第に大貫連伊己呂比命天布多由岐命子景行天皇御世奉仕大阿禮命一名大荒命伊己呂比命子 同御代奉レ仕爲二物忌一と見え度會遠祖奉仕次第に乙若子命大若子命弟也景行成務仲哀三代奉仕と見えたり此時荒木

田度會二氏相並て皇太神宮に仕奉し間なれば宜に然ぞ有べき儀式帳御遷幸條には彌宜御正體を戴奉り宇治大内人左方の御を戴奉り大物忌父右方の御を戴奉れる中に此寶基本記に依る時は左方御は度會姓の仕奉る可き事なれども其は止由氣宮に附奉し故に其例の異れるなり（大貫連は沼木郷に依れるなる可し但其伊己呂比命は大見連命の子なり蓄刺羽等は後世めきたる物なれども神代紀に謂ゆる眞床覆衾即此なり刺羽は姓氏錄に爪工連神魂命男多久豆玉命之後也雄略天皇御世造二紫蓋爪一并奉レ飾二御座一仍賜二爪工連姓一と有を内山眞龍說に爪者爬略字也和名抄翳云レ波云々と云るは然る事にて此亦上古より有來る所の物なり但垂仁天皇廿六年丁巳より此景行天皇十五年乙酉迄凡八十九年に至る可し）仲哀天皇五歲三月仁德天皇十歲九月允恭天皇廿歲十月有二假殿遷幸事一と有て事實を記さず（景行天皇十五年乙酉より仲哀天皇五年丙子迄は凡百十二年其より仁德天皇十年壬午迄は凡百　十七年其より允恭天皇廿年辛未迄は凡百十年計になるなり）用明天皇即位元年丙午三月推古天皇廿一年八月孝德天皇即位三年九月皇太神宮假殿遷宮事など有る用明天皇即位元年より前にも有つらむを漏たるにや允恭天皇廿年より此迄百六十六年計にて餘に間遠き心ちす若くは雄略天皇廿二年戊午に止由氣宮の御鎮座の時など造替の事有つらむも知らず（度會宮は其より後にも繼體天皇十二年欽明天皇五年二度造替有に皇太神宮の造替其二無る可き理無ればなり但用明天皇元年丙午より推古天皇廿一年癸酉迄は廿七年計なり其より孝德天皇三年丁未迄は三十五年計になるなり天武天皇の二十年一度の造替は此等の年數思し合させ給へるなり）天武天皇朱雀三年乙酉九月十日右大臣宣奉レ勅伊勢二所太神宮御神寶物等差二勅使一被奉送畢宣旨狀偁二所太神之御遷宮事廿年一度應レ奉レ令二遷御一立爲二長例一也と有て此は雜事記の文なり此時より廿年に一度新宮を造改らるゝ御制なり（度會延佳神主頭書に云く按年代記云朱雀二年乙酉又和漢合運云白鳳十四年乙酉共以天武天皇十四年乙酉也年號有二兩說一但日本紀有二朱鳥一無二朱雀一若以二朱鳥一爲二朱雀一則白鳳十五年丙戌改元號二朱鳥一也乙酉非二白鳳一二年一又朱鳥之年間無二乙酉一是有二誤字一歟又按續日本紀云白鳳以來朱雀以前年代玄遠尋問難レ明云々然則白鳳以後有二朱雀一分明也但以二年代記一可レ作二朱雀一年乙酉一則三字誤也猶可二尋知一者也）持統天皇四年庚寅太神宮遷宮（東本宮地也）元明天皇和銅二年己酉太神宮遷宮（西宮地座）と有て此より廿年に當り造替の時々其宮地の東西に更々遷奉る事にて中今に至迄然り但其造替毎に宮地の東西に更る事は上世より有る事なり其は此次に天平十九年丁亥九月諸別宮遷宮事荒祭宮任二假殿造立之舊跡一奉レ遷二于東宮地一也于時本宮西宮地座豊受宮御鎮座以往荒祭宮與二高宮一二所御鎮座以二中間一爲二假殿之地一故也神宮法更不レ改二舊跡一也と有を以思ふ可し○度會宮御遷宮の事は儀式帳に大長谷天皇の大御世に丹波國より令行幸奉て鎮奉れる由なれども其年紀詳ならず倭姫命世記に泊瀨朝倉宮大泊瀨稚武天皇即位廿一年丁巳冬十月御託宣有し趣を載て次に故率二手置帆負彦狹知

二神之裔以齋斧齋鉏等始採山材搆立寶殿而明年戊午秋七月七日以大佐佐命天從丹波國余佐郡眞井原志天奉迎止由氣皇太神度會山田原乃下都磐根仁大宮柱廣敷立豆高天原仁千木高知豆鎭定坐と所見たり上代本記御鎭座本緣等にも此事を記せるに明年戊午秋七月七日以大佐佐命奉布理留云々次遷幸度會沼木平尾與于行宮天三箇月坐云々戊午秋九月望從離宮遷幸山田原之新宮と見え又廿一年冬十月の御諱宜の日を朔と爲るなど決めて正しき古傳に依れりと聞ゆるなり 雜事記にも此傳有り皇太神宮天降御在之後四百八十四年。然後從天皇即位廿二年戊午七月七日豐受神宮乎波被奉迎也と有る四百八十四年は四百八十餘年と有しを書誤れるならむ垂仁天皇廿六年丁巳より雄略天皇廿一年丁巳迄四百八十一年に成れゝばなり垂仁天皇廿五年倭姫命に託給へるより御鎭座有し戊午歳迄を計へても四百八十三年なり 此より後の事は實基本記に繼體天皇即位十二年戊戌九月十一日等由氣皇太神宮殿舍御門等朽損事依宣旨造進假殿一宇十一日以寅剋奉遷御形於假殿之後本殿修補終夕戊剋奉遷寶殿神主飛鳥小事物忌諸大小内人及妻子等供奉以當國調庸及田租等充造假殿及寶殿等者也と有は始ての造替にて此時より當國の調庸田租等を以充行はるゝの御定有て内宮外宮の神御の物相別れたりと聞えたり 雄略天皇廿二年戊午より今年迄凡四十一年に至る可し神主飛鳥小事は例文度會遠祖奉仕次第に神主飛鳥乙乃古命二男彌豐大に御世奉仕神主小事乙乃古命四男欽明天皇御代奉仕と見ゆ偕乙乃古命迄は某命と有を其子飛鳥より以下は神主某と有るを以見に此時ハ兩宮の諸事共各相別れたるなり

欽明天皇即位五年甲子九月豐受宮假殿宮子内親王供奉と有る此内親王の三字は削去て宜し孝德天皇即位三年八月豐受太神宮假殿遷宮事天武天皇元年壬申十月豐受太神宮破損之間始宮司大朽連馬養蒙宣旨當國司差遣神戸百姓等以神税正税等造假殿奉遷正體修補本殿已終と有は此迄當國の神税及調庸を以て神人の修補奉れる古例なりしを孝德天皇御世に大宮司を任れたるより其造替遷宮以下の事は大宮司の職掌と成れる由なり此は度會宮耳ならず皇太神宮に於ても同し事なり天武天皇御世に宣旨有て二所太神之御遷宮事廿年一度應奉令遷御立爲長例也と有て此より以來廿年に一度造替有る事御世々々の御紀に載られたるが如し持統天皇六年壬辰豐受太神宮遷宮 西宮地座 元明天皇和銅四年豐受宮遷宮 東本宮地座也 と有て此より以降東西の宮地に更に遷奉る事已に皇太神宮條に云るが如し 又天平寶字元年丁丑豐受宮別宮高宮遷宮と有り此を初見に別宮なども其より以往の御世々々には破損るに隨て修補奉られしなり ○皇太神宮御造營の御事は太神宮式に凡太神宮廿年一度造替正殿寶殿及外幣殿

度會宮及別宮餘社造ニ神殿之年限亦准レ此皆採ニ新材ヲ構造 自外諸院 新舊通用宮地定置二處コレ限中造替有は天武天皇御世に定させ給へる事上に云るが如し雜事記に朱雀三年以往之例二所太神宮殿舎御門御垣等宮司相待破損之時ニ奉ニ修補ニ之例也而依ニ件宮旨ニ定ニ遷宮之年限ニ又外院殿舎御倉四面重重御垣等所ニ被ニ造加ニ也と有り此文實ニ本記にも出たり 又同式に凡神宮諸社及齋內親王參ニ神宮ニ時宮舍者太神宮司並使ニ神戸百姓修作破損ニ理ニ不ニ得ニ更致ニ損壞ニと有り但此は其ノ宮の時の事には非ず常の事なり 凡太神宮年限滿應ニ修造ニ者 遣レ使 使并判官主典各一人但使判官任ニ中臣忌部兩氏ニ 孟ニ始作之神宮七院社十二處 月讀社熊社高相社鴨社田乃家社蚊野社湯田社月夜見社草名伎社大間社須麻漏賣社佐那社田社 其使供給充ニ用神稅ニ丁匠役封戸人夫糧食便用ニ神稅ニ若神稅不レ足用ニ正稅ニ自餘諸社宮司修理と有る神宮七院は太神宮一院荒祭宮一院伊佐奈岐宮月讀宮各一院瀧原宮同並宮各一院伊雜宮度會宮多賀宮各一院なり其社十二處は皇太神宮儀式帳に小朝熊神社一處薗相神社一處鴨社一處田邊神社一處蚊野社一處湯田社一處已上六箇處社造神宮使造作奉也と見え止由氣宮儀式帳に月讀神社草奈支神社大間國生神社右三所神社造宮使造奉と見え其餘三處は神名式に多氣郡に出たる社々なり 續史に延暦十八年五月辛未遣ニ神祇大祐正六位上大中臣朝臣弟枚ニ改ニ作伊勢太神宮正殿ニと有り 此事は皇太神宮儀式帳に

新宮造奉時行事幷用物事常限二十箇年一度新宮遷奉造宮使長官一人次官一人判官一人主典二人木工長上一人番上工卅人參入來即取ニ吉日ニ二所太神宮拜奉即發役夫伊勢美濃尾張參河遠江等五國國別國司一人郡司一人率ニ役夫ニ參向造奉用物九種 官庫之物請ニ造宮使ニ調行 鐵十廷鍬五口鋤五口五色薄絁五丈五尺綿二疋木綿十六斤麻十六斤已上造宮使受ニ官庫物ニ用ニ新造正殿地鎮料幷山口祭木本祭等ニ紺染・幕布四段 官庫之物 別正殿蘿隱料庸布百四十二端 官庫之物 此正殿地築平禰宜內人等妻子等幷所々祭及內人物忌工等明衣料但自餘雜物等者太神宮司所ニ充奉ニ者雜物等造宮使受散用行と見えたり其造宮使の事は後紀に延暦十年八月太神宮炎上の時に遣レ使修ニ造之ニと有て其使の事詳ならざるを光孝天皇實錄に仁和元年九月廿一日辛丑勅遣ニ散位從六位上大中臣朝臣罕雄判官一人主典一人ニ造ニ伊勢太神宮ニ云々と有り 止由氣宮儀式帳にも新宮奉レ造時行事幷用物事限ニ常廿箇年ニ一度遷奉新宮造レ之造宮使罷來時取吉日ニ二所太神宮拜奉次使之充年用物玖種官庫之物請ニ造宮使ニ所レ行鐵六廷鍬三口鋤三口五色薄絁三丈五尺綿二疋木綿拾陸斤大麻十六斤大右物等新造正殿地鎮并山口祭木本祭等料紺幕布肆端官庫之物右正殿隱料庸布陸段右正殿地築平禰宜內人等妻子等并人并所々祭及內人物忌工等明衣料但自餘雜物等者太神宮司所ニ宛行ニと有て同じきは凡ての事共皇太神宮に准ふが故也其故に此より次々の條々にも太神宮式は兩宮を合せて書れたれば其を本に取り皇太神宮の例を其次に擧け止由氣宮のは細注の所に記し加ふる者也 此は敢て兩宮の尊卑を立るに

非す其此其行ふ時日こそ異れ其事の一なるを以なり已に太神宮式に三時祭などせるに十六日度會宮の神嘗祭にして十七日參ニ太神宮ニ其祭一同ニ度會宮になどと有を思ふ可し借伊勢美濃尾張參河遠江五國ノ夫ノ事に三代實錄元慶八年三月十一日戊に先レ是遣レ使伊賀ニ遣伊勢太神宮ニ是日下知伊賀伊勢尾張參河遠江等國司ニ曰云々暫停ニ神宮ニ之工夫ヨと有て此ニ以上三物度會宮は美濃國無して伊賀國有り山口神祭鐵人像鏡各卅枚年以下祭准此長刀子卅枚手斧一柄鎌一張五色薄絁各五尺木綿麻各二斤米酒各一斗堅魚鰒各二斤雜腊一斗雜海菜二斗鹽二升雞二翼雞一雞卵十枚陶器土器各五十口內人等明衣料庸布五段度會宮減ニ一段ニと有る此を儀式帳に鐵人形四十口鏡四十面鉾四十柄大刀二十柄忌手斧一柄忌鎌一柄小刀一柄五色薄絁五尺木綿二斤麻二斤庸布五端宮守治大內人一人山向物忌一人父一人御巫內人一人忌鍛冶內人一人已上人別一端已上授ニ宮庫之物ニ即金物造ニ忌鍛冶內人ニ酒一斗米一斗堅魚二斤鰒二斤雜魚一斗雜海藻二斗鹽二斗雞二羽雞一雞卵十九陶器五十口土御器五十口已上物以ニ神税ニ太神宮司所ニ充奉ニ右祭造宮使忌部宿禰寄刀申畢山向物忌以ニ忌鎌ニ且草木苅初然以後役夫等草苅木切所々山野散遺然宮造畢時返祭料物如レ始と所見たり斯れば大宮造仕奉て後も始の如く其返祭は有なりけり度會宮のは儀に次ニ吉日ニ山口神祭用物進行事如レ左云々已上宮守之物云々已上以ニ神税ニ太神宮司所ニ充奉ニ右件物祭奉畢時禰宜內人等告乃申畢卽宮造物忌以ニ忌鎌ニ且草木苅始然以後諸役夫等草苅木切所々山野散遺然宮造畢時返祭ニ物ニレ始と見えて同じことなり右の云々と書るは其祭の用物なるが式文と同じければ今記さず下此に准ふ可し能々合せ見る可し借上に引る式文に孟冬始作之と云ひ此に取ニ吉日ニと云るは外宮雜事記ニ年山口祭記に載る官符に左弁官下ニ造伊勢豐受太神宮使ニ云々在山口並木本祭等日時事ニ日祭日時十月十五日辛酉時申二點木本祭日時日辛酉時戌二點右得ニ造宮使神祇權大副大中臣朝臣去月八日奏状ニ件日時任ニ先例ニ以ニ勘下ニ謹請ニ處分ニ者權中納言藤原朝臣宣奉レ勅宜任ニ件日時ニ令ニ仕ニ者使宜承知依レ宣行レ之嘉暦三年七月廿日右少史中原朝臣在判中辨藤原朝臣在判と有て顯て朝廷より日時を定下る所なり採ニ正殿心柱ニ祭鐵人像鏡各卅枚長刀子卅枚鉾四柄度會宮減ニ三柄ニ加ニ手斧ニ一柄ニ鎌二張小刀子一枚鉇一枚五色薄絁各五尺木綿麻各二斤米酒各一斗堅魚鰒各二斤雜腊一斗雜海菜二斗鹽二升雞二翼雞卵十枚陶器土器各廿口內人等明衣料庸布四段使忌部明衣料一段右造宮使忌部自奉ニ內人並役夫等ニ就ニ山木本ニ祭レ之と有る此を儀式帳に次取ニ吉日ニ爲ニ正殿心柱造奉ニ率ニ宇治大內人一人諸內人等斤人等ニ入ニ杣木本ニ祭用物注レ左其柱名ニ號忌柱ニ鐵人形四十口鐵鏡四十面鐵鉾四十柄太刀廿柄忌鍬四柄立削一柄忌奈太一柄忌鎌一柄小刀一柄鉇一柄已上物造ニ忌鍛冶內人ニ云々右祭告刀申造宮使忌部宿禰其忌柱造奉畢自レ杣出前追運來置ニ正殿地ニ也と見えたり此にては立削忌奈太の二種有り式文に漏たる所なり此は謂ゆる心御柱を採奉る祭なり大殿祭詞に今奧山乃大峽小峽爾立留木乎齋部能齋斧乎以伐採氐本末波山神爾祭氐中間乎持出來氐齋鉏乎以弖齋柱立氐

云々と有は此を云なり神宮朝廷相分れざりし古の狀仰ぐ可し尊む可し　止由氣宮儀式帳にも次卜ニ吉日一齋ニ正殿心柱造奉ニ宇ニ大内人一人内人等戸人夫宮ニ奉入ニ柚木本祭奉用物如レ左其注名目ニ忌注ニ云々如レ之と有て此にも立削鋒一柄有り式文の鋒を此には小鋒と云ひ鐵柄と此には奈良鋤一柄鎌一柄と記せり倩ニ太神宮に二月例の中に山口祭同木本祭の事有は此櫟にて以御田佃る湯鍬の柄を山に採に就て祭る事なり古より山材に採にも如此き行事共有て混りならざりしは甚々尊き御事なり此宮の故山新年山口祭詞大殿祭詞の下に委しく注れば見合せて曉る可し　鎮　祭宮地一除ニ明衣及鍬一宮鎮造レ此但　鐵人像以下小刀子以上同ニ六柱祭一鍬二口五色薄絁各一丈木綿各二斤酒二斗米二斗五升雜腊二斗五升堅魚鰒各三斤雜海菜二斗五升鹽二升雞卵廿枚陶器土器各廿口禰宜内人物忌等五人明衣料絹二疋度會宮海ニ一疋　築ニ平正殿地一禰宜内人等八十人明衣料庸布八十段度會宮減レ半　太神宮所攝宮地鎮料鐵人像鏡鉾長刀子各卅枚鑄鐘鎌各四柄鍬八口木綿麻各四斤五色薄絁各二丈米酒腊各二斗堅魚鰒各四斤海菜四斗鹽四升雞八翼卵卅枚度會宮等分　内人等十三人明衣料庸布十三段度會宮所攝宮地鎮料鐵人像鏡鉾長刀子各十枚鈔鎌刀子各一枚鍬二口木綿各一斤五色薄絁各五尺米酒腊各五升堅魚鰒各一斤海菜一斗鹽一斗雞二翼雞卵十枚陶器土器各十口内人等三人明衣料庸布三段右鎮祭畢地祭物忌清ニ掃其地一掘ニ心柱穴一禰宜竪レ柱其築ニ平殿地一之日以ニ紺布帳一奉レ翳ニ神殿一勿レ令ニ工

夫臨看一と有は臨時祭式に鎮ニ新宮地一祭鎮ニ御在所一祭鎮ニ土公一祭と見えたり又齋宮式に鎮ニ野宮地一祭齋レ此後鎮と見えたる等同じ事にて神宮は更にも云ず皇大宮及齋宮を破修るにも此祭有る事なり文武天皇御紀に大寶二年三月己卯鎮ニ大安殿一大祓天皇御ニ新宮正殿一齋戒總頒ニ幣帛於畿内及七道諸社一と有は新宮造畢て後に其宮を祓清させ給へるなれども鎮ニ大安殿一と有るは此の例なり此後の御紀にも斯る事往々所見たり太神宮所攝宮地鎮の事は此下に儀式帳を引て云り　其鎮　祭宮地一と築ニ平殿地一と同日に非ず皇太神宮儀式帳に次取ニ吉日一宮地鎮謝之用物並行事注レ左と有て右の用物を載せ右祭告刀申地祭物忌父仕奉所レ侍造宮使中臣忌部然祭奉レ仕畢時地祭物忌以ニ忌鍬一鎮ニ宮地草苅始次以ニ忌鋤一且宮地穿始奉禰宜大物忌波忌柱立始然後諸役夫等柱竪奉と有て此は心御柱を竪る祭也倩其祭神は宮處神矢乃波々木神に坐事六月々次祭條興玉神の注に云るが如し倩神宮にて心御柱は御正體と共に同等しく齋祀奉る事にて此上無き神物なり實基本記に廿年一度新宮及假殿造進之節神主部物忌等奉レ立ニ忌柱一任ニ儀式一勤ニ仕之一其舊柱則宮地之内人無ニ往反一清淨之靈處奉レ藏ニ置之一崇敬如ニ神在一愼無ニ顯露一矣心御柱一名忌柱一名天御柱一名天御量柱是則一氣之起天地之形陰陽之原萬物之體也故皇帝之命國家之

固宮物代千秋萬歳無動下都磐根大宮柱廣敷立稱辭定奉ㇾ有は言痛き云狀なれども決て古傳也其由大殿祭齋柱條に注りき 並（止由氣宮儀式帳にも次取ニ吉日ニ宮造貢財之用物事如ㇾ云々其次吉日波當栽物忌中祭供奉所に書は宮使中臣忌部…終仕奉事時宮材物忌以ニ…一日宮地草苅始次以ニ淨…二見宮 宮始奉の宮大內に波忌柱立始奉次壽言トモ宮造柱）奉と有て皇太神宮の儀式にも同に侍るべし 其築 平殿（地）には儀式帳に 次取ニ吉日ニ正殿地築平料用物並行事注ㇾ左庸布八十端（官庫之物）給禰宜內人並妻子總八十人（男四十人女四十人）爾時役夫卜合地土正殿地持運置禰宜內人等築平詠儛然後日與ㇾ幕正殿隱奉と有て此は卜合たる地の土を取て大宮（地）を築平す祭なり（止由氣宮儀式帳に次取ニ吉日ニ正殿地築平料物并行事如ㇾ左庸布一段…禰宜內人妻子等總八十人男卌人女卌人爾時役夫取ニ卜合地土ニ正殿地持運禰宜內人等…然後日暮ㇾ幕正殿隱奉と見えたり人數は皇太神宮の半分也）造ニ船代ニ祭鐵人像鏡鉾各卌枚鑿二柄鐇二張鉇二枚長刀子十枚鎌二張（度會宮減ニ一張ニ）鉾手鉾各二柄錐二枚（度會宮除ㇾ之）小刀子二枚鉾二柄五色薄絁各五尺木綿麻各二斤酒米各二斗堅魚鰒各二斤雜魚一斗雜海藻二斗鹽二升雞四翼鶏卵卌枚陶器土器各卌口（度會宮雞以下並減ㇾ半）內人等明衣料庸布六段（度會宮減ニ二段）庭作工明衣料二段と見えたる此は御船代を造奉る山材を採に就て山口祭木本祭を爲る料なり次取ニ吉日ニ爲ㇾ造ニ御船代木ニ率ニ宇治大內人一人諸內人戶人夫等ㇾ杣山木本祭用物並行事注ㇾ左云々右如ㇾ之祭

告刀申御巫內人畢時山向物忌先以ニ忌斧ニ巳木本切始然後神服織神麻續內人戶人並諸役夫等切造奉御船代料材自ㇾ杣出時前追運ニ進正殿（地）ニ之ニと有り此杣山木本祭と云事は山口木本祭と云事なり其は止由氣宮儀式帳ニは此を二條に分て次取ニ吉日ニ爲ㇾ造ニ御船代木ニ入ㇾ杣山口祭用物並行事如ㇾ左云々祭畢告刀申御巫內人と有て其次に木本祭用物並行事如ㇾ左云々如ㇾ之祭告刀申御巫內人畢時營栽物忌先以ニ小鉾ニ巳木本切始然後役夫等切造と有を以て明らけし（但山口祭木本祭とこそは別れたれ其は同日同時同所にて有事故に太神宮儀式帳には此を分たざるなり但其次第に南宮共に二月內に山口祭を先行ひ然後に木本にて行ふなり）造備雜物太神宮船代三具（一具正宮長七尺三寸內…尺高二尺一寸內深一尺四寸二具相殿料長七尺六寸內七尺七寸廣二尺五寸內二尺）樋代一具（正宮料高二尺一寸廣一尺五寸內深一尺…）度會宮船代四具（一具正宮長七尺…五寸內五尺八寸廣…尺…）樋代一具（正官…徑高各一尺五寸）太神宮相琴一面爐臺（五基）納ㇾ鎰韓櫃一合（具ㇾ鎰）幣案二脚床二脚（一太神宮…二相殿…）天井・蓋短床二脚（度會宮亦同但相殿床一脚）と有は右の御船代を造奉むとて爲て山口木本の二祭を執行ひ然して此を造奉るなり皇太神宮儀式帳此に合り止由氣宮儀式帳に（造奉物）正體御船代一具（長六尺廣二尺四寸）御坐一基（高一尺…七寸）相殿御船代貳具

長四尺廣一尺五寸高宮御船代一具長四尺廣一尺五寸と有て寸法の違有は式文の頭に改られたるなる可し御坐一基と有は御樋代の事なり偖御船代御樋代と申す其御船代は家神を居船神と申す如く船とは御居の謂にて儀式帳別宮條に見えたる御床有て其上に置きて其御坐の御樋代を載る料の器なり御船に形象れる由には非ず代は苗代などの代にて其安置る所を云り儀式帳御装束條に御床装束四種樋代御装束六種と有て御船代御装束と云事の無を以て御船代とは御床の事なるを暁る可し然れば御樋と申すも御體の御坐す代と云義なり御貢を口調など云むが如し別に深き仔細を云者は悉く古意に非ず然れば寶基本記などの如く妄説を多く記せる書にも御船代御樋代神寶藏神代制作形器也と耳書るは理屈の附會べき方無りしが故なり　太神宮式に右の高宮の御船代を記されたるに荒祭宮の御船代を載ざるは不審しき事ながら儀式帳にも右に引る如く高宮のは載て荒祭宮のは載ず、然らば荒祭宮多賀宮と云る次序にも違ひて事略(コトツキ)たる状なるを紛熱思ふに荒祭宮正殿装束條に御床一具と有や此ならむ　皇太神宮儀式帳に右の事共を記し終めて宮造奉畢時正殿東西妻御形穿初仕奉地祭物忌父仕奉者物忌父遣レ故時者禰宜仕奉と見えたり此事止由氣宮の帳にも正殿造奉時東西妻鏡形穿奉始營裁物忌父若其人遣レ故時者禰宜穿始奉と見ゆ此に鏡形と有を以其形状を思ふ可し又同帳に宮造奉畢次後返祭並山口祭仕奉用物如レ始と有は右の山口木本祭以下の事を再被行るを云ふ又然天平賀宮柱諸木本別置員貳仟餘口造ニ多氣郡宇貳郷人夫等ニと見えたるが皇太神宮の帳には此事見えず然れども雜例集に載る仁安四年四月日飯野郡司に下せる司符に可下早任ニ先例ニ進ゅ上太神宮御遷宮新天平賀造進宍祭物上事云々と有は皇太神宮の事と通えたるが此は猶正殿の下に別置には非ず爲て鎭祭宮地及築ニ平殿地ニ等の祭に被用る土器の事なる可し然れば此は止由氣宮の事耳なりと見えたり　倭姫命世記に采女忍比賣我作之天平瓮八十枚持而伊波比戸爾仕奉支と有は供物を盛料なり此を谷川士清が神武天皇御紀の通證に引るには大同本記に曰と記せり又世記度會宮御鎭座條に又随ニ天神之訓ニ土師物忌取ニ宇仁之波邇ニ造ニ天平瓮八十枚ニ天神地祇ニ祭諸宮ニと有も神饌を盛る器なり上代本記には右の世記と同文にて天平賀随ニ天神之教ニ土師物忌父取ニ宇仁之波邇ニ造ニ天平瓮ニ敬ニ祭諸神ニ宮別八十口注本並諸木本堅之云々と見えたり此亦止由氣宮の事なり然るを寶基本記に右の世記の傳を載て天照太神宮止由氣太神宮別八百口荒祭高宮月夜見宮伊佐波宮瀧原宮齋内親王坐營宮々別八十口進レ之と有るは件太神宮及諸宮にも有る由なり又雜例集に天平賀破損例を擧たるも皇太神宮の事ならず　○皇太神宮諸院の事儀式帳に云く大宮一院正殿一區長三丈六尺廣一丈八尺高一丈一尺御橋一枚長六尺廣五尺高欄四方廻高三尺廣二尺五寸鎊金華形並戸具於居坩殿扉金鏁一具鎊金御鎰一句已上從ニ朝廷官庫ニ奉レ入　○今云此は太神宮式に修ニ錺神宮ニ調度云々と見えたる種々にて營造神寶並装束使

の供奉る物共を云ふ其外は造宮上[illegible]一枚長二丈八尺弘八寸厚四寸號ニ稱
使の供奉る所なり下此に准へ
比木ニ針覆大坩堅魚木十枚長各七尺一尺七寸 村木判レ端以ニ金
錺ニ○今云此ハ正殿の御事なり 寳殿ニ宇長各二丈一尺弘各一丈[illegible]尺 並上ニ博風[illegible]二具
打立目塞四枚戸具鎰ニ[illegible]六[illegible]立二枚引手ニ[illegible]拾四枚戸坏[illegible]四隻[illegible] 臥ニ堅魚木
各八枚ニ瑞垣一重長[illegible]卅九丈高一丈 宿衛[illegible]四間長各二丈 御門十一間
於[illegible]御門三間長各二丈五尺弘一丈高九尺 不[illegible]御門八間長各一丈三尺高九尺 玉垣
三重一玉垣長十四丈五十一丈なる可し○今云廻二玉垣廻六十丈三玉垣二廻百[illegible]丈 齋內親
王侍殿一間長四丈弘二丈六尺高一丈一尺 蕃垣一重長三丈 女[illegible]侍殿長[illegible]丈弘一丈七尺
高一丈 板垣廻長一百卅八丈六尺○今云以上大宮一[illegible]の內に在る所一
一尺なり合の三の玉垣に各於御門有り其一なる[illegible]門一
な玉垣御門一なる蕃垣[illegible]門と云り[illegible]くは內玉垣[illegible]門外玉垣[illegible]門と云り
齋內親王侍殿女[illegible]侍殿などは其間に在しなり但此の[illegible]垣一重の下に
御門一間を脫せり 齋院一院殿一宇長一丈五尺弘一丈二尺高八尺 玉垣一重廻長十六丈二尺
御倉一院倉四宇長各一丈八尺弘各一丈五尺高一丈 臥ニ堅魚木ニ各六枚玉垣
廻長卅八丈 御輿宿殿一間長三丈弘一丈四尺高九尺 御厩一間長四丈弘二丈高九尺○今云右の御倉
の事を止由氣宮儀には一宇納ニ正殿寳殿御鎰ニ一宇納ニ[illegible]神田苅稻ニ[illegible]など見ゆ 御厩一[illegible]隻[illegible]
殿ニ院九丈殿一間長十丈弘二丈高一丈一尺 五丈殿一間長[illegible]丈弘[illegible]尺高一丈一尺 直會
四丈殿一間長四丈弘一丈六尺高九尺 以上皆ニ檜皮ニ 御門一間長[illegible]丈弘一丈三尺 齋內親
一尺高九尺 防往籬一重[illegible]廻六十丈○今云止由氣宮儀には[illegible]倉所と云ふ[illegible]門を直會[illegible]門とも云り
王御膳一院屋四間長各二丈弘一丈高[illegible]尺 防往籬一重[illegible]廻二十四丈○今云止由氣宮儀に[illegible]
膳殿御炊殿[illegible]垣等の事見ゆ 御酒殿一院酒殿一間長四丈弘一丈七尺高[illegible]八尺[illegible]一重 務所廳
一間長三丈弘一丈七尺高一丈 倉二宇長各一丈八尺弘一丈[illegible]尺高一丈 大炊屋一間長二丈弘一丈

高七尺 防往籬長[illegible]四丈○今云止由氣宮儀には倉二宇を一宇は神酒並御贄等類ニ一宇納ニ[illegible]器並米鹽等類ニと有り大炊屋は
同儀に齋火炊屋と[illegible]大[illegible]屋と間有るに見ゆ 齋內親王川原殿一院正殿一區長八丈弘一丈
七尺高一丈檜皮葺 御裝束殿一間長二丈弘一丈高八尺 御輿宿殿一間長二丈弘一丈高八尺
御厠一間長一丈弘八尺高七尺 防往籬一重長廻四十丈 御膳宿一院殿二間
長各二丈弘一丈高八尺 廻防往籬一重長廻四十丈 直會院防往籬一重北長六十三丈○今
云此は[illegible]以下は止由氣宮に[illegible]き所なり然るは[illegible]宮にては[illegible]宮より[illegible]き故に[illegible]より直に參給ふ故なり 禰宜齋館一
院齋殿一間長三丈弘二丈六尺高九尺 炊屋一間[illegible]屋一間大炊屋一間並長二丈六尺弘一丈二尺高八
尺 倉一宇長一丈八尺弘一丈尺高一丈 廚一間長二丈弘一丈高八尺 厠一間長二丈弘一丈五尺高一丈
丈 防往籬一重長廻[illegible]十丈 宇治大內人齋館一院齋殿一間長二丈弘一丈
一丈高八尺 忌火炊屋一間長二丈弘九尺高八尺 廚屋一間長二丈弘一丈高八尺 防往籬
一重長廻卌丈 右禰宜幷宇治大內人二人常ニ食ニ忌火物ニ不レ
食ニ他火物ニ○今云禰宜[illegible]掌条に忌火[illegible]食を見目聞耳言辭齋敬宮內行レ事云々宇治大內人條にも忌火飯食忌慎云々と
有り 大內人二人宿館一院齋侍屋一間長各四丈弘各一丈六尺高八尺五寸 廚大
炊屋二間長各二丈弘一丈三尺高八尺 防往籬一重長廻卌丈 右二人大內人忌
火物不レ食但齋御供奉與ニ宇治大內人ニ同○今云內人二人[illegible]條に忌
[illegible]火を[illegible]しと雖も其[illegible]大[illegible]人の間なり 物忌幷小內人宿館五院大忌齋館
一間長二丈弘九尺高八尺 齋火炊屋一間長二丈弘九尺高八尺 廚屋一間長二丈弘九尺高八尺
尺 大炊屋一間長二丈弘九尺高八尺 宮守物忌齋館屋一間長二丈弘九尺高八尺
齋火炊屋一間長二丈弘九尺高八尺 地祭物忌齋館屋一間長二丈弘九尺高八尺
齋火炊屋一間長二丈弘九尺高八尺 荒祭物忌齋館屋一間長二丈弘九尺高八尺

齋火炊屋一間（長二丈弘一丈尺高八尺）已上四人常食ニ忌火物ヲ供奉諸物忌小内人常宿齋館屋一十二間五間（長各三丈弘一丈二尺高八尺）七間（長各三丈弘一丈高八尺）防往籬廻一重（長廻七十五丈）右清酒作物忌以下御巫内人以上齋館院食但齋敬供奉與ニ大内人ニ同と見えたり

○皇太神宮別宮の事儀式帳に云く管神宮肆院行事造奉荒祭宮一院（在ニ太神宮以北ニ相去廿四丈）稱ニ太神荒魂宮ニ（御形鏡坐）正殿一區（長三丈一尺弘二丈一尺五寸高一丈一尺）瑞垣一重（長廻十六丈高一丈一尺）御門一間（長一丈弘七尺高九尺）宿衛屋二間（長各一丈二尺弘一丈高七尺）月讀宮一院（在ニ太神宮以北ニ相去三里）正殿四區之中三間（長各一丈七尺弘一丈高八尺）一間（長八尺弘六尺高六尺）此一稱ニ伊弉諾尊ニ次稱ニ伊弉冉尊ニ已上奈良朝廷御世定祝次稱ニ月讀命ニ御形馬乘男形著紫御衣金作帶ニ大刀ニ佩レ之次稱ニ荒魂ニ已上内人物忌定仕奉御床四具御倉一宇（長一丈六尺弘一丈四尺高八尺）玉垣四重（長廻卅二丈）御門二間（弘七尺高九尺）伊雑宮一院（在ニ志摩國答志郡伊雑村ニ、神宮相去八十三里、）稱ニ天照太神遙宮ニ正殿一區（長一丈五尺弘一丈二尺高八尺）御床一具瑞垣一重（長八尺）御門一間（長七尺高九尺）玉垣一重（長十二丈高九尺）御門一間（高九尺弘八尺）幣帛殿一間（長二丈四尺弘一丈六尺高八尺）御倉一宇（長一丈三尺弘一丈一尺高八尺）瀧原宮一院（伊勢志摩兩國堺大山中在太神宮以西相去九十二里）稱ニ天照太神遙宮ニ（御形鏡坐）正殿一區（長一丈五尺弘一丈一尺高八尺）御船殿一宇（長一丈五尺弘四尺高六尺）御床一具（長八尺弘四尺厚一寸半）瑞垣一重（長廻十二丈高一丈）御門一間（長八尺高一丈）玉垣一重（長廻廿丈高九尺）御倉一宇（長一丈一尺弘九尺高八尺）並宮一院正殿一區（長一丈五尺弘一丈一尺高八尺）御床一具（長八尺弘四尺厚一寸半）瑞垣一重（長廻十二丈高一丈）御門一間（長八尺高一丈）と見えたり此別宮儀式帳にては四所なれども延喜式にては五所なり其は月讀宮と伊佐奈岐宮と支別れたる故なり（尙後には七所別宮と成れる事已に六月月次祭の下に注るが如し然れども此は延暦儀式帳と延喜太神宮式とを合せて云所なり下此に準ふ可し）又同帳に鎮祭荒祭月讀瀧原伊雑四宮地用物幷行事注レ左云々已上以ニ神税ニ太神宮司所ニ宛奉ニ又金物作ニ忌鍛冶内人ニ給ニ官庫庸布一段明衣料ニ其祭告刀申ニ内人ニ然後以ニ物忌ニ令ニ地穿始ニ後返鎮如レ始と見えたり此は已に鎮祭宮地條に引る太神宮所攝宮地鎮料云々と有る其なるが延暦の昔四所別宮なりしを延喜の今五所別宮と成ても其員數に異無きは伊佐奈岐宮月讀宮と宮號こそは別たれたりけれ總ての物事猶古の如く一に被行るが故なり○皇太神宮所攝の社の事儀式帳に管ニ度會郡ニ神社行事合四十處之中（官帳社廿五處未官帳社十五處）と有が中に造宮使の造奉れるは六處なり其は小朝熊神社一處稱神櫛玉命兒大歳兒櫻大刀自（形石坐）又苔虫神（形石坐）又大山罪命子朝熊水神（形石坐）正殿一區（長一丈四尺弘一丈一尺高八尺）御床一具玉垣二重（長七丈各高一丈）御門二間（高各一丈弘各八尺）御倉一宇（長一丈三尺弘一丈三尺高八尺）前一處（長一丈二尺弘五尺）坐地八町四至る（東大山南公田西宇治川北御竈島○此神の委しくは上なる六月々次祭大歳神祭の下に云るが如し又は佐美長神）

注と云も此と同神にて志摩國に坐なり又今思ひ出たり大年神は須佐之男命大山津見神の御女神大市比賣命に娶坐て生坐る所なり然れば神[illegible]玉命と申は須佐之男大神の御事なりけり命御名を[illegible]御氣野命と申せるに據有て思ゆ　薗相神社一處稱大水上兒會奈々比古命形石坐　同内親王定祝正殿一區長九尺弘七尺五寸高四尺六寸　玉垣一重長八尺　坐地十町四至東川南西大山北公田○此は園[illegible]の神には坐さるか上なるは農作の神に坐し此なるは園業神にて祈年に謂ゆる御縣神の類なり大忌祭に御縣山口の神々の共に被祭給へるを思ふ可し大水上神と申すも山口神の御族に坐せばなり此社神名秘書に元々集に在ニ沼木郷積良村ニと云り末ニ官帳ニ十五座の中に津布良神社大水神兒津布良比古布良比賣命形無と有は此積良村に在す神と通ゆ　鴨社一處稱ニ大水上兒石己呂別命ニ坐形石　同内親王定祝正殿二區各一丈弘九尺高五尺　玉垣二重長九丈二尺　坐地五町四至　東南西山北公田○今云式文にては一處にて其社二處なり神名秘書に大水神兒前社在ニ城田郷山上村ニ在ニ同郷狩田村ニと見ゆ末ニ官帳入ニ十五座の中に鴨下神社一處大水上兒石己呂和居鴨比賣命形石右神社太神宮造奉使造奉而祝[illegible]を有は此二處の内なり倭石己呂和居命は陸奥國白河郡石部々吉和氣神社此を白河[illegible]事考と云る其國の事書る物に所祭高彦[illegible]命と有と[illegible]社と申は何方にても其神なるとに思合せられ侍り又大水上神と申は[illegible]神の御事と通えたるに其御女瀧祚姫を[illegible]れば大水上兒と申て姉[illegible]し侍り又事代主神とも申して共に同神なる者也　田邊神社稱ニ太神御滄川神ニ坐形鏡　大長谷天皇御宇定祝正殿一區長一丈弘九尺高[illegible]尺　御床一具長四尺高五寸弘[illegible]尺五寸　前一宇長四尺高[illegible]尺弘二尺六寸　門一間長四尺弘七尺　玉垣二重長八尺　坐地一町九段三百四十歩　東限ニ五百木行淨人家并小道ニ南限レ道西北限ニ公田ニ○今云神名秘書に元々集に太神御滄(ミソキ)神社前社在ニ城田郷矢野村ニと云り正殿と前社と二處[illegible]なれど祭神詳ならず　敷野社一處稱ニ太神御蔭川神ニ坐形鏡　大長谷天皇定祝正殿一宇長一丈弘九尺五尺　御床一具長四尺弘二尺五寸高一尺　瑞垣一重長三丈高七尺　御門一間長八尺弘四尺五寸高七尺　玉垣一重長三丈高七尺　前段一宇長三尺五寸弘二尺四寸高七尺　坐地二町四至

東澤井島西道北島ニ○今云神名秘書元々集等にも太神御滄川神也在ニ田邊郷蚊野村ニ前社と云り太神御滄川と云事何なる由か知ず又祭神詳ならずと雖も御船神社の下に稱ニ太神乃御滄川神ニと見えたれば御船川と云事なり彼天御[illegible]川御[illegible]の事を思合す可くこそ　湯田社一處稱ニ鳴雷電(ナルイナツメ)ニ又大歳御祖命無形　同御宇定祝正殿二區長各四尺五寸弘[illegible]尺高五尺　玉垣一重長三丈[illegible]尺高七尺　御門一間高九尺弘八尺　坐地二町五段四至　東[illegible]川西北公田○元々集に在ニ湯田村ニと云り倭湯日とは忌[illegible]忌鍬を以耕し種る忌田なり此を鳴震電と申は震雷の謂には非ず生稻實(ナルイナツミ)なる事已に六月々次祭大歳神祭の下に事の因に依て云るが如し　已上六箇處社造神宮使造作奉也と見えたり次に大土神社國津御祖社久麻良比神社宇治山田神社津長大水神社堅田神社大水神社江神社神前神社粟御子神社川原神社久具社猪原神社榛原神社御船神社坂手神社狹田神社瀧原神社等の事を載て以上十七箇處神國津社右社隨ニ破壞之時ニ國郡司以ニ正稅稻ニ修造如件以前祝部等太神宮司ト食定任レ之狀移ニ送伊勢國司之ニと見えたり何れも官帳に入給へる神社なり　但元々集に或記ニ儀式帳廿五處内瀧神社無ニ實殿ニ久麻良比社宇[illegible]山田社堅田社已上四社ニ載ニ儀式ニ不レ載ニ神式ニと有ば古今の異にて太神宮式には杼羅社伊佐奈[illegible]社大國玉比賣社の三社を加へて合せて廿四座と成れり其瀧祭神社を入ざる事は儀式帳六月例に瀧祭物忌所と有る如く太神宮の物忌所なるが故に神社の列に非るが爲に除れたるなる可し[illegible]此十七社を國津社と云は太神に與奉給へる天よりの神には坐ず本より其邊の地に在す神に申す事なり　又未ニ官帳入ニ田社事[illegible]下神社右神社太神宮造奉使造奉而祝無津布良神社　葭原神社　小社神社　許母利神社　新川神社石井神社宇治乃奴鬼神社加努彌神社川相神社

熊淵神社荒前神社那自賣神社葦立弖神社牟彌乃神社以上十五前神社右神社倭比賣乃御時仁祝弁御刀代田宛奉也未(アラザル)レ祝乃倍不レ免仍號二田社一弖爲二供奉宮一祝同と有此を田社と云は宮より祭らせ給はざる故に御刀代田は宛奉ると雖も未祝の非る社は田租舊役をも被召るゝと云事なる可し此十五處の中に鴨下神社は上なる鴨神社と殿二處の内に坐り津布良神社は上島なる薗相神社と同しく沼木郷積良村に坐なる可し許母利神社は宇島神御玉形無と有ればに摩■答志郡菅島に坐神なる可く加努弥神社は三節祭の御贄を採に到る宛海なる神なる可し此等の神々の事を委しく注し奉らま欲かれども若にては其主と云べき二所太神宮の事に打混ひて紛はしき故に又別に云むとす○止由氣宮及別宮の御事儀式帳に大宮壹院正殿壹區長三丈廣一丈尺高一丈同殿坐神參前稱二相殿神一寶殿貳宇長各一丈六尺廣一丈二尺高一丈御饌殿壹宇長一丈廣一丈高一丈幣帛殿壹宇長一丈廣一丈二尺高一丈齋内親王殿壹宇長四丈廣二丈高一丈女孺侍殿壹間長四丈廣二丈高一丈御門肆間長各二丈廣各一丈五尺高各一丈瑞垣壹重廻長五十丈高一丈宿直屋參間長各一丈四尺廣各八尺高各六尺玉垣貳重一重廻垣長六十二丈一重廻長九十六丈高各一丈板垣壹重廻長百十六丈高一丈蕃垣參重長各二丈○四上右大宮院の内に在る所なり皇太神にては常類に別に一院有り御饌殿は二所の宮相饗神に日毎に朝の大御饌夕の大御饌を奉る所なる事已に云りや御倉壹院倉參宇長各一丈六尺廣各一丈四尺高各一丈一宇納二正殿寶殿御裝束一一宇納二無稅并御田苅稻一一宇納二鋪設一廻玉垣壹重廻長卅丈高一丈御輿宿殿壹間長三丈四尺廣一丈五尺高一丈御厩壹間長三丈五尺廣一丈六尺高一丈○今云皇太神宮御厩一院條には疏二鰹魚木各六枚一と有り直會所壹院五丈殿貳間長一丈一長丈廣二丈高一丈九丈殿壹間廣二丈高一丈直會御門長一丈三尺廣一丈高一丈○今云皇太神宮儀式帳には此院を已上等ニ檜皮一と見えたり齋内親王御膳壹院御膳殿壹間長二丈二尺高八尺廣一丈御炊殿壹間長一丈八尺廣一丈二尺高八尺廻板垣壹重長八丈高八尺○今云皇太神宮には御膳殿御炊殿共に名を記さず屋と耳云り然るは齋王の此殿に就坐と云にも非るが故に殿とは云ざりしにこそ御酒殿壹間長二丈一尺廣一丈六尺高九尺務所廳壹間長三丈五尺廣一丈六尺高一丈鹽殿壹間長三丈廣一丈六尺高九尺禰宜齋院壹間長三丈廣一丈六尺高九尺齋火炊屋壹間長一丈六尺廣一丈二尺高八尺祭大炊屋壹間長三丈五尺廣一丈六尺高九尺倉二宇長各二丈六尺廣各一丈四尺高各一丈一宇納二神酒并御贄等類一一宇納二雜器并米鹽等類一廚屋壹間長三丈廣一丈六尺高八尺防往籬壹重廻長卅五丈○今云齋火炊屋祭大炊屋と同じ如き物の二有は平日の齋火炊く所と三節祭以下の祭日に炊く所とを別てあるなり齋館壹院御饌炊殿壹間長二丈二尺廣一丈二尺高八尺大内人三人宿館屋參間長各二丈廣一丈二尺高各八尺物忌五人宿館屋伍間長各二丈廣各一丈二尺高各八尺齋火炊屋伍間長各一丈六尺廣各一丈高各八尺物忌父小内人等宿館屋伍間長各二丈廣各一丈高各八尺倉一宇長一丈六尺廣一丈四尺高一丈納二木■一防往籬壹重廻長十五丈總宮廻防往籬貳百漆拾餘丈禰宜内人等戸人夫掃造二百丈多氣郡并神戸人夫掃造七十余丈馬道厩貳間長各四丈廣二丈高八丈幣帛御馬隱厩壹間長二丈廣一丈二尺高七尺と有が如し能々皇太神宮儀式帳に合せ見る可し必思得る所多からむ物ぞ管高宮一院等由氣太神宮之荒御玉神也正殿壹區長二丈四尺廣一丈二尺高一丈瑞垣壹重廻長十二丈高一丈玉垣壹重廻長十八丈高一丈御門壹間長二丈廣一丈四丈高一丈と見えたり但此は延暦延喜迄の狀にこそ有けれ其より後には土宮風宮月讀宮等三所の別宮加はり合せて四所の別宮と成れゝば其心得有べき者ぞ○止由氣宮攝社御事儀式帳に所管度會郡神社事合貳拾肆處載二官帳一名社十六

處未レ載二官帳一名社八處　月讀神社正殿貳區長各六尺廣各四尺高各三尺玉垣壹重長八丈高八尺御門一間長八尺廣六尺〇今云此は新月讀宮の御事なり神名秘書に在二沼木郷一大河原座承元宮號と有り承元は土御門天皇の大御世なり其子細未詳ならずと雖も正殿貳區は月讀命荒御玉命二神ならむ　草奈支神社正殿一區長六尺廣四尺高三尺玉垣一重長七丈高八尺御門壹間高八尺廣六尺〇今云神名秘書に在二沼木郷山田村一大間社西座草薙劔座と有は其御撰遣などを奉れるにや、　大間國生神社正殿二區長各六尺廣各四尺高各三尺玉垣一重長八丈高八尺御門一間高八尺廣六尺〇今云神名秘書に大若子弟若子命在二沼木郷一山田村座云々と有り但此大若子命弟若子命を山田國の摂宮に坐神に大若子命小若子命坐を其と同神の如く云るは然らず實は二十二社注に式に瓊々杵尊彦火々出見尊なる山を祀せり此は度會神主氏の遠祖なるなり倭國生神とは國魂神と申す如く國を經營とか國を治むとか其地に就て功坐神の御名なり皇太神宮儀式帳に大土神社稱二國生神兒字國玉命一云々と有る此は須佐之男命と通え國津御玉神社稱二國生神兒治比賣命又田村比賣命一と見えたるは度會の地主神の由なれば遠田彦命を申せるなる可く神前神社稱二國生神子荒前比賣命一と有る此も右の例なり又荒崎神社稱二國生神兒荒前比賣命一とも有り又坂手神社を神名式に坂手國生神社と見え又狹田神社を狹田國生神社と申せるなど皆其國に縁有る神等を國生神と申す由なり　右三所

神社造宮使造奉此祝死闕替申二送太神宮司一即卜食定

其後家被清預二供奉事一と見えたり又其續きに度會之

國都御神社度會之大國玉姫神社田上神社都野井庭神

社大河内社清野井庭神社高河原社川原淵社山末社宇

須乃野社水戸御食都神社小俣社正殿拾三區長各五尺廣各三尺五寸高各二尺玉垣十三重廻長各六丈高各八尺　御門拾參間高各八尺廣各六尺右十六社

官幣帛宛奉但十三社者國宛料令レ造二奉於祝一又春秋

並三度祭者節別禰宜内人等率二祝等一供奉此祝死闕替

禰宜等申二送太神宮司一即卜食定其後家被清預二供奉

事一と有り太神宮式には都野井庭神社と見え清野井庭神社を井庭に作りて葉傳と訓り井手とも溝(ウナデ)とも云と同じきにや　伊我理神社懸神社井中社打懸社志等美社毛

理社大津社土買屋社右八社未レ載二官帳一名二但社无料

祝造奉但年中三度祭者禰宜内人等率二祝等一供奉此祝

同如レ上卜食定と有り此等の官帳に載ざるを太神宮

式には田社と云り右の伊我理神社は年中行事に二月上亥日外宮鐵山伊賀利神事云々と其を其祭神なるへし倍右の某神社とも某社とも有て其別有る如くなるを思ふに神名なる時は某神社と云地名の時は某社と云ふ例を以て書り

皇御孫命能御命乎以氏皇太御神能大前爾申給久常乃

例爾依氏廿年爾一遍比大宮新仕奉氏雜御装束

物五十四種神寶廿一種乎儲備天被清貫持忌氏波理

頂供奉辨官某位某姓名乎差使氏進給狀乎

申給止申

皇御孫命の命字は諸本に無を今出雲本に依て補へつ

〇廿年爾一遍比大宮新仕奉　凡太神宮廿年一度

造二替正殿寶殿及外幣殿一云々と有る此にて其は已に

引る如く雜事記に天武天皇朱雀三年乙酉九月廿日

依二左大臣宣一奉レ勅伊勢二所太神宮御神寶物等差二勅

使一被レ奉レ送畢宣旨狀偁二二所太神宮御遷宮事廿年一

度應ㇾ奉ㇾ令㆓遷御㆒立爲㆓長例㆒也と見えたる此御例を天地と共に彌遠長に傳させ給ふが故に常乃例爾依氐とは申なり 此文上にも引つる實基本記にも此と同文有て其には九月廿日を十日に左大臣宣を右大臣宣に作れり何れを正しとも定難し 朱雀三年以往之例二所太神宮殿舍御門御垣等宮司相㆓待破損之時㆒奉㆓修補㆒之例也而依㆓件宣旨㆒定㆓遷宮之年限㆒又外院殿舍御倉四面重重御垣等所ㇾ被㆓造加㆒也と有て其より以來宮地を東西に定て更々其地に大宮柱太敷立高天原に千木高知て稱辭定奉る事書典に記す迄も非ず見たり聞たり人の能く知れるが如し○雜御裝束物五十四種は皇太神宮の御なり太神宮式に營造神寶並裝束使辨官五位以上一人史一人史生二人官掌一人神祇若諸司主典已上可ㇾ堪ㇾ事者四人史生四人女孺廿一人仕女二人雜使六人雜工六十三人自外應㆓供作㆒雜色人等隨ㇾ事喚補多少堪ㇾ濟其女孺以上各給㆓明衣㆒男各絹四丈五尺女一疋一丈雜工以上男各布二丈六尺女二丈五位以下大膳大炊依ㇾ例供給七月一日神祇官西院始行ㇾ事と有る此は其事に任(メサ)れたる即神祇官西院に於て事を執行ひ始るなり御裝束物及神寶耳ならず修㆓餝神宮調度㆒も皆此使の預りて供奉る所なり 齋宮式にも四月上旬に齋王の裝束司を被任る事有り其文に同旬於㆓神祇官西院㆒始行ㇾ事と見えたると同例にて此御裝束神寶共に京にて調進せらるゝなり 右の次に修㆓餝神宮調度㆒を擧たり此は造宮使を以て造奉る神宮及諸院の御餝の調度なれば今茲に擧るに及はず次に太神宮裝束條有り然れども儀式帳の方各其條目を別ちて委しければ此には太神宮式を以て本據と爲し儀式帳を以て其子細を說明す著なり 蓋(キヌガサ)二枚淺紫綾表緋綾裏 表各三丈裏加之 頂及角覆錦 枚別所ㇾ須一丈 垂㆓淺紫組總㆒ 枚別所ㇾ須八兩但縫料絲臨時斟酌請受以下准ㇾ此 緋綱四條 二條蓋料二條菅笠料長各二丈 紫扇二枚菅笠二枚菅扇一枚 ○以上儀式帳には此條の始に新宮遷奉御裝束用物事と記して此の紫扇菅扇を紫刺羽菅刺羽と有り此外に絹垣幀一條長六丈弘三幅道長九十五丈敷用調布廿三端三丈と有り長曆送官符には緋綱五條二條蓋一具料三條菅大笠二具料と有り又垣代絹單帳一條と有て儀式帳に同じ 壁代絹帳二條 一條長六丈廣六幅一條長九尺廣二幅 天井上覆絹帷一條 長三丈六尺三寸廣九幅 內蚊屋絹帳二條 高一丈三寸廣十二幅 幌一條 長七尺三寸廣四幅○以上儀式帳には太神正殿之物と有り壁代生絁御帳二條長各二丈二尺弘各六幅天井生絹御帳一條長三丈六尺三寸弘九幅內蚊屋生絁御帳二條云々御幌帳一條云々と出て少相違有り長曆官符には幌廣七幅なり壁代絹帳三條にて今一長四丈五尺廣六幅なるが有り蚊屋絹帳高各一丈三尺と見ゆ何れか是なるを知ず 床土代敷細布袷帷一條 長二丈八尺廣六幅 絹袷帷一條 長一丈三寸廣四幅 生絁(スヽシ)絹被(フスマ)二條 長九尺廣四幅納㆓綿廿屯㆒二條無ㇾ綿 小菓錦被一條着㆓緋裏㆒ 長九尺廣四幅納㆓綿廿屯㆒○以上儀式帳には御床裝束四種と有り偖右の內生絁絹被二條の內一條は出㆓坐御床裝束物の中に出たり長曆官符には小菓錦被は次なる御樋代條に出たり又絹袷帷長一丈三尺と見え又別に納白葛筥方一尺深二寸有て已上納黑漆辛櫃と見ゆ此の帷を御帳と云て絹を生絁と云り此は皆御船代の料なり 小文紫被一條 長五尺廣二幅納㆓綿八屯㆒ 小文緋被一條 長廣如ㇾ上 屋形錦被一條 長廣同ㇾ上 小文緋絹一疋 折累敷料 帛被二條 二條長一丈廣四幅納㆓綿各廿屯㆒

一條長九尺廣四幅無綿五窠錦被一條長一丈廣五幅著ニ緋裏ー納ニ綿廿屯ー〇以上儀式帳には樋代御裝束六種と有り小文緋綾を一本に小文緋綾と見え帛被を表覆帛被二條と見えたり度會宮の上覆帛被と同物なるが彼は御船代の料なるを以思ふに船代樋代共に亘れるなり右の屋形錦被と帛被一條とは次なる出坐御床の裝束物の中に出たり然れども長暦官符に小窠錦御被小文紫綾御被小文緋綾御被小文緋綾一疋共に已上納ニ辛櫃一合ーと見え又錦御被五窠文錦御被帛御被組三十八條長各三尺廣五分蘇羅組已上納ニ辛櫃一合ーと有り

敷ㇾ床細布袷帷一條廣四幅長九尺絹袷帷一條長廣如ㇾ上小文紫衣二領長三尺五寸著ニ白裏ー各納ニ綿一屯ー小文緋衣二領長三尺五寸裏同上各納ニ綿一屯ー帛衣四領長裏同ㇾ上各納ニ綿一屯ー帛裳四腰長五尺著ニ纈色裏ー紫羅裳一腰長廣裏色同ㇾ上紫帶六條長七尺廣一寸八分絹比禮八條長五尺廣二幅帛意須比八條長二丈五尺廣二幅細布巾(ノゴヒ)四條長五尺廣一幅帛巾四條長如ㇾ上帶(マヘシレ)廿條六條十四條長各七尺廣一寸八分錦履二兩長九寸五分錦襪八兩長九寸五分高七寸五分帛絲八條長二尺廣一寸五分盛柳筥方一尺五寸櫛筥方一尺囊用ニ生絹ー納ニ櫛八枚ー鏡二面各徑九寸盛韓櫃筥以ㇾ錦黏ㇾ表以ニ緋帛ー黏ㇾ裏髻結紫絲八條長五尺納柳筥一合方一尺加美阿氐帛八條長三尺白玉一兩三分中分裹ニ白絹ー盛白筥二合方一尺納ニ坐袷茵ー錦枕二枚長各五寸五分廣三寸八分厚二寸四分盛柳筥一合方一尺五分敷ニ御道ー布廿三端三丈納ニ裝束ー韓櫃八合所謂齋宮裝束因納ニ此韓櫃ー〇以上儀式帳にては出坐御床ー裝束物七十二種と有り右の外に生絹御被一條長九尺弘四幅帛御被一條長九尺弘四幅屋形錦御被長九尺弘四幅と有り右の三種は皆已に上に出たる所なり長暦官符右に同じ盛柳筥は三所共に載す此は蓋無き筥なり盛白筥は蓋有て其中に納るなり此敷御道布は此には已に上に出韓櫃の事は記さず長暦官符には御衣筥二合と有り又御加美阿氐帛納白柳筥二合など見ゆ

相殿神二座裝束左神新絹囊一口長七尺二寸廣二幅右神新絹囊一口長四尺二寸廣二幅〇度會宮にては相殿神の御裝束には御被御衣御裳等の事有を此に無は此は御裝束と云内にも御靈質を奉ニ納の囊也御裝束は皇太神に奉る其中に收めて記されたり

絹幌二條長六尺三寸廣四幅〇儀式帳には寶殿二字御幌二條長暦官符には寶殿二字生絹幌二條と有り四門幌四條宮垣門長七尺八寸廣四幅蕃垣門長八尺八寸廣五幅玉串門長廣同ニ蕃垣ー玉垣門長七尺四寸廣三幅〇長暦官符には荒五垣門なるを長八尺四寸と有れども八は七字を誤れるも知べからず同書に此下に右納漆塗韓櫃八合と有り有り以上御裝物五十四種なり但此は蓋の覆組總ーに收て計へたる數なり〇皇太神宮別宮御裝束の事は太神宮式に荒祭宮正殿裝束菅笠一枚徑四尺五寸金餝納緋囊緋綱二「□」蚊屋一條長七尺六寸廣十二幅內蚊屋一條長七尺廣二幅土代細布帷一條長八尺廣二幅絹被一條帛被一條各長七尺廣三幅納ニ綿八屯ー緋綿衣一領錦綿衣一領絹綿衣一領已上長二尺綿裳一腰緋裳一腰帛裳一腰各高二尺齊長四尺櫃練絁帊一張長九尺廣四幅絹幌一條長六尺廣三幅櫛筥一合納ニ櫛四枚ー髻結紫絲二條長四尺紫帶二條長四尺と有て合せて十八種なり儀式帳には此內緋綱帛被緋綿衣の三種無して御床一具褥覆一領長四尺弘四幅鞆長八尺漆塗の三種有り且廿種と有れども凡て十八種なり長暦官符には緋綱無して鏡一面徑□寸納ニ緋囊ーの一條有れども此は神財より混れ入たるなり備有の錦御衣御裳を散花文錦と有り伊弉諾宮二座裝束土代絹帷二條長各一丈廣各三幅幌二條長各六尺廣各三幅絹被二條長各七尺廣各三幅帛被二條長廣如ㇾ上青纐纈綿衣二領長各二尺帛裏絹單衣二領長各如ㇾ上帛紺袴二腰長各一尺六寸紫紗裳一腰帛裳一腰各高一尺六寸齊長四尺緑帶四條長各四尺髻結紫絲四條長各四尺櫛筥二合各納ニ櫛四枚ーと有て以上十二種なり儀式帳には月夜見宮と一に記せり其は未宮號の宣旨非りし故に其宮に管(スベ)たるなり長暦官符には此外に天井一條長七尺六寸廣十二幅蚊屋二條一條長七尺六寸廣十二幅一條長七尺廣二幅生絹幌一條長五尺五寸廣三幅緋御裳二腰長

各二尺帛裏錦御裳二腰長各二尺廣四尺紫御帶二條長各四尺廣各二寸頸纈絹帛一帳長九尺廣四幅絹布帳一條長六尺廣二幅と有て凡て二十種なり 月夜見宮二座裝束土代絹帷二條一條長一丈一條長八尺各三幅 幌二條一條長六尺廣三幅一條長五尺廣二幅 絹被二條各長七尺廣三幅 帛被二條長廣如上 靑纐纈綿衣二領各長二尺帛裏 絹單衣二領長如上 帛綿袴三腰長各一尺六寸 緋帶四條長四尺 髻結紫絲四條 櫛筥二合各納二櫛四枚 と有て合せて十種なり儀式帳には伊雜諸宮と合せて載たるに此外に兩面覆樻一備と有り此は韓樻の事なり 然るを長暦官符に儀式帳の任に四座の積りにて記せるは誤なる可し古は然なれども式文より以來伊雜諸宮月夜見宮と各別なる者をや 瀧原宮裝束絹蚊屋二條一條長七尺六寸廣十二幅一條長七尺廣二幅 絹幌一條長六尺廣三幅 土代細布帷一條長七尺七寸廣二幅 緋衣一領紫單衣一領帛衣一領各長二尺 裁替裳一腰帛裳一腰紫紗裳一腰各高二尺腰長二尺齊長四尺 帛被一條絹被一條各長七尺廣三幅 絹帳一條長七尺七寸廣三幅 生絹天井覆一條長七尺六寸廣十二幅 櫛筥一合納二櫛八枚 髻結紫絲二條長四尺 緌帶二條長四尺 と有て合せて十六種なり 儀式帳には此絹蚊屋二條を一條と爲て荒衣帳(アラキヌノトバリ)一條と有り絹幌を御床張裁替裳を比毛立口裳絹御被を綿御被生絹天井覆を荒衣天井蚊屋と云り倭帛被無し十七種と有れども十五種より非ず長暦官符は此式文と同じく十六種にて已上納白木辛樻一合と有なり 瀧原並宮裝束正殿絹蚊屋二條一條長五丈廣十幅一條長五尺四寸廣二幅 土代細布帷一條長五尺八寸廣二幅 緋衣二領各長二尺 紫紗裳一腰帛裳一腰各長二尺 帛被一條絹被一條各長六尺廣三幅 櫛筥一合納二櫛四枚 髻結紫絲二條長四尺 緌帶二條長四尺 と有て合せて十一種なり 儀式帳には絹蚊屋二條を正殿生絹蚊屋天井蚊屋と別ち帛被絹被を荒衣御被練御被と云り長暦官符には絹被の事非ず納白木辛樻一合と見ゆ 伊雜宮裝束正殿絹蚊屋二條一條長七尺六寸廣十二幅一條長七尺廣二幅 絹被一條帛被一條各長七尺廣三幅 細布土代帷一條長六尺廣二幅 緋單衣一領帛單衣一領各長二尺 帛裳一腰錦裳一腰紺裳一腰各長二尺 絹幌一條長六尺廣三幅 櫛筥一合納二櫛四枚 髻結紫絲二條長四尺 緌帶二條長四尺 と有て合せて十三種なり 儀式帳には緌帶二條の事無く緋御床敷一幅長六尺と云有り長暦官符にも床敷緋帳長六尺廣三幅と見ゆ ○此始に遷奉太神宮祝詞と有る下に豐受宮准此と有れば度會宮にも此詞を被用る事云も更なるが御裝束物都て五十四種なり其由下に云るが如し太神宮式に云く度會宮裝束紫蓋一枚菅笠一枚紫翳(サシハ)一枚菅翳一枚○儀式帳には翳を刺羽と作き此式太神宮裝束條には紫翳菅翳と有り以上皇太神宮儀式帳には新宮遷奉御裝束用物と見ゆ 壁代絹帷二條一條長六丈廣六幅一條長一丈八尺廣如上 天井上覆帷一條長二丈五尺廣九幅 蚊屋帷二條一條高一丈八尺四寸廣十九幅一條高如上廣五幅 幌一條長七尺三寸廣四幅 戸上壁代帷一條長八尺五寸廣二幅○儀式帳には此を殿戸上間張帳と有り皇太神宮帳には此物無し但此等の種々を太神正殿裝束物と有り 絹袷被一條長一丈廣四幅 土代敷細布袷帷一條長二丈廣五幅 帛被一條長八尺四幅 刺車錦被二條各長八尺廣四幅○儀式帳には土代敷細布袷を御床於(ミトコノツヘニ)敷細布御帳と有但此刺車錦被一條は次なる御船代條に用る所なり皇太神宮帳には此四種を御床裝束と載る條なるなり 船代內敷小綾帛被二條各長八尺二幅 上覆帛被一條長八尺四幅 小綾紫被一條長八尺四幅○儀式帳には此外に刺車錦御被一具長八尺四幅と有り此は上に出たる所なり皇太神宮には此等を樋代御裝束と有り其は御船代の上に御樋代を置奉り其上下を御被以て裝束奉ればなり 緋錦衣一領紺衣一領小綾綠衣一領絹衣一領已上各長三尺納二絁一斤一 吳錦衣一

領小綾紫衣一領小綾帛衣一領緋衣一領已上長各三尺五寸納ニ絲一斤ー緋裳一腰帛裳二腰紺裳一腰絹裳一腰各高四尺齊長五丈腰長一丈三尺呉錦裳一腰小綾紫裳一腰紺裳一腰倭文裳一腰各高三尺五寸齊長二丈五尺腰長七尺絹比禮四條各長二尺五寸帛絹忍比四條各長二丈五寸帛巾二條各長五尺細布巾二條各長五尺帛袜（マヘダレ）四條各長二尺枕二基櫛筥一合納ニ櫛四枚ー髻結紫絲四條各長三尺紫帶二條各長七尺廣二寸錦襪二具錦沓二兩○皇太神宮儀式帳及長暦官符には上件の物共を出坐御床裝束物と有り止由氣宮帳には右の帛裳を高五尺なると三尺五寸なると二に別記せり敷ニ御道ニ調布十八端柳筥三具各方一尺六寸幔一條長六丈三尺幅納ニ裝束ニ韓櫃四合所ニ摘別宮裝束同納ニ此韓櫃ー○此中に韓櫃は御裝束物を盛る料なる事已に太神宮裝束條には見えたるが如し儀式帳には新宮遷奉時用物太神行幸道敷調布拾捌端太神坐奉草筥三具廣各一尺八寸生絁衣垣一條長六尺三幅と有は此なり然れば右の柳筥は此の草筥に幔一條は此の生絁衣垣に當れり　相殿神ニ座裝束帛被三條絹被三條已上各長三尺五寸廣二幅納ニ綿五斤ー帛衣三領絹衣六領已上各長二尺七寸綿各六兩絹裳九腰各齊長一丈腰長三尺高二尺○以上儀式帳に相殿坐神三前御裝束物と出たり右の御衣は御船代の新なる事皇太神宮の例なり絹幌二條各長七尺二寸廣四幅三門幌三條各長九尺廣五幅○絹幌は儀式帳に實殿二間御帳二條長各八尺各四幅と有此なり三門幌帳に見えず御門四間なるに幌無も有にや　戈二竿各長一丈二尺楯二枚高四尺六寸廣一尺四寸弓二枝胡籙二具箭六十隻鞆二枚と有て凡て六十種なり但此戈楯弓胡籙鞆は神寶なれば此六種を除てて都て五十四種の員數に成れる者也但儀式帳に此六種の物無は延暦より以後延喜より以前に奉り始たるならむ多賀宮裝束絹蚊屋帷一條一條長五尺四寸廣二幅一條長五尺廣十幅天井帷一條長八尺廣三幅細布單帷一條長六尺廣二幅帛被一條絹被

一條已上各長四尺五寸廣二幅納ニ綿各五斤ー緋衣一領絹衣一領紫紗裳一腰帛裳一腰櫛筥一合納ニ櫛四枚ー髻結紫絲二條帶二條各長四尺絹幌一條長六尺と有り儀式帳には御衣御裳不レ繼進新緋一尺錦二丈絁一疋と有り然れば當昔は新絹にて進れりしなりけり○太神宮式に遷宮禰宜内人等裝束太神宮絹明衣五具男三具女二具布明衣六十具男卅具女卅具度會宮絹明衣二具男一具女一具布明衣六十具男卅具女卅具　此は神宮に奉る所に非ずと雖も同じく裝束使の造る所なる故に注す所なり儀式帳に給ニ禰宜内人等明衣六十五具ー生絁男衣三領袴三腰一具給ニ禰宜ニ一具給ニ宇治大内人ニ一具給ニ宮守物忌子ー生絁女衣二領裙（モ）二腰一具給ニ大物忌子二具給ニ地祭物忌子ー白布男衣卅領袴卅腰給ニ大内人二人物忌父小内人十六人禰宜内人等子弟十二人ー已上人別一具白布女衣卅領裙卅腰給ニ禰宜内人等妻子三十八人ー人別一具　已上遷奉人垣新と見え止由氣宮儀式帳にも新宮遷奉時用物云々禰宜一人大物忌一人給ニ生絁明衣一具ー男衣一領袴一腰女衣一領裳一腰人垣仕奉内人等并妻子等摠六十八人男卅八人女卅人給ニ明衣六十領袴裳六十腰ー男衣卅領袴卅腰女衣卅領裳卅腰　内人并人垣仕奉人夫蘰并玉串著木綿捌斤云々白ニ朝廷ニ進入と見えたり斯れば人垣に立る人々も蘰を着け木綿著たる太玉串を捧げて仕奉るなりけり　又高宮遷奉時物忌一人父一人給ニ白布明衣二領ニ男衣一領女衣一領已上官庫之物と有れども式文に載ざるは皆祭事以下凡てを省かれたるが故なり然れども必如此委曲に有まほしき者なり　○神寶廿一

種は儀式帳に寶殿物十九種と有此なり續紀に天平十年五月辛卯使下云々齎二神寶一奉中于伊勢太神宮上と有は遷宮の時ならざるを思ふに後れても被進しか又は此時に始れるか今知難し後紀に平城天皇大同二年八月癸亥遣レ使奉二神寶幷唐國信物於伊勢太神宮一と有は遷宮の神寶の使に唐國信物を合献給へりと聞ゆ續後紀に淳和天皇天長五年十月戊子云々奉二神寶於伊勢太神宮一と有は遷宮に依てなり但九月なる可を後れたるは觸穢などに依て延たるか仁明天皇嘉祥二年九月丁巳遣二左少辨從五位上文室朝臣助雄等一奉二神寶於伊勢太神宮一是廿年一度所レ奉例也三代實錄に貞觀十年九月七日丁酉遣二從五位下右少辨藤原朝臣千乘左大史正六位上刑部造眞鯨等伊勢太神宮一奉二太神財寶一是隔二廿年一所レ造也大二祓於建禮門前一而發レ使同十二年九月八日丁巳遣二云々於伊勢太神宮一奉二神寶一是日太政官停二尋常政一但非二廢務之例一也光孝天皇仁和二年九月四日己卯申時於二建禮門前一修二大祓一以下明日奉二伊勢太神宮神寶一使可中進發上也五日庚辰奉二太神宮神寶一云々凡伊勢太神宮神寶廿年一度改作前修之後十二九年于茲一雖レ未レ滿レ限改造畢仍奉レ之

是日諸司廢務而神祇官不レ進二解文一責二過狀一と見えたる此貞觀十二年なるを除きては三度共に遷宮に依てなり此より前に陽成天皇元慶二年三月七日癸卯遣レ使奉二伊勢太神宮幣幷神寶弓梓劍(ソコ)等物一と見えたる三種も神寶廿一種の中の物なり損ねなど爲し故に臨時に被進し所なる可し又續紀に高野天皇神護景雲三年二月乙卯以二大炊頭從五位下掃守王左中辨從四位下藤原朝臣雄田麻呂一毎社男神服一具女神服一具奉太神宮及月次社嘗加レ之以二馬形幷鞍一と有る馬形幷鞍は皇太神宮儀式帳荒祭宮月讀宮瀧原宮神財條に青毛土馬一疋高一尺鞍立髪金漆と見えたる此なり瀧原並宮伊雜宮に此物無きは太神宮式に就レ中瀧原並宮伊雜宮不レ預二月次一と有る如くなればなり止由氣宮儀式帳なる新宮遷奉時用物に被立御馬一疋白二朝廷一進入と有も決く此馬形と通えたり此を以観るに二所太神宮及別宮に被進る御衣御裝より始て凡ての御裝束物の狀の甚古くも見えざるは此時に被進し故の任なるか故なり皇太神宮及荒祭宮には四月神衣祭ありて此事已に大寶の令に出たれば麻續服部二氏の織る所を以て御衣に設備たるなり　太神宮式に云く神寶廿一種金銅多々利二基高各一尺一寸六分土居徑三寸六分金銅麻笥二合口徑各三寸六分尻徑二寸八分深二寸二分金銅賀世比二枚長各九寸六分手長五寸八分金銅𨫼(サヒツヱ)二枚莖長各九寸三分輪徑一寸一分　銀銅多々利一基高一尺一寸六分土居徑三寸五分　銀銅麻笥一合口徑三寸六分尻徑二寸八分深二寸二分　銀銅賀世比一枚長九寸六分手長五寸八分　銀銅𨫼一枚莖長九寸三分輪徑一寸一分梓弓廿四枚長各七尺以上八尺以下塗二赤漆一弼纏二縹組一　征箭一千四百八十隻長各二尺三寸鏃長二寸五分以二烏羽一作レ之鏃塗二金漆一筈塗二朱沙一　又箭七百六十八隻長二尺四寸筈鏃箭以二鷲羽一作レ之以二雜丹漆一畫レ之　玉纏横刀一柄柄長七寸鞘長三尺六寸柄頭横著レ銅塗レ金長三寸八分片端廣一寸五分片端廣一寸頭頂著二仆鐶一勾二徑一寸五分玉纒十三町四面有二五色玉一著二五色組長一

丈阿志須惠組四尺一柄著勾金長二尺一著二鈴八口琥碧玉二枚一 金鮒形一隻長各六寸廣二寸五分 著レ緒紫組長六尺袋一口表大暈間錦裏緋綾帛各長七尺 須我流横刀一柄柄長六寸鞘長三尺其鞘以二金銀泥一畫レ之柄以二鵠羽一纒レ之 柄勾皮長一尺四寸裏小暈繝錦廣一寸 押二鐶形金六枚一柄枚押二小暈繝錦一長三寸一分廣一寸五分 四角立乳形著二五色組長一丈阿志須組四尺金鮒形一隻長六寸廣二寸五分 著二紫組長六尺袋一口一表大暈繝錦裏緋綾帛各長七尺 節別雜作横刀廿柄欄柄長六寸五分鞘長二尺七寸漆塗郎表二緋帛并倭文一柄以二烏羽一纒レ之 纒二小暈繝錦阿志須惠一長各三尺三寸廣各一寸二分 著二緋細帛緒一長九尺廣二寸五分 姫靫廿四枚長各二尺四寸上廣六寸下廣四寸五分天刺口方二寸九分以レ檜作レ之以レ錦裹レ表以二緋帛一著レ裏著緒四處並用二紫革一長各二尺廣一寸三分 箭四百八十隻以二烏羽一作レ之 蒲靫廿枚長各二尺上廣四寸五分下廣四寸以レ檜作レ之以レ蒲著レ表以二鹿皮一著レ頂以レ斑鹿レ裏著二緒四處一 並用二紫革一長各二尺廣一寸 箭一千隻以二烏羽一作レ之 革靫廿四枚長各一尺八寸上廣四寸五分（下廣三寸八分）以二調布一結レ之塗二黒漆一著二緒四處一 並用二紫革一長各二尺廣一寸 箭七百六十八隻以二鵠羽一作レ之 鞆廿四枚以二鹿皮一縫レ之胡粉塗以レ墨畫レ之納二持座一著二箭二合一徑一尺六寸五分深一尺四寸五分緒一處一用二紫革一長各一尺七寸廣三分 楯廿四枚長各四尺上廣一尺三寸五分下廣一尺四寸厚一寸 桙廿四竿長各一丈二寸鋒長八寸五分廣一寸五分徑一寸四分本金長二寸八分徑一寸四分本末並二金漆 鵄尾琴一面長八尺八寸頭廣一尺末廣一尺七寸頭鵄尾廣一尺八寸 と有る儀式帳此に同じきが御鏡二面各徑九寸 と有を此には御裝束の中に加りたれば其を除きて十八種なるを姫靫蒲靫革靫に盛る所の箭三種を合せて廿一種なり長暦官符に載るも式文の如くなり借儀式帳金銅檔二基の細書に右延暦四年宮遷時依二神祇官符一載言二上解文一即被二供奉一と有を以思ふに――右の檔麻笥加世比鎛の種々は其迄神宮にて――供奉れるを此時始て朝廷より被進る事と知らる言二上解文一と有を以神宮には素より有來る所なるを思ふ可し神祇令に太幣者三月之内令二修理一訖と有義解に金水桶金線柱の事を記せるは天長に記せる文なれば延暦の故事を取れるにて大寶に在しならず又此に就て思ふに上に引る續紀に聖武天皇天平十年五月云々使下賫神寶奉中于伊勢太神宮上と有る此時にぞ玉纒横刀須加流横刀以下の神財は始て出來にけらし但其品々の中には往古よりの物も有べきなり寶基本記に倭姫命隨二神誨一云々盖於二礒宮一以二天富命裔等一所二鑄造一鏡八十三面大刀小刀五十二枚鉾弓箭神財四十二種式備二大幣一也と有れば元よりの物に伊勢にて仕奉來れりし也然云は續紀に文武天皇慶雲元年十一月庚寅遣二從五位上忌部宿禰子首一供二幣帛鳳凰鏡窠子錦于伊勢太神宮一と有に太神宮に式なる神寶裝束等に小窠錦綾一條と記して後迄の例に成り又神護景雲三年二月乙卯以二云々一爲二伊勢太神宮使一毎年男神服一具女神服一具其太神宮及月次祭着用レ之以二馬形牟婆一と有は二所太神宮及別宮迄も其當時の御服を奉られたるが永世の例と成れるなど次々に事具ひ行たと思ふ可し 式文に載ずと雖も皇太神宮の別宮には各神財を被奉る所なり儀式帳に荒祭

宮神財八種太刀七柄金作一柄黑作七柄楯一枚長四尺五寸梓一枚長一丈六尺弓二張胡籙三具皮作一具黑作一具呉床一具漆塗長二尺三寸青毛土馬一疋高一尺鞍立髮金笠鏡一面徑三寸納ニ緋囊ーと見えたり長暦官符此に同じ但鏡を御裝束物の中に收たる故に神財柒種と有り月讀宮神財十六種金作大刀二柄在ニ東一殿ー黑作大刀六柄正殿三字各二口小刀二柄在ニ西一二殿ー各一柄弓六枝西二殿二枝東二殿二枝東一殿二枝胡籙六具各矢五十東二殿二具西二殿二具楯四枚東二殿二枚西一殿二枚梓四枚東一殿二枚西二殿二枚鏡九面徑各二寸西一殿二面西二殿四面東一殿三面鈴一口徑一寸在ニ東一殿ー木絡絲二具在ニ西一殿ー研四面高二寸徑六寸別殿一面青毛土馬一疋高一尺鞍立髮金餝在ニ東一殿ー桶二合在ニ西一殿ー御鞍二具西二殿一具東一殿一具五色玉一連長二尺在ニ西一殿ー大笥七合各納ニ小笥二合ー三殿各二合一殿一合と有る此は伊弉諾宮月讀宮を合せて記せるなり其東一殿は伊弉諾尊東二殿は伊弉冉尊西一殿は月夜見命西二殿は荒魂命に在り長暦官符に載る所月夜見宮神財拾陸種伊佐奈岐伊佐奈彌宮神財拾七種にて式文にも儀式帳にも合ざるは當時定奉らせ給ふ所なり瀧原宮神財御笥一合銀端一柄高四寸銀桶一口徑一寸半弘一寸銀挊一枚長九寸銀楯笥一合納ニ鈴四枚ー鈴二口徑一寸弓三枝大刀二柄胡籙三具各箭卅箭梓二柄長一丈六尺青毛土馬一疋高一尺鞍立髮金餝と有て合せて十一種なり右の銀端を銀鐵と作るを今は長暦官符に銀銅端一基高四寸と有に校見て今改めつ伊雜宮神財九種金絡絲二足高四寸金桶二口高一寸徑一寸半金挊一枚長六寸金高機一具本高三寸五色糸織初有鏡四面徑各五寸黑作大刀三柄弓三張胡籙三具各箭卅箭鞆一口と有り長暦官符に載る所此外に銀銅端二枚靭三枚有て鏡の事無し其御裝束物の中に入たり又金挊無き故に凡て八種なり度會宮には戈二竿楯二枚弓二枚胡籙二具箭二隻鞆二枚合せて六種を被奉ると雖も御裝束の中に加へて別に神寶としては出されず然れば神寶を被奉る事は皇太神宮及諸別宮に局れる事と所見たり此條の始に引る御世々々の御史の趣をも考ふ可き者なり

○儲備大祓淸寶は類史に延暦十四年八月庚午大ニ祓宮中及左右京畿內近江伊賀伊勢等國ニ爲レ奉ニ伊勢太神宮裝束物ー也と有り太神宮式に凡太神裝束應レ送ニ伊勢ニ者預先宮中祓潔亦差ニ中臣氏ニ遣ニ京畿內及近江伊勢並太神宮司ニ左右京一人五畿內一人近江伊勢及太神宮司一人預同祓潔豐受宮准レ此と見えたる即其なり三代實錄に淸和天皇貞觀十年九月七日丁酉遣ニ云々等伊勢太神宮ニ奉ニ太神財寶ー是隔ニ廿年ー所レ造也大祓於建禮門前ニ而發レ使と見え光孝天皇仁和二年九月四日己卯申時於ニ建禮門前ー修ニ大祓ー以下明日奉ニ伊勢太神宮神寶ー使可ニ進發ー也と見えたり齋宮式に凡齋王將レ入ニ太神宮ー在前七月若八月同時遣ニ大祓使ニ左右京一人五畿內一人七道各一人と有と同じく此神寶を奉らせ給ふに就て淸めの大祓をも物爲させ給ひて奉らせ給ふ所なり○持忌波理氏は上に引る太神宮式に營造神寶幷裝束使云々七月一日神祇官西院始行レ事と有る如く其始より齋愼みて仕奉るを云なり如此く七月初より物爲て九月に至て送奉るなり神祇

令義解に其大幣者三月之內令二修理一訖（謂大幣者供神幣物各有二色目一金作桶金作桙奉二伊勢神宮一楯才奉二住吉神一之類是也三月之內者唯以レ月二不二以レ日計一云々）と有る御定に依る所なり（但し此は大嘗會に載たる文なれども義解の如くは凡ての大幣に亘る故に此に引出づ）又伊勢神嘗祭の幣帛使發遣は中祀にて其前後共に三日の神事なる例にて諸司廢務なり三代實錄に仁和二年九月五日庚辰奉二太神宮神寶一云々凡伊勢太神宮神寶廿年一度改作前修之後十二九年于茲一云々是日諸司廢務而神祇官不レ進二解文一責二過狀一と見えたるが如し（但同錄清和天皇貞觀十一年九月八日丁巳遣二正五位下左中辨源朝臣直右大史正六位上廣階宿禰八釣於伊勢太神宮一是日大政官停二尋常政一但非二廢務之例一也と有は遷宮の時ならざる故に斯るなり）〇預仕奉辨官某位某姓名乎差使氐進給狀乎申給久止申は太神宮式に右裝束雜物造備訖即差二使辨大夫史一人史生一人官掌一人使部二人神祇官史一人史生一人神部一人卜部一人一部領送二太神宮一其檐夫皆給二桃染衫一九月十四日粧二餝度會宮一十五日十六日奉レ徙二御像一同日粧二餝太神宮一十六日奉レ徙二御像一（先令二祭主申二粧餝之狀一若祭主有レ障令二宮司申一然後粧餝）と見えたる此を云にて此は造宮使の外なり續後紀に嘉祥二年九月丁巳遣二左少辨從五位上文室朝臣助雄等一奉二神寶於伊勢太神宮一云々三代實錄に貞觀十年九月七日丁酉遣二從五位下守右少辨藤原朝臣千乘左大史正六位上刑部造眞鯨等伊勢太神宮一奉二太神財寶一云々など有る如く此は王氏中臣忌部等に列ならず此部共に進發（イデタツ）なり（神嘗の例幣使は又別に中臣忌部等を率て參向ひ神宮にて一群になるなり）然れども古くは辨官なる人の參向はざりしと見えて儀式帳に新造宮御裝束用物事大政官大史一人史生一人神祇官大史一人史生一人賚二持御裝束物一百三十六物漆韓櫃八具大輿龍三具禰宜內人物忌等明衣百五十二具一云々と有り其例に依りと見えて彼仁和二年なるは九月五日奉二太神宮神寶一使左大史正六位上善世宿禰有友史生二人官掌一人進發凡伊勢太神宮神寶廿年一度改作前修之後十二九年于茲一云々と有り此には其長たりし辨官の人名を漏せるかとも云べけれども佗人こそは有め其長たる辨官の人名を脫して其次官の人名を記し出すべくも非れば此には無りしなり然れども嘉祥貞觀の例を引て右に引る式文の如くは定れるなり〇皇太神宮御遷宮の較略は儀式帳に皇太神御形新宮遷奉時行事常以二九月十四日一正殿內帳代帷寶殿御幌並禰宜內人等明衣乎波自二御裝束使所一令レ請と有此事度會宮にては十三日に在り（然るは太神宮式に見えたる如く度會宮十五日太神宮と其遷宮一日前に在る爲なり）以二十五日巳時一齋內親王參入坐於太神宮一暫侍二坐於外川原

殿院自手輿參入坐舊宮御門外自手輿下弖參入侍坐輿玉垣瑞垣間東方女孺二人從侍即太神宮司太玉串並蘰木綿乎捧第三御門爾候即女孺一人罷出弖受取其太玉串並蘰木綿乎持參入爾時親王受取着蘰木綿太玉串捧持拜奉給畢即親王還出度會郡離宮之と有は凡ての事共三時祭に參入給ふ狀の如し此日度會宮にては御像を新宮に徙奉る日なるが齋內親王は常の如く明日神嘗祭に就て彼宮には參入給ふなり然れば遷宮の縁に出て齋內親王の參向はせ給ふ事は皇太神宮に耳在る也けり然るは此齋內親王を奉らせ給ふ事は皇太神の御杖代なるが故なり其三時祭等に彼宮に參向はせ給ふも皇太神宮に參入せ給ふに就ての事なり此十五日は度會宮の十四日に當れるを彼宮の儀式帳には以十四日正殿內餝奉と有て外の事を記されず此は太神宮に齋王の向はせ給ふ事は倭姫命の御像を載奉らせ給へるに依れり度會宮は大佐々命の布理奉りし例を以齋王の向はせ給はざるなめり但當日彼宮の御遷宮なるを以て驛使以十六日の參宮は無なり太神宮司は今夕彼宮從奉に向ふなり御裝束物等被淸弖驛使王一人神祇官副已上一人忌部一人太神宮司共令參入外院太玉串所然禰宜內人並人垣可仕奉男女等以戌時悉皆大宮以西川原大祓淸即給明衣畢○今云三時祭川原大祓此なり度會宮の帳にては此事御遷幸供奉の前に在り此大祓有て直に太玉串を令持るなり以亥時始弖然則御裝束物等皆悉持參入弖

參入內院中御門にて○今云此は太神宮月次祭に依に外玉垣門の內にて內玉垣門の外なり儀式帳には玉串と云り使中臣告刀申新宮仕奉弖遷奉狀並御裝束備奉進狀如之申畢弖○今云此は此詞を申なり此記せる狀を以見るに常昔未定れる詞は非りしなる可し祝詞式に其臨時祭祝詞所詞隨事修撰餝祭進官經處分然後行之と有る如くなりしも知べからず此は廿年に一度有る事にて定れる常例なれども其間に年序を經る事なれば其時々に其狀を申けむを何れの時にか彼宮たるが遺りて此詞有なる可し倭太神宮式に九月十四日粧餝度會宮十五日奉徙御像同日粧餝太神宮十六日奉徙御像と有下に先令祭主申粧餝之狀若祭主有障令宮司申然後粧餝と有は此の事なり此詞の趣にては辨官の申す狀なれど然らず使中臣一人並太神宮司御裝束物乎令持弖新宮爾參入弖正殿御橋下侍東使中臣西太神宮使爾時大物忌先參上手付初次禰宜參上天正殿戶開奉天正殿內四角燈油然天御裝束具奉畢皆悉罷出但使波外直會殿坐○今云以上新宮にての行事なり太神宮司人垣仕奉人等召集弖即衣垣衣笠刺羽等乎令持天人垣仕奉男女等乎太玉串令持捧弖左右分立弖太神宮司率參入弖正殿乃御橋許候侍爾時行幸道布敷即大物忌御鑰被給弖正殿戶開奉先大物忌手付初次禰宜參上戶開即正殿內燈油然御船代開奉弖正體乎波禰宜頂奉相殿神東方坐宇治內人頂奉西方坐大物忌父頂奉遷奉行幸時立先○今云此由氣宮儀式帳に正體乎波禰宜頂奉相殿坐神三所乎波云々頂奉弖先立太神宮司次禰宜次物忌次大內人云々と有れば此は大神宮司の先に立て供奉るなりけり前に太神宮司云々と有より云下したる故に其と云はされども必其意を含て書るなり禰宜次宇治內人次大物忌父次諸物忌內人等及妻子等人垣立弖衣垣曳弖蓋刺羽等捧弖行幸道長九十五丈

敷調布廿七端一丈二尺令二幸行一爾新宮玉串御門爾立
留弖三音爲弖發令二幸行一至二瑞垣御門一爾留弖又三遍
音爲レ之稱二其音一如レ雞加二新鋼一即御河橋本留弖使中臣侍弖參入進二玉
串御門一爾侍令二幸行一坐 ○今云使中臣は先に外直會殿に侍ひしを幸行の供奉に加らず此に至て出て玉串御門に侍ふなり太神宮司は此より前に參て正殿の御橋本に侍て在なり倡人垣に仕奉る人共は本垣御門内に供奉り其より退て五十鈴川の御橋邊に在て其眞定給へるを待て退くなり 爾時禰宜正殿乃内爾令二入坐一畢
即内御門爾油火炬弖御裝束物如二注文一讀申弖令レ進一
納御床代一 ○今云内御門は瑞垣御門なる可し内重御門と云も同じ事なり注文とは造神寶使より注(シルシ)來る所の注文に引合するなり 畢時爾退出弖常告刀地弖八度拜奉弖罷出奴即
驛使母直會殿坐 ○今云常告刀地とは玉串御門の外を云り驛使母云々は行幸の間に使王以下の人々直會殿に侍ひ居なり止由氣宮儀式帳には新宮爾令二行幸一畢時始二太神宮司一弖人垣仕奉諸人夫等波罷出奴即驛使母館舍還宿と有り此は皆湯貴に預らざる故に其事畢て直に退事るなり 即禰宜率二諸内人等一湯貴供奉其行事其
所レ錄二祭行事條一と有て此夜に神嘗祭の夕大御饌朝大
御饌を引續きて供奉り十七日に齋内親王の參向はせ
給ふなど常の例の如し○度會宮の御事は凡て皇太神
宮より一日前に在る事なり 儀式帳に云く常以二九月
十三日一正殿内幌代帷質殿御幌並禰宜内人等明衣
乎 自二御裝束使所一令レ請弖以二十四日一正殿内餝奉畢
波 ○今云皇太神宮にては十四日十五日の事なり其例の如くならば十四日には齋内親王の向はせ給ふ可きを然らぬは天照太神の御杖代と爲て其宮の齋王に御在すが故なり此宮には十六日にぞ例の神嘗祭を畢て參入せ給なる 以二十五日一御裝束物

祓淨弖驛使王神祇官副已上中臣忌部太神宮司共令レ
持二參入外院玉串所一然先禰宜内人並人垣可仕奉男
女等爾明衣給畢即御裝束物等皆悉持參入弖參二入内
院中門一使中臣告刀申シテ下新宮仕奉弖可二遷奉一狀ヒ並御
裝束物乎令レ持 弖○今云此可二遷奉一の下に脫字有べし皇太神宮儀式帳に中臣告刀申二新宮仕奉弖遷奉狀并御裝束備奉レ進狀一如之申畢弖使中臣一人并太神宮司御裝束物乎令レ持弖と有る如ならざれば通え難き所也此迄古宮にての行事なり
新宮爾參入弖正殿御橋本侍 東使中臣西太神宮司 爾時禰宜上參入
弖正殿戶開奉弖正殿内四角燈レ油弖御裝具進畢皆悉
罷出但使波侍二外直會殿一然太神宮司人垣可二仕奉一人
夫等乎召集大祓爲弖○皇太神宮にては此より先に明衣を給ふ時に在る事也其即川原大祓なるなり 即
衣垣衣笠刺羽等令レ持弖人垣仕奉男女等爾太玉串令二
捧持一弖左右爾分立太神宮司率參入弖正殿乃御橋許
餝時爾時行幸道敷レ布 ○今云行幸の際に當て布を敷なり太神宮式に敷御道調布十八端とあり 即
禰宜御鎰被レ賜弖正殿戶開奉弖燈レ油然御榻代開奉留
正體波禰宜頂奉相殿坐神三所波大物忌大内人頂奉弖
先立二太神宮司一次禰宜次物忌次大内人立列弖新宮爾
令二行幸一畢時始二太神宮司一弖人垣仕奉諸人夫等波罷
出奴即驛使母館舍還宿 ○皇太神宮儀式帳には遷奉畢て常告刀地にて八度拜奉る事有り此には凡ての事を略き記せるは常の例にて誰も知れゝばなる可し倡行幸の事畢て驛使太神宮司以下の人々共に今夕の湯貴に預らざる故に運く退出るなり 然更禰宜率二諸内人等一湯貴供奉其行事其所レ錄二行

事條ニ也と有り如此く引續きて直に湯貴仕奉る事皇太神宮の如し翌十六日齋内親王參向はせ給ふなり

延喜式祝詞講義十四之巻

嘉永四年四月朔日事始同　淡路國　鈴木重胤　著
七月二日於大瀧光憲亭竟　出羽國　竹村吉顯
同國　山本眞秋　校

○遷ニ却崇神一祭

上件祈年祭より以下遷奉太神宮祝詞迄は凡て四時祭の統屬なるを此より以下出雲國造神壽詞に至る迄三段は共に臨時祭の部類にて其事其時を得て被行る神事なり　但右の四時祭と云中にも伊勢太神宮の詞共の中に齋内親王奉入時詞及遷奉太神宮祝詞の二段は毎年の事には非れども此二共に九月神嘗祭の度に在が故に今も四時祭詞の統屬には入たれども其實は此も臨時に在る事なる由已に其詞の下に注せるが如し

儋祝詞式の首章に其臨時祭祝詞所司隨レ事脩撰前レ祭進レ官經ニ處分一然後行レ之と有が如く臨時の諸祭には定れる詞とて非りければ神祇の官人及其事に預る所司より其事に隨ひ其詞を脩撰て豫て其當日より以前に此を太政官に進り其官の處分を經て然後に其事を行ふ可き御定なるが中に此詞の如く往古より常例と定有て被行るは其事の非るに殊更に物爲らるゝ事こ

そは無りつらめ何時にても宮中に災異の有れは此を被行る事なりしが故に其詞の定りは有し者なりけり（右の文に臨時祭祝詞所司隨レ事云々と有は臨時祭式に鎮竈鳴祭などと見えたる其等の事の今新に出來るに隨ひて其詞を定るを云なり）然れは臨時祭式の卷首に凡常祀之外應レ祭者隨レ事祭レ之非ニ辨官處分ニ不レ得ニ輙預ニ常祭ニと有も右と同義の文なるに就て思ふに此詞の如く已に定れるは更に官に進りて辨官の處分を經べくも非れは其應に祭る可き時に當りて其祭る可き處分を經て然此を被行る事なりけり（右の祝詞式の文と此校て詞に就て云と祭に就て云と其處分に異有る事を先に心得置可し）借臨時祭式を以推すに遷却崇神祭と云條有る事無しと雖も此詞の題號とは其祭名の異に爲こ必被載たる可く思えたれは此詞文と其臨時諸祭の幣物とを合せて曉り得べき凡ての例に傚ひて今此を校合せ見に似着はしき物種々有り一には霹靂神祭の幣物此詞に載る所に大に同じきが其終に右荒魂和魂各中分並煮レ粥而祭者新有ニ霹靂神ニ者依レ件鎮祭移ニ弃山野ニと有は詞に皇御孫之尊乃天御舍之内仁坐須皇神等波荒備給比健給事無氐志云々自ニ此地ニ波四方乎見霽山川能清地爾遷出坐氐吾地止宇須波伎坐世止云々と有に協へれば此其遷却崇神祭の一なりとは所知たり（此は大雷神の霹靂（カミトケ）し給ふ時に當りて被行る事成が其餘にも人の忿死せる靈の如きに何も雷と爲て霹靂し其恨に報ゆる事有り藤原廣嗣朝臣の靈霹靂して立時と云妖僧を碎き殺せりし事は已に續紀に出て人の知れるが如し又天曆元年丁未三月十二日酉時天滿宮託宣記に我瞋恚乃身止成太利我瞋恚乃炎天爾滿太利諸乃雷神鬼波皆我從類止成天惣十萬五千爾成太利只我所行乃事波世界乃災難乃事也帝釋毛一向爾任給太利其故波不信乃者世爾多成太利疫癘之事乎毛行間止宣聞波云々今波只不信爾有牟人乎波雷公雷公等爾御天令蹈殺牟と有る如く現世の人の身死たるも雷神と成て祟を爲す事も有めれば此を祭鎮るも所謂無き事に非ず）二には同式に羅城御贖（毎世一行 中宮准此）と云一條有は四時祭式（六月 祭條）に御贖祭（中宮 准此）云々右始從六月一日至于八日日別御巫行事其東宮日限並物數減レ年と有事の大なる者と聞えたるが其羅城御贖に差次て八衢祭（中宮 東宮減レ半）大刀八口弓八張箭八具鞆八枚五色薄絁四十疋腊海藻海松滑海藻各八籠（別受ニ六斤ニ）棚四脚と見えたる幣物の員數の大凡此詞に載る所と同じきは彼四時祭に六月晦日大祓有て已然の罪穢を清め道饗祭を被行て未然に禍災を避ぐと其旨全く一なるは大に由有ることなり（御贖に大祓に就て御形代の物を出し贖はるゝ事なる由は已に大祓の講義に委く書るか如し但六月御贖祭の始ニ從ニ六月一日ニ至ニ于八日ニ日別御巫行レ事と有を以考に毎世一行の羅城御贖も其如く日八日を限りて被行るなめり然ればこそ右の二條共に其料物を見に凡て其員八なるは日別に各其一を被用ると聞えたれ）鈴屋大人說（大祓詞後釋附錄）なる道饗祭詞條に其詞を信はれずて此祝詞は考に疑はれたる如く道饗祭には協はず今思ふに此は臨時祭式に八衢祭と云見えたれば其祝詞なりけむを取混らはして道饗のと爲るなり借遷却崇神と題したるぞ道饗

祭の祝詞には有りける」と云れたる事なれども其は神祇令季夏道饗祭（季冬同レ之）の義解に謂ト部等於二京城四隅道上一而祭レ之言欲レ令四鬼魅自レ外來者不三敢入二京師一故豫迎二於路一而饗遏也と有を深くも思ひ取られざりし説にて其鬼魅はしも黄泉國に屬る者なるが故に障神の御制を仰奉る可き所緣有る者共なれば其道饗祭に就て其祭を享け退く事已に道饗祭の講義に云るが如くなれば少しも取混はしたる所有に非ず但八衢祭も其同じ神の祭なる事次にいふが如し（鬼魅の障神に屬て其御制を仰奉る所緣はしも予詞に明らめたる事有り御靈會など其祭にて此亦遷却祟神祭の一種なり下に云を見よ）又此詞條に是は有上にも云る如く道饗祭の祝詞なるを混れて此題は有なり臨時祭式にも佗の書共にも遷却祟神祭は有事無し」と云はれたれども素より遷却祟神と云祭は非る筈なり其は臨時祭式に就て事の狀を稽るに或は霹靂の度（トキ）に値（アタ）りては其怒氣を山野に移し或は八衢祭を被行て京城內の妖氣を攘ひ或は疫癘の時などは其疫神を祭て不正の氣を逐（オ）ふなど其も此も祟神の心なるが故に其を祭和め遠く遷却ふに就ては何れにも此詞を被用たる者と見ゆれは臨時祭式に別に遷却祟神祭と云條は被立まじき事なり（其八衢祭の委しき狀は今知る可からぬが如くなれ共其大凡道饗祭に同じき事其詞に大八衢爾湯津磐村之如久塞坐皇神等之前爾申久八衢比古八衢比賣久那斗止御名者申氏云々と有を以知べし然れば鈴屋大人の道饗祭詞を八衢祭のと爲られ此遷却祟神詞を道饗祭のと爲られたることは誤なれ共に同じき條理（スヂ）の物と見定られたる神眼を以て見認られたる所なれば却て其説の此予か言を超すに至れるは此大人の思賜也古人の説と云者の往に見遁し難き事此を以知べし或問書の如きは道饗祭の障神祭なるに遷却祟神詞を八衢祭に用て其祭る所障神ならむは何れか正詞一にて在なむな別事の如く其詞の別々なる事心得ず如何答此は御門祭詞の有に祈年月次等祭に其神の詞有と同じく同じ御功を仰ぐ中にも其祭る事からの異なるが故に其詞の又外に在と此も同じ意味成也）三には臨時祭式に宮城四隅疫神祭（若應レ祭二京城四隅一准レ此）云々畿內堺十處疫神祭（山城與二近江一堺一山城與二丹波一堺二山城與二攝津一堺三山城與二河內一堺四山城與二大和一堺五山城與二伊賀一堺六大和與二伊賀一堺七大和與二紀伊一堺八和泉與二紀伊一堺九攝津與二播磨一堺十）云々と有は上なる道饗祭條に註る如く其疫神と云は疫を防ぐ神にて謂ゆる障神祭なるが古より有來し事なるを如此く其所を被定たるは續紀に寶龜元年六月壬辰朔甲寅祭二疫神於京師四隅畿內十堺一と有る其時よりの事なるが祭式と祝詞式とを合せて其次第を推索るに祝詞は此詞有て次に遣二唐使一時奉幣次に出雲神壽詞有り祭式には右の宮城四隅と畿內十堺の疫神祭有て次に祈雨神祭八十五座（大并）と有れども此は遷却祟神と云べき事ならねば此は唯事の因に被載たるにて敢て拘るまじかるを其次に遣蕃國使時祭（其一）造二遣唐使舶一木靈並山神祭（其二）開二遣唐舶居一祭（其三）唐客入京路次神祭（其四）蕃客送レ堺神祭（其五）障神祭（其六）など有る此六共に唐國の

事に就たる一統なるを開遣唐舶居祭と有ぞ遣唐使時奉幣にて其次に賜出雲國造負幸物と有れは其に其次第同しきを以此の遷却祟神祭と云は右の京城畿內の疫神祭なるを先思ふ可し　但其詞は遷却祟神詞をこそは襲用され右の疫神祭も其一種なりと知べし右の疫神祭を續紀には高野天皇神護景雲元年と有り舊記を以て祭祀たると改元の賞を奉りたるとの差耳なり　偖右の疫神と云は疫を行ふ神に非ず疫を遏る神にて道饗祭詞に謂ゆる八衢比古八衢比賣久那斗の三神に坐事申も更なるが其疫癘神は此神に附屬ひ奉て其御趣けを仰奉る事にて纔に疫癘を成行ふ可からざる所謂有る事と聞えて右に引る道饗祭の義解に欲令鬼魅自外來者不敢入京師故豫迎於路而饗遏也と有如く此道饗祭に就て其神等に遏はれ奉る鬼魅も共に其祭に預るは全く其神等の御し給ふに依が故なり　此例猶有り禍津日神は禍事を立行ふ神には坐す邪を罰め惡を徵し給ふ[illegible]に坐るも其邪を成し惡を行ふは諸の枉神等の所作なるか其等の者共は悉く亦此禍津日神の御所置を仰ぎ居と同事なり　若く此疫神を祭和むるを御靈會と云ひ世を恨て身死たる靈を祭鎮る社を御靈祭と云ひ又其祭をも御靈會と古くより云來れるは世に怨有て祟を爲むと爲る靈は皆右い疫神の御許に侍ひて其神の御許可を奉はりて其祟を成す事なり今八所御靈の一例を引て此を曉す可し其一は崇道天皇に坐り此

は光仁天皇の皇子早良親王也後紀延曆十六年條に初早良云々太子幽死其靈悩逼皇太子醫巫不効同十七年條に近年依親王祟世人多病悩或夭死先是二度遣勅使然而神祟不止風波衝盪宮墻漂沒云々と有る此御祟に依て祭られ給へる也其二は其御子伊豫親王なり其三は藤原大夫人此は崇道天皇の妃伊與親王の御母なり其四は吉備內親王なり天平元年縊死し給ふ御靈を祀れり俗に此を吉備公と云事甚誤れり其五は文屋宮田丸其六は橘逸勢其七は藤原廣嗣其八は火雷天神此は菅家に御在り以上八座なり三代實錄に貞觀五年五月廿日於神泉苑修御靈會云々所謂御靈者崇道天皇伊與親王藤原夫人及觀察使橘逸勢文屋宮田丸等是也並坐事被誅寃魂成厲近代以來疫病死亡甚衆天下以爲此災御靈之所生也今茲春初咳逆疫百姓多斃朝廷爲祈至是修此會以賽宿禱也と有は右の御靈を祀れるなるが賽宿禱と有は疫神を被祭たる其に屬て右の御靈を鎮祭られたりと見ゆ此御靈會と云事の物に所見たる始なり　猶桓武天皇の大御世に井上內親王の靈祟を爲給へるに依て大和國宇智郡に祭鎮められ藤原忠文小野宮左大臣殿の將門誅伐の賞列に入ざるを恨て宇治川に沒しゝ其靈數祟を爲し故に宇治離宮に祀れる其外にも餓死の人の靈の寃魂の鬼魅と爲て其仇を報ひ疫癘を病て死たる靈の厲鬼と成れるなど其死る事各正しき

道を得ざる故に死て天上に復命する事を得ず黄泉國より疎で荒び來る禍事に觸む故に其を守り給ふ障神に屬居る者なり　祇園社の中間は須佐之男命俗に牛頭天王と稱ひ西間は奇稻田媛命俗に少將井(イ)と稱ひ東間は八王子俗に蛇毒氣神と稱る此八王子を此社及日吉神社共に五男三女神と申す事なれども後人の杜撰(ツクリゴト)なり實には八王子と聞ゆるは障神の御名を八衢比古八衢比賣久那斗神と申すを漢語に云約めたるなる事已に道饗祭條に河內國大縣郡常世岐姬神社を八王子と申すより例證を引て辨たるが如くなるが蛇毒氣神の蛇は邪の義なるを八岐大蛇の事附會(コジツケ)て蛇字は書るにこそ有けれ實には疫神の謂なり此に因て此社の祭を御靈會と云なり二十二社注式に　圓融院天祿元年六月十四日始御靈會自今年行之と見えたり　法道春が神社考に蛇毒氣神是八岐大蛇之化現歟凡皆爲行疫神今六月御靈會於四條京極供飯一蓋題寺蘇民(攘)樣云々と有れども六月御靈會は蘇民が故事に拘れるならず疫神に就て被行るなめり　小社熊社神鎮沙汰文に載たる依副作に延久二年十月十四日感神院燒亡と有て同三年六月二日後朱雀上云寶三宮(?)可奉遷安置八王子御體三體云々と有に八王子の御體なるが御體三體なるは五男三女神ならぬ證なり同年七月廿日宣旨偁蛇毒氣神像可奉遷云々と有に合せてもの八王子には蛇毒氣神なる事を祭らむ可し且五男三女神を蛇毒氣神と云べき由の非るを以て此八王子は八衢神にて疫神なる事をも思合す可し　又山城國葛野郡なる　紫野今宮は疫神を祀れるなり日本紀略に　一條天皇正曆五年五月廿七日　丁未爲疫神修御靈會木工寮修理職造神輿二基安置北野船岡山云々　城中之人招伶人奏音樂都人士女賫持幣帛不知幾千萬人禮了送難波海此非朝議起自巷說と有は今の紫野今宮の地なり但此時未社有に非ず此地に疫神を祭和めて疫を行ふ神を難波海に送出せること遷却祟神祭の趣に合へり又同書に長保三年　五月九日庚辰於紫野祭疫神號御靈會依天下疾疫也是日以前神殿三宇瑞垣等木工寮修理職所造也又御輿內匠寮造之京中上下多以集會此社號之今宮と有り此を帝王編年記に五月九日船岡祭今宮是謂紫野明神七月以後疫死漸止と見えたる御靈會も疫神の爲に被行るなり神殿三宇は障神等三柱に坐が故なり　大倭神社注進狀に載る率川社記園障神社三坐條に舊記云件神等素戔嗚尊之子孫守疫也傳聞園神者大己貴命之和魂大物主神也韓神者大己貴命少彥名命也兩神者當天下爲蒼生則定其療病之方紫野今宮三社主宰者流刻右とあるに依れば今宮の社家の傳ふる所宮神の三柱にて守疫神也と雖日本紀略帝王編年記に載る所は全く疫神にて障神三柱なり今は例の多さに亂びて其方に定めつ然れども園韓神社も共に御方を合せて鎮り御在す事と見え[illegible](ケ)む　右の如く遷却祟神祭と云者の太體三條なるが其に就て猶熟思ふに此詞は彼道饗祭を本に取て作る(ナ)も著く彼詞に高天之原爾事始氐皇御孫命止稱辭竟奉と有を此詞に高天原爾神留坐氐事始給志云々と有て其言の狀の同じく出たるは其を本に取て物爲るが故なめり　然れども其文は悉く同じからまじ

き筈なり其は道饗祭より出たるにも有れ已に別に詞を立るからは其事其趣の亦格別に在べき者なり　倩道饗祭は障神を齋ひて鬼魅の外より來るを路上にて饗し遏めて其內を爲て安から令るの祭なるを此祭は或は霹靂或は疫癘の時に當りて其荒び健ぶる神靈を外に遷し令出て其內に在る所の天氣を攘逐ふ事なり此即四時祭と臨時祭とに相別るゝ所以なる者なり

高天原爾神留坐氏事始給志神漏岐神漏美能命以氏天之高市爾八百萬神等乎神集集給比神議議給氏

高天原爾神留坐氏は高天原に御在し坐てと云義なり鈴屋大人說に此は皇御孫命を天降し奉給ふ事に就て云出る語なれは神留坐氏と姑く語を斷て下文の天降所寄奉志時爾と云へ係て見べし」と云れたるが如し但神留坐の留を留り坐意に見られたるは當らず留は積字の意にて其所に充滿て坐るを云ふ○事始給志は已に道饗祭詞の下に云り文武天皇御紀の詔に高天原爾事始而遠天皇祖御世中今至麻弖爾云々と有り此なるは皇御孫命を天降し奉給ふ事を起始め給ひしを云ふ同じ語ながら道饗祭なるは大八嶋祭を事始給ひしを云ひ續紀なるは下文に天津日嗣の御事を始給ひしを云ひ此は唯汎く御天降の事を物し始給ふ由を其首にて先る演也○神漏岐神漏美能命以氏は常には皇親とか親とかの言を上に置べきを然らざるは事始給志より直に續くが故也○天之高市は天國の中にて諸神等の集會ひ給ふ域を云なり神名秘書に天之高市天宮是也と有るが如し神代紀天石窟段一書に故會八十萬神於天高市而問之云々と有を正書に于時八十萬神會於天安河邊と有れは天安河の邊なる平地の最高處と云ふ市とは神等を集る料に設たる所なるを以云ふ後に交易の人の集ふ場を市と云も此より出たるなり古事記朝倉段歌に夜麻登能許能多氣知爾古陀加流伊知能都加佐と有を傳に倭之於此高市小高有市之高處と訓れたる如く高市の高は平地の高き處を云り考に古は大宮所を高市と云り高は稱言市は天下を被集る由なり」と云れたるは麁說なり高市とは大宮所の謂に非ず物の集り會ふ義に取て云なり高を稱言と云事更に由無し　又神代紀御天降段一書に是時歸順之首渠者大物主神及事代主神乃合八十萬神於天高市以昇天陳其誠款之至と有を且と見ては天高市は此國土の地名にて其より天に昇給へるが如くなれども然に非ず文意を熟考るに右の文は合八十萬神昇天以於天高市陳其誠款之至と句の次序を換て見れは心得易きなり大物主神事代主神等八十萬神を合て其誠款の至を天高市に於て陳し給へる由なり是以て天高市とは皇祖天神の八百萬神を會て政ごち給ふ所なるを知べし　予先には神名式に大和國高市郡天高市神社大月次新嘗と見え且高市郡と云も有れば此地にて大物主神事代主神の八十萬神

合て天に昇坐けむより地名と成れるならむと思ひしを今思へば天降りし時天上より天香山の降れる時に其天高市も共に降れるが故に高市郡と云に至れるなる可し天高市神社と云も天香山神社と云るも同じく其地名に擬れる者なり紀傳廿二に大和国高市郡も神武天皇の畝火宮の地に就ての名なる可し」と有は信られず ○神集々給神議々給氐は皇御孫命を天降し奉給はむと為て八百萬神等を天之高市に召集へて事議り給へるを云

我皇御孫之尊波豐葦原能水穗之國乎安國止平氣久所知食止天之磐座放氐天之八重雲乎伊頭之千別支爾千別氐天降所寄奉志時爾

此段總て大祓詞に同じ但彼詞には荒振神を神問し神掃の事を文の中間にて云るは此は末に廻して其事を委曲に云が為に此にては省るなり然るは彼と此と同じ條理を云中にも彼詞は此國を安國と平けく所知食す御事を専と立て此詞は今も荒び健ぶる神の在に當ては還却ふ事なる故に荒振神を言向の事を云列ねて即此詞の首尾を全く為る故に其差異格別なり 此むして此な見ざれば其意を事能はざる者なり唯に謂に娯の文面なりと麁略に思ふ事勿れ ○我皇御孫之尊波古くは命字を書事なりしかども尊字に作るは中頃の状に改たるなり 考に此文多くは古風ながら尊字を書しからは此篇の初に書しならむ若此字は後人の欲書かしと云れつれど然に非ず鈴屋大人説の如く、其詳説に尊字を書事は古は無りし事なれども書紀に書始られてより後に此を書も常の事にて其も何か苦しからむ然るを考に此字有る度毎に尤めらるゝは本に其主なり」實に読く誰も可きたらず實に其古かりけり中々に此篇の頃ひ物には見えず ○所知食止の下に事依志奉氐の語を加て聞べし 何も此に省けるならず自然に何様さに依て然聞取るゝ故に省りたる者なり ○天降所寄奉志時爾は天より降著給へる大綱を先此に如此云置て次に荒振神云々の事を演て小目と為るなり 文に如此く巧に妙なる所有に依て其神々しき迄に其趣深く聞ゆめり

誰神乎先遣波水穗國能荒振神等乎神攘攘平氣武止神議議給時爾諸神等皆量申久天穗日之命乎遣而平氣武止申支是以天降遣時爾此神波返言不申氐次爾遣志健三熊之命毛隨父事氐返言不申又遣志天若彦毛返言不申氐高津鳥殃爾依氐立處爾身亡支

誰神乎先遣波は本に遣志波と有を然削改たるは鈴屋大人説に一本又元々集に被引たるにも共に志字は無し遣左婆と詠べきなり志の字は後人の情進に加へたるなる可し若遣波志ならば氐と云では言浮たり」と有に随へり 予も前には氐字の置たるならむと思ひしかども遣左婆と遣波志氐を何可むと訓試るに未然に係て遣左婆と云ル勝れるに依て今定む ○倩此は古事記御天降段に爾高御産巣日神天照大御神之命以於天安河之河原神集八百萬神集而思金

神令ニ思而詔ニ此葦原中國者我御子之所ニ知國言依所ニ賜之國也故以下爲於ニ此國ニ道速振荒振國神等之多在上是使ニ何神ニ而將ニ言趣ニと見え神代紀同段正書にも故高皇産靈尊召ニ集八十萬神ニ而問之曰吾欲レ令レ撥ニ平葦原中國之邪鬼ニ當レ遣ニ誰者ニ宜也と有此を云なり此國の荒振神を言向に降し給はむ神を選び給へるを云ふ古事記に使何神と有も神代紀に遣誰者と有も共に此なると同じ事なり如此て公然（オホヤケ）に宣ひ出して八百萬神の御量を令せ給ふなり○荒振神等は此國に素より住る神の天神の詔命を奉らず爲て己が乖々荒び居を云ふ古事記に於是天忍穗耳命於ニ天浮橋ニ多々志而詔之豐葦原之千秋長五百秋之水穗國者伊多久佐夜藝弖有那理云々と有は其神の荒ぶたるを噪大凡に云るなり其實は神代紀正書に然彼地多有ニ螢火光神及蠅聲邪神ニ復有ニ草木咸能言語ニと見え又一書に葦原中國者磐根木株草葉猶能言語夜者如ニ熛火而喧響之晝者如ニ五月蠅ニ而沸騰之と有など皆荒振神の所爲也記傳十三十丁に右文を引て云く此等皆荒神の多有狀にして上に佐夜藝弖有那理と詔はせるも如此る狀を見行はして也是時葦原中國は猶如此荒振神多くして未平るは何ぞと云に須佐之男命の黃泉の汙穢の遺（ナゴリ）有て未清淨き天照大御神の御德化の至及ばざる故なり○今云須佐之男命の黃泉の汙穢と云ふ由來し伊邪那岐大神の御身の汙穢に屬給へるに依て成れる枉津日の所業なるを須佐之男命の事に思ひ混へられたるなり

と有が如し但此頃大國主神の未順ひ奉給はざりし程なれば其神の在（ココ）むに荒振神とは云へからざるに似たりと雖も此は然事を巨細に別つ可き所ならず鈴屋大人說の如く凡て天神に順ひ依來ずして踈々しき神を汎く云るなり神撥々平（麻本）登と有て神問の語無きは大國主神の御方に係て心得まじき爲なるが故なる可し此は上なる大祓詞なる荒振神の條に云れば此に云べきならぬを一應（コトトヒ）り齋言せるは彼と此と同じき中に少し心を換て心得べき事有が故なり○神撥々平登は言向るを云なり上に引る古事記に故以ニ爲於ニ此國ニ道速振荒振國神等之多在上是使ニ何神ニ而將ニ言趣ニと見え下にも汝所ニ以使ニ葦原中國ニ者言ニ趣和其國之荒振神等ニ者也と有を合せて曉る可き事なり鈴屋大人の大祓詞後釋に彼詞の神掃云々は荒振神に係り神問云々は主と大名持命に係れり」と云れたる如く此は唯荒振神の事耳を云故に神撥云々と云て神問云々の語非るなり出雲國造神賀詞には殊に條々を判然（キハヤカ）に分爲て荒布留神等を撥平け國作之大神をも媚鎮て大と有り此にて尋ぬ事も無く明かに、其事は神問云々に寓れたるなる事著明き者なり○神議々給時爾諸神等皆量申久古事記に是使ニ何神ニ而將ニ言趣ニ爾思金神及八百萬神議白之と有此なり大殿祭詞には以ニ天津御量ニ弖と云り神代紀には故高皇産靈尊召ニ集八十諸神ニ而問之曰云々惟爾諸神勿レ隱ニ所レ知僉曰云々故是神議ニ衆言ニと有れども略りに擧し○天穗日之命乎

遣而平止氣牟申支は古事記の右文に[illegible]さて爾思金神及八百萬神議白之天菩比神是可レ遣と見え神代紀に惟爾諸神勿レ隱レ所レ知僉曰天穗日命是神之傑也可不試歟と有此なり出雲神賀詞には高天能神王高御魂神魂命能皇御孫命爾天下大八島國乎事避奉之時出雲臣等我遠祖天穗比命乎國躰見爾遣時爾云々と有を立て思ふに此神を被降し事は荒振神の征代と爲て被遣しには非ずて後に征伐の御使を被降む爲に國躰見に先被遣し者なりけり其は天忍穗耳命の天浮橋に立して詔へる御言に豐葦原之千秋長五百秋之水穗國者伊多久佐夜藝弖有祁理と有も國に就て宣へるなれは國躰見と云事征伐の謂には非ず其國に趣しめて域中の消息を見認しめ給はむとなり但其消息に就て其取擬ひ鎭平け給はむ道の有が故に其極り終に征伐の御使の如くは成れりしなり古事記の右の下に高御産巢日神天照大御神の御言を擧たるに故以下於二此國一道速振荒振國神等之多在と云々と有は天忍穗耳命の水穗國は甚く喧擾て在けりと申上給へるを其は道速振る荒振神の所業なりと思ほし取給へるなれば此には神の荒びより國の喧擾るを主と云所なり然れば記傳に此穗日命の事を說て先初に此神を天降し遣しゝは天若日子の如き征伐の御使には非ずて神賀詞に云る如く此國の狀を見て其狀に隨ひて宜しき樣に令謀むとにて有けむかし其故は彼天若日子を遣しゝには弓矢など賜ひし事有を此神には然事も無ればなり若征伐ならば最初に此神を遣す所にぞ弓矢などの事は有べき業なりける」と云れたるぞ甚々愛き說なりける此に就て再神代紀を閱に御天降段第一の一書には天穗日命の事を省きて初に天稚彥の事を云るは然る由に依れる者に

なり猶下なる天若彥の下及神賀詞に就て委しく云べし然此の平氣牟の語を記には言趣とも言向とも作り萬葉廿五十丁に知波夜夫流神乎許等牟氣と有り言趣の言は言を說て人を歸順るを云なり大殿祭詞に神等能伊須呂許比阿禮比坐乎言直志和志坐氐御門祭詞に天能麻我都比登云神乃言武惡事爾相麻自許利相口會賜事無久云々待防掃却言排坐氐と有も言を當然に令趣るなり然るを記傳に言は借字事にて事依事避などの事と同じと」云れたるは言と事と一途にて當れるが如くなれども其旨を得ざるなり平氣は記傳に牟加世にて背る者を此方へ令向る意の言なり背向は此反にて彼方へ向なり平字を書て牟氣と耳も云り此方へ向は即歸服なり」と有は然る言なり大殿祭詞に親王諸王諸臣百官人等乎己乖乖不令在邪意穢心無久と有如く上の御趣に歸服ず己が心の向方に任するは邪意穢心の態なり其引直し令憑るを平るとは云ふなり此事已に大殿祭御門祭等詞の下に委く辨たれば立復りて見合す可し然れは言趣を追罰の事と耳心得べきならず其始に言を以て理を說諭して君上の命令に歸服は令るが本意にて其に叛き逆ふ者を此を征伐が故に終には其稱ともなれるなり此なる天穗日命は始より其任なりしが故に大國主神に媚附給ふ狀に正史には被記たる所なり○此神波返言不申氐記に故遣ニ

天菩比神者乃媚附大國主神至于三年不復奏紀に即以天穗日命往平之然此神佞媚於大己貴命比及三年尙不報聞と有を云なり記傳に復奏（カヘリコト）とは使人の還て申言と云意にて加牟理は其使に係る言なり萬葉十九に平安早渡來而還事奏日爾云々」と有り此は天若彥を遣はされし頃迄も猶此國の事竟給はざりし故に天に還參上り給はざるを云にて此は此次に御使を被降るに就てこそは返事不申とは云れ實には出雲神賀詞に出雲臣等我遠祖天穗比命乎國躰見爾遣時爾天能八重雲乎押別氐天翔國翔氐天下乎見廻氐返事申給久云々と有を以稽るに天若彥よりは後經津主神よりは前に返事申給ひし者なり記傳に天穗日命の復奏し給ひしは三年も過て後の事なれは此記などには其間甚久しく還給はぬ間を言て即次の天若日子の事に移れる故に其後に此穗日命の復命給ひし事をば混かして傳漏せるなる可し然後に雉名鳴女を遣す時に唯天若日子の事を令問る由のみ有て此穗日命の猶久しく還らぬ所以を令問る事は見えざるを思へば其以前に既に返事申給ひし事所知たり」と有は實に然り此詞の如きも同事にて直に引續きて天若彥の事に移れる故に其復命（コト）し給ふ委曲なる子細に至る迄は及はざりしなり然るを神代紀に天稚彥の事を云所に此神亦不忠誠也と有る亦の字は先の穗日命を不忠誠として書るなれば事實に於て協はざる者なり記傳に三年に至まで待給へども還來坐ぬ故に終に返事申さで止ぬる物の如思はれ奉りしなり」と有れども然らず其復命の遲きを覺束無からせ給ひて其子健三熊之命を被遣たるが猶返事申さゞりしかば亦荒振神の大御命に歸服ひ奉らぬ事と思ほし定めて天若彥は被遣たるなり此時に至て更に弓矢を賜はせたるを察ふ可し〇次遣志健三熊之命の次は天穗日命に續（ツギ）て降給へるなり天若彥の上には又遣志と有るは更に改て被遣る故に又と有を此は天穗日命に就て云所なる故に次と云り神代紀正書に故仍遣其子大背飯三熊之大人大人此云于志亦名健三熊之大人と有は此なり古事記に天菩比命之子建比良鳥命此出雲國造等之祖也と有を合すれは其同神なる事知らる記傳に神名帳に因幡國高草郡に天穗日命神社天日名鳥命神社阿太賀都健御熊命神社と別に在れば一には非ぬにや」と疑れつれども祝詞考に同神と定られたる方勝れり然るは神賀詞に己命兒天夷鳥命爾布都怒志命乎副天天降遣天荒布留神等乎撥平氣國作之大神毛媚鎭天大八島國現事顯事令事避支と有を以思ふに天夷鳥命と申す夷は鄙（ヒナ）にて此顯國の事を天上に對て云るなり鳥（トリ）は取（トリ）にて此國を言趣て皇御孫命に令獻給へる功に依て負坐る御名なり天上の世間の最中央（マホラ）なるに對ひて此國を鄙と云事神代紀一書なる下照媛の歌に阿磨佐箇留避奈菟謎廼云々と詠る天放る鄙女と云事にて御自國ツ神の女なるを[illegible]し給へるなり古事記には右の事を爾天鳥船神副建御雷神而遣と有り夷鳥も鳥船も同言なり健三熊之命と申す出雲國意宇郡熊野は其裔の國造の本居なるを以思ふに此命の天より降著給ひて此處に在て熊野杵築兩大神に仕奉られしに依れるなる可

し健と負坐るは其國平の御功に依れる事阿太賀都健御熊命と申も敵勝なるに准へて知べし又說有り其父天穗日命と申も稻穗に依れる如く聞え大背飯と申す其同じ事と聞ゆるに就て思へば三熊は借字にて御稻(ミクマ)なる可し和名抄淡路國三原郡の郷名に神稻(クマシロ)と見え懸税を倭姬命世記に懸久眞と有に依れば全く稻な久麻と云るなり然れば神代紀なる保食神段に是後天照大神復遣二天熊人一往看之是時云々天熊人悉取持去而奉進之と有る此天熊人と同神なるが故に其功を稱て其父神をも天穗日命と稱(マチ)し此命の大背飯と負坐るも其を悉取持去て奉進る時に背に其を負給へる事跡より號りたる可し○隨父事氐は天穗日命の大國主神に媚附給へる其事に從ひ物爲給へるを云なり神代紀に即以二天穗日命一往平之然此神佞二媚於大己貴神一比二及三年一尙不二報聞一故仍遣二其子大背飯三熊之大人亦名武三熊之大人一此亦還順二其父一遂不二報聞一と見えたるが如し然るに記には所レ遣二葦原中國一之天菩比神久不二復奏一亦使二何神一之吉と有て此命の事を云ざるは其父の消息を伺しめ給へるが故なり故此の次序には載られずして下なる建御雷神の天降らしゝ所に耳載たり此にては其父に屬と云耳にて主々しからざる所なればなり神賀詞も然り思ふ可くなむ返言不申と右の神代紀に遂不二報聞一と有此なり如此は有れども其父と共に返言申給ひけむ事は上に註る如くなるが此も引續きて天若彥の事に移るが故に傳漏せるなり神賀詞なる天穗日命の言に豐葦原乃水穗國波晝波如五月蠅水沸支夜波如火瓮光神在利石根木立靑水沫毛事問天荒國在利然毛鎭平天

皇御孫命能安國止平久所知坐之米牟止申氐己命兒天夷鳥命爾布都怒志命乎副天天降遣天云々と有る如く初度に父神と共に國體を見巡らし次度には安國と平け奉給へる御功坐り此事神賀詞の下に云べし此父子二神を忠誠ならぬ神の如く人の思ふめるが心苦しさに少云耳○又遣志は記に是以高御產巢日神天照大御神亦問二諸神等一所レ遣二葦原中國一之天菩比神久不二復奏一亦使二何神一之吉爾思金神答白可レ遣二天津國玉神之子天若日子一故爾以二天之麻迦古弓天之波波矢一賜二天若日子一而遣と有此なり又遣の又は天穗日命を國躰見に被遣しかども其復命い聞えざるを以其子健三熊之命を引續きて被遣れしを父神の事に從事て物爲給ふ事の有けむが共に未其事を竟さゞりしかは復奏ざるに依て更に又征伐の御使を天若彥に任して降給へる由なり然るを神代紀に天稚彥が事を云るに此神亦不二忠誠一也と有は天穗日命健三熊之命の上に取ては甚不足ぬ事也是選者等の杜撰なる事云も更なり但記に健三熊之命の復命さゞりし由を云ざるは、父神の如く主々しきに非ずして其父神の消息を伺給へる故に其に含たるなり偖此度の御使は天穗日命父子の報聞の期の甚く後れし故に愈々荒振神の大御命を信奉らずして己が乖々晴擾き居由に思看し定させ給ひて征伐の御使と爲て天稚彥

を降させ給へる者なりかし其は神代紀一書には天穂日命父子の事を擧ずして直に天照大神勅二天稚彦一曰豐葦原中國是吾兒可レ王之地也然慮有二殘賊强暴橫惡之神一者故汝先往平レ之乃賜二天鹿兒弓天眞鹿兒矢一遣レ之と有を以所知たり正書及古事記の如く天穂日命を被遣し由無は前なるは國體を巡察(ミアキラメ)しめ給はむし爲て天降し給へるにこそ有けれ征伐の御使ならぬ事此を以曉る可し（記傳に天穂日命を天降し遣しゝは次の天若日子の如き征伐の御使には非ずて只彼神賀詞に云る如く此國の體を見て其狀に隨て宜き樣に令議むとにぞ有けむいし其故は彼天若日子を遣しゝには弓矢など賜ひし事有を此神には然事も無ればなり若征伐ならば最初に此神を遣す所にぞ弓矢などの事は有べき業なるを又建御雷神を降し給ふ所にも弓矢などの事(サタ)無きは其は既に天若日子の所に出つれば略る事本より然有べきなり」と有ぞ謂れたる語には有ける）○天若彦は古事記に天津國玉神之子天若日子と見え神代紀にも天國(アメノクニ)玉(タマ)之子天稚彦と有り天津國玉神は神名式に土佐國吾川郡天石門別安國玉主天神社と有れは天石門別神にて即天手力男神に坐り國魂とは天國を保護るの謂なり其は垂仁天皇御紀なる一書に載たる大倭大神の御誨言に我親治二大地一官と宣へる如く其地處に就て云なり（故大人等の國經營に功有し故に國魂と云由に云れたるも僻事ならねども其も貴麁かりけり萬葉に魂は物々に靈備れど云々と喋る如く其守護坐す御魂を國中に充せ給ふ由に稱れる御名也■も古に引る大書と云書に天國玉者天之掌レ玉神也云々と有などは殊に乳臭き說也今辨る迄にも非ず）天若彦は神代紀に傳曰天國玉之子天稚彦是壯士也宜試之と有は天石門別神の子に在れは決めて健き神なるを以此征伐の御使には被降し者なりけり記傳十三丁十九に神名帳に出雲國出雲郡に天若日子神社二有り又三代實錄十九に授近江國正六位上天若御子神從五位と有も此神にや（古今集序細註には此神を天若御子と云り又狹衣物語に大將を天より迎に來し入を天若御子と云るも本此天若日子の事より起れり云々○今云山城國乙訓郡なる彼丹塗矢の化て成れる神の子を片山日子神と云るを神名式に山城國愛宕郡片山御子神社とあるも此の例なり同式に備前國邑久郡片山日子神社有て亦■■郡に■神社三座と有を合考るに日子と御子と同じ）紀記共に此神耳は神とも命とも云る處一も無し其返言申さゞるを以貶しめたるなる可し」と有は然る言なり（以上取意偖右の神名帳及三代實錄共に神と有は其祭る社に就て云なれば事實を記して褒貶を云時に非るが故に神とは云り）偖天稚彦が高津鳥の災に依て身亡たる時阿遲志貴高日子根神其喪を弔ひ來坐る御言に我者愛友故弔來耳と宣へるに就て猶考ふ可き事なむ有る其は此神の後天津羽々神は土佐國風土記に土左郡有二朝倉鄕一鄕中有レ社神名天津羽々神天石帆別命今天石門別神子也と有り斯れは天津羽々神と天若彦とは兄弟に爲て共に天津國玉神の子なり高日子根神の天若彦を愛友と宣へる事は其妹下照比賣の嫁る耳ならず彼兄弟なる天津羽々神を妻坐し故に殊に其中善し〻坐し者なりける（天津羽々神は日本後紀に阿波神是三島大社本后也と有神と同じく阿波咩命とも阿

波々神とも申せり出雲ノ土記楯縫郡の條に神名樋山云々古老傳曰阿遲須枳高日子命之后天御梶日女命來坐多吉村ニ云々と見えたるも其同神なる可く所思ゅ天ノ梶日女命とは天御門日女命と申す事にて御父神の御功に依て冒（オ）へるには非るべし下照比賣を稚國玉と云例なる可くや○返言不申氐には古事記に於是天若日子降ニ到其國ニ即娶ニ大國主神之女下照比賣ニ亦慮レ獲ニ其國至ニ于八年ニ不ニ復奏ニと見え神代紀に於是高皇産靈尊賜ニ天稚彥鹿天兒弓及天羽々矢ニ以遣之此神亦不ニ忠誠ニ也來到即娶ニ顯國玉之女子下照姬ニ（亦名高姬亦名稚國玉）因留住之曰ニ吾亦欲ニレ馭ニ葦原中國ニ遂不ニ復命ニとも又一書には天稚彥受レ勅來降則多娶ニ國神女子ニ經ニ八年ニ無ニ以報命ニと有る等此也多娶ニ國神女子ニと有を見に下照姬一人耳にも非りけらし（記に高日子根神の天若日子が喪を弔給條に此二柱神之容姿甚相似と見え書紀にも味耜高彥根神此神容貌正類ニ天稚彥平生之儀ニとも此神形貌自與ニ天稚彥ニ恰然相似とも有に下照姬の歌に依れば一書に味耜高彥根神光儀花艷映ニ于二丘二谷之間ニと有る如くなる光儀（ヨソホヒ）の艷（ウルハ）しきに相似たる天若彥なる故に見愛て國神の女子共の娶られけむ事然も有る可し）上に引る神賀詞に天穗比命云々天翔國翔氐天下乎見廻氐返事申給久と有る其の返事は天若彥が征伐と爲て降來れるに引交りて天上に參昇給ひしなり（此命の坐むには征伐と爲て罷向へる天若彥は恣に國神の女子を娶り其國を獲むと謀れる事の如きは出來まじき業なれば也神代紀に天稚彥云々此神亦不ニ忠誠ニ也の亦字こそ頁はしからざりけれ如此ては天穗日命も忠誠ならざる神と成也荒振神を撥平げ國作して大神を媚鎭め給へる御功の隱ろゝこそ遺憾（クチヲシ）かりけれ）偖彼天若彥の事は知乍も終に事の成まじきを知せる故に神賀詞に然毛鎭平天皇御孫命能安國止平久所知坐之米牟止申氐已命兒天夷鳥命爾布都怒志命乎副天天降遣天荒布留神等乎撥平氣國作之大神毛媚鎭天大八島國現事顯事令事避支と有る其事量は豫て天穗日命の國體を見て奏給へるに依る所なり是を以て天若彥に相交代て還上らしゝ事を知べし（斯れは天若彥が八年に至る迄に復命さゞりし間に天穗日命は天に在て種々に取行ひ給はむ御趣は定申されし者なり）天神の御許にも此時迄は只甚く其國の喧擾て在けりと思はしけるを天穗日命の此國を巡視給ひて荒振神の所得て荒ふる狀は云々大國主神の其荒芒たる國に坐つゝも國作の功を立給ひ顯見蒼生に恩賴を令蒙給へる御所爲の天下に比類無き功神なる由を聞え給ひて荒振神の御言向は如此こそ物爲給はめ大國主神を治給はむ狀は然して宜けむと奏上給へるに依て更に天神の御趣も此に於て改れるなり（此を天若彥が事より後と見ては實に打合ぬ事有めり熟考ふ可し）

偖右の顯國玉神とは大國主神の亦名なり下照姬の亦名を稚國玉と云も父大神の此國魂神と在すに對て稱たるなめり記傳十三（二十二丁）に抑此下照比賣は父神の御名の大國魂に對て稚國玉てふ名をしも負たるは女神ながら父神を輔けて國經營に大なる功ぞ有けむ然れは當時威勢も有けむ故に今天若日子此國を得むと

思ふ心から此神をも娶けらし」と有は然る言なり御父大國主神には天神より此國を皇御孫命に事依し奉れと仰下さるゝ今(トキ)に當て其重き大御命を聞(サシオキ)て天若彦に此國を授與給はむ心は坐ざれ共天穂日命の天上に復命して程も立ざる間なれば其復信を待請させ給はむ爲に天若彦が請に任て其女を娶(アハ)せて只其時を閑(ノド)め給はむ御計ひならし神名帳に攝津國東生郡比賣許曾神社名神大ノ次相嘗新嘗有を四時祭式臨時祭共に下照比賣社と擧たるに同郡阿遲速雄神社有は必味耟高彦根命成可し又難波坐生國國魂神社二座並名神大月次相嘗新嘗と同郡に有も下照比賣の父顯國玉神と同神に坐を攝津風土記に味生山(アヂフヤマ)の事を記せるに昔味耟高彦根命坐し故に味耟山と云る由云るを阿遲速雄神社は其所に立せ給へれは天若彦下照姫の住有しは究て難波の地ならむと所思ゆ朝野群載に味原と有る地是也味耟山は萬葉歌に味生之原(アヂフノハラ)と詠る所なり且難波に三津と云地名の有も出雲風土記に三津の地の故事を載たるに其神の故に起れる地名なれは高彦根神に就て其地名と成れるなり古事記高津宮段なる三津の地名の山は依難かり萬葉三二十二丁に久方乃天之探女之石船乃泊師高津者淺爾家留香裳と有り記傳に被引たる代匠記に此を說て云津國風土記に難波高津は天稚彦が天降し時屬て下れる神天探女磐舟に乘て此に至る天磐舟の泊る故に高津と號云々と云り朝野群載に攝津國東方於味原有二石船往年下照姫垂跡生島高神之地一是也と見え八雲御抄に天石船の泊る所を高津と云と有も由有る事なり或書に東生郡小橋村の西南田圃の中に一堆の丘有り磐舟山と云ひ又下至土野原(ゲシトノハラ)と云ふ其土中に埋れ有る磐舟長四十尋餘亘二十尋餘有り石中に凹凸有り其上に祠を立て其石靈を祭祀す若て其磐舟東北方に向て在と云り然も有べし然るを記傳に右の比賣許曾神社を天若日子が妻なる下照比賣と心得て右の萬葉の歌をも引合せ見るは非なり彼社は別神にて其由緣此記中卷の末に見えたり名の同じきを以て思混る事勿れ」と有れども抑て其方誤にて其社は同國住吉郡赤留比賣神社の事を混へたるなり日本書紀傳を著して說記す可し

〇高津鳥殃爾依氏立處爾身亡支 古事記に於是諸神及思金神答白可レ遣二雉名鳴女一時詔之汝行問二天若日子狀一者汝所三以使二葦原中國一者言三趣一和其國之荒振神等一之者也何至二于八年一不二復奏一故爾鳴女自レ天降到二居天若日子之門湯津楓上一而言三委曲如二天神之詔命一爾天佐具賣聞二此鳥言一而語二天若日子一言此鳥者其鳴音甚惡可二射殺一云進即天若日子持二天神所レ賜天之波士弓天之加久矢一射二殺其雉一爾其矢自二雉胸一通而逆射上逮下坐二天安河之河原一天照大御神高木神之御所上故高木神取二其矢一見者血二著其矢羽一於是高木神告下之此矢者所レ賜二天若日子一之矢上即示二諸神等一詔者或天若日子不レ誤レ命爲レ射二惡神一矢之至者不レ中二天若日子一或有二邪心一者天若日子於二此矢一麻賀

禮云而取ニ其矢ー自ニ其矢穴ー衝返下者中ニ天若日子之寢胡床之高胸坂ー以死と見えたる此高津鳥殃なり但此は天神の御罰なれば此を殃とはいふべきならざれども國神の許にては然る事とも知ざりける故に天若彦は高津鳥の殃に依て身亡たりと耳ぞ思けむを後に經津主神健雷神の降坐し時に其御罰にて身亡たる事實は所知たりけむを此は國神の然る所由は知ざる間(サ)の諺を以傳たるなり大祓詞なる高津鳥災も其に羅る人の方よりこそは災とも云べき狀なりけれ實には天神の御罰なるも有なむが爲に其本源より正して其罪咎を攘ふなり偖右の事を神代紀には此時高皇産靈尊恠ニ其久不ニ來報ー乃遣ニ無名雉伺ヒ之其雉飛降止ニ於天稚彦門前所レ植湯津杜木之抄ー時天探女見而謂ニ天稚彦ー曰奇鳥來居ニ杜抄ー天稚彦乃取ニ高皇産靈尊所レ賜天鹿兒弓天羽々矢ー射レ雉斃レ之其矢洞ニ達雉胸ー而至ニ高皇産靈尊之座前ー也時高皇産靈尊見ニ其矢ー曰是矢則昔我賜ニ天稚彦ー之矢也血染ニ其矢ー蓋與ニ國神ー相戰而然歟於是取レ矢還投ニ下之ー其矢落下則中ニ天稚彦之胸上ー于時天稚彦新嘗休臥之時也中レ矢立死此世人所謂反矢可レ畏之緣也と有り中レ矢立死と有ぞ此に高津鳥殃爾依氏立處爾身亡支と有に當れりける 一書には故天照大神乃召ニ思兼神ニ問ニ其不來之狀ー時思兼神思而告曰宜ニ且遣レ雉問ニ之於是從ニ彼神謀ー乃ニ使レ雉往候レ之其雉飛下居ニ于天稚彦門前湯津杜樹之抄ー而鳴之曰天稚彦何故八年之間未レ有ニ復命ー時有ニ國神號ニ天探女ー見ニ其雉ー曰鳴聲惡鳥在ニ此樹上ー可レ射之天稚彦乃取ニ天神所レ賜天鹿兒弓天羽羽矢ー便射ニ之則矢達ニ雉胸ー遂至ニ天神所處ー時天神見ニ其矢ー曰此昔我賜ニ天稚彦ー之矢也今何故來乃取ニ矢而呪之曰若以ニ惡心ー射者則天稚彦必當レ遭ニ害若以ニ平心ー射者則當ニ無恙ー因還投レ之即其矢落下中ニ于天稚彦之高胸ー因以立死此世人所謂返矢可レ畏之緣也と見えたり如此く高皇産靈尊とも天照大神とも傳たるは亘みに略るにて右の二柱神の御計になる事由も更なる者なり　然れは右の高津鳥は雉名鳴女を云なり神代紀一書に乃遣ニ無名雄雉ー往候レ之此雉降來因レ見ニ粟田豆田ー則留而不レ返故復遣ニ無名雌雉ー此鳥下來爲ニ天稚彦ー所レ射中ニ其矢ー而上報と有り天神は其矢羽の血に染たるを見行して惡心を以て射上つるか平心を以て射放てるかと判(コトワ)り給へれば此上報は其返矢の事有て後の事なりけり此傳に依時は古事記及神代紀正書一書(ニ字)の傳共に右の雌雉の事を耳載て雄雉の事は主とも無き故に漏せる者なり 記に雉名鳴女と有は名を鳴女雉の意なり記傳に二の考を擧られたる中に書に無名雉と有と合せて見れは必名鳴と云べく可なれど只鳴女には非じ那々依と訓べし」と云れたる方勝れり神紀に引る天書に無名雉亦名天之鳴女と云るは似つかはしき事と聞ゆ然るを必名を大名持神が亦名を葦原國見賀武建與束命と申」と有は天日別命の子なり然る傳も有けるにや 天佐具賣は右の萬葉歌に依時は天より降れる神なりと雖も神代紀一書には有ニ國神號ニ天探女ーと有れば纂疏に稚彦之侍婢也と有如く天稚彦に侍婢と成居たる鬼魅な

り其仕たる由を以天とは云なる可し然も有ば右の萬葉歌は天に使して降れる事などのありし傳を詠る者なる可くや和名抄に天探女を鬼魅類に載せ記傳に今世の諺に天之佐古と云は此名なり其も左右に人に悖て心悪き者をなむ云める」と說れたるに就て說有り抑天探女は祝詞に根國底國里與能傳踈傳來物とも踈夫物とも云る鬼魅にて天神の荒振神と指給へる其部屬なるか其征伐と爲て罷向へる天若彥を相率とり相口會せて終に此國を獲むとさへ負氣無き禍心を令起たる邪神なり故雉名鳴女の詔命を宣れる時にも此鳥者其鳴聲甚悪故可ニ射殺一云進と有を以知べし此を以考るに諸神の中より壯士と選ひ擢られたる天若彥なれば固有して然る禍々しく忠誠ならざる心は無りつれども彼鬼魅に交こられて悪心出來り其悪心に依て罰められ奉りし者なめり憐む可し然れは天探女は天去離女成可し今昔物語廿四段二十に年來住ける妻を去離にけり」と有る去離と同じ言にて人にも物にも交こりて去離しむる由の名にもや有む 中古の物語書などに佐久白具といふ語の多かるは全く小賢しく言痛きに用たるを以て曉る可し古事記に奥踈邊踈神と云る二神有り其なむ踈び荒ぶる神なりける倚御門祭詞道饗祭詞の注見合す可し 偖天若彥が雉を射つる矢の天神の所處に到り

下照比賣の哭聲の風の共響て天に到れるなど天地の如此く共に相去事遠きに凡人心を以見れ實に怪しむに墮たりと雖も其は甚幼稚き心なりけり天若彥が天神の御使を射つる矢なるを以て天上に到り下照比賣は其夫の身亡たる事を天にも聞え知せ將欲く思乍ら哭つる故に其聲即天上に到れるなり 空しく上方を仰ぎて射たればとて其矢の天に到る可くも非ず只哭に哭たればとて其聲の及ぶ所限有て天に到る可きならず此なる二共に天上の事に係りたる事なれこそ其到るには有けれ尋常の心を以て更に疑ふ可に非ず 返矢可畏之緣也は君臣の大義正邪の差異の境に立つ所以也其本天若彥が天神の御使を射たるは天神に射向奉るに當れり是を以其御所に到れるを若以ニ悪心一射者則天稚彥必當レ遭レ害若以ニ平心一射者則當レ無レ恙と咒詛給ひて返し射下し給へる故に其實違はず立所に身亡たるなり神倭天皇の日に向ひて戰給ふすら天道に逆れりとて忌憚給へる物を況て天神の御方に射向ひ奉れらむには其返矢の畏有べき事勿論なり然れば此理を以て我天神の御子と座す天皇命に對奉りて負氣無き禍心を起して若くも射向奉れる僻者の有なむには其矢を祝して咒詛乍も射返し給　らむには立所に身亡と云ふ諺の傳はれるなり記傳に諺は本は神の御心にて世人に言せて吉凶さ

事を示喩し給ふを云」と有は然る言なり如此く返矢可畏の古き證徴有を用させ給はずて賤しき臣が爲に時と爲ては天神の御子の害められさせ給へりし事も有は天神の御定を忘させ給へるが故なり 如此く天皇命の御上に於ては甚止事無き大事の有を忘竟させ賜ふは儒に依り佛に依て御心責しく且々しく成せ給ふより神世の古傳に疑の出來る故なり神倭天皇を天壓神と稱奉て其嫁き奉れりし者共の思て在し事の如く大御稜威の坐なむには背向奉る枉人も出來まじかるを遺憾き事なり彼北條義時泰時親子は更なり足利尊氏義詮義滿の如き穢く逆しまなる奴が射向ひ奉れる時に此古事を思ほし出し給ひ切て返矢一矢射返し給へらむには天下は大御心の如く撫給ひ治給ひ調給ひ惠給はましを如て其時より甚く大御稜威の彌癈れに癈れ彌衰へに衰へさせ給へるこそ心苦しけれ但此も天津日嗣の天地と長く久しく隆坐む間には大御政の立返る事有て皇祖天神の御心の如くなりなむにぞ人は思合すらむ所思ゆ

是以天津神能御言以氐更量給氐經津主命健雷命二柱神等乎天降給比氐荒振神等乎神攘攘給比神和和給氐語問志磐根樹立草之片葉毛語止氐皇御孫之尊乎天降所寄奉支

是以云々は先に征伐と爲て被遣たる天若彥の然しも壯士なりしも其威力足ざりし故に國神に牽こられて終に忠誠ならず成り其に就て身亡にしかは更に事を改めて議給へるなり 更字大に力有り心を留て見るべきなり 倩此國に道速ぶる荒ぶる邪神の所を得て滋蔓居る因起はしも伊邪那岐伊邪那美二柱神等妹妖二柱嫁繼給ひ國の八十國島の八十島を生給ひ又八百萬神を生給ひて最弟子に火產靈神を生給へるに其妹伊邪那美命御陰處を所燒坐て病悶熱ひ給ひしかは石隱り坐て其火徹を避給へる時こそ有れ其期日を違へて其妖神の見淡たし給ひければ恥恨給ひて我汝妖命は上津國を所知看べし我は下津國を所知と申て入給へるに其愛はしく所思す御心を留め難させ給ひて黃泉國に追往坐けるに其妹の御容儀の甚しく病穢れ給へるに黃泉神 豫母都志許賣の事を云ふ さへ副居ければ見畏み坐て黃泉平坂迄逃還らせ御在し坐けり 此時にぞ別處を立て上津國下津國と相放坐ける此時の委しき事共古事記日本紀など相照し見て曉る可し此は唯其要を云なり

この時伊邪那岐大神其黃泉國にて受坐し汚穢を除去給はむと爲て日向國橘小門に身潔き祓給はむと先其御身に着給ひし物を悉くに脫棄給へるに各其物物の因に由て時置師神佗咋神煩神と云ふ疾病神世に出來り又奥疎神邊疎神奧津那藝佐毘古神邊津那藝佐毘古神奧津甲斐辨羅神邊津甲斐辨羅神と云ふ禍神等國中に成れり 此は何れも謂ゆる禍神にて神祇令道饗祭義解に鬼魅と云る類なり正しき神の列には非ず下に荒振神等と有る注に云り 此より前に伊邪那岐大神桃枝を衝立て黃泉神を避ぎ給ひ千引石を其穴に塞ぎて其國の往來を令

絶給へりと雖も其御身に着給ふ物に猶黄泉國の垢殘在しかば右の神等は出來れるなり然れども其國の垢より成れる所なれば固有して其國に屬たる神なり是を以て八衢比古八衢比賣久那斗と三柱神坐て其を御給ふ（所以て道饗祭詞には根國底國與理麁備疎備來物をは云り大己貴命の岐神を經津主命武甕槌神に薦て是當ニ代レ我而奉ニ從也と申給へるを思ふ可し）天神の有ニ殘賊強暴横惡之神ーと宣へるは此にて晝は狹蠅なす水沸き夜は火瓫の如く光きて磐根木立草葉に着託て言語はしめなど甚く喧擾て在ける也 大國主神の與言に 夫葦原中國本自荒芒至ニ于磐石草木ー咸能強暴然我已摧伏莫レ不ニ和順ーと宣へる如く大國主神の威稜に畏怖て且く和順ひ居る狀なりしかども皇御孫命を天降し奉て此國を所知し令坐と有ては却々に信服奉らざりしは其妖氣猶止ぬるには非る故に既に天若彥の如きも此が爲に交こられて其身を喪ふに至れり（神代紀に故大己貴神白ニ於二神ー曰如吾防禦者國內諸神必當ニ同禦ー今我奉レ避誰復敢有ニ不順者ニ云々於是二神誅ニ諸不順鬼神等ー果以復命と見え一云二神遂誅ニ邪神及草木石類ー皆已平了と有を熟々思ふ可し）是以て天津神の御言以て更に量り給へるは其殘賊強暴横惡之神の出來れる固有の所謂を所知る故に火產靈神の御親族を以て其根國底國に隷る鬼魅を征罰め給はゝ所思すが如く平かならむと思ほし定給へるにて此經津主命健雷命を天降し遣給ふ所以也又思金神の深く思ひ遠く慮れる事の至れるなり（此等の較略の事已に大殿祭詞の注の首にもいへり火產靈神の御親族を以て鬼魅を逐ひ却給ふ事天石屋戸段も然り）此度の事を出雲神賀詞には天穗比命の言に己命兒天夷鳥命爾布都怒志命乎副天天降遣天云々と有る天夷鳥命は此詞の健三熊之命なるが此の意は天穗日命と共に先に國體見に降れりし神なるが己命の大國主神に媚附て粗天神の御趣をも傳置給へれは其事を竟し給はむとて天神の御命を乞て降し遣し給へる由なり經津主命健雷命は右の殘賊強暴横惡之神を主と罰平に罷向ひ坐が故に其詞には大國主神を媚鎭めて現事顯事を事避しめ奉りし事を主と立て其荒振神の征伐の御使を次に立て述たる所なり（然らざれば國造の己が遠祖に私して古說を言掠るに至るなり然計り古傳の明るき當昔に然る私言を許可し置せ給はましや能考ふ可し）古事記には右の二を分別ず爲て唯此國を言向に被遣る由を以て爾天鳥船神副ニ建御雷神ー而遣と有り然るは天夷鳥命の御使に立せる事は一なるを猶其よりは荒振神の征伐と爲て被遣る方其任され奉る所負に重ければなり偖右の神賀詞には布都怒志命と云ひ古事記には建御雷神と云るは互ひに略る者なり然るは如此く古說の昭々なる頃ほひなりしが其一を云うて餘

を合めたる所なり（其は祝詞には何事の始をも神漏岐神漏美乃命以氏と云て高皇產靈神神皇產靈神二柱の事なるを記紀には或は高皇產靈神とし或は神皇產靈神として各一柱を記せると同し例なり）經津主命健雷命神代紀に是後高皇產靈尊更會二諸神一選下當レ遣二於葦原中國一者上僉曰磐裂根裂神之子磐筒男磐筒女所レ生之子經津主神是將佳也時有二天石窟所レ住神稜威雄走神之子甕速日神甕速日神之子熯速日神熯速日神之子武甕槌神此神進曰豈唯經津主神獨爲二丈夫一而吾非二丈夫者一哉其辭氣慷慨故以即配二經津主神一令レ平二葦原中國一と見えたる此なり（一書には復遣二武甕槌神及經津主神一先行駈除と有り然れども事實（コトノサマ）を思ふに經津主神は大將軍の如く武甕槌神は副將軍（スケノイクサノキミ）の如く爲て降給へれば此順次宜しからず又の一書に天神遣二經津主神武甕槌神一使レ平二定葦原中國一と有如くならでは協はず）古事記には經津主神の事を傳漏して建御雷神の事を耳載たり其文に於是天照大御神詔之亦遣二曷神一者吉爾思金神及諸神白之坐二天安河河上之天石屋一名伊都之尾羽張神是可レ遣若亦非二此神一者其神之子建御雷之男神此應レ遣且其天尾羽張神者逆二塞上天安河之水一而塞レ道居故他神不二得行一故別遣二天迦久神一可レ問故爾遣二天迦久神一問二天尾羽張神一之時答二白恐之仕奉一然於二此道一者僕子建御雷神可二遣乃貢進一と有り此に右の神代紀の文を合せて考るに經津主神是將レ佳也とは諸神の定むる所に其上に伊都之尾羽神是可レ遣とは思金神の思慮に依る所なり然るを神代紀なる武甕槌神の事を云るに此神進曰豈唯經津主神獨爲二丈夫一而吾非二丈夫者一哉其辭氣慷慨と有は天迦久神を遣し被召たる趣に反へれは究めて後の加文にて古傳の趣に非る也（古史徵にも此神と云より以下は甚く漢めきて更に古の眞傳とは見えざれば取らず」と云れたり實然る事なり）倘此度の征伐と爲て降給へる其表立（チシタチ）たるこそ右の二神には坐れ其隨從（シタガヒ）給へる神猶有べし神代紀に一云二神遂誅二邪神及草木石類一皆已平了其所レ不レ服者唯星神香々背男耳故加遣二倭文神建葉槌命一者則服故二神登レ天也と有を以知べし（此經津主命健雷命の御事は已に春日祭詞の注に云れば其に見合すべし其因に依て建葉槌命の事をも云り）

○荒振神等乎神攘々給比神和々給氏此文を以て次條に磐根樹立草之片葉毛語止氏と有は荒振神の然る天恠（マガリザ）を爲つる事著明なり固有して磐根木立等は非情の物なり言語は出來べくも非るを荒振る邪神の其に寓て種々の禍事轉有けるなり然れは此荒振神は御趣に順はず跳々しき由ながら大己貴神に係て心得べきならず（大祓詞には國中爾荒振神等乎波神問志爾問賜比神掃々賜比氏と有て後釋に此所神掃云々は荒振神に係り神問云々に主と大名持命に係れり」と云れたる意味も有れども此なるは然らず）然るは神代紀に大己貴神云々今我當下於二百不足之八十隈一將中隱去上矣言訖遂隱於是二神

誅ニ諸不順鬼神等一果以復命と有如く大己貴神より此國を受取給ひて後に其不順る鬼神を誅(コトムケ)給へるなり故同段の一書には於是大己貴神云々薦ニ岐神於二神一曰是當ニ代レ我而奉レ從也云々而長隱者矣故經津主神以ニ岐神一爲ニ郷導一周流削平有ニ逆命者一即加ニ斬戮一歸順者仍加ニ褒美一と見えて大己貴神の御方より薦め給へる者成をや然れば右の有ニ逆命者一即加ニ斬戮一の語は此の神攘々給に當り歸順者仍加ニ褒美一の文は此の神和々給に當れり倩又常陸風土記に天地權輿草木言語之時自レ天降來神名稱ニ普都大神一巡ニ行葦原中津之國一和ニ平山河荒梗之類一云々と見えたるを以て思ふに其草木をも言語は令る者は其山河荒梗之類の所業なる事必(キハマ)れり大己貴神の岐神を奉出し給へるに合せて考るに上にも云る奥疎神邊疎神以下六神はしも其荒梗之類の巨魁なり奥津那藝佐毘古神邊津那藝佐毘古神は海にも河にも水に屬たる名なり奥津甲斐辨羅神邊津甲斐辨羅神は山にも丘にも峽と云有れは此二神ぞ山河荒梗之類には有ける（奥疎神邊疎神は謂ゆる疎び荒ぶる神なり磐石草木なも言語てもに停り居らしむるは凡て右の六神の相交こりたる所業なる事云も更なり）猶出雲神賀詞に豊葦原乃水穗國波晝波如ニ五月蠅一水沸支夜波如ニ火瓮一光神在利石根木立青水沫毛事問天荒國在利りと有て其下に天夷鳥命爾布都怒志命乎副天降遣天荒留布神等(マガコト)乎撥(アハ)平氣云々と有を照し應せて曉る時は右の怪異は荒振神の所業なる事愈以て炳焉きを其に就て猶云むには晝は狹蠅の聚(ムラ)がる如くに水の沸騰り夜は火瓮の如くに轉び巡る火の在て奇怪き事の見えたるにて此亦彼山河荒梗之類の所爲なるなり（此は神賀詞の傳正くして水火に寓(ツキ)て荒振神の天詔を爲るなり古事記に皆涌と書るは例の借字なり神代紀第六の一書に高皇産靈命曰葦原中國者磐根木株草葉猶ニ能言語ニ夜者如ニ熛火而喧響(ホトナヒ)之晝者如ニ五月蠅一而沸騰之と有る猶ニ能言語一とは邪神の其物に寓て外より言語るが磐根木株草葉の言ふが如く在しとなり喧響之とは此處より彼處より音なひ立て喧びすしく晝は五月蠅の如く水の沸騰れるなり此に水とは云ざれども熛火に對たるを以其と知るゝなり猶大殿祭詞の注にも云る説有見合せて曉る可きなり）○語問志磐根樹立草之片葉毛語止氏は上よりの續を以見に荒振神等を神攘攘給ふが故に語止にきとなり（此注已に大殿祭大祓詞の下に在れは今云に及ばずと雖も此より上に云る注等の心を能々照し應す可し凡て此に限らず同じ事と雖も其上下の續き狀に依て其義の異る事有り）○皇御孫之尊乎天降所寄奉支の文を大祓詞には天之磐座放天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別氏天降依志奉支と有を略きたるながら理甚能聞ゆるなり大殿祭詞も此例にて事問之磐根木根立知草能可岐葉毛乎言止氏天降利賜比食國天下登云々と有に同じ（大祓詞に其事を委しく云るは下に天津神波天磐門乎押披氏志天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別氏所聞食武と云む序(ハシ)を爲たる者なり）

如此久天降所寄奉志四方之國中止大倭日高見之國乎安國止定奉氏下津磐根爾宮柱太敷立高天之原爾千木高知氏天之御蔭日之御蔭止仕奉氏安國止平久氣所知食武

如此久天降所寄奉志云々は當世の天皇命の大宮造の事を申せる事全大祓詞に同じ上に皇御孫之尊乎天降所寄奉支と有は天より始て降來坐る邇々藝命の御事を申せるが其初國知しゝ大宮造の事とを一に兼て云下せる者なり（大殿祭詞も亦然り古文の妙處（ハタラキ）此に在て更に後人の企及ばざる所なり）偖此詞はしも道饗祭詞より出たるらむと所思しき事已に上に註る如くなるが其も甚古かりけり其は此に下津磐根爾宮柱太敷立高天之原爾千木高知氏と有を思ふに宮室の制も既く上古の如くに非ず成以て來ぬる隨に千木などは神社ならでは用ざる事と成れゝば假令高千穗の初宮の事を兼たりとて當世に無き事を有し狀に云べくも非ねば此詞の出來つる程は猶上古の宮制の狀なりし頃なりけり又詞の狀も甚美好く麗しく凡て甚古かりけるは此も高千穗宮の當時に被定たるならむか文中に高天之原爾始志事乎云々と云るも皇祖天神の天上にて事始め定給へりし趣を受たる由なるを古より必行ひ來る可き筈なるを思ふ可し（然るを祝詞考の自序に崇神を却大殿祭の詞は藤原宮の末に作れるならむ」と云れたるは何の據も無き說なり又皇御孫之尊と有る尊字を尤めて「尊字を書しからは和銅の初に書しならむ」とも有り尊字は時に依て書改むましきにも非ず只凡ての詞の上を能見てこそ論ふ可き事なりけれ）○天之御蔭日之御蔭止仕奉氏の上に天御舍の事有べきを其は下へ廻して其用有る所に置て此は如此云て其天御舍を造仕奉る事を申せるなり（大祓詞には皇御孫之命乃美頭乃御舍仕奉氏天之御蔭日之御蔭止隱坐氏と有は下に御舍の用無が故なるを此は其天御舍之內爾云々と其用有て下に云り）偖此詞に天之御蔭日之御蔭止仕奉氏と有り大殿祭詞に天之御翳日之御翳止造奉仕禮流と云ひ鎭御魂齋戶祭詞に天之御蔭日之御蔭止稱辭竟奉氏と有などは其天皇御殿を造仕奉る事を申せるなるか大祓詞及祈年祭月次祭等の座摩山口神詞に天御蔭日御蔭登隱坐氏と有は其造仕奉る御殿に天皇の住給ふ御事を申せるなり（春日祭平野祭久度古開等詞に天乃御蔭日乃御蔭止定奉氏と有は神の宮居を定奉給ふ時に云なり此等の詞遣ひを今人は混りに物爲る故に古き詞の妙なる處をも解得ざるなり能々例を正して辨ふ可し）○安國止平久氣所知食武は天神等の上件の如く此國の荒振神を言向させ給ひ皇御孫命の安國と平けく所知食べく物爲給へれば其御殿の內に於て其妨奉る事の無き筈の事なれは先此に如此云て下に神等の荒び健び祟る事を述て其義を戰はせたるな

り高天之原爾始志事乎神奈我良毛所知食氏と云るに甚く力有を以其深意を曉る可し（大祓詞なるも然り其は其注に已に委しく云りき）

皇御孫之尊乃天御舍之内仁坐須皇神等波荒備給比健備給比祟給事無氏志高天之原爾始志事乎神奈我良毛所知食氏神直日大直日爾直志給氏自此地波四方乎見霽山川能清地爾遷出坐氏吾地止宇須波伎坐世止

天御舍之內仁坐須皇神等波は天皇の御殿に祟を爲て坐す神等と云ふ事なり（其由次に述てむ）天御舍は古事記（國遷段）にも天之御舍と有り如此く天某と云は天上の物は揔て美たく麗しきを其に擬ひ物爲るを云ふ常に瑞之御殿などと云とは異なり（但萬葉二に天津御門乎懼母定賜而と詠るは天皇崩御して天宮に上らせ給ふ由に就て其殯宮を云なれば此詞の天御舍とは異（カハ）れり）坐は次に荒備給比健備給比祟給云々と有る其如く爲て天皇の大殿內に在すを云り皇神等とは何れの神の御心とも知られぬも有が爲に廣く皇神等と云るなり（一鈴屋大人說に此は坐の上に入來の二字有て入來坐など有けむが其字の脫たるなる可し其故は御殿內に本より惡神の坐べきに非ず若亦惡神には非れども時として祟給ふならば假令祟給ふ事有とも本より坐神ならば和め奉る耳にこそ有べけれ他所へ遷却る事は有べくも非ず然事は諸書に見えたる事無く御々世々に且て聞えぬ事なり又此祝詞は道饗祭のと見えたるに此の文耳其祭に協はず彼此を合せて思ふに此は必天御舍之內仁入來坐皇神等と有て道饗祭祝詞なる事愈明らけし偖道饗祭は京城四隅道上にして行ふ由なれば都之內になど云べきを御舍之內仁と云るは少違へるに似たれども都と云名も元來宮所（ミヤコ）と云事なれば如此云むも何てふ事か有む」と云れたるが此に種々の辨有り一に坐の上に入來の二字有て入來坐など有けむ云々と有る成ほど御殿に本より惡神の坐べきに非ざれ共假令他より來れる神にも有れ其祟を成せる間は其御靈を御舍の內に留めて物爲る事なれば今現に然る所を以て天御舍の內仁坐須と云べき事なり二に惡神には非ざれども時として祟給ふならば假令祟給ふ事有とも本より坐神ならば和奉る耳にこそ有べけれ云々と有も違へり本より坐神は天皇の守護と爲て鎭る神なれば縱や其御祟有とも和奉る耳にて有べきを此は他より來て祟るなれば必遷却ふ可き筈なり三に此を道饗祭詞と見られたるも協はず然れど凡同等の事にては有なり道饗祭は鬼魅を饗し遏めて禍事を成しめざる爲なれば六月十二月に定れる日有て行れて其祟の有無に拘はらぬを此祭は已に其事有に及て行るゝなれば同じ事ながら常祀なると臨時なるとの相違有て彼は彼此は此なり混ふ可ならず）

○荒備給比は上に荒振神等乎神攘々乎止氣牟云々荒振神等乎神攘々給比神和々給氏云々と見えたる天神の御趣に對て云るなり其は下に高天之原爾始志事乎神奈我良毛所知食氏と有を照應せて所知たり大殿祭詞別に神等能伊須呂許比阿禮比坐乎言直志和志坐氏御門祭詞に四方四角與利疎備荒備來武天能麻我都比登云神乃言武惡事爾云々道饗祭詞に根國底國與里麁備疎備來物云々など有も此の例なり考合す可し（委くは其所々に注（シル）し尚大祓詞なる荒振神の下に注る說なも見合す可し）○健備給比祟給事無氏志下には祟給比健備給事無氏之と有り偖此の文を健備給比健給事無氏志と有て諸本共に祟を健に誤れるを出雲本に從て今改めつ（然る善本の有しなる可し賀茂翁の考にも健を祟に作られたれど其由を記されざりし故に從ひ難かりしを出雲本は數本を以て比挍せたるなれば據有べく所思ゆ）健備給と

は動作（フルマヒ）の一途（ヒトムキ）に強捍（コハク）して佗に頼る所無を云て常に武勇を云とは異なり布留と活用く時は皆然り神名人名共に上に置て健某と云は武勇の由なるを下に屬ぬ熊曾建出雲建など云時は勇猛にして佗人を凌ぐ類なるが如し祟給とは神等の御怒坐時は災異を以示給ふを云が此は荒振神の荒びをも神の御心に怒坐事有て祟給とは云る也此祟給に當る事を貞觀十年實錄なる廣田生田神社への告文に攝津國解頁久地震乃後爾小震不止云々大神乃布志己利賜天所ニ致賜ニ奈利止申利と有り布志己利は事の節に當て神の微し罰給ふ由にて祟を云にや此は序に云耳○高天之原爾始志事乎は道饗祭詞に高天之原爾事始氐皇御孫之命止稱辭竟奉流と有如く皇御孫命の御世の繼々受給ひ保給ひて天下に敷給ひ行給ふ大御政はしも皇祖天神の御事依し坐る神代の故事に依せ給はざる所無を殊に天社國社の皇神等を齋奉らせ給ふ御業はしも高天原に事始て傳させ給ふ所なり祈年祭詞に高天原爾神留坐皇睦神漏伎命神漏彌命以天社國社登稱辭竟奉と見え其結に故皇吾睦神漏伎命神漏彌命登皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉と有如く當今の大御政其即天神の定させ給ふ所也續紀第一詔に高天原爾事始而遠天皇御世中今至麻弖爾天皇御子之阿禮坐牟彌繼々爾大八島所知次止天都神乃御子隨母天坐神之依之奉之隨聞看來此天津日嗣高御座之業止現御神止大八島國所知云々第五詔爾高天原爾神留坐皇親神魯岐神魯美命吾孫所知食國天下止與佐斯奉志麻爾高天原爾事波自米而四方食國天下乃政乎彌高彌廣爾天日嗣止高御坐爾坐而云々抔見えたる此也麁略に讀過し奉る可き所には非ず然れば天皇の大御位に即給ふ踐祚の大嘗祭は申も更なり寛平四年格に二月祈年六月十二月月次十一月新嘗祭等者國家之大事也欲レ令ニ歲灾不レ起時令順レ度と有如く此四箇祭は天津日嗣の立つ所天下人民の依る所の基なるが故に既く高天原に事始て傳給ふ所なり六月十二月晦大祓は不祥（マガコト）を解除（ハラヒ）て善事（ヨゴト）を得るの大御政なり鎭火祭又此に次て行はる家に大殿祭有り門に御門祭有り衢に道饗祭有て荒振神等の荒び健び祟る事をしも防禁る等は皆天神の定させ給所なり今將祟神を遷却ふ事も申す迄も無く皇祖天神の事始め給ふ所なれは如此く高天之原爾始志事乎とは云り然れば天皇の御殿は更なり今も人家に祟を爲す神の在む時此祭を爲て他處に遷却ふに何の憚る事か有む皇祖天神の事始め定させ給ふ所に因て行むを如何なる禍神か此を防ぐ事を得む○神奈我良毛例は續後紀承和三年五月香取鹿島枚岡等へ奉らせ給ふ宣命に神那我良母皇御孫之御命堅磐爾常磐爾護奉利幸閇奉給比又文德天皇實錄仁壽元年六月伊勢賀茂松尾乙訓等へ奉らせ給ふ宣命に奉祭爾供奉留世使等中爾有ニ穢事ニ利介因茲大神不志己理賜止倍利卜申世利而祭使波御卜合留倍人乎令ニ供奉ニ毛止奈所念行留此事乎聞食天奈毛懼畏利御坐須大神神那我良毛聞食天云々と有り孝德天皇大化三年御紀に惟神とも隨在天神とも作き續紀詔に隨神と書き萬葉に神長柄

とも神隨とも神在隨とも種々に作り萬葉に假字書にて可武奈何良と有に依て訓べし續紀第十三詔に神奈我良母と有て此と同じ萬葉十三に神在隨事擧不爲國と有な今一神柄跡言擧不爲國と有れば神からと云も同語也言義は神中在なる可き事右の字共を合せて知らる此は高天原に事始給ひし神漏岐神漏美命の事依し奉給へる隨に奉り行はせ給ふ事にて其事の有べき狀に物爲給ふ謂也中在(ナカラ)と云は大中臣本系帳に高天原爾事始而皇御神之御中皇御孫之御中執持伊賀志桙不レ傾ニ本末ニ中臣布留人稱ニ之中臣ニ者と有は神と皇との御中間に在て仕奉る事にて神隨の例には非れども中在の義等し右の孝德天皇御紀に詔曰惟神我子應治故寄是以與ニ天地之初ニ君臨之國也自ニ始治國皇祖之世ニ天下大同都無ニ彼此ニ者也云々と見ゆ天下大同にして都て彼此の間然無きを惟神と云る事知べし其下に民心不レ整國政難レ治是故今者隨在天神屬下可ニ治平ニ之運上と有は其事の有べき狀に隨ひて天神の定させ給ふ所を治給ふが故に隨在天神とは云り同元年御紀に隨ニ天神之所奉寄ニ方今始將修ニ萬國ニと有る詔も右の隨在天神の意を合て被記たる所なるが此字面を以ても其隨在天神とは天神の事依し奉給ふ所を云事炳焉し如此く其云所に依て少しの異りは有と雖も其歸る所は天神の御命を奉行はせ給由にて佗義有るに非ず此で其有るべき狀に隨なりけるを右の御紀の本註に惟神者謂下隨ニ神道ニ亦自有中神道上也と見えたる神道とは外國の道々に對たるならず御紀の本文に惟神我子應治故寄是以與ニ天地之初ニ君臨之國也と有如く皇祖天神の皇御孫命に事依し奉給へる天津日嗣高御座の大御業其即神道なるを謂なり國土を修理固成て保せ給ふ事其即天津日嗣所知食にて天下人民の依て立所是なり外國人の道と云者は人を言痛く敎率ふな道と云れども我神道は然る微少なる者に非ず天の覆ふ所地の載る所悉く此神道を以成る然れば萬葉十三に葦原水穗國者神在隨事擧不爲國と有も皇神の大道の有べき隨に行はれて在故に殊更に言擧する事非じと云義なり隨とは記傳直毘靈に天下を統御給ふ、御所業は唯神代より有來し隨意に物爲給ひて少かも私意を加給ふ事無を云ふ」と有が如し右の隨ニ天神之所レ奉レ寄ニ云々と有る隨字の義を合せて識れたる者と見ゆ亦自有ニ神道ニとは天皇と坐ては天神の事寄奉給ふ所の道に隨給ひて臣連八十伴男を率て天下の人民を撫給ひ治給ひ平給ひ整給ふ時は其成給ひ行給ふ所悉く神道に契合せ給ふと云義にて上に神隨は神中在なりと說るは此謂なり漢籍論語に直在ニ其中ニなど云る在ニ其中ニに同じ直毘靈に現御神と大八洲國所知食と申すも其御世々々の天皇の御政即神の御政なる意なり萬葉集の歌などに神隨云々と有も同じ意そと有は然る言なり右の如く隨神道と有神道と二所に神道と云語有る共に其義同じからず上なるは神道を天皇受行はせ給ふ事を云て隨字に力有り下なるは其神道に隨て行はせ給ふ所高天原に事始給へる皇祖天神の事依し奉給ふ御旨に自然に契合はせ給ふ由にて天

照皇大御神の寳祚の隆坐む事當に天壤と共に窮無る可しと言壽て勅給へる如く世と共に其神道の行れむ事を云る者なり（此に此神勅を引て云事は天津日嗣と申す事はしも道の本源なる事已に上なる大殿祭詞の注及其餘にも注る如くなれば此御事を先神道の規矩と定て心得べき事なり）然れは亦有神道とは當に然有べき隨に物爲給ふ其中に自神道有て彼此と云べき間然（スキマ）無しと云義なり神中在（カムナカラ）と云も神道其中に在る謂なれは右の說に合へり然るを此神隨の語を漢籍老子に謂ゆる自然とも無爲とも云事に配（アテ）て說るも聞ゆるは此の自有神道と云るには似著しき狀なれど猶僻事なり其は上に隨神道と有は神道と當（マサ）に指物有て即其に隨ふ可き謂なれば自然にも無爲にも合ざる事遠き者なり漢字に當然と有は當に然有るべき事を然爲る義なれば此にや近からむ（萬葉一に安見知之吾大王神長柄神佐備世須登芳野川多藝都河内爾高殿乎高知坐而上立國見乎爲波など其外にも斯る云狀多きを右の自然とも無爲とも說ては少しも當らず當然と云義に見れば鈴屋大人の天皇は現御神と申て實に神にて坐故に神にて坐ます隨に物爲給ふ由なり」と說れたるにも充當りて其義明かなり餘歌も此に准らへ知べき者なり）○所知食氐は崇神の有なむには遷却ふ可き神事を高天原に事始て傳させ給ふ趣を以て天皇の行はせ給ふ事を神奈我良も所知食てとなり此にて神奈我良とは當に然有べき事に隨ふ義なるを知べし（其崇を爲す神も神にて坐はせ本より此天津宮事を疾く所知食し辨させ給ふとなり）○神直日大直日爾直志給氐比は上に荒備給比健備給比崇給事と有は謂ゆる禍津日神に率これる禍事なるが故其意を含て如此く相對たるなり（此例已に大殿祭詞に在て其注に委しく述たり）直志給氐比は其荒び健び崇坐し禍事を以直し給ひて其を遷却ふ其神の持罷退給ひて也次に山川能清地爾遷出坐氐と有に係りて其意亘れり○自此地波は天皇の天御舍の內を云へり（但其大宮處の凡てに係れること云も更なり此地と有を以曉る可し）神代紀（一書）に是時伊弉諾尊云々因曰自此莫過即投其杖是謂岐神也とも又雷等皆起追來時道邊有大桃樹云々因採其實以擲雷者雷等皆退走矣云々時伊弉諾尊乃採其杖曰自此以還雷不敢來云々と見えたる其自此と境を立て逐退給へる文意に彷彿たるは天神の御許に右等の事を以此崇神を遷却ふ神事は定させ給へる者なめり（此卷首に云る事共を熟に讀らむには思過半む者ぞ）○四方乎見霽は高き所を云り祈年祭月次祭（太神宮）詞に皇神能見霽志坐四方國者云々と有り其は上天より此國を見霽し坐を云なるが此は山河の清地より四方を見晴すを云ふ（今も高處より眺望（ノゾミ）ころ事を見晴すと云語の有は此例なり）○山川能清地爾は考に引れたる光仁天皇御紀詔に山川淨所者孰倶加母見行阿加良閇賜牟と有を鈴屋大人の解に云く山川淨所は山と川となり山の

川には非ず（上に春秋麗色乎波誂俱加母見行弄賜牟と有る春秋の對なり○今云續紀第七詔にも天爾日月在如地爾山川有如と有も此に同じ然れば夜麻加波と川字清て讀べし）萬葉一に山川之清河内跡御心乎吉野乃國之云々此川乃絶事奈久此山乃彌高良之とも山神乃奉御調等云々遊副川之神母大御食爾仕奉等云云山川母依氐奉流神乃御代鴨とも山川毛因而奉流神長柄なども有り（六に山川乎清々（キヨミサヤケミ）七に皆人の戀る三芳野今日見れば諾も戀けり山川清見など猶多し皆山と川となり山なるも清しと云ふ）○遷出坐氐は其祟を爲居る此地よりは山と川との清地に移ろはし出し奉る隨に出行せ給へと也雄略天皇御紀に三諸岳の神形を天皇の命捉て見行し坐る文に天皇不齋戒其雷虺虺（ヒカリヒロメキ）目精赫々天皇畏蔽レ目不見却入殿中一使放二於丘一と有を日本靈異記に其一傳を記して雷神怒レ目起レ鱗異光照レ室帝恐供二幣帛一送レ之と有も其本は天皇の御方より求させ給ふ事ながら其神の怒に依て幣帛を供て送放ち給ふ事全く此の祟神を遷却に同じきなり臨時祭式なる霹靂神祭條に若新有二霹靂神一者依レ件移二弃山野一と有も山川の清地に遷し出坐しむるなり思合す可し（此卷の首にも引る日本紀略なる疫神祭條に送二難波海一と有も此と意味異ならず然れば山にも川にも此時宜に隨て遷出坐しむる事なり）○吾地止は祟神の遷出坐てト給ふ地と成し給へとなり神等の多き中には其祭る處を得ずて祟を成も有べければ

其山川に移弃る耳ならず社を設て祭るも有べし（死れる人の靈と雖も其祭らる可き子孫などの亡（ナク）なりたるが佗人に依りて其祭を乞に先に祟て後に和むなど常に多き事也）⊙宇須波伎坐世止下に山川乃廣久清地爾遷出坐氐神奈我良鎮坐世と有を合せて思ふに其地を我有（モノ）とト て鎮坐（シヅマリヰ）るを云なり（記傳に宇志波祁流は主（ウシ）と爲て其處を我物と領居るを云ふ但天皇の天下所知食す事などを宇志波伎坐と申せる例は更に無ければ似たる事ながら差別有事と聞えたり」と有り）宇志波伎を如此く宇須波伎とも云を以思ふに言に活く所有と所思たり然れは宇志も宇須も共に長の義ならむか所知食など云時は甚廣く普きを宇須波久と云は其地に際限有て其佗に及ばぬ義有り古事記なる大國主神に問へる言に汝之宇志波祁流葦原中國者我御子之所知國言依賜と有り此にて宇志波久と所知食との差別甚著明し神代紀なる大己貴命の與言に今理二此國一唯吾一身而已其可三與吾共理二天下一者蓋有レ之乎と有る理二此國一は此國を宇志波祁流なり是を以て宇志と乎佐と言の同じきを思ふ可し（下に引る萬葉の歌共を見度して其際限有を知べし賀茂翁鈴屋翁共に主（ウシ）の義に見られたるも違きに非ず）波久は記傳に佩（ハク）レ刀著（ハク）レ沓などの波久と同じくて身に著て持意ならむかと有るが如し（俗言に自領る地有て其佗人の領知る事をも一に合せ保つを領帯すと云なる其帶字は此の波久と同じきを以見るに身に親しく帶るを云なり）記傳に引れたる萬葉五（三十一丁）に宇奈原能邊爾母奥爾母神豆麻利宇志播

吉伊麻須諸能大御神等六三十六丁に住吉乃荒人神船舳爾牛吐賜九二十三丁此山乎牛掃神之十七三十九丁に須賣加未能宇之波伎伊麻須爾比可波能曾能多知夜麻爾十九三十六丁に墨吉之吾大御神舶乃倍爾宇志波伎座など有り何も境界を定めて其内を保つ義なり 能々其歌に就て其心を察らむ可なり

進帶帛者明妙照妙和妙荒妙爾備奉氐見明物止鏡翫物止玉射放物止弓矢打斷物止大刀馳出物止御馬御酒者甁戸高知甁腹滿雙氐米爾毛穎爾毛山住物者毛乃和物毛能荒物大野原爾生物者甘菜辛菜青海原爾住物者鰭廣物鰭狹物奧津海菜邊津海菜爾至萬氐横山之如久八物爾置所足氐奉留宇豆之幣帛乎皇爾等乃御心毛明爾安幣帛乃足幣帛止平久聞食氐崇給比健備給事無之氐山川乃廣久清地爾遷出坐氐神奈我良鎭坐世止稱辭竟奉止申

此段なる鏡玉弓矢大刀等に御字は非れども次なる御馬の例に傚て御鏡御玉など訓べきかとも思ゆれども各々其序に見明物とも翫物とも其用を先に云る故に却て語脈悪しく成故に唯に鏡とも玉とも讀て御字は添べからず 春日祭詞平野祭詞久度古開詞等に御鏡横刀御刀など云ると語の續け樣同じからざれば其と同じく御字を加へて讀むは非なり ○見明物止鏡は向ひ見る料のものなる故に云へり 萬葉十一に眞祖鏡雖見言哉とも眞鏡床重不去夢所見乞とも十三に喚(マヽ)犬追ソ馬鏡(カヽミ)雖見不飽者と有など何れも見に係れるなり 明は鈴屋大人說 歷朝詔詞解 に物を見て心を晴す也萬葉三に御心乎見爲明米之活道山十七に加久之許曾美母阿吉良米々十九に許能久禮乃繁思乎見明良米情也良牟等布勢乃海爾又秋花種々有等色別爾見之明良牟流今日之貴左又見賜明米多麻比抔有り」と云れたるが如し 尙出雲神賀詞麻蘇比乃大御鏡乃面乎意志波留志天見行事能己登久と有る注に云を見べし ○翫物止 玉は出雲神賀詞に白鵠乃生御調能玩物登云々と有如く見賞て翫弄なり 玉を手に取持て賞遊ふと云事なりと見ゆ ○射放物止弓矢萬葉二卄四丁に引放箭繁計久と有如く弓を引放て物を射を云也○打斷物止大刀打は討なり斷は切なり古事記に都牟刈之大刀と見え又其持所切大刀名謂大量と有を神代紀に大葉刈と作る如く物を刈斷つ故に大刀と號たる其用を云るなり 大祓詞に天津金木乎本打切末打斷云々天津菅曾乎本刈斷末刈切と有を以て打も切も斷も同じき由を知べし記傳九卷都牟刈之大刀の下に必見る可し ○馳出物止御馬は馬は走出る料なる由也と有り此も其如くなる可し 鳳神祭詞に御馬爾御鞍具氐 ○米毛爾穎毛爾鈴屋大人說に米は例無し汁字を寫誤れるなり」とあ

るに就て例を稽るに新年祭詞に瓱閇高知瓱腹滿雙氐汁母爾穎母爾と有を同詞に初穗波穎毛爾汁母爾瓱閇高知瓱腹滿雙と有を右の事を倒反せるなり又汁毛爾穎毛爾を略て大御酒者瓱閇高知瓱腹滿雙と耳云るも有り其を換て大忌祭詞鎭火祭詞には御酒者瓱閇云々氐和稻荒稻爾と云切て至爾麻氐の語を含たるも有り然れば今其を例と爲て云時は米毛爾は右の和稻に當り穎毛爾は右の荒稻に當れゝは姑く本の任に有むとぞ思ふ（何れの本にも米と有れば今容易く改難かり其和稻は穎の皮を去たるなり荒稻は穎の任なる稻なれば米を和稻に引當て心得むに更に疑ふ節無る物なや）○八物は鈴屋大人說に八字は几を誤れるなり几物は机代物と云に同じ（考に八な夜登理と訓て古事記にも書紀にも有と云れたれど八取と云事は物に所見たる事無し百取とこそ有れ其上八取机とこそは云も爲べけれ八取物爾と云ては理聞えず夜都母能は更なり）と有は然も有べきに就て字は本の任に存て訓は都久惠母能と改從へり○皇神等乃は崇神の某神ならむと所知るも有べく何れの神のならむと諦に所知ざるも有べきが爲に一神を某と指ずして皇神等と云り（此事上に天御食の何爾坐皇神等と有る所に云れと猶心得可なり）○御心毛明爾安幣帛乃足幣帛止平久聞食氐の明爾は其遷し却らるゝ由に依て幣帛をも奠らるゝ事を隈無く所知食てとなり（大忌祭風神祭等詞に安幣帛能足幣帛止皇御心平久安久聞食氐云々と有る同じ事ながら此に明爾と云るに深く心を含たる者なり）上に自二此地一波四方乎見霽とも見明物止鏡など有も自然に此語を云む序と成れるが如し○神奈我良鎭坐は神にて坐す任に高天原に事始めて皇御孫命の御世の次に行はせ給ふ神事なる事を明かに所知食て山川の清地に遷り却き給ひて其地を宇須波伎坐て御心も和やかに鎭坐せと云事なり此文上下の照應有て極めて美好し如何にも天津神の定させ給ふ神事なるが爲めなり（能々上に云る事共を立返り讀味ひて此文の少緣ならぬ事を曉る可なり然熟讀ては此は道饗祭の同時に在な遷却崇神祭と云事ぞ知られむ）

○遣二唐使一時奉レ幣詞

天照坐皇大御神の御子の繼々天津日嗣と神隨天下所知食す掛卷も畏き皇御孫命の明御神と天下を攝合せ統御す御事はしも豈啻此大八島國耳ならむや天の覆ふ所地の載る所日月の御照す極み雲風の射渡る限り何れの所か天皇の御國ならざらむ何れの隈か大御恩賴を蒙奉らざる處有む四夷八蠻の末々隈隈に至る迄も人民有り人民有に隨て倫理有り此即我天朝の正朔を仰倚る所なり又命續々食物衣物住家等に至る迄も皆我神の恩賜に爲て天皇の賜物なり然れば四夷八蠻の國々の酋長共は我が朝廷より其國の酋長と爲て領置せ給へるに其意味同じければ大地の中

に在と有ゆる萬國の酋長共各々共々に語合せ言合せて歸順ひ奉る表と爲て其王族の者を質と奉出し置て其身は國中の政も有れば度遍くは參來すとも天朝の踐祚と其己が父より受て酋長と爲る代始には必參來て玄蕃寮に就て太政官に侍候ひ天皇を拜奉むは甚可畏し其官人に謁見て其可畏の狀を奏し又時々の御令御法をも受賜り歸りて其國に敷行ひ末々の民等にも天朝の大御愛しみの厚く尊き由を令知て國々の方物をば棹枚乾さず船舶列並て貢奉來べき態なり（此事新年祭太神宮詞の下に注れば見合せて曉る可し偖此外國は次々に大己貴命少彦名命の次々に作成て天朝に寄奉り給ふ由は生島神詞に著し明）然れども萬國ば其出來始の古からず其中には西戎の蕃なる赤縣州こそは諸蕃の上と有り又其開け始も古かれば其國の酋長共の己々も御奴と稱し貢調を入て皇朝に畏服奉り御制度を承て自此に從奉り次々に開くる各國の摸範と成て仕奉る可を師說（赤縣太古傳三五本國考）の如く我大人君子國より次々に渡坐て其國を開闢かせる三皇五帝の代と聞えしは天孫降臨の前に在れば其は論の限に非ず其後に素より惡かる國俗の猾狡しく耳成以て行て君臣の紀綱弛みて下よりは上を奪はむと謀り上よりは下に纂はれじと構ふる間に中々に侘

國の事所にては非ず自國の事に持倦て甚く苦しめりし間に古に大人國君子國と天朝を仰慕奉れりし事も何も忘れて終々は萬國の中華などゝ放り高ぶる狂事さへぞ出來にたる（然れば彼の古より我皇國を輕蔑せるに非ず神代の昔は君臣の差別正しかりし事我を崇まへて大人國君子國と仰奉る所を以所知たり）然れば天朝より大御使等を彼に降賜はるなどの事は神氣の御盛なる古には且ても非る事なりきかし鈴屋大人の馭戎慨言に云く唐戎の習俗は君を亡して其國を纂ふが常なる故に往古より下なる者は上の隙間を伺ひて取むとし上なる者は下に被取じと構ふるから上と下と內心相和かず相共に言痛き思慮事爲る餘りに萬事正實は甚少くて唯虛僞潤色耳ぞ多かる抑君の國を纂ふに就ては甚々しき罪を紛らはさらむが爲に或は天より授賜ふなど樣の僞事を種々構へ文辭を麗しく飾りて民を欺き又萬の制度を委細く爲て尊き事に思はせなど總て表向は甚愛たけれど內心惡く穢き國也ける然れど如此く萬に心して思慮の勝れたる故に歷世に賢哲き人も多く出來何事も具足て不足事無が上に國も甚廣くて威勢強ければ傍なる小き國の王共をも數多馴服がへて自は天子と號り一際尊けに持成し己が國をば中國と云ひ傍の

國共をば夷狄などゝ乏しめ侮りて天地の間に並ぶ者無が如漫りに敖り高ぶり居り此皆此酋長の私事なるを彼順ひ怖たる傍の國王共は其制度を奉て天子と崇め中國と仰ぐめり然るは古より今に至る迄誰も々々彼表向の愛く文辭の麗美しきに謀られて誠に然る可き理と耳信じ居なりけり偖諸越の唐戎も彼息長帶姫尊の御時より韓の戎と同じ狀に大御國へ御貢調物奉りて臣服ひ參る可かりし道理なるを世々に然計り敖り高ぶり居る酋長なりしかばにや然る事も無て御代々々を經けるに小治田宮御宇推古天皇の大御代に抑りて此方よりぞ大御使遣しける十五年秋七月戊申朔庚戌大禮小野臣妹子遣二於大唐一以二鞍作福利一爲二通事一と見えたる是なり抑彼國王より未使を奉遣さざるに厚く皇朝より斯く殊更て大御使を遣しゝは如何なる故にか尋るに扶桑略記に此御使の事記る所に太子奏曰臣之先身修二行漢土一所レ持之經今在二衡山一望遣レ使將來比二校所レ誤之本一云々と見え又彼簡書と云にも此度罷れる大御使の詞とて聞海西菩薩天子重二興佛法一故遣レ使朝拜と記る如く聖德皇太子の大御政申給ふ御世なりければ多くは佛道の爲に遣しゝ御使なりけり又當時は韓國の人共多く參居て親しく仕奉れりければ其者共の彼赤縣州の事を愛き國也と常に譽申せるを聞看し又其文辭巧こき書典を見行すに就ても爭御言通はして萬の事共を學び取ばやと思ぼす御心も坐々けるなる可し同三十一年御紀に其國に物習に遣はしゝ人共の歸參りて申ける詞に其大唐國者法式備定珍國也常須レ達と云るにても先々韓人共なども斯狀に誘かし申し類有けむ事知べし偖斯此赤縣州の戎へ皇朝の大御使遣して睦給ひしは此御時ぞ始也ける」と云れたるが如し同十六年御紀に爰天皇聘二唐帝一其辭曰東天皇敬白二西皇帝一云々と有は何事ぞや其皇太子の御心と爲て假令彼戎の威儀制令を學取して惟神なる大御風儀を混雜し恰はむ御心坐むにも深く佛乘を信みて世の狀を變給はむ御所爲ならむにも其は御私事なり其私を以て君臣の公義を忘させ給ふ事如何なる鬼魅にか相率こられ給ひけむ抑天津日嗣の御事は天地を預鎔造り坐し神漏岐神漏美命以て事依し奉給ひて天地の底際の内に照徹らせる天照日大御神の授奉給へる天津日嗣の高御座を受給ひ傳給ふ天皇に大座坐せば此大地の有の悉く已に天皇の保せ給ふ天下にし在れば唐戎の國と雖も天地の外には非ず日月の照す域なれば取摠て我天皇の御有なり遠津神代に大己貴少彦名神の作置し

て萬の物をも事をも始給ひ定給へる萬國の一區なれば幽に我正朔を受賜らしめ給ふ所なれば我天皇より宣むには大國小國の差別有事無して其各國々の宰持しめ給ふ所なる故を以て辱き大御使などを下遣し給はむ御事の有むにも彼酋長が畏服ひ參來む時にも臣等卿等の上には置給ふ可からず皇國の各國を持てる宰(ミコトモチ)などの列には治給ひて主々しき公事などの時には神別皇別なる氏人に混らず歸化の者を諸蕃の部に掟給へる 遠飛鳥宮の故事をも所思し出し給ひて彼馭戎慨言に言れたる如く若彼國王共に詔書を下賜むには天皇勅ニ隋國王一などゝこそ有べき事なるに東天皇西皇帝と東西に對へ天皇と皇帝と相對はせたる同(キミ)じ格(サマ)なる御隣交こそ皇祖天神の御定に違はせ給ひ皇威(ミイキホヒナミ)を蔑如し國體(クニノサマクニノカタチ) 國格をも取亂し給へる態なりけれ、此御詔めに依れりと所思しく師の古史徴開題記に彼十七條憲法に不レ歸ニ三寶一何以直レ枉と宣ひ末に見レ惡必匡とも宣へれば馬子が崇峻天皇を弑奉れる惡事をば必直し給ふべき任に當りて坐ながら知ぬ氣にて彼が罪と爲て匡し給はざるは表を耳宜しげに藻(ツヽ)み文(カザ)りて善言(ヨタテモノイ)ふ漢風を好給へる故に然しも惡とは思はれざりしが林道春が神社考に太子馬子者同志之人也と言るは實然有べくや又此に依て案に皇太子と坐て戎事を弘給へるは深き聖意の有りける事とは聞えたれど終に高御座に即給はず薨給ひ其御子等も彼好しく睦給へる馬子が孫の入鹿に被迫て悉く御頸な縊(クビ)りて終(ハテ)給ひ御末は殘らず成ぬるは皇祖天神の御道に違給へる御詔にやと推惟(すゝ)ましく甚く所思ゆる云々」と有るが如き御詔な得給ひき推古天皇十五年御紀に詔曰朕聞之曩者我皇祖天皇等宰レ世也跼レ天蹐レ地敦禮ニ神祇一周祠ニ山川一幽通ニ乾坤一是以陰陽開和造化共調今當ニ朕世一祭ニ祀神祇一豈有レ怠乎故群臣竭レ心宜レ拜ニ神祇一と有を以見に天皇の御心と皇太子の御心と相忤へる事違き者大也 高天原より天降り坐て天津日嗣の高御座を高千穗宮に定給し神代の古昔は更也中州(ウチツクニ)に大宮柱太高敷しける畝火橿原宮に天下所知看し大御世より以來民心一途に爲て現御神とも現人神とも遠津神とも畏み服ひ敬ひ崇奉て天に二の日無に准へ奉て天地の間に二無く甚も尊く御在し坐す御事を誰やし人も知て仰奉事猶一國の心一人の心の如く有しかば彼唐戎(ミヤツコクニ)の如きも已く內屬奉れりし三韓抔の如く此を蕃國の列に思て有し民心に疑を萠して其內外の差別さへ心々に成れるも此一時の御過より延(ヒキ)たるなり皇典にすら如此く大唐などゝ記さるゝ事と成れるなむ遺憾しとも鬱悒しとも言に絶たる枉事の極には有ける後世狂儒輩の彼を尊みて皇帝と云ひ天子と云ひ由無く其國を中國中華共大國共上國とも稱擧げ我を卑しめて東夷ぞ大東ぞと唱ぐめる其根源は專此皇太子に起始給へりと云むも強事ならず馭戎慨言に彼より奉れる表の無禮りしを尤(トガ)め論て云々「古此方より御使遣しゝ御代御代には彼國に參來(マヰミ)給ひし事有ければこそ御怒なも忍給ひて睦び給ひしか其すら今思へば不快(アカヌ)御事也しを況て其後彼土に求給ふ事も無く萬に足ひて愛たき御代に何の由有てかは戎王が然る無禮き漫言をば受給はむ一字一言も無禮(ナメ)しき逢(スヂ)の交らむには深く蔑(トガメ)て其表却し遂(ヤリ)て唯何度も物

に書き口に言ふ詞にも況て彼王を崇みて天子皇帝などゝは假にも云べき謂に非ず其は彼戎王の制度を受賜かふ國の者の云ふ言にこそ有れ皇御國人は唯唐國王宋國王若くは唐主宋主などにぞ云べき又其が死るを崩と云なども僭事也唯死卒（シヌミマカル）など云べし其妻なも妻と云べし皇后とは云べきに非ず其外の言状も擬て此等に准ふ可し可畏くも我天皇を除奉て彼をしも天子と爲むは貳心にて即天皇を蔑如（ナキ）に成奉る也彼戎國にてすら天に二の日無に准へて地に二人の王は無とて佗國の君をば少かも尊む事無し云々況て天地の間に二と無く尊く坐々す天皇を戴奉ながら由無き戎國の王を少かも尊み云べき道理有なむや云々又其國をも中華中國上國など云て一向尊む餘に抑て皇國をば殊更に東夷でなど云成すなるは甚も可畏く大叛逆に等しき罪人なり然れど今世にては書の上の詞などには有（トアル）こも右有（カヽル）も然して告させ給はぬから憚も無く口に任筆に任せて斯る狂言共をさへ言もし書も爲るなめり抑書と云物は天下に弘りて後世迄も傳り行く物にし有れば斯る邪事（ヨコサマゴト）爲む輩は重き御告も有ま欲き事になむ大寶の御令にも蕃國の列に置れ其人なも蕃客と有上は必其御令にこそ從ふ可き事なれ畏くも皇朝の御令に背きて彼外國の制にしも從ひ言むは甚しき罪人に非ずや學者ならむからに唐戎の人には非ず皇國人にして皇國に在む間は皇國の御制度に背く事を得む云々又大字を添て大唐と云れたるも僭事なりけり彼國にても明代に成て元を大元清の代に成て明を大明と云る事は更に無き著なや　其より以來大凡天皇の歷世に必一度は大御使を下給へる定れる例の如く成れりしかば其御心罰きに依られさせ給ひて神功皇后の御世より内宮家國（ウチツミヤケノクニ）と召給ひし百濟國をさへ彼が爲に亡ひ給ひ猶新羅高麗などをも合せて終に彼が有（モノ）とは爲給へり天神隨の御制度を忘させ給へれば皇祖天神の御罰ならめども然は思ほし蹤らせ給はで猶懲（コリ）ずまに又しも大御使を下賜る事御世々々に數度なりき何時も々々神の御守護の添さりけるけにや暴き浪風の災に遇て其船の到着ず惜しき大宮人を沖の

藻屑と共に浪底にて腐し給ひし事迹の正史に見えたるは彼に求させ給はむ事の有むにも大御使迄下賜ひて侮詬給ひ其辱しめを皇朝に受させ給はむ事を惜（アタラ）しみ思ほし罰給へる神の御心也けむかし寛平の御時より永く此時を停止させ給ふ由其御遺誡に記させ給へるぞ甚も尊く愛き御業には有ける（右等の事の委しき由は馭戎慨言に論ひ記されたれば就て見べし凡世に在と有ゆる書の中に此書計り情神有て尊き書も有事無れば心を留む可き寶典なり）借此遣唐使時奉幣は臨時祭式に開遣唐舶居祭（住吉社）幣新羅絹四丈五色薄絁各四尺糸四絢綿四屯木綿八兩麻一斤四兩右神祇官差ㇾ使向ㇾ社祭ㇾ之と見えたる是なり　開舶居とは考に「初て其湊を榜出るを云」と有が如し（冠辭考に引れたる萬葉九に開榜出而我十八に安佐妣良伎伊里江許具奈流可治能於登乃十五に安佐妣良伎[illegible]に安佐妣良伎[illegible]奴等云々三に且[illegible]之十七に珠[illegible]安佐妣良伎[illegible]など有は湊を朝に船出するを[illegible]と云るにと此も同じ事にて遣唐使の船出爲を云なり）住吉社に就て祭る事は古事記韓國御言向の御喩言に「是天照大神之御心者亦底筒男中筒男上筒男三柱大神者也（此時其三柱大神之御名者顯也）今寔思ㇾ求二其國一者於二天神地祇亦山神及河海之諸神一悉奉二幣帛一我之御魂坐二于船上一而云々可ㇾ以度一」と有が如く彼韓國を歸（ヨセ）賜ふ天照大御神の大御心は專此住吉大神の執行はせ給ひし故事の有故に徒に船路の守護耳に非ず凡て外國の事に此時

より始て預給ふ所謂有が故なり其は新羅國を平竟給へる條に再以ニ其御杖一衝ニ立新羅國王之門一即以ニ墨江大神之荒御魂一爲ニ國守神一而祭鎮還渡也と有を以知べし（神功皇后御紀に於是從軍神表筒男中筒男底筒男三神誨ニ皇后一曰我荒魂令レ祭ニ於穴門山田邑一時穴門直之祖田裳見宿禰啓ニ于皇后一曰神欲レ居之地必宜レ奉レ定則以ニ踐立一爲下祭ニ荒魂ニ之主上仍立ニ祠於穴門山田邑ニと有は式に長門國豐浦郡住吉坐荒御魂神社三座並名神大と有此なり然るを記傳に此記文を疑ひて爲ニ國守神ニ而祭鎮の字還渡也と云文の上に在て新羅國に鎮祭給ふ如くに聞ゆるは如何と云て長門國なるに定られたれど然には非じ彼國にて國守神と爲て祭鎮給へるは皇后の御心と定給へるなり長門なる神の御心より皇后に其祠を請給へるなれば此と彼と別なり彼一の火を何在（イクツ）に別ても猶本の火の滅りも衰も爲ざるが如なり）鈴屋大人說に此祝詞は語美く調ひて古し此は古の御代に此云々の事有し時に作れりし祝詞なるを後迄用ひられしにや」と有如く實に古かりけり此遣唐使の事を始給へる推古の御世などに作れらむかと思ふに當時儒佛に御心を奪れ給へる聖德皇太子上に在て萬機を政申し給ふ頃なれば此に就て住吉大神に幣帛を奉らせ給はむ御心の坐べくも非ず若然る神代の故事を思ほし出で行給ふ忠々しき御心坐むには皇祖天神より授傳給ふ天津日嗣を蔑如し奉て遣唐使を被遣し如き國體國格を漫り給ふ狂事は更に事始め起し給ふ可に非ればば此は馭戎慨言（コトムケ）に息長帶姫尊（神功）神の御教に從ひて御自新羅の國を征伐に御在し坐しより以來三の韓

の戎國又其傍（ワタリ）の國々も永るに皇朝の御制に從ひて服事（ツカヘマツ）れりければ宰を遣し置てなむ其國々の事は執行はせ給ひし書紀に日本府と有る是なり」と有如く神功皇后の御世より以來其日本府へ宰を遣し給へる時に彼御諭の故事に依て住吉大神に幣帛を奉り祈申して渡る恒例なりけむを今度更に唐戎に大御使を下賜るにも用たるが天智天皇の御世に百濟は新羅唐の賊に亡び高麗將間も無く滅亡たりし故に日本府に宰を被遣る事も止にしかば何時と無く唐戎の國に大御使を賜る時の用とは成れりしなり（然るは彼韓國征伐の故事に依せ給ふにて著明かり推古天皇の御世より平城宮の當時迄儒佛に淫（モノ）し給ひて次々神世の故實に違はせ給ふ御世頃なりし事を考合す可し）然れば臨時祭式に見えたる一に遣ニ蕃國使一時祭二に造ニ遣唐使舶一木靈並山神祭三に開ニ遣唐舶居一祭四に唐客入レ京路次神祭五に蕃客送レ堺神祭六に障神祭と有如きも神隨なる上古の大御政の狀にて甚も々々尊く愛きを以て今思ふに神氣の盛なりし古昔より有初て行來る大御政にて此將彼韓の戎を「給ひし時のなるを唐の戎の事に移し用られたる者なる事次々說記るが如し（倭朝廷の御饗應（ミアヘシラヒ）に於ては韓の戎なるも唐の戎なるも同しきは共に屬國の御持成なり彼此の差別を立られず共に蕃國と云ひ蕃王と云ひ蕃客と云由玄蕃寮式に記せる如し）○臨時祭式に遣ニ蕃國使一時祭

使還之日准此　五色薄絁各三疋四丈八尺絁四疋倭文二端木綿十五斤麻十五斤布十六端明衣新庸布六段鰒堅魚各十連鮭卅隻腊十籠海藻二籠[ ]二斗四升二合鹽二升四合二勺缶四口𤭖五口坏二百口槲二俵白米二斗飯二石酒一石 副㆓案盛之匏餝等㆒ 葉薦廿枚右擬㆑發㆓使者㆒摠㆓祭天神地祇於郊野㆒祭庭當國司掃㆓脩其地㆒又所司營㆑苫並設㆑座所㆑須雜物神祇官申㆑官請其酒肴等所司各儲會㆓集祭所㆒神祇官率神部等 並着㆓明衣㆒ 大使自陳㆓祝詞㆒神部奠㆑幣訖大使以下各供㆓私幣㆒ 神部執奠㆓神座㆒ と有は後には唯蕃國に大御使を被遣るに就ての祭にこそ有けれ實には韓國御征伐の當昔よりぞ起れりける其古事記 訶志比宮段 に是天照大神之御心者云々今寔思㆑求㆓其國㆒者於㆓天神地祇亦山神及河海之諸神㆒悉奉㆓幣帛㆒我之御魂坐㆓于船上㆒而眞木灰納㆑瓠亦箸及比羅傳多作皆々散浮大海㆒以可㆑度と有りて此には幣物の事を載られざれども右祭の新物に匏及槲の事の有は此の狀に同じ記傳にも右の文の下に彼祭㆓天神地祇郊野㆒云々の事を引て推古天皇御紀に來目皇子爲㆘擊㆓新羅㆒將軍㆖授㆓諸神部㆒と有も諸神を祭る爲にや有むと云れたるは實に然言なり 比羅傳は神武天皇御紀に作㆓葉盤八枚㆒盛㆑食饗㆑之と有如く御食を盛て饗奉る時の物なり記には比羅傳の事を云て其に盛備る食物の事を略るなれば決めて其事と知らる匏に眞木灰を盛れりや盛ずや後世は知れども其匏を用る事延喜の今に至る迄易らざるを思ふに必神功皇后の御世の御制の遺制(ナゴリ)なり

續紀に養老元年二月壬申朔遣唐使祠㆓神祇於㆓蓋山(ミカサヤマ)之南㆒と見え寶龜八年二月戊子遣唐使拜㆓天神地祇於春日山下㆒去年風波不㆑調不㆑得㆓渡海㆒使人亦復頻以㆓相替㆒至是副使小野朝臣石根重修㆓祭禮㆒也と見えたる此郊野に於て天神地祇を祭らせ給ふなり 天平勝寶三年四月御紀に遣㆑使奉㆓幣帛於畿内七道諸社㆒爲㆑令㆓遣唐使等平安㆒也と有は其社々に幣帛を進らせ給ふ事にて上の例に非ず去年九月に藤原朝臣清河を遣唐大使に定させ給へるに依てなり

〇同式に造㆓遣唐使舶㆒木靈並山神祭五色玉二百八十丸金作鈴四口鏡四面糸一絇絁一疋六尺綿一屯五色薄絁各一丈四尺倭文三尺木綿一斤八兩鍬四口褁薦二枚 已上京庫所㆑請 麻一斤八兩白米一斗四升稻六束酒一斗四升鹽八升鰒堅魚各六斤海藻滑海藻海松雜海菜各八斤 已上用㆓正稅㆒ 酒盞六口坏四口匏三柄柏十六把棚二前 已上用㆓當國物㆒ 使一人 中臣氏 と見えたる此は兩宮儀式帳に大宮造替の時に當て木本祭山口祭を被行るが如古ゟ有來し神事にて中世の人の思寄る所に非ず 又兩宮共に二月には例年共に忌鍬等の柄を伐取る爲に右の祭を被行る事も有なり委しくは遷奉大神宮祝詞の下に記せるが如し 案ふに此は記傳にも引れたる攝津風土記に美奴賣松原今稱㆓美奴賣㆒者神名其神本居㆓能勢郡美奴賣山㆒昔息長足比賣天皇幸㆓于筑紫國㆒時集㆓

諸神祇於川邊郡内神前松原以求社福于時此神亦同來集曰吾亦護治仍諭之曰吾所住之山有須義乃木各宜材採爲吾造船則乘此船而可行幸當有幸福天皇乃隨神敎遣命作船此神船遂征新羅一云于時此船大鳴響如牛吼自然從對馬海還到此處不得乘仍卜占之曰神靈所欲乃留諸還來之時祠祭此神於斯浦并留船以献亦名此地曰美奴賣と見えたる此に本着たるらむと所思る由有り然るは大宮造などの時こそは其古例を引て木靈山神祭をも有來りたる任に物爲給はめど當時始らるゝ遣唐使舶に就て然る事を起し始らるゝ時節に非れば舊を被用たる者なり其舊は何時か有む彼の征韓の當昔なりし事云も更なり右の風土記の神功皇后御紀に依て按るに仲哀天皇九年に當る秋九月庚午朔己卯令諸國集船舶と見えたる此時の事なるべし然れば筑紫の行在所より人を遣して神を神前松原にて令祭給へるなりけり此より前に天皇と共に幸行し時には其韓征の事は思ほしも寄せ給はぬ事にし有れば必筑紫より人を遣して祭らせ給へる事著し ○同式に唐客入京路次神祭幣帛絁五尺絲一絇綿一屯五色薄絁各一尺木綿二兩麻三兩裹新薦四枚已上幣前別所充 差使一人畿内外國各一人 並中臣と有る此亦神功皇后の成し置給へる故事を用さひ給ふ所なり其は彼古事記に於天神地祇亦山神及河海之諸神悉奉幣帛と有を傳に抑天神地祇と云へば其中に山海河の諸神も有べきに如此別に擧たるは天神地祇と云は後に神祇官帳に載れる諸神社の如く定りて幣帛奉給ふ神社の事山神河海神と云は其外にて此度韓國言向に幸行すと歴賜ふ道すがらの山海河の諸神なり」と說れたる如く此は其例を立て彼より參來る者の過る道路の傍に諸神等に幣帛を奉らせ給ひて彼蕃國より屬來らむ邪神などの禍事を爲むを防遏めさせ給ふ事此次々の趣を以曉る可し玄蕃寮式に凡新羅客入朝者給神酒其釀酒料稻大和國賀茂意富纏向倭文四社河内國恩智一社和泉國安那志一社攝津國住道伊佐具二社各卅束合二百卌束送住道社大和國片岡一社攝津國廣田生田長田三社各五十束合二百束送生田社並令神部造差中臣一人充給酒使釀生田社酒者於敏賣崎給之釀住道社酒者於難波館給之と見えたる此は新羅客と有は神功皇后の大御世に始て來朝りしは其國人なるを以然云るにこそは有けれ實には蕃客の悉に被用る事同式なる右の續きに唐國の使をも兼て蕃客從海路來朝攝津國遣迎船なども有を以知べく猶舒明天皇御紀に四年四月唐國使人高表仁等到于難波津云々即日給御酒と有は彼式に依に住道社にて釀れるを難波館に於て令賜給へる者なるを以知べし玉勝間列々椿卷に此文を引て抑神酒を蕃客に賜ふ事思ふに神功皇后の御世の由縁有事なる可し」と云れたる實に然言にて何れも彼國御征伐の時に守護奉給へる由縁を以て蕃客入京の路次にて此神酒を令賜給へるなるが彼を其神等に令守護るには非ず蕃神の屬

て來居る事も有むかと神酒を賜ひて掃排け給ふ御舉にて此方の守護の爲に此事は行はせ給ふ者なりけり其廣田生田長田等の神々は殊に其御韓征の時に守奉給ひ敏賣社は其時の御船を奉給へる神に坐事右に引る風土記に所見たるが如し此を以て其餘の神々も正史にこそは記傳られざりけれ何れも由緣る神ならむ事准へて想像り奉る可し（賀茂は神名式に大和國葛上郡鴨都味波八重事代主命神社二座並名神大月次相嘗新嘗と有る此なる可し高鴨社かとも思ひしかども彼御託言に事代主命神之曰吾子御心長田國ニと御紀に有るを以て鴨社なる事所知たり富は同國十市郡多坐彌志理都比古神社二座並名神大月次相嘗新嘗と有向は同國城上郡卷向坐若御魂神社大月次相嘗新嘗と有を並に大相殿に坐ば右二社にて穴師坐兵主神社名神大月次相嘗新嘗と有を兼たる可し下に云ふ和泉國安那志社の事に思合す可し倭文は同國葛下郡葛木倭文坐天羽雷命神社大月次新嘗と有此なり河內國恩智は式に高安郡恩智神社並名神大月次相嘗新嘗と有此を三代實錄に大御食津彥命大御食津姬命と有り和泉國安那志は式に和泉郡和穴師神社二座と有て兵主神と若御魂神と二座なるべく思ゆる事上に云る如し攝津國住道は住吉郡中臣須牟地神社大月次新嘗神須牟地神社須牟地曾禰神社と有三社の中に臣須牟地神社の方なる可し伊佐具社は河邊郡なる由式に所見たり）

〇同式に蕃客送堺神祭五色薄絁各四尺倭文二尺木綿麻各二斤庸布四段鍬四口牛皮熊皮鹿皮猪皮各二張酒二斗米四升鰒堅魚各二斤海藻四斤腊八斤鹽四升稻十二束水瓮二口坏四口匏二柄薦二枚藁四圍槲八把（已上祭料）木綿四兩麻一斤酒六升米四升鰒堅魚各一斤雜海菜二斤腊一升鹽一升水瓮坏各二口匏一柄食薦二枚槲十把薑籠一口杤一枝夫二人（已上祓料）右蕃客入朝迎ニ畿內堺ニ祭ニ却送神ニ其客徒等比ㇾ至ニ京城ニ給ニ祓麻ニ令ㇾ除乃入と有は道饗祭條にも此文を引て云る如く蕃客の入朝（ミカドマヰリ）爲る時に先畿內の堺に迎て此堺神を祭て彼を送來る蕃神を追却して其堺より內に入しめず京城に至る頃に祓麻を令給て彼が身の汚惡を掃除かしめて京城に入しめ其歸る時にも堺に送て其堺神を令祭給へる也堺とは其蕃客の往來ふ路の堺にて山崎須磨等の堺を云ひ堺神とは請ゆる障神に御在る事彼詞の注に云るが如し（此將來功皇后の御世に始させ給へるならむ事は前條に記せる蕃客に神酒を賜ふ事の已に舒明天皇御紀に出たるを思ふ可し借祭ニ却送神ニとは彼を送來る神は障神の御所置に從ふ可き事彼道饗祭の趣なり）清和天皇實錄に貞觀十四年正月廿日辛卯京邑咳逆病發死亡者衆人間言（ゴロイ）渤海客來異土毒氣之令ㇾ然焉是日大ニ祓於建禮門前ニ厭ㇾ之と有如く蕃客の入朝するに屬て蕃神の送來る故に異土の毒氣に中りて如此く咳逆の京邑に行はるゝなれば後に祓麻を賜ひて京には令入給はむを今又更に臨時大祓を被行て其を避祓はるゝ者也けり（此は在京の中ならざりし故に堺神祭の場（トコロ）には非ず大祓を被行るより外に非る事なり同年三月廿三日癸已今春以後內外頻見ニ怪異ニ由ㇾ是各遣ニ使者諸神社奉幣使ニと有て其石淸水社へ奉らるゝ告文に去年陰陽寮占申就ニ蕃客來ニ天不祥事可在止占申世利今渤海客隨ニ盈紀例ニ天來朝世利事不ㇾ獲ㇾ已國憲止之天可召云々遠客參近止毛神護之故爾無事久矜賜倍止申と有は右の時の事なり今しも琉球王の使と爲て其王子などの往々大江戸に參る事有れは必市中に疫癘の行はるゝ事例と爲て有が如し今は何事も漢樣に爲て大祓は更なり堺神祭障

神祭の故事を忘竟られたるが故なり又西洋人の長崎に貢と爲て在が五年計に一度江戸に參る度毎に伊勢國鈴鹿山を越る時は必大雨風荒るゝ事定れる事にて人も知る所なり此も古く關を置れし跡なるが故に堺神の甚く汚惡み懲し給ふ者なり　寔に蕃神の渡參來る時は必祭却す可き事なり其蕃神の禍爲る事は欽明天皇御紀十三年に西蕃より佛像を渡し參來れる時に物部尾輿大連中臣鎌子連等の同じく奏されたる忠言に我國家之王二天下一者恒以二天地社稷百八十神一春夏秋冬祭拜爲レ事方今改拜二蕃神一恐致二國神之怒一と聞え上られし如く國神の其を汚穢み嫌給ふ御怒と蕃神の疎び荒ぶる枉事と此二にて惡神所を得る故に其時にも蘇我稻目宿禰が向原家を寺と爲て佛さび爲けるに於後國行二疫氣一民致二夭殘一久而愈多不能治療と有如き天氣行れし故に右の二人の忠臣等同奏けらくは昔日不レ須二臣計一致二斯病死一今不遠而復必當レ有レ慶宜三早投弃懃求二後福一と申て其佛像を難波堀江に流弃られしは遷却崇神祭の趣意にも此堺神祭の本旨にも協ひて甚尊く雄々しく健氣なりける事其也異土の毒氣に塗たる蕃神の渡來る計り世に忌はしき事は非りけり　猶敏達天皇十四年御紀に蘇我馬子が其父の志を繼て石像を禮拜ける下に是時國行二疾疫一民死者衆と有を始て其餘悉く記すに遑ず佛法世に災を爲事此を以て知べし　右の如く蕃神を送却す此堺神祭を遠皇祖の神隨に定置させ給へるは幽深き由有る事なりけり能く物爲給はでは得有まじき事ぞとぞ思ふ赤縣より渡來る文書の中にも取て用べき事の無には非ねども又無て事の足はぬと云事も非るを其中に其を深く學ふと爲ては君臣の道理を取失ひ內外の差別を忘竟るに至る事少からず彼堯舜が禪讓の如きは然も免さば許し置るゝ方も有なむを湯武の放伐の如きは惡逆無道にして論の限なる大枉事と云べし彼は素より定れる王は無して君臣の義も何も立ざる國なれは其君を弑して國を簒ふも常なる事なれ其我皇國に然る敎の渡參來て其を人の受學ぶ心に成りては天統を尊重せず寶祚を輕蔑しめ奉る如き枉事の無とは云べからず天位を簒奉る如きは人の歸服さる所なれは絕て無事には在れども人臣の憍放る事此より出て末代に其弊風の未除こらざるは全く漢學の害より延及べる者なり漢籍に共て蕃神の渡參來て其所を得たる事知べし已に當時蘇我馬子が崇峻天皇を弑し奉りしことの如きは天皇を現御神とも現人神とも仰奉り來る上古には且ても無事にて又後世にも例無る可き枉事なり早く神逐ひ却く可きは蕃神の心なりかし　明世に出來たる武備志と云書又五雜俎と云る書にも彼船の皇國に孟子と云書を渡す事を大に怖る者強て持渡る時は其

船漂沒すと云り彼國人にして記せるなれば實に然る神威の事共も有つらむを何時と無く神の守護の薄くなれる隙に渡參來て今は世に普く行るゝこそ悒しけれ彼孟軻か言を神の惡せ給ふは君之視レ臣如二手足一則臣視レ君如二腹心一君之視レ臣如二犬馬一則臣視レ君如二國人一君之視レ臣如二土芥一則臣視レ君如二寇讎一と有なとは世に謂ゆる事の始を起せる也鈴屋大人の此を難られて此一章を以孟軻か大惡を識る可し此は君たる人に教たる語とは云ながら餘に口に任せたる惡言なり此書人の臣たらむ者の見べき書に非ず臣たる人に不忠不義を敎たる者なり」と云れたる如く皇國の如き浦安國にても此を信ふ者有なむには皇祖天神より傳來れる神璽の大御風儀の横さまに改革る事もや有むと神等の其を塞へ此國に入給はざりつるを如何に荒びてか蕃神の渡參りけむ如何に荒びてかも蕃神の導入けむ　○同式に障神祭五色薄絁各一丈二尺倭文一丈二尺木綿麻各十二斤庸布八段熊皮牛皮鹿皮猪皮各四張鍬十六口米酒各四斗稻十六束鰒堅魚海藻各八斤腊鹽各二斗水瓮四口坏八口匏四柄槲十二把薦四枚（五色薄絁以下等分）右客等入京前二日京城四隅爲レ障神祭一と有は四時祭式に謂ゆる道饗祭と同じ事なるが蕃客入京の前に豫て此祭を被行て蕃神を京城に令入じと防遏る爲に在るなり（前條に擧る堺神祭は謂ゆる畿内十處の堺神なるが其十處の皆は祭られず其往來の道路の堺神耳を祭らるゝなり此は其往來に拘らず凡て京城の四隅にて祭らるめり）上古の神氣盛なりし間は天之日矛が渡參來りし時も將レ渡二難波一之間其渡之神塞以不レ入と記に見えたる如く彼は姓氏錄に稻飯命之後也と有すらに塞て容易く入給はぬを播磨風土記に天日槍命從二韓國一度來到二於宇頭河底一而乞二宿處於葦原志擧乎命一云々即許二海中一と有も又其國中の塞給ひし故に終に葦原志擧乎命の其邊に鎭座す社に乞て此國に入しなり其は蕃神の従來れらむには此國の害とも成もぞ爲るとて守り防遏給へるならむ是等の由縁を以て蕃客の入朝する時には其過る堺神祭と其宿る京城の障神祭とは行はせ給ふ事にて其始は何れの時か有む神功皇后の御世に事始め定行はせ給へる者也けり阿那可畏皇御孫尊乃御命以氏住吉爾稱辭竟奉留皇神等乃前爾申賜久大唐爾使遣佐牟止爲爾依船居無氏播磨國與理船乘爲氏使者遣佐牟止所念行間爾皇神命以氏船居波吾作牟止敎悟給比支敎悟給比那我良船居作給部禮婆悅備嘉志美禮代乃幣帛乎官位姓名乎令捧賚氏進奉久止申

皇御孫尊乃御命以氏は九月神嘗祭詞に皇御孫命御命以遷奉太神宮祝詞に皇御孫命能御命乎以氏と有例に同じ（但此二の皇御孫命の命字は出雲本に依る所なり天皇我御命以氏と有は今京以來の事にて公式令の規定に違へり鈴屋大人云く皆に命と書しゝは此ミ奈良の朝廷已前の文なり」と云れたるは同頤（カタチ）なり一字二字などは後に書替たる事も何どか無らむ總ての文を能見てこそ古き近きたゝ定む可き事なれ）○住吉爾稱辭竟奉留の稱ノ字諸本其に無し例に違へり決めて脱たるなり今賀茂翁の補はれたるに從へり（稱辭竟奉と辭竟奉と差別有て混りに物爲可からざる事已に新年祭第三詞の下に説る如し）

住吉は古事記(御身禊段)に其底筒之男命中筒之男命上筒之男命三柱神者墨江之三前大神也と有を神名式に攝津國住吉郡住吉坐神社四座(並名神大月次相嘗新嘗)と有て四座なるは私記に稱二四座一者神功皇后座二別殿一歟と有其如く後に合祭れる所なり記傳卅五(二十丁)に神功皇后の御靈を合せ祭給へるは高津宮の御世に菟原郡の住吉より今地に遷奉給へる時抔にもや有むと云れたるは然も有べし(同式に長門國豐浦郡住吉坐荒御魂神社三座並名神大筑前國那賀郡住吉神社三座並名神大と有を合せて思ふに決く三前大神に神功皇后を加祭給へらむを其は古事記を記されたる和銅よりは後なる事云も更なり其外にも壹岐國壹岐郡住吉神社名神大對馬島下縣郡住吉神社名神大と有は右の三柱を合せて一柱に祀祠るなれば凡の例には非ず林道春が神社考に二十二社注式を引て攝津住吉神社四座社家者說曰第一天照大神第二宇佐明神田霧姬命是也第三底筒中筒表筒是爲二一座一第四神功皇后と有は古書に合ざる所なり此故に社家說與二神書一異と有り)臨時祭式に攝津國住吉神社正殿廿年一度改造其斯使用二神税一如無二神税一即充二正税一と有て香取鹿島兩神宮と同じ御會釋なるを以其崇重の佗に異なるを知べし神階の事は記傳に引れたる續紀に延曆三年六月叙二正三位住吉神勳三等一同年十二月叙二住吉神從二位一日本紀略大同元年四月攝津國住吉大神奉レ授二從一位一以二遣唐使祈一也と有が如し(村上天皇康保二年乙丑霖雨に依て宮幣を獻らるゝ十六社の數に入給へり後に二十二社の其一たり又八十島社にも此神社の預給ふ事臨時祭式に出たり)記傳六十七丁に云く此大神の鎮座る事は書紀息長足姬尊西國より海路を歸上り給ふ所に云忍熊王引レ軍退屯二於住吉一時皇后聞二忍熊王起レ師以待之一命二武內宿禰一懷二皇子一横出二南海一泊二于紀伊水門一皇后之船直指二難波一于時皇后之船廻二於海中一以不レ能レ進更還二務古水門一而卜レ之於是天照大神誨之曰云々亦表筒男中筒男底筒男三神誨之曰吾和魂宜レ居二大津渟中倉之長峽一便因看二往來船一於是隨二御教一以鎮坐焉則平得渡レ海と見え(今云此に吾和魂と有は荒魂は已に去年十二月の下に於是從レ軍神表筒男中筒男底筒男三神誨二皇后一曰我荒魂令レ祭二於穴門山田邑一時穴門直之祖踐立津守連之祖田裳見宿禰啓二于皇后一曰神欲レ居之地必宜レ奉レ定則以二踐立一爲下祭二荒魂一之主上仍祠立二於穴門山田邑一と有は上に引る長門國豐浦郡住吉坐荒魂神社ノ御事なるが彼征韓の時に和魂服二王身一而守二壽命一荒魂爲二先鋒一而導二師船一と宣へる荒魂を以て坐守坐す事竟給へるに依て彼天照大神の御誨に我之荒魂不レ可レ近二皇居一と御給へる如き由にて己に別れて鎮給ひ其和魂の玉身に服ひシタガヒて壽命を守り坐在したるが其祠を乞給るなり)攝津風土記に所三以稱二住吉一者昔息長足比賣天皇世住吉大神現出而巡二行天下一覓二可レ住國一時到二於沼名椋之長岡之前一(前者今神宮南邊是其地)乃謂斯實可レ住之國遂讃稱之云二眞住吉國一乃是定二神社一今俗略之直稱二須美乃叡一と有り」と云れたるが如し但當時眞住吉國と云しは菟原郡住吉鄉の事也しを後に住吉郡なる今地に移奉れるより其地名を移されたる事下に云へる如し(又西國なるなも同じく住吉と云は此の名を取れるなりと云れたるは然る言にて事代主命の大和國葛上郡鴨の本宮に鎮座を以て其を移祭れる何國なるも賀茂と呼が如くなり)二十二社注式に

も住吉大神其荒魂在ニ筑紫之小戸一和魂者神功皇后征ニ三韓一時顯ニ坐攝州一而託ニ神功皇后一而循ニ行四方一遂到ニ攝州之地一宣言曰ニ眞住吉眞住吉之國一也因鎮ニ座其地一名曰ニ住吉一豐浦之住吉那珂之住吉因ニ攝州地名一通ニ呼之一ーと有に託ニ神功皇后一而循ニ行四方一と見えたるは穴門豐浦宮より御船發して務古水門に泊給迄の御船路の間にても其鎮坐べき宮地を求給し也けり（此は風土記の異本に在しなる可し此を神社考には住吉緣とて引るに征ニ三韓一時の下に陰陽二神而の五字有但其荒魂在ニ筑紫之小戸一は穴門に在事を傳せるなる可し）但右の住吉の古說は今の住吉郡住吉郷なるには非ず記傳卅卷七十七丁に大津渟中倉之長峽は和名抄に攝津國菟原郡住吉郷有る其處にて今も住吉村と云ひ本住吉とて神社も有なり古名渟中倉の里と云しとぞ此地は武庫山のまと別の南方へ長く引延たる尾崎にて眞に長峽と云つ可き地なり今海邊へは村より七八町有り（今の住吉の地は後に移されたる處にて此渟中倉之長峽と有地には非ず今の地にては神功皇后御紀に直指ニ難波ニ于時皇后之船廻ニ於海中一以不レ能レ進更還ニ務古水門一而卜レ之云々因亦停レ渡レ海と有に叶はず菟原郡の住吉にて能合へり）と有り今地に移奉られし考は同書卅五丁二十に云く高津宮御世に又定ニ墨江之津一と有るに就て熟思ふに菟原郡の住吉より今地に大神を遷奉賜へりしも此同時にぞ有けむ雄略天皇十四年御紀に泊ニ於住吉津一と有は今地と聞えたれは其より先に遷給へりし事は知られたり然遷奉賜へるは必神の御誨なりけむ事は論無し此時に其津をも共に移し定賜へるなる可し（此御世難波に大宮敷坐るに就て大神の御心京師に近く坐將欲くや所念看たりけむ斯て津の事は神功皇后御紀なる御誨言に宜下居ニ大津渟中倉之長峽ニ看中往來船上と有如く菟原郡に坐しより其地大津にて有しを今地に移し給へるなり和名抄に同郡に津守郷有は其大津を守れりし人等の居住なる可し西成郡に津守郷有も其に菟原郡より移されたるなり然れば郡名を住吉と號たるも住吉社住吉津を移されたる後の事なり以上撮要）と所見たるが如し此に就て說有り下に皇神命以テ鎮居波吾作牟止數悟給支と有る下に云り此に見合せて此傳の說の謂れたるを思ふ可し○皇神等とは右の三前大神に息長帶比賣命を加へて神名式に住吉坐神社四座と有る其を申せり其比賣命を玉津島神とも申せりとぞ（玉勝間花雪卷に紀伊國人岩橋方榮と云し人の著せる物の中に出たる說とて抄しておこせられたる所に云く玉津島神は神功皇后なる可し其故は住吉神社四座の中に第四は神功皇后なるを一說に玉津島と云り袖中抄に故左京亮顯季云住吉神主國基云住吉に本三社なり第四社は玉津島明神即衣通姫なりと云に紀（イハ）は有に結ふ依て和歌なり給ふと云るは玉津島には神功皇后なる故に其傳へ有なり然るを衣通姫なりと云るは世間の妄說に依て誤れるなり但玉津島を和歌の神と申すは本和歌ノ浦の神と云事なるべし後地名を和歌と云へはなり但住吉を和歌神と爲る事も第四社神功皇后にて若ノ浦の神なるより出たる事なる可し但玉津島には津を渡りて玉出島（タマデシマ）也榮花物語には玉出る島と有り依て按に此地に神功皇后の新羅を伐給ふ時に如意珠を海中に得給ふと有る則如意珠の出たる地なるべし亦功皇后の紀伊國に來坐る事日本紀に見えて由有り斯て其玉を得給へる地なる故に此皇后を祭れるなる可し或說に攝津國住吉に玉出島有り神功皇后新羅を伐給ふ時干珠滿珠を得給ふ其玉の出たる所なりと云るは紀伊國の玉出島の事を誤て傳たるなる可し紀伊國の玉出島の神を後に住吉にも祭れるに依て其を玉出島とは云ふなる可し云々）底筒之男命中筒之男命上筒之

男命と申す三柱神の名義筒は野椎神石土命など申すも同じ状にて筒は傳(ツタフ)なり傳とは海の底と中と上とを持分て其御靈の至り及ばせ給はぬ隈無き事なり萬葉五に宇奈原能邊爾母奥爾母神豆麻利宇志播吉伊麻須諸能大御神等上有を十九に墨吉乃吾大御神船乃倍爾宇之波伎座船騰毛爾御立座而佐之與良牟磯乃崎々許藝波底牟泊々爾荒風浪爾安波世受平久率而可徹理麻世毛等能國家爾と有を合すれば諸能大御神等と有も住吉大神なる事知らる上に引る神功皇后御紀なる御誨言に吾和魂宜下居二大津渟長倉之長峡一便因看中往來船上と見えたる看二往來船一の看は所知食す義なるを合せて御名の筒は傳にて海原の邊にも奥にも神積り御在して船路を守坐す由なるを知べく其即往來の船を所知看にて在る事を曉る可き者なり又彼御誨言に和魂服二王身一而守二壽命一荒魂爲二先鋒一而導二師船一と有しに依て撝二荒魂一爲二軍先鋒一請二和魂一爲二王船鎭一と御紀に見えたる彼此を按るに攝津國に坐住吉大神の其和魂に坐り服二王身一而守二壽命一と宣ひし御言の如く船の鎭と成て壽命を守給ふなり右に引る歌に平久率而可徹理麻世は守二壽命一ゐ由なるなり又萬葉廿に須美乃延能安我須賣可未爾奴佐麻都利伊能里麻乎之豆奈爾波都爾船乎宇氣須惡など有も海路の守を仰く由なり〔右の看二往來船一の看は見行し所知食す由なる事は月夜見命綿津見命などの見其義なり鈴屋大人は右の見を母知の約れるにて月夜見は月夜持綿津見は海津持にて共に所知食す意に於て異有に非ず但同説に筒は都知にて都は例の之に通ふ助辭知は男の稱名なりと云はれたれども野椎神磐筒女神の如きは女神なれば當り難かり〕偖總ての大海の事は大綿津見神在し其底と中と上とに御靈を分て三柱の綿津見神の所知食し御在る事神典に所見たるが如し然れども其海路の事は右の三柱之底筒之男中筒之男上筒之男神等の主領き所知食す所なり全躰の海を持給ふと其海の用を所知食との差別混ふ可からず〔古事記海宮段に吾掌レ水故云々と綿津見神の申給へるは海水を掌れりとなり又紀記共に大小の魚を集めて御言宣せるなど其神の掌る所なるが故に亡にし鈎の事を求給ふと爲て海中に入給ひ其神の許より令獻給へるなど考合す可なり〕偖右の三柱を神代紀に磐土命とも赤土命とも底土命とも有は筒と土と通ふ故なり此に依て按ふに神代紀に鹽土老翁古事記に鹽椎神とも有る土(ツチ)は若くは之(ツ)路(ヂ)の義にて潮路(シホツチ)の神と申す事なる可くや若て此は三柱の筒男命を一柱に合せ申せるにて大綿津見神の例なる可し其は古事記に於下其弟泣患居二海邊一之時上云々鹽椎神云下我爲二汝命一作中善議上即造二無間勝間之小船一載二其船一以教曰我押二流其船一者差暫往將レ有二味御路一乃乘二其道一往

者如₂魚鱗₁所ㇾ造之宮室其綿津見神之宮者也到₂其神御門₁者云々其海神之女見 相議者也と有て 神代紀なるも此に同じ償は彦火々出見尊の海中に鉤を失ひ給ひし時の事なるが其は鹽椎神の預る所に非るが故に海神の宮に送奉り給ふと爲て其を載奉る小船を作て献り又其海路の事をも敎奉給へるなど悉く住吉大神の守給ふ狀に合れば其三柱を合せて稱申す所なる事知べし又此にて大海神と海路神との差別も甚分明なる者なり 神代紀に事勝國勝神者是伊奘諾尊之子也亦名鹽土老翁と有る伊奘諾尊の子なる由は聞えたれど事勝國勝神は同神なりや別神なりや未考得ずと雖も此は決めて混にたる傳説なる可し新年祭第七太神宮詞の下に云り 斯て住吉大神は右の如く海路を守給ふ神に坐が故に御紀に請₂和魂₁爲₂王船鎭₁と見えたり其は海路を守護坐が爲に王船の鎭めと齋はれ御在せるにて船靈神には非ず式にも攝津國住吉郡船玉神社と有りて別なり此は道饗祭詞の注に云る如く岐神に御在して彼踈び荒び來物を防遏めて船中を平安から令る神に坐り 大海を主る神と船路を守神と船中を守ると各々其々に神等の持分守給ふ所有て其御恩頼を令蒙給ふ事別々なるを思べし 鈴屋大人の說れたる如く凡て異國に係れる事は主と此大神の所知看なり古事記に即以墨江大神之荒御魂爲₂國守神₁而祭鎭還渡也と有る由に緣れり直に海路の平安を耳守坐

とには非ず凡ての事に預給ふ事知べし 下に引る萬葉の歌をも思合す可き者なり ○大唐御の大字は彼戎に記す所を見て何の心も著ず書たらめども大寶の御令に己に蕃國の列に置れたるからは謂ゆる尊內卑外の趣に違へれば必除く可し考に唐法を受るに非ぬに大と貴ぶは奈良人の僻事なり民の疑ひて我天皇を輕しむる業ぞ神に申す事は上代に習て云へば假令大唐と書をも毛呂許志と訓からは大は無用の字なり」と有は實然る事なり 馭戎慨言に云く皇國には元來書と云物無りしを明宮の御世より始りて世人の學び讀は皆唐土の書なれば何れにも其王を天子と崇め萬に尊げに書成せる其書典(フミドモ)に倣ては皇國人も自然彼王をば天子と云物ぞと何心無く思取て古の書等にも然は書れし物なれど實には僻事なり又大ノ字を添て大唐と書れたるも同じ事にて彼國の書に然云るに目馴たる上に彼國周と云し代迄こそ諸の地名なども多くは一字なりしが秦漢の頃よりしては二字なるが多きに目馴ては唯一字の國名は物に書に何とかや事足ぬが如くなる所の多かるから二字に足さむ爲にも添たるなり國々の郡鄕の名共必二字に書べき由の詔有りしなども思合すべし凡て古の正しき史には中國中華とは皇國を耳云て唐國をば西土などゝ云て摠て蕃國の御會釋なりしに合せて思へば大ノ字は尊む心にて添たるには非ずかし然れど彼土にても其代の者こそ尊びて大とは云事なれ其代過て後迄云る事は例無れば て異國の名に皇國人の然書習しは僻事なり云々 借右の赤縣州など地續の國々を合せて古くは粟島とも常世國とも云るを其國を限れる號を毛呂許志と云事はしも彼韓(カラ)國(クニ)新羅(シラキ)百濟(クダラ)高麗(コマ)肅愼(アシハセ)任那(ミマナ)等の國號などの如きは素より皇國の大古より云來る所にて彼土の語の風ならぬを以思ふに然る可き由有てこそ號させ給ひけめ 韓國の名

は下に云べし新羅は神代紀に素戔嗚尊帥其子五十猛神降到於新羅國と有は後の號を始に及せりとも云べけれども元より神代よりの傳なる事論無く其上出雲風土記に見えたる八束水臣津野命の國引の古事に栲衾志羅紀乃三崎矣國之餘有耶見者國之餘有詔而云々と有れば已く我皇神等の號させ給へるなりけり百濟高麗肅愼などの國號も彼が言語の狀に非るを以思ふに我皇神等の定置せ給へるが傳れるなる可し任那は垂仁天皇御紀に元意富加羅國と云しを改汝本國名追負御間城天皇御名便爲汝國名云々故號其國謂彌摩那國其是之緣也と有る大御詔などの狀を思ふ可し然らは毛呂許志とは少彦名命などの天より降坐し故事などに依れるにや古事記なる同神の渡來る條に爾白上於神產巢日御祖命者答告此者實我子也於子之中自我手俣久伎斯子也故與汝葦原色許男命爲兄弟而作堅其國と見え神代紀に大已貴命云々遣使白於天神于時高皇產靈尊聞之而曰吾所產兒凡有一千五百座其中一兒最惡不順敎養自指間漏墮者必彼矣宜愛而養之と有とを合せて思ふに御祖命の御手俣より漏來坐て其國を經營給ひ由緣などを以其國號を毛呂許志とは云なる可し伯耆風土記に相見郡々家西北有餘戸里有粟島少日子命蒔粟莠實離々即載粟彈渡常世國故云粟島也と見えたる常世國と云も其國の名なるが但此は皇國の東南西北に在る總ての外國を云名にて祝詞に國乃退立限とも白雲乃向伏限とも有如く大地は皆なる物なれば皇國を中と定めて四方の國々の國の所在何れも卑く退き伏て有を云なり粟島の事は已に祈年祭生島神詞の下に云れは其に見合す可し少彦名命の彼土に天墮せる故事の彼に傳れるも有て平田翁赤縣太古傳三五本國考に說れたり 又韓國とも云事は神代記に素戔嗚尊曰韓鄕之島云々と有は右の新羅百濟高麗の三國を合せて三韓とも韓國とも云故

に其に局れる號の如く思も有り又韓の字音の如く思ふも有れども共に僻事なり然るは素戔嗚尊の五十猛神を帥て降到り給ひしは新羅の地なる事上の細書に引る御紀の文にて著きを此の御言は普く其地聯きの一大部を指て宣へるにて三韓は更なり唐土天笠などの地方を一に合せて指給へる事韓鄕之島と有を以知べし古くは大和島師木島など必海河の周れる一區（ヒトツボ）の地を某島と云事常なれど韓鄕之島は其とは異なり然れども神功皇后の御世に新羅百濟高麗の國の內屬（シタガ）ひ參れるより自然其地に係て云事多在し故に終に三韓の總號の如く成れりしなり唐國をも加羅と云事は萬葉十九に漢人と詠み遣唐使の事を韓國邊遣とも韓國爾由伎多良波之弖とも有を以知べし然れば任那國の本名を意富加羅國と云しも加羅國の上に意富の言を冠て其國の名とは成せりしなり欽明天皇御紀に二十一年任那滅焉總言任那別言加羅國云々合十國と有は崇峻天皇の大御世に任那の名を改給へる故に其別てる十國の中に加羅國の名を遺存せりし者ならむ 加羅と云ふ號の故由はしも神代紀御天降段に膂宍之空國自頓丘覓國行去と見え一書に膂宍胸副國自頓丘（カタツカタ）覓國行去と見えて空國とも胸副國とも有る副は邊僻に倚れる處を云なるが其空國を古事記には此地者向韓國眞來通笠沙之御前云々と有れは此二を合せて空國即

韓國なる事知るゝなり記傳十五(八十四丁)に韓國の韓は借字にて空虛國の義にて即書紀の空國なり凡て物の內の空虛くして實の無を加良と云ふ殼なども其意なり神代卷口訣に膂宍之空國荒芒地仲哀紀曰熊襲國者膂之空國也膂ハ背也無レ肉以譬ニ不毛之地ニと云ひ纂䟽に空國則不毛之地と有り此等の意なり」と云れたる韓の例にて彼外蕃の悉は皇大御國の瑞穗國と云て國饒の瑞々しく美好しく有て稻穀は云も更なり絹綿の豐饒に屋材の數多に寶鐵の許多に家肆の富榮え人民の蕃息て國も狹に充滿たる恂怜國の如きには非ず何地も何處も荒芒なる不穀しき空虛なる故に韓の戎國をも唐の戎國をも受張て加良と云ひ其餘なる四夷八をも打任せて加良と云ぞ古名とは聞えたる 又後外國の始めは伊邪那岐伊邪那美二柱神國生坐むと爲て遘合坐むと爲給ふ時女神の御言を先立給ひし過を受て成れる蛭子粟島有り其蛭子は蝦夷島なり粟島は粒々と小く生坐る所に爲て神代紀に處々小島皆是潮沫凝成者矣亦曰水沫凝而成也と有る狀に二柱神の生坐るよりは遙に後に成就るが元來淡め惡み坐し由を以て淡島と號させ給へるが後に少彦名命の天降坐て經營給ひし由緒に依て粟島と云事即皇大御國を瑞穗國と云るが如し淡め惡坐し故は稻穀も生立ず空虛(ウツロ)なる國の故なるを以なるべし神代紀に韓郷之島是有ニ金銀ニ云々と見え仲哀天皇紀なる神の御誨に有ニ寶國ニ譬如ニ美女之睩ニ有ニ向津國ニ眼炎之金銀彩色多在ニ其國ニ是謂ニ栲衾新羅國ニと有が如は外蕃の諸國共に今日に必用なる米鹽以下の物はしも素より是ざれども金銀彩色の多在る事古より然有しかば皇神等の御誨有て其を寄奉給へる也今も現に然り金銀寶貨の類は我に用有る所なるが其餘の外國の品々は衣食住の物質と爲る物は一も無く皆奇器淫巧の類にて有ても益無く無ても害無き物共なるを以外國の空虛なる事を曉る可し ○使遣止(左半爲衛)の使は天朝より彼戎國の酋長に辱くも大御使を下賜はらむと爲し時を云なり遣唐使と云は大使副使をも兼たる唱なるが此に使と有も其なり使の下に者の聯辭を讀附べし 又遣唐執節使とも云り孝德天皇白雉四年御紀に發ニ遣大唐大使小山上吉士長丹副使小乙上吉士駒學問僧云々百二十一人ニと有る大唐の大ノ字の負はざる事上に已に云り總て此遣唐使の事は馭戎慨言に委しければ必見る可し ○依ニ船居無ニ氐 は臨時祭式に舶居とも作て船を居置く湊にて津と云る此なり但上古には船の作り狀小かりし故に其津の陸上に引上て船を居置たりし故に船居と云しを其に事起りて後には唯に湊の內の海に浮べ置をも共に船居と云りと見ゆ此船居の委しき事下に云べし 考に云く續紀に播磨國の某が舶居の地を奉りて位を賜りし事有り」と有も舶居の津を見定めて奏上たるなり ○播磨國理(與)船乘爲氐 諸本共に船乘止爲氐と有る小字の止は衍なり今此を削る 此は上に使遣左半と有る大御使の播磨國より船乘り爲て其舶居を開き渡るを云なり 若て此舶居は播磨國の室津なる可し此津は已に神代より有來し證文有て別に記せる物有り ○使者遣(佐半)止 所念行間(爾) 鈴屋大人說に使者の者は波と云ふ聯辭なり然れは此使も上に云る使と一にて遣唐使を云なり 考に使者の二字を直に都加比と見て强ひて上なる使の下にも者字落たらむと云ひ乘止の止と云辭に就て下なる使者(ツカヒ)は舶居の所への御使なりと云れたるは皆違へり船乘止と云語穩ならず若考の說の如くば船乘爲半止爲氐などこそ有べけれ其上若其播磨國の舶居の事ならば唯に播磨國理與船乘爲志米半止所念行間爾など

(こそ云べけれ其をば云ず爲て其所へ御使遣さむと爲る事耳を褻庇しく云べくも非ぬを思べし)倩後の心以て思へは同じ遣唐使の事を二度云むは煩しき様なれども如此云ぞ返りて古の語の狀には有ける」と云れたるは然る言なりかし○皇神命以氐船居波吾佐牟止敎悟給比支此は住吉大神の命以て敎悟し奉給へるなるが此御悟の時は何れの御世なりけむ今詳ならず强て思ふに此は推古天皇の大御世に始て唐國に大御使を下賜はるよりは以前の事にて彼三韓の内屬ひ奉れりし程より彼に置れたる日本府に大御言持する人々を被遣し時などの御悟にこそ然る事は有けめ(此詞の遣唐使よりは以前に有て其三韓に大御使の船發に住吉大神に幣帛を奉來れる由は已に上に云るが如し)上に引る記傳卅五に高津宮御世に定二墨江之津一と有に就て思ふに菟原郡の住吉より今地に住吉大神を遷奉賜へりしも此同時にぞ有けむ雄略天皇御紀十四年に泊二於住吉津一と有は今地と聞えたれは其より先に遷給へりし事は所知たり然遷奉賜へるは必神の御誨なりけむ事は論無し此時に其津をも共に移し定賜へるなる可し」と云れたるは實に然る言にて此時迄は其大神の本鎮坐る菟原郡なる住吉の地即大津にて在しを其現在の地形を以て上古を思ふに此邊を攝津灘と云て海深く爲て船繫には宜しく有れども戌亥を後にして武庫山を負ひ辰巳を前にして和泉國に相對たれども東南の風の恐れ有て永く其處には船を留難き故に難波津界津兵庫津等に船を泊る事なれば皇國の海を往來ふ船の如きは其本住吉の大津に船を居も爲つ可けれども異國の大洋を渡る大船は其に居べき由無かりし故に播磨國の室津より出し遣給ふ例也しを更に住吉大神の船居は我作むと敎悟し給へる其今の住吉郡なる住吉にて高津宮御世に定二墨江之津一と有る此なり(委くは住吉爾備辭竟奉の下に云るを見る可し古の船居と云は陸上に居るを本として云る事上に云り)○敎悟給比那我良の那我良は考に神隨の隨に等し敎給ふ任に云ふ語なり」と有るが如し(那我良は中在(ナカラ)にて其事の中に在て直に其物其事を然爲る由は神那我良の下に云り)○船居作給は記に定二墨江之津一と有る其時に神の御悟有て船居を作らせ給けむを即其を津と定給へるなり(考に此船發せむ頃難波の湊塞れる事有て播磨國鹿兒湊より發せむと議給はず間に此皇神の御悟有て忽船津開けし時の事と見えたりと有は委しからず)又考に三代實錄に遠江國敷智郡濱名の港の塞る毎に其地の角避比古神の開給ふ事も有り倩此詞の狀奈良朝に此事有て即祭も有しと見ゆるを續日本紀に見えぬは漏たるか又神の命は奈良より上代の事なるを後に如此稱申か」とも有れども已に記傳の說に依る時

は其津の開けしは仁德天皇の御世也し事論無し又考に今昔物語に行基法師難波江に行て云々を堀へ開か令め船津を造と云事有りと云れたる其船津は即船居の事にて同じ記傳卅五二十一丁に雄略天皇御紀に十四年春正月身狹村主青等共吳國使將ニ吳所レ獻手末才伎漢織吳織及衣縫兄媛弟媛等ニ泊ニ於住吉津ニ是月爲ニ吳客道ニ通ニ磯齒津路ニと有る此を菟原郡なるに非ず今の住吉の地なりと爲る故は倭京へ入料に磯齒津路を被開たるを以なり抑吳國使は希見しき客なる故に難波津には泊ずして殊更に此住吉津に泊べく豫て定給へるなる可し凡て異國の事は此大神の所知看が故也意取と有は實に然る言也此に依て愈已く仁德天皇の御世に住吉津の定れりしは此詞に謂ゆる皇神命以て船居は作給へる者にぞ有けむ此由緒を以こそ此度の吳客は住吉津に令泊給へりけむかし然るは此より到るも彼より來るも共に此大神の凡て異國に係れる事は皆がらに預り所知看を以なり萬葉十九に天平五年遣唐使に餞爲る時の歌に住吉爾伊都久祝之神言等行得毛來得毛船波早家無と詠み又贈ニ入唐使ニ長歌に虛見都山跡乃國青丹與之平城京師由忍照波爾久太里住吉乃三津爾船能利直渡日入國爾所遣とも有り記傳に此歌を引て是又遣唐使なる

を以殊更に此津より發船爲るなる可し」と云れたる如く、難波より態と住吉の三津に到り其大神宮に幣帛を捧げ神言を乞請て船を出し遣る例なりしなり住吉乃三津とは住吉津を美稱て御津と云るなり難波の三津大伴の三津など云る所には非ずと記傳に說れたるが如し ○悅備己喜志美は神の船居を作給へりし事を厚み所思食す由なり言義悅は寄乞喜は情及なる可し其悅は古事記に貴御子得坐る條に伊邪那岐命大歡喜詔吾者生ニ生子ニ而於ニ終ニ得ニ三貴子ニ云々と見え神代紀にも故ニ神喜曰云々と有は物の寄來るを御心に感坐るにて常に人の物を悅ぶ狀も然り字は悅をも喜をも歡をも種々に書れとも言義は同じく又具足（ヨロヒ）と云物名及萬葉一に取與呂布と有も宜しく宜しきと活用く詞なども共に物の寄る義有り喜の情及なる事は物に見賞開賞たる事の心足ひに至り及ぶを云なり神代紀に憙哉を阿那宇禮志夜と訓るに姸哉と作るをも合せて知べし此に反（ウラガヘリ）して愁（ウレフ）などは情態（ウレフ）にて事の案外なる所に傾き歪（フ）る言なるを以て知べし然れば悅は物に就て喜は事に就たる言なるを重ねて事に悅己備喜美とは云る者なり ○禮代乃幣帛は上に擧たる臨時祭式開遣唐船居祭條なる幣物を云り禮代の事は出雲國造神賀詞後釋自利の條に云べし ○官位姓名爾令捧齋弖進奉久止申は同式に右神祇官差レ使向レ社祭レ之と見えたる是なり

延喜式祝詞講義十五之巻

嘉永四年七月晦日於　淡路國　鈴木重胤　著
出羽國大山村大瀧光　出羽國　内藤昌運
憲之家稿之同國　鈴木秀春　校

○出雲國造神賀詞（イヅモノクニノミヤツコノカムヨゴト）、出雲國造者（イヅモノクニノミヤツコハ）、穗日命之後也（ホヒノミコトノノチナリ）

神魯伎神魯美の命以て皇御孫命に天下大八島國を事依し奉らし丶時に出雲臣等が遠祖天穗日命を國躰見に遣し給ひければ其神天翔り國翔り天下の消息を悉くに見廻給ひて復命申聞え給ひけらく豊葦原之水穗國は晝は狹蠅如す水沸き夜は火瓮の如く光神（カヤクカミ）在り石根木立青水沫も言語て荒ぶる國也然れども鎮平て皇御孫命に安國と平けく所知坐しめ奉らむと白給ひて其子天夷鳥命を經津主神武甕槌神に副て天降し遣して荒振神等を撥平げ天下作し丶大神大國主命をも媚鎮めて現事顯事をも事避しめ奉れりしかば吾は百不足八十坰手に隱て候ひなむと申給ひて八百丹杵築宮に鎮り坐りき（此は此詞を本と爲て古事記日本紀をも合せて云所なるが其委しき事は條々に云が如し）神代紀書一に高皇産靈尊云々勅大己貴神曰云々夫汝所治顯露之事宜是吾孫治之汝則可以治神事又汝應住天日隅宮者今當供造即以千尋栲繩結爲百八十紐其造宮之制者柱則高太板則廣厚又將田供佃又爲汝往來遊海之具高橋浮橋及天鳥船亦將供造又於天安河亦造打橋又供造百八十縫之白楯又當主汝祭祀者天穗日命是也と見えたる如く此時に始て顯幽界を分ち皇御孫命の天降り坐て天下を所知看べく事定りける故に大國主命の鎮り坐て幽事所知看む宮造の條々を皇祖天神の御許より宣ひ下されし其祭祀は天穗日命の始て降著し丶時に大神を媚和し給ひ次て天夷鳥命の媚鎮めて現事顯事を事避り奉しめ給ひし其本の所緣に依て其父子二神を天降し遣し坐て其大神の杵築宮に令仕奉給へるなり（但其二神の此國に下著ては其部内に坐す熊野大神にも仕奉れりし事此詞に依て著く又神祇令天神地祇の義解に天神者云々出雲國造齋神等類是也と有は熊野大神を云り次に地祇者出雲大汝神等類是也と有を以て熊野杵築兩神宮に仕奉れりし事を知べし書紀通證に引る行成記に長德元年出雲國言上云杵築兩神致齋廢務之由云々此は杵築の上に熊野の二字脱たるかと記傳に有は然言なり）此ぞ顯國にて神の御舍を定て齋ひ奉るの起り又其神主を任して神の御前を令齋祭給ふ事の始なりける（此より前に伊弉諾尊神功既畢靈運當遷是以構幽宮於淡路之洲寂然長隱者矣と神代紀に有は御親常に住給ひし宮を幽宮と爲て其に御身を隱し給ひ其御靈を留置て

天上に復命し給へること此と同じければ此と同じき山下に云るが如し此詞に乃大穴持命乃申給久云々八百丹杵築宮爾靜坐支是爾親神魯伎神魯美命宣久汝天穂比命波天皇命能手長大御世乎堅石爾常石爾伊波比奉伊賀志乃御世爾佐伎波閇奉登仰賜云々と有は右の當レ主ニ汝祭祀一者天穂日命是也と有る其事に就たる詔勅なる事云も更なり然れば大神の宮定め仕奉りし間天より降來坐て祭初給へるは其神に御在るが其鎭祭れる由を以て天上に復命し給ひ大國主命の禮寳を捧奉りて此國を言向覺られし由を申給へる此なむ此神賀吉詞を聞え奏し給へる初なりける其は又皇御孫命の御天降よりは前なりし事此詞に伊波比乃返事能神賀吉詞奏賜波久登奏」と有を以所知たり出雲國土記楯縫郡の所に所三以號二楯縫一者神魂命詔云五十足天日栖宮之縱横御千尋栲繩持而百結々八十結々下而此天御量持而所レ造ニ天下一大神之之宮造奉詔而御子天御鳥命楯部爲而天下給之爾時退下來坐而大神宮御裝束楯造始給所是也云々と有も大神の宮造は天より降坐て命作給へるなり又同記出雲郡杵築郷の所に所レ造ニ天下一大神之宮將レ奉與諸皇神等參ニ集宮處一杵築故云ニ寸付一と有る皇神等も天より下して宮造らし令給ふ神等に坐り其は大國主命を始て其御子神等共に實に入給ふ後なるを以知べし備に此神等共に杵築宮より天に復り參上り給ひし事云も更なり然れども其子天夷鳥命は此國に留り住て熊野杵築兩神宮に仕奉り乍御在るが未其官名は非れども其國造の如くにて自然に其國の政は申けるなり其は古事記に天菩比命之子建比良鳥命此出雲國造云々等之祖也と有は父子の間なる故に何れにも係て其出自を傳たりとも云べけれ其崇神天皇六十年御紀に秋七月丙申朔己酉詔ニ群臣一曰武日照命一云武夷鳥又云天夷鳥從レ天將來神寳藏ニ于出雲大神宮ニ是欲見焉云々と見えたる若天穂日命の此國に留り住給へらむには其聞え高き父神の方を以詔給ふらめども其然らぬを以てこそ武日照命とは仰給ひけめ此事は下に出雲國造の事を註ふ其に委しく記せるを見る可し此は其用有る序に云耳なり記傳七に天夷鳥命を寫すして建比良鳥命の事に其子孫を出せるは此神功有て御名高ければなり」と有れども御功の高き事天菩比命に在れは其に就ては父神の方を申さる可きを然らば建比良鳥命此國に留り住給へるか故なり若して皇御孫命の高天原より天降り來坐て高千穂の皇大宮に高御座を定め給ひ食國天下一天津日嗣所知看す新世の始の時に其天夷鳥命其父天穂日命に繼て兩神宮に仕奉る由を以て其大朝廷に參向ひ負幸物を賜りて國造に任れ仕奉り神の禮代の禮寳と御禱の神寳を捧奉して此詞を奏せる其即此出雲國造神賀詞の始には有ける其は天穂比命波云々登仰賜志次乃隨爾供齋仕奉弖云々と有るを以知るゝなり然れども記紀共に歷世に奏神賀事の事は全に所見無しと雖も國造の家に取ても定れる例なる故に載られざるにこそ有けれ國造本紀に出雲國造瑞籬朝以ニ天穂日命十一世孫宇迦都久怒一定ニ賜國造一と

見えたれば此時なども其事有つらむ事年中恒例の神事公事を正史に載ざると等しければ今論ふ迄も無くなむ有ける 但出雲國造と云職名として朝廷より任し給へるこそは此時ならめども素より出雲國に土着(ツキ)たる國の御臣(ミヤツコ)にて在し事上に云るが如し此時より始て國造の家出來れりと勿給ひ混へそ祝詞考に見えたる國造の說は今依難し 右の宇迦都久怒は崇神天皇六十年御紀に依て稽るに出雲振根の弟飯入根の子なる今度武日照命の天より將來れる神寶を持て叔父甘美韓日狹と共に都に參れりしかば此時に出雲國造の職號を改て賜へるにぞ有べき 但姓氏錄左京神別中に出雲臣天穗日命五世孫久志和都命之後也」と有る此は右の宇迦都久怒命より六世ばかり上なれば末國造にては非りしなり右の宇迦都久怒命は國造本紀に天穗日命十一世孫なるを同錄右京神別上出雲臣神門臣等の下に天穗日命十二世孫鵜濡渟命之後也と見え河內國神別に出雲臣天穗日命十二世孫宇賀都久野命之後也と見えたる國造本紀に十一世孫と有は天穗日命の子武日照命より數たりと思ゆれば何れか誤れり共定め難かり又其飯入根命は其父成に攝津國神別に土師連天穗日命十二世孫飯入根命之後也と見えて甘美韓日狹は飯入根命の弟にて鵜濡渟命の叔父なるを右京神別下に土師宿禰天穗日命十二世孫可美乾飯根命之後也と有て飯入根命と世數の同じきは宜しけれど鵜濡渟命と同じく十二世孫と云事心得ず此に就て思ふに御紀に被ニ貢ニ命一以ニ神寶一付ニ弟甘美韓日狹與ニ子鵜濡渟一而貢上と有は誤にて付ニ子鵜濡渟與ニ弟甘美韓日狹一と有しなる可し如是く見る時は右の二人共に飯入根の子にて兄の鵜濡渟は出雲國造の祖と爲り弟の韓日狹は野見宿禰の父にて既く其派別れたるべし此に依りて今世數を云時は飯入根は十二世孫鵜濡渟と韓日狹とは十三世孫なる可し攝津國神別に凡河內忌寸天穗日命十三世孫可美乾飯根命之後也と見えたる此は記傳七に遠祖天穗日命と天津彥根命と御兄弟の間傳の混つるなる可しと云れたる如く凡河內忌寸の出自とは爲難けれど天穗日命より可美乾飯根命に至迄の世數に用有て引り證と爲べし和泉國神別に土師宿禰天穗日命十四世孫野見宿禰の後也と有ればば甘美韓日狹より派れたりと見て甚能合ひて聞ゆ倩右の韓日狹は其神寶を獻ける賞に伊勢國にて地を賜へるにや谷川士清が書紀の通證に註る如く神名式に伊勢國安濃郡加良比乃神社有り又雄略天皇十七年御紀に土師連祖吾笥仍進ニ伊勢國藤方村弘見部一名曰ニ贄土師部一と見え倭姬命世記に安濃藤方片樋宮と有を度會延佳說を韓日乾飯片樋皆通と云るは然る言なり此は垂仁天皇の御世に在し事跡なれば其より前に此地を賜り住しならむ又士清說に今按藤方村東矢野村有ニ加良須神祠一式所謂加良比乃神社近レ此と有も由有て思ゆ又國造本紀に島津國造志賀高穴穗朝御世出雲臣祖佐比禰足尼孫出雲笠夜命定ニ賜國造一と有る島津は今の志摩國なるが佐比禰足尼は右の甘美韓日狹と聞ゆ此人崇神天皇垂仁天皇二御代に亘る人なるに其孫と有れば志賀高穴穗朝に此世も能合へり 然れば國造に任されたるは右の如く崇神天皇の大御世の事なりけり古事記玉垣宮段に爾出雲國造之祖名岐比佐都美餝ニ青葉山一將レ獻ニ大御食一之時其御子詔言是於ニ河下一如ニ青葉山一者見レ山非レ山若坐ニ出雲之石垌之曾宮ニ葦原色許男大神以伊都致之祝大廷乎と有に國造之祖と有れは當時然稱ざりし如思へども己に其號を用ひたるなり然所思る由は國造とは國の宰と爲て仕奉る此本職の名なるが神に對へては祝と云ふ古の唱也し事此に於て所知たり倩此神賀詞を奏聞ゆる事は其職に就ての事には非ず其祖宗と在す天穗日命天夷鳥命の國向の故事を其裔孫の人等世々出雲臣と爲て神代より以降御世の繼々朝廷に參上て奏し來れりしかば國造の職に拘はる事に非れば已に註る如く高千穗宮の久代より仕奉れる事著明き由此文を見て察ふ可くなむ有ける 其は出雲風土記仁多郡御津鄉の下に國造神吉事奏參ニ向朝廷一時其水沼出而用初也と有此書は神龜の頃に奏上の書なるに古き例として記せるを以て其久しき事を思ふ可くなむ 祝詞考

に此神賀詞を奉る事は紀には元正天皇靈龜二年二月に云々と有て是より後絶えず見えたり然るを日本紀に見えざるは總て日本紀は此耳ならず上代より有來れりし神事共の漏たる事甚多し」と有は謂れたる言なり（但次文に此詞の式に載たるは祝詞共の中に此辭いと古き文なるを思ふに舒明天皇の[illegible]の文にや有む[illegible]國造は下らず」と有れども然る由は[illegible]の文には[illegible]決めて其代よりいならむ事上にも下にも委しく註をも如く後[illegible]にも此事たゞ[illegible]して然る理なる事は知難し唯諸祝詞の中にも古き文なるは見えざるなり」と云れたるぞ宜き）○出雲國造は上に記せる如く其祖天穗日命其宗天夷鳥命なり古事記に天菩比命之子建比良鳥命（此出雲國造云々等之祖也）と有る傳に天菩比命の此葦原中國を言向に天降て出雲に留坐つる由は末にも書紀にも見え又書紀に高皇產靈尊勅₂大己貴神₁曰云々汝應住天日隅宮者今當₂供造₁云々又當レ主₂汝祭祀₁者天穗日命是也（此出雲國造又大社の齋主たるを云○今云出雲國造[illegible]大社の神主を齋（サヤ）たる[illegible]しと雖も本末の道ご有り[illegible]子孫の齋[illegible]宮に神主と[illegible]て仕奉れる事は[illegible]中の故事に依[illegible]に[illegible]共て尊く[illegible]たる[illegible]事なりけるを其住者たる國主に依て出雲國造にはれるなり然るを後には國造にして[illegible]なる者の如くなれるは[illegible]造の其土地に長たるに就て其家に[illegible]由緒有も無も其て部内の神主を兼たる事と遂つに思[illegible]れたり）同紀に天穗日命是出雲臣土師連等祖也（土師連は出雲[illegible]より出[illegible]後に菅原氏大江氏等にも土師連より出たり）云々國造本紀に出雲國造瑞籬朝以₂天穗日命十一世孫宇迦都久怒₁定₂賜國造₁と見ゆ姓氏錄に出雲宿禰天穗日命子天夷鳥命之後也また出雲天穗日命五世孫久志和都命之後也また出雲臣天穗日命十二世孫鵜濡渟命之後也（此外も山城河内にも出雲臣見ゆ）續紀に延暦十年九月近衛將監正六位下出雲臣祖人言臣等本系出₂自₂天穗日命₁云々於是賜₂姓宿禰₁と見ゆ其後[illegible]臣に爲しにや續後紀七（二丁）八（三丁）などに其人見ゆ抑此姓は元來臣の戶に成しも彼國より上りて朝廷に仕奉しより始まれるなる可し（此人は[illegible]京に[illegible]て仕奉りしに垂仁天皇の御世野見宿禰なり此人は天穗日命十四世の孫にて土師連の祖なり凡て臣の戶なる姓に朝廷に[illegible]く仕奉る[illegible]〇今云天穗日命の末より支派（ワカレ）とて京に[illegible]て參上りて仕奉れりしに甘美韓日狹なる可き事已に上に云り考合す可し）備後に宿禰にも朝臣にも成れるなり諸氏に此例多し偖然京の邊に住るも又國に住るも皆其本は國造より出たる子孫なる故に此には其本に就て國造と擧げ書紀には廣く渾て臣と擧たり諸氏に此例多し效て知べし偖延暦十七年三月廿九日太政官符に昔者國造と郡領と別なりしを慶雲三年よりして出雲國造に意宇郡大領を合（カケシメ）帶けるを又舊例の如く國造と郡領と別に被任し事見ゆ（[illegible]云古には凡國造の家は其氏の首たる人造と云[illegible]は本より[illegible]にて其氏の戶なる即國造に[illegible]國造と[illegible]りしなり孝德天皇御紀に[illegible]に大領小領と有るを以て其一氏の人をば皆國造と云し事を知べし凡て古書に國造と云るに首たる一人を指て云と[illegible]云と二有る事をへすは必混るゝ事有べし慶雲三年云々は[illegible]格に昔者國造郡領職員有レ別各守₂其任₁不₂敢違越₁慶雲三年[illegible]國造帶₂郡領₁寄₂言神事₁動廢₂公務₁云々と有る此は[illegible]事[illegible]より[illegible]の如く國造の氏族の由[illegible]はれて郡司に成れる者に[illegible]郡司に非る者）

の職り來りしを此慶雲三年よりは郡司に成れる者も神事をも兼職れるなり然るを又延暦十七年格に自今以後宜下改二舊例一國造郡領分レ職任之と有て慶昔の舊例を改て孝德天皇の御世の御定に復されしなり偖今世迄國造の殘れるは此國と紀伊國と耳にて中にも此國造名高し此二國造は昔より佗に異也しにや（取意）と見えたり又同卷八十丁に國造は久邇能美夜都古と訓べし其由は先上代に諸仕奉る人等を揔擧るには臣連伴造國造と並云り（書紀卷々に數知ず）多し又敏達天皇御紀に臣連二造とも有て二造者國造伴造也と註せり偖其國造は諸國にて其國の上と爲て各其國を治る人を云戸也 造は即彼伴造と云者にして伴とは部を云ふ（三枝部などの部也偖は即伴緖を約たる米に通はしたる言也上達部と書て加伴陀知米と訓類をも思ふ可し）故造の戸は多くは某部（ナニベ）と云姓に多し（天武天皇御紀十二年九月の所を見べし○今云御紀を稽るに其時姓を賜へる三十八氏の中に矢田部連莰原部造刑部造磐草部造殿服部造石上部造財日奉造埿部造穴穗部造白髪部造抔何れも某部造と云り）部と云ぬも其意なる姓也（○今云右三十八氏の中に水取造錦織造等多く見えたる此は水取部造錦織部造と云意也）如此れば造は諸部（タシ〳〵）にて上と爲て各其部（ムレ）を掌る人を云ふ戸なり（垂仁天皇御紀に某部々々（ナニベナニベ）と云を擧て并十七箇品部（トモノミヤツコ）と有り又欽明天皇御紀に秦人戸數揔七千五十三戸以二大藏掾一爲二秦伴造一と有る是秦人の戸を掌る人を秦伴造と云るなり又雄略天皇御紀に詔二聚二漢部一（アヤベ）定二其伴造者一（トモノミヤツコ）云々此も漢部を掌る人を其伴造と云なり又孝德天皇御紀に詔曰若憑二詐之一人有二伴造一者其伴造先勘當而奏と有る此も其部々（ムレ〳〵）を掌人を其伴造と云り）然れば一二の造同義にて（部領をも許本利乃美夜都許と訓り此訓の事紀山抄にも懸に記されたり此も字は異なれども同言同意なり）名義は御臣（ミヤツコ）なり稱德天皇御紀詔に貞久淨伎心乎以天朝廷乃御奴（ミヤツコ）止奉仕天之米云々又丈部（ハセツカベ）姉女乎波内都奴止爲豆冠位擧給此など有を以て夜都古は臣の意なる事を知べし推古天皇御紀には國造を久邇能夜都古とも訓り（夜都古と云へば甚賤き者の如く聞ゆれども本然に非ず君に對へて臣を云名なり故に君臣の意なる臣をば書紀などにも皆夜都古と訓り又官奴を美夜都古と云は別なり其は本主家の奴婢より起りて公の奴婢を云なり然れども其主家の奴婢も君臣の臣の意なれば云以て行けば本は一なり又殿守の伴と美夜都古など云も此なり此等名の本の意は一に歸めれども造は天皇に對へて臣の意なる故に其部の上たる人を云ひ御奴とは下に附者なれば用ふる所に至ては甚異なり云々）然れば天皇の御臣と爲て（推古天皇御紀に國司國造云々所任官司皆是王臣○今云始て國司を拜賜ひしは孝德天皇大化元年の事なるに其より四十餘年以前に既に此號有を以て思ふに彼郡縣と云ふ御制も彼御世に出來始れるにて其大化元年には全く備りて被行たる者なりけり然らざれば大御位に即せ給へる其元年などに天下の制度など然計り速に改易させ給ふまじく縱は然思食し立せ給へらむに天神御子の詔勅とは雖なから人心の安からざる所有べきも然ら聞えざるは次々に此時に至る迄に改給ひ竟たるなる可し天武天皇十二年御紀の詔などには諸國司國造郡司及百姓等と列ねて國造の上に國司の稱有り）其國々を治る人を國御臣と云ひ其部々を掌る人を伴御臣とは云なり（偖造字を用所由は未思ひ得ず漢國秦官に大良造と云有り大上造とも云ふ又北史に新羅國官十七等の中の第十七を造位と云と云り此等に依て書始たる○今云康熙字典に前漢百官公卿表に二上造十五ニ少上造十六ニ大上造と有を引り造字は昔大譜小予造二夫役一と有る註に造爲也我之所レ爲昔天所二役使一也と有れば其部に役使れ奉る意なる可し）偖國造は上代には職にて即加婆禰なりしを漸後には加婆禰は別に任て其氏の中に國造有り（那良の頃に至ては其氏人の中にて國造を任し給ふが常也然るに其國造と云ふ姓を賜し事も續紀三十三の二葉抔に見えたり又大寶二年には諸國々造の氏を定めて國造記に載られし事も同書に見え又陸奥國に大國造國造と並べ被任し事も同書廿八卷に見えたり）然國々に宰を置れて後（古國造は世々傳へて其國を治たり漢國の古の封建の制と云も此に似たり然るに孝德天皇の御世より彼國の郡縣の

制と云を擬びて京より國司を更々遣して國々を治令給ふ事に爲れり其より前にも宰と云者は有つれども毎國に必定めて置れたるは彼御世よりなり 國造は國司の下に立て多くは郡領などに任れり然漸々に衰へ行て後世には終に國々の國造絶て今世迄其名の殘れるは出雲拯は紀國などのみなり」以上史意と云れたり此にて通えたり神武天皇御紀に以珍彦爲倭國造云々以劔根者爲葛城國造など有て縣主の號も此時より起れりき其御世より有來し國造縣主の職を廢して國司郡司を京より下さるゝ御制と成れるは甚々哀しく惜しき事也姓氏錄序に神武臨東征之年云々海內清謐論功行德考功胙土命氏國造縣主始號於斯と有る如く、土に胙び氏を命する事は止事無き所由有るを全く忘れさせ給へるなり況て出雲國造などは高千穗宮の遠神代より大神の奉仕を兼て其國に御臣と爲て土着（スミツキ）たる止事無き家にし在れば佗國造の列に廢置共に當時の御心にも任せさせ給ひ難き事なれども時の勢の變更（アラタマ）るなむ爲方無き業なりける者てぞ佗國造の裔孫などは佗國に廢れたるも有べく民庶に下りて知れざるも有と見えて其姓の人の聞えず成れるなむ甚惜しきを出雲と紀伊の二國造耳傳はれるは然（サ）は云へ大神の御心なめりかし但國造を廢して國司を置れたるは其由て來る事有る所由又其廢置に就ての得失互に在る事など委しく發明せる事有て此にも云まほしきを却て煩はしきに似たればばは今は日本書紀傳に記す可く思なりて此に云はず其書に依て上代の制度且其沿革等を知る可きなり ○神賀詞とは此文に出雲國々造姓名云々朝日能豐榮登爾伊波比乃返事能神賀吉詞奏賜波久登奏と有て其祖天穗日命の國體見に降坐し事と其子天夷鳥命の國平に降坐て大國主神を媚鎭め坐し事と此二度の復奏を天神の御前に白せる狀を以て皇御孫命の御世の次々其二神の裔孫の人等朝廷に參上て申上る定れる例なりし故に其下文に天津次能神賀吉詞白賜久登奏と見えたり此天津次と云事の有を以思ふに已に高千穗宮より有初たる事今云限に非ず炳焉し此事上にも下にも委しく判れるが如し考に此詞の出來始を云るなどは取にも足ぬ僻說なりかし後釋に神賀詞は本に加牟本岐乃許登婆と訓み人も皆然唱ふめれども出雲風土記に國造神吉詞とも神吉事とも書たれば迦牟余恭登と訓べきなり此文中に神賀吉詞と有をば迦牟本岐乃余恭登と訓べし余許登は萬葉廿六十三丁に餘其騰と見え書紀持統天皇御卷に天神壽詞とも見え此詞をも續紀に神賀事神賀辭神齋賀事神吉事續後紀には神壽抔書れたり」と有り天皇本紀神武天皇元年段に天種子命奏天神壽詞即神世古事類是也と見えたる此は中臣壽詞の事なるが如此く臣連の家々に傳たる神世ノ古事の有を朝廷に參て聞え上る詞を余恭登とは云り然るは皇御孫命の天降坐て初國

知看す始に當今(イマ)仕奉る臣連等の祖々は何れも其事に功しく仕奉れりし勳功坐す神に坐が故に其勳功を發呈(アラハシマチ)す事は子孫の人々の其餘慶有て滋蔓(サカエ)居る耳ならず其先祖の勳功に資て天津日繼の終古(トコシヘ)無窮に定り坐る御事なれば上下に通(ワタ)りて甚々愛き神世ノ古事なる故に余恭騰と云號は出來りしなり 今傳はる所と正史に所見たる所とは右の中臣壽詞と神賀詞の二有る耳なれども猶其餘の家々にも必有つらむとぞ所思る其は高橋氏文を始と爲て家々の氏文と云者は右の二の如く主々しく表立たる事にこそは非らめ時と爲ては公に聞え上たりしと見えて何れも其文躰家紀の状ならぬを思ふべし天智天皇十年御紀に正月己亥朔庚子大錦上蘇我赤兄臣大錦下巨勢人臣進ニ於殿前ニ奏ニ賀正事ヲと有は其類なり癸卯大錦上中臣金連命ニ宣ニ神事ヲと見えたる此は中臣壽詞なる事云も更なり扨余恭騰と云は古語拾遺に善言美詞と有る意なり禍事吉事など云ふ事には非ず言の義なり思ひ混ふ可からず

後釋に云く此事の紀共に所見たるは續紀七に靈龜(ハタヤス)二年二月丁巳出雲國々造外正七位上出雲臣果安齋畢奏ニ神賀詞ヲ神祇大副中臣朝臣人足以ニ其詞ヲ奏聞是日百官齋焉從ニ果安ニ至ニ祝部ニ一百一十餘人進ㇾ位賜ㇾ祿各有ㇾ差 ○今云此なむ此詞を奏する事の始なりける然れども其上代よりの例なる事上に已に云るが如し齋とは臨時祭式に國造賜ニ負幸物ヲ還潔齋一年云々と見えたる是なり若て中臣朝臣人足以ニ其詞ヲ奏ㇾ聞は式には凡國造奏ニ神壽詞ヲ日之平且神祇官試ニ國造奏事ヲと有て直に奏すべきに先て其草案を神祇官に試らるゝにはなれども御紀の趣を以考るに國造奏ニ神賀ヲも神祇官の中臣より傳て奏す事と聞ゆ 九 神龜元年正月戊子出雲國造外從七位下出雲臣廣島奏ニ神賀辭ヲ己丑廣島及祝部等授ㇾ位賜ㇾ祿各有ㇾ差 同三年二月辛亥出雲國造從六位上出雲臣廣島齋事畢獻ニ神社ノ釼鏡并白馬鵠等ヲ廣島並祝二人並進ニ位二階ヲ賜ニ廣島絁二十疋綿五十屯布六十端自餘祝部一百九十四人祿ヲ各有ㇾ差 ○今云位二階を被進れば外正六位上なり出雲風土記の卷尾に國造帶意宇郡大領外正六位上勳業出雲臣廣島と有に合り如此く同じ人にて二度有は前齋と後齋とを併記たるなめり臨時祭式に右に引る國造賜ニ負幸物ヲ還ㇾ國潔齋一年云々の文有て次に又後齋一年更入朝奏ニ神壽詞ヲ如ニ初儀ヲと有なる以知べし其獻ニ神社ノ釼鏡並白馬鵠等ヲと有は同式に載たる獻物の種々なり此文に依に大神の御物を以朝廷に捧るなりけり此詞に神乃禮自利臣能禮自登御禱乃神寶獻良久登奏云々神禮自利臣禮自登云々と見えたるにも契合(ヨクカナヘ)り又絁二十疋綿五十屯布六十端等は臨時祭式に見えたる祿法に異る無し 十六に天平十八年三月外從七位下出雲臣弟山授ニ外從六位下ヲ爲ニ出雲國造ト 十八に天平勝寶二年二月癸亥天皇御ニ大安殿ニ出雲國造外正六位上出雲臣弟山奏ニ神齋賀事ヲ授ニ弟山外從五位下ヲ自餘祝部敍ㇾ位有ㇾ差並賜ニ絁綿ヲ亦各有ㇾ差 ○今云爲ニ出雲國造トは貞觀儀式に大政官曹子廳任ニ出雲國造ニと有て臨時祭式に賜ニ出雲國造負幸物ヲと有此なり下に引く其全文を見て知べし 廿五に天平寶字八年正月戊午以ニ外從七位下出雲臣益方ヲ爲ニ國造ト 廿八に神護景雲元年二月甲午幸ニ東院ニ出雲國造外從六位下出雲臣益方奏ニ神事ヲ仍授ニ益方外從五位下ヲ自餘祝部等敍位賜ㇾ物有ㇾ差 ○今云東院とは八省院の事なり西に豐樂院の有に對へて東院と云事にて其被行る所は大安殿なり又は大極殿とも被記たり若て上なる弟山と此の益方の例神賀事を奏すに就て從五位下に昇敍(ナサレ)たり 卅二に寶龜四年九月以ニ外從五位下出雲臣國上ヲ爲ニ國造ト ○今云此は不審しき事なり此は上に記せる益方の子次に載る國成の父と聞えたるに從五位下にて爲國造し事疑ふべし且奏神賀事の事の記されざるを思ふに右の二事の混ひて一

に被記たる者なり自餘の例と異なる可き事ならぬをや卅八に延暦四年二月癸未出雲國造外正八位上出雲臣國成等奏ニ神吉事一其儀如レ常授ニ國成外從五位下一自外祝等進レ階各有レ差同五年二月己巳出雲國々造出雲臣國成奏ニ神吉事一其儀如レ常賜ニ國成及祝部物一各有レ差○今云此は前後齋二度有しにて上なる廣島の例にて式文の如し近例前齋にて從五位下に叙され後齋には賜物有る耳なり四十に同九年四月以ニ從六位下出雲臣人長一爲ニ出雲國造一類聚國史に延暦十四年二月甲子出雲國々造外正六位上出雲臣人長特授ニ外從五位下一以下縁ニ遷都一奏中神賀事上也○今云前例を推に奏神賀事有て外從五位下を授る常なり特ノ字如何此人九年に國造に任(ナ)されたれば十年十一年の頃に有べきを十三年に遷都の事有に就て十四年二月迄延引せられけむを有司も遷都に就ての事と心得て然記せりしならむ若遷都に就て有る舊例ならば其事を兼て延引せられて合奏給へるならむかし弘仁三年三月癸酉御ニ大極殿一出雲國造外從五位下出雲臣旅人奏ニ神賀辭一並有ニ獻物一賜レ祿如レ常○今云國造には已に被任しなる可し外從五位下は奏神賀辭の勞に依て賜ふ所なるを略記せるなり有獻物は廣島の時に獻ニ神社劔鏡並白馬鵠等一と有を省書せる者なり天長七年四月乙巳皇帝御ニ大極殿一覽ニ出雲國々造出雲臣豐持所レ獻五種神寶兼所レ出雜物一還レ宮授ニ豐持從六位下一續後紀一に天長十年四月壬午出雲國司率ニ國造出雲豐持等一奏ニ神壽一並獻ニ白馬一疋生鵠一翼高机四前倉代物五十荷一天皇御ニ大極殿一受ニ其神壽一授ニ國造豐持外從五位下一○今云五種神寶とは玉横刀鏡の三種なるか玉六十八枚と有る細注に赤水精八枚白水精十六枚青石玉四十四枚と見えたるを合せて五種なる可し此より前に任國造の事無く此に奏神壽の事無は漏たるなる可し今思ふに天長七年は任國造耳にて神寶は唯に御覽しなる可し神壽詞を奏せる當に依て從五位下を授らるゝ例なるを思ふ可し但皇帝御ニ大極殿一と有れば奏神壽は有しならむか尙能考ふ可き事也次に十年の度には神寶の事は省れ白馬白鵠倉代物等を出せるは前なるに合せて國造奏ニ神壽詞一の獻物の具なり後釋に廣島豐持などは二度仕奉れりと有れども此は疑と定難かり諸國司率ニ國造一事此に始て見ゆ

扨此事右の天長十年の後は見えざるは御紀に漏たるなる可し延喜の式に委しく被載たるを思へば其頃迄も絶ず仕奉りけむを何時の間よりか絶にけむ詳ならず」と見えたるが如し西宮記北山抄江次第等に被載ざるを思ふに當時已に絶たりと見ゆ今熟思ふに延喜の初菅原贈太政大臣の筑紫に左遷(サスラ)はれさせ給ひしより彼家の衰へに就て其同族たるを以て出雲國造の家勢も何と無く衰へ竟て自然止ぬるなる可し然も有むと所思る由は式に近江國蒲生郡馬見嶺神社二座と有を舊記に天穗日命天夷鳥(ミトリ)命と二柱と有て出雲國より出雲宿禰の尸の人供奉仕奉りて齋祀れる社なるを延喜式撰定の頃は菅家沈淪の間にて天平神帳の任に小社に被列たり」と見えたる實に藤原氏の心の任に天下の大御政を執行はれし頃なれば其家に係づらふ事無きは止事無き家をも貶し神事をも絶ば絶行く任に措ひ申されざりしと知れたり甚惜しき事なりけり

此馬見嶺神社に出雲國造の氏神なる所由又其社記の事共は此詞の天穗日命を註せる所に云ふ可し鈴屋大人の此後釋を著述られて其國みに大前[illegible]奏賜倍幾禰貴伎許[illegible]乃吉詞乎と詠添られたるは唯に其吉詞の美しきを耳賞られたるなゝむや朝廷の御爲にも天下の爲にも比無く貴き神事の衰へたを歎息かれたる者なり豈大凡に見過して大人の志を空しく爲めやも○出雲國造を被任る事は國造本紀に瑞籬朝以ニ天穗日命十一世孫宇迦都久怒ニ定ニ賜國造ニと有れども其儀式に於ては如何有けむ今得て考ふ可からず今徵とし爲る所は貞觀儀式に太政官曹司廳任ニ出雲國造ニ儀當日早旦掃部寮預設レ座（辨大夫西廳式部輔座東廳西廂）式部錄率ニ史生省掌等ニ進置ニ版三枚於中庭ニ（自ニ尋常版ニ南去五尺置ニ宣命版ニ南去四許丈更東折一許丈置ニ國司版ニ自此西去一丈當ニ宣命版ニ置ニ國造版ニ）訖參議已上就レ座大臣喚ニ召使ニ稱唯就ニ尋常版ニ大臣宣レ喚ニ式部省ニ召使稱唯出而喚レ之輔稱唯丞代進就レ版大臣宣ニ參來ニ丞稱唯而上至ニ大臣座前ニ大臣賜ニ國造名簿ニ丞受退出訖輔丞各一人錄三人入就レ座訖國守入就レ版次省掌引ニ任人ニ參入（任人就レ版省掌差レ南而立）參議已上辨大夫降立及ニ式部起レ座立定ニ辨大夫一人就レ版宣制曰天皇我詔旨良麻止宣久其位某出雲國造爾任賜天冠位上賜比御手物賜止久宣國司任人共稱唯再拜拍レ手四段參議已上及辨大夫以下還就ニ本座ニ掃部寮進敷ニ簀中庭ニ式部史生置ニ位記筥ニ錄一人進就レ簀賜ニ位記ニ錄一人留ニ位記ニ史生進撤ニ位記筥ニ次掃部寮撤簀次錄一人進ニ錄所聞賜毎ニ賜ニ一物ニ拍手（大藏省預積ニ於庭中ニ絁十疋絲廿絇布廿端）任人持ニ絁十疋ニ退出綵布藏部相隨持出訖各退出と有り此即任ニ出雲國造ニい公事の方にて次に載る賜ニ出雲國造負幸物ニは其神事なるなり其文に右任ニ國造ニ訖辨一人史一人就ニ神祇官廳ニ云々と有れば當日に引續て被行るなりけり下に引く太政官式を見て知べし然れば此の御手物は太政官より賜るを次なる負幸物は神祇官より賜ふ例にて各別なるなり倩御手物とは天皇の大御手より物を下し賜る義負幸物とは國造の國に還て潔齋して神壽詞を奏す其に係たる稱にて此を佐伎意布勢能物と云ふ佐伎は行先の事意布勢は京に上て吉事を申せと仰給へる表物と云事なり續紀第五詔に大御手物取賜治賜久止詔三十九詔に黑紀白紀乃御酒賜御手物賜方久止宣ともも有り此は給祿を天皇の御手ゆ賜ふ由の目にて右に同し（後釋に此儀式の文を記し畢たる後に其次に紀伊國造を任する儀も有り大凡は右と等しくて其には參議已上在レ座不レ下と見え又御手物を賜ふ事無し此等にても出雲國造の殊に勝れる程知れたりと書されたり且其にはは官姓名を紀伊國造任賜波久止宣と有を出雲國造のには天皇我詔旨良麻止云々と有り公式令なる詔書式に天皇詔旨云々と有る義解に謂用ニ於中事ニ之辭即任ニ左右大臣以上ニ之類なりと有る御令を被用たり出雲國造を任ざらるゝに左右大臣以上の格を被用るにては非れども其仕奉る大神に就て重き所由の有が故也）猶又臨時祭式に賜ニ出雲國造負幸物ニ金裝横刀一口絲廿絇絹十疋調布廿端鍬廿口右任ニ國

造訖辨一人史一人就神祇官廳（辨座設伯座上即辨入自西就座史座設前敷其史入自東就座）次伯已下皆已上以次就座史一人大藏錄一人入自南門就座（錄座設史前敷）史唱官掌仰云喚出雲國司並國造官掌率國司國造就版位（國造就版位國司次立官掌立西若國司五位者著座）史亦喚神部一人進（著木綿鬘著手纏）就大刀案下跪之于時辨官云出雲之國造止今定給布留姓名乎賜負幸之物止宣久國造稱唯再拜兩段拍手兩段訖進大刀案下跪之神部取大刀授之拍手賜之（拍手兩段）退授後取之人即就版位次大藏錄喚國造々々就跪祿下後取一人進先取絲給國造拍手一度賜而授於後取後取退而立本列絹布鍬亦如之國造退而就版位更取太刀出（後取前立國造後立其國造者喚名及給祿之時每度稱唯）次錄次本官次史次辨退出と有を後釋に此は神祇官廳にての儀にて彼太政官曹司廳にて國造に任じたる次の事なり」と云はれたる實然る者なり孝德天皇の大御世より國造を停めて國司を置れ年も猶國造を被任るは大神の由緒に就て必廢せらる可らざる事有ればなり然れども太政官式に凡出雲國造云々於太政官補任如任諸國郡司儀云々と有を以て全く古例を存すると云ふ迄にて御會釋は右の如きも猶郡司の狀也と

見ゆ若て國司の國造を率て參向ふは古例には非る可し上に引る天長十年御紀に出雲國司率國造出雲豐持云々と有ぞ始なりける（但國司出來て後は舊の國造は郡司の大領少領と爲て任奉る御定なれば國司の屬官たる事云も更なれども此より以前の御紀には任國造の時も奏神壽の時も國司に率て上れる例無し）如此く太政官にて國造に任じ神祇官にて負幸物を賜ふ事は國造の職掌はしも部内の神社の神主をも帶たる古風の存れるなり一卷なる集侍神主祝部云々の下及十三卷度會神主條の注に云るが如く同じ國造ながらも公務を以ては國造と召れ神事に依ては神主と召給ふ舊儀なるが故に官にも廳にも隷を以なり國造を神主に配たる證は續紀に靈龜二年に出雲國々造外正七位上出雲臣果安云々至祝部一百一十餘人進位賜祿各有差神龜元年に出雲臣廣島及祝神部等云々同三年に廣島並祝二人並進位二階天平勝寶二年又神護景雲二年に自餘祝部等云々延曆四年に自外祝等云々同五年に賜國成及祝部物など有て上に標せる如し此祝部は神主に次たる者なるに一も神主と云る事の無きは國造即熊野杵築兩大神の神主たるが故に自外を祝部とは云るなり正史の公務を先と爲る事なるが故に何所も國造と耳記され儀式にも任國造と有て任神主

と云ざるは國造と有て神主を帶る古格なればなり況て出雲國造は神代紀に高皇産靈尊勅ニ大己貴神一曰云云汝應住天日隅宮者今當ニ供造一云々又當レ主ニ汝祭祀一者天穗日命是也と有れば神主に爲て國造を令帶給へりと云むも强事ならず（國造の神主を帶る事は十三卷に委しく云るを考合す可し民部省式に凡諸社神主禰宜祝者擇下八位以上及六十以上堪ニ祭事一者上補レ之雖ニ元來定氏之社並神戸百姓ニ而盡ニ八位及六十以上一然後及ニ壯年白丁一即免ニ課役一と有れども此は諸國共に國造た廢したる後の御定なれば此の例に非ず類聚三代格に應レ停ニ官人任ニ諸社神主一事右太政官弘仁十二年正月四日下ニ大和國一符ニ偁彼國解偁有官之輩若レ兼ニ任神主一全直ニ本職一不レ勞ニ神社ニ神社頃廢職此之由望請擇ニ抽無官一任ニ神主一專ニ事ニ祈禱一令レ修ニ理神社一者右大臣宣ニ奉勅一依レ請以前撰格所レ起請偁上件事條遵行有レ者中納言兼左近衞大將從三位藤原朝臣基經宣ニ奉勅一依レ請貞觀十年六六月廿八日と有此に因れる也往古の如く神事公事一ならむには何の煩はき事か有む神事の麁略に成れる程知べし）○臨時祭式に云く國造奏ニ神壽詞一玉六十八枚（赤水精八枚白水精十六枚青石玉四十四枚）金銀裝横刀一口（長二尺六寸五分）鏡一面（徑七寸七分）倭文二端（長各一丈四尺廣二尺二寸並置レ案）白眼鴾毛馬一疋白鵠二翼（乘レ軒）御贄五十舁（舁別盛ニ十籠一）右國造賜ニ負幸物一還レ國潔齋一年（齋內不レ決ニ重刑一若當ニ校班田一者亦停）訖即國司率ニ國造諸祝部並子弟等一入朝即於ニ京外便處一修ニ餝獻物一神祇官長自監視預トニ吉日一奏聞宣ニ示所司ニ又後齋一年更入朝奏ニ神壽詞一如ニ初儀一（事見ニ儀式一）凡國造奏ニ神壽詞一日之平旦神祇官試ニ國造奏事一給ニ座新調薦五枚一奏ニ神賀一齋一日在前申レ官國造已下祝神部郡司五色人等給祿但其人數臨レ時所レ申無ニ定額一祿法國造絹廿疋調布六十端綿五十屯祝神部不レ論ニ有位無位一各調布一端郡司各二端子弟各一端と有り後釋に此文を引て國造奏ニ神壽詞一と有は標題にて玉六十八枚云々は獻物の色目なり備右國造と云より下其ことの次第なり抑この次第の記し狀國造二度の入朝に先の度には獻物を餝る事ことのみえて壽詞を奏すこと見えず後の度には獻物のこと見えざるは互に略る文にて先度も後度も事は同しくて獻物も壽詞を奏も二度共に有なり如初儀と有にて先度にも壽詞を奏す事有を知べく又此壽詞二度共に獻物の品々を以て賀申せる詞同じきを以て獻物も同じき事を知べし」と有にて甚々詳明なる者なり（此古書を互に相融通して其義を貫く法なり等閑に見過す可からず鈴屋大人の神眼の古今に勝れ天下に秀たる妙致此に在り）又太政官式に凡出雲國造國司依レ例詮擬言上即於ニ太政官一補任如下任ニ諸國郡司一儀上宣命及叙位並如ニ常儀一賜レ祿有レ數畢辨大夫及史各一人就ニ神祇官一給ニ負幸物一還國一年齋畢國司率ニ國造一入朝奏ニ神壽詞ニ初到ニ停於京外便所一修ニ餝獻物一申ニ神祇官一預擇ニ吉日一申レ官奏聞依レ例供進（後齋亦進レ此）其日史二人入ニ朝堂院一擲ニ獻物數一依レ例領ニ充所司一（事見ニ神祇式及儀式一）と有り臨時祭式にも此と同じ、事見ニ儀式一と

有事なれども儀式には任國造の儀有て奏神壽の式無れは諸書に參考(カムガヘアハセ)て其大凡を知る外無し〈式文に如此有からは必當時の本には委曲に記載られつらむを其事の行れず成ぬる頃より削去れる者ならむ〉今此を稽るに奏神壽は中祀に當る可し四時祭式に依に並諸司齋之と有を續紀に靈龜二年二月出雲臣果安齋竟奏神賀事是日百官齋焉と有て同事なればなり神祇令に三日齋爲中祀と有る散齋三日の中に當日一日の致齋なり百官齋焉と有は此を謂なり〈中祀の委しき事は一巻新年祭の下に云り右の御紀の文は此に用有る耳を引たり下此に傚ふ可し諸司百官の此に預る事は次なる朝堂院の條に云り考合す可し〉但奏神壽は此詞に見えたる如く熊野杵築兩大神を始奉り百八十六社の神々を勸請(マセマツリ)て神事なるには違ふ事無しと雖も此神賀詞を天皇の大御前に聞え上るを專要と爲る事故に猶公事の例なる所以に此詞の始終共に明御神止大八島國所知食須天皇命　申て公式令義解に謂用於朝廷大事之辭と有を用ひたるなり文中神祇に係る所には何處も皇御孫命云々と有て祝詞の例に違はず臨時祭式に凡國造奏神壽詞日之平旦神祇官試國造奏事と有は此等の事を試るなめり〈儀制令に天子祭祀所稱と有る義解に謂告於神祇云々至於風俗所稱別不依文字假如皇御孫命及須明樂美御德之類是也と有も神祇に告るには必皇御孫命と申す例なる事風神祭詞及大祓詞の注に云るが如し〉若て其奏する所は太政官式に史二人入朝堂院勸獻物數と有る此八省院にて正殿は所謂大極殿也御紀に天平勝寶二年二月癸亥天皇御大安殿出雲臣弟山奏神齋賀事とも神護景雲元年二月甲午幸東院出雲臣益方奏神事とも弘仁三年三月癸酉御大極殿出雲臣旅人奏神賀辭とも天長七年四月乙巳皇帝御大極殿覽出雲臣豐持所獻五種神寶云々とも同十年四月壬午天皇御大極殿受其神壽とも有て克合へり偖右の大極殿は天皇即位朝賀等の大禮に臨ませ給ふ正殿にて此院に出御(イデマ)す時には諸司百官共に參向ふ例なれば靈龜元年御紀に是日百官齋焉と有に皆克合へり〈右の大安殿は大極殿の事なり東院に八省院の事也各別處に非ず但其百官以下の儀式は如何に有けむ今考ふる所無し〉偖其獻物は式文に載る所玉橫刀鏡倭文白馬白鵠御贄等なり然るに續紀に神龜三年二月出雲臣廣島齋事畢獻神社劍鏡並白馬鵠等と有て玉と倭文と御贄を漏せれども大較に記せるなれは右の三は古に無しとは此詞に依て云べからず類史弘仁三年の度に有獻物と書て色目無く天長七年の度には所獻五種神寶兼所出雜物と有て是亦分明ならず續後紀天長十年の度には獻白馬一疋生鵠一翼高机四前倉代物五十荷と有て此には玉橫刀鏡等の主々しき

をも略記せり　但五種神寶とは玉に赤白青の三種有に横刀鏡等を合せたるなる事已に上に云る如し倉代物は式に御贄五十舁と有を云なり江次第大嘗祭條に運ニ置倉代等物一の木註に明ニ土物ニ（クニツモノ）と有り後も悠紀主基兩國より京に上る御贄なるかさらに其土物を指て倉代とは云ふなり借其倉とは物を置く座（クラ）を云也代とは物を云ふ猶倉代の事は一卷字豆能御幣の下に註せり式文に國造賜ニ負幸物一還國潔齋一年と見えたる其間の事は此詞に出雲國乃青垣山內爾下津石根爾宮柱太敷立氐高天原爾千木高知坐須伊射那伎乃日眞名子加夫呂伎熊野大神櫛御氣野命國作坐志大穴持命二柱神乎始天百八十六社坐皇神等乎某甲我弱肩爾太襷取掛天伊都幣能緒結天乃美賀秘冠利天伊豆能眞屋爾麁草乎伊豆能席登苅敷天支伊都閇黑益之天能瓱和爾齋許母利氐志都宮爾志都米仕奉氐と有る以上國造在國一年の間の齋館の較略なり如此く物忌爲て京に上る事前度後度兩時に神壽奏有て二年の齋なり且京に參向の豫に身潔有り此詞に須々伎振遠止美乃水乃彌乎知爾御袁知坐と有る是なり　凡て上古より物忌の狀の大抵如此しと見えて齋宮式齋院式など組此に同じ式に凡齋宮諸門常立下者ニ木綿一賢木上と見え次に忌詞有り齋院に將入には河頭の祓有り卜ニ定供膳井一立ニ賢木一と見え忌火庭火御竈井神祭等の事此詞に合る事下に注すを見て知べし新年祭月次祭新嘗祭は更なり大祓大殿祭御門祭道饗祭等の事有り國造の齋館に於ても素より然有べし凡齋內親王在京潔齋三年即每朔日者ニ木綿鬘ニ參ニ入齋殿一遙ニ拜太神一時先供ニ御麻一次鬘木綿云々と有る齋殿は此の伊豆能眞屋に當り御麻は伊都幣鬘木綿は天乃美賀比に當るなど男女の差別は有れども潔齋の狀は同じきを察ふ可し齋ニ內不レ決ニ重刑一若當ニ校班田一者亦停と有は謂ゆる六色禁忌などの狀と聞ゆ神祇令に凡散齋之內諸司理レ事如レ舊不レ得ニ弔レ喪問レ病食レ宍亦不レ判ニ刑殺一不レ決ニ罰罪人一不レ作ニ音樂一不レ預ニ穢惡之事一致齋唯祭事得レ行と有る此を以て其齋內の凡てを思ふ可し職制律に凡大祀在ニ散齋一而弔レ喪問レ疾判ニ署刑殺文書一及決レ罰食レ宍者笞五十奏聞者杖七十致齋者各加ニ二等一と有る此等は京官の上の事なれども諸國と雖も其異有べからねば國司上に在て此を糺す可き事勿論なり國司率ニ國造一入朝と有にて察（アキ）らむ可し班校田は田令に凡田六年一班云々凡應レ班レ田者每ニ班年一正月三十日內申ニ太政官一起十月一日京國官司預校勘造レ簿云々と有る此に當るを被除るなり　然るは上にも云る如く古國造の職掌と爲し所は國司此を管領する事と成しより以來國造は多く郡の大領を帶るが故に班校田を太政官に申に上るを停らるゝなり職員令に大領掌下撫ニ養所部一檢ニ察郡領一事上と見えたり國造の齋內は其職掌の事をも如此く免さるゝなり國司率ニ國造諸祝部並子弟等一入朝は其下に國造已下祝神部郡司子弟五色人等給レ祿但其人數臨時所レ申無レ有ニ定額一と有此なり續紀に見えたる人數は靈龜二年に自ニ果安一至ニ祝部一一百一十餘人と見え神龜三年に廣嶋並祝一二人並進ニ位二階一自餘祝部一百九十四人と有て定額無く其時に隨ひて增減有りと見ゆ　これより後の御紀にはしるされず右の五色人は一に國造二に祝三に神部四に郡司五に子弟此は國造以下の人々の子

弟を合せ云なり即於二京外便處一修二餝獻物一は京外の便處に到着なり太政官式に初到二停於京外便所一修二餝獻物一申二神祇官一と有るを以知べし神祇官長自監視預卜二吉日一申レ官奏聞宣二示所司一は國造以下の人々京外便處に到着く即神祇官に申せは伯此に行向ひ自監視して太政官に申して奏聞を經且當日朝堂院にて其事に預る官司の人共に宣示するを云るなり其下に凡奏二神壽詞一之日平旦神祇官試二國造奏事一云々と有り先なるは獻物の具否を自監視し當日には奏事を試み認るなり太政官式に其日史二人入二朝堂院一勘二獻物數一依レ例頒二充所司一と有るは先に神祇官長の監視して申せるは太政官の史再此を勘校神賀事の奏竟て所司に頒賜ふなり（其次に齋一日在前申レ官云々と有る此に神祇官より國造以下の人々に給祿の事を申せるにて右とは別なり）奏二神賀一當日天皇大極殿に入御ひ大臣以下其事に預る所司此に參集て此を監察し神祇官人此を奏行ふ事なるが獻物は案に置て前に並べ其後に庭上に座を設る事と見ゆ式に給二座新調薦五枚一奏二神賀一と有を以知べし斯れは國造の神賀を奏す席は天皇の大御許より遙に遠く下りて有故に神祇の官人取傳て此を奏すなり續紀に出雲臣果安齋竟奏二神賀事一神祇大副中臣朝臣人足以二其詞一奏聞と有を證と爲べし其事竟て右の五色人等に給祿の事有て御暇を賜るなり（以上當日の儀式を諸書に考證す所なり今傳る儀式には見えざれども外の朝堂院にて又行るゝ儀に相互に比挍ば應に思半に過むかし）

後齋一年更入朝奏二神壽詞一如二初儀一とは又更に國に下て齋する事一年に爲て齋竟て神賀奏に京へ上て仕奉る此を後齋と云なり但此後齋の度には負幸物を賜る事無し此は任國造の時に一度有る耳なんめり然れども上に擧たる御紀共を通覽すに前後共に仕奉れりしは廣島豐持の二人有て外に見えざるは如此く定れる例ながら其間に御代にても改るか世中に事有かなどの時には國造の一世は更らざれども前齋耳有て後齋は無事と見えたり（伊勢の齋王の京外にて御齋の内に大御世の更れゝば齋を解て退下り給ひ御代改りて後佗齋王を定させ給ふ例には異りて國造の一世は經れ共齋を解に於ては同じ狀なんめり）

八十日日波在止毛今日能生日能足日爾、出雲國國造姓名恐美恐美毛申賜久

八十日日云々は神祇官より豫に神壽詞を奏す吉日を卜へて太政官に申すを官にて其を擇て其被行る可き日を奏聞せる其當日を云なり（臨時祭式に神祇官長自監視預卜二吉日一申レ官奏聞と有る同じ事を太政官式に神祇官預擇二吉日一申レ官奏聞と記せるに卜の字と擇の字を換用ひたるを思ふに神祇官より某日々々は吉日也と卜へ申

せるを官にて君臣の間に故障無き日を撰ひて當日を定申せるなり八十日日は八十來經日にて大抵某月の中に數多有る日數を云ふ中臣壽詞に月内に日時遠擇定氏と有る如く其月の定め有て其中にて日時を撰むなり上に例を擧たるに多くは二月四月に在り然れども正月なるも稀に在れば出雲より參向ふ頃を以て撰定るなんめり○今日能生日能足日は考に生日は物の生榮る日足日は事の足滿る日なり生魂足魂生弓足幣などの生足と同じ」と見え後釋に日は多く有れども其中に今日ぞ吉日と賀稱へて如此申すなり」と有る其に然る言なるが今吉義を思ふに舒明天皇皇極天皇の大御名に息長足日廣額天皇と申し天豊財重日足姫天皇など申せるも此の生日足日を以て稱奉れるなり其は息長は氣長にて生活榮ゆる事なれば此の生日に當れゝは生日足日と續けられたるなり又重日足姫と申すも生日足日なるを其中間に日字を係たるなり足を多羅斯と云例にて生を伊加志と云べき語格なり然れば祝詞に茂御世など有も生榮る由なる事著明し生は氣の潔淸(イサギヨ)き日足は物の整ひ備りて不足ぬ事無き謂なり新年第三詞生魂足魂神の下に注せるを見べし又神功皇后の大御名を息長足姫尊と申すも此生と足とを合せて稱奉れる也後釋に足日爾の爾ノ字本に無きを考ノ本に有は被補たるなり此字は必有べきなり」と有に據て今其に從ふ出雲本に爾字有は右本に依られたるか又古本に然有しか如何にも有れ甚愛たき事なり○出雲國々造姓名後釋に云く姓名と書るは此詞を奏す國造の自の姓名を申す所なり

掛(カケ)麻久(マク)毛(モ)畏岐(カシコキヤ)、明御神止(アキツミカミト)大八島國所知食須(オホヤシマグニシロシメス)、天皇命乃大(スメラミコトノオホ)御世手乎長能大御世止齋(ミヨチタナカノオホミヨトイハフ)止若後齋時(トノノチ)若加二後字一爲氏(シテ)

此の文體は中臣壽詞の發端に現御神止大八島國所知食須大倭根子天皇我大前爾天神乃壽詞遠稱辭定奉良久止申須と有て次に云々の事を述るに似通ひたり此も彼も同じく天皇命の大御前に申上る壽詞なれば互に相照し比挍して其義を需むべき事少からず○掛麻久毛畏岐は天皇命又は貴き神等の御事などを申すとては先前に言に掛て申も恐れ多きと斷り申すなり此事續紀以下の宣命に多く又萬葉には挂文忌之伎鴨言久母綾爾畏伎とも掛卷母綾爾恐之言卷毛齋忌志伎可物とも有て甚も貴き御上の御事は唯に言に掛て申すも畏く深く忌愼む古人の常なりし故に此事を得ず申出るには必右等の語を上に冠て申せりしなり阿那畏々努々神皇の御事などを漫りに申す可きに非ず深く恐れ謹みて麁略(オホロカ)なる可からず又無禮(ナメ)しき言などは忘れても申可きならず因に云ふ近代の人の著述を見に御紀などの引狀甚々無禮(ヰヤナ)し神武紀綏靖紀等に書ること心得れ既に歴世の御紀にすら某天皇紀と被記たり後の天皇にして先の天皇の御紀をすら稱びて然載させ給へる者を詳節など天皇の御號を私に省き載る樣なる無禮き事やは有る是を以て予が著書には悉くに某天皇御紀と正しく記し奉り又人の說を擧るにも本書には某紀又は某天皇紀と有をも引直して某天皇御紀と記せり假令公卿以上の人々のなりとも此一事に於ては彼と我と其尊卑こそは有なめ天皇に對奉りては共に臣なる者を何とて此を許して閣(サシオク)べき此は其略書せし人の罪なれ

ば何れに憚り何れに畏る可きや畏は彼處にて畡は辭にて此は深く恐れ憚りて其隔を立る言なり貴き御邊に近附難く爲て恐懼謹む狀を云り○明御神考に此乎阿良美迦微と訓は惡し言も能も熟はず公式令に明神御宇大八洲天皇宣命に現御神と有る類皆阿伎都美迦微阿伎都迦微と訓申す可し萬葉に明津神吾皇之と有は阿伎都迦微と訓外無ればば也偖此は今明かに世に御在し坐す御神と崇み畏みて申す言なり」と有は然る可し（後釋に云く萬葉に明津神吾皇とは六卷に所見たり此宣に阿伎都迦微と訓へき明かなる意なり歷朝詔詞第一に明御神止の止は衛氏と云むが如し皇止坐父止坐なども皇にて坐父にて坐なり」と有り）偖此明御神と稱奉る尊號は高天原より始て天降り坐る皇御孫命を指て申初たる言にて中臣壽詞なるは天忍雲根命此詞なるは天夷鳥命の高千穗宮に於て尊び崇まへ被申しより天下擧りて申し倣へりし者なりけり若て其明は現にて天より此顯世に現出坐す意なり續紀第一詔に高天原爾事始而遠天皇祖御世中今至麻弖爾天皇御子之阿禮坐牟彌繼々爾大八島國所知次止天都神乃御子隨母天坐神之依之奉之隨と有は天より現れ坐る天皇の御世より繼々に生坐と云て其直に天都神の御子と申せるにて現も生も同じく外より顯れ來る義にて文中に現御神の意を含めたる者なり此は決めて古傳に依れる文なり高橋氏文にも阿禮子孫乃八十連屬爾と有も右と同じ意味の語也（第五詔に是平城大宮爾現御神止坐而大八島國所知而と有は平城大宮に往坐ふ事なるを其を天上より現來坐る狀に云るにて此ずは皇御孫命の皇天皇の時の事實に見たる者なり子の生るゝを阿禮と云も現と同然なり然るは人の性命は素より幽冥に在る者なり然るを此國土に顯れ出給へる所なれば其義相等しきなり）景行天皇御紀に日本武尊則從ニ上總ニ轉入ニ陸奧國ニ時蝦夷賊首望拜之曰仰ニ視君容ニ秀ニ於人倫ニ若神之乎欲レ知ニ姓名ニ王對之曰吾是現人神之子也と見えたる此は天皇を指て顯身の人と現形れ坐神と宣へるにて此時の造語に非ず大古より以降現御神とも現人神とも稱奉り來る所を以て名號せ給へる者なる雄略天皇御紀に天皇射ニ獵於葛城山ニ忽見ニ長人ニ天皇問曰何處公也長人對曰現人之神先稱ニ王諱ニ然後應レ導と有る此長人は一事主神に御在せる其御言に天皇を現人之神と申させ給へるは御自は神の中の神なり天皇は現國を統御む爲に神の御所より人身に現れ坐る神と云意にて申させ給へる者なり唯に其德を稱へて神と申せるには非ず眞に神にて御在す由なるなり景行天皇の日本武尊を稱給へる大御命に形則我子實則神人と有に深く心を留て思ふ可し後釋に現人神は現はなる人にて座坐す神と申す事なり」と

有るは未其意を被得ざるを歴朝詔詞解一に現御神と申は天皇は世に現しく坐ます御神に爲て天下を所知食す由なり又天皇の御上の事には神隨云々と申すも神にて坐ます隨にと云意なり抑後世に至て天皇を畏れ奉らざる者も出來たりしは世人の心漢意に轉りて現御神にて座坐す事を忘れたるが故なり」と有は言意を甚能く盡されたりけり　萬葉六に住吉乃荒人神船舳爾牛吐賜と有は此大神神功皇后の韓征の先鋒と爲て現身を顯し給へるに就て然申せるなり是を以て現はなる人にて坐と云事の遷遠きを知べし他神等の人世に御形を顯はし給ふ事は且々(ヲサ〳〵)無きに此神は然る現形も有し故に住吉乃荒人神とも古く諺に云りし者なり袖中鈔に「天降る現人神の相追を思へば久し住吉の松」と有も皇御孫命の現人神と爲て天降り給へると住吉神の事とを一に混らしく詠る者なり後拾遺集雜三に「天皇も現人神も和む迄鳴ける今日の郭公哉」と詠るは八幡大神を現人神と申せり續詞花集に「思出づや無名立身は憂かりきと現人神に在し昔を」此は北野に奉れるにて此現人神は道眞公の未現世に御在しゝ時の事を詠たるにて此は現はなる人を云如くなれども然らず寔に天皇命は天神御子と神代より稱奉り來りて萬世の後と雖も直に天照大御神の珍子と座坐が故に現御神共現人神共稱奉り加之古語に遠津神共稱申せる此は冠辭考に天皇は即顯津御神に坐て遙に人の比倫ならねば遠津神とは申せる也」と有か如く眞に形は人に坐せども實は神にて御在る故に萬葉等には皇者神二四座者云々等多く詠り尊しとも高しとも言知ず甚可畏くなむ　但現御神とに天神の御子と爲て此土に顯れ來坐る神と申す意にて實きを現人神と申す時は直に其大御身を指か故に狹きなり所以に此詞に明御神能云々安久平久知行牟事能志太米と有を始と爲て凡て知行す大御世の事に係て云ひ上に引る如く現人神之子也とも現人之神先稱㆓王諱㆒とも大御身の事には云て現御神之子也とも現御神云々とも大御身を直に現御神と申奉る定りながら其用法少か心得有る事と見ゆ

○大八島國所知食須國號考に云く皇大御國の號神代に二有り一には大八島國二には葦原中國也○今云葦原中國と云は皇大御國耳の名稱に非ず天に對ひて此地の全を云なり然れども甚も久しき上代には未外國は潮沫の凝固る間にて事無りしかば自然皇大御國の名の如く見ゆるなれども然らず其は十一卷鎭火祭詞の下に云り　其大八島國と云は古事記に伊邪那岐命伊邪那美命御合生㆓子淡道之穗之狹別島㆒次生㆓伊豫之二名島㆒次生㆓隱伎之三子島㆒次生㆓筑紫島㆒次生㆓伊伎島㆒次生㆓津島㆒次生㆓佐渡島㆒次生㆓大倭豐秋津島㆒故因㆓此八島先所㆑生謂㆓大八島國㆒と見えたり書紀にも生坐る次第などは異なれども八の數は同じくて由㆑是始㆓起大八洲國之號㆒焉と有り　抑志麻とは周廻りに界限の有て一區なる域を云名なり然云に本の意は締(シマ)る縮(シジ)まる迫(セマ)る狹しなど云ふ語と同じきなる可し此等も取放ち曠(ムナ)しく界限無くは非で界限有て取締れる意より云ふ語なれば志麻てふ名も本は必海耳ならず國中にて山川などの回れる地にて云りと見ゆ又此大八島など云名の如く甚大なるにも云れは必小きを耳云るにも非ず但小くて海中に在は殊に周廻りの界限も炳焉ければ専然る地のみの名の如くにも自然成れるなり備島洲等の字を宛て書るも其海の周れる地を云ふ一方に就てなり然れど此等の字に泥みて必本より海の中なるを耳云ひ又小きを云名なりと勿思ひ誤りそ凡て皇國の言に漢字を配(アテ)たるは全く當れるも有り又傍は當り傍は當らざるも多在るを後世には永(ヒタ)ぶるに字に耳依る故に言の本の意を誤る事のみ多きぞかし偖此大八島の島も海の回りて隔れる一界の國をば云るにて其例は書紀の神代卷に三韓國をも韓郷之島と云ひ萬葉集の歌には海を隔ては大和國の方をさても倭島と詠み又此大八島を總ても倭島根と詠るなど是なり偖八島としも云は海を隔ずて一連なるをば幾國にまれ一島と爲て其數八なれ

ば也若て、其八に例の彌にて本は唯島の數の多在る意の號なりけむを漸後には八の意に取て其數を合へト、ノへて云傳たるかとも疑るめれ共古事記に記されたる八にて畿内七道の諸國は皆備り又他の島々は一も交らず爲て餘れるも無不足るも無れば本より八の數に動かざるにこそ書紀の傳々には此内に他の島々も交れれば八の數は動けれども古事記の正しきに就て定むべき事なり 偖此號は外國に對はず獨立て天下を統云ふ號也八千矛神の御歌に夜斯麻久爾と詠給ひ倭建命の御言に吾者坐ニ纒向之日代宮ニ所レ知ニ大八島國ニ大帶日子淤斯呂和氣天皇之御子ト詔給ひ孝德天皇の詔にも現爲御神御ニ八島國ニと詔給へり公式令の詔書式にも朝廷の大事に被用る詔には明神御ニ宇大八洲ニ天皇詔旨と詔給ふと見えたり以上文 右の大八島國と云號は外國に對はず獨立て天下を統云ふ號也とは定に聞れたる言也神代紀に狹野尊云々後撥ニ平天下ニ奄ニ有八洲ニとあるにて炳焉し皆我が現人神はしも天神の御子と坐て天降り給ひ天下の大君と大坐々せは此皇大御國は更也外國々の皆も悉く我天皇の有たせ給ふ域内に非るは無を大八島國所知食須と申す時は此皇國を耳界限て天皇の敷給ふ國にて外國は外國なるが如く聞ゆれ共然には非ず皇御孫命の御天降より以前以後共に少彦名神などの開闢き給ふ間の事にて未國形も善しく成就はざりければ天神の御事依しにも大八島國を耳授給へれど萬國を合せたる御言也家を人に與ふるに廊等迄の事は云に及ばざるか如し然る外事迄を委曲に云べくも非るを思ふ可し 然れ共神代紀なる素盞嗚尊の御言に韓鄉之島是有ニ金銀ニ若使吾兒所御之國不レ有ニ浮寶者ニ未ニ是佳ニ也と詔給ひて皇國に歸せ給はむ事を議給ひ崇神天皇御紀に大物主神の亦有ニ海外之國ニ自當ニ歸伏ニと誨申給へる御言を被裁たるに的當して其後に意富加羅國の歸伏ひ參たる徵有り仲哀天皇御紀神功皇后御紀には寶國を言向の御誨の有けるなど追次て依さし給ひ皇國の羽翼に令使給へる者なり 仲哀天皇の前御代成務天皇の大御世に大八島國の事全く整りしか故に此御誨は有けるなり然れば天神の大御心は外國にも何にも拘はらず大八島國を愛しみ坐る事此を以所知たり御紀に五年秋九月令ニ諸國ニ以ニ國郡ニ立ニ造長ニ縣邑置ニ稻置ニ並賜ニ楯矛ニ以爲レ表則隔ニ山河ニ而分ニ國縣ニ隨ニ阡陌ニ以定ニ邑里ニ因以ニ東西ニ爲ニ日縱ニ南北爲ニ日横ニ山陽曰ニ影面ニ山陰曰ニ背面ニ是以百姓安居天下無事焉と有は全く皇國の[illegible]の守り備はれるなり是を以て外國な御言依の御旨有なり 然れば神代より以來天皇の大八島國所知食と申すは廊を省きて母屋を耳云るが如し天照皇大御神の大御命に寶祚之隆當ト與ニ天壤ニ無レ窮者矣と宣給へる如く天地の窮無き間に比様ては神代より以降中今の大御世に至る迄經て來る年序は幾千萬年有とも少かの事にて末世の始と云べし其天壤の窮無き間に天下に在ゆる千萬國は悉くに歸伏ひ來なむを右の趣に依れは唯大八島國の羽翼の爲に寄せ給ふ神の御心なれ

は大八島國所知食すと申が即受張て天下を所知看す御事になむ有ける 然れば鈴屋大人說の如く外國に對へず爲て大八島國所知食すと云時は天下を統云ふ號に用ふ可し其等に拘はらず區別せる國々を云時は大八島は皇國の號にて他に及ぶ可からず ○天皇命乃後釋に云く天皇を天皇命共書る事は古事記上卷にも有此は須賣良と耳も申す事有故に美許登と云に命ノ字は添て書る耳也古書には斯る類多し 然るを考に天皇の命と訓て其意に解れたるは僻說なり彼日進斯皇子命高市皇子命など申せるは異なり皇子は御子の義にて父命母命なども云類と同じければこそ下に命をば添て申せれ美許登能美許登とは重ねて申す可き由も無く例も無き事なるをや ○大御世乎 考に此四字脫たり此に此言無ては次の言整らず上なる祈年祭の大御巫の詞にも皇御孫命御世乎乎長御世登と有を見べし 此賀詞は殊に古く傳り來つれば言も落字も誤れる多し○今云祈年祭伊勢の詞にも右の如く有れば必此も然有る可し と有り後釋に此四字は考に被補たる實に無て協はぬ言なり 月次祭詞にも皇御孫命御世平長御世登云々とも有り此は長の上に手の字脫たるなる可し と見ぬ實に然る言なり○手長能大御世止齋止爲氐は右に引る新年月次等祭詞に皇御孫命御世乎手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉云々故爾と有は其神の云々に守護坐る故に依て幣帛を被奉る事なるが此も其義は同じきに歸めれども其運びに少か異有り此は出雲國造が遠祖天穗日命に大國主命の祭祀を令爲給ひて皇御孫命の大御世を長く遠く令齋給へる天神の御旨に依て殊更に國造に被任たる始に其次第を受賜はれる初に齋爲て祈奉るを云るにて此は式に國造還國潔齋一年と有間の所作なるなり其齋の狀は此次に所見たる如し是ぞ詞に親神魯伎神魯美乃命宣久汝天穗日命波天皇命能手長大御世乎堅磐爾常磐爾伊波比奉伊賀志乃御世爾佐伎波閇奉登仰賜志次乃隨爾供齋仕奉と有る主意なりける然れば此は國造が其大神を齋奉り其御守護に添て禮實の物を獻り其を以て天皇の大御世を齋ひ言壽奉れる由なる者也 是に於て素より守給ふ神に幣帛を奉ると異なる事を知可し此は國造の此神事に就て殊更に神に請て齋る所也○此の細註に若後齋時者加二後齋字一を本には加二後字一と有るを此に齋字を補へるは考說に後齋のときには手長能大御世止齋（イハフノチノイハヒ）後齋止爲氐と有るべき也然れば小書に加二後齋字一と有けむを此も本には齋ノ字落たるなり故今補ひつ」と有に依れり此は臨時祭式に國造賜二負幸物一還國潔齋一年云々又後齋一年更入朝奏二神壽詞一如二初儀一と有を云なれは必後齋と有つる事著明し下に供齋と有る細書に唯加二後字一と有と此とは同じからず後釋にも考に齋字を補はれたる寔に然る事なり今本は後人齋ノ字を煩はしく思ひて猥意に削りつるなる可し下文にも此と同じ小書有る

其所は本より齋ノ字は有まじき理なり此は考に云れたる如くならでは語調はず」と云れたり（下文には齋字有ましき理なりとは其は仰賜志次の隨爾供齋仕奉氏と有る所なるが其は體言の所なる故に仰賜志次乃隨爾後齋供（ノチノイハヒゴト）仕奉氏と云て語の調ふ所なればなり）

出雲國乃青垣山内爾下津石根爾宮柱太敷立氐高天原爾千木高知坐須伊射那伎乃日眞名子加夫呂伎熊野大神櫛御氣野命國作坐志大穴持命二柱神乎始天百八十六社坐皇神等乎某甲我弱肩爾太襷取掛天伊都幣能緒結天乃美賀秘冠利天伊豆能眞屋爾麁草乎伊豆能席登苅敷支天伊都閇黒益之天能𤭖和爾齋許母利氐志都宮爾志靜米仕奉氐朝日能豊榮登爾伊波比乃返事能神賀吉詞奏賜波登奏

此は神賀吉詞を京に上りて奏さむ爲に國造い出雲國に在て一年潔齋爲る間の忌愼の狀を申すなり後齋の時も此に同じ若て熊野大神以下の神々は其齋館（伊豆能眞屋を云ふ）に令坐奉りて天皇の大御世を祈奉れるなり（此を京にて神壽詞奏す時に神獻を捧へて祭れる如く思ふは非ず國にて潔齋つゝ其祈を爲て然京に上りては神と臣との禮質の神寶を取捧げて壽詞を奏す耳なるなり）〇出雲國號は古事記に其速須佐之男命宮可造作之地求出雲國云々茲大神初作須賀宮之時自其地雲立騰爾作御歌其歌曰夜久毛多都伊豆毛夜幣賀伎都麻碁微爾夜幣賀伎都久流曾能夜幣賀岐袁と有る此故事に依て出雲の國號の出來れる事古來識者の云るが如し（此御歌神代紀にも有り其說は予が傳に云べし偖右の須賀宮は大原郡なり風土記に大原郡須賀社不在神祇官と見えたるを思ふ可し此を近世在御室山麓など云るは無稽の妄說なり又大原郡に御室山神須佐乃乎命御室令造給所宿故云御室と有も須賀宮に依れるなり記傳見る可し）然るに出雲風土記に所以號出雲者八束水臣津野命詔八雲立之語之故云八雲立出雲國也と有時は其源二有るに似たり又風土記和名抄其に出雲國出雲郡出雲郷有れば此出雲と彼の出雲と名義異なるが如しと雖も然に非ず右の八束水臣津野命は古事記にては須佐之男命の四世孫にて大國主命の祖父に當れ共神代紀正書に素盞嗚尊行覓將婚之地焉乃言曰吾心淸々之於彼處建宮乃相與遘合而生兒大己貴神と有る此は稻田姫を以て令生給へる所なるが此に依る時は古事記は混れたる傳也けり日御碕社記に八束髪速佐須良命と申せると同じく八束水臣津野命と申せるも共に須佐之男命の別御名なる者也（此事次に云べし谷川士淸說に八束水臣津野命は素盞嗚尊の別名と云るは僻事ならず）偖右の風土記の義は須佐之男命の前に夜久毛多都伊豆毛夜幣

賀岐と御歌はしゝ事の名高く有りしを其大神の後に思はし出し給ひて其事を其地に在し詔給ひし故に其郷名と爲り郡名と爲り終に國號とさへ成れるなり若其八束水臣津野命は須佐之男命の外の神ならむには先に右の御歌有れば其子細を陳て然國號となる子細を云べく又然計り名高き古語を閣きて後に假初に宣へる語を取て國に號く可くも非ざるを思ふ可し然れば詔二八雲立之語一は右の御歌なる事論を待ず爲て著く八束水臣津野命は須佐之男命に坐事明かなる者なり右に云る如く大國主命を須佐之男命の六世孫と云事は二柱の亦御名と御兄弟神の別名とに依て混ひつる故由は委しく大穴持命と下に說べし此に右の混れた云事は用無きに似たりと雖も此御名の事實明かならでは悟り難き事有に依つて少云るなり ○青垣山內爾 考に云れたる如く青垣の如く山の廻り立るを云なり出雲風土記に八十神者不レ置二青垣一山裡一詔而云々と有は青山の周れる中なる國秀の美地を青垣山裡と云て此に同じ古事記中卷なる倭建命の思國歌に夜麻登波久爾能麻本呂婆多々那豆久阿袁加岐夜麻碁母禮流夜麻登志宇流波斯」と有を以て其義を曉る可し此御歌を景行天皇十七年御紀には天皇の日向にて詠せ給へる大御歌と爲り、 又出雲風土記意宇郡母理鄕の處に所レ造二天下一大神大穴持命越二八國一平賜而還坐時來二坐長江山一而詔我造坐而命國者皇御孫命平世所レ知依奉但八雲立出雲國者我靜坐國青垣山廻賜而玉珍置賜而守詔故云二文理一神龜三年字改二母理一 と見えたり此に依れば大穴持命の靜坐む料に出雲國は青垣山廻らして作賜へるにて此詞に出雲國青垣山內と有に克協へり但此文且(フ)と見ては母理の地に青垣山を廻らし給ふ如聞ゆれども然には非ず其所には御靈を留め給へる耳なり 此に類たる事は古事記に吾者伊二都岐一奉于倭之青垣東山上一此者坐二御諸山上一神也と有る御諸山は三輪山にて倭國の東方の垣秀如る山上と云事にて右の阿袁加岐夜麻碁母禮流と有る其中即國秀なるが故に神武天皇御紀の大御詔に抑又聞二於鹽土老翁一曰東有二美地一青山四周と有も青垣山內と云事なり同御紀に大己貴大神目之曰二玉牆內國一と有も青山四周れるを以て玉牆と形容(カタドリ)給へる者なり此事國號考に說れたるに本着て予も考なも合せたるなり萬葉にも一に疊付青垣山此を疊有と有は誤なり記傳廿八に改られたるが如し十二に田立名付青垣山と有り又六に芳野離宮者立名附青墻隱と有は山に隱れる地にて此なる青垣山內に同じ ○下津石根爾宮柱太敷立氐高天原爾千木高知坐須は考に熊野大神と大穴持命と二神の宮を云り」と有る然る可し倩此二宮の中に熊野は實に青垣山內と云べき地形なるを杵築は後釋に古事記に於二多藝志之小濱一造二天之御舍一と有る宮なる可ければ海邊に近くて青垣山內とは云難き地ならむか風

土記には御崎山の西麓なる由見えたり」と云れたる如くなれ其國造の其宮に向ひて申す詞ならず其齋爲る齋館に一年招奉れりし云々の狀を述るなれば此彼を兼て大凡に云る者なり 後釋に又思ふに青垣山内とは必しも其地の狀には拘はらず唯大凡に云るにも有べし」と有は然る事なれども其大凡に云べき由を未盡されず ○伊射那伎乃日眞名子は伊邪那岐大御神の貴御子と申さむが如し出雲風土記に伊弉奈枳乃麻奈子坐熊野加武呂乃命と有を後釋に須佐之男命なりと有は寔に謂れたる說なりけり 其は其下文に五百津鉏々猶所取々而所造天下大穴持命と云々と有を以て其下に知可し大穴持命に神鉏を授け與給ふ神は此神を除ていかで有む猶此下に云を見て知る可し 日眞名子は御眞名子なり萬葉集六卅六丁に父母爾吾者眞名子曾七十九丁に人在者母之最愛子曾十三三十二丁に母父爾眞名子爾可有六同三十三丁に母父之愛子丹裳有將など有て何れも深く父母の愛しむ子を眞名子と云るにて其眞は物の多く有が中にも不足ぬ事無く愛しき極みを云るなれば此も後釋に伊邪那岐命の御子等多なる中に天照大御神月讀命須佐之男命は殊に三貴子と古事記にも見え書紀にも珍子と有りて殊に勝れたる子なるが故に眞名子とは申せるなり」と有が如くなる者なり 考に眞名子とは愛しみの殊なる由にて眞之子と親しみ愛しむ詞日は日子の日と同じ崇(タフト)む言なり」と有は宜し然れども子なも孫なも曾孫なも共に眞名子と云つらむ」と有には誤なり後釋に古は子なも孫なも曾孫なも彌末々なも凡て子と云しは然る事なれども眞名子と云るは子に限れる事にて孫曾孫などを云る事無し」と云れたる如くなれば其事は依難くなむ有ける

○加夫呂伎は後釋に神祖なり須佐之男大神は大穴持命の祖神に坐が故に出雲國にては殊に如此申す也」と云れたる如く已に引る風土記に唯に熊野加武呂乃命と見え長寬勘文に引る初天地本紀に熊野大御神加夫里支名久志彌居怒命とも有て其御名を申さゞるも其御名の上に冠らするも共に大穴持命の祖神に坐故なり記傳九四十二丁に云れたる說も右に同じ加夫呂伎の事は祈年祭大殿祭大祓詞等の注に委しく云へりさかし 但打任せて神漏岐神漏美命と申すは高御魂神魂二神を申す事は此下に注せる如くなれども其より轉りては男女の皇祖神を申し又其子孫の神に對へては其祖先の神なも加夫呂伎と申例と見えたり此も大穴持命を下に云に對へて須佐之男大神を然申せるなり此を出雲にて熊野加武呂乃命と申すも其國に鎭座す神社の中には熊野杵築兩神宮坐す中に熊野は殊に其祖神にて坐故に御名を指して然稱申せるなり ○熊野大神は神名式に意宇郡熊野坐神社名神大と見え風土記にも熊野大神と載せ熊野山郡家正南一十八里有二檜山一也所謂熊野大神之社坐と記せる是なり 同記島根郡朝酌郷の條に熊野大神命と有り此は地名を以て神の御名に稱奉れるにて熊田大神石上大神など申さむが如し 記傳九四十一丁須佐之男命宮可レ造二作一之地求二出雲國一爾到二坐須賀地一而詔云吾來二此地一我御心須賀々々斯而其地作レ宮坐故其地者於レ今云二須賀一也と有る下に此地は出雲風土記を細に考るに先大原郡須我山郡家東北一十九里一百八十步須我

小川源出二須我山一と見えて又意宇郡野代川源出二郡家西南一十八里須我山一と有る此須我山も即右の大原郡なるを云ふなり須我山は大原意宇二郡に亘りて其堺に在り偖同郡熊野山郡家正南一十八里と見ゆ斯れば須我山熊野山は相並べる處なれば熊野神宮ぞ即須賀宮處なる可き故思ふに久麻野は隱野の義にして御歌詞の都麻基徵の由なる可しと云れたるは實に詳明なる說なり然れば須賀は以前に我御心須賀々々斯と詔給ひし古名熊野は八雲立の御歌に依れる名にて共に一處の名なるを後に須賀と熊野の地を分ちて大原郡と意宇郡とに隸たる者なりけり（但文は甚く約めて引り委しくは本書に依て知べし偖右の野代川は出二郡家正南十八里一と有れども千家清主が訂正本に西南と有る其正しと思しければ今改つ又大原郡御室山郡家東北一十九里一百八十歩神須佐乃乎命御室令レ造給所レ宿故云二御室一と有る此御室は須賀宮とは別に造給ひしかしと云れたる此は決めて別には非るなり同郡須我社不レ在二神祇官一と有を以思ふる八雲立の御歌有しは其御室なるを其宮は後に熊野に移されて大社と爲れる趾に須賀社を存（ノコ）せりし者ならむかし）神祇令義解に謂天神者伊勢山城鴨住吉出雲國造齋神等類是也地祇大倭葛木鴨出雲大汝神等類是也と有る出雲國造齋神は即此熊野大神に坐り神位は文徳天皇實錄に仁壽元年九月庚午朔乙酉特擢二出雲國熊野杵築兩大神一並加二從三位一三代實錄に貞觀元年正月廿七日奉レ授二出雲國熊野神杵築神並正二位二五月廿八日授二出雲國正三位勳七等熊野坐神正三位勳八等杵築神並從二位一九年四月八日授二出雲國從二位勳七等熊野神從二位勳八等杵築神正二位一と有り（此より後寛平九年十二月に從一位天慶三年正月に正一位に至らせ給へる事など下なる八百丹杵築宮の下に至て明らかに考記せるを見て知べし）然れども佗神社こそは有め此兩神宮の御會釋の狀に於ては甚々足す遺憾き心ちぞ爲る其は熊野大神は須佐之男命に坐て伊邪那岐大神の日眞名子と坐耳ならず天照大御神と相並ばして皇統にも御祖と坐す由は天安河にて御誓ひ坐る御中に天忍穗耳命生出坐て天照大御神は女神に爲て大御父の如く須佐之男命は男神に爲て大御母の如く御在るが故に其大神の御言に吾以二清心一所生兒等亦奉二於姉一と神代紀に見え又吾兒所レ御之國と有は天忍穗耳命の葦原中國を所御す事も其大神と大御神との御心に依て定れるなれば天皇の大御祖と坐す須佐之男大神の本宮也又杵築宮は古事記に大國主大神の國避の時に唯僕住所者如二天神御子之天津日繼所知之登陀流天之御巢一而云治賜者と申給へるは天皇の御舍の如作賜へとなるを天神の許可し給ひて天御量持而所レ造二天下一大神之宮造奉詔而御子天御鳥命楯部爲而天降之給之と風土

記に見えたるが上に天皇の顯露事に相對ひて世中の幽冥事を所知看す大神の宮にし有れば此兩宮共に宮號をも奉らせ給ふ可きを神名式風土記ともに唯熊野大社杵築大社と耳有は一の闕典と云ふ可く神位の御事も然御定の出來らむには忽に正一位をも授奉り給ふ可きを杵築宮などは大神大倭等社の本宮と有に其位階の別社には後れ給ふは何事ぞや又式に名神大と有て月次相嘗新嘗等に預給はぬぞ甚々可畏く神慮の程も如何有むとさへぞ思はるゝ若武藏國なるを以て奉られしとならば下總國香取神宮常陸國鹿島神宮などは名神大月次相嘗新嘗なり武藏國氷川神社安藝國速谷神社阿波國忌部神社等は名神大月次新嘗なるを何とか云む然しもの齋[illegible]も此事を一言たに所見[illegible]て甚惜せられざりしは已に此兩神宮の御事は朝廷にても其事を忘れ竟させ給ひし間にて天下に然る心有る人も無りけるにや予は甚怪しくこそ思ゆれ右に引る義解の天神地祇の差別などの趣きに就ても當時の衰へ遺憾しとも悲哀しとも言に述て言むも中々なりかし偖熊野 大神は右の如く須佐之男命に坐を中古より已に其傳を失へりと見えて長寛勘文に引る初天地本紀に 伊謝那 支命娶ニ惠乃女命一生ニ大夜乃女命次足夜乃女命次若夜乃女命三神一此大夜乃女命熊野大御神后坐陸上立時身體左肩忍奈豆流時成出來神名加已川比古命又右肩忍奈豆流時成出來神名熊野大御神加夫里支名久志彌居怒命自ニ其中一成出來神名須佐之乎命三柱太玉等是也此時 金國之八熊野 波比降ニ手伊豆毛國ニ到ニ熊野村ニ宮柱太知奉而 加夫里支熊野 大御神地祇神是又御兒后大夜女命山狹村宮柱太知奉而靜坐大御神三是なりと有る此は御身滌段と御誓段と二を混雜せる傳なるが中には正說も無には非れども熊野大御神と須佐之乎命とを別神と爲るは決く誤なり但此大夜乃女命熊野大御神后坐と有は正說にて稻田姬命より以前の后なり此ぞ五十猛命大夜津姬命抓津姬命三柱の御祖なりけらし當郡に三所韓國伊太氐神社ありて宮帳に入給へるも由有る事なり神皇又御兒と有は神皇產靈命又御兒と有しが脫たるなる可し式に出雲國意宇郡山狹神社同社坐久志美氣濃神社と有は后神の社に本宮熊野大神を合せ祭れる者なり右の文に伊謝那支命娶ニ惠乃女命一生ニ大夜乃女命云々と有は決く誤傳なるべし又加已川比古命も詳ならざる神名なり此初天地本紀は神祇八にも引たれども共に全くは信用(ツケヒキ)難き書になむ[illegible]本に[illegible]命娶ニ萬魂[illegible]五十猛命妹大屋津姬命次抓津姬命と有り若是正說ならば[illegible]有り初天地本紀なる大夜乃女命の別名なる可くや偖熊野神宮には須佐之男大神后神奇稻田姬命一柱共に鎭坐す事右の須賀宮の故事にても明亮なり然れども宮帳には熊野坐大社と耳有て幾座とも無は其社を一座と立て被齋給へるか又は其に並びて前 神 社と有は同神社にても有むか風土記には前社と有り後釋に熊野社の今の說には

上宮三社は中伊邪那岐命伊邪那美命左早玉男右事解男也下宮は天照大御神須佐之男命なりと云なれども神名帳に唯熊野坐神社と耳有て幾座と云事無ければ宮帳に入て式に載れるは主と爲て祭る須佐之男命一座のみなり其餘は皆添て祭る神にて宮帳には入ざる神なり凡て神名帳の例何れの神社にても幾座と云事無は皆一座也と知べし」と見えたり然る可し今思ふに今祭る如きは後に佗社を一に合せたるなる可し其中に早玉男神は式に早玉神社と見えたる其なる可し內山眞龍が風土記抄に在二大草郷一中熊野村熊野社同地一と有り紀伊國牟婁郡熊野坐神社名神大と有に並びて熊野早玉神社大と有るは共に出雲より移し奉れるにて克合へり（此熊野神宮の祭神の傳を失ひつる故に今社家說の如きも出來れるなり神名帳頭注に出雲國意宇郡熊野伊弉並同遇樋佐久佐稲田姫山代伊弉諾也と有て須佐之男大神の御事を僞ても申さゞるは何なる說ぞや右に注る如く熊野は須佐之男命なる事本より論無く佐久佐は風土記に依に青幡佐久佐日古命山代は山代日子命に坐を餘りに推當の妄說と云べし努々惑（マドフ）はさるゝ事勿れ）其餘にも式に近江國高島郡熊野神社越中國婦負郡熊野神社丹後國熊野郡熊野神社など有は何れも出雲なるに同神なる事無疑き者也（三代實錄に貞觀十二年九月廿一日授丹後國正六位上熊野神從五位下とあり此丹後國なるは久美と云ふ浦の岬に熊野山とて有る其頂に立せ給へり今川上庄甲山（カフヤマ）村に屬る地なるが甲山村は神山村の轉れるなるべし同郡神谷神社有る其に浦を隔て相對立て甚々神進たる御社なり予も久美濱に度々物爲る間に屢參詣でたりき）紀伊國の熊野坐神社は其には勝りて古昔より大社也今此を本宮と申し熊野早玉神社をば新宮と申し又那智を加へて合せて熊野三所と申せり然るに本宮新宮は式にも被載て貴き神の御社も立せ給へるを那智は觀音と云ふ蕃神の鎭る地と爲て神の御在る所とも人皆知ざんめるこそ心憂きことなりけれ那智は大名持命の御名の地名とは成れるなり然れば那智の祭神は必其神なる可き事出雲國の例に按合せて所知たり（上野國神名帳に群馬西郡從三位大奈智明神と有るは決く大己貴少彦名命なり文明十一年の東大寺の戒檀院の神名帳に大汝大明神小汝大明神と見えたるを思ふに汝（ナムヂ）を奈智と切て呼るなり斯計りの神地を法師原に奪はるゝ事こそ悲しけれ）神階の事は三代實錄に貞觀元年正月廿七日從五位下熊野早玉神熊野坐神從五位上同年五月廿八日從五位上熊野早玉神熊野坐神從二位と見ゆ扶桑略記に延喜七年十月二日授紀伊國正二位熊野早玉神從一位又從二位熊野坐神正二位と有り（此の時に至りて熊野坐神の神階は後れ給ふ事ならず神名式にも正史にも早玉神の後に熊野坐神社を常も載たり）若て長寛勘文に熊野早玉神社（伊弉諾尊子）熊野坐神社（伊弉冉尊）と有は心得ぬ事なり熊野坐神社は須佐之男命にて渡らせ給ふに伊弉冉尊と有は出雲より其に移し奉れるなるべし然るは熊野鈴木玉木家傳に伊弉冉尊の神靈を出雲より紀伊の熊野に移し奉る時に

御前驅（ミサキバラヒシ）爲て鈴を神木に着け捧持たる家の子孫を鈴木と云ひ御魂を隱たる賢木を持たる家を玉木と云ふ後に改て玉置と書く（以上傳說）と云り此迎奉れりしは何時ならむ神名帳頭註に崇神天皇十六年始建ニ熊野本宮ニ又景行天皇五十八年建ニ同新宮ニと有る其間の事なるにや但神武天皇御紀に此地方を熊野神邑と有故（カラ）は出雲の熊野と同じく熊野大神（須佐之男命）の鎭り坐す本よりの宮有に伊弉冉尊と早玉神とを當時迎申されし年紀の傳はるならむか（國造本紀に熊野國造志賀高穴穗朝御世饒速日命五世孫大阿斗足尼定ニ賜國造ニと有る大阿斗足尼は天孫本紀に見えず姓氏錄を稽るに山城國神別天神に阿刀宿禰［illegible］連熊野連共に石上朝臣同祖饒速日命孫味饒田命之後也と見えて天孫本紀に孫味饒田命阿刀連等祖と有て此は合るを又京神別天神に［illegible］積臣石上同祖饒速日命六世孫伊香色雄命之後也と有る其に並び阿刀宿禰石上同祖と有れば右の五世孫大阿刀足尼の五世は九世の誤ならむか天孫本紀に依に八世孫九世孫などの人々景行天皇の御世に傳臣に仕奉れる人多けれど伊香色雄命の裔ならば人か何るか其系に滿たるなる可し若ておの鈴木は穗積臣たり然れば其が刀足尼より以前に已にその國に來れて住る程に迎奉れりしてし其右の崇神天皇景行天皇の御代なりしなる可し此より此に土着して其大神を崇奉りしを成務天皇の御世に國造には任たりしなるか其し然るを紀伊國に自なる鈴木家譜に神武天皇長髓彥征伐の時の木に稻穗を結着て御馬印の頭に持せ御先手を勤め御軍の時に稻をりしかば穗積姓を賜れりと云て鈴木の濫觴を云めれども此は古無き事にて其實は此の熊野神の事を記せるなり夫木集に熊野詠るに「榊木の葉に掛ける露の玉動きな給ふの神や光添らむ」と豐云るも神武天皇の御世の事ならざるを思ふ可し長寬勘文には彥山より御座の地なり此は新宮に坐す早玉神にて右の伊邪那美命と前は別か又は二柱共に出雲より其に遷坐しか其文は熊野權現御垂跡緣起云日本國鎭西日子乃山峯雨降給天八角水精乃石高佐三尺六寸奈留仁天天降給布次五箇年乎經天戊午年伊豫國石鎚乃峯仁天給次六年乎經豆甲子年淡路國乃遊鶴羽乃峯仁渡給次六箇年過庚午年三月廿三日紀伊國牟婁郡切部山乃西乃海乃北乃岸乃玉那木乃淵乃上乃松木本渡給次五十七年乎過庚午年三月廿三日熊野新宮乃南乃神藏峯降給次六十一年庚午年新宮乃東乃阿須加乃社乃北石淵乃谷仁勸請鎭奉津始結玉家津美御子止申二宇社也次十三年乎過壬午年本宮大湯原一位乃本三枚月形仁天天降給止有る此中に玉那木と云ひ結玉家津美御子と有るもの夫木の歌に合り又結ぶの神と云に有も右の玉木家の傳の如くなりば皇產靈神の事には非る由ふ名に此正覺ならば出雲より國々を行て遷坐るが鈴木玉木の［illegible］は其近き邊より迎奉れる其に見て出雲迄の年數を書すに西より初て甘盤しは甲寅年に當るを其より壬午年迄の年數積り十九年なり此は何れの御世の支干とも分り難く其々降しきは有事出雲國の熊野神宮の事を主と云ふ所なるに紀伊國に熊野神社の事を然計（バカ）り詳しく云故は中古より以來紀伊國に熊野の有事を知て出雲國に其本宮は有とだに知られぬ程に榮ける隨に其に就ては種々の妄說も多かる故に且は正しがてらその事ぞ）

○櫛御氣野命後釋に此は須佐之男大神のこの熊野宮に鎭座す御靈を稱奉れる御名なり大名持命をも倭の大三輪に祭る御名をは別に大物主櫛𤭖玉命と下に在る類にて同神も其社々に祭る御名の別に在る例積佐にも有り神名帳に熊野の同郡に別に久志美氣濃神社と云も有は此熊野大神を又別に祠れる社なる可し此御名を別に一神と心得むは僻事なり」と有り（記傳九卷に既れたる如く同じ借字に有は式に出雲神社同社坐久志美氣濃神社と有る是にて其后大夜乃女命の御許に坐るにて其御魂は熊野より勸請（マセ）奉れりしなるべし此社今能義郡出佐村に在り熊野の東南なりと云り）櫛は御門祭の下に云る如く天よりこの國土に降坐て奇異なる御恩頼を幸へ給ふ美稱なり美氣濃は旹不合命の大御子に御毛沼命若御毛沼命亦名豐御毛沼命と申せる其は何れも御食の意なる其と同義にて御氣主（ミケヌ）なる可し氣は衣

食住に亘る稱なり其は神代紀に已に所見たる如く此神の天上に坐し間に天照大御神の大御使と爲て葦原中國に天降り給ひ保食神の御許に出坐しけるに其神の大御饗奉る狀を伺はして穢物を奉ると所思して終に事有り著して其復奏しけるに大御神甚く怒坐て汝は惡神なりと詔給ひ退給ひて天熊之大人を再び天降し給ひ其保食神の消息を令伺給ひ其神の身より化れる食物着物住宅の資と成べき種々の物を天に召上給ひ水田種子陸田種子を以食物の設と爲給ひ天香山に桑を殖て養蠶機織の道を始給ひ又新宮を作りて家居の營みを整給へり此食衣宅の物實を氣と云ひ又宇氣とも云ふて（此事卷九大殿祭詞の注に委しく記せり此は其要を摘て其趣を通る耳ぞ此に書せりとはおもふべからず）然るに須佐之男命は御父大神伊邪那岐命より天下を所知と事依され奉給ひしかども御母伊邪那美命の御許に根國底國に至坐む御心なりしかば顯見蒼生を治給はむとも所思食ず有しかば衣食住の事などには更に御心留らず唯我に無禮かりし者を其保食神より化れる品物を大御神の愛慶み給ひし己命は其御兄弟に坐を遠放け給へりしかば御心妬ましく成て終に天罪種種の事を犯し給ひて大御神の御事業を妨奉り給へり

（天罪とは何れも食住宅の物を損ぬる罪なる事大祓詞なる其件の下に云る如し）此に因て天照大御神天石窟に入て隱給ひしかば高天原も此國土も常夜行て晝夜の差別も無く成れりしかば八百萬千萬神も各其德を施すに由無く且國土萬物共に皆徒の物と成て已に世中絕竟べき狀なりしかば諸神天上に集ひて其禱奉らむ方を議給ひ鏡劒玉等の太御幣を奉り其須佐之男命の損害給へる食衣宅の物を又更に善成して大御神に奉りて種々の神樂仕奉れりければ漸々大御心和み坐て石屋戸を出坐るに至れり此に依て六合に本の如く大御光を放ちて照し給ふを以て神人萬物共に國土に安居爲る事を得たり（此他家の說と大に異なる所なり大殿祭詞及大祓詞等の說に委しく云れば此には漏せり）於是て其天罪を解除しめ給ふ是祓の始なり神代紀一書に已而科二罪於素戔嗚尊一而責二其祓具一是以有二手端吉棄物足端凶棄物一亦以レ唾爲二白和幣一以レ洟爲二青和幣一用レ此解除云々と有は已に天罪を解除むと爲に至て既く淸々しき御心と成給はむ端に唾の白和幣と化り洟の青和幣と化れるなり又同じ事を古事記に於是八百萬神共議而於二速須佐之男命一負二千位置戸一亦切レ鬚及手足爪令レ拔而神夜良比夜良比岐と有る此を神代紀一書に合するに然後諸神歸二罪過於

素戔嗚尊ニ而科レ之以ニ千座置戸一遂促徵矣至レ使レ拔レ髮以贖ニ其罪ニ云々と見えたる千座置戸は祓具を載る案なり髮鬚を令拔るを以て思ふに其を以て其造る材とは化せる者なりけり（是等は未だ祓にも及ばざる以前より此神の清々しく成給ふ事の見えけるなり此事委しくは大祓詞の條下に云りきかし）須佐之男命天より被逐て出雲國に降り給へり神代紀（正書）に遂到ニ出雲之清地ニ焉乃言曰我心清々之（此今呼ニ此地ニ曰レ清）於ニ其處ニ建レ宮と見え古事記にも爾到ニ坐須賀地ニ而詔云吾來ニ此地ニ我御心須賀々々斯而其地作レ宮坐故其地者於レ今云ニ須我ニ也と有る如く以前の狀とは異りて御心清々しく成給へるは全く天罪の除れるが故なり出雲風土記（安來鄕條）に神須佐乃乎命天壁立廻坐之爾時來ニ坐此處ニ而詔吾御心者安平成詔故云ニ安來ニと有も同じ意味の御言なり此を以て其美好しき御心を想像り奉る可し（但此安平成の御言は須賀に出坐るよりは以前なるべし有に共に解除に依て禍事の除こり盡て神直日大直日の御靈を得て御心の和げき由なるなり）此より御父大神の事依し奉らせ給ふ天下を治給ふ可く思ほし成て須賀宮に留まらせ給ひ間も無して國引の御功を立給ひて其を作固め給ひ其御事は御子大國主神に授け任ね給へる事已に引る風土記に伊弉奈枳乃麻奈子坐熊野加武呂乃命五百津鉏々猶所ニ取々ニ而與下所レ造ニ天下一大穴持命ニ二所大神上と有以て知られたり但此二所大神とは少彥名命を合せたる御言と聞えたり又御子神等を數多に生給ひ國土人民の爲に各自の功德を令立給ひて先に天照大御神の天上にて事始め給へる食衣宅の事に殊に御心を盡し給ひ殊に其道を弘定め給へり（國引の故事は出雲國耳の事と思ふは心狹し風土記に國引坐八束水臣津野命と有も已に其神の御名なる上は在ゆる國々を引坐して國形とし給へるが故なり其が中に出雲國のは期殊に記に遺り傳はるにこそはありけれ他國とても各然有りつるが傳說の亡びたるなンめり甚惜しき事ながら國引坐神と申の專への存へ（ノコ）れるこそ天下の幸には有けれ）此大神の食物に功しみ給ふ證は風土記に須佐鄕神須佐能袁命詔此國者雖ニ小國一々處在故我御名者非レ着ニ木石一詔而即己命之御魂鎭置給之處然即大須佐田小須佐田定賜故云ニ須佐一有ニ正倉一と見え又朝酌鄕熊野大神命詔朝御餼勘養夕御餼勘養五贄緒之處定給と有る此一二事を以ても食物の事に勞かせ給ふ事知られ又后神を稻田媛と申し其父母に稻田宮主神と云號を給へるにて著明きを猶其御業を令繼給はむと爲て娶ニ大山津見神之女名神大市比賣ニ生ニ子大年神次宇迦之御魂神ニと古事記に見えたる此は保食神の稻穀を天にて大御神の農作らせ給へるを害ひ給へるを此國にて償給へるなり（此神等の御功の坐事は悉くに一卷御年神詞の下に說き三卷太神宮詞十三卷豐受宮の詞共の下に說き須佐之男命の次第は六卷大忌祭詞九卷大殿祭

詞の下に説り合せ讀て味ふ可し又衣服の事に御靈を幸はへ給ふ事は風土記大原郡條に高麻山古老傳云神須佐能袁命御子青幡佐草日古命是山上麻蒔初故云ニ高麻山一と有る此麻は天にて已に青和幣白和幣有しを此國にて蒔初給へるは衣服の料なる事云も更なり此天にて大御神の天衣織女に御衣を令織給へるを此國にて償ひ給へるなり（大殿祭詞の下に註る如く紀伊國に坐三神共國にて衣食の道を始給ひし故事の有などを思ひ合す可し）又家宅の事は神代紀一書に素戔嗚尊曰韓鄉之島是有ニ金銀一若使吾兒所御之國不レ有ニ浮寶一者未ニ是佳一也乃拔ニ鬚髯一散レ之即成レ杉又拔ニ散胸毛一是成レ檜尻毛是成レ柀眉毛是成ニ櫲樟一已而定ニ其當レ用乃稱之曰杉及櫲樟此兩樹者可ニ以爲ニ浮寶一檜可下以爲ニ瑞宮一之材上柀可ニ以爲ニ顯見蒼生奧津棄戸將レ臥之具一夫須レ噉八十木種皆能播生于時素戔嗚尊之子號曰ニ五十猛命妹大屋津姫命次枛津姫命一凡此三神亦能分ニ布木種一即奉レ渡ニ於紀伊國一也と見え又は素戔嗚尊師ニ其子五十猛神一降到於新羅國ニ云々初五十猛神天降之時多將ニ樹種一而下然不レ殖ニ韓地一盡以持歸遂始レ自ニ筑紫一凡大八洲國之內莫レ不ニ播殖而成ニ青山一焉所以稱ニ五十猛命一爲ニ有功之神一即紀伊國所坐大神是也と有る此も天にて大御神の新宮を害給へるを此國にて償ひ給へるなり（右の歟ふ可き木種を播生し給へるを以て桑をも蒔生し給ひけむ事をも思ふ可し備予先に思ひけらくは久志美氣濃神と申すは奇御木主（クシミケヌシ）と申す事にや右の故事耳ならず其神の坐す山與神社は其后大夜乃女命に坐は五十猛神の御母なる事は云はでも著きを當國に韓國伊多氏神社の多きは御母子共に間違からぬ國内に並びて鎮坐る山緣を以思ふに美氣濃は決めて御木主なる由舊は古語拾遺に採レ材齋部所レ居謂ニ之御木ニ（ミケ）と見え景行天皇御紀に到ニ筑紫後國御木一居ニ於高田行宮一と有て時人歌に瀰概能佐烏麼志と有れば御木は美氣と訓む古語なるべければ其に依て御木主ならむと思ひしは其一端を取れる耳にて未盡さゞりけり）右は天罪にて食衣宅の資を損害給へりしを御心の安く平けく清々しく成給へるに依て此國にても其道を起し給ひ其御子神等にも各自に持分て其事を令主給ひて先に事有し豐宇氣毘賣神の世に幸給ふ御德を幽贊て顯見蒼生に御恩賴を令蒙給はむと所思し功しみ給ふ貴く高く廣く厚き御所業になむ有ける是以て櫛御氣野命と申奉るは須佐之男命の國土萬民に食物衣服住宅等の事を授與へ給ふ主宰神と申す意にて受張たる亦御名と畏けれど定奉る者なり上に云る氣と宇氣と同じく共に右の三に亘る名なりと云由は先食物の事を食とも御饌とも喰とも衣服の事を御衣とも著物とも所著住宅の事を家とも住處とも在所とも大宅とも御宅とも云る體より云時は加伎久祁の言にて共に語を成し其用ふる用を以ては宇迦とも宇氣とも云て其詞と成を以考るに右の三

の資(モノ)は他より來著て其身を令保(カネアハセ)るに出たる語なりけり然れは御氣は右の三を該羅たるなれは其を主宰り給ふ由の御名なる事疑ひ無る可き者也（此事は大忌祭詞大嘗祭詞等の下に委しく註り引合せ讀て其義を曉るべし又右の外に御氣野に甕主（ミカヌ）の意をも兼たるは可しき事也此大神を健速須佐之男神と申せる御名の雄々しく武く勇ましく性に叶ひて妙也然れども御名の本義は上に云る如くなる者也）然れは櫛御氣野命と申奉るは此大神の國引坐神と在して天下の分野(アリカタ)を定めて國土を經營り給ひ衣食宅の物を世中に分布(ホドコラ)し給へる主宰の神と申す義の御名なり然るを其御子大國主大神に其御業を事依し授給ふ故に其神を國作坐神とも所造天下大神とも稱奉て其御業を繼坐る故に此詞に櫛甕玉命の御名有るは御父大神の御氣野と申すに靈合て幽賛給ふ由なり（天照大御神に天照御魂神豐宇氣神に宇迦之御魂神の添て其御功用を幽賛奉る例を思ふ可し凡て某魂神と申すは其主たる神に對て申す定格なれば此の御父子二神の御名義も奇異なる迄克く合へり）○國作坐志は杵筑大神の御事なり下に國作之大神と見えたり神代紀に國作大己貴神と有るを出雲風土記に所レ造二天下一大神大穴持命とも所レ造二天下一大穴持命とも又省きては所レ造二天下一大神とも記せり偖此大神の國土に在ゆる八百萬神に殊に勝れて尊く高き由緣二有り一には國作坐し御功坐るなり此は御父須佐之男大神の御事依しに因せたまへるなり二には

神代紀に高皇產靈尊勅二大己貴命一曰夫汝所レ治顯露之事宜二是吾孫治一レ之汝則可三以治二神事一云々於是大己貴神報曰吾所レ治顯露事者皇孫當レ治吾將三退治二神事一と見えて此は天神の御事依しに因る所なり（其國作坐とは右の顯露事を云なり此事下に委しく述るを見て知べし但其にも差別有る事なり下に現事顯事の下に云べし）右の二の中に國作の事は顯露事と共に皇御孫命に事避り奉給ひてより以降其謂ゆる神事を所知看すなむこの大神の天地と共に無窮き大なる御業なりけるを此に國作坐志と有は子細有る事なり其は此文に次て國作之大神乎毛媚鎭天　大八島國現事顯事令事避支と有るへ運ぶ所なり故坐志と有る志は過去の辭なるなり（且此は未國避給はざりし程の事を云件なれば必其時の事實の任に國作坐と本より云はでは得有らぬ所なるなり）偖國作坐と云事の顯露事なる由は誰も唯國土を經營(ツクラセ)爲る事と耳思ひためれど然らず國土を經營爲るは人民を令住給ひ隨分に衣食住の資を賜ひて生育(オフシスダテ)給ふが本にて其有ゆる人共の事業繁き中に善を行へば賞給ひ惡を爲せば罰め給ひ各其趣く所を定給ふ御政有をも兼併せたる語なり然るを顯露事と云へば人の善惡邪正を御糺し有る事と思ふは末を捉へて本を亡ひたる論にて未漢意を免る事を得ざるなり（彼國にてこそ治國平天下など〻言々（コチタ〳〵）しく論（サダ）すめれ其國を

治めむにも天下を平げむにも國天下を保つ所以の衣食住の稗鬱有て其後ならでは治りも平らぎも爲ヶ者に非ず畢竟事の亂に之(ユ)くも其本たる衣食住に安堵(オチツカ)ざるより出來る事なれば其未だ今に立定れらむには與せず爲て國治り天下平なる可き理に非ずや詳案に此を說べし抑古事記に於是天神諸命以詔二伊邪那岐命伊邪那美命二柱神修二理固一成是多陀用幣流之國一と有は天神の幽世より顯國を事始よと命令せ給へるなり然して二柱神の御言に以三爲生二成國土一と宣へるは其種子を成始め給へるなり故次には吾與レ汝所レ作之國と宣ひて其を善成し給ふ事を宣ひ又既生レ國竟更生レ神と有て其國土に在て功を立べき神を生給へり此に因て人草成る是を以て伊邪那岐命の桃子に告給へる御言に汝如レ助レ吾於二葦原中國一所レ有宇都志伎靑人草之落二苦瀨一而患惚時可レ助と宣へるなどは人身の上に係る事にて顯露事の類なり然れば天神の御言に修理固成と宣へるは國生の事耳には非ず其經營と政事とを兼て命令せ給へるなり神代紀には此事を宜二汝往循一レ之と有り右の修理固成を併せて循と有り循は所知看の義なり然れば知レ國又治二天下一と云事を唯に政刑賞罰を掌る事と思ふなどは全に狹立する漢意より染入たる未說なり 若て神代紀に是後伊弉諾尊神功既畢靈運當レ遷是以構二幽宮於淡路之洲一寂然長隱者矣と有は貴御子等に事を委任れ授給ひて幽世に入給へるにて大國主神の顯露事を皇御孫命に事避奉給ひて幽事を知食すに同しきを照合す可し 又神代紀に素戔嗚尊者可三以治二天下一也と勅任し給へるも右の循と同じきは御父大神に次て國土を修理固成と勅任し授給へるにて謂ゆる顯露事なる事古事記に見えたる大國主命に國讓の故事にて著明也尙云はゞ出雲風土記に國引坐八束水臣津野命と申せるは其大神に坐事已に上に考徵せるが如く又神代紀一書にも素戔嗚尊曰韓鄕之島是有二金銀一若使吾兒所レ御之國不レ有二浮寶一者未二是佳一也云云夫須噉八十木種皆能播生と有る此一事を以ても國土を經營り給へる大較は知られたり然れば治二天下一と云る顯露事とは國土を經營る事をしも主と立る事にて政敎は其に亞る者なり 此を以て大國主大神の御業は御父須佐之男大神より受給へる顯露事なる事次に云ふ說に合せて曉るべきなり但右の神代紀に吾兒所レ御之國と有は正哉吾勝尊の御事にて後に天降り坐む事を未前に宣ひ置し者なり 又古事記に須佐之男大神云々遙望呼謂二大穴牟遲神一曰其汝所レ持之生太刀生弓矢以而汝庶兄弟者追二伏坂之御尾一亦追二撥河之瀨一而意禮爲二大國主神一亦爲二宇都志國玉神一云々而居是奴也故持二其大刀弓一追二避其八十神一之時每二坂御尾一追伏每二河瀨一追撥而始レ作レ國也と有は其顯露事を被任給へるにて始レ作レ國とは國土を經營して有たせ給ふ謂なる事右の前

文に此大國主神之兒弟八十神坐然皆國者避ニ於大國主神一所ニ以避ニ者云々と有を以知べし（其は此大神の兒弟共に國を分ちて各々國土を有てりしを避奉る可き所以有て天下は悉くに大國主大神の併せて有たせ給ふ由なる者なり）上にも引る風土記に伊弉奈枳乃麻奈子坐熊野加武呂乃命五百津鉏神鉏所ニ取々一而與下所レ造ニ天下一大穴持命上一所大神上と有は本より國土經營の事依に依れゝば右の古事記の文に合せて心得べき事なり然れば國作坐とは國土を有たせ給ふ體に就て申し顯露事とは國土を治めさせ給ふ用に就て云るにこそは有けれ其體より云て用に及ぼすも用より云て體に及ぼすも其落着る處一なり（此大神の御子を味鉏高彦根命と申すは其國土經營の御功に取て御名と爲りし御名を事代主命と申すは國土を治め給ふ事務（ミコトモチノコト）を看を以て傳奉れる御名なるをも思ふ可し有委しくは下なる現事顯事令事避支と有る下に云むを合せ讀て皇御孫命の天下を有たせ給ふ事の國作の御事たる事を明らむ可きなり）○大穴持命古事記に大穴牟遲神神代紀に大己貴命作り記傳九（五十九丁）に此御名の訓は萬葉三（三十三丁）六（二十三丁）に大汝と書き又十八（二十五丁）に於保奈牟知と見え古語拾遺には大己貴と作ながら（此文字は書紀によれるなり）古語ニ保那武智神と云ひ姓氏錄に大奈牟智神文德天皇實錄八に大奈母智又於奈牟智と有る此等以知べし遲は濁音なり（然るを書紀に大己貴此云於褒婀娜武智と有に依て今に至る迄世人如此唱めるは如何此訓注は師の疑ひ置れつる信にはし此訓注に富阿と□を添たる事古に例無ればなり云々○考頭書に云く紀一書に大己貴此云ニ云々一と有は倭武等に誰を阿誰と云る類にて阿は添たる辭ぞ又阿那多布の阿那と爲て崇み敬くする辭と云るか云々○今云上野國神名帳に群馬西郡に從三位大奈知明神小奈知明神と有も大穴持命と聞えたるが此は後の書ながら同今と云ざるは皆には古言の遺れる者なり倭古語拾遺に字は大己貴と書ながら更に訓注を添たるは書紀の訓注の故實に違へるが故なる可し）倭大穴と作るは此記を始と爲て萬葉七（二十三丁）に大穴道出雲神賀詞又神名帳又出雲風土記等に大穴持姓氏錄に大穴牟遲命など有り是等も皆於富那と訓べき證は和名抄に信濃國埴科郡郷名の大穴を於保奈と訓せる是なり倭牟遲と母智とは通はして古より二に傳はれる中に正しくは母智と有は右の文德天皇實錄耳にて餘は皆牟智なれば持と書るをも牟智と訓ても有ぬ可し（智は此記には遲と有れば必濁音なるを持とも多く書たるを思へば此は清音にも唱たるにや此清濁の事は疑はし○今云神代紀なる大日霎貴命を清て唱奉る例に倣ひて清べき也神名式に丹後國與謝郡大虫神社名神大小虫神社名神大越前國丹生郡大虫神社名神大小虫神社など有る丹後の社傳に大汝少彦名神なる由云り此は牟智と牟志と音は異れど清て呼ぶ例なり）御名義三代實錄及延喜式等に大名持と作る是正字なり名は成にて行事を云なり高橋氏文なる日代宮天皇の大御詔に大倭國者以ニ行事一負ニ名國（奈利）と宣揚げ給へる如く其行事を以て名に負ふ古例なるが故に古事記などに云々而成神名者云々と有り其は神名は乃行業にて其即其主の名と自も號り他よりも稱られ給へる者なり所以に其神の事實は其負坐る御名に定れるぞかし（後人の己が向々佳字を擇びて號るなどの如き名と物と事と行と業と打合ざる如きは殆に神

國の風儀とも思ゆかしからぬ僞事なり然れは此に國作坐志大穴持命と續け神代紀に國作大己貴命と申す亦號を被載たる如く此大神は御父大神より國土經營の御事依しを受有たせ給ひ千名の五百名に負持給ふ可き大造の功績を得建給へるを以て大名持命とは御名に稱奉る事なりけり然れは物を成すより其物の主と成り其主の名稱と成れる由なり其を大名と云時は佗神に比倫無く御功の高く貴き謂なり又此考出來て思ふに大名の名は行事を云るなれば國作坐志大穴持命とか國作大己貴命とか上に冠らする言無くは語足はぬ如くなれど然らず其名は地に通ひて大地の事なり常にも岩根木根などゝ云も其安置（スヱ）る地盤を根と爲て云ひ地（ツチ）の發語に阿羅珈禰能と云るも天地の散（アラ）け分判れたるより云ふ言なるを思ふ可し又地を名と云は田地を墾開（ヒラ）きて其所に號るを字（アザナ）と云ひ其を有つ主たる者を名主と云ひ其名を併せて多く有つ者を字音なれども大名と呼びなと爲るは地の體と墾（ハ）れる用とを兼て名と云るなりまた地震を奈韋と云ふも名動（ナユリ）と云事にて地の動くを以云也韋は山埴なる事古事記中に山由理草の本名云二佐韋一也と有にて知るべし然れば名は行事に依れる者から其行事に依て成れる國土の事にも成れゝば大名持と申さむは大國持と申さむに其意味に於て異ならず持とは其地を修理固成し坐て其地の有の其有たせ給ふ主宰なるが故に其御尊さも譬くへ無く御在す由也是を以て神代紀に大日靈貴とも大己貴とも持に貴の字を塡られたり然れば持は其行事に依れる正字貴は其神德に依れる義訓なり考に牟遲は毛知の轉にて此に持と書る如くにて大名持と云事なり」と云れたるぞ謂れたる又考に凡て古名の弘く長く聞ゆるを擧れと爲つれば天皇は宮所を遷し給ひ御子無き后又御子等は御名代の氏を定められ又名兒名服妹など云萬葉二に大名兒など有も名高き山の美詞人に對ひて那牟遲と云も名持てふ言にて美る稱なり斯て此命は天下を作り治め坐給へる御名の世に勝れたれば大名持と美稱へ申せるなり」と有を記傳にも引用ひられたり然れど有は末の義なり然れは大穴持命と申奉らむぞ主張たる此大神の御名には坐ける古事記に御父大神の御命に爲二大國主神一と有れは打任せて其御名の主たるが如く思ゆれども此詞及神名式共に大穴持命と被載又出雲風土記なとにも大穴持命と耳記せるは此は殊に其御行事に依て稱へ負せ奉れるなれば此大穴持命と申すなむ主たる御名なる可き此大神の宮の事下に八百丹杵築宮爾靜坐支と有る所に委しく云べし尚此大神の御名共をも此に因に說奉ら將欲かれども下に倭大物主櫛𤭖玉命と有る所に並へ說奉らむを其所に合せ考へて其委しき由をも曉る可き著なり

○二柱神乎始天は右の熊野杵築兩神宮を始と爲てなり神名式に出雲國意宇郡熊野坐神社名神大出雲郡杵築大社名神大と見え風土記には熊野大社杵築大社と有て城內の神社三百九十九所の最首として甚も尊く並無き大神宮なるが中にも殊に熊野は神祇令義解にも出雲國造齋神と有て凡て正史に熊野は先杵築は後に擧けられ勳位も杵築よりは一等進み給へるを何時の亂世よりか斯有初けむ國造は杵築大神に耳仕奉りて熊野大神を齋奉る可き由緣を知す成れるより人も

杵築有を知て熊野有を知らず其御社も大社と申す事耳は傳りながら並々の社の列に渡らせ給ふぞ味氣なく甚も畏き事也ける文德天皇實錄に特擢出雲國杵築兩大神ニと有を自餘の社と同等ならむには特擢と有るに打合ざる者をや紀傳十四に國造齋神と云ふに熊野を指なり神賀詞に依に出雲一國の神々に悉く彼國造此を拜奉る中にも熊野を第一と爲る故に然云るなる可しと有ぞ謂れたる此大人の說定りて普く人も熊野大神の實に御在す所由を知る事としも成れゝば實に其事の實有しも延喜の御會なくとも古きに復るべきを其大神の國造と有ないに然る事をも思疑ずで居ることそ淺ましとも氣疎かりけれ○百八十六社坐は神名式に出雲國一百八十七座大二座小百八十五座と有は右の兩神宮をも列たる員數なるが此に百八十六社座と有からは延喜よりは以前に奏神壽の事有りし度いなる也右は神名式に載れる天神地祇惣數三千一百三十二座の內に加はりたる數ながら已く三代實錄に元慶元年九月廿五日分遣中臣忌部兩氏人於五畿七道諸國班幣境內天神地祇三千一百三十二神と有れば其より以前の奏神壽の任にて書傳たる也御紀には天長十年迄奏神壽の事を記されたれば其時止ぬるか唯詞は傳へたるかと思ふに然れば貞觀祭式に被載たるは詞は已く改りつる化に措たるにも有べし風土記には合神社參佰玖拾玖所壹百捌拾肆所在神祇官貳佰壹拾伍所不在神祇官と有れば此詞にては二社加はり神名式にては三社加增したる也然れば天平より後に官社に加りたるは僅に三社計りと見えたり○皇神等乎後釋に皇御とは何

の神をも尊みて如此申せる也○今云此事一卷祈年祭詞の下に云り又風土記出雲郡杵築鄉の下に八束水臣津野命之國引給之後所造天下大神之宮將奉與諸皇神等參集宮處と有皇神も此大神に屬る枝神を申せる也乎と云辭は下に志都宮爾志靜米と有る所へ係れり」と有が如し此は其部內の神々を國造の齋ふ齋館の中に招祭るに就て云出たる也○某甲我後釋に姓名と書ずして如此書るは此所にては姓をば申さず唯名計り申すを爲我とは書難き故に如此は書るか又甲字をも添て書るを思へは會禮賀斯と唱るにても有むか己が事を某甲と云も良古く見えたり」と有る此二の中に後考なるぞ允當れりける然るは姓名と有る所にて姓名を名乘れゝば此にて姓を脫(ハヅ)して名を耳云べくも非れば此は某甲とぞ云けらし借此より以下は國造の齋爲る支度を云條なり其大綱を此にて明らめ置べし其は先文に弱肩爾太襷取掛天は謂ゆる木綿襷の事なり次に伊都幣能緒結天乃美賀秘冠利は蘰の事なり次に伊豆能眞屋爾麁草乎伊豆乃席登苅敷天は齋部の消息なり伊豆閇黒益之は御饌天能暇和は御酒齋許母利氏は齋爲るなり志都宮爾志靜米仕奉氏は其齋館に神殿を構て部內の神々を招奉るなり朝日能豐榮登爾伊波比乃返事能神賀吉詞奏賜波久奏は其云々の齋畢て京に上りて神壽詞を奏讀るなり先に此まで辭を擧へ置されば其文斷々へキレヤレこに終に其まを貫く事なお甚難かンめ

る○弱肩爾太倭取掛天は其齋館に招奉て神々に御饌御酒を調へ供る爲なるが如くなれども下文に朝日乃豊榮登爾神乃禮自利臣能禮自登御禱乃神寶獻（奏へ登）奏と有に相照應して思ふに一年の齋の内に其禮寶の神寶を製りて其靜宮の神に捧げ其を神の御寶臣の御寶と爲て天皇に獻るなれば其を製造る料に太倭は取掛るなりけり其は新年月次大嘗等詞の結に辭別忌部能弱肩爾太多須支取掛氏持由麻波利仕奉（禮留）幣帛乎と有に例して知べきなり（此事其詞の下に云るを見合て曉る可し御饌は奉るに稗稻を掛る事は高橋氏文に取二日影一弖爲レ縵以二蒲葉一天美頭良乎卷採二麻佐氣葛一天多須岐爾加氣云々と有り然れば次なる御饌御酒と下なる神寶とに係て見る可し）○伊都幣能緒結後釋に伊都は嚴重に齋清めたる物に云ふ語なり」と有が如し此續きに伊豆能眞屋伊豆乃席伊都閇なども有る皆同じ事なり（都は清音豆は濁音の字なるに取違へて書る事正しからざるに似たれども共に濁りて伊豆と訓べし伊豆能賣神の伊豆にて稜威の事の伊都にには非るなり古事記傳を讀て知べし）幣は後釋に奴佐と訓べし萬葉などに奴佐を幣とも幣帛とも多く書り借（フサ）此は木綿と麻とを云なる可し」と有り借其奴佐は總なり其證は古語拾遺に仍令下天富命率二天日鷲命之孫一求二肥饒地一遣二阿波國一殖中穀麻種上云々所以郡名爲二麻殖一之縁也天富命更求二沃壤一分二阿波齋部一率往二東土一播二殖麻穀一好麻所レ生故謂二之總國一穀木所レ生故謂二之結城郡一（古語麻謂二之總一今爲二上總下總二國一是也）と有る此穀麻共に（フサ）聚て麻と云ひ總と云ふ稱なり（大祓詞講義に奴佐の事を云る處に委しく云り借此文に穀木所レ生故謂二之結城郡一と有に就て木綿は布の類と云ひ總と云ふ外なるが如くなれども結城は別に穀耳の地を云へるより言とれに負るなり）四時祭式大殿祭條に中臣忌部南官人著二木綿鬘一（忌部更加二木綿襷一）と見え大神宮式に麻世鬘（佐レ鬘）圍二尺と有れば後釋の如く木綿をも麻をも用るなるが共に幣（ヌサ）とは云也けり（借此にて嚴重に齋清めたる幣と云事也下なる冠利天と云迄は此の用を云り）緒結は後釋に緒とは結と云から言るにて即木綿麻なり常にも麻をば緒と云り結とは國造の頭の髮に結着るにて謂ゆる木綿鬘なるを如此云成せるは古の文なり」と有が如し後撰集詞書に男の花鬘結ぶとて菊有ける所に乞に遣したりける」と見え拾遺集に人の許へ幣を結て遣すとて能宣「淺からず契結べる心葉は手向の神ぞ知べかりける」と有は此の伊都幣能緒結の例にて鬘の事なるが中古に心葉と云るは鬘の遺制也其は萬葉十九（四十五丁）に足日木乃夜麻之多日影可豆良家流宇倍爾也左良爾梅乎之奴波牟」と詠る其頭より挿華と鬘と一に成て出來たる名なる可し（桃葉□葉に心葉金銅梅花也と有て冠に刺す物なり今も大祭祀には日蔭鬘と共に同じく冠の裝ひと爲れり）○天乃美賀秘冠（利）天（理氐）後釋に此は天之御蔭登冠（理氐）なるを氣字を秘にあやまれる也氣と秘

とは字の總ての形は似ざれ共(ドモ)書に似たる所々有に依て誤れるなるべし 氣の下に登と云ふ辭を訓附べし古書共に辭の字なも添へたる文にも登ノ字なば省きて訓附たる例多し此詞の中にも是御孫命乃朝御食夕御食と申天と有るが如し又假字の下にも辭は訓附る例無に准す 借如此云るは即彼木綿を頭に着る事なり其は御饌の事を天之御蔭日之御蔭止隱座と云る如く空に覆ふ由にて頭に蒙る物をも又に如此は云るなり日蔭鬘と云も日光を覆ひ隔る由の名なる事古事記傳に云るが如し若て思合す可し 此齋隱りの時の種々の事を此に云たる文一事毎に天と云辭を置て界と爲り取掛天津利天刈天支天などの如し無るに緒結の下には天の字の無きは次へ屬きて一事なるが故なり能々心を附くべし と見えたり此說實に然る言なり 此は持統天皇御紀に華縵(カツラ)進二于殯宮一此曰二御蔭一と有を證據と爲て說れたるなれめり萬葉二十三丁に人者縱(ヨシ)念息登母玉蘰影爾所見乍不所忘鴨と有も鬘を着るを蔭と云を影に用させ給へるなり十四に安之比奇能夜麻可都良加氣麻之波禰母衣可多敷可氣乎於吉夜可良佐武」と有る加氣は懸なるが下なる可氣は蔭にて右と同じ 然るを冠辭考には先の歌の玉縵を懸ると云を影に云ひ懸して續けたり」と有れども其は十二に玉蘰不懸時無戀友と續けたる一途に依て定められたる說にて懸は其蘰を着るに就て云ひ實は其を着たる形に依て續けたるにて此と彼と別々なる事を思はざりし說也倍又蘰木の枝葉ながらなるを蘰と云ふ事有り古事記玉垣宮段に八〓と有は〓の枝葉ながらなるを云り又萬葉七に片〓此〓攀蘰者今年與之〓(ナラムカ)と有り 冠は中古以來冠の制出來て後には上世の如く木綿鬘を直に頭に結着る事は無して白糸或は青糸を八條或は十二條に結ひて冠の左右へ打垂れて此を日蔭鬘と云れは其如く爲つらむを猶詞は、上古の任に用ひて如此用語に云りし者なり旣に持統天皇御紀なる華縵も御冠に裝束ひ奉らせ給ふ料なるを思ふ可し借上古の冠は右の鬘にて在しを後に冠出來ては其上に裝束ふ物となれるなりけり 菅の鬘の說當らず後釋に云く鬘は加賀布理と賀を濁り布を清て讀べし萬葉は假字の清濁を正して書るに五卷に可賀布利二十に加我布理など有ればなり ○伊豆能眞屋 伊豆は例の嚴重に忌清めたる意眞屋は齋屋にて國造の齋館の中にて御饌御酒を調ふる屋を云なる可し其は大嘗祭式齋郡條に所作八神殿一宇長四丈廣一丈 稻實齋屋一宇長二丈廣八尺云々 並以二黑木及草一構葺壁蔀以レ草と有る八神殿を此詞の志都宮と稻實齋屋を此詞の伊豆能眞屋と心得れは甚分々しき者なり 然るを後釋に眞清まはれるに就て眞屋と云むは然る事なれども然云るに無を思へば若くは眞字は直の誤にて宮直の意にて直部の屋には非るか然らば熊野に在る宮直に宿直爲る屋を清めて宿直爲るなり此は必見に云有なりと有れど此は思議られし說なり 其制樣は伊勢の直會殿春日の拜屋などの如く四阿(アツマヤ)の狀なりけらし歌に四阿(アヅマヤ)の兩下(マヤ)など詠て同じ狀なる者なり然れは右の四阿造りの齋屋は元より壁蔀等も非れは時々に柴青草等を以て圍ひ黑木の屋なる可し斯れは此に國造の齋隱ると云には有べからず齋

の中此にて御饌御酒を作りて志都宮の神々を祭りて奏神壽の支度を物爲るとの義なる事著き者なり然れども尋常の厨とは別なり右の二種は更なり朝廷へ奉る禮代物をも合せて此にて調進る事と見えたり和名抄に四阿阿豆萬夜と有るは周禮注に四阿は四柱屋也と見え文選注に四阿屋四垂也と有る字を用ひたるなり江次第には字介と見えたり同抄に雨下萬夜とあり其制同じ狀なるは上古の齋屋の雨下の狀なるに當たる訓なる可し然れば四阿は聚齋屋(アツマヤ)にて雨下を二合せたる名なるを後に濁りて東屋の如く呼る者なりけり○庵草平考に人氣に穢れぬ遠き野山の草を用る故に庵草と云なり凡て此類の庵は生れながらの意なり」と見え後釋に今も神事などに用る薦をば庵薦と云りなど有が如し但庵は人氣に穢れぬ云云にては有べからず荒山荒野などの荒は疎(アラ)にて人氣に疎く遠き所に在る草と云事なり○伊豆能席登茹敷天支は庵草を茹り席に綴て敷なり和名抄に薦和名古毛席也と有れは菰を以て製造る物なり又菅莚なども云れば此庵草は菅の事を云か偖此は國造の御饌御酒に供奉る席の料なり茹は上の庵草より照り應(ア)ひ敷は席の語なるを如此く錯綜せる文の巧妙なる事譬るに物無し席は身代(シユロ)と云事にて身を牟と云は身實(ムザネ)とも身(ミ)の代(カハリ)を質(ムカハリ)とも云に同じく代は苗代などの代にて物の落着て居る位置を云○伊都閇黒瓮之後釋に伊都閇は神武天皇御紀に嚴瓮此云二怡途背一と見え古事記書紀萬葉等に忌瓮とも有り其外も古に瓮と云る多し奈閇は魚菜瓮なり古魚をも菜をも奈と云る其を煮る器を云り仲哀天皇御紀に云々爲二御厨一此云二彌那倍一と有れは古より奈閇と云器も有しなり以上採要と有り偖其神武天皇御紀の文は夢有二天神一訓之曰宜下取二天香山社中土一以造二天平瓮八十枚一並造二嚴瓮一而敬中祭天神地祇上嚴瓮此云二怡途背一と有る御文なるか其下に名二其所置埴瓮一爲二嚴瓮一と見え次に天皇嘗二其嚴瓮之粮一と有れは嚴瓮は食を炊く器にて其は埴を以製造る事所知たり後釋に云く考に金鍋の略也と云れたるは如何和名抄に釜賀奈閇と有こそ金堝の山の名には有れ又鍋賀奈々閇と有る是金魚菜堝(カナナヘ)の由也此等を以て奈閇と云は金堝の略には非る事を曉る可し右の御文の間に天皇甚悦乃以二此埴一造二作八十平瓮天手抉八十枚嚴瓮一而陟二丹生川上一用祭二天神地祇一と有を今此を分別るに八十平瓮は御饌を盛る料天手抉は甕にて酒を盛る器嚴瓮は右に云る如く御饌を炊く堝なるなり此次に云事を見合せて曉る可し黒益之考に益は借字にて儞なり薪して燒けば黒くなる故に飯など燒事を如此云るなり田舎人などの鍋尻黒ますと云是なり偖此は神御食又は吾齋食をも云べし」と有る實に動くまじき說なり後釋にも此說を諾なはれたり又後釋に黒益之の下に天と云ざるは次へ續きて一事なりと云はれたれど然らず此にて一旦次の天能甕和にも一章にて齋許母利氏は眞屋より續く詞と天能甕和爾齋隱にて酒を諸(ツム)る事とを一に兼たる所なり偖此黒益之の語は一年の齋の間に供奉る事の意

慢まざるを云なり古事記大國主神に於二出雲國之多藝志之小濱一造二天之御舍一而水戸神之孫櫛八玉神爲二膳夫一而獻二天御饗一之時禱白而櫛八玉神化レ鵜入二海底一咋二出底之波邇一作二天八十毘羅迦一而鎌二海布之柄一作二燧臼一以二海蓴之柄一作二燧杵一而鑽二出火一云是我所レ燧火者於二高天原一者神產巢日御祖命之登陀流天之新巢之凝烟之八拳垂摩弖燒擧地下者於二底津石根一燒凝而云々と有に彷彿たる文意なり然れは黒益之は黒まする辭なるにも其庶志の辭に増い義を兼たらむも知べからず○天能瓺和備の天は唯に美稱る事には非ず天の物の麗はしきに擬作れるを以て添云る者なり瓺とは天に云る天手抉と一物なるが手を以て捏ね製れるか其形容の嚴めしきを以て號る所なり後釋に云く和名抄に本朝式云瓺美加辨色立成云大甕和名同上と見え古書に美加には常に甕字をも用ひたり諸の祝詞に御酒者甕上高知甕腹滿並氐など有借瓺和と云も亦瓺にて和に別に意有に非ず三輪の和と同じ三輪も酒を釀る瓺の事なり萬葉二に哭澤之神社爾三輪須惠と有にて知べし然れば美和と云も即美和の略にても有べし又今世に一斗計り入る大鍋を斗那和と云ふ其和も同じく聞ゆれば和は甕又大鍋などの類の器の惣名也べし借此は御酒の瓺一を云て其餘の種々の御食物をも兼たる文なり伊都閇黒益之と云は御酒耳の用に非ず御食物など煮炊くをも云る其より一聯の文なるを以知べし上文以上今按ふに一聯の文の如きは御酒も本は御饌に次て後に釀る物なるか故に錯綜したる者にて伊都閇より見れば御饌を主と爲る如く天能瓺和より見れは御酒を主たる如く共に持せて作る文義の妙なる事今云限に非ず若て伊都閇は齋清めたるを瓺には下へ廻して齋の言を用ひて國造の齋屋に忌愼める事と兩方に響かせたりと見ゆ○齋許母利氐は上に伊豆能眞屋麻草乎伊豆能席苅敷國造の一年の齋に籠りて郡内の神祇を齋奉るを云也後釋に爾齋許母利氐と云る爾は其瓺の邊にと云ふ意には非ず御食御酒などを調へなど爲て其事に齋籠ると云なり齋籠る所は伊豆能眞屋なり考に爾を則(ニ)と爲て瓺の邊に齋籠り居る事に注せられたるは允當ず[illegible]に引れたれども其[illegible]と訓事にて昔より[illegible]なり此篇の和と云は古今集より以來の事にこそ有れ其上[illegible]里などにこそ[illegible]など其[illegible]と云る例[illegible]と有り謂れたる言なり○志都宮爾後釋に神を鎭奉る宮なり借此に云々皇神等乎と有より連れて出雲一國の神々を請奉る宮なり然れば此宮は常の宮には非で此齋の爲に新に造れるなる可し」と有る其如くにて國造の齋籠の中なる神殿に

て此に仕奉る料に伊豆能賣旦等云々の事は有なり借神を鎭奉る宮なれは志都は用語なるを如此體言に云る例は萬葉三（三十二丁）に大汝少彦名乃將座志都乃石室者など有に同じ事なり（考に志都宮は本よりも騷がしからぬ神宮云々と云たる閑なる宮と云には非る由後釋に辨られたるが如し然れども伊都宮を誤れるにも有べしと有は如何なり）○志靜米仕奉氐は上に擧たる熊野大神杵築大神二柱を始て百八十六社の神々を志都宮に鎭まり令坐奉りて一年の齋の間仕奉るを云ふなり（後釋に志靜米は或人志都米を誤れるなりと云り然る可しと有り）如此く爲て天皇命の大御世を手長の大御世と堅石に常石に齋ひ新奉り其齋一年の間に禮代の神寶を調備へて新申す國造と守奉る皇神等の禮代と成すは此に依てなり（此迄の文は前に國造にされ奉り負幸物を賜り還りて其國にて齋爲し時の事を云なり）○朝日能豐榮登爾此は朝廷に參向ひて神壽詞を奏す時を云なり臨時祭式に凡國造奏二神壽詞一日平旦神祇官試二國造奏事一と有れは其事畢りて後なれは平明には非されとも朝の間にて在る事なるが故に如此は云也○伊波比乃返事能神賀吉詞奏賜波久登奏考に此は初に朝廷に召上せられて位及負幸物を賜はり大神等を齋奉りて天皇の御代を賀奉れと云ふ大命を受給はりてその齋事畢りつれは彼大命の復命と爲て神賀詞を申すと云なり」と云れたるは寔に動まじき說なるが猶其本を云はゞ此奏神壽の大較凡ては天穗日命の故事を擬せる者なり其は一に任二出雲國造一は有ゆ神等を國形見に令降給ふに比(ナラ)ひ二に賜二出雲國造負幸物一は其出立に臨て兵器及祿物を賜ひし事の有りけむを擬び三に國造の國に在て齋爲て皇神等に仕奉る事は天夷鳥命などの大國主命を媚鎭め給ひしに容(カタド)り四に神寶を擎る事は大國主命の平國廣矛以下の神寶を皇御孫命に献給へるを天夷鳥命なと取持し乍も新禮寶を献給ひけむ例を引き五に神壽詞を奏す事は和順ひ給へりし大神の御言を取傳へて復奏し又己命の大神を齋ひて皇御孫命の御世を眞幸く令在奉らむと申給へりし事の如く物爲る事にて凡ては神代の趣を摸擬びたる者なり借返事とは使人の還て申言と云ふ意にて加幣理は其使に係る言なり」と記傳にも說れたる如くなれば天穗日命の天に還上りて申上給ひし故事の趣を立て後世に至る迄も被行る義なるなり（此は此詞を讀來ふるに哭日と有る事なり此義を知す爲て此を讀とも終に盡さゞる所有む物そ此次に返事申給久と有を思ふ可し）考に此神賀詞は其大神等の御詞に國造が言を取合せて申なりと有は誤(ヒガコト)なり後釋に此吉詞は唯國造の申すにてこそ有れ神等の申給ふ心は無し

彼志都宮に鎮奉るは此詞を此神等の申給ふ故の事には非ず此齋は朝廷の重き御祈を申す國造い世の限の重き齋なるが故に國中の神等をは請奉るなり」と有る其宜し（又後釋に下に神乃禮白利と有は此所の序に云れたる如く穗日命より次々國造の先祖の神等より奉給ふ穗代なればと云 此吉詞も穗日命より代々の出雲氏の神等の申給ふ意を述たりとは云ひも爲べけれども彼志都宮に鎮奉るに出雲一國の神等なれば後神乃禮白利と有には預らぬ事なるや」と有れども熊野大神は御祖に坐せば格別出雲一國の神々は皆大國主大神の支族なるが多ければ神乃禮白利に於て妨無し）後釋に又云く此迄は此吉詞の序の如し

高天能神王高御魂神魂命能皇御孫命爾天下大八島國乎事依奉之時出雲臣等我遠祖天穗比命乎國體見爾遣時爾天能八重雲乎押別氐天翔國翔氐天下乎見廻氐返事申給久

高天能神王は天祖と云むが如し高天は天原の事なり常に高天原と云れは然有ぬべきを高天と耳云へるは天上の事には用無く輕く天と云て事足ぬ可き所なればなり（後釋に高天は高天原なり但原を省きて高天と耳に云る例無ければ疑無に非ず然れど原字は脱たる者とも聞えず又理は原を省ても云つ可きなり」と有り但心に落着れぬ如き說様なり）神王の王字は舊くより美於夜と訓來りて何れの本も皆然り然れは神王の字を合せて迦牟美於夜と訓へきなり定に此高御魂神魂命は謂ゆる神魯伎神魯美命に坐て八百萬神の御祖と坐せは必然申す可き理也神代紀に皇祖高皇產靈尊と見え顯宗天皇御紀なる日神月神の御託言に我祖高皇產靈尊と詔せ給ひ古事記に神產巢日御祖命と有る此は古書に御母を御祖と申せる例なるにて女祖の義なれば少異なれども出雲風土記に御祖神魂命と有などは其御末の神に對へて祖と云るなれば上の例なり偖此は皇御孫命と次に申すに對へて置たるなり（神王の字外に見當られども神等の祖と坐字書に王ハ主也と有る意にて書れたるなり其は八百萬せば其に主宰たる意を含みてぞ作（カヽ）れけらし此神王の字を賀茂翁の考に加夫呂伎と訓れたるを鈴屋翁も加牟漏岐と訓附けられて後釋に加牟漏岐なる神王と書るは夜の寫誤なる可し其は本神祖と有けむ祖字を神に誤れるを又後に神々と書る々字を王字の草書王と見混へて終に神王とは書るなり云々と云れたれども迂遠なる說なり若加夫呂伎にも加牟漏岐にも有むには既に加夫呂伎熊野大神と前に假字書に爲るを今此に神祖とは書へくも非す其上神魯伎は高御魂命に坐し神魯美は神魂命に坐を二に爲て加牟漏岐と云ては理に違へり平田翁は其意有けるにや古史徵に引れたる此詞の神王を加夫呂と訓れたれど其根據有に非れば依難かり）○高御魂神魂命能此にては正實の御名を擧け下には稱奉る御名を以て是爾親神魯伎神魯美命宣久と書る文法奇異に微妙也（此事下に委く說へけれども先此事を心留め置べし然らざれば文意貫きて悟り難けむ）後釋に此所にて句を切て心得べし此能は次なる事避奉へ係れる辭にして皇御孫命へ續け云ふ能には非す此の文は高御魂神魂命能天下大八島國乎皇御孫命爾事避奉之時と云事なり（以上要）と有は然る言なり（此は既に皇御孫命とは天照大御神の御子の御子を申せる御前にて高御魂神よりは遠けれど後世の天皇をも御孫命と申すが如く斯く云て可なりける」と有に對へて云れたるなり又後釋に云くすに此能を皇御孫命へ係て心得られたるは甚しき誤なり

り事廣く云は古意には有れども某神の皇御孫命と申せる事は總て例無き事なり」と見えたり　○皇御孫命爾天下大八島國乎は天下大八島國乎皇御孫命爾云々と續く意なる事上に云るが如し　此皇御孫命と申す天忍穗耳命を申せり此を以ても皇孫の孫は子孫の孫に非る事を知べし次なる二所に出たるも御天降より前の事なれば邇々藝命を指たるに非ず　備此に天下大八島國と重複たるは次に天翔國翔氏天下乎見廻氏云々豐葦原乃水穗國波云々と事を別て述る始なればなり　古文には如此く人の心の及び難なる所に蘊める妙處有り心を着へし　○事避奉之時後釋に事避は決めて後の誤にて事依なる可し必事依と云はては協はぬ所なり云々　若此を事避と爲る時は高御魂命の遣給ふに成なり然るを初に事避は大名持命の避奉りしなるを其事は次に云へば此には其御名を省るなりと云れたるは甚しき強説なり大名持命の避給ひし事は次に在れば此には云へくも非ず假令後の事の大凡を初に先云置くとも然らば上に大名持命乃と云はては理聞え難し此御名は次に云へば此には省りと云れたるも強説なり次に云へばとて此にも云はては事避は誰か避けりとか爲む更に聞えぬ事なり然るを理足はずとも聞えざるは古文の妙なるなりとは如何なる事ぞや　と有は決めて動くましき説となむ所思たる然るは下に令事避支と有は大穴持命の主領給ひし國土を皇御孫命に令避奉給ひしなれは事避と云ぞ允當れる語なるを此は高天原より皇御孫命に此國土を依せ給ふ所なれば事避とは云まじく決めて事依なりけむか下より混ひて此は誤れる事著し　同じ祝詞式の中なる祝詞ながら其記し留らるゝ時世に依て其書様皆異なりと雖も一詞の中に其訓の同じからざるに同じ文字を書て或佐斯とも佐利とも訓を異に爲る如き煩さき事は右に無き事なり平田翁の古史徵には此なるを事依と有は後釋の説に依て改引れたるなンめり　○出雲臣等我考に此臣は尸なり」と見ゆ然れは出雲は氏國造は職號臣は尸なるなり此事此卷の首に委しく云り　姓氏錄に出たる出雲氏五有か中に臣の尸なる四有て宿禰の尸なるは唯一有る耳なり但此事は他國に散在せる支派なるを云(イフ)なり　○遠祖後釋に今本に遠神と有は祖の字を神に誤れるなり」と有は實然る言なり傍に神の字に於夜と訓の附たるは誤らさりし以前の訓の遺れるにて甚愛きを幸なる哉近世に刻本と成たる出雲本には正しく遠祖となむ傳はれりける　按に遠神祖此を今本に遠神と有は後に祖の字を落せるなり萬葉に遠神我大君と有は天皇は即神に御在しし坐し入に遠き山にてこそ云へし此には遠神は山無しと遠き神祖の字なは遠神祖と歌にも詠れば此も遠神祖なり」と有どとも儀なり後釋に祖の字の落たるには非ず遠神祖と云事も萬葉の歌には見えたれと此には唯遠祖と云なぞ穏なる」と有ぞ宜き　○天穗日命乎此は謂ゆる天照大御神と須佐之男命と二柱神の御誓に因て成坐る五男の中に天忍穗耳命に亞て出坐て天津日子根命には御兄に坐り備此時の御子の事正史の傳る所五柱と有れとも實は三柱に坐るを亦名より混ひて五柱とは訛傳へたるなる可く又其成坐りし物實も玉よりは男神劒よりは女神と傳たる事なれとも神代紀瑞珠盟約章第二ノ一書に璵に依て三女神生坐し劒に依て五男神の生坐ると有る傳ぞ事實に相應ひて良はしく聞えたる　其は右の三女神は第三一書に即以二日神所レ生三女神一者使レ降二居于葦原中國之宇佐島一矣と有りて神名式に豐前國宇佐郡八幡大菩薩宇佐宮比賣神社大帶姫廟神社と有る此比賣神社は三女神に坐るを玉依姫命と稱奉れるを思ふ可し猶

予か諸に考定たる說有れども其は日本紀傳に註す可ければ此には謂
せり又右の男神等の[illegible]に依れる趣は忍穗耳命の御子天火明命の子天
香山命は八咫鏡を鑄作給ふ此は鏡なれども同じ鐵を以て鍛ふ故なれ
ば其由無しとは云へからぬを天津日子根命の子天目一箇命は鍛冶に
祖神と坐て[illegible]刀斧及鐵鐸を作給へる
等各其因有るを以て讀(シン)こす可し倍右の五男神と申す實
は三柱に坐を亦名より混ひて五柱と傳りたるらむと
所思しき由は紀記及姓氏錄共に天穗日命天津彦根命
の御子の神等及裔孫の氏々迄も載たるに活津彦根命
熊野大隅命には御子神等は更なり御裔の氏々の一た
に被載ざるを強て云はゝ此國に被降ざりし故に其傳
無しとも云へけれとも天津彦根命活津(カ)彦根命は決く
同神也然るは天と云と活と云とは同し在る可き犢な
る說有て御門祭條に云る如くなれは也但祀にも記にも其[illegible]姓と云內にも各其成出坐る次第に殊なる子細有て昔より人の意を入れざる古傳を我心を以て如此く三柱に定むる事甚異こく身も[illegible]さはる[illegible]とも古の正實を說明し奉る我任と爲ては[illegible]しきを措く可に非れば何所迄も考索む可ければなり我唯天地の神[illegible]に糺して避奉る心無を以云ふ熊
野大隅命は決く天穗日命の亦名なり然るは熊野大隅
命と申は其神の天より降坐て留らせ給へる地に就た
る御名なるか別神の如く成れりしなり倍天穗日命は
天より此國に降著て大國主神を和し鎮給へれは此神
の事跡なむ多く在る可を風土記に一だに載ざるは此
國にての更名を以て記せるなり同記出雲郡伊努鄉ノ條に國引坐
意美豆努命御子赤衾伊努意保須美比古佐倭氣命と有

る赤衾は發語にて伊努へ係れるなり意保須美は熊野
大隅の大隅と同しけれは別神には非る也亦古事記に
熊野久須毘命と有て其下に大年神娶ニ神活須毘神之
女伊怒比賣ニと有と全く同神なる事更に疑無る可き
者なり意美豆努命は須佐之男命なる由已に上に說る如し須佐之男命の御力に取ても御子に坐せは其御子と云事は謂れ無に非す
其天穗日命と申す名義を考るに穗は稻穗にて日は
飯なる可し天照大御神天上に坐て保食神の身より化
出たる穀物を天熊之大人を以て御使と爲て令奉め給
ひける時に始て飯に炊きなど被爲たる御功に依れる
名なるにや然所思る由は其天熊之大人と聞ゆるは其
子健三熊之命ならむの說有て遷却祟神詞の下に註る
か如くなれはなり但熊野大隅命の熊野は地名天熊之
大人の熊は神稻(クマシネ)及懸久眞(カケクマ)などの久麻にて稻穗の事な
り神代紀に大背飯三熊之大人と有る大背飯(オホセヒ)は飯爲る
由以て冠らせたるに思合す可し但保[illegible]を以て云時は保食神の事は彼神々の生坐て間も無き頃なれば天穗日命の未幼稚く坐む其さへ有に其子と有む神の御使に葦原中國に御[illegible]降りて[illegible]へくも非れは彼は此に[illegible]名の似[illegible]たる耳こそ有れ[illegible]にて由無しと云へけれども忍穗耳命の御子天火明命有て其[illegible]天香山命は大國神須佐之男命には御曾孫なるに天石窟隱の時に[illegible]を作給へると天津日子根命の子天目一箇神の[illegible]を作給へると此等の例を引かば[illegible]る可からむ故そ凡人に比へて古[illegible]を[illegible]ナミ)する事勿れ然れは天穗日命熊野久須毘命同神にて
其女伊怒比賣の大年神の后神と成て向日神を生給へ

るなと決めて幽深き由有る事なりけり然るに記に大年神又娶二香用比賣一生子御年神と見えたれども向日神社記に向日神者大歳神娶二神活須日神之女神須治曜姫命一生子也と有れば此を合せて伊怒比賣と香用比賣とは同神にて向日神と御年神と亦同神なる事所知る偖其伊怒比賣の御母を索るに風土記（秋鹿郡伊農郷條）に出雲郡伊農郷坐赤衾伊農意保須美比古佐和氣能命之后天甕津日女命云々と有るにて著きを亦名は神名式に出雲郡伊努神社神魂伊豆乃賣神社と見えたる其即御禊段なる伊豆能賣神に坐て即水戸神なり然れは古事記（大國主神鎭坐段）に水戸神之孫櫛八玉神爲二膳夫一獻二天御饗一云々と有る其實は天穗日命伊豆能賣命二神の孫なれども海底に入る事に就て專御祖母と坐す水戸神の方の御靈を被蒙たるを以て父方の祖神を被記ざるなり（予も此に至る迄は其櫛八玉神の天穗日命の孫神なりけりとは得しも心着さりつるに近年レ疑ひ一時に消亡て白日青天を見ると云ふ思ひそ爲る然れど人は信るや信すや）或説に風土記（飯石郡條）に飯石郷伊毘志都幣命（イヒシツメノミコト）天降坐處云々と有る其神必天穗日命なる可し否鎭命と聞ゆると云るは然る説なり又同記（熊野郡條）に野城驛依二野城大神坐一故云二野城一と有て神名式にも野城神社と出たるか風土記よりは後神名式よりは前に熊野郡より分りたる能義郡に天穗日命神社有り此に因て野城大神と申すは天穗日命に坐事著し然れとも風土記には本の天穗日命と申には拘らす其神の此國土にて負せ奉る御名を以て傳へたり其心を得て其神世の跡を伺ふ可くなむ尚此神の鎭坐す社の事なと下に委しく註へし（又伊勢國の度會郡の邊は天穗日命の子孫の彼住し故其其の多在るに湯木神と云か有も著くは出雲の本居より移せる名なる可し尚其事は別に云へし）

○國體見爾遣時爾は天下大八島國の風土を見せに被降遣たるなり（此は征伐の御使に非る事此文の續きを見て知べし此事次に委しく逃ふ可し久邇知祭神詞の註にも且々云りき考に下津國の有狀を見に降し給ふにて其は主とは大國主神の狀を見又凡て荒び猛ふる諸神の樣を見て治順へつ可しや否を見取て事を令成む爲なり故國體と書り」とあるは委しきに似て麁し此は大國主神に係てならす何と無く風土を見せに降し給へりし者なり）景行天皇御紀に遣二武内宿禰一令レ察二北陸及東諸方國之地形（クニカタ）且百姓之消息一也と見え又下に遣二吉備武彥於越國一令レ監二察其地形嶮易及人民順不一と有に同し心得を以て思合す可し偖其風土を國體と云事は出雲風土記に國之大體（オホカタ）首震尾坤東南山西北屬レ海と見え又其文中に吾敷坐地者國形（クニカタ）宜者とも國稚美好有二國形（クニカタ）如二畫鞆一哉と見ゆ（然れば風土記の訓は國形文なるを思ふ可し唯國體と云時は土地の嶮易なとを云事となれども國體見と云時は其土地に住る人物の消息をも伺ひ察るを云なり又右の御紀に日本武尊を熊襲國に遣しし所にも十二月到於熊襲國其消息及地形之嶮易と見え天武天皇十三年御紀にも令レ看二地形一など有り）猶神武天皇御紀に皇輿巡幸因登二腋上嗛間丘一而

而廻₌望國狀₋（クニノサマテ）云々と有も國體見と同義なり後釋に凡て事の有狀をも加多と云ひ阿理加多とも加多知とも云は古言なり」と有に考合す可し又萬葉一七丁に天皇登₌香具山₋望₌國之時御製歌山常庭村山有等取與呂布天乃香具山騰立國見乎爲者と詠せ給へるも高きに上て國中を見放る事と思ふは俗意にて其所知看す國中の風土を見行し察らめさせ給ふ意にて同卷十九丁幸₌于吉野宮₋之時の歌に高殿乎高知座而上立國見乎爲波云々と有も同し又神武天皇御紀に大和國に國見山の號有り此等も天皇の上坐て風土を見明らめ給ひし故の名なる可く又諸國に國見山國見丘等の地名此彼有り此等も國守なとの部内を見る料なりし古趾なり萬葉三卷及九卷には國司のなも國見と詠るなと思合せて悟へし〇天能八重雲乎押別氐例は神代紀正書及一書共に排₌分天八重雲₋稜威之道別道別と出たり神武天皇御紀には披₌雲路₋と有る披の字を押別と訓たり天翔國翔と云は殊に稜（イツ）々威（イツ）々しき狀なるを以て押別とは云るなり輕く見る事勿れ大祓詞と遷却祟神詞の下に委しく註る事共を此に考合す可なり〇天翔國翔氐は鳥なとの飛翔る如く虛空より往來ひ給ふなり神名にも天日鷲翔矢命姓氏錄に見えたり古事記日代宮段に於是化₌八尋白智鳥₋翔天而飛行と有る傳に引れたる同記高津宮段に比婆理波阿米邇迦氣流仁德天皇御紀歌に破夜步佐波阿梅珥能朋利等彌箇慨利なと有る

に思合す可し又其下に亦自₌其地₋更翔天以飛行と有る傳に萬葉五三十一丁に久堅能阿麻能見虛喩阿麻賀氣利見渡多麻比と有る例を引て此なるも阿麻賀氣理と訓れたるは然る言なり近江國馬見岡神社地に祓れる四月祭祝詞に天照命日乃眞仁齋七奉利園乃眞保眞止崇奉と有る天翔は諸語にて翔來と云に續けたり此神記の事此卷の末に云べし又萬葉四に天翔故輕路從と有る天翔の字は此と異なり二卷及十一に天飛也輕と連たるに依て訓たるを知べし此は神等の往來ひ爲給ふ事と聞ゆ記傳の右の細註に中古の物語書なとに死たる人の靈の此世に物爲る事を天翔りて云々と云り空穗物語俊蔭卷に天翔りても如何に詮無く見賜ふらむと有る類なり」と云れたる如きも人の靈も神の許に到れは然物爲る事の古傳有て神代より言傚へるなる可し源氏物語帚木卷に天翔り云々と有も右と同しきなり歷朝詔詞解に續紀三十四十五詔に眹き天翔給天見行志退給比捨給比將夏比給本物曾と有る下に此は亡靈の此世に往來ひ來事に云り」と云れたるは然る言なり古今集物名に翔りても何をか靈の來ても見む云々と有も右の例なり〇天下乎見廻氐返事申給久は天下の風土を巡（ミリタ）察して復奏し給はくとなり皆天穗日命の御事を稽ふるに古事記に爾高御產巢日神天照大御神之命以於₌天安河之河原₋神₌集八百萬神₋集而思金神令₋思而詔此葦原中國者我御子之所知國言依所賜之國也故以₋爲於₌此國₋道速振荒振國神等之多在₋是使₌何神₋而將₌言趣₋爾思金神及八百萬神議

白之天菩比神是可レ遣故遣ニ天菩比神ニ者乃媚ニ附大國主神ニ至ニ于三年不ニ復奏ニと有て神代紀及遷却祟神詞等の如く其子武三熊之大人を追て被降遣る事の見えずて直に天若日子を被降る事を被記たり然るに天穗日命の復奏し給へる事の見えさるは其實は記し漏されたる者なり 記傳に天穗日命の復奏し給ひしは三年も過て後の事なれは此記などには其間甚久しくて還給はぬ私を云て即次の天若日子の事に移れる故に此神の復奏し給ひし事をば混らかして傳漏せるなる可し」と有は然る言なり 此神の復奏されしは天若日子の降れる後なる事云も更なるか彼神の事は見認ずてぞ天に復奏されけむ然らすは彼神の忠誠ならざりし行狀を見知らぬ狀に措き給ふましければなり且此神の其を見免し容イレ給へらむには其罪天若日子に同しかれは天神の其を罰めさせ給はすと云理の非るをも思ふ可し 其總ての論は此より次々古書を載擧て其に云むを先其件々にも其異同を校合せて且々云論さむとす 神代紀ノ正書には右の事を故高皇産靈尊召ニ集八十諸神ニ而問之曰吾欲レ令レ撥ニ平葦原中國之邪鬼ニ當遣誰者宜也惟爾諸神勿レ隱レ所レ知僉曰天穗日命是神之傑也可レ不レ試歟於是俯順ニ衆言ニ即以ニ天穗日命ニ往平之然此神佞ニ媚於大己貴神ニ比ニ及三年ニ尚不ニ報聞ニ故仍遣ニ其子大背飯三熊之大人亦名武三熊之大人ニ此亦還順ニ其父ニ遂不ニ報聞ニと有り 遷却祟神詞も亦此に同しければ古事記の方より此傳は詳なれとも此下に天國玉之子天稚彥是壯士也云々此神亦不ニ忠誠ニ也と有る亦の字は天穗日命の御方に取ては甚味氣無し此時に忠誠ならさりしに依て天譴シキタメを得たるは天稚彥一人なれは此神者とこそ有へけれ然らされは天穗日命の已に忠誠ならさりしか天稚彥も然爲しに成て此神の國體見に降坐て立給へる功も何も虛事と成れゝはなり又往平之と有れとも征伐の御使には非す又佞ニ媚於大己貴神ニと有る佞の字なとは餘りなる事也凡て古傳は有か隨に素朴なる物なるを漢文に被記ると爲ては斯る推量の文アヤ飾有て事實の正を失ふ業なれは深く心を着へくなむ有ける 一書には下に天穗日命の事有れとも正書は此に終めて此神父子の事を載さるは脱たるかと思ふに然らず此神父子共に忠誠ならざりつる神と見て略かれたるなる可し但下に使者稲背脛と有るは大背飯三熊之大人の亦名なるを其か非しか撰者等も知らぬ狀なり 第一の一書には凡て此神父子の事見えす表立たる征伐の御使にこそは非りけれ大己貴神を媚鎮め給ひし此神の事跡を漏したるは遺憾し第二の一書には此神の國體見の事は無して天日隅宮鎮座條に又當レ主ニ汝祭祀ニ者天穗日命是也と耳見えたるは凡て其餘事を遺して記載られさる也 其餘の一書には悉く此神父子の事の見えざるは何れも片成にて全き古傳に非るか故なンめり 遷却祟神詞に

は天穗日之命乎遣而平氣武止申支是以天降遣時爾此神波返言不レ申氐次遣志健三熊之命毛隨二父事一氐返言不レ申と有は神代紀正書に同しけれとも此は國平に次々神等も被降し因に云るなれは唯返言不レ申と耳有て其結ひ無し〔次に又遣志天若彥毛返言不申氐高津鳥殃爾依氐云々と有る毛の字は[illegible]の亦の字に同じ[illegible]なれば天穗日命に係りて叶はざる如くなれども此は甚忠と不忠とに係たるならず返言不申と云一例のなれば健事とは云ひ難し更々上に云るを見合す可し〕斯れは右等の傳々よりは此詞の方負に勝れて美たき正說となむ聞えたる然れは記傳十三〔二十三丁〕に祝詞考を引て穗日命は大名持命に媚附て三年に至る迄復命申さすと古事記日本紀等には有を此神賀詞に如此云るは國造か遠祖なる故に宜しく云成せるにやと思ふ人も有なむか然には非す此傳事右の二記には漏たるか此詞に遺れるなり若二記に見えたる如く終に返事申さすは天若彥に亞たる罪も有へきに然は非て天神祖の詔に大名持命の祭を成むは穗日命と宣ひしは能彼神を媚和せし故なり然天に復命申して終に天夷鳥命布都怒志命を天降して大なる功を成せるも專穗日命の思兼に依れり云々と云れつるそ委き考なりける今又委しく考るに先初に此神を天降し遣しゝは次の天若日子の如き征伐の御使には非すて唯彼神壽詞に云る如く此國の體を見て其狀に隨ひて宜しき樣に令謀むとにぞ有けむかし〔其故は後天若日子を遣しゝには弓矢など賜ひし事有を此神には然る事も無ればなり若征伐ならば最初に此神を遣す所にこそ弓矢などの事は有可業なる偖又此[illegible]命たち給ふ所にも弓矢などの事無は其は既に天若日子の所に出づれば略ける事本より然有べき事なり〕云々と有ぞ甚明亮なる說なりける偖此神の復奏し給へりしは記傳に三年に至る迄待給へとも還來坐ぬ故に終に返事申さて止ぬる物の如く思はれ奉りしなり」と有る其如くにて天稚彥か征伐と爲て此國に降來れるに引変りて天上に復命し給ひしなり偖天上にて天若彥にては終に此國の平くましく思定むる所有か故に其子天夷鳥命に布都怒志神を副て天降し遣して令鎮坐め奉らむと事議り坐る事次に見えたる如し〔此は已に遷却祟神詞の注に此詞を引て委しく云れは其に見合て知る可し〕

豐葦原乃水穗國波（トヨアシハラノミツホノクニハ）晝波如五月蠅水沸支（ヒルハサバヘナスミナワキ）夜波如火瓮光神在利（ヨルハホベノカガヤクカミアリ）石根木立（イハネコダチ）青水沫毛事問天（アヲミナワモコトトヒテ）荒國（アラブルクニ）在利（ナリ）

此は天穗日命の天下を見廻りて其見給へりし有狀を天神に復命し給ふ詞也其は此始に天忍穗耳命天浮橋に御立し坐て豐葦原之千秋長五百秋之水穗國者伊多久佐夜藝弖有祁理と宣給ひ更に還上らして天神に申上給へりしかは天神の御命以て此葦原中國者我御子

之所レ知國ニ依所レ賜之國也故以下爲於ニ此國一道ニ振荒振國神等之多在上是使ニ何神一而將ニ言趣一と詔給へる其任に當りて天穗日命國體見に天降り給へるか故に其國の體は云々と申給へる也（此は古事記に取て云るか神代紀も然り下に其文を擧るを見へし）倭右の伊多久佐夜藝而有祁理と有は此詞に晝波云々夜波云々と有る妖氣なるか其は其物の妖を爲には非す其物に託て妖を爲す邪神の所爲なるか故に天神の御詔には道速振荒振國神等之多在と詔給へり此詞も下に荒（布留）神等乎撥平氣と有て晝夜物に託て妖を爲す事は荒振神の所爲なる事を顯せり神代紀（正書）にも右の運ひにて彼地多有螢火光神及蠅聲邪神復有ニ草木咸能言語一と有を其下には切めて葦原中國之邪鬼と有て萬物の妖は邪鬼の所爲なる事を諦に知に足れり又一書には其妖を云すして有ニ殘賊强暴横惡之神者一と耳有り此にても通えたる事なから相照應す可き文有て其委しきに知ゐるなり（又正書の細書に一云ニ神遂誅ニ邪神及ひ草木石類一皆已平了と有も邪神とは萬物の妖を爲す邪鬼なるか草木ニ類に依託たるをも悉くに誅ひ平たる由なり如此く見されば文意聞取難からむ）○晝波如五月蠅水沸支は白晝には波瀾を立て陸地を浸し溺らす水氣の妖にて如五月蠅は水の飛巡る狀なり水沸支は水の涌上るを云なり（次に夜波如火瓮光神在利に相照して曉る可し古說とは大に異なり）

古事記（石屋戸段）に惡神之音如狹蠅皆涌萬物之妖悉發と有るは惡神の音なひの囂ひすしきか狹蠅の如くして一時に皆涌出たりと聞ゆれとも然に非す皆涌は水の涌出て陸地を浸し溺らす時の音なひの甚しかりしをいへるなり神代紀（天降段正書）に螢火光神及蠅聲邪神と並擧たるは事を省くに過たれとも其時邪神の水火に依て妖を爲す事を知せたる者なり一書に夜者如ニ熛火一而喧響之晝者如ニ五月蠅一而沸騰之、有る此沸騰る物は水に非すして何か有む心を平にして思ふ可き者なり（一條禪閣の御說に螢火ニ夜閒一蠅見ニ晝日一喪ニ彼邪氣無一止時一也と宣へるなとは餘りに外々（ヨソ〳〵）しきなり）五月蠅は記傳七（二十二丁）に字の如く五月頃の蠅なり（然るを佐都伎と云は佐と耳云は田植る農業を凡て佐と云ふ其苗を佐苗植る女を佐少女植始むるを佐開植終るを佐登またその業爲る月を佐月其頃の雨を佐亂と云ふなり）斯れは狹蠅も田植る頃の蠅と云意の稱なり其頃殊に此虫は多在る故に名に負るなり（以上採要）と有か如し（如は那須を訓む例なるか那須は似爲にて其能相似るを云なり）水沸支は水の沸騰るを云なり倭水の性下に向ひて潤ひ流るゝ其即水の神隨なる質なるを其緣も無きに沸騰りて妖を爲すは惡しき神の所爲とは云なから世に有へからぬ妖事なるなり其水の激り散る音の囂すしく有て五月蠅の如く騷き巡れらむは如何に恐ましかりけむ（萬物の中に水火の二計世に無て叶はぬ物は非しを）

其水火に就て妖氣の立起れらむは世の禍事の萌みと云へし然れど實に水と火との然るに非す皆〻暴風〻之神の所〻なる上は悉くに幻術に出たる也經津主武甕槌二神の其〻〻給へる後は其〻〻外國にも散れ遣りけむ漢土の道士天竺の法師等の方術共に〻〻〻祟りて行へれば皆妖事なるなり 〇夜波如火光神在利は夜間には妖火出て螢火の如く群かり騷くを云ふ神代紀に彼地多有二螢火光神及蠅聲邪神一と見え一書に夜者若二熛火一而喧響之晝者如二五月蠅一而沸騰之と有て熛火此云二褒倍一喧響此云二游等娜比一と見えたる此等を合せて其有狀を曉る可し 記傳七に右の文を引て云く此紀に〻〻〻多留毘と訓るは甚〻僻事也火一字に絶る可き事かは又如二五月蠅一なる此には字を略きて蠅聲と書れは此も〻〻〻〻に〻ふるに如の字を略たる者なれば保多留邪須と訓へき也凡て螢火と書は漢文にこそ有けれ此方に保多留毘と云事は無なり 考に火瓮は瓮の內にて燒く火の光を云ふ」と有を後釋に信はれて「火瓮は瓮の內に燒く火なる事考にも云れたるか如し然るを神代紀に熛火と有は心得ぬ事なり其故は熛は字書に火飛也と注したれは火瓮には叶はす又喧響も火〻に由無れはなり 篤熟思ふに後紀の文は〻來事の〻〻たる傳の有しを其〻に心得て書れたる者なり其〻〻と云〻〻事記に〻神〻音〻〻〻〻〻發と有る音には〻〻如く沸音なるを又一の傳に光〻〻を夜とに分て二物に譬へて云る〻混し〻〻音〻夜〻實に〻〻て云る但し倍如此混して音と有〻〻紀の〻音〻〻に〻有る〻は〻〻な〻むと心〻て火瓮に熛字を當て書れたる者なり後紀の文には斯る類〻多し心して見へし 火瓮は然聲に云程の音は有へくも非す又晝に對へて夜を云むには光こそ似著はしけれ喧響は夜に限らぬ事なれは似著はしからす又の一書に螢火光神と有ると同意の譬なるにても必光なる可き事著明ければ此は此詞に光神と有そ正しかりける」と有そ然る事なりける然れは晝は水の音を以て妖を爲し夜は火の光を以て妖を爲して人の得堪まじき狀に邪神の妖事をは世に行ひけるなりけり猶火瓮とは瓮の內にて火を燒くか如く圓々としたる火球と化て邪神の荒ぶるにて今も稀々に闇夜などに光物とて虛空を飛巡る事の有る其等も邪神の往來ふ事と思しきか其等の妖物の熛火なとの如く群かり飛競へらむは如何に妖々しく有けむ 此等の事を今思出るにも身の毛竪立て甚怖(オソロ)しきを如此く安けく平けく幾(キ)世と成しも天神等の皇御孫命を天降し奉給ひて悉く事向しめ給へる恩賴に依れる者也かし 又後釋に神在利は晝波如五月蠅水沸支へも係れり」と有り其も然る事なり其水沸くも光くも皆殊に神有て然る妖事を行へるなれは也〇石根木立の木立は許陀知と訓へし大殿祭詞大祓詞遷却祟神詞等なる下に草之片葉と云て其樹立(キダチ)は全木は本よりにて伐杭迄もと云意なれは伎爾多知と訓へき事其下に云るか如きを此は然す次に草之片葉を云す總ての植物を含めて云るなれは汎く許陀知と訓むそ宜しかる可き 凡て古文には如此く奇異にて人の意も詞も及難なる所に云知ぬ味有る事なるを大凡に見ては別難かり 〇青水沫毛事問 天は微き水の沫に至る迄も

邪神の靈を託る所と成て言語を令成ると云事なり例は神武天皇御紀に水沫美那和と訓み萬葉歌に往水之三名沫如とも水沫奈須微命とも詠り神名式に伊豆國田方郡白波之奈阿和命神社有此に依れば彌奈阿和と訓むぞ古かる可きと熊迺さひ考るに美奈和と訓る例多きに從ふ可し續古今集に思川逆瀨待てとや水沫なす脆き命も消ゆるらむなど外にも多し〇荒國在利は彼道速振荒振國神等の多に在て平穏ならざる形狀を云るなり考に云く國在利は久爾ァ利と訓へし爾阿理の約奈利なり此は阿理と訓ては荒ひぬ國も有る如く聞えて叶はす此に疑を啓發く可き一條有り其は神代紀に大己貴神與言曰夫葦原中國本自荒芒至磐石草木咸能强暴然吾已摧伏莫レ不二和順一遂因言今理二此國一唯吾一身而已と仰給へる御言に因る時は此詞の荒國在利と有る天穂日命の復命と顧類て何れを是何れを非とか定めむ由の所知ぬを熟思ふに共に正しき古傳なりけり然るは彼道速振荒振國神の全は悉くに大國主神に摧伏られ奉りて其御趣けには和順ひ奉れりしかとも其悉く滅亡たるに非れは其神の御許を放れて猶荒ひ踈ひたりける狀此詞の如く有つるなり天穂日命は如此の狀を見認坐しに依て此荒振國神を滅亡さすては終に皇御孫命の所知看す御世と成ても愈治させ給ひ難からむと思慮らせりけるなり大國主神にも豫て其御心は御在しゝかとも假令荒振神にも有れ已命に和順ひ奉れる上は未罰めさせ給ふ可き時にも非りければ其期を待給へりしなり其は神代紀に薦二岐神於二神一とも以三平レ國時所レ杖之廣矛授二二神一とも有を以て知られたり其委しき所由は大祓詞荒振神の下に云り倍如此く道速振荒振國神等の多く成以て來し起元は伊邪那岐命黄泉國に其妹伊邪那美命を逐て往行しけるに其穢繁國の汚穢に行觸れ給ひし御身に着る物を脱棄給ひけるに時置師神飽咋之宇斯能神和豆良比能宇斯能神と申す三柱、疾病神成り次に奥踈神邊踈神奥津那藝佐毘古神邊津那藝佐毘古神奥津甲斐辨羅神邊津甲斐辨羅神と申す六神是禍害神にて合て此九柱そ彼道速振荒振神の魁首也ける然して此神等を御禊給ふは八十禍津日神大禍津日神二柱に坐し又其禍事を直し給ふは神直日神大直日神二柱に坐り然れとも此は彼黄泉國の汚穢より成以て來る神にし在れは彼國に屬へき所謂有か故に其を防き塞り給ふは八衢比古神八衢比賣神久那斗神の三柱に坐事彼詞に大八衢爾湯津磐村之如久塞坐皇神等之前爾申久云々根國底國與麻備踈備來物爾相率相口會事無氐下行者下乎守理上行者上乎守理夜之守日之守爾守奉齋奉云々と有て古事記に所レ塞二其黄泉坂一之石者號二道反大神一亦謂二塞坐黄泉戸大神一と見え神代紀に伊弉諾尊已至二泉津平坂一云云因曰二自レ此莫レ過即投二其杖一是謂二岐神一也其又伊弉諾尊隱二其樹下一因採二其實一以擲レ雷者雷等皆退走

矣此用レ桃避レ鬼之縁也　時伊弉諾尊乃投二其杖一曰自レ此以還雷不二敢來一是謂二岐神一此本號曰二來名戸之祖神一焉と見えたる本因に契合ひて必如此く有へき物なり（猶此神等の大八洲に坐して守給ふ事は宮門にては櫛磐間戸豊磐間戸の二神家にては屋船命大宮賣命の守り坐す事なる大殿祭詞御門祭詞の下に委し　云るか如くなるか其主と有に本因に依て右の三神なる事云も更なり）是以て大國主神い此國土を主領き給へりし間に彼磐根草木に至る迄も悉くに皆能強暴るを攘伏せ給へるも岐神い曲替有けるなり其證は神代紀に此國土を天神御子に避奉り給ふと爲て於是大己貴神報曰天神勅教慇懃如此一敢不レ從レ命乎　吾所レ治顯露事者皇孫當レ治　吾將三退治二幽事一乃薦二岐神於二神一曰是當二代吾而奉一レ從也吾將二自レ此避去一即躬披二瑞之八坂瓊一而長隱者矣故經津主神以二岐神一爲二鄕導一周流削平云々と見えたるか又同紀に同時の事を大己貴神白二於二神一曰云々如吾防禦者國中諸神必當二同禦一今我奉レ避誰復敢有二不順者一乃以二平レ國時所杖之廣矛一授二二神一曰吾以二此矛一卒有二治切一天孫若用二此矛一治レ國者必當二平安一今我當於二百不足之八十隈一將二隱去一矣言訖遂隱於是二神誅諸不順鬼神等（一云二神遂誅邪神及草木石類皆已平了其所レ不レ服者唯星神香香背男耳故加遣倭文神建葉槌命者則服故二神登レ天也）と見えたり右の岐神は其主神を以て申し廣矛は其靈形を以て記せるにて此と彼と別事には非るなり大國主神此天下を經營給ふ初より岐神い幽替に頼て荒芒たる國を治給ひし故に天神の御子の天下を所知食むにも先つ岐神の廣矛を以て荒振神を罰平させ給ひて後治めさせ給はむ事を諭し申給へるか故に二神岐神を鄕導と爲て道速振荒振國神等を言向け給へるなり如此く前後を相照して見る時は此詞に晝波如二五月蠅一水沸支夜波如二火瓮一光神在利石根木立青水沫毛事問天荒國在利と有る其は道速振荒振國神の所爲なる事知られ其荒振神と云は上に載たる疾病と禍害とを世に行ふ九神を本と爲て其枝葉の邪鬼の事なる所由論ひを竢すして明亮なる者也（尚大殿祭詞御門祭詞大祓詞道饗祭詞に此神等の罪々に見えたるを合せ讀て其深き意有る事を察る可し凡て字も嚴な一同耳見ては悟さゝる者多かり）

然毛鎭平天皇御孫命乃安國止平久所知坐之米申氏己命兒天夷鳥命爾布都怒志命乎副天天降遣天荒布留神等乎撥平氣國作之大神毛媚鎭天大八島國現事顯事令事避支

然毛は其國の荒芒たる狀の甚し在りつる事中々に容

易く非れは悉に事向く可き勢ならされとも然は有れ云々爲むと云ふ初に置るなり 上に其反る所なるか故に此なる然毛に殊に力有れは其心して考ふ可し 鎮平天は國作之大神乎毛媚鎮天の鎮と荒佈留神等乎撥平氣の平とを合せたるなり借天穗日命の國體見に此に降着て其消息を察給へるに彼道速振荒振國神い妖事こそは右の如く轉有けれ其を抑へて此天下國土を經營給ひし大國主大神の御功高く貴く御在しけれは皇御孫命の所知食む顯露事は此大神より避奉らせ命給むと即其御心を執申給ひしなり大國主大神素より此國土は天神御子に奉給はむと爲て種々の事共を始給ひて其御業を貴く高く勉成し給へる最中なりし故に急にも承諾せ奉給はさりつるを天穗日命甚能も知看しかは何れの御爲にも美好しからむ事を事議り御在しける故に其父子の神共に復命の遲く成りしなり 此に因て中世に正史を記撰ばるゝ時に天穗日命は終に復命申さて止ぬる神の如く記され大國主大神に此國を惜しみ給ひて天神の命を防拒める神の如書れたる此二なむ予常に憤ろしく歎く、思ゐ事なりけれ此に付て生々の識者も神典の正なるを誤る者多し其は皇國の古傳とても祝詞宣命の如き假字書にて在むには如何にも神代の任に甚々正しく美好しく在る可を漢文に書綴ると爲ては事がら措て彼國の歴史と云物に相似たる事有れば先に其熟字を取り其文體を擬びて物爲る事故に記者の一時の思誤へより終に彼と此と同事の状に成れる事少からず素より彼は賤しき末國にて在し人事なるを奇異に尊き神の御上を其と日を同じくして語はむ事は彼諺に謂ゆる杓子定規と云者なり能々心して思ふ可し ○皇御孫命能安國止平久所知坐之米平止申氐は大國主大神よりは其現事顯事を事避り奉らしめ荒振神等は皆悉くに事向て皇御孫命の安見し給ふ國と成し仕奉らむとなり 此安國と云事にも說有り大殿祭詞大祓詞等に出たる其下に說置りき ○己命兒に某命兒と云に同し自より佗に對ひて汝命と云ふ對なり下にも己命御魂乎云々己命乃御子云々と二所出たり此條の書には見當らす 常には上を受て其命兒其命和魂など云へき所を己命云々と云るは古言なり甚愛たし ○天夷鳥命此神は書紀及遷却崇神詞に天穗日命に次て降坐し事有れとも此詞と古事記には略れたり 其は天穗日命に屬て物爲給へる故に主々しからざればなる可し但書紀遷却崇神詞共に武三熊之大人の名を以て載たり 古事記に天菩比命之子建比良鳥命と有る傳七卷六十六丁に此御名武夷鳥とも天夷鳥とも天日照とも諸書に在て何れも比那なるを此記に耳比良と有り 那と良とは横通音なり歎辭の阿那を阿良と云も此例なり 名の意は此神天より降て邊鄙を平給ひし功を美て鄙照と稱しなる可し 照を登理と云る例は萬葉十四に日之照者を比賀刀禮婆と詠り日名照額田毘道男云々てふ神名も思合す可し○今云比那とは天上に對へて此國土を云る稱より起れる稱なり事遷大崇神詞の下に云るが如し其より轉して京都に對へて邊鄙の地を比那と云り然れとも其は神代よりの古稱には非す 式に因幡國高草郡天穗日命神社天日名鳥命神社 ○今云式に同郡阿太賀都健御熊命神社有り此は同神なれとも御靈を分て祀れるなり其例は○式に近江國蒲生郡鳥見嶺神社二座と有を其社中に載れる祝詞に奇日乃嶺仁座天穗日命西宮座天夷鳥命椎殖仁座健御熊野大人命三柱と有て天穗日命天夷鳥命二坐は式內にて健御熊野大人命一座は式外なるか此も同神には坐せとも殊なる御名を以て祭給へるに同し 出雲國出雲郡阿麻能比奈等

理神社有り ○今云同式に能義郡天穗日命神社有り又出雲郡大穴持伊那西波伎神社見も此も天夷鳥命と同神なれども此神社は祭り別てるなり 文德天皇實錄に河內國天夷鳥命神見⊕ 志紀郡道明寺村に在と云り道明寺は一名土師寺とも云り即土師鄕此なりと云り又姓氏錄河內國神別に出雲臣有り と見えたり又傳十三丁十五 に神賀詞に天穗比命は返事申して後は天に留りて降給はぬ趣に云るも然有けむ其故は此記上段に此神の子孫の氏々を擧たる處に天菩比命此出雲國造某々等之祖也とは無て天菩比命之子建比良鳥命此出雲國造某等之祖也と有も出雲に降て大國主神の祀を主りし始祖は天夷鳥命なれはなる可し」と有は尤なる說也崇神天皇御紀に六十年詔群臣曰武日照命一云武夷鳥一云天夷鳥 從レ天將來神寶藏二于出雲大神宮一是欲見焉と有と天穗日命と云さるを以知へし 此事委しくは此卷首に註る を見合す可し備天夷鳥命の夷は邊(ヘタ)にて天に對ひて此邊國(カタホトリ)なる由にて端(ハタ)と云に同し靈異記及字鏡に鄙は止比止と有は遠邊(トホヘタ)の義なるを思ふ可し 又傳に書紀に大背飯三熊之大人と有は即此天夷鳥命か詳ならす」と有れとも此は決めて同神たる可し其は大背飯三熊之大人と申すは本自の名にて天夷鳥命と申すは此國土を鎭平て奉れる名稱背脛と申すは大國主命の御使と爲て御子事代主命の御許に此國を奉むや否と問申給へりし由の名なり此を以て大穴持伊那西波伎神と其御名をさへに上に冠り呼ふ事なるなり 猶心を着て考るに神代紀に載二使者稻背脛一遣之と有る其同し事を古事記に遣二天鳥船神一徵二來八重事代主神一而問焉と有る天鳥船神は祝詞考に夷鳥と鳥船と同神なり」と云れたる後釋に天鳥船神は考に云れたる如く即天夷鳥命なり備其は夷と船と通ふ音にて本船鳥なりけむか紛ひて鳥船とは成れるなるへし然紛ひつる由は此神の事を以二熊野諸手船一一名天鳩船一載二使者稻背脛一遣之と見え又伊邪那岐命の御子に天鳥船といふ有り彼此を以なり」と有るか如し備又武三熊之大人と天夷鳥命と同神なる可き證は姓氏錄なる天穗日命の系派を見るに天穗日命天夷鳥命の子孫耳有て武三熊命の出自なる一も有事無し此等も考ふ可く又記紀を考るに天穗日命の子とは天夷鳥命と有て武三熊之大人には唯其の名の出る因に依て其子と云る耳也 備此詞の所を古事記には天鳥船神副二建御雷神一而遣と有り其事次に云へし○布都怒志命乎副天 天降遣天は右に引る古事記の趣に違ひて副天の言平穩ならさるに似たりと雖も其子細有事なり天神の御許より此國土を言向させ給ふ其惣ての事に取ては云ふ迄も無く布都怒志命爾天夷鳥命乎副天と云ふ可き事の狀なれとも此國にて事を取擬ひ物爲給ふ途二有り其は天夷鳥命は其父天穗日命の御業を繼て大國主大神を媚鎭め給ふ由に就て父神より其事を任され降りしなり 大國主大神より事代主命の許に此國を奉むや否やと問に遣しも此天夷鳥命に坐など考合す可く又神代紀一書に天神より大己貴神に勅給ふ言に又當レ主二汝祭祀一者天穗日命是也」と有て其子天夷鳥命より以降世々出雲大神を祀奉るなども思ふ可し 布都怒志命は建御雷命共に天神の御命を持て降し給ふ征伐の御使なれは天穗日命より左も右も指揮す可き神に非れは大國主命を媚鎭めに遣す天夷鳥命の降る便りに共へ降ら

分給ふなり 古事記には其等の事を混同(ヒトツ)にして其有か任に天鳥船神副二建御雷神一而遣と有は記錄の文體なるを此は其事の有狀を少か別つべき心有て如此く云るなり 如此く布都怒志命は建御雷命と共に征伐の御使なるか故に神代紀正書に於是二神誅二諸不順鬼一神等共一云二神遂誅二邪神及草木石類一共一書に故經津主神以二岐神一爲二鄕導一周流削平有逆命ー者即加二斬戮一歸順者仍加二褒美一と見えたり 常陸風土記に天地權輿草木言語之時自レ天降來神名稱二普都大神一巡二行葦原中津之國一和二平山河荒梗之類一云々と有など思合す可し 所以に同紀に既而二神降二到出雲五十田狹之小汀一而問二大巳貴命一曰汝以二此國一奉二天神一耶以(イナヤ)不對曰疑汝二神非二是吾處來一云々と有は大國主神の素より此國は天神に奉らせ給ふ事は其御心に在て天穗日命と相共に謀り置せ給へる事も有しかは其御趣を以てこそ計はせ給ふ可けれ征伐の御使を以て順はさる荒振神の如く會釋はれ奉る可き所謂無き事を申聞え給へる也其御心に坐故に建御名方神の如く天神の大御命を拒み奉れるに依て建御雷命に追迫られ奉るは御子と雖も顧給はす征伐の御使の御心に任せ奉給ふなと何れも其神隨の道に背違はせ給ふ所無を知へし 此を一に混らす時は大國主神と荒振國神とを差別(ワキタ)む可からず又天夷鳥命と布都怒志命との御業の條々明らかならざるなり能々思ふ可し 偖此詞は荒振神等を撥平けたる事よりは大國主大神を媚鎭たる方全文に亘りて其用重きか故に天夷鳥命爾布都怒志命乎副天とは續けたるにて出雲國造の己か祖神たるを以て私し佗神を誣たるには非す 此事遷却祟神詞の下にも委しく云り能々合せ讀味ひて事意を曉る可し 偖此に布都怒志命と有は建御雷命を略けるにて古事記に建御雷命一柱を載て布都怒志命を略けるに同し 天宮にて凡ての事を執行ひ給ふは此詞に高御魂神魂命能皇御孫命爾天下大八島國乎事避奉之時云々と有か如く二柱相並びて物爲給へるを紀記共に高皇產靈神一柱の御名を出され又時としては神皇產靈神の御名を耳擧たるも古書に多し惣て名高き故事には斯る類ひ能有なれば其心して汎く考亘す可なり後釋に經津主と建御雷とは實は一神なるか混ひて書紀には二神の如く被記たる此事古事記傳に委しく辨たるか如し」と有れども其は強說なり春日祭詞の下に云るか如し 實には神代紀及遷却祟神詞に右の二柱を並載たるなむ甚委曲にて正しかりける 其說は遷却祟神詞の下に云り猶日本紀傳にも委しく註す可し 〇荒布留神等乎撥平氣 後釋に古事記に大名持命の八十神を毎二河瀨一追撥(ホヒハラヒ)又白檮原宮段に退二撥(ハラヒタヒラゲ)不伏人等一萬葉十九三十九丁に安母里麻之掃平(ハラヒタヒラゲ)なと有り」と見ゆ 考には平氣を牟部と訓れたり處程上に鎭平天と有る此平の字は多比良宜と訓へからざれば此も其に准へて然訓へきが如くなれど然る語脈に非れば後釋の訓に從へり 偖布都怒志命の此國を言向に降來坐る事主とは彼晝は如五月蠅す水沸き夜は如火瓮く光神及石根木立青水沫も分言語る殘賊殘暴横惡之神を撥平け給ふ事に任され奉給へる故に荒振神乎と有て大國主神には國作之大神乎毛と云り此等の辭を以ても其に輕重の次第有事

を熟思ふ可し（然らざれば大國主神も荒振神と共に天神の大御命を防ぎ拒む者の如く成て甚く事實い誤出來ぬ可し古事記に天鳥船神副ニ建御雷神ニ而遣と有を思ふ可し）○國作之大神乎毛媚鎭弖の乎毛の辭は荒振國神を言向に天降し給ふ事の因みに此大神をも媚鎭めて此國を令避奉給ふなり然るは天神の此國は甚く喧擾て有けりと仰給へる大御命を奉て天穗日命國體見に來着給ひて巡視給へるに荒振國神の妖事は然る事なれとも其國に大國主神坐て甚荒芒たる中に在つゝも和順ざる邪鬼を摧伏せて大國主と成給へる御功の高く貴く御在るか故に此は其と等しく言向く可き神に素より御在し坐す且須佐之男命の貴御子と爲て日神と御誓の間に成坐る玉依毘賣命（亦名須勢理毘賣命）を后神と成し給ひ八百萬神の魁首と爲て天下を經營給へるか即天神御子に避奉らせ給はむ豫ての御心に坐せは媚和し鎭奉らせ給ふ可き時勢に從はせ給ひて其子武三熊之大人と共に其復命し給ふ時節さへ後るるに至れりし事紀記に見えたるか如し（大國主命の皇御孫命に此國を奉らせ給はむ御心は出雲風土記意宇郡母理郷條に所造天下大神大穴持命越八口平賜而還坐時來坐長江山而詔我造坐而命國者皇御孫命平世所知依奉但八雲立出雲國者我靜坐國青垣山廻賜而玉珍置賜而守詔云々と有る此一事を以ても推量奉る可し）　媚は記傳十三丁十一に媚字常にも許夫と訓み字鏡に嫵媚也古夫と見え靈異記にも媚許備と有り」と有り又通證に世俗謂ニ依ニ親人一爲ニ媚附一と有る如く大國主神の御許に依親み給ひて其御心を損ねさせ給はじと程能く會釋ひ奉給ふを云なり言義は來觸なる可し來は佗より來る事にも行て寄る事にも云ふ言なれは其許に來依り親しむの謂なる可し然るを書紀天穗日命の事に佞媚と有は餘りなる事なり此は天神の大御命を措て大國主神の方人と成れるならす宜しき樣に鎭め和し給へるなり（通證に[illegible]戀ゝ也夫利反備と有れとも戀ひ謂には非す夫利は活語にて其有状を云なるか又此に[illegible]の義をも含みたり記傳に云く詩經大雅に無縱爲ニ參毘一注に參毘以巳身而附入也と云ひ又儀禮鄭注に嬖媚と云事も有り又狐媚と云事も見えたれば本此等の字音かとも云へけれども何れも遠き字にて聞慣ぬ言なれば其を取て此の言に用ふ可に非す）○大八島國現事顯事令事避支と有る此大八島國は物なり現事顯事は事なり大國主神の主領き所有せ給へりし物と事と二なから事避て皇御孫命に令獻給へりし也（師の古史に此文を採れたるに大八島國之現事顯事ニ事避ニ矣と文を改し而之ノ字は衍也除く可し之ノ字を加ふれば大八島國の上に在る事を令避たるに成れゝば之ノ字は加ふ可に非す古事記に故之字志波須流葦原中國者我御子之所知國言依賜とも此國者立ニ奉天神御子一とも此葦原中國[illegible]命既獻[illegible]とも有て國を奉るか主にて現事顯事は其國に就たる事共なれば此篇の大八島國の下などに之ノ字は始めて[illegible]の事なり）然れは大國主神の和魂の御名を大物主命とも大物代主命とも申せるか事代主命に對へたる御名にて代は所知食す由なる事此に照し應せて思ふ可くなむ有ける（師は事代主とは事の信（シロ）を立る山の御名なりと云れたれど若然らむには物代主に物の信（シロ）を立る意と爲むか甚謂れ無き事なり）

猶下に其御名の意を註す所に云べし　○現事とは現世之事と云事なり師說に現事に神事顯露事に幽冥事と相對ふ語なりと有は然る事なり　然れど右の四共に其說は同じからざる可し但古史傳も未世に出されば予か說の合りや合さるやを知ず　此は御父大神より其汝所レ持之生大刀生弓矢以而汝庶兄弟者追ニ伏坂之御尾一亦追ニ撥河之瀬一而意禮爲大國主神亦爲ニ宇都志國玉神一而其我之女須世理毘賣爲ニ嫡妻一云々而居是奴也と詔給ひ授給へる御業なる事は爲ニ宇都志國玉神一と有にて著明なり此は顯國を作堅めて其恩頼を令蒙給ふ由の御名にて其恩頼を令蒙給ふ御業即現事なるなり　唯に顯國の御靈神と耳思ふは甚麁かり委しく神に糺して其義を索む可きなり　宇都志とは神代紀書一に圖ニ造彼神之象一と有る圖ノ字を宇都志とも阿羅波斯とも訓る其と同しく彼を圖して此と成れる由也然るは神を圖して人有り天を圖して國と成れる故に神に對へて宇都志伎青人草とも現身とも云ひ天に對へて宇都志國とも云るか本にて唯現在の事に成れりと見ゆ此世を現世と云も神の世を圖したる世と云事なる可し古事記明命宮段に一言主神の形を現し給へる所に恐我大神有ニ宇都志意一者不レ覺と天皇の申給へる事も見えたり神代紀に顯見蒼生此云ニ宇都志枳阿烏比等久佐一と見え又顯此云ニ于都斯一と見え神武天皇御紀に今以ニ高皇產靈尊一朕親作ニ顯齋一　顯齋此云于圖詩怡破比一　なとも有て顯をも宇都志と訓り　但其顯見の字は神の隱身なるに對へて其顯に見ゆる由以て書るなり舒明天皇御紀に幽顯の二字を迦徵母比登母と訓て顯字を人に當たるを見へし若て右の顯齋は顯露なる齋と見ては解難し此は天上の儀式を摸し擬はせ給ひて謂ゆる彼天津神籬及天津磐境を起樹させ給ふなンめり　其よりは目に現しく見ゆる物に呼ふ名と成て人にも身にも國にも宇都志と冠て云ふ定りと成れりしか又物の上に立て其高く貴きの顯るゝにも云り古事記に貴御子と有を神代紀に珍子と書て註に珍此云ニ于圖一と見えたるも思も及はせ給はぬ奇異なる御子等に御在るか故に別天神などより顯出し給ふ事と爲て宇都とは宣へるなり神武天皇御紀に海中より顯たる人に珍彥と云ふ名を賜へるなと思合す可し但其等は宇豆と濁音に訓む事なれとも大殿祭詞に皇我宇都御子と有に合せて清音に訓へし此の宇都志に同しければなり　萬葉六に天皇朕宇頭乃御手以云々と有は今も人の容貌を宇豆高き抔云に叶へりと記傳に有に同じ又祝詞に宇豆乃幣帛と有も高く著きを云り　偖現事は現身の事なりと云は宇都志國玉神と申して此國土を作らせ給ひ百姓に恩頼を令蒙給へる御事にて人事の善を褒め惡を貶す等の事耳ならす其も其中に在る事なるか該羅めては此國土を修り理め固めて未能成さる所を能成すを云なり此そ天皇

命の天津日繼所知食す天津高御座の大御業に臣連八十伴男の仕奉る所由天下人民の世を度る業にて天津神隨の大道なり 然るを一條兼良公の御說に顯事人道也幽事神道也人爲ニ惡於顯明ノ地ニ則帝皇誅レ之爲ニ惡於幽冥之中ニ則鬼神罸レ之と有は美たき事には有れども猶漢意にて其歸也甚小くなむ右の如きは顯露事にて此の現事と一ならす 如此く說明めて後又思得たる事有り其は舊訓に現事を阿良比登基登顯事を阿伎良米基登と讀附たる其訓こそは僻事なりけれ其義に於ては允に當れるは必傳ふる所有て然義訓せるにや有む考に現は紀に顯國玉顯見蒼生萬葉に顯身など云れは其身の事に抱る可し」と有は然る事にて予が右に說るが如く國作の大業を現事とは云て今も人の營爲の事を然云と聞ゆるなり然らは顯事と云は天下の人の行の善惡を見明めて其有へき神隨の道を以て治る事を云なり然れは上に云る如く現事は物に云ひ顯事は事に云て此二を合せて古昔國作之大神の大國主と坐す御業にて今しは天皇の天津日繼所知看す大御業此なり 後釋に現事は宇都志許登顯事は阿羅波爾許登と訓へし同意なる事を如此状に二つ重ねて云は古文の常なり云々と云れたる其訓は然る事なれども其を同意なる事と思はれたるは誤なり此は考に現と顯とを分て說れたる其義は盡されすと雖も舊釋の說には勝れり ○顯事は神代紀一書に高皇産靈尊勅ニ大己貴神ニ曰夫汝所レ治顯露之事宜ニ是吾孫治ニ之汝則可ニ以治ニ神事ニ云々大己貴神報曰吾所レ治顯露事者皇孫當レ治吾將ニ退治ニ幽事ニと有る此なるか顯露此云ニ阿羅幡貳ニと訓註せり古史徵に此訓註の貳字決めて衍なり」と有は然る事なり貳は辭の爾より紛ひたる事著明ければ今も阿羅波許登と訓へし 倩右の文を舊事紀に載たるには神事を幽神之事幽事を幽神事と有り然る本も有しなる可し決めて杜撰には有へからす下に云へし 倩此の顯事は露の字を省きたる者なるか右に准ひて阿羅波許登と訓へき事云も更なり此を舊く阿伎良米基登と訓るも其所謂有る事なり其は現事は右に說る如く國土經營の事業を云に對へ天下の人民の所行の善惡しごを明察らめ給ひて善を賞め惡を罰むる御政刑を然云るにて同し状なる事の中に如此く分るゝ條理有り記傳十四に右文を引て「今より皇孫の所知食へき顯露事とは即朝廷の萬の御政にて現人の顯に行ふ事なり」と有は能も云れたり 然れども現事と顯事の差異を立られさりつる故に猶足はぬ所には有筈の事なり 此を師の幽冥事に相對へたる語なりと云れたるは然る言にて阿羅波とは隱れたる物の顯るゝに等しく人には各自に現事の作業有り此は吾一己に成て其餘を人に及すなるか顯事の行状は人に對へる愛憎に成て其身に歸る事なるなり君父に對ひて奉仕へ妻子に對ひて憐愛しみ爲など皆外物の爲に賞罰の身に

歸る所有る此を云なり（幽冥事は此反にて人の顯露に見すまじく包み隱して成す事の上の善惡を政(タヾ)し給ふなり下に委しく云むを明らめ見る可し）神代紀口訣に顯露之事謂治國之政務也と有り纂疏に顯露之事人道也幽冥之事神道也猶晝夜陰陽二而爲一人爲惡於顯明之地則帝皇誅之爲惡於幽冥之中則鬼神罰之爲善獲福亦同之神事則冥府之事非祭祀牲幣之禮也祭祀猶屬顯露事と有は幽明を透視給ひて甚々美き御說にて其如く物の陽なると陰なるとの界に於て異なるが如しと云へども行ふ所の善惡に於て二途有に非るか故に顯るゝは帝皇此を誅ひ給ひ隱るゝは鬼神此を罰めて邪正を糺彈す事常なるか人の隱善隱惡は幽冥事の御治に預り奉る反に鬼神の所行たりと雖も目に顯るゝ陽善陽惡は又帝皇の預らせ給ふ事なり今正史に所見たる所一二を擧ぐべし其は古事記（白檮原宮段）に如此言向平和荒夫流神等退撥不伏之人等而坐畝火之白檮原宮治天下也と見え又同記（日代宮段）に爾小碓命到熊襲建之家云々然而還上之時山神河神及穴戶神皆言向和而參上と見え又爾天皇亦頻詔倭建命言向和平東方十二道之荒夫流神及摩都樓波奴人等云々自其入幸悉言向荒夫琉瑕夷等亦平和山河荒神等而還上幸時到足柄之坂本於食御粮處其坂神化白鹿而來立爾即以其咋遺之蒜片端待打者中其目乃打殺也云々自其國越科野國乃言向科野之坂神云々取伊服岐能山之神幸行於是詔茲山神者徒手直取など有りて人は更にも云す天皇の知し看す現事顯事の大御政に背き奉りて天下の大御寶を損害ふ者有れは鬼神と雖も言向給ふ御定也大己貴命の葦原中國の本より荒芒たるを靜め給ひ諸の邪神を摧伏せて國土を經營り大凡の功績を建給へる其現事顯事を皇御孫命に避奉らせ給へれは必邪神と雖も其大御政には漏奉る可く非すなむ有ける（但右の山神河神なとは山河を主領き給ふ大神の類には非す山に住み河に住て妖を爲す鬼魅を云なり右の事を景行天皇二十七年御紀に日本武尊從海路還倭到吉備以渡穴海其處有惡神則殺之亦比至難波殺柏濟之惡神と見えたり猶此餘にも多在れど一二を擧るのみ）右等の邪神は悉く皆幽事に屬く者なれは大國主大神の御許にて罰めも罪なひも爲給可き筈なるが其誰か爲すとも無く自然なるか如く幽より行はゞこそ有め現世の顯露に出て大御寶を損害ふ禍事の著けきに幽事を以て治めさせ給ふ時は天皇の現事顯事の大御稜威無く成て朝廷の御爲にも天下の爲にも甚しき災害と成るか故に幽よりも此を出して其御治めに令遭給ふ所也又此

反にて現世の人の所業と雖も天皇を始奉り官々の人等の目にも耳にも入る事無きか如き幽なる善惡共に神事に屬て其御治に奉遭ると同事なり猶下に云へし世中の人の上に誰か成すとも無く善事惡事の有る其等は幽事なれば譬ひ惡事と雖も幽事の持前なれば其こそは大國主大神の治させ給ふ所なりけれ已に顯なる者も顯に出て事を成す時は必天皇の顯露事に屬く可き御定と見ゆ但古昔より以降天下に凶事惡事の有る其等は正しき神と雖も時に觸て祟給へるなれは太占の卜事なとを以て其所由を問明らめ奉らせ給ひて祭鎮め奉らせ給ふなとは右等の例とは異なり此は天皇の御方にこそは覺えさせ給はさらめ神等の御上より必告めさせ給はては得有ましき事有る故なり其等の事は八百丹杵築宮爾静坐支の因みに神事幽事の說に云へし

乃大穴持命乃申給久皇御孫命乃静坐牟大倭國申天己命和魂乎八咫鏡爾取託天倭大物主櫛𤭖玉命登名乎稱天大御和乃神奈備爾坐己命乃御子阿遅須伎高孫根乃命乃御魂乎葛木乃鴨乃神奈備爾坐事代主命能御魂乎宇奈提爾坐賀夜奈流美命能御魂乎飛鳥乃神奈備爾坐天皇御孫命乃近守神登貢置天八百丹杵築宮爾静坐支

此は大國主大神の國避の時に天神に申上給へる御言なり神代紀に於是大己貴神報曰天神勅教慇懃如此敢不レ從レ命乎吾所レ治顯露事者皇孫當レ治吾將三退治二幽事一と有は此に大八島國現事顯事令二事避一支と有と同し件なれは其時に其歸順ひ奉給へりし事を白上給ふに就て又其八十坰手に隱坐し乍も守奉らせ給はむ大較を申させ給へるにて甚愛たし此の御言は記紀共に傳へ漏せる古傳なるは既々京師には亡て出雲國に傳はれりしなり愛しと云むも中々なり○乃大穴持命乃申給久は天神の御言に隨奉り給へる其度を緩べず直ちに己命の御心を顯はし明らめ申給へる勢を示て乃とは云るなり乃とは其言(スナハチ)にて上の言を承て下を起す辭なるを思ふ可し倩此にも書紀の如く皇御孫命は顯露事を知食す可し吾は退て幽事を治むと申給ふ詞有て乃云々と續く可き語なるか如しと雖も其は元來天神の大御命に順奉らせ給へるなれば此には其隨奉らしめ給へる御方より令事避支と云て濟せたるなり其は右に引る書紀の前文に高皇産靈尊勅二大己貴神一曰夫汝所レ治顯露之事宜三是吾孫治二之汝可三以治二神事一と有を以て知へし右の大己貴神の御答は此大御命を受て奏させ給ひし者なり○皇御孫命乃静坐牟大倭國申天は皇御孫命の大宮處と敷坐むは大倭國と豫て定給へれは其國に鎮坐せと申給へるなり下に近守神登貢置天と有に相照して見るへし後釋に静坐牟は鎮利坐牟にて大宮造り爲て今より住給はむ事を云なり」と有そ宜しき考に此は天孫未天降り坐ぬ間なる故に静め坐む大倭と云り云々と有は後釋に静むるは是迄の事にこそ有れ此は既に静まりたる上なれは然云へきに非ず」と辨られたる然る言なり又考に後の天皇の御世々此倭に宮敷坐む前つ辭とも聞ゆるか如く云るは妙なる文と云へし」と有は心得ぬ云樣なり其說の如くならむには後の天皇の倭に宮敷坐に就て其邦内の神を取合せて作爲れる文に成なり考にも後釋にも其外にも說有れども共に其意を得られさる者なれば今悉くは載さす神武天皇

御紀に昔伊弉諾尊目二此國一曰二日本者浦安國細戈千足國磯輪上秀眞國一復大己貴大神目レ之曰二玉牆內國一と見えたるか如く國生坐し大神の既く大倭國を大八島の國の眞秀と定させ給へりけるを國作坐し大己貴大神も殊に美好しく經營り物爲給ひて玉牆內國と目（ナツ）けさせ給へる美地なるか故に大宮造は此大倭國に於て物爲させ給へと申給へるにて此實に此國土を作坐し神ならすは佗神の得知り給ふましき事なり 古事記に其神之嫡后須勢理毘賣命甚爲二嫉妬一故其日子遲神和備弖自二出雲國一將レ上二坐倭國一而と有て其時の御歌に夜麻登能比登母登須々伎と詠せ給へるも其國を美好しみ給ふか故なり又其大神の幸魂奇魂神を御諸山上に齋祭らせ給ひ又神代紀一書に是時歸順之首渠者大物主神及事代主神乃合二八十萬神於天高市一帥以昇レ天と有る天高市は其國の高市郡なるなと其所山深きを思ふ可し 偖此大神の然申し上させ給へるに就ては皇御孫命の初て天降り着せ給はむは大倭國なる可きに筑紫國に天降らせ給ひ神倭天皇の御世の始迄四繼の間は倭國に上幸坐むの大御心も御在し坐す西偏（ニシノホトリ）に年序（アマタトシ）を經給へるを以て云はゝ此なる大穴持命の御言は浮たる如くなれとも然らす大穴持命の然申させ給ふ御心は天津日繼の天地と共に常在に無窮き大御代を指て宣へるなれは其に抱る可に非す 古事記神武天皇段に神倭伊波禮毘古命與二其伊呂兄五瀨命二柱坐高千穗宮而議云坐二何地一者平二聞一看天下之政一猶思二東行一と見え書紀にも又聞二於鹽土老翁一曰東有二美地一靑山四周云々余謂彼地必當レ足下以恢二弘天業光中宅天下上蓋六合之中心乎一と見えたる共に大穴持命の申させ給ひし事を忘させ給ふか如く外々（ヨソヨソ）しき御言の如くには有れとも熟思ふに神代に大倭と云國號の非れは此なるも後の名を以て語傳へたるにて其國號無き以前には彼西偏より對へて思二東行一とも東有二美地一なとも必宣ひつ可き者也 故神倭天皇中洲に入坐て始て畝火白檮原宮を造給ひ初國所知看しより以降彼大穴持命の申給へる御言の如く大倭國に御世々々の天皇命等の大宮處敷給ふ事とは成れり神代より鎭り坐し乍もこの時の至れらむを下待せ給ひし神等も如何に嬉しく所思せりけむ 萬葉一に過二近江荒都一時柿本朝臣人麿作歌に玉手次畝火之山乃橿原乃日知之御世從阿禮座師神之盡樛木乃彌繼嗣爾天下所知食之乎天爾滿倭乎置而靑丹吉平山乎越何方御念食可天離夷者雖有石走淡海國乃樂浪乃大津宮爾天下所知食兼云々と有も近江國は畿內の外なれは然る鄙國に都し給ふましき筈なるを何方に思ほし違へさせ給ひけむと深く慷慨（ナゲ）ける狀見えたり神代を去事遠しと雖も止事無き古傳を存して守る偉人の思ふ所は格別なる者なり 偖此詞に大倭國と有は後に出來たる國號を始に及ぼして云にこそ有けれ畿內を公然（オホヤケ）に指て宣へりと見えて大和は更なり其間々には山城河內攝津も都と成れりし事も有けれ共倭を本所にて自餘の國々なるか行宮なるか如くなるは御天降より以降仕奉れりし家々の氏人等皆倭に土著（オチツキ）て有か多在けれは自然なる勢なり斯て桓武天皇の大御世より今の平安宮を萬世に易る可からぬ大宮處と定させ給へる上は愈大穴持命の御心ならぬか如く有れとも大和山城二國共に山河相聯りて同し一國の如き地勢

なれは其御旨に背かせ給ふ所無からめるを其地にも賀茂大神神代より鎮り在して皇都を守奉らせ給ふなとは又幽契有る御事なる可くぞ所思たる 其賀茂大神と聞ゆるは御祖社には大己貴命と后神玉依比賣命と二柱に在し別雷社には阿遅須伎高日子根命とも事代主命とも傳へて共に同神なる由予別に明らめたる書有て其に記せるか如し神代の幽契の如此く空しからざるなど皆大穴持命の萬世を消遙し坐て定させ給ふ所有か故なり阿波禮阿那奇しきかも奇しきかも ○己命和魂乎云々此の和魂云々爾取託天云々登名乎稱天云々爾坐天皇御孫命能近守神登貢置天と有る文意神功皇后御紀に和魂服ニ王身ニ守ニ壽命ニと有に相似れり大倭神社注進狀にも家牒曰腋上池心宮御宇天皇孝昭元年秋七月甲寅朔遷ニ都於倭國葛城ニ丁卯天皇夢有ニ一貴人ニ對ニ立殿戶ニ自稱ニ大己貴命ニ曰我和魂自ニ神代ニ鎮ニ三諸山ニ而助ニ神器之昌運ニ也云々と有は此の事なり 但此社記の七月は六月を寫誤れるなる可し師の天朝無窮暦に據て考るに六月は甲寅朔なれば丁卯は六月十四日に値れるなり 倭大穴持命の和魂は王身に服ひて壽命を守り神器の昌運を助奉らせ給はむの御心に坐故に其を皇御孫命の靜り坐む大和國に豫きに鎮め置せ給へるなり 又此事に就て天照大御神の和魂を止由氣大神に副奉らせ給へる御旨を想像り奉る可し凡て和魂は其御身に服て守らせ給ひ其御身を助け給ふ趣に見えたり 又此時荒魂の事をも申させ給へりけむを此詞に漏せるは此も由有る事なり其は右の社記の文にも荒魂服ニ王身ニ在ニ大殿內ニ而爲ニ寶器之衛護ニと有か如く和魂と同じく王身に服ひ乍も其守る所異にて有か上に其御靈形は其國避の時に奉らせ給ひけるか故に此には擧られざりつる者なり此は下に亦名大國魂命の御名を註す所に云へし 其大凡は新年祭生國足國の下に云り立復りて見合す可し又此次に大國魂神の傳にも註り皆功皇后御紀に荒魂爲ニ先鋒ニ而導ニ師船ニと有と和魂云々と有と其異有る事を曉る可し ○八咫鏡爾取託天は八咫鏡を御靈實と爲てなり 馬見岡神社の祝詞に天[illegible]日命乃和御魂乎八咫乃鏡仁取託天八重榊末爾取懸天云々と見えたり此同し例なり字書に託は依憑也と見ゆ 八咫鏡とは神宮の古書に謂ゆる中臺圓形なる八頭花崎（ヤツハナサキ）の鏡なり然るを神代紀に八咫鏡の分注に一云ニ眞經津鏡ニと有は後の書入にて誤なり 眞經津鏡は圓鏡なる事三卷新年祭五謂の下に云るか如し 古事記には八咫を八尺に作て云ニ八阿多ニと有れとも其は語の本を記せるなれば夜多加賀美と訓べき也又右に引る馬見社記には乃鏡と有れとも其も省て訓へし ○倭大物主櫛𤭖玉命登名乎稱天は大國主大神の和魂を皇御孫命の近守神と奉置せ給はむ爲に然御名を稱させ給へるなり如此く御靈を分給へは即一柱神と成坐るなり 記傳十四に此は御靈の事にして現身には非ず」と云ひ二十に大物主神云々と云よりは御靈の事也」とも云れたれとも已に御靈を分坐る上には現身を結はせ給ひて別に一柱神と成坐て萬事も本御身とは別々に成坐る常也 神代紀に是時歸順之首渠者大物主神及事代主神乃合ニ八十萬神於天高市ニ帥以昇レ天陳ニ其誠款之至ニ時高皇產靈尊勅ニ大物主神ニ汝若以ニ國神ニ爲レ妻吾猶謂レ有ニ疏心ニ故今以ニ吾女

三穗津姫ニ配レ汝爲レ妻宜下領ニ八十萬神ニ永爲ニ皇孫ニ奉上護乃使ニ還降ニ之と有は此の結なり其は此詞に己命和魂は其御本體ト坐す大國主大神より白上給ふ語なるか此御紀に昇天と有は大物主神の其御言に隨ひて御自物爲給へるにて陳ニ其誠欵之至ニと有り皇御孫命の鎭坐む大倭國に鎭り居て近守神と仕奉むと申上させ給へるなるか故に其に應へて天神の八十萬神を領て永ふるに皇御孫命を守護り奉れと仰せ給へる者なり偖大穴持命の己命和魂を大御和乃神奈備爾坐と申給へる其後に右の如く天に昇て其誠欵之至を陳ごせ給ひけるに天神の勅以て三穗津姫を配せて天降し給ひければ其時に始て鎭給へるにそ有ける其は御紀の右の文に次て即以ニ紀伊國忌部遠祖手置帆負神ニ定爲ニ作笠者ニ彥狹知神爲ニ作盾者ニ天目一箇神爲ニ作金者ニ天日鷲神爲ニ作木綿者ニ櫛明玉神爲ニ作玉者ニ乃使下太玉命以弱肩被ニ太手繦ニ而代ニ御手ニ以祭中此神上者始起ニ於此ニ矣且天兒屋命主ニ神事之宗源ニ者也故俾下以ニ太占之卜事ニ而奉上仕焉と有は必此大物主神を大御和に鎭り令坐給ふ時の事なるなり然れは此下に云ゆる三柱の神等の鎭坐しも其同時なる事云も更なり猶下なる神乃禮自利の下に云事を見合す可し彼天神の大己貴神に夫汝所治顯露之事宜ニ是吾孫能治ニ之汝則可ニ以治ニ神事ニと仰給へるに對へて大己貴神の吾所レ治顯露事者皇孫當レ治吾將ニ退事ニ幽事ニと申給へる如く其事を承諾たる由を明せり然れは是時に大物主大神の其誠欵の至を陳し給ふとして天上に率給へりし神々は己命の天下を主領き給へりし御勢ひに就て令從たるも歸順ひたるも有つらめとも如此き天神の大御命を蒙り奉給へる上は受張て此國土に在と有ゆる神々は此御本體と坐す大國主大神は更なり其和魂大物主大神に屬奉りて皇御孫命の朝廷を守護り奉る可き御定なる者也卷二生島神詞の條に云る荒魂大國魂神の註に引る垂仁天皇御紀なる倭大神の言に天照大神悉治ニ天原ニ皇御孫尊專治ニ葦原中國之八十魂神ニ我親治ニ大地官ニと見えたる如く同じ大神の和魂荒魂に坐せども其持分て掌給ふ所なり記傳二十十六丁に有り文を引て其說に云く物主とは八十萬神の首渠と爲て皇御孫命を護奉るを以て神之大人と云むか如し凡て物と云稱は萬に泛く亘る中に人を指て云事多し譬へは此人彼人を此者彼者とも云類にて此も然なり其は神は神代の人なる故に彼八十萬神を指て物とは云り又神代紀に葦原中國之邪鬼と有る邪鬼を私記に安之岐毛乃と訓み又尸者を毛乃萬佐と訓み中昔に毛乃々氣なと云る此等の例に依らば皇御孫命を守奉る神靈の方に就て云か何れに在れ彼八十萬神を云ことは違はざるなりと有る如く物と云稱は萬物の名を其と指すして泛く云中に主とは神を云事なるか故に御門祭詞に四方四角與利疎備荒備來武

天穗麻我都比登云神乃云々と有る其同し事を同神の祈年祭詞には辣夫留物能云々と云ひ又道饗祭詞には根國底國與理荒備辣備來物爾云々など神と云を物とも云ひ又萬葉集中に毛乃と云ふ辭に鬼字を書るも其類なる事已に右の詞共の註に云る如くなれは皇御孫命を守護り奉る八十萬神の主宰たる意の御名なる事更に論ひ無き所なるか倚考るに雄略天皇七年御紀に三諸岳神の事を或云此山之神爲二大物代主神一也と見え神名式に播磨國完粟郡大倭物代主神社と見えたるを合せて思ふに大物主と申すよりは委しき御名にて事代主神に相對へたる御名なり然れは右の物には八十萬神も其物の中にて有るへけれとも猶泛く國土に在る萬物に主たる由にて大國主と混かし云る御名の用に就て云なり（然思ゆる所由は崇神天皇十年御紀に物實此云二望能志呂一と見え實基本紀に心御柱を富物代と云り此實に依れば古事記に物實因二我物一所レ成と有も其例に訓へきなり今も代物なと云るに右の物實と同じきを思ふ可し下に神乃禮白利の所を云を見合す可し）櫛㼐玉命の櫛は例の奇異なり㼐玉は御父大神を櫛御氣野命と申せる御氣は衣食住と成る物の主と坐神なるに對へて其御魂神と申せるなり凡て其魂神と申すは即其物に主たる神有る其神に屬て其幸ひ給ふ御魂を幽賛る謂なる事上に櫛御氣野命の下に委しく此事をも渾て云るか如し見合せて曉る可きなり神名式に伊豆國那賀郡㼐玉命神社武藏國那珂郡㼐𤭖神社等見えたるは共に同神なる可し然るは大物主神と申して下を省る例に上を省ても申せるなり（後釋に瑪は伊加と同じくて嚴く健き由なり凡て神名人名に美加と云ふ皆同じ」と云れたる其義をなさきるには非れとも御父子共に相對ひ給へる御名に心を着て深く思ふ可き事なり此は酒に依れる御名そなど解傳す類は取に足す）大御和乃神奈備爾坐は大穴持命の此國土を皇御孫命に避奉給ふか故に其大宮敷坐む大倭國に和魂を鎭給はむ由を申上給ひて天高市より其子事代主神及八十萬神を領て天に昇給ひけるに天神の御命以て三穗津姫を配せて天降し給へりけるに此より前に國作の時に其幸魂奇魂神を齋奉らせ給ふ三諸山に其御魂を鎭め留め給へる者なり（然るを右の幸魂奇魂神を和魂の德用（ハタラキ）なりと云める說の多在るは右の二を取混らしたる也下に云を見よ）偖神代紀に自後國中所レ未レ成者大己貴神獨能巡造遂到二出雲國一乃興言曰夫葦原中國本自荒芒至二及磐石草木一咸能强暴然吾已摧伏莫レ不二和順一遂因言今理二此國一唯吾一身而已其可三與レ吾共理二天下一者蓋有レ之乎于時神光照レ海忽然有二浮來者一曰如吾不レ在者汝何能平二此國一乎由二吾在一故汝得レ建二其大造之績一矣是時大己貴神問曰然則汝是誰耶對曰吾是汝之幸魂奇魂也大己

貴神曰唯然廼知汝是吾之幸魂奇魂今欲二何處住一耶對曰吾欲レ住二於日本國之三諸山一故即營二宮彼處一使二就而居一此大三輪之神也と見えたる此幸魂奇魂と申すは此大己貴大神に局らす凡ての神にも人にも御魂を共副て其身體を守護り其作用を萠助給ふ神に坐て即高皇產靈神神皇產靈神なる事余深く得たる所有て祈年第三詞の註に云るか如し三諸山に坐神と云に深く泥みて大物主神と混同に爲る說は强言なり然るは此同し事を古事記には於是大國主神愁而告吾獨何能得レ作二此國一孰神與吾能相二作此國一耶是時有レ光レ海依來之神一其神言能治二我前一者吾能共與相作成若不レ然者國難レ成爾大國主神曰然者治奉之狀奈何答二言吾者伊二都岐奉于倭之青垣東山上一此者坐二御諸山上一神也」と見えたる是若大穴持命の和魂を祭鎭め給へるならむには此詞に國避の時に當りて皇御孫命乃靜坐牟大倭國申天己命和魂乎云々皇御孫命能近守神登貢置天八百丹杵築宮爾靜坐支」と有る文は後より儲けて云に成て可惜古傳を亡なふ事なり偖其御諸山上神は其神の御言に倭之青垣東山上に齋奉れと詔給へるに本據て此を神名式に索るに神坐日向神社 大月次新嘗

と有そ其御社なりける內藏寮式に日向王子と有るは此社なる可し王子とは枝社の謂を以當時俗に云習はしたるを以記されたりと見ゆ 但右の神代紀にも古事記の如く記さる可きを此大三輪之神也と有は此詞の旨に合す如何なる事なり今此を分て云は丶三諸山神と申すはこの日向神社の事なり此社今も山頂にありて高宮と云と云り若て三代實錄に貞觀元年從五位上を授らる丶由見えたり偖大三輪神と申すは即大物主神社に當れ丶は書紀の趣にては紛はしきなり

然れは大穴持命の國作の時に其御靈を蒙り奉給ひし幸魂奇魂を治奉れる御諸山に己命の和魂を鎭置て皇御孫命の近守神と奉らせ給へるにて神名式に大和國城上郡大神大物主神社 名神大月次相嘗新嘗 と有て右の神坐日向神社と並ひて其先に在る是なり但式の趣にては何座とも記されされは官より被祭る所は一柱に在れとも大三輪三社鎭坐次第記に當社古來無二寶倉一唯有二三箇鳥居一而已奧津磐座大物主命中津磐座大己貴命邊津磐座少彥名命と但往古より鎭坐す所は上の二柱にて少彥名命を配祭れるは磐余甕栗宮の御世なる由下に見えたり 但崇神天皇八年書紀歌に宇摩佐開瀰和能等能々阿佐妬珥毛伊弟氏由介那瀰和能等能渡塢と詠る朝戶殿戶は更也古事記同段にも至二美和山一而留二神社一と見えたれは古來より寶倉有し狀に聞えたるに此は後に書社の嬖て後に記せる文なるに依て無二寶倉一と云るにかと猶考るに右の歌の朝戶殿戶は其社の酒殿に云るにて神社と云も右の三鳥居の所を云なり寶倉無きに社と云は伊勢の瀧祭社などの例も有れば此社記の趣實に然る可し記傳廿三に古は御殿有つと見えて云々日本紀略に長保二年七月十三日奉二幣廿一社一依二大神社寶殿鳴一也有二辭別一と見え童蒙抄に三輪明神の社に參て此女に逢べき由を祈申す程に御社の御戶を押開き見え給ふなど

も見えたり」と云れつれど今の御山の状を見奉るに山を後にして三島居り其左右は瑞■にて囲みたり神の在す所に實に森倉にて其左に寶殿有り其三島居の前に拝殿有り其なる社と云へければ難無し■■次官記も古書なれば其に在にもで宜しかる可き和名抄郷名に大神於保無和とあるは於保美和を音便に呼るなり大神字を然訓せたるは記傳廿三（五十四丁）に古大倭國に皇大宮を敷坐りし御代には此美和大神を殊に崇奉らして唯に大神と耳申せは即此神の御事なりしから遂に其文字を即大美和と云に用る事とそ成れりけむ」と有か如し倩此詞及神代紀古事記等に美和とは有る事なれとも右の次第記に載る幸魂奇魂を鎮祭る古傳を擧たるに對曰欲レ住ニ於日本國青垣山一故即營ニ御室於ニ大倭國磯城縣青垣山一使ニ就而居一故號曰ニ御諸山一（或作ニ三諸山一）此大三輪大物主神也と有は日本紀の異本を引るなる可きか此に因て甚了然たり其始青垣山と云ふ地名なりしを其幸魂奇魂を祀給ふと爲て御室を營給へるを以て三諸山と云しを後に三輪とは云るなり（但此に大三輪大物主神也と有は誤なり上にも云る如く其時のを大物主神と爲る時は此詞の旨に違へる耳ならず凡ての古書に合ふ所無し記傳十二御■の下に御諸とは何處に在れ神社の事なるに此山にしも其名を負るは取分て此大神を齋崇めるからなり今京に祭ると云へば賀茂祭山と云へば三枝山なるが如し」と見えたり此後に大物主大神の鎮坐す山は■に然有可き事なりかし）倩古事記白檮原宮段に美和之大物主神と有は後に出來たる名を前に及ぼせるが上に其段に載たる故事は山城風土記の傳の混れにて其實は水垣宮段なる意富多々泥古の出自を云る故事と一に在て其は神代紀に又曰事代主神化ニ爲八尋熊鰐一通ニ三島溝樴姫（或云ニ玉櫛姫一）而生兒云々と有る是正説なる事下に事代主命の下に云か如し（其は白檮原宮段に三島之湟咋之女名勢夜陀多良比賣其容姿麗美故美和之大物主神見感而其美人爲大便之時化ニ丹塗矢一自ニ其爲大便之溝一流下突ニ其美人之富登一爾其美人驚而立走伊須々岐伎乃將ニ來其矢一置ニ於床邊一忽成ニ麗壯夫一即娶ニ其美人一生子名謂ニ富登多々良伊須々岐比賣命一云と有は山城風土記に見ニ角身命娶ニ丹波國神野神伊可古夜日女一生子曰ニ玉依日古一次曰ニ玉依日賣一玉依日賣於ニ石河瀨見小川之邊一遊爲時丹塗矢自ニ川上一流下乃取挿ニ置床邊一遂感孕生ニ男子一云々と有る此より紛ひたる傳なり此事下に山城風土記及諸を擧て辨たるが如し又古事記水垣宮段に意富多々泥古命の申せる言に僕者大物主大神娶ニ陶津耳命之女活玉依毘賣一生子名櫛御方命云々と見え同天皇七年御紀に問ニ大田々根子一曰汝其誰子對曰父曰ニ大物主大神一母曰ニ活玉依媛一陶津耳之女亦云ニ奇日方天日方武茅渟祇之女也と有る此陶津耳命は建角身命なる可し然思ゆる由は神名式に和泉國大鳥郡陶荒田神社と見え姓氏録和泉國神別に荒田直高魂命五世孫劔根命之後也と有る劔根命は其子に當る事を思得て神武天皇御紀の傳に云か如くなれば然れば事代主神化ニ爲八尋熊鰐一通ニ三島溝杭（又■■）女活玉依姫生ニ一男二女一兒天日方奇日方命妹姫蹈鞴五十鈴媛命次妹五十鈴依媛命と有て其を大田々根子命の祖と爲るぞ正説と聞えたる其は大物主大神の御子と爲る紀記の傳は其大神のさし坐しし事より混れたるにて姓氏録にも大物主命の孫櫛日方命と有も同じく其紀記の誤を承て記されたるものと思しければ今は御事紀の方の正しきに從ひつ）崇神天皇の大御代迄も御諸山と云ける證は古事記に以ニ意富多々泥古命一爲ニ神主一而於ニ御諸山一拜ニ祭意富美和之大神前一と有は更なり御紀四十八年の下に天皇勅ニ豐城命活目尊一云々兄豐城命以ニ夢辭一奏ニ于天皇一曰自登ニ御諸山一向レ東而八廻弄槍八廻擊刀弟活目尊以ニ夢辭一奏言自登ニ

御諸山之嶺縄絚四方逐食粟雀と見え其より前十年の下に倭迹々日百襲姫命爲大物主神之妻然其神常晝不見而夜來矣倭迹々姫命語夫曰君常晝不見者分明不得視其尊顔願暫留之明旦仰欲覲美麗之威儀對曰言理灼然吾明旦入汝櫛笥而居願無驚吾形爰倭迹々姫命心裏密異之待明以見櫛笥遂有美麗小蛇其長大如衣紐則驚之叫啼時大神有恥忽化人形謂其妻曰汝不忍令羞吾吾還令羞汝仍践大虚登于御諸山 と有を以知へし偕土佐風土記に倭迹々媛皇女爲大三輪大神婦每夜有一壯士密來曉歸皇女思奇以綜麻貫針及壯士之曉去也以針貫襴及旦也看之唯有三輪遺器故時人稱爲三輪村社名亦然と有は古事記には活玉依毘賣の故事なるを此は異なる傳なるか如くなれとも風土記の傳の方古説なる可し其は記の書成て後に然る異説を傳る事は別に憶なる事有るが故なり然れば此三輪の故事は同じ大物主大神の倭迹々姫命に通ひ坐る間に前に在し事なる可し皇女の始より異しく所思しけるに竟して其麻の三輪山に至れる故に愈異しく成給ひける故に右の書紀の傳の如くに再物爲させ給へる成る可ければ同し皇女に二度有し事の一は別の故事に混れ入つる者なりけり其は古事記に耳有て書紀の方には右の三輪の故事を省かれたるは心を用たる所有る所爲と所思たり 古事記に此謂意富多々泥古人所以知神子者上所云活玉依毘賣其容姿端正於是有神壯夫其形姿威儀於時無比夜半之時儵忽到來故相感共婚供住之間未經幾時其美人妊身爾父母怪其妊身之事問其女曰汝者自妊無夫何由妊身乎答曰有麗美壯夫不知其姓名每夕到來共住之間自然懷妊是以其父母欲知其人誨其女曰以赤土散床前以閇蘇紡麻貫針刺其衣襴故如教而旦時見者所着針麻者自戸之鉤穴控通而出唯遺麻者三勾耳爾即知自鉤穴出之狀而從絲尋行者至美和山而留神社故知其神子故因其麻之三勾遺而名其地謂美和也と有は倭迹々姫命の故事の活玉依毘賣の事に成れりし古き諺の有を取れるなり又舊事紀には右の故事を神代に泝せ記して其始に大己貴命乘天羽車大鷲而覓妻と有は下に引る駿河風土記なる御穗神社の故事を取紛らしたるなり天より降給ふにこそは天羽車大鷲にも乘給はめ國土にて有る御妻間には似着しからす又姓氏錄大和國神別に大神朝臣素佐能男命六世孫大國主之後也初大國主神娶三島溝咋耳之女玉櫛姫夜未曙去未曾晝到於是玉櫛姫績苧係衣至明隨苧尋覓經於茅渟縣陶邑直指大和國御諸山還視苧遺唯有三縈因之號姓大三縈と有は記傳廾三卷に此三輪の故事を三島溝咋耳の女と爲たるは混れ誤れるなり又三島より美和山に到むに茅渟縣を經たる事も地理違へり又苧の三縈遺れるに因て姓を大三縈と云とは心得ぬ事なりと云れたるか如し又大物主を大國主と爲るも作傳とは異なり猶此三島溝咋耳命の女玉櫛媛の事は下に事代主神の所に委しく辨たるか如し 神奈備は神並の義也已にも引る神代紀に宜領八十萬神永爲皇孫奉護と有る如く山にも在れ杜にも在れ神の鎮坐す所には其支神（エダカミ）も共に侍坐す故に然云りと聞ゆ所以に萬葉に神名備之三諸之山とも三諸之神名備山とも續け出雲風土記に神名樋山の地名見えたるも有石神高一丈周一丈許側

有ニ小石神百餘計一と有る此にて神並の義を知るに足れりと云べし同記に城名備山所レ造ニ天下一大神大穴持命爲レ伐ニ八十どもの神造城一故云ニ城名備山一也と見えたるは城を並べたるに依て城名樋山と云には非す柵を並べて城を造給へる故に然云なり又神名火山曾支能夜社坐伎比佐加美高日子命社在ニ此山嶺一故云ニ神名火山一と云るも本より神の鎮坐山に曾伎能夜神來て並坐故に然云る山なり今京になりての地名に神並森と云るも有り　考に神奈備は神の毛理なり毛理の約美なるを通はして備とも云り」と有れども迂遠き說なり又地名の神並森と云も神の坐森と云事なり後釋に近江は淡海と云事なれとも既に國名と成たる上にては其海をば淡海の海と云る例を引れたるも叶はす因に云ふ記傳十二に雄略天皇御紀に謂ゆる三諸岳又石の萬葉の歌なる等は雷山とも神岳とも云る處にて飛鳥の神の坐し山にて此とは異なりと見えたり　神階の事は文德天皇實錄に嘉祥三年十月正三位仁壽二年十二月從二位と見え清和天皇實錄に貞觀元年正月從一位同二月正一位を授奉給へる由見ゆ　其後に無きは已く極位に進み給へる故なり然るを村上天皇康保二年閏八月十六社奉幣の時に大原野の下石上の上に次でられたるは甚可畏き御事なり其より二十二社の定れるに中七社の第二に置て改められず　倭此大神の御事の物に所見たるは鎮座次第記に腋上池心宮御宇天皇御世神明憑ニ吉足日命一曰吾國造大己貴命也太初己命之和魂取ニ託八咫鏡一名曰ニ倭大物主櫛𤭖玉命一鎮ニ坐大三輪神奈備一云々令下造ニ瑞籬一奉上崇焉隨ニ神託一立ニ瑞籬於大三輪山一遣ニ吉足日命一令ニ崇齋一大己貴命大物主命詔ニ吉足日命一自レ此以後可レ爲ニ宮能賣一是神宮部造先祖也と有り此に因れは往古より大己貴命も其和魂と共に鎮坐しつるは表には大物主神を以て被祭給へり若て此御託は大倭社注進狀に依に孝昭天皇元年六月甲寅朔丁卯なり其文次に大國魂神の御傳に引るが如し

但姓氏錄山城國神別天神に神宮部造葛城猪石岡天降神天破命之後也六世孫吉足日命磯城瑞籬宮御宇天皇御世天下有レ災因遣ニ吉足日命一令レ齋ニ祭大物主神一災異即止天皇詔曰消ニ天下災一百姓得レ福自レ今以後可レ爲ニ宮能賣神一仍負ニ姓宮能賣公一然後庚午年籍註ニ神宮部造一也と有て孝昭天皇の御世の事を崇神天皇の御世の事と爲り何れ可(ヨロシ)からむと備考るに孝昭天皇御世の方勝る可し其は其御世に吉足日命を以て令祭給へりしかとも又崇神天皇御世に意富多々泥古命を以祭らせ給はむ事を請坐ると所思しきを紀記共に其事を載さるに心を着へし此には神の御言を天皇の詔と爲たれとも此時のは神の可レ爲ニ宮能賣一と宣へるを受給ひて宮能賣公と被任たりと見ゆ宮能賣の事は大嘗祭の下に已に云り又同錄左京神別天神に宮部造天璧立命子天背男命之後也と有れば天破命は天背男命の亦名なる可し此神の子孫にして大物主神を祭る所由は今詳ならざれども其は天石門別神の御事なるに就て思ふに神の御門の邊に侍ふを以て宮能賣とは負せ給へるなる可く所思ゆ

古事記水垣宮段に此之天皇御世役病多起人民死爲レ盡爾天皇愁歎而坐神牀之夜大物主大神顯ニ於御夢一曰是者我之御心故以ニ意富多々泥古一而令レ祭ニ我御前一者神氣不レ起國安平是以驛使班ニ于四方一求下謂ニ意富多々泥古一人上之時於ニ河內之美努村一見ニ得其人一貢進云々於是天皇大歡以詔之天下平人民榮即以ニ意富多々泥古命一爲ニ神主一而於ニ御諸山一拜ニ祭意富美和之大御

前云々因此而役氣悉息國家安平也と有る此を御紀には七年春二月丁丑朔辛卯詔曰昔我大祖大啓鴻基其後聖業逾高王風博盛不意今當朕世數有災害恐朝無善政取咎於神祇耶盍命神龜以極致災之所由也於是天皇乃幸于神淺茅原而會八十萬神以卜問之是時神明憑倭迹々日百襲姬命曰天皇何憂國之不治也若能敬祭我者必當自平矣天皇問曰敎如此者誰神也答曰我是倭國域內所居神名爲大物主神時得神語隨敎祭祀然於事無驗天皇乃沐浴齋戒潔淨殿內而祈之曰朕禮神尙未盡耶何不享之甚也冀亦夢敎之以畢神恩是夜夢有一貴人對立殿戶自稱大物主神曰天皇勿復爲愁國之不治是吾意也若以吾兒大田々根子令祭吾者則立平矣亦有海外之國自當歸伏秋八月辛卯朔己酉倭迹速神淺茅原目妙姬穗積臣遠祖大水口宿禰伊勢麻績君三人共同夢而奏言昨夜夢之有一貴人誨曰以大田々根子命爲祭大物主大神之主亦以市磯長尾市爲祭倭大國魂神之主必天下太平矣天皇得夢辭益歡於心布告天下求大田々根子即於茅渟縣陶邑得大田々根子而貢之天皇即親臨于神淺茅原會諸王卿及八十諸部而問大田々根子曰云々天皇曰朕當榮樂云々十一月丁卯云々即以大田々根子爲祭大物主大神之主又以長尾市爲祭倭大國魂神之主云々於是疫病始息國內漸謐五穀既成百姓饒之と見えたり此より前に孝昭天皇御世に吉足日命を宮能賣公と爲て祭らせ給へれども神主を定めて祭らせ給へるぞ此御世には有ける（記傳に此御社は此御世に今始て准給へる如くに聞ゆめれど然には非ず既に白檮原宮御段にも美和之大物主神と見え下文なる三句の故事に至美和山而留神社と有も往昔の事なるをやと云れし其如くにて此は其神主を定て其祭に仕奉る始を云るなり）又御紀に八年夏四月庚子朔乙卯以高橋邑人活日爲大神之掌酒冬十二月丙申朔乙卯天皇以大田々根子令祭大神是日活日自擧神酒獻天皇仍歌之曰許能瀰枳破和餓瀰枳那羅孺椰磨等那殊於明望能農之能介瀰之瀰枳伊句臂佐伊句臂佐如此歌之宴于神宮即宴竟之諸大夫等歌之曰宇磨佐開瀰和能等能々阿佐妬珥毛伊弟㐧由介那瀰和能等能渡嗚於是天皇歌之曰宇磨佐階瀰和能等能渡嗚阿佐妬珥毛於辭寐羅箇禰瀰和能等能渡嗚即開神宮門而幸行之と見えたるは公事根源に見えたる四月十二月上卯日大神祭の起なり鎮座次第に卯日祭者夏四月冬十二月上卯日若有三卯時中卯日行

之と有り右の卯日と云中にも乙卯を殊に取れりと見えて御紀十二月なるは上卯に有べきを下卯に被祭れ又下に引る磐余甕栗宮段にも十月乙卯日を以て令祈給へり偖如此く此事無き御祭なるか神祇令貞觀儀式延喜式江次第等に被載ざるは已く朝廷より幣物を被奉る事は停ながらも其社にて往古よりの例の随に行へる者也如此く天皇を始奉りて官々の人等も其祭場に集會て甚しき祭なりしに依てこそ御紀には被載けめとも後には廢絶たる者也（右の四月には卯日三有か乙卯に十六日に當りて中卯なり十二月には卯日二有て乙卯は廿日にて此は下卯なるも例と違れる者なり凡ての神祭は其祭初たる日を取て後の例と爲る常ノ事なり然るに公事根源に此祭は貞觀の頃より始りけるにやと有は深くも古を不考されさる説なり神功皇后御紀に於九月庚午朔己卯立二大三輪社一以奉二刀矛一矣と有此は筑前國にての事なれども卯日を以て祭らるゝ例なり）右の七年御紀に就て考るに神祇令に季春鎭華祭出たる其義解に謂二大神狹井二祭一也在二春華飛散之時一疫神分散而行レ癘爲二其鎭遏一必有二此祭一故曰二鎭華一と見えたり狹井は神名式に大和國城上郡大神荒魂神社五座と有る此大神は大物主神に非ず大己貴命の同社に坐を以云り其は鎭座次第記に狹井社大己貴命荒玉也と見え大倭社注進狀にも傳聞狹井神者大己貴命荒魂大國魂神即當社別社也云々所謂大市長岡岬今狹井社地是也と見ゆ然ば大倭社の舊地なる故に其社に遷奉れる後も猶御靈を留めて祭れる也偖此祭は彼七年二月に神の御諭し有て十一月に大物主大神倭大國魂神を祭らせ給へる例を本の春に復して季春に被祭るなんめり四時祭式三月祭條に鎭花祭二座と有て次に大神社一座云々狹井社一座云云と幣物を載せ其終に右幣物依二前件一付二祝等一令レ供祭と見えたり然れども古の狀よりは甚く省略たる事也偖右の四月十二月のは恒例の祭にて鎭花祭は疫を除かむ爲のなれば何日とも定れる日無く唯其季春の間に被行ゝ也（令集解釋に大神狹井二處祭大神者貴部請二受神祇官幣帛一祭レ之狹井者大神之麁御靈也云々と見ゆ其云云は此祭レ之時疫神分散之時一神其散而行レ疫已爲レ止其散祭レ之也と有る事なれども此は甚しき僻事なり其は此二神には大己貴命の和魂荒魂に坐せば世中の事は善も悪しきも其御心に依る事は云も更なるか散り時に散て疫を行ふと云事やは有べき此は季春の頃なとは疫の多き時なるか故に此二神を祭て其行疫神を鎭遏めさせ給はむ事を祈申さるるなり大倭社注進狀に狹井社相殿神四座大物主神姫蹈韛五十鈴姫命勢夜多々須比賣事代主命と見えたり此社は三輪社の北狹井川の南に在り今花鎭ノ社こ狹井神社と云と云り上野國佐位郡大國神社神名式に見え同國神名帳に廿日郡從五位上佐位明神と見えたり郡名も神名も由有るは大和より移せるにや）又鎭座次第に磐余甕栗宮御宇天皇勅二大伴室屋大連一奉二幣帛於大三輪神社一祈下請無二皇子一之儀上時神明憑二宮能賣一曰天皇勿レ慮レ之何非レ絶二天津日嗣一哉上古吾與二少彦名命一戮レ力一レ心所二以經二營天下一其所以而今少彦名命來二臨吾邊津磐座一與二吾及和魂一共能可二敬祭一守二皇

孫濟人民矣於是起立磐境崇祭少彦名命于時天皇元年冬十月乙卯日也と有る此は清寧天皇の御事なるか古事記に此天皇無皇后亦無御子故御名代定白髪部と見え御紀に二年春二月天皇恨無子乃遣大伴室屋大連於諸國置白髪部舍人白髪部膳夫白髪部靫負冀垂遺跡令觀於後と有は天皇皇后を御給はざりし故に皇統の中にて然る可き皇太子を得させ給はむ所思して祈給へる者なる可し此時より少彦名命を併祭らせ給へる其御驗と見えて二年冬十一月來目部小楯播磨國にて顯宗天皇仁賢天皇を見得奉り翌三年正月に宮中に迎入奉りて皇太子と定まらせ給へる事御紀に見えたるが如し但古事記には故天皇崩後無下可治天下之王也於是間日續所知之王也云々と有て聊趣異なり然れども御紀の年紀等も精にて正しきに從ふ可し偖此より大三輪三社と申す事とは成れりしかども猶大己貴命少彦名命は幽(ツラ)にて顯には大物主神一柱にて祓祭させ給へりと見ゆ但三代實錄に貞觀元年正月廿七日奉授大和國大己貴命正一位大物主神從一位と有は諦しく三輪なるなりと見ゆ神名式に吉野郡大名持神社名神大月次新嘗と有か有れとも大物主大神の上に立へくも非れば其には非じ偖大物主大神の后神は神名式に城下郡村屋坐彌富都比賣神社大月次相嘗新嘗と有る此なり其は神代紀に高皇産靈尊勅大物主神汝若以國神爲妻吾猶謂汝有疎心故今以吾女三穗津姬配汝爲妻と有る此は皇御孫命の近守神と令坐給はむ爲に御女を配せ給ひ深く睦ばせ給ふ所なり駿河風土記に盧原郡御穗神社所祭大己貴命又號御穗津彥御穗津比咩命也羽車磯田社雜宮也大己貴命登天上奏歸順條忽乘御天日鷲大日鷲羽車休御穗御崎後其鷲爲社云々と有り斯れば天より駿河に降着給ひ其より大和に鎮坐つるなり鎮座次第記に三穗神社三穗津媛命と有は村屋社の外に別社有か猶考ふ可し天武天皇御紀に村屋神著祝曰今自吾社中道軍衆將至故宜塞社中道故未經幾日廬井造鯨軍自中道至時人曰即神所教之辭是也軍政既訖將軍等擧此三神教言而奏之即勅登進三神之品以祠焉と有る三神とは此より前に著神有し高市神牟佐神を合せて數へたる也又神名式に長門國豐浦郡村屋神社見ゆ此は神功皇后御紀に秋九月庚午朔己卯令諸國集船舶練兵甲時軍卒難集皇后曰必神心焉則立大三輪社以奉刀矛矣軍衆自聚と有る此は神名式に筑前國夜須郡於保奈牟知神社と出たる其にて筑前風土記に氣長足姬尊欲伐新羅整理軍士發行之間道中逃亡占求其由即有祟神名曰大三輪神所以樹此神社遂平新羅と見えたるこの時に此村屋神社は祭給へる者なる可し偖其三穗津姬命は高皇産靈尊の御女と有れども此は大伴の遠祖天津久米命などに縁有る神なる可し大伴室屋大連有り村屋と室屋と言の相通へるも由有り此に就て思ふに萬葉三に皮爲酢寸久米若子我伊座家留三穗乃石室者雖見不飽鴨と有るは三穗津姬命の事には非ず大伴の遠祖にて神武天皇に仕奉れりし大久米命などの其供奉間に留り居給へりし石室と聞えたるが三穗と云も由有け也記傳十二の說は強說(シヒコト)なり其餘萬葉の諸註共に取に足ず○因に云大國主大神の荒魂は大國魂神に坐り神名式に大和國山邊郡大和坐大國魂神社三座と有る是なり神代紀には和魂大物主神荒魂大國玉神共に大國主神の亦名と爲られたるは誤也又古語拾遺に一名大國魂神者大和國城上郡大三輪神是也と有などは愈誤れり偖古事記に大年神娶神活須毘神之女伊怒比賣生子大國御魂神と有は古史徵に神代紀拾遺共に大國主神の亦名と有に古事記には亦名を擧たる所に并有五名と云て此御名の無は別に一神と傳たるが故なり記傳に何神に在れ國を經營坐し功德有る其國々にて國魂とも大國魂とも申て拜祀るなり故諸國に某大國玉神社と云多し此は何國

とも無は倭の大國御魂なり舊事紀に此神の下に大和神也と有は古書に然所見たる事有しかと云れしは然る言なから此神大穴牟遲神を助て殊に倭國を經營し功徳ぞ有けむと云て別神と思はれしは此の錯亂を思得られざりし故なりと有か如し 同社注進狀に大倭神社在大和國山邊郡大倭邑蓋出雲杵築大社之別宮也傳聞大國魂神者大己貴神之荒魂與和魂戮力一心經營天下之地建得大造之績在大倭豐秋津國守國家因以號曰倭大國魂神亦曰大地主神以八尺瓊爲神體奉齋焉と見え同記狹井神社の下に傳聞狹井神者大己貴命之荒魂大國魂神即當社別社也と有り此に困て其荒魂に坐事著明き者なり此文に依て考るに大己貴命の國土を經營給ふ時に此荒魂神も其和魂大物主神と共に各其御業を助奉らせ給ふ者なり凡て某魂神と申す例其主たる神坐て其事を司給ふ其功用を資給ふ神を云る事上に櫛甕玉命の下に云るが如し等しく大己貴命の荒魂和魂に坐せとも其御靈を分れば又各一柱の神と成坐て其本神の御業を助奉らせ給ふ事奇異なる神の御上には常に有て怪しむに足ず常人の上に比べて思ふ可からず又疑ふ可からず 亦曰大地主神と有は荒魂 大國魂神の別號なり名義は垂仁天皇御紀なる倭大神の御誨に太初之時期曰天照大神悉治天原皇御孫尊專治葦原中國之八十魂神我親治大地官と見えたる此を記傳に大地官とは大地を掌り守る官職の意也と云れたるが如し借國々の國魂神と申すは此の神の支神と聞ゆるが各々一區の域を經營て其地に地主たる事此亦名に依て所知る又古語拾遺に昔在神代大地主神營田之日云々祭御歲神之緣也と有も此大國主神に坐り當社の相殿に御歲神を配せ祭る由緣此なり下に云が如し二十二社本緣に大汝神乎波大地主都毛云奈利と有て此を荒魂の別名とは云されとも大地主神と申す名の例なり此は國々の地主神を合せて其に主宰と坐故に大地官とも大地主神とも申せるなり借此地主を發許努斯と謂の謂るぞ宜(ヨ)き以八尺瓊爲神體奉齋と有る此八尺瓊の事凡て神典に考る所無か如くなれども崇神天皇六年御紀の文に先是天照大神倭大國魂二神並祭於天皇大殿之內と見えたれば神代より天璽と並べて皇大宮に合坐奉給へる狀なるを何れの時如何なる由に緣て奉らせ給ふとも知られざるを出雲風土記意宇郡ノ條に飯成郷大國主命天降坐時當此處而御膳食給故云飯成と有れば其和魂大物主神と共に天上に參昇給へりしなり然れば右の太初之時期曰云々の御言は其時に天神に奏給へりけむを其より前に八尺瓊は獻上給ひて國避の信物(ミルシノモノ)とは成し給ひけるなり此に就て神代紀を立復りて見に吾將自此避去即躬(ミツカラオキ)披瑞之八坂瓊而長隱者矣と有る躬(ミツカラナク)披の二字は身自其信物を置給へるなれば此ぞ大國魂神の御靈と

爲て天より降し給へる八尺瓊なるを其奉れる事をも其降し給へる事をも紀記共に傳漏せりしを崇神天皇御紀の文に合せて其神代の正說は跋り知るめり 師の古史に大物主神の昇天の所に次られたるは卓見と云へし又太初之時云々の文なら其に加へて其徵に是時期給へるならで何時か有む」と云れたるは實に然る言なり 又註進狀に家牒曰腋上池心宮御宇天皇孝昭元年秋七月甲寅朔遷二都於倭國葛城一丁卯天皇夢有二一貴人一對二立殿戸一自稱大己貴命曰我和魂自二神代一鎭二三諸山一而助二神器之昌運一也荒魂服二王身一在二大殿內一而爲二寶器之衞護一即得二神敎一而天照大神倭大國魂神並二祭天皇大殿之內一と有る如此くは此時初て大殿の內に祀給へるが如くなれども然らず服二王身一在二大殿內一と有れば往古より大御許近く令坐奉給へるを殊更に天照大御神に並べて相殿に令坐て尊崇み祭給へりと云事也 此文の秋七月は夏六月の誤なる事此文和魂の注に用有て其下に引て云るが如し大三輪三社鎭座次第記に腋上池心宮御宇天皇御世神明憑二吉足日命一曰吾國造大己貴命也云々今下遣二瑞籬一奉崇上秀隨二神託一立二瑞籬於大三輪山一云々と有と不遠からぬ間に在し事成可し 崇神天皇御紀に六年百姓流離或有二背叛一其勢難二以レ德治一レ之是以晨興夕惕請二罪神祇一先レ是天照大神倭大國魂二神並二祭於天皇大殿之內一然畏二其神勢一共住不レ安云々以二日本大國魂神一託二渟名城入姬命一祭然渟名城入姬命髮落體瘦而不レ能レ祭と有るは皇大宮を離ちて佗處に令坐奉る始なり記傳十二三十二丁に此文を引れたるに祭然の間に其地名の字有つらむを脫せるなる可しと云れたるは實に然る言なり倭渟名城入姬命に託奉給へるは皇大宮にて此皇女の齋祭給へりし神なる故に其神を外處に遷奉給へるにも屬奉給へる者也然らざれば卜定などの事も聞えぬに髮落ち體瘦て其祭に得任給はざる皇女に託給ふ可き理無きを思ふ可し 此事卷十三伊勢齋宮の條に委しく云りき倭右の倭大國魂神の倭字を和に誤れるなる記傳に和字は倭を後に寫誤れるなり書紀の誤れる時未和字を用たる事無し」と有に依て改引る所なり 同七年御紀に秋八月癸卯朔己酉倭迹速神淺茅原目妙姬穗積臣遠祖大水口宿禰伊勢麻績君三人共同夢而奏言昨夜夢之有二一貴人一誨曰以二大田々根子命一爲下祭二大物主大神一之主上亦以二市磯長尾市一爲下祭二倭大國魂神一之主上必天下太平矣天皇得二夢辭一益歡二於心一云々十一月丁卯云々即以二大田々根子一爲下祭二大物主大神一之主上又以二長尾市一爲下祭二倭大國魂神一之主上云々於レ是疫病始息國內漸謐五穀既成百姓饒之と有る市磯長尾市は下に引る垂仁天皇御紀に大倭直祖と見えたれば大倭國造にして倭大國魂神を齋奉る事幽契有る者なりけり 但市磯は十市郡の地名なれば其に在て齋祭れるならむかと猶考るに神武天皇御紀に以二珍彥一爲二倭國造一と見えたれば既くより倭國

遣にて在しかば古磯は長尾市の産土なる可し古へイニシへ母の許に在て生る丶常なる故に其地名を冒る多かり　又垂仁天皇御紀に一云天皇以二倭姫命一爲二御杖一貢二奉於天照大神一是以倭姫命以二天照大神一鎭二座於磯城嚴橿之本一而祠レ之然後隨二神誨一取二丁巳年冬十月甲子一遷二于伊勢國渡遇宮一是時倭大神著二穗積臣遠祖大水口宿禰一而誨レ之曰大初之時期曰天照大神悉治二天原一皇御孫尊專治二葦原中國之八十魂神一我親治二大地官一者言已訖焉然先皇御間城天皇雖レ祭二祀神祇一微細未レ探二其源根一以粗留二於枝葉一故其天皇短命也是以今汝御孫尊悔二先皇之不一レ及而愼祭則汝尊壽命延長復天下太平矣時天皇聞二此言一則仰二中臣連遠祖探湯主一而卜レ之誰人以令レ祭二大倭大神一即渟名城稚姫命食レ卜焉因以命二渟名城稚姫命一定二神地於穴磯邑一祠二於大市長岡岬一然是渟名城稚姫命既身體悉瘦弱以不レ能レ祭是以命二大倭直祖長尾市宿禰一令レ祭矣と見えたる此は甚珍らしき傳なるが即渟名城稚姫命食卜より以下は崇神天皇御紀の中に在る事の再混れて出たるなり其は上に御紀を引て註せるが如し前朝六年より當今廿六年迄の間大市長尾岬に令坐奉れりしを今年大倭邑に移し奉けむを右の如く傳誤れる者なり穴磯邑は三輪山の北に續きたる地にて大市長岡岬は狹井社地なる事上に云るが如し思ふに六年御紀に其祭れる地名を脱されたれば此文は其（ソコ）に在べき事也然れば渟名城稚姫命食卜以下は前朝六年七年御紀に加ふ可き文なり　倭大初之時期曰云々の御誨は高天原に參上給ひし時天神の御許に白上給へりし事を天皇に誨奉給へるなり倭右文に先皇御間城天皇雖レ祭二祀神祇一微細未レ探二其源根一以レ粗留二於枝葉一と有は天皇の八十魂神を治させ給ふ御上に甚止事無く肝要と有る御誨言なり言意は崇神天皇の大御代に天神地祇を祭らせ給ふと雖も微細に其源根を探索させ給はず猶枝葉の末に耳係つらはせ給ひて主と祭祀らせ給ふ可き神も有に然計りは心着せ給はずして祭漏し給へりとの義なり下に今汝御孫尊悔二先皇之不一レ及而愼祭則汝尊壽命延長天下太平矣と懇到に宣へるを以て其神慮を想像り奉る可き事なりかし此文下なる八百丹杵築宮爾靜坐支の下に云を見合す可し顯宗天皇御紀に月神著レ人謂レ之曰我祖高皇産靈有下預二鎔造天地一之功上宜下以二民地一奉上と有る御紀はなども枝葉の末事に御心を留させ給ひしと其源根を探り合給はぬ所也吾輩の古學も亦然り天皇の御爲天下の爲に天地神祇の此世を立給ひ定給ふ其源根を探り明らめ皇祖天神の道に法則りて天下國家を治給ふ大本を取て枝葉の末事にかゝはらず闇に[illegible]の御言に相[illegible]ひて[illegible]しとも云む方無し　倭大國魂神の倭は大倭國を經營らせる謂には非ず其地名を取れるにて大倭大神とも倭大神とも申せる如くなり此は大國主大神の荒魂と坐せば大和國は置て

大日本國にも天下萬國にも大國魂神と坐せば一區の域を以て局奉る可き御名ならぬを思ふ可し記傳に和名抄鄕名に大和（於保夜末止）と有て城下郡に入れり孝謙天皇御紀にも城下郡大和神山と有り山邊郡と界近き處なれば如此も有なり」と有が如く大和の地名は右の二郡に跨れりと所見たり文德天皇實錄に嘉祥三年冬十月乙巳朔辛亥進ニ大和國大國魂神階ニ授ニ從二位ニ清和天皇實錄に貞觀元年春正月戊午朔甲申奉ニ授ニ云々從一位ニと見え註進狀に新國史曰寛平九年冬十二月壬寅朔甲辰奉レ授ニ五畿七道諸神三百四十座各位一階ニ官符云大和國大國魂神奉授ニ正一位ニと見えたり萬葉五に天地能大御神等倭大國靈久堅能阿麻能見虛喩阿麻賀氣利見渡多麻比云々と詠り（此社今新泉村に在又神名式に淡路國三原郡大和大國魂神社名神大と有は何れの時に被遷れたるにや永萬記に二宮と有は此社にて今も上八太（カミハタ）村二宮と云り同式に阿波國美馬郡倭大國玉神大國敷神社二座と有る大國敷神と申すは大國を敷給ふ神と申す事なれば其亦名なるを二柱に分て被祭たる者なり其外諸國に國魂神社の多在るは此神を祀れるも其支神を祭れるも有べきなり）神名式に大和坐大國魂神社三座と有る前神は註進狀に相殿神二坐八千戈神御歳神傳聞八千戈神者大己貴命以ニ廣矛ニ爲レ杖令レ撥ニ平豐葦原之邪鬼ニ是時大己貴命號曰ニ八千矛神ニ神代卷曰大己貴命即以ニ平レ國時所レ杖之廣矛ニ獻ニ皇孫ニ云今我當下於ニ百不足之八十隈ニ將中隱去上矣言訖即躬被ニ瑞之八坂瓊ニ而長隱ニ常世鄕ニ者矣此矛亦上古天皇在ニ大殿之內ニ其藏齋爲ニ八千矛神之神體ニと有る此廣矛は元來岐神の御靈と爲て荒振神を攘伏せ給へる器なるを皇御孫命に奉らせ給へるが其御天降の時に携へ給ひ彼大國魂神の御靈の八尺瓊へ共に崇神天皇の大御世に至る迄皇大宮にて齋祭給へる者也古語拾遺に矛玉自從と有る矛は此廣矛を云ひ玉は彼八尺瓊を云るなるか此を天璽と心得違へて三種神寶を二種と爲る事も此因て出來事也（此事に就て祈年祭生島詞の下に云る事有り考合す可し又廣矛の事は大祓詞道饗祭詞の注及此詞の荒振神の下に云り合せ讀て其旨を曉る可し）御歳神者守ニ護不殺ニ神也是以八束嚴稻爲ニ神體ニと有は師說に神代紀に天照大神勅曰以吾高天原所御齋庭之穗亦當レ御ニ於吾兒ニと有る齋庭之穗なる可し」と云れたるは然る言なり其は古語拾遺に昔在神代大地主神營レ田之日以ニ牛宍ニ食ニ田人ニ于レ時御歳神之子至ニ於其田ニ唾レ饗而還以レ狀告父御歳神發レ怒以レ蝗放ニ其田ニ苗葉忽枯損似ニ篠竹ニ於レ是大地主神令ニ片巫肱巫占ニ求其田ニ御歳神爲レ祟宜下獻ニ白猪白馬白鷄ニ以解中其怒上依レ教奉レ謝ニ御歳神ニ云々仍從ニ其教ニ苗葉復茂年穀豐稔是今神祇

官以二白猪白馬白鶏一祭二御歳神一之縁也」と有は此は大地主神の事始給へる神事なるを皇祖天神の御許に白上給へりしかば其大御命以て皇御孫命に此御年神の祈年祭の法は傳させ給へる由慥なる所見有て其に註るが如く(か)なれば神代より以來大國魂神八千矛神の御靈實と共に皇大宮の内に並祭り給へる事灼然ければ師說を云れたりとは云なり 但此師說は古史傳の說なるを其男鐵胤が講するを聞たる也 然れど其は八束穂稻は齋庭之穗なめりと云る說耳こそ有れ總ての證に於ては異也 又註進狀に別社狭井神社丹生川上神社と有其狭井神社の事は上に已に云るが如し其文に丹生川上神社一座此神者雨師神也式臨時祭 凡奉二幣丹生川上神一者大和社神主隨レ使向レ社奉レ之爲二當社之別宮一也帳大和國吉野郡丹生川上神社一座 名神大月次新嘗 と見ゆ祭神は闇龗神に坐す由諸書に見えたるが如し當社別宮と云事は其后神が御子神とかならぬ懸離れたる神に云ぬ事なるに就て倩思ふに雨師神と申すは雨を施す神にて龗(オカミ)に坐り尾張國内神名帳に大國玉名神憶感名神と並載たるも此の旨に合て由有る事なし 雨師は赤縣にて雨を降す神を云るか其を取て書るか此にも雨爲(アマシ)と云[illegible]の有にて彼を取れるなられと克合へり抱朴子登涉卷に雨師者龍なりと見え風俗通に師曠曰昔黄帝駕二象車一云風伯進レ掃雨師灑レ道云々と見ゆ此にても能なる事は著きを搜神記には赤松子者神農時雨師也とも風伯雨師星也云々なと云て詳ならぬ者に成れり 古事記に故此大國主神之兄弟八十神坐云々各有下欲レ婚二稻羽之八上比賣一之心上共行二稻羽一云々於是八上比賣答二八十神一言吾者不レ聞二汝等之言一將レ嫁二大穴牟遲神一云々故其八上比賣者如二先期一美刀阿多波志都云々其所レ生子者刺二挾木俣一而返故名二其子一云二木俣神一亦名謂二御井神一也と有る此八上比賣は因幡國八上郡の名に因れるが如くなれども神名より地名は起れるにて八上と云は龗と云に近きを其命生給へる子の御井神なるに神名式に當郡久多美神社有は其は出雲風土記に玖潭郷所レ造二天下一大神命天御飯田之御倉將二造給一處覓巡行給爾時波夜佐雨(ハヤサメクダミ)久多美乃山詔給之故云二忽美(クダミ)一と見えたるは暴雨降水と云義なるに合せて萬葉二十二丁に吾岡之於可美爾言而令落雪之云々と詠るをも思ふに決く龗神ならむと所意たり 又神名式に法美郡意上奴神社有り此亦龗神なる可し此を式書に津野井鄉香取村意上山に在り谷深く森茂りて物凄く人の恐れて一人は行難に爲る所なりと云るも山有り式に大和國宇陀郡御井神社有に當郡に丹生神社宇陀水分神社宅生龍穴神社見え又美濃國多藝郡御井神社久々美雄彦神社並着へり此は河内國石川郡美具久留御玉神社の例を引て思ふに泳水男彦と云事なれば同しく龗神の群の神なり此に御井神の事を蓋騰しく云るは其御母神の出自を明さむ爲なり心ある者へし猶二卷座摩神の下に云ふを合せ見るべし 神名式に山城國愛宕郡鴨川合坐小社宅(コモリヤケ)神社 名神大月次相嘗新嘗 と有る川合の例皇大神宮儀式帳に川相神社大水上御子兒細川水神形石坐と見

え神名式に越後國魚沼郡川合神社有を其を今雨降明（アオリ）神と傳たるを其例に式なる相摸國大住郡阿夫利神社今も八大龍王と云れば龗神に坐事云も更なり又儀式帳に小社（コモリ）神社大水上兒高水上命形石坐と有て此二を合せて細川水神高水上神同神なる事被知たり又小社宅の宅と八上と言相近く聞ゆるは同神なる徴と所思たり然らば右の八上比賣本體は龗にて雨を施し給ふ神にて其御祖は闇龗神に坐て丹生川上神なる可し斯る由縁も無に大和社より被祭る事有べくも非れば此を思ひ此を惟ひて如此迄は採索ね出たり又此大國魂神の天下を經營給へる間に殊に其御力を添させ給へるなどの由縁も有なる可し偖右の小社宅神を八上比賣と見れば又賀茂社に副て貴布禰神社の立給ふも大に由有り此小社宅神の事次なる事代主命の下又下なる賀茂雨所大神の下に云るを見べし ○己命乃御子後釋に云く次々三柱に亘れり○阿遲須伎高孫根乃命乃御魂乎古事記に故此大國主神娶坐胸形奥津宮神多紀理毘賣命生子阿遲鉏高日子根神次妹高比賣命亦名下照比賣命此之阿遲鉏高日子根神者今謂迦毛大御神者也と有て大國主神の長子に坐り舊事紀に大己貴神先娶坐宗像奥都島神田心姫命生一男一女兒味鉏高彥根神妹下照姫命と有て下に次娶坐邊都宮高津姫神生一男一女兒都味齒八重事代主神妹高照光姫大神命と有は同神に坐せども異なる御名なるを以て昔より別神の如く傳たるに社は有けれ其に同神にして異名なる者也又同記に大國主神亦娶神屋楯比賣命生子事代主命と有て別神と爲たれども其御母も御子も共に同神の異名なる事下に云か如し又舊事紀にも次娶坐邊都宮高津姫神生一男一女兒都味齒八重事代主神妹高照光姫大神命と有る此も右に同じ但胸形の三神の内にて奥津宮邊津宮の神に娶給ふと有は右の三柱を合せて玉依毘賣命と申す其に御合坐るか故に本御名の方に就て右の如く別の事の如く傳はれるなり山城國鴨御祖神社にては大己貴命玉依姫命と並祭れるを其同神を松尾にては胸形中部大神と云るを思ふ可し出雲風土記神門郡條に高岸郷所造天下大神御子阿遲須枳高日子命甚晝夜哭坐仍其處高屋造而坐之即建高椅而登降養奉故云高岸と見え又同記仁多郡條に三津郷大神大穴持命御子阿遲須枳高日子命御須髮八握于生晝夜哭坐而辭不通爾時御祖命御子乘船而率巡八十島宇良加志給鞆猶不止哭之大神夢願給告御子之哭由夢爾願坐則夜夢見坐之御子之辭通則寤問給爾時御津申爾時何處然云問給即御祖前立去於坐而石川度坂上至留申是處也爾時其津水沼於而御身沐浴坐故國造神吉事奏向朝廷時其水沼出而用初也依此今産婦彼村稻不食若有食者所生子不云也故云三津と見えたる大神は大穴持命御祖命は多紀理毘賣命に坐し夢に願奉し神は天神に坐事云も更なり偖御子の初て御津と申給へるは石川度坂上に至ると夢に見坐るに依て其處と指て奏給へ

るなり若て其津の水沼にて御身を沐浴坐しは御禊を物爲させ給へるなり此驗に依て御子は辭通はし給ひ終に御父大神の國作の御功を資けて甚しき大神と成給へり（此は大神の御子の辭通ひ給はざる所由を所知看まく欲して御夢の御告を天神に乞給ひし故に天神の御心以て御子に御津の御言を令告給ひ其處を教給ひて其地にて御禊を令行給へる者なり此事卷十大殿祠に註せるか如し三津の名の所由を遷却祟神祭詞天若彦の下に云る事有り考合す可し又同記垂迹部條）に神名鐘山古老傳云阿遲須枳高日子命之后天御梶日女命來ニ多久村ニ産ニ給多伎都比古命ニ爾時敎詔汝命之御祖之向位欲下生ニ此所ニ宜上也所謂石神者即多伎都比古命御魂當レ旱乞レ雨時必令レ零也と見えたる天御梶日女神は土佐風土記に土佐郡有ニ朝倉郷ニ郷中在レ社神名天津羽々神天石帆別命今天石門別命子也と有天津羽々神の御事と聞えたり此を約めて阿波々神共阿波神共申せるにや日本後紀に阿波神是三島大社本后也其有は實に愛たき古傳なり其は味耜高彦根神と申すは事代主命の稚く坐し間の御名なるが故に其時の后神と申意にて本后とは傳たる者なり神名式に同郡都佐坐神社大と有る此を高鴨神と傳たるも由有る事なり（然るを林春齋が朝倉神社緣起に當社者古老相傳曰高鴨大明神ニ味鉏高彦根之靈也古老之所レ傳不レ可レ許之乎或云下野國宇都宮社亦是崇ニ祀味鉏高彦根神ニと有は都佐坐神社を朝倉神社に誤れるは惡しけれども其后神に坐より然思違へたるなれば所謂無事には非す此事十四卷遷却祟神詞天若彦の下にも云ひ又此次に說なら見へし）

此神の御事迹の物に所見たるは古事記に阿遲志貴高日子根神到而弔天若日子之喪時自天降到天若日子之父亦其妻皆云々取ニ懸手足ニ而哭悲也其所ニ以過ニ者此二柱神之容姿甚能相似故是以過也於是阿遲志貴高日子根神大怒曰我者愛友故弔來耳何吾比ニ穢死人ニ云而拔下所ニ御佩ニ之十掬劒上切伏其喪屋ニ以レ足蹶離遣此者在ニ美濃國藍見河之河上ニ喪山云者也其持所レ切大刀名謂ニ大量ニ亦名謂ニ神度劒ニ故阿治志貴高日子根神者忿而飛去之と有る此事を神代紀には同傳を載たるに正書一書共に天にての事と爲るは誤なり但一書に味耜高彦根神光儀花艶映ニ于二丘二谷之間ニ云々と有は下照媛の歌の狀に合へり此天若日子か父は天津國玉神は天御梶日女命にも御父にて天石門別安國玉主命に坐るか故に天若日子か爲にも阿遲須伎高日根神は婦兄に坐し又阿遲須伎高日子根神の爲にも天若日子は婦兄なるか故に此の二柱神共に友善ウルハシかりつる者なり（然らずは此二柱神の友善しく坐し所以も詳ならず且其后神の出自も知らしず昔々活眼無き愚說を守るの外無れば如此迄考定めたりき猶天御梶日女命と申すは天御門日女命と云事にて其御父神の御名を負坐るならむと所思たり）師說に阿遲須伎高日子根神事代主神は同神なる由に云れたるは然る言なり思ふに同神には坐せとも大國

主大神に相並はして國土を經營り給へる間の御名を然は申せるなる可し偖御名の阿遲は貴（アテ）なる由にて長（ヒトコノカミ）子の謂なり須伎は鉏にて國作の具なり出雲風土記に伊弉奈枳乃麻奈子坐熊野加武呂乃命與下五百津鉏神鉏所ニ取々ニ而所レ造ニ天下ニ大穴持命二柱大神ト云々と有る如く御父大神の熊野大神より賜はりつる神鉏を事依され奉給へるか故に然負坐る御名なり事代主神の前の御名なりし故に其間に娶給へる后神をも本后と申せる如く凡ての事別神の狀に傳れりしなり其同神なる證は師も云れたるか如く出雲風土記には阿遲須枳高日子命の御名耳有て然計り名高き事代主神の事迹一所にも出ず又紀記の二典共に國避の所に大神の御言に吾子事代主神建御名方神有とは申給へ共長子と坐す阿遲須伎高日子根神有りとは申給はさるを以其同神なる事を曉る可き者なり（已にも云る如く事代主神と申すは物代主神に對へる御名にて此は國土經營の方には非ず此國土の事を知と云ふ御名なり委しくは次に云る條々を見合せて曉る可きなり）神名式なる山城國愛宕郡賀茂別雷神社（亦名若雷名神大月次相嘗新嘗）の祭神を元曆奏上記に事代主命と傳へたるを出雲大社小緣起に山城國加茂大明神者當社第一王子阿式大明神是也と見え異本舊事紀に針間室神社味鉏高彥根大神

山城國鴨上宮同神とも見えたるは同神異名の證也又大和國葛上郡葛木坐一言主神社（名神大月次相嘗新嘗）と有る此一言主神は土佐風土記に有ニ土佐高賀茂大社ニ其神名ニ一言主尊ニ一說曰ニ大穴六道尊子味鉏高彥根尊ニと有を異本一宮記に高賀茂大明神事代主命と見え又神代系圖傳に一言主神此神者大己貴之子事代主神也と見え當麻緣起に圓堂の前に一言主神來座の石有り抑此明神は地祇の根本大己貴神の嫡子事代主神にて御在し坐すとも有り又下野國河內郡二荒山神社大と有る此を一宮記に味鉏高彥根命と見え日光三社記に本宮味耜高彥根命一說事代主命と記し又日光山舊記に事代主命垂跡と有など共に同神なる故に御名の異りて傳れるなり又神社考詳節に高鴨神事代主神者葛城鴨神也とて高鴨を事代主命と爲るも其同神を以てなり懿德天皇御紀に渟名底仲媛命事代主神孫鴨主女也と有を尊卑分脈一本に味鉏高彥根命（大和高鴨神宇都宮大明神）其子鴨主命其孫渟名底仲媛命と系を係たるも其同神同體に坐る故なり（又神名帳に常陸國新治郡鴨大神御子神主玉神社有を常陸國志に按神主宜レ訓ニ加毛奴志ニ鴨主命是也と有は然る言なり然るを常陸廿八社志に所祭大田々根子命也と有は此命の大神主の神主たるを以て推量說なめり此鴨主命は天日方奇日方命なる可き由考得たる說有て懿德天皇紀傳に述るか如し但右の件は事代主神高日子根神同神異名なる事を令知むか爲に云るなり猶次なる事代主命の

條を見合す可し○葛木乃鴨能神奈備爾坐此も後に出來る名を始に廻らせる者にて大穴持命の御子神等を三所に鎭め分て皇御孫命の近守神と奉置給るか後に葛木と成り宇名提と成り飛鳥の地名と成れるなり神名式に大和國葛上郡高鴨阿治須伎託彥根命四座（並名神大相嘗新嘗）と見ゆ此を高鴨としも云は同式に鴨都波八重事代主命神社（並名神大月次相嘗新嘗）と有に對へたる地名にて鴨は此邊の總名なり偖皇御孫命の御天降坐さりし以前に大神と申すは大穴持命に坐し神と申すは事代主神に坐りし故に其神の國造の時に住せ給へる地には何處も鴨とは云るなり（迦微を迦毛と云例は神名式に隱岐國周吉郡賀茂奈備神社と有る此は神奈備神社と云義なり又前に引る常陸國新治郡鴨大神御子神主神社此は鴨主を神主と書るなる事上に云るか如し神代には此二神の傍に並ぶ可き神無りし故に後迄も大神を於保美和と訓せたるなとを合せて思へし）然れとも此大和なるぞ諸國に在ゆる鴨と云地名の本なる可き其は右に引る古事記に阿遲鉏高日子根神者今謂迦毛大御神者也と見え舊事紀に大己貴神娶田心姫命生兒味鉏高彥根神（坐倭國葛上郡高鴨社云捨篠社）と有なと受張て鴨地の本著く所なる狀なるに出雲風土記（意宇郡條）賀茂神戸所造天下大神命之御子阿遲須枳高日子根命坐葛城賀茂社此神之神戸故云鴨と有を以見れは彌著明かり其は次條事代主命の下に委しく

云を見へし偖此地の小名を逢日（アフヒ）村とは云けるなる可し其は元曆奏上記に欽明天皇廿八年四月中酉自大和葛木鴨逢日村社本所祭三座兒神皇兒神（コノカミスメミコノカミ）以味耜高彥根命陪之地依神宣遷山城別雷山遺味耜高彥根命止葛木鴨と有を以知へし此記に就て考るに高鴨社の祭神第一素戔嗚尊第二吾勝尊第三は味耜高彥根命に坐す兒神皇兒神以味耜高彥根命陪之と有を以知へし第四は其后神なる可し春日に天兒屋命此賣神相並坐す例也（但此元曆奏上記の文に就て云へき事甚多在れと事長けれは下に云へし此は山城國賀茂別雷神社は神代より高鴨と同神の鎭座す社なるに此時始て其相殿の神を渡し奉れりと云事なり）此高鴨神雄略天皇御世より天平寶字八年迄土佐國に坐し事有り其は御紀に四年春二月射獵於葛城山忽見長人來望丹谷面貌容儀相似天皇天皇知是神猶故問曰何處公也長人答曰現人之神先稱王諱然後應曰天皇答曰朕是幼武尊也長人次稱曰僕是一言主神也遂與盤于遊田駈逐一鹿相辭發箭並轡馳騁言詞恭恪有若逢仙於是日晚田罷神侍送天皇至來目水是時百姓咸言有德天皇也と見え又古事記に一時天皇登幸葛城山之時百官人等悉給著赤紐之青摺衣服彼時有其自所向之山尾登山上人既等天皇

之齒等ニ亦其裝束之狀及人衆相似不レ傾爾天皇望令レ問曰於ニ玆倭國一除レ吾亦無レ王今誰人如レ此而行即答白之狀亦如ニ天皇之命一於レ是天皇大忿而矢刺百官人等悉矢刺爾其人等亦皆矢刺故天皇亦問曰然告ニ其名一爾各告レ名而彈レ矢於レ是答曰吾先見レ問故吾先爲ニ名告ニ吾者雖ニ惡事一而一言雖ニ善事一而一言言離之神葛城之一言主之大神者也天皇於是而惶畏而白恐我大神有ニ宇都志意美者一不レ覺白而大御刀及弓矢始而脫ニ百官人等之所服之衣服一以拜獻爾一言主大神手打受ニ其捧物一故天皇之還幸時其大神深山末於ニ長谷山口一送奉故是一言主之大神者彼時所レ顯也と見えたる此時の事に依れる者なり然れと其後にも屢然る事有と見えて續紀廿五に天平寶字八年十一月復ニ祠高鴨神於大和國葛上郡一法臣圓興其弟中衞將監從五位下賀茂朝臣田守等言昔大泊瀨天皇獵ニ于葛城山一時有ニ老夫一每與ニ天皇一相逐爭レ獲天皇怒之流ニ其人於土佐國一先祖所レ主之神化成ニ老夫一爰被ニ放逐一於レ是天皇乃遣ニ田守一迎レ之令レ祠ニ本處一と見えたるか如此事を土佐風土記に有ニ土佐高賀茂大社一其神名爲ニ一言主神一云云時與ニ天皇一相競有ニ不遜之言一天皇大瞋奉レ移ニ土佐一神隨而降神身已隱以レ祝代レ之初坐ニ加茂之地一後遷ニ于此社一而高野天皇寶字八年從五位上高賀茂朝臣田守等奏而奉レ迎ニ鎭於葛城山下高宮岡上一其和魂者猶留ニ彼國一于レ今祭禮と有り斯れは三百五年計の間彼國に坐りしなり右の文意を考るに高鴨に在すは其本體に坐て一言主神と申て顯れ給へるは其荒魂に坐るか土佐より復して高宮岡上に鎭奉れるにて式に葛木坐一言主神社（名神大月次相嘗新嘗）と有る是なり但天武天皇朱鳥元年御紀に八月己巳朔丁丑爲ニ天皇體不豫一祈ニ于神祇辛巳遣ニ秦忌寸石勝一奉ニ幣於土佐大神一と有れは其頃大和に復し給ふ可き由の御諭など有けるなる可し然れとも天皇不豫なりしも遂に差給はずして其九月に崩給へは其事竟さすて有けむを此に至て迎取奉給ひけるなンめり

此一言主神を荒魂と申す事餘りに奇說めきたりと雖も彼御名乘(ナノリ)坐る御言に雖ニ惡事一而一言雖ニ善事一而一言々離之神と宣へるか中々に嚴めしければ此一を以ても疑ふ所無るべき者なり倩其和魂者猶留ニ彼國一于レ今祭禮と有る文の自他甚混(マキラ)はし其は風土記は其土佐國にて記して京へ奏上せる書なれば若土佐に留り坐せらむには留ニ此國一と有べきを然らぬは雄略天皇御世に其荒魂を耳其國に移し給ひて和魂には大和國に留給へりと也上に引る元暦本上記に欽明天皇廿八年の事を云るに遣ニ味耜高彥根命一止ニ葛城鴨一と有を以高鴨に留り坐る程を知べし然ば今も式に都佐坐神社大と有は一言主神に坐事云も更なるか故に風土記に大穴六道尊子味耜高彥根尊と傳へて此は高鴨にも一言神社にも別社と云べき御社なるなり倩天武天皇四年御紀に三月乙巳朔丙午土佐大神以ニ神刀一口一進ニ于天皇一と有は神庫の物を夢想等の事有て今進給へる者なる可し同十三年御紀に冬十月己卯朔壬辰云々土佐國田苑

五十餘萬頃沒爲レ海是夕有ニ鳴聲一如レ雷聞ニ于東方一有レ人曰伊豆島西北二面自然增益三百餘丈忽爲ニ一島一則如ニ鼓音者神造ニ此島一響也と有も土佐大神の御所爲なる可し伊豆國の式社に坐す神々は何れも事代主命及其后神等御子神等なるに思合す可き者なり神位は三代實錄に貞觀元年正月廿七日甲申土佐國從五位下都佐坐神從五位上と見え長寬勘文に天慶三年二月一日此社授ニ正一位一と有り續紀に神護景雲二年十一月戊子土佐國土佐郡人神依田公名代ら四十八人賜ニ姓賀茂一と有は右の高賀茂朝臣と同宗の人にて此大神の遷され給へりし時より供奉れるなる可し風土記に神身已隱以レ親代レ之と有を見へし今此社一宮村と云に立せ給へりとて此に古土佐郷なりし所也清和天皇實錄に貞觀元年正月廿七日大和國從二位勳八等鴨阿治須岐宅比古尼神云々同正三位高鴨神並從一位と有は心得ぬ事なり此は從二位勳八等鴨都波八重事代主神云々正三位高鴨阿治須岐宅比古尼神並從一位と有けむを誤れる者なり大倭神社註進狀に新國史曰寬平九年冬十二月壬寅朔甲辰奉レ授ニ五畿七道諸神三百四十座各位一階一と有ニに依れは此時正一位なり右の文を誤なりと云事如何とおもふ人も有なむかなれとも其時從二位高市御縣鴨八重事代主神も從一位なるに鴨都波八重事代主神の然計りの大社にして遷され給ふ可き謂の有べくも非ぬた此を除ては此より外に神社のことの無を思はゞ疑無らむ者ぞ○事代主命能御魂乎古事記に大國主神亦娶ニ神屋楯比賣命一生子事代主神と有り然るを舊事紀に大己貴神娶下坐邊都宮ニ高津姬神上生ニ一男一女一兒都味齒八重事代主神妹高照光姬大神命と有り是を以て記傳に神屋楯比賣命高津姬神同神ならむと釋れたるは然る物にて前條に說る阿遲須伎高彥根乃命の御母を多紀理毘賣命とも田心姬命とも申せる共に同神たり然るは胸形大神はしも御靈を分て宗像の奧津島中津島邊津島と三所に鎭り分り給へれとも其元は玉依毘賣命とも道主貴とも申して一神に坐か故に須佐之男命の御許に坐て大國主神に御合坐る時にも須勢理毘賣命と申す一柱にて后神と成給へるを高彥根神事代主神を各別神の如く傳たるを以て一には多紀理毘賣命に御合坐て味鉏高彥根神を生坐し一には高津姬命に御合坐て事代主命を生坐と傳へ分れたる者なり猶山城國松尾神社にて胸形中都大神大山咋神と並坐大山咋神は事代主命の亦名なるに賀茂別雷神亦同神なるを鴨御祖社の祭神大己貴命玉依毘賣命と有れは松尾にては御母子相並ひ坐し御祖社にては御夫婦にて相並ひ坐由なり是等に依る時は三女神共に大國主神に御合坐る趣なれとも一柱に坐事右等の混雜を正して著明き者なり若此三柱神別々に御合坐りと爲は何れを后神とし何れを妃とか爲む清和天皇實錄貞觀元年二月の下に筑前國從二位勳八等田心姬神湍津姬神市杵島姬神並授ニ正二位一太政大臣東京一條第從二位勳八等田心姬神湍津姬神市杵島姬神並授ニ正一位一此六社居雖レ異實是同

神也と有は社に就て同神を祀れるとには非す六神とは祭り分たれとも其實は同神異名なりとの義なるを思ふ可し此三女神の御事は已殊に委しく探索めて抄錄せる物有り其は日本紀傳に書並ふ可きなり倭右の神屋楯比賣命と申す御名義神屋は字の如く神の御屋なり楯は假字にて神屋を建る由也其は出雲風土記神門郡八野郷の下に須佐能袁命御子八野若日女命坐之爾時所造天下大神大穴持命將娶給爲而令造屋故云八野と有る八野は屋主にて妻屋の主と云事なるか是亦同神に坐事云も更なり此三女神は須佐之男大神の御女に坐て大國主神とは御兄弟には坐せども異母兄弟にも同母兄弟にも非す天照大御神と御誓の間に成出坐て奇異なる所由有る神に坐せば兄弟婚などの謂には非す倭事代主神と申す名義は上に說る如く大物代主神の對にて事知之大人神と云意なり同神には坐せとも右の味鉏高彥根神と申すは大國主大神の國土經營の御功を祐賛け奉給へりし間の御名なるか此御名は已に此國土を天神の御子に避奉給ひて御父大神の幽事を治給ふ其御事業に預り知看すの謂なる可し倭古事記國避段に是以此二神降到出雲國伊那佐之小濱而拔十掬劒逆刺立于浪穗趺坐其劒前問其大國主神言天照大御神高木神之命以問使之汝之宇志波祁流葦原中國者我御子之所知國言依賜故汝心奈何爾答白之僕者不得白我子八重言代主神是可白云々故爾遣天鳥船神徵來八重事代主神而問賜之時語其父大神言恐之此國者立奉天神之御子即蹈傾其船而天逆手矣於青柴垣打成而

隱也と見え神代紀正書に二神於是降到出雲國五十田狹之小汀云々而問大己貴神曰高皇產靈尊欲降皇孫君臨此地故先遣我二神駈除平定汝意何如當須避不時大己貴神對曰當問我子然後將報云云故以熊野諸手船亦名天鴿船載使者稻背脛遣之而致高皇產靈尊勅於事代主神且問將報之辭時事代主神謂使者曰今天神有此借問之勅我父宜當奉避吾亦不可違因於海中造八重蒼柴籬蹈船枻而避之使者既還報命故大己貴神則以其子之辭白於二神曰我怙之子既避去矣故吾亦當避云々同紀一書に故天照大神復遣武甕槌神及經津主神先行駈除時二神降到出雲便問大己貴神曰汝將此國奉天神耶以不對曰吾兒事代主射鳥遨遊在三津之碕今當問以報之仍遣使人訪焉對曰天神所求何不奉歟故大己貴神以其子之辭報乎二神二神乃昇天復命と有る文意を熟思ふに御父大神は大國主と坐て此國は主領き在せとも總ての事共は御子事代主神此を知看しける故に大國主神の御答に僕者不得白我子八重事代主神是可白とは申給へる者也然は記に建御名方神の言に不違我父大國主神之命不違八重

事代主神之言二云々と並申給へるも上に說く如き趣有を以なり偖此國避の事はしも大國主神の御上にも御子神の御爲にも甚々止事無き大事なるに阿遲鉏高日子根神は此より前に天若日子か喪を弔給ふ耳こそは有けれ大國主神の長子と坐に更に國避の事に拘り給へる由無きは其時迄は國土經營の間なりし故に其御名を以傳へ此は國土を避奉るや否の時の事なる故に事代主神と申す御名の方を以傳へたるか故に後に異神の如く思成ぬれとも其神實は同神なる事上にも下にも說るか如し已にも云る如く事代主神はしも大國主神の珍子と坐に出雲風土記に一たに其御事迹の傳無く唯味鉏高彥根神の御事耳見えたるは彼に在る御事迹の國土經營の間の事なる故に事代主と申す御名を以て傳はらぬなり且國避の事に於ても此神天津の御命を直に諾ひ奉れりしかば御事迹などの遺る可くも非れど其國に傳の有べくも非ぬ筈、ハて一の事なり此等の事を思合せて其同神にして異名なる事を思ふ可し右の書紀の一書に三津之碕と有は風土記に稱を阿遲須枳高日子命の遺跡なるを事代主神の此地に射鳥遨遊を爲給へるなど其同神なる證とも云べし攝津國西成郡に三津の地名有り其に味原山と云か有を風土記に味鉏山と云て其神の坐山なるに又に東生郡阿遲速雄神社有なども傳へ合す可き者なり猶下に云を見べし　偖又古事記なる大國主神の御言に僕子等百八十神者即八重事代主神爲二神之御尾前一而仕奉者違神者非也と申給へる其結ひは神代紀一書に是時歸順之首渠者大物主神及事代主神乃合二八十萬神於天高市一帥以昇レ天陳二其誠款之至一時高皇產靈尊云々宜レ領二八十萬神一永爲二皇孫一奉レ護乃使二還降之一と見えたる是なり神功皇后御紀の御託言に於レ天事代於虛事代玉籤入彥嚴之事代神と御名乘も天神の御許にて定り給へる御名と通えたり大物主神に對ひて事知の神と云事也偖此天神の御命は大物主神に耳係れりと思ふは委しからす先に大國主神の白給へる御言を結ひて此昇天の事有しなれは右の二神に係たる天神の大御命なる事申すも更なり偖事代主命と申すは味鉏高彥根神の御父大國主神と共に此國土を天神御子に奉給ひて幽事を治す御名なるか此一書に大物主神に屬て天に昇給へる事を被載たる趣を以深く考るに味鉏高彥根神の和魂に御在すなる可し其は上に說る如く一言主神は其荒魂に坐に對て必斯在ては得有ましき理なれはなり然れは大國主神に味鉏高彥根神其和魂大物主神に事代主神其荒魂大國魂神に一言主神と相對はせ給へる者なりけり此は予か始て云說にて古人の且ても云ざる事なれは右の如き證なる書據を得て說事なれとも甚可畏き心ちそ爲る然れとも古書の所載たる所ら考究れは右の說等に至らざる事を得ざれは予を罪する者あれ大三輪三社注進次第記に別宮に壯葛城加茂神社八重事代主命也と有て大三輪大神に屬るを思はゝ疑ひ無らむ者ぞとよ若て神代紀一書に又曰事代主神化爲八尋熊鰐一通三三島溝橛姬一或云玉櫛姬一生二兒姬蹈鞴五十鈴姬命一是爲二神日本磐余彥火火出見天皇之后一也と有

り此事神武天皇元年御紀に庚申年秋八月癸丑朔戊辰天皇當レ立二正妃一改廣求二華胄一時有レ人奏之曰事代主神共二三島溝咋耳神之女玉櫛媛一所生兒號曰二媛蹈鞴五十鈴媛命一云々九月壬午朔己巳納二媛蹈鞴五十鈴媛命一以爲二正妃一と有を綏靖天皇御紀に母曰二媛蹈鞴五十鈴媛命一事代主命之大女也と見え同二年御紀に春正月立二五十鈴依媛一爲二皇后一即天皇之姨也と記され安寧天皇御紀に母曰二五十鈴依媛命一事代主神之少女也と有て大女少女と對たるを以見れは五十鈴媛命五十鈴依媛命は共に同母姉妹にて共に溝咋姬の生む所なり然るを地神本紀に都味齒八重事代主神化二爲八尋熊鰐一通二三島溝杭女活玉依姬一生二一男一女一兒天日方奇日方命妹姬蹈鞴五十鈴姬命次妹五十鈴依姬命と有れは其大女少女の外に長子は天日方奇日方命坐る者なりけり

古事記神武天皇段には此比賣多々良伊須々比賣命を大物主神の子と有は決めて誤傳なる事上に辨たるが如し記傳廿三に右の舊事紀の文を擧て此は姓氏錄に大神朝臣素佐能雄命六世孫大國主命之後也初大國主神娶三島溝杭耳之女玉櫛姬云々と有に依て白檮原朝の大后の御父母と此大神朝臣の祖とを混へ遂に三島溝杭の女の名を活玉依姬とし又天日方奇日方命と五十鈴姬命とを同母の兄妹と爲る皆僻事也抑此は書紀神代卷に大三輪之神此神之子即日茂君大三輪君等又姬蹈鞴五十鈴姬命と有を心得誤れるより出たり云々と云れたるを以見れば舊事紀の傳は杜撰なるが如くなれども然らず右に引る神代紀一書の文は其文の續に在て又曰云々と有れば素より異傳の書法也と雖も神武天皇綏靖天皇安寧天皇御紀共に右等の傳を正說と立て記されたれば又曰は其一書に耳關る事に

て書紀の合說に至る事にては無た安寧天皇御紀に三年春正月戊寅朔壬午立二渟名底仲媛命一爲二皇后一と有て其を懿德天皇御紀には母曰二渟名底仲媛命一事代主神孫鴨王女也と有る鴨王は神名式に常陸國那賀郡鴨大神御子神主玉神社と有を常陸國志に按神主は訓二加毛奴志一鴨主命是也と有か如くなるが考信閣本尊卑分脉に味鉏高彥根命より系を立て其子鴨主命と有て渟名底仲媛命には御父と有て同本神系圖に大國主命子味鉏高彥根命子鴨主命と有て右と同じきを地神本紀に摠合するに事代主神の子天日方奇日方命と有る下に此命娶二日向賀牟度美夏姬一生二一男一女一兒健飯勝命妹渟名底仲姬命と有れば鴨主は天日方奇日方命の亦名にて動かし得べからざる事也然れば古事記にも姓氏錄にも天日方奇日方命を大物主神の御子と爲るは共に誤れる者なり

右の溝樴媛の父三島溝咋耳神の三島は攝津國の地名にて溝咋耳とは溝を樴以て塞上て田に引する事を掌れる神にて水分神と同神と通えたるか此は決く大山津見神高龗神と共に成坐る御子にて其女溝咋媛も共に身體は龗にて坐なる可し大倭神社註進狀に大神氏家牒曰小治田豐浦宮御宇天皇推古御世建二大神御子神一姬蹈鞴五十鈴媛命宮於二春日率川邑一御世三島溝樴耳之女玉櫛姬狹井本名狹井川邑云々養老年中左大臣藤史建子守大己貴命荒神魂大國魂命兩神社奉齋焉と有る子守は水分を訛れる事記傳に說れたる如くなれば能合へり鴨川合坐小社宅神社と云るも此と同じ此事下なる賀茂大神の說の終に云り如此く溝樴姬は龗神なるが故に其に娶給ふ、には八尋熊鰐に化爲て通給へる者なりけり

出雲風土記仁多郡の下に戀山古老傳云和爾戀二阿位村坐神玉日女命一而上到二爾時玉日女命以レ石塞レ川不レ得レ會レ所レ戀故云二戀山一と有は事代主命の八尋熊鰐に化爲給ひし事を脫せるなる可し此古老の傳は攝津國にて在し故事なれども其山に祭れるから其にて在し事の如く傳たるなる可し玉日女命

は玉櫛媛と聞ゆ阿位村を阿伊村に誤たれども其下に阿位川と有に見合せて今改めつ阿位は攝津國の地名也繼體天皇の御陵を三島之藍野陵と云ひ式に阿爲神社和名抄に島下郡安威阿井と有る此なり　此故に依れりと見えて河內國若江郡長柄神社有る其は姓氏錄に長柄首天乃八重事代主神之後也と有て其如くなるも子守勝手宮と云も其后神の由に依れる者也右等の由に依て時代主神の鎮坐す地方には大山祇神高龗神共に鎮坐す例多在り山城國愛宕郡賀茂別雷神社は事代主神なるに乙訓郡酒解神社葛野郡梅宮坐神四座の中に酒解神は其社記に依に大山祇神に坐し愛宕郡貴布禰神社乙訓郡小倉神社は共に闇龗神也其例大和國葛上郡鴨都波八重事代主神社鴨山口神社葛下郡深溝神社と有も右に同じく河內國杜本神社二座と有る此を風土記に所祭事代主命也と有を或書に一座水神一座山神と有も上の如き御所緣に依て然云傳たる者なり又攝津國島下郡三島鴨神社は事代主命に坐事云も更なるを伊豫風土記に宇知郡御島坐神御名大山積神云々是神者津國御島云々と有を以見れば同し相座に鎮坐事決き者なり又溝咋神社は溝樴耳神玉櫛媛命の本生の地なる事上に說るが如し　此類猶多かれど然耳はとて漏しつ又事代主神の社にも太田神社の如く定りと見えて山城國愛宕郡賀茂別雷神社太田神社大和國葛上郡長柄神社多太神社此は今多田（タヽダ）村に在と云り攝津國三島鴨神社太田神社是等の例多有べし

倍三卷十三卷に說る如く伊勢神宮の古書に太田命と有は猿田彦神の子と有に其猿田彦神は事代主命と同神なる予委しき說有り其太田命と申すは天日方奇日方命なる由も其卷々に註せる如くなれば事代主命の溝樴姬に娶て令生給へりし事實に甚克（イトヨク）合へるなも思ふ可き者なり　倍右の攝津國三島鴨神社は右の如く事代主命大山祇命並坐故に神名式に伊豆國賀茂郡伊豆三島神社名神大月次新嘗有る此を一宮記に祭神大山祇命と記せるを平田翁は事代主命也と考明されたれども共に其傍を思ひ漏せる者なり釋紀十五に引る日本後紀に天長九年五月庚戌令二卜筮一八九畢於內裏伊豆國神爲レ祟奏伊豆國言上三島神伊古奈比賣神二前預二名神一此神塞二深谷一摧二高巖一平造之地二千町許作二神宮二院池三處一神異之事不レ可二勝計一と有りて式にも伊古奈比賣神社名神大と有て此神に坐るが凡ての御所爲龗神に似著はしき事なるに依て思ふに式に陸奥國宮城郡伊豆佐賣神社と有は其本國の名を取れるにて同神には非るか陸奥風土記に伊豆佐賣神社所祭溝咋比賣也と有は正しき證にて上に云る說共に打合て甚愛たし倍續日本後記に承和七年九月癸酉勅癸未伊豆國言賀茂郡有二造作島一大名二上津島一此島坐阿波神是三島大社本后也又坐物忌奈乃命即前社御子神也云々ト求二其崇一云阿波神者三島大社本后五子相生而後后授二賜冠位一我

本后未レ預ニ其色ニ云々と有は上に說る如く阿波神は味鉏高彦根神と聞えける時の后神に坐か故に本后と宣ひ伊古奈比賣命は事代主命と申す方にて娶坐か故に後后とは宣別給へる者なりけり且此事代主神伊古奈比賣命の御事迹の出雲風土記に所見たるは國避の時より事代主命と御名に負坐し其御名の方の御靈の現身と化爲て伊古奈比咩命亦云玉櫛媛に娶給へるが故に彼國にては傳はらぬにてぞ有ける扶桑見聞私記と云書に建久六年十一月十三日北條殿伊豆國へ被下向是三島社神事に會せむか爲なり此神の事神書に奉號く伊豆明神一名溝咋姫云々女體の神なり」と有も伊古奈比咩神社に坐は溝咋媛なる事を證すに足れりと云べし又十訓抄に能因か伊豫にて天ノ川苗代水に塞下せ天降り坐す神ならば神と詠るなどは取にも足ざることなから本國伊豫の三島にても溝咋媛命大山積神と並坐る傳などの有を取て詠るにて亮其溝咋媛の神德に合へり或書に伊豆國三島神社所祭五座大山祇命其一は伊古奈比咩なり其三未詳と云り今按に其三未詳の一は事代主神に御在すなる可き事上に云るが如し ○宇奈提爾坐の宇奈提は宇奈太理と云に同じく溝水を云由已に二卷座摩神條に註るが如し右に引る御紀に事代主神化ニ爲八尋熊鰐ニ通ニ三島溝杭姫ニと有を思合す可き者なり倩和名抄鄕名に大和國高市郡雲梯宇奈天と見え萬葉十二二十九丁に不想乎想常云者眞鳥住卯名手乃杜之神思將御知と見えて鄕名も神社も古に名高かりけむ狀なるを今は鄕名廢れて雲梯村の地名遺れゝども其神社詳ならず式に高市郡川俣神社三座並大月次新嘗と有社を大和志に在ニ雲梯村ニ今稱ニ川俣八王子ニと云ひ其社を俗に卯名手之杜と云事なれども當社は姓氏錄に川俣公彦坐命之後也と見えたれば其祖神を祀れる社なる可し今こそは雲梯村の一村とは成にたれ古に雲梯鄕と云しは畝火山の西北の地に廣く亘る名なれば其心して求む可き者なりかし倭名抄に今本には宇奈提爾坐と有れども如此同じ事を並べ云中に是耳違ひては文を成ず故今乃神奈備と云ふ四字を補へつと有れども同じ事を並へ云中に是耳違へるは違ふ可き所有が故に違へるなめれば今從はず又後釋に飛鳥神社は事代主神を主と祀れり此に事代主命を宇奈提と云ひ賀夜奈流美命を飛鳥と云る二方共に所違へり故備思ふに此の文は事代主命能御魂乎飛鳥乃神奈備爾坐賀夜奈流美命能御魂乎宇奈提爾坐天と有けるが中頃誤りて飛鳥と宇奈提と入混ひたる者也けり云々然れば宇奈提は即式の加夜奈流美命神社にて萬葉に卯名手之杜と詠るも是なりと云れたるは思誤られたる者なり右の萬葉の歌の狀も事代主命にこそは似着て有め賀夜奈流美命には更に由無事なるをや　倩萬葉に不想乎想常云者と詠るは事代主神は事を知る神に坐せば終に其僞り發覺て終に神の御罰をぞ得奉むとにて事代主神の御父大神を祐贊て幽事を治す事實に甚克合へり已に大國主神の國避の時に右の如く事代主命能御魂乎宇奈提爾坐と申給ひて鎭め給ひて歌にも詠計り神威の高く御在しける神社なるを神壽詞の事の未廢れざりし昔時に朝廷の帳に漏させ給ふ可くも非ねば此を思ひ此を惟ふに式に高市御縣坐鴨事代主神社大月次新嘗と有る此なる可し猶式に葛上郡鴨都波八重事代主神社並名神大月次相嘗新嘗と有も在れども其は大三輪三社註進次第記に瑞籬宮御世云々承レ勅立ニ社於葛城邑賀茂地ニ奉レ齋ニ事代主命ニと有れば上古には聞えぬ事なるが此高市御縣なるは其よりも古く神代より

の鎮座なる事云も更なり地神本紀に都味歯八重事代主神の下の細書に坐二倭國高市郡高市社一亦云甘南備飛鳥社一と有も古き傳の有を取て記せるなるべし神位も三代實錄に貞觀元年正月廿七日從二位高市御縣鴨八重事代主神從一位と見えたり其後寬平九年に奉レ授二五畿七道諸神三百四十座各位一階一る列に加はり給ひて正一位なり備此社は宇奈提にて事代主命の本社ならむと所思る由は大國主神の國避の時に亦僕子等百八十神者即八重事代主神爲二神之御尾前一而仕奉者違神者非也と申給へる事の有に天武天皇御紀に高市大領高市縣主許梅儵忽口閇而不レ能レ言也三日之後方著レ神以言吾者高市社所レ居名事代主神又牟狹社所レ居名生雷神也乃顯之曰於二神日本磐余彥天皇之陵一奉二馬及種々兵器一便亦曰吾者立二皇御孫命之前後一以送二奉于不破一而還焉今且立二官軍中一守二護之一且言自二西道一軍衆將レ至之宜愼也言訖則醒矣と見えたるは應に神代の御約束に依れる者なるか此高市御縣坐す方にて其事を物爲給へるは此社諦しく宇奈提なるか故なり高市杜と有るにも心を留む可き者なりかし然れは卯名手之杜とは鄉名を以云ひ高市杜とは郡名を以て云るにて此杜の事郡にも鄉にも受張て世に聞え高在りけらし（大和志に在二高殿村一今稱二大宮一又名鴨公森と云り畝火山よりは東香具山よりは西に在り古其邊り皆共に雲梯鄕なりけむ者此に鴨事代主神社と有れば葛木より移せるか如くなれとも然らす鴨は高鴨の地名より移れる者なり且事代主命を鴨大神と常に冠らせて申慣(ナラ)へる例に依れるにても有べし續後紀には葛木事代主命とさへ地名を御名の如く冠て被載たりき）事の因に事代主神の鎮座す社々の大較を說へし神名式に葛上郡鴨都波八重事代主命神社二座（並名神大月次相嘗新嘗）此は姓氏錄（大和國神別）に賀茂朝臣大神朝臣同祖大國主神之後也大田々禰古命孫大賀茂都美命（一名大賀茂豆尼）奉レ齋二賀茂神社一也と有て元より有る社に始て神主を置れたる如くなれとも然らす大三輪三社註進次第記別宮小社條に葛城賀茂神社八重事代主命也瑞籬宮御宇天皇御世大田々根子命孫大賀茂意命承レ勅立二社於葛城邑賀茂地一奉レ齋二事代主命一仍賜二賀茂君氏一と有れは崇神天皇の大御世に大三輪の別社と爲て齋奉り初つる者にて此より以前には此賀茂地には高鴨神の神代より御在せりし耳なり三代實錄に貞觀元年正月廿七日從一位の神階を奉給へりし事見えたり寬平九年に位一階を進奉給へれは正一位に坐り或書に一座は神屋楯比賣命を祀る由記せるは然る言なり（但右の三代實錄に紛らはしき事有り其は從二位勳八等鴨阿治須岐宅比古尼神正三位高鴨神並從一位と有は上にも云る如く誤にて從二位勳八等鴨都波八重事代

主神正三位高鴨阿治須岐宅比古尼神と有しは誤れる者なり倩此外諸國に鴨神社の多在るは事代主神の國土經營の時の神迹なると高鴨社と當社と山城國の鴨下上社より別れたりとは聞ゆれども今何れよりとも詳ならず〻

○賀夜奈流美命乃御魂乎　此は出雲風土記（神門郡條）に多伎郷所レ造ニ天下一大神之御子阿陀加夜努志多伎吉比賣命坐之故云ニ多吉一と有と同神と通えたるか其は何の神ならむと索隱るに決く下照比賣命に坐り阿陀加夜努志は大高屋主にて御母神屋楯比賣命の御名を取り多伎吉比賣は亦名を高比賣命と申せる其と同義なり地神本紀に大己貴神先娶下坐ニ宗像奥都島一神田心姫命上生ニ一男一女一兒味鉏高彦根神妹下照姫命次娶下坐ニ邊都宮一高津姫神上生ニ一男一女一兒都味齒八重事代主神妹高照光姫大神命と別々に爲るは傳の誤なる事已に註るか如し其亦名なる證は古事記にも右の如き傳有て阿遲鉏高日子根神次妹高比賣命亦名下光比賣命と有又於是天若日子降ニ到其國一即娶ニ大國主神之女下照比賣一と有る其下に故阿治志貴高日子根神云々其伊呂妹高比賣命と見え神代紀に僉曰天國玉之子天稚彦云々即娶ニ顯國玉之女子下照姫一（亦名高姫亦名稚國玉）と有を以知へし（倩右の舊事記に高照光姫大神命と有る大は衍なり削去る可し古事記には右の如く阿遲鉏高日子根神末高比賣命亦名下光比賣命と一所に出たるは宜しけれども別に大國主神亦娶ニ神屋楯比賣命一生子事代主神と有て高日子根神と事代主神とを別神と爲るは誤傳なる事上に委しく云るか如し記傳十三（二十三丁）に右文を引て其下に抑下照比賣は父神の御名の大國魂に對へて稚國玉てふ名をしも負たるは女神ながら父神を輔けて國經營に大なる功そ有けむと云れたる如く甚しき御功坐神なるからに此國避の時も上の二柱に並へて皇御孫命の近守神と奉り置し者なる事更に疑ひ無る可き者なりかし倩賀夜奈流美命の賀夜は例の高屋にて奈留は爾在にて阿陀加夜努志の主（ヌシ）に當り美は比賣なる事下に引る格文に賀夜鴨比女と有を以思明らむ可き者なり（神名式に攝津國東生郡難波坐生國々魂神社二座と有は二坐生島神詞の下に説る如く大國魂神に坐るに並びて比賣許曾神社阿遲速雄神社有其比賣許曾神社を臨時祭式に亦號ニ下照比賣一と見え三代實錄貞觀元年正月廿七日の下に攝津國從五位上下照比賣神從四位下と有れば大國魂神稚國玉神並坐すに合へり）如此く考定めて神名帳を閲に大和國高市郡加夜奈流美命神社有り其かと思ふに猶然らす帳に飛鳥坐神社四座（並名神大月次相嘗新嘗）と有る此の祭神を社傳に事代主命建御名方命高照姫命下照姫命と有て高照姫命下照姫命は同神なるを並へて祭る可くも非れは此は其御母高津姫命なる由下に云るか如し然りと雖も此詞に賀夜奈流美命能御魂乎飛鳥乃神奈備爾坐天と有に克合へる者なり（然れども飛鳥坐神社は事代主命を主と爲て祭る事云も更なるか如此き例猶有り神名式近江國滋賀郡日吉神社名神大は祭神大己貴命に坐を古事記に山末之大主神此神者坐ニ淡海國之日枝山一と記せるは其主神の事に拘らず其に用有る一神の事耳を云か故なり）

此も然り假令事代主神の相座に坐にも在れ其事に用無れば如此く宜ひ上させ給へるなり　但式に加夜奈流美命神社と有を措きて飛鳥坐神社四座の內なりと云むは異有るに似たりと雖も彼社は猶飛鳥座神社の別社にてそ有む其は類聚三代格貞觀十六年六月十八日官符に應下以二大社封戶一修中理小社上事其祖神則貴而有レ封其裔神微而無レ封假令飛鳥神之裔天太玉臼瀧賀屋鳴比女四社此等類是也と有る祖と裔とは神に就て云ならず上に大社小社と有る其を云ふなるが思ふに色葉字類抄阿部諸社ノ條式外神社に飛鳥神坐二大和國一天太玉臼瀧賀屋鳴比女と有は右の三柱を飛鳥神社に並祭れる由也官符に右の三名を擧て四社と云るは飛鳥神に右の三柱を合せて四座の事なる可し字類抄に此三柱を式外と云るは此三社を飛鳥神と別なるか如く成れる上にて式外と云るなる可きか素より小社の列也しなる可し神名式に此三神有るは既く別に祭られたりける也但太玉命は右の四座の中には非る可し別に小社と聞ゆ式に太玉命神社四座並大月次新嘗と有は今も忌部村に在て彼氏の產土なれは其には非す別に飛鳥神社に屬たる小社なる可し豐受大神宮儀式帳に神祇官大史忌部飛鳥アスカ田首野守と云人の名有を以思ふに其忌部の支派の人の飛鳥に在か祀れる氏社にて元來式外の神社なる可し殘の二座は式に飛鳥川上座宇須多伎比賣命神社加夜奈流美命神社と在て帳に載られたれとも飛鳥座神四座の中より別れ乍らも其社に屬るか故に其本社の名神大社なるに對へて小社と云ひ又裔とも云る者なりけり（但太玉命は然らず飛鳥神の敷坐す地に其神孫の忌部か住るに就て飛鳥田首の姓を賜へるを其祖神と爲て太玉命を祭れりしか素より官社の列には非ず飛鳥神社の別社と爲て其社に附座たりし者なり）偖右の宇須多伎比賣命神社は今も宇佐宮と云に就て思ふに宇須は宇佐なる可し多伎比賣命は多伎都比賣命にて胸形の邊津宮に坐神にて事代主命にも下照比賣命にも共に御母に坐り斯れは社傳に飛鳥坐神社四座の中の第三なる高照姬命は決く高津姬命の訛傳なり（神代紀に以二日神所生三女神一者使レ降二居于葦原中國之宇佐島一矣と有此に就て神名式に豐前國宇佐郡比賣神社名神大と見えて八幡宮三座の一なり八幡本記に云宇佐に三所神殿相並東中西坐南面也西殿爲二第一殿一八幡宮也中爲二第二殿一比賣神是田心姬命湍津姬命市杵島姬命也此三神先二于八幡一顯二座此地一仍爲二地主神一其宇佐大宮司家說也第三殿大帶姬命也云々と云る如く右の三女神は宇佐の主神なるを思ふ可し倍宇佐とは長と云義ならむ、其は大御神と須佐之男命の御誓の時に先立て座坐る由にそ有ぬ可き神社考詳節に宇佐明神湍津姬八幡是者一世之事也と有ても思ふ可し）第四下照姬命より別れたるなる可し三代實錄に貞觀元年正月廿七日授二大和國從五位下賀夜奈流美神正四位下一と見えたり此詞に飛鳥乃神奈備爾坐と有は

右の社に非す飛鳥坐神社成事上に云か如し（此社右の字須多伎比賣神社の下に在て共に飛鳥川上なり大和志に在二栢森村一今稱二葛神一と云る是なり嘉永三年夏予詣て見奉つるに栞寺と云ふ一向宗の僧院の庭中に小き祠にて渡らせ給へり其本社の飛鳥坐神社の御昌坐れは其にても宜しとは雖も餘りに畏く痛（イタ）・ましきことなりかし猶下に云を見へし、）○飛鳥乃神奈備爾坐天は後釋に神名帳に高市郡飛鳥坐神社四座（並名神大月次相嘗新嘗）と有る是也」と云れたる賀に然る言なり抑當社は地神本紀に都味齒八重事代主神と有る下に坐二倭國高市郡高市社一又云二甘南備飛鳥社一と有れは事代主神を主神と爲て祭れるか賀夜奈流美命（亦云下照姫命）は其相殿に鎮座す事上に註るか如し（但右の又云甘南備飛鳥社一と有は又坐二甘南備飛鳥社一と有しを誤れるなる可し然らざれば高市社を又云と云に成て事の意大に違ふ也紹運録に事代主神飛鳥社是也と見えたり）其第二は大物主神なる可し其は記傳十一に雄略天皇七年御紀に秋七月甲戌朔丙子天皇詔二少子部連蜾蠃一曰朕欲レ見二三諸岳神之形一（或云此山之神爲二大物代主神一也云々）答曰試往捉レ之登二三諸岳一捉二取大蛇一奉レ示二天皇一云々此故事は靈異記にも見えて三諸岳は即飛鳥の神奈備山と云る所なり三輪山をも三諸山と云へとも其に非す混ふ可からず萬葉三廿九丁登二神岳一山部宿禰赤人作歌に三諸乃神名備山爾云々明日香能舊京師者山高三河登保志呂之又十三三丁に甘南備乃三諸山者云々甘甞備乃三諸乃神之帶爲明日香之河之云々とも詠る皆此飛鳥の神奈備なり此山を神岳とも雷岳とも云て今も雷土村と云所飛鳥川に傍たる里にて小山有り飛鳥坐神社は元來其處に坐ける也然るを日本紀略に天長六年三月己丑大和國高市郡賀美郷甘南備山飛鳥社遷二同郡同郷鳥形山一依二神託宣一也と有れは今の社地は鳥形山也（以上取意）と云れたるか此山之神爲二大物代主神一也と有は事代主神と並坐す古傳の存て云る者なれは必大物主神なる可し（且三輪を古く御諸山と云るを此にも三諸岳と云は其よりた物主神を此飛鳥神社に勸請奉りし者なり然れば社傳に第二建御名方命と云るは此傳を亡ひたる後の説なる可し然れとも事代主神の御兄弟に坐せは其枝社には坐なる可し右に引る三代格に飛鳥神之裔天太玉臼瀧賀屋鳴比女と有れば太玉命ならむかとも思ひしかとも此は事代主神と共に祀はれ給ふ由無く飛鳥日首の祖神なれば是亦枝社に坐なる可ければ今大物主神と思定めつ此事師も然る考有りと云り）如此く考定むれは事代主神大物代主神宇須多伎比賣命賀屋鳴比女命四柱を合せ祀れる事更に疑ふ所無き者なりかし偖飛鳥坐神社は名神大社なるに神階の事の正史に所見ざるは記し漏され給へるなり貞觀元年正月廿七日に高鴨神鴨神高市御縣坐神共に從一位なれは此時に在しが脱たるなめり其は同時從五位下賀夜奈流美神正四位下と有に其本社にして神階の後れさせ給ふ可き所謂無ればなり天武天皇御紀に朱鳥元年七月乙亥朔辛丑詔二諸國一大解除癸卯奉下幣於居二紀

伊國ニ國懸神飛鳥四社住吉大神ょと見えたるを以て其重く被齋させ給ふ事知べし 若て新國史の例に依れば寛平九年十二月に一階を進められ給ひて正一位也但此等は餘りに推量に過たりと雖も必如此くならでは事實に適はざるを如何にとか爲む ○皇御孫命能近守神登貢置天は上に皇御孫命乃静坐牟大倭國申天と見えたる其は天皇の大宮處は大倭國に敷給はむと云意此は其京城の近守神と爲て大穴持命の和魂及御子神等三柱の御魂を出雲國より大倭國へ國遷の今貢り置て令鎮給へる者なり 後釋に此の貢置天と有は出雲より倭へ貢る也次に八百丹杵築宮爾静坐支と有は即本よりの出雲に鎮坐にて其趣自著明なり」と云れたるは實に然る言なり 近守神とは後釋に皇京の同じ大倭の國内なるを以なり」と有が如し云はゞ皇城の鎮守にて今京にては賀茂松尾の兩社などの狀なり偖皇御孫命の未御天降坐ざりし以前より如此く御定坐しを今しは其隣の山城國平安大宮を以て天地と日月と共に長く遠く易る可在ぬ都城と成れる上は其御約束に違へるに似たりと雖も大和と山城とは其隣國とは云へど地勢一聯なるが上に又遠くも非りければ右の大御和葛木乃鴨宇奈提飛鳥等の近守神と坐事少かも神代の御約束に背けたる趣は無めるを猶亦神代より大己貴命玉依姫命二柱は鴨御祖社に事代主命は賀茂別雷社に鎮り給ひ又胸形中都大神大山咋神 又云事代主命 二柱は松尾社に鎮り給へる耳ならず其御族の神等も悉く此山城國に坐て天地と日月と共に長く遠く易る可からぬ大宮處と定させ給はむ期を待奉らせ給へりけむも著く其國がらも天下に又比類なき何怜國に山城國と云るも闇に大穴持命の玉牆内國と目給へるに相叶へるなど皆少緣の事共には非りけり故今神代より鎮坐す所の賀茂松尾の御事を明證し奉る可し 此は此に然しも用無き事の如くなれども凡て神代の傳説はしも今に遺有を以て爺しと爲る所なれば云はでは得在ぬ心ちす且右の二社の御事は古より能くも說得たる人無れば此も亦云ては得非ぬ心ちの爲るより止事を得ずてなむ然るは掛卷も畏も可畏き皇大宮の近守と坐す太しき神々の御社にして祭神の事も何も世に詳ならざるより悲しとも哀しき事無ればの事ぞ 先神名式に山城國愛宕郡賀茂御祖神社二座 並名神大月次相嘗新嘗 賀茂別雷神社 亦名若雷名神大月次相嘗新嘗 と有を古くより賀茂下上社と申傚へり又賀茂兩所大神とも申す事なるが其主神は別雷神社に坐し御祖神社は其別雷神の御父母を齋奉らせ給へる者にぞ有ける神名式の次第前に別雷神社と御名を擧て後に御祖神社と有を以知べし 其別雷神社と御祖神社との間に出雲井於神社大月次相嘗新嘗と有は別雷神の御祖父須佐之男命に坐り三代實錄に貞觀元年正月廿七日從五位下出雲井於神授ニ從五位上ニと見えたり元曆奏上記に欽明天皇廿八年四月中酉日ニ大和葛木鴨遷日村云々之地ニ依ニ神宣ニ遷ニ山代別雷山ニ云々以ニ見神ニ祭ニ下社ニと有は此出雲井於神社には非るが同記に見神の細註に素戔嗚命と見えたり橋本經亮說に此は今の比々良木社なり古は異處に在しを後に御祖神の社地に遷せるなり祭神は素戔嗚命なり出雲と云も山緣有べし四時祭式に出雲井上と作り按に井上と申せば舊くは井の上に社の有つる

なる可し洛東祇園社尾張津島社も素戔嗚尊を祭れるがともに井の上に社を建たり云々」と云るは然る言なり祇園社記に當社は下鴨の攝社比々良木神社を遷す者なり比々良木神古は一乘寺村の西に在り此は出雲路地主の神にして祭神素戔嗚尊なり其故は下鴨の社地及東西南の方一里計を出雲路と云ふ云々と云るも能合へり出雲井於神社は今比々良木社と云ふ證なり偖別雷神と申すは國土經營の時の御功に依れる御名にて分土の義なり然るに建角身命の女玉依日賣命の丹塗矢に婚て生坐る御子の屋甍を穿ちて天に升給ひし事の有に依て舊記に山本坐天神御子稱二別雷神一と有れども其丹塗矢は火雷神の化れるなれは其御子は實に雷神に坐りけむより似着はしき名なるを以て彼と此とを混同に物爲るなり年中行事秘抄の異本に引る舊記には右の山本坐天神御子稱二別雷神一と有を以思ふに後に書入つる事の混ひて本文とは成れるか山城風土記は延長の頃奏進の書なれは舊記及秦氏本系帳の説を受て記せる者なる可し然れども山本坐天神御子と有に合ふ可き事有り神名式に片山御子神社大月次相嘗新嘗と有る此は俗に片岡社と云て神山の麓に坐れは其地に就て片山御子とは申せるなり又備前國邑久郡片山日子神社有て赤坂郡鴨神社三座津高郡鴨神社等有は同神なり片山日子社傳に大山咋神亦名片山日子命と有れども大山咋神と申すは事代主神の亦名なる事下に云る如くなれば此は誤傳なる可し丹波國鍬山神社記に大國主神領二大山咋神及諸神一而行二于丹波國一矣此國者鴻水懷レ山濁浪排レ空故大國主神大山咋神登二黑柄嶽一覗二水脈地勢逆レ流西下矣今水戸峠是也大山咋神又見二東方一山狹可レ通而鑿レ山劈レ磐順レ流決レ之亦穿二浮田一爲二家鄕一於レ是水涸爲レ土田地始豐饒也是時此神等自取二鋤鍬一以成二此功一焉依レ之崇奉而號二鍬山大神一也又以レ鋤爲二神之主一祠二大山咋神一而稱二桑田請田神一也其所レ鑿之山者葛野荒子アラシ山松尾是也其片端者龜尾山是也又其所レ通之水者即葛野河一云大堰川是也又其松尾山稱二分土山一此其緣也故其大山咋神者坐二松尾山一大神也亦名別雷神と有り是にて別雷神の名義詳なる者なり此大山咋神は古事記に大年神の子と爲るは誤なり若是正説ならむには諸書に傳る所同じかる可きに元暦奏上記に松尾社者大山咋神而大國御魂命之子蓋兒神之孫と大國御魂命は大己貴命の荒魂なれども同神に坐せは違へるに非ず兒神とは素盞烏尊なる由同書の細註に在り又神社啓蒙に引る神系圖に素盞烏尊孫大國御魂命兒大山咋神松尾大明神是也と見え和漢三才圖會に山城國松尾大山咋神大己貴命之子と記し神佛冥應編と云物に大己貴命及其子大山咋命と見えたるは其傳に異なる所有が故なめり又紹運錄及神系圖に大山咋神別雷神山王二宮山城國松尾大明神と有て別雷

神と一神の中なるを二十二社註式に鴨社（號下）御祖神（玉依日咩）（別雷御母大己貴神別雷御父）と見え別雷神を大山咋神と云る一說も由有る事なり鴨長明が四季物語に下鴨と申奉るも大山咋御神にて坐々て此も有難く松尾日吉など皆々同じ御神躰なる可し云々と云る下は上を誤れるなる可きが正しき傳有て云るなる可し又一宮記に賀茂別雷神社祭神大山咋神也と有り二十二社註と云書にも上社大山咋神松尾日吉同躰と有など彼此を思合するに大山咋神の御父は大己貴命にて御母は玉依姫命（所謂三女神）に坐り洞院公定公の尊卑分脈に事代主命（近江國日吉二宮號小比叡大明神）と見えたるを上に引る書共に合すれは大山咋神は事代主神の亦名なる事知らるゝを四條殿御本神社本記松尾條に大山咋神一座と云て事代主命を合せ祭る事極秘なり」と有る社傳は其同神なる傳に依て云るなり（猶下に別雷神社の事を註る所に證なる證を舉べきなり右の鐵山神社記は本より社傳の有に吾友小泉東嶽も神代系圖傳丹波國澤田社記山城國松尾社記羅山文集なとに所見たる故事を拾こ葉あて文を成せるを取れり其元書を今一々に引出て論にむには支漢の事に力を費して中々に事の序に終べくも非ればなり然れには此は有等の書共の集說と見て有ぬ可し）然れども古事記に大山咋神亦名山末之大主神此神者坐近淡海國之日枝山亦坐葛野之松尾用鳴鏑之神者也と有は正說なり用鳴鏑とは彼山城風土記に所見たる玉依日賣於石川瀬見小川爲遊時丹塗矢自川上流下と有る其丹塗矢は大山咋神の射放ち給へる鳴鏑なる傳の名高かりし故に用鳴鏑之神者也とは云る也偖山末之大主神と申すは其神の近江國日枝に坐す御名なり神名式に滋賀郡日吉神社（名神大）と有て官より禮祭る所は一座なれども其實は二社なり大宮を大比叡明神と云て三輪と同神なり註式に引る大江匡房卿の扶桑明月集に人皇卅代欽明天皇即位元年（庚申）大和國城上郡大三輪神天降第卅九代天智天皇大津宮即位元年（壬戌）大比叡大明神顯御日吉與三輪大物主神此國地主也と有は欽明天皇御世に遷奉り天智天皇御世に祭初たる由ならむが二宮を小比叡明神と云るが日吉神道秘密記に此を地主大明神と有れば決く山末之大主神に坐り諸神鎭坐記日枝神社條に在近江國滋賀郡坂本村日枝神社者大國主大神也（大己貴大神別名也）自神代兒大山咋大神化遊此處以此山爲六合本社至豐浦宮天皇時大神辭之返父大神替栖以葛野爲鎭祠山城國松尾祠是也と有は神代より山末之大主神の鎭坐す處なりしを御父大神を迎て大宮に合鎭坐奉れりし傳說なる可し古くより山王七社

と云事なれども二座なる證は記傳十二（四十三丁）に三代實錄に貞觀元年正月近江國從二位勳一等比叡神授二正二位一從五位下小比叡神授二從五位上一元慶四年五月奉レ授二正二位勳一等大比叡神正一位從五位上小比叡神從四位上一と有り臨時祭式にも日吉神社一座と有れば神名式なるも一座なり然れば是大比叡神にして小比叡は式外の神と見ゆ」と云れたる如く式內式外合せて二座耳なり偖此小比叡神は上に引る尊卑分脈に事代主命と有る細書に近江國日吉二宮號二小比叡大明神一と有る其正說にて賀茂にて別雷神松尾にて大山咋神と同神なる者なり神名秘抄に山末御玉命一名大山咋神又山末大主神是也と有り（偖山王七社と云る其中にて大比叡神一座は式外なり自餘の五社の事を今說べし一に聖眞子は豐葦原卜定記に吾勝尊なりと有は然る可し續日本後紀に仁明天皇四十の賀算を奉賀歌に茜刺天照國乃日宮乃聖乃御子云々と詠る聖は日を所知看すと云事にて即大御神なれば其御子と云意にて聖眞子とは書るなる可し音讀に爲ては何の事とも解難きを訓讀にて其義明し二に十禪師は卜定記に十比波天神七代地神乃三瓊々杵尊合之天十也と有るか如し三に三宮は註式に引る匡房卿記に天照大神與素戔烏尊二誓約所生五男三女之中三女也故名三宮一と有り大宮には后神二宮には御母神也四に八王子祇園社にも相殿に八王子有て共に五男三女神と云へども五男の中に吾勝尊は聖眞子に祭られ給ひ三女神は三宮に坐せは重複せりと云べし八王子は謂ゆる八衢比古八衢比賣神なる可き由十二卷道饗祭の下に云るが如し五に客人宮は註式に白山菊理比咩神也と云る然も有べし若て其神は岐神の亦名なる事右同書に云れば今云限にあらず偖記傳十二にも或書に大宮は大比叡明神にて大物主神なり二宮は小比叡明神にて國常立尊也號二地主權現一と云れども小比叡は國常立尊と云は甚く僻（ヒガ）事にて此

を地主權現と申すを思へば是大山咋神ならむか偖又別に中七社下七社と云も有て合せて廿一社と云ふ其下の七社の中に山末社と云有て此名此に山有然れども偖其如何に心の任に爲ればとて然すがに古くより此山に主領き坐神を然計り末々には得も崇奉らじと思はるれば上七社の中にては坐べしとぞ思はるゝ」と云れたるぞ此考の出來る本とは成れり）右の如く別雷神大山咋神共に事代主命の亦名なりと雖も山城風土記及秦氏本系帳に傳へたる古說の混雜を糺して後に明亮なる可し今本文を擧て其下に云を俟べし可茂社稱二可茂一者日向曾之高千穗峯天降坐神賀茂建角身命也神倭石余比古天皇之御前立上坐而宿二坐大倭葛木之峯一（今云此の建角身命は事代主命と有けむを誤れるなり其は建角身命は古事記白檮原宮段に於是亦高木大神之命以覺白之天神御子自レ此於二奧方一莫レ使二入幸一荒神甚多今自レ天遣二八咫烏一云々と有て其時直に天より降坐し也但神倭石余比古天皇之御前立は其建角身命の八咫烏と化て導奉給ひしを云り古事記の右に續きに故其八咫烏引レ道從二其立後一應二幸行一と有り宿二坐大倭葛木之峯一も又右の二神の故事の混れたるなり神武天皇二年御紀に以二劔根一者爲二葛城國造一又頭八咫烏亦入二賞例一其苗裔即葛野主殿縣主部是也」と有る劔根命は其建角身命の子なる由委しく考定めて日本紀傳に云か如し○偖此傳は事代主神の猿田彥神と化て皇御孫命を天八衢に參迎奉給ひて日向の高千穗峯に天降らせ給ひ其より伊勢に移出坐る時大倭の葛木峯に宿り給へる故事と建角身命の八咫烏に化て神武天皇を導奉給ひし其功に賞て其子劔根命を葛城國造と被任給ひし故事とを一に爲る者なり）自レ彼漸遷至二山城國岡田之賀茂一隨二山代河一下坐葛野河與二加茂河一所レ會至坐迦見二賀茂河一而言雖二狹少一然石川淸川在仍名曰二石川瀨見小川一自二彼川一上坐定二坐久我國之北山基一從二爾時一名曰二賀茂一也（○今云此段全く事代主命の故事にて少かも建角身命に係る事無し仍て思ふに上なる可茂社云々は元來此文に續きて事代主命の事なりしを次なる賀茂建角身命妻二丹波國神野神云々一と云事の其首無き故に此迄の文は混たるなめ

れども此迄の文一聯にて全く別の物なるを合せたるなり

賀茂建角身命娶ニ丹波國神野神伊可古夜日女ー生子。名曰ニ玉依日子ー次曰ニ玉依日賣ー

〇今云此より下に聯きて建角身命の故事なり上文と混同（ヒトツ）に爲べからず偖丹波の神野神は神名式に桑田郡神野神社氷上郡神野神社有り此は氷上郡の方なる可し和名抄に賀茂郷有り偖神野神伊可古夜日女玉依日賣の事を秦氏本系帳に初秦氏女子出ニ葛野河ー澣ニ濯衣裳ー時有ニ一矢ー自レ上流下女子取レ之云々と有は母方の氏を取て傳たるにて秦氏は姓氏録山城國神別に秦忌寸神饒速日命之後也と有れば伊可古夜日女は其女なる可し同國天田郡に天照玉命神社有も山有り和名抄に同郡六部（ムトベ）郷有り姓氏録山城國神別に六人部ハ火明命之後也と有て饒速日命天御魂神火明命同神異名なるを以知べし又伊豫國新居郡を古へ神野郡と云ひ其郡に坐伊曾乃神社有を續紀天平神護二年二月の下に伊豫國神野郡伊曾乃神と見えたり然るを後紀に神野郡避ニ嵯峨諱ー爲ニ新居郡ーと有るは其より被改たるなり又丹波國氷上郡に新井神社有も山有る事なり偖其新居も饒速日命に山有り和名抄郡名に讃岐國阿野郡新居爾比乃美と有が姓氏録未定雜姓河内國に新家（ニヒノミ）首汗麻呂足尼命之後也と有は其子なるを思ふ可し又紀伊國の事記せる物に伊都郡に神野の地有り河野氏伊豫より移れるより其本土の名を取て然號たりと云り河野氏の本姓越智なるに姓氏録左京神別に越智直石上同祖と有れば此も饒速日命の子孫なり又越後國磐船郡磐船神社の舊地神野（カツノ）村に在と云り其神天磐船に乘て天降坐し由を以磐船神社と申すに神野村と云も山有る事上に云るが如し是等の事を思合するに伊可古夜日女は饒速日命の女なる事疑ふ所無き者なり又神名式に讃岐國那珂郡神野神社もをと同神ならむを同國二十四社考と云物に今在ニ郡家村ー社傳云天德日命也爾云ニ神野神ーと云るは上に擧たる事共に合されば異傳と聞えたり（）又秦氏本系帳に初秦氏女子云々而生ニ男子ー云々故鴨上社號ニ別雷神ー鴨下社號ニ御祖神ー也戸上矢者松尾大明神これなりと有る秦氏女子のことは然ることなれども上社を其御子とし下社を玉依日女と爲る如きは僻事ながら其次に是以秦氏奉レ祭ニ三所大明神ー也と有る三所大明神に賀茂の下上を合せて一所と爲て有の二所共に上古より祭來れりし正説なり其下に而鴨氏人爲ニ秦氏之聟ー也秦氏爲ニ愛聟ー以ニ鴨祭ー讓ニ與之ー故今鴨氏爲ニ禰宜ー奉祭此其縁也云々と有は此の葛野郡より愛宕郡へ係て古秦氏の知る所なりし故に賀茂松尾の二社共に齋奉れりしを其聟たる鴨氏人を愛聟たるに依て其地に縣主たらしめ又其地に坐賀茂ノ神を令崇奉たりとの義なる可し二十二社注式にも此事を擧て社家の云梨木元祖和縣主也と有り此本系帳は陽成天皇元慶五年奏上の書なれば其より甚古かりけむ事知るべし

玉依日賣於ニ石川瀬見小川之邊ー爲遊時丹塗矢自ニ川上ー流下乃取挿ニ置床邊ー遂感孕生ニ男子ー

〇今云年中行事秘抄に舊記云と見え色葉字類抄には本朝文集云と有に御祖多々須玉依媛命始遊ニ川上ー時有ニ美箭ー流來依レ身即取レ之挿ニ床下ー夜化ニ美男ー相副既知ニ娠身ー遂生ニ男子ーと有り御祖とは其生坐る男子に就て云るにて賀茂御祖神社の事代主命の御祖なるとは異なり彼と此とは別なるなり其同じ賀茂の地に同じく御祖と云が故に誤も思違へを爲る事なり偖此丹塗矢を放給へるは事代主神に坐り古事記に大山咋神云々用ニ鳴鏑ー之神也と見えたる是なり然れども其神も其鳴鏑は火雷神の御靈の化れるとは知れず射給へるを玉依日女も又其心も有ずて唯美鏑なりと思ひて拾給へりしなり〇古事記白檮原宮段に三島溝咋之女名勢夜陀多良比賣其容姿美麗故美和之大物主神見感而其美人爲ニ大便ー之時化ニ丹塗矢ー自ニ其爲ニ大便ー之溝流下突ニ其美人之富登ー爾其美人驚而立走伊須々岐伎乃將ニ來其矢ー置ニ於床邊ー忽成ニ麗壯夫ー即娶ニ其美人ー生子云々と有は山城風土記の傳の混れなる事上に大物主神の下に辨たるが如し然るを風元暦奏上記に風土記載ニ丹塗矢ー是皆ノ己貴命之故事而已と云るは風土記の事實に疑有に依て云るならめども却て僻事也今辨る如くならむには其條理甚々明亮なる者をや

至ニ成人時ー外祖父建角身命造ニ八尋屋ー堅ニ八戸扉ー釀ニ八腹酒ー而神集々而七日七夜樂遊然與レ子語言汝父將レ思人令レ飲ニ此酒ー即擧ニ酒坏ー向レ天爲レ祭分ニ穿屋甍ー而升ニ於天ー乃因ニ外祖父之名ー號ニ可茂別雷神ー

今云右の舊記及本朝文集には不レ知ニ其父ー於レ是爲レ知ニ其父ー乃造ニ宇氣比酒ー令下子持ニ坏酒ー供中父此子持ニ酒坏ー振ニ上於天ー而吾天神御子乃上レ天也于時御祖神等戀慕哀思夜夢天神御子云各將レ逢レ吾造ニ天羽衣天羽裳ー炬火祭鉾ー待レ之又餝ニ走馬ー取ニ奧山賢木ー立ニ阿禮ー悉種々綵色又造ニ葵楓鬘ー嚴餝待レ之吾將レ來也御祖神即隨ニ夢教ー令ニ彼神祭ー用ニ走馬并葵楓鬘ー此之縁因レ之山本坐天神御子稱ニ別雷神ーと見えたり二十二社注式に風土記の同傳を日本書紀一書云と擧て其終に母亦同時上レ天成ニ神御祖神ー是也と有れば其御子の天に御父の御許に上坐に就て御母玉依日女も其夫神の御許に上給ひし者なり風土記因ニ外祖父之名ーとは賀茂建角身命の名に依て別雷神にし賀茂の言を冠らせたる由なるが別雷神は事代主神の名なるを其御子神の鳴雷と成て天に上給ひしを以其名なめりと心得たる後人の所爲なり舊記及本朝文集に天神御子と云ひ山本坐天神御子と云る

そ宜しき其は御父火雷神は天上に坐神なる故に其御子と云義也但備二阿雷神一に非なる事上に云るが如し備山本坐天神御子は神山の麓に坐神にて神名式に謂ゆる片山御子神に坐り然れ共秦氏本系帳に于時此見不レ指二奈人一御觀行指二戸上之矢一即爲二雷公一折二破屋棟一升レ天而去と有れば雷神にて上にへりし事は違無き者なり **所謂丹塗矢者乙訓郡坐火雷神在** 〇今云古事記に謂ゆる大山咋神の用給ひし鳴鏑にて其に化れりし神は天に坐火雷神の御靈なりと云事にて神名式に乙訓坐火雷神社名神は大月次新嘗と有る是なり秦氏本系帳に戸上矢者松尾大明神是也と有は主客の相違なり釋紀に引る風土記にも賀茂別雷命父丹塗矢乙訓坐火雷神社是也と見え諸式にも其同傳を載たるに丹塗矢乙訓社是也と有るを思ふ可し續紀大寶二年の下に詔在二山城國乙訓郡一火雷神毎レ旱祈レ雨頻有二徵驗一宜レ入二大幣及月次幣禮一と見え寶龜五年の下に奉幣於乙訓社一と有も當社の事なり又延暦三年十一月丁巳遣二兵部大輔從五位上大中臣朝臣諸魚一叙二松尾乙訓二神從五位下一以二遷都一也と有り文德天皇實錄に嘉祥三年秋七月丙子朔丙戌進二山城國火雷神階一授二從五位上一清和天皇實錄に貞觀元年正月廿七日正五位下乙訓火雷神授從四位下と有れば嘉祥三年より貞觀元年迄の間に一階進られ給へるか御紀に脫たるなンめり中右記に大治二年二月神祇官失レ火燒二高倉一藏火者山城國乙訓社祝部眞成可レ令二給祿一と有は當社の神威を奉て徵驗有し賞なる可し此社今向日町と云に立せ御在し坐て神名式なる向神社と共に齋れ給へり此二社を合せて向日明神と申せり **可茂建角身命也丹波神伊可古夜日賣也玉依日賣也三柱神者蓼倉里三井社坐也** 〇今云釋紀に引るに蓼倉里三身社傳二三身二者賀茂建角身命也丹波伊可古夜日女也玉依日女也三柱神身坐故號二三身社一今訛云三井社一と有にて事甚著明し此今云々と云る今は風土記を奏進爲る延長の今也三井とは三柱神の鎭居給ふ由なり神名式に三井神社名神大月次新嘗と有り臨時祭式には三井を御井に作れり其に依て訓べし社家說に中賀茂三井社也元坐二蓼倉里一在二下賀茂東北之地高野川之西一と云り和名抄郷名に愛宕郡蓼倉多天久良と有り山城志に已廢有二賀茂田中二村と見え京都古圖に蓼倉田中里と記して此邊都にて蓼倉郷なり借右の三井社後に又遷せりと聞えて今河合社の　に在て三社並立せ給へり又元曆奏上記に下社所レ坐有二小鳥社一八咫烏之德祭レ之と有は式外なれども此も建角身命を祀れるなり **妹玉依日子者今賀茂縣主等遠祖也** 〇今云姓氏錄山城國神別に賀茂縣主神魂命孫武津之身命之後也と見え又鴨縣主賀茂縣主同祖云々と有り風土記と姓氏錄と其父子に依て傳の異れるなり借上賀茂の末社に氏神社と云るは此玉依日子命なる可し但今賀茂にて賀茂縣主と云る三流有り一は右の玉依日子の子孫なるなり一は姓氏錄大和國神別に賀茂朝臣大國主神之後也と有る流なる可し一は鳥羽本國の鴨より其同神なるに就て其祭に來れるなるが此は天皇の御流なり然れど此氏神社は次なる二流のにては非ざり と見えたり此傳を正して辨る時は右の風土記の可茂社云云より從衛時名日二賀茂一也迄は賀茂事代主命の故事にて其より以下は建角身命及其子其孫の上の故事にて其本二條なるが混れて一に爲れる事上にも下にも辨たるが如し右の傳を正したる趣は建角身命丹波國神野神（健速日命）の女伊可古夜日女に娶て生坐る御子玉依日古玉依日女二柱坐り或時玉依日女石河瀬見（ソヒ）小川に遊び爲る時に川上より丹塗矢流下りて身に依しかば取持還りて床邊に插置りしに麗美しき男に化れりければ見感て嫁繼けるに娠みて御子を生りしかば祖父建角身命其父を知まく欲く成て云々の事を物爲給ひけるに吾は天神の御子と云て天に上給ひ其母も次て天に上れりしと云事なり若て丹塗矢を射放ち給ひしは大山咋神（即事代主命也） 其矢に化れるは火雷神（即乙訓社坐神） 其玉依日女の火雷神の妻と成て生ませるは山本坐御子神（片山御子神也）に坐りとなり然るを秦氏と賀茂氏とに傳る所少異有が故に終に御祖神社（大己貴命玉依姫命）と御祖神（片山御子神御母玉依日女）とを混らし別雷神社（事代主命）は分土の義なるを御子神の雷公

と成て天に上給ひし事と紛ひて別雷神と爲ると賀茂事代主命と賀茂建角身命と凡て似たる事の多在に依て此と彼との條理を紕し別べくも非ず成れりける者なり 備此玉依日女の事は其の丁神武天皇御世なる可し書紀二年王寺の下に又頭八咫烏亦入ニ賞例ニ其苗裔即葛野主殿縣主部是也と有て其建角身命は其より五年の前戊午に天降坐る事書紀に見えたればなり備古事記の同段に丹塗矢の故事を載たるは誤傳に在れども其天皇の御世に在し故を以なる者なり 故賀茂別雷神は元暦奏上記に自ニ神代ニ所ㇾ鎭上社事代主命下社大己貴命而已故有ニ別嚴山之名ニ也後竟爲ニ山城國杜ニ矣天降自ニ神代ニ先之詠於ㇾ此在焉云々顯言則上社事代主命下社大己貴命而已と反復して云るは實に古說なり出雲大社小縁記に山城國加茂大明神者當社第一王子阿式大明神是也と有る阿式大明神は味鉏高彦根命にて事代主命と同神なり別嚴山は先に御父大神と共に國土經營の時に葛野の荒子(アラシ)山を劃て大井河を通し其片端をば龜尾山と號け片端の松尾山を分土山と云るを後に日向より遷坐て此賀茂の地に鎭坐時に其別雷神と御名に負せる故を以其山號をも移して山城の國の鎭めと爲して齋ひ給へる者なりけり山城志に賀茂山在ニ上賀茂東ニ一名分土山又神山と有る是なり天降自ニ神代ニ先之詠於ㇾ此在焉は賀茂註進記に「千早振分土山に宮居して天降る事神代より先」と云歌を神詠と爲て出せる其を云るにて此神詠は覺束無き事なれども此神の天より降り給ひて此に神代より鎭坐と云證には爲れり 備別雷神事代主命一神なる證は攝津國比賣許曾社記に雀宮神社祭神二座別雷命事代主命下照姫別名也と有り奥州白河郡仙臺と見えたる下照姫に比坐と有を以ても他神ならぬ事を知べし又神名帳頭註に上賀茂宮味鉏高彦根神中宮大己貴神下賀茂宮宗像姫神と見えたる中宮下賀茂宮と分たるは非なれども凡て此傳甚正しきなり又異本舊事記に開闢宮神社味鉏高彦根大神山代國上宮神と有るなど實に然る言なり猶下に云ふ事を待て此說の妄ならぬを知べし 備山城風土記に日向曾之高千穗峯天降坐神云々と有は皇御孫命の天降り坐時に天之八衢に參迎奉給ひし事を云るなり此は事代主神其父大神と共に此國土を奉避り給ふ時の大國主神の御言に僕子等百八十神者即八重事代主神爲ニ神之御尾前ニ而仕奉者違神者非也と申給へる御言を結びて顯出給へるか其時の御名乘に猿田彦大神と聞え給へるか其は事代主命に坐事を慥に見認め深く遠く考定めたる所有て三卷太神宮新年祭詞十三卷等に委しく註せるが如くなるが說長ければ此には記さずと雖も其大略を云むに古事記に其御天降の時に天宇受賣命の問に答へて僕者國神名猿田毘古神也所ニ以出居ニ者聞ニ天神御子天降坐ニ故仕奉御前而參向之侍と申給へるは其御尾前に仕奉り給ふ義なり然れば右の風土記の原文には日

向會之高千穗峰天降坐神賀茂事代主命也皇御孫命之御前立云々など有けむを建角身命の神武天皇を導申給へる事と混同(ヒトツ)に爲る者なる事明らけし（事代主命の猿田毘古神に坐るが天鈿女命に送られ給ひて山城國の賀茂に至坐る事は下に云ふを見べし）偖風土記に上坐而宿ニ坐大倭葛木山之峯ニとは神代紀に因曰發ニ顯我ニ者汝也故汝可ニ以送ニ我而致ニ之矣云々即天鈿女命隨ニ猿田彥神所ヲ乞遂以侍送焉と見えたる如く日向より伊勢に到給ふ因に物爲給へるなり此より前に播磨風土記に室神社の故事を誌せるに上古は大なる藤葛の南山より北嶺に這繞ひて海面見え分ざりしを當社の御神賀茂別雷神日向國高千穗峯ニ上嶽より洛北二葉山へ遷らせたまふ時此國に暫時影向し給ふ時此名津(ヨキツ)なりと見行して便供奉の神等に令せて斧鉈鎌の三刄を以て彼藤葛を悉く伐拂ひ給ひ湊を開き給ひしかば程無く名湊(ヨキミナト)と成り往來の船風波の難を凌ぎ侍る」と有は其時の事なんめり上に引る異本舊事紀に針間室神社味鉏高彥根大神山代鴨上宮同神と有を思ふ可し（又一本舊事紀には針間國室戸神社浮穴宮天皇時味鋤託彥根大神出現鎭坐とも有り然れども風土記の傳は神代の事なれば浮穴宮の御世より其神代の迹を認て勸請奉ると云意なる可し浮穴宮は安寧天皇の都城の名なり或書の紀行に播磨國室津に明神社有り本社は南向に立せ給ふ末社六座並坐故に七社大明神と稱す神領三十石神主二人有り本社は賀茂明神にて御在し坐故に此御祭には京都賀茂社の社人等來て此神主と共に執行はる云々と云り但此社式内には非ず式外なり）偖右の宿ニ坐大倭葛木山之峯ニは高天山の事成が神名式に葛上郡高天山佐太雄神社見えたるも上に云る事共に叶ひ又其麓に高鴨阿治須岐高彥根命神社（並名神大月次相嘗新嘗）立せ給ひて此葛木の邊を主領き坐神に坐るが此は此詞に依に此より前に此地に皇御孫命の近守神と爲て御靈を留置給へるが故に暫く其に留り御在しけむと所思る山は元曆奏上記に欽明天皇廿八年四月（中酉）自ニ下大和葛木逢日村社本所ニ祭三座兒神皇兒神以ニ味耜高彥根命陪ニ之地依ニ神宣遷ニ山代別雷山遺ニ味耜高彥根命止ニ葛木鴨ニ吾勝尊與ニ兒神至ニ祭於山城ニ以ニ皇兒神ニ（忍穗耳命）祭ニ上社ニ以ニ兒神ニ（素戔嗚尊）祭ニ下社ニと有は欽明天皇御世迄に高鴨社に祭れるは兒神（素戔嗚尊）皇兒神尊（吾勝）味耜高彥根命と三柱坐るを神宣に依て素戔嗚尊を山城の賀茂御祖神社に合祭り吾勝尊を別雷神に併祀り味耜高彥根命は同神に坐故に一柱を葛木鴨に止め奉れりとなり然るは神代に此葛木より遷て味耜高彥根命は山代別雷山に鎭坐すが故也同記に神武天皇東征之後以ニ高皇產靈尊ニ祭ニ上社ニと有り其別雷神社の古き事知るべし偖彼丹塗矢の故事は其東征以後の事なり然れば其御子の別雷神には非る事も

愈著明き者なるをや 但以ニ兒神一祭ニ下社一は出雲井於神社の事なる可し此事已に上に說り賀茂緣起及秦氏本系帳又本朝事始等に志貴島宮御宇天皇之御世天下擧レ國風吹雨零百姓含レ愁爾時勅ニト部伊吉若日子一令レト乃卜奏ニ賀茂神之祟一也仍撰ニ四月吉日一祀云々と有り此を註式には欽明天皇二十八年丁亥と見ゆ借以爲ニ祭禮一能令ニ禱祀一因レ之五穀成就天下豐年也と見えたり此は御紀廿八年の下に郡國大水飢餓人相食轉ニ傍郡穀一以相救と見えたる此年の事なり公事根源にも欽明天皇御宇四月吉日を撰びて祭らると有り

倭風土記に自レ彼漸遷至ニ山城國岡田之賀茂一隨ニ山代河一下坐葛野河與ニ加茂河一所レ會迴見ニ賀茂河一而言雖ニ狹少一然石川淸川在仍名曰ニ石川瀨見小川一自ニ彼川一上坐定ニ坐久我國之北山基一從ニ爾時一名曰ニ賀茂一也と有は右の事代主神(亦名猿田彥神)の葛木より別雷山の麓に鎭り定坐す 道次也岡田之賀茂は 神名式に 山城國相樂郡岡田鴨神社(大月次新嘗) と有る是なり久我國は小河國にて石川瀨見小川に依れる名にて上賀茂の邊の古名なり北山基は謂ゆる神山の麓なり名曰ニ賀茂一也は鴨事代主命の鴨を以地名と成れる事已に葛木乃鴨能神奈備ニ坐の下に說るが如し今井似閑が萬葉緯に擧たる古說に天鈿女命天の磐船を榜寄せて神代の浦の浪靜なる磯に送奉りけるに賀茂大神形を顯し給ふ故に其地を御生野と云」と有は猿田彥神を送りて伊勢に到れる時の事にて定ニ坐久我國之北山基一と云ふ此時なる事疑ひ無るべき者也 此事豐葦原卜定記に皇孫天石座放千天乃八重雲乎稜威乃千別爾千別天云々天鈿女命波磐樟船乎漕奉利皇孫乎神代乃浦乃浪靜奈留磯迄送云々と有て此を皇御孫命の御事と爲るは妄なりと雖も猿田彥神を天鈿女命の送來て其御靈を鎭給ひし古說を掠めて云る者なり又神記の歌に「久方の天の磐船漕寄せし神代の浦や今の御生野」と有など皆ニ本着く所有が故なり倭此所に御靈を留めて終に伊勢國の五十鈴川上に到給ひて皇太神宮の鎭坐む期を持奉らせ給へる者なり

如此く種々の證文を得たれば賀茂別雷神社に神代より鎭坐す所即事代主命に坐て自餘の諸神は其より後の鎭坐なる事明らけし元曆奏上記に賀茂別雷皇大神宮(上社)四座中所レ祭正哉吾勝々速日天忍穗耳尊命故以ニ皇字一繼ニ伊勢一左高皇產靈尊右武祇命後事代主命也云々自ニ神代一所レ鎭上社事代主命下社大己貴命而已云々顯言則上社事代主命下社大己貴命而已と有を以知るべし右の高皇產靈尊は同記に神武天皇東征之後以ニ高皇產靈尊一祭ニ上社一と見え吾勝尊は同記に欽明天皇廿八年四月(中酉)自ニ大和葛木逢日村社一云々依ニ神宣一遷ニ山代別雷山一と見えたり 武祇命は其時世未詳と雖も決て古より並御在すなる可し或は此社を瓊々杵尊とも云れども吾勝尊の方勝る可し右の逢日村社は上に說る如く高鴨社なるが其味鉏高彥根命と並坐すは如何にと云に御父大神と共に此國を天神御子に奉と申給へりしは未瓊々杵尊の生坐さりし間なれば其にて天神御子と指て申給へるは正哉吾勝尊に坐れ

ば其由緒に依れる者なる可し但以二皇字一繫二伊勢一と有は恐くは當らざる可し此は今京に成て後に其皇京の守神と爲させ給ふ故に崇奉らせ給へるにこそ有りけれ皇祖などの趣意には非ず淳和天皇天長八年十二月に賀茂齋内親王を卜定ふ時奉らせ給ふ策命に掛畏皇大神爾申賜波久皇大神乃阿禮乎止賣爾云々乎卜食定進云々と始て見えたり又同記に以二天照皇大神宮一爲二皇祖一以二賀茂皇大神宮一爲二御祖一と有も非ぬ僻事なり天照皇大神の皇祖に坐事は疑ひ無き事ながら賀茂大神を御祖と申す事は下社に限たる事にて上社に坐事代主命の御祖の謂にて皇統に預りたる事には非ず此元暦奏上記は賀茂神宮奥秘記と云て元暦元年十二月二十八日常祇散位正四位下賀茂縣主祐正上と奥書有て其端書に謹奉二明詔一忝二臣祐正家之名譽一未レ顯二於朝廷一爲レ之記二兩宮之奥秘一密備二凡下奏覽一焉と有て兩神社に傳はる所の古說を記したる甚々正しき書なるにさへ如此く渉着たる時習を免れざるは惜しき事なり況て自餘の書典に載る所悉く其充當れるは無き筈の事なりけり賀茂御祖神社二座は元暦奏上記に自神代所レ鎭下社大己貴命と有て其も然る事には有れども御祖とは御母を申す古書の例格なるを思ふに上社に坐事代主命の御母神に坐事決き者なり二十二社註式に鴨社號二下社一御祖神と見えたる下に並べて玉依日咩別雷御母大己貴神別雷御父と有て常には父母と序次べき事成を御母神を先とし御父神を後に爲を以其御母神の主神として鎭坐す社に御父神を併祭給へる所也神佛冥應編に中宮大己貴神下賀茂宮宗像姫神也と有れば大己貴命本は中賀茂に坐けるを御祖神社に合せて二座成可し宗像姫神は大己貴命の后神に坐て事代主命には御母に坐せば御祖神と申す事其謂有下に引る鴨氏人記には姫大神と有り此は右の宗像三女神を八幡にて姫大神と稱奉れゝは其に依成可し近江國武佐八幡社傳に田心姫命瀛津島姫命市杵島姫命此三神號二玉依姫命一と有るは然る言也白井宗因が神社啓蒙御祖皇大神條に玉依姫非二高皇產靈並海童女一別有二一神一と云るは建角身命の女の玉依日賣にても豐玉毘古命の女の玉依毘賣命にも非ず別に玉依姫と云一神有と云るは然言也然るを古より識者此を建角身命の女の玉依日賣と云は憐れむべき者なり年中行事秘抄に舊記曰御祖多々須玉依媛命云々と有は其丹塗矢の化れる火雷神に娶て生坐る山本坐天神御子に對へて云るなるを秦氏本系帳などに其を結びて鴨上社號二別雷社一鴨下社號二御祖神一也と有は同じ狀なりける事の同じ所に二有が故に混ひたる者なるを識者其正しも無して信(タノ)み居る事心行ぬ業也けり偖御祖神社東西と二座並坐る其東方を玉依姫命西方を大己貴命の由也然るを元暦奏上記に鴨御祖皇大神宮三座中所レ祭兒神素戔鳴尊左神皇產靈尊右大己貴命也と有て玉依姫命は隱ろひたり今思に神皇產靈尊を古事記に神產巢日御祖命と有ば此御祖神を其なめりと中古に思違たる傳を其任に取れる者成べし又其素戔鳴尊は出雲井於神社に坐事上に云る如くなれば御祖命即玉依姫命と大己貴命との二柱に成て式文にも註式の說にも合て一事と成るは靈しき迄奇異しき事なりかし偖鴨氏人記に本宮神倭磐余彥天皇姫大神高皇產靈尊客御前大己貴命と有て本宮と客御

前と二社の趣は式文に合へるが本宮は姫大神に坐るを後に二柱を祭加へて三座と爲られたるに依て本宮は東社客御前は西社にて此を合せて今祭る所四座なる趣なり然れば高皇産靈尊は上社にも下社にも在す由なるが奏上記を暫く立る時は神皇産靈尊に坐せらむも知べからず（或書に社家云西方神武天皇也東方五十鈴媛也と有は西方大己貴命東方玉依姫命なるを御祖を皇祖と心得たる僻說也偖今詣て見奉るに本宮の北院に三所若宮と申て其中社は綏靖天皇東方は五十鈴媛命西方は神武天皇荒魂に坐り同神た本社別社共に祀る可くも非るを思ふべし偖今祀る所下鴨の祭神四坐なる事氏人私記に記せる如くなゝむを古老者など其も爲れば神武天皇の御相殿に坐事を打破りて御祖神社の祭神を誤る事の多在るは中々に拙き事なり古は玉依姫命大己貴命二座なれども中昔より合せ祭れる由なるが其は何れの時とも知る可からねども今現存す所右の如くなる者なり）偖皇大宮を大和に敷せ給ひし頃は神代の御契約の如く大御和鳴宇奈堤飛鳥等の神々其近守神と渡らせ給へば同神を祭ると雖も佗國なるには自然に疎く會釋(アヘシラ)はせ給ふめるを此賀茂大神はしも後に皇御孫命の天地と易る可からぬ皇大宮を敷せ御在し坐て其近守神と持齋かれさせ給ふ可き神の御定の有ける事と聞えて欽明天皇の大御世より其御祭を奉らせ給へる事上に引る秦氏本系帳及本朝事始に所見たるが如し續紀に和銅四年四月丙子朔乙未詔賀茂祭日自今以後國司毎年親臨檢察焉と有を以其盛なる事想像る可き者なり萬葉六（廿五丁）に天平九年夏四月大伴坂上郎女奉レ拜二賀茂神社一之時便起二相坂山一云々と見えたる此を以大和國の都邊りより態と參詣たりし事を知べし（但此は四月中酉日の祭に詣たりし者也此日の祭の事は秦氏本系帳等に撰二四月吉日一祀と有れども元暦奏上記に欽明天皇二十八年四月中酉云々と有を證と爲べし若て此祭今京と成ては公家の御崇敬も他に異に成て弘仁十年三月己卯朔甲午の勅に山城國愛宕郡賀茂御祖幷別雷二神之祭宜レ准二中祀一と御紀に被載たりき）神階の事は下上兩社共に何の時も同じく奉進らせ給へり續紀に延暦三年十一月丁巳遣二近衛中將正四位上紀朝臣船守一敍二賀茂下上二社從二位一と有は此より以前にも已に神位の高く御在せりし也帝王編年記に延暦三年是歲賀茂下上社奉レ授二從一位一と見ゆ然れば其同年に次で進ませ給ふ者なりけり此を日本紀略に延暦十三年十月鴨神松尾神加レ階以二遷都一也と有れども三年十一月の方然る可し續紀に延暦三年十一月丁巳遣二云々一敍二松尾乙訓二神從五位下一以二遷都一也と有を合せて其誤れる事炳然き者なり後紀に大同二年五月戊子朔庚寅賀茂御祖神別雷神並奉レ授二正一位一と見え又編年記に大同二年丁亥五月從一位賀茂兩所大神奉レ授二正一位一と有り此事記略には五月戊子と見えたり朔庚寅の三字を脱せる者なり其頃より齋內親王を進らせ給ひ萬事共に伊勢太御神に亞て貴く

御在し坐す事は皇御孫命の近守神に坐故に大和の京にて此詞に見えたる四所の神等を尊崇め給ひし狀に異ならず以上賀茂兩所大神の較略なるが猶此社に屬たる枝社坐り神名式に鴨川合坐小社宅(コモリヤケノ)神社名神大月次相嘗新嘗と見えたる此を年中行事秘抄に引る延喜元年十二月廿八日太政官符に件川合神是御祖別雷兩神苗裔神也と有は兩神の枝社なる山なるが其に就て思ふに小社宅神は二神を合せて一に祭れるなる可し小社(コモリ)は右の事代主命の下に云る如く三島溝咋耳命の女玉櫛媛命にて別雷神の后神武天皇の皇后五十鈴姫命の御鉏なり宅(ヤケ)は八上比賣命にて御祖社に坐大己貴命の御妃なる事上に大國魂の說を立て云るが如くなれば此兩神を合せて鴨川合神とは申せるなり又貴布禰神社名神大新嘗と有は右の川合神の御祖に坐れば兩社共に親しく由有る神なり又太田神社は天日方奇日方命にて事代主命の長子にて五十鈴姫命の御兄に坐り此事上に事代主命の下に云り猶云まく欲き事の多在れども此は此詞に近守神と有る事の因みに云ふ耳なれば日本紀傳に委しく記し傳ふ可し又神名式に葛野郡松尾神社二座並名神大月次相嘗新嘗と有は國土經營の時より鎭坐す所にして賀茂大神の天孫降臨の後に鎭坐すとは同じ神代の事と雖も先後有る事にて同神にては座坐せども鎭座の由來同じからざるなり二十二社註式に一座大山咋神也本社一座胸形中都大神市杵島姫也素戔鳴御子と見えたり社傳に御社東向にて北間は大山咋神南間は市杵島姫命に坐と云り玉葉に建久二年十二月七日松尾行幸神寶御覽寶殿二所云々一所金銀幣一具無ニ御鏡一是男躰之故也又女躰之御劒不レ付ニ平緒一と有るを以て知べし但此神寶は朝廷より行幸に就て奉らせ給ふ神寶にて神躰の謂には非す偖其大山咋神は賀茂別雷神に坐て味鉏高彥根命にも事代主命にも同神なる事上に委しく說明せるが如し御父大國主大神と共に國土經營の時に丹波國は湖なりしを龜山嵐山を裂分て大井川を通して國處を成し給へりし故を以大山咋神とも別雷神とも御名に負して丹波國鍬山社及此松尾神社に御靈を留めて鎭坐す事其社記を舉て上に註るが如し此所謂に依れりと見えて神名式に丹波國桑田郡出雲神社名神大と有り此は決く大山咋神の御父母の神々に坐なるべし一宮記に三穗津媛命と有は何とかや落着ぬ心ちぞ爲る小川月神社名神大此は大國主神の御父素戔嗚尊に坐せり松尾神社の攝神に月讀神社の御在るに思合すべし三縣神社は事代主神の子天日方奇日方命ならむ和名抄に同國何鹿郡三方鄕有り又松尾神社此は山城のと同神なる事云も更なるが浮田大明神と申して大井川の水上に坐り神代系圖傳に丹波國浮田大明神者大山咋神也遂古世丹波國皆湖也大山咋神鋤ニ其湖水一水涸成レ土(クニト)矣以レ鋤爲ニ神體一此神者即松尾大神后體也と見えたり伊達神社は五十猛命にて大國主神の兄神なり水涸て土(クニ)と成ける時に木種を蒔殖給ひつらむ大井神社は社傳に酒美豆男命酒美豆女命二柱山城國松尾より出立し御在し坐て大井川を鯉魚の背に乘て上來給ひ此所に鎭坐に依て大井神社と申と云り松尾大神の酒に由有事次に云り古事記に大山咋神亦名山末之大主神云々坐ニ葛野之松尾一用ニ鳴鏑一之神者也と有は其松尾に鎭坐す御靈の形を顯し給ひて物爲給へるなるが此は神武天皇の大御世頃と所思しき由上に山城風土記を引て云る如くなり是を以て神代より鎭坐すと云事の然る所緣を知べし又社記に松尾神日尾の椙を以桶に作り山田の米を以飯に炊き御手洗の水を以酒を釀給ふ」と有は神代の事なる事云

も更なり此に依て今も造酒の神と申して世に崇奉る所なり 大和志に高市郡飛鳥神社酒殿在二岡村上方一大石縦一丈五尺横五尺石面彫二刻槽七道一相傳昔沃二滴神酒於此一と有は事代主神の其地にて酒を醸給ひし古傳の遺れるなり但神の字は山の下沃滴の上に在べし神酒の事に非ず神の酒を此に灌給ひし由なり松尾神の始て酒を此地に醸給へりし故に酒美豆男命酒美豆女命と申せる由丹波國大井神社の傳説に合り然れば松尾に祭る所の二神を申す事云も更なり 倍一座は胸形中都大神此は下鴨に坐御祖神に同じく坐故に 註式 に玉依日咩 別書御母 と有を神佛冥應編には其を宗像瀬神鴨氏人記には媛大神と有事上に云る如くなり本朝月令に載る秦氏本系帳に正一位勲一等松尾大神御社者筑紫胸形坐中都大神戊辰年三月三日天二下坐松埼日尾一 又云日埼岑 大寶元年川邊腹男秦忌寸都理自二日埼岑一更奉レ請二松尾一又田口腹女秦忌寸知麻留女始立二御阿禮爾一知麻留女之子秦忌寸都駕布自二戊午年一爲レ祝子孫相承祈二祭大神一云々 戊辰年は大寶元年丁酉より以前に推上るに天智天皇七年は戊辰に當れゝば其時なる可し此年に筑紫より勸請りて元より日埼岑に坐す大山咋神と御母子共に相並はせ給ふ事と成れるが其は神託などに依れりけむ故に天下坐とは云るなり此の時迄松埼日尾には大山咋神一柱ぞ坐りけむ其は上に引る諸神鎭座記日枝神社條に日枝神社者大國主大神也 自二神代一兒大山咋大神化二遊此處一云々豊浦宮天皇時大神辭レ之返二父大神一替栖以二葛野一爲二鎭祠一山城國松尾神祠此也と有を以知可し 筑前國宗像社古文書に山城國松尾一當時既及二退轉一候之由被二歎思食一候也然者筑前國宗像社者爲二當社一體之上候間神社家中別而勵二興隆之志一相二觸國中一奉加等令二運送一於二本社一者可レ爲二神妙一候由可下令二下知一給上者大氣如レ此執達如レ件天正五年十月廿四日伯中將殿左中將花押と有は其本社は筑前國宗像郡宗像神並名神大と見えたる其なる事云も更なり拾芥略要抄諸社部に宗像本社筑前國と云るも此松尾に對たるなり 大寶元年川邊腹男秦忌寸都理自二日埼岑一更奉レ請二松尾一云々と有は大 山咋命と共に日埼岑より松尾に遷奉れりしなり色葉字類抄に引る本朝文集に大寶元年秦都理始建二立神殿一立二阿禮一居二齋子一供奉天平二年預二大社一者 と有る是なり 註式秦都理奉レ勸二請松尾一始造二立神殿一と有は 文集の 元本に然有しを取れるなる可し 右の日埼岑より松尾に移給へる後にも猶其地に宗像神社有て松尾の枝社なるは其舊趾を存（ノコ）せる者なる可し百練抄に仁治二年八月七日の下に櫟谷宗像兩社云々是松尾末社なりと見えたるが其櫟谷神社は式内にして宗像神社の式外なるは已に大寶元年に松尾に移し奉れゝばなる可し今も嵐山の麓に此兩社並び立せ給へり櫟谷は和名抄に葛野郡櫟原郷と見えたれば其櫟原の谷なる地名にて元日尾とも日埼とも云し地名は亡て櫟谷と呼事とは成れりけむ三代實錄に貞觀十二年十月十七日ニ在二葛野鑄錢所一宗像櫟谷淸水堰小社五神奉二鑄錢所新鑄錢一と見えて其告文有此櫟谷神社は太國主神には坐ざるが宗像神と並坐るを其宗像神は松尾にて大山咋神の相殿に成給へるが故に式外なる櫟谷祠社の式内なるを思ふに大山咋神にては本より無して大國主神の其地に留坐故に宗像神をも共に並祭れるなる可し若て松尾社に秦忌寸姓の仕奉る事は丹波國に坐し程よりぞ仕奉りつらむ其は大山咋神の其國地を經營らせ給ひける山を以鎭り坐つるが饒速日命の御末其國に土着スメりし事上に山城風土記を引て云る如くなるが其國にて仕奉れりし隨に其松尾大神の御社を山城に遷奉れる時に移りて元の如く仕奉れりしなり但此は決めて遠き大古の事なる可し知麻留女立二

（御阿禮爾㆒とは本朝文集に立㆓阿禮㆒居㆓齋子㆒と有を云ひ部驚布自㆓戊午年㆒爲㆑祝は養老二年より祝部と成て仕奉れりしを云ふ）神階の事は續紀に延暦三年十一月丁巳遣㆓兵部大輔從五位上大中臣朝臣諸魚㆒叙㆓松尾乙訓二神從五位下㆒と有る此を紀略には十三年と有れども又續紀に同五年十二月辛巳叙㆓從五位下松尾神從四位下㆒と見えたれば誤なり續後紀に承和十二年五月奉㆑授㆓從四位上勳二等松尾神正四位下㆒同十四年七月奉㆑授㆓正四位下勳二等松尾大神從三位㆒と見え文德天皇實錄に仁壽二年五月丁卯朔加㆓山城國松尾神正二位㆒と見え三代實錄に貞觀元年正月廿七日山城國正二位勳二等松尾神授㆓從一位㆒同八年十一月廿日進㆓山城國從一位勳二等松尾神階㆒加㆓正一位㆒と有が如し（然れば秦氏本系帳に正一位勳一等松尾大神云々と有る勳位は貞觀よりは後元慶よりは前に一等を被加たるにや其下に大寶元年云々自㆓戊午年㆒云々自㆑其以降至㆓于元慶三年㆒云々と有れば其より以前に在し事知べし或說に元慶三年の三は五を誤也三代實錄に元慶五年三月廿六日甲戌制令㆓五畿七道諸國神社祝部氏人本系帳三年一進㆒と有を證と爲べしと云るは然る言なり）如此く賀茂松尾の神等其枝神等を率て此山城の域內に神代より鎭り御在せる其地に玉敷平安宮を敷給へるが闇に近守神と成れるは自然の如くには在れども素より神代に大國主神宗像姬神事代主神の此地ぞ萬代に易るべからぬ大宮處と見定め給へる幽事の其期を得て顯るゝ所にて尊しとも辱しとも言に出て著し述むも甚可畏くは有れども餘りに世人の正實を得ざるが心苦しくてなむ（右の賀茂松尾の神々は此詞に大穴持命の近守神と奉らせ給へる神々に坐て他神には御在さぬも又奇しき事ならずや然れども大和は大和此は此にて近守神と御心を號せ御在せらむ事云も更なり）○八百丹杵築宮爾靜坐支神名式に出雲國出雲郡杵築大社（名神大）と有る是なり神代紀に天日隅宮古事記垂仁天皇段に出雲之石硐之曾宮齊明天皇御紀に巖神之宮など見えたる皆此大社なる事下に條々云るが如し神名式風土記共に見えたる所出雲國にては熊野大社杵築大社と有て自餘の諸社とは相並ばざる事今云ふ限に非ず後釋に引れたる風土記に杵築鄕郡家西北廿八里六十步八束水臣津野命之國引給之後所㆑造㆓天下㆒大神之宮將㆓奉與㆒諸皇神等參㆓集宮處㆒杵築故云㆓寸付㆒（神龜三年改㆓字杵築㆒）と是を以八百丹杵築と云名義を意得べし冠辭考に彌百土と多くの土を重疊て杵築固めたる宮地を云り」と有は然る言なり此文に八束水臣津野命國引之後と有は同記國引の文に國引坐八束水臣津野命云々國々來々引來縫國者自㆓去豆㆒乃打絕而八百米支豆支乃御埼也と有に對へて云るなり（然るは國引坐八束水臣津野命の時に支豆支乃御埼は成れりしかども杵築鄕と云地は未成ずて有けるを所造天下大神を天日隅宮に鎭奉る時に至て諸皇神等の彌百土を以て杵築給ひしなりと云意なる事能々照し應せて悟る可き者なり倩右の八百米は八百丹を誤れるかとも思

ひしかども師說に八百米を杵以て搗と云意の發語也と有や然る可からむ且右の杵築郡古は出雲郡也しを今は神門郡に屬る由記傳十四に見えたり同書に風土記に出雲郡出雲御埼山郡家西北廿七里三百六十丈高三百六十丈周九十六里一百六十五歩西下所謂所造天下大神之社坐也と有は杵築大社なるべし」と云れたれども其は杵築鄉の下に郡家西北廿八里六十歩と見え御埼山の下に郡家西北二十七里三百六十歩と有を以思誤られたるなんめり御埼山の廿七里三百六十歩は郡家より最近き所を云るにて其周九十六里一百六十五歩と有の西下を遙に程隔たる事云も更なり此は神名式に御碕神社と見え風土記に美佐伎社と見え同記式外に御前社同御埼社と有此にて今日御埼社と云是也懷橘談と云ふ書に載る羅浮子鐘銘に天曆帝深崇二此社一如二日字一讀二日御崎一と有る日字は心行ぬ事なから今稱する所日御崎と云り此社の祭神の事白井宗因が神社啓蒙に云る說なとは後世の杜撰と聞えて信難き事共耳なり

此大社の起元は古事記國避段なる大國主神の御言に爾答白之僕子等二神隨レ白僕之不レ違此葦原中國者隨レ命既獻也唯僕住所者如二天神御子之天津日繼所一レ知之登陀流天之御巢一而於二底津石根一宮柱布斗斯理於二高天原一氷木多迦斯理而治賜者僕者於二百不一レ足八十坰手一隱而侍と申給るに依れり右の登陀流は富足なる事大殿祭詞の下に說る如し天之御巢とは天之御舍也同記玉垣宮段なる出雲大神の御諭言に於レ是天皇患賜而御寢之時覺二于御夢一曰修二理我宮一如二天皇之御舍一者御子必眞事登波牟如レ此覺時布斗摩邇々占相而求二何神之心一爾祟出雲大神之御心云々即返二菟上王一令レ造二神宮一と有る此は神代の古例に違へるを以て祟給へるなるを以て御巢は御舍なるを察らむ可し治賜は同記御諸神條に能二治我前一者云々吾者伊二都一岐一奉于倭之青垣東山上一と有を合せ見れば宮を修理りて其に鎭奉る事を云り物を其置べき座に安置（シヅメオク）を納と云も同じ事なり右の天之御巢の事を傳に御庖廚の竈所の上の炊烟の發騰る所を云なり云々と云れたるは下に於二出雲國之多藝志之小濱一造二天之御舍一而水戶神之孫櫛八玉神爲二膳夫一獻二天御饗一之時云々と有る文を列ね見られたるより誤られたる者なり此多藝志濱の天之御舍は杵築大社の事に非ず大國主神を其宮に鎭め奉る後に其大神に天御饗奉らむ御廚を構へて其に齋奉れるにて此は天御饗の爲に招奉れるにこそは有けれ其神の常宮ならざるを文の續きしきから一に思混へられたるなめり記傳に引れたる內山眞龍が說に多藝志之小濱は今は田地に成て武志（タケシ）村と云神門郡鹽冶鄉の內なりと云ふ此所にて在つる御廚の故事なり

如此申給へるを天神の諾ひ給へりし事は神代紀一書に高皇產靈尊乃還遣二二神一勅二大己貴神一曰今者聞二汝所レ言深有二其理一故更條々而勅レ之夫汝所レ治顯露之事宜二是吾孫治一レ之汝則可三以治二神事一又汝應レ住天日隅宮者今當二供造一即以二千尋栲繩一結爲二百八十紐一其造レ宮之制者柱則高大板則廣厚又將二田供佃一又爲二汝往來遊レ海之具二高橋浮橋及天鳥船亦將二供造一又於二天安河一亦造二打橋一又供二造百八十縫之白楯一又當レ主二汝祭祀一者天穗日命是也と見えたる是なり斯れは其天日隅宮を供奉て大神を鎭奉る事は天穗日命其祭主と爲て仕奉給ひし事斯文に依て著き所なり偖此は天神の御言なるを其を受て其仕奉れりし由をも記さるべきに然らぬは傳へ漏せるなり尙より其御言の如く仕奉れらむには再其事を態（ワザ）と記し載る迄にも非ればなる可し偖此云々の時に天穗日命は再天降り給へりしなり其天日隅宮とは大國主神の顯國を皇御孫命に避奉給ひ其に八十隅路の如く潜まり隱り給ひ

て神事を治し給ふ義なれば舊く日隅を比須美と訓る其宜しかる可し神代紀に伊弉諾尊神功既畢靈運當遷是以構ニ幽宮於淡路之洲一寂然長隱者矣と見えたる其幽宮と同し意なれはなり然れば上に引る古事記に唯僕住所者如ニ天神御子之天津日繼所レ知之登陀琉天之御巣ニ云々而治賜者僕者於ニ百不レ足八十坰手一隱而侍と有る文を考るに於ニ百不足八十坰手一隱而侍と有は其宮に隱り住給ふ事を八十の隈々を經行て甚遠き處に去給ふ如くに云るにて此は顯世を避て神宮に被齋給ふ事に云るなれは於字を爾と訓るは如字の意なる事第一巻（大御巫祭神詞）堅石爾常石爾の爾の辭の註に云るが如し然るを神代紀正書には豫に其鎭坐す神宮の事を云ずて直に今我當於ニ百不足之八十隈一將ニ隱去一矣言訖遂隱と有に依て然しもの鈴屋翁すらに其心ざし給ふは黄泉國なりと云ひ平田翁も何處にか身を隱し給ふと云れたれども記及一書の文の始終を照し見られざる誤より出たる說共なり右に引る一書に汝應レ住天日隅宮者云々と有て其下に吾將ニ自レ此避去一即躬披ニ瑞之八坂瓊一而長隱者矣と有は右の古事記の趣に異ならず（考頭書に日隅宮は比曾萬里乃宮なり」とあるは謂れたる說なるを後釋に日隅宮は比須乃宮と訓べし此を風土記に日栖宮と書て栖は古書に必須（ス）と訓む字なればなり云々若て比須の須は古事記に天之御巣と有る須なり」と云れたれども栖の字は須牟とも訓字なれば須美と訓て難無し假令比須美を比須と訓ても潜り隱るゝ意は有なり又比須を御巣なりと云れたるも心得ず御巣とは御舍なる事大殿祭詞の下に註る如くなれば叶はず）右の如く大國主神の天日隅宮は天神の定させ給ふ所なるが故に其造宮の事も天神の御許より諸の皇神等を降して物爲させ給へり其は風土記に所ニ以號ニ楯縫一者神魂命詔五十足天日栖宮之縱横御量千尋栲繩持而百結々八十結々下而此天御量持而所レ造ニ天下一大神之宮造奉詔而御子天御鳥命楯部爲而天降下給之爾時退下來坐而大神宮御裝束楯造始給所是也仍至レ今楯桙造而奉ニ於皇神等一故云ニ楯縫一と見え又上に引る杵築郷云々所レ造ニ天下一大神之宮將ニ奉與一諸皇神等參ニ集宮處一杵築故云ニ寸付一と有を合せて曉る可し又佐香郷云々佐香河内百八十神等集坐御厨立給而令レ釀レ酒給之即百八十日喜讌解散坐故云ニ佐香一と有も所造天下大神宮の御厨なり是以て此國土に在ゆる神等の大國主神に仕奉給ふ事知べし但此は神代に此天日隅宮を創めて造らせ給ふ時の事にこそ有れ人世と成て後に此宮を朝廷より造替させ奉給へるも其神代の謂に依て幽より神の賛けて其大神宮を造奉らせ給ふ事と聞えて杵築大社記に引る節中

納言家保卿日記に天仁三年七月四日大木百本海上より稻佐浦に流寄れり於是稻佐上宮の近邊に長十五丈口一丈五尺の大木一本依來る在地の人民疑を成ながら是を伐取むと爲るに大蛇件の木を纏ひて居ける故に諸人恐れて退きぬ然るに伐取むと謀りし者共病苦に惱さるゝ事頻也ければ種々祈を爲けるに御託宣に云く出雲大社建立の度毎に諸國の神等行事と成る今度は我行事に當りぬ御材木は採奉り畢ぬ件の一本は我が得分也此木を以急ぎ我社を造立す可と示給ふ稻佐浦の依木にて正殿を營作せり永久三年十月廿六日遷宮なり此を寄木の造營と云」と有り此は因幡國宇倍神社の神の行事に當らせ給へる山にて託宣サト〻し給へる神異なりし事跡の玉襷に云れたるが如し神代の事跡の天地と共に違はざる事此を以曉る可し備右の五十足を内山眞龍は五は衍として登陀流と訓る其は古事記に登陀流天之御巢と云る證も有て宜しけれ共予思ふに亜傳に引れたるには伊陀流と訓れたり其に從ふ可で所思たる其は伊は氣にて天中ソラノナカ〻に足滿て有を云なる可し漢籍素問に太氣擧之と有を思合す可し然れば伊陀流は天と云む發語なる者なりけり若て天御鳥命を師の古史には天御鳥命（アメノミチ）と作れたる然る本の有に依られたるならめども門人杜擧重説に御鳥は假字にて身度（ミトリ）なる可し上古曲尺を用られざる以前には身を以て度（ハカリ）として規矩を定られしと思しければ天御鳥命と有るを正しと爲べしと云るは然る事なりき古事記玉垣宮段に本牟智和氣御子云々是御子八拳鬚至二于心前一眞事登波受云々於是天皇患賜而御寢之時覺二于御夢一曰修二理我宮一如二天皇之御舍一者御子必眞事登波牟如此覺時布斗麻

邇々卜相而求二何神之心一爾崇出雲大神之御心故其御子令レ拜二其大神宮一將レ遣之時令レ副二誰人一者宜爾曙立命食レ卜故科二曙立王一令二宇氣比白一因レ拜二其大神一誠有レ驗者住二是鷺巢池之樹一鷺乎宇氣比落如レ是詔之時其鷺墮レ地死又詔二之宇氣比活一者更活又在二甜白檮之前一葉廣熊白檮令二宇氣比枯一亦令二宇氣比生一爾名三賜其曙立王謂二倭老師木登美豐朝倉曙立王一即曙立王菟上王二王副二其御子一遣時自二那良戸一遇二跛盲一自二大坂戸一亦遇二跛盲一唯木戸是腋戸之吉戸卜而出行之時每二到坐地一定二品遲部一也故到二於出雲一拜二訖大神一還上之時肥河之中作二黑樔橋一仕二奉假宮一而坐爾出雲國造之名岐比佐都美餝二青葉山一而立二其河下一將レ獻二大御食一之時其御子詔曰是於二河下一如二青葉山一者見レ山非レ山坐二出雲之石𥑎之曾宮一葦原色許男大神以伊都玖之祝大廷乎問賜也爾被レ遣二御伴一王等聞歡見喜而御子者坐二檳榔之長穗宮一貢二上驛使一云々於是覆奏言因レ拜二大神一大御子物詔故參上來故天皇歡喜即返二菟上王一令レ造二神宮一と見えたるを深く思ふに前朝崇神天皇七年御紀に以二大田々根子一爲下祭二大物主大神一之主上又以二長尾市一爲下祭二倭大國魂神一之主上云々

便別祭二八十萬群神一仍定二天社國社及神地神戸一と有て大國主大神の和魂神荒魂神をは御誨に依て形の如く祭らせ給ひけれども出雲は皇都より程の遠く在し故に猶齋祭らせ給ふ事より始て凡ての事共も何も其國造に耳委任ね置せさせ給ひければ其國の力を以物爲る事なりければ造宮の制なども柱は高く太く板は廣く厚くと云ふ神代の御定の如くは非りける故に此御祟は有けるなりけり其は垂仁天皇二十五年御紀なる一云丁巳年云々と有る大倭大神の御誨に先皇御間城天皇雖レ祭二祀神祇一微細未レ探二其源根一以レ粗留二於枝葉一故其天皇短命也是以 汝御孫尊悔二先皇之不レ及而愼祭則汝尊壽命延長復天下太平矣と有を以て、、、、知られける　御紀に依に譽津別王の初て得言(アギトヒ)給へりしは二十三年の事なり此出雲大神云々の事は記し漏されたれども其同年なる事著きを其より三年經たる頃は如此き御誨の有けるなどを思合するに決めて菟上王を返遣はされて其大神宮を造奉らせ給ひし理なる故に大倭大神より如此は誨し白し給へりと見ゆ能々事の狀を思合せて曉るべき者なりかし大倭神社注進狀にも大倭神社在二大和國山邊郡大倭邑一蓋出雲杵築大社之別宮也と有て其本宮は杵築大社也と雖も杵築大社は神名式に准名神大と耳見えたるに大和大國魂神社は名神大月次相嘗新嘗にて渡らせ給ふなど京よりの遠近に依とは謂ながら未其源根を探らせ給はざるに似たり鹿島神宮香取神宮平岡神社等は春日祭神の本宮なりと雖も御祭以下總ての事共春日には猶後れさせ給ふが如し　右の石坰之會宮の石坰は上の八十坰手と同意にて會は日隅宮の隅と同じく此は天日隅宮なる事云も更なり倭

石坰とは巖石の隈々しき處の如く世人の目も耳も及難なる隈處を云と聞ゆれば八十坰手に同しとは云なり會に隅の意有は古熊襲國と云し地方を今大隅國と云を以曉る可なり此に葦原色許男大神と有を以誰も別社の如く心得ゆれども此も亦大國主大神の亦名なれば然も宜ふ可き者にこそ　其は杵築大社に坐同神を古事記には大國主命と傳へ他の古書には大己貴命と記せるに同じく此も其例なり倭此の文肥河之中作二黑樔橋一仕二奉假宮一而坐爾出雲國造之祖云々餝二青葉山一而立二其河下一云々是於二河下一如二青葉山一者見レ山非レ山若坐二出雲之石坰之會宮一葦原色許男大神以伊都玖祝之大廷乎と有に依て石坰之會宮と云も肥河の下に在が如なれども此は御子を其肥河に假宮を造て令坐奉るを以て國造岐比佐都美が大御食を獻らむ料に青葉山を作れるなれば石坰之會宮に拘はる事ならず其國造が身の[illegible]學を指て葦原色許男大神を以齋く祝と宣へるなりさて肥河は風土記大原郡條に斐伊川郡家正西五十七歩西流入二出雲郡多義村一と有れば其河下は出雲郡にて杵築大社とは同じ郡内也　齊明天皇五年御紀に是歲命二出雲國造一闕レ名修二嚴神(イツカシノカミ)之宮一云々と有を釋紀に嚴神之宮謂二杵築神宮一也と有は然る言なり此を舊くより伊都久志之神宮とも伊都加志之神宮とも訓るは神事を治せる大神に坐せば恐こみ敬ひ畏るゝ意を以て古より云來る所にして宮の稱號には非ず祭神に就て然申せるにぞ有べき伊勢風土記に員辨郡執賀師神社大己貴命也と有を證と爲べし　吉記に或古記云平安京者百王不易之都也東有二嚴神二(イツカシノカミ)西仰二猛靈二(タケキミタマ)嚴神賀茂大神宮猛靈社松尾社是也依二二神之鎭護一期二萬代之平安一と有は嚴神と猛靈とを對(アラ)へて云る耳ならむと思ひしかども此の考の出來て思へば賀茂は御祖神社と別雷神社と二座なれども大己貴命及其后神と御子

神の鎮坐るなれば其を嚴神と申せる此御紀の傳に同じきを取れるなり松尾を鎮座と申せるは大山咋神の亦名を別雷神と申せる其意を取て然對へ申せるにぞ有ける 祭神は古事記に其神之嫡后須勢理毘賣命云々如此歌而即爲ニ宇岐由比ニ而宇那賀氣理氏至レ今鎮坐也と有れば大國主大神其后神と共に好しく睦び坐て其相座に鎮坐るなり此文の今は此記を奏上爲られし和銅の頃の今なり然るを神名式に杵築大社 名神大 同社大神大后神社と有れば別社の如く聞ゆれ共同相殿の神をも別に擧る例無きにしも非れは古事記の傳に依べくぞ所思ゆる、但出雲大社忠に大社客神五座と有て御向社筑紫社天前社門神社二字と見えたり社傳に御向社は嫡后須勢理毘賣命筑紫社には宗像三女神天前社には三穗姫命門神社は櫛磐牖豐磐牖二神なりと云り思ふに御向社は風土記にも然見えたれば右の大神大后神社に當る可か筑紫社と天前社との二座は式にも風土記にも見えず且須勢理毘賣命と宗像三女神とは同神なる由上に委しく註るが如くなるを御向社筑紫社と分て祀らるゝは其御名に依て御功用の異有れば別に祭れるなる可し又三穗津姫命は其和魂大物主神に天神の配せ給ふ所なるを此に祭れるは其元神の御許なるが故なる可し何に在れ此二社は中古より祭加へたる者と見ゆ

神階の事は記傳十四五十三丁に文德天皇實錄に仁壽元年九月庚午朔乙酉特擢ニ出雲國熊野杵築兩大神ニ並加ニ從三位ニ三代實錄に貞觀元年正月廿七日奉レ授ニ出雲國從三位熊野神杵築神正三位ニ同年五月廿八日授ニ出雲國正三位勳七等熊野坐神正三位勳八等杵築神並從二位ニ同九年四月八日出雲國從二位勳七等熊野神從二位勳八等杵築神並授ニ正二位ニと有りニと所見たり其後には大倭神社註進狀に新國史曰寛平九年冬十二月壬寅朔甲辰奉レ授ニ五畿七道諸神三百四十座各位一階ニと有れば此時其兩神共に從一位也又園大暦に天慶三年以來天下諸神奉レ増ニ一階ニ宜下及ニ度々ニ云々天慶三年庚子正月六日と有れば此時正一位に至らせ給へりと雖甚く佗社に後れさせ給へるぞ氣疎かりける彼大倭大神の御諱の如く未其源根を探らせ給はず粗を以枝葉に留めさせ給へる者なり已に其和魂と坐大物主神は貞觀元年正月從一位同二月正一位の極位に至らせ給ひ其荒魂と坐す大國魂神は嘉祥三年十月從二位貞觀元年正月從一位寛平九年十二月正一位に進められ給へるに其本宮に坐神の御位の甚く後れさせ給へるは畏りに畏き御事にて今思ふに身も縮まる心ちこそ爲る 猶上 熊野大社條 に云る如く熊野大神は天皇の大御系統に於ても天照大御神に相並べ奉りて遠御祖とて齋かせ給ふ可き大神に坐し杵築大神は天皇の天津日繼と所知看す現事顯事に相對へて神事幽事を所知看大神に坐れば正しく熊野神宮杵築神宮と宮號を以記奉給ふ可き事なるを式にも風土記にも社號を以被載て自餘の天下の諸神社に格別に勝らせ給ふ事も見えず名神大社と云耳にて月次相嘗新嘗等の祭祀にも預らせ給はぬなど神代の御定には似てしも着ずなむ有ける此は已に大倭大神の御諱も有ける事なれば天皇の御上には能も

所知食て厚く崇奉らせ給へりけむ事右に引る齊明天皇御紀に命出雲國造修嚴神之宮と有る其命は天皇の大御心より出て命せ給へる事著明きを世々を經る隨に佛進ひし漢好み爲給ふ天皇等も坐て神代の契約に違はせ給ふ事も多く成て甚も尊き右の兩大神にも社號以て官帳に載させ給ひ然るまじき神社にも宮號を進らせさせ給ひて然計り尊き大神等の上に置て猶改めざるなど皆時の勢に乘とは云ながら其正しも無は其神祇宮に仕奉れりし人共に忠々しき倭心の非りければなり阿那遺憾しきかも 古語拾遺に至大寶年中初有記文神祇之薄猶無明案望秩之禮未制其式至天平年中勘造神帳中臣專權任意取捨有由者小祀皆列無緣者大社猶廢敷奏施行當時獨歩諸社封税總入一門起自天降泊于東征扈從群神名顯國史或承皇天之嚴命爲寶器之鎮衛或遇昌運之洪啓助神器之大造然則至於錄功酬庸須應同預祀典或未入班幣之列猶懷介推之恨況復草薙神劍者尤是天璽自日本武尊凱旋之年留在尾張國熱田社外賊偸逃不能出境神物靈驗以此可觀然則奉幣之日可同致敬而久代闕如不修其禮所遺一也と有るを以て其時の狀を想像る可し然るを其幣今日に至て猶改らぬは如何にぞやその後は中臣に限らず時の權勢有る人とたに云へば其家に由緣有る神は此を擧げて祭り由緒無き者は此を棄て朝廷の官帳に載有へる神社をすらに蔑如するも多く又後には其祖先の人等の軍など爲し時に神主など軍好みの者有て末方爲し類には數多の封田を寄せ其神主の敵地に在つる者など其神封を奪ひなど甚々拙く賤しく成にたり神主の末方に成るも敵方に在るも其毀譽は其人に在る事にて其仕奉る神の預らせ給ふ所に非れば神社を破却し封田を沒收するには及ばざる事なるを亂世の武士計り身勝手なる者は非りけり○偖八百丹杵築宮に靜坐す事は皇御孫命に現事顯事を事避り奉給ひて神事幽事を知食す可き爲なり神代紀に於是大己貴神報曰天神勅教慇懃如此敢不從命乎吾所治顯露事者皇孫當治吾將退治幽事云々吾將自此避去云々而長隱者矣と見えたる是なり然るに此詞に神事幽事を云ざるは上に現事顯事を云れば其に相對ふ事なる故に云ずして其趣自然に所知る事なればなり 其現事顯事の事は上に已に云ければ次に述る神事幽事に相對はせて心得べきなり右の神事を同義に見る説などは深くも考ざる者なり 神事とは現事に相對ひて神の作用に就て云るにて幽事の邪正曲直を御すとは異なり垂仁天皇御紀なる大倭大神の御誨に我親治大地官と見えたる其にて各國の國魂神を率て皇御孫命の所知看す國土を幽より助けて修理固成し給ふ是即神事なり然るを神代紀に天神の汝則可以治神事と詔給へるに大己貴神の吾將退治幽事と答申給へるは何れにも文を一つ略きて被載たる者なり 然るを記傳に幽事は此上文に神事と有と一事にて神事は言の隨に書る字幽事は意を以書る字なり此二共に加微碁登と訓べし舒明天皇御紀に幽顯カミモヒトモと有り此訓を以て幽事を加微碁登と訓べき事を思定めよと有るは思漏されたる者なり然るを師は神事を加微碁登幽事を加久理碁登と訓れたる其は宜しけれども神事幽事を其事は一なる由に云はれたるも委しからず 神代紀に天兒屋命主神事之宗源者也故俾以大占之卜事而奉仕焉と有る此主字は志流と訓て察知の意にて此神事は後事に公事神事と並云ふ神事には非ず神の御業を神事と

云へるにて現事に相對へる神事に同じまた同紀に吾亦當ㇾ避如吾防禦者國中諸神必當二同禦一今我奉避誰復敢有二不ㇾ順者一と見えたる如く國中に在ゆる諸神の首領と爲て其神々の各其德と有る事業を以て大に國土經營の御功立りけれども猶神の扶助給ひて狹國は廣く峽國は平けく作固め給ふ事上（生島足島神祠條）に註るが如し（古事記に所見たる稻羽之白菟又内者富良々々外者須夫々々と云て此大神を助奉りし鼠又國作の時に幸給ひし多邇具久又少彦名神を顯二申せりし久延毘古なとは何れも一の能（サチ）有て其大神に使はれ奉れる其即神事と云者なり）同紀に高皇產靈尊勅二大物主神一云々宜下領二八十萬神一永爲二皇孫一奉上ㇾ護と有も皇御孫命を護奉る八十萬神の神事は其大神の御し給ふ所なるを以なり偕皇御孫命の現事顯事を以天下を調給ひ治給ふに其能太平にして國土富み公民榮る事はしも皆其神事に依れり崇神天皇七年御紀に天皇乃幸二于神淺茅原一而會二八十萬神一以卜二問之一是時神明憑倭迹々日百襲姬命曰天皇何憂二國之不ㇾ治也若能敬二祭我一者必當二自平一矣天皇問曰敎ㇾ如ㇾ此者誰神也答曰我是倭國域內所ㇾ居神名爲二大物主神一時得二神語一隨ㇾ敎祭祀然於ㇾ事无ㇾ驗天皇乃沐浴齋戒潔二淨殿內一而祈ㇾ之曰云々是夜有二一貴人一對二立殿戶一自稱二大物主神一曰天皇勿二復爲ㇾ愁國之不ㇾ治是吾意也若以二吾兒大田々根子一令ㇾ祭ㇾ吾者則立平矣亦有二海外之國一自當二歸伏一云々と有るを以知べきなり六年御紀に百姓流離或有二背叛者一其勢難二以ㇾ德治一ㇾ之と有をも思合す可し（此事古事記には此天皇之御世疫病多起人民死爲ㇾ盡爾天皇愁歎而坐二神牀一之夜大物主大神顯二於御夢一曰是者我之御心故以二意富多々泥古一而令ㇾ祭二我御前一者神氣不ㇾ起國安平と有り神祭の違て人の疾病なども神の心なれば其を撫び和給ふは本より神事に依る所なれば我之御心と宣へる寔に然有べし）神功皇后御紀に九年秋九月庚午朔己卯令二諸國一集二船舶一練二兵甲一時軍卒難ㇾ集皇后曰必神心焉則立二大三輪社一以奉二刀矛一矣軍衆自聚と有が如く軍卒の集り難なるを御占事をも何も物爲給はで神心なりと詔ひ定めて大三輪社を立て齋奉り給へるは其大神の神事の事を所思看す所なり（神名式に筑前國夜須郡於保奈牟智神社有る是なり又長門國豐浦郡村屋神社と有は其大神に坐れば此も其時に共に祀ひ給ふ所なる可し）續紀に寶龜九年十二月甲申去神護中大隅國海中有二神造島一其名曰二大穴持命一至ㇾ是爲ㇾ社と有る名曰二大穴持命一と同紀に神龜十四年十一月壬子大隅國司言從二今月廿三日未時一至二廿八日一空中有ㇾ聲如二大鼓一野雉相驚地大震動丙寅遣二使於大隅國一檢閱並請二聞神命一と見えたる其時に神命を請聞しめ給ひし時に大穴持命と名乘せ給ふ所なりけり然れば右の神護は決く神龜を誤れる者なり偕此は人世と成

て人の力を盡して成へき國土は人をして修理固成しめて其力を幽賛る神事なるが人の力を以て得物爲べからざる處は神事を以て造成給ふにて今も猶神代に異ならず　然れば天武天皇十三年御紀に冬十月己卯朔壬辰ニ逮二人定一大地震云々伊豫湯泉沒而不レ出土佐國田苑五十萬餘頃沒爲レ海云々有レ人曰伊豆島西北二面自然增益三百餘丈更爲二一島一則如二鼓音一者神造二是島一響也と有を始て世々に斯る事の多在るに皆大國主大神其御子神等の功爲させ給ふ神事に依れる事能々思ふ可き者ぞかし　文德天皇實錄に齊衡三年十二月庚午朔戊戌常陸國上言鹿島郡大洗磯前有レ神新降初郡民有二煮レ海爲レ鹽者一夜半望レ海光耀屬レ天明日有二兩怪石一見二在水次一高各尺許體二於神造一非二人間有一鹽翁私異レ之去後一日亦有二廿餘小石一在二向石左右一似レ若二侍坐一云々時神憑レ人云我是大奈母知少比古奈命也昔造二此國一訖去往二東海一今爲レ濟レ民更亦來歸と有は少彥名命と共に此國を造訖給ひ其より赤縣印度の地方より始て萬國を經營給ひ今東海より歸坐との義なりけむを往二東海一とは其還坐る方を以て然記されし者なる可し借正しき神代の古傳無き海外の國人共は天地は固より天地にして其始無き物と云ひ國土は神在て此を經營給ひ幽顯相別れて後は人を以て經營しめ給へるに己命の成給ふが如くに御力を添させ給ひて國形を善好しく調へ給ふ事なるを彼蠢化の民共は己が力の限を盡して成せりけりと思ふめれども其實には如此き神事の有が故なり　右に引る崇神天皇御紀なる神の御教に亦有二海外之國一自當二歸伏一と有つるに差して六十五年秋七月任那國遣二蘇那曷叱知一令二朝貢一也云々と見えたり此時に任那の國王が心に天皇に貢を奉らむの志の起れるは即右の大神の其土に坐て令爲給へる神事には在れど彼が心より出たりと思が如し此方にても此御教言の無らましかば神の御心とは得しも所レ有ざらましを然すがに此等の神事を知と云は神の御國の尊き所由なりけり　然れば神事とは右等の如く國土萬物を修理固成して皇御孫命に事依し奉らせ給ひ又天下の人民を濟助け給ふ御所爲を申せる事にて彼現事の人身を以國土萬物を修理固成て天下の人民互に其濟助る事を幽より賛け令成給ふ事を云也　但天地立て造化の道行はれ寒暑晝夜の來往行に年月の序次有り日火金水土神等相結ばりて物を作出し給ひ八類萬物の生育して世に存ある皆に各自に掌る神在して其を造化したまへれば神事にそれには非ず國土經營に係る幽神の事業を云ふなり　○幽事とは顯露事の對なる事上に謂るが如し借此は現事神事の國土經營の道なるとは異りて皇御孫命の政ごたせ給ふ顯露事は現人神と坐て現身の人を治給ふなれば人の成し行ふ善事惡事共に人の耳目に觸るゝ者の限を盡して其を正し給ふめれども人の得知ましく隱れたる所迄に豈及ばせ給はむや然れば其餘の事共は悉く幽事を以治給ふ大國主神の御政也古事記に大國主神の僕者於二百不足八十坰手一隱而侍と有傳十四卷四十六丁神代紀に大已貴神報曰吾所レ治

顯露事者皇孫當レ治吾將ニ退治ニ幽事ニと有る治幽事も此侍ふてふ言の中に含コモめり即皇朝の大御政を幽に助奉り給ふなれば侍はむと云に其義有り要操と有は然る事なり然れば似たる狀なる事ながら神事と云とは大に異なる所有り神備人は高御魂神魂命の御靈に賴りて生るゝ事云も更なるが其位トコロ置を得る事素より幽事より出て皇御孫命の顯露に渡し奉らせ給ふなれば此身の事業を竟て世を避る時は八十坰手に隱りて大國主大神の幽宮なる天日隅宮に參侍ひて其御治めを請奉る事にて彼宣ニ領ニ八十萬神ニ永爲ニ皇孫ニ奉ヵ護と有る八十萬神の列に侍ひて皇御孫命を護奉る事なるが又世に出むと爲る人は再生出しめて其生涯にて得しも竟ざゝりける事業を令成てその德を進め給ひ其定に正しく直きは天上に昇り日之少宮に復さしめ給ひ八十萬神に列ねて皇御孫命を護奉ら令給ひ其心僻める惡しき輩は各黃泉神の群に棄遣り給へる者とぞ見えたる世に云ふ疫病神など云ふ醜しき惡神の類は顯世の人にて在し間に無る禍に犯されなど爲し者の己が苦しく悲しかりしを以て人の安樂なるが嫉妬しくて其群に加はりて疎び荒ぶる類の者は皆其群なるなり天滿天神の御託宣に我に從身の伴類十六萬八千百餘人有り總て恨を含みて世を背ける貴賤の靈鬼悉く來集す但理無く恨を含むの輩は相伴ならずと宣へるも其神の恨を含まぜ給へるも理有る恨なるに依て其に從へる人の靈の其に伴れ奉るに相似たり　彼一條兼良公御說に顯事人道也　幽事神道也人爲ニ惡於顯明之地ニ則帝皇誅レ之爲ニ惡於幽冥之中ニ則鬼神罰レ之爲レ善獲レ福亦同レ之と有が如く師說に君上は如何に聰明に坐と雖も同じく現世の人にて渡らせ給へは人の幽に思念する心は更なり惡行にても顯明に見え知れざるは罰めさせ給ふ事能はず善心善行と雖も顯露ならぬは賞させ給ふ事能はせ給はざるを大國主大神は幽冥より其を見徹し坐て善に福ひし惡に罰し給へる是幽事なりと云れたるは然る言なり但此師說は何れの書に註されたるか未其本書を見ざると雖も男篤胤が古史を說く時に云るを實に然てと所思しきが故に今師說と聞け文を變て此に引く所なり　然れども善人の禍事に遇つゝ世を終り惡人と雖も幸福を得て其一世は安き者も無には非ねども其は其に神隨なる正しさを得ざる所なるは子細有り其は善人の上に禍事有は僅に一世の間の災なりと雖も身罷て後に神の嚴處にて尊く貴く治給ふ爲に其德を令滿給ふ所なればば其も眞の禍事に非ず又惡人の身に幸福有も僅に一世の幸福にて身罷て後に永く神の嚴處にて罰め給へれば其も眞の幸福に非ず譬へば時平公と道眞公との如く尊氏と正成卿との如し道眞公は時平公に貶され給ひて太宰帥にて筑紫にて終らせ給へるは善人の禍事なりと雖も天滿天神と齋祭させ給ひて其威德の長く遠く廣大なるに至りては其幸福天下に比し無く又足利尊氏の如きは天皇を輕如し奉り楠正成主に打勝たる所は一世の幸福にて子孫十三代に至る迄其餘澤を嘗たりと雖も末世迄に朝敵の名に汚されて此上も無禍事なるた正成主の後世に淸き名を千名の五百名に傳へて武士の鑑と仰かるゝ

と何れ勝れりや此を以て此本文の趣を明らむべし又今しは善人と雖も前世に惡かりし人の其罪を贖ひに出たるも有べきを凡人の其は幽事なれば何に依て然りとは知む　俗君親と爲り臣子と爲り夫婦と爲る等凡ては天皇の公民なれども其令然給ふ所即幽事より出て著見るゝ所なり俗に杵築大社を緣結の神と申せるも其謂れ無き事には非ず又毎年十月を佗國にては神無月と云に其國にては神在月と云て天下の諸神等其大神の御許に神集給ふ由なるは實に然る事なり天朝の大御政に縣召と云て諸國在任の外官を集へさせ給ふが如し幽顯界を異に爲と雖も其御政事を聞看す狀に於て別なる事有べからず齊明天皇御紀に嚴神之宮と見えたる如く實に畏き神の朝廷なり俗此國に坐限りは天社國社と鎭座す何れの神と雖も此大神の御制令を奉て各國の一宮の神と成り又產土神とも鎭守神とも成て其幽事を持分て知行ひ給ふ事云も更なり（然れば杵築大社は朝廷の如く其和魂荒魂神等は文官武官の總督なるが如く其御子事代主神は記に寄二于向之御尼前一而仕奉者違神者非也と有れば太政官の如く各國の一宮は國司の如く其に亞ぐ大社の神等は郡司の如く或は庄官の如く產土神鎭守神は其里正村長なるが如く持分て幽事を治めず事顯事の狀に違ふ事無し但伊勢神宮及其餘の貴き天神等は又格別の御事と見えたり）記傳に皇御孫命の治す可き顯露事とは即朝廷の萬機の大御政にて現人の顯に行ふ事なり其に對ひて顯に目にも見えず誰が爲とも無く神の爲給ふ御政なり」と云はれたる如く已に引る古事記水垣宮段に此天皇之御世疫病多起人民死爲レ盡爾天皇愁歎而坐神牀之夜大物主大神顯二於御夢一曰是者我之御心云々又同記玉垣宮段に是御子八拳鬚至二于心前一眞事登波受云々布斗摩邇々占相而求二何神之心一爾崇出雲大神御心故其御子令レ拜二其大神一など天神の御子の御上にすら如此し況て凡人の身に在る吉事凶事の類の誰が爲とも無く出來るは實に其大神の御心に依れるは固よりにて善事惡事を人知らず闇昧の所に爲すに其善惡の報應の又人知ず來るなど皆幽事なる者なり（但其善事惡事の類を闇昧の所に爲すと雖も他人の上に抱る事に於ては此を皇御孫命の顯事より賞ひ罰し給はず幽事より其を治めさせ給ひては天皇の大御稜威の輕く成る事にし有れば幽事より顯事に着見（アラハレ）え知らる可く出して天皇の御政に預ら令給ふ所なり其は盜賊の人の目を忍び密夫の夫の隙を伺ふなど其幽事をコミに人知す爲すと雖も遂る事能はず何時となく吏人の手に渡るなど幽より其事の著る可く知らる可く物爲給ふが故なり誰とても惡事を爲すに人に著はれ知るゝを諱て如何にも其用意有と雖も大國主大神の幽事有れば古今皇國の間に一人と爲て成し遂る事無きを思ふ可し）

是爾親神魯伎神魯美命宣久汝天穗比命波天皇命能手長大御世乎堅石爾常石爾伊波比奉伊賀志乃御世爾佐伎波閉奉登仰賜志次乃隨爾

親神魯伎神魯美命の親の例後釋に引れたる孝德天皇白雉元年御紀に今我親神祖之所レ知穴戸國中と有り常には皇親云々と續くる事なれども如此も省て云ふ

古の一格なり下に引る馬見岡神社の祝詞も古き詞と聞えたるに吾親加夫呂岐加夫呂美乃命と有り此も出雲より移せる社なる故に神賀詞の句を採れる事多在り（然るを考に例にも依り唱の調にも依に此は皇字の上に皇字の落たるなり故今補ふ」と有に宜しからず後釋に此は皇親と云ては中々に宜しからず」と云て本の任に復されたるなむ宜しき）倩上文に高天能神王高御魂神魂命云々と御名を先に擧げ此に至りては親神魯伎神魯美命と稱名を記して上下を相應へたるなり（此事祈年祭詞及大祓詞の下に云るが若し神魯伎神魯美命とは高御魂神魂命を崇て稱奉れる御名なることこの詞によりて著きを此を男女の皇祖神等を廣く指云ふ由に云ふ説は其考麁かり）若て此御事は神代紀に高皇産靈尊乃還ニ遣二神ニ勅ニ大己貴神ニ曰今者聞ニ汝所言ニ深有ニ其理ニ故更條々而勅レ之云々又汝應レ住天日隅宮者今當ニ供造ニ云々又當レ主ニ汝祭祀ニ者天穗日命是也と見えたる御契約に依て大國主大神の八百丹杵築宮に鎮り定り坐し後に天穗日命に事負せ給へるなるが古書に漏て此詞に遺れる者なり然れども當レ主ニ汝祭祀ニと有からは神代紀なるも其本の傳には必此詞の如く有つらむ事云も更也〇汝天穗比命波云々右に引る神代紀の傳に依て思に大國主大神を八百丹杵築宮に令鎮座奉給ひしは天穗日命に坐り彼風土記に所レ造ニ天下ニ大神之宮將ニ奉與ニ諸皇神等參ニ集宮處ニ杵築と有など總

ての事共此天穗日命其司と爲てこそは物爲させ給ひけむと所思ゆ（但此は推量の説の如くなれども大國主神を媚和し給へりし由に依て天神の當レ主ニ汝祭祀ニ者天穗日命是也と仰給へる御命の有を以て云ふなれば必如此有では叶ふまじければなり）倩其事の狀を熟考るに經津主神武甕槌神及天夷鳥命共に大國主神及其御子神等に天神の勅教を述て國土を皇御孫命に事避らしめ奉給へりし時に天神の御許より天穗日命を天降し遣給ふと爲て此大御命を仰給ひける任に其杵築宮に大國主大神を令鎮奉給ひ其大神宮に其御子天夷鳥命と共に其復命申し給ひに天神の御許に此伊波比の返事を神の禮賓白の禮賓と御禱の神寶は奉給ひける者也其時は何れの時ならむと思ふに右の前なる御紀の文に既而二神降ニ到出雲國五十田狹之小汀ニ而問ニ大己貴神ニ曰汝將以ニ此國ニ奉ニ天神ニ耶以不對曰疑汝二神非ニ是吾處來ニ者故不レ須レ許也於是經津主神則還昇報告時高皇産靈尊還ニ遣二神ニ勅ニ大己貴神ニ曰云々と有る此時より天穗日命は天降り御在して其鎮め奉る事を取擬ひ申給へるなり其は其造宮の事を先宜ひて其終に當主汝祭祀者天穗日命是也と有を以て知に足れり（然るを古書に右の首不足八十坰手に隱坐す事耳を云るは文の續きに其を云べき所無が故なり能々他の古傳を合せて其時の狀を思ふ可し）然れば天穗日命天夷鳥命二柱神は經津主神武甕

棲神二柱神の天に復奏し給ふ時に同じく復奏し給ひけるが其道相同じからず右の二柱神は征伐の御使と爲て天降り給ひければ葦原中國の荒振神を言向託給ふ由を以復奏し給ひ此二柱神は專とは大國主神を媚鎭めて現事顯事を命事避て八百丹杵築宮に命鎭坐奉給ひて其大神の國讓の御禱の神寶を神の禮寶と取持して己命等の天神の大御命を奉て八百丹杵築宮の祭祀を主りて皇御孫命の大御世を手長の大御世と堅石に常石に齋ひ奉り茂の大御世に幸はへ奉る由の言を神の御禱の神寶に副て臣の禮寶と天神の御許に献上給へるにて是ぞ此神壽詞を奏す起元には有ける若て其天穂日命は天上に留坐て降り坐す其御子天夷鳥命此國に降りて熊野杵築の兩神宮に仕奉て出雲臣の遠祖と成れりし者也けり（此國に留坐は天夷鳥命なる事古事記に天菩比命之子建比良鳥命者出雲國造等之祖也と見え崇神天皇六十年御紀に武日照命一云武夷鳥又云天夷鳥從レ天將來神寶藏ニ于出雲大神宮一と有なるを以て知べし神名式に杵築大社に次て、同社大穴持伊那西波伎神社と見え阿須伎神社に次て、同社神阿麻能比奈等理神社など有に其枝社に天穂日命の出ざるを思ふ可し猶上に已に委しく云り）偖天夷鳥命の天降坐る時に御父天穂日命の御靈實を持降り給て其出雲國に齋奉らせ給ひけむ其は神名式に能義郡天穂日命神社有る是なる可し此を風土記熊野郡條に野城驛依ニ野城大神坐一故云ニ野城一と有は未能義郡の分れざる以前の書なればなる事上に註るが如し但當郡にも野城神社神名帳に載れり一社にして二方に分れたるなめり備風土記に出雲國中に於て大神と稱る者僅に所造天下大神と佐太大神と此野城大神と三處有る耳なるを官帳に收れり（イ）と云ふ耳にて名神大社の部にも列らせ給はざるが不審しくて猶考るに既く他國に移し祀れるが故にぞ有ける神名式に近江國蒲生郡馬見岡神社二座と有る是なり其社記に載る馬見岡神社四月御祭宣文と云を見に

參集神主祝部乃禰男女等諸聞食止宣（以下祝詞）高天原仁神留座須吾親加夫呂岐加夫呂美乃命乎持天吾皇御孫尊波大倭國乎安國止所知食氐天津神國津神乎祭給幣留時仁天穂日命能和御魂乎八咫乃鏡仁取託八重榊葉仁取懸天出雲乃國與利彦健忍雄心命此國仁到給比川榧田乃邑仁志天國造乃新仁造奉禮留御室仁天乃小菅乎莿敷天乃八十瓮乎献利次乃日村人導之奈天奉利志叙乃谷川乎泝利天翔奇日乃嶽仁齋比奉利國乃眞保良止崇奉之利與山乃雲井仁遠幾高山彼春秋乃祭毛意仁任世奴物止其後仁ト定（サダメ）志天親仁饋（オクル）留昨（ヒモロギ）野邊乃廿美加岡乃上仁宮柱太敷立天高天原爾千木高知天奇日乃嶽仁座天穂日命西宮仁座

天夷鳥命稚殖仁座健御熊大人命止三柱乃神乃御名乎稱天常磐爾堅磐爾齋比奉利吾皇御孫尊乃手長幾御世乎伊加志御世登言壽奉利天下乃公民乃作留作利物乎惡風洪水仁遇世給波受成幸閇奉良牟加ヘ故仁今年乃四月乃中乃亥乃日乃朝日乃豐榮登利仁故事乎追比尋禰天川撫田乃邑乃倉鷁加小野仁伊提麻佐志米三柱乃神爾蒲生直乃遠祖於保加夜都比古命乎相副天四柱乃神乃御前仁竹玉貫垂類乃腹滿雙陪天雜々乃色物乎備奉利肉事物膝折伏世守事物頸根突拔天神主外從五位下出雲宿禰貞範祝詞稱時官位姓名等加恐美畏美申世留事乃由乎諸共仁狹牡鹿乃御耳乎振立天、平計久安良計久所聞食止宣祝詞稱レ申と見えたれば如何にも古く近江國に移らせ給ひけるなり社傳に當社は神武天皇四海を一統坐々て神祇の恩に報給はむとて即位四年先皇天を祀り次に山川を祭り給ふ時此所は天穗日命の遺跡なる由にて神靈を出雲國より迎奉り此山に配(イハヒマツ)祭れり此事風土記に有る山に云るは然も有るべし天穗日命の遺跡とは此神の天翔り國翔りて初て降着給ひし地なるを以て云なる可し右の神詞に天翔寄日乃嶽と有は天翔り來着給へるを以て號たりと所思しければなり神武天皇四年御紀には立ニ靈畤於鳥見山中ニ云々用祭ニ皇祖天神ニ焉と有て天社國社を被祭る事は被載ざれども已に祈年祭詞の下に註すが如く固より其御世に天地神祇を祭祀らせ給ふ事決く又此祝詞も甚古く傳はる所なれば其社說は實に信ふ可く所思たり倩右の彥健忍雄心命は天夷鳥命の裔なる可し前には大彥命の孫大稻輿命の子彥屋主田心命とも屋主田心命とも申せる其ならむかと思ひしかども然らざりけり社記に其末社に櫃畔(エグロノ)神社と云有り又飯室神とも云るが其祭神は彥健忍雄心命健忻宿禰(タケバキノスクネ)從四位下出雲宿禰貞尙の三座なり其中央の神は馬見岡神なれば出雲より供奉れりし神にて左右は其御孫にて大神主の遠祖なりと云れば出雲臣の同族たり彥健忍雄心命は出雲健子神には非るか度會神主載神代卷奧書に伊勢國者伊賀事志社坐神出雲神子出雲健子命又名伊勢津彥命又名天櫛玉命云々と見ゆ此伊勢津彥命には神武天皇東征の時に天日別命に國を避て東國に度坐しかども皇朝に與び參りて出雲より其祖神を此に遷せるが猶亮考ふ可き事也右三座中貞尙主は後醍醐天皇の大御代に忠臣たりと見ゆ社記に吉野宮より神主貞尙主を大宮司に補せられ從四位下に被叙たるを其子播磨守貞冬の代に足利義滿より改易して其家滅亡たり」と有り義滿の逆徒の爲に改易せられたるを以見れば其甚しく南朝の忠臣と思えたり嗚呼哀しき哉倩其蒲生直乃遠祖於保加夜都比古命は古事記に天津日子根命蒲生稻寸等之祖也と見えたり又社記に攝社に必佐御前と申有り神名式に蒲生郡北都佐神社と有る是なり祭神三座天津彥根命山津照命日巢何比咩(ヒスワヒメノ)命也と云り此山津照命日巢何比咩命共に古記には見えざれども蒲生直の遠祖なりと謂ゆ出雲風土記意宇郡屋代鄕條に天之夫比命御伴天降坐神伊支等之遠祖天津日子命云々と見えたればば天津彥根命の攝社たる由緣無に非ず又社記に寄日嶺神社正遷宮宣文に寄日仁稱辭竟奉皇神乃前仁白久○祝詞省ニ此一句ニ非レ例掛麻久毛畏幾後乃志貴島爾大八島國知之天皇命乃大命乎加々布利皇神乃乞波之乃隨仁寄日乃嶺乃荒草木乃根苅掃比下津岩根爾蹈凝之宮柱太敷立天天乃御蔭日乃御

影止定奉利天乃禮志奈國乃禮志奈齋比祀利奉禮留興利故幾典仁隨比天廿年仁一太比大宮新仁造奉天乎草昔垂葛目結比堅米高天原仁千木高知氐伊都乃牟志呂止莉敷留天乃小菅乎避支掃比御酒波甕乃閇高知甕乃腹滿雙倍御膳爾波海山乃物採利供倍御服神寶仁至萬天賢木乃枝仁取懸天横山乃如久置足波之天神祇官跪屬出雲宿禰栲帔祝詞稱時官位姓名等加祓志齋天波利申世留天津祝詞乃太祝詞乃事乎平介久安良介久聞食氐吾皇御孫尊乃所知食須磯隱浦生乃國乎登古仁之陪見露加之座天安國止靜米麻比母良比奉給止陪宣○以上命祝詞乎神主祝部等諸聞食止宣右神祇官宣神部傚ニ常例一宣レ之と見えたり後乃志貴島は欽明天皇の都を云ふ紀貫之主の誌されたる天慶八年梁簡銘に大嵩社者天穗日命神世之古趾也於是欽明天皇御宇六年觀レ瑞以創ニ祠於錦嶽ニ云々と有を合せて知べし又至德三年に記せる纂緣跡に人皇三十代欽明天皇御宇六年夏四月云々と有て祝詞に四月乃中乃亥日仁云々と云ると此三を合すれば六年乙丑四月□□朔□亥は中亥に當れゝは其日を以祭日とは爲る者なりけり 其梁簡銘の云々と有る文は其後天武天皇白鳳甲申御レ德更作ニ詩於篠谷ニ而奠ニ儀意備矣雖レ然赤烏早翔兮春雨點ニ其壌ニ玄兎速過兮秋露洗ニ其簷ニ清宮既廢矣故今復上レ棟立レ柱以全ニ其住躅ニ因以ニ祝奠ニ明讃頭融刀爵定焉良爲協和八荒安焉四時序レ季疾病除焉十雨順節穀梁登焉僞僉神朋叡聖尙垂ニ皇恩ニ矣敬白天慶八年己巳八月二日從四位下行木工寮頭紀朝臣貫之謹誌神主正六位上出雲宿禰貞主工匠無位鞍部稻足と有り右の廿年仁一太比大宮新仁造奉天云々は社記に㒸向社御遷宮者欽明天皇六乙丑年始而祠御造立同天皇廿六乙酉年御造替自レ是廿一年日御造替略レ之と見えたり右の狀を以見に右昔甚しき大社にて公の御尊崇も餘社に殊なりし也 右の皇神乃乞乃波之隨仁奇日乃嶺乃云々は社記に欽明天皇六年夏四月蒲生稻置三摩侶此山の麓に藹しけるに時移る迄穫無りけるを不審り思けるに天遽に曇り寒風吹起り白雪降頻りて途を失ひける時に西大路の人に山部連羽咋と云人其雪の時ならざるを異しみて尋到れるに不意く三摩侶に遇へりければ三摩侶云々の由を語る程に天漸く晴て猪鹿の蹤有り因て此を慕ひ登るに神人現形坐々て告給はく吾は此山の神天穗日命是也此國天上に侍りける時此地は我棲息の處なり此故に神日本磐余彦天皇の四年に大山小山の祀を定給ひ吾和魂を八咫鏡に取託け榊枝に取掛て出雲國より此處に迎奉り此山に祝奉りて一向に國の眞秀とは成れりき其後代々の天皇命等西羌を王化に服へ給はむ爲に多く都を西偏に移し給ひければ有司の往來自然に疎かに成にたるより幾許の年月を經て其禮典已に泯滅むと爲汝等此由を天朝に奏して舊儀に復さ令べしと宣ひ光を放ちて山上に飛去給ふ兩人此山を天朝に奏せしかば奇日嶽を封して

地神とし山上に神祠を造ら令給ひ即宣命使を被下る其後天智天皇此國に都敷き坐々て群山を祀給ひける時も此良伊吹三上當山油日等皆祀に預りけるとなむ其後蒲生稲置三摩侶山部連羽咋の兩人も後は神と成て村井御前玉椿明神とぞ申ける當山は當國第一の高山なる故に大嵩と云ひ其名を天翔奇日嶽と云ふ又錦向山とも云けるを訛て綿向と云り一名を朝日山とも云ふ以上取意と見えたり 此文に此國天上に侍りける時此地は吾棲息の地なり」と有は心行ぬ事なり予此を二に釋く一には此國に天下り侍云々と有を誤れるなる可し其は右の梁簡銘に天穂日命神世之古趾也と云るも共に國向の時に初て天降坐し古趾と見て叶ふ可からむ一には昔此近江國は彼天香山などの如く天より墮(オチ)降りたるにや記傳にも云れたる如く此國に安河或は彦根など云が天國の名を移せるを以見れば天より降れる地なるに依て然るなれば此國の天國より墮降らざりける時に天穂日命の棲息給ひし處なるを以て此國に坐す御靈の出雲より遷住給ふ義なるにや後人の定を與者なり右の村井御前玉椿明神共に今も其社の末社にて有り又社記に高倉天皇安元年中舊記を御穿鑿の時に錦向の字面有に依て錦向と讀せられ錦山大神の號を下たまへるを以て神號に準じ錦向山とあらためこれより錦の御山とも云と有りしかれば上古には奇日嶽と云ひそれより大嵩と云ひそれより錦向といひしをのちに錦向山と云事とは成れるなり 右に梁簡銘に天武天皇白鳳甲申仰レ德更作ニ時於篠谷一と見えたり社記に 往古奇日嶽 谷深く峯聳へ歲時の祭祀不便に依て天武天皇白鳳十三年大辨官羽田公矢國執奏して日野の御牧馬見が岡厩上の地に勸請奉りしに延暦十三年御遷座の時卜問奉りけるに宮中より綿を擘が如くなる一片の白雲東方に向て飛去り同所猪部杜なる古櫻樹に留りければ其に宮造り奉れり是今の社地なり」と所見たり其頃より地名に依て馬見岡神社とは申すなる可し 然れば右の白鳳の度なる社地は篠谷と云ひ今の社地は猪部社と云所にて馬見岡とは其邊の總名なりと聞えたり又社記に其後延長八年乙巳八月二日御社造替有り其頃は檜物庄と云て木工寮領なりしと云り 如此く甚も止事無き由有る神社には坐せども猶大祀の列に預らせ給はぬは社記に延喜式撰定の頃は菅家沈淪の間にて天平神帳の任に小社に列ね被置たり」と云り此故にや神階も延長六年戊子二月奉レ授ニ從五位下一」と社記に但一記せる耳なり 彼古語拾遺に至ニ大寶年中一初有ニ記文一神祇之源無ニ所案一望秩之禮未レ制ニ其式一至ニ天平年中一勘造神帳中臣專レ權任レ意取捨有レ由者小祀皆列無レ緣者大社猶廢敷奏施行當時獨步と有を以思ふに天平神帳に小社に列たるも中臣の私事にや有む又此大神の氏人にて出雲宿禰の世々奉仕れりしを其家を改易せる足利義滿などが心汚き所爲を何とてか咎させ給はざりけむと道を思ふ故に神さへぞ恨しき 偖四月祭の祝詞に奇日乃嶽爾座天穂日命西宮爾座天夷鳥命稚殖仁座健御熊大人命三柱乃神と有を社記に其天穂日命天夷鳥命二柱は謂ゆる馬見岡神社二座と有る是にて健御熊大人命は式外にて末社なり此御社は飯室明神出雲國より綿向太明神を供奉し給ひ御止住の時に其御祖神なる故に祭祀給ひし舊跡に依て欽明天皇六年に御社を造奉れりと有り天夷鳥命健御熊大人命は一神に坐を並祭る例は大神大物主命と大己貴命と合せ祭り大

和大國魂神と八千矛神とを並べ齋へる例也神名式に因幡國高草郡天穗日命神社天日名鳥命神社阿太賀都健御熊命神社と並べ載るも此に同じ然るを社記に天夷鳥命を天穗日命の元子健御熊大人命を天穗日命の次子と有は如何有む然れども此社記の趣都ても社撰めきたる事少しも見えず唯有の任に記せれば固より然傳はれるにも有るべし倩古の飯室明神とは櫟[illegible]（エクロノ）神社にて座健名雉心命を申せり錦同大明神とは有の馬見岡神社を今傳する所な以云り此社今日野と云に立せ給ひ神威はしも古にも勝り給ひて甚々尊く御在すと云り　然れば天穗日命の本社は此馬見岡神社なる者なり神代の古趾なるを以て神武天皇御世に出雲より遷奉られ欽明天皇六年乙丑に神託に依て天翔奇日嶽（クミヒノタケ）に宮柱太敷奉り天武天皇白鳳十三年甲申に篠谷に遷奉り桓武天皇延暦十三年甲戌に今の馬見岡神社には鎮り定り給へる者なり廿年に一度造替爲らるゝを以其古に重く崇らせ給へる事灼然くなむ有ける臨時祭式に攝津國住吉下總國香取常陸國鹿島等神社正殿廿年一度改造と有を此社に廿年一度改造の實有て其事を被記ざるを以思ふに菅家沈淪の時なるが上に已く天平神社に小祀の部に被置たる計なれば朝廷よりは物爲させ給はず其國司郡司等の力に成れるなる可し貫之主の梁簡銘などの有も其頃木工寮領なりしかば其領内より造替せるを其時頭にて御在せしから書れたる者なり何れにしても古よりは甚く劣れる事と見えたり彼足利の姦夫を打滅し給はむ吉野宮の御祈の驗有なむには往古の状に復らせ給ひて御社も何も甚く榮えむを禍津日神の所を得て榮びけむ世は甚も々所謐き者なり○天皇能手長大御世乎堅石爾常石爾伊波比奉伊賀志乃御世爾佐伎波閇奉云々と有は上に明御神止大八島國所知食須天皇命乃大御世乎手長能大御世止齋止爲氐と有に應へる文なる事云も更なるが此は彼神代紀に高皇産靈尊勅二大己貴神一曰當レ主二汝祭祀一者天穗日命是也と仰給へりし時に天穗日命に仰給へる御命なる者也天穗日命をして杵築大神を齋き奉らせ令め其神主に事依し給ふ事は始其大神を媚鎮め坐し所縁に依事也上に云るが如し如此く天より降して祭祀を令成給ふ事は皇御孫命の御世の爲なる事知べし倩此下に玉横刀鏡倭文馬白鵠及御贄等を擎て祝申せる言は皆其手長の大御世を堅石に常石に齋奉り茂の大御世に幸へ奉る詞にして右の條々は此段を請て解釋せる者なり其は手長大御世は手長大御壽と云事なるに下に大御白髮坐又御阿加良比坐又行相爾又廣爾誅堅米とは御白髮の生給ふ迄に御顏の匂やかに坐つゝも堅固く御在せと云事にて行相とは此も彼も行相て其一を缺ざる由なり次に伊賀志御世とは其所知食す天下の事に係れる事なるを其より下に上津石根爾踏堅米下津石根爾踏凝立とは皇大宮に動く世無く靜坐す事に云ひ耳乃彌高爾は天下の事を明かに所知食せと壽奉るなり玩物は天下を安く保せ給ふ可き由なり大御心毛多親爾は大御心の慥に坐せと云ひ彌若叡爾御若叡坐又彌乎知爾御袁知坐は御齡を重ねさせ御在し坐とも若やけく越復（ヲチカヘ）らせ給へと申す事なるが此迄には大御壽の事を所知食す

大御世の事とを錯綜て云るを其終に至て麻蘇比乃大御鏡乃面乎意志波留志天見行事能己登久明御神能大八島國乎天地日月等共爾安久平久知行牟事能志太米云々と結び合せたるは妙なりとも妙なる文なりかし此事古より人の未得しも見出ざりける事なるが故に餘りに奇説めきたる物から必如此くならでは上下の文離々に成て其意神々しく奇異に妙なる語意を失ふ事ぞ猶下に解分るを見べく又第一卷に手長能大御世云々の註に云る其意味を此に合せ考べし○御賜志は後釋に仰は負せと同言にして其事を負持しむる由なり此言凡て其意なり」と有が如し又歴朝詔詞解第一詔授賜比負賜布の下に云く常に仰せと云ふ言も本其事を負持しむる由にて此と同言なり假字は四十五詔に勅此於保世給布と有り○次乃隨爾の次は考に天穗日命天夷鳥命より次々の國造のなり」と見えたるが如し暦朝詔詞解にも第一詔天皇御子之阿禮坐牟彌繼々爾大八島國所知次止と有る下に此詞を引て天穗日命より國造の繼々に仕奉るを次と云り」と有は實に然る言なり但考に穗日命熊野命と有を其熊野命と云は誤なる事後釋に辨られたる如くなれば今改て引り下に天津次と有も此に同じ天穗日命の大國主大神の國讓の表物を取持して天上に復奏し給ひし例の隨に天夷鳥命出雲臣として高千穗宮に參上りて此神賀吉詞を奏上給ひしより以來其子孫の國造等其次第を又繼ぎ又繼ぎ繼行て天皇命の御世々々に仕奉るを云也偖此事次なる御禱乃神寶献登白久奏と有へ係れり偖右の仰は親神魯伎神魯美命宣久と有る宣字を受たるなり

供齋若後ノ齋時者加フ後ノ字ヲ仕奉氏朝日乃豊榮登爾神乃禮自利臣乃禮自登御禱乃神寶獻登白久奏

此は前に大御世乎手長能大御世止齋止爲氐と有に應へたる文なり其供齋とは上にも引る如く臨時祭式に國造賜負幸物還國潔齋一年云々と有を云ひ若後齋時者加後字とは後供齋仕奉氐と云べきにて是は同式に又後齋一年更入朝奏神壽詞如初儀と有を云なり此事初に手長能大御世止齋と有る其下に云るを見合せて思可し○神乃禮自利は大國主神の國避の時に其禮賓の物を天穗日命に託けて其大神の皇御孫命の大御世を手長の大御世と齋奉り給ふ表に献り給るを天穗日命の復奏し給ひし時に天津朝廷に擎奉れりし例に擬ひて其裔の出雲國造が熊野杵築兩神宮に供奉り其大神等に奉れる神寶を申下して大神の禮賓と爲て献るを以云なり此事上なる伊波比乃返事の下に委しく云るを見べし然れば今獻る所は國造の手に成れりと雖も後國避の故事を摸せる事云も更なり禮自利は遣唐使時奉幣詞に悦備嘉志美禮代乃幣帛乎令捧賓氐類史天長三年四月伊勢太神宮に幣帛を奉らせ給ふ宣

命に禮代之大幣帛乎云々捧令持氐進給布同五年八月壽ニ北山神ニ詞に禮代乃幣乎令捧賛天など所見たる禮代に同じ（猶文德天皇實錄天安元年二月の宣命三代實錄貞觀三年五月の告文等にも禮代之大幣帛と見ゆ此例猶有る可し）備禮自利は其敬禮の表に奉る物實と云事にて神に奉る幣帛を禮代と云も其意味同じ古事記（穴穗宮段）に令レ詔者汝命之妹若日下王欲レ婚ニ大長谷王子ニ故可レ貢爾大日下王四拜白之云々言以白事其思レ無レ禮即爲ニ其妹之禮物（ヰヤシロ）ニ令レ持ニ押木之玉縵ニ而貢獻ニと見えたる如く言耳以て白さむは無禮き事なるが故に其禮の表を奉るを云なり此禮物の二字を禮代（ヰヤシロ）と古く訓せたるを以知べし（又朝倉宮段に其大縣主懼畏稽首白奴有者隨レ奴不レ覺而過作甚畏故獻ニ能美之御幣物ニと有る御幣物の三字を記傳に禮代と訓れたるは實に妙なりと謂つ可きなり）自利は志呂に同じく物代又は代物など云ふ代なり古事記に於是天照大御神告ニ速須佐之男命ニ曰是後所レ生五柱男子者物實（モノシロ）因ニ我物ニ所レ成故自吾子也先所レ生三柱女子者物實因ニ汝物ニ所レ成故乃汝子也と見え崇神天皇御紀に倭國之物實と有る下に物實此云ニ望能志呂ニと註し寶基本記には心御柱を富物代と云り又上に大物主神を大物代主神とも申す所に註る事共を考合す可し（但右の古事記なるを傳に望能邪禰と訓れたるは神代紀に原ニ其物根ニ則云々と有に依られたるなれども彼は其物と爲れる種子を原る由なれば此とは異なれば從難し）備右の如く神乃禮自利は大國主神の此國土を皇御孫命に避奉らせ給ふ表物なるが其に並べて天穗日命より獻給ひしは謂ゆる臣乃禮自なるが此二を合せて天夷鳥命より次々其裔孫の出雲國造より御世々々に朝廷に神賀吉詞奏す禮實は捧奉れる者と見ゆるが實に大國主大神の天穗日命に託て奉らせ給ひし神乃禮自利は鏡と玉と劒の三也しなる可し其神代に已に天石屋戶段に右の三種を天照大御神に太御幣と献れるより始て天孫降臨段に右の三種を神寶と爲て皇御孫命に事依し給へりし事は云も更也人世と成ても仲哀天皇御紀に筑紫伊覩縣主祖五十迹手聞ニ天皇之行ニ拔ニ取五百枝賢木ニ立ニ船之舳艫ニ上枝掛ニ八尺瓊ニ中枝掛ニ白銅鏡ニ下枝掛ニ十握劒ニ參ニ迎于穴門引島ニ而献レ之因以奏言臣敢所ニ以献ニ是物ニ者天皇如ニ八尺瓊之句ニ以曲妙御ニ宇且如ニ白銅鏡ニ以分明看ニ行山川海原ニ乃提ニ是十握劒ニ平ニ天下ニ矣と見えたるなと上古には常に多在し禮式と所思しければなり（備此壽詞も彼の作意にては非るなり寶鏡開始に引る神代紀なる御天降段を載たるは此は天照大御神の皇御孫命に右の三種の神寶を事依し奉らせ給ふ時に宣給へる大御命なるを其に本着たりし者なりけり）備其鏡は此詞に己命和魂乎八咫鏡爾取託天倭大物主櫛𤭖玉命登名乎稱天大御和乃神奈備爾坐と申給へる其なる可し斯

れば一度天神の御許に奉上給へりしなるを神代紀に大物主神事代主神を天より還降し給ふ所に即以二紀伊國忌部遠祖手置帆負神一定爲二作笠者一彥狹知神爲二作盾者一云々乃使下太玉命以被二太手襁一而代二御手一而使中此神上者始起二於此一矣と有る此時に其八咫鏡は大御和に鎮奉らせ給へるが故に皇御孫命の御天降の時に副給はざりしとなり（然れど又此時に葛木乃鴨能神奈備及宇奈提及飛鳥乃神奈備等の社々は祭り初たる事も又此文の次第に因て知るゝ事なり）玉は神代紀に大己貴神報曰云々吾將二自レ此避去一即躬披二瑞之八坂瓊一而長隱者矣と有る其にて披とは其國を避奉らせ給ふ禮代に奉らせ給へるにて神に奉る幣帛にも置と云に同じ大倭神社註進狀に傳聞大國魂神者大己貴神之荒魂與二和魂一戮レ力一レ心經二營天下之地一建二得大造之績一在二大倭豐秋津國一守二國家一因以號曰倭大國魂神一亦曰二大地主神一以二八尺瓊一爲二神體一奉レ齋焉と見えたる是也又其下に家牒曰腋上池心宮御宇天皇元年云々天皇夢有二一貴人一對二立殿戶一自稱二大己貴命一曰我和魂自二神代一鎮二三諸山一而助二神器之呂運一也荒魂服二王身一在二大殿內一而爲二寶基之衞護一と見えたるは此詞に克合へる者也此和魂自二神代一在二三諸山一而助二神器之呂運（タスクアマツヒツギノミサカエチ）一と有は詞に麻蘇比乃大御鏡乃面乎意志波留志天見行事能己登久明御神能大八島國乎天地日月等共爾安久平久所知牟云々と見え彼如二白銅鏡一分明看二行山河海原一と有に其趣同じく又荒魂服二王身一爲二寶器之衞護（ナルスメラミコトノミマモリト）一と有は詞に白玉能大御白髮坐赤玉能御阿加良毘坐云云と見え又彼如二八尺瓊之句一以曲妙御宇と有に其旨等しきを以曉る可き者なりかし（猶思合せらるゝ事は上にも已に引たりし垂仁天皇御紀に載れる大倭大神の御言に先皇御間城天皇雖レ祭二祀神祇一微細未レ探二其源根一以レ粗留二於枝葉一故其天皇短命也是以今汝御孫尊悔二先皇之不一レ及而慎祭則汝尊壽命延長復天下太平矣と見えたるも此に由有りて聞えたり）劍は所見無しと雖も今此を按思ふに神代紀に乃以二平レ國時所レ杖之廣矛一授二二神一曰吾以二此矛一卒有二治功一天孫若以二此矛一治レ國者必當二平安一と有る此を以當べし然るは後世に至てこそ劒と矛との製樣は異なりけれ元同物にして其柄の短きを以て劒と云ひ長きを以矛と云事なれば克叶へり又詞に明御神登大八島國所知食天皇命能手長大御世乎御横刀廣爾誅堅米と有も右の旨に合ひ又彼提二是十握劒一平二天下一矣と有にも事は等しきを思ふ可し若て此は彼大倭神社註進狀に依に同社に坐相殿神八千矛神の神體たり（此矛亦上古在二天皇大殿之內一其祭齋爲二八千矛神之神體一と有り此は彼八尺瓊と共に御天降の時に持て降らせ給ひ崇神天皇の大御世迄天皇の同大殿の內に鎮り御在けるなり此次に述る事をも此に見合す可し）

斯れば右の如く神の禮代と爲て天穗日命の天に擎持参れりしは鏡と玉と劒の三種にて有けるを天夷鳥命より以降其天津次に依て御世々々に奏神賀事の有る度毎に増加へて式文の御定の如く成れりし者なりけり斯れば詞も神代より大旨の定は有なから其時の献物の次第に依て取捨有ける者なり臨時祭式に凡國造奏二神壽詞一日之平旦神祇官試二國造奏事一と有を以曉る可なり 右の國避の時の禮代は經津主神武甕槌神の取持して奉れる趣に神代紀には見えたるを此詞に依に天穗日命天夷鳥命も共に取持して天神の御許に奉れるなり然るを右の二神を云ざるは上に己命兒天夷鳥命爾布都怒志命乎副天云々と有に依てなる者なり ○臣能禮自登出雲本に自利と有は宜しきに似たれども今諸本を校合するに何れも自と耳有り言義を考るに禮自利の自は其にて物を云なり其は禮の表を其と其物を以献る謂なる事彼古事記に禮物と有を爲夜志呂と訓せたるを以曉る可し若て利は其形狀を云辭なるが故に添ても省ても云ふ常の例なり且語の調に於ても神乃禮自利臣能禮自云々と有る方甚美たければ本の隨にて有べし下に今一處有も然り 考にも利を略けるは唱ふる調の爲なる可し」と云れたり又頭書に自利と云は留志の約利にて禮の志留志と云事なりとも有り」と見えたれども然らず物を志と云る方安らかにて宜し 倩如此く神乃臣能と重復て云事は其始大國主神の國避の禮代を天穗日命の返事の禮代と爲て天神の

御許に献給へる美たき吉例なるに依て其天津次の隨に天夷鳥命より以來世々出雲國造等彼兩神宮を伊豆の眞屋に令請奉りて一年の齋を爲つゝ御禱の神寶を成し整へて奉れる其出雲臣の献る禮代なりと雖も神の禮代を取持て捧る由なり 然るを後釋に此の禮自利は穗日命より始て次々の出雲氏の神等又國造の皇朝に献る禮代なり」と見えたる神乃禮自利の旨は擗事也 ○御禱乃神寶獻良久登奏は親神魯伎神魯美命の御命以て天穗日命に天皇命の大御世を手長の大御世と堅石に常石に齋ひ奉り茂の大御世に幸はへ奉れと仰給ひし其御命に因准ひて御禱の神寶に依せて祝奉るを云にて次々皆其辭なり 是を以て次々の壽詞は右の天神の勅命の趣を條々に分てる者なる事を知べし

白玉能大御白髮坐赤玉能御阿加良毘坐青玉能水江玉乃行相爾明御神登大八島國所知食天皇命能手長大御世乎御横刀廣爾誅堅米

玉は臨時祭式に玉六十八枚と有る細書に赤水精八枚白水精十六枚青石玉卌四枚と見えたる是なり此は神代紀に大己貴神の躬披二瑞之八坂瓊一と有る事に本就たる事なるが此に限らず此國より玉を出す事古より然り古語拾遺に櫛明玉命之孫造二御祈玉一 古語美保伎玉言祈禱也 其裔今在二出雲國一毎レ年與二調物一貢二進其玉一と見え臨

時祭式に凡出雲國所レ進御富岐玉六十連三時大殿祭新卅六連臨時廿四連毎レ年十月以前令ニ意宇郡神戸玉作氏造備ニ差使進上とあるを以知べし風土記に意宇郡玉作山郡家西南廿二里有レ社と有る此地にて造れるなり有社は玉作湯社と有る此なる可し神名式には玉作湯神社同社坐韓國伊太氏神社と有て二座なり風土記に由宇社と有る其韓國伊太氏神社なり又玉作川源出ニ郡家正西一十九里拜志山ニ北流入ニ于海ニ有ニ年魚ニと見えたるも同じ所なり右の玉作は温泉有る地なり ○白玉能大御白髪坐凡て此白玉能赤玉能などの能は如（ナス）字の義なり此は白玉の如く大御白髪の生給はむ迄に大御壽長く大座坐むと禱白せるなり後釋の說此なり考には次に御若叡坐と云ふに合せたりと云れたれど其は事違て中々に違へりと後釋に見ゆ ○赤玉能御阿加良毘坐は考に御病など御在し坐ず大御顔の榮え坐色を譬へたり上の水分神詞に赤丹穗爾聞食と云ふに同じ」と見え後釋に他の祝詞等に豐明爾明坐と有も明は借字にて同意なり阿加良毘は阿加利を延たる詞にて赤らむと云に同じ」と有る共に然る言なり予が說は已に其因々に記されば其所見る可し實に赤丹穗又豐明爾明坐と云に同じ意なる也 ○青玉能水江玉乃行相爾の青玉は青石を磨たる玉を云り水江玉の水は借字にて瑞珠（ミツタマ）なと云に同じ江は後釋に借字にて可愛玉（エダマ）なり」と有が如く瑞々しく麗美しきを云なり前には青玉能の能も如（ナス）の意にて青玉の如き稚枝（ミヅエ）の玉と續けたるならむ然れば水江乃（ミツエノ）玉乃と詠附べし偖此は玉を青々としたる木枝に繫て奉れるが故に其なも共に稱辭せるなる可しと思ひしかども鈴屋翁の瑞の可愛玉の說よりは實に劣れり行相爾は萬葉四廿三に道之去相爾（ミチノユキアヒニ）と有り後釋に云く緒に貫たる玉と玉と相並び着たる所を云ふ鵠の行相の間など云と同じ譬たる意は此玉共の相列りて並び着たる狀の能整ひて亂れざるが如くに天下を調へ治め給ふ由なり考に木の稚枝の如く見ゆる由に云れたれど然見えむいらに推て水枝と云む事如何又行相を曲れたるを以云と有も叶はず行相とは必しも行回りて逢ふ事には非ず從鵠にても如くし然れば譬たる意も天下を統轄らしたる意もてと云れたるも當らぬ事なり從仲哀天皇御紀に云るも其意の違なるには非ず從は勾玉の形の妙なるが如く神に天下を所知食せと云事たり妙を曲妙と書れたるは撰者の例の杜撰にて唯上の句字と相照したる文字の上の事耳にこそ有れ曲妙と云に曲れる意は無き事ぞ此字などに惑ふ事勿れ ○御横刀廣爾誅堅米は臨時祭式に金銀荘横刀一口長二尺六寸五分と有る是なり此は句の上に明御神登大八島國所知食天皇命能手長大御世乎と有る長に對へて廣と云るなり偖横刀に八握劍十握劍など云は其長さを計りて云ひ又尾羽張と云は其鋒の張廣でれるを云ひ廣矛など云も此に同じければ其横刀の長く廣きを以譬とは爲る者なり出雲風土記なる神名に八尋鉾長依日子命と見えたる此八尋は柄の長きを云事なれ共如此く續きたる中に廣と長とを對はせたる味有て聞ゆ神名式に熊野郡鷹日神社と有る鷹日は借字にて劔の高柄（タカヒ）なる可し風土記には多加比社と有り此御横刀を作る所なる可し誅堅米は御横刀を打鍛ひ堅めたる如く大御身堅固かに御在し坐て大御壽の長く遠く天下を所知食せとなり上の青玉能水江玉

乃行相爾より續けて心得べし彼提ニ十握劍ー平ニ天下ーと見えたる其意味無に非ず但後釋にも右の文の事を論ひて此は御横刀を用ひてと云ふ意は無し手長大御世を打堅めと云ふ語の續きなりと有が如し又神代紀に大己貴神の廣矛を奉出して吾以ニ此矛ー卒有ニ治功ー天孫若用ニ此矛ー治レ國者必當ニ平安ーと有をも合せて思ふ可き者也かし 然るを後釋に備考るに御横刀能廉堅爾誅堅米など有けむを廉を廣に誤り堅字を一落せるにや有む然云ふ據は萬葉六に新酒歌焼大刀之之加度打放大夫之禱豐御酒爾吾酔爾家里此初二句は壽事に爲る業と聞えたれば放は必波奈知と訓べし云々此歌と此の詞とを合せて思ふに古壽事に如此く爲し習ひの有しならむ云々と有る此考は用ひられざりけれども僻事なンめり其に如度打放は佩たる大刀を放ち置て甚く打解けたる状と聞ゆれば此の例には引難かり

白御馬能前足爪後足爪踏立事波大宮能内外御門柱乎上津石根爾踏堅米下津石根爾踏凝之振立流事波耳、能彌高爾天下乎所知食左事志太米

白御馬は臨時祭式に白眼鴾毛馬一疋と有る此を以禱申せるなり和名抄に鴾白馬と有る是なり其下に漢語抄云鴾白馬鴾毛也と見え形白雜色馬也とも見えたり 白眼は爾雅に驪に作りて馬一目白者名ニ驪ー魚目ー也と有り鴾毛は同抄に鴾和名豆木赤喙白呼之鳥也楊氏漢語抄云紅鶴和名上同俗用ニ鴾字ー日本紀私記云桃花鳥と有る此鳥の羽色に其毛の似たる故に號たる所なり右の形白雜色は爾雅に駁黄白雜色馬也と有此に同じ ○前足爪後足爪踏立事波は其獻物の馬を奏神賀事の庭に引て參る事を云なり踏立るーと云て踏行く事に爲るなり 新年月次等の太神宮に進せらるゝ詞に御繕縛堅氏磐根木根履佐久彌氏馬爪至留限と有て馬爪の至ると云に同じきなり

○大宮能内外御門柱乎は皇大宮の内重外重の御門御門の柱にて其馬の踏て過行く所を以云をり 此奏神賀事の儀は大極殿にて受させ給ふ故に如此く内外御門とは云る也右に八省院等の無りし程にも本より内重中重の有しかば如此く云傚へり ○上津石根爾踏堅米下津石根爾踏凝之は上より云下したる意は祝詞に下津磐根爾宮柱太敷立など大宮造りの堅固なる事を讃申せる其意味を以て馬の爪して柱根の地を踏堅め凝すを賀たるなり偖上津石根と下津石根と並べたるは文の章を成せるなりと雖も云意は此大地上より地底の際限迄もと云なり 但上津石根と云言は此より外に古書には見えぬ事なるが甚美たし又常に上と下とを對へ云事なれば必如此く有べき所なり 踏堅米と踏凝之と對はせたるも堅むるは上方の事凝は底方の事にて共に用有る語共なり偖凝之を本に凝立と誤れるを後釋に凝立の立の字は志の誤にて小字なる可し其故は此の文は馬の爪して地を踏むを以柱の根を踏堅むる由に云るにこそ有れ柱を立る事を云るに非ず柱立るは馬爪に與かる事無れば立と云べき由無ればなり上に柱をとは有れども文意は唯柱根の地を踏堅むる由耳なり偖上の堅にも米の字を添たれば凝にも必志の字有

べきなり」と云れたる寔に然る言なるに就て猶考るに立は之の小字を誤りて大書せる也と所思しければ今凝之と改む志(シ)と之(シ)とを字體を見合するに立には之ノ字の方近き耳ならず此詞の中に伊都閉黒益之(シ)とも事遂奉之時とも所知坐之(シ)米牟止申氏とも國作之(シ)大神とも之ノ字を志の假字に用ひたる例所見えたれば今其多きに從へるなり○振立流事波は考に耳をなり」と有が如し後釋に耳と云はざるは即次に耳能彌高爾と有故なり然るを或人上の立字を耳の誤として此上へ屬たるは僻事なり然ては言重りて中々に拙し次なる耳能は此馬の耳の如くと云意なり」と有は然る言なり大祓詞にも耳振立聞物止馬牽立氏と有りと雖も其と此とは云樣に少違ひ有り○耳能彌高爾天下乎所知食牟左事志太米の事の下に能の辭脱たるか下に事能志太米と有を證と爲べし耳能の能は馬の耳の如くと云事なり後釋に馬の耳は高く立る物なるが故に彌高と云なり大祓詞に高天原爾耳振立と有も高天原爾千木高知と云と同じくて高き由なり倩彼大祓詞にては神等の疾く聞給ふ表に云るを此は疾く聞食す由には非ず唯彌高と云む料耳にて此馬の耳の高きが如くにと云るなり倩天皇の天下を所知食すを彌高爾と云は御世の彌益々に隆盛なる由なり萬葉に高殿乎高知座而など多く有も宮殿に係て盛に所知食す事を云るなり六卷に吾大王乃高敷爲日本國者など宮と云はでも云るにて知べしと有が如し萬葉十五丁廿五に多可多加爾麻都良牟伎美と有考には此は天皇の天下の事を御耳速く聞食す可き物實と爲り馬は勝れて耳疾き物なればなり倩其耳疾きを耳高と云り目の疾きを目高しと云に同じ」と有れども後釋に若考の説の如く耳疾く聞食す意ならば彼大祓詞に聞物と有る如く此も天下乎所聞食牟とこそ有るべけれ所知食左牟にては叶はずと有るが如し事志太米は事能爲給閇に同じ中臣壽詞に見食倍 尊食倍 歡食倍 聞食倍と有は見給へ尊み給へ歡び給へ聞給へなるに同じ若て多倍を多米と云は食物は神より賜はる意にて多倍物と云を又多米都物と云ひ其を調ふる氏に多米連など有を以明らむ可し然るを後釋に志太米は下見えにて其下形の顯はれ見えたるを云ふ今世の言にも下地下繕ひ抔凡て物の基讃ての設けを下菜又菜下と云事多し下形とは雅言にも云り倩見えた米と云は常也と云れたれども迂遠く聞ゆ此は爲給へと見て何の事も無く聞ゆる所著なるをや

白鵠乃生御調能玩物登倭文能大御心毛多親爾彼方能古川席此方能古川席爾生立若水沼間能彌若叡爾御若叡坐須々伎振遠止美乃水乃彌乎知爾御袁知坐麻蘇比乃大御鏡乃面乎意志波留志天見行事能己登久明御神能大八島國乎天地日月等共爾安久平久知行牟事能志太米止御禱神寳乎擎持氐神禮自利臣禮自登恐彌恐毛天津次能神賀吉詞白賜登奏

白鵠は臨時祭式に白鵠二翼乘レ軒と有る是なり後釋に式に垂レ軒と註したる垂字は乘の誤にて、輿の如き物に乘するを云ふ軒は車なれ共此は輪有て挽く車には非じ舁物なる可し」と有が如し但今出雲本に乘に作る者は然る善本有しなる可し〇鵠字は出雲本に從へり後釋にも鵠字を本に鵠と有は誤なり考に改て書れたる宜し」と有り當時然る善本は無りつるなる可し考に鵠は古は久々比と云ひ後世には白鳥と云て白く大なる水鳥なり借此は志呂伎久々比とも訓べけれど凡て佗色なるをこそ志呂伎某とは云へ唯白き耳なるをば白鷺白雪など云例なり然れど志良久々比と訓むも如何なり又白ノ字を捨て唯久々比と訓むも此文の字を用ひたる例に違へり然るに紀に白鳥と有は皆此久々比の事と思しき由有を後世にも字音に白鳥と云は是なれは白鳥と訓べきなり」と見え又冠辭考四に萬葉九十丁に白鳥鷺坂山四卅丁に白鳥能飛羽山松之と有る其二を擧て此白鳥を鷺と續けたるは事も無し飛羽と云るは必しも鷺耳ならじ仲哀天皇御紀に詔曰朕未レ逮ニ于弱冠一而父王既崩之乃神靈化ニ白鳥一上レ天仰望之情一日勿レ息是以冀獲ニ白鳥一養ニ之於陵域之池一因以覩ニ其鳥一欲レ慰ニ顧情一則令ニ諸國一俾レ貢ニ白鳥一と有は鵠の事ならむか

出雲神賀詞に白鵠乃生御調と有をも白鳥と訓べければなり以上取意と有り　右の御紀の白鳥は古事記には倭建命の伊勢國能煩野にて崩坐る事を云條に於是化ニ八尋白智鳥一翔レ天而向レ濱飛行と見えたり此事御紀に日本武尊化ニ白鳥一從レ陵出之指ニ倭國一而飛之と有り借記傳廿九に右の白鳥鷺坂山の歌を引て其下に「此は唯鷺は白き鳥なる故に如此續けたるか、又鷺の一名を白鳥とも云しか決め難し漢籍詩疏に鷺謂ニ之白鳥一とも有り借此の白智鳥を即白鷺なりと云說も有なり云々と云れたり　又古事記玉垣宮段に聞ニ高往鵠之音一と有る鵠字を記傳廿五六丁に多豆と訓れて其說に上代には鶴をも鵠をも鸛をも共に總て多豆と云るなり久々比意富登理など分れたる名有は良後の事なる可し萬葉三十九丁に近江海八十之湊爾鵠佐波二鳴と有る此も多豆に鵠字を書り　鵠と鶴とは別なれども漢國にても鶴の事を鵠と云る例も多く又字音も其鳥も似たるから混れつる事も有り五雜組と云書には鵠即是鶴ともいへり借鶴は秋の末より春迄ならでは此國には居ぬ物なるに萬葉に夏又秋初などの歌に多豆の鳴る事を詠り是鵠又鸛などを多豆と云るなり〇今云右の五雜俎の文は鵠即是鶴漢黃鵠下ニ建章一歌則曰ニ黃鶴一是已戰國策說士或言鵠或云レ鶴交互不レ一物同而音亦同也此雖ニ小事一亦博物者所ニ當知一と有り借此は鶴なるを通はして鵠とは書るか將久具比なるを多豆と云るか其差は辨へ難し何れにまれ訓は多豆なる可し和名抄に鶴は四聲字苑云鶴似レ鵠長喙高脚者也和名豆流唐韻云鶴別名也楊氏抄云多豆今按和俗謂レ鶴爲ニ葦鶴一是也」と見え又鵠野王按鵠大鳥也漢語抄云古布日本紀私記云久々比と見え又鸛本草云鸛水鳥似レ鵠而巢レ樹者也

和名於保止利と見え又天武天皇御紀には鶴をも於保止利と訓り字鏡に鵠久々比又古比と有り（漢語抄の古布と字鏡の古比とは通ひて一名なる可し借右の三た字にて云はゞ鶴は都流鵠は白鳥（ハクテウ）と云物□は許布と云物なり然るに右の書共に鵠を古布とも古比とも云るは違へるに似たり今許布と云物は鵠に當れり借又久具比と云しは鵠（ハクテウ）の事なりとも云ひ鵠（コウ）の事なりとも云ふ鵠（コウ）なりと云は誤なる可し神楽歌湊田に美奈止多仁久々比也也川乎利也云々 東遊彼乃行に加乃由久波加利加久々比加云々 師云久々比は今白鳥と云物なり古布には非ず古布は唯雌雄一番（ツガヒ）耳居る物にして群居る物に非れば八居と云に叶はず白鳥（ハクテウ）は多く群居る物なりと云れたるが如し又嗟きと見給へたるも白鳥にてこそ然る可けれ〇今云此師云と有は神賀詞なる此條の考に云れたる説にて上に引る文に續けるなるも其よりは抄出す此記傳に載られたるを取れる由は上に引ては却て混らはしき故に今記傳に依て引出つ）と見えたり〇生御調は生ながら奉れるなり臨時祭式に乘レ軒と有を合せて知べし此は同式に御贄五十昇と有其に別たむ爲に生御調乃玩物とは云るなり續後紀に生雉とも記されたり同じ例なり後釋に生は伊伎と訓べし伊久と云ては事違へり彼生日生弓矢などの生（イク）は生（イク）べき意なる故に伊久なるを此は其意には非ず生たるを云なれば伊伎なり凡て生たる物をは皆伊伎某と云ふ例なるぞかし（然るを考に伊久と訓て伊氣留の約なりと云れたるは甚々亂り也言の延約も事にこそ依れ伊氣流を約て伊久と云事は無し伊久と云と伊氣留と云とは意異なるを然一に成しては凡て言語の活用無く言靈の徳を失ふ業ぞかし其上此は伊久とは訓まじき事右に云るが如し）と有り御調とは稲穀を奉る事は更にも云はず日々の御贄に至る迄奉るを云なり萬葉六十五丁に御食都國日之御調等淡路乃野島之海子乃海底奥津伊久利二鰒珠左盤爾潜出なども詠み又内膳式には紀伊淡路近江若狭を日々の貢の番（ツガヒ）と爲られしなどを見て知べき也（又此を日鑑とも云り大殿祭詞の下に云るを見合す可し）〇玩物登此は其白鵠の生御調は御贄と爲て獻れるならず故有て御愛翫（ミモテアソビ）の料に奉出す事なる故に如此は云なり（但御贄の設なるも養置せ給ふ事なるを以て鳥取部鳥養部と云ふ部を立させ給ひ其を領るに鳥取造を定させ給へる事下に引る御紀を見て知べし又雄略天皇御紀に鳥ノ官之鳥爲二菟田人狗一所レ嚙死天皇瞋黥面而爲二鳥養部一と有り此文に依に鳥ノ官に其鳥養部を統る官名なるなり然れば鳥取造を下して鳥養部とは成されしなる可し此は御贄なるをも御翫なるをも合せて知れるなる可し）「後釋に此鵠を獻る事は本牟智別命の故事に依てなり」と有は謂れたる言なり其は垂仁天皇御紀に二十三年秋九月丙寅朔丁卯詔二群卿一曰譽津別王是生年既三十髯鬚八掬猶泣如レ兒常不レ言二何由一矣因二有司一而議レ之冬十月乙丑朔壬申天皇立二於大殿前一譽津別皇子侍レ之有二鳴鵠一度二大虛一皇子仰觀レ鵠曰是何物耶天皇則知二皇子見レ鵠得一レ言而喜レ之詔二左右一曰誰能捕二是鳥一獻レ之於レ是鳥取造祖天湯河板擧奏言臣必捕而獻即天皇勅二湯河板擧一曰汝獻二是鳥一敦賞矣時湯河板擧遠望二鵠飛之方一追尋詣二出雲一而捕獲或曰得二于但馬國一十一月甲午朔乙未湯河板擧獻レ鵠也譽津別命弄二是鵠一遂得二言語一由レ是敦二賞湯河板擧一則賜レ姓而曰二鳥取造一亦定二鳥取部鳥

養部與津部と見えたる是也姓氏錄右京神別天神に鳥取部造云々垂仁天皇々子譽津別命年向三十不言語于時見飛鵠問曰是何物爰天皇悅之遣天湯河桁尋求詣出雲國宇夜江捕貢之天皇大喜即賜姓鳥取造と有り宇夜江は風土記出雲郡健部郷の下に先所以號宇夜里者宇夜都辨命其山峰天降坐之云々故云宇夜里と有れば其健部郷中に在る江なる可し又神門郡に來食(クヒ)池と云か有も由有る事なり神名式に鳥屋神社有も由有る事なり偖十月壬申は六日に當り十一月乙未は二日に當れゝば僅に三十日には足ざるに捕て獻れるなり古事記には是御子八拳鬚至于心前眞事登波受故今聞高往鵠之音始爲阿藝登比爾遣山邊之大鶙令取其鳥故是人追尋其鵠自木國到針間國亦追越稻羽國即到旦波國多遲麻國追回東方到近淡海國乃越三野國自尾張國傳以追科野國遂追到高志國而於和那美之水門張網取其鳥而持上獻故號其水門謂和那美之水門亦見其鳥者於思物言而如思爾勿言事於是天皇患賜而御寢之時覺于御夢曰云々爾崇出雲大神之御心云々と有り斯れば後釋に此鵠を獻る事は其に原きたる由に云れたるは寔に然る言になむ有ける但其鳥を追到れる道次は互に相違有に何れ正しからむと考るに御紀の方正しく見えたり此記の追回東方到近淡海國乃越三野國自尾張國傳以追科野國遂追到高志國の三十字は佗より混れ入たる文なるにて 即到旦波 國多遲麻國而於和那美之水門と續きたるなる可し然らずば右の高志の二字を舊印本又一本に但馬と作るは上に多遲麻と有て字の異なるは如何なれども科野より但馬に回復れるにも有べし其證は神名式に但馬國養父郡和奈美神社今も網場(アミバ)村に立せ給へる耳ならず城崎郡久々比神社此は今下宮(シモノ)村に在て宗像神社と稱し和名抄に出石郡安美鄕有など旁由有を以知べし然れば御紀に詣出雲而捕獲或曰得于但馬國と有を合せて思ふに本國より針間に到り旦波國多遲麻國を經て稻羽國を越え出雲國の宇夜江に追迫りて捕獲たりしを又放れ行しかは東方に追回りて多遲麻國の和奈美之水門にて網を張て捕て獻れるなるが故に其國に和奈美神社久々比神社等の趾慥に遺れる者なりけり右の山邊之大鶙と云は天湯河板擧の亦名なり記傳廿五には高志舊印本又一本などに但馬と有に誤なり今は眞福寺本延佳本に依れり云々と云れて式に越中國礪貢部白鳥神社有り和名抄に同國新川郡鳥取郷有りと有れども和奈美之水門は但馬なれば叶はず右に辨へたる古事記を助けて云はゞ東方近淡海國三野國科野國より高志國に巡到りて多遲麻國に復來れりとも云べけれども僅に三十日には足ざる日數の内に行回る可くも非ず且和奈美之水門を今越中國に射水郡に久具湊と云有て其邊りに鳥取村と云有り其なと思めく記し樣なれども但馬國の方正しかる可し偖此白鵠の生御調を玩物(モテアソビ)と獻れるは右に引る御紀に湯河板擧獻鵠也譽津別命弄是鵠遂得言語と有る吉例に依事云も更なるに此時の事を記に出雲大神之御心と

見え姓氏錄に詣二出雲國宇夜江一捕貢レ之など有れば由有る事なる可し（此に就て猶思ふに右の久々比に化れるは出雲大神の御心にて宗像大神に坐るにや但馬國の久々比神社を今に宗像神社と傳ふるも古き事にて杜撰には非る可し出雲大神の后神は須世理毘賣命にて其即宗像大神に坐事上に云るが如し）○倭文能は後釋に此能は白玉能赤玉能耳能など云ると同じ例にて倭文の如くと云意なり」と有が如し臨時祭式に倭文二端（長各一丈四尺廣二尺二寸並遣レ案）と有る此を以て賀詞を成せるなり偖倭文は班布なり古語拾遺に令三天羽槌雄神（倭文遠祖也）織二文布一と見え神代紀に倭文神此云二斯圖利我未一と有り冠辭考に古に文有る布は唯是なる故に實に文（アヤ）の布とも云つらむ其文の樣は釋紀に右の拾遺の文を舉て次に云く建久諸祭與行之時大藏省年預申狀有二青筋文一之布也と是ぞ實に古昔の物と思ゆ其筋とは後世に縞織（シマオリ）てふ物の狀なる可し」と有にて著明し後釋に倭文は古の良布にて筋を織たる物なり志豆とは即筋と云事なる可し今云ふ島織なり此を島と云は狹間（セマ）なり然云意は古のは筋の間の大に麁かりけむを後には其を細く小（コマ）かに織たるも出來て其を分て狹間（セマ）織（オリ）と云しが又後には古の麁きは廢れて其狹間織耳弘まれるから終に筋織の總名とは成れるなる可し考に倭文は青筋有る布と云はれたれど筋の色は青には限る可からず彼釋紀に云るは稀に青筋なるが遺れる成可し」と有り十三卷神衣祭詞荒妙和妙の下に委しく注せるを見合す可し（若て倭文は多くは帶に爲りし物なり武烈天皇御紀に於裒枳瀰能瀰於襄能之都波枳夢須寐陀黎云々萬葉十一に去家之倭文旗帶乎結垂云々と有を以知べし此を右歌の左に一書歌云古之狹織之帶乎結垂と有る此を冠辭考に此狹織は倭文の狹く織たるにて帶に用る爲と有が如し但狹織は竪に筋有が故にて幅の狹きには非る可し）萬葉十三（十九丁）に倭文幣乎手取持而竹珠呼之自二貫垂同十七（四十六丁）に知波夜夫流神社爾底流鏡之都爾等里蘇倍など玉に副へ鏡に副て奉れる事は彼天石屋戸段に五百枝賢木に鏡玉劒を取繋け又荒妙和妙を取著たりける例に依れる也然れば此も其意味を以て奉る所なる可く所思ゆ○大御心毛多親爾は倭文に織る筋の正しく貫き通りて有が如く大御心も髓に坐せとなり後釋に多親には親字を假字に用ひたる事は例も無く如何に聞ゆれども多志爾と云言古く有て此に克叶へり古事記允恭天皇段の歌に佐々婆爾宇都夜阿良禮能多志陀志爾韋泥氐牟云々雄略天皇段の歌に多斯美陀氣多斯爾波韋泥受出雲風土記島根郡手染郷の下に所造二天下一大神命詔此國者丁寧（タシ）所レ造國在詔而故丁寧負給而今人猶誤謂二手染（タシミ）之郷一云耳と有る此丁寧も多志爾と訓べし然らざれば手染（タシミ）に緣無し萬葉十二に慥（タシカナル）

使乎云々など有り多志爾は慥になり借倭文に云る意は彼布の筋の鮮かに慥に分れ通りたる如くに天皇の大御心も慥やかに座坐せとなり」と有は彼大人ならぬ人の得思ひ得まじき高き説にて甚愛たし（若て上の白鵠を玩物等と云さして其語を竟ざるは此迄意續きて被白鵠を玩物と爲て大御心慥に御在し坐せと云るなり）萬葉一（廿二丁）に家忘身毛多奈不知九（三十五丁）に身乎田名知而十三（三十六丁）に事者棚知など有る多奈も慥之の意にて了解り又出雲風土記に所以號仁多者所造天下大神大穴持命詔此國者非大非小川上者木穗刺加布川下者河志婆這度之是者爾多志枳小國在詔故云爾多と有爾は神武天皇御紀に妍哉乎國之獲矣（妍哉此云鞅奈珥夜）と有妍にて國の麗美しき事を云るにて多志枳は辭也と雖も慥の意にて妍慥き由なり又同記楯縫郡沼田郷の下に宇乃治比古命以爾多水而御乾飯爾多爾食坐詔而爾多負給之と有る爾多の爾は祝詞に赤丹乃穗爾聞食と有る丹にて物を食て御面の赤らむを云れば此は丹慥にて同意ながら其義異なりと雖も辭の多志は何時も同じ事なり然れば愛たしは愛慥新たしは新慥にて共に此の多親と同意なる者なり（如此き愛たき考の有ながら猶後釋の一説に多字は和の誤ならむか和と多と草書能似たり萬葉一にも多豆伎を和豆伎と誤れる例有借和親は那碁夜と訓べし夜に親字を書るは彼黒盆の盆の類の借字にて於夜の訓を取れる其於は那碁の韻に在なり麻都羅を松浦と書く類にて猶例多し借那碁夜爾は和（ナコ）やかになり古事記上卷歌に牟斯夫須麻爾古夜賀斯多爾萬葉四に無被奈胡也我下丹」など有り若て倭文は古に眞有なる故に和やかなる事に云るなり云々」と有れども猶上の多志爾の説に比べては劣りて見ゆ但此の説も更に謂れ無き事には本より非るなり）

○彼方能古川席此方能古川席爾生立後釋に本に彼方の下に能字は無きを今は考の本に加へられたるに依れり此方の下には此字有ればなり借考に席の字を誤として改られたる原も然る事なれども猶思ふに岸の誤ならむとぞ所思ゆる字形も原よりは今少し能似たり（○今云考に今本に二ながら古川席と有は何の事とも聞えず席字は原を誤れる事灼ければ改めつ」と有れども岸の方勝れる事云も更なり然るを出雲本に二共に古川原に作れる者は考の説に驚きて漫りに改たるにて取用ひ難かり）又彼方此方と云るも川原にては少し用無く聞ゆるを岸にて克叶へり古川の彼方此方の岸と云事なるを文に古川を二に分て云るなり」と有は寔に然る言なり故今も席字を伎志と訓て然る善本の世に出む時を待つ者なり借古川の古に意有に非ず唯川岸の事を如此く文を成るなる可し（然れども越中國に新河（ニヒカハ）郡と云も有るは新に堀て通せりし由なるを以ての名なるに對へて思ふに唯何と無く往古より有來りし川なるを以て古川とは云るなる可し）生立は本の任に訓て有べし下に若久留須（ワカクルス）と有る其を云なり（考に生立と有て於此多氐留と訓るは誤なり下に生（オフ）ると云べき物も立ると云べき物も無ればなり然れば生は那利と訓て水底に凝成れる土なり立は出の誤にて出は生と云に就て自添たる言なり」と有れども其下なる若水沼間の訓を誤りて立られたる辭より出たる説なれば更に信（タノ）み難し）

○若水沼間能後釋に此水沼間は甚々心得ず其故は生

立と云ひ若と云ひ彌若叡と云るは必草木とこそ聞えたれ沼間は若叡と云べき物に非ず譬ひ若水沼間とは云とも其若は唯美稱て添たる耳にこそ有れ然添たる耳の言に係りて御若叡坐の譬には取難し必實に若ゆる物ならでは叶はぬ事なり上に擧たる種々の物の例をも思ふ可し何れも皆其物の色形或は其事を取てこそ譬へとは爲たれ然れは此は必川の邊に生る草木の名にて獻る御贄の中の物なる可きを其字の誤れるか文の亂れたるなとなる可し故思ふに若くは若久留須能成けむを久を水に留を間に須を沼に誤れるを後に情進（サカシラ）に其間沼を下上に置易て水沼間とは成せるか如此云故は語の續き古事記の雄略天皇の大御歌に比氣多能和加久流須婆良和加久閇爾と詠せ給へる例有り借獻る御贄の中に栗も有に就ての祝詞ならむかと思へばなり栗栖は栗林なり右の如く思ひ寄れる任に姑く久留須と訓つ然れど定めては云難し猶克考ふ可なり」と有る久留須の說は動くまじきながら實に定めては云難しと云れたる如く間と沼を下上に置替て水沼間と誤れる由は平穩ならざれども此より外に取べき說の非れば姑く從ひつ風土記神門郡の下に吉栗山（ヨシクリヤマ）郡家西南廿八里と見えたる其細書に所謂所レ造ニ天下一大神宮材造山也と有る吉栗山と云も栗に良はしき地名と聞えたるに五卷春日祭條に云る如く鹿島神宮を造れりし材の栗なりしを此に合せて思ふに古に栗を宮材に用ひたりしかば彼天日隅宮を造て令鎭坐たる由を以て其宮材の料の栗木に生れりし實を以獻れる成可し但此には彼方此方の古川岸と云るを吉栗山は山名なれば合ざるが如くなれ其如此く大らかに云て詞に文を成せりし者ならむかし考に水沼間を土物を造る泥也と云れし說は甚々信難ければ今擧て辨ふるに及ばず甚敷強事也借栗を奉れる事は姓氏錄に栗栖連中臣殖栗連などの姓氏を載たるを以古に此物を賞し事今に勝れるを知べき者也○彌若叡爾御若叡坐後釋に若えは若やぎの古言なり古は若えと耳云り其を若やぎと云は中昔よりの言なり然るを考に若やきより轉りて若えと云ふ如く解れたるは本末違へりと見えたり若え若ゆと活用く詞也○須須伎振遠止美乃水乃後釋に須々伎振は滌振にて振滌と云に同じ其内此は振と云事重き故に下に置けり振は動かすを云て滌ぐ狀也○今云考に萬の惡事を滌きて放遣るを云ふ」と有る如く國造の一年の間齋み竟て朝廷に參向ふ時に禊載を爲るを云り下に云を見べし今も此伊勢人などは水の淀むをも事の盛なるが弛び靜まるをも遠止牟（ヲドム）と云り○今云己が淡路國なとにても右の語有て遠止牟とも遠止毛流とも云り然れは後釋の今一の考に遠止美乃は乃美を下上に誤れるにて遠止乃美水乃にても有むか遠止は小門にて彼三津の川門を云ふ橋小門などの如し若如此く訓む時は水を袁比と訓べし凡て水は汲取て用ふる

なは市は母比御母比と云り主水（モヒトリ）又御母比も爽しなどの如し但何と無き小門の水は母比とは云まじけれども此は汲取て朝廷に獻るに就てなれば然云へきなり」と云れたる此説は甚く劣りて見ゆれば右の遠止美の本說に從ふ可くぞ所思たる　備彼出雲風土記なる仁多郡御津の水は神代に美たき由縁の有る水なる故に國造の此齋ひにも用ひ初る事なれば御贄五十舁の內にも雜へて此水を獻るなる可し然る故に此言は有ならむ彼三津は斐の川に傍たる鄕にて津は其河門なり（一云水を獻れるに有べからず國造の禊祓より始て其品々奉上る五十舁の御贄にも此水を振滌ぎて清めたる由なり下に云を見べし）若て滌振と云は彼神代に阿遲須伎高日子命の御身沐浴坐と有に就て云るにて遠止美の水とは川にて身に在れ物に在れ滌き振れば其勢にて流るゝ水の淀みて良上ざまへも逆上る故に云り」と有は然る事なり右の神代に美たき由縁の有る水とは風土記に三津鄕大神大穴持命御子阿遲須枳高日子命御須髮八握于レ生晝夜哭坐之辭不レ通云々大神夢願給告ニ御子之哭由ニ夢爾願坐則夜夢見ニ坐之御子之辭通ニ則寤問給爾時御津申爾時何處然云問給即御祖前立去出坐而石川度坂上至留申ニ是處ニ也爾時其津水沼出而御身沐浴坐故國造神吉事奏參ニ向朝廷ニ時其水沼出而用初也云々故云ニ三津ニと有る是なり偖此は阿遲須枳高日子命此津の水沼にて御身沐浴ぎ坐し美たき例に依て國造の神吉事奏しに朝廷に參向ふ時に其水沼に出て身沐浴し又御贄を調ふるに用ひ初る由なる可し又意宇郡忌部神戶の條に國造神吉詞奏參ニ向朝廷ニ時御沐之忌里故云ニ忌部ニ云々と有も其道次にて身沐浴する事なるが右の三津に始め又此に至て身を滌ぎ清むるなる可きが此詞には右の二を合せて云るなり（出雲僧俊信が校正本に水沼於而と有を沼於を汲出の誤とし下なる水沼出而と有る沼をも汲の誤と爲るは僻事なり本の任にて有べし神名式に三澤神社と有は此處なる可し）○彌乎知爾御袁知坐諸本共に爾乎知爾御表知坐と有は誤なり鈴屋翁の被改たるに從ふ可し後釋に云く此は本に爾乎知爾御表知坐と有は決めて誤なり然るを考に上なる美乃水乃を此上に屬け御表知坐を次なる鏡へ屬て本の任に訓れたる故に言足ざれは語の落たるなりと云れたり此は己も甚心得難かりしを猶熟思へば言の落たるには非ず字の誤れるにて爾は彌なり表は袁なりけり（此等の字は相誤れる例常に多し如此く唯二字を改れば甚能聞えて語も能調へり○今云考に水乃爾乎知爾（ミツノネヲチシルニ）とは紀に根國底國と云る如く爾は底と同じ云々と有も本より誤なり）若て乎知とは何に在れ初の方へ還るを云ふ言にて老たる人の若返るをも云り此は彼川水の滌き振る勢ひにて淀みて上の方へ漸返々するを彌乎知と云て天皇の彌益に若返り坐む事に申せるなり（遠止を小門と見ても此意は同じ事な

り川水は上より流れ來る物なる故に上の方へ返るを乎知と云り 借乎知と云る言の例は萬葉十七鷹の歌に手放毛乎知母可夜須伎此は本の手へ歸るを云り同廿に和我夜度爾伎家流奈氐之故麻比波勢牟由米波奈知流奈伊也乎知爾左家此は又初へ返々して咲けと云るなり 又郭公などの歌に乎知加敝里鳴と詠むも初鳴し所へ又返り來て鳴くを云なり 借又人の若返る事に詠るは萬葉五に和我佐可理伊多久々多知奴久毛爾得夫久須利波武等母麻多遠知米也母此は古の漢國の仙藥を服むとも又若返る事は得非じとなり久母爾得夫久須利波牟用波美也古彌婆伊夜之吉阿何微麻多越知奴倍之此は京を見たらば又若返らむとなり又十三に天橋文長雲鴨高山文高雲鴨月夜見乃持有越水伊取來而公奉而越得之牟物此は己が乎知の考に依て或人の如此く詠る也此歌昔より能訓得たる人無有しを右の如くにて甚能聞えたり越水ヲチミヅは人の飲て若返る水なり越字は音を借て書る耳ぞ越得之牟物は若返る事を得さ令む物をと云事なり右の反歌に天有哉月日如吾思有公之日異老落惜毛と有にて越は若返るを云事愈明亮けし右の歌は殊に此に能叶へる事なり 借年の始に若水とて汲も呑て若返るべき水と祝へる名也是も古昔より有し事なる可し と見えたり此にて此の詳說冠に盡せりと云べし○麻蘇比乃大御鏡

乃面乎は彼臨時祭式の献物の中に鏡一面 徑七寸七分 と有る是也 神名式に磐坂神社鷹日神社と見えたる鷹日神社は鏡を作りし地なる可き事上なる御横刀廣爾の下に云る如し然れば此の磐坂神社は右の鏡を造れりし地なる可きにや實鏡開始に磐境圖とて賢木に鏡を懸たる圖を出せるを以思ふに古鏡を献るは右の如く爲て奉れりけむ事彼石上戶段及伊都岐主が故事にも見えたれば彼臨時祭式に此等の物を置案と有は後の事なる可し 麻蘇比は眞澄にて塵計りも曇りたる隈無くして眞に澄明らけきを云なり神代紀及仲哀天皇御紀に白銅鏡と書て然訓み萬葉十三に吾持有眞十見鏡爾十六に吾目良波眞墨乃鏡なども見えたり然れば比を濁りて毘と訓べきかとも思へとも猶字の如くにて有べきなり續紀第卅三詔に宇倍奈彌と有は諾ひなるを此を彌と通はし云る例も有れば也考に眞澄日の鏡なりと有は僻說なり 考に天津日の御面の天下を照す事に云て即今の天皇の御事に云附たるなりと有れども天津日に少しも由緣有に非ず其由次に云べし 借此は前文に大穴持命乃申給久皇御孫命乃靜坐牟大倭國申天己命和魂乎八咫鏡爾取託天倭大物主櫛𤭖玉命登名乎稱天大御和乃神奈備爾坐と見え又大三輪三社註進次第に腋上池心宮天皇御世神憑㆓吉足日命㆒曰吾國造大己貴命也太初己命之和魂取託㆓八咫鏡㆒名曰㆓倭大物主櫛𤭖玉命㆒鎮㆓坐大三輪神奈備㆒と見えたる其にて大御和の神體なる事上に已に註るが如し 又大倭神社註進狀にも家牒曰腋上池心宮御宇天皇元年云々天皇夢有㆓一貴人㆒對㆓立殿戶㆒自稱㆓大己貴命㆒曰我和魂自㆓神代㆒鎮㆓三諸山㆒而

（助詞ト有リ寶遷也云々共有り）上に出たる玉と御横刀と此鏡と三種は大國主命の國避の時に天神御子に献らせ給へりし神寶にて謂ゆる神の禮賓なるを出雲國造の繼々世々相承て臣の禮賓として献る例と成れるなり然れども熊野杵築二所大神を始て其國に坐神等を齋ひ奉りて物爲る事今も猶神代の狀を取擬びたりし者なり○意志波留志天見行事能己登久は押晴かして見行（ミソナハ）す事の如くなり後釋に鏡は献物の中の一種なる故に譬へに云るにて押晴して見行す事の如くとは曇無き鏡の面を見給ふが如くと云るにて其如くに天下を明らかに見行し所知食むとなり」と有り故思ふに次に明御神能云云と有は其鏡の如く明かなる意に係けて云るなり彼仲哀天皇御紀に如二白銅鏡一以分明看二行山川海原一と有に合せて思ふ可き者なりかし（意志波留志の解は三巻太神宮祈年祭詞なる皇神能見霽志坐と有る下に委しく註れば其に見合す可し惜又後釋に考に天津日の御面の天下を照すに譬ふと云れたるは面乎と有に叶はず右の説の如くならば面乃と云ては聞えぬ言なり此は上なる御表知坐は字の誤なるを本の任に見て天津日の事と心得られたるから其を此鏡へ係て強て如此駁雑（ムツカ）しき説の出來たるなり天津日に譬へたる意は少かも無し唯此鏡を見給ふ如くと申せる耳なるをや」と有は然る言なり）○明御神能大八島國乎天地日月等共爾例は續紀第三詔に與二天地一共長與二日月一共遠云々と見える是は天皇命の御子の繼々長く遠く傳はり坐すことに云るを此は國造の參りて神吉事を白上る其天皇の大御世の久しく御在し坐む事に云て御子孫の事に係たるならず中臣壽詞に與二天地一日月共爾照志明志御坐事仁と有も當今を指たるにて此詞に同（萬葉二に天地與共將終登念乍奉仕之情違奴と詠るも日並子皇子尊の御壽の長く遠く坐む限りを云るにて此の明御神能云々に同じ）日月は常に都伎比と訓む事なれども其來經を云ふには月日の如く訓むべしと雖も此は天象を以て譬に取れるなれば直に字の如く訓べきなり第七詔に天爾日月在如地爾山川有如と有る日月を鈴屋翁の比都伎と訓れたるなむ允に當れりける（然れば今も古書を讀むには其心得必無て叶ふまじき事なり萬葉一に東野炎立所見而反見爲者月西渡二に茜刺日者雖照有烏玉之夜渡月之隱良久惜文と有など日を先に月を後に云るなり十三に天有哉月日如と有などは例にも事實にも逆へり）○安久平久知行牟事能志太米止は神代紀に寶祚之隆當下與二天壤一無上レ窮者矣」と天神の言壽き詔給へりし如く大國主神の國避の時に然白し給へるを天穗日命の傳申し給へりし跡を蹈て國造の神吉事を奏す趣を述たるにて此は始に天皇命乃大御世乎手長能大御世止齋止爲氏と言出たるより始て又其中間にも汝天穗日命波天皇命能手長大御世乎堅磐爾常磐爾伊波比奉伊賀志乃御世爾佐伎波閇奉登仰賜志次乃隨爾とも有を合せて終めたる者なり此乃天神の大御命を受賜は

り傳ふる趣なり（事能志太米は上にも有り事之爲給へなる事已に云るが如し後釋に志太米を下見えと註されたれど當らず。）〇御禱神寶乎擎持氐神禮自利臣禮自登は下に神賀吉詞白賜登久奏と有に係れり然るは上に謂ゆる種々の神寶に寄せて其々に禱言を申述るなればなり常に言壽と云は唯に言を以て壽ぐ耳なるを此は其禮實に依て壽申せるなるにて此御禱神寶開神と臣との擎奉る禮實なる義なり上に某甲我弱肩爾太襷取掛天伊都幣能緒結天乃美賀氣冠利氐云々は國造が其國の齋館にて一年の齋爲る消息なるを其間に右の献物を作備へて今献るなり（若て此は上に明日乃豐榮登爾神乃禮自利臣能禮自登御禱乃神寶献良久登奏と有る其読なる事云も更なり）〇恐彌恐毛彌天津次能神賀吉詞白賜登久奏は考に天津次とは天穗日命より始めて次々に絶せず賀申す由なり」と有が如し上に是爾親神魯伎神魯美乃命宣久汝天穗日命波云々登仰賜志次乃隨爾云々と見えたる如く其天穗日命の天津朝廷に齋の返事申上給ひける時に更に天神の宣ひ附させ給へりし事の有に依て其子天夷鳥命の高千穗宮に參向ひけむより其裔の出雲臣等の世々仕奉るを以てぞ天津次とは云なりける然ればば此詞も本より其時に成たる者にて人世の作に非る事上に註るが如し但献物の如きは其時々の少異も有べければ詞も少の異りも有つらめども其大旨の易れるならねば甚々尊き文なりかし（然るを考に此賀詞甚上代より有けむを上にも云る如く今の此詞は飛鳥宮より上に非ず見ゆるが上代より唱へ來しが違ひ失ぬる事も有しを正し補ひて岡本宮に書錄りたるならむ」と有は餘なる推當なり然る細かしき差異迄も然計り際際しく見え分るゝ者に非れば依難かり）後釋に此詞は實に甚古く尊とく古語の甚も愛たき物なるを近き頃迄は世に取見る人も且々無りしを吾師の大人の殊に如此く尊ばれしに依てぞ世に顯れて人皆も尊き物には爲なる此も亦甚尊き功にぞ有ける」と有る如く右に繼て後釋の書は著述して出雲八重垣隈々しき事無く説明あられし鈴屋大人の功將古昔にも後代にも比類無き大功にて尊しとも高しとも云む方無き事なりけり其卷尾に一首の歌を添られたり「大前爾今母請至奏賜倍綾爾貴伎許禮乃吉詞乎」と有る其尊く高き志の至り徹りて終に神代の絶たる趾を繼興し給はむ大御世に何れの時の人か遇らむ天地と日月と共に長く遠き大御世の内に必しも行はせ給ふ運有べし

中臣壽詞講義上卷

天保十五年二月十一日於　淡路國　鈴木重胤著
出羽國淳代村井汶直常校　出羽國　大瀧光憲
同十二月十五日男光凪校　同國　秋野重義　閲

發題　嘉永五年四月十一日訂正淨書

天照坐皇大御神の御子の繼々天津日繼と天津高御座に大座坐て現御神と神隨天下所知食す大御世の初に大嘗聞食す御事はしも高天原に事始て初國所知食し高千穗宮より以降天地と日月と共に萬千秋の長秋に行れ來つる貴とく高き大御政事になむ有ける者て此は當年の新穀を御酒に釀り御膳に炊きて天皇の貴の御手以て大御身自天照皇大御神を始奉りて諸の神等に奉らせ給ひ始て又天皇の聞食し初させ給ふ御事にて職員令大嘗の義解に謂下嘗二新穀一以祭中神祇上也朝則諸神之相嘗祭夕則供二新穀於至尊一也と見えたる是なり。（神代紀に神吾田鹿葦津姫以二卜定田一號曰二狹名田一以二其田稻一釀二天甜酒一嘗レ之又用二淳名田稻一爲レ飯嘗レ之と有は即新嘗にて御田卜定の事などの物に所見たる始なり猶此より前に邇々藝命の天下所知食す始より是等の事等の有へる由など壽詞の本文に就て說けるが如し）猶上古に□大嘗とも新嘗とも云て其稱を分別ざりしを中古より以來踐祚のを大嘗と云ひ每年なるを新嘗と云ひ別たれども大寶元年の令に仲冬下卯大嘗祭と有は每年のなるを其下に凡大嘗者每レ世一年國司行事以外每レ年所司行事と有て此は踐祚なるを云るなり但稱德天皇御紀には每世一年なるを大新嘗と云ひ每年のを唯新嘗と耳有り然れば大嘗とは大新嘗の意なる可し貞觀儀式に至ては踐祚なるを大嘗會と記し每年なるを新嘗會と記し分たれたれども延喜式祝詞卷なるは每年のなるを猶大嘗祭と有り然れども四時祭式十一月祭條に新嘗祭と記され別に踐祚大嘗祭式有れは令よりは後儀式よりは前に既に其名目は異に成れゝども祝詞は踐祚なるにも每年なるにも通はせ被用たりし故に其重き方に依りて大嘗祭とは題號せるなり（此事已に其詞の下に委しく註せれば此に云るに合せて曉る可なり凡て此大嘗新嘗の起原より始て其歷世の古き例共の事は悉くに其所に註へれば再此に云ず）神祇令義解に凡天皇即位總二祭天神地祇一（謂即位之後仲冬乃祭下條所謂大嘗每レ世一年國司行事是）散齋一月（謂仲冬之月自レ朔至レ晦）致齋三日（謂自レ丑至レ卯其辰日以後即爲二散齋一故下條云致齋前後兼爲二散齋一也）其大幣者三月之內令二修理一訖（謂大幣者供神幣物云々三月之內者唯據レ月言不二以レ日計一即始レ自二九月一終二十一月一也修理者此言二新造一也）と有は踐祚大嘗祭を云なり下に引る式文も此

に同し右の散齋致齋の事は其下條に凡一月齋爲ニ大祀ニ（謂上條云散齋一月而此大祀散齋者皆指散齋唯於三日齋更無ニ散齋ニ其致齋者皆在ニ散齋限内ニ）三日齋爲ニ中祀ニ一日齋爲ニ小祀ニと有り此大祀と云るは踐祚大嘗祭耳にして自餘には非るなり其は四時祭式に凡踐祚大嘗祭爲ニ大祀ニ、祈年月次神嘗新嘗賀茂等祭爲ニ中祀ニ大忌風神鎭花三枝相嘗鎭魂鎭火道饗園韓神松尾平野春日大原野等祭爲ニ小祀ニ（鎭魂祭已上並諸司齋之鎭花祭已下祭官齋之其小祀祭官齋内裏不レ齋其遣ニ幣使ニ之祭者齋レ之）と有を以知へし毎年の新嘗祭と雖も中祀にして三日の齋には過さるなり（但日本紀略に見えたる大同三年十一月丁丑の詔に前例ニ大嘗會散齋三月也自レ今以後只ニ一月ニと有は必得て若其知くならむには、さに致齋三月と有こときた然有は只思ふに大嘗よりは後に然る御定には有りしを復其本の世には改たるなり詔り其大嘗並三月之内と有には儀式大嘗祭式等に見えたる如く九月上旬に繊ニ神服ニ云々の事の有より始て其餘の物た十一月迄に調へ備ふるを云なり）又令の次條に凡散齋之内諸司理事如レ舊不レ得ニ弔レ喪問レ病（謂有ニ重親喪ニ者不レ在ニ預祭之限ニ）食レ宍亦不レ判ニ刑殺ニ不レ決ニ罰罪人ニ不レ作ニ音樂ニ（謂不レ作ニ絲竹歌舞ニ之類也）不レ預ニ穢惡之事ニ（謂穢惡者不淨之物鬼神所レ惡）致齋唯祭事得レ行自餘悉斷其致齋前後兼爲ニ散齋ニと所見たる此は諸祭に亘る事なるが此には大嘗祭に就て云る也大嘗祭式に凡散齋一月（十一月朔日至レ晦）致齋三日（自レ丑至レ卯）其齋月者預告ニ諸司ニ及下ニ符畿内ニ不レ得レ預ニ佛齋清食ニ其言語者死稱レ直病稱レ息哭稱レ鹽垂ニ打稱レ撫血稱レ汗宍稱レ菌墓稱レ壤

と有る言語云々は齋宮式に謂ゆる外七言なり猶令に其大祀及齋日朔望晦上下弦二十四氣假日並不レ得レ奏レ決ニ死刑ニと有を以其事を行ふ事は更にも云ず詞に迄忌憚る事を知べし借又不レ得レ預ニ佛齋清食ニと有て忌詞の事は被載ずと雖も其より輕き方なるにも外七言を被用る事なれば其方に就て内七言は被用たりけむ事云も更なり其内七言とは同式に凡忌詞内七言佛稱ニ中子ニ經稱ニ染紙ニ塔稱ニ阿良々岐ニ寺稱ニ瓦葺ニ僧稱ニ髪長ニ尼稱ニ女髪長ニ齋稱ニ片膳ニ外七言云々又別忌詞堂稱ニ香燃ニ優婆塞稱ニ角筈ニと有る是也右の佛齋とは佛事供養を云ひ清食とは齋（トキ）の事なるを忌詞に稱ニ片膳ニと有は詞に迄も忌憚る可き穢惡の事なればなり然れは右の令に不レ預ニ穢惡之事ニは式不レ得レ預ニ佛齋清食ニに當れる文にて義解に謂穢惡者不淨之物鬼神所レ惡と有は允に然る言也儀式に被載たる官符可忌事六條の中に行ニ佛法ニ事と載たるは唯に佛を祟く耳ならず凡に其に拘はりたる事を忌故に佛法とは云るなり又職制律に凡大祀在ニ散齋ニ而弔レ喪問レ疾判ニ署刑殺文書ニ及決ニ罰食レ宍者笞五十奏聞者杖七十致齋者各加ニ一等ニと見ゆ大祀の重き事此を以知べし右の如く

凡散齋之內諸司理レ事如レ舊と有る中にも右等の事を堅く禁止められたるなり致齋唯祭事得レ行自餘悉斷と有は上に引る四時祭式に並諸司齋レ之と有にて其趣知らるめり下なる第五條に委しく云り見合す可し猶職制律に凡大祀不二預申一期及不レ頒二告諸司一者笞五十以レ故廢レ事者徒一年幣帛之屬不レ如レ法杖六十闕レ數者八十全闕者杖一百云々と見え賊盜律に盜二大祀神御物一者中流と見えたり令玉掌中抄には六日大不敬と有る十三條の中に盜二大祀神御物一と有るを收られたり何れも大祀と云は右の踐祚大嘗祭を云事云も更なり又神祇令に凡踐祚之日謂天皇即位謂二之踐祚一祚位也福也中臣奏二天神之壽詞一謂以二神代之古事一爲二萬壽之寶詞一也忌部上二神璽之鏡劒一謂璽信也猶レ云二神明之徵信一此即以二鏡劒一稱レ璽と所見たる此は繼體天皇元年御紀踐祚の條に二月辛卯朔甲午大伴金村大連乃跪上二天子鏡劒璽符一再拜云々と見え持統天皇四年御紀にも春正月戊寅朔物部麻呂朝臣樹二大盾一神祇伯中臣大島朝臣讀二天神壽詞一畢忌部宿禰色夫知奉中上神璽劒鏡於皇后一皇后即二天皇位一公卿百寮羅列匝拜而拍レ手焉と見えたれば上古より以來踐祚の日に必右の事共は有けむを天皇即位儀に其事の見えざるは唐制を被摸たるに依て唯大嘗會に耳遺れる者なり持統天皇五年御紀に十一月戊辰神祇伯中臣朝臣大島讀二天神壽詞一云々と有る是即大嘗會に天神壽詞を奏し神璽鏡劒を奉る故事を被載たるにて大嘗會儀及大嘗祭式に合へる者なり偖神祇令に凡天皇即位摠二祭天神地祇一云々次條に凡散齋之內云々次條に凡一月齋爲二大祀一云々と有る其次條に此の凡踐祚之日云々の文を載られ其次に凡大嘗者每レ世一年云々と有は天皇即位の日と大嘗會の時と二度に在る事なるが故に其次は其に收られたれども大嘗耳には限らざるを以て凡踐祚之日云々とは冠らせたる者なり然れば即位の儀式の全は唐制に擬はれたる故に右の天神壽詞及神璽鏡劒の事等は彼には無き事なるを以て大寶より後に省かれたる者にて甚遺憾しき事なり天照大御神の天津高御座を受攝せさせ給ふ大御世始に良はしくも非ざる唐戎の制を用ひ給ひ甚も賞ときき古昔の大御手振を改させ給ふは其も何たる御過ちぞ云む方無き大禍事になむ有ける羽倉在滿と云人の著せる大嘗會便蒙の自叙に夫以朝賀之儀即位之禮雖下其大不レ出二乎大嘗之左一而襲李唐制爲之裝非二中國從來之式一唯於二大嘗一則否山藍之摺可下以日二華人之古一壽詞之奏不レ可レ得レ播二蕃客之耳一實是中國禮儀純粹無レ所二駁雜一者也と有は實に謂れたる言なり偖右の如く同じ事を再度物爲させ給ふ事狀を今思ふに上古の狀は天皇の大御位に即せさせ給ひて高御座に上らせ給ふ日に其天璽を奉る事なるが其は大連大臣などの如く御前の事執申す卿等より渡し奉りて天津日繼を受繼せ給ふ大御璽と齋はせ給ふ事なるが其より後に大嘗祭を行はせさせ給ふ日に當りて中臣朝臣は天神之壽詞を奏し忌部宿禰の神璽之鏡劒を奉れる其時なむ實に天神の御子と爲て其天津璽を受授り給ふ御事にし有れば此大嘗聞食す日即天皇

の新世の大御世始なる事此本文の下に註すが如し猶大嘗祭大嘗祭の箇其の下に委しく註れば彼是合せ讀て知べし然れば右に引る持統天皇四年紀に神祇伯中臣大島朝臣讀二天神壽詞一畢忌部宿禰色夫知奉二上神璽劍鏡於皇后一と有る文は五年十一月戊辰大嘗云々と有る下の文にて此は其時の大臣などの奉上れるなるを奉上神璽劍鏡と云事の同じきから混ひつるなる可し其上天神壽詞の大嘗聞食す下に就て奏する詞なるを即位の時には例も無く又五年十一月戊辰大嘗の下に神祇伯中臣朝臣大島讀二天神壽詞一と有て神璽劍鏡を奉上る事の無きに此文は斯に落て彼に入たるが故なるも知れば令に踐祚之日云々と有には即位の時を云には非ず踐祚の事有て後に大嘗を被行る時と云事なり心を着て分ふ可き者なり　又神祇令に凡大嘗者毎レ世一年國司行レ事以外毎レ年所司行レ事謂所司者在京諸預二祭事一者也と所見たる大嘗者毎レ世一年と有は謂ゆる踐祚大嘗祭なる事上に註るが如し其國司行レ事と云るは大嘗祭式に凡踐祚大嘗七月以前即位者當年行レ事八月以後明年行レ事此據二受禪即位一非レ謂二諒闇登極一其年預令二所司卜一定悠紀主基國郡一奏可訖即下知依レ例准擬又定二撿校行事一と有を云なり以外とは毎レ世に一年の大嘗祭を被行れたる其以外と云事にて謂ゆる毎年の新嘗祭を云なり所司行レ事とは義解に在京諸預二祭事一也と有る其にて悠紀主基等の國々を被定るにも非れは國司以下の人此に預らず在京の官人にて取行るゝは彼は大祀此は中祀にて其重からぬが故なるなり猶國司行レ事の云ば下に儀式及大嘗會式を舉て悉く註すが如し新嘗の大儀は已に大嘗祭の下に委しく述たるが如し　偖大嘗祭と云は十一月卯日に被行る御祭にて神事なり大嘗會と云は辰日に被行る公事にて節會なり此事人の思誤る事なれば能に心得置べきなり此並らびに新嘗祭と新嘗會の差別も右の例なるなり然れども廣く大嘗祭とも大嘗會とも其一事に渉らず云事常多し此亦心得有べし踐祚大嘗祭式に云く定レ月事凡踐祚大嘗七月以前即位者當年行レ事八月以後者明年行レ事此據二受禪即位一非レ謂二諒闇登極一其年預令所司卜二定悠紀主基國郡一奏可訖即下知依例准擬又定二撿校行事一と有る此を踐祚大嘗祭儀に天皇即位之年七月以前即位當年行レ事八月以後明年行レ事謂二受讓即位一非レ謂二諒闇登極一大臣奉レ勅召二神祇官一密封令レ卜二定悠紀主基國郡一奏レ畫訖即下二知其國一官符在二別卷一下國凡送二諸國一官符幷牒一事急者附二驛傳一自餘附二在京使幷差當一と見たり　奏可の字允恭天皇四年御紀に有六祭祀支要須由流佐受と訓り公式令の論奏式聞御畫の下に有大祭祀支用二增二減官員一云々及律令外議應レ奏者爲二論奏一畫レ聞と有る是奏畫なり又詔書式の可御畫下に覆奏畫レ可と有る是奏可なり史記に下二有司一曰レ可天子曰レ可之「可」は有る此字を作り然るに御紀の大祭祀の下に請二神祇官一須二由流佐一者當て彼書たる者なり右の大祭祀及臨時大祀之類一なりと有る大祀即此大嘗祭なるなり　其國郡卜定は其年の内に在る事にて定れる時無る可し一條太閤の御說に國郡卜定は二月より九月に至る迄八箇月の中は毎月其例有り」と宣へるが如し天武天皇五年御紀には其十一月に新嘗の事を被行るに九月丙寅朔丙戌神祇官奏曰爲二新嘗一卜二國郡一也齋忌(ユキ)則尾張國山田郡次(スキ)丹波國訶沙郡並食レ卜と見ゆ其委しき事は本文太兆乃卜事遠持白奉仕豆の下に云り　右の訓註に齋忌此云二踰既一

次此云ニ須岐一也と見えたり悠紀主基の字は文武天皇二年十一月御紀に始て出たり儀式よりは儀式の方古く有て委しければ今も其方を本に取て式文と比校ふ可き理なるを如此く式を先に立たるは儀式は多くは一聯に被載たれば事長くて中々に心留め難きが故に式文を本と爲て其解の料に儀式及其餘の書を引て註す事右の如くなり 又定ニ檢校行事一とは儀式に次以ニ大中納言二人參議一人一爲ニ悠紀主基兩所檢校一行事四位各一人五位三人辨在ニ其中一凡直ニ於會所一諸大夫不レ貴ヽ雜役幷國忌不レ參ニ預諸節會一諸司判官已上四人史在ニ其中一 主典已下五人 左右史生各一人在ニ此中一其判官已上奏聞主典已下申ニ大臣一其諸所等奏申亦同官掌一人使部直丁各一人と有は其大營會に預る行事の人々を被定るにて檢校は其長官の如し行事の四位五位の下に辨在ニ其中一とは謂ゆる行事辨なり一條太閤の御說に行事辨は悠紀主基に各一人中少辨なり」と有が如し以上（コレマデ）大臣の敕を奉りて定むる所なり 江次第大嘗會條に右の國郡卜定の事畢て神祇官退出の次に大臣召ニ外記一令レ撤ニ硯筥一大臣召ニ外記一令レ進ニ例文幷折堺紙ニ(チリゲカミ)外記進レ之例文進ニ大臣一入レ筥入ニ往代例文二卷補任二卷今度可ニ行事一人々交名一紙折堺進ニ參議座一大臣目ニ參議一參議進候大臣給ニト文幷風記(ホノキ)等ニ入レ筥參議復座書レ之參議書畢入レ筥返ニ上之一大臣見了令ニ藏人奏一之入レ筥乍レ居レ座令レ奏レ之奏下了大臣先召ニ大外記一給ニ檢挍行事文ニ入レ筥例文等同入レ之不合卜形等同入レ之又召ニ辨給ニト文一執レ手給レ之次退出と有り右の風(ホノ)記は江次第注に今度可ニ檢挍行事一人々之書附也心覺也と有が如し又宮主秘事口傳抄河原御禊條にも此公事之月日陰陽寮勘日書ニ進風記(ホノキ)一卷一と有り但此は國郡卜定の事竟て後に檢挍行事を定たるとを併せて奏せさす時の次第なり 此より其大嘗祭に就たる總ての事共は右の檢校行事此を奉行ふ事なり儀式の右の文に次て次檢校納言已下召神祇官令レト二悠紀主基行事所並小忌院等一卜訖行事史申ニ大臣一奏訖即仰ニ陰陽寮一擇ニ吉日一著レ之 先レ是權取ニ便處一爲ニ行事所一 即廳レ借ニ行鋪設ニ宮内省一 宮司在ニ別省一下皆同 其設レ座檢校西面北上行事四位已下南面東上主典東面北上諸所預並國司北面東上 國司帶ニ三位及參議一設レ座西四位五位同席六位亦總席在レ東 才伎長上諸司史生等在ニ四位五位後一北面東上其座南所共同其始ニ行事一日時合ニ陰陽寮定レ之と其同日に被定る所也行事所とは悠紀方主基方共に各相分れて其檢校行事の人等の相集りて事を行ふ廳舍なり一條太閤の御說に行事所は大内の諸司の中に卜食る所を用ふ所々の預主典代繪所木の道の工等諸道の雜從はすと云事無し」と有が如し仰ニ陰陽寮一擇ニ吉日一著レ之とは其廳始の吉日を令擇るを云へり 權取ニ便處一爲ニ行事所一とは有來りたる便處を被用るにて更に造らるゝならざる由なり其設座の次第等は兩方共に同じ 又儀式に次定ニ所々預一出納所五位二人六位以下六人齋場預五位五人六位以下八人 隸ニ標幷倉代一 小忌所五位四人六位以下六人細工所 隸ニ畫幷繪所一 五位三人六位以下八人女工所五位二人六位以下四人樂所五位四人六位以下八人風俗樂所五位二人六位以下二人和舞所五位二人六位以下二人大炊所 隸ニ人給所一 六位以下六人 用ニ諸司主典以下一 云々と有は所々の官人を被定るなり此は檢校の處分に依る事云も更なり 一に出納所とは大嘗會の料物の出納を掌る所二に齋場とは

在京齋場にて悠紀方主基方兩處有り三に小忌所は小忌院とも小忌食之院とも云て小忌の人々の侯ふ所なり四に細工所とは御調度を調ふる所五に女工所とは下に内侍就二女工所一行レ事と有る如く内侍以下の事に預る所六に樂所七に風俗樂所八に和舞所とは辰日巳日の節會に仕奉る樂人の屋なり九に大炊所とは其御膳を炊く所を云なり

大祓使事式に凡大祓使者八月上旬卜定差二遣左右京一人五畿内一人七道各一人一下旬更卜二定祓使一差二遣左右京一人五畿内一人近江伊勢二箇國一人一在京諸司晦日集祓如二二季儀一と有るは儀式此におなじ其八月上旬なるは謂ゆる天下の大祓なる事云も更なるが又此大嘗祭を被行るに就て幣帛を天神地祇に被供る事を兼て大祓使は遣はさせ給ふ所なり此大祓使を被遣たるは天下の大祓なり其由下に云を見べし陽成天皇實錄に元慶元年八月廿五日分二遣大中臣氏人於五畿七道諸國一祓二除境内穢惡一爲レ供二奉大嘗會一也又光孝天皇實錄に元慶八年八月十六日甲辰分二遣大中臣氏人於左右京五畿内七道一解除以下十一月可レ修二大嘗會一也と有にて事の状知らる次に下旬云々は伊勢太神宮に大御使を奉らせ給ふに就て更に又大祓を負せ給ふなり儀式に下旬別卜更復發遣左右京一人五畿内一人近江伊賀伊勢一人と有る此には近江伊勢二國の外に伊賀國を被加たるは當時齋王の群行の道を取て當の敕使と離ち往來ふ御定なりしかば伊賀國も其路次なるを以て祓使は被遣し者なり在京諸司晦日集祓如二二季儀一とは八月下旬に六月十二月大祓の如く晦日の申時以前に親王以下百官朱雀門前に會集して行

也清和天皇實錄に貞觀元年九月十日壬戌大二祓朱雀門前一爲レ行二大嘗會事一也依レ式八月上旬可レ行而以二諒闇之内一延以二于今日一遣レ使奉二幣於伊勢太神宮一と有上旬は下旬を誤れるなる可し同卅日壬午雨大二祓於八省院東廊一爲二大嘗會近一也依二雨行レ事故用二東廊一とは臨時大祓に准らへて再行はれたる者なりけり陽成天皇實錄に八月卅日戊戌大二祓於朱雀門前一以來十一月可レ修二大嘗會一也光孝天皇實錄に元慶八年八月廿九日丁巳晦於二朱雀門前一大祓以レ可レ修二大嘗會一也など有り委しくは大祓詞講義に註せるを見て知べし齋宮式に凡齋王將レ入二太神宮一在前七月若八月同時遣二大祓使一云々凡齋王將レ入二太神宮一八月晦日朝廷大祓云々と見え當二齋王參入之時一更差二使中臣一人一遣二近江伊勢一在前祓清と有に克似たる事なり偖天武天皇五年御紀に八月丙申朔辛亥詔曰四方爲二大解除一云々と有は當年十一月に大嘗聞食す豫の大祓にて此なると同し供幣は式に凡大祓使發訖即差下遣供二幣帛於天神地祇一使上太神宮諸王五位以上一人中臣一人忌部一人卜部一人五畿内一人七道各一人中臣忌部兩氏供レ之其幣法大所各絹五尺五色薄絁各一尺絲一絢綿一屯木綿二兩麻五兩小所各絹三尺絲一絢綿一屯木綿二兩麻五兩裹薦總九十枚並以二大藏物一充レ之大所小所並諸社預二祈年祭一者繩七十丁夫五十二人朸五十二枚と有を儀式にも大祓使發遣云々訖發遣奉二天神地祇幣使一と見えたり先に大祓使を被遣て諸

國に祓を令せ給ひ直に幣帛使を差立らるゝ事成が故に即と云り大神宮齋王五位以上一人中臣一人忌部一人卜部一人と有る中臣は儀式に中臣長一人と有り此太神宮へ大御使を殊に奉らせ給は十一月大嘗祭に皇太神を迎へ入奉らせ給て朝夕の大御饌を奉らせ給ひ天皇の天津日嗣所知食す大御世初の新穀を聞食す爲なり平城天皇御紀に大同三年十一月辛卯奉二幣帛於伊勢太神宮一以レ行二大嘗會之事一也是夜御二朝堂院一行二大嘗事一と有り此は當日に幣帛を被奉るにて大御使は其より前に立れしなる可を傳漏せるなり嵯峨天皇御紀には見えず淳和天皇御紀には弘仁十四年十一月癸丑天皇御二大極殿一奉二幣帛於伊勢太神宮一と見えて此月大嘗會行はる仁明天皇御紀に天長十年十一月庚申爲レ行二大嘗會事一奉二伊勢太神宮幣帛一と有て其月に祭有り文德天皇實錄に冬十月己亥朔庚申遣二使者一向二伊勢太神宮一告以二大嘗祭事一と有て翌月大嘗會有り陽成天皇實錄に元慶元年十一月二日己亥遣二使於伊勢太神宮一奉幣と有て其月祭有り又光孝天皇實錄に元慶八年十一月四日丁卯遣二散位從四位下良末王一奉二幣於伊勢太神宮一告以レ可レ修二大嘗會一天皇御二朝堂院小安殿一發レ使焉十一月戊辰天皇御二朝堂院小安殿一遣二從四位上行神祇伯棟貞王大副從五位上大中臣朝臣有本等一奉二太神宮幣一など二度なるも有り上件何れも大祓使發訖即と云狀にも非るは八月に先大祓使京を發て即天神地祇に御使を被遣る時に伊勢の大御使も立事には有ども記し漏されたる者にて十一月の度なるは殊に別に伊勢一所に奉らせ給ふ事なる故に如此く御正史には記されたるならむかし（太神宮式に凡神嘗幣帛使取二五位以上卜食者一充レ之と見え其時に中臣忌部卜部等も共に參向ふ事人の知るが如し同式に凡太神宮裝束使遣二伊勢者預先宮中祓潔亦差二中臣氏一遣二京畿內及近江伊勢并太神宮司一左右京一人五畿內一人近江伊勢及太神宮司一人預同祓潔豐受宮准レ此と有と此式に下符更卜二定祓使一差二遣左右京一人五畿內二一人近江伊勢二箇國一人一云々と有て此の太神宮の供幣に及べると全同じきを思ふ可し）大所小所並諸社預二祈年祭一者と有る大所小所とは大社小社と云むが如し四時祭式に祈年祭神三千一百卅二座大四百九十二座（三百四座案上官幣一百八十八座國司所レ祭）小二千六百卌座（四百卌三座案下官幣二千二百七座國司所レ祭）と所見たる是なり陽成天皇實錄に元慶元年九月廿五日癸亥分二遣中臣齋部兩氏人於五畿七道諸國一班二幣境內天神地祇三千一百三十二神一緣レ供二奉大嘗會一也と見ゆ然れば此は天神地祇を迎奉らせ給ひて十一月卯日に祭奉らせ給はむとの事なり其幣物の員數の大概は大所小所共に祈年祭の前座神

の例に同じ 前とに社の相座に坐を申せり儀式には五畿内一人と有れども儀式には山城大和攝津各一人河内和泉一人有れば其昔は其社々に就て幣帛は供りけむを中の頃に至てはその國置に追(イタ)りて國司郡司等より合饗る事と成れりけむ故に五畿内一人にて事は足てぞ有つらむ猶前の相當の所に云るを見合て知べし

御禊は式に凡天皇十月下旬臨ニ幸河上一爲レ禊新五色薄絁各八尺五色絹各八尺御縣庸布四段祝詞料庸布二段安藝木綿八斤木綿麻各二斤黄蘗十枚鍬四口鰒堅魚各六斤腊二斗鮭八隻鹽八升雜海菜八斤酒米各四斗稻四束食薦四枚柏廿把坏八口匏二柄輦籠二擔夫六人と有は十一月朔日より大嘗會の散齋なるが故に十月の末に行はせさせ給ふなり儀式に十月下旬天皇幸ニ卜食川一被レ禊と有は是なり次に晦日於ニ朱雀門前大祓其儀同ニ二季一と有は天下の大祓にて御禊の事竟て後に晦日の大祓を被行る事なる由第二條に云るが如し備一條大閤御說に大嘗會行はれむとての十月に此事有る豐の御禊と是を云ふ世俗には河原の御祓と云ふ解除をば河に臨みて修する事なれば二條三條の川原に行幸して此を被行る大祀は一月の潔齋中祀は三日小祀は一日なり大嘗會は大祀たるに依て十月より御神事有り川原の御祓は御神事を被始る由也」と宜へる如く此なむ天皇の齋爲させ給ふ始には有ける備豐

の御禊と云事は素より不淨などの事有て被行るにては無く此は神事に就たる清祓なればなるべし此を正史に稽ふるに大同三年十月乙亥幸ニ近江國大津一修禊以ニ御ニ大嘗一也嵯峨天皇御紀に弘仁元年十月甲午禊ニ於松崎川一緣大嘗會事也淳和天皇御紀に弘仁十四年十月甲辰幸ニ佐比川一修ニ禊事一也仁明天皇御紀に十月癸未朔幸ニ葛野川一爲ニ大嘗會一將レ修ニ禊事一行ニ幸賀茂川一文德天皇實錄に仁壽元年十月甲子帝幸ニ鴨川大修ニ禊事一爲ニ大嘗祭一豫除ニ邪穢一也清和天皇實錄に貞觀元年十月廿一日癸卯爲下來月將レ奉ニ大嘗會一行上幸ニ鴨水一修ニ禊事一例也陽成天皇實錄に元慶元年十月廿九日丙申天皇備ニ法駕一幸ニ鴨水一修ニ禊事一爲下十一月將レ行ニ大嘗會一光孝天皇實錄に仁和元年冬十月廿八日乙卯行ニ幸鴨河一大修ニ禊事一天皇踐祚之年十一月修ニ大嘗會祭一先ニ一月一修ニ法駕一陸ニ旗鼓一行臨レ水盥被之例也是日蹕ニ京城萬民會集縱觀一云々と見えたり 然れば大祀の散齋一月と有る事には有れども十月より既に是後て御禊事を行はせ給ふなり然ればば上に引る日本紀略に於ニ有例一大嘗會散齋三月也と有る如く其散齋には今の御定にも一月には有れども九月十月の二月共に其散齋なるが如し 儀式に九月中旬任ニ御禊裝束司(モモドチ)一長官一人次官一人判官二人主典二人即可レ給ニ百度一之宣旨下ニ宮内省一云々修レ解申ニ大臣一次大

臣仰ニ神祇官及陰陽寮一卜ニ定御禊地幷日時一奏レ之訖長官以下率ニ陰陽寮一就ニ所レ占方河頭一擇ニ廣邈地一而點定次喚ニ文武諸司一勘下申可ニ陪從一之人數幷裝束雜物上とあり江次第に九月中旬大臣定ニ裝束司一長官一人中納言次官一人中辨判官二人史二人內記一人主典二人內藏屬勘解由主典各一人云々と見えたり當時其員數の加はれるなんめり一條公御說に九月中旬に大臣陣に著て裝束司の除目を申行ひ陰陽寮に仰せて御禊の日時を勘申さしむ裝束司と云は御禊に就て兼日の義點地等の事を奉行す長官一人中納言を用ふ次官一人中辨を定む云々と有り〔又同御說に御禊の地上古は定れる事無し平城天皇は葛野河にして御禊有り嵯峨帝は松か崎に行幸有り文德天皇は鴨川にして御禊有り其後ニ條三條等の末を用ひらる近代は大略三條の末を點せらる陰陽寮吉方を勘申す者なり」と宣へり宮主秘事口傳ニ河原御禊條に文保二年十月廿七日甲寅天晴今日御禊行幸也自ニ官廳一出ニ御宮城東大路一南行自ニ二條大路一東行自ニ京極大路一南行自ニ三條一東行折レ北至ニ頓宮ニ三條以北姉小路以南未刻出御と有る文保は花園天皇の御世號なるか其頃已に若るを以て大略三條の末を點ぜらるとは宣へる者ならむかし〕同式十月上旬云々の下に次任ニ前後次第司一御前長官一人次官一人判官二人主典二人御後長官一人次官一人判官二人主典二人と有り江次第には九月中旬大臣定ニ裝束司一云々に次て次第司御前長官一人納言若參議次官一人式部少輔判官二人式部中務丞主典二人式部中務錄御後長官一人參議次官一人兵部少輔判官二人兵部民部丞主典二人兵部民部錄奏聞下ニ一省一也と見えたり御前次官に式部少輔を任（メサ）るゝ事は職員令に依に禮儀版位の事を掌る爲なり義解に版位謂朝賀及祭禮定群臣幷百官列位之版也と有か如し儀に次第司會ニ集宮城門外一檢校行立レ標と有る是なり又御前判官以下に中務を任るゝは令に贊ニ相禮儀一と有る如く式部に加はりて禮節威儀を助導くなり御後次官に兵部少輔を任す事は兵士兵器儀仗の事を令掌給へる者なり又民部は道橋以下の事を掌るを以て判官主典たるなり一條公御說に次第司と云は行幸に就て諸司百官悉く供奉するに依て御前の長官次官判官主典御後の長官次官判官主典の職を定む御前の長官一人は納言參議の中を用ゐ御後の長官には參議の人を用ふ此は御輿の前陣後陣の行列を奉行するに依て次第司とは名附るなり次官たる人兼日に行列の圖を奏す此をば鹵簿の圖と云ふ」と宣はせたる此にて能通えたり〔裝束司次第司は齋宮式にも凡齋內親王三年齋終四月上旬任ニ裝束司一云々と見え又凡齋內親王臨行預定ニ監送使ニ云々と見えたる此を三代實錄に前監送次第司後監送次第司と有て其職掌鹵簿に替る事無きなり光孝天皇實錄に仁和元年冬十月廿一日己酉差ニ定大嘗會御禊陪從親王以下五位以上八十四人一令所司給ニ朝服一と見ゆ〕又儀式に次に次第司長官以下率ニ京職官人及國郡司一檢　察道

裲并禊處一次諸衛府青摺衣并左右馬寮騎士居飼等裝束及左右衛門部數文武官留守等事申二大臣一行レ之云々と有る此次條は裝束司の預る所也江次第點地條に辰一點裝束司主典史生官掌等率二諸司等一臨二川原一云々午尅長官次官到二着各官一乘車一先點二地形一次着二幄座一次山城國進下讀二風土一者二人解文上主典以二解文一覽二長官一覽畢仰下可レ下二次第司一之由上返給云々次召二繪師一人一令レ畫二地樣圖一其端以二判官史一令レ書付村邑號一次主典令レ覽二長官一覽畢長官付二勅使一(中將少將) 此間召二陰陽寮一令レ勘二地方一次召二左京職官人一令レ申二京條丈尺一然後令レ勘 中件勘文一相 副村邑名文一奉之云々と見ゆ 一條公御說に十月上旬に陪從の五位以上八十二人御前三十六人の歷名留守の參議弁に辨各一人を定めて裝束司に下すなり裝束司吉日を撰みて官の東廳に着て次第の事共を行ふ近衛の少將を勅使と定めて其所職の雚河原に行向ふ長官次官以下各幄の座に着て事を行ふ河原の 地を點して南北四十五丈東西四十丈に大綱を組き札を建る事有り此より國司檢非違使等に仰せて汚穢不淨を禁しめ牛馬の闌入を令止む其後幄處分と云事有り諸司の着べき輕幄等を打る也 と見えたり但幄處分は儀式に先レ禊一日次官以下主典以上向二禊處一供張二幄幕一と有る是なり(此は儀式及江次第を折中し給へる御說なり右の河原の地を點して云々は江次第に次木工寮少屬以二大綱一點二地方丈一立レ札南北四十五丈東西四十丈次召二仰檢非違使并國司等一今日以後點二地內外一制二止汚穢物并牛馬闌入一事又幄幔處分之日饗可レ儲由可仰下と見えたる是なり) 又儀式に其日平旦神祇官奉二路次神幣一云々と見ゆ 其平旦は江次第に寅二刻打二裝束鼓一平旦奉二幣路次諸社一と有が如し大嘗會式には 凡行幸爲レ禊路次邊神奉二幣帛一座別五色薄絁各一尺綿(大五尺小三尺) 絲一絇綿一屯木綿二兩麻五兩裹薦夫(此二種進二)帶多少一 と見えたり (臨時祭式行幸時祭堺に見えたる路次神祭の幣物等此に同じ但其下に若不レ經レ宿不レ祭と有れども此御禊の行幸は殊に重き神事にて渡らせ給ふか故に宿を經る並に祭らせ給ふなり齋內親王の河原御禊にも其邊の神に幣を奉らせ給ふ事此に同じ) 其當日の次第は儀式に時剋乘輿初出警蹕如レ常云々乘輿御二禊所一之後皇太子步行參詣時剋神祇官奏二禊詞一訖還二御供膳所一云々訖車駕還レ宮と見えたり江次第大嘗會御禊條に寅一剋打二裝束鼓一云々被レ仰下前後次第司可二帶劍一由上云々打二進鼓一天皇御二紫宸殿一(出二女御代一被レ參之由之後出御) 內侍一人候二劍璽一云々天皇乘御次着二鳳輦一云々次乘輿到二宮門一(五位以上騎馬六位以下到二待賢門一乘之) 打二行鼓一次鹵簿次第行列 至二京極一京職留下レ馬山城率二子弟一奉レ迎比レ至二頓宮一節下大臣就レ標諸司列立裝束長官以下迎 謁於西門外(南邊東上北面) 公卿着二休

息幕一間待レ駕御輿留二西門外一祭主進二御麻一一撫一吻返給入レ門次第司以下就レ標公卿列立御二御膳幄一經二御禊幄北一寄二御輿於東面中央間一若時剋至者先御二御禊幄一節下大臣令レ撃二鎮陣鉦一大臣前後長官等入レ門各着レ幄主上駕二腰輿一幸二御禊幄一入レ自二西方一公卿列立公卿幄東頭東面北上大將不レ著レ靴進候主上自二百子帳後方一入御近衛次將取二璽劔一開二百子帳後一置二之大床子一近仗退御輿近候二幄西邊一執柄候二東面北第一間一南面中臣女候二南第一間中隔屏風西一次公卿就二幄南邊地上座一裝束次第長官同著二此座一裝束次官以下著二同後座一次供二御手水一云々主上御二百子帳前平敷座一次宮主參入候二幄東南砌一上膝突二神祇官以二折敷並祓物等一置二幄東庭石疊上一薦上二祭主一獻二御麻一經二幄南幔北邊一候二幄東面南第一間一中臣女進取レ之傳獻御吻後返二給中臣女一中臣女返二祭主一神祇官人取二御贖物一二本進レ之如二祭主路一御巫取レ之又傳進五位藏人獻二執柄御被物一重衡次置二公卿以下被物一神祇官人置レ之安二於結筥一次宮主奏二解除詞一了退出大炊官人散二五穀一神祇官引二大麻一於公卿座一御巫撤二御前御被物一次撤二關白御被物一次又駕二腰輿一自此始稱二警蹕一大將進候如レ初還二御御膳幄一公卿以下着レ幄采女供御膳一陪膳一人役供六人入レ自二御膳幄東南角一供レ之內膳造酒傳供云々次寄二御輿一還二御警蹕雅樂寮奏二立樂至二建禮門一奉二御麻一還宮儀如レ恒と有にて其大儀は所知たり右に次て皇后同輿儀有り此の天皇御二紫宸殿一の下なる細書にも開二女御代被レ參出一之後出御と有は注に幼主の時は中宮同輿なり又女御代供奉の例有」と見えたる如く其時の趣に依る事なり偖又儀式に凡十月下旬天皇向二卜食川一祓禊晚日於二朱雀門前一大祓其儀同二二季一と有は御禊畢て直に引續きても日を易ても行るゝにや陽成天皇實錄に元慶元年十月廿九日御禊にて翌卅日丁酉所司大二祓於朱雀門前一緣レ欲レ供二奉大嘗會一也と有は所司の中より卜定にて小齋大齋に仕奉るに依てなり然るに清和天皇實錄に貞觀元年十月五日丁酉是日夜神祇官於二羅城門前一修二祭事一爲二大嘗會祭一故也と有は祓とも聞えねども外に思合す可き事無れば此に引出たる也祓か何か猶能考ふ可き事なり

右の御禊の狀など大體六月十二月の大祓儀御贖儀に同じ御麻とは木に幣を附たるなり此を以て御體を撫させ給ひ又御息を吹て其御穢を負はせ給ふ義なり御贖物は下に御被物と見えたるに同じく罪咎又汚穢を託(ウツシ)て流し棄させ給ふ御撫物なり皇后同輿儀に御撫物筥と見えたる是也此事次に引る宮主秘事口傳抄に詳なり猶此御贖物の事大祓詞講義に注るが如し散二五穀一は散米の事なり皇后同輿儀に大炊寮散二五穀一并米一と有れば米には限らざるなる可し其下に五穀類流二之水一或記云擲二沙石一と見えたり大炊寮の散米を掌る事は元來多米連の大炊寮に仕奉れりし時の餘風なり第二十三條に引る本系帳に謂二天皇御贖之攻一と有は大祓の御贖物に依れるなる可し猶一條大閤御説に當日は大内より河原へ行幸なる云々御輿は原葦也河原頓宮に至ては先御膳の幄に御輿を寄せて下御ならせ給ふ此より腰輿に駕れて御禊の幄に移らせ給主上は百子帳の内の大床子に着御し給ふ百子帳と云は

（桯榔を以て頂を覆ひて四方に幔を掛て前後を開きて出入する状に餝りたり其中に毯代を敷て大床子を立たり此床子に着せ給ふ也と宣へる此にて明らけし）宮主秘事口傳抄（文保二年十月廿七日御禊條）に今日御禊行幸也未時出御着二御頓宮一之時於二西幔門一祭主蔭直朝臣獻二御麻一殿下以二御平一御供奉云々先幸二御膳幄一大殿祭少副忌部平典權少副大中臣冬親勤レ之次幸二御禊幄一左大臣（實泰節下）以下諸卿着二被座一（御被幄南東面北上）殿下御二帳北邊一次御巫三人戸座童一人供二御贖物一（一前御手巾一前御輿形一前人形解縄一前）散米付二命婦一進レ之（於二御禊幄東第一間一進レ之也）祭主並宮主代兼高宿禰（宮主祭貨幼少之間所二相語一也）剋立御禊幄巽角邊二宮主代授二大麻於祭主一祭主傳二節折命婦一獻レ之返給事同以宮主着座（新撰向）勤二御禊一其後經二公卿上方一于二御所東面一於二北面一進二殿下御麻一（藏人右少弁藤房獻レ之）返給之後引二大臣以下一（大臣跪引之納言参議導居引之）大麻以前先神祇官八居二被物於公卿前一親忠朝臣齋部平典冬親等役レ之祓詞之後大炊寮可二散米一也と見えたる與書に十一月十一日祭主蔭直朝臣會談云去月廿七日御禊條々有二違例一云々御麻者供二御贖物一之後獻レ之處先進二御麻一未備進御贖物一寛治文應之例之由關白殿御張行云々尤不審也と有れども大凡同じければ右に引る江次第に合せて心得と成る事多し此に依に河原の頓宮にても大殿祭の事有るなり然るを儀式江次第等に見えざるは其職掌の人の素より定りて行ふ常例なるが故に取立て載られざるにこそ有れ此抄に傳はれる甚々愛たき事なりかし（但江次第にては寅二點より催さるゝ由なるを此抄に未時と有は甚く違へるに似たれども彼は支度の初より云ひ此は其行幸の時剋を以て記せるなれば同じ事なり右の節下と云ふ節は旗の名なり俗に大頭と號く其節の下に供奉するに依て節下の大将と云ふなり）

齋事は式に凡散齋一月（十一月自レ朔盡レ晦）致齋三日（自レ丑至レ卯）其齋月者預告二諸司一及下二符畿内一不レ得レ預二佛齋清食一其言語者死稱レ直病稱レ息哭稱二鹽垂一打稱レ撫血稱レ汗宍稱レ菌墓稱レ壤と有り卷首に引る神祇令に凡散齋之内諸司理レ事如レ舊と見え致齋唯祭事得レ行と有が如し圓大暦（寛喜二年三月十日明法勘文）に散齋荒忌致齋眞忌也と見えたる如く同じ齋にて在ながら其輕重の差有なり（又雲客諸役抄にも大忌者荒忌也小忌者眞忌也と見えたれば散齋は荒忌とも大忌とも云べく致齋は眞忌とも小忌とも云ふべきなり宮主秘事口傳抄御禊御卜奏次第に荒齋（アラヰミ）吉哉眞齋（マヰミ）吉哉の語有り此の荒忌眞忌の義なり凡て御神事に當て齋の中に最重なるを小忌と云ひ大凡に齋するを大忌と云ふ猶昔は諸司百官以下に當りて神事に預り奉仕る人を小忌と云ひ其外は皆大忌なりき今は小忌の公卿何人大忌の公卿何人と被定と聞え侍り）其預告二諸司一下二符畿内一とは儀式十月條に次依二神祇官解一太政官下二符左右京五畿内諸國司一告二知散齋致齋及諸司可レ忌之事一云々と有て下に太政官符中務式部治部民部兵部刑部大藏宮內彈正左右京春宮坊勘解由左右近衛左右衛門左右兵衛左右馬兵庫等臺

省職坊使府寮五畿內諸國司應爲大嘗會齋事散齋一月十一月致齋三日同月丑寅卯可忌事六條弔喪問疾判刑殺決罰罪人作音樂事調習供神之樂不在此限言語事死稱奈保留病稱夜須美哭稱垂鹽血稱赤汗宍稱菌人姓稱菌人預喪產並觸雜畜死產事其忌卅日食宍限月產并畜死七日產三日滿限而齋清乃參但不得預祭事預穢惡事祓詞所云天罪國罪之類皆神之所穢所惡也行佛法事擧哀並改葬事有得神祇官解偁爲供奉大嘗會自來十一月一日迄卅日百官五畿內諸國應忌依例申送忌諸司國承知依件行之と見えたる是なり右の言語事と有る一條は謂ゆる外七言なり猶內七言と云も有り此は佛法に係りたる事なるが其とは云ず行佛法事と云ふ條を被立たり其は併に齋く耳ならず其法に依る事共を凡て忌む故に然仰給へるにて忌詞を用ながら行ふよりは更に重く戒め給へる者也尚上に神祇令を引て其下に注せるを見る可し又其儀式に預穢惡事と有る下の細書に祓詞所云天罪國罪之類皆神之所穢所惡也と見えたる祓詞は謂ゆる大祓の事なり又儀式に載たる器物を調進る諸國に被下る太政官符に應造新器云々應潔祓穢惡畔放溝埋樋放頻蒔串刺生剝逆剝屎戶以上天罪生膚斷死膚斷白人故求彌犯己母罪犯己子罪犯母與子罪犯子與母罪犯畜罪昆蟲之災畜仆爲蠱罪以上國罪右者有犯件等罪者依例祓淨但可輸物數悉載別紙便副使身以前得神祇官解偁爲供奉大嘗會應須雜物並潔祓具如上件者云々と有る是也此を犯す者には大上中下の差有て祓を科せ給ふ御定也延暦廿年五月太政官符に大祓料物云々右闕怠大嘗祭事又同齋月中弔喪問病判署刑殺文書決罰食宍預穢惡之事云々宜科大祓所輸雜物具如前件官人有犯解見任云々と見えたり大祓詞講義に右の全文を擧たり必見合す可し

齋郡拔穗使の事は凡拔穗田者國別六段用百姓所營田其代以正稅給之八月上旬申官差宮主一人卜部三人發遣兩國各二人其一人號稻實卜部一人號禰宜卜部各於齋郡大祓馬一疋太刀一口弓一枝鹿皮一張庸布一段木綿一斤堅魚鰒各四斤海藻滑海藻（アラメ）各四斤米酒各四斗鹽四升當郡備又鄉別刀子一柄鍬一口麻一斤稻一束訖卜定田及齋場雜色人等歌人歌女不卜造酒兒一人謂佐可都古以當郡大少領女未嫁卜食者充之御酒波一人篩粉一人共作二人多明酒波一人以上並女稻實公一人燒灰一人採薪四人歌人廿人歌女廿人訖鎭齋場其幣五色薄絁各五尺木綿麻各三斤倭文五尺鍬二口斧小斧鎌各二柄卜部二人明衣新絁二疋調布二端綿八屯造酒兒酒波等調布三端一丈四尺綿二屯半縫絲兩一分二銖並用大藏物但鎭祭所須酒肴等當國供之所作八神殿一宇長四丈廣一丈稻實齋屋一宇長二丈廣一丈使衛屋一宇長四丈廣一丈二尺稻實公等屋一宇造酒兒等屋一宇各長二丈廣一丈二尺並以黑木及草構葺壁蔀以草堀井一處蓋以片屋院內方十六丈以柴爲籬編木爲扉即於齋院祭神八座御歳神高御魂神庭高日神大御食神大宮女神事代主神阿須波神波比伎神其幣座別絹四尺五色薄絁各一尺倭文一尺木綿一兩絲一絇綿一屯布一段鍬

一口宿ニ東米酒各四升鰒堅魚海藻各二斤腊鹽各二升並用二國物一凡齋郡之齋院祭神八前卜部二人（兩國各給二明衣并被一）と見えたり此八月上旬申レ官とは神祇官より太政官に申也其宮主卜部を發遣せらるゝ事を儀式には神祇官卜二定拔穗使一申レ官發遣（稻實卜部一人 禰宜卜部一人）と見えたるが如し第十七條大嘗宮山材を採る所の儀式に稻實卜部宮主と見えたり第卅二條の行立次第に宮主卜部一人と有も即此稻實卜部の事なり（宮主卜部者日本紀抄に大嘗會國郡卜定[illegible]之公事也當[illegible]官氏人可レ奉二[illegible]一事也自二行事所一[illegible]紀主基[illegible]使左右相分行レ合レ參嘗也云々郡内宮主[illegible]依レ爲二國家之重[illegible]一勤二[illegible]大使一也氏[illegible]勤二主基大使一第二一官人[illegible]勤二悠紀小使一第三[illegible]勤二主基小使一也と見ゆ其祭祀主基共に大使は稻實卜部小使は禰宜卜部なる也式に齋郡之齋院祭神八前卜部二人と有は其大使小使共に[illegible]其實[illegible]に[illegible]り居て拔穗時迄其八前の神等に仕へ[illegible]て在る事也）到レ國令於二齋郡一大祓は儀式に到レ國卒二國司一於二齋郡一大祓（齋郡司并百姓亦預）レ焉と見えたれば國司及郡の大領少領以下の人々より始て齋郡の百姓に至る迄も此に預る事なり（在京齋場の[illegible]同祓又道[illegible]使の祖伊[illegible]間波三國に至りて大祓[illegible]るにた凡同じ就なる可し此をも役なら大祓と云に[illegible]三代[illegible]に[illegible]られたる[illegible]上中下の[illegible]の時にはず[illegible]朝廷にて當世にも[illegible]時にも行はさせ給ふ天下の大祓に進らへて令[illegible]なる[illegible]也[illegible]九月條に是月[illegible]拔穗使在レ國卒二國郡司[illegible]部人[illegible]夫[illegible]三百人一而解除と有れば其齋部の内にて便理なる[illegible]に就て此大祓も[illegible]行るなる可し）次に卜二定田及齋場雜色人等一と有る田及齋場は儀式に大使與二國司一共卜二定稻實殿地一即以二木綿繋賢木一立二地四角一次卜二定御田六段一（田皆上大田[illegible]稻[illegible]稻實子稻一）即使及國司向二御田一以二木綿繋賢木一立二田四角一令二夫四人守一之と見えたる是なり此卜定有て御田を大田と稱ひ稻を撰子(エラミ)稻(イネ)と稱ひ其齋場(ユニハ)を稻實殿と云て共に其地に標結(シメユ)ひて木綿繋たる賢木を立る事にて悠紀主基二國共に異無し此を以見れば此所々屋の中にて稻實齋屋其正殿なる事此下にも見え又在京齋場の下にも見えて其重き事發知たり（大田とは大御田と云事なる可し然るは此時迄は百姓の何の事も無く常の如く佃れるも已に卜定有ては此大嘗會料[illegible]大御田と成れる由なり右に引る式文の細書に用二百姓所レ營田一[illegible]其[illegible]二正税一給レ之と有を以知べし其撰子稻とは實を撰て奉れる由に候れり）其雜色人等は中臣壽詞に物部乃人等云々と有る是なり儀式に次卜二定物部人十五人一（男六人女九人）造酒童女一人（以二當郡大少領女未レ嫁一卜二食先之神事一[illegible]可部古）稻實公一人大酒波一人大多米酒波一人粉走二人相作四人灰燒一人採薪四人歌人廿人歌女廿人（歌人歌女並不レ卜）と見えたり此採薪以上は謂ゆる物部人十五人と見え又其下に載る太政官符にも然見えたる其なるを右の外に歌人歌女をも合せて式には雜色人等とは記されたり（右の造酒童女は式に造酒兒と作(カヽこ)れ大酒波を式には御酒波と作れ大多米酒波を式には多明酒波と有り又粉走をば式には篩粉(コかこ)に作(ツク)り相作を式に其作に作れたり但式には篩粉一人其作二人なるを數に物部人等の總數十三人なるは其にて足れる故なる可し但太政官符には女は造酒童女大酒波女大多米酒波女粉走女相作女と記されたり猶此等の人々の事委しくは本文にて說べし）乾鎮二齋場一とは儀式に次鎮二稻實殿地一其祈云々（以上用二國物一）鎮畢使執二齋鉏鎌一苅二除

草木始掘柱穴と有る是にて先に卜定の所に以木綿繋賢木立地四角と有る其所の地を鎭むる也（但此に使執齋鉏鍬云々と有る使は抜穂使にて卜部氏の人なれば供奉無き事なり元は齋部氏の共に其國に行向ひて此等の事は行へりしなる可し古語拾遺に凡奉造神殿者皆須依神代之職而造伊勢宮及大嘗悠紀主基宮皆不預齋部所遺四也と見えたれば既くより其古義に違ひたりと見ゆ備此鎭地祭の事は壽義大殿祭條及所遷奉太神宮詞の下に委しく注せれば再此に云す）所作八神殿一宇稲實齋屋一宇使宿屋一宇稲實公等屋一宇造酒兒等屋一宇云々の事は儀式の右文に續て其院方十六丈以柴爲垣（高四尺以□結之四箇）門在東方編葦苫爲扉（高八尺廣一丈）院四角挿賢木其内搆作雜殿入門二許丈縦三間使政所屋一宇（長二丈四尺廣一丈二尺○式に使宿屋と有る是也）其北横五間抜穂使宿屋一宇（南戸長二丈八尺廣一丈二尺東三間爲稲實卜部宿所西二間爲禰宜卜部宿所○式に謂ゆる稲實齋屋なり）其西横五間屋一宇（南戸長廣同上東三間爲物部男宿所西二間爲稲實公宿所○式に云く稲實公等屋）其西横三間造酒童女宿屋一宇（南戸長二丈四尺廣一丈二尺○式に云く造酒童女宿屋）其南少西縦八間八神殿（東戸長二丈四尺廣七尺八寸柱高八尺與使政所屋相對○以上五字式文と同じ）其南少東高萱御倉一宇（北戸方一丈）其東横三間稲實輕幄一宇（北戸長二丈四尺廣一丈二尺）其東横三間物部女等宿屋一宇（北戸長廣同上○此三字式文には載られず）其制也八神殿者爲片廂萱以青草内安竹棚（西高尺）其上敷席爲神座葺廻以葦開東戸懸葦簾高萱御倉者萱葺以青草開北戸以葦爲扉内作竹棚其上敷薦以安御稲稲實殿者萱葺以青草戸亦用草使宿屋者萱以青草葺之以葦開南戸使政所屋者萱葺同宿屋開東戸造酒童女宿屋者萱葺以青草開南戸以葦爲扉稲實公物部男宿屋萱葺以青草開南戸以葦爲扉物部女宿屋萱葺以青草開北戸以葦爲扉並以黒木構作倒萱と有り此にて院内屋宇の状甚能所知たり（式文と其趣同じ但屋宇の大小少の違は有れども其は次第に便理の宜しく成て式文の如く成れるなる可し但式に掘井一處蓋以片屋と有は此儀式に漏たるは脱たるには有べからず其大略のみぞ記されたる）於院内祭神八座云々は右に謂ゆる八神殿也又神座殿とも云事在京齋場の條に見えたるが如し此祭神八座を下に御膳八神と有り然るは何れも御膳の事に預りて祭られ給ふ神に坐せば也此は大膳式上に見えたる彼に坐御膳神八座云々御膳神（ミカシハデノカミ）二月十一月上酉日祭之と有と同神なる可し神名式には御食津神社と有り御食處の神と申す意なれば也職員令大膳職の下に率膳部以供其事と有れば大御食を調ふる處なるが故に常に其所に齋奉る也猶又儀式九月條に次使率物部人始入齋殿次祭八神と有る細書にも御歳高御魂庭高日御食神大宮賣事代主阿須波波比岐と見えて此に同じ其幣物は九月の抜穂の時に當りて初て右の八神を祭る時の用なる由儀式に見えたるが如

し然れは八月上旬に拔穗使到り齋郡に於て先大祓し次に御田を卜定め次に齋場の地を卜定めて此を標榜て其次に物部人等を卜定めて其より九月中旬に至る迄に其齋場を造りて祭始るなり倩右の如く此神は大嘗宮に坐神なるか其始は御食津神一柱に坐けむを次々に從神を合せて八柱に奉りしなる可し此に依て神名式に出て官より祭らせ給ふ所は一柱に坐て大嘗宮にて祭るは八神に坐り同しく公より祭らせ給ふと雖も然る證を立かたけれは此御食津神の事は二十二段に高橋氏文を引て云り右の御歳神は新年祭詞に御年皇神等能前爾白久皇神等能依左志奉牟奥津御年乎手肱爾水沫畫垂向股爾泥畫寄氐取作牟奥津御年乎八束穗能伊加志穗爾皇神等能依志奉者云々と有る如く稻穀を司坐す神に坐故に此拔穗の事に就て殊に重く祭らせ給ふ也大倭神社註進状に御歳神者素戔嗚神也是以八束[illegible]有をも引たり此神の事祈年祭條に委しく云又出雲國造神賀詞條にも大地主神の事を註て四に云たには抜き見へし高御魂神は神代紀に高皇産靈尊因勅曰吾則起ﾆ樹天津神籬及天津磐境ﾆ當ﾆ爲吾孫奉ﾚ齋矣汝天兒屋命太玉命宜ﾚ持ﾆ天津神籬ﾆ降ﾆ於葦原中國ﾆ亦爲ﾆ吾孫ﾆ奉ﾚ齋焉乃使ﾆ二神陪ﾆ從天忍穗耳尊ﾆ以降之と有る此は新年祭及六月十二月月次祭新嘗祭等の四箇の大祭を事始て授給へるなる事新年祭講義に注せるが如くなれは此由に依て殊祭給へるにて唯に産靈の御靈と坐すか故耳には非す神魂神をも共に祭らせ給ふ可きに高御魂神一柱を祭らせ給ひては祈年月次等詞に高天原爾神留坐皇睦神漏伎命神漏美命以天社國社登稱辭竟奉云々皇吾睦神漏伎命神漏彌命以[illegible]宇豆能幣帛乎稱辭竟奉と二柱を並申せるに合さるか如くなれとも此二柱神の御事には何事も一柱にて傳たるも多く又祭るにも何れか一柱の御名を舉なから其祭る意味は二柱なるを以知へし但神祇官に坐なとは二柱並坐る中にも新年月次等祭にも高御魂神別祠ﾆ爲一座ﾆと四時祭式に見えて此上無く御會釋の替れる者なり庭高日神は古事記に大年神娶ﾆ天知迦流美豆比賣ﾆ生子奥津日子神次奥津比賣命亦名大戸比賣神此者諸人以拜竈神者也云々次庭津日神次庭高津日神と有る事成が此二柱は諦しく竈神の亦名にて別神には非ㇾ也文徳天皇實錄天安元年四月の下に内膳司忌火庭火神並從五位下と有る忌火神は清和天皇實錄貞觀元年正月の條に齋火武主比神と有に並坐れは竈神に坐事著明し同年同月内膳司從五位下庭火皇神從五位上と見えたれは崇めて庭火皇神とも申す事也此を中右記に内膳司御竈神三所一所平野件美御祭奉仕神也一所庭火皇神是等尋常御飯奉仕神也一所忌火是則十一月新嘗六月神今食祭奉仕神也と見え百練抄仁治三年十月九日戊午今夜内膳御竈神渡ﾆ御新造内膳ﾆと有れは庭津日神即庭火皇神にて其を庭高津日神とも申して御竈神に坐事決なき者也然れは翁の古史成文に奥津日子神奥津比賣命此二柱神謂庭津日神亦云ﾆ庭高津日神ﾆ此者諸人之拜祭竈神也と有は古事記の古書に依られたる證にもなり有けれ[illegible]中右記の文は増鏡內卷にも載られたるも此書の事は講義六卷中に久度神の下に說たるか如し庭火神と申すは竈を守る所なるが故に其竈の火神と云事なり庭高津日神と申すは其を尊み高くて高火とは云なり緒下なる阿須波神波比伎神の下に云へるを見べしれは造酒司にても竈神と祭らせ給へるなり御食神は神祇官西院坐神八座の中なる大御膳都神ﾆ同じ事にて豐宇

氣毘賣神に坐り神代紀に保食神の御身より稻穀の成れる時に天照大神喜之曰是物者則顯見蒼生可ニ食而活ヒ之と詔賜ひて其稻種を始て天狹田及長田に殖給ひ此大嘗聞食し初させ給へば此大御政に就ては甚も甚も止事無き大神に坐る祈年祭大忌祭大殿祭詞等の講義に說き又豐受宮詞の下に註るが如し又天照大神又勅曰以ニ吾高天原所レ御齋庭之穗ニ亦當レ御ニ於吾兒ニと詔給ひて稻穀を授け給へるより此瑞穗國の嘉號さへ出來る事は已に先師等の說れたるが如く成が右の齋庭とは朝大御饌夕大御饌を調ぶる齋處の名にて御食津神とは御食處に坐て其を司給ふ神と申す意也然れば悠紀主基の國の齋場ユニハにても必重みし祭らせ給ふ事所由有事也かし　釋紀及明文抄に所見たる大倭本記の傳に一鏡及子爵者天皇御食津神朝夕之食向夜護日護齋奉大神云々と有ば天皇の御食處に令坐て朝夕の大御膳に向はせ給ふ事に就て齋奉らせ給ふ大神と申事なり神名式に大膳職坐神三座の中に御食津神社有を以知べし此事太神宮詞三節祭條に委しく說たりき　大宮賣神は大殿祭詞別に皇御孫命乃同殿能裏爾塞坐氏參入罷出人能選比所知志神等能伊須呂許比阿禮比坐乎言直志和志坐氏皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳供奉流比禮懸伴緖襁懸伴緖乎手躓足躓不レ令レ爲氏親王諸王諸臣百官人等乎已乖乖不令在邪意穢心無久宮進米爾進宮勤爾勤之米氏咎過在乎婆見直志聞直坐氏平久夏氣安久夏氣令仕奉坐爾依氏大宮賣命止御名乎稱辭竟奉と有が御巧坐に依て祭らせ給ふなり　其詞の講義に註せれば再此に云ず此神御巫祭神八座の中に坐たる高御魂神と此神とを殊に擇られて祈年月次祭等には定れる幣帛の外に各馬一疋を被加る由四時祭式に見えたり又神名式に造酒司坐神六座の中にも大宮賣神四座並大月次新嘗と有り此神の酒を奉給ふ事も祝詞講義に已に云り然れども造酒司式を考ふに祭神九座と有り其中に二座は酒殿神なる事次に云り次に四座は竈神なり次に三座は從五位上大邑刀自從五位下小邑刀自次邑刀自と有は右の大宮賣神に當るを竈神四神を一座として算へたるにや　事代主神は御酒と御贄の事に依て祭らせ給ふ成可し御酒に預給ふ由は此神の亦名を大山咋神とも申せるが松尾社傳に松埼の日尾の榾を槽に作り山田の米を炊きて始て酒を釀らせ給ふに依て酒彌豆男神と御名に負坐し御祖市寸島姬命を酒彌豆女神と申して共に神名式造酒司坐神六座の中なる酒殿神社二座と有る是なり又御贄の事は此神の鳥漁遊を物爲給へりし事は記紀共に見えたる如く又志摩國風土記に事代主命行ニ列于伊勢島ニ而得レ鱸而祭ニ天神地祇ニ因其地曰ニ鱸藪ニなど有を以心得べし　先には古事記なる大國主神の御言に僕子等百八十神者八重事代主神爲ニ神之御尾前ニ而仕奉者違神者非也と申給へる其に依る事かとも思えしかども凡て此齋場の事は然る迂遠き事にては無く其時に當て用有る神を被祭るなれば御酒と御贄の事と見ば日易かる可し偖其大山咋神の事は神賀詞講義事代主命の下に云り若て此の事代主神は神祇官にて御巫祭神八座の中なる辭代主神とは別神なる可し　阿須波神波比岐神は此物部の人等の中に灰燒採薪カマギコリとて有るを以考るに阿須波神は大柴神と

申す義波比岐神は灰木神と申す事にて竈に燒く柴及木の事を掌給ふ御神にて即竈神の屬なる事座摩巫祭神の祈年祭詞の下に委しく考定めて註るが如し造酒司式に見えたる竈神四座は此二柱に上なる庭高日神を合せ祀れるにや有む然れば餘の一柱は大宮賣神に合せ奉れるなる可し 記傳に阿須波は足場波比岐は這入君の意に解れたるは當らず阿に大の義有に第十七大嘗宮條に引る儀式に阿都加草と云るは大東草と云るが如く又出雲風土記に阿陀加夜社と有は大高屋社なるに同じく柴は諸の事なり灰木は予が本生の淡路國などにては竈處に燒く木を常に婆比木(バヒギ)と云るは其古言の遺れるにてぞ有べき

拔穗の事は式に凡拔穗者卜部率二國郡司以下及雜色人等一臨レ田拔レ之先造酒兒次稻實公次御酒波次雜色人次庶民共拔訖於二齋院一乾收先割二取初拔四束一四把為レ束擬二供御飯一自餘皆擬二黑白二酒一摠盛以レ籠々別一束以二一籠一為二一荷一々別著レ足蓋以二編茅一插二賢木一著二木綿一訖令二駈使丁荷一每二十荷一子弟一人領レ之卜部及國郡司率二雜色人以下一前後檢校運送其行列者御飯稻在レ前自餘物次レ之稻實公著二木綿鬘一引道九月下句到レ京所二卜定一齋場院之外預作二假屋一暫收二御稻一と有其拔穗者卜部云々は儀式九月中旬任二御禊裝束司一條の次に是月拔穗使在レ國率二國郡司物部人擔夫三百人一就二水濱一而解除訖至二御田一拔二取御稻一造酒童女先レ之稻實公次レ之酒波次レ之物部男女次レ之擔夫次レ之摠拔二得御稻若干束一以二四把一為レ束乾レ之納二齋院一就レ中以二先拔四束一別納二高萱御倉一會日稻實公所レ負稻也自餘為二黑白二酒料一次使率二物部人一始入二齋殿一次祭二八神一其料云々と見えたる其八神の事及其料の事は前條に已に註り始に水濱に就て解除し其が御田に至て御稻を拔取其中が先に拔たる四束は殊に高萱御倉に納て御食の料と擬し自餘の御稻は黑酒白酒の料と擬して齋院に納め其乾く間其齋場に侍ふ事也右の御稻を會日稻實公所負稻也と有を第廿七條なる行列次第に稻實公其前に立て御稻輿にて上れるなれば當日大嘗宮にて造酒童女の舂く迄に其臼屋には稻實公の負て運ぶなる可し第廿八條舂二御飯稻一と有る下見合す可し偖前條に歌人廿人歌女廿人と有は一條公御說に拔穗使は神祇官人兩國に下向して齋郡の稻の初穗を拔て神膳に供へむとす各和歌を作て此を謠ひて穗を拔事也云云風俗の和歌十首此中に「稻舂の歌有り」と宣へり此より使以下物部の人等上京の支度を物為る事なめり 偖京には九月下旬に着く程に日數を計りて參上る事なる可し中昔より悠紀は近江國主基は丹波國にて其郡郡を卜定せらるゝ事と定れる上は兩方共に其發足の定日も有べきなれども古くは遠くも近くも其國を卜定せらるゝ事なれば其支度に然る心しらひの無ては得非ぬ事なり

摠盛以レ籠云々は儀式に次以二韓櫃七合一各長二尺六寸廣一尺八寸

一尺二寸實ニ御稻十四束ニ二束合別一合爲レ荷裹レ之以レ薦居ニ筥形ニ足高一尺四寸一籠若于合數隨ニ稻多少一籠口徑各一尺深各一尺五寸合別實ニ御稻一束ニ二合爲レ荷荷別有ニ四脚一以ニ木綿賢木一插ニ籠上一其擔丁外更有著レ衆相副著ニ下敷設亦同一夫擔レ之以レ若ニ子弟一廻ニ立內及蓋等ニ訖問ニ齋場門一上レ道向レ都其行列健兒コムデイ四人各執ニ白木一左右列立後陣健兒亦同子弟四人執下著ニ木綿一賢木上後陣子弟亦同次レ之禰宜卜部當レ途而列稻實公取ニ木綿鬘ニ次レ之御稻韓櫃幷籠次レ之每ニ二十荷ニ子弟一人執ニ白木ニ領レ之長薦各七十枚簀五十枚子弟四人健兒四人次レ之造酒童女駕レ輿當レ途擔丁四人物部女九人次之書生一人次レ之郡司次レ之國司次レ之以上乘ニ私馬ニ稻實卜部次レ之下旬至ニ京齋場ニ官人幷國司持ニ麻幷鹽湯ー迎ニ南門ー灑ニ御稻幷雜物ニ訖納ニ院外權屋ニ預先作備次賜ニ明衣ー造酒童女布一端綿一屯六兩酒波女二人布一端三丈人別三丈六尺と有り御稻を實る器を儀式には韓櫃と籠との二種なれども式には總盛レ籠と有は當時已に被改たるなる可し訖問ニ齋場門ーとは在國の事竟て京の齋場に向ふが故に此に用無ればなり持ニ麻及鹽湯ー向ニ南門ー灑ニ御稻幷雜物ーは卯日儀に神祇官中臣一人率ニ神部等ー持ニ拔麻鹽湯ー灑ニ潔供神物幷雜物ーと有り又平野祭儀にて供ニ神麻ー灌ハラフニ鹽水ーと有に同しく汚穢を解除なり其南門ーと云ひ次に院外權屋と有は共に在京齋場の事にて預先作備とは第十一條に引る儀式八月條に其南縱七間納ニ拔穗御稻ー屋一宇と有る是なり其由次なる第十一條に云るを見べし有い文中に以レ若ニ是子弟ー廻ニ立內及蓋等ーの十一字如何に考ても其義通え難し強て云はゞ一夫之を擔へば國郡司の子弟の若きを以て其籠の內は更なり蓋（ノタ）等に廻立て改見る由なる可し又執ニ白木ー列立と有る白木は謂ゆる棒にて非違を禁しむる爲に執るなる可し多明米の事は式に凡悠紀主基國各令ニ卜食郡辨ニ備多明米卅斛多明酒料短帖卌枚帖卌枚薦七十枚長薦七十枚簀五十枚ニ差ニ駈使丁三百人ー輿ニ拔穗稻ー同領送と儀式に載る大政官符に多每米卅斛と有る細書に大多每黑木白木酒料と見え又物部人等に大多米酒波女有を以知べし第十一條に引る儀式構ニ造齋場雜屋ー云々の條に西門北掖有ニ大多米院ー東門院門北掖橫三間酒屋一宇南掖麴室一宇兩屋西頭縱三間大炊屋一宇云々と有は大多米院即ー構にて其門は東に向ひ內に在る所の屋は三宇なるは此大多米酒殿なり但上の拔穗の事を儀式に總拔ニ稻御稻若干束ニ就レ中以ニ先拔四束ニ云々自餘爲ニ白黑二酒料ーと有れば同じ事の二有が如くなれども彼は多ニ酒にて神供ニ黑木白木の御酒なる可く此は直會の料なる可し然るに上に小忌大忌の事に就て云る如く大とは然計りヶ忌等の嚴重ならざるに云れば此も其例の大なる可し然ればこそ卜定田の拔穗にては無く其齋郡より粟（モミ）にて奉るなりけれ序に云ふ有の短帖及帖を儀式には短疊又疊と作（カヽ）れたり禁守のことは式に凡應レ採ニ大嘗殿材幷御膳柏ー由及苅ニ萬草ー野齋場地等八月上旬神祇官共ニ國司ー卜定

將レ卜ニ齋場一先爲ニ解除一其料物當國所ニ輸訖即申レ官令ニ山野所レ屬郡司一人專當禁守一勿レ入ニ穢人一（採ニ鎭魂琴材・山葉此其鵄尾琴國郡令ニ内匠寮造ニ之ニ神祇官一）と見えたり儀式には卜ヨ定齋場一の次に載て卜ニ定採ニ大嘗宮材木萱幷御琴材柏等一山野上即下ヨ知卜食國一と有り此御膳柏は葉椀葉盤の料なる事第二十二條に云る如し第二十七條に引る儀式に擗葉二荷用ニ卜食郡柏一と有も是なり（但古事記高津宮段に大后爲レ將ニ豊樂一而於ニ採ニ御綱柏一幸ニ行木國一と有れば昔は遠近に拘はらず此を遠國に採れりし事も有と見えたり右の如く神祇官共ニ國司一卜定と有は其齋場と成べき山城國のなる事次に見えたるも如し）將卜ニ齋場一先爲ニ解除一は儀式に次應レ卜ニ定齋場一之狀牒ニ送山城國ニ至ニ於其地一撿校以下率ニ神祇官一到ニ北野一卜ニ定其地ニ其儀神祇官悠紀主基兩國司並山城國郡司等詣ニ荒見河一陳ニ置祓物一各五色薄絁各一尺木綿二斤米二升酒一斗薄鰒堅魚海藻各一連食薦二枚干柏六把並國料備訖行事以下雜色人以上共就ニ祓場一（悠紀在レ上大祓主基在レ下紀主）先發ニ祓詞一次主基訖各就ニ幄下一卜ヨ定齋場一（悠紀在レ東主基在レ西行事以下兌同行ニ野中一其）其塊一將歸（モチカヘリテ）卜レ之其料物各酒一斗米四升木綿麻各一斤鰒堅魚海藻各一連腊（キタヒ）一斤卜訖立ニ標四角一（立ニ賢木一着ニ木綿一）方冊八丈爲レ限即令ニ山城國葛野愛宕兩郡司守レ之と有て謂ゆる荒見河祓是なり荒見とは荒忌と云事にて大嘗祭の散齋に仕奉り初る由と通えたり（大嘗會便蒙に荒見河祓と云事有り此は大嘗會に奉仕する行事の辨史等是迄の假初に犯せる輕き罪咎を被棄て此より清淨に爲る義なり大嘗會の散齋は十一月朔日よりなれども行事の辨史は先是迄の罪咎を祓ひ汚穢を除かむが爲に九月晦日に河祓を爲すなり凡て祓は水邊にて爲る事にて即贖物とて人形を作り此に我が罪咎を移して河水に流し棄跡の遺らぬやうに爲る事なり昔に荒見河と云は何れの流やらん知ず今の祓は京の西北に紙屋川と云有り今の人加伊川と云ふ此川の高橋と云ふ許にて祓を被行るれども名目には荒見河祓と云なり其儀川邊に幄を立悠紀主基の行事辨史中臣卜部着座し史大麻を撫て息を懸け卜部其大麻を地に衛立て祝詞を讀み祓を畢して贖物を流し棄るなり」と有が如し但荒見河を地名と心得たるは僻事なり上に云るが如し）

新理院は小忌院とも小忌食院とも云ふ式に凡新理御膳並備ニ小忌人食ニ院者近レ宮之地隨レ便卜定訖即鎭祭其幣五色薄絁各一尺倭文一尺木綿麻各一斤絹二疋商布四段鍬五口米四升酒一斗鰒海藻各一斤祝詞布二端並用ニ國物一（餘祭不レ顯幣物色數者皆准レ此）所レ作盛屋一宇酒屋一宇贄屋一宇器屋一宇大炊屋一宇供ニ御膳一屋一宇新理雜魚屋一宇備レ食屋一宇（以上宇數及長隨ニ事開繁ニ增減）皆以レ板葺掘ニ井一處其院四面各開ニ一門一作訖料賞卜部等於ニ院内一爲ニ解除一其料物各當國所レ輸一と見えたり儀式に右の大嘗宮材木萱並御琴材柏等を採る山野卜定の事有て其下に次卜ニ定小忌院一訖宮主卜部率ニ行事並小忌官人以下一鎭ニ小忌院一其料云々並以ニ國物一備レ之と有り其料物等式文の如し（此鎭祭の事は第六條鎭ニ齋場一の下に云るが如し其料以ニ國物一備レ之と有に由緒の國司郡司より其國の祖稅を以ぞ辨へさする事なり此小忌官人とは次に云ふ小忌所預にて後世に謂ゆる小忌公卿には非ず）其盛屋以下八箇

の屋は儀式に次定ニ所々屋一若當所舊屋不レ足者權作ニ新屋一と見えたり上に小忌所預五位四人六位以下六人と有れば此十人にて此院を守る事なり若當所舊屋八字にて足ざれば更に新屋を權に造て其用に便するなり以上屋數及長廣隨ニ事閑繁一增減と有を以て其狀を想ふ可し　掘ニ井一處一は儀式に次卜ニ定御井所一方一丈二尺若當所舊井卜食者即使ニ修理用ニ之と有は其所々屋にして汲て用ふる御井を卜定るなり若小忌院の地に元より有來る井有て卜食は更に修理を被加て其用に物爲る事なり　又儀式に次定ニ所々屋一の下に次鎭ト調ニ備供御並小忌食ニ之院上其料五色薄絁各一尺倭文一尺木綿麻各一斤綿二屯商布四段鍬五口米五升酒一斗薄鰒海藻各一連卜部軾料布二端並用ニ國物一と有は大殿祭などの如し如此く設置て拔穗使の京に上るを待なり偖此迄の事八月に在り先に鎭ニ小忌院一と有は地鎭なるを此は其院中の事備はりて祭行るなれば其屋に就て祭なり此事式文に漏たるは上に讓りて被省れたりつるならむ　稻實卜部等於ニ院内一爲解除は儀式九月下旬の條下に次始掘下備ニ小忌食一院凡酒甕穴上並始釀レ酒と有て次同院大祓其料五色薄絁各二尺木綿麻各二斤酒米各一斗薄鰒堅魚各一連海藻二連鍬二口軾料布二端並用ニ國物一と有る是なり但此は向ニ卜食山一の次齋場内院の雜屋を作る前に在り又十月上旬の下に次各鎭ニ小齋麴室一其料木綿五枚紙四枚堅魚薄鰒各一連雜腊一升酒五升米二升橘子二十顆蘿菔一把並用ニ國物一鎭畢始

納ニ麴一新米一厥明各炊ニ白黑並大多米ニ酒麴料飯一次各掘居小齋御酒料甕四口造酒司卜食甕瓱四口役所と有を合せて思ふに九月下旬に備へ十月上旬に至て始るなりけり又其下に次始各釀ニ小齋院御酒一云々と有は卜部國郡司及物部人等を合せて各と云なり偖此度の解除は其爲に在る事なり儀式には如此く大祓と有る所を式には唯解除と有は天下の大祓と別たむ爲なる可し但式にも於ニ齋郡一大祓と有なとは格別なる可し

在京齋場は式に凡在京齋場者預分設ニ兩處一悠紀在レ左主基在レ右兩國所レ送拔穗稻到レ京先鎭ニ祭其地一訖造酒兒先執ニ齋鍬一始掃レ地幷掘ニ四角柱窟一卜部率ニ國郡司以下及役夫等一入ニ卜食山一採レ材即祭ニ山神一訖造酒兒先就ニ齋斧一始伐レ木然後諸工下レ手採ニ大嘗宮材一准レ之　又卜部率ニ郡司以下雜色人等一入ニ卜食野一苅レ草即祭ニ野神一訖造酒兒先苅次諸人下レ手苅ニ大嘗宮草一准レ此　其齋場者分爲ニ内外兩院一所造八神殿一宇稻實屋一宇黑酒白酒屋各一宇倉代屋一宇贄屋一宇臼屋一宇大炊屋一宇麴室一宇外院所作多明酒屋一宇倉代屋一宇供御新理屋一宇多明新理屋三宇麴室一宇以上舍屋長廣稱レ宜（カナフ）　皆以ニ黑木及草一構葺以草爲蔀但麴室塗壁　裏以ニ長薦一其酒屋麴室席爲ニ承塵一曝布爲裏其井二處卜訖御井者造酒兒始掘造酒兒御井者稻實

卜部始掘其二院營造既訖收ニ御稻於稻實屋ニ但御飯稻造レ棚別置祭ニ御膳八神於內院ニ 其幣進レ上 と見えたるが如し右の在京齋場者預分設ニ兩處ニ悠紀在レ左主基在レ右は已に第九條に引る儀式卜定齋場と有る下に悠紀在レ東主基在レ西と見えて東西を以左右と爲る事なり其文に次て次齋場預官人等點 定齋場內外院服院幷雜殿地ニ 外院方卅丈內院十二丈服院十丈其內院悠紀在ニ外院西ニ主基在ニ外院東ニ服院在ニ南內院中間南去五許丈ニ 始構作齋場雜屋ニ其外院南門北卅許丈橫七間廳一宇 西北戶長五丈六尺廣一丈六尺南北二面有庇 其北一許丈橫七間酒屋一宇 西南戶長五丈六尺廣一丈六尺南面有レ庇 其東橫五間人給屋一宇 東三間爲室西側戶其庇亦爲レ堂西戶其西二間並爲レ堂長四丈廣一丈六尺 其南縱七間料理屋一宇 西戶長五丈六尺廣一丈六尺西面有庇與人給屋西簷相當 其南縱九間倉代屋一宇 長七丈四尺廣一丈六尺東西二面有レ庇 其南縱九間倉代屋一宇 長廣庇並同レ上 其東縱九間倉代屋一宇 長廣同レ上 東門北掖北去十三許丈縱五間官人宿屋一宇 長四丈廣一丈六尺東西有レ庇 南掖南去十四許丈橫五間屋一宇 西二間爲ニ稻實公宿所ニ南戶東三間爲ニ物部男宿所ニ南戶長三丈五尺廣一丈四尺 其南橫九間屋一宇 西二間爲ニ造酒童女宿所ニ東三間爲ニ物部女宿所ニ並南戶長廣同レ上 酒屋以西橫七間大炊屋一宇 南北有レ庇長九丈六尺廣一丈六尺 其南四許丈少西縱七間納ニ雜物ニ屋一宇 西東戶東面有レ庇長五丈六尺廣一丈六尺 其南縱七間造筥形幷レ菓屋ニ一宇 東西戶東面有レ庇 其南縱七間納ニ拔穗御稻ニ屋一宇 東西戶東面有庇長廣並同レ上 西門北掖有ニ大多米院ニ門 東 院門北掖橫三間酒屋一宇 南戶長二丈四尺廣一丈六尺南面有レ庇 南掖橫三間麴室一宇 東戶長廣同ニ酒屋ニ 南屋西頭縱三間大炊屋一宇 東戶長廣同ニ麴室ニ 西門南掖造レ標屋一宇 廣方四丈高三丈八尺四面有レ庇 其南五間屋一宇 東三間爲ニ驛使宿所ニ西二間爲ニ禰宜卜部宿所ニ並南戶長三丈五尺廣一丈四尺 其南橫五間屋一宇 東二間爲ニ神服長宿所ニ西三間爲ニ神服女宿所ニ並南戶長廣同レ上 御井在ニ院外東北角荒見川東ニ童女井在ニ其東ニと有は先に齋場の地を卜定して立ニ標四角ニ 立ニ賢木ニ著ニ木綿ニ 方卅八丈爲レ限と有る其地を齋場所預の官人等點定して內院外院神服院等を建べき地を定め右に截る雜屋の如きは神事に拘はるならねば九月下旬に拔穗使の京に著く迄に豫搆作る事なるなり又儀式に十月下旬始於ニ外院ニ搆ニ大嘗宮雜殿ニと有も此所にて物爲る事なり 但右の內に大多米院は別に一搆にて其酒屋麴室大炊屋の三字は其院中に在る所にして右の齋場雜屋の部には非ず其由第八條に云るが如し儀式には九月下旬拔穗稻京に到りて內外兩院を作る由にて內院所レ造云々外院所レ造多米酒屋一字倉代屋一字供御料理屋一字多米料理屋三字麴室一宇云々と見えたり此事下に云を見合す可し上の儀式に外院方卅丈と有は後立ニ標門角ニ方卅八丈爲レ限と有る其中にてなり內院十二丈服院十丈と有は其外院方卅丈の內にて右の三院を搆ふるなり悠紀在ニ外院西ニ主基在ニ外院東ニ上に云る東西を右左とは違へるが如し但後は向(むき)い方を主として定め此は向ふ方より云なるか猶能く尋ぬ可き事なり 兩國所レ送拔穗稻到レ京卽先鎭ニ祭其地ニは儀式九月拔穗の所に下旬至レ京齋場官人幷國司持ニ麻幷鹽湯ニ迎ニ南門ニ灑ニ御稻幷雜物ニ訖納ニ院外權屋ニ云々と有て次鎭ニ稻實殿ニ其料各五色薄絁各一尺倭文一尺 木綿麻各一

斤綿二屯商布四段鍬二口米四升酒一斗薄鰒海藻各一連雜菓子四升凡料布二端並用二國物一鎭畢造酒童女先執二齋鉏一掃レ地幷掘二院垣四角柱穴一先是次巽次乾役夫終レ之と見えたり但此より以下の事共多くは忌部氏の仕奉る可き事を造酒兒共の仕奉る事は古義に非る事第十七條に註せるが如し稻實與地は右に見えたる忌紀主典の誤れる文なり造酒童な先執二齋鉏一云々の下に役夫終之と有は其國より採擇の擔夫と定て奉上れる役夫其造酒童女の手に代りて此を奉(ツカフ)るなり此細書の次巽の下に次坤レ二字を脫せり補ふ可し第十七大嘗宮條なる掘二殿四角柱穴一の下に云る事共を見合す可し入二卜食山一採レ材云々は儀式に稻實卜部率二造酒童女國郡司各一人物部男六人子弟五人工十人夫等一向二卜食山一前二日預申二行事所一即祭二山神一其料各五色薄絁各一尺倭文一尺木綿麻各一斤鍬二口米五斗酒一缶鰒堅魚各二連雜魚腊一籠海藻二連鹽一升雜菓子一斗稻二束軾料絁一疋布一端綿二屯祭畢造酒童女先執二齋斧一伐レ樹工匠次レ之役夫次レ之訖歸來自後遣二工幷夫等一伐運と見えたり此事十三卷遷二奉太神宮一詞の下山口木本祭の事を説る處に云り此卜食山は八月上旬に神祇官山城國司と共に卜定有て、其山に所屬の郡司をして禁守に令たる地なる事第九條に記せるが如し入二卜食野一苅レ草云々は儀式に次國司率二禰宜造酒童女及當郡司役夫等一向二卜食野一即祭二野神一其料各五色薄絁各一尺倭文一尺木綿一斤米酒各一斗鍬一口鰒堅魚海藻各一連祭畢造酒童女先執二齋鎌(イミカマ)一苅レ之役夫等終レ之訖歸來自後令二役夫苅運一と見えて右の卜食山に入例に同じ但式文には入二卜食山一と入二卜食野一とを前に載て其下に內外兩院を造る事を云れども儀式には然らず先向二卜食山一と有て其次に作二內院正殿一の條有て其次にぞ此向二卜食野一條は出たる依て思ふに先山に向ひて木を伐取て內院の正殿を作りさて其萱を以て萱に及びて其卜食野に入る事と見ゆ猶右の禰宜とは禰宜卜部なり向二卜食山一は稻實卜部に向二卜食野一は禰宜卜部に分て事任し給へる者なり其齋場者分爲二內外兩院一以レ柴爲レ籬編レ草爲レ門內院所レ造八神殿云々は儀式に次始作二內院雜殿一造酒童女先執二齋鉏一掘二稻實殿四角柱穴一物部次レ之役夫終レ之其東門南掖縱八間神座殿一宇長一丈四尺廣七尺八寸高七尺四面有庇○式云八神殿北掖高萱御倉一宇徑八尺高九尺○式文に載す其西橫三間稻實殿一宇南戶長二丈四尺廣一丈二尺柱高八尺○式云稻實屋其南縱三間倉代殿一宇其南縱三間御贄殿一宇並西戶長二丈四尺廣一丈二尺高七尺○式云倉代屋贄屋其南橫二間鋪設殿一宇西側戶與二稻實殿一相對○式文に見えず稻實殿西橫三間黑酒殿一宇其西橫三間白酒殿一宇並南戶○式云黑酒白酒屋各一宇其南縱三間麴室屋一宇○式云麴室其南縱三間大炊屋一宇並東戶○式亦同其南橫三間臼殿一宇東側戶長廣並同二稻實殿一○式云臼屋と有り但右の高萱御倉及鋪設殿の二は式文に被載ざるを以思ふに高萱御倉は神座殿に屬き鋪設殿は稻實殿に屬などの事に依て省れたる者なる可し備又式に外院所レ造多明酒屋一宇倉代屋一宇供御新理屋一宇多明料理屋三宇麴室一宇以上倉屋長廣稱レ宜と有れども儀式には此より前に預設作る所なり

此條の初に云るが如し右の多米酒屋は儀式八月条に外院西門北掖有ニ大多米院ー院門北掖構三間酒屋一字と有る是なり倉代屋一字は儀式に三字有れども其數を減られたるなめり供御料理屋は儀式に理屋と有り多明料理屋三字は大多米院の内なる可し其内に儀式に大炊屋一字有れば其共に三字なる可く思ひ麹室一字は此も大多米院のなるなり然れば外院の内なる殿も預こに造置と抜穂稲の束に到て後造るとの二有り皆以ニ黒木及草ー構以レ草為レ蔀云々は儀式に其制也神座殿ニ構以ニ黒木ー用レ萱葺内構ニ檜棚ー敷席其上更重敷レ席高萱御倉者以ニ四枝黒木ー為レ柱以レ萱芹莒薦為ニ壁代ー内構ニ檜棚ー尺 高一 御稲四束盛ニ韓櫃ニ承屋庸布五段白曝四合安ニ於棚上ー御贄殿者構以ニ黒木ー用萱葺レ之以ニ柴蔀ー之編板為レ扉稲實殿如レ之黒酒殿者構以ニ黒木ー萱レ蔀用レ萱薦為ニ壁代ー白酒殿者構以ニ白木ー自餘同ニ黒酒殿ー其倉代大炊麹室臼舂設等殿並同ニ御贄殿ーと見えたるにて明らけし有り臼屋殿は在レ國の八神殿に同じき也其制大旨同じ但しには其ニ檜棚ーと有るを後には安ニ於棚ーと有り又此の高萱御倉の内ニ構ニ檜棚ーと有るを後には作ニ存棚ーと有りて如此ハ少の異には有也又式には稲實殿と見えた其酒屋麹室臼屋ニ屏宇レ黒布為レ戸と有は事の甚しき者なり　其井二處卜託御井者造酒兒井者稲實卜部始掘と有儀式に十月上旬祭ニ六神ーと有る細書に井意加美三神の名見えたる其次に次各禰宜卜部郡司等率ニ造酒童女物部人六人工一人夫十人ー始掘ニ齋場御井童女井ニ子時童女先執ニ齋鉏ー掘ニ御井ー次禰宜執レ鉏掘ニ童女井ニ工夫終レ之と有り此は上に引る儀式に御井在ニ院外東北角齋兒川東ニ童女井在ニ其東ーと見えたり院外とは齋場内院の外にて外院の内なるなり但儀式には卜定の事見えず て卸て公卿ニ御井を卜定の事有て第十条に引るが如し借此童女井の童女は造酒童女（サカツコ）の事にて式に造酒兒井と云ると同じきなり節廿七條に載る行列次第に御水六瓱と有る下に川ニ齋場ニ井水ーと見えたるは是なり　其二一院營造既訖後ニ御稲於稲實屋ー但御飯稲造レ棚別置は儀式に九月下旬差ニ史一人ー納ニ院外權屋ー作ニ儲 在院と有る權屋にて八月條に其前縦七間納ニ抜穂御稲ー屋一字 西東戸東面有レ庇 長五丈廣一丈六尺と見えたる此より出して新造の稲實殿に收むるにて其稲は拔穂條に還抜ニ得御稲若干束ー乾之納ニ齋院ーと有る御稲にて式に自餘皆擬ニ黒白二酒ーと有る是なり御飯稲造レ棚別置は式に先割ニ取初拔四束ー擬ニ供御飯ーと有る御稲なるを儀式に別納ニ高萱御倉ーと有を在京齋場にても高萱御倉者云々構ニ檜棚ー尺 高四 御稲四束盛ニ韓櫃ニ承屋庸布五段白曝四合安ニ於棚上ーと見えたる是なり又十月上旬の所に各拔穂御稲并雜物遷ニ納内院ーと見えたり 如此ハ在國齋場の稲實殿に收めたるは在京齋場にても稲實殿に納め在國の高萱御倉に收めたるは在京の高萱御倉に收るなり但式には高萱御倉の事を載られざれば貞觀の昔に在て延喜の今に廢ぜられたるか何くなれども文を簡古に記す式の文法なれば遺祭ニ御膳八神於内院ニ其上レ櫃別置にて其稲遺えたり 其常は儀式に十月上旬云々次各祭ニ八神ー 名號見レ上 其料各五色薄絁各一尺緜三丈二尺 座別四尺 木綿二斤絲綿各八斤 座別一斤 商布八段

鍬八口麻四斤酒一缶米五斗鰒堅魚各一連雜腊一籠海藻一連鹽二升雜菓一斗凡新布二段又賜各稻實卜部禰宜卜部二人明衣各一具（並用國物）と見えたり（凡ての狀在國齋場にて八神殿を祭らるゝに異なる事無し）

神服の事は式に凡織神服者九月上旬神祇官差神服社神主一人給驛鈴一口遣參河國召集神戶卜定織神服長二人織女六人工手二人訖率長以下十人將當國神服部所輸調絲十絇歸向京齋場先祭織屋然後始織其作具所須小斧四具鑿四具刀子四枚鉋四枚錐三隻火鑽三枚（以上料織二廷）鹿皮二張木綿三斤五兩麻三斤五兩篦一編薦四枚男女十八明衣新調布四端八尺並以官物充之其神服殿者兩國各一宇神服男女憩屋各一宇祝部憩屋一宇（長廣隨宜）並以黑木及草構營と有り其九月上旬云々より工手二人迄の文は儀式も此に同し神服社は神名式に攝津國島上郡神服神社にて其神主とは姓氏錄攝津國神別に服部連熯之速日命十二世孫麻羅宿禰之後也允恭天皇御世任織部司摠領諸國織部因號服部連と見えたる是也此氏の事及參河國の神服の事など別に祝詞講義神衣祭條神服部連の解に合せ云るが如し參河國神戶とは服部神社の神戶なり和名抄鄕名に同國八名郡服部（波止利）と有る是なる可し（神祇令孟夏神衣祭義解に謂伊勢神宮祭也此神服部等齋戒潔淸以參河赤引神調絲織作神衣と有り如く神宮の神衣祭神御衣も共に彼國より奉る古例なるなり）歸向京齋場先祭織屋然後始織云々は儀式に十月上旬神服使率服長織女工手等十人持神服部所輸調絲十絇到來（悠紀主基各五人）と見え中旬の所に次各神服使幷國司齋場預率服長織女等鎭神服院地其料各五色薄絁各一尺倭文一尺木綿五兩麻一斤五兩鍬四口米酒各一斗堅魚腹海藻各一連坏四口瓱四口其調度服板七枚（長各八尺廣二尺厚二寸）籰（ワク）廿口席三枚薦七枚薦四枚服覆庸布一段知岐黑綿一屯使幷服長織女等明衣料布五端三丈一尺（使一人長二人各二丈織女六人各一丈六尺巾料各三尺三寸襷（チハヤ）料各五尺襷（タスキ）料各五尺）と有る是即祭織屋にて地鎭なり（右の國司とは悠紀主基の兩國司なり齋場預とは齋場所預の官人を云なり儀式文に祭織屋と有からは神宮の如く神服部の遠祖と坐す天八千々比賣命は其神に坐せば齋奉れるならむと思ふに儀式に鎭神服院地云々と見えたれば例の地鎭の祭にて服殿の神には非じ）其神服殿者云々は儀式の右の文に續きて即兩國相共造神服院（一院有四屋每國作二屋）充造酒童女執鋤初掘四角柱穴工夫終之其制也開門東北兩方北門東掖橫五間神服殿一宇（南戶長三丈五尺廣一丈二尺）南垣下橫五間屋一宇（與服殿相對西二間間壁爲神服女宿所東二間爲服丁宿所東北戶長三丈五尺廣一丈二尺以上二宇悠紀造之）北門西掖縱五間屋一宇（東戶）南垣下橫五間屋一宇（北戶與上共主基造之）並構以黑木葺以萱

以二葉柴一葺レ之と見えたり式には長慶隨レ宜と有れども此を以て其大略を辨ふ可き者なり

雜器の事は式に凡應レ供二神御一雜器者神語曰二由加物一所司具注二所須物數一預前申レ官八月上旬差二宮内省史生一遣二五國一監造河内和泉一人尾張參河一人備前一人到レ國先祓後始造作其幣國別五色帛各一丈木綿麻各六斤十兩鍬四口熊皮二張並以二大藏物一充レ之と有て次に五國の所造の雜器を載たり皆陶器にて神膳神酒等の具なり儀式に載る所式文に異無れば今舉るに及ばす但祓料云々の末なる細書に以上官物と有は右の以二大藏物一充レ之と見えたるにて心得へし次に米酒魚藻之類國司辨レ之と有は例に依に米四升酒一斗鰒海藻各一斤也 上の料理院條に餘案不レ顯二幣物色數一皆從レ此と有を以知べし又臨造使に宮内史生を被遣る事は職員令宮内省の下に掌出納諸國調雜物舂米官田及奏二宣御食產諸方口味一と見え又當省の管領するに大膳式大炊寮内膳司等の供御に預れるか有る爲なる可し然れども供御の雜器を造る如きは忌部氏の預る可き事なるを斯在るは中古よりの例ならむ

由加物の事は式に凡應レ供二神御一由加物器新者神語號二雜贄同爲二由加物一九月上旬申レ官差二卜部三人一遣二三國一先大祓後行レ事料馬一疋太刀一口弓一張箭廿隻鍬一口鹿皮一張庸布一段木綿八兩麻一斤鰒堅魚海藻滑海藻各二斤鹽二升米酒各二斗以上當郡所レ輸馬一疋太刀一口弓一張箭廿隻鍬一口鹿皮一張庸布一段木綿麻各一斤堅魚鰒各四斤海藻滑海藻各四斤酒米各四斗鹽四升以上阿波國麻殖那賀兩郡所レ輸 其供神幣物幷作具及潛女衣料人別布一丈四尺並以二大藏物一充但粮以二當國正稅一給人別日米二升紀伊七日阿波十日 其物造了卜部監二送齋場一分二付兩國一但阿波國獻麁布木綿付二神祇官一紀伊國所レ獻云々並令二賀太潛女十人量レ程採備一其幣云々淡路國所レ造云々 其幣云々使下當國凡直氏一人著二木綿鬘一執二賢木一引導上阿波國所レ獻云云其幣云々並令下忌部及潛女等量レ程造備上凡紀伊淡路阿波三國造二由加物一使向レ京之日路次之國掃二道路一祇承と見えたり但卜部を被遣るは大祓の爲には然る事なれ共由加物の御使には似氣無し古語拾遺に天太玉命の業を受繼しめて令下天富命率二供作諸氏造中作大幣上と見えたれば忌部氏を舊は被遣しなりけり下なる麁妙服條に忌部一人執下著二木綿一之賢木上前行云々と有て其事に主と預るは此には古義を失へれども彼に大古の餘風の遺れる者なり其神語號二雜贄一同爲二由加物一(ユカツマツリモノ)と見えたる由加は齋食(ユケ)と云事にて凡て神の供御は齋清まはりて物爲る由にて御膳御酒御贄は更なり其を盛る雜器をも合せて共に由加物と通はし云なり 伊勢内外宮の儀式其三節祭條に由紀御饌とも由紀御酒とも又唯に由紀と耳も云ひ御饌を料理(トヽ

ノフ）るを由紀殿とも云り此事祝詞講義卷十三又此□の齋庭波利の下にも委しく説明らめたるが如し　九月上旬申レ官差ニ卜部三人ニ遣ニ三國ニ先大祓後行レ事は儀式には神祇官差ニ卜部三人ニ申レ官差ニ遣紀伊淡路阿波等國ニ監ニ作由加物ニ各到レ國先大祓と有て其料式文に同じ此は各國に卜部を一人宛被遣る事なるが此國に到りて先大祓して後に事を行ふ状拔穗使の國に到る時の如し　又大祓の料も拔穗の時の員數の如し其細書に以上當部所輸と有は紀伊國は海部郡淡路國は御原郡と各一郡にて右の大祓料物を出す事なり其次なる料物の細書に以上阿波國麻殖那賀兩部所レ輸と見えたるは右の大祓を其郡々にては物せず兩郡にて大祓を行ふ故に然云るなり其料などに異なる事有に非ず　其供神幣物並作具及潛女衣料並以ニ大藏物ニ充云々は次に擧る紀伊淡路阿波等の國々の神に幣を被奉るなり右等の料物は大藏物を賜ふ由儀式又其奥に載たる官符にも見ゆ　然れば大祓料は其部より輸し供神の幣物は官物なる以輸すなり但頴以ニ當國正税ニ給は同じ官よりながら此は京よりは下されず其國にて賜はる事なり　其物造ニ卜部監ニ送齋場ニ分ニ付兩國ニ但阿波國獻ニ麁布木綿ニ付ニ神祇官ニは儀式も此と同文なり此は其三國にて造る所の由加物を其國に被遣たる卜部より悠紀主基兩國の在京齋場に監送アラタメオクり阿波國の獻れる麁布木綿は神祇官に付となり　此は十一月卯日に至りて神祇官より此を奉るなり第二十八條麁妙服事の下に云るを見べし　紀伊國所レ獻云々は儀式に紀伊國薄鰒四連生鰒生螺各六籠都志毛古毛各六籠螺貝燒鹽ツビヤキシホ十顆並ニ盛ニ賀多潛女十人ニ量レ程採備ニ其幣各五色薄絁各一尺倭文一尺木綿麻五兩葉薦一枚潛女所レ須鑿ノミ十具刀子二枚と有て同し第□□條なる行立次第に鰒汁漬海藻汁漬と有は此内なる可し四卷なる官符に紀伊國海部郡と有ゐ賀多は和名抄郷名に同郡賀太と有る是なり　然るを神名式に加太神社は名草郡に收（イ）れるは古名草郡より海部郡の分れざりし以前の記に依れるなる可し偖下なる淡路阿波の國々の幣數に比ふるに其祭る所ニ前と見えたり又は同國那賀郡に海神社有り其が何れにも其祭る幣物の數は一なるなり　淡路國所レ造云々は儀式に淡路國瓮廿口各受ニ一斗五升ニ比良加一百口各受ニ一斗ニ坩二百口各受ニ一斗ニ其幣各五色薄絁各三尺倭文三尺木綿麻各一斤葉薦一枚作具鑁斧小斧各二具鎌二柄造瓮使下當國凡直オフシ氏一人著ニ木綿鬘ニ執ニ賢木ニ引ニ道と有此は第廿七條に擧る黑酒白酒料と酒一百缶と雜魚並菜一百缶との料なる可し偖此を官符には御原郡と見えたり凡直氏とは凡海連の同族たる可し　履仲天皇御紀に阿曇連濱子淡路の野島の海人を率たりし事の見ゆれば其國に綿津見神の裔孫の住有しかば凡海連は其支族などならむ偖幣物に依に祭る所三前なれども何れか知難し神名式に三原郡久度神社有り其は御竈神に坐す事講義平野祭條に云るが如し古昔は御竈に土器なるをも用ひさせ給へば其をも此大嘗會の由加物をも造れるに依て祀れる者なる可し儀式に齋院造酒料に土師韓竈二具と有などを以知べきなり然れば久度神社と淡路伊佐奈伎神社大和大國魂神社を合せて三前なるにや此大和大國魂神社は和名抄郷名に三原郡幡多と有る其所に立せ給ひて今八太村二宮と申せるなり姓氏錄に右京神別に八太造和多罪豐玉彦命兒布留多麻命之後也と有は右の凡海直に由有て聞えたり又同郡に倭文村有り姓氏錄に倭文連振魂命四世孫天忍人命之後也と見え又和名抄に阿萬郷有れど古は右の由加物耳ならず御贄をも奉りけむを近く儀式の頃には其事止ぬるなめり

阿波國所レ献麁布一端木綿六斤年魚十五缶蒜英根合(ヒルノフサネノマゼ)漬(ツケ)十五缶乾羊蹄(ホシノブクサ)蹲鴟(イモ)橘子(タチバナ)各十五籠(以上忌部所レ作)鰒卅五編鰒鮨十五坩細螺(シタヾミ)棘甲蠃石花等並廿坩(以上那賀潜女十八所レ作)其幣各五色薄絁各六尺倭文六尺木綿麻二斤葉薦一枚作具鑁斧小斧各四具鎌四柄鑿十二具刀子四枚鉋二枚火鑽三枚並令二忌部及潜女等量レ程造備一と見えたるは儀式も此と同文なり第廿八條に載る式文に阿波國忌部所レ織麁妙服(神語所レ謂阿良多倍是也)云々と見えたるは其下に云を見合す可し以上忌部所レ作也古語拾遺(神武天皇段)に天日鷲命之孫造二木綿及麻並織布一(古語阿良多倍)仍令下天富命率二天日鷲命之孫一求二肥饒地一遣二阿波國一殖中穀麻種上其裔今在二彼國當二大嘗之年一貢二木綿麁布及種々物一所以郡名爲二麻殖一之縁也と有る縁に由れる者なり神名式に阿波國麻殖郡忌部神社(名神大月次新嘗或號二麻殖神一或號二天日鷲神一)と見え和名抄郷名に麻殖郡忌部(伊無倍)と有り又板野郡大麻比古神社名神大と有も由有る神と所思ゆ(又名方郡に天石門別八倉比賣神社大月次新嘗と有る此は栲幡千々姫命の御事由[illegible]三巻十三巻等に説るが如く此は和妙の神に坐せば古くは此より和妙を奉れりしにつ大月次新嘗なる格別の御會釋有なと思ふ可し備有レ貢物の數六前なるは麻殖那賀兩郡の神なるか又其國内にて六座なるは詳ならず) 凡云々造由加物使向レ京之日路次之國掃二道路一祇承は儀式にも同じく被記たるが紀伊淡路阿波の三國より奉る由加物は上に記せる五國の雜器よりは殊に重き由有が故に國々にて路を掃ひて祇承する事猶御稻の京に到るが如し其中に阿波國忌部は由加物に屬て京に參上る事と見えたり第廿八條見る可し(但彼由加物使の入京にて悠紀主基の國司郡司共に參上る事故に別に祇承の事は云ざる也此は造由加物使の卜部各其國に一人宛下れるが上れるを淡路國なる耳當國の凡直氏一人木綿鬘を着け賢木を執て引導き奉れりば餘の二國よりは共に上る人尋きが故に其も此も共に其路次の國々にて此を迎へて送奉なり其祇承とは俗に云ふ御馳走役人の事なり)

酒米の事は式に凡春二黒白酒料米一者造酒兒先下レ手次諸女共春訖祭二井神一次祭二竈神一始釀レ酒日亦祭二酒神一國別所レ須甕四口𤭖(サラケ)四口(各二口黒酒料二口白酒料二口並大膳職所レ充) 大麻笥四口臼四腰杵八枚箕八枚槽三口羅(アシカ)八口志多美八口平笥八口酒槽三隻明櫃四合折櫃廿二合大案二脚韓櫃二合大明櫃一合小麻笥六口匏七柄杓四柄灰單二張粉單一張𤮕(ミカサラゲ)口以二曝布一覆レ之其釀二多明酒一者用二國備米卅斛一と有り其春二黒白酒料米一云々と有は內院御酒と大多米院御酒との事を舍たる也儀式十月上旬の下に拔穗御稻幷雜物運二納內院一次始令レ春二御稻一造酒童女先レ之等(大酒波仕女)終レ之と見えたり(大酒波仕女と有る仕女は御作の事なる式に諸女共春とは云る也有の口に就て說有第十七大嘗宮條臼屋の下に云るが如し) 祭二井神一次祭二竈神一は儀式に次各稻實卜部禰宜卜部率二造酒童女並物部

人等ニ祭ニ六神ー（竈門井山積意加美水神）其新各五色薄絁各三尺倭文一尺木綿三斤鰒堅魚海藻各三連鹽二升滑海藻二連米酒各一斗二升凡料絁二疋絲二絇布二段庸布四段（並用ニ國物ー）次云々次各賜ニ物部人明衣料ニ稻實卜部二人新布一段一丈（衣袴一具新）稻實公一人酒部一人燒灰一人採薪四人駈使丁四人并十一人新六段三丈四尺（人別衣新三丈袴新六尺）童女一人酒波二人粉走二人相作四人并九人料三端三丈四尺（衣新別一丈八尺）又童女一人物部女八人酒部一人燒灰一人駈使丁四人并十五人冠新一段三尺（人別三尺）又物部男六人女九人并十五人襷新一段三丈三尺（人別五尺並用ニ國物ー）と有り右の祭ニ六神ーと有る中に山積は次條なる式文に先祭ニ山神ー燒ヲ得藥灰一斛ーと有る其なるかと思ふにしからず此は山材を以ふ事に就て祭らるゝか水の水上の山に在を以祭らるゝかなる可し竈は此に祭ニ竈神ーと云なり井意加美水神の三柱は此に祭ニ井神ーと有る是なり（門神は式文に見えずと雖も大殿祭を兼て酒神を被祭るならむ事下に云るが如くなれば其に就て門神は被祭るなる可し下なる大嘗宮の條にも祭ニ殿及門ーと見えたれば此齋院にても殿及門を祭る可き箸なり倚右に冠と有は上なる神服の下なる料物に巾料各三尺三寸と有り此は太神宮なる被（カブリ）と同物にて領巾なる事大殿祭詞大祓詞の講義比禮掛伴男の下に委しく説たるが如し）始釀レ酒口亦祭ニ酒神ニ云々とは儀式の神服院を造る下に次各祭内院酒殿神其新五色薄絁各一尺倭文一尺木綿麻各一斤鍬八口鰒堅魚海藻各一連雜菓子一斗稻五把米五斗酒一缶雜腊三籠凡新絁二尺布五段綿二屯（用ニ國物ー）と見え又十一月上旬始釀ニ内院御酒ーと見えたる是にて其神は大宮賣神に坐事上なる八神殿の下に云るが如し神名式に造酒司坐神六座（大四座小二座）大宮賣神社四座（並大月次新嘗）酒殿神社二座（並小）酒彌豆男神酒彌豆女神と見えたり（倚其大宮賣神は又御殿神に坐せば此内院の殿祭をも兼て被祭るなる可し上なる祭ニ六神ーの中に門神坐り其主たる殿神を祭らずて門神耳の被祭る可くも非ればなり但此度は右の大宮賣神二座耳にて酒殿神社二座は被祭るならざる可く思ゆ）其釀ニ多米酒ー者用ニ國備米卅斛ーは右に引る儀式に十月上旬云云各掘ニ居齋院大多米酒料甕八口㼚四口ー云々と見え又中旬各祭ニ大多米酒殿神ー其新各五色薄絁各一尺倭文一尺木綿麻各一斤鰒堅魚海藻各一連鹽二顆酒一斗米四升鍬五口布二端商布四端訖始各釀ニ大多米酒ーと有る是なり又其用ニ國備米卅斛ーは第八條に見えたる多明米を以て多明酒に釀れるなるが内院の黒白二酒大多米院の黒白二酒共に神代紀に以ニ卜定田ー云々以ニ其田稻ー釀ニ天甜酒ーと有る甜酒を釋に美酒也と有に同じく醴酒なり職員令義解に醴謂ニ甜酒ーと有り和名抄に醰酒（日本紀私記云甜酒多無佐介）酒味長也と見えたり多米多無は食る酒と云義なり（大多米院は外院の西門の北掖に在り酒屋麹室大炊屋の三字にて其門は東に向）

へる事上に第十一條に委しく云り
藥灰は式に凡造酒司酒部一人率燒灰一人駈使五人入卜食山先祭山神燒得藥灰一斛所賈小斧釿鎌各一柄明櫃二合苫二枚と有り儀式に十一月上旬始釀内院御酒次進三國料御贄（國并物數見上）次各燒藥灰使造酒司酒部一人率燒灰并夫五人向卜食山祭山神其料五色薄絁各一尺倭文一尺木綿二兩鍬一口米酒各一斗雜魚腊一籠海藻一連滑海藻一束鰒堅魚各一連鹽五升凡料絹一尺布一端酒部明衣料布一端燒灰料雜物斧一柄鈖鎌各一柄堝一口水椀一口苫二枚明櫃二合疊一枚篩料絁七尺其住山一宿燒得藥灰一斛訖以藥灰和御酒（五斗和内院白黑二酒五斗和大多米院白黑二酒）云々と有り右の卜食山は此より以前に見えざれば此時に臨みて別に卜定せらるゝなる可し偖此灰は和せて黑酒白酒に成す爲なるなり造酒司式の此の細書に記せる文の下に其踐祚大嘗會遣酒部二人於二國齋場院以預其事と有は此なり萬葉十九（四十五丁）新嘗會肆宴歌に天地與久萬氏爾萬代爾都可倍麻都良牟黑酒白酒乎と詠り尚此事壽詞の本文にて説べし（歷朝詔詞解五に此文を引れて其説に此藥灰と云物に灰燒とて此灰を燒く役人有て山に入て燒得る事なり偖件文に依に此藥灰白酒に爲ると黑酒に爲るとの二種有て各其を和すに依て其色白と黑とに成る事と聞えたり然るを造酒式には新嘗會白黑二酒料云々其造酒者云々熟後以久佐木灰三升和合一甕是爲黑貴其一甕不和是稱白貴と有は彼儀式の黑白共に灰を和すと異なり式の如きは白酒は灰を和さゞる尋常の酒と聞えたり世々を經る任に變りぬるにや又中原康富記には二酒共に醴酒なりとして白者白其色也黑者上聊振烏麻粉（クロゴマノコ）と云るは又後の事にて聊其色を見せたる耳也」と有り燒灰の職掌此に至て明らけし又第十七大嘗宮條にも燒灰率造酒童女參進童女始以木燧出火次稻實公燧出火次燒灰吹之云々と有をも思ふ可し）

右の云々と記せるは儀式の此條の上に次進三國料御贄（國并物數見上）と有て次に此の文を記され下に其御贄と此條の藥灰との事を合せて次各獻會所（アツマルトコロ）御贄百捧以上（捧數度々記文獻物無有定數隨時增損）其行列儀也子弟二人捧白木前行五位以上六人次之國司二人次之（介以上）捧著木綿賢木子弟二人次之捧著被麻賢木子弟二人次之（以上左右分）横物次之屯櫃次之缶物次之松明次之蔀次之藥灰次之（以上列途中）捧賢木子弟二人左右分頭在後捧著木綿賢木子弟二人次之國司二人次之（目以上）次捧白木子弟次之摠納内膳司受領送主殿造酒等寮司次一所供御雜器送内膳等諸司と有り其細書に以上列途中と有からは一所に會まりて出るには非ず右の三國の由加物五國の雜器此なる藥灰等各途中の然る可き便處にて打會て行列を爲し内膳司に送りて彼司の處分に任するなり（右の國司とは悠紀主基二國なるを云なり二所供御雜器と有る二所は大嘗宮を云り又儀式の此より下に内膳司より寮司に分送る事を悉く記たり）

大嘗宮は次條に大嘗院とも云り神龜元年十一月御紀大嘗祭條には齋宮と被記たり三代實錄及儀式には齋殿と云り朝堂院に儲らる常の例なり陽成天皇實錄に元慶元年十一月十八日己卯天皇御二豐樂院一自供二大嘗祭一と有は去貞觀十八年八省院燒亡て無りし故なり光孝天皇實錄に仁和元年十一月廿二日己卯天皇御二朝堂院齋殿一親奉二大嘗會祭一先御二悠紀殿一後御二主基殿一云々と有は古の例格の如し式に凡造二大嘗宮一者前レ祭七日神祇官中臣忌部二官人依レ次立率二悠紀國司及雜色人等一爲二一列一亦中臣忌部相別率二主基國司以下一進レ上皆單行各自二朝堂院東西腋門一入至二宮地一（龍尾道南庭也）分二列左右一（悠紀在レ東主基在レ西）鎭二祭其地一國別所レ備幣物庸布四段安藝木綿一斤凡木綿二斤麻二斤鍬八口米一斗清酒二斗濁酒八升鰒四斤堅魚十斤海藻十斤腊一斗六升鹽四升𤭖十口坏十口二國造酒兒各執二賢木一著二木綿一竪二於院四角及門處一訖執二齋鍬一（國別四柄納以二布袋一結以二木綿一）始掘二殿四角柱堀一堀別八鍬然後諸工一時起レ手其宮東西廿一丈四尺南北十五丈中分東爲二悠紀院一西爲二主基院一宮垣正南開二一門一內樹二屏籬（マガキ）一東開二一門一外樹二屏籬一（悠紀國作）正北亦開二一門一內樹二屏籬一西開二二門一外樹二屏籬一（主基國作）二院中垣二國共作中垣南端去レ屏一丈開二一小門一（二國共作）將レ柴爲レ垣押二椊八重一垣末一插將二椎枝一（古語所謂志比乃和惠）諸門高九尺廣八尺（小門准減）編レ楉爲レ扉悠紀院所レ造正殿一宇（長四丈廣一丈六尺棟當二南北一以二北三間一爲レ室以二南二間一爲レ堂南開二一戸一以二席爲レ扉甍置二堅魚木八枝一著二高博風一）構以二黑木一葺以二青草一以二檜竿一爲二天井一席爲二承塵一壁蔀以レ草表裏以レ席地敷二束草一（所謂阿都加）上加二竹簀一其室簀上加レ席席上敷二白端御帖一帖上施二坂枕一（帖枕並掃部寮所レ設其製在二彼寮式一）戸懸二布幌一（內藏寮所レ設）其堂東南西三面並表葦簾裏席障子但西面二間卷レ簾見レ障此院東北角造二膳屋一宇（長廣與二正殿一同）端當二東西一東端二間蔀以二椎柴一東壁下作二棚閣一西端三間爲二盛膳所一膳屋以北造二臼屋一宇（長一丈四尺廣八尺）蔀以二椎柴一西端開レ戸二屋南西並皆樹レ籬別爲二一院一正殿東南造二御厠一宇（長一丈廣八尺）其壁同二正殿一西面開レ戸主基院殿與レ上相對五日之內造畢即中臣忌部率二御巫等一祭殿及門二其幣物五色薄絁各三尺絲二兩安藝木綿一斤筥二合案二脚米二升酒二升𤭖二口坏二口並申レ官請受（後鎭祈亦准レ此）と見たり儀式には此前レ祭七日の上に先レ祭十餘日各大嘗宮所雜材幷菅運二朝堂第二殿前一と有り此次に載たる文を此に移して見べし

式には表立たる作法等も非るが故に省につるなる可し中卯は十三日より廿五日迄の間に在る故に十一月中旬迄の內なり朝堂とは八省院

にて其第一は大極殿なれば第二は小安殿なり尙儀式には此より前十月中旬の所に次各爲レ採＝大嘗宮御新材＝禰宜卜部國司郡司率＝造酒童女物部人並夫等＝向＝卜食山＝祭＝山神＝其料五色薄絁各一尺倭文一尺木綿麻各一斤鍬二口米五斗酒一缶鰒堅魚各二連雜魚腊一籠海藻二連鹽一斗雜菓子一斗稻二束軾新絁一疋布一端綿二屯用＝國祭料物＝酒造童女執レ斧伐レ樹夫等終レ之運＝置齋場＝次各爲レ芟＝同殿料萱＝稻實卜部宮主禰宜卜部國司郡司率＝造酒童女物部男並夫等＝向＝卜食野＝祭＝野神＝其料五色薄絁各一尺倭文一尺木綿一斤鍬一口鰒堅魚海藻各一連米酒各一斗用＝國祭料物＝造酒童女執レ鎌芟レ之夫等終レ之運置齋場＝次各仰＝木工寮＝令下進＝長上工十人＝構造上と有り式には已に第十一條に引る在京齋場の所に入＝卜食山＝採レ材即祭＝山神＝又入＝卜食野＝苅レ草即祭＝野神＝と有て下に採＝大嘗宮材＝准レ此又採＝大嘗宮草＝准レ此と有故に其所に讓りて此には略かれたる者なり其運＝置齋場＝とは十月中旬に採て各其國々の在京齋場に運置て十一月に至て祭より十餘日の先に其大嘗宮を被建る朝堂院に持行事上に引る文の如し尙第十一條に云るを見て知べし又此に稻實卜部宮主と有を宮主を以て任し給ふ事其所に云るが如し備此の卜食山卜食野共に第九條に委しく註せるが如し

前レ祭七日神祇官中臣忌部二官人依レ次立率＝悠紀國司及雜色人等＝爲＝一列＝云々は儀式に先レ祭七日鎭＝大嘗宮齋殿地＝其儀也神祇官中臣齋部二官人依レ次率＝悠紀國司及稻實卜部禰宜卜部造酒童女燒灰等＝令レ持＝鎭料雜物二輦＝入レ自＝朝堂院南掖門＝酒一缶次レ之執下著＝木綿＝賢木上子弟二人次レ之執＝丈尺＝工二人次レ之到＝龍尾道南庭第二堂間＝少時蹲侍悠紀在レ左主基在レ右と有て右の云々と記せる式文に亦中臣忌部相別率＝主基國司以下＝准レ上皆單行と有に當る主基の文無は下に主基准レ此と有る如く其一を云て餘の一を闕せたる者也其中臣忌部相別とは前に先悠紀國司以下雜色人等を率て參り其に別れ復って再主基國司以下雜色人等を率て參り宮地に到りて先の悠紀方と一に成て左右に相分れて列立する事皆單行と有を以知べし儀式の右文に合レ持＝鎭新雜物二薦二と有は下に擧たる薦六なり酒一缶と有も然り鐵四口持レ布と有は下に謂ゆる齋服にて國別四綱と見えたる是なり火二燧る新物に紙八口と有は國別に出す所なるを此に四綱を用て餘四綱は諸工の執る新なる故に行列には立ざるにや其龍尾道南庭第二堂間とは東は含章堂西は含嘉堂なり鎭＝祭其地＝云々は儀式なる右文の續きに于時燒灰率＝造酒童女＝參進童女始鑽＝木燧＝次稻實公鑽＝出火＝次燒灰吹レ火次子弟以＝松明＝炬レ之東北西一人東南角一人所々隨便六人訖稻實卜部辨＝備鎭物＝率＝童女＝先鎭＝東北角＝次東門次東南角次中央主基准此其料庸布四段安藝木綿一斤凡

木綿二斤麻二斤鍬八口米一斗清酒二斗濁酒八升鰒四斤堅魚海藻各十斤腊一斗六升鹽四升瓶十口食薦十枚雜菓子五升柏五把宮主執ニ祭文ー入ニ南門內ー再拜兩段讀ニ祝詞ー（主基入ニ其門內ニ再拜）と見えたるにて詳か也其主基准レ此と有を目易く知む爲に文を成さば先鎭ニ西南角ー次西門次西北角次北門次中央なり又主基入ニ其門內ー再拜とは悠紀と共に其南門の內に入る事なるが悠紀の稻實卜部は宮主此を勤むるに依て祭文を執て祝詞を讀を主基の稻實卜部は氏長者此を勤むるが此は宮主に並びて再拜する耳なる由也（宮主秘事口傳抄に宮主勤ニ悠紀大使ー也氏長者勤ニ主基大使ーと有を以知べし又同抄に河原御禊役者宮主定役也此外行事所レ始荒見河禊同日齋場所點地大嘗宮點地此三箇度者可レ限ニ宮主ー也拔穗使二人三人并中臣官人參集所レ被レ行也と有を以知べし儀此の麻二斤以下鰒四斤以上廿字は大嘗祭式に依て補ふ所なり右の廿字無ては例にも違ひ心行ぬ事多ければなり今思ふに古昔此を書寫すとして一行を脱せるなめり但予が見たる本は何れも脱せれど必善本には必然なる可し）一國造酒兒各執ニ賢木ー著ニ木綿ー竪ニ院四角及門處ニ訖執ニ齋鍬ー（國別四柄納以ニ布袋ニ結以ニ木綿ー）始掘ニ殿四角柱塔ー塔別八鍬然後諸工一時下レ手は儀式亦此文に同じ此は造酒兒の今鎭めたる所に著ニ木綿賢木ーを以挿立て其より齋鍬を以柱塔を八鍬宛掘初るなり（此柱塔を掘事此に至て三度なり先其國の齋場にては拔穗使の所役たるは此時未造酒童女は卜定有し耳にて神事に預らざりける程なればなり此事第六條見べし次に在京齋場にては造酒童女此に仕奉るなり第十一條に引る儀式に造酒兒先執齋鍬始掘レ地并掘ニ四角柱穴ーと見えたるが如し尚此條の末に云を見る可し）

其宮東西廿一丈四尺南北十五丈中分東爲ニ悠紀院ー西爲ニ主基院ー宮垣正南開一門內樹ニ屏籬ー東開ニ一門ー外樹ニ屏籬ー（悠紀國作）正北亦開ニ一門ー外樹ニ屏籬ー（主基國作）二院中垣二國共作中垣南端去レ屏一丈開ニ一小門ー（二國共作）將レ柴爲レ垣押ニ梓八重垣末挿將ニ椎枝ー（古語所レ謂志比乃和惠）諸門高九尺廣八尺（小門准）編レ楉爲レ扉悠紀院所レ造正殿一字（長四丈廣一丈六尺棟當ニ南北ー以北三間爲室以南二間爲レ堂南開ニ戸葦簾爲レ扉甍置ニ堅魚木八枝ー著ニ高博風ー）云々と有は悠紀院の制にて儀式も此に同じきなり下に主基院殿與レ上相對と見え儀式にも其主基院制作裝束皆准ニ悠紀ー焉と有を以主基院も同じ狀なるを知べし其東西廿一丈四尺を中分して東を悠紀院と云て左方に在り西を主基院と云て右方に在り其を一構として四門有り中垣の小門は中央の門にて悠紀主基二院の間に在り押ニ梓八重垣ーは儀式宮垣の細書に押ニ收八重垣ーと見えたり梓ノ字を脱せるなり掃部寮式にも押梓と云目見えたり諸門高九尺廣八尺（小門准減）は儀式に高廣各一丈二尺小門准減と見ゆ正殿の下に以ニ北三間ー爲レ室以ニ南二間ー爲レ堂と有は內陣外陣の謂なり（其正東正西の門の事は正東少北開ニ一門ー云々正西少北開ニ二門ー云々と有り其東西二門は屏籬外に在り南北二門は屏籬內に在なり屏籬とは袖垣を云なり末挿以ニ椎枝ーの末を上に附て押ニ梓八重垣末ーと讀は誤なり儀式にも押ニ收八重垣ニ末挿ニ椎枝ーと有たるも共に讀僻る人多かり梓は八重垣の本迄衞立る故に押收と云ひ椎枝は

籬の上方に挿む故に末と云るにて此末稍は柴爲垣の垣の秀なるを云り椎枝を志比乃和惠と云る古語今知難し和惠（ワエ）は枝の意ならば和惠にては假字違へり和延と作る可なり然れども儀式にも式にも然有て當時此計りの假字を書誤る可ならねば猶別義有なる可し強て思ふに和は袁に通ひて大小の小の意惠は殖にて其生立を云なれば和惠（ワエ）は小生（コハヘ）と云義ならむか俗に木枝の末方なるを受和延（スワエ）と云は末枝（スワエ）なれども其にては非る可し構以黑木皆以青草以檜竿爲天井席爲承塵壁蔀以草表裏以席地敷束草（所謂阿都加）上加竹簀其室簀上加席席上敷白端御帖帖上敷坂枕（帖枕并掃部寮所設其製在後案式）戶懸布幌（內藏寮所設）其堂東南西三面并表葦簾裏席障子但西面二間卷簾見障は儀式に構以黑木皆以青草其上以黑木爲町形以黒葛結之以檜竿爲承塵骨以黑葛結之以小町席爲承塵壁蔀以草表用伊勢斑席裡用小町席鋪地以束草（所謂阿都加草）以播磨竹簀加其上竹簀上加席既而掃部寮以白端御疊加席上以坂枕施疊上內藏寮以布幌懸戶其堂東南西三面并表葦簾裡席障子但西面二間卷簾と見えたり其町形とは太古の町形の如く十文字に結束ねたる狀を云なり承塵とは天井なり束草を阿都加草と云は大束草にて地に敷事の多き故の名なり竹簀は和名抄に簀（功程式板敷簀子須乃古）床上藉竹名也と有が如し神代紀に柀可以爲顯見蒼生奧津棄戶將臥之具と有る棄戶は借字簀上にて人屋の床上を云れば此の簀の事なり右の掃部寮の設る御帖坂枕等は謂ゆる神座の料なるなり掃部寮式に十一月中卯酉剋官人以下掃部以上卜食人十人持御座等物自大嘗宮北門入鋪白端御帖十一枚布端御坂枕於悠紀正殿中央云々又主基殿亦如之と有り又白端狹帖（長九尺廣四尺五寸）端料暴布二條（長各九尺五寸廣六寸）裏料暴布一丈八尺麻八兩一分木綿三兩二分織席一枚編薦二枚細繩十五丈長功日一人半中功日二人短功日二人半と見え又御坂枕一枚（長三尺廣四尺）料編薦一枚織席一枚端料曝布一尺七寸五分麻二兩木綿一兩三分長功一人小半中功一人大半短功二人と有り（町形をば姓氏錄額田部連條には田町形と云り田町形とは其町の形田の縱橫に畝を以界たるが十文字の如くなるを云り田字も其より成たる象形ながら當時未天下に文字を以て用を通さゞる允恭天皇の御世なれば田の町に依て云る名なり此を以て其形を思ふ可きなり）此院東北角造膳屋一宇（長廣與正殿同）云々主基院殿與上相對五日之內造畢は儀式に正殿東南橫御厠一宇（長一丈廣八尺高七尺西戶壁并所餝葺制同正殿）中垣北六許尺橫五間膳屋一宇（其制同正殿）東三間蔀以柴裏用葛野席東壁下作楉棚（高二尺）西一間爲盛膳所其西南間皆以席柴蔀之北垣南六許橫三間臼屋一宇（長一丈六尺廣一丈與盛殿東頭相對）其西縱神服柏棚（左右各有四柱長一丈五尺廣五尺高四尺）五日之內造畢所須椽六百荷柴千二百荷葛二百荷椎枝二百五十荷承塵骨

新檜樽卅四材菅草千園葛野席百五十枚小町席百枚伊勢班席五十枚其主基院制作裝束皆准二悠紀一焉と見えたり其膳屋は盛レ膳所と有れば御膳御贄等を調進する屋なり其神服柏棚は第廿八條に神祇官一人引二神服男女等一到二大嘗宮膳殿一置二酒柏一出と有る所なり臼屋は第廿八條に造酒兒先舂二御飯稻一云々と有る所にて又酒をも舂たるなる可し皇大神宮儀式帳(造酒作物忌職掌條)に陶内入作進瓱三口仁碓ヲ舂白御酒備儲供奉と有を以知べし古事記中卷の大御歌に許能美岐袁迦美祁牟比登波曾能都豆美宇須邇多豆々と詠せ給へるも臼に立て也於二吉野之白檮上一作二横臼一而於二其横臼一釀二大御酒一と有る傳(卅三)に右文を引て其說に儀式大嘗祭酒の事の中に陶臼と云物は此新が大嘗祭式にも陶臼三十口と見えたり又臼四腰杵八枝と有は御酒料の米を舂具と聞えたり偖又思ふに此横臼に釀て奉りし御酒は書紀に醴酒(コザケ)と有て一夜酒なる故に臼には舂しか然れば上代にも醴酒をこそは臼に舂けめ」云々と有るが如く悠紀主基の黑酒白酒も醴酒なる事上に註せる如くなれば臼にて御飯稻と酒とを舂て献りしより臼屋は其用に有なりけり造酒司式新嘗會白黑二酒新條に缻大篩三條と有下に一條篩レ灰二一條篩レ酒と注せるは右の酒を臼にて舂て漉す爲なる事壽詞の粉走の下に委しく云り見合て曉る可なり(式に膳屋臼屋二宇の南西並皆樹レ籬別爲二一院一と有て二屋共に東北隅に在故に東北の二面は外に垣有故に南西二面に籬を樹れば即別に一院と成なり右の儀式に西南開皆以二席葉一蔀レ之と有は即右の樹レ籬に當る文なり然れば神服柏棚も其籬の内に在なる事云も更なり右の一院東南角なる處に相對ふなり主基院も亦此に准ふ可き由本文に見えたり) 即中臣忌部率二御巫等一祭二殿及門一其幣物云々并中官請受(後鎭祈亦准レ此)は儀式亦如是し偖此は大殿祭御門祭なる事祝詞講義に此文を引る其下に註せるが如し(後鎭料亦准レ此とは寅日卯一點神祇官中臣忌部引二御巫等一眞二祭大嘗宮殿一其幣如レ初訖即令二兩國民壤却一云々と見えたる是なり)

偖此大嘗宮を被造る事は天太玉命の神胤なる齋部氏の預り供奉る可き事なるに忌部は中臣と共に其地を鎭祭ると殿及門を祭ると此二に仕奉る耳こそは有けれ大殿祭詞に皇御孫之命乃御殿乎今與山乃大峽小峽爾立留木乎齋部能齋斧乎以伐採氐本末乎婆山神爾祭氐中間乎持出來氐齋鉏乎以氐齋柱立氐皇御孫之命乃天之御翳日之御翳止造奉仕留禮瑞之御殿云々と云ふ天津奇護言の旨に合はざるは中古より中臣の權恣なりしかば彼が爲にぞ其職掌を失へりけむ(稻實卜部は國郡卜定には更なり卜定田の事及稻實に預る事こそは奉行ふ可き事なりけれ齋部にて稻實殿の柱穴を掘る等の事にも預るに何れの時にか齋部を一度被遣ざりし例の遺れるなる可し又造酒童女は酒を造る爲の物忌也其事にこそは係つらはしけれ在京齋場及大嘗宮を造る小忌鍬を以物爲るなどは此も齋部を強

て貶さむ爲に其職を奪ひて彼に附たる者な
る可し何れにも平城京以來の例と思はる　抑齋部の造宮に仕
奉る所由は少縁の事には非ず天照國い日宮に始れる
事古語拾遺に太玉命所ㇾ率神名曰ニ手置帆負命ㇾ讃岐國忌部祖也
彥狹知命紀伊國忌部祖也と有て其天石窟段に令ㇾ手置帆負彥
狹知二神之孫以ニ天御量ㇾ伐ニ大峽小峽之材ㇾ而造ニ瑞殿ㇾ
兼作ㇾ御笠及矛盾ㇾと見えたる是其始なり仍て御天降
段に宜ㇾ太玉命率ニ諸部神ㇾ供ニ奉其職ㇾ如ㇾ天上儀ㇾ仍
令ニ諸神亦與陪從ㇾと有れば世と共に造宮の事に於て
は其氏の管領す可き職掌なり神武天皇段に建ニ都橿
原ㇾ經ニ營帝宅ㇾ仍令ㇾ天富命太玉命之孫 率ニ手置帆負彥狹
知二神之孫ㇾ以ニ齋斧齋鉏ㇾ始採ニ山材ㇾ搆ニ立正殿ㇾ云
云故其裔今在ニ紀伊國名草郡御木麁香二鄕ㇾ採ㇾ材齋部
所ㇾ居謂ニ之御木ㇾ造殿齋部所ㇾ居謂ニ之麁香ㇾ是其證也
と見えたり然るを何時の程よりか他氏の人の預る事
と成りて齋部の職を失ひたりつと見えて同書に凡奉
造神殿者皆須ㇾ依ニ神代之職ㇾ齋部官率ニ御木麁香二鄕齋
部ㇾ伐以ニ齋斧ㇾ掘以ニ齋鉏ㇾ然後工夫下ㇾ手造畢之後齋
部殿祭及門祭訖乃所ニ御坐ㇾ而造ニ伊勢宮及大嘗由紀
主基宮ㇾ皆不ㇾ預ニ齋部ㇾ所遺四也と見えたり　倭姫命世記に垂仁天皇
廿六年巳巳冬十月甲子作ㇾ遷ニ天照大神於度會五十鈴河上ニ云々五十鈴
原乃荒草木根刈掃比大石小石造平氏遠山近山乃大峽小峽ニ立並木乎

齋部之齋斧乎以天伐採大本末乎波山祇衞奉ㇾ祭氏中間乎持出來氏齋鉏
乎以天齋柱立云々と見え又雄略天皇大御世に止由氣大神御鎭
座の下にも故擧ニ手置帆負彥狹知二神之裔ㇾ以ニ齋斧齋鉏ㇾ始採ニ山
材ㇾ搆ニ立寶殿ㇾ云々と有れば素より神宮を奉造る事齋部の職なりしを
後に停止られたるなり此事講義十三
卷奉ㇾ遷ニ太神宮ㇾ詞の下に記せりき　天照大御神の大御詔に
天上の儀の如物爲べく仰給へりし故事に違ひて右の
如伊勢神宮及大嘗宮を造奉る職を他氏に任し給ふ始
は難波長柄朝廷に萬の制度を改させ給ふに起り又中
臣の權恣なりし故に齋部は其下風に立て其指揮を請
ばかりに衰へて終に其職掌に預る事無く成て唯大殿
祭御門祭に仕奉る耳神代の形は遺れるなり「又古語拾遺に殿祭門祭
昔者元太玉命供奉之儀齋部氏之所ㇾ職也雖ㇾ然中臣齋部共任ニ神祇官ㇾ相
副供奉故宮内省式曰中臣率ニ御巫ㇾ齋部供ニ御殿祭ㇾ中臣齋部侍ニ御門ㇾ至ニ寶龜
年中ㇾ初少從五位下中臣朝臣常磐ニ改ㇾ供爲ㇾ侍中臣ニ齋部ㇾ侍ニ御
門ㇾ者從ニ今昔以ㇾ後爲ニ後例ㇾ于今未ㇾ改所ㇾ遺五也と有たり當昔の狀を
思ふ可き者なり、猶大殿祭
詞の講義に委しく云り
廻立殿の事は式に凡 木工寮 大嘗院以北造ニ廻立宮正
殿一宇ㇾ長四丈廣一丈六尺棟當ニ東西ㇾ其内三間以爲ニ御浴之東間ㇾ戸 搆以ニ黑木ㇾ以ㇾ苫葺
ㇾ之席爲ニ承塵ㇾ供御雜物並所司供ㇾ例供ㇾ之 と見えたり儀式の趣亦此
に同じ廻立殿とは天皇の大嘗宮に渡らせ給ふ初に御
湯を奉り御衣を改させ給ふ所なり偖當日に悠紀の神
事竟て後に又此殿に行幸なりて御湯を供奉り衣服を
改させ給ひ偖又主基の神事を始させ給ふが故に廻立
殿と號る由古人の說なり　但右の搆以ニ黑木ㇾ以下の文儀式に
は搆以ニ黑木ㇾ葺以ㇾ苫壁蔀以ㇾ苫

覆二板上一以二席爲一承塵一主殿寮以二斑幔一張二東西北三間一と有て其細書に自二大嘗宮北垣一繞二廻立殿以北一と見えたり是にて委しく其狀所知るなり

神楯戟は式に凡大嘗宮南北門所レ建神楯四枚（各長一丈二尺上廣三尺九寸中廣四尺七寸下廣四尺四寸五分厚二寸）戟八竿（各長一丈八尺）左右衞門府九月上旬申レ官令三兵庫寮依レ樣造備一（楯丹波國楯縫氏造之戟紀伊國忌部氏造之祭畢便收二衞門府一）又朱雀應天會昌等門所レ建大楯六枚戟十二竿亦令三同寮修理一と見えたり儀式にも九月上旬左右衞門府申レ官令三造兵司作二大嘗宮南北門神楯四枚云々戟八竿云々大門新大楯六枚戟十二竿一亦令三同司修理一と有て同じ事ながら各自に異有り（兵庫寮と造兵司と別なり職員令兵部省所屬に造兵司有掌下造二雜兵器一及工戶戶口（コゥベノコク）名籍事上と有り然るを官位令正六位の所なる造兵正の下に寬平八年併二兵庫寮一と見えたれば儀式の時に造兵司有て式の頃は兵庫寮に併せられし後なるが故に造兵司の日無なり但續紀に天平十六年四月甲寅廢二造兵鍛冶二司一と有れども未行はれざりしか復廢して後に置れたるか知難し偖其大門と云るは古朱雀應天會昌等の名無き以前に稱（トナ）ふる任に云るなり是等を以ても儀式の文は貞觀に記されたりと雖も古きを存せるを知べし因に云古語拾遺神武天皇段に饒速日命造二備矛盾一と有は其物を製作れるには非る可し其を竪て威儀を嚴增たるなり然れども此は古くは物部氏の預り仕奉れる事なりしを衞門府を被置たるより後に今の如くは成れるなり第二十四條に云を見る可し）丹波國楯縫氏の本貫は神名式に多紀郡川內多多奴比神社二座と有て和名抄に河內鄕有り又氷上郡楯縫神社有れば右の二郡に住有しかば其祖神とて祭れるなる可し神代紀に以二紀伊國忌部遠祖手置帆負神一爲二作笠者一彥狹知神爲二作盾者一と見えたるを古語拾遺には手置帆負命（讚岐國忌部祖也）彥狹知命（紀伊國忌部祖也）と見え天石窟段に令三手置帆負彥狹知二神云々兼作二御笠及矛盾一と有るも御笠は手置帆負神矛盾は彥狹知神の作給ひしかば紀伊國忌部より共に獻る可きを楯は其支族の別れて丹波國より令獻給へる者なり但馬國にも養父郡に楯縫神社名草神者有は彼神の裔の蕃息りて其國にも住有し程を知べし名草は紀伊國の郡名にて彼忌部の住る御木麁香の二鄕も其郡に隷る所なり（但拾遺に手置帆負神を別て讚岐忌部祖也と有て神代紀に紀伊國忌部遠祖手置帆負神と有に合ざるも知べくなれども拾遺の神武天皇段に率二手置帆負彥狹知二神之孫一云々故其裔今在二紀伊國一と有れば右の讚岐國忌部祖也とは其支族の彼國に有たる故云るなり其下に手置帆負命之孫造二矛竿一其裔今分在二讚岐國一云々と有は後に紀伊國より分れたる證也尙右の二神の父子に御在る所由は日本紀傳に云べし）紀伊國忌部氏は右に云る手置帆負彥狹知二神の孫也永享大嘗會記に兵庫寮神楯梓立之件楯梓紀州鳴神社氏人等相二論之一經二御沙汰一之後祝與二氏人一相合楯一帖充造進と有然れば其頃已く丹波國楯縫氏より楯を奉る事は止て彼國より奉れりし也神名式に名草郡鳴神社（名神大月次相嘗新嘗）と有り右の大嘗會記に據に忌部氏の神なる事著明し其は此社は日前神社國懸神社の東五町許に在り其社より南六町許に小山有り此を忌部山と云ひ山下に小村有り其を忌部村と云を證と爲べし（文德天皇實錄に嘉

祥三年十月乙巳朔壬子紀伊國鳴神從五位下、清和天皇實錄に貞觀元年正月廿七日從五位下鳴神從四位下と見え本國神名帳には正一位鳴大神と見えたり旧拾遺に手置帆負命之孫造矛竿其裔今分在讃岐國每年調庸之外貢八百竿是其事等證也と有れども其大嘗祭の載などは本國紀伊國より奉りしなりけり

御服の事は式に凡御大嘗殿之時所服御服二具衾三條敷衾三條帖枕二枚絹幞頭三枚望陀布單二張幌二具筥三合預令縫殿寮裁縫弁備並造儲又供同殿衾八條單八條令同寮縫備と見えたり右の望陀布單は第卅條大嘗宮に行幸の所に大藏省預敷二幅布單と有る其なる可く單八條は同條に宮中道并庭者以八幅布單敷と見えたる其より儀式亦此に同じ（此は第廿七條に載たる卯日儀に是日云々別差中臣忌部官各一人率縫殿大藏等官人一率置衾單於大嘗宮悠紀殿一率內藏官人一率置御服幷絹幞頭於廻立殿一と有る是也一條大閤御說に廻立殿に行幸なりて御湯を奉る天羽衣と云は主上の御湯船に降させ給ふ時召るゝ御帷子の名なり明衣（ヤカハ）と云は御湯御裳を云ふ湏衣（ナミヤヌ）と云は御湯等に覆ふ絹なりと有れば右の天羽衣明衣湏衣の三を合せて絹幞頭三枚と云に有るなる可し）

御帖の事は式に凡大嘗殿所須長帖十二枚短帖六枚疊十六張預令掃部寮造備と有て儀式此に同じ

雜物の事は式に凡供神御雜物者大膳職所備多加須伎八十枚（高五寸五分口徑七寸無蓋着折足四所別盛二鰒及烏賊各十四兩熬海鼠十五兩魚腊一升海菜十兩鹽五勺一）並居葉椀氐（久善）覆以笠形葉盤（笠形）比良氏似以木綿結垂裝餝比良須伎八十枚（高及口徑裝餝與多加須伎同但足不着別盛其物各別五合）山坏當口（別盛貽貝鮮鰒各一升）裝餝與比良須伎同 鮑盛白筥三百合（長一尺五寸廣一尺五寸深三寸）盛東鰒筥五合（別納三十二斤）熬海鼠筥十六合（別納三十二斤）烏賊筥十二合（別納六斤）佐渡鰒筥四合（別納十斤）煮堅魚筥十五合（別一籠不開）腊筥五十五合（別一籠不開）與理刀魚筥十一合（別納三斗五升）鮭筥二合（別納二十隻）昆布筥四合（別納五斤）海松筥六合（別納六斤）紫菜筥四合（別一籠不開）海藻筥六合（別納六斤）橘子筥十合（別納十蔭）搗栗子筥五合（別納一升）扁栗子筥五合（別廿籠不開）干柿筥二合（別納十連）梨子筥五合（別納一斗）椑栗子筥六合（別納一斗）削栗子筥二合（別納二斗）熟柿筥三合（別納一斗）柚筥二合（別納三顆）勾餅筥五合末豆子筥五合大豆餅筥十合小豆餅筥十合捻頭筥五合䊪粔筥五合（以上六種別納三六枚）祭畢山坏以上皆置山野淨處（餘皆須給諸司）造酒司所備等呂須伎十六口（口別酒五升）都婆波卅二口（十六口別酒一斗十六口別五升各以八口置二一案）甌八口（口別酒一斗五升各置一案）匜六十口小盞六十口（以上各盛置案）長女柏一筥（置案）祭畢都婆波以上亦置山野淨地（餘皆准）上須給と見えたり第三十五悠紀節會條に宮內引大膳職造酒司所備多賀須伎比良須伎等物進見於庭と見えたる是也（但大嘗儀式に見えざるは此に譲りて略けるなり其鮑盛白筥三百合は盛東鰒筥五合以下椑栗子筥五合以上凡て二百四十筥と匜六十口の數とを合せて三百合の數に成なり然れば匜と盞とを一に有るなり北山抄に進酒司等呂須伎都婆波に預なりと見ゆ）其多加須伎は高坏にて比良須伎と同物なるが其制樣折足の四所なるを高坏と云ひ足の折ざるを平坏と云別てるにぞ有ける細

書に高皮口徑裝飾與二多加須伎一同但是不レ折と有るを考ふべし此二物を北山抄注に鎚手等也と有り此事の起り高橋氏文に見二阿西山梔葉一天高次八枚刺作見二眞木葉一天枚次八枚刺作天云々と見えたり斯れば古は木葉を以物爲るを此頃に至ては木を以製造れる器と成れりしなり下に等呂須伎と云は泥を以て涅ねたる名と聞ゆ泥とは埴の事なり又下に都婆波と云るは鐔土と云事にて同じ毬の類ながら刀の鐔に似たる所の有を以云なる可し但此は事の因に云なり然れば古の高次平次は式に高五寸五分口徑七寸など云る狀なる物には非りしを中古に至て其多加須伎比良須伎といふ名耳は猶古にて其物は異に成れりし古なり借有の阿西山を阿字を年中行事秘抄に引るには阿に作り西字を同抄一本に曲に作れり和名抄安房國安房郡に河曲郷有て加波和と註せり高橋氏文に上總國安房大神乎御食都神止坐奉天云々と有も由有ること也其御食都神と申すは豐宇氣毘賣命に坐を其神を大和國廣瀬に齋奉れるを河曲と云ふ地なる事大忌祭講義に注る如くなれば阿西山よりは河曲山の方正しかる可し安房大神と申すは式に安房坐神社と云る其には非ず齋部氏の阿波國より其本國の神なるからに古事記に粟國謂二大宜都比賣一と有る其神を遷祭れるが此より大膳職に齋奉れりしかば其國には官帳に載れる社は無き筈の事なり高橋氏文に但云二安房大神一爲二御食津神一者今大膳職祭神也と有を以曉る可し

葉椀を久菩氏と訓るは其形手の窪みたる所に物を受納るが如くなるを以云稱なり第卅二條に引る江次第卯日神膳の下に次御肴鮮干合八種置二御飯左一次菓子在二御肴右一御飯以下幷盛二窪手一置二小高坏一と有は此に同じ和名抄に葉椀本朝式曰十一月辰日宴會其飲器參議以上朱漆椀五位以上葉椀和名久保天と有る其を儀式には造酒司人別賜レ柏と見えたり著て其稱は食山に採る事第九條に記せるが如し元亨大嘗會記に宮内省より獻る久保天をば多加須伎比良須伎と稱くと云るは此式及江次第の趣に違へり空穗物語歌に新事も聽す成にし笠間には神の多かる久菩氏解とて」と詠るも笠間神は大宮賣神に坐故に飲器の葉椀を以云るなり此事大殿祭詞別の講義に委しく說たるが如し

葉盤を比良氐と訓るは其狀手を平に成せるに似たるを以云なり神武天皇御紀に作二葉盤八枚一盛レ食饗レ之と見えたる其下に葉盤此云二毗羅耐一と有る釋に葉盤柏葉盛レ物也と註せる如く食を盛る器なるを此に用たるは然らず覆以二笠形葉盤一と見え本註に比良氐似二笠形一と有れば物を盛にては無く其覆に用られたるなり類聚三代格に柏十五把枚手六十枚新と有れば柏葉を用たりと見ゆ和名抄に漢語抄云葉手比良天と有も葉の義を以當たる字なり第三十二條に引る江次第卯日條に姫先取二葉盤一奉二天皇一天皇以二御箸一御飯盛授レ姫云々姫亦以二葉盤一奉二天皇一々々合二盛八種肴於一枚一授レ姫云々次菓子十二葉盤列置如レ此と有り此にては上の葉椀の用に似て式文の如くには非ず古事記詞志比宮段に眞木灰納レ瓫亦箸及比羅傳多作皆々散二浮大海一以可レ度と有も比羅傳に食を盛て奉れと云御諭言なる

可し委しくは記傳に詳なり就て見べし但此記傳と箸とは御食の祈なる
を思ふに右の艶は御酒なるべくや若然も有ば眞木灰酒艶と有しな酒
たを艶に誤れるなる可し上にも註せる如く大嘗の黒酒に久佐木灰を入
れて醸れるは上古は如此くして物爲けむと思ひければなり然れど此は
事の因に試に云耳也神樂歌韓神には八平手を手に採持て我韓神の韓
招爲むや韓招爲むやと有を梁塵抄に八平手は八枚の平盤なり柏葉に
て刺て神供を盛る物なり新勅撰集に霜枯や夏の葉葉を八枚手に刺と
ぞ急く神の宮人と有り刺とは葉と葉と縫合せて笠形に作るを云なる
可し後拾遺集に神祭る卯月に成れば奈良山の楢の葉柏本つ葉も無し」
と詠れば多くは楢又枏(ホヽガシハ)を多く被用たるにや萬葉に皇
祖神之遠御世三世波射布折(イ、フチリ)酒飲等伊布此保々我之波」と
有は遠御世に祝ふ事の時は此枏の葉の柏にて酒を飲たりとなり或説
に保々即枏音也と云は何事ぞや保々は彼葉椀などの如く内に含ま
りて物を納(イレ)る所有る由の名にて本より我が古言なり其餘にも
式には槲柏共に加志波と訓み又長女柏の名有り儀式には以弓葉
爲酒柏と見え江次第に本柏萬葉集中に見ゆ柏安可眞我之波金葉集
に玉柏など有り此を或説に皆因葉形色而得名非別種也と有は然
る言なり又式に青槲干槲等の事有て上に引るか如し然れば生なるをば干たるをも共に用らるゝ事なるなり偖高千穗宮
に初國所知食し皇御孫命の大御世の大嘗祭より始
て其大御饌の事は天日鷲命より以來繼々相承て仕奉
れりけむ大嘗祭に多米々多米酒大多米院多米酒波等
の事有は神代の迹に依せ給ふ所と聞えたるを猶思合
せらるゝ事有り政事要略廿六年中行事十一月條に引たる多米宿
禰本系帳に天皇自爲國大歡然之時供御大飯已
不聞食仍召氏人等令作御飯特被詔勅小長
田命作備御飯進御之日米吉聞食即垂詔備仕奉御
飯甚有香美平服聞食故召小長田命者特賜嘉
名朕御多米負賜被詔定多米連也爾時賜大歡政
亦任御田之職賜天皇御命贖之政掌以仕奉也と有
れば此時に始れる狀なれども文に召氏人と云ひ名
に小長田命と負るも素より其職に仕奉れりしが爲な
り文に任御田之職と有をも思ふ可し此天皇は成務
天皇に御在り其は同書に載る同氏系圖に志賀高穴太
宮御宇若帶天皇御世以米入大能而獻天皇也因改
令宗賜多米連姓爾時天皇御命贖乃人乎四方國造等献
支と見え同書に引る姓氏錄に多米宿禰出自神魂命五
世孫天日鷲命也十四世孫小長田稚足彦天皇諡成務御世
仕奉大炊寮御飯香美特賜嘉名負朕御多米六世孫
三枝連男倭古連之後天渟中原瀛眞人天皇諡天武改賜宿
禰姓と見えたり猶大殿祭講義補遺伴緒の下に云る
を見る可し其姓氏錄は今本と異也今本には右京神別上に多米宿禰神魂命五世孫天日鷲命之後也成務天皇御世仕
奉大嘗祭供御飯香美特賜嘉名と有は甚く略ける者なり又左京神別中に多米連多米宿禰同祖神魂命五世孫天日和志命之後也成務天皇御
世仕奉大嘗祭賜多米連也又大和國神別に多米宿禰神魂命二十二世孫旨保止命之後也と見ゆ神魂命より五世は天日鷲命其より十四世は小
長田命なれば小長田命の曾孫なる可し又河内國神別には多米連神魂命兒大不都倭居命之後也と耳見えたり其本系帳に賜大歡政とは大
嘗祭の多米に仕奉るを云ひ任御田之職とは供奉の御田な[?]仕奉るなり賜天皇御命贖之政とは祓除の御贖物に仕奉るなり
江次第御贖物に大炊官入散五穀神祇官引大麻と有は多米連の大炊寮に仕奉りし迹の遺れるなる由第四條に說るを合せて思ふ可し
若て其大膳職內膳司の仕奉る職掌は元高橋朝臣の家
業なりしなり高橋氏文に掛卷畏向日代宮御宇大足彥

恐代別天皇五十三年癸亥八月詔群卿曰朕顧愛子何日止乎欲巡狩小碓王又云倭武王所平之國是月行幸於伊勢轉入東國冬十月到于上總國浮島國爾時磐鹿六獦命從駕仕奉矣天皇行幸於葛餝野令御獦矣大后八坂媛波借宮爾御坐磐鹿六獦命亦留侍此時大后詔磐鹿六獦命此浦有異鳥之音其鳴駕我久々欲見其形卽磐鹿六獦命乘船到鳥許鷩飛於他浦猶雖追行遂不得捕於是磐鹿六獦命詛曰汝鳥戀其音欲見形飛遷他浦不見其形自今以後不得登陸若大地下居必死以海中爲住所還時顧舳魚多追來卽磐鹿六獦命以角弭之弓當遊魚之中卽著弭而出忽獲數隻仍號曰頑魚此今諺曰堅魚今以角作釣柄釣堅魚此之由也船遇潮涸天渚上爾居奴堀出止爲爾得八尺白蛤一貝○景行天皇御紀に五十三年秋八月丁卯朔天皇詔群卿曰朕顧愛子何日止乎冀欲巡狩小碓王所平之國是月乘輿幸伊勢轉入東海冬十月至上總國從海路渡淡水門是時聞覺賀鳥之聲欲見其鳥形尋而出海中仍得白蛤云々と有り氏文の趣にては天皇の葛餝野に出坐りし間に大后の其聲を聞附給ひて後の事なるが少異也今此二を合せて思ふに始天皇の淡水門を渡坐し時に聞給へるを其後に大后も其聲を聞して磐鹿六獦命を捕に被遣しなりけり偖其覺賀鳥の傍訓に美佐古と有は如何有む和名抄鶚鵰の下に和名美佐古今按古語用覺賀鳥三字云加久加乃土利見日本紀私記公望案高橋氏文云水佐古と有れども然る事見えざるは當時然る本の有しなる可し磐鹿六獦命捧件二種之物獻大后卽大后譽給比悅給氐詔久甚味淸造欲供御食爾時磐鹿六獦命申久六獦令新理天將供奉止白天遣喚無邪志國造上祖大多毛比知々夫國造上祖天上腹天下腹人等爲膾及煮燒雜造盛天見阿西山梔葉天高次八枚刺作見眞木葉天枚次八枚刺作天取日影爲縵以蒲葉天美頭良乎卷採眞佐氣葛天多須氣爾加氣爲帶足纏乎結天供御雜物乎結餝天乘輿從獦還御入坐時爾爲供奉○御紀の上文の續きには於是膳臣遠祖名磐鹿六鴈以蒲爲手繦白蛤爲膾而進之故美六鴈臣之功而賜膳大伴部と見えたり新撰姓氏錄を下に引るを見合す可し但谷川士淸が通證に姓氏錄曰賜襷爲御膳部と有れども今本に見えず偖右の供御雜物乎結餝天云々の事は此條の始に引る式に凡供神御雜物者大膳職所備多加須伎八十枚并居葉椀覆以笠形葉盤以木綿結垂裝餝と有る起原なり此文の下に以木綿代蒲葉云々と有を思合す可し然れば高橋氏の職掌大膳職に歸したりと雖も舊を存する事知べし又蛤膾の事は式に貽貝鮓鰒鮓等の見えたる是其餘風と云べく堅魚は式の箟物の始に盛東鰒一籠五合と其最初に出たるなど舊古の迹に依れりと思しき事少からず知々夫國造は國造本紀に瑞籬朝御世八意思金命十世孫知々夫彥命定賜國造一年祠大神と見えたり大多毛比は國造本紀に无邪志國造云々兄多毛比命と有る此なり大(オホ)と兄(エ)と同じ言なり大女少女と有を延比賣於登比賣と云る思合す可し此時勅久誰造所進物問給爾時大后奏此者磐鹿六獦命所進之物也卽歡給比譽賜天勅久此者磐鹿六獦命獨我事波非矣斯天坐神乃行賜留倍物也大倭國者以行事負名國利磐鹿六獦命波朕我王子等爾阿禮子孫乃八十連屬爾遠久長久天皇我天津御食乎齋忌取持天仕奉止負賜天則若湯坐連等始祖物部意富賣布連乃佩大刀乎令脫置天副賜支○右の獨我事波非矣の事字は予が心を以補へるなり其は上に誰造所進物問給云々

所ㇾ獻之物也と有る其即六鴈命の事（ワザ）にて次なる行賜借留物也な合せて其下に以ㇾ行事ㇾと云る事著ければ今事の字を加へつるなり伴信友は心字ならむと云ひ予も前には奉字か又は行字ならむかとも思ひしかとも非りけり倩思ふに磐鹿六雁命は膳夫臣と爲て仕奉らしめ意富賣布連は采女臣と爲て陪膳の事に仕奉らしめ給へるなる可し此即比禮掛伴男手襁掛伴男なる事大殿祭詞の講義に云るが如し姓氏錄天和泉國神別に采女臣神饒速日命六世孫伊香我色雄命之後也と有り天孫本紀に據て考ふるに大咩布命は其子なれば予か說の强ざる事を思ゆ又大咩布命と申すは大女部と云ふ義にて國々より奉れる采女の陳梁たる由の名なり又右京神別上に采女朝臣石上朝臣同祖神饒速日命六世孫大水口宿禰之後也と有れども大水口宿禰命は五世孫なる由天孫本紀に見ゆれば伊香我色雄命の父なる可し其同統なる事其下に穗積臣采女臣等祖出石心命子と有るを證と爲べし但其下に伊香色謎命を大綜杵大臣之子と有は伊香我色雄命も共に其子ならむとは見ゆる物から若其知く爲る時は采女臣采女朝臣の出自二に派るゝ事と成なり同錄左京神別に穗積臣伊香賀色雄命男大水口宿禰之後也と有は父子を取違へたるなる可し倩大嘗祭神今食新嘗等の神饌には必高橋朝臣采女朝臣相並び仕奉れる事此に由與れるなる可し和名抄に上總國周准部湯坐鄕見えたり尚第卅二條采女朝臣の下に云を見べし

又此行事者大伴立雙天應ニ仕奉ニ物止在止勅天日堅日横陰面背面乃諸國人乎割移天大伴部止號天賜ニ於磐鹿六獦命ニ又諸氏人東方諸國造十七氏乃枕子各一人令ㇾ進天平次比例給天依賜支山野海河者多邇久々乃佐和多流美岐波加弊良乃加用布美岐波波多乃廣物波多乃狹物毛乃荒物毛乃和物供御雜物等兼攝取持天仕奉止依賜如ㇾ是依賜事波朕我獨心耳非矣是天坐神乃命叙朕我王子磐鹿六獦命諸友諸人等乎催率天愼勤仕奉止御贈誓賜天依賜岐

○大伴部とは六獦命に隷て膳夫の事に仕奉る部を云るにて天忍日命の末なる大伴宿禰大伴連の事には非す次に今令ㇾ讀ニ忌火ニ大伴造者物部豐日連之後也と云武藏國知々夫大伴部之祖三宅連意由なと有を以知べし御紀に於ㇾ是膳臣遠祖磐鹿六鴈以ㇾ蒲爲ㇾ手襁ニ白蛤爲ㇾ膾而進ㇾ之故美ニ六鴈之功ニ而賜ニ膳大伴部ニと見え又姓氏錄左京皇別に膳大伴部阿部朝臣同祖大彥命孫磐鹿六鴈命之後也景行天皇巡ニ狩東國ニ至ニ上總國ニ從ニ海路ニ渡ニ淡水門ニ出ニ海中ニ得ニ白蛤ニ於ㇾ是磐鹿六鴈爲ㇾ膾進ㇾ之故美ニ六鴈ニ賜ニ膳大伴部ニと有に心得べき事有り六鴈命の出自にて膳臣の有は此の故事に依て大膳に仕奉れるは右に云る如くなるを此は其膳臣の支族なる中に大伴部に仕奉るも有し故に膳大伴部なるなり此に美ニ六鴈ニ賜ニ膳大伴部ニとは他姓の人に在れ何に在れ膳夫に仕奉る大伴部を屬給へる由なるを思ふ可し儀式神今食儀に膳伴造一人など有は大伴部の遺（ナゴリ）にて職員令に大膳職膳部一百六十人掌下造ニ庶食ニ事上と見え內膳司膳部四十人掌ㇾ造ニ御食ニと有る膳部の如き者也東國諸國造十七氏枕子と有る枕子とは其實の女と云事なる可し後宮職員令に凡諸氏々別貢ㇾ女皆限ニ年三十以下十三以上ニ雖ㇾ非ニ氏名ニ欲ニ自進仕ニ者聽其貢ニ采女ニ者郡少領以上姉妹及女形容端正者皆申ニ中務ニ奏聞と有を引合せて考ふ可し然れば此枕子は其采女なる事決し乎次比例給天云々と有を考ふ可し猶此事大殿祭詞比禮懸伴緒の下に云り大嘗新嘗等に采女の仕奉る事此に其始有か如し

是時上總國安房大神乎御食津神止坐奉天若湯坐連等始祖意富賣布連之子豐日連乎令ニ火鑽ニ天此乎忌火止爲天伊波比由麻閇天供ニ御食ニ并大八洲爾像天八乎止古八乎止咩定天神嘗大嘗（カムイマケオホニヘ）等祭仕奉始支

但安房大神爲ニ御食津神ニ者今大膳職祭神也今令ㇾ讀ニ忌火ニ大伴造者物部豐日連之後也○上總國安房大神は後に安房國と成れり此は神名式に安房國安房郡安房坐神社名神大月次新嘗と有れども此は天太玉命なる可き由古語拾遺に見えたれば別に此所に坐りし神なるか此時より京に迎奉て大膳職に祭奉給へるは別に本國に御社は遺るまじき事此條の始に河曲山の說に就て云るか如し八乎止古八乎止咩は儀式神今食儀に副命八社男八社女御膳司并色々人等次第令ニ參進ニ云々兩命云八社男八社女云々御ニ八社男以下依ㇾ次令ニ參進ニと有る下の細書に先八社男次八社女次典膳以下云々など見えたる是也此事六月々次祭講義に神今食の事に就て註し又第廿七條に儀式を引て云るが如し神齋は神今食の事なれば今も然訓べし或說に年中行事秘抄一本に引るには神嘗と有りと云れども神嘗には更に由無き事也大膳職祭神也は神名式に大膳職坐神三座並に御食津神社有る是也大伴造は姓氏錄には見えずと雖も第卅二條に內膳司膳部伴造と有は大伴造なるを大を省きて伴造と云る事大伴宿禰を伴宿禰と云か如し忌火に就て祭神に同座に坐火雷神社有り是なる可し大膳職式に竈神四座と有る此には式外なれども忌火に由有る神なる可し四時祭式六月祭條に忌火庭火祭云々右大殿祭畢宮主於ニ內膳司ニ行

レ事と有を江次第に六月十一月十二月一日內膳司毎至神態竟レ火炊饗謂ニ之忌火ニと有は此に文に同じ文德天皇實錄に大炊寮大八島竈神齋火武主比命庭火皇神なども見えたり又卷廿七條に載る行列次第に木燧一荷云々と見え廿八條なる大嘗宮條に伴造鑽レ火援ニ安曇宿禰ニ吹レ火伴造炊ニ御飯ニなど見えたり

以ニ同年十二月ニ乘輿從レ東還ニ坐於伊勢國綺宮ニ五十四年甲子九月自ニ伊勢ニ還ニ坐於纏向宮ニ五十七年丁卯武藏國知々夫大伴部祖三宅連意由以ニ木綿ニ代ニ蒲葉ニ天美頭良乎卷寸從レ此以來用ニ木綿ニ副ニ日影等葛ニ天爲レ用矣

○五十七年の七は脫たるを今補ひて引り三宅連は姓氏錄諸蕃に新羅國王子天日槍命之後也と有り垂仁天皇三年御紀ニ云に天日槍娶ニ但馬出島人太耳女麻多烏ニ生ニ但馬諸助ニ也諸助生ニ但馬日楢杵ニ日楢杵生ニ清彥ニ清彥生ニ田道間守ニ云々と有を以考るに田道間守の子などにもあるべし和名抄郡名に武藏國橘樹太知波奈と見え郷名に橘樹郡橘樹多知波奈御宅美也介など有も由有る事なり以ニ木綿ニ代ニ蒲葉ニ云々は大伴部纏向朝廷の膳夫に仕奉る時の手襁是時より改れりと云事なるなり

歲次癸亥始奉ニ貴詔ニ所レ賜ニ膳臣姓ニ天都御食乎伊波比由麻波理天仕奉來迄ニ于今朝廷歲次壬戌ニ幷卅九代積年六百六十九歲

延曆十九年○以上本朝月令六月朔日內膳司供ニ忌火御飯ニ條と年中行事秘抄同條に引るとを校合せて引たるなり纏向朝廷歲次ニ亥は五十三年にて東國巡狩の年なり所レ賜ニ膳臣姓ニは姓氏錄左京皇別に高橋朝臣大彥命男大稻輿命之後也巡ニ狩東國ニ供ニ獻大蛤ニ于時天皇嘉ニ其奇美ニ賜ニ姓膳臣ニ天淳中原瀛眞人天皇諡天武十二年改ニ膳臣ニ賜ニ高橋朝臣ニと有る是なり今朝廷歲次壬戌は桓武天皇の大御代なり猶此年數等に就ても辨ふ可き事有れども日本紀傳に云べければ省きつ今は唯其大略を少か云料に引出たるなり

六鴈命七十二年秋八月受レ病同月薨也時天皇聞食而大悲給准ニ親王式ニ而賜レ葬也於レ是宣命使遣ニ藤河別命武男心命等ニ宣命云天皇加大御言止良麻宣久王子六獦命不思保佐流外爾卒上（カムアガリ）太利止聞食之迷夜晝爾悲愁給比川

大坐須天皇乃御世乃間波平爾之天相見曾奈波佐牟止思保須間爾別山介利然今思食須所波十一月乃新嘗乃祭毛膳職乃御膳乃事毛六鴈命乃勞始成流所奈利是以六鴈命乃御魂乎波膳職爾伊波比奉天春秋乃永世乃神財止仕奉牟止志迷子孫乎波長世遠世乃膳職乃長毛止上總國乃長毛止淡路國乃長毛上定天從ニ餘氏ニ波萬介多麻波寸乎佐女太麻波牟若之膳臣等乃不繼在朕加王子等乎志天他氏乃人等乎相交天波亂志良女之和加佐乃國波六鷹命爾永久子孫等可遠世乃國家止爲止定天授介賜支此事波世々爾過利違傳志此志乎知天太比吉久膳職乃內毛外毛護守比太利家患乃事等毛无久在志女給度太奈戶毛思食止宣布太麻天皇乃大御命乎良麻虛川御魂毛聞止太戶宣太麻

○此は政事要略廿六十一月中卯新嘗祭條と年中行事秘抄十一月豐明節會の下に引るとを合せて引り七十二年は六鴈命の歲數なりし景行天皇の御世は六十年にて高穴穗宮に崩給へば其より前方なりしなる可し准ニ親王式ニは此命は孝元天皇々子大彥命其子大稻輿命の子に坐ければ後に謂三世王に當れる故に重く會釋せ給へりしなり藤川別命は皇子なる可し古事記に此大帶日子天皇之御子等所レ錄廿一王不レ入レ記五十九王幷八十王之中云々此三王負ニ太子之名ニ自レ其餘七十五王者悉別ニ賜國々之國造亦和氣及稻置縣主ニ也と見ゆ武男心命は武內宿禰の父なり六鴈命乃御魂乎波膳職爾伊波比奉天は神名式に高倍神社と有る倍は倚の譌にて高橋と訓べければ此神なる可し然れども三代實錄にて大膳職醬院高部神と有れば其別にて式外なるにや上總の上字は衍にて總國なる可し神名式に安房國朝夷郡高家神社下總國結城郡高倚神社見え和名抄に高橋郷見えたり但上總國淡國の長たるは國造にては非る可し和加佐乃國云々は國造本紀に淫[?]飛鳥朝膳臣祖佐白米命兒荒礪命定ニ賜國造ニと有れば六鴈命の子孫の國家たる耳にて國造に任され奉りしは允恭天皇の大御世の事也と見えたり斯れば此大膳職の供奉る事はしも元來磐鹿六獦命

の仕奉られし事迹の景行天皇の大御代より加はりて神代より傳はり來れる六月十二月神今食十一月新嘗及踐祚大嘗祭等の儀又更に美たく好はしく成整へる者なり其は次條に引る古事記三重釆女が歌に麻紀牟久能比志呂能美夜波云々と詠るにて知るべし是を以て永世遠世乃膳職乃長（毛止）定天從餘氏波萬介多麻波寸乎佐女太麻波牟と事依し賜へれば永く其職の長官たりしを他氏の人をも其職に被補る事と成れりしかども猶氏文に神事之日供奉御膳者膳臣等之職非他氏之事とさへ見えて舊儀を失はざるは然すがに纒向朝廷の御趣に依れるなりけり第卅一條に載る式文に坐定安倍氏五位二人六位六人左右相分共就版位奏侍宿文武官分番以上簿と有る安倍氏も高橋同祖なれば由縁有る事なり其氏族別れて一は右の簿を奏する事を掌り一は膳夫に仕奉りて安倍高橋の二流と成れるなり偖古は膳職にて中古の大膳職內膳司の事を總たるを右の如く二司に別れてより內膳司の奉膳（ブゼン）と為て仕奉る事なり職員令に內膳司奉膳二人掌摠知御膳進食先嘗（謂在御所而嘗之凡王食則嘗欲登天供膳官營造請戒俱（?）然猶慮其誤犯故在照臨而先嘗）事と見えたり此等の事をも明らめ知らざれば古に疎くして事實に闇く成るめれば熟々思ふ可き者也かし（類聚國史に高野天皇神護景雲二年二月癸巳勅准令以高橋安曇二氏任內膳司者爲奉膳其以他氏任之者宜名爲正（カミ）と有り高橋氏文に載る延暦十一年三月十九日太政官符に神祇官定高橋安曇二氏供奉神事御膳行立先後事と云々の事有り安曇氏の仕奉れる事は上古より御贄を上れる事に依れるなり大殿祭講義に記し又第廿八條にも委しく述たりき）

刀子等の事は式に凡新理所須刀子一百七十枚（長八十八十盛 中二小八筥二合）預令所司造備及木綿十八斤手巾新調布三端二丈四尺並以官物分付兩國と有り儀式には其下に先是神祇官修解申官々下符所司令充神祇官受之頒兩國の細書有り偖此は當日行列次第に悠紀主基兩國共に各切机四脚加納刀子折櫃一合と有る其なり切机とは俎板の事なる可し（但儀式には右の太中小の刀子を並盛筥二合の文無くして實筥三合と有り此は儀式の頭に在て延喜の今こに無きなる可し此迄こに儀式に先祭十餘日云々先祭七日鎮大嘗宮齋殿地云々より續きて此次に次物部人等行列日裝束云々の事有り此は第二十五條の末に擧たり）物部門部語部等の事は式に凡物部門部語部者左右衞門府九月上旬申官預令量程參集物部左右京各廿人門部左右京各二人大和國八人山城三人伊勢二人紀伊一人語部美濃八人丹波二人丹後二人但馬七人因幡三人出雲四人淡路二人と有り儀式には九月上旬の下に次左右衞門府申官令造兵司作大嘗宮南北門神楯四枚戟八竿云々と有に續きて出たるが其文同じ

（但語部の中に式には丹波二人と有を儀式に丹波國一人と有は古今に違ひ有か何れか本の中に誤有か予が見たる本は如此くなり）物部左右京各廿人と有は卯日條に諸衛立レ仗諸司陳二威儀物一如二元正儀一石上榎井二氏各二人皆朝服率二内物部四十人一（著二紺布衫一）立二大甞宮南北門神楯戟一（門別楯二枚戟二竿木工寮預設二格木於二門左右一其楯等祭事畢即收二左右衛門府一）訖即分就二左右楯下胡床一（門別内物部廿人左右各十人五人為レ列六尺為レ間）と見えたる是なり其石上榎井二氏共に物部の正統なり天孫本紀に饒速日命十七世孫物部連公麻侶（馬古連公之子）此連公浄御原朝御世天下萬姓改二定八色一之日改二連公一賜二物部朝臣姓一同朝御世改賜二石上朝臣姓一と見え又十六世孫物部荒猪連公（榎井臣等祖惠佐古大連之子）と有より始て弟物部弓梓（アヅサノ）連公にも弟物部加佐夫連公にも弟物部多都彦連公にも榎井臣等祖の細書有を以見れば十五世孫物部惠佐古連公の子四人共に榎井氏とは成れるなりけり（姓氏録左京神別天神に石上朝臣神饒速日命之後也と有て同族の氏上なるなり榎井氏は續紀に榎井朝臣倭麻呂榎井連小君榎井朝臣廣國榎井朝臣擇麻呂榎井朝臣大島など其餘にも有も其擇麻呂は養老三年五月に連姓を改めて朝臣姓を賜はる由見えたり然れども姓氏録には左右京の神別共に榎井連も榎井朝臣も見えずて和泉國神別に榎井部饒速日命四世孫大矢口根大臣命之後也と有は當時已に衰たるなる可し）物部は刀劍を帶て大内を守護奉る部の名なるが故大祓詞には劒佩伴男と云り右の如二元正儀一は天孫本紀天皇本紀共に神武天皇元年春正月庚辰朔都二橿原宮一肇即二天皇位一宇麻志麻治命

奉レ献二天瑞寶一乃竪二神楯一云々率二内物部一乃竪二矛楯一嚴二増威儀一と見え古語拾遺にも饒速日命帥二内物部一造二備矛楯一云々然後物部乃立二矛楯一と見えたる是なるが饒速日命と有は誤也神武天皇辛酉元年に大御位に即せ給ひ官々の朝賀を受させ給ふ初に物部の遠祖宇麻志麻治命内物部を率て楯戟を竪て威儀（ミイツ）を嚴増に成して仕奉給へりし美たる例なるを以て後に近衛府衛門府等を被置て物部氏の職掌他氏に渡りたれども猶即位及元正ば更也此大甞祭等の事には主と其事に預り仕奉れりし也續紀に文武天皇二年十一月十三日己卯大甞榎井朝臣竪二大楯一大伴宿禰竪二楯桙一と有は石上氏を脱せるに似たり神龜元年十一月己卯大甞從五位下石上朝臣勝男從五位下石上朝臣乙麻呂從六位上石上朝臣諸男從七位上榎井朝臣大島率二内物部於南北二門一と有て此には楯戟の事を漏せるが如此く定れる常例なる事は略きても著き事なればなる可し（委しくは大祓詞講義劍佩伴男の下に注せるを見べし同紀に天平十四年正月元日の下に百官朝賀石上榎井兩氏始樹二大楯槍一と有は心得ぬ事なり此に據れば此年は戟楯を並べては竪ず大楯耳を竪て有しを舊儀に復して槍（ホコ）をも樹たるを始とは云るなる可し物部の矛盾を竪る事は古語拾遺及舊事紀に見えたる如くなれば今始れるには非れども衛府を被置るより既く其事に異儀は出來りしが又は儀式の元正儀を閣に異しき汝漢様に變（カハ）りたる事耳にて右の物部氏の仕奉れりし例とては少かも見えず神隨なる皇國風とては無を以思ふに大

寳などの頃より元正即位等の儀式には絶て唯大嘗祭に耳石上榎井兩氏に仕奉る式は遺れるを然すがに惜しませ給ひて其異しき漢樣は改らずながらに其式に列なり加へさせ給ふが故に始とは記せるなる可し儀式元正儀に伴佐伯兩氏五位降レ壇北向立ニ門下ニ門部開レ門諸門共開訖各還ニ本位ニ云々と有り門部は伴佐伯二氏に屬て御門を守護る部也式に伴佐伯各二人分就ニ南門左右外掖胡床ニ待レ時開レ門と見え儀式にも伴佐伯氏人各二人分就ニ南門左右外掖胡床ニ云々左右衛門督以下各引ニ其隊ニ分衛ニ其方及門ニ々部糺ニ察諸門出入ニ云々酉剋伴佐伯宿禰各一人各率ニ門部八人ニ於ニ南門外ニ通夜設ニ庭燎ニ云々既御ニ悠紀正殿ニ云々伴佐伯宿禰各一人開ニ大嘗宮南門ニと見えたるが如し斯れば門部は諸門の出入を糺察し又庭燎を設る事を掌ふ事也但職員令に衛門府門部二百人と有て其府の被官たりと雖も此は神事に依て古く靭負の職と爲て御門の開閉を掌れりし大伴宿禰佐伯宿禰に被指揮る事也姓氏錄大和國神別に門部連牟須比命兒安牟須比命之後也と有は大伴佐伯と其出自の一なる事御門祭講義に云るが如し孝德天皇御紀に門部金と云人名見え後の物ながら掘鄲と云ふ諸物に四方の門部の玉の戸を出入る云々」とも有り門部とは大伴佐伯二氏の御門衛り被仕るゝに其率る部と云事なる者なりむし備高千穗宮より以來後の衛門府兵衛府の如く仕奉れりしは神代に天忍日命天津久米命橿原宮に道臣命にて其より繼々仕奉りしを雄略天皇大御世に大伴佐伯二氏に別れたる事大祓詞講義靭負伴男の下に姓氏錄を引て云るが如し古語拾遺神武天皇段に日臣命帥ニ來目部ニ衛ニ護宮門ニ掌ニ其開闔ニ云々然後物部乃立ニ矛盾ニ大伴來目建レ仗開レ門令ニ朝四方之國以觀ニ天位之貴ニと有を天皇本紀には神武天皇元年正月朔即ニ天皇位ニ給ふ時の事と爲り如此く物部と相並ぶ事は此御世より始りたる事にて中古に衛府を被置たる後も元正朝賀大嘗等に仕奉る事物部氏の如くなりし者也續紀に文武天皇二年十一月十三日己卯大嘗榎井朝臣竪ニ大楯ニ大伴宿禰竪ニ楯桙ニと有れども大伴佐伯二氏は靭負伴男なれば竪ニ楯桙ニと云事物部氏に混つるに似たり備此時に門部を召給へるは必其氏人成事本より也尚第廿八條なる開門の下見可し左右京は其氏人多なれば今云ふ限に非ず大和國には和名抄に高市郡久米郷有り山城國は神名式に葛野郡伴氏神社大月次新嘗と有て此地和名抄に上林郷下林郷と云地なり姓氏錄に林宿禰大伴宿禰同祖室屋連公男御物宿禰之後也と有り伊勢國なるは神名式に多氣郡に林神社見え又佐那神社は御戸開神に坐事祝詞講義三卷十三卷に註る如くなれば其氏人有可き事云も更なり紀伊國なるは續紀に天平神護元年十月己卯前名草郡少領榎本連千島獻ニ稻二萬束ニと有る榎本連は姓氏錄に榎本連道臣命十世孫佐氏彥之後也と有て大伴連の同族なるが上に神名式に刺田比古神(サテヒコノ)社有れば其本貫なる事知べし又同紀に神護景雲三年十一月己丑陸奧國牡鹿郡俘囚外少初位上勳七等大伴部押人等言傳聞押人等本是紀伊國名草郡片岡里人也昔者先祖大伴部直征夷之時到ニ小田郡島田村ニ而居焉と有を以て古く大伴部の住りし事知らる又同紀に神龜二年十月壬寅名草郡少領大伴櫟津連子人と見え三代實錄に貞觀六年八月十三日節婦紀伊國名草郡大伴連宅子と云も有り門部は凡て此等の由有る氏人を召給へる事著明し但職員令に門部二百人などは此例に非ず此は唯門を衛護る部と爲て他の人を置せさせ給へるなり語部は儀式及式共に

伴佐伯宿禰各一人率二語部十五人一（着二青摺衫一）亦入就レ位奏二古詞一（伴入レ自二左掖一佐伯入レ自二右掖一）と有る亦は國栖及歌人等の前に進みたるに對へて然云ひ奏二古詞一は國栖に奏二古風一と云ひ歌人に奏二國風一と云に對へて文に然云る耳にて共に歌なる事次に云が如し江次第にも伴佐伯率二語部十五人一入レ自二東西掖門一各就レ位云々語部奏二古詞一と有る其細書に其音似レ祝（ノリトニ）又渉二歌聲一出雲美濃但馬語部各々奏レ之と有れば當時其他の國々なるは被召ざりしなる可し（語部の員數は儀式にては廿七人式には廿八人有る其中より十五人を擢出るなる可し伴佐伯の語部を率る由は下に云り）　儲語部は神世の古事にても奏す事かとも思ゆれし共然耳には非ず此大嘗に就たる事を聞え上る事と見えたり古事記（朝倉宮段）に天皇坐二長谷之百枝槻下一爲二豐樂（トヨノアカリ）一之時伊勢國之三重采女指二擧大御盞一以献爾其百枝槻葉落二浮大御盞一其采女不レ知三落葉浮二於盞一猶献二大御酒一天皇看二行其浮レ盞之葉一打二伏其采女一以レ刀刺二充其頸一將レ斬之時其采女白二天皇一曰莫レ殺二吾身一有二應レ白事一即歌曰麻紀牟久能比志呂乃美夜波阿佐比能比傳流美夜由布比能比賀氣流美夜多氣能泥能泥陀流美夜許能泥泥婆布美夜夜本爾余志伊岐豆岐能美夜麻紀佐久比能美加度爾比那閇夜爾淤斐陀氐流毛々陀流都紀賀延波本都延波阿米袁淤幣理那加都延波阿豆麻袁淤幣理志豆延波比那袁淤幣理本都延能延能宇良婆波那加都延爾淤知布良婆閇那加都延能延能宇良婆波斯毛都延爾淤知布良婆延斯豆延能延能宇良婆波阿理岐奴能美幣能古賀佐々賀世流美豆多麻宇岐爾宇岐志阿夫良淤知那豆佐比美那許袁呂許袁呂爾許斯母阿夜爾加志古志多加比加流比能美古許登能加多理碁登母許袁婆故献此歌者赦其罪也爾大后歌其歌曰夜麻登能許能多氣知爾古陀加流伊知能都加佐爾比那閇夜爾淤斐陀氐流波毘呂由都麻都婆岐曾賀波能比呂理伊麻志曾能波那能氐理伊麻須多加比加流比能美古爾登余美岐多氐麻都良勢許登能加多理碁登母許袁婆即天皇歌曰毛々志紀能淤富美夜比登波宇豆良登理比禮登理加氣氐麻那婆志良袁由岐阿閇爾波須受米宇受須麻理韋氐祁布母加毛佐加美豆久良斯多加比加流比能美古許登能加多理碁登母許袁婆此三歌者天（アマカ）語（タリウタ）歌也故於二此豐樂一譽二其三重采女一而給二多祿一也と有る大后の大御歌も共に新嘗の事を詠せさせ給れば其豐明の時の事なるが此を天語としも云は神代より以來世々の大嘗新嘗等には必天津神代の古詞を申す

例なりしは然る物にて此歌は天皇の大御怒を和め奉らむ爲に其古詞を美好しく歌ひ詠めつる故に其罪を赦したまひ物など賜はせて其三重采女を擧給ひ此御世より此を天語歌(アマカタリ)と傳へて世々の大嘗新嘗等の時に令奏め給へりしが此舊を存して奏二古詞一とは云る者なりけり但此初の歌に纏向日代宮々詠る此前條に引る高橋氏文に依に此天皇の大御世に新嘗等の儀式の大に起れる事有が故なんめり此三首有る第一つは國土の始の事第二のは新嘗の事詞第三のは男女二神の故事の端を歌ひ進たるが故に大御歌とは云なり此に因て思ふに上古に語部が古詞を奏せりしは古事記日本紀等に載り出たる天地の初發の時よりの事を一章づゝ申せりしなる可き事有の歌を以知べし江次第に其音似レ風又渉ニ[illegible]ニと有も其音を成てには有い來由も詳ならず成した以て祝詞に似たりとも又歌聲に渉るとも云りしなりの姓氏錄右京神別上天神に天語連縣犬養宿禰同祖神魂命七世孫天日鷲命之後也と有て其縣犬養宿禰は同錄左京神別中天神に神魂命八世孫阿居太都命之後也と見えて大伴佐伯多米等の氏々と其出自の同じきを以思ふに天語連は語部を率て神代の古詞を奏す長なりしかども儀式を稜記たる貞觀の頃ほひに至ては甚く其氏衰へて語部の長と爲て仕奉るに堪ざりし故に其同族なるを以て伴佐伯を以て事依し給へりし者なり是等の縁有を以て語部の奏二古詞一と有は右の天語歌なりし事を明らめ曉る可き者なりかし

右の語部を奉る國々に依て考るに美濃國は和名抄に多藝郡佐伯郷丹波國桑田郡佐伯郷天田郡拜師郷氷上郡拜師郷丹後國與謝郡拜師郷などと有るは由有る地なる可し拜師は上なる門の下に引る姓氏錄に林宿禰大伴宿禰同祖と有を思ふ可し但馬國なるは神名式に城崎郡縣神社有はさきに云る縣犬養宿禰に由有れば其所などより出たるなる可し因幡國なるは和名抄に八上郡日部郷に日部郷有り姓氏錄未定雜姓に日下部首天日桙命六世孫保都禰命之後也と有れば右に擧る姓共の出自に[illegible]けれは其部有て聞ゆ出雲國なるに神名式に神門郡佐伯神社見えたり此も其縁なるにや有む淡路國なるは更に考る所無し但右等の事は悉く當れるにも有べからざれども後人の考案の基とも成べからむと叢脞しき迄引出つるなり

齋服の事は式に凡齋服者十一月中寅日給レ之神祇官伯以下釋奉以上十三人(伯一人副二人祐二人史二人宮主一人卜長上二人坐部二人琴彈一人)各榛藍摺綿袍一領白袴一腰史生以下神服以上一百卅七人(史生四人官掌二人卜部廿四人下部十六人使部十二人[illegible]五人神服七十六人)各青摺布衫一領其御巫猿女等服者依新嘗例小齋親王以下皆青摺袍五位以上紅垂紐(淺深相副)自餘皆結紐内親王及命婦以上女孺以上皆青摺袍紅垂紐(五位以上亦淺深相副)自餘皆結紐(親王以下女孺以上皆日蔭鬘)並卜食訖乃給卯日夜宿料布被各五十領付小齋人等侍宿所(事畢返上)門部語部楯笛工並青摺布衫物部靑布衫中務省預支所レ申レ官請受神祇官齋服令縫殿寮縫備自餘縫物各付本司班給其衛實卜部二人神祇卜部二人各給當色と見えたり儀式には前レ祭一日神祇官參議以上就宮内省令レ賜齋服云々中務錄唱(ハン)レ名縫殿屬(サクハン)賜レ之と有り右の齋服と云ふは謂ゆる小忌衣にて神事の時の

服なり白き布を張て山藍と云草にて圖本(サイギ)を摺る物に
て大凡狩衣の如し赤紐と云て紗を疊みて沫緒(アワミ)結をし
て泥繪など書て右の肩に二筋縫付る事なり半臂下襲
など常の如し小忌の半臂は白地に繡したるを云ふ此
小忌は私に用意して着するなり國司を兼たる者將衛
府佐など此を用ふ其外は諸司の小忌出納の小忌と云
ひて形の如く布に青摺したる着なり其をは唯袍の上
に打懸て着するなり何れも臨時祭の舞人の着するを
は青摺と號け大嘗會の時は小忌と云なり小忌青摺大
凡は同じけれど裁縫の様異れるなりと一條大閤の御
說なり 但右の當主一人卜長上二人と有を儀式には當主二人卜長上一人と有り此白縫物各付二本司一とは內膳司采女司等の人の服なりき
其御巫猿女等服者依二新嘗例一は儀式に御巫猿
女各四人各縫袍(ツヘノキヌ)一領縫表帛裡別三丈 絹二屯兩面帶一條長一丈九尺廣五寸
汗衫一領三丈縫褶一腰表帛裡別三丈 褶腰料縹帛一條長一丈五尺 綿二
屯下褶一腰褶三丈腰一丈五尺 袴一腰三丈 綿一屯縹帶一條長六尺廣四寸五分 細
布髮搔一條長二丈 緋帔一條縫表帛裡別一丈五尺 細布襪一兩長三尺 線鞋
一兩と見えたり 四時祭式鎭魂祭條宮人以下裝束新に裱るに此縫袍を青摺袍汗衫を單衣(ヒトヘノキヌ)一領帛三
丈と有り縫褶を表裳(ウハモ)袴一腰を帛三丈と見え又外に單袴一腰帛二丈と見えたる此品儀式には見えぬ所なり又襪新細布長五尺なり
此條に褶(ヒラカ)一條縹帛四丈紐一條絁三丈領巾二七尺…二丈と有れども儀式に見えず鎭魂祭式に鎭魂祭服新嘗祭同用レ之と見えたれば
此にも通はし被用るめり 小齋親王以下云々內親王及命婦以下云々

並卜食乃給は儀式には一に合せて次賜二小齋親王以
下及群官并內侍以下女孺以上青摺衫各一領一と有れ
ば袍即衫の事也其下の分註に五位以上不レ副二男女淺
深相副紅染垂レ紐白絛結レ紐祭及宴(アソビ)會日皆加二日蔭鬘一
と有り日蔭鬘と云は白き糸を結卷にして左右八條或
は十二條など冠の左右の角(ツノ)に續ひて垂る事なり又此
に心葉と云て梅枝の四寸許なるを糸にて結びて着る
なり皆上古の蘿葛及挿頭の遺制なる者なり祭とは大
嘗祭にて卯日實會とは大嘗會にて辰日巳日の豐明節
會を云なり 但儀式には並卜食乃給の文無し卯日條に是日中臣官人二人卜二於宮內省一卜二小齋人一と有れば右の
嘗祭は前に祭一日に神…其當日卜食人後に…なるなり式文に中務省…新嘗…官…と有は其內…以下の者に…なる可し…負合に
中務…一人掌云々及女王內外命婦宮人等名帳…云々等と有れば右の文は他に係らはざる事知へし第二十七條見る可し 卯
日夜帛被布被各五十領付二小齋人等侍レ宿所一事畢返上と有
は儀式には見えざれども卯日儀に座定安倍朝臣氏五
位二人左右相分其就レ位奏二侍レ宿文武官分番以上簿一
主典以上書二姓名一分番唯其數凡奏二事於御在所一者皆跪若雨濕則立奏亦準レ舞官仰二諸司一進レ之即賜二安倍朝臣氏一と見えた
る此新なる可し 式文此に同じきが安倍氏五位二人六位六人と有り又書二姓名一を書二(ツクス)姓名一と見ゆ安倍氏
は膳臣同祖にて大彥命の後なれば磐鹿六鴈命の預り仕奉られたる其迹を續て此事に預るにや第廿二條第卅一條に註るを見合すべし
門部語部楢笛工並青摺布衫物部紺布衫云々の事は儀
式には別條に立ずして卯日儀に其名の出たる所に被

記たり但第三十一條の式文に吉野國栖十二人楢笛工十二人と有る下に並青摺布衫と有は此の服の事なるが其文に比挍るに此にも國栖の二字有けるにや又は國栖の事をも一に合せて楢笛工と耳記されたるにや稻實卜部禰宜卜部に給ニ當色一事も然り儀式には其下に記して上に略かれたり當色とは其卜部の官位に相當れる色の袍を賜ふを云ふ是迄にて京官の人の齋服の事は終めたるが尙儀式には第十七條に引る先祭七日鎭ニ大嘗宮齋殿地一云々の事より續きて次賜ニ物部人等行列日裝束一造酒童女纐纈表衣一領藍地青草摺綿袍一領支子(クチナシ)染綿衣一領紅染單衣一領白絹袴一腰赤裳一腰支子染下裳一腰楾押羅帶一條小刀子一具錦襪一兩雛(ヒキハダ)文沓一兩大酒波大多米酒波粉走相作各紵青摺單衣一領緑地青草摺綿袍一領支子染綿衣一領紅花染單衣一領赤裳一腰支子染下裳一腰赤薄機引下裳一腰楾押羅帶一條小刀子一具深紅染襪一兩雛文沓一兩稻實公紵青摺單衣一領紅花染汗衫一領白絹綿袴一腰支子染襖子一領調布袴一腰調布襪一兩雛文沓一兩次賜ニ部領並擔夫等裝束一標部領各纐纈袍一領細布袴一腰細布帶一條調布襪一兩白綵部類各青揩調布衣一領調布帶一條其脛巾葉(イチヒ)私設之擔夫各青揩庸布衣一領調布帶一條庸布袴一腰冠一條巾子一口庸布襪一兩菲蒲脛巾各一具其部領商用國司子弟百姓容止端正者ニと有り右の造酒童女大酒波大多米酒波粉走相作等は皆女の裝束也稻實公は男なり燒灰採薪(ハヒヤキカマギコリ)の行事は此時に至る迄に濟て此の行列には充(イラ)ざるにや裝束の事見えず 標部領は卯日儀に標一基と有る其に領る部領なり但式文の頃は止められたるにや行列の次第に見えず借其部領今俗に宰領と云者なり 又十月中旬の下に風俗歌人南國男女各廿人裝束男細布揩袍(ウヘノキヌ)各一領襖子(アヲシ)汗衫各一領白純綿袴一腰細布襪一兩 歌人八人着ニ布帶末額ニ各執ニ阿禮末一 女各領巾一條襠(ウチカケ)一領長袖衣一領汗衫一領小褄子一領裳一腰紕一腰下袴一腰下褶帶一條綞襪一兩細布襪一兩線鞋一兩錦鞋一兩釵一枚と見えたり 右の執ニ阿禮末一と有る阿禮は幡の類なり內藏寮式賀茂祭齋內條に阿禮料[illegible]色帛各六匹云々布綱十二條など見え其次[illegible]式大射條に阿禮幡十二旒各有ゝ幡左第一紫色次深緑次緋次紺次黃次[illegible]右方亦之など有る阿禮は幡の末を執て舞ふ事と聞に末には矛の誤か

中寅日の較略は式に凡十一月中寅日 卯在ニ三日一用ニ上寅一 以前內外應事辨備已畢賀ニ御魂一 卯在ニ二日一用ニ當寅一 と有は今日に至る迄に諸事を整へ備へて明日は唯神事耳なる由なり 細注に卯在ニ三日用ニ上寅一と有は朔日卯に當る時は中卯は十三日なるから故に中寅無き故に上寅を被用ると云事なり 儀式には此文見えされども前ゝ祭一日所司於ニ承光顯章兩堂前一縱立ニ七丈幄各一宇一設ニ小齋人座一 天皇御ニ悠紀殿一在ニ東幄一御ニ主基殿一在ニ西幄一 顯章堂前橫立ニ五丈幄二宇一西一宇爲ニ參議以上座一東一宇

爲ニ五位以上座一其參議以上幄以北二許丈立ニ皇太子輕幄一修式堂前立ニ五丈幄二宇一東一宇設ニ親王座一西一宇設ニ五位以上座一廻立殿北横立ニ五丈幄一宇一設ニ内侍座一と有は此文に當る可し次には右に引る同日薄暮齋服を賜ふ事有り云て豐樂院御座を装潢する事見えたり於是て實に内外庶事一齋已畢とぞ云べき　鎮御魂一同ニ尋常一とは四時祭式に被載たるに異り無しとなり但第九條に引る式文に大嘗殿材幷御膳柏及萱草を採べき山野卜定の所に採ニ鎮魂琴材一山准レ此其鵄尾琴四面令ニ内匠寮造送ニ神祇官一と有り儀式に載れる太政官符調布一端絲捌兩右得ニ神祇官解一偁供ニ奉大嘗會一御鎮魂鵄尾琴二面袋幷緒新所レ請如レ件とも又太政官符中務省應レ造ニ御琴二面一右得ニ神祇官解一偁供ニ奉大嘗會一御鎮魂新云々大藏省調布一端御琴二面袋新右云々供ニ奉大嘗會御鎮魂一鵄尾琴二面調度所レ請如レ件と有て其頭は鵄尾琴二面也しと見えたり此文に就て稽るに御鎮魂は大嘗の大御祭仕奉らせ給はむ爲に其前日に行はせさせ給へるにて毎年の新嘗祭の前日に其鎮魂祭を行はるるも此例に同じ是を以て其大嘗新嘗等の大御祭の重く貴き御事を思ふ可き者也かし　其鎮魂祭の所由は祝詞講義鎮ニ御魂齋戸一祭詞の附錄に委しく說記せれば今此に云ふ限に非ず其書に就て明らむ可し

班幣及卯日儀は式に卯日平明神祇官班ニ幣帛於諸神一謂ニ新年奠ニ幣案上者一座別絁五尺五色薄絁各一尺倭文一尺木綿二兩麻五兩四座置一束八座置一束楯一枚槍一竿裹葉薦六尺庸布一丈四尺前神除レ布是日中臣官人率ニ卜部一於ニ宮内省一卜ニ諸司小齋人一訖各還ニ私舍一沐浴齋服赴集別差ニ中臣忌部官人各一人一率ニ縫殿大藏等官人一奉レ置ニ衾單於大嘗宮悠紀殿一率ニ内藏官人一奉レ置ニ御服幷絹幞頭於廻立殿一主殿寮供ニ奉御湯一三度一度大齋湯於常宮供レ之二度小齋湯幷於ニ廻立殿一供レ之　諸衞立レ仗諸司陳ニ威儀物一如ニ元日儀一石上榎井二氏各二人皆朝服率ニ内物部卌人一著ニ紺布衫一立ニ大嘗宮南北門神楯戟一門別楯二枚戟四竿木工寮預造ニ楯木於二門左右一其楯等祭事畢即收ニ左右衞門府一訖即分就ニ左右楯一胡床一門別内物部廿人左右各十人五人爲レ列六尺爲レ間　伴佐伯各二人分就ニ南門左右外掖胡床一待レ時開レ門左右近衞中將以下各引ニ隊仗一分衞ニ大嘗宮一左右兵衞督以下各引ニ部隊一分衞ニ其方一左右衞門督以下各引其隊一分衞ニ其方及門一々部紀ニ察諸門出入一隼人司率ニ隼人一分立ニ左右朝集堂前一待ニ開門一乃發レ聲中務輔丞率ニ大舍人寮及舍人一宮内輔丞率ニ主殿寮掃部寮殿部掃部等一幷公服執ニ威儀物一左右分陳式部設ニ皇太子以下版位於大嘗宮南門外庭一佃ニ丈尺一見ニ儀式一　巳時主殿寮供ニ奉大齋御湯一同苑

兩國供物發レ自二齋場一向二大嘗宮一悠紀在二左行一主基在二右行一其行列者神部四人左右前驅 著二青摺衣一執二賢木一 神祇官一人在二中頭一 當色著二木綿鬘一 次神服長二人分二左右一 著二青摺衣一執二賢木一 神服宿禰一人在二中頭一 當色木綿襷日蔭鬘 次繒服ニギタヘ案 納以二細籠一置二於案上一神服二人舁之 著二青摺衣一 次神服男七十二人分在二左右一 青摺衣日蔭鬘 次神服女五十人分在二左右一 青摺衣日蔭鬘男女各執二弓弦葉一插二白竿四重一々別四枚 次悠紀國前駈四人分在二左右一 青摺衣執二賢木一 次稻實卜部一人在二中頭一 當色木綿襷日蔭鬘執二青竹一 次造酒兒 細布明衣日蔭鬘乘二腰輿一々夫四人 次御稻輿 納二稻實袋一夫二人 次稻實公 青摺衣木綿襷日蔭鬘 次戴二御膳一女八人 細布衫木綿襷日蔭鬘執レ持 次御酒案一脚 擔夫四人 次黑酒二甕 夫各八人 次白酒二甕 夫各八人以上四甕各載二黑木輿一飾以二蘿葛一 次由加物八輿 輿別夫四人納以二明櫃一置二於大案一 次切机四脚 加レ納二刀子一折櫃二合 裹以二薄布一以レ案爲二上一荷一々別夫二人 次木燧一荷 納二筥一合一爲レ足覆以二綾一吳竹纖夫一人 次臼一腰 上以二布袋一結以二布帶一覆レ口以二白木牀一裹以二細布一夫二人 次杵四枚 裹以二布袋一吳竹爲レ足夫一人 次箕二枚 裹以二曝布一吳竹爲レ足夫一人 次薪十荷 兩端裹以二細布一夫十人 次火臺四荷 塗以二白土一覆以二細席一荷別夫二人 次炬明四荷 兩端裹以二細席一夫四人 次土火爐四荷 備以二赤木一塗以二白土一覆以二細席一荷別夫四人 次檞葉二荷 裹以二細席一夫二人 次食薦并筥簀一荷 裹以二曝布一納以二明櫃一置二於大案一夫二人 次韓竈一具 納以二明櫃一置二於大案一覆以二油單一夫六人 次水六甕 覆レ口以二白木一蓋載以二黑木輿一飾以二草木葉一夫各四人以上並神御物皆插二賢木一 次禰宜卜部在二中頭一 當色木綿襷日蔭鬘以上當色皆官給レ之 次國郡司分在二左右一 並當色日蔭鬘其國司親族相助者各監二獻物一左右分列緣濃青摺彩此像彩及擔夫衣皆國給レ之 次酒盞案一脚 夫四人 次黑酒十缶 夫廿人 次白酒十缶 夫廿人 次餝酒十甕 甕別夫八人 次倉代物卌輿 輿別夫八人黑酒以下黑木爲レ輿飾以二美草一 次雜魚腊一百缶 夫二百人擔木爲レ足以二曝布一覆レ口 次肴菓卄輿 輿別夫四人 次飯一百櫃 夫二百人 次酒一百缶 夫二百人 次雜魚并菜一百缶 夫二百人以上擔夫皆青摺衣以上並多明[illegible] 其主基國次第亦如レ之と見えたり皆當日の儀なり 今此下に悉く記明むるを見べし 其卯日平明神祇官班二幣帛於諸神一云々は儀式の文も如此し是は四時祭式に新嘗祭奠二幣案上一神三百四座 並大 社一百九十八所座別絁五尺五色薄絁各一尺倭文一尺木綿二兩麻五兩四座置一束八座置二一束楯一枚一槍鋒一竿社別庸布一丈四尺裹葉薦五尺前一百六座座別幣物准二社法一但除二庸布一右中卯日於二此宮齋院一官人行レ事 諸司不二供奉一 但頒レ幣及造二供神物一新度中臣祝詞准二月次祭一と同じ事にて是一事は踐祚大嘗祭にも毎年新嘗祭にも異り無き事と見えたり此班幣の事畢て其より大嘗の神事なる事月次祭の班幣有て直に神今食なるに同じ 委しくは見[illegible]月次祭大嘗祭等の詞の下に云れば見合せて考ふ可き事なり神今食新嘗大嘗共に大凡相類たる神事なり 是日中臣官人率二卜部一於二宮内省一卜二諸司小齋人一訖各還二私舍一沐浴齋服赴集は儀式の文の任に記されたるなり中務省式に凡應レ供二奉神今食一小齋次侍從以上曆名前レ祭一日奏レ之 大嘗會亦准レ之 と見え又凡應レ供二奉神今

食并新嘗一云々付二神祇官一令レ卜レ之諸司者散齋之日省書二歴名一致齋之日於二宮内省一卜レ之訖各歸レ舍沐浴云々と有此を宮内省式に凡卜下供二神事一小齋人上者其日神祇官副祐各一人率二宮主卜部等一先就二宮内省廳座一云々神祇副官始レ自二八男八女一至二御膳司人等一次次令二參進一云々即隨レ次令レ昇レ廳充卜二八男以下御膳司人等次諸司人等一と見えたる是なり其委しきは神今食儀に月次祭畢神祇副祐各一人（用二中臣官一下同）率二宮主及長上卜部向二宮内省一卜下定可レ供二小齋一六位次下上其儀副祐先進就二廳座一（東向）次宮主以下就レ座（南面西上）座定神祇官掌捧二版庭中一其兆人（カタヒト）參二集南門一命婦以下就二東舍座一次中務丞錄各一人宮内丞錄各一人就二西舍座一（中務北上宮内南上）（並東面史生各在二其後一）座定二省々掌共捧レ版各當二丞前一置レ之訖縫殿寮進就レ版可レ供二奉小齋一内侍以下名簿進二中務省一其詞云兆人女刀禰（ヒメトネ）乃名簿進止申錄讀申即丞錄押署訖立出二南門一執レ簿率二文武官人一就二宮内省版一申云兆人乃名簿進止申丞命云進レ之共稱唯轉取最下ノ人摠取進錄讀申訖丞云レ縱諸司共稱唯退出于レ時宮内錄就二神祇版一申云宮内省申久司々乃兆人乃名簿進畢止申副命云八社男八社女御膳司并色々人等次第令二參進一官錄

稱唯復レ座即告二丞一丞命云令レ喚二省掌一錄稱唯即喚二史生名一二聲史生稱唯錄命云喚二省掌一史生稱唯喚二省掌一二聲省掌稱唯進就レ版丞命云八社男八社女御膳司色々人等次第令二參進一省掌稱唯退出仰二八社男以下一依次令參進（先八社男次八社女次典膳以下次中務省丞錄内舍人）訖宮主起レ座西面跪申云立二御兆竹一副云立レ之稱唯進二於卜部前一々別折立即申二立畢狀一還就二本座一卜食人等列就レ版副命云兆竹折著事被清仕奉共稱唯退出其八女及女官廳上東壁下共西面丞命退出事了散去と見えたり（但此神今食儀は小齋人を卜定いるゝ事の狀を知せむとて引出たるなり毎年の新嘗祭は此に同じければ子細無を大嘗祭なるは人數も甚多し次に云を見べし）此を宮内省式供二奉踐祚一大嘗小齋條に神祇官一百五十人（伯以下史以上七人史生四人宮主一人彈琴二人巫部一人神部廿四人卜部十八人使部十二人忌部五人神服七十六人）太政官十八人（中納言以上一人參議一人外記二人史二人史生二人）中務省七人（輔一人丞二人錄二人史生二人）次侍從以上廿人内舍人十人内記二人監物二人主鈴二人典鑰二人大舍人寮四十二人（官人二人史生一人舍人三十九人）圖書寮四人（官人二人書手二人）内藏寮廿人（官人六人史生四人藏部十人）縫殿寮十人（官人四人番上六人）宮内省五人（大少輔丞錄各一人史生一人）大膳職八十四人（官人二人史生二人膳部八十人）大炊寮廿六人（官人二人部廿四人）主殿寮廿二人（官人二人史生以下十八人火炬小子二人）典藥寮六人（官人二人侍醫二人藥生二人）掃部寮十人（官人二人掃部八人）内膳司十六人（官人二人膳部十四人）造酒司卅人（官人二人酒部廿八人）采女司四人（官人二人采女二人）主水司

十二人官人二人木工部十八人左右近衛府各官人四人府生一人近衛卌人駕輿丁八人左右兵衛府各官人二人兵衛廿八人左右衛門府各官人二人府生一人門部廿八人語部十五人門部八人内侍以下數同ニ毎年新嘗ニと見え又供ニ奉新嘗ニ小齋命婦以下宮人以上卌四人御巫五人采女十人と有り中務省及縫殿寮屬の仕奉る事は其卜食の人に齋服を賜ふ故なる事第廿五條に有が如し其八男八女は此中に在り男女凡六百八十六人計なり此外に親王も小齋にて仕奉らせ給ふ事神今食の如くなり其八社男八社女は第廿二條に引る高橋氏文に大八洲爾儀天八乎止古八乎止女定天と云る其を宮内省式には八男八人と[illegible]上に云るが如し江次第には十男十姫と有り十男とには膳部六人酒部四人と有るを合せて十男と云るか此式にては膳部五人と有れば合せて九人なり又江次第の一本には膳部四人と有れば合せて八人なるが何れにても其數に拘らず古名を存して八社男（ヤヲトコ）と云るなり十姫は此式に采女十人と有るは江次第には此を分別て典水二人采女八人と見えたり後宮職員令に水司典水二人と見え膳司に采女六十人と有る其より取れるなり此中に最姥謂ニ次姥謂ニ後取ニ（シトリ）などの名目有り此は齋部氏の一の采女と取次の采女とを云なり若て此も八社男の例に其數には拘はらずして小社女（ヤヲトメ）と云り但古は八男八女にて有けめども其にては事の足ざるが故に其名は改めずないし數に十男十姫と成れるなめり[illegible]光竹は宮主[illegible]卜[illegible]に見えたる如く長八寸許の竹に其小齋に仕奉る可き人の名を記して次に[illegible]申たるにて卜定るなり光竹[illegible]とは其光竹に二の刻目有なし其卜食たる時に着て標とする可し此齋供奉は當日より散齋なり[illegible]日より致齋なれば本より齋爲る事云も更なれど猶に[illegible]令卜食たる人の身の罪穢を祓清め仕奉れと仰する也斯れば中臣に卜串た率るとは云中にも此齋は供奉る事に主と用有るなる可し此より各其舍に還り[illegible]して齋場に改めて大嘗祭の小齋に仕奉るなり 別差ニ中臣忌部宮各一人ニ率ニ縫殿大藏等宮人ニ奉レ置ニ衾單於大嘗宮悠紀殿ニと有は右の宮内省に卜定に向ふに對へて別と云るなり衾單共に第廿條に式文を擧たるが如く儀式も亦然り此單は儀式に戊剋御ニ大嘗宮ニ大藏省預以ニ二幅布單ニ鋪ニ其通ニ其宮ノ地面鋪以ニ八幅布單ニ上宮内輔二人左右膝行敷ニ畳薦ニ掃部允以上二人從レ後且卷レ之不ニ敢踏ニ還亦如レ之其葉薦者掃部寮設レ之と見え又江次第に御ニ悠紀殿ニの下に其道大藏省敷ニ二幅布單ニ宮中地面敷以ニ八幅布單八條ニ宮内輔膝行以ニ葉薦ニ隨ニ御歩ニ敷ニ布單上ニ掃部允以上二人自レ後且卷人不ニ敢踏ニと見えたる此料也此は其所の細書に主上徒跣不ニ著ニ履給ニ供奉人亦同と有に依れり第廿條に引る式文に凡御大嘗[illegible]之時所レ設御服二具衾三條[illegible]布單二張[illegible]二具云々又供ニ同殿ニ衾八條單四條云々と見えたる此に大嘗宮悠紀主基兩殿と廻立殿との料を合せたる也其心して見る可也 率ニ内藏官人ニ奉レ置ニ御服並絹幞頭於ニ廻立殿ニと有は前條に續ける文にて此率は中臣の率る事也儀式此に同じ并御服二具絹幞頭三枚なる事第廿條に見えたるが如し内藏寮式に六月十二月神今食奉ニ絹幞頭ニ新嘗祭亦同と見えたる例にて大嘗祭も此に同じ其御服は儀式に即着ニ祭服ニ御ニ大嘗宮ニと有る此は悠紀殿に御するなり又子一剋易ニ御服ニ遷ニ御主基殿ニと有る合せて二具なるなり江次第に帛御衣之袍と見えたり其絹幞頭は第廿條に云る如く一は天羽衣（アマノハゴロモ）、は

明衣(アカハ)一は浪衣(ナミギヌ)にて其數三枚なるなり江次第主殿寮供二御湯一條に仁和記云御二東方御床一著二天羽衣一供二御湯一了御二中央御帖一と見え建武年中行事神今食條に御槽に御浴衣(ミユカタビラ)を召て入せ給ふ三杓聞食て天羽衣槽の内に脱棄て更に御浴衣を召て上らせ給ふ」と見えたれば天羽衣即御浴衣なり何を以天羽衣と云ぞと云に天は例の天上の制に倣へる也羽衣とは薄絹(ウスキヌ)以て製れる謂なる可く明衣(アカハ)と云は御湯を聞食て潔清(キヨ)まらせ給ふに御す意にて阿加婆の婆は同じく薄絹の謂なり浪衣(ナミキヌ)と云は御湯に浸らせ給ふ時の狀に依て名とは成れるなり和名抄澡浴具に内衣太比良(和名由加)論語註云明衣以レ布爲二沐浴衣一と見えたり（年中行事秘抄に引る賀茂舊記に天神御子云各將レ逢レ宵遣二天羽衣天羽裳一炬レ火擎レ鉾云々と有も薄帛の衣裳を云なり天羽衣の浴具なる證は御鎭座本緣及元々集に引る丹後風土記に比沼山頂在レ井其名云二眞名井一此井天女八人降來浴レ水于時有二老夫婦一云々至二此井一而竊取二藏天女一人衣裳一と有も右に例して思ふに天羽、天羽裳なるなり又帝王編年記に古老傳曰近江國伊香郡與胡鄉南天之八女倶白鳥自レ天而降浴二於南之津一云々於レ是伊香刀美云々遣二白犬一竊二取天衣一云々と有る此を好思案にて潮の海に來つゝ隱けて少女子が天羽衣干つらむやも」と詠ければ此天衣天羽衣にて俗目なる事上に同じ尚駿河風土記に羽衣竹取物語伊勢物語等に天羽衣の名目は有れども其等は實事レ上に倚れえなられば此か中證には立難し）主殿寮供二奉御湯一三度（一度大齋湯於二常宮一供レ之二度小齋湯竝於二廻立殿一供レ之）と有は御齋戒極めて重く渡らせ給ふが故に度々御湯を供奉る儀なり其一度大齋湯於二常宮一供レ之は儀式に巳時以前内

辨巳設二主殿寮供奉浴湯一（巳時大齋酉時小齋）と見えたる巳時なるにて此は御在所の御湯殿にて供奉る荒忌の御湯なり次に二度小齋湯竝於二廻立殿一供レ之と有は右の酉時小齋と有にて儀式に戌刻鑾輿御二廻立殿一主殿寮供レ湯即著二齋服一御二大嘗宮一云々子一刻宸儀還二御廻立殿一其儀如レ初主殿寮供二浴湯一訖易二御服一還二御主基正殿一と見えたる此二度なるを小齋と云て眞忌の御湯なるなり其狀は江次第に主殿寮供二御湯一（用二東戸一）と有る下に奉レ仕御湯殿一之人（殿上四位一人六位一人並觸二山蔭卿子孫一之人）於二女官幄一可レ解二改裝束一而於二盆殿一脫レ之人有レ之云々仁和記云御二東方小床一著二天羽衣一供二御湯一了御二中央御帖一次西方供二奉御裝束一治曆長元御紀作レ著二天羽衣一入合レ下二御槽一給又以二一領一奉レ拭云々承保供二御河藥一入二土器一居二折敷一と見えたり用二東戸一と有を通して考るに廻立殿の東間にて御湯を奉り西方にて御裝束を改させ給ひ中央を以て御座所と爲る事と見ゆ（其觸二山蔭卿子孫之人の觸は屬字を誤れるなる可し山蔭卿は註に三木從四位上藤原魚名孫越前守從五位上高房二男仁和二年六月十三日任二從三位一任二中納言一と有り此卿の子孫に觸がるゝ事故有る可し御河藥は註に河藥白朮也自二御厨子所一進レ之入二土器一居二折敷一と見えたり）諸衛立レ仗諸司陳二威儀物一如二元日儀一は衞府の儀仗を立て諸司の陳列する事元日の朝賀の儀の如しとなり（即位儀亦此に同じ近衞の大

（將中將少將以下帯司の隊る代に元日儀に委しく儀に引る本文に待ニ內裏舉ニ衛門府ニ南三門ニ如ニ元日儀ニとも見えたり）石上榎

井云々は儀式に石上榎井二氏人各二人（皆ニ朝服一）率ニ內物

部卌人ニ（着ニ紺布衫一）立ニ大嘗宮南北門神楯戟一（門別ニ楯二枚戟四竿未ニ立ニ楯戟四竿）

（於ニ門左右ニ其楯戟等物祭事ニ收ニ左右衛門府一）此物部分就ニ左右楯下胡床ニ（アグラ）（門別廿人左右）

（各十人五人爲レ列六人爲間）と有りて異り無し（遠祖より以來劔佩作男として衛門府に奉りし物部氏の

仕奉り來にりし職掌なく衛府の官（ノ）と成れりしかども元ト其位大嘗祭等に至ては其氏人を召て仕はせ給ふ事如此きなり衛兵の下に

云るなど見べし）伴佐伯云々待レ時開レ門は儀式に伴佐伯氏人各

二人分就ニ南門左右外掖胡床ニと有り此內伴佐伯各一

人は門部を率て庭燎に仕奉り又各一人は語部を率て

古詞を奏せさする事下に見えたるが如し 若て此待

レ時開レ門は其大嘗宮の南門の開閉は伴佐伯の掌るが

故なり此は衛門府の預る所に非ず（衛門府は開ニ閉朝堂院南門ヽ次に見えたる衛門府を掌る事な

院は其總攝にて其院南門に應天門也衛府には衛府より諸門を掌る事なれども此には其事なきは大嘗宮に南門に伴佐伯二氏靫負伴男とし

て仕奉る事ヽ見… 修に…たるか如し）左右近衛中將云々左右

衛門督云々は儀式に左右近衛中將以下各引ニ隊ニ分

衛ニ大嘗宮ニ左右兵衛督以下各引ニ其隊ニ分衛ニ其方ニ左

右衛門督以下各引ニ其隊ニ分衛ニ其方及門ニ々部糺ニ察

諸門出入ニと有て同文也 此六衛府の衛護奉る狀は

も己に大祓詞講義靫負伴男の下に記せる如く大伴佐

伯二氏の遠祖より天靫負を率る內兵と爲て天皇の大

御許に親しく衛護奉れりし其職を分て置れたる府な

るが故に右の六衛府共に由介比乃都加佐と云事なり

備其左右近衛中將以下とは近衛府の大將は御許に近

く侍ふ故に中將假に其長として少將々監以下の人々

を率る事なり左右兵衛督以下に衛ニ其方ニとは職員令

に督一人掌下檢ニ校兵衛ニ分ニ配閤門ニ以レ時巡檢車駕出

入分ニ衛前後ニ及云々事上と見えたる其如く兵衛を檢

校し閤門に分配り其左右を分て衛るなり左右衛門督

以下に衛ニ其方及門ニとは同令に督一人掌ニ諸門禁衛

出入禮儀以レ時巡檢及云々事ニと有る是其門を衛るな

り又同令に衛士府督一人掌下禁ニ衛宮掖ニ檢ニ校隊仗ニ

以レ時巡檢云々車駕出入前驅後殿事上と有る此を大

同三年に衛門府に併せられたれば其衛士に仕奉れり

し狀を以仕奉る是其方を衛るなり門部は其府の部下

なり（隊仗とは宮衛令に衛士陣ニ之隊ニ也兵衛內舍人陣ニ之儀也と有り衛は衛府の人たるを以て引ニ隊仗ニなり宮門は義

闈に同じ宮中の小門也と有り閤門とは內重に在る所の小門を云り）隼人司云々は儀式にも

隼人司率ニ隼人ニ分ニ立左右朝集堂前ニ待ニ開門ニ乃發

レ聲と有り下に供物入ニ應天門ニ隼人百餘人在ニ門內ニ

自ニ胡床ニ起發ニ大聲ニ三節と見え又伴佐伯氏各二人

開ニ大嘗宮南門ニ衛門府開ニ朝堂院南門ニ云々群官初入

隼人發レ聲立定乃止進ニ於掮前一拍レ手歌儛と見えたる其下に註せるを見て辨ふ可し朝集堂とは會昌門の外應天門の内にて其左右に在る堂を云り朝堂院は八省院の總名なり混ふ可からず此隼人の仕奉る事始は古事記に火照命此者隼人阿多君之祖と有て海神宮の事有る其下に火遠理命云々備如ニ海神之教言一與ニ其鈎一故自爾以後稍愈貧更起ニ荒心一迫來將レ攻之時出ニ鹽盈珠一而令レ溺其愁請者出ニ鹽乾珠一而救如レ此令ニ惚苦一之時稽首白僕者自レ今以後爲ニ汝命之晝夜守護人一而仕奉故至レ今其溺時之種々之態不レ絶而仕奉也とも見え神代紀正書に彦火火出見尊已還レ宮一遵ニ海神之教一時兄火闌降命既被ニ厄困一乃自伏レ罪曰從レ今以後吾將レ爲ニ汝俳優之民一請施ニ恩活一於レ是隨ニ其所レ乞遂赦レ之其火闌降命即吾田君小橋等之本祖也と見何一書にも見えたる何れも同状なり是に因れる事なり職員令に隼人司正一人掌下検ニ校隼人謂隼人者分番上下一年爲レ限其下番在レ家者差ニ科課役一及簡ニ點兵士一一如ニ凡人一及名帳教ニ習歌儛一事上と有り此義解の文に分番上下とは大隅薩摩等國より朝廷に番直する事なり天武天皇十一年御紀に秋七月壬辰朔甲午隼人多來貢ニ方物一是日大隅隼人與ニ阿多隼人一相ニ撲於朝廷一と有り又元正

天皇御紀に大隅薩摩二國隼人等奏ニ風俗歌儛一と見ゆ隼人司式に大衣者擇ニ譜第内一置ニ左右各一人一大隅爲レ左阿多爲レ右又曰今來隼人令ニ大衣習レ吠と見えたる其阿多は薩摩國なる也和名抄に阿多郡阿多郷有り文武天皇御紀に唱更國等と有る註に今薩摩國也と見えたるは其隼人の出る國と云義なり同御紀に征ニ薩摩隼人一と有も薩摩の南方に當れる地名と聞ゆ萬葉三に隼人乃薩摩乃追門と詠る同じ事を六卷に隼人乃湍門と詠るを以知べき也後には其國より分番上下せずして京近き地に留住て朝廷に番直せりしにや中原康富記に山城國綴喜郡大嘗會於ニ官廳一出ニ舞人一奏ニ風俗一と有り大住郷和名抄に見えたり尚此下なる歌儛の所に云るを見合す可し又古事記傳必見べし中務輔丞率ニ大舍人寮及舍人一宮内輔丞率ニ主殿掃部等寮及殿部等一並公服執ニ威儀物一左右分陳は儀式にも然見えたり左右分陳とは大嘗宮の御垣外の左右に中務と宮内と各其所屬を率て列り時を待て其事に候るなる可し大舍人は職員令義解に謂大舍人是供奉之人也云々と有れば其義なる可し殿部の事は下なる車持朝臣子部宿禰の下に云べし式部設ニ皇太子以下版位於大嘗宮南門外庭一相去丈尺見ニ儀式一と有る見ニ儀式一は第廿六條に引る儀式に前レ祭一日所司於ニ承光顯章兩堂前一縱立ニ七丈幄各一宇一設ニ小齋人座一天皇御ニ悠紀殿一在ニ東幄一御ニ主基殿一在ニ西幄一顯章堂前横立ニ五丈幄二宇一西一宇爲ニ參議以上座一東一宇爲ニ五

位以上座ニ其參議以上幄以北ニ許丈立ニ皇太子輕幄ニ修式堂前立ニ五丈幄二宇ニ設ニ親王座ニ西一宇設ニ五位以上座ニ廻立殿北横立ニ五丈幄一宇ニ設ニ內侍座ニと見えたる此幄より出て進み給ふ版位にて下に皇太子入レ自ニ東南掖門ニ云々五位以上共起就ニ中庭版位ニ跪云々と有る是にて中庭とは朝堂院の中庭にて大嘗宮には南門の外庭なるなり（然れば皇太子と申せども大齋の列に渡らせ給ふなる可し又に南ニ悠紀當殿ニ小齋群官各就ニ其座ニ訖と有る細書に大齋群官不入ニ還ニ殿ニ及大嘗宮中と見えて次第に此事を記したるに畢各復ニ幄座ニと有る思ふ可し第二十一條に就ニ幄下座ニと有る其下に云を見べし版位の事に第三十四條に註せり）已時兩國供物發レ自ニ齋場ニ向ニ大嘗宮ニ悠紀在ニ左行ニ主基在ニ右行ニ其行列者云々は儀式に悠紀自ニ宮城東路ニ主基自ニ西路ニ共南行と見えたる其南行は下に共到ニ七條衢ニ而相會出ニ朱雀大路ニ云々と見えたる如く悠紀主基南國の齋場より發出て宮城を悠紀は左より主基は右より廻りて南に行き七條衢に到りて相會ひ朱雀大路に到り更に又左右に相分れて相列り朱雀門前に至り神祇官より出る阿波國の鹿妙と一に成て應天門に入り又左右より廻りて各大嘗宮に入る事なり下に到ニ大嘗宮南門外ニ即悠紀左廻主基右廻共到ニ北門ニと有を以知べし（此事委しくは次條なる其文の下に註す可し兩國齋場の事は已に第十一條に說記せるが如し此條の末にて少か云り）其行列者云々此には一に神部ニ一に神祇官三に神服長四に神服男五に神服女なれど儀式には其行列也神祇官神部四人前行（著ニ青摺布衫並日蔭鬘ニ執ニ賢木ニ分在ニ左右ニ神祇官行列ニ服案以上者未レ到ニ朱雀ニ之間只列ニ悠紀前ニ）神服長二人（著ニ青摺布衫並日蔭鬘ニ執ニ賢木ニ分在ニ左右ニ）次神服男七十二人（著ニ青摺布衫並日蔭鬘各執ニ酒柏ニ所レ謂酒柏者以ニ弓弦葉ニ挾ニ白木ニ四重別四枚分在ニ左右ニ）次神服女五十人（衣色並ニ物著同レ上相對分在ニ左右ニ）神祇官一人在ニ路中央ニ（前ニ行神部之後神服長之前ニ著ニ當色ニ著ニ木綿鬘ニ把レ笏）次神服宿禰一人（著ニ當色木綿ニ蒙ニ日蔭鬘ニ）次繒服案（以ニ細籠ニ置ニ案上ニ神服二人舁之著ニ青摺布衫木綿鬘ニ案長四尺二寸廣二尺高三尺八寸）と有て其例に異有が如くなれども其神祇官一人在ニ路中央の下の細書に前ニ行神部之後神服長之前ニと有れば次なる神服宿禰繒服案共に神服長の前に在れば式文の趣に少も違ふ事無きなり其神祇官行列繒服案以上者未レ到ニ朱雀ニ之間只列ニ悠紀前ニとは次條に載る式文に未時以前供物到ニ朱雀門下ニ神服部在レ前如レ初阿波國忌部引ニ麁服案ニ出レ自ニ神祇官ニ就ニ繒服案後ニ云々神祇官ニ人引ニ神服男女等ニ到ニ於大嘗宮膳殿ニ置ニ酒柏ニ出と有る如く繒服案以上は其列に在とは云ながら兩國の預る所ならねば唯便に隨て悠紀の前に進み朱雀門下に到て麁服案と一に成て其より悠紀の列を離れて大嘗宮に向ふ事なり神服男女の下に執ニ酒柏ニ云々と有る酒は大多米院のなる可

し其には第十一條に引る十月上旬神服使率ニ服長織女工手等十八人ニ持ニ神服部內輸調糸十絇到來云々と有る次に各賷ニ小齋造室ニ云々次始各賷ニ小齋清御酒ニ云々と有て下に中旬各祭ニ大多米酒殿ニ始釀云大多米酒ニ次各神供進國司齋場所率ニ服長織女等ニ賷ニ神服院地ニ云々即調服院ニと有を以知べし其神服ハ龍上と同じく綱龍に納るなり當主秘事口傳抄に正殿大祀之時號參河國無ニ沙汰ニ不ニ備進ニ只竹籠許置レ案と有る此竹籠即細籠なるなり右の神服宿直の下に木綿欅と見えたる其日己く允恭天皇四年御紀に出又萬葉に木綿手次肩荷ニ懸と有れば甚古くより云來れる名なゝ　次悠紀國前駈云々切机云々に至る迄の次第式文の趣は一に悠紀國前駈二に稻實卜部三に造酒兒四に御稻輿五に戴ニ御膳案ニ女六に御酒案七に黑酒八に白酒九に由加物十に切机なり儀式には上の文に續きて次國前行卅人左右各十八相分行列者ニ退紅染布彩布帶ニ執ニ白杖ニ國前行以下行列主基亦同之　湯二舁部領各二人左右相夾擔丁各二人納ニ松樹比良加ニ居ニ黑木案ニ筒以ニ木綿賢木ニ其比良加徑一尺三寸深一尺四寸　次主禮二人左右相分用ニ諸司史生ニ以下皆同　次次第司一人用ニ諸司主典ニ　次標一基着冑左右各二人相夾着ニ退紅染布彩白布青帶襪并ニ履夫(ヒキフ)卅人着ニ黄地黑摺布彩白布青帶脛巾并ニ　次行事及國郡司並眷族等五位以上着ニ當色ニ執ニ白木ニ左右分列　次稻實卜部一人在中央着ニ當色ニ木綿欅日蔭鬘ニ　次造酒童女一人着ニ細布明衣日蔭鬘東ニ白木輿ニ夫四人擔レ之部領左右各一人相夾着ニ青摺布彩白布袴帶脛巾并ニ日蔭鬘執ニ白木ニ　次御稻輿一基(アシウヅノツクセ)納ニ稻ニ居ニ黑木輿ニ擔丁六人部領左右各一人相夾着ニ青摺布彩木綿欅日蔭鬘ニ　次稻實公一人着ニ青摺布彩木綿欅日蔭鬘ニ　次御膳足別案八脚(アシワケノツクヱ)各長四尺二寸廣二尺高二尺五寸敷以ニ曝布ニ覆以ニ緋油單ニ以ニ紺帶ニ結ニ二所ニ於部女戴レ之着ニ布彩木綿欅日蔭鬘ニ垂レ髪(モトドリスベシ)部領左右各四人相夾　次御酒足別案一脚長三尺八寸廣二尺高三尺敷以ニ曝布ニ覆以ニ緋油單ニ以ニ絲帶ニ結ニ二所ニ居ニ大案ニ擔丁四人部領左右各一人相夾　次主禮二人次次第司一人次黑酒二瓱各納ニ一石五斗ニ以ニ白木盤寫ニ蓋覆以ニ曝布ニ結以ニ木綿ニ載ニ六角黑木輿其ニ表以ニ稲皮ニ裡以ニ斑席ニ帖レ布敷ニ瓱下ニ結以ニ綱筒以ニ眞葛ニ擔丁各八人部領左右各二人　次白酒二瓱其飾同ニ黑酒擔丁同ニ黑酒　次由加物八舁以ニ四尺明櫃八合ニ納ニ神物ニ各居大案ニ各長九尺廣二尺二寸高二尺覆以ニ食薦ニ次以ニ布綱ニ結ニ三所ニ擔丁卅二人部領左右各二人相夾　次切机四脚加納ニ刀子ニ折櫃二合覆以ニ曝布ニ以レ案荷ニ上一荷ニ々別夫二人と見えたり以上甲乙人共に千五百八十六人計なり　右の湯二舁は神御物なる可し下に供神物皆揺ニ賢木ニと有に此の狀同じければなり式文に漏されたるは後には膳殿より仕奉るなどに依るなる可し主禮二人次第司一人の事は下にも四所見えたれども式に見えざるは文を簡略れたる故なんめり標一基も然り行事は第一條に引る儀式に四位一人五位三人云々と有る是を云なり國郡司並眷族等五位以上は式には禰宜卜部の次に在り眷族等は其を後見するなる可し御稻輿の稻は第十一條に云々高萱御倉の御稻なり御膳足別案を戴く女式に八人と有を此に物部女と有を第六條に引る卜ニ定物部八十五人ニ男六人女九人と見えたる女九人の內にて造酒童女一人を除けば女八人有る此を被役るなり黑酒白酒は在京齋場なるにて下なる大多米院のとは別なり由加物は紀伊淡路阿波三國のなる事第十四條に註せるが如し其切机四脚加ニ納ニ刀子ニ折櫃二合ニと有る一本には有る本と無き本と有り何れ宜けむと考るに式文に合せて有る方允に正しと所思ゆれば其に依りつ此刀子は第二十三條に云りき其切机とは御贄を料理する俎板の古名と聞えたり　次木燧一荷云々水六瓱以上は式文の次

第一に木燧ヒキリ二に臼三に杵四に箕五に薪六に火臺七に松明八に土火爐九に槲葉十に食薦並置簀十一に韓竈十二に水なる事上に舉る如くなるが儀式も此に同じきを火臺と松明の間に主禮と次第司其列に加る事なり其文は次木燧一荷（納白葛二合一笑竹爲籠蓋以細布裹結以木綿以布綱纏之其上插賢木擔丁一人當領左右各一人相夾）次臼一腰（納以布袋以布帶囊以白木臺居以細席夾二人）次杵四枚（納以布袋一笑竹爲籠蓋以木綿賢木擔丁一人部領左右各一人相夾）次箕一枚（裹以曝布一笑竹爲籠蓋以木綿賢木擔丁一人部領左右各一人相夾）次薪十荷（長各四尺以葛一束兩端居以木臺以賢木擔丁十人部領左右各二人）次主禮二人次次第司十人次松明四荷（長各四尺以葛束兩端擔丁四人部領左右各二人相夾）次土火爐四荷（各廣方二尺五寸擔以椿木器二具以細席居黑木臺塗以白土覆以細席以布綱擔丁十六人荷別四人部領左右各二人相夾）次槲葉十荷（荷別四束用食野柏以黑葛居白木臺以賢木擔丁二人部領左右各一人相夾）次食薦スゴモ並置簀一荷（各十枚以曝布覆以明櫃置於大案擔丁二人部領左右各一人相夾）次韓竈一具（納以明櫃置於大案以布綱擔之擔丁十六人部領左右各一人相夾）次御水六甕（用齋場御井水盛以白木盤覆以曝布以木綿結之其上插賢木用六角單木輿以布綱擔丁卌人部領左右各六人相夾以上並供神物皆插賢木）と見えたり右の臼杵箕等は次條に造酒兒先舂御飯稻次酒波等不易手舂云々と有る其斷なり槲葉の下に用食野柏と有る野は山なる可し上に引る大嘗祭式に應採大嘗殿材並御膳柏山と有を以知る可し御水の下に用齋場御井水と有は第十一條に云る造酒兒井なり餝瓱柄杓と云なり偖其下に以上並供神物皆插賢木と有は此迄は卯日神御物以下は辰日供御物の界なり其（辰日儀に奏爾所獻多米部物色目其詞云悠紀爾仕奉留某姓名等加進禮留物合若干荷就中獻物黑木御酒若干缶白木御酒若干缶云々と有は次に註せる黑酒白酒以下の物なるを以知るべし右の木燧は阿波忌部より所獻れる由加物の中に火鑽一枚と有る其なる可し又其韓竈は儀式に韓竈一具と有れば土器なる事云々更也）次禰宜卜部云々以下雜魚並菜以上の事の次序式文には一に禰宜卜部二に國郡司三に酒盞案四に黑酒五に白酒六に餝酒七に倉代物八に雜魚鮨九に肴菓十に飯十一に酒十二に雜魚並菜なるが儀式には次禰宜卜部一人（着當色木綿日蔭鬘）（以上當色行）次六位以下國郡司（並着當色日蔭鬘白木分在左右）次酒盞案一脚（盞十口以曝布覆以緑油單以絲帶二所結之擔丁八人部領左右各一人相夾）次黑酒十缶（蓋以白木盤以曝布結以木綿居黑木輿以布綱纏之美草爲擔以上插賢木擔丁廿人部領左右各五人相夾）次主禮二人次次第司一人次白酒十缶（裝束及擔丁部領同黑酒）次餝瓱酒十口（裝束同黑酒擔丁八十人部領左右各五人相夾）次膳部卅二人（皆着當色分頭下）次倉代十輿（毎輿居白土其上彩以青摺布其上樹以白土其上彩以…實以菓子等以緑帶二所結之擔丁八十人部領左右各十人相夾下皆傚此）次膳部卅二人次倉代五輿次主禮二人次次第司一人次倉代五輿次膳部卅二人次倉代十輿次膳部卅二人次倉代五輿次主禮二人次次第司一人次倉代五輿次膳部卅二人次雜魚鮨一百缶（蓋以白木盤覆以曝布居以黑木擔丁二百人部領左右各十人相夾）次主禮二人次次第司

一人次肴物菓子十輿（實レ櫃居ニ黒木輿以ニ布綱ニ結レ之擔丁四十八人部領左右五人相夾）次飯一百櫃（實ニ明櫃ニ居ニ白木笥形ニ擔丁二百人部領左右各十人相夾）次主醴二人次次第司一人次酒一百缶（蓋以ニ白木盤ニ覆以ニ曝布ニ居ニ黒木笥形ニ而以ニ美草ニ / 其上挿ニ造花ニ擔丁二百人部領左右各十人相夾）雜魚並菜一百缶（蓋以ニ白木盤ニ覆以ニ曝布ニ居ニ / 黒木笥形ニ擔丁部領同レ上）次主醴二人次次第司一人後陣廿人（左右分列）と見えたり此行列の次第を考るに稻實卜部は供神物を奉行し禰宜卜部は供御物を奉行するなりけり其國郡司式には此に列なる耳なるを儀式には其國郡司並眷族等五位以上は已に上に稻實卜部の前に列なり六位以下は此に禰宜卜部の後に列なれり此の黒酒白酒は大多米院のなる事已に第十五條に委しく云り此即第三十五條に註せる如く旦日豐樂院にて聞食す料なり次條なる式文に除ニ神御物ニ之外皆留ニ朝集院庭中ニ各分安ニ置東西堂ニと有は此酒盞案以下の物なる膳部卅二人宛五度にて總數百六十人なるが式文に見えざるは其頃列を離れて參りしにこそ（倉代物を式に四十輿と云るは其總數を載られ此には刻みて / 記されたる其數合せて同じ事也又式文には後陣廿人左右分 / 列の文無し備右の膳部に大膳職なるなる可し職員令に膳部一百六十 / 人掌下造ニ庶食ニ事上と見えたれば倉代の御饌に就ては參り候ふ可き部 / なる事なり廿條に引る高 / 橋氏文に就て註る如し）其主基國次第亦如之と有は悠紀國前驅以下の次第に少しも異なる所無を云なり儀式に國前行以下主基亦同レ之と記し又神祇官行列 繒服案以上者來レ到ニ朱雀門ニ只列ニ悠紀前ニと見えたる如く神祇官及繒服案は悠紀の前に列なりて宮城東路より南行して七條衢より西に朱雀大路に出て西路より南行し來れる主基の供物七條衢より東に出て相會る時に其より擢出て神祇官及繒服案は朱雀大路の中央に立て北行し宮城に到るに悠紀は左に主基は右に相並びて同じ狀に進む事にて少かも異なる事無きを云なり（其宮城東路とは左京の大宮通を云ひ西路とは右京の大宮通に / て齋場を出て七條衢に至る迄は悠紀主基東西に八町を隔てた / り一條より七條迄廿八丁其より朱雀大路へ四丁其より / 朱雀門迄十八丁凡て宮城外五十町許りの行列なるなり）

麁妙服の事は式に阿波國所レ織麁妙服（アラタヘ）（神語所レ謂阿 / 良多倍是也）預於ニ神祇官ニ設備納以ニ細籠ニ置ニ於案上ニ四角立ニ賢木ニ着ニ木綿ニ忌部一人執下著ニ木綿ニ之賢木上前行四人舁レ案並著ニ木綿鬘ニ未時以前供物到ニ朱雀門下ニ神服部在レ前如レ初阿波國忌部引ニ麁服案ニ出自ニ神祇官ニ就ニ繒服案後ニ立定待ニ內辨畢ニ衞門府開ニ南三門ニ如ニ元日儀ニ神祇官一人引ニ神服男女等ニ到ニ於大嘗宮膳殿ニ置ニ酒柏ニ出又神祇官左右分引ニ兩國供物ニ參入（除ニ神御物ニ之外皆 / 留ニ朝集院庭ニ各 / 分安ニ置 / 東西堂ニ）到ニ大嘗宮南門外ニ即悠紀左廻主基右廻共到ニ北門ニ神祇官引ニ神服宿禰ニ入ニ奠ニ繒服案於悠紀殿神座上ニ次忌部官一人入奠ニ麁服案於同座上ニ訖共引出乃

兩國獻物各收齋殿。訖衞門府開門。神祇官侍於北門內左掖。造酒司先存御飯筥。次酒波等其不易干音樂伴造燈。火鑽炊御飯。安曇宿禰吹火。內膳司率高橋氏伴造各供其職。料理御膳。宮內省官人左右分引大膳職造酒司各陳其所備供神物。高橋朝臣一人安曇宿禰一人各擎多賀須伎共膳部酒部亦依次立並入大嘗宮。其升殿就座。頭立定前頭先置案上。自餘以次手傳奉薦訖。相顧退出（門只擎亦知之）と見えたり（前に已に兩國供物擎自齋場向大嘗宮により以下此に至る迄一聯の事なれども此に別條に立る事はしも別なる意有に非ず條りに長くなりては其意を讀見む爲に煩はしければ其の頭書にも麁妙服事と記されたるに做ひて此條は立たれども前條に並べ見ざれば分離き事多からむかし）阿波國忌部所織麁妙服云々は儀式に時剋悠紀主基共發自齋場詣大嘗宮（悠紀自宮城東路、主基自西路共南行）云々共到七條衢而相會。出朱雀大路。于時神祇官神服等自悠紀行列進立大路中央。兩國相分在左右（悠紀在左、主基在右）到朱雀門前須臾留止。先是阿波國忌部所織麁妙服（神語所謂阿良多倍是也）預於神祇官設備。納以細籠置於案上。四角立賢木著木綿。阿波忌部一人執著木綿賢木前行。四人舁案。並著木綿鬘。供物未到朱雀門前預出自神祇官而相待。供物既到。就繒服案後立定と見えたる如く前條に出たる繒服案の後に列りて宮城に入る事也今其行を列ね見に一に神服宿禰二に繒服案三に阿波國忌部四に麁服案其より神服男神服女以下此に列る事元の如し其四人舁之とは麁服案を舁く人數なり（右の繒服は第十二條に云る如く神服宿禰を參河國に被遣て[illegible]神服部の所織の繒絹十疋を京に上せ[illegible]院にて此を[illegible]て其より[illegible]奉れるを麁服は然にす第十四條に記せる如く阿波國にて織たるを京に上せて[illegible]官に納むるなり阿波國麁布木綿等付[illegible]官にと有れば神祇官にて設備に[illegible]たるなり阿波國忌部は伯仲[illegible]に建久五年六月十二日辛丑阿波國忌部久家還補氏長者在廳之[illegible]と有れば其人多かりしなる可し）待內辨畢。衞門府開南三門。如元日儀。其儀式に衞門開。會昌應天（朱雀三門如元會儀）。供物入應天門。進入百僚入。在門內。自胡床起發大嘗三節と見たり內辨畢云々の事は儀式元正儀に卯三刻以前諸儀辨備訖。閣外大臣以下入。自舍耀章義南門就朝集堂床（大臣以下參議以上在東、親王以下非參議三位以上及奏賀奏瑞在西、若太政大臣就列者在大臣北[illegible]）訖式部丞錄以下起。自閣道座降立前（去前一許丈東西上北面）史生二人各持大札共立庭中唱計五位以上隨唱稱唯列立。訖史生共復本列。參閣內大臣入。自昭訓門就幄下座。時閣外大臣喚召使。稱唯進立（當堂西中階北面而立）。大臣宣。喚兵部省。召使稱唯退出喚之。丞入立。大臣宣。令擊外辨鼓。丞稱唯退出。令擊之。諸門皆應之（殿下鼓不應）乃開章德興禮南門（自餘小門皆已開）訖伴佐伯兩氏五位各一人（左伴氏右佐伯氏、不帶劍者帶帶）各著禮服率門

部三人二不レ帶二弓箭一入レ自二章德與禮兩門一居二會昌門內左右廂胡床一門部在二門下一去レ壇丈當二門北楹一侍候辰一刻乘輿出レ自二建禮門一御二大極殿後房一云々伴佐伯兩氏五位降レ壇北向立二門下一門部開レ門諸門共開訖各還二本位一と見えたる是元正儀なり右の閤內大臣閤外大臣即內辨外辨を云なり借式文の其下に訖衛門府開門と有は兩國の供物の入訖る時を云なり　此に依て考ふるに右の內辨の式は行列の大凡宮城近く至る時を期りて有なる可し又右の其人の發遣の事式文に見えざるなり定式の事故に略かれたるも有べし　神祇官一人引二神服男女等一云々は儀式に神祇官中臣一人率二神部等一持二被麻鹽湯一灑二-潔供神物並雜物一訖神祇官一人率二神服男女等一到二膳屋一置二酒柏一退出次神祇官左右分列率二兩國供物一參入除二供神物一之外及標等皆留二朝集院庭中一各分安二-置東西殿一　到二大嘗宮南門外一即悠紀左廻主基右廻共到二北門一と見えたり此は右に註せる如く神祇官縉服案麁服案の前に立て進み神服男神服女を大嘗宮東北角なる膳屋に引て其行列の時に手に持りし酒柏を置て罷ら令め其より供物を引て大嘗宮北門に到る迄に式なり此除二供神之物一之外及標等皆留二朝集院庭中一各安二-置東西殿一と有る供神之物之外とは前條行列次第に見えたる酒盞案黑酒白酒倉代物以下にて辰日宴會の料なり但式には標の事見えざるは前なる行列の次第にて載ざる故なり借悠紀左廻主基右廻共到二北門一と有は右の供神之物なり若て此儀式の初に神祇官中臣一人率二神部等一持二被麻鹽湯一灑二-潔供神物並雜物一と有は式文には略かれたり　第七條なる拔穗使の國より[illegible]に到る所にも國司持二被麻鹽湯一迎二[illegible]門一灑二-潔御稻並雜物一と見えたり其も此も[illegible]例なり其到二[illegible]一[illegible]所は第十七大嘗宮條に膳屋一宇云々臼屋一宇云々其西に[illegible]柏棚と有て細書に左右各有二四柱一長一丈五尺廣五尺高四尺と有り　神祇官引二神服宿禰一入レ奠二縉服案於悠紀殿神座上一次忌部官一人入奠二麁服案於同座上一訖其引出と有は儀式も同文にて異無し主基殿の事は此に傚ふなる可し宮主秘事口傳抄に宮主與二神服長一分レ昇二縉服案一於二案下一差レ笏昇二レ之　宮主者昇二後方一神服長者昇二前方一也經二神座西北兩方一立二懸長疊立一案外主上御通達之間廣立也御通達無二違亂一之樣立レ之是故實也　神服長者官方催也　次小使與二齋部官人一昇二荒妙案一　小使者後方齋部者前方　各先於二案下一差レ笏立二神座西方南北行一也各退出と有る宮主は禰宜卜部にて次に云ふ大使の事なり其小使は禰宜卜部なり此は式文にては其國に拘らず神祇官人の取擬ふなると趣少異なるに似たり次主基神殿者大使與二神服長一各於二案下一差笏昇二縉服案一經二神座西北兩方一立二東方一立二懸長疊上一案外主上御通行之間廣立也次各拔レ笏退出

次小使輿ニ齋部官人ニ昇ニ荒妙案ニ（先於ニ案下ニ各進レ奠小使前方齋部官人後方）立ニ神座西方ニ（南北行也）と有れば主基殿にも同じく被奠る事著明し式文に漏たるは其主基國次第亦如レ之と有に合れる者なりけり（猶此抄に依に荒妙案は神座の東方に置き繪服案は神座の西方に置く可き御定なるなり）訖共引出乃兩國獻物ニ各收ニ齋殿ニ訖衛門府開レ門神祇官侍ニ於北門內左掖ニは儀式此に同じ兩國獻物は右に云る供神物なり齋殿をば儀式に膳屋と記せるは其總名を以云るにて第十七大嘗宮條なる式に此院東北角造ニ膳屋一宇ニ（[illegible]）構ニ當ニ東西ニ東端ニ二間云々西端三間爲ニ盛レ膳所ニと有る其盛殿なり衛門府開レ門は神御物は盛殿に收め畢り供御物は朝集堂に納訖れるに依てなり神祇官侍ニ於北門內左掖ニて儀式に留侯と見えたり此は行事有によりて自餘の人と共に退出せざるなり（北門は大嘗宮の北門なり左掖とは北門傍の小門を云なりければ北方なる[illegible]に[illegible]ひて西北方にや在る可からむ此に置なとに記さにや其事見ざれば此「十條に大嘗宮大門ニ一人（掌ニ中臣忌部[illegible]）右前行と有る此事に供奉る爲に此に侍ふなめり）造酒兒先舂ニ御飯稻ニ次酒波等共不レ易レ手舂は儀式にも造酒童女先舂ニ御飯稻ニ次酒波等共不レ易レ手且舂且歌（歌詞當レ時爲レ之）と有り此は大嘗宮東北角なる臼屋にて舂く事第十七條に見ゆるが如し惜此御稻は第七拔穗條に先御ニ束稻拔ニ（四把爲レ束）擬ニ供御飯ニと有る其なるが儀式には納ニ高萱御倉ニと見えて其細書に會日稻實公所レ負稻也と有れば御稻輿より下して造酒童女の臼屋にて舂に至る迄の內に稻實公の負て收むる式有と見えたり且舂且歌は風俗の歌を謠ひ乍御稻を舂く事なり第七條に引る一條大閤御說に風俗の和歌十首此中に稻舂歌有り」と有は是なり宮主秘事口傳抄に行幸以前以ニ拔穗御稻ニ分レ歌ニ舂歌ニ眞實者悠紀方三升許主基方三升許舂ニ出之ニ是神膳御飯米料也先々拔穗使申狀云以ニ千五百之嘉穗ニ備ニ億千載之神膳ニ由載レ之者此稻事也」と有り此眞實三升は稻四束を以て得る所なる可し此拔穗使申狀とは右の稻舂歌とは別にて其壽詞と聞えたり（右の眞に千五百之嘉穗ニ備ニ億千載之神膳ニとは中臣壽詞に豐葦原乃瑞穗乃[illegible]久安介久由庭仁所知食止事依志奉氏天[illegible]之と有に[illegible]秋乃瑞穗乎以氏長御膳乃遠御膳[illegible]仕奉[illegible]に[illegible]する字なれば其[illegible]にて書るなる可く[illegible]五百秋之瑞穗」と有れば千五百秋と訓付べき事[illegible]の字は千五百に對て書るにて長く遠き[illegible]）畢伴造燧レ火會炊ニ御飯ニ安曇宿禰吹レ火は其御稻を以大御饌を炊仕奉るなり儀式に伴造燧レ火云々伴ニ炊ニ御飯ニと有を此に約めて會炊ニ御飯ニと記されたり中右記に內膳司御竈神三所也云々一所云々一所忌火是則十一月新嘗六月神今食祭奉ニ供神也と有る其御竈ニ以

て炊奉るなり此大嘗の月は更にも云ず六月十二月の神今食の爲にも內膳司より忌火御飯を供るをも思ふ可し其伴造鑽レ火は高橋氏文に令レ鑽二忌火一大伴造者物部豐日連之後也と見えたり其大伴造を省て伴造とは云也古に膳大伴部と云る是にて內膳司の膳部の中にて物部豐日連の後を精用る事は景行天皇御世よりの例なる事已に第廿二條に註るが如し神今食儀には膳伴造鑽レ燧即炊二御飯一と見えたり安曇宿禰の吹レ火く事は神代より以來海幸を以て御贄仕奉れりし山に緣るなる可し姓氏錄右京神別に安曇宿禰海神綿積豐玉彥神子穗高見命之後也と有る穗高見命と申すは御贄を供奉る爲に御厨屋の火を高く燒擧る由なる可く又古事記に阿曇連等者其綿津見神之子宇都志日金拆命之子孫也と有れば穗高見命の亦名なる事決きを其宇都志とは顯明(ウツシヨ)を云れば海中より此顯國に出て皇御孫命の御贄に仕奉られしを以て云ひ日金拆とは火を燒立て金も拆る程に功績しみ給ひしを以云也神代に已く鍋等具有し事此を以知べし　古に厨屋の火を高く燒立るを美好き例と爲し事は同記に水戸神之孫櫛八玉神爲二膳夫一獻二天御饗一之時禱白而櫛八玉神化レ鵜入二海底一咋二出底之波邇一作二天八十毘良迦一而鎌二海布之柄一作二燧臼一以二海蓴之柄一作二燧杵一而鑽二出火一云是我所レ燧火者於二高天原一者神產巢日御祖命登陀流天之新巢之凝烟之八拳垂摩弖燒擧地下者於二底津石根一燒凝而云々と有以て其穗高見命又宇都志日金拆命と申す名義た曉る可し但其命の皇御孫命の朝廷に仕奉られし初は神代の三朝の內也とは見ゆれども何れの御代とも今定め難し　內膳司率二諸氏伴造一各供二其職一新二理御膳一は儀式亦此に同じ偖此より以下の事共は酉剋に在なる可し其は第卅三條に引る式文に子時神祇官引二內膳部等一遷二主基膳殿一と有て寅一剋薦二主基御膳一と有れば二時の前に在り然れば此の亥剋より二時前は酉時なるを思ふ可し偖又上なる忌火を鑽て御飯を炊く事より種々の御贄を新理り供奉る事は內膳司の職掌にて神今食儀に膳伴造鑽レ燧即炊二御飯一安曇宿禰吹レ火內膳司率二諸氏伴部及采女等一各供二其職一新二理御膳雜物一と有を合せて考ふ可し類史に高野天皇神護景雲二年二月癸巳勅准レ令以二高橋安曇二氏一任二內膳司一者爲二奉膳一其以二他氏一任レ之者宜二名爲一レ正と有が如く高橋安曇の氏人其長官と爲て仕奉る事已に第廿二條に註り其諸氏伴造とは膳部にて謂ゆる膳大伴部也　御贄を炊く伴造は豐日連の後の大伴造に限れる事なるを御膳の御贄を料理る事は諸氏の伴造を以て任ず事なり但元は大伴造と云しを大字を省て後に伴造と云る事第卅三條に高橋氏文を引て云るか如し又第卅二條なる行立次第の下にも云り職員令に膳部四十人掌レ造二御食一と見えたり　宮內省官人左右分引二大膳職造酒司一各陳二其所一備供神物一高橋朝臣一人安曇宿禰一人各擧二多賀須伎一其膳部酒部亦依レ次立並入二

大嘗宮ニ其升ノ殿就ニ案頭ニ立定前頭先供ニ案上ニ自餘以次手傳幸レ覓訖相顧退出（明日辰亦如レ之）は儀式も此に同じきが此は盛殿にて料理れる御膳物の凡て調備はれる時に黛て大嘗殿に納め置く事なり其大膳職と造酒司は御膳と御酒の事を奉行する爲なる可し（造酒司式に卯日申時神供神物入（自ニ朝堂院東中門ニ隸ニ於昌福堂内以南ニ）辰日午比東ニ案北野請立ニ云々と有り） 内膳司の本膳に仕奉る高橋安曇二氏に掌ニ多賀須使ニと有は下なる行立次第に就ニ薦汁漬ニ就ニ海藻汁漬ニと有る其にて此を紀伊國由加物を以料理れるなる可し膳部酒部は大膳職造酒司のなる可し其は内膳司の膳部は御膳を料理れ、は此には預らぬにや猶考ふ可き事なり就ニ案頭ニとは其最前に進む人なるが故に前頭とは云と見えたり（采女の中に其[illegible]次第有に准へて知べし[illegible]官人の大膳[illegible]造酒司[illegible]る事に其[illegible]造酒主[illegible]令[illegible]に見ゆ[illegible]云るに[illegible]官受ニ取大[illegible]木工[illegible]命[illegible]を以て其以下を思ふ可し）

燈燎及庭燎の事は式に酉時主殿寮以ニ寮火ニ設ニ燈燎於悠紀主基ニ院ニ院別ニ燈ニ燎伴宿禰一人佐伯宿禰一人各率ニ門部八人ニ（並著ニ青摺ニ）於ニ南門外ニ通夜設ニ庭燎ニ悠紀主基ニ國進ニ御殿油ニ斗ニ（主基別）燈臺盞各八口燈心布八尺（宿別）二尺炭八石二石（日別）續松三百廿把（別八十把）其長八尺薪一千二百斤（日別三百斤）と見えたる如し儀式亦如此し（但燈盞盤を燈坏盤に作り燈心布を燈炷布に作り續松三百廿把を松明三百廿把と作れる其餘に少も異る所無し） 主殿寮以ニ寮火ニ云々を江次第には以ニ齋火ニ設ニ燈燎於南院ニ各二燈二燎と有を合せて思ふに寮火は寮より出す火と云事なるが物實は齋火を以て供奉るなりけり燈は燈火燎は庭燎を云也（[illegible]貞令主殿寮の下に燈燎の二字有る其[illegible]に油火所の燎と見えたる庭燎と有たるを以知べし） 伴宿禰一人佐伯宿禰一人各率ニ門部八人ニ云々通夜設ニ庭燎ニは江次第にも伴佐伯宿禰率ニ門部ニ（各八人著青摺）南門外設ニ庭燎ニと見えたる此南門は大嘗院の南門なる也（第廿七條に伴佐伯各二人就ニ南門左右ニ[illegible]）

行事の事は式に度時天皇始警蹕ニ廻立殿ニ主殿寮供ニ奉御湯ニ即御ニ祭服ニ入ニ大嘗宮ニ其道者大藏省預敷ニ二幅布單ニ掃部寮設ニ葉薦ニ且随ニ御歩ニ敷ニ布單上ニ前敷後卷（宮内輔以上二人敷レ之掃部允以上二人卷レ之）人不ニ敢蹈ニ還亦如レ之宮中道并庭者以ニ八幅布單八條ニ敷大臣若大中納言一人率ニ中臣忌部（中臣立レ左忌部立レ右）御巫猿女ニ左右前行（大臣立ニ中央ニ中臣忌部[illegible]門外路左右ニ）候

儀始申主殿宮人二人執レ燭奉レ迎車持朝臣一人執ニ菅蓋一子部宿禰一人笠取直一人並執ニ蓋綱一膝行各供ニ其職一（還亦如之）御ニ悠紀嘗殿一小齋群官各就ニ其座一訖レ（大齋群官不入ニ廻立殿院及大嘗宮中一）伴佐伯氏各二人開ニ大嘗宮南門一衛門府開ニ朝堂院南門一と見えたり（儀式の趣も大抵同じけれども此式文の章毎に引て註すを見て明らむ可し）戌時天皇始警云々入ニ大嘗宮一は儀式に戌刻鸞輿御ニ廻立殿一主殿寮供レ湯即著ニ祭服一と有り江次第に戌刻御ニ鸞輿一（常御）其儀式如レ常小忌王卿列立出レ自ニ建禮門一入レ自ニ昭訓門一於ニ東廊壇上一改駕ニ腰輿一經ニ廻立殿北并西幔門一入レ自ニ西方一御ニ廻立殿一不レ奏レ鈴持ニ候大刀契一同候レ之小忌親王納言參議各一人供奉如レ常即就ニ殿巽角庭上座一大臣一人著ニ小忌服一供奉候ニ坤角座一（後日著ニ位袍一）と見えたり小忌王卿列立と有は供奉列るなり小忌群官は親王以下參議以上を云なり第廿七條に宮內省式を引たるが如し經ニ廻立殿北并西幔門一と有は第廿六條に擧たる廻立殿北横立五丈幄一宇設內侍座一と有る其より經させ給ひ廻立宮の西門より入せさせ給ふなり入レ自ニ西方一御ニ廻立殿一は第十八條に引る儀式に主殿寮以ニ斑幔一張ニ東西北三間一（自ニ大嘗宮北垣一籠ニ廻立殿以北一）と見えたる其南一方は大嘗宮の北垣なるが故に東北を經させ給ひ西門より入御すとなり不レ奏レ鈴持ニ候大刀契一候レ之の下に寛平式云是夜不ニ警蹕一入御後殊禁ニ高聲一仁和記云入レ自ニ南戶一先御ニ西方御床一と有は神事なる故に警蹕等の事は止めさせ給へるなり南戶は廻立殿の南戶にて西方御床は御裝束を奉る所なるなり小忌云々即就ニ殿巽角庭上座一は供奉にて其所に候ふ也大臣一人著ニ小忌服一云々は此大臣は謂ゆる前行の大臣にして小忌の列に非すと雖も中臣忌部以下を率て御前に供奉る故に當日は小忌服を著て其列に仕奉り辰日以後は著ニ衣袍一て大忌の列に仕奉るなり主殿寮供ニ御湯一の事は第廿七條に委しく云り但此廻立殿にて奉るは二度共に小齋湯なり次御ニ裝束一は祭服を着させ給ふなり（御服の事は第廿條に見えたり今度は悠紀殿に入給ふ爲に御湯御裝束の事有り次は主基殿に御給ふ爲に又其事有て凡て二度なり廻立殿と云日も此に依れる事第十八條に註るが如し偖江次第に次御ニ裝束一の下に近例脫ニ常御衣之袍下襲等一令レ著ニ祭服一給至ニ表袴一以下者不ニ改給一又御幘令レ廻ニ御巾子一給不ニ必曳一廻御領董常無ニ供レ幘之儀一と見えたり）入ニ大嘗宮一其道者云々は儀式に御ニ大嘗宮一大藏省預以ニ二幅布單一鋪ニ其通途一（其宮中地面鋪以ニ八幅布單上一宮內輔二入左右膝行敷ニ葉薦一）掃部允以上二人自レ後且卷レ之不ニ敢踏一還亦如レ之（其葉薦者掃部寮設レ之）と見えたり式に掃部寮設ニ葉薦一且隨ニ御步一前敷後卷と有は江次第に御ニ悠紀殿一の細書に主

上徒跣不ニ着レ履給一供奉人亦同と有る如く廻立殿よ
り大嘗宮に入御すに徒跣にて歩行させ給ふが故なり
且敷且巻は供奉の人も徒跣にて履を着ざれども敢て
蹋せじとての事なるなり（布單の事は第廿條に見えたり葉薦は第廿一條なる掃部寮の進る物の中に記されざるは此寮の掌る所なるが故に預云ざるなり）大臣若大中納言一人云々は儀
式此に同じ此は上に引る江次第に若ニ小忌服一供奉
候ニ抑角座一と有る大臣なり又同書に大臣（執レ綱把レ笏）率ニ中
臣忌部一在ニ御前一大臣在ニ中央一（近衛不レ請ニ葉薦一仍兼帯レ傍）中臣在レ左忌
部在レ右御巫猿女左右前行と有は殊に委しき也借此
大臣は右に云る前行の大臣なり（第廿八條に引る式に神祇官侍ニ於北門内左素一と有は此行幸に御供仕奉らむが爲なる事其所に云り）宸儀始出云々は儀式に主殿官人
二人秉レ燭照レ路車持朝臣一人執ニ菅蓋一子部宿禰笠取
直各一人夾ニ膝行執ニ蓋綱一還亦如是と有て同じ事なり
江次第にも夾膝行執ニ蓋綱一と有り此菅蓋の制は大嘗
會其檡に菅にて作れる指掛笠なり別に長き柄有り柄
末曲りて少し下れるが其曲りたる所に鳳凰の如くに
て尾の長からぬ鳥を作り居其鳥の喙を貫ぬきて紐を
下げ其紐の末を蓋の頂に在る環に通じたる物にて其
柄を持て蓋を主上の御上に指覆ひ奉る者なり一と有
るが如し借職員令に主殿寮頭一人掌下供御輿輦（謂御行用）

（輿竟行日レ輦也）蓋笠繖扇（謂繖蓋扇翳也）帷帳湯沐洒ニ掃殿庭一及燈燭（謂油
火爲レ燈火爲レ燭也）松柴炭燎（謂柴薪柴燎庭燎）等事上と有て其所屬に殿部四
十人と有り然るに三代實錄元慶六年十二月の所に
以ニ日置子部車持一笠取鴨五姓人爲ニ殿部一と有る車持
子部笠取三姓は右に出たる氏々なり借此は古くより
其主殿の事に仕奉り來れるを更に殿部に任給へるな
り姓氏錄（左京皇別）に車持公上毛野朝臣同祖豊城入彦命八
世孫射狹君之後也雄略天皇御世供ニ進乘輿一仍賜ニ姓
車持公一と有は輿輦の事を以主殿寮に屬て仕奉るは
然る理なり子部は天武天皇十三年御紀に兒部に作
れり小子部連の例に准らへ思ふに小兒を率て彼酒ニ
掃殿庭一などの事に仕奉れりけるにや姓氏錄（右京皇別）に子
部火明命五世孫建刀米命之後也と見えたる刀は御所
にて御贄の事米は部にて其に供ふ義なるを以思ふ可
し笠取直は彼蓋笠繖扇の事に依れる氏とは聞えたれ
ども直姓なるは姓氏錄に見えたる笠朝臣笠臣などの
皇別の上氏なるには非ずて別なる可し又諸蕃に御笠
連と云が有れども神龜元年五月御紀に高正勝賜ニ姓
三笠連一と有れば三笠は地名にて蓋笠の謂に非ざれば
舊事紀に笠縫等祖天津麻占命々笠縫等祖天都赤麻良

笠縫部祖天昔蘇など見えたる其裔孫なる可し尚右の日置鴨等の事を云むに日置は國々の地名に多くは開役と訓るも有れども比於伎と訓べき也彼松薪炭燎等の事に就て考るに比於伎は炊火（オコシヒ）に依れるなる可し姓氏錄右京皇別に日置朝臣應神天皇々子大山守王之後也と有も大に由有る事なり然れば日置の職名なるも此に依て考ふ可き事なり鴨は神武天皇御紀に二年春二月甲辰朔乙巳天皇定レ功行レ賞云々又頭八咫烏亦入ニ賞例ニ其苗裔即葛野主殿縣主部是也と有る頭八咫烏は建角身命にて其苗裔は鴨縣主なるが主殿縣主部と見えたるは古くより主殿の屬官として仕奉れりし也けり然れば右に引る職員令なる主殿寮の職掌を日置子部車持笠取鴨等の五姓に配當れば悉く喈合せるは右の五氏の[illegible]を合せて主殿寮は置れたれども其後にも殿部に仕へ給ひ又斯る大祀などに至りては主々しき方にも使はせ給ふ事なり 御ニ悠紀營殿ニ云々は儀式に既 御ニ悠紀 正殿ニ小齋群 官各就ニ其座ニ但大齋人留ニ宮門外ニ不レ入ニ其內ニ訖伴佐伯宿禰各一人開ニ大嘗宮南門ニ衞門府開ニ朝堂院南門ニと見えて異無し江次第御ニ悠紀殿ニ其道云々內侍二人候ニ御劒璽筥ニ云々仁和記云自ニ南簷ニ開レ簾入御次御ニ中央戶坤ニと見えたり然れば廻立殿より悠紀殿の西面を通らせ給ひ南面の戶より入せさせ給ふ也宮主秘事口傳抄に載る圖を以て見に南面戶の西方に倚て彼以ニ北三間ニ爲レ室有る其第一間の柱の方より西少北に折て其殿の西面の方を北に進ませ給ひ其より北面の方を東に折れ其より回りて東面を南に進み北より第二間の所東寄たる其中央の御座に即せ給ふなり第卅二條に引る江次第に亥一刻釆女申レ時皇上召ニ御手水ニ入レ自ニ中戶ニ經ニ神座西並北ニ着ニ神座以東御座ニと見えたるは此時の事也 小忌群官各就ニ其座ニは江次第には其細書に王卿經ニ大嘗宮東邊ニ就レ之ニと見えたり其は第廿六條に引る儀式に所司於ニ承光顯章兩堂前ニ縱立ニ七丈幄各一字ニ設ニ小齋人座ニと有る本註に天皇御ニ悠紀殿ニ在ニ東幄ニ御ニ主基殿ニ在ニ西幄ニと有る是なり又江次第の小忌群官各就ニ其座ニの文に續きて西面北上辨少納言以下侍從等皆候ニ此幄ニ大臣就ニ左近小忌幄ニメ有り此小忌幄即悠紀幄なり第卅三條に引る江次第に天皇易ニ御服ニ御ニ主基殿ニ云々小忌群官度ニ馳道ニ就ニ主基幄ニと有る其下に云を見べし但此大臣は右の前行大臣を云なり左近小忌幄とは東方なる承光堂前なるを云り但大齋人留ニ宮門外ニ不レ入ニ其內ニは江次第に大忌不レ入ニ大嘗宮及廻立殿ニと有る是なり大齋人の幄は悠紀主基共に同じ所に在て易らざるなり右に引る江次第の小忌群官度ニ馳道ニ就ニ主基幄ニの下に新式云大忌不レ遷又大忌座悠紀主基不ニ分別ニ而承平以後大忌共遷非也と有が如し 王卿以下小忌群官の外は何れも大齋なれども猶別に定らるゝ事も有にや宮內省式に大齋內膳司十四人並膳部 釆女司廿八人官人二人釆部六人釆女廿人 主水司廿三人官人一人水部廿二人 國栖十二人笛工五人と有り伴佐伯宿禰各一人開ニ大嘗宮南門ニ衞門府開ニ朝堂院南門ニは江次第開門の細註に伴佐伯宿禰開ニ大嘗宮南門ニ衞門開ニ會昌門ニと有然れば應天門には此時に伴佐伯無き故に衞門開さる事と見えた

り拾芥抄に宮城門謂二之八省朝堂院南面外門一と云ひ會昌門謂二之南内門一と有る内門に用有て外門に事無ればなり

皇太子以下參着の事は式に宮内官人引二吉野國栖十二人楢笛工十二人一（並青摺布衫）入レ自二朝堂院東掖門一就レ位奏二古風一悠紀國司引二歌人一入レ自二同門一就レ位奏二國風一作宿禰一人佐伯宿禰一人各引二語部十五人一（青摺衫）入レ自二東西掖門一就レ位奏二古詞一皇太子入レ自二東南掖門一諸親王入レ自二西門一大臣以下五位以上入レ自二南門一並着二幄下座一六位以下在二暉章修式二堂後一依レ次列立群官初入隼人發レ聲立定乃止進二於楯前一拍レ手歌舞五位以上共起就二中庭版位一跪拍レ手四度々別八遍（神語所レ謂八開手是也皇太子先拍レ手而退次五位以上拍レ手）六位以下相承拍レ手亦如レ之（但小齋人不レ入二此例一）訖退出唯五位以下退就二幄下位一坐定安倍氏五位二人六位六人左右相分共就二版位一奏二侍宿文武官分番以上簿一（主典以上書二姓名一分番已上惣注二其數一其奏二事於御在所一者皆就二南楯東頭一並立）と見えたり（此は天皇の正殿に出させ給ひて常に在る事なり[illegible]の諸官は已に其座に就て在るなり）宮内官人云々は儀式には率二吉野國栖十二人楢笛工十二人一（並青摺布衫）入レ自二朝堂院南左掖門一就レ位奏二古風一と有て式の東掖門を南左掖門と見えたる耳異なりと雖も東掖門南左掖門共に同じく會昌門の東にて左に當れる章德門を云なり下是に傚ふ可し江次第には宮内官人率二吉野國栖一入レ自二左掖門一（國栖十二人笛工五人）承平記云馳道當二近仗平張南一と有て此には人數に相違有り儀式には其下に國栖奏二古風一五成と見え江次第には其細註に承平記其笛以レ指摩レ穴歟と見えたり此國栖の古風を奏する事は古事記（輕島明宮段）に天皇聞二食豊明一時之於二髮長比賣一令レ握二大御酒柏一賜二其太子一云々又吉野之國主等瞻二大雀命之所一レ佩御刀一歌曰本牟多能比能美古意富佐邪岐意富佐邪岐波加勢流多知母登都流藝須惠布由布由紀能須加良賀志多紀能佐夜佐夜又於二吉野之白檮上一作二横臼一而於二其横臼一釀二大御酒一獻二其大御酒一之時擊二口鼓一爲レ伎而歌曰加志能布邇余久須袁都久理余久須邇迦美斯意富美岐宇麻良爾岐許志母知袁勢麻呂賀知此歌者國主等獻二大贄一之時々恒至二于今一詠レ之歌者也と見えたる是其始なり此事を御紀には十九年冬十月戊戌朔幸二吉野宮一時國樔人來朝之一因以二醴酒一獻二于天皇一而歌之曰云々歌レ之既訖則打レ口以仰咲今國樔獻二土毛一之日歌訖即擊レ口仰咲者蓋上古之遺則也と出たり右の奏二古風一と見えたるは此也又政事要略にも豊明節會吉野國栖於二承明門外一奏二歌笛一其詞云云々進二御贄一と有る其詞と云も右の

歌なる由り姓氏録國栖の下に息長天皇御世乙未年中七節進二御贄一仕二奉御態一至レ今不レ絶と有る此神態は、大嘗祭を云なる可し（但乙未年と有は元[illegible]天皇元年には[illegible]壬子にて御在位四十二年の間に有りけ[illegible]無きなり[illegible]天皇元年は[illegible]年なれば二十年ぞ有りの乙未には當れりけるにればなり[illegible]安康天皇[illegible]の混ひたるにや有らむか舊宮内省式に[illegible]以二十七人一爲レ定と見え民部省式に吉野國栖永勿二課役一者不レ忘二其舊功一也と見えたり右の[illegible]歌曲[illegible]と有は[illegible]に同じ其舊功とは應神天皇の大御[illegible]の[illegible]奉りし[illegible]の事は古事記傳卅二卷に就て知べきなり[illegible]笛工(ナラ)に在る所の笛工にて雅樂[illegible]の笛工とは別なる者なり）悠紀國司引二歌人一入レ自二同門一就レ位奏二國風一と有は同じく東掖門より入る事なるが儀式の此と同文にて入レ自二同門一と有は南左掖門にて章德門なるなり江次第には左掖門と有り儀式には其下に次悠紀國司奏二國風一四成と有を江次第にも其同文有て細書に其聲似二神歌一涯主基奏二早歌一と見えたる似二神歌一涯とは神樂よりは其歌聲緩なる義なり奏二早歌一とは主基方は其聲を急て歌ふ事なり此歌人と云へるは第六條なる披穗使の其兩國に到りて歌人廿人歌女廿人を定めたる其を云ふ第廿五條なる齋服の下に風俗歌人兩國男女各廿人と有れば一國に男女四十人完也其國風と云は謂ゆる風俗の和歌なる事第廿八條稻春歌の下に云るが如し此風俗の和歌の起元究めて尊く愛たき由緣の無てやは有べき故思ふに顯宗天皇御紀に白髮天皇二年冬十一月播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯於二赤石郡一親辨二新嘗供物一適會二縮見屯倉首縱二賞新室一以レ夜繼レ晝云々億計王起舞既了天皇次起自整二衣帶一爲二室壽一曰云々壽畢乃和節歌曰伊儺武斯盧呵簸泝比野儺擬寐逗愈凱麼儺彌企於己陀智曾能泥播宇世儒云々と有る此等の迹に本む依られけりとは見えたりけ（[illegible]より[illegible]の事を歌に歌て[illegible]の時にも此天皇ひて舞し[illegible]此大嘗祭に[illegible]次に奏するなり）伴宿禰一人佐伯宿禰一人各引二語部十五人一著二青摺衫一入レ自二東西掖門一就レ位奏二古詞一とは儀式も此と同文なるが其入レ自二東西掖門一を細書に伴入レ自二左掖一佐伯入レ自二右掖一と見えたり語部の事は第廿四條に江次第を引て委しく註れば其に就て明らむ可し但儀式には右の文に繼て並掃部寮舗設と有て其下に前座國栖次歌女次語部皆北面東上國司座在二歌女以東一と有り然れば其大嘗宮に向ひて前座は國栖其次は歌女其次は語部と異位重行に座を定むるなりけり（江次第此に同じ但歌女は歌人歌女と並へ記さる可き事なれども然細かに云に及ぶ可からざるが故に略かれたる者なり但伴宿禰の入る左掖門は章德門佐伯宿禰の入る右掖門は興禮門を云なり）皇太子入レ自二東掖門一諸親王入レ自二西門一大臣以下五位以上入レ自二南門一並就二幄下座一六位以下在二暉章修式二堂後一依レ次列立は儀式亦異儀無し此より前に大臣以

下朝集堂の床に在る事第廿八條に云る如し其より此幄下座に進む事なり皇太子入レ自ニ東南掖門ニを儀式には東方南掖門と有り即章徳門の事なり西門は章善門南門は會昌門なり幄下座の事は第廿六條に詳る如く皇太子の幄幄は暉章堂の前に在て東方なり親王以下五位以上の幄は修式堂の前に在て西方なり六位以下には幄を設ざる故に暉章修式両堂の後に列立するなり江次第に大忠親王以下參入就ニ幄下座ニ云々並北面云々と見えたり（其六位以下參入の下なる細註に新六位已上者儀式作レ無ニ云々列ニ立堂上ニ者と有り借儀式及式共に開門の後直に參入る事なるを江次第には其の直に大臣親王及親王大臣以下參入る事なり其より先の國栖歌人語部の參入る状にして其前後に異なる所有り右の進北面と有に次て儀式井覚平式園酒等參入後群官參者云々面亦式次為知レ北ニ立列行幸以前王韓人レ自ニ東門ニ同就ニ暉章堂前ニ宮衛家諸ニ皆承不レ開ニ仕也開門後出レ自ニ東掖門ニ皇太子參入後更入レ自ニ會昌門ニ者なりと見えたり右レ儀式とに延喜式の事なる可し）群官初入隼人發レ聲立定乃止進ニ于梧前ニ拍レ手歌儛は儀式に次隼人司率ニ隼人等ニ從ニ興禮門ニ參入於ニ御在所屏外ニ北面立奏ニ風俗歌儛ニ（主基同）と見え江次第に隼人司入レ自ニ右掖門ニ拍手歌舞（於ニ御在所屏外ニ北面立奏二人舞）訖各退出と有る此等を合せて知るべきなり右の梧前とは大嘗宮南門外に有上擬井二氏の立たる神梧の前にて即御在所の屏外なる也群官初入とは朝集堂の床に侍給ふ大忠の大臣以下朝堂院の南門より入て幄下座に就く時を云り立定乃止は六位以下に至る迄悉くに參入て列立ち畢るを云なり第廿七條に記せる如く此より前に隼人は左右朝集堂の前に在を今度右掖門より入て聲を發するなり（右掖門は即會昌門を云なり第廿七條に委しく云るを見合す可し儀式に主基も同じと見え江次第に各退出と有は此より上なる國栖歌人等に係て云る也其心して見る可し）五位以上其起就ニ中庭版位ニ云々は儀式に皇太子以下五位以上就ニ庭中版ニ跪拍レ手四度（度別八遍詳ニ所レ謂八開手是也皇太子先拍レ手而退次五位以上拍手）六位以下亦如レ是（其小齋人不レ在ニ拍限ニ）訖退出唯五位以上退就ニ幄座ニと見えたり就ニ庭中版ニとは幄座より進みて中庭の版位に就るゝ事なり第廿七條に引る式に式部設ニ皇太子以下版位於大嘗宮南門外庭ニと見えたる其南門外庭即朝堂院の中庭なるなり江次第に親王以下五位以上就ニ庭中版ニ（異位重行）と有る如く其列は異位重行なる者なり跪拍レ手云々を江次第に跪拍レ笏拍レ手四度（度別八遍云々）拍レ手畢小拜（設南膝）と有は殊に委しきなり小齋人不レ在ニ拍限ニは江次第に不レ在ニ拍レ手限ニと有る如く大齋人と混れざる用意なる可し訖退出唯五位以上退就ニ幄座ニは六位以下は幄座無き故に便所に復り五位以上は幄座に就て此悠紀の事畢て主基の座に進む期を待つ事なり第三十

六條悠紀節會に皇太子先拍レ手退出次五位以上俱拍手六位以下相承拍レ手退出如二前儀一と有は此條を云るなり（入開手の事は祝詞講義十三卷に此文をも引て委しく註せれば今此に云す庭中版は江次第に承平記云進二馳道東近仗南一式部不レ置レ版量レ程列立云々今案親王可レ立二馳道西一公卿在レ東四位以下相分立二東西一と有り馳道は江次第に承平記云馳道當二近仗平張南一と有る是を云り近仗は江次第抄に謂二近衛次將一也と有れば其陣を云なり第廿七條に引る式に左右近衛中將以下各引二隊仗一分衛二大嘗宮一と有る其幄の事なり異位重行とは一條大閤御說の如く大臣の其後に大納言其後に三位の中納言其後に四位の宰相列り二位の中納言は大納言の末に少し退きて列なるを云なり但異位重行は江次第より以降の事か）座定云々は右の幄下座に復り就を云なり儀式に座定安倍朝臣氏五位二人六位六人左右相分共就二版位一奏二侍宿文武官分番以上簿一（主典以上書二姓名一分番唯奏二其數一凡奏二事於御在所一者皆跪若雨濕則立奏其簿辨官仰二諸司一進レ之即喝二安倍朝臣氏一）見えて江次第にも畢各復二幄座一安倍朝臣（五位二人六位四人）左右相分就レ版奏二侍宿文武官簿一（主典以上書二姓名一分番奏二其數一）と有り此は群官幄下座に復就き座定りて其中より安倍朝臣の五位二人六位四人其幄より進み座中の版位に就て文官武官の侍宿に供奉る名簿を奏るなり侍宿の人には右の大忌の親王大臣以下の文官は更なり諸衛以下の武官を凡て云なり安倍朝臣の主々しく此事に仕奉る事は第廿二條に高橋氏文を引て委しく註せる如く此大嘗祭の事は磐鹿六鴈命の子孫に傳へて長々しく令仕奉給ふ御定に依れる事なる可し姓氏錄（左京皇別）に安倍朝臣孝元天皇皇子大彥命之後也と見え高橋朝臣安倍朝臣同祖と有れば共に磐鹿六鴈命の後なるが後に其氏を改て其職掌を分任されたる者なりけり倚右の凡奏二事於御在所一者皆跪若雨濕則立奏と見えたるは此安倍氏の奏事耳には非る事其上に凡字有を以て知らる然れば此は上なる國栖の奏二古風一歌人の奏二國風一語部の奏二古詞一隼人の奏二風俗歌舞一以下に亘る事云も更なり（第廿五條に引る齋服の下に卯日夜宿破在被各五十領付二小齋人寄侍宿所一と有は小齋大齋を併せたるなめり安倍氏は此等の事を奏するは御在所に侍宿等の事の具へるを奏して御膳を薦給ふ支度の時迄に及べる由を聞えさする事なり次文に續けて其の狀を思ふ可者なり）

悠紀院神膳の事は式に訖薦二悠紀御膳一（亥一尅進四尅退）行立次第最前內膳司膳部伴造一人（執二火炬撲燕一）次采女司采女朝臣二人（左右前驅）次宮主卜部一人（著二木綿鬘一襷一執二竹杖一）次主水司水取連一人（執二蝦鰭盥槽一）水部一人（執二多志良加一）次采女十人（一人執二刷筥一一人執二巾筥一一人執二神食薦一一人執二御食薦一二人執二枚手筥一一人執二飯筥一一人執二鮮物筥一一人執二干物筥一一人執二菓子筥一）次內膳司高橋朝臣一人（執二鰒汁漬一）安曇宿禰一人（執二海藻汁漬一）膳部五人（一人執二鰒蓋坏一二人執二海藻蓋坏一二人執二葉盤案一但一人守レ棚不レ關二行列一）酒部四人（二人舁二酒案一二人舁二黑白酒案一）皆依レ次而立薦享已訖撤亦如レ之と見えたり儀式此に同じく神今食儀亦大抵右に同じ（倚大嘗宮中の儀は江次第殊に委しけれは此條の末に其全文を擧て註す可けれは併せて此を考ふ可き者なり）訖薦二悠紀御膳一は儀式に亥一尅供二

御膳一四毬撤レ之と見え江次第に亥一刻采女申レ時取ニ削木一就ニ殿南戸邊ニ申レ之皇上召ニ御手水一（女藏人傳供）入レ自ニ中戸一經ニ神座西并北一著ニ神座以東御座ニ亥一刻供ニ御膳と見えたり但取ニ削木一就ニ殿南戸邊一と有る殿は廻立殿の事にて入レ自ニ中戸ニ云々は主上の御座に著せ給ふ御道にて此は此より已に前に在る事なれども御膳を薦むる次第に因て此には記せる者なり此即上に御悠紀殿と有る時の事なり（宮主秘事口傳抄に主上入ニ御神殿一之後采女官人持ニ削木一管ニ其後供ニ御手水具一云々と有れば右の采女申レ時と有る采女は采女司の官人なり入レ自ニ中戸ニ經ニ神座西并北ニ云々に第廿八條なる齋服案を舁て行く道に同じ）行立次第最前内膳司膳部伴造一人（[illegible]）は儀式に執ニ火炬一（タテアカシ）前行（提レ盆盛レ炭一）と有り其提盆の事は神今食儀の行立次第に執ニ炬火一以レ盆懸レ臂承ニ其灰燼一と有るにて能聞えたり江次第には執ニ炬提盆一と有り（此伴造は第廿二條に引る高橋氏文に大伴造と有る是なり第廿八條に伴造鑽レ火と出たるも同じ）次に采女司云々（左右前驅）は儀式又江次第共に次采女朝臣二人左右分列に見え神今食儀に左右前行と有を合せて思ふに神供物の前驅に仕奉るなり姓氏錄（右京神別）に采女朝臣石上朝臣同祖神饒速日命六世孫大水口宿禰之後也又同錄（和泉國神別）に采女臣神饒速日命六世孫伊香我色雄命之後也と有り天孫本紀に依て稽ふに大水口宿禰命は五世孫なり高橋氏文に若湯坐連等始祖物部意富賣布連云々と有て其子豐日連共に大嘗の事に仕奉れる由有て其に縁れる事第二十二條に註るが如し備采女は大殿祭大祓詞に謂ゆる比禮掛伴男なる其を采女朝臣は率て仕奉る職掌なる故に采女司を被置たる後も其氏人を任給ひ神事には殊に擢出て行立の前驅に令仕奉給ふ者なり（古事記に邇藝速日命娶ニ登美夜毘賣一生子宇摩志麻遲命此者物部連穗積臣采女臣祖也と見え天孫本紀に大水口宿禰命穗積臣采女臣等祖と見え伊香我色雄命は其子なる由第廿二條に註せる如く又同紀に大咩布命は伊香我色雄命の子なる由見えたり大咩布命と申すも右の采女の長として仕奉れる由の名なり式に賣布神社の國々に有に其命を祭れるなンめり越中國射水郡に[illegible]神社婦負郡多久比禮神社有る婦負と云る郡名は賣布と聞え多久比禮は栲領巾と思ゆ）次宮主卜部一人（著ニ木綿鬘襷一執ニ竹杖一）は儀式には宮主卜部一人著ニ鬘襷一執ニ竹杖一在ニ道中央一と有て江次第此に同じ竹杖の事は宮主秘事口傳抄に七節竹二（悠紀一主基一）仰ニ内膳司一可レ請ニ取之一宮主參ニ入神殿一時持ニ副笏一令ニ參候一以ニ此竹杖一神膳次第令レ指ニ敎于采女一也と見えたる此にて明らけし備右の宮主卜部は第六條に出たる稻實卜部是にて（第十七條に引る儀式に稻實卜部宮主とも有て悠紀大使に仕奉り此にては宮主の[illegible]に仕奉るなり同抄に大嘗會者神膳之供進第一之大事也[illegible]御自殿下又生涯之御大事此事也仍代々大臣年首以ニ當家一適々所レ有ニ御相傳一也云々と有たも思ふ可し當家は卜部家を云ふなり）次主水司水取連一人（執ニ[illegible]盥槽一）を儀式には海老鰭盥槽（エビノハタブネ）に作り江次第には海老鰭槽に作れる字に少異は有れども皆

同物なり江次第の其下に十瓶之中一八相分共昇ニ海老鰭槽ニ置ニ御前短帖之上ニ云々次取ニ水部所レ持之多之良加ニ御手水供了云々水取連水部退トと見え宮主秘事口傳抄に御手水料と見え蝦鰭槽長一尺二寸左分廣四寸餘云々或說長二尺餘なと有を以思ふに海老鰭(ヱビノハタ)の形に造れる水槽にて俗に謂ゆる盥の事也河内國所造雜品に大手洗瓮十八口と有や此ならむ水取連は姓氏錄(左京神別及右京神別共)に饒速日命六世孫伊香我色雄命之後也と見えたり但水取の事は大同本記に皇御孫命天村雲命乎召詔久食國乃水波未熟荒水爾在利介故御祖命御許爾參上此由申天來止詔云々御祖命詔久雜爾奉乎政波行下奉天在止水取政波遣天在利介云々止詔天天忍石乃長井乃水乎取ニ八盛ニ天誨給久此水持下天皇大神乃御饌爾八盛又皇御孫命乃御饌爾八盛献天遣水波天忍水止天食國乃水於爾灌和天献物又御伴爾天降奉レ仕神等八十友乃諸人仁毛斯水乎令レ飲詔天下奉支と見えたれば天村雲命の裔の氏人の此事に預仕奉る可く有を伊香我色雄命の子孫の水取連と為て仕奉るは如何と云に天村雲命の裔は伊勢に在て皇大神宮に仕奉るが故に京には更に別氏の人を以被任たる者也けり猶中臣壽詞考にも且々云るを考合す可なり（水を毛比と云事は景行天皇十七年御紀に冷泉(サムキミモヒ)と見え古事記高津宮段に且々淡路島之寒泉ニ以ニ大御水ニ(オホミモヒ)也と記し式に御水を於毛由と訓み倭名抄に主水司を毛比止里乃豆加佐と訓注し催馬樂に飛鳥井に宿りはすべし陰も宜(ヨシ)御水も寒し御秣も宜しと有を諸陵抄に美毛比に水なりと注せるが如し然に美毛比も寒しと見たるこそ可笑(ヲカシ)けれ赤染衛門集に美毛比にもあひなる御水(ミモヒ)神へ物に盛る云々とも有り又仁烈天皇御紀に在ニ盞…と有は毛比佐倍…なり此を以考るに水取莫比…伊比佐倍…と有は毛筒には…さへ盛なりけれ然れば毛比は水の名には非で水を盛る器の名なり此を以考るに水取連と云も水盤を取て奉る由の氏なる事著明し萬葉集に思遣爲便乃不知者片埦(カタモヒ)之底曾吾者戀成家流と見え式にも片埦(カタモヒ)八十口と見え和名抄に毛碑色立成云末里俗云毛比と見えたれば毛比は器の名なる者也）水部一人（執ニ多志良加ニ）は江次第に水部一人執ニ多之良加一謂ニ入ニ水瓶一次レ之と有り然れば多志良加は水を入る器の名なるなり宮主秘事口傳抄に次多志良加に入ニ御手水ニ料也と有をもつて著けし水部は水取部なる可し水取連は其部を主る姓なるに對へておもふ可し但職員令の今本に主水司云々水部四十人云々氷戸と見えたる氷戸は氷室のことによりてしかることなれとも氷部は水部をあやまれるなり（多志良加は參河所造の雜物に多志良加八口と見えたり倭和名抄に瓶子楊氏漢語抄に云瓶子和名加米と有を多志良加と記されたるは本名加米なるを例の神語を以載られたるなる可し多志良加は手精(タシラゲ)にて手を洗ひ淨むる由の名と聞えたり）采女十人（執ニ巾筥ニ一人執ニ剛筥ニ一人執ニ神食薦ニ一人執ニ御食薦ニ一人執ニ枚手筥ニ一人執ニ飯筥ニ一人執ニ鮮物筥ニ一人執ニ干物筥ニ一人執ニ箸筥ニ一人執ニ菓子筥ニ）と有る此は祝詞に謂ゆる比禮懸伴男にて高橋氏文に八乎止咩と云ひ神今食儀に八社女と云る是なり此采女十人

の內二人は典水(モトリノスケ)にて後宮職員令に水司(モトリノカミ)尚水二人典水(モトリノ)
二人と見ゆ儀式に典水二人（一人執二巾篋一一人執二刀子一）と有は刀子の
下に筥字を脫せるなる可し神今食江次第に載る所右
に同其副筥と刀子筥と同物にて御匜にて御手水の後
に御口を洗はせ給ふ具也江次第に一須歸取二楊枝筥一
授二留賾一云々と云て下に取二先所レ捧匜等一候レ之と見
え宮主秘事口傳抄に御楊枝筥入二蘘穗十筋許小刀一也
と云文有を以知へし巾筥は同抄に御手巾と有る是也
又御手巾布二切長六尺條云々入葛籠と見えたり江次第
に留賾取レ巾獻二天皇一々々拭レ手と有り以上典水二人
の所役也以下八人の事は儀式又神今食儀及江次第等
同文にて采女八人各執二供神并供御雜物等一奉レ之と
見ゆ神食薦御食薦は神御の物と供御の料と二也以下
の物も神御と供御とを合せたる也枚手筥は第廿二條
に載たる葉盤也次に引く江次第に委しく見えたる其
下に云り飯筥の御飯は第廿八條に作造疑ひ火爨炊二
御飯一也と見えたる是也鮮物筥は宮主秘事口傳抄に
鮮物四種一種甘鹽鯛（一切赤土器盛レ之下同）一種鯖蛇一種雜魚腊
一種薄(ヒラウチ)斷と有る此にて其大抵は知らる干物筥は同抄
に干魚四種一種蒸鮑（切盛土器之）一種干鯛一種□魚一種干

鯵と有り箸筥は同抄に御箸六前と有る註に五前は神
料一前者主上御料居二折敷一也折敷者筥之儀也大嘗會
之日者美麗之筥也折二屈於竹一而作レ之也と有り菓子
筥は同抄に菓子四種干棗（同土器盛レ之）搗栗生栗干柿と見え
たる是なり（右の鮮魚干魚は第十四條に出たる阿波國紀伊國等の由加物に用ひらるゝ事を所思しけれど悉くは右の抄の如く
に并る可けれども其大抵を知に足れり又菓子も阿波國由加物に同十五種と有れば此も其時々の□に依て定らざる事と見えたり）內
膳司高橋朝臣一人（執二鰒汁漬一）安曇宿禰一人（執二海藻汁漬一）は儀式又
神今食儀及江次第共に同じ次なる鰒羹海藻羹に對へ
て思ふに二共に生にて鰒は肉く薄く聶て汁に漬け海
藻は細に切て汁に浸せるにて膾の如く爲るなめり
（高橋朝臣の事は已に第廿二條第廿八條に云ひ安曇宿禰の事は第廿八條に註せり膳部の汁漬の汁は鹽なる可し酒をも此中に汁と云
るを合せて聞ゆる此二氏の捧持たる見れば御贄の中にも殊に此二種は進きなり）膳部五人（一人執二鰒羹坏一一人執二海藻羹坏二
一人執二□羹坏二一人守レ棚不レ關二行列一）酒部四人（二人舁二酒案二人舁二黑白酒案一）と有を儀式及
神今食儀共に膳部六人各執二供神并供御雜物等一と有
り式にも五人の內一人守レ棚不レ關二行列一と有れば四
人の外は用無き故に省れたるにぞ有べき江次第にも
六人と有れは式より後に古の員數に復りたる也又此
膳部六人酒部四人を合せて十男と云る其內行列に關
ざる二人を除きて其數八人なり此は祝詞に謂ゆる手
襁懸伴男にて高橋氏文に八乎止古神今食儀に八社男

と有る是なり酒部四人は造酒司式に卯日平明小齋官人一人史生一人酒部二人夾名進レ名令ニ卜食ニ酉䢜人ニ悠紀神殿之盛所ニ受取干柏十把刀子二枚小坏四口匜四口竹二株白筥二合白木明脚案二脚云々各依ニ職掌ニ儲備以ニ亥一刻ニ隨ニ神祇官宮主ニ與ニ諸司ニ引入ニ神殿ニ供奉訖退出即雜物返ニ送神祇官ニ又丑剋入ニ主基神殿之盛所ニ云々と有を此に酒部四人と云なり此鰒並海藻の二種亦紀伊阿波兩國の由加物なる可き事云も更なり一人守レ棚不レ關ニ行列ニは儀式に依に二人なるが此棚とは贄殿の棚なる事第十七條に見えたるが如し但式儀式共に酒部四人の下に二人舁ニ酒案ニ二人舁ニ黑白酒案ニと有は心得ぬ事なり江次第には酒部四人舁ニ黑白酒案ニ或説ニ二人舁ニ酒案ニ二人舁ニ白酒案ニと有に右の式の細註を或説と云るを以見れば右の式文には誤有べし其は第廿八條なる行列次第に御酒案一脚次黑酒二𤭖白酒二𤭖と有る御酒案は黑酒白酒を載る物なれば此酒案も黑白二酒を載る可なる事著ければ黑白酒案は黑白酒瓶など記されたるを後に誤れるが故に江次第にも更に或説とは云れたる也宮主秘事口傳抄に黑白酒瓶土瓶子也二盃二用ニ意之ニと有るを以て瓶に盛る事知べし又黑酒造酒也白酒濁酒也入ニ分竹筒ニ二若者小桶と有は後世の事なる可し皆依レ次而立薦享已訖撤亦如レ之と見えたる薦は神に奉らせ給ふ也享とは天皇の聞食す御事なり公事根源神今食條に伊勢天照大神を勸請申されて天子御自神饌を供させ給ふにや」と有る如く皇大御神に新世の初穗を以て大御饌大御酒に奉らせ給ひ御自も聞食て天津日繼を受繼せさせ給ふなり偖此より後の儀式は江次第に次十姬十男以レ次參入列ニ居於中戶南ニ ○今云中戶南は悠紀殿の室と堂との界なり第十七大嘗宮條に據當ニ南北ニ以ニ北三間ニ爲レ室以ニ南二間ニ爲レ堂と見えたる其室に列居也室は神殿なる故に入事を許れず宮主秘事口傳抄に神殿者殿下當主采女二人之外者不ニ參入ニ也と有り次十姬之中二人相分其舁ニ海老鰭槽ニ置ニ御前短帖之上ニ一姬留候一姬歸取楊枝筥授ニ留姬ニ姬取レ之置ニ槽南邊ニ次取ニ巾筥ニ授レ之如レ先開ニ其蓋ニ置次取ニ水部所レ捧多之良加ニ授姬退候ニ戶外ニ ○今云十姬之中二人は宮主秘事口傳抄に采女昔十八人之內二人之外不レ參ニ入神殿ニ也以レ一號ニ陪膳ニ以レ二號ニ後取ニ（シトリ）也自餘皆候ニ神殿之外ニと見えたる其陪膳を留姬と云は一姬留侯と有に依れり一姬歸云々と有は右の後取なるなり海老鰭槽は御盥楊枝筥は刷筥多之良加は入水瓶なる事上に云り御手水供了三沃爲限候ニ戶外ニ之姬伺ニ御盥畢ニ參入取ニ多之良加ニ却返ニ給水部ニ留姬取レ巾獻レ天皇ニ天皇拭レ手訖姬又歸參取ニ刷巾等ニ匣退出又進與ニ留姬ニ其舁レ槽退出返ニ授主水連ニ取ニ先所レ捧匣等ニ候レ之迫ニ戶外ニ祇候主水連水部等退下 ○今云候ニ戶外ニ之姬は後取なり姬又歸參と有も後取なり取ニ先所レ捧匣等ニには典水二人一人執ニ巾箱ニ一人執ニ刀子筥ニと有る匣等なり迫ニ戶外ニ其候は神殿に近く迫りて祇候し此迄に御手水の事竟て此より神御供御の事に仕奉る爲なり八姬幷高橋氏等捧ニ神食薦ニ更北行向レ南列候猶在ニ戶外ニ最姬謂ニ陪膳ニ捧ニ神食薦ニ敷ニ短帖之右上ニ次姬謂ニ後取ニ傳ニ御食薦於最姬ニ々々取鋪ニ同疊之上ニ姬等以ニ御食ニ手傳置ニ御食薦之上ニ先置ニ八葉盤於御食薦上之外方ニ次御飯逼ニ御前ニ而供レ之 ○今云八姬は采女十八人の內最姬次姬を除きて其餘の八人を云なり高橋氏も共に神殿に入事能はざる故に神殿の方を後にして戶外に南向に候ふ也最姬（モヒメ）は右の留姬と同じ人にて第一の采女を云ひ次姬とは取次の采女を云也故に後取とも云り短帖とは天皇の御座なり宮主秘事口傳抄に當ニ御座之巽方ニ敷ニ短帖幷御座ニと見えたり八葉盤（ヤヒラ

テノ)は次に御飯以下盛二筥手一置二小高坏一と見え又次菓先取二菓盤一奉二天皇一々々以二御箸一御飯盛給レ姫云々姫亦以二菓盤一奉二天皇一々々合二盛八種肴於一枚一授レ姫云々次菓子十二葉盤列置如レ此と見えたる此料なり御前盛通二御前一而供レ之は天皇の菓子盛せ給はむ便宜に供ふるが故なり

次御肴鮮干合八種置二御飯左一次菓子在二御肴右一御飯以下并盛二筥手一置二小高坏一 ○今云御肴鮮干八種と見えたる右に采女十八人の下一人持二鮮物筥一一人持二干物筥一と有る鮮物干物を云なり菓子も一人の采女持二菓子筥一と見えたる是なり是亦四種なる由上に引る宮主秘事口傳抄に見えたり筥手は右に八葉盤と有と同物なり第廿二條に委しく註せる如し 又居二御菓等於高坏一立二同薦上一薦不レ足者立二短帖上一置二菓子東邊一高橋氏等列座十姫受レ手傳供レ之又御羹二種後取列二南戸一傳取授二宦姫一并置二羹坏之上一姫等更北向列候最姫獨留二御前一 ○今云同薦とは上に見えたる御食薦なり高橋安曇等を云ふ後取は次姫なる事上に云る如し御羹等とは上に見えたる鰒汁漬海藻汁漬以下鰒羹海藻羹等を云なり御羹二種とは鰒海藻等の羹堝たる可し并二置羹坏之上一(ホトリ)と有を以知らる姫等更北向列候とは次姫以下は戸外より殿に向て列候ふを云り 最姫先開二筥手蓋一置二御食薦左右一 其蓋レ羹並二御羹坏并蓋云々 又開二羹坏蓋一同重二置之一 次以二御箸一置二御飯並御肴菓子等上一 ○今云筥手蓋は上に采女一人執二筥手二合一と有る其筥の蓋也宮主秘事口傳抄に本柏二三十束筥手所出采女取レ之指二筥手一也と見え又御云本柏何枚哉云々申云本柏者以二柏本葉一枚一自二其本一挿又御云本柏者十枚也仍後日引散レ之遣十枚也以二柏十枚一以二竹串(?)一合レ結云々合二其本方一云々と見えたり第廿二條葉盤(クホテヒラテ)の下見べし其筥手御菓坏等の蓋を開く事は天皇の盛せ給はむ爲也御箸も本より其料也 畢最姫先取二葉盤一奉二天皇一々々取二御箸一御飯盛(モリマフ)給レ姫如レ此搃十度他物同レ之便以二其所レ加箸一盛御搃十度也姫給レ之置二御食薦上一姫亦以二葉盤一奉二天皇一々々合二盛八種肴於一枚一授レ姫々給レ之加二盛汁物一供レ之 (鮑海藻等汁也) 次菓子十二葉盤列置如レ此置レ膳之儀如二五出一也東 ○今云姫は最姫なり右に天皇(?)御飯盛給ひて御前一と見えたる是なり天皇以二御箸一御飯を葉盤に盛て采女に賜ふ事を見て十度なり他物同之次なる八種肴及び菓子を盛せ給ふ數凡て十度なるなり借御箸には葉盤十枚に盛る十箸と云ふ八種肴及菓子は十箸なると云るなり其下に便以二其所レ加箸一盛御搃十度なりと有を以知べし置二御食薦上一には御食薦上に奉らせ奉らむに御飯の御食薦に置なり天皇合二盛八種肴於一枚一と有は葉盤一枚新の上に右の鮮物干物四種合せて八種肴を各十箸宛盛せ給ふなり加二盛汁物一は鰒汁漬海藻汁漬なるも此は右の葉盤には盛へからざるが故に別に奉らせ給ふ也次菓子は右に見えたる菓子を各十箸宛葉盤一枚に盛させ給ふなり十二葉盤には右の御飯并菓子十枚八種肴一枚菓子一枚を合せたる數なり前に御飯以下并盛二筥手一置二小高坏一と有る如く小高坏に居る事なり置レ膳之儀如二五出一と有る膳は一に御飯二に八種肴三に汁物四に菓子五に次なる黒白酒と合せて其數五なるを如二五出一に進るを云なり 最姫目二後取采女一令レ供二清酒一 (不二高坏一仍有二此儀一) 次姫自二南戸一傳取二瓶子一來候最姫傳取二本柏一盛レ酒奉二天皇一 (内裏式奉二柏於天皇一奉レ酒盛レ之天皇受即[illegible]二神食上一而逝代所レ祐頭取レ柏自盛) 天皇受レ之灑二神食上一以二其柏一便置二神食之上一如レ斯四度々別易レ瓶供レ之此間采女祝曰先可二挾給一之物遠後(爾)挾美給及諸有咎(毛)比神直比大直(比爾)受給戸 ○今云後取は次姫なり清酒の清は[illegible]の清に非ずて齋清めたる由にて即黒酒白酒を云なり南戸は神殿の南戸にて采女以下の候ふ所なる事上に云るが如し本柏は御酒を盛る新なり灑二神食上一は采女の柏に盛たる酒を神食(ミケ)の上に灑き然して其上に置なる可し公事根源神今食條に白黒の御酒参りて本柏にて灑く云々と有り如レ斯四度々別易レ瓶と有れば白酒二瓶黒酒二瓶より瓶毎に奉らせ給ふなり采女祝曰以下は祝詞を申すなり天皇の挾み盛せ給ふ物の次序を錯(アヤマ)らせ給ふ事も有むを見直し聞直し給へと申す意にて大殿祭詞別に皇御孫命朝乃御膳夕乃御膳供奉流比禮懸伴緒襁懸伴緒乎手躓足躓不レ令レ爲氏云々若過在乎波見直志聞直坐氏平良氣久安良氣久令二仕奉一坐云々と有に大抵同じければ決めて古き事なる可し然るに宮主秘事口傳抄新嘗祭條に采女供二神膳一次不レ撤以前宮主向二巽方一二拜

中臣二習ヒ次宮主拍レ手兩段次采女撤二神膳一と有る祝詞は卯日朝神祇官にて班ち常のときに被用る詞なるは班幣の事覆ぬる後に然誤れるなる可し又一載たるに今年の十一月の中卯日依レ例天御食乃夕御食遠長御食乃遠御食登新嘗聞食牟爲爾掛毛畏伎皇神達相宇豆乃比奉給布此狀大直日神爾日爾之納免給天天皇朝廷爾寶位無動久夜守日守仁護幸陪給天千秋乃五百秋乃茂御世爾平久安久常磐爾堅磐爾守矜給陪止恐美々々毛申と有て終に此祝詞分二明于參大記一廿子孫可レ用レ之と有れども甚々ち世の樣也同抄神今食條にも今年乃六月十一日依レ例云々と有て右詞に同じきを載たり公事根源同條に直會の御飯御酒參ぬれば宮主祝詞申と見えたれば古き事とは聞ゆれども此は中古に始れる事なる可し最姫取二先所レ立之御箸一收二於本筥一更加二御箸於御飯上一天皇頗低レ頭拍レ手稱唯執レ之羞レ飯如レ常寢姫自二次姫一供二御酒一八度以レ坏居二高坏一〔度別拍レ手稱唯〕御飯了姫等傳始レ自二寢後之供物一撤レ膳如二初儀一　○今云此は天皇悠紀の御飯御酒を聞食させ給ふにて右に引る公事根源直會の御飯御酒と見えたる是なり先所レ立之御箸は上に最姫云々次以二御箸一置二御飯并御香菓子等上一と有を云なり收二於本筥一とは式に采女一人執二箸筥一と有る其筥に復すなり更加二御箸於御飯上一とは先に獻らせ給ひし神膳の今天皇の供御と成が故に御箸を改るなり天皇頗低レ頭稱唯執レ之は神御の物を賜りて聞食し初させ給ふが故に其御命を蒙らせ奉給ふが如く稱唯し給ふなり式太に薦享と有る薦は神に薦め給ひ享は天皇の享させ給ふにて謂ゆる嘗聞食すなり羞レ飯如レ常は註に天仁記云嘗二御飯一三箸餘味不嘗云々と有が如し供二御酒一八度の下に度別拍レ手稱唯と有も右の御飯の例なり御飲了を今本に御飯に作るは誤なり右の八度の御酒を飲せさせ給ふなれば御飲と無ては叶はず始レ自二最後之供物一撤レ膳如二初儀一後に備たるより始て次々前方に及ぶ也如二初儀一とは上に擧たる行立次の如く其列を正して退く也訖最姫即卷二裹神食薦一退出次二姫參入供二御手水一如二初儀一天皇洗了十男十姫相引退出天皇還二御廻立殿一　○今云卷二裹神食薦一は神御の物を卷裹み納むる也二姫參入供二御手水一は初には最姫の供奉りしことなれども今は最姫は神食薦を持て退く故に二姫の仕奉れるなる可し但如二初儀一とは最姫其より前進みて供れるが猶さふ可き事也公事根源神今食條に御手水は事始らぬ前と事果てと二度有り」と見えたり十男十　と見え姫相引退出は上の行立次第に撤亦如レ之と有る其事を云也

たり是にて大嘗祭の儀掌を指が如し主基殿の儀亦此に同じければ思ひ准へて曉る可き者なりかし其十男十姫相引退出の委しき狀は儀式に亥一刻供二御膳一四刻撤レ之其次第也　膳部伴造一人執二火炬一前行〔提レ盆攪二灰炭一〕次采女朝臣二人　左右列次宮主卜部一人著二豊襷一執二竹杖一在二道中央一水取連一人執二海老鰭盥槽一次レ之水部一人執二多志良加一次レ之典水二人〔一人執二巾筥一 一人執二刀子一〕　筥次レ之采女八人各執二供神并供御雜物等一次レ之内膳司高橋朝臣一人執二鰒汁漬一次之安曇宿禰一人執二海藻汁漬一次レ之膳部六人各執二供神并供御雜物等一次レ之酒部四人〔二人舁二酒案一 二人舁二黑白酒案一〕次之薦享已畢撤亦如レ之と見えたる右の如くなる可き事云も更なり

主基院神膳の事は式に子時神祇官引二内膳々部等一遷二於主基膳殿一新二理神御饌一寢儀遷二廻立殿一〔其儀如レ初〕供二奉御湯一訖易二御衣一遷二御主基嘗殿一其儀一如二悠紀一又國栖等奏二古風一及皇太子以下拍レ手等并同二悠紀儀一寅一剋薦主基御膳進退如レ前〔事見二前儀式一〕と見えたり　儀式亦此に同じ江次第に載られたる殊に委しければ下に引て註す可し儀式に又辰日卯一刻寢儀遷二御廻立殿一一如二初儀一と見えたる其如二初儀一と有る其と同じく此の如レ初とは第二十條臨二廻立殿一と有る狀の如くなるを云り　子時神祇官引二内膳々部等一遷二主基膳殿一新二理神御饌一は第二十八條に

載たる式に造酒兒先春レ稻次酒波等共不レ易レ手春畢件造燧火爨炊ニ御飯一安曇宿禰吹レ火內膳司率ニ諸氏伴造一各供ニ其職一新ニ理御膳一と有る是なり江次第に子一刻新ニ埋主基神膳一と見えたり此時迄悠紀膳殿にて物爲たる事を今度は主基膳殿に移從て物爲る耳にて外に異無れば此より以下の凡の事共皆右に准らへ知べし若て內膳々部を儀式には內膳部ッチノカシハテへと記されたり寢儀還廻立殿一其儀如レ初供ニ奉御湯一訖易ニ御服一遷ニ御主基嘗殿一は第三十條に引る式文に戌時天蹕始警臨ニ廻立殿ニ主殿寮供ニ奉御湯一即御ニ祭服一入ニ大嘗宮ニ云々と見えたる其如く爲させ給ふを以て其儀一如ニ悠紀一とは有なり江次第にも丑刻采女申レ時如ニ悠紀儀一又御浴易ニ御服一御ニ主基殿一小忌群官度ニ馳道一就ニ主基幄一新式云大忌不レ遷入大忌座悠紀主基不ニ分別一而承平以後大忌共遷非也と見えたり小忌群官の遷る事は第廿六條に引る儀式に前祭一日所司於ニ承光顯章南堂間一縱立ニ七丈幄各一宇一設ニ小齋人座一天皇御ニ悠紀殿一在ニ東幄一御ニ主基殿一在ニ西幄一と有り承光堂前の悠紀の東幄より顯章堂前の主基の西幄に移るを就ニ主基幄一とは云なり馳道の事は廿一條に云り儀式及式共に大忌親王以下遷る事無く悠紀主基の分別有る事を見ゆ又ニ御廻立殿一の時は次條に辰日卯一點還と有るに當へいふに亥子一點なり采女申時は前條に見ゆ又國栖等奏ニ古風一及皇太子以下拍手等并如ニ悠紀一は儀式に皇太子以下拍レ手及國栖等奏ニ古風一等事亦同と見え江次第にも國栖等奏親王以下拍レ手并同ニ悠紀一と見えたり其國栖奏とは第卅一條に載たる儀式に國栖奏ニ古風一五成次悠紀國奏ニ國風一四成次語部奏ニ古詞一次隼人奏ニ風俗歌舞一主基亦同と見えたる是也其皇太子以下拍レ手の事も同條に委しく註るが如し委しく其條に云る事を合せて曉る可なり但安倍朝臣奏ニ侍宿文武官分番以上簿一事は一度にて濟事なれば此度には非る可し猶餘にも斯る類の事多々かんめれば其取捨有べし寅一尅薦ニ主基御膳一進退如レ前事見儀式は儀式に寅一尅供ニ主基御膳一進退亦如ニ悠紀一と見え江次第にも寅一刻供ニ曉膳一進退且如ニ悠紀一と有り第卅二條に舉る式に薦ニ悠紀御膳一の下に亥一尅進四尅退と有に准らへて主基御膳を供るは寅一尅進四尅退く事云も更也此を曉膳と云は悠紀の夕膳なるに對へたる也此主基神膳の委しき状は前條なる悠紀神膳の事に少しも違ふ事無か故に如ニ悠紀一とは記載られたる者也神今食儀に寅一尅供ニ曉膳一其次第如レ初四刻撤ニ御膳一と有も此に同じ清和天皇實錄に貞觀元年十一月十六日丁卯車駕幸ニ朝堂院齋殿一親奉ニ大嘗祭一十七日戊辰未ニ鷄鳴一大嘗會祭既訖とは例よりに早く訖れりしを以て記されたるか還宮及後鎭のことは式に辰日卯一點還ニ廻立殿一其儀如レ初易ニ御服一還レ宮警蹕侍衛如ニ常儀一祭事已畢百官各退作佐伯氏人閉レ門二點神祇官中臣忌部引ニ御巫等一鎭ニ祭大嘗宮殿一其儀如レ初訖即令ニ兩國壞却一後鎭祭所ニ訖即鎭ニ其地一新庸布四段木綿二斤麻二斤十兩鍬八口米八升濁酒八升鰒四斤十兩堅魚十斤六兩海藻十斤六兩腊

一斗六升鹽四升瓱坏各八口其御服衾單狹帖短席（サダヽミサムシロ）幷廻立殿及供ニ奉御湯一之屬幷給ニ忌部等ニ一物以上所レ用雜物經レ火之物給ニ宮主卜部一自餘一物以上及雜舍等悉給ニ中臣一四點神祇官進レ例祭ニ仁壽殿一と見たり（但此は辰日に在る事なれども卯日の儀の翌朝に及べる者なり）卯一點還ニ廻立殿一（其儀如レ初）は儀式に辰日卯一刻宸儀還ニ御廻立殿一一如ニ初儀一と有り其如初儀とは第三十條に其次第を載たる如きを云也江次第に寅一刻供ニ曉膳一（進退且如ニ悠紀一）事了還ニ御廻立殿一（百官各退兩氏閇レ門）天皇還ニ廻立殿一之後采女進ニ南戸下一申云阿佐女主水夕曉乃御膳平（爾）供奉（止）申勅曰好之（ヨシ）采女等稱唯還却と有り此采女は最姫なる可し南戸は廻立殿のなり阿佐女主水は典水の采女を云り夕膳乃御膳は悠紀主基の御饌也供奉（止）申は仕奉竟つと奏す也此を近代の例に采女進ニ南戸一有ニ還申事一と云るは然る事なり但此は前に采女の時を申して催がし奏せりし其結びなる事云（イフ）も更也（阿佐女は江次第註に采女之事也天仁記作ニ采女一と見えたり阿佐女とは吾兄女（アセメ）と云事なる可し其は采女十の中に其第一第二なる典水二人を抽出て陪膳とし後取と爲る其陪膳後取を最姫次姫と云ひ神殿の内に入り部膳の事に仕奉るを以然云る名と聞えたり神今食儀に亥一刻薦ニ御膳一四刻撤ニ御膳一内膳主水官人各一人進申云夕御物平供宮内丞命云レ縱と有は此と同じ事ながら彼は宮内官人に申し此は天皇に奏すにて異なれども其趣は異ならざる者なりかし）易ニ御衣一還レ宮侍衞警蹕如ニ常儀一は祭服を改めて常の御衣に易させ給ふ也還宮を儀式には還ニ御本宮一と有り然れども禁中には還入らせ給はずして直に豐樂院に行幸なる事也其は江次第に卯刻乘輿（安和私記云於ニ廻立殿一駕ニ御輿一時初稱ニ警蹕一或於ニ豐樂院後堂一初稱）出ニ光範門一（仁和寛平例如レ之承平以往依レ不レ御ニ腰輿一入レ自ニ宣政門一出レ自ニ章善門一天慶以後入レ自ニ昭訓門一出レ自ニ章善門一無レ所レ據覺弘經ニ含嘉堂後一出レ自ニ章善門一）遷ニ御豐樂殿一入レ自ニ不老門一御ニ清暑堂一（以ニ殿南廂西面一爲ニ殿上座一以ニ西華堂一爲ニ藏人所御厨子所進物所等候所一）小忌王卿經ニ大嘗宮西邊一供奉大忌在ニ其前一（近代不ニ供奉一）少納言弁左右將監自ニ殿南庇一進ニ大刀契鈴等一主水司供ニ解齋御盥御粥一（七種）と有を以知べし偖第四十一條に記せる午日儀に供ニ解齋和舞一とも解ニ齋服一とも見えたれば全くの解齋は其日に在れとも卯日の儀式の終るも致齋の解るなれば其意味同じきを以て解齋御盥御粥などゝは云る也偖今は御神事を畢させ給ふ故に常の行幸の如く警蹕せらるゝ事也卯日迄は鸞輿に御させ給へるを今日よりは鳳輦に御させ給ふ由江次第註に見えたり御衣は元の帛御衣に易させ給ふなり清暑堂は今日節會を被行る所なる事次に委しく云り主水司供ニ解齋御盥御粥一（七種）は同書神今食次第に藏人供ニ御粥一（堅粥也高盛レ之）次又供ニ和布汁物一（以上居ニ土器一）云々と見えたる如し其は祝詞講義月次祭條に委しく註せれは就て見合す可

し又公事根源供解齋御粥條に神今食の次の朝解齋の御粥参る晝御座の大床子にて基盤一脚を立て供す御粥土器に盛る和布の御汁物添たり三口食て御箸を立つ解齋の御手水は御手水間の疊を取掲て大床子を北に立て南向に供す御手水具を置て御手水の儀有り云々と見えたり此は清暑堂にて在る事なれども其趣異なる可からざれば此に准らへて曉る可き者なり猶祝詞講義に委しく云る如し

祭事已畢百官皆退伴佐伯氏人閇レ門は卯一點天皇廻立殿に還御の時に直に門を閇るなり其門大嘗宮の南門なる事第三十條に引る式に伴佐伯氏各二人開二大嘗宮南門一と有に合せて曉る可也又同條に衞門府開二朝堂院南門一と有れは此時百官皆退に當りて其門を開べき事右に例して知べし但百官皆退は右に引る江次第に小忌王卿經二大嘗宮西邊一供奉大忌在二其前と有る小忌大忌は供奉なれば退とは云難かり單廾七條なる式に諸衞立レ仗諸司陳二威儀物一如二元日儀一と有る諸衞諸司を云なり二點神祇官中臣忌部引二御巫等一鎭二祭大嘗宮殿一其幣如レ初は儀式も然り其幣如レ初は第十七大嘗宮條に五日之内造畢即中臣忌部率御巫等祭殿及門其幣物五色薄絁各三尺綵二兩安藝木綿一斤筥二合案二脚米二升酒二升瓶二口坏二口并申レ官請受後鎭料亦准レ此と有る後鎭即是なり其大嘗宮は前祭七日に事始めて五日の内に造畢れゝば右の大殿祭御門祭等は其翌日にて寅日なる可し大殿祭儀に神今食大嘗會等前後必有二此祭一と見えたるに合へり此事祝詞講義大殿祭條に委しく註せれば其書に就て知べし江次第にも此の事を御殿祭と云り即ち鎭祭の事也訖即令二兩國民壞却一は江次第に神祇官鎭祭壞二大嘗宮一御服雜物賜二中臣忌部宮主等一と見えたり儀式には訖令二兩國人夫壞二却大嘗宮一より直に御服雜物を中臣忌部宮主等に賜ふ事を載たれども式には鎭二其地一の次に出たり後鎭祭所平訖即鎭二其地一云々は儀式に訖各鎭二大嘗宮舊地一と有て其新物同し此は第十七大嘗宮條に載る式に凡造二大嘗宮一者前レ祭七日神祇官中臣忌部二官人云々鎭二祭其地一國別所レ備幣物云々と有を儀式に先鎭二東北角一次東門次東南角次南門次中央と有る下に主基准レ此と見えたれば先南西角次西門次西北角次北門次中央と次第に此を鎭むるなれば今も右の如く爲るなり但右の大殿祭及此祭共に兩國各別なる事云も更なり鎭祭所平訖即鎭二其地一とは右の大殿祭を成して其宮を悉く壞却し其地を平(ナラ)し備元の地に成れる時に其祭を行ふなり其御服衾單狹帖短帖席并廻立殿及供二奉御湯一之屬并給二忌部等一一物以上所用雜物經火之物給二宮主卜部一自餘一物及雜舍等悉給二中臣一は儀式も此に大抵同じ一物以上とは神御供御に就たるを云なる可く自餘一物以上は大嘗殿に就たる物を云なる可し御服衾疊及廻立殿并浴具等を忌部に賜ひ御膳に預る物を宮主に賜ひ殿舍屏籬は中臣に賜ふなり儀式に自餘物及殿舍屏籬賜二中臣一と見ゆ四點神祇官進レ例祭二仁壽殿一は此亦尋常の大殿祭なり第四十三條に引る式に凡大殿祭新云々と有は儀式の員數とは同じからざれとも決く此の新なり儀式

に四刻神祇官祭仁壽殿其新絲四兩安藝木綿一斤筥四合（各徑一尺五寸）米四升酒二升瓶一口盞二口案二脚と見えたり此幣物四時祭式大殿祭なるに同じ（大殿祭儀に中臣忌部官人著木綿鬘立案前直進仁壽殿云々中臣忌部御巫等以次入仁壽殿忌部執玉懸殿四角次御巫等散米酒切木綿於殿內四角退出中臣候仁壽殿南忌部向巽微聲讀祝詞云々と見えたり又四時祭式に大殿祭云々右神今食明日平旦云々と有に准ひて大嘗祭の明日平旦に例祭る故に准例と）は云り

辰日宴會は悠紀主基二國共に在り公事根源に辰日を悠紀節會巳日を主基節會と申にや」と見えたる實に其如く有る可きが兩日の儀式共に一國に局らず兩方共に在なり然れは右の御說は辰日は悠紀を主として主基は並び行はれ巳日は主基を專と爲て悠紀は副て被行るなる可し偖宴會の支度は式に辰日卯四點悠紀主基兩國倉代等雜物列立於豐樂院庭中先是所司預掃除豐樂院悠紀主基二國各設御帳於殿上（悠紀在東主基在西）諸司內外張設如常儀式部預置版位と見えたり右の悠紀主基兩國倉代等雜物列立於豐樂院庭中は第廿八條なる儀式及式の行列次第の終に除神御物之外皆留朝集院庭中各分安置東西堂と見えたる其倉代等雜物を左右の朝集堂より取出て豐樂院の中庭に運びて今日此を献る設なるなり江次第に觀德明義兩堂前運置倉代物（謂土物）と有り土物（クニツモノ）とは其國より奉出すを以云なり（行列は卯日に朝集院に納る迄に在つれば今日は然る事は無く唯何と無く運ぶなり）先是所司預掃除豐樂院と有る先是は右の卯四點より前なり新嘗會儀に當日寅刻掃部寮設式部輔以下省掌以上座於興禮門以西壇上（南面西上）輔以下就座點檢五位以上平且掃部寮敷調薦於舞臺上內藏寮以兩面敷薦上鐵爲鎭子次中務省舞臺以北四丈置宣命版南去一丈許置尋常版と見えたる是等を合せて云なる可し（右の新嘗會は每年の新嘗祭の翌辰日の節會を云なるが此も豐樂院にて被行て其儀同じきが故に此に合せ引て註すなり但祝詞講義十一卷に已に註したりき）悠紀主基二國各設御帳於殿上（悠紀在東主基在西）は儀式には悠紀立東第三間中央主基西第三間と有り此殿上は豐樂殿なり拾芥抄に豐樂院天子宴會所と見えたり江次第に兩國司裝束宴會儀と有る下に悠紀帳立東第三間主基立西第三間南廂當御座巽設王卿座（北面西上）小忌在其上頭顯陽承歡兩堂第一間前移立兩國標觀德明義兩堂前運置倉氏等物（謂土物）と見えたり新嘗會議に前一日所司裝飾豐樂院構舞臺於庭前（自殿南階去十一丈七尺高三尺方六尺）設樂人幄於舞臺東南角（南去八許丈東去二許丈）高御座東第二間設皇太子座（西面）第三四間少南大齋參議以上座（南北面西上）南廂小

齋參議以上（北面西上白大嘗參議以上ニ有ニ差西進一）顯陽承歡兩堂五位以上座觀德明義兩堂六位以下座一と有り若座の事は次條に見えたる如し偖此は例年の新嘗會なるが故に所司の預る事なれども兩國より供奉る義に同じければ右の江次第に合せて考ふ可し右の殿上の東三間西三間に設る御帳即高御座なるにて此は儀式に先レ祭一日云々訖各裝ニ飾豐樂院御座一云々と有る是也此各は悠紀主基兩國の御座二所有を云也（神祇令に凡大嘗者每世一年國司行事以外每年所司行事と有る義解に謂諸司者在京諸司預ニ祭事一者也と有る）諸司内外張設如ニ（其意を以て右の新嘗會儀に合せ考ふ可き者也）常儀一を儀式亦江次第には諸司供張如ニ元會儀一と有り次條なる諸衞陳列如レ常と有は此事なり此は第廿七條に諸衞立レ仗諸司陳ニ威儀物一如ニ元日儀一と有と同じ事なり（但元日朝賀は八省院にて被行れ又元日節會は豐樂院儀に有り此會に同じく豐樂殿にて被行る事にて其實を賜ふ事の類たるな云）式部預置ニ版位一は新嘗會儀に前一日式部丞率ニ史生省掌等一立レ標と見えたる細書に自ニ顯陽堂北第四柱一西去十五丈南折二丈立ニ親王標一次大臣標次大納言標次中納言標三位參議王四位參議少退在ニ此列一次臣四位參議標次王四位標次五位標又自ニ承歡堂北第四柱一東去十五丈南折七丈五尺王四位五位標又當ニ觀德堂第三柱一西去十五丈立ニ六位以下標一自ニ明義堂一東去及當レ柱亦准レ此並以ニ一丈三尺一爲レ間と見えたり

預とはこの前レ祭一日を云ひ版位は此に標と云る是也（右の以ニ一丈三尺一爲レ間とは前の版位と次の版位との間を云なり偖版位の版は札なり位は場所なり庭上に大勢立並ぶ事なるが故に其廣き庭中にして其出仕する人の心に任せて列立すれは其位置宜しからざるが故に其以前に此に何位の立べき場此に何官の立べき所と云ふ標シルシに札を置く其札を版位とも云ひ又略きて版と計りも云事なり職員令義解式部省の下に版位謂下賀及祭祀定ニ群臣并百官列位一之處也と見えたり儀制令凡版位皇太子以下各方七寸厚五寸題ニ書其品位一並漆字謂ニ以レ漆書一也と有も如し）

辰日悠紀節會次第は式に辰二點車駕臨ニ豐樂院一御ニ悠紀帳一諸衞陣列如レ常皇太子入レ自ニ東北掖門一（侍ニ親王以下就レ位畢一乃入）五位以上入レ自ニ南門一各就ニ版位一六位以下相續參入立定神祇官中臣執ニ賢木一副レ笏入レ自ニ南門一就ニ版位一跪奏ニ天神之壽詞一忌部人奏ニ神璽之鏡劒一訖退出（若有ニ雨湿一卽立奏レ之）次辨官五位一人亦就版位跪奏ニ兩國所レ獻供御及多明物色目一訖退出皇太子先拍レ手退出次五位以上俱拍レ手ニ六位以下相承並拍レ手如ニ前儀一以レ次退出（式部收ニ版位一出）宮内引ニ大膳職造酒司所レ備多賀須伎比良須伎等物一進ニ具於庭一訖將去是時大臣侍ニ殿上一喚ニ五位以上一（先喚ニ舍人一二音少納言參入如ニ常儀一）俱入就ニ顯陽承歡二堂座一六位以下以レ次參入就ニ觀德明義二堂一訖悠紀國別貢物參入已一點悠紀國獻ニ御膳一給ニ饗五位以上一（小齋悠紀國給レ之大齋大膳職給レ之）如ニ宴會儀一而國多明物並令レ辨官班ニ給諸司一悠紀國獻ニ

當時鮮味一次國司引二歌人一入奏二國風一訖撤二朝膳一と見えたり儀式は殊に委しく江次第は大に日易ければ其條々に引て註すこと上の例の如し以上は悠紀の儀なり主基は別に次條に註せり辰二點車駕臨二豐樂院一は儀式に辰二刻幸二於豐樂院一須臾留二清暑堂一と見え新嘗會儀にも時刻乘輿幸二豐樂院清暑堂一諸衛服二中儀一と有り第三十三條に引る江次第に遷二御豐樂殿一入レ自二不老門一御二清暑堂一云々主水司供二解齋御盥御粥一と有は此時の事なる可し豐樂殿は正殿の名清暑堂は後房にて大極殿と小安殿とのことし或書に清暑堂考豐樂殿後房也與二八省院十二堂一異也と見え拾芥抄に清暑堂大嘗會五節於二此所一行レ之と有り御二悠紀帳一は儀式に須臾留二清暑堂一乃御二悠紀帳一と有り即清暑堂より豐樂殿に進ませ給ふなり江次第に時刻出御と有て其下に位服内侍持二璽劍一劍在二御前一璽在二御後一藏人奉二御靴式筥等一命婦藏人各四人扈從と有は其後房より正殿に渡らせ給ふ供奉の次第なり其下に出御著レ靴置二璽劍於東一置二式於西一近仗稱レ警と有るぞ高御座に着せ給へるには有ける此置二璽劍於東一置二式於西一と有は悠紀帳に御すが故に常の如く物爲させ給事なるが次條なる主基帳に御す下には此文置二璽劍於西机一置二式於東一と有て互みに反樣也凡て此心得有べし但時刻出御より下なる出御の所に至る迄に次に引く近衛陣二殿前一王卿著二外辨一内辨於二東廊邊一行レ事を云ふ三條有り其は其間に在る事なれば也右の御靴は御沓也式とは其次第を記せる簿（フミ）にて俗に手控と云ふ物なり諸衛陳列如レ常は儀式には所司開二豐樂儀鸞兩門一と耳記されたるを新嘗會儀に稽ふるに式部丞錄率二史生省掌等一東西相分入レ自二禮成崇賢兩門一列二立豐樂院以内一東列以レ西爲レ上西列以レ東爲レ上史生省掌相分隨レ之彈正忠疏史生臺掌等東西相分列立東西各以レ北爲レ上史生臺掌相二隨之一式部史生二人各持二大札一左右相分進左西面右東面唱二計五位以上一稱唯列立左西面重行右東面重行六位以下亦東西相分列二立禮成崇賢兩門外一于時乘輿御二豐樂殿一内侍置二位記筥於大臣之座前一即臨二東檻一喚二大臣一若無二大臣一參議以上得レ之大臣稱唯到二左近陣西頭一謝座升レ自二東階一就レ座云々と見ゆ此事を江次第には切（ツ）めて近衛陣二殿前一入レ自二青綺白綺等門一陣二東西階下一云々王卿著二外辨一式部引二刀禰一入レ自二東西掖門一彈正同入列二立先着二章善門北休幕之後一入レ自二延英堂東北開明門一着二堂上座一親王北階納言參議南階內辨於二東廊邊一行レ事と見えたり此間に天皇の出御有なり偖所司開門の事は江次第に近衛開二儀鸞門一率二近衛八人一衛門開二豐樂門一と有が如し拾芥抄に豐樂門謂二之南外大門一正中五間戶三間と見え儀鸞門正中と見ゆ東廊邊とは高陽門の邊なる可し同抄に禮成門崇賢門は豐樂門の東西に在る在廂門右廂門此なり位記筥とは唱二計五位以上一と有る其姓名書なり左近陣西頭は東廊の事なる可し高陽門は左廂門謂二東廊一儀鸞門北と見え青綺門は東廊の南に在り白綺門は其に對ひて西廊の西に在り延英堂は豐樂門の内儀鸞門の外に在て八省院の朝集堂の如し右の近衛開レ門の事は兵衛を誤れるならむ近と兵と近き字なり皇太子入レ自二東北掖門一待二親王以下就位華一乃入は儀式此に同じ但就レ位を就レ版と有り同じ事なり新

營會儀に大臣到ニ左近陣西頭一謝座升レ自ニ東階一就レ座凡升レ殿者皆用ニ此階一次皇太子升レ自ニ同階一到ニ座東頭一謝酒就レ座所司開ニ豊樂儀鸞兩門一大臣升殿即開レ内不ニ必待ニ皇太子就一レ座と見えたる大臣は謂ゆる内辨なるか此には昇殿の事は是より後に在り江次第には皇太子參入の事を載られざるなり唯王卿の事耳ぞ出たりける此升レ自ニ東階ニ就レ座の細書に凡升殿者皆用ニ此階ニと有は悠紀 會に局りたる事にて主基節會は然らず其は次條に引る儀式に大臣昇レ自ニ西階ニ就レ座云々と殊更に記し別てるを以て知べし五位以上入レ自ニ南門一各就ニ版位一六位以下相續參入は儀式には親王以下五位以上左右相分入レ自ニ儀鸞門東西戸一各就レ版六位以下相續參入と有て江次第も同文なるが各就レ版の細書に不レ着レ靴小忌共入と見えたり斯れば大齋小齋共に打混じて參入る事と見ゆめり立定中臣執ニ賢木一副レ笏入レ自ニ南門一就ニ版位一跪奏ニ天神之壽詞一忌部入奉ニ神璽之鏡劒一訖退出若有ニ雨濕一即立奏レ之は儀式に立定神祇官中臣捧ニ賢木一入レ自ニ儀鸞門東戸一就レ版跪奏ニ天神之壽詞一群臣共跪忌部奉ニ神璽之鏡劒一共退出親王以下共起と有り立定とは右の親王以下の人に各版位に就を云なり江次第には執ニ賢木一副レ笏の細書に或加下注ニ壽詞一紙上と有り儀鸞門東戸即南門東扉なり跪奏ニ天神之壽詞一入奉ニ神璽之鏡劒一と有る天神之壽詞は即此中臣壽詞なる事此卷首に註るが如し偖此跪は儀式に群臣共跪と

見え親王以下共起と有れば摠てに亘る事なれば今云ふ限に非ずと雖も下なる入奉の入は右の跪に對たる字なるを思ふに上古には神璽之鏡劒は忌部の取出て奉れりしを中古以來は右に引る江次第に内侍持ニ璽劒ニ劒在ニ御前一璽在ニ御後一と有て出御の供奉には忌部の預らされは入て高御座の御前に到りて古例の隨に奉上る由を奏し申せりし也けり此神璽を奉る事も此卷首に云りきかし持統天皇五年御紀に十一月戊辰大嘗神祇伯中臣朝臣大島讀ニ天神壽詞一と有も大嘗の宴會にて卯日大嘗祭過て後の事也但式の今本に奉ニ神璽之鏡劒一の奉字を奏に作れり然れども儀式及江次第は更なり其餘の古書共に皆奉と有に從ひて今改む猶神璽之鏡劒に就て予が思ふ限は祝詞講義大殿祭詞の下に註せり若有ニ雨濕一即立奏レ之は雨儀な云り第三十一條に引る儀式式共に凡奏ニ事於御在所一者皆跪若雨濕則立奏と有に同じ但此には百官共に跪く也次辨官五位一人亦就ニ版位一跪奏ニ兩國所レ獻供御及多明物色目一訖退出は儀式には次辨大夫入レ自ニ同所一就レ版跪奏ニ兩國所レ獻多米都物色目一其詞云悠紀爾供奉留其國宰姓名等加進禮留雜物合若干荷就中獻物黒木御酒若干缶白木御酒若干缶多米都物雜菓子若干輿飯若干櫃酒若干缶々物若干缶主基爾供奉留其國宰姓名等加進禮留雜物合若干荷就中獻物云々多米都物云々進禮留事乎申賜止波久奏訖退出と有り其詞に雜物合若干荷と有は

黒木以下缶物以上の員數の大綱を總たるなり就レ中云々は其を小目(コマツク)せるなり黒木御酒白木御酒鎊瓱は第廿七條に黒酒十缶白酒十缶鎊酒十缶なと有る是なり倉代は四十輿と見ゆ缶物と有は雜魚腊一百缶と見え多米都物雜菓子は肴菓十輿と見え飯酒は飯一百櫃酒一百缶と有り次なる缶物は雜魚葅葉一百缶と有るを云り 缶物と云事二所に出たり混ふべからず備右の辨大夫とは五位の辨を云り同門とは上に入レ自二儀鸞門東戸一と有るを受て云る也 多米都物とは黒白二酒以下を凡て云なり唯に倉代とのみも云り其國宰姓名等は其悠紀主基に卜食て仕奉る國司等と其齋郡の郡司以下の人々た連署して奏聞ゆるなり 皇太子先拍レ手退出次五位以上俱拍レ手六位以下相承拍レ手前如二前儀一以レ次退出 式部取二版位一出 は儀式にも皇太子先跪拍レ手退出次五位以上共拍レ手次六位以下拍レ手四段 段別八段所レ謂八開手者也 訖以レ次退出式部取レ版退出と有て是迄全く神事の狀なり如二前儀一とは第三十一條なる大嘗宮にての所作に同じとなり江次第には此事右の辨官の奏事の前に五位以上拍レ手次六位 四段段別八度 訖退出と有は文の錯亂(ミダレ)たるにや有む其證は次に辨官の奏事を記して其次に式部取レ版 率二諸司史生一入自二儀鸞門一分取 と有て其續く可き事の又別に出たればなり 皇太子先拍レ手は先前に跪かせ給ひて御手を拍せ給ひ御拜の事畢て其版位より退かせ給ひ其次に親王大臣以下五位以上俱に手を拍ち其次に六位以下俱に手を拍て今度は衆と共に退出するなり斯れば式部の設たる版に用無く成たる故に其を取出て元の如く爲るなり 宮内引二大膳職造酒司一所レ備多賀須伎比良須伎等物進二見於庭一訖將去と見えたる此は第廿二條に引る式に大膳職所レ備多賀須伎八十枚比良須伎八十枚云々造酒司所備等呂須伎十六口比良須伎卅二口云々と見えたる雜物なるが今日の宴會に人々に賜ふ新なるが故に先庭中に列並て進見(ミセタテマツ)り將去りて其用意有る事なり儀式には此より前に是時大臣於二左近陣西頭少南一謝座升自東階 凡升殿者皆用二此階一 就レ座と有て次に宮内省云々と有も然も有ぬ可き事なるを式には省きて載られずと雖も次文に是時大臣侍二殿上一と有にて其然る事明らけし 江次第には入レ自二顯陽堂南標前一北面列立出レ自二承歡堂南一或入レ自二逢春門一西面列立と見えたり標は第三十四條なる版位也宮内省の版位は顯陽堂の南に當る可し 是時大臣侍二殿上一喚二五位以上一 先召二舍人一即少納言參入如二常儀一 は儀式には是時大臣於二左近陣西頭少南一謝座升レ自二東階一 凡升殿者皆用二此階一 就レ座云々次皇太子升殿列二座東一面西面謝座酒就レ座訖大臣喚二舍人一二聲舍人共稱唯 候二逢春門外一 少納言代レ之入レ自二逢春門一就レ版大臣宣喚大夫等少納言稱唯出レ自二儀鸞門東戸一立二班幔南面一北面喚レ之親王以下五位以上共稱唯 小齋先發レ聲群臣次レ之 次六位以下稱唯 下皆倣レ之 と見えたり大臣は謂ゆる內辨なり江次第に式部取版內辨就二兀子一內侍臨二東檻一內辨謝座昇 自出

軒廊南階ニ於テ左近陣南頭七尺ニ再拜舒ニ陣前ニ從レ自ニ龍尾東階ニ昇ル陣右掲宮内省云々内辨召ニ舍人ニ二音人舍人參ニ進在門外ニ稱唯少納言立レ版奏事入自ニ逆内辨宣召ニ刀禰ニ少納言稱唯出召レ之左廻出レ自ニ儀鸞門ニ息ニ[illegible]外又稱唯と有を合せて知べし謝座謝酒の事は延喜雜式に凡參宴賜ニ酒食ニ親王以下皆列ニ庭中ニ再拜謂ニ之謝座ニ訖行酒人把ニ空盞ニ授ニ貫首人ニ跪受レ盞再拜謂ニ之謝酒ニと見えたるが如し右の皇太子の下に謝酒と有に謝酒の酒と云事を約めたるなめり右の皇太子は省なるか酒の上に[illegible]を脱せるかとも先には思へりしかども其は然らず但新嘗會儀には大臣云々次皇太子升レ自ニ同階ニ到ニ座東頭ニ西面謝酒就レ座と有て謝座の事見えざるなり倶入就ニ顯陽承歡二堂座ニ六位以下以レ次參入就ニ觀德明義二堂ニは儀式の右文に次て親王以下五位以上共稱唯小齋先發レ聲群臣次之〇新嘗會儀には小齋先發大齋共群臣相承稱レ之と有り次六位以下稱唯下皆倣レ之訖親王以下參議以上入レ自ニ儀鸞門東戸ニ神祇官列ニ小齋列大齋前ニ五位以上六位以下亦准此下皆倣レ之此レ入レ門諸仗共起次五位以上左右分入並開ニ東西戸ニ但小齋八入レ自ニ東戸ニ六位以下亦同〇新嘗祭儀には小齋大齋五位以上云々と見え小齋用ニ西戸ニ大齋分ニ西戸ニ神祇官為レ上と有り式部錄二人左右相分進立ニ屏内ニ互稱ニ容止ニ次六位以下分入省掌二人亦稱ニ容止ニ參議以下行列相去三許丈皆於ニ見王ニ五許丈可位置署名於顯德院北七許丈五位最後者到ニ觀德明義兩堂北頭ニ六位以下始入異位重行立定參議以上并小齋人列ニ東方ニ四位以下東西ニ列ニ庭中ニ未レ入ヶ前酒部等各立ニ酒擔下ニ大臣宣侍座親王以下稱唯謝座小齋者先拜訖群臣次レ之造酒正把ニ空盞ニ來授ニ貫首ニ後取共跪更還執ニ三許丈北面立謝酒訖造酒正把レ盞還ニ擔所ニ參議以上分就ニ顯陽承歡兩堂ニ參議以上著ニ三人并殿四位以下相共就レ之ニ並待ニ參ニ升堂ニ六位以下分就ニ觀德明義兩堂ニ訖諸仗共居と見えたるが如し新嘗祭儀此に同じ又江次第にも王卿立レ標入レ自ニ儀鸞門東戸ニ不忌為レ先諸仗共起五位以上左右分入小忌人入レ自ニ東戸ニ神祇官在レ前式部錄稱ニ容止ニ次六位以下分入省掌稱ニ容止ニ異位重行立定參議以上并小忌列ニ東方ニ四位以下東西方ニ内辨宣敷居宣群臣再拜酒正授ニ空盞ニ貫首人跪取レ之ニ不レ取レ盞群臣再拜跪還ニ取レ之ニ王卿著ニ堂上ニ上レ殿自ニ陣前ニ五位以上分著ニ顯陽承歡兩堂ニ六位著ニ觀德明義兩堂ニ諸仗共居と有て右の儀に異ならざる者なり右の如く小齋大齋共に預る事なるが小齋は階位に拘はらず大齋の前に就く事なり諸仗共に居る事は上に云ひ諸仗共起諸仗共居は上に見えたる近衛以下の諸衛の動止するなり此入レ門は親王以下の門内に入る時刻より始て其終るに至て止なり稱ニ容止ニ訖悠紀國別貢物參入は儀式には將ニ別貢物ニと有り此は下に悠紀國より獻る和琴御挿頭衾襖子等なるが其は卯日の行列に並ばざる物なる故に別貢物とは云なる可し其事は下に其事の出たる所に注す可し着て其衾襖子等は次條の末に云る書類の料なり已一點悠紀國薦ニ御膳ニ給ニ饗五位以上ニ小齋悠紀國給レ之大齋大膳職給レ之は儀式には已一刻供ニ御膳ニ次賜ニ五位以上饌ニ小齋ニ悠紀國給レ之大齋ニ大膳職給レ之と有り江次第に酒部立ニ擔ニ御膳ニ釆女一二人率ニ後取ニ酒司臺盤ニ[illegible]自ニ北廊ニ[illegible]受内膳供ニ御膳ニ八入釆女令史前行傳レ[illegible]諸仗共起内膳官人[illegible]東階ニ[illegible]一釆女出レ[illegible]傳取供レ之諸膳酒部ニ餛飩索餅餲餬桂

心臣下共居次々供レ膳（白ニ東掖一供レ之䭔子黏臍饆饠團喜）給ニ臣下餛飩一御箸鳴臣下應レ之供ニ鮑羹一（撤索餅）供ニ御飯一（撤餛飩）供ニ進物所御菜一（高盛八焼物二御汁二平盛六窪坏二汁物三）給ニ臣下菜追物一供ニ御厨子所御菜一給ニ臣下追物一御箸下（臣下應レ之）供ニ白黒酒一（八変）給ニ臣下一（小忌悠紀國司給レ之大忌所司給レ之）と見えたり此御箸鳴臣下應レ之と有は其供物の物を聞食す儀にて臣下亦其に應ひて箸を鳴す事は共に食る儀にて是即大嘗の直會を君上も聞食し臣下にも賜也偖右の種々は元日御豊樂院儀に菓子雜餅等類と有る是也進物所は月華門の外の南腋に在て諸國の進物を納むる所にて公卿及近衛次將を以別當とし內膳の奉膳を以て預と爲て日々の供御の御菜を此所より奉る故に此事に仕奉るなり御厨子所は後涼殿の西庇に在て此にも別當及預等有て朝餉及朝夕の御膳を御菜を進物所と共に献るが常には請所と稱ふ是なり御飯は大炊寮より御汁は大膳職より献る事なるが唯小忌八耳は國司より給ふなり偖白黒の御酒を供るは此節會に兩國のを合せて進れるなり其は次なる主基節會の江次第に此度不レ供ニ白黒酒一と有以知べきなり（內膳供ニ御膳一の下に八人の釆女有は上に謂ゆる八社女（ヤチトメ）なり酢鹽酒醤等の八種は各別々供るなる可し次々供膳も然り餛飩は和名抄に餅剉內（ハイレテ）麵煮レ之と見え索餅は次なる餲餬の類なる可し同抄に餲餅俗云ニ餲餬一名ニ煎麵一作ニ蝎虫形一也と有り鎚子黏臍饆饠共に同抄に出たれども其製詳ならず團喜は同抄に楊氏漢語抄云歡喜團以ニ品甘物一爲レ之或說云一名團喜今按俗說梅枝桃枝餲餬桂心黏臍饆饠鎚子團喜謂ニ之八種一唐菓子其有ニ所レ見者ニ云々と有り然れば上件の菓子は上古より有來たる物とも見えざれば中古より有初たるなめり供ニ鮑羹一撤ニ索餅一等は前の物と後の物と引替るなり進物所御厨子所は江次第に以ニ西華堂一爲ニ藏人所進物所御厨子所候所一と見えたり白黒酒は悠紀國の奉れるなり小忌は神事に預り仕奉る人々なるが故に其國物を以饗し偖又大忌は大膳職より常の如く賜るなり）兩國多明物並介ニ辨官班ニ給諸司一悠紀國献ニ當時鮮味一と有る兩國多明物は上に屬か此に屬か詳ならざるを儀式に稽るに次辨官班ニ給云々一悠紀献ニ當時鮮味一と見えたれば下に屬く可き事云も更なり江次第に一献悠紀献ニ鮮味一（行事辨率ニ國司幷膳部一執レ之入レ自ニ顯陽堂南腋門一經ニ堂西壇下一立ニ馳道東一北面西上）內辨問何曾乃物曾各稱唯云悠紀所レ進御贄（各稱ニ物名一）內辨宣給ニ膳部一稱唯云出レ自ニ逢春門一（付ニ內膳一々々預候ニ門外一）と見えたるとを合せて思ふに此初献の時に當りて兩國多明物を諸司に班給はる其所へ悠紀國より當時の鮮味を献るにて上文に悠紀國別貢物參入と見えたるとは別なり行事辨は國司を引て指揮するなり偖其鮮味一は雉を梅枝に附たると一は蜜柑と搗栗とを髭籠に入たるを松枝に附たると二なり行事辨前行し次に國司並膳部等右の鮮味を附たる木枝の末を左に本を右にして持て進むなり（儀式に右の献ニ當時鮮味一に續きて子時鉦人持ニ鉦一懸ニ人レ自ニ儀鸞門一從ニ悠紀帳一執槌人參入就ニ鉦下一北首伏レ地着ニ當色襴鞋一須臾即起擊レ鉦二度々別二下訖伏レ地と有れども

式にも江次第にも見えざるは餘りに忌々しき唐戎の風俗を擬ぶに過たれば皇神等の御心に叶はざるからに何時と無く止ぬるにぞ有べき此事の一変りては美たく麗しき今日の威儀の甚々神々しからざる者なり次國司引ニ歌人ニ入奏ニ國風ニは儀式には于時鉦人云々即起撃鉦二度度別二下訖伏レ地次國司率ニ風俗歌人等ニ且歌還時亦同參入國司立レ前次音聲人次歌女次男立ニ庭中ニ歌人先入レ幄次國司伏レ地者更起撃レ鉦如ニ初儀ニ入レ幄乃奏風俗歌儛舞以ニ八人ニ成列レ之次奏所司樂訖退出と見えたり江次第に二獻奏ニ風俗ニ入レ自ニ儀鸞門ニ且歌參入國司立レ前次音聲人次歌女次歌男天覽男廿八人女廿八人樂人在レ後先立ニ庭中ニ次舞八人入レ幄次國司着ニ幄座ニ奏ニ風俗歌舞ニ退出レ八人爲レ列承保十ニ二人ニと見えたる是なり歌人歌女の事は已に上に出たり奏所司樂は雅樂寮の樂人の參入て音樂を奏するを云ふ者なり但國司は退出せざる可し次なる二獻に至て舞の事有ればなり猶右の幄座は第三十八條なる巳日主基儀に次主基人等就中庭右幄と有に對へて思ふに必庭中の左幄なる可き事云も更なり巳日悠紀儀に悠紀人入レ自ニ儀鸞門ニ就中庭左幄奏ニ和舞ニと有を思合す可し訖撤ニ朝膳ニは三獻の式畢りて御膳を撤するなり此間の事儀式に次獻ニ御挿頭ニ藤花足札居ニ高机ニ以レ紗爲レ覆五位六人昇レ之和琴二面各長六尺納レ袋盛ニ花足机ニ居ニ高机ニ以レ紗覆レ之人給和琴ニ面衾若干條六幅四幅相雜襖子若干領衾襖子納ニ韓櫃ニ居机加ニ綾覆ニ訖皇帝御ニ清暑堂ニと有が如し其御挿頭和琴人給和琴衾襖子等は謂ゆる悠紀國別貢物是なり江次第には三獻仰ニ御酒勅使ニ内辨起座後召ニ參議ニ仰レ之立ニ内辨後七尺ニ奉仰稱唯左廻下ニ東階ニ取ニ外記所レ持交名ニ昇立ニ南階東ニ間ニ少倚レ東召レ之右廻復座召ニ大夫ニ東西各二人不ニ必待ニ大夫參ニ獻ニ挿頭ニ逢授入列立ニ此列ニ按察納言以下參ニ悠紀行事大夫等ニ昇ニ御挿頭候ニ奉等案ニ五位以下六人昇ニ一案ニ入レ自ニ逢春門ニ經ニ左仗南頭ニ昇レ自ニ中階ニ立レ之於ニ南榮ニ挿頭在ニ西御前間也ニ從レ下退出大臣奉レ之起座就レ案擎ニ御挿頭ニ經ニ座上ニ於ニ御壇東階ニ跪レ執昇候ニ帳下ニ宸儀自給即奉レ指ニ御冠左ニ自ニ座末ニ復ニ本座ニ此後有ニ拜舞ニ行事辨等給ニ王卿挿頭ニ親王紅梅大臣藤華納言櫻華參議款冬親王及大臣新大辨取レ之奉レ之皆右若無ニ大辨ニ時按察參議取ニ大臣新ニ此間會ニ、べシ、按察行酒ニ事訖入御王卿下レ自ニ東階ニ座ニ四方ニと見えたり仰ニ御酒勅使ニは諸大夫の幄に御酒を給はらむ事を仰下されむ爲なり御挿頭は天皇に奉上り臣下にも分賜給ふなり天皇は御冠左に挿せさせ給ひ臣下は冠右に挿べき御定有る事と見ゆ然れども右の挿頭等は眞の華を挿頭せるなる可し萬葉十九新嘗會肆宴應詔歌に島山爾照在橘宇受爾左之仕奉者卿大夫等とも足日木乃夜麻之多日影可豆良家流宇倍爾也左良爾梅乎之奴波牟とも有を以著明し右の鮮味を梅枝に着け松枝に着たる髭籠に盛れる橘などに就て思合せらるゝ事無に非ず事訖入御は清暑堂に御し給ふを云なり按察納言以下行事大夫等を率て仕奉る事は主基亦此に同し御挿頭は今日に在る主基節會に猶撤せずして用ひらるゝ由下に見えたり以上悠紀節會の儀なり主紀節會は此次條に註す可し偖此悠紀のより始て巳日兩度の節會午日の節會共に合せて謂ゆる豐明節會にて大嘗會の事なるが卯日に大嘗祭の大御政訖させ給ふ其致齋(モノイミ)を弛べさせ給ひ打解けて宴會(サカホカヒ)し爲させ給ふ也光孝天皇實錄詔に今日波大嘗會乃直會乃豐樂畢日爾在と有る豐樂畢日は午日の事なるを以曉る

可き者也［然れば右の五度共に同じ豐明節會なれども然云には何れの日のとも分難き事なる故に某節會と號け其畢の午日のを以豐明節會と云事中古よりの例なり又毎年の新嘗祭には悠紀主基の事無が故に辰日の新嘗會即豐明節會なるなり］其儀式の凡ての狀に右に記せる如く甚々美たく麗はしき大御風儀にて元より上世より神隨にて在來し隨の事共なるが中頃より物毎に唐制を擬用ひらるゝ事なん多かりければ可惜（アタラ）神事にも猶神々しからざる事の交出來れるこそ良はしからさりけれ［平城天皇御紀に大同三年十一月戊子勅如聞大嘗會之雜樂伎人等專乖二朝憲一以二唐物一爲レ飾令之不レ行往古所レ譏宜重加二禁斷一不レ得二許容一と有る大御勅を恐み恐みも咲はへ奉る可き事なり天下の人多く漢意に成れる上は斯る傷しき御事にも彼國風のことの交はる故に堅く止めさせ給へる者なり淳和天皇御紀に弘仁十四年十一月癸亥右大臣藤原朝臣冬嗣大納言藤原朝臣緒嗣等同奏曰豐主相續大嘗頻御天下騷動人民多レ弊天皇勅答元不レ好レ飾唯事二神態一耳云々以二宮內省一爲二悠紀所一以二中務省一爲二主基所一作二借屋一用レ之但齋場依例定二北野一一切不レ用二玩好金銀刻鏤等之飾一雕標者以レ榊作レ之用二橘並木綿等一飾レ之即書二悠紀主基字一以著二樹木一凡以二清素一供二神態一畢と有は漢狀の飾を省かれて清素を用ひられたるは然る事ながら餘りなる事なり］大古の豐明節會の有狀は如何に麗はしく貴く有けむ中古の儀式さへに右の如く美たく有ける者を況て此上無く勝れたりけむ事想像り奉る可き事なりかし其一二を摘出て貴く高き天上（アメ）の儀（ヨソホヒ）の概略を註してむ偖豐明とは大嘗新嘗の直會の宴會に限らず凡て宴會の名なる事鈴屋大人の說の如きは然る物から受張て豐明と云は此直會のなる事古書の趣に然り其は此大嘗祭は黑白の御酒を釀て神に獻給ひ天皇の聞食し臣下にも宴を賜ふ事當なるが故に大嘗祭の直會の名の如くなむ成れりける然れば豐樂院は豐明宮と訓へく豐樂殿は豐明殿（トヨノアカリノトノ）にて上古より別に宴會の所と爲て有けむを後に大きく造加られて唐めかしく是も成たるなめり［大極殿は大安見殿小安殿は小安見殿にて天下を安見し給ふ御殿の名なるを中古より字音に稱て其本の故實を失へりし事大殿祭詞の講義に註せるに准らへて考べし］大嘗の豐明と思しきは古事記應神天皇段に天皇聞二食豐明一之日於二髮長比賣一令レ握二大御酒柏一賜二其太子一云々又吉野之國主等於二吉野之白檮上一作二橫臼一而釀二大御酒一獻二其大御酒一之時擊二口鼓一爲レ伎而歌曰云々此歌者國主等獻二大贄一之時時至二于今一詠レ之歌者也と有は常の御宴には有べからず此例を引て御世々々の大嘗に國栖等の仕奉れるは其直會の豐明の時なればなる事已に篝用一條に註せるが如く又大御酒柏を被用る事は午日儀に造酒司人別給レ柏即受レ酒而飲訖即爲レ盞而舞と見えたる此一事に合せても曉る可し但此を令握給へるは髮長比賣を皇太子に賜ふとての結構には有れども采女を以て酌を令取給へるなり［但御紀には十三年秋九月中天皇宴二于後宮一之日始喚二髮長媛一因以上二坐於宴席一時撝二大鷦鷯尊一以指二髮長媛一云々と有て國栖の事は十九年冬十月戊戌朔幸二吉野宮一と見えて全く別時の狀なれども古事記の獻二大贄一之時云々と有に據と成し又後世に其蹤の遺れるを以て大嘗のなりとは云なり］仁德天

皇四十年御紀に是歲當ニ新嘗之月一以ニ宴會日一賜ニ酒於內外命婦等一と見えたる新嘗之月は十一月にて宴會日は謂ゆる豐明節會なり其內外命婦等を召て御酒を賜へる狀の上下相睦ましく打解たるは誠に神事に就たる宴會の本意にて言痛からぬなむ物事に甚美たき業なりける又古事記同段に大后爲レ將ニ豐樂一而於レ採ニ御綱柏一幸ニ行木國一之時云々と有も常の宴會のならむには御綱柏を採に大后の御自幸行す可くも非れば御紀には此事三十年秋九月と有れども新嘗の宴會の料なる可し（右の四十年の事を古事記には爲レ將ニ豐樂一之時氏々之女等皆朝參云々於是大后石之日賣命自取ニ大御酒柏一賜ニ諸氏々之女等一と有り君臣の間の好にしく親しかりし狀なむ甚々美たく貴く思えたる）又古事記履仲天皇段に坐ニ大嘗一而爲ニ豐明一之時於ニ大御酒一宇良宜而大御寢坐也と有などは諦しく右の當ニ新嘗之月以レ宴會日一云々と有と同じく後世に謂ゆる豐明節會に當る者なり又雄略天皇段に天皇坐ニ長谷之百枝槻下一爲ニ豐樂一之時伊勢國之三重采女指ニ擧大御盞一以獻爾其百枝槻葉落浮ニ於大御盞一其采女不レ知ニ落葉浮ニ於盞一猶獻ニ大御酒一天皇看ニ行其浮レ盞之葉一打ニ伏其采女一以レ刀刺ニ充其頸一將レ斬と時其采女白ニ天皇一曰莫レ殺ニ我身一有ニ應レ白事一即歌曰云々故獻ニ此歌一者赦ニ其罪一也爾大后歌其歌曰云々即天皇歌曰云々此三歌者天語歌也故於ニ此豐樂一譽ニ其三重采女一而給ニ多祿一也云々と有り此三重采女が歌にも大后の御歌にも爾比那閇夜爾と有れば此豐樂新嘗祭の豐明なる事著明し又後世迄も語部の此歌を奏する例なるをも思ふ可し偖如此く百枝槻本にて宴會し給へりし事甚々雅びたる事なりしを後には頽はしき迄に事の多く成れる也けり其歌等は第卅四條に引て註るを見合す可し（又右の文に續きて是豐樂之日亦春日之袁杼比賣獻ニ大御酒一之時天皇歌曰美那曾々久淤美能袁登賣本陀理登良須母本陀理斗理加多久斗良勢斯多賀多久夜賀多久斗良勢本陀理斗良須古此者宇岐歌也爾袁杼比賣獻レ歌其歌曰夜須美斯志和賀意富岐美能阿佐斗爾波伊余理陀多志由布斗爾波伊余理陀多須和岐豆紀賀斯多能伊多爾母賀阿世袁此者志都歌也と見えたり皆此時に歌れりし歌の樂府に傳はれる者なり）偖豐明は記傳卅二五十七丁に謂れたる如く記に豐明とも豐樂とも記され萬葉十九には豐宴と書き御紀には宴とも讌とも宴樂とも宴會とも宴饗とも肆宴とも字は種々に作れたれども皆同じ事には豐は豐饒なる意明は大御酒を食て大御顏色の赤らみ給を申す語にて公の御宴の名には有れとも打任せて豐明と云は大嘗の直會なるを云事は紀續第卅八詔に今日方大新嘗乃猶良比能豐明聞食日仁在は即辰日なる也又四十六詔に今日方新嘗乃猶良比乃豐乃明聞許之貴須日仁在

と有も十一月壬辰賜ニ宴於五位以上ニ詔曰と見えたり又萬葉十九(四十二丁)に豊宴見(トヨノアカリセサセス)爲今日者毛能乃布能八十伴雄能島山爾安可流橘宇受爾指紐解放而千年保伎保伎吉等餘毛之惠良々々爾仕奉乎見之貴左と有も端書には何時とも見えざれ共豊明節會也其は次に引る新嘗會肆宴應詔歌に島山爾照在橘宇受爾左之と見え此の反歌に須賣呂伎能御代萬代爾如是許曾見爲安伎良目米立年之葉爾と有も毎年の狀成を以見れば右の豊宴は毎年の新嘗に就て詠れたる事著明し又同卷(四十四丁)に十一月廿五日新嘗會肆宴(トヨノアカリ)應詔歌六首の中に天地與相左可延牟等大宮乎都可倍麻都禮婆貴久宇禮之伎と有は新嘗聞食す宮を造れたるを賀たる也天爾波母五百都綱波布萬代爾國所知牟等五百都々奈波布と有は右の新嘗の大殿の制樣は古昔の如く綱を以て結縛り造る事を天象に寄せて詠る也其由日本紀傳に云べし次に天地與久萬氐爾萬代爾都可倍麻都良牟黑酒白酒乎と有は例の黑白二酒を釀る事を賀たる也次に島山爾照在橘宇受爾左之仕奉者卿大夫等と有は上に引る江次第に依に當時の挿頭は作花なれども古は時の花を以挿頭には爲つるなりけり仲冬の頃花無き程なる故に橘を實ながら髻華には刺せりしと見ゆ其次に袖垂而伊射吾苑爾鶯乃木傳令落梅花見爾と有る歌の狀は此宴會日の儛を詠りと聞えたり終に足日木乃夜麻之多日影可豆良家流宇倍爾也左良爾梅乎之奴波牟と詠るは後には神事に木綿鬘を懸る事なれども眞の日影を鬘と爲るが此には梅を挿ば良はしけむと今日の挿頭の橘に對へて詠るにて此六歌にて豐明節會の儀式を悉に盡せりと謂べし然れば受張て豊明と云事は古にも新嘗の宴會を主と爲たる名なる事云も更なる者也けり 其は大嘗と云事は荷其(オホニヘ)とも書て大に饗する事の名なれども打任せては新嘗を指て耳大嘗と云が如し備元日御ニ豐樂院ニ儀に今日波正月朔日乃豐樂聞食須日爾在と見え正月七日儀に今日波正月七日乃豐樂聞食須日爾在故是以御酒食閇惡良岐と宣ひ十六日踏歌儀にも今日波正月望日乃豐樂聞食須日爾在と宣へるなどは何れも表立たる御宴を云なり記傳に引れたる穴穗藤原君卷に七日七夜豐明して打上げ遊ぶと有も宴會の事を云なるが正しく其名稱に豐明と云は新嘗の宴會を云り 辰日主基節會次第は主基帳にて被行る然れども公事根源に被記たるが如く今日は悠紀節會の日なるが故に專とは悠紀のを主と爲て被行れ主基節會は唯其に屬て被行る故に甚々事略たること明日の悠紀の如し式に未二點遷ニ御主基帳ニ皇太子以下亦就ニ主基座ニ別貢物參入獻ニ當時鮮味ニ薦ニ御膳ニ奏ニ國風ニ等並同レ前事訖悠紀國給レ錄と見えたり其遷ニ御主基殿ニ云々は儀

式の上文の續きに皇帝御二清暑堂一未レ御二主基帳一前皇太子以下參議以上殿下經階下度西方宸儀出御之後大臣昇レ自二西階一就レ座次皇太子以下亦就レ座並如二悠紀儀一次參議以上參三入自二右近陣一西頭一謝座酒就レ座小齋四位以下度二馳道一共謝座謝酒訖諸仗居と有り斯れば悠紀帳より清暑堂に入御す其間に皇太子以下參議以上共に殿の東階を下り階下を經て西階の方に度りて出御を待て階を上り座に就く事なりけり江次第悠紀條の終に事訖入御王卿下レ自二東階一度二西方一天皇御二主基帳一警蹕如レ恒不レ撤二悠紀插頭一御レ之臣下同レ之內侍臨二西檻一內辨謝座昇自二右仗後於仗頭一謝座昇レ自二南面西階一着座王卿列立仗頭北面東上重行第一入當二西階東端一小忌五位以上直度則立二馳道西一謝座謝酒如レ前內辨不レ仰二侍坐一（シキヰン）各着座此度不レ供二白黒酒一と有る內辨は儀式に謂ゆる大臣なり此度不レ供二白黒酒一とは今朝の悠紀節會に奏す中臣壽詞に悠紀主基乃黑木白木乃大御酒遠云々の文有て兩國の所獻る多米都物を相並べて進れるが故に主基國なるをも共に聞食しけるなれは此度より以下の節會には白黒の大御酒の事無を云なり況て今日は悠紀を主と爲る事なる故に主基の方は凡て事略たる事多く見えたり此故に主基國の賜祿等の事は巳日の節會の度に在なり尚明日の節會の所に合て讀で其主と爲と然らざるとの異を思ひ分べき者なり別貢物參入獻二

當時鮮味一は儀式に云々獻二別貢物並御插頭一等事一同二悠紀儀一と見えたるは明巳日主基節會に賜ふ可き設けなり其は次に引く江次第の文に奏二風俗一如レ前と有る細書に無二獻物插頭等事一と有を以て證と爲べし備儀式の巳日主基節會條に即國獻物並種々列二于殿前一と有は其別貢物等なる事か三十八條に云るが如し薦二御膳一奏二國風一等並同前は儀式に次供二御膳一賜二群臣饌一云云等事一同二悠紀一と見えたり江次第に次供二御膳一給二臣下饌一如レ前一獻二獻次奏二風俗一主基如レ前無二獻物插頭等事一三獻奏二見參一云々と見えて當日の悠紀の次第に同じ此奏二見參一以下の事は悠紀國の獻物を以て祿を賜ふ儀なる事次に擧る文を見て知べし主基國の賜祿は巳日の節會の度に在り事訖悠紀國賜レ祿は儀式に次悠紀祿獻物韓櫃列二于殿前庭一外記仰二式部一令レ進二五位以上見參歴名一外記加二註皇太子見參一進二大臣一々々執奏レ之酉刻主殿寮擧レ燭賜レ祿參議一人就二賜レ祿所一少納言喚レ名悠紀國司賜レ之四位以上衾一條五位襖子一領未レ得二科由一者亦預七十以上者雖レ不二參而特賜之祿物殘進二內侍司一訖御二清暑堂一と見えたり江次第には三獻奏二見參一內辨下殿着二軒廊砌上兀子一見二見參一了參上經二座下一進二軟障下一付二內侍一奏レ之先レ是示二參議一祿所一參議下殿召二少納言一授レ之參議就二祿所一少納言進二庭中一唱レ名王卿下殿給レ祿悠紀祿還御不二必待二王卿下殿一と有り是主基節會の終に引續きて悠記の給祿をも合せて共に行ふにぞ有ける若て主基國の給祿は翌る巳日に在り然るは辰日は悠紀を主と爲し巳日には主基を主と

爲て被行る節會なる故なり第三十九條なる主基國賜祿の所を見合す可なり持統天皇五年紀に十一月戊辰大嘗云々壬辰賜ニ公卿食ニ云々と有は此の賜祿なる者なり

巳日宴會は公事根源に主基節會と有り悠紀主基共に並行はるれども昨日は悠紀を主とし今日は主基を主と爲るが故に然云るなり式に巳日辰二點御ニ悠紀帳一三點薦ニ御膳一次奏ニ和舞一其召ニ五位以上一給ニ饗及六位以下參入奏ニ風俗樂一等並同ニ辰日一云々と見えたり此文を註するに儀式は辰日條に任れて甚簡ければ例の江次第の委しきを以て云るが如し巳日辰二點御悠紀帳云々は儀式に巳日辰刻御ニ悠紀帳一其儀一同ニ辰日一と有り江次第には時刻出御位服内侍持ニ璽劍一々在ニ御前一璽在ニ御後一命婦藏人各四人扈從藏人奉ニ御紙式筥等一近衛陣殿前入レ自ニ東福西華等門陣レ東西階下一出御着レ就置ニ璽劍於東一置ニ式筥於西一近仗稱レ警内辨着ニ東廊兀子王卿着ニ外辨一式部引ニ刀禰一入レ自ニ東西掖門一彈正同入列立内侍出内辨謝座昇開門近衛開ニ會昌門一率ニ衛八人ニ兵衛開ニ應天門一内辨召ニ舍人一二大舍人於ニ昭訓門外一稱唯少納言立レ版入レ自ニ昭訓門一内辨宣召ニ刀禰一少納言稱唯出召之左廻起出レ自ニ會昌門一息ニ漫門一外文唯王卿立標入レ自ニ會昌門東扉一小忌爲レ先訓代共造五位以上左右分入人人レ自ニ東戸一宜官在レ前式部錄彌ニ容止一次六位以下分入省掌稱レ之異位重行立定參議以上并小忌列ニ東方四位以下西分列と見えたるが如し儀式及式の趣は今巳日節會も昨辰日節會に同じく豊樂院に於て被行る事なりしかども此次第なるは八省院にて事を被行るめるは何れの時よりか改れりけむ然れども其被行る所の異れる耳にして其次第に至ては辰日の狀に同じければ前條を合せ讀て曉る可き者なり三點薦ニ御膳一次奏ニ和舞一其召ニ五位已上一給ニ饗及六位已下參入奏ニ風俗樂等一並同ニ辰日一は儀式に群臣一兩巡後悠紀人入レ自ニ儀鸞門一就ニ中庭左帳一奏ニ和舞十人共舞訖退出次雅樂寮率ニ樂人一亦入就ニ同幄一奏レ樂と有り此左幄に就は悠紀のなる故なる事第三十五條に云るが如し次なる主基儀には次主基人皆就ニ中庭右幄一奏ニ田舞一と有に對ひたり倚右の和舞の事は[illegible]月々次祭直會の所に出たり見合せて曉る可し此群臣一兩巡後とは其饗を給ふ一二獻の後なるを云悠紀人とは其國司の率る歌人男女を云也入レ自ニ儀鸞門一は式の頭迄は豊樂院にて被行たる事右に註る如なれば江次第の當時と同じからず倚右等の委しき由は江次第に内辨宣敷居群臣再拜酒正授ニ空盞一貫首人跪取レ之不レ取レ盞群臣再拜跪返ニ與之一王卿着ニ堂上一經ニ階前一上殿五位六位分着ニ幄座一諸仗共居酒部立撤ニ御膳机一一二采女八人采女令史前行供レ警群臣諸仗共起内膳官人御菓盤受撤ニ酒司菓盤把一件把進物所就ニ西階一受レ之内膳供ニ御膳一登ニ東階一弟ニ五女出ニ東階一傳取供レ之次次供レ膳自ニ西腋一供レ之[illegible]給ニ臣下館飩一御箸鳴之臣下醴酒餺飩索餅餲餬桂心臣下共居供ニ鮑羹一撤ニ羹供ニ御飯一撤ニ餛供ニ進物所御菓一平盛六坏二汁物二供ニ御厨子所御菜一高盛八燒物二汁物二給ニ臣下菜汁一御箸下臣下一獻獻物奏ニ風俗一樂人在レ後先立ニ庭中一次歌人入レ自ニ會昌門一且歌參入國司在レ前次歌女歌男次國司着ニ

握座奏歌舞退出一獻奏和舞（着青摺舞人十人歌人十人居庭中琴師二人居歌人前舞人用內舍人其庭中南北行設二行座舞人分着其南立床子琴師二人着之南上一人在其後）三獻仰御酒勅使（內豎奏後召參議仰之立內豎後七尺奉御稱唯左廻下東階取外記所持交名昇立簀子敷東二間少傍東右之右廻復座召大夫東西各二人）入御と見えたり大凡辰日の儀式に同じけれは委くは註さず見合せて曉る可し（但今日は白黑酒を供らず鮮味及御挿頭をも賜らざるは辰日は悠紀の當日巳日は主基の當日なるか故に今日に悠紀節會は如此く被行ると雖も此を主とは爲ざる故なる事上に云るか如し）

巳日主基節會次第は辰日なるに相も異らずと雖も今日は主基儀の當日なるが故に昨日は悠紀儀の當日なるを以て其を主と爲るに同じきなり然れども其次序に至ては悠紀を前に主基を後に爲す事常の定りの如し式に巳日云々未二點御主基帳供御膳之後奏田舞庶事同前儀事訖主基國賜祿と有が如し儀式には殊に委しく巳日云々未刻御主基帳其儀同上即國献物韓櫃列于殿前庭次供御膳次主基人等入就中庭右握奏田舞（十八人六人舞）訖退出次薦御膳次雅樂寮奏樂退出酉刻賜祿同辰日儀亥刻御清暑堂と見えたり其未二點御主基帳とは例の豐樂院の主基帳に御し給ふ事なる由辰日儀に註るが如し然れども後には巳日なるは兩度共に朝堂院にて被行る事江次第を引て前條に註せり其巳日主基節會次第の文に云

く御主基帳（置御璽於西机置式於東）內侍臨西檻內辨謝座昇（自右仗後於仗頭謝座昇自南面西階着座）王卿列立（仗頭北面東上重行第一人當西階中端）小忌五位以上直度列立馳道西謝座謝酒如前（內辨不仰侍坐）各着座と有り第三十七條なる辰日主基節會の狀に相も異る事無し又主基國の白黑酒は辰日悠紀節會に共に供れるが故に當日なれども今日の節會には其事無き由は巳に第三十六條に見えたるか如し（但其餘の事に於ては昨日に勝れる事の多在るは然も有ぬ可き事なり）即國献物韓櫃列于殿前庭は第三十七條の末に引る悠紀儀に悠紀國献物韓櫃列于殿前庭と有に同じく謂ゆる別貢物にて酉刻賜祿と有る料物なり（此事上にも巳に云るを猶此條の終なる賜祿の所に委しく註せるか如し此は昨辰日悠紀節會の所に貢別貢物と有る下に云る如く此は[illegible]なり[illegible]て此を豐樂院正殿の前に引居置を云ふ）次供御膳は江次第に次供御膳給臣下饌（皆如前儀）一獻主基獻鮮味（行事辨率國司並膳部執之入自光範門經壇下立馳道東北面西上）內辨問何曾乃物曾各稱唯云主基所進御贄（各稱國名）內辨宣給膳部稱唯出自逢春門（付內膳々々預候門外）と見えたり献鮮味とは鳥を楓の枝に着たると鶉を鹿鳴草の枝に着たるとこの二種を云なり儀式に即國献物韓櫃列于殿前庭と有る其は別貢物にて辰日主基節會に預て奉れるを今日の賜祿の爲に殿庭に並べ置にて鮮味は今日を待て献る事なら

むと思ひしかとも猶第三十六條に引る式には辰日未二點云々別貢物參入獻二當時鮮味一と見え儀式の同日儀に獻二別貢物幷御挿頭等一事一同二悠紀一と有れば此より後に改れる者なりけり（然るは江次第辰日主基條に無レ獻二物挿頭等事一と有て此に獻二鮮味一と見え下に獻二挿頭一等の事の見えたるを以著明きことなりけり猶此獻二鮮味一云々の委しき由は已に第三十五條に云りき）次主基人等入就二中庭右幄一奏二田舞一（十八人共舞）訖退出次薦二御膳一次雅樂寮奏レ樂退出と有る主基人等云々は辰日儀に國司率二風俗歌人等一（還時亦同）參入（國司立レ前次音聲人次歌女次男）立二庭中一歌人先入レ幄次國司就二幄座一云々乃奏二風俗歌儛一（以二八人一成レ列之）と有るを切めて主基人等入就二中庭幄座一とは被記たるなる可し右に引る江次第の續の文に奏二主基風俗一（如二悠紀儀一）と有を合せて思ふ可き者なり偖此は右の如く甚く略きたる書樣なる故に右の奏二田舞一は主基人等の仕奉るが如くなれども然らず江次第に二獻奏二田儛一（多治比氏内舍人等供奉舞人十八人樂人着二幄座一奏二音樂一）と見えたる此に右の雅樂寮奏レ樂の事も有れば田舞は此に註せる如く多治比氏の奏せる樂なるなり（田儛の事今詳ならずと雖も近昔に田樂と云るが有り若くは其始ならむか偖此を吉例と爲て奏せる所由を熟思ふに反正天皇御紀に所見たる瑞井の故事などに因れるにや姓氏錄右京神別下丹比宿禰の下に大鷦鷯天皇御世皇子瑞歯別尊誕二生淡路宮一之時淡路瑞井水奉レ灌二御湯一于時虎杖花飛入二御湯瓮中一色鳴宿禰稱二天神壽詞一奉レ號曰二多治比瑞歯別尊一云々と見えたる此天神壽詞を稱せるに音聲の巨細長短昂低曲節なとの有るに合せて舞なと爲しが自然に一種の曲と成れるを其氏人の傳へて奏し習ひ來れるが故に多治比舞とぞ云けむを後に字を略きて田舞とは書る物なら其は和舞の二字に配せて書る耳にて其唱は猶多治比舞にて有しなる可し若て中昔に田樂と云けるは即其轉れる者と思ゆ雅樂寮の樂人と此舞人と打混して供奉るを思ふ可くなむ）偖儀式及式文には上（第三十七條）に記せる如く別貢物及御挿頭等を獻るは辰日の主基節會に就てなれども江次第には三獻二挿頭一（撿挍納言以下率二主基行事大夫等昇二御挿頭倭琴等案一五位以上六人昇二一案一入レ自二光範門一經二右仗南頭一昇二自中階一立レ之於二南榮一挿頭在レ西從下退出）親王奉レ之（起レ座就案擎二御挿頭一經二座上一昇二御壇西階一候二帳下一寢儀日給即奉レ指二御冠左一自二座末一復二本座一）王卿下レ殿拜舞（異位重行）東面北上復座後行事辨以下給二王卿挿頭一（親王紅梅大臣藤華納言櫻華參議款冬親王及大臣科大辨若撿挍參議取レ之奉レ之者右此間會撿挍行レ酒）と有て今日の事なり（凡て此の次第古今同じからず儀式には先田舞を奏し次に御膳を供り次に雅樂寮樂を奏する由なるを江次第には右に見えたる如く先御膳を供り一獻の後に主基鮮味を獻り次に風俗を奏し二獻の後田舞を奏して次に樂人音樂を奏するなど一に辰日の悠紀儀の如くなるは其宜しきに隨ひて被改たりつる者と見えたり）事訖主基國賜レ祿は儀式に酉刻賜レ祿と有り辰日は悠紀國賜祿にて同日酉刻主基節會の後に就て被行れ今日は主基國賜祿にて此にて兩國の賜祿の事畢るなり江次第の右文に續きて奏二見參一（内辨下殿着二西軒廊一覽上几子一見二見參一了參上經二座下一進二軟障子一付二内侍一奏レ之先レ是示二祿所一參議下殿召二少納言一授）參議就二祿所一少納言進二庭中一唱レ名王卿下殿給レ祿主基還御（不レ必待二王卿下殿一）と見えたり（凡ての事辰日悠紀給祿に同し其第三十七條の末に儀式を引て委しく註せるが如し）

清暑堂の御神樂は巳日主基節會の事訖て即被行る此は天皇辰巳兩日に悠紀主基の御帳に入御する始終其

に此清暑堂に渡らせ御在し坐事卯日儀の廻立殿の狀に異ならず然れば昨今に兩國の儀を畢させ給ふに就て神遊の事を行はせさせ給ふ事と聞えたり但儀式にも式にも此事所見されば後に始れる事ならむとも所思ゆれども斯る事は略かれたるも常に多く且下に引く文に上古云々近代云々と有れば猶古よりの事なる可し然るは兩國の節會の如きも古は然計りに言痛くは非ず萬に簡易(ヤスラ)かなる事共なりしかは後にこそは漢めきたる樂などに對へて神樂とは云りけれ其渡り參來ざりし以前は唯尋常の御遊なりけれは兩國の宴會にも本より被用たりけむを種々の事共の多く加はりつれば其には似ざるからに彼是を分ちて此は別に被行るならむと所思ゆれば其古き事推量られたり神事と公事と一なりし古と神事も公事も別に成れる今とを思亘して考ふ可き事なり備其豐樂院(トヨノアカリノミヤ)の清暑堂と云名こそは漢めかしけれ字に就て思ふに宴會に御むと爲て大御身を沐浴せ給ひ大御裝束を改させ給ふ齋殿の儀にぞ有ける第三十三條に引る江次第に卯日大嘗祭の事訖て辰日卯刻乘輿還ニ御豐樂殿ニ入ㇾ自ニ不老門ニ御ニ清暑堂ニ云々供ニ解齋御盥御粥ニと有を思合

せて曉る可し古には可と呼けむ知いず拾芥抄に清暑堂大嘗會五節於此所行ㇾ之と有は違へるに似たり此所より裝束し立す事なるを思誤れる者と所思ゆ　江次第に云く行事藏人裝ニ束清暑堂ニ不ㇾ改ニ御諱頭ニ出御玉■同出御不ㇾ改節會服　關白先候ニ東座ニ令三藏人召ニ王卿ニ頭若五位藏人上古有ニ公卿召例ニ近代不ㇾ然　參上着座拍子公卿相分着ニ左右ニ　次召ニ侍臣堪ニ絃歌ニ者參入着座先例上御座次横切敷ㇾ之而治暦左右相分着ㇾ之若依ㇾ可ㇾ有ニ本末ニ歟承保横切　次召ニ御遊具ニ笛御筥　鈴鹿　次唱ニ神樂歌ニ一先和琴次笛次篳篥次拍子次取物賢木幣杓韓神　次給ニ公卿衙重ニ次坏酒一行藏人頭獻ㇾ盃五位二人取ニ瓶子ニ左右　次左井波利此間供ニ御膳ニ御臺二本菓子干物大納言陪膳云々　次左井波利了亦坏酒一行公卿二人勸盃左右殿上五位取ニ瓶子ニ　次朝倉其駒次召ニ御遊具ニ琵琶　次答笙先吹ニ調子ニ次御遊具御前調　次拍子安部多不重宴山鳥急承保武徳樂　次給ㇾ祿親王大臣半帖下襲　關白御衣給　大中納言紅打袙一重　參議表袴以上四位以下　召人匠綿六從ㇾ之　次人御と有り此は大嘗祭及兩國の節會を行はせさせ給ひ畢つる狀を天地神祇に申させ給ふ神事なる事申すも更なり凡毎年十二月に被行る內侍所御神樂の狀に同じかる可し此も有と同じく御拜の事有べく又御■■などを令申給ふ事の必有つるなる可し

午日宴會を中古より豐明節會と云事と成にたり大凡豐明とは辰日巳日午日の宴會に總て亘る名には有れども上の兩日なるを悠紀節會主基節會と云故に殊更に今日のを豐明節會と云はその名目を分たむ爲なるにて其實は其に同じ事なり稱德天皇御紀に天平神護

元年十一月云々天皇重臨萬機於是更行大嘗之事云々庚辰詔曰今日方大新嘗乃猶良比能豐明聞行日仁在と有る此程は未悠紀主基の節會共に一日に兼併せて被行たるに豐明と云れば儀式の頭より辰巳午と三日に被分たりと雖も該羅（オシクル）めて豐明節會なる者なりけり 同三年御紀に十一月壬辰朔宴於五位以上詔曰今勅久今日者新嘗乃猶直比乃豐乃明聞許之賞須日御在と有る此は毎年の新嘗なれば今の例に非ず上なるを大新嘗と云別てるを以て知るべし 式に午日卯一點却兩國帳所司裝束尋常御帳辰二點御此帳召五位以上及六位以下參入同前日四點叙位兩國司及氏人等 叙位人數依勅處分 巳二一點所司薦御膳 其器幷雜具者便用兩國所供御膳之具 奏久米舞吉志舞申一點奏大歌幷五節舞三點供奉解齋舞先神服女舞 數限四人 次神祇官中臣忌部及小齋侍從下番上以上左右分入造酒司人別給柏即受酒而飲訖即爲鬘而舞之酉二點皇太子以下五位以上給祿各有差又諸司六位官以下及兩國駈使丁以上給祿 神祇伯大副及齋郡少領以上如給馬一疋 其悠紀主基兩國主典以下諸郡主帳以上把笏者別勅叙位者依臨時處分 諸司六位以下給祿兩國主典以下叙位或以未日行之事見儀式 是日小齋侍從以下於宮內省解齋歌舞如常大膳大炊造酒及兩國司給酒食訖脫齋服復常凡北野齋場雜舍事畢壞却と見えたり其却兩國帳所司裝束尋常御帳は儀式に午日卯刻撤悠紀主基兩國帳所司裝飾高御座構舞臺於殿前 自殿南階南去十一丈七尺高三尺方六丈 設樂人幄於舞臺東南角 南去八許丈東去二許丈 中務省舞臺北四丈置宣命版掃部寮立位記案於版東西 自尋常版南去四尺東折一丈立親王位記案南去七許尺立三位以上案南去七許尺立四位以下案兵部在西准之 所司預辨御膳幷群臣饌如常と有にて知らる備儀式及式の趣は豐樂殿にて被行るを江次第にては大極殿なり其心して見へし其にも午日裝束使奉仕上下裝束撤兩國帳幷標樂人幄等裝飾高御座設王卿座如常構舞臺於殿前設樂人幄舞臺東南角中務省舞臺北四丈置宣命版南去一丈置尋常版掃部立位記案二省立標と見えたり 裝束使は辨官の人之を勤む上下は殿上殿下なり裝束使二省及掃部等を率て其裝飾に仕奉るなり辰日巳日は豐樂殿の東西に構て在し御帳を撤し却て今日は其中央に高御座を裝飾するなり宣命版を設る事は今日宣命大夫其を宣事有るを以なり 辰二點御此帳召五位以上及六位以下參入同前日と有る前日は辰巳兩日の宴會を云ふなり儀式に辰刻賜可叙人歷名於內侍々々臨東檻授大臣々々喚內竪宣喚式兵二省々々丞各一人參入大臣賜歷名令召計時刻皇帝出自清暑堂遷御豐樂殿高御座內侍置位記筥於大臣之座前即臨東檻喚大臣々々稱唯到左近陣西頭謝座升自東階就

座次皇太子升レ自二同階一至レ座東西面謝座　酒就レ座所（掃部寮設座）司開二儀鸞豊樂兩門一闈司二人分在二逢春門南北一大臣喚二内豎一二聲共稱唯大　夫（元正ニ内豎者）一人趨立二左近陣西頭一大臣宣喚二式部省兵部省一稱唯退出喚レ之式兵兩省輔稱唯入レ自二逢春門一立二左近陣西南頭一（若多二位記一筥一者丞等相從）大臣喚二式部省一輔稱唯升レ自二東階一受二位記筥一復二本所一（若可レ叙二三位以上一者以二勅所レ定四位以下筥一授レ丞更升受二三位以上筥一兵部亦同）大臣喚二兵部省一稱唯升二同階一受二位記筥一復二本所一依レ次直進置二机上一（兵部渡二朝道一置レ之）退出次大臣喚二舍人一二聲舍人共稱唯少納言代レ之入レ自二逢春門一就レ版大臣宣喚二大夫等一少納言稱唯出レ自二儀鸞門一喚レ之親王以下依レ例稱唯（小齋人先入並群臣次レ之下同）參議以上一列入レ自二儀鸞門東戸一比レ入レ門諸仗共起次五位以上左右相分入（昨用二東西戸一）式部録二人左右相分入立二扉内一互稱二容止一次六位以下入省掌亦稱二容止一立定（並北面異位重行在レ東者以レ西爲レ上在レ西者以レ東爲レ上）大臣宣二侍坐一依レ例稱唯謝座酒就座訖諸衛共居と見えたり其大抵は辰日悠紀節會の儀に同じ此可レ叙人歴名とは外任奏にて申下せる下名と云物にて此は兩國司以下の人々の位叙す可き交名の簿（フミ）なり次に引く式の細註に叙位人數依二勅處分一と有を以知べし但親王大臣以下の叙位も有る事時として有げなれども兩國司及氏人の叙位を主と爲る事下に云るを以知べし位記筥とは其人々に賜ふ可き位記を充たる筥を云ふ其大臣は謂ゆる例の内辨なり此等の事江次第にも上文に續きて

藏人頭召二外記一渡二殿上見參一上著陣令レ奏二外任奏一（以次上若可レ仰二内辨一者有二追叙一者被レ仰下大臣中二下下名一書入返二上之一不レ入レ筥外記申二代官一）天皇御二大極殿一（内侍取二位記筥一ゝ々在二御前一置在二御後一藏人奉レ持二御親式筥等一令下藏人各兩人相從藏人持二位記筥一へ）内侍給二下名於大臣一（出二東置一給レ之内侍著レ靴給レ之内侍歸）大臣持二下名一著二東廊兀子一召二内豎一二音稱唯參入（出レ自二昭訓門一當二門北頭一一間西去一許丈一北面磬折立）内辨宣式部兵部召世稱唯出召之二省丞參進（入レ自二昭訓門一當二門北第一間西去一許丈北面磬折立）内辨宣式部稱唯丞參進給二下名一（以二左手一給レ之次給レ文歸立）召二兵部一給レ勅二省丞退出（歸入）内侍置二位記筥一（計二内辨座一理一置二臺一）（畢二在レ下當二一在中二在レ上二代藏人置レ之）近衛陣二階下一天皇出御（著二御帳一置二叙位式於西一）近仗稱警内辨又著二兀子一（開二）卿著二外辨一内侍臨檻此間將監以下仆二胡床一平伏内辨謝座昇著レ座（起座者經二北行自二軒廊前一出斜行當二左近陣坤角一南去七尺西出六寸乾面再拜更進當二陣前一自二南面東階一登入レ自二母屋東第一間一又西進著座保右大臣自二庇西一進著座）開門闈司著（入レ自二東一門一著二昭訓門南北一）内辨奏二宣命一（内記以二宣命一挿レ杖候二東廊下一内辨大臣執レ杖登レ自二東階一北折自二東庇一進二於軾障東端一付二内侍一内侍作レ杖）拔レ笏天覽了返給（内侍作レ杖進レ之主上以レ文覽レ之返給内侍取レ之返給之不レ挿レ杖）内辨給レ之退立下レ自二東檻一返二杖於内記一復座内辨召二内豎一稱唯

入立二左仗南一內辨宣式部兵部召世稱唯出召レ之二省輔丞參進（必用二代官一六位在二後列一著レ靴一）內辨宣式部輔稱唯參進（昇レ自二東階一自二母屋東一間一入立二大臣後一去レ巽七尺）內辨給二位記筥一（寄二笏於臺盤一自二右方一給レ之宣命暫入二懷中一輔給レ之下レ階給レ丞レ二本所一內辨又給二次筥一如レ初若有二三筥一者又登）次召二兵部一給如レ初丞等以レ筥置二案上一（式部輔丞置レ筥之間兵部輔丞趁二度馳道一置二筥於案上一即式部自二昭訓門一出兵部自二光範門一出）內辨召二舍人一（音）二大舍人四人於二幔外一稱唯少納言就レ版（入レ自二昭訓門一）內辨宣刀禰召世少納言稱唯出召レ之（左廻趁出二於會昌門外一召レ之）王卿立レ標（入レ自二會昌門東扉一小忌爲レ先北面西上異位重行諸仗起）內辨宣敷居爾群臣再拜（謂二之謝座一）酒正授二空盞一出レ自二左仗一授二貫首人一貫首人相跪取之（不レ再レ拜酒正持レ盤左廻去貫首人置レ盞作レ跪小拜起再拜諸臣同再拜更獨跪酒正來貫首人拔レ笏作レ居小拜更立謂二之謝酒一）王卿著二堂上一群臣著レ幄（諸仗居）式部錄以レ簡點撿と有り克々上なる儀式と合せて考ふ可き事なり但儀式にては豐樂院なるは江次第にては八省院なれども其式に於ては相も異らざるなり　右の一上とは左大臣の事なり外任とは外官と云に同しく諸國の國司なり選叙令に凡在京諸司爲二京官一自餘皆爲二外官一と有るこれなり外任奏とは宴會の時に至て小節には五位以上大節には六位以下迄も宴に預るか皆京官の五位以上六位以下にて外官は遠路なれば之に預らずと雖も諸國の守介など上京者任して未任符を給はらずして在京し又は任符を給はりても未京を出發ざる或は其國の政務の事に就て入京して留り居る等の間に若節會を被行る時に當れは其々必其宴に預るか故に其預る可き人々の名を錄して奏するを外任奏とは云なり此大嘗會にも辰日巳日は京官耳にて外官は預らざるを此午日には京官外官共に被召る故に外任奏を歷れば其列に令侍む可き由を宣下せらるる此を以儀式には歷名と云ひ江次第には下名と云ふ共に同じ物なり今日は兩國司以下氏人に至る迄に叙位の事有が故に殊更に外任奏重きなり　四點叙二位兩國司及氏人等一（叙位人數依二勅處分一）と有る四點は長刻のなる事上に引る式文にて亦待べし

此事儀式に次內記以二宣命文一進二大臣一大臣執奏レ之訖大臣喚ト堪二宣命一參議以上一人一授二宣命文一受即復二本座一次式部兵部兩省擧ト可二叙位一者ト分入レ自二儀鸞門東西一起（諸仗）立二於中庭一皇太子立二座東一西面次親王以下共降立（參議以上下殿到二左近陣南三丈一西面北上立四位以下見二參議以上下殿一則應二俱下一升同但宣命者獨座四位以下降立二堂前一各東西去レ堂二丈若大臣預二叙位一者便往就レ列）宣命大夫下殿進就レ版宣制其詞云天皇我大命止（良）萬數大命乎諸聞食止宣（皇太子先稱唯次親王以下共稱唯之皇太子先再拜次親王以下共再拜）更宣云悠紀主基爾奉仕留兩國乃國司等日夜無怠事久務結利勤久之奉仕爾依天治賜布又奉仕人等中爾其仕奉留狀乃隨爾治賜人毛在又御意乃愛盛爾治賜人々毛一二在故是以冠位上賜治賜波久止詔天皇我大命乎衆聞食止宣（皇太子先稱唯次親王以下稱唯之皇太子先再拜次親王以下小齋先拜○今云續紀に天平神護元年十一月云々更行二大嘗之事一以二美濃國一爲二由機一越前國爲二須伎一庚辰詔曰云々又詔日由紀須伎二國守等仁命久汝多知方貞仁明伎心乎以天朝廷能護等之天關仁奉供義方之賀國方多久在止毛美濃止越前止御占仁合天大嘗乃政事乎取以天奉供良之止念行天奈毛位冠賜久止宣と有て次に授美濃守正五位下小野朝臣竹良從四位下介正六位上藤原朝臣家依從五位下越前守從五位上藤原朝臣繼繩從四位下介從五位下弓削宿禰牛養從五位上と有る例を思可し）宣命大夫復二本座一親王以下亦復二本座一式部就レ案依レ唱叙レ之兵部亦如レ之（式部叙二親王一大輔叙二三位以上一少輔叙二五位以上一但叙二親王一者親王先入次式部輔其叙畢却先出次親王拜舞退）訖兩省退出次被レ叙人等相二近馳道一拜舞（不レ必レ待二二省出一）訖退出諸仗居爰式兵兩省

丞入レ自ニ逢春承秋兩門ニ執レ笏退出訖掃部寮分入レ自ニ同門ニ撤ニ位記案ニ次新叙人親族下拜舞訖復ニ本座ニと有り此事江次第にも式部輔率ニ叙人ニ參入（參議以上在ニ叙列ニ者立ニ輔前ニ）兵部率ニ武官叙人ニ自ニ會昌門左右扉ニ參諸仗近立定內辨召ニ宣命使ニ若叙ニ三位以上ニ之時召ニ中納言ニ四位以下時召ニ參議ニ被レ召者稱唯立ニ內辨後七尺ニ內辨給ニ宣命ニ（右廻復ニ本座ニ）王卿下レ堂列立（西面北上）諸大夫立ニ幄前ニ宣命使立レ版（降レ自ニ東階ニ比ニ折ニ有レ揖）宣制一段（群臣再拜）又宣制（再拜）此間叙人不ニ拜舞ニ而立宣命使復レ座王卿同復レ座式部輔召ニ位記ニ（叙ニ親王ニ者以ニ參議ニ爲ニ輔代ニ就レ案給ニ位記ニ大輔自ニ公卿位記ニ少輔唱ニ五位以上位記ニ被レ唱者進就ニ於輔之右邊ニ輔相跪授レ之叙人置レ笏取ニ位記ニ左廻一拜把レ笏左廻六位新叙之輩但六位以上叙勞者ニ位記替笏叙人中有ニ五位參人ニ者省史生取レ之）次兵部輔叙ニ武官ニ了（覆レ案輔等退出文官左廻武官右廻）叙人拜舞退出（四位相連）二省丞代取ニ位記筥ニ（入レ自ニ昭訓光範門ニ）掃部寮撤レ案（入レ自ニ同兩門ニ）王卿下レ堂列立拜舞（群臣同レ之謝ニ之視叙拜ニ）王卿復レ座（諸仗居）と見えたり此即今日悠紀主基の兩國司及其外の人々にも大嘗祭に奉仕れる勞に依て位を進め給ふ儀なり（歴朝詔詞解の卷首に此儀式の文を引たる下に云く宣命大夫と云は宣命文を讀人にて宣命使とも云り上に堪宣命參議以上一人と有る是なり就てとは宣命版とて除て設置る其に就を云ふ宣とは則は則命にて此も宣命と云に同じ事なれども宣命とは其事の儀式を汎く云指へる名なる故に其中に就て正しく其文を讀擧る事をば宣制と云て事を分てるなりと有る此にて心得べし）巳二點所司薦ニ御膳ニ（其器并雜具者即用ニ前日兩國所レ供御膳之具ニ）奏ニ久米舞吉志舞ニは儀式に所司爲ニ供御膳ニ（其御器便用ニ兩國設ニ）親王以下諸仗共起

次主膳監徒ニ供東宮饌ニ大膳職徒ニ進群臣饌ニ一觴之後吉野國栖於ニ儀鸞門外ニ奏ニ歌笛ニ并獻ニ御贄ニ訖伴佐伯兩人率ニ舞人ニ入レ自ニ儀鸞門ニ（左伴氏右佐伯氏五位以上相分而列）就ニ中庭床子ニ（所司預設）奏ニ久米舞ニ（廿人二列而舞）訖退出次安陪氏人（五位以上相分面列）奏ニ吉志舞ニ（出入門并人數行列等同ニ久米舞ニ）訖退出次悠紀主基兩國司率ニ歌人歌女ニ入ニ同門東西戸ニ就ニ左右幄ニ奏ニ風俗樂ニ歌舞一曲退出と見ゆ式には國栖の事は漏されたれども其事の無には非ず省きて被記さるなり江次第にも酒部立采女撤ニ御膳肥ニ（先內膳御膳次酒司件御鎮子等進物所就ニ西階ニ受レ之群臣着仗井起）內膳正以下八人供ニ御嗟ニ（采女正并令史叉手前行留ニ階下ニ內膳官人登ニ西階下第一級ニ采女出ニ[illegible]傳ニ[illegible]鮮餡餅桂心ニ供レ之臣下其[illegible]飩宗）次々供レ膳自ニ西放ニ供レ之（[illegible]）給ニ臣下飩ニ御箸鳴（臣下應レ之）供ニ鮑羹ニ（徹ニ菜鮮ニ）供ニ御飯ニ（撤ニ飩ニ）供ニ進物所御菜ニ（窪坏ニ平盛六汁物ニ）供ニ御厨子所御菜ニ（高盛八坏物）二汁二度給ニ臣下追物ニ御箸下（臣下應レ之）一獻國栖奏歌笛（於ニ會昌門ニ升奏レ之）二獻久米舞（入レ自ニ南門ニ着ニ中庭床子ニ出レ自ニ舞臺東）伴左佐伯右五位以上相分引之舞人廿人琴工六人（如ニ駿河舞ニ）來ニ版位ニ舞綜頭拔レ劍（テハシコロ）（無歌）以レ琴爲レ節了退出三獻仰ニ御酒勅使ニ吉志舞（出レ自ニ舞臺西ニ或三獻前久米舞後）安倍氏五位以上着ニ床子ニ高麗亂聲舞廿人樂廿人了退出と有り久米舞の起源は神武天皇御紀に天皇使レ徴ニ兄猾及弟猾者ニ云々時兄猾不レ來弟猾即詣至云

云天皇即遣二道臣命一察二其逆狀一時道臣命審知レ有二賊害之心一云々因案レ劔彎レ弓逼令二催入一云々已而弟猾大設二牛酒一以勞二饗皇師一焉天皇以二其酒宍一班二賜軍卒一乃爲二御謠一之曰云々是謂二來目歌一今樂府奏二此歌一者猶有二手量大小及音聲巨細一此古之遺式也と有を始て種々の歌を載られ其下に今來目部歌而後大嘗是其緣也とも記し其終に凡諸御謠皆謂二來目歌一此的取二歌者一而名レ之也と見え元年御紀に初天皇草二創天基一之日也大伴氏之遠祖道臣命帥二大來目部一奉二承密策一能以二諷歌倒語一掃二蕩妖氣一倒語之用始起二乎茲一と見えたる是なり日本紀傳に云を見べし其儀式に次悠紀主基兩國司率二歌人歌女一入二同門東西戸一就二左右幄一奏二風俗樂一歌舞一曲退出と有を式にも次第にも被載ざるを以思ふに辰日巳日の宴會に奏せりしか故に後には被行ざりし者なる可し（久米舞に用ふる劔は儀式に載れる大政官符に下二治部一金作劔廿口右久米舞料悠紀所レ請如レ件と見ゆ主基所の所にも右に准ふ事云も更なり吉志舞の事は終に註す可し國栖の事記傳廿二卷三十一卷に委く說れたるが如し其の儀辰巳兩日の狀に異非るなり）申一點奏二大歌幷五節舞一日儀式に次奏二大歌幷五節舞一訖皇太子先起在二座後一次小齋親王以下五位以上下二殿堂一列立（參議以上自二左兵衛陣一南三丈更西折一丈西面北上四位以下立二各堂前一去レ堂二一丈次大齋親王以下又下共拜舞也）次治部雅樂率二工人一奏二立歌一訖退出と見えたり此を新嘗會儀に大歌別當大夫率二歌者一參入就レ座々定奏二大歌一舞二五節一（昔有二警蹕一於二殿上一舞）其五節妓一行下レ自二西階一垂二雨數一上南行升二臺道引姫四人以上南行在レ前到二舞臺階下一東西分座（掃部寮預敷二草座於階東西頭一）云々訖治部雅樂率工人等參入奏二立歌一（或有レ勅停レ之）と有か如し江次第にも上に引る文に次て大歌別當退下（下レ自二東階一經二立杖後一出二會昌門東廊一着二門外壇下仰二左近衛一令レ召二歌人一此門有二近衛陣一近代不然）掃部立二床子一（門內）別當立二壇上一（召二歌人一別當座歌人進着二門內床子一別當座在二會昌門）大歌發二物聲一內辨奏下可レ召二別當一由上（把レ笏奏勅之後召二參議一仰レ之）參議奉レ仰出二南檻一召レ之（召了右廻下レ自二東會近衛官人告二其由一）別當登上（如二出儀一）掃部移二床子於舞臺北頭一歌人着二床子一發二歌笛一（自二舞臺東着レ之）下二小忌臺盤一（內舞姬出レ自二西廂上佃副女官五人舞薬副南柱南立隱レ身頭レ舞）訖退入歌人退出所司撤二床子一王卿下レ堂拜舞（諸仗立西面北上異位重行拜了復レ座請仗居）と有り其大歌及五節舞の事は大歌幷五節舞儀に歌人幷琴師笛工等候二儀鸞門幔外一云々別當降レ自二殿東階一南行出レ自二儀鸞門東戸一東行更西向當分レ立レ臺云々訖別當喚レ之歌人以下共稱唯左右相別行列（相去一許丈）其次第左彈御琴師二人（着二紫袍一各擎二御琴一）次歌人十三人（四人着二紫袍一九人綠幷縹袍）次笛工四人擊拍子四人次鐘師一人（幷着二當色一）右彈御琴師二人次歌人十三人（服色並同レ左）次一二三鼓師各一人

各著當色次擊拍子一人服色同左次鐸師鼓師各一人著當色立定別當宣喚之共稱唯別當刻入自戶彈御琴以下依次入各當床子前折而立即鐘鐸鼓師自歌人座邊就其就床子訖鐘並鼓師相鐘擊鼓各三下訖別當以下共就床子訖笛工調音聲次調御琴次搔御琴三聲詞云牟奈須可々記次拍手三度詞云牟奈夫奏數曲訖奏五節歌手時儛妓四人一行徐步降自殿西階經右近陣東頭踏兩行在前至舞臺階下東西分坐掃部寮預設舞妓座於階下舞訖升殿即奏大直歌本末二度安末四度訖退出と有り此にて其委しき樣知に足れり備其大歌は職原抄に別當一人云々と有る是にて拾芥抄にも[illegible]大歌所在[illegible]東上西門[illegible]也新嘗時供奉有王大夫[illegible]六位別當云々と有る所の名なり大直歌とは大直會歌と云意なり古今集大歌所御歌部に大直歌と有て新しき年始に如此しこそ千年を兼て樂しきをへめ」と見えたる等なるが此は續紀に天平十四年正月壬戌天皇御大安殿宴群臣云々又賜宴天下有位人並諸司史生於是六位以下人等鼓琴歌曰新年始爾何久志社供奉良米萬代摩提爾」と有る下句を換て直會歌とは爲られたるなり扨て右の本末二度とは右等の歌を本方末方二度宛諷ふを云ひ安末とは同紀に天平十五年五月癸卯宴群臣於內裏皇太子親儛五節云々因御製歌曰蘇良美都夜麻止乃久爾波可未可良斯多布度久安流羅之許能未比美何波阿麻弖可未美麻乃彌己止乃登理母知弖許能等與美岐遠伊可多弖末都流」夜須美斯志和己於保支美波多比良氣久那何久伊末之弖等與美岐麻都流」と見えて此時に五節舞有し由續紀に被記たる此中の阿麻弖可未の初句に依て假に其目とは成せるなる可し五節儛の事は右の皇太子親儛五節の文に次て右大臣橘宿禰諸兄奉詔奏太上天皇曰天皇大命爾坐西奏賜久掛母畏伎飛鳥淨御原宮爾大八洲所知志聖乃天皇命云々登隨神母所思坐弖此乃舞乎始賜比造賜比伎等聞食弖與天地共爾絕事無久彌繼爾受賜波利行牟物等之弖皇太子斯王爾學志頂令荷弖我皇天皇大前爾貢事乎奏と有り靈龜詔詞等に云く皇太子は孝謙天皇なり天平十年正月立阿倍內親王爲皇太子と有る是なり同十五年には二十六歲の御時なり太上天皇は元正天皇也五節の舞の始は即此詔に見えたるを以て正說と爲べし然るに政事要略に五節舞者淨御原天皇之所製也相傳曰天皇御吉野宮日暮彈琴有興俄爾之間前岫之下雲氣忽起疑如高唐神女髣髴應曲而舞獨入天矚他人無見擧袖五變故謂之五節其歌曰[illegible]乎度賣佐備須茂と見え河海抄少女卷年中行事抄江次第裏書などにも本朝月令云とて此文を引たれど三善清行の延喜十四年に奉れる意見封事請減五節妓員文の中にも[illegible]昔神女來舞と有れば此は古き傳へ也けり然れども此等の事は古事記雄略天皇段に天皇幸行吉野宮之時吉野川之濱有童女其形姿美麗云々坐其御呉床彈其御琴令爲儛其孃子之好儛作

御歌ニ其歌曰阿具良奈能加彼能美豆知比久許曾爾麻比須流東美那登許余爾母加母と有を取て作換たる者にして彼乎度綿度茂云々の歌も四ノ迄萬葉五なる長歌の中の句と同じければ其を取て結句を作添たる也猶又公事根源に天平五年五月に正しく內裏にて五節舞は有けるとぞと後記たるは此の事にて天平十五年の十の字の落たる成可し然れど此より前天平十四年正月にも天皇御大安殿宴群臣と有て五節舞有し事見えたり又此後も天平勝寶元年十二月同四年四月など東大寺行幸の時も彼寺にて此舞も有し事見ゆ此舞後には十一月の節會に限たる事なれ共元は然らざりし事上件の如し三點供ニ奉解齋舞ニ先神服女舞數限ニ四人ニ次神祇官中臣齋部及小齋侍從以下番上以上左右分入造酒司人別給レ柏即受レ酒而飲訖即爲レ鬘而舞レ之と有る解齋は今迄嚴重に忌愼みし齋を解て常に復る事にて此舞は宮中儀式帳などに謂ゆる直會の舞と一事なり儀式にも次神服女四人於ニ舞臺北ニ供ニ解齋和舞ニ次神祇官中臣忌部及小齋侍從以下番上以上左右分入造酒司人別賜レ柏即受レ酒而飲訖以レ柏爲レ鬘而和舞先神祇官次侍從次大舍人次左近衞兵次右近衞次左兵衞次右兵衞也と見え江次第にも神服女四人供ニ和舞ニ於ニ舞臺北ニ奏ニ解齋樂ニ神祇官小忌侍從以下左右分入奏ニ和舞ニ中臣一人忌部一人侍從廿人大舍人廿人左近廿人右近廿人左右兵衞等也近代一度舞と有り猶此解齋の事は太神宮式六月月次祭條に衆官神拜の事竟て退就ニ解齋殿ニ給ニ酒食ニ訖入ニ外玉垣門ニ供ニ倭舞ニ先神宮司次禰宜次大內人次幣帛使次齋宮主神次寮允以上一人酒立女一人持レ柏一人持レ酒每ニ舞丁人ニ令レ飲ニ柏酒ニ云々次禰宜大內人妻訖齋宮女孺四人供ニ五節舞ニと有に甚々克似たり其倭舞の狀は同宮年中行事同條に祭使參入之時先吹レ笛自ニ忌火屋殿ニ請ニ取御琴ニ搔レ之云々跪有ニ大和舞ニ先大司次權司次少司也次祭中臣舞宮司並中臣左右舞也半疊跪一拜後進労舞了後揖等一拜歸也次神主舞神主右左右舞也云々と有にて其大抵を推量り知べき者なり此より直に小齋公卿以下宮內省廳に赴きて解齋に就く事なり下に引く儀式に曉頭掃部寮設ニ解齋公卿以下座於宮內省廳事ニ云々豐樂殿宴畢未レ賜レ祿之前小齋公卿一人率ニ史及中務宮內供奉所司等ニ向ニ宮內省ニと有を以知べし此伊勢の解齋の事は此詞講義に說たには此に見べし凡て神廷と朝廷と神事の時に就ては同じき事多在れば此と彼とを爰に合せて曉り得る事有る者ぞ猶此解齋和舞を作仕る迄辰巳午の三日の間に公事にて在れども散齋の方と云ひ仕事無く重き大嘗祭に就たる事にし有れば猶神事なる故に此直會を仕り畢りて初て齋服を脫て平生に復る事なり第三十四條なる解齋御粥のことと合せ見る可し酉ニ一點皇太子以下五位以上給レ祿有レ差は儀式に次掃部寮立ニ祿床於舞臺南ニ云々訖辨大夫就レ版奏ニ祿數ニ其詞云絹若干疋綿若干屯進止申訖給ニ大膳大炊造酒及兩國司酒食ニ訖解ニ齋服ニ著ニ常服ニ於レ是外記錄ニ皇太子見參ニ式部省進ニ親王五位以上見參文ニ外記計會更寫ニ一通ニ副ニ祿法ニ進ニ大臣ニ內記亦進ニ宣命文ニ大臣執奏レ之又定下堪ニ宣命ニ參議以上一人上奏レ之畢大臣喚ニ宣命大夫ニ付ニ宣命文ニ受レ之復レ座次以ニ見參文ニ付ニ參議一人ニ受之就ニ賜祿座ニ皇太子先起レ座在ニ座

後一次群臣下而列立如レ常訖宣命大夫下レ殿就レ版宣制云天皇我詔旨良麻止宣不大命乎諸聞食止宣皇太子以下稱唯再拜更宣云今日波大嘗乃直會乃豐樂聞食日爾在故是以黑岐白岐乃御酒赤丹乃穗爾食(タマヘ)惠良岐罷止爲氏奈毛常毛賜御物賜久止宣以レ次稱唯共拜舞宣命大夫復座皇太子以下各復レ座式部輔二人執レ札左右相分立ニ版南一唱ニ親王以下名一以レ次稱唯進受レ祿再拜退出乘輿還レ宮」と見えたるが如し江次第にも次掃部寮立ニ祿床子一舞臺南大藏省積レ祿辨官奏ニ目祿一宣命一通大臣以下見參一通國司見參一通祿法一通次大臣下レ殿見ニ見參宣命一以上挿ニ一枝一外記進レ之參上經ニ座末一到ニ軾東頭一付ニ内侍一令レ奏天覽了返給下レ殿返ニ書杖一復レ座召ニ參議二人一給レ之先召ニ宣命人一右廻復座次召ニ見參人一左廻降レ殿舒行者ニ祿所一以ニ目祿ニ下レ辨内辨以下降立諸仗起宣命使就レ版宣制一段再拜又宣制拜舞宣命使登王卿復座諸仗居式部輔唱王卿以下下レ殿給レ祿小拜出レ自ニ東福門一可レ參ニ小安殿一天皇入御近代不ニ必待ニ王卿降一入御仍有ニ警蹕一乘輿還レ宮衛府公卿不レ帶ニ弓箭一皆從杖槍供奉到ニ延政門一神祇官獻ニ御麻一到ニ南殿一鈴奏名謁等如レ常」と見ゆ猶此宣制は甚古き例に依れるなる可し續紀に天平神護元年十一月云々更行ニ大嘗之事一云々庚辰又詔曰今勅久今日方大新嘗乃猶良比能豐明聞行日仁在云々故汝等毛安久於多比仁侍天由紀須伎二國乃獻禮留黑紀白紀能御酒乎赤丹乃保仁多末倍惠良伎常毛賜酒幣(キカマヒ)乃物乎賜方利以天退止爲天奈毛御物賜止方久宣と有り常毛賜と有は大嘗會の豐明には何時も例にて賜ふ由なり是を以て此詔の此時に始れるならず定りたる古き遠き迹なる事知らる右の酒幣乃物は此の祿物の事なり但古は卯日に大嘗祭を被行れ辰日は謂ゆる大嘗會にて兩國の節會も何も此日に兼て被行れしかば此宣命も其日のなるを儀式などの頭ほひよりや如此く辰巳午の三日に分て被行れたりけむを宣命は猶古の任にて辰日悠紀宴會に耳被賜る黑酒白酒の事をも被載たれども其實に違へるを以古は辰日一日なりし事を曉る可し光孝天皇實錄にも宣詔曰天皇我大命良麻止勅大命乎諸衆聞食止宣今日波大嘗會乃直會乃豐樂華日爾在故是以黑支白支乃御酒赤丹穗食惠良支罷止爲天奈毛常毛賜酒乃幣乃御物賜久止宣と有り此は儀式より後なれば其に依れる事云も更なるが時々其文に取捨有りと見えて同じからずと雖も大體は異ならざるなり酒幣は祿物なる事右に云る如し[illegible]部詞解に酒幣はミ加摩比と訓べし摩比は凡て神に奉る物にても人に贈る物にても下たる者に賜ふ物にても通はし云言也摩比那比と云も摩比と云に同じ然るを後世には摩比那比と云は正しからぬ言略するに馴れる

言の如く成れり書紀に神に奉る幣物たら庶比又庶比都比と云り萬葉に來比波世武之幣者爲と有も唯物を言らむと云事なり酒看に宴の時に賜る物なり倍禮明に賜ふも其物は常の祿に異る事無し」と有にて甚々明亮なり又續紀に天平神護二年十一月壬辰賜ニ宴於五位以上一詔曰今勅久今日方新嘗乃猶良比乃豐乃明聞許之賣須日仁在云々故是以黑記白記乃御酒食倍惠良倍常毛賜酒幣乃物賜久止之天御物給波久止宣と有り此は毎年の新嘗會の豐明のなるにて新嘗會儀に宣命大夫下殿就版宣制云天皇我詔旨良萬止宣大命乎衆聞食止宣皇太子稱唯再拜皇太子先稱唯再拜訖王以下次稱之更宣云今日波新嘗乃直相乃豐樂聞食日爾在故是以黑紀白紀乃御酒赤丹乃穗爾食惠良伎罷退止爲天奈毛常毛賜御物賜波久止宣皇太子以下稱唯再拜賜祿と有に同じ右の如く大嘗と新嘗とは大小の差こそは有けれ趣に於て異なる所無也又諸司六位官以下及兩國駈使丁以上給レ祿神祇伯大副及齋部小領以上加ニ給馬一疋一

一　其悠紀主基兩國主典以下諸郡司主帳以上把レ笏者別勅敍位者依ニ臨時處分一諸司六位以下給レ祿兩國主典以下敍位或以ニ未日一行レ之事見ニ儀式一

と有る此は上なる皇太子以下五位以上給祿と同じく酉二點に引續て被行る事なれども定りたる事には非りけらし細註に或以ニ未日行レ之とは記されたり儀式に未日賜ニ神祇官並諸司六位以下及兩齋國國郡司役夫以上祿ニ其儀也平明所司自ニ儀鸞門東第一間ニ南去一許丈更東折五許丈南面設ニ勅使參議床子ニ東去一許丈辨大夫床子其南面式部輔床子其東一許丈官史床子其南式部丞床子並西面其南五許丈更西折五許丈式部錄床子四脚北面門西與式部輔相對兵部輔床子其西一許丈兵部丞床子其南五許尺更東折五許尺兵部錄床子四脚大藏丞錄床子在祿床子前左右相分當門訖中務省於儀鸞門前正中ニ南去三許丈置ニ宣命版ニ南去三許丈掃部寮左右相分設ニ積祿床子ニ大藏省積ニ祿物於床子上一○今云午日に親王以下五位以上の給祿は豐樂殿の前にて即儀鸞門の内なるを未日の六位以下の給祿は儀鸞門の外なる故に如此く勅使參議以下の床子を其平明より設るなり午刻勅使參議一人就ニ床子ニ次辨大夫式兵ニ省輔官便以下次就ニ床子ニ可レ賜ニ祿者群ニ立祿床子南頭ニ訖勅使起レ自ニ床子ニ南去二許丈更折西去二許丈進就版宣制其詞云天皇我大命良萬止勅大命乎衆聞食止宣布可レ賜祿者共稱唯再拜又宣云神祇官人等乎始氏大嘗會爾參來氏仕奉流悠紀主基兩國司郡司百姓及司司人毛止番上以上爾御物賜布又卜食留二郡司波爾特御物加賜波久止宣或時有レ勅免ニ兩國萬負若干庸並物可レ賜レ祿者共稱唯拜舞訖勅使復ニ床子ニ次式兵二省錄分四番執レ札唱レ名大藏省隨即賜レ之○今云兩國萬負とは租税の未納を云ひ庸並物とは調庸及課役雜徭共に免さるゝを云なり持統天皇五年御紀に十一月戊辰大嘗壬辰賜ニ公卿食ニ乙未饗ニ公卿以下ニ至ニ主典ニ並賜ニ絹等ニ各有レ差丁酉饗ニ神祇官長上以下至ニ神部等ニ及供奉播磨國因幡國郡司以下至ニ百姓男女ニ並賜ニ絹等ニ各有レ差と有は此事なり其祿法神祇齋主加ニ賜馬一疋一諸司別官各綿五屯主典各四屯史生掌等各三屯內豎大舍人喚使等亦同自餘番上各二屯悠紀主基兩國守介各絹十疋綿二十屯調布卅端椽各絹五疋綿十屯調布六端目各絹三疋綿六屯調布四端史生博士醫師各絹二疋綿四屯調布三端齋郡大少領各絹四疋綿十屯調布六端大少領加ニ賜馬一疋一主政帳各絹二疋

綿四屯調布二端諸郡大少領各絹三疋綿六屯調布三端主政帳各絹一疋綿三屯調布二端其在國司並郡司不レ在二此限一造酒童女稻實公燒灰大酒波粉走各絹一疋綿二屯調布一端相作女大多米酒波女粉走相作採薪等各調布一端風俗歌人幷國苦生子弟等各庸綿二屯撰丁各綿一屯又悠紀主基二所雜色人隨二等第一賜レ之一等各綿四屯二等三屯三等二屯祝部各綿四屯供二奉開門幷久米舞一件佐伯宿禰主典以上各綿廿屯散位並蔭子孫等各綿十屯供二奉神事一神服各絹一疋神主各絹一疋綿四屯調布一端服長各絹一疋綿一屯服女各調布一端 ○今云神祇齋王は伯を云なり上に引る式に神祇伯大副及齋宮少領以上加二給馬一疋一と有れども大副の事此に見えず其在國司並郡司不レ在二此限一には今度上京爲ざるには賜はらずとなり 又勅使內侍於中重對勘見參國司以下郡司以上妻賜レ祿其祿法也守介妻各絹六疋綿廿屯調布十端掾妻各絹四疋綿八屯調布五端目妻各絹二疋綿六屯調布二端史生博士醫師妻各絹二疋綿二屯調布二端供二奉神事一神服妻絹一疋調布一端綿一屯齋部大少領妻各絹三疋綿六屯調布三端主政帳妻各絹二疋綿二屯調布二端諸郡大少領妻各絹二疋綿二屯調布二端主政帳妻各絹一疋綿二屯調布二端 ○今云中重は內裏を云ふ此は兩國の國司郡司以下の妻に祿を賜ふなるが此等の人々は大嘗會に預る事無き故に中重に召て賜ふなる可し同じ女と雖も齋部入等のは上の辭にて豐樂節なるを思ふ可なり と所見たり宣命の文に卜食留二郡司波爾特御物加賜と有は絹綿の外に馬一疋宛を賜はる事也但神祇伯大副と悠紀主基二郡司は其勞に依て特に賜へども其餘は國司と雖も加賜はざる事と所見たり偖此事式には右の如く午日の儀とは成せれども猶儀式の古法に因准ひて未日に分ち被行る事にて畢竟（ソンヅマリ）は時の宜しきに隨ふ故に或以二未日一行レ之事見二儀式一とは註されたるものなる可し 江次第の頃も午日に一に被行たりけむ上に引る給祿の所に齋宮奏二目錄一宣命一通大臣以下見參一通國司見參一通祿法一通と有る宣命は謂ゆる上の宣命なり大臣以下見參とは午日儀に親王五位以上見參文を有是也國司見參とは此なる神祇官云々及兩齋國々郡司役夫以上の見參に當り祿法とは給祿の日次なれば式より後の御定は右の如く午日に共に被行たるなンめり然れども儀式の當昔に新嘗會の給祿と雖も五位以上と六位以下とは同日ならざりし也 新嘗會儀に掃部寮立二祿臺於庭中一大藏省積レ祿辨大夫奏二祿數一其詞云絹若干疋綿若干屯進申す時外記以二見參并祿法文一云々宣命云々皇太子以下拜舞訖賜レ祿と有る下の細書に六位以下後日賜レ之と有を知べし 是日小齋侍從以下於二宮內省一解齋歌舞如レ常大膳大炊造酒及兩國司給二酒食一訖脫二齋服一復レ常と有る大膳大炊造酒及兩國司給二酒食一云々の事は儀式には此より前に在て給祿の初に辨大夫就レ版奏二祿數一云々訖給二大膳大炊造酒及兩國司酒食一訖解二齋服一著二常服一於是外記錄二皇太子見參一云々と見えたる事上に引る文を見て曉る可し偖其解齋の狀は曉頭掃部寮設二解齋公卿以下座於宮內省廳事一其面位也東方西面設二公卿一人

座北方南面東上次侍從以上座南方北面東上雅樂寮座西方東面北上官史及中務宮內供奉所司座一豐樂殿宴畢未レ賜レ祿之前小齋公卿一人率二史及中務宮內供奉所司等一向二宮內省一神祇官先就レ座次公卿以下依レ次就レ座（公卿用二東側階一侍從以上用二北東一階一自餘用二西側階一）訖神祇官奏二解齋歌一一成次雅樂寮奏二同歌一宮內丞二人先和舞次神祇祐一人次侍從二人次內舍人二人次大舍人二人訖辨大夫喚二官掌一二聲官掌稱唯立二庭中一辨大夫問云阿誰官掌稱二姓名一辨大夫命云喚二宮內省一官掌稱唯退喚二一聲錄稱唯進立（官掌立所）辨大夫問云阿誰錄稱二官姓名一大夫仰二御飯早速令一レ賜レ祿稱唯喚二膳部一二聲膳部五六人共稱唯錄仰云御飯賜（部）膳部稱唯錄以下相分賜レ之錄申云御飯賜畢公卿以下拍レ手四段各退出と有り文に豐樂殿宴畢未レ賜レ祿之前小齋公卿一人率二史及中務宮內供奉所司等一向二宮內省一と有は上に引る儀式に神祇官中臣忌部及小齋侍從以下番上以上左右分入造酒司人別賜レ柏即受レ酒而飲訖以レ柏爲レ蘰而和舞云々と有る其より直に宮內省に向ふ事と所見たり神今食儀に辨大夫率二小齋人等一到二宮內省一就二解齋座一々定辨大夫喚二官掌一二聲官掌稱唯趨立庭中辨大夫命云喚二宮內

省一官掌稱唯趨出喚レ之錄稱唯趨立辨命云御飯早速賜錄稱唯趨出喚レ之膳部五六人共稱唯錄仰云賜二御飯一膳部共稱唯大膳進屬以下共起先賜二神祇官一次分頒賜二辨大夫以下一訖屬趨立申云御飯賜了諸司共拍レ手三段（先後稱唯）酒盞三行亦拍レ手一段各了依レ次散去と見えたる辨大夫喚二官掌一云々以下の文五に精粗こそは有けれ合せ讀時は其委曲なる狀甚分明なり解齋歌今傳はらず決めて定りたる古き歌有て此を謠へるなる可し此解齋の事は新嘗會にも小齋人等集二宮內省一解齋（其儀具二踐祚大嘗會式一）と有て神今食及新嘗大嘗の時共に其式同じき狀なり此に依て右に引る式にも解齋歌舞如常とは被記たり（但午日儀に拍手四段と有と神今食儀に御飯賜了拍レ手三段酒盞三行亦拍レ手一段と有と事の違へるか如くなれども然らず午日儀に拍レ手四段と有る其實は神今食儀の如く御飯を賜りて三段と酒盞三行の後に一段と前後四段なるを合せたるなり式にも如レ常と有る如く六月十二月二度の神今食と新嘗祭と年中に三度も有て常に著き事なれば神今食儀に精を讓りて此は粗く被記たるなり）凡北野齋場雜舍事訖壞却は第十一條に載せる在京齋場を壞却するなり事訖と有は午日宴會の儀畢り未日賜祿の事訖て後に物爲るなる可し（始に造たる由を以て悠紀主基兩國司以下役夫等の功なる事云も更なり大嘗宮をも令二兩國民壞却一と有る式文に勘合す可し）齋部の解齋の事は式に凡大嘗祭畢差二禰宜卜部一一人一遣二兩齋國一祭二御膳神八座一即爲二解齋一明日燒二却齋

場一其供神物者以二當國物一充レ之と有り大嘗祭畢云々を儀式に十二月上旬差二禰宜卜部一遣二兩齋國一と有り先に拔穗使の時は稻實卜部主と成て仕奉りし故に今度の解齋は禰宜卜部を長と爲て仕奉ら令給ふなる可し（右の禰宜卜部二人と有は兩國へ差遣はさるゝ意味にて其一國に就て云時は各一人宛なるなり第六條を見て知べし）祭二御膳神八座一即爲二解齋一は儀式に祭二御膳八神一訖召二集物部人等一解齋解除と有り御膳神八座に第六條に引る式に於齋院祭八座（御歳神高御魂神庭高日神大御食神大宮女神事代主神阿須波神波比伎神）其幣座別絹四尺五色薄絁各一尺倭文一尺木綿一兩絲一絢綿一屯布一段鍬一口稻一束米酒各四升鰒堅魚海藻各二斤腊鹽各二升並用二國物一と見えたる如此く爲て祓祭るなる事第十條に引る式の細書に餘祭不レ顯二幣物一色數者皆准レ之と有にて知べきなり召二集物部人等一解齋は京に上りて仕奉れりし物部人等の事竟て禰宜卜部と共に其國に歸着たるが共に其御祭に仕奉り然て解齋の事を爲し始て齋服を解て常服に復るなり凡京の解齋は午日に有て十一月晦日に散齋も事竟たりしかども禰宜卜部及物部人等は此祭仕奉らざる限は齋を弛へからざるが故に今日に至て常に復るなり解除は第六條に引る式に八月上旬申レ官差二宮主一人卜部三人一發二遣兩國一云々到レ國各於二齋郡一大祓と有は其齋郡に卜食るに依て行へるにて此度のは其ならず儀式九月條に是月拔穗使在レ國率二國郡司物部人擔夫三百人一而解除と有る如く供神物等其格に被行るなる可し（然るは京に出立むと爲て此解除を行へれば歸着ても其同じ狀に行ふ可き筈なればなり物部人等とは第六條に引る儀式に卜二定物部人十五人一と有て在京齋場にて仕奉れりし造酒兒御酒波以下の人々を云なり）明日燒二却齋場一は前日に其御祭仕奉りて解齋を爲し解除を爲て神齋の事訖たる故に燒却ふなり其供神物者以二當國物一充レ之は儀式に解齋解除の下の細書に祭祀並供神用度一同レ初副二兼用物一と有が如し（但式には右の如く解齋の事耳有て解除の事を記されざるは常の定り有る故に省るならむ）

大祓及從鎮の事は式に凡晦日在京諸司集被准二二季儀一凡大殿同新安藝木綿十六斤筥二合米四升酒二升甕一口小坏二口机一脚又大嘗御竈祭放殿鎮等之例與二尋常新嘗會一同と見えたり右の在京諸司集祓を准二二季儀一と有は六月十二月兩度の大祓に同じと也儀式にも晦日於二朱雀門一大祓如二二季儀一と有り是亦同式に十月下旬天皇幸二卜食川一被禊晚日於二朱雀門前一大祓其儀同二二季一と有る結にて一月の散齋を此より弛給ふ爲也と知べし文德天皇實錄に仁壽元年十一月

丁酉晦大ニ被朱雀門前ニ爲ニ之解齋ニ清和天皇實錄に貞觀元年十一月卅日辛巳大祓於ニ朱雀門前ニ大嘗會解齋也陽成天皇實錄に元慶元年十一月廿九日丙寅晦大ヨ祓於ニ朱雀門前ニ大嘗祭禊解齋也又光孝天皇實錄に元慶八年の度に見えざるは漏されし也けり十一月朔日より晦日に至る間凡一月散齋なるを以て其前と後と二度に祓を被行るなるが其齋重き故に二季禊に准へ行はせさせ給ふ也倘並二條見る可し大殿祭は儀式に載されず四時祭式の例を稽るに神今食及新嘗祭の明日平旦に被行る由なるに例して思ふに此も辰日平旦に被行る可き事也第三十四條に引る式に辰日卯四點神祇官進レ例祭ニ仁壽殿ニと有れば右の幣物は其新なる可し但其下に載せる儀式に其新を擧たると此なると其數の同じからずして彼は常の大殿祭なるに同じきを此は其員數に不同有は此時のに限りたる幣物の御定などの出來りし者なる可し又大嘗御竈祭炊殿鎭等之例與ニ尋常新嘗會ニ同と有る御竈祭は四時祭式神今食條に忌火庭火祭中宮准此五色帛各四尺絁二疋倭文四尺木綿麻各二斤絲二絇綿二屯布二端庸布二段鍬四口米酒鹽各二斗鰒堅魚腊海藻各二斤食薦二枚坏八口匏二柄槲十把右大殿祭畢宮主於ニ内膳司ニ行レ事と有る是なるが右の如く此も辰日平旦に大殿祭に次て被行る事也同式新嘗祭條に忌火庭火等祭祈並准ニ神今食ニと有に依て此に引出たる也偕此祭仕奉る事は

十一月朔日より大嘗の散齋なるが故に今日より清き火を鑽改させ給ひ其改りたる清火にて仕奉る御膳を聞し食す其を供ニ忌火御飯ニと云りたり此大嘗の月に限らず毎年六月十一月十二月の朔日に必忌火御飯を供る事は其月に格別の御神事を行はせ給ふが爲なり內膳司より奉る御膳を大床子の御座にて聞食す由江次第に見えたり備忌火庭火と申すは御竈神を稱奉る御名也日本紀略に天德四年十一月十九日今夜坐ニ內膳司ニ忌火庭火等之御神奉遷冷泉院內膳云々平野謂釜二口也庭火謂鑄一口也云々と見え中右記に內膳司御竈神三所也一所平野件炎御祭奉仕之神也一所庭火是尋常御飯奉仕之神也一所忌火是則十一月新嘗六月神今食祭奉仕之神也と有を合せて考るに紀略に見えたる平野の釜二口の中一口は忌火也増鏡四に內膳屋燒て神代より傳はれる御竈も燒損はれけるをぞ淺ましき事には申侍りし彼竈昔は三有ける一をば平野一をば忌火一をば庭火と申ける云々神祇官に尋られ古き事共勘へらる平野と云けるを陰陽寮に居て炎祭と云事に用ひけれど中頃より彼祭は絶ぬ忌火と云にては六月十二月の御膳をば調じけり庭火にては常の

御膳をば仕奉れりと云々と見えたり神階は文德天皇實錄に天安元年四月內膳司忌火庭火神並授二從五位下一清和天皇實錄に貞觀元年正月內膳司從五位下忌火庭火神並授二從五位上一と見ゆ備右の御竈神三所の中に忌火庭火神には神階をも授られ又神今食新嘗大嘗等の祭に就ても其祭有に平野一所には其事無きは其本躰は彼平野社に令坐奉る久度神と聞ゆる御靈形と成れるが故に其御模造をば司には被留ながら却て司にては祭る事無くして陰陽寮にて癸日に被祭る耳なるが故に自然に輕き方には成ぬるなる可事平野祭詞講義に委く註せるが如し 供忌火御飯ニ事は建武年中行事に六月朔日忌火御飯參る云々今日より八日迄御贖物參る云々今日より醴酒參る云々と見え公事根源供忌火御飯ニ條にも內膳司より奉れるは大床子の御膳にて供するなり景行天皇御時より始まる忌火とは火を忌む義なり神事などの時は不淨の火を打易る事にや是は月次神今食の御神事など今日より齋始まるなる可し」と有り此景行天皇御時有より始まるとは高橋氏文に安房大神乎御食都神止坐奉天云々令三大伴部二天此乎忌火止爲天伊波比由庭止爲天供ニ御食一云云神齋(カムイマケ)大嘗等祭仕奉始支と有を云なり徃古は神と皇との御中間の甚近く視呪(シタ)しく大御世々けれは神事にも殊なる物忌とては物忌始はざりけむ其漸々に神事を公事と別れけるからに如此く成れるなれば如何にも其御代にて始まりつらむ 炊殿鎮は四時祭式新嘗祭條に忌火炊殿祭五色薄絁各四尺倭文二尺木綿五兩麻一斤五兩鍬四口米酒各四升鰒二斤堅魚海藻雜海菜各四斤鹽二升瓶四口坏四口食薦一枚庸布二段右新嘗祭時先新造二炊殿一依レ件鎭祭宮主行レ事其舊殿者壞却給二宮主一と有る炊殿は內膳司より供る忌火御飯を炊く所にて大炊寮より仕奉る屋也宮主秘事口傳抄に大炊寮申二新嘗御稻田一本宮公文史生內膳司相二寮之一書二進卜串一と有を以寮司共に同じく相並びて供奉る事を知べき者なり備其忌火炊殿神は文德天皇實錄に天安元年四月大炊寮大八島竈神授二從五位下一と見え清和天皇實錄に貞觀元年正月大炊寮從五位下大八島竈神八前齋火武主比神授二從五位上一と有る此二神を合せて炊殿神と爲て大炊寮に令坐奉り常に齋奉らせ給ひ來る此大嘗に就て更に鎭奉らせ給へるにぞ有ける 右の齋火武主比神の上に無位と記されざるに大八島竈神と共に先に已に從五位下を授奉らせ給へりけむなを天安の御紀に漏されたるか又は其より後に有し御紀に被載さるか何れにまれ其前に已に從五位下なりし事云も更なり備竈に御竈を炊く事なる事推古天皇の御世に名を豐御食炊屋天皇と申奉るにて可知る姓氏錄に多米宿禰云々成務天皇御世仕二奉大炊寮一御飯香美特賜二姓名一とも多米連云々當國天皇御世仕[illegible]一賜二多米連一とも見えたる如く此炊寮は御食を炊き仕奉る[illegible]事なる故に竈神と忌火神な其神と崇ひ奉るなり

中臣壽詞講義下卷

天保十五年二月十一日於淡路國　鈴木重胤著
出羽國淳代村井政直宅撰　出羽國　大瀧光憲
弘化二年三月六日光胤校　同國　秋野重義　閲

○中臣壽詞　嘉永五年十月二十二日訂正淨書

文には天神乃壽詞とも又略きては唯に壽詞と耳も云り此を中臣壽詞と云て其題名のごとくなりて人も然思へるは高千穗の皇大宮に初國所知食し皇御孫命の大嘗の大御政を行はせ給時に高天原より大御供仕奉りて天降給し中臣の上祖天兒屋命より繼々相傳へて天神乃壽詞を稱申せりしかば其中臣の氏人の奏す壽詞と云ふ意味なり（如此く後に中臣壽詞と云ふ名と成れるは大祓詞を後世に至ては中臣祓と云て其名と心得るが如し然れば正しくは天神壽詞と云ぞ受張たる名なりける）偖此を天神乃壽詞としも云事は素より皇祖天神の大御命を受傳へ奏す由なる事云も更なるが此は同じ神語の中にても皇御孫命の天津日繼の萬御座に即せさせ給ふ初より天地と日月と共に照し明らし御坐て齋庭の瑞穗を聞食む事に皇神の御中と皇御孫命の御中と執持て茂桙の如く本末傾けず中在（ナカラ）ふりて中臣の仕奉る事を言壽ぎ申述るが故に殊に壽詞とは云るにて神祇令なる中臣奏二天神之壽詞一の義解に謂下以二神代之古事一爲中萬壽之寶詞上也と有る是なり（猶壽詞と云名義は出雲神賀詞講義に委く辨へたれば就て見べきなり姓氏錄丹比宿禰條に瑞齒別命誕二生淡路宮一之時淡路瑞井水奉レ灌二御湯一于時虎杖花飛入二御湯瓮中一色鳴宿禰稱二天神壽詞一奉レ號曰二多治比瑞齒別命一と見えたる天神壽詞は今傳はらねば如何に在けむ知られねど其此は中臣壽詞の如く上古より定りたる一の詞の有には非ずて其御子の誕生し事を神代の古事を以て言壽ぎ奉れるを以て天神壽詞とは云るにて別也是耳には非ず神に申す祝詞をも唯に壽詞（ヨゴト）と云ふ然るは其詞必神をも君をも壽奉るなればなり賀茂祭儀に齋王先出二下社一就二社前左殿座一其內藏寮幣到二社中門一史生二人相二代舍人一棒持入レ社使就レ座壽詞了後付二禰宜祝一退出と有る其壽詞即祝詞を指て云るなり）若て此詞の天神壽詞なるに就ては又此詞の聯きて文を成せる其本根を探索め何神の作整たりと云ふ其事を明らめ知ならでは何に依て天神壽詞なると云ふ其意辨ふ可からざれば今一亘り先說ふ可し此天神壽詞の較略凡て三條なり一には天津日繼御事依しの始を云ひ二には天津御食を齋庭に聞食す事を云ひ三には天津水を授け依し給へる本緣を云て其終に其天津水を以て大御食に炊き大御酒に釀て大嘗の大御政に仕奉る事と成りて是即天地と日月と共に窮無く御隆坐々す高御座天津日繼の天下に照臨

なせる一事に收りて奇異に微妙なる名文なる所なり如此く一事を分別て三條と爲し其三條なるが又一事に歸て其文其義共に明亮なる事眞に古文の妙に奇しき所なれば等閑に看過す可ならずかし借其文を正史に就て比較るに皇御孫尊波高天原爾事始天豐葦原乃瑞穗國遠安國止平久介所知食天天津日嗣乃天都高御座仁御座天天津御食遠長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穗遠平久介安久介由庭仁所知食止事依志奉と有る天津日嗣の御事は神代紀に天照大神因勅二皇孫一曰葦原千五百秋之瑞穗國是吾子孫可レ王之地也宜二爾皇孫就而治一焉行矣寶祚之隆當レ與二天壤一無レ窮者矣已而且降之レと見え天都高御座の御事は同紀に是時天照大神手持二寶鏡一云々祝レ之曰吾兒視二此寶鏡一當レ猶レ視レ吾可二與同レ床共レ殿以爲二齋鏡一と有る床即其なり次に瑞穗の事は右の下に又勅曰以二吾高天原所レ御齋庭之穗一亦當レ御二於吾兒一と見えて正史に傳へたる所と異ならざる物から神隨なる古文の任にて存すると漢文の樣に被記て其訓に古言を傳へたるとの異有る耳なる事其條々に註せるが如し大殿祭詞に皇親神魯企神魯美之命以氐皇御孫之命乎天津高御座爾坐氐天津璽乃劔鏡乎捧持賜天言壽宣志久皇我宇都御子皇御孫之命此乃天津高御座爾坐氐天津日嗣乎萬千秋乃長秋爾大八洲豐葦原瑞穗之國乎安國止平氣久所知食止言寄奉と有も此詞と同意の文なる事[illegible]

義に已に議たりき上の文に引續きて天降坐之後爾中臣乃遠都祖天兒屋根命皇御孫尊乃御前爾奉仕氐云々と有は神代紀に天照大神復勅二天兒屋命太玉命一惟爾二神亦同侍二殿内一善爲二防護一と見え古事記にも天照大御神高木神之命以云々次思金神者取二持前事一爲レ政と見えたる大御命の趣に縁て高千穗宮に右の二神の相並びて仕奉り給ひしが各持分る事有を以て此には齋部神の預る事無が故に獨中臣神の名有也其は大殿祭には中臣氏の預る事ならぬが故に齋部氏の仕奉る事耳を詞に云るに同じ其餘凡ての事共悉く古事記神代紀に孕める神代の故事なる所由下に述たるが如し借此天神壽詞の事を御紀に被載たるは持統天皇四年春正月戊寅朔天皇即位の所に神祇伯中臣大島朝臣讀二天神壽詞一と有は神祇令に凡踐祚之日中臣奏二天神之壽詞一と有に合へり次に同五年十一月戊辰大嘗神祇伯中臣朝臣大島讀二天神壽詞一と有は神祇令に見えざるは古昔は即位と大嘗と二度有し事なれども續紀に文武天皇二年八月癸丑定二朝儀之禮一と見えたる其頃に至て續改たる者ながら神隨なる天神の御定はしも終古に天壤と與に易るまじき事なりけるにや其御令の

如くは非ずして大嘗會儀に神祇官中臣捧₂賢木₁入₂白ニ儀鸞門東戸₁就ㇾ版跪奏₂天神之壽詞₁（群臣共跪）忌部奉₂神璽之鏡劒₁と有て却て天皇即位儀の方には讀₂天神壽詞₁と云ふ文無は唐禮を擬ばれたる故に廢れ竟たる者なりけり（續紀に文武天皇大寶元年辛巳正月天皇御₂大極殿₁受ㇾ朝云々文物之儀於ㇾ是備矣と有は異しき時なり然る程よりや古儀は廢り初けむ）然れども其天神壽詞の上に就て大嘗のは此詞なる事今云ふ限に非るを即位の時なるは上に引る神祇令義解に謂₃以₂神代之古事₁為₂萬壽之寶詞₁也と有を思ふに皇御孫命の天降り坐むと為る其初に皇祖天神の詔命を以て上に引る紀記の文の如くなる趣を申述て天皇の萬壽（ナガミヨ）を寶詞（コトホギ）し奉れるにて大嘗の壽詞の始終の文と全く同じ狀なりつらむを即位の壽詞には水取の事及悠紀主基の事等は易て長御世の遠御世に天下所知食べき祝詞を申せりし事著明し其は午日儀の宣制と辰日儀の天神壽詞と其趣の一なるに例して思ふに天皇即位の詔書と其旨一なる可く思ゆるに就て續紀文武天皇受ㇾ禪即ㇾ位の詔詞の中に高天原爾事始而遠天皇御世々々中今至麻弖爾天皇御子之阿禮坐牟彌繼々爾大八島國所知次止天都神乃御子隨母天坐神之依之奉之隨聞看來此天津日嗣高御座之業止現御神止大八島國所知倭根子天皇命授賜比負賜布貴支高支廣支厚支大命乎受賜利恐坐弖此乃食國天下乎調賜比平賜比天下乃公民乎惠賜比撫賜牟止奈母隨神所思行佐久止詔と有る大御命は皇祖天神の大御命を奉て天下を所知食す御旨を宣揚給へるなれば如此の狀にぞ即位の壽詞は申せりしなる可し其は此詔書の中に大殿祭詞の中なる文を徵入て整られたりと所思しきも有る事已に鈴屋大人の解にも所見たるがごとなれば壽詞の文を立て作られしならむと云ふ予が說の証ざるをおもふ可し（續紀の詔書も此邊なる中に此第一詔な引出たるに此文甚々古くして中々に其頃の人の手に成る可き文ならねば決く上古の作なるを知る故なり此より次々の詔に漢籍意なる言の多く交れるを思ふに彼文物の儀未備ざりし程なりし幸と云ふ可くや）借此を天神壽詞と稱ふ名義は正しく右に註せるが如く天神の言壽ぎ宣給へりし天津奇護言にて謂ゆる天津祝詞の太祝詞なるを以なり大殿祭詞に高天原爾神留坐須皇親神魯企神魯美之命以氐皇御孫之命乎天津高御座爾坐氐天津璽乃劒鏡乎捧持賜天言壽（古語云₂許止保企₁言壽詞如₂今壽詞之詞₁）宣志久云々天津奇護言乎（古語云₂久須志伊波比許登₁）以氐言壽鎮白久と有が如く此天神壽詞も天神

の大御命以て言壽ぎ宣給へりし古事を申顯はして天皇の大御世の繼々々も神代の如くに言壽ぎ奉れるにて出雲國造神賀詞なども同じ例なり其は天神の大御使と爲て天穗比命天夷鳥命の大國主神に國を令避て天神の御許に齋(イハヒ)の返事を申給へりし古事を傳へて服前に今も有つる事の如く此を奏して其詞の終に天津次能神賀吉詞白賜久奏と有る如く天皇の御上にも大御世を條多に繼せさせ給ひ臣の世繼も若干に累ぬと雖も天津神代よりの次序を失はず神と臣との禮賀を捧げ神賀に賀奉れると同じ例にて此も彼も其究る所と云は皇神の御中と皇御孫命の御中を本末傾けず茂槍の中執持て御親睦厚く仕奉る業にて尊しとも高しとも言知ず奇異に可畏き天津御定なる者なり此等の事は神と臣との御上に係て此事を得ざる神代の大道なり或王臣の小賢しき圖情などに引競べて大義を應犯る可からず自意を立せる外國の有様なしの夢にも有見ざる神事なる皆とよ故此天神壽詞は高天原より天降坐て高千穗宮にて天下所知食し皇御孫命の天皇命と坐て天津高御座に即せ給へりし即大嘗の大御政を行はせさせ給へりし時とに事始て天兒屋根命ぞ天神の大御命の隨に言備に奏給ひけり其は此時に天忍雲根命を天の二上に奉上給へる事などは申す可くも非ればなり日子穗々手見命鵜葺草葺不合命の大御世に移りては同じ天忍雲根命の奏すにも其水取の古事は申加へて長御世の遠御世に申繼ぐ可き理なれども其も猶事略(コトソギ)たる事なりけむを神倭天皇の中洲宮に天下を定めさせ給へりし大御世の始に至て天種子命の奏せられしより其文定りて今の天神壽詞とは成れる事決し其は此詞に限らず大殿祭詞神賀詞などを始として高千穗朝廷より以降古く用ひ来れる祝詞等の文を日向國を大和國に換改たりと思しければ也天皇本紀神武天皇段に辛酉爲二元年一春正月庚辰朔都二橿原宮一肇即二皇位一云々天富命率二諸忌部一捧二天璽鏡劒一奉レ安二正殿一天種子命奏二天神壽詞一即神世古事類是也と有る此は大嘗なるには決無けれども天神壽詞を今始て有る事の如く記せるに譏を留む可なり古語拾遺に[illegible]同段には天富命率二諸齋部一捧二天璽鏡劒一奉レ安二正殿一并懸二瓊玉一陳二其幣物一殿祭祝詞次祭二宮門一と有て此一條な[illegible]の事に係たるに天璽[illegible]に離せる如く然る事には有れども天種子命の天神壽詞を奏せられし事を漏されたるは中臣氏の常に志なりしなれば[illegible]より出たる記事なり此者重寵の如く必有べき管の所なり　惜此天神壽詞の全文は中臣の家にこそ傳はりけらし所以に舊式以下の書共に其名目は有ながら祝

詞式などにも被載ざるは神代より以降彼氏の職掌と定りて佗より競望む事にて非れば其家の物の如く成れるが故なる可し台記別記第一卷に此文を載給へる即是上古より傳はれる天神壽詞なり鈴屋大人の玉勝間（初若葉卷）に此詞を舉て云く大嘗會の中臣壽詞と云文有り宇治左大臣賴長公の台記の康治元年の大嘗會の別記に被載たり此文古く美たき事多きを世に知れる人稀なる故に今寫し出せり所々文字の誤多かるを今は三四本を合せ見て互に善き惡しき中に善しと所思しきを撰びて記しつ然れど猶誤と見ゆる所々無に非ず猶善本を得て正す可なり」と見ゆ此恩賴に依て世人も此天神壽詞の神隨にして傳來る事を得知る事と成たるは世に比類無き功になむ有ける此に依てぞ其職に仕奉る中臣氏を除て餘の人も其事の狀をさへに心留る世と成れゝば事の然計も開けざりし古に生れたるよりは猶詮有る心ちす　宮主秘事口傳抄にも壽詞秘訓事と云ふ一條有れども其訓義に用有る文を耳抄錄（ヌキシルシ）せれば全文を見る可き者は台記別記より外に無し然れば此公の文才御在し乍も其家に耳傳（ノミツタ）へらむには後世に至て如何なる事の錯より亡失まじきにも非ずと深く遠く慮らせ給所有て此文を詳には載させ給者なる事決きを世俗此大臣を惡左府など聞ゆるこそ心苦しけれ此大臣の日記に如此記し傳給へらずは如何に成行らむも知べからぬを道の爲に甚々辱くなむ又其に次て鈴きは鈴屋大人の恩賴になむ有ける　若て此天神壽詞を奏す事唯に讀上る耳にては有るべからず宣命と同じ狀に言を永めて奏せりしなり歷朝詔詞解に宣命と云物は聞人の心に染て感く可く作れる物なれば其文詞の作り狀は更にも云はず此を讀舉る事をさへに古は甚重く嚴重に爲られて其法正しく種々習ども有し事なり三代實錄に貞觀九年正月十七日二品仲野親王薨親王者桓武天皇之第十二皇子也云々幼辨慧性寬裕云々親王能用ニ奏壽宣命之道一音儀詞語足レ爲ニ模範一當時王公罕レ識ニ其儀一勅ニ參議藤原朝臣基經大江朝臣音人等一就ニ親王六條亭一受ニ習其音詞曲折一焉故致仕左大臣藤原朝臣緒嗣授ニ此義於親王一云々襲持不レ失ニ師法一焉と見えたるにて甚容易からざりし程を知べし古き書籍目錄に宣命譜と云物出たり今は傳はらぬ書なれば如何狀なる物にか知らねど譜と名附たるを以思ふに其讀揚ざま音聲の巨細長短昂低曲折などを傳したる物にこそ有けめ」と有が如し此奏壽と云る即中臣壽詞及出雲神賀詞等の類を云ふ也　備宣命は朝廷より天下に大御命詔爲させ給ふ事を百官に宣聞せ給ふを云て壽詞は中臣氏に在れ出雲氏に在れ神世の古事を傳へて天皇の大御前に奏すと爲て同じく百官に聞ゆる事にし有れば上より被仰るも下より奏上

ろも共に集侍る百官の人々にも聞ゆる事なるか故に廣く人の耳に入て心に感けしむ可き本旨なるを以て音詞に曲折有る事云も更なり儀式午日儀に大臣喚下堪ニ宣命ニ参議以上一人上授ニ宣命文ニ云々皇太子立ニ座東ニ西面次親王以下共降之立宣命大夫下レ殿進就レ版宣制云々宣命大夫復ニ本座ニ親王以下亦復ニ本座ニ云々と見え同辰日儀に車駕幸ニ於豊樂院ニ云々皇太子入レ自ニ東北掖門ニ親王以下五位以上左右相分入云々就レ版六位以下相續參入立定神祇官中臣捧ニ賢木ニ云々就レ版跪奏ニ天神之壽詞ニ云々退出親王以下共起と有て其趣一なる事所知たり

現御神止大八島國所知食須大倭根子天皇我御前爾天神乃壽詞遠稱辭定奉止申須

現御神と稱奉る事は掛まくも甚も可畏き天皇命は天津神の御子と坐て顯國に現はれ坐る大御神と申奉る意ばへなり此事委しくは出雲國造神賀詞講義に註せるが如し○大倭根子天皇の例大を省きて倭根子天皇とも申り記傳廿一 廿七丁細註 に引れたる孝徳天皇御紀大化二年詔に明神御ニ宇日本ニ倭根子天皇詔云々天武天皇十二年御紀詔に明神御ニ大八洲ニ日本根子天皇勅命者云々文武天皇王御紀詔に現御神止大八島國所知倭根子天皇命云々など有が如し 右の孝徳天皇御紀なる日本は外國に對へて此大八洲の國號を建給へる其を被用たるなれば天武天皇御紀の御ニ大八洲ニと有に同じく總國の號の日本と畿内の大倭國とを分別たれたるなれば重複れるには非ず 大倭は畿内に大宮處を定させ給へるより以來冠しめ給へるにて高千穗宮の昔よりは唯に天皇命とのみこそ唱奉りつらめ何を以知ぞと云に神武天皇の御事を神代紀に所レ稱ニ狹野ニ者是年少時之號也後撥ニ平天下ニ奄ニ有八洲ニ故復加號ニ曰神日本磐余彥尊ニと有を以考るに狹野の狹は字の如く少なる意野は主の義にて御紀に治ニ此西偏ニと見えたる當時の御名なるを後に中洲に都定め給へる後にぞ神日本とは大御名に負せ給へる由也ける其より以降御世々々の天皇等の大御名に冠らせ給ふ例と成て懿德天皇を大倭日子鉏友命と申し孝安天皇を大倭帶日子國押人命と申し孝靈天皇を大倭根子日子賦斗邇命と申し孝元天皇を大倭根子日子國玖琉命と申し開化天皇を若倭根子日子大毘々命と申奉る耳ならず御子等の御名にも倭某と申すが多く神名にも大倭大國魂神など申せる皆其止住せ給ふ畿内の大倭にて大八洲の總號には非ず若て古の天皇等の御世數多に大倭國也しかば自然に定れる例の如く成て今の京と成ても猶本の任に容易く改させ給はざりしなり 大祓詞などにも大倭日高見之國と有て倭京なりし其任に被用ると同じ凡て神代よりの舊儀を重みし給ひければ如此く改て妨無き事をも易られざるを以て古傳に狹ひを交へざるを思べし 根子は孝靈天皇を大倭根子日子賦斗邇命孝元天皇を大倭根子日子國玖琉命開化天皇を若倭根子日子大毘々命淸寧

天皇を白髪大倭根子命元明天皇を日本根子豐國成姫天皇なども申し又光仁天皇より仁明天皇迄の御謚にも稱奉れり記傳に根子は尊稱にて景行天皇御子にも倭根子命と申す有り凡人にも記中に難波根子神功皇后御紀に山背根子など云名見えたり」と有か如し根子の根は其土着する國土を云にて島根國根などの如く子は其地に生坐るを以て然稱奉れるが何時と無く尊稱とは成れりける者なる可し（然れば記傳に天皇は大倭國所知看たる以て倭根子とは申奉る也」と有は然る事なれども猶云足はぬ心ちす倭根子とは所知看よりは其地に生出て住着せ給ふ方勝りて重く聞えたれば其方に心得べくや有む）○御前は大御前と訓べきなり然るは御字を中古の訓に意富牟と云る常多ければ其意以て記されたる事著く且天皇の御上には何事も大御と申す古格なればなり（又大前と申し御前とも申し前と申すなどの差異は祈年祭詞義に委しく云れば此には漏しつ唯此詞なるは御字を意富牟と訓る中古に大御の意を以て記されたる由を明さむとて也）○天神乃壽詞次に皇御孫尊波高天原爾事始天云々より瑞穗遠平久安久所知食と迄を云也其は下に云々天都御膳乃長御膳乃遠御膳止汁仁毛實仁毛赤丹乃穗仁毛所聞食豆豐明爾明御坐止天都神乃壽詞遠稱辭定奉にて結べればなり此は高天原にて天神の事始給へる齋ひの賀事を此にて奏聞ゆる由なる也天皇本紀天孫本紀等に神武天皇元年云々奏二天神壽詞一即神世古事類是也と有に據て按ふに高千穗宮より以降天兒屋根命天忍雲根命の次々に被仕奉し故唯業のみ有て此詞は未定らざりけむを白檮原宮に至りて天種子命の此新道に仕奉らるゝ時にぞ全く此詞は整へりけむと思えたり文に右の二神の行事を述たるを以知べし（然れども此水取の御事有し久代より此ばへの詞など申されけむ事云も更なり今は此詞の定れる上に就て云のみ其委しき事實は此書首に云りき）○稱辭定奉亘久止申須は稱辭は此天神乃壽詞なる事有文にて明かなり定奉とは彼皇御孫命の御天降の時に事依し奉らせ給ふ大御詔を以て此儀を始て襲りて申し勅れる時の詞なるを其任に被用たるなり（春日祭詞に大神等能乞賜比能任仁稱云々宮柱廣知立云々定奉氏とも平野祭詞に皇神乃辭竟奉流皇御孫命仁宮柱定奉氏とも久度古開祭詞に皇大御神乃乞志給乃任爾云々天能御蔭日能御蔭登定奉氏と有などは神の宮處の事には有れども古の例共は何れも神の御諭に（ツケ）て仕奉るに耳定奉氏とは云るり然れば天神の御授け給ふ大御詔を奉（ツケタマハ）りて此詞を仕奉れるが故に定奉亘久止申須とは云るになむ有ける）

高天原仁神留坐須皇親神漏岐神漏美乃命遠持天八百萬乃神等遠集倍賜天皇孫尊波高天原仁事始天豐葦原乃瑞穗乃國遠安國止平久所知食天天都日嗣乃天都高御座仁御坐天天都御膳遠長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穗遠平久安久由庭仁所知食止事依志奉亘

天降坐之後仁（アマクダリマシヽノチニ）

高天原爾神留坐須云々は大祓詞講義に註せり（又青年祭第二詞の下にも云りき）○皇親神漏岐神漏美乃命遠持天の遠の辭は佗に例無しと雖も御命令を以てと云ふ意なれば更に難無し若くは康治の御世などには古書に命以氐と記るにも遠の辭を訓附たるらむ故に時の唱へに循ひて其辭を被添たるにも有べし（近世の人の大祓詞を讀むに皆遠の辭を添て云ふ格と成れるを以て當昔の状を思ふ可くなむ）○八百萬乃神等遠集侍賜天は佗の例大祓詞及遷却祟神詞に神集集賜比神議議賜比と有れば此は脱たるが如くなれども下に神議の事に關係る文無が故に略ける者なり（祈年祭詞に皇睦神漏伎命[illegible]企神漏美之命以氐皇御孫之[illegible]議の事に用ひきは八百萬神[illegible]可し）○皇御孫尊波は本に御字無きは神代紀に天孫皇孫と記せ給へるを文法に據られたるにやと所思ゆれども下に皇御孫尊乃御前に云々皇御孫尊乃御膳都水波云々とも有所に出たれば決めて落字なる事著明ければ今補ひつ（尊字は御紀に至貴曰尊自餘曰命並訓美許等と有に依て文は古けれど其文法に記さるゝ[illegible]親王奉入時詞等に皇御孫之命[illegible]に皇御孫命なりしど種々に在て尊字を書るにも日本紀の御意有て後は古に命字なりしも尊字に被改せり）○高天原仁事始天は次に瑞穗遠平久介安久介由庭仁所知食止事依志奉志天降坐云々と有る事依の言に照應せる文なり（遷却祟神詞に高天原爾事始氐皇御孫之命止[illegible]賜比奉志有は高天原に神留坐す神漏岐神漏美の命以て事始給ひし法に因循ひて皇御孫命の稱辭竟奉らせ給ふ義にて此とは少の異なるを此は御天降の事に係て遷却祟神詞に高天之原爾神留坐氐事始給志神漏岐神漏美乃命以氐云々と有る趣に同じ（委しくは其詞共講義に注せるを見合せて悟るべき者なり[illegible]天中今[illegible]と多く其外にも高天原[illegible]云々と云る語甚多し）○豊葦原乃瑞穗乃國遠安國止平久介所知食天は此國土を所知食す御事はしも此に天降り坐てよりの事には非ず大殿祭詞に皇[illegible]神漏[illegible]之命以氐皇御孫之命乎天津高御座爾坐氐云々[illegible]久皇我宇都御子皇御孫之命此乃天津高御座爾坐氐云々と有る如く高天原に事始て天津日嗣所知食す天皇の大御位に即奉り給へる御事を明せる文也故安國止平久介所知食天と云て佗の例の如く所知食止事依志奉氐とは云はざるなり（若て此の所を下に千秋乃五百秋仁瑞穗遠平介久安介久由庭仁所知食止云々と云たり此にては[illegible]所知食す事に云ひ下には其國土に成べき[illegible]を所知[illegible]を云て[illegible]二途に別ち述て其旨一に歸るは古文の[illegible]なるなり[illegible]）

の詞共の說は祝詞講義に註せれば再此に擧ず ○天津日嗣乃天都高御座仁御坐天大殿祭詞には天都高御座爾坐氐天津日嗣乎萬千秋乃長秋爾云々と有り其講義に註せるが如く天都日嗣とは天津神の日々に給依し給ふ御貢を云て其物實は次に天都御膳と云る其にて瑞穗を云事上より云下せる文の脉を以て曉る可き者なりかし此二の解は已に大殿祭詞講義に云れば今盡す限に非るなり ○天都御膳遠云々とは天津神の事依し奉給ふ瑞穗を以て仕奉る御膳なるが故に遠辭を用ひられたり新年御縣神詞に此六御縣爾生出甘菜辛菜乎云々長御膳能遠御膳登云々と有る文格と同じきなり同じ事ながらも下に大倭根子天皇我天都御膳乃長御膳乃遠御膳止云々又大嘗祭詞に天都御食乃長御食乃遠御食登皇御孫命乃大嘗聞食牟爲故爾と有は何を隔てゝ天都御食乃大嘗聞食牟爲故爾と連聯けるにて同じ詞ながらに其用意等しからざるなり然れば天都御膳遠と瑞穗遠と遠辭重複れりと雖も少も妨げ無き者なり玉勝間に天都御膳遠の遠字は必乃なる可し遠にても聞ゆるが如くなれども然(サテ)は次に瑞穗遠と有る遠と重複れり」と云れたれども右の大嘗祭詞に依て思ひ誤られたりと思ゆれば難依し ○千秋乃五百秋は次に由庭仁所知食と有へ係りて下なる皇神等母千秋五百秋乃相嘗仁相宇豆乃比奉と有に亘る言なり大嘗祭詞にも千秋五百秋爾平久安久聞食氐豊明爾明坐牟とも有て其所に註せるが如し又大殿祭詞にも天津日嗣乎萬千秋乃長秋爾大八洲豊葦原瑞穗之國乎安國止平氣久所知食云々と有も此と同じ意味なる事下に云るが如し ○瑞穗遠平久介安久介は上に豊葦原乃瑞穗乃國遠安國止平久介所知食天と有る語體にて瑞穗を殖て人民を育養ふ國土を安けく平けく所知食し有たせ給ふ事に云ひ此は用にて其所知食す御國に生出たる瑞穗の天都御膳を安けく平けく所知食す御事を云別たれたる者なりけり上より長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穗遠云々と云續けたるが大御國の總號を古事記に豊葦原之千秋長五百秋之水穗國と見え神代紀に葦原之千五百秋之瑞穗國とも天神の稱へ宜へるに契合るを思ふ可し右に引る大殿祭詞なども考ふ可く又講義に註る說をと見合す可し ○由庭仁は齋場にて悠紀主基の大御政を行はせさせ給ふ大嘗宮を云なり下に所聞食由庭乃瑞穗乎云々大嘗會乃齋場仁持齋披利參來氐云々と有を以察らむ可し又南齋郡の稻實殿及在京の齋院をも共に齋場と云り發題第六條に載る式文に八月上旬於ニ齋郡一大祓訖卜ニ定田及齋場雜色人等一とも鎭ニ齋場一とも有は國郡司以下物部の人等の事を行ふ謂ゆる齋郡の齋院にて主とは稻殿を云也又第十一條に擧たる式に凡在京齋場者

預分設二兩處一悠紀在レ左主基在レ右云々其齋場者分爲二内外兩院一云々と有て在京の齋院をも共に齋場とは云也けり（玉勝間山吹巻に齋場は別に北野に於て其地を卜定めて構造らるゝ事にて大嘗宮とは別なり九月下旬悠紀主基二國より持参れる諸の物も人も先齋場に詣りて其處にて種々の事有て十一月祭の當日に至て大嘗宮に詣り奉る其行列など儀式に委しく見えたり又初二國の齋郡にも齋場を構へて物爲る事なれば云々と云ひたるは眞の齋場は大嘗宮を本として齋郡のをも在京のをも其齋院を齋場と云事を思ひ落されたる者なり猶下に云ふを見よ）抑由庭の起原はしも保食神の御身より種々の穀物の成出し始に天照大御神の甚喜ばして是物は顯見蒼生の食て活べき者ぞと詔給ひて其稻種を天狹田及長田に殖給へりしかは其秋の垂穎八握に莫々然て其快き實成れるを牧めて大嘗所聞食す時に新宮造り給へるなむ由庭には有ける（須佐之男命の御荒びの段の古事記に天照大御神之云々於下其聞二看大嘗一之殿上屎麻理散と見え神代紀に復見下天照大神當二新嘗一之時上とも及レ至下日神當二新嘗一之時上素戔嗚尊則於二新宮御席之下一云々とも見えたる聞看大嘗之殿とも新宮とも有は大嘗所聞食む料に新に設構らせ給へるなれば其即此に云由庭にて彼大嘗宮の起原なる者なりかし）神代紀御天降段に天照大神又勅曰以二吾高天原所一レ御齋庭之穗一亦當レ御二於吾兒一と見えたる齋庭は高天原にて天照大御神の毎年の新嘗を所聞食す齋場を云る也此詞に由庭仁所知食と有は其齋場に於て所知食せと仰給へるにて此に引る御紀の趣に異ならず（然れば毎世一度の大嘗祭は悠紀主基の大嘗宮にして被行れ毎年一度の新嘗祭は中和院の神嘉殿に於て被行るなど共に高天原の齋庭を傳へさせ給へる者なる事右の件々にて明らけし）○所知食止は下に如此依奉志任々仁所聞食由庭乃瑞穗遠云々汁毛實毛赤丹乃穗毛所聞食弖と有れば此も所聞食と云べき格の如く所思ゆるを猶熟考るに此は上に安國止平久介所知食天より相對へて全とは御國を所知食す御事を兼併せて云ふ所なるが故に所聞食とは云ず下なるは今此大嘗の大御政を執行ひ給ふ一方に耳云が故に所知食とは云ざりける者なり下なる天津水の所には所聞食止事依奉支と有を合せて心得べし（玉勝間に由庭仁所知食の知字は聞なる可しと云れたるは深くも考られず唯一通に輕く見られたる故なり）○事依志奉弖は上なる高天原仁事始弖の結なるが大嘗の大御政をも高天原に事始て皇御孫命の天都日嗣と由庭に所知食せと事依し奉給へる趣なり（若て此の聽(ヒゞキ)は下に如此依奉志任々仁所聞食由庭乃瑞穗云々と見えたる其下に云べし）○天降坐之後仁は此は次に皇御孫命より天都水を受賜はむに天に御使を奉らせ給ふ事を云ふ段なれば皇御孫命の御上に就て天降利と訓べし（大祓詞などに天降依左志奉依と有は皇御孫命に御命依して天降し坐しめ給ふ天神の御上より云なれば天降志と訓とは別なり）若て此は皇御孫命の高天原より天降り來著き給ひて筑紫の高千穗宮に初國所知食し大御世の初年に彼天神の天都日嗣の齋庭の瑞穗を令殖給ひ其大嘗の天都御膳を所聞食むと且々も物爲給ふ間なるを天降坐之後仁はと云るなり

之字（シノ）を諸本共に大字に記し誤れるを例に依て今小字に改む
中臣乃遠都祖天兒屋根命皇御孫尊乃御前仁奉仕弖天忍雲根神遠天乃二上仁奉上且神漏岐神漏美命乃前仁受給里申仁皇御孫尊乃御膳都水波宇都志國乃水仁天都水乎加弖奉止申世止事教給志仁依弖

中臣乃遠都祖と其氏の出自を殊更に如此く擧たるは下に與天地日月共照志明志御坐事仁本末不傾茂槍乃中執持弖奉仕留中臣云々と云む序なり神代紀に中臣連遠祖天兒屋命とも中臣連遠祖興臺産靈兒天兒屋命とも中臣遠祖天兒屋命とも見え又中臣神とも云ひ古事記にも其天兒屋命者（中臣連等之祖）と見えたり此事下に中臣と有る下に云り（又神武天皇御紀に天種子命是中臣氏之遠祖也と有は天兒屋命の孫天忍雲根命の子なるをも然云り垂仁天皇御紀にも中臣連遠祖大鹿島とも中臣連祖探湯主など云人名も見えたり）○天兒屋根命皇御孫尊乃御前仁奉仕弖は天兒屋根命はしも皇御孫尊の大御前に侍らひ給ふ事を云るなり古事記（天降段）に次思金神者取持前事爲政と見えたる此なり（思金神と此神と同神なりける由は平田翁の古史徵に委しく又祝詞講義春日祭詞及び所々に註せれば今此に云ず）神代紀にも其同じ事を天照大神復勅天兒屋命太玉命惟爾二神亦同侍殿内善爲防護と見えたり（然れば右の二神を此にも擧べきを然有ぬに此大嘗の御[illegible]二は天兒屋根命の事を並て行給ふが故也此時に當りて大嘗會は大嘗[illegible]祭を專として仕奉給へりける由縁など大嘗祭詞[illegible]に云るが如し）○天忍雲根神は神宮の古傳には天牟羅雲命と有れば同神にや有むと所思ゆれども然らず此二柱神を高天原に立奉り給へるなるが神宮と其傳の二に別れて別事の如く成れる也其事下に天忍雲根神天乃浮雲に乘且云々と有る所に云べし藤原系圖荒木田系圖等に天兒屋根命の御子と有は實に然る事なり白井宗因が神社啓蒙に引る平岡社古記に若宮一座天押雲命也と有は古き傳說と聞ゆ（右の平岡社は天兒屋根命の主と坐事は春日祭詞に有岡坐天之子八根命此實神と所見たれば其若宮には天忍雲根命の鎭り坐べき所由なれば正しき古傳なる事決し）名義忍雲は壓雲にて根は主の稱なるにて其は神名秘書に引る或書に天押雲命以天津詞太詔解除清淨而天八重雲乎出之道別々々天下坐と有る意を以て負給へる事此詞に天乃二上仁奉上且と有も雲路を押分る御勢ひ坐神なるを以て被任給へりと通はるを以て所知たり（天忍日命と申す神名の忍日も壓靈（オシヒ）にて皇御孫命の御前に立して武き裝束（ミヨソヒ）して天降り給へる御功に依れる名なるを思ふ可し）神名式に宮中神卅六座の中に主水司坐神一座小鳴雷神社大和國添上郡鳴雷神社其に此神を被祭るゝなり其は春日祭詞講義の卷首に委しく說るが如し（右の大和國なるは今春日若宮と申す是なり又神名式に伊勢國度會郡[illegible]神社と有は此神なる可し但久行事記六月十五日占定の時奉レ下レ[illegible]に安在久貢仁奈留伊加津千毛於

利萬志萬世と有は此天押雲命の御事と所思たり ○天乃二上尓奉上天云々の文は鈴屋大人說に此は天忍雲根神遣神漏岐神漏美命乃前仁受給波里申仁天乃二上仁奉上弖と語を次第て見れば能通ゆる也」と云はれたるにて甚明らけし倩思ふに天乃二上とは神漏岐神漏美二神の神留坐す高天原の山名には非るか其は御天降段の神代紀一書に日向襲之高千穗槵日二上峯天浮橋と見えて今現に二の峯なるは男女相俱ふ二の山を二上と云と聞えたり 正書には槵日二上天浮橋とも云り此二上を舊く布多賀美と訓る然る可し平田翁の布多能簑理と訓れたるは再登る山を以なる可けれども古實に協はず 其男女俱並べる山ならむと思ふ事は萬葉三卷に明神之貴山乃儕立乃見杲石山跡神代從人之言嗣國見爲筑羽乃山と詠る明神は男神女神二山の並べるを以なり其證は九卷に衣手常陸國二並筑波乃山乎云々男神毛許賜女神毛千羽日給而云々と見え猶短歌に男神と有も女神に對へて然詠るを神名式に常陸國筑波郡筑波山神社二座 一名神大一小 と有て今も男躰山女躰山と並び立し給へるは實に二上と云狀なり又十七卷越中國狀に二上山賦と有て多麻久之氣布多我美山者云々可牟加良夜會許婆多敷刀伎云々須賣加未能須蘇未乃夜麻能と神をしき狀に詠るを式には漏たれども文德天皇實錄

に越中國二上神加二從三位一と有て今猶二上山とて二峯相並び對へる有り又式に大和國葛下郡葛木二上神社二座 大月次新嘗 と有は今も二上嶽とも・子山とも云て山二つ相並べる地に立し給へり 又神名式に下野國河内郡二荒山神社名神大と有る其山を日光と云に二荒の字音を以て借字を用ひたるにこそ有けれ日光と云字には義無く二荒と云言に義有りて男躰山女躰山の二山相並べるを以て二在(フタラ)とは云なり此は二山の例なるには非ざれども事の同じきに依て云ふ 然れば天乃二上とは神漏岐命神漏美命と稱奉れる謂ゆる高皇產靈神神皇產靈神と申す男女二神等の神留坐す二並びの男山女山を合せ云名なる事論ひ無く思ゆるはや 其を山名と思定めて猶考るに遠皇祖神詞に天之高市と有も其なる可く然して復天安河は其天二上山の間より流落る河には非じかと思けれども想像奉なり 奉上天は天兒屋根命の事教へて皇御孫尊の水取の大御使に立奉り上る山なり○神漏岐神漏美命乃前仁受給波里申仁は故御祖命御許仁參上此由申天來止詔と有りて實に皇御孫命の御天降の事は天照大御神の大御心にて神漏岐神漏美二柱御祖神の御命以て物爲給へれば此水取の由はた必其大前に受賜り申べきにて此は皇御孫尊の御膳都水に仕奉らむ天都水を受賜はら令になり新年祭月次祭等詞の終に辭別忌部能云々仕奉禮留幣帛乎神主祝部等受賜氐事不過捧持奉登宣と有る如く其物を受賜り請るに其行事をも合せて受賜はる

事にて其行事とは次文に出たる事を云なり下に引る大同本記にも天忍石乃長井乃水を賜ひ又天都祝詞を傳給へる此二を合せて即受賜天持參下天獻時仁云々と有も此の受給の例なり唯に天都水を賜はる耳ならず今俗にも上より仰の事を聞くを奉(ウケタマ)はると云ひ人より云事を領掌する事を承知すると云も皆事に就て云るなり續紀第一詔に大命乎受賜利恐坐互と有など是なり此余猶多し但右の事不過を大嘗祭詞には事不落と有り　○皇御孫尊乃御膳都水波は皇御孫尊の大御膳に仕奉りて所聞食む水を云なり神宮雜例集に擧たる大同本紀に皇太神宮皇孫之命天降坐時爾天牟羅雲命御前立天天降仕奉時爾皇御孫命天牟羅雲命乎召詔久食國乃水波未熟荒水爾在利介云々と見え二十一社記に水天孫降給時諸神中葦原中國者潮也可レ何仍供奉神中天叢雲命云神天上還皇祖申給云々と見えたり此二を合せて思ふに古昔は潮水の任にて荒々熟からざりければ天忍雲根神と天牟羅雲命と二柱を相並べて御膳都水の事を申しに天上には立奉り上ざせ給へる者なり猶大同本紀の傳の文は祝詞講義伊勢太神宮新年祭詞の下に委しく云れは就て見べし右の二十一社記は平田翁の古史徵に引れたるを取れゝば通本とは異也○宇都志國乃水爾は顯國の水の上に天都水を乞て加ふるを云なり大同本記に食國乃水於爾云々と云る是なり但宇都志國とは廣く此國土を云事なるを食國と云時は御膳に仕奉る事に云て常に食國と書て乎須久邇と云とは異なるなり萬葉の歌共に御食津國と詠み又御食國志麻など詠る是なり十三に八隅知之和期大皇高照日之皇子之聞食都國十八に御食國波左可延牟物能等云々など續けたるにては愈明らけし偖此文の水仁の仁字を本に丁と誤れるを玉勝間にも丁字は尸とも加とも有り皆誤なり尸仁なる可しと云れたる説に依て今改めつ古史徵に引れたるには水仁と有り平田翁説に師の玉勝間に引れたると外に二本を合て字を正したるなりと有れば然る善本も有けるなる可し偖宇都志國の宇都志は記傳六二十四丁宇都志伎阿志伎青人草の傳に書紀に顯見蒼生此云宇都志伎阿烏比等久佐ニと有て私記に顯見者見在之義也と有り斯れは宇都は現志伎は嬉悲の類の志伎にて辭なり神武天皇御紀に顯齋此云于圖詩怡破毘ニ續紀十卷の宣命に于都斯久母など有り○今云神名にも右の見在の義なるは宇都志日金拆神又宇都志國玉神など有り皆宇都志は顯の意なるなり　偖人草の事を如此詔ふは書紀大已貴命の御言に吾所レ知顯露事者皇孫當レ治吾將ニ退治ニ幽事ニ云々如此く幽神事に對て顯露事と云るが如く目に見えず顯ならぬ神に對て顯れたる世人と云事ぞ此顯事を上文には神事と書る同じ事なり古事記中卷末に神習青人草習と云事有る此も世人を神に對て云るなり○今云出雲國造神賀詞に現事顯事の現は宇都志と訓字にて此に同じきなり雄略天皇の葛木神の形を顯して見え奉給ふを宇都志意美と詔へる又萬葉に空蟬借字なり宇都曾臣など有も皆顯しき身と云事なり　又現心夢現などの現皆同言なり○今云傳り十二宇都志意美の下に云く現大身にて大は御と云むが如し書紀に此時此大神の御答に顯人之神と申給へると同じ事なり

大凡神は形は隱坐て顯には見え賜はざるを是は御身の顯しく見え賜へるを申給へるなり續紀第四詔に和銅の出たる事を天坐神地坐神乃相于豆奈比奉福波倍奉事爾依而顯久出多留寶云々第六詔に神龜の出たる事を此大瑞物者云々爾依而顯久出多留瑞云々など多く神の方に幽れたる物の顯るゝを予都斯久とは云るなり と有にて宇都志の義明らけし偖其言義を按ふに宇都志は摸（ウツシ）には非しか然るは神代紀に天先成而地後定と有る如く此國土の初素より天に次て成り古事記に見_立天之御柱_と有は神代紀に謂國中之柱なれども天之御柱と云物の有る其に見立たる由なる事は云も更なり人體を顯身と云も神祇の隱身に因准ひ摸せるが故に宇都志伎青人草とは云るなり皇御孫命の御天降の後は更なり其より前に天神諸の御命以て伊邪那岐伊邪那美二柱神の天降り來坐て國土萬物を生成し給へるも天の狀を移して物爲給へりし事右の傳説にて明らけし然れば宇都志國は天國を摸（ウツ）せる謂より本著たる名なる事知べし古語拾遺御天降段に宜下太玉命率ニ諸部神一供ニ奉其職一如ニ天上儀上仍令ニ諸神亦與陪從上と有るを以凡ての物も事も天上の儀に擬へる此國の狀なる事を思ふ可し紀傳四に萬の物に天之某と天てふ言を上に添て呼事は皇御孫命の天降坐し時大御身に服御物及御從の神等の取々に持し物など凡て天より降來し物多し其時に此國の物と別ちて天物をば天之某と呼しなり偖後には此國にて作る物も彼天物の制樣に擬へるをば然云けらし」と有は實に然る事なり然れば彼神武天皇御紀に朕親作ニ顯齋一とそムウツシイハヒ」と有は高天原に事始給へりし皇祖天神の定給へる御祭の狀を摸し齋はせ給らむとなり顯身の天皇に大坐々て神を齋はせ給ふに殊更に顯とは云べからぬを然詔へるは彼天上儀を摸させ給ふに非ずは何の事とか爲む

○天都水遠加豆奉牟止申世止は上に云る如く此國土の水は未熟からぬ荒水にし有ければ天國の水を受給はり加て御膳都水に奉らむと申せとなるが後代に至迄も大嘗の大御政の度毎に天都水を乞求めて用ふる事有が故なり然れども後には其事止て御井を卜定る事と成たるは古の御手振には非るなり此に是を立に世止た違里に誤れるを玉鉾百首に天都水遠加立の立字には甚た誤れる也由遠里には心得すと必中世止と有べき所なり」と有に隨て改む古史徴なるも然なり 天都水とは大同本記に天忍石乃長井乃水乎取八盛天獻給久云々遺水波天忍水止云天食國乃水於灌加天獻初と見えたる是にて天之安河の天之眞名井なる可き事長井と云にて明らけし其は記傳七五十丁に天之眞名井書紀一書に天渟名井とも有を合せて思ふに眞渟名井を約たる名にて眞は美稱渟は凡て水の湛たる所を云ひ名は借字にて之なり然れば此井は即安河瀨の中にて井と云べき所を指云るにて別に尋常云ふ井有しには非ず凡て古は泉に在れ川に在れ用る水に汲處を井と云り」と有は然る事にて天忍石（オシハ）乃長井と云も右の安河を指る事決し天忍石とは壓石にて石に觸て水の清く澄を以云なり神代紀に去來之眞名井と有る去來は砂礫なるを思ふ可し偖此の天都水は天上の水と云事なり萬葉二卷に天水仰而待備と連續たる發語の天水は雨水を云るなれば此の例には非ず ○事教給志仁依豆は天兒屋根

命の皇御孫尊の大御命を受賜はりて天忍雲根神に事敎へて天乃二上に令參赴給ふ由なり然れども大同本紀には皇御孫命天牟羅雲命乎召詔久云々故御祖命御許爾參上御由申天來乎詔と有は天兒屋根命の事を略けるは其神の事敎給へる其即皇御孫尊の御事なるか猶此事は天忍雲根神と天牟羅雲命と共に天に上坐故に其本を擧て末を略る者なりし事下に云が如くなれども神宮に預らぬ方は略きて傳へたるに例して思ふ可き者なり

天忍雲根神天乃浮雲仁乘弖天乃二上仁坐神漏岐神漏美命乃前仁申波天乃玉櫛遠事依奉弖此玉櫛遠刺立弖自夕日至朝日照弖乃天都詔戸乃太詔乃言遠以弖告禮

天忍雲根神云々の事此には此神一柱のみ見え大同本記なる神宮の古傳には天牟羅雲命一柱のみ有て此彼共に別なる時なりし如くして傳の趣も何も凡て別事なりし狀には見ゆれども猶熟思ふに右の二柱神共に同時に天に昇給へるが其持分る所別なりし者なり其は神漏岐神漏美命より天乃玉櫛を依して水取の術を事依し授給へるは天忍雲根神なり天忍水を玉の瓮に入盛て授給ひ高千穗宮の御井を令崇居給へりしは天牟羅雲命に坐り大同本記に後仁毛悉任奉事勇止乎志詔天天牟羅雲命天二上命後小橋命止三名賜也と有を以曉る可し鈴屋大人も此意を得られざりしと見えて玉勝間に天忍雲根神云々の事伊勢の外宮の書共に天ノ村雲命ノ事として出せり同神にや有むと云れたるは考漏されしなり不用宮の古史の文には此詞を本文に立て神宮の記文たるを一傳云と擧られたるは其事なり著て瑞籬宮の大御代迄は皇大御神皇御孫命共に同殿に大坐々しかは天上の儀式の如くして在し故に其二神の裔たりし氏人を任て朝夕の大御膳の御水を令献給へる中に高千穗の御井は神代より止由氣大神に屬て既く丹波國の魚井原に移させ給へりし以前は皇太神皇御孫命の日々の大御饌に供奉りて常の事と成れゝば中臣壽詞には大嘗の年に當ては天忍雲根神の裔孫の次々水取の神術を物して悠紀主基の大御饌に仕奉る事耳を傳へ奏せりしなり所以に天牟羅雲命の故事は其氏人に耳傳はれりし者なる事凡々古く家々の氏文と云物の躰裁何れも其家の事耳を專と書て他家の事は其同じ時の事なるも漏せる例に傚ひて曉る可き者なりかし然るは上古に一種の神字有と雖も押並て云ふとにも非ず多くは口誦なりしかは然計り事を巨細に記憶ゆる事の難澁なりけむ故に必略かるゝ限りは略こりし故に如此く一事の二に分れ傳はりたるなる可し伊勢人の著せる或書に天村雲命と云るは天孫本紀に依て天香語山命の子にて尾張連の祖なれば僞れる也又水取の事は中臣壽詞を竊して新意を加たるなりなど云るは強て度會の家系を言貶さむと爲る姉心より出て甚々祥なし神名などにも同名などにも同名にて異神なるも有り異神にして同名なるも有り

凡ては古書の何れにも合て其即定說と云つなるを如何に私意を立ればとて餘りなる事なり又外宮の古書共に記せる事ならむからに其悉く新作の物ならず中には美たき古傳の也[illegible]書に適して實に存れるも少からぬをや　天村雲命は姓氏錄右京神別天神に額田部宿禰明日名門命三世孫天村雲命之後也と見え豐受大神宮禰宜補任次第及度會氏系圖等に天牟羅雲命云々天曾己多智命子天鬪柞命子天鈴柞命子天御雲命子也と有て其委しき說共は祝詞講義伊勢太神宮月次祭詞の下に註せれば就て見合す可なむ如此くなる上は此天村雲命は度會神主額田部等の上祖にて後見證連の出自なる天村雲命は別神なる事を察すべし但彼度會氏の系譜の類は後世に杜撰たる物なる故に甚々信み難き事多かり其心して見る可きなり　○天乃浮雲爾乘天は天浮橋にて天と地との間を神等の昇降り通ひ給ふ料なり皇御孫命の天降らせ給へりし初の間などには此國土にても此物に乘て往來ひ給ひけるにや神代紀御天降段に皇孫遊行之狀也者則自二槵日二上天浮橋一立二於浮渚在平處一云々と有は槵日二上峯なる天浮橋に乘して浮渚在り平處に御立して虛空より幸行せるなり一書の傳にも到二於日向襲之高千穗槵日二上峯天浮橋一而立二於浮渚在之平地一云々と見えたり正しの傳と同じ事なり　偖其天浮橋と云物は雲霧の類を云と聞えたり其は神代紀國生段に伊弉諾尊伊弉冊尊立二於天浮橋之上一と有を一書には二神立二于天霧之中一とも二神坐二于高天原一とも見えたれば實は其質無き物にて唯大虛の氣に乘て天降らせ給へる者なり又天照大御神を高天原に上せ奉らせ給ふ文に以二天柱一擧二於天上一也と有も右の天浮橋なる事風神祭詞講義に註せるが如し然れば天浮橋とは其用を爲す所に依て號け天霧とは其物を以云ひ高天原とは其空氣なる云を徵して傳たれば此三共に異なる傳には非ず然れば此に天乃浮雲と有るも右の天霧と云に同じきを以て其を天浮橋なりとは云なり常陸風土記に自レ天降來神名稱二普都大神一云々即乘二白雲一還昇二蒼天一と見え姓氏錄吉野連條に自レ天降來白雲別神と云神名有をも思ひ合す可き者なり

古くより雲と云ひ霞と云ひ霧と云る皆其居所に依てこそ名を別ちたれ其實は皆同物なるを思ふ可し然るに[illegible]とも大地に塞ては其氣を[illegible]るにて萬葉三に久方乃天之探女之石[illegible]と有も有に同じ又十九に天雲[illegible]志に云々と有れば天雲の上に鳥船を浮べたらむが如くにも聞ゆれとも熟思ふに假合天乃浮雲に乘たりとも[illegible]如くなりし[illegible]に然[illegible]なる可し[illegible]には[illegible]定められばたる事なれども[illegible]土に[illegible]有もこも[illegible]きの[illegible]上には奇しき事に[illegible]有[illegible]此[illegible]浮有二[illegible]云々伊[illegible]云々[illegible]と有も雲に[illegible]志久立を作給へるか仆れ伏て長く大なる石前と成れるなり速石里と云もくに[illegible]以て怪しみ[illegible]より[illegible]なるむには萬速ると成たる以て怪しみ[illegible]石里とは[illegible]じき理なるを思ふ可し然れば[illegible]益氣里有二石橋一傳云上古之時[illegible]天八十[illegible]と有る此も右の如くなる立ならにして石と化れるなり益氣と云地名の益氣は字の如く氣の益

り仲て天に連なり聯きて往來の橋と成て在し傳に因れる名なるなり ○天乃二上仁上坐弖神漏岐神漏美命乃前仁申波世高千穗宮より發遣して天乃二上に參詣りて御祖神の御前に奏すなり然るは皇御孫命の御天降の事はしも此詞の始に神漏岐神漏美乃命遠持天と有る如く悉くに此二柱神の御議らひなりしかばなり其は古事記御天降段の初に天照大御神之命以豐葦原之千秋長五百秋之水穗國者我御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命之所知國言因賜而天降也と見えて其より後の御事議には何れの時にも高御產巢日神亦名は高木神相並はし（神代紀第一ノ一書にも右の如く有は同じ傳なるを以なり）神代紀は正書一書共に悉く此御天降の事を高皇產靈尊の勅命以て神議り給へる趣に見えたるは常も云如く天照大御神の大御命なる事申すも更なるが凡ての事其の其間に在しは高皇產靈神神皇產靈神二柱神相並ばして事議り定給へる也其最近き證は出雲神賀詞に高天能神王高御魂神魂命能皇御孫命爾天下大八島國乎事避奉之時云々と有を受て是爾親神魯伎神魯美命宣久云々止仰賜志と見えたれば諦しく右の二柱神相並ばして事議り定給へる事祝詞講義（大殿祭條大祓詞條）に註せるか如し（凡て古書の例記傳三に云れたる如く此大御訓は如此く二柱坐を記中に其御事を記せるには二柱並出給へる處は無して或時は高御產巢日神或時は高木神御祖命と書て一柱出給へるは其片方を略かれし者にて實は二柱神等相並にして物食給へる事云も更なり）然ればは其所由に縁て皇御孫命の大御命以て天兒屋根命の事教へて天忍雲根神天牟羅雲命を大御使として天乃二上に坐す神漏岐神漏美命の御前に令申給へりし者なりけり大同本記の傳に即天牟羅雲命𫝆上天御祖御前爾皇御孫命乃申上給事乎子細申上時詔久雜爾奉牟政波行末レ下天在止命氏取政遣氏在利介云々と有る御祖命は謂ゆる神漏岐神漏美命に坐て右文の下に此水持下天皇太神乃御饌爾八盛皇御孫命乃御饌爾八盛云々と皇太神の御事を異に言ひ別たるを以て曉る可く其神漏岐神漏美命は高皇御魂神魂命に坐事を明らむ可くなむ有ける（其を右の大同本記と上代本紀御事業本業書に引るには御祖天御中主神天照皇太神[illegible]正哉吾勝勝速日[illegible]云々と見え御祖二柱傳記なるには御祖天照皇大神大御神天御中主[illegible]神魯伎神魯美乃命詔久などと有は外宮禰宜の輩などが思ふ旨有て私意を加へて改易たる者にて古傳に叶合ざれば云にも足ずなむ）○天乃玉櫛遠事依奉弖の櫛は借字にて天乃玉串なり太神宮式に著二木綿一賢木是名二太玉串一と有る是なり神代紀一書に又使下山雷者採二五百箇眞坂樹八十玉籤一野槌者採中五百箇野薦八十玉籤上と見え皇太神宮儀式帳山向物忌職掌條に太玉串並天八重榊云々高四尺枝別木綿懸レ之此太玉串並天八重佐加岐乃元由者天照坐太神乃高天原御坐時爾素盞嗚命乎依二

種々荒惡行事ニ天磐戸閉給時ニ八十萬神會ニ於天安河邊ニ計ニ其可レ禱之方ニ時ニ天香山ニ立テ握ニ眞坂樹ニテ上枝懸ニ八咫鏡ニ中枝懸ニ八尺瓊乃曲玉ニ下枝懸ニ天眞麻木綿テ種々祈申セ此令賢木懸ニ木綿ニ太玉串止號レ之以レ此天乃八重佐加岐弉禰宜乃捧持太玉串ニ大中臣隱侍テ天津告刀乃太告刀乃厚廣事遠多々備申と有り備玉串は手向串と云事にて神に祈事する時に其を太御幣と手向る故の名なる事天石屋段の記紀の文を讀て知べきなり然れば此に天乃玉櫛を事依し奉給へる事は此を捧げて天津詔戸の太詔刀言を以て告り[illegible]給はゞ天神相諾ひて坐て天都水を下し奉給はむと其術を事教へ授奉給へりしなり（神代紀に高皇產靈尊因勅曰吾則起ニ樹天津神籬及天津磐境ニ當ニ爲ニ吾孫ニ奉レ齋矣汝天兒屋命太玉命宜ニ持ニ天津神籬ニ降ニ於葦原中國ニ亦爲ニ吾孫ニ奉レ齋と有と此なると事の趣の同じきを以て考合す可き事なりかし）又一の考有り天乃玉櫛の櫛は正字にて玉を以て飾れる櫛には非じか其は古事記に伊邪那岐命の豫母都志許賣に追れて逃歸らせ給ふ所に亦刺ニ其右御美豆良ニ之湯津之間櫛引闕而投棄乃生レ筍是拔食之間逃行と見え神代紀にも此傳を載て次に一云伊弉諾尊乃向ニ大樹ニ放屎此則化ニ成巨川 泉津日狹女將レ渡ニ其水ニ云々と有は此文に天乃玉櫛遠刺立テ云々[illegible]

韮ニ由都眞生出牟 自其下天乃八井出牟と有に契合ひ又御天降よりは後の事なれども神代紀海宮段に彦火々出見尊云々有ニ憂吟ニ乃行至ニ海邊ニ彷徨嗟嘆時有ニ一長老ニ忽然而至自稱ニ鹽土老翁ニ云々老翁即取ニ嚢中玄櫛ニ投レ地則化ヨ成五百箇竹林ニ因取ニ其竹ニ云々と有て櫛を投棄たると刺立るとの差異こそは有けれ其櫛の竹と化成る事等しければ伊邪那岐命の禍事を逃遁れ給ひて善事に遇し給へりし吉例を引て右の天乃玉櫛をば事依し奉らせ給へるにぞ有べき（但此は似たる故事の有が然すがに捨て難くて言出たるにこそは有けれ立復りて猶思ふに天乃玉串と見たる方や宜しく有むか猶後人の定を俟べく思ひて此說は物係るなり）

○此玉櫛遠刺立テは高千穗宮大宮にて新世の大嘗の齋庭に刺立て天都水を求むるなり以來大嘗の大御酒を醸り大御饌に炊き用ゐさせ給ふ料の水は此事を行ひて天都水を得て仕奉れりし事決し下に此遠持天天都水止所聞食止事依奉支 如此依奉志任々仁所聞食由庭乃瑞穗遠云々と有を以曉る可し（[illegible]て天平寶字の[illegible]は[illegible]るには[illegible]の常の大嘗[illegible]水なる故に此國に當られざるなり別の水と思はむは僻事なり）第十小忌院條に引る儀式に卜ニ定御井所ニ（方一丈二尺著齋竹ニ井卜食者則使ニ御巫用之）第十一在京齋場條に引る式に其井二處卜定御井者造酒兒始掘造酒兒御井者箭貫卜部掘と有など此卜定して掘る御井はしも昔

は此文の如くして求させ給りけむを中古よりは唯卜定して其卜食たる所を掘て水を得る事とは成れりし也今も其大嘗の大御政を行はせさせ給へらむには神代の眞心に立復りて疑ふ所無く思定させ給ひて然物爲させ給はゞ卜定して井を掘の事擧は有まじくこそ所思えたれ 中古より其行ひを物爲させ給はず唯卜有る耳奏させさせ給へりしは足ぬ事ながら此詞の若此く傳はる上は其事を行はれむに今とて神の承引せさせ給はぬ事やは有べききゝ ○自夕日至朝日照豆は夕日照より朝日照に至迄と云事なるを一は省ける者にて此は薄暮の程より翌朝平明アケボノに至る迄を云ふ古事記に朝日之直刺國夕日之日照國也と有は夕日照とも云べき例也 同記朝倉宮段に阿佐比能比傳流美夜由布比能比賀氣流美夜儀式帳に朝日來向國夕日來向國風神祭詞に朝日乃日向處夕日乃日隠處なども見え大祓詞に夕日乃降衛云々など有は夕日を云る例なり 朝日照の例は萬葉二二十九丁に朝日豆流佐太乃岡邊爾又卅丁 旦日照島の御門爾など有て朝日の影刺すを以云言也備此は常に朝日夕日の刺を以て其處を美稱るとは異にて暮より晨に至る頃ほひの事にて約めて云はゞ終夜ヨモスガラの事なるを如此言を麗美しく連聯たるになむ有ける 大嘗及神今食等に朝夕の大御饌の事有り太神宮の三節祭なるも然にて終夜の神事なるに斯りける事にこそは本着たるなンめれ ○天都詔戸乃太詔刀言遠以弖宣禮は其天乃玉櫛を刺立たる前に侍らひて終夜に天都詔戸の太詔刀言を以て宣れとなり

此例大祓詞に天津金木乎本打切末打斷氐千座置座爾置足波志氐 天津菅曾乎本苅斷末苅切氐八針爾取辟氐天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮と有に同じ 此も天津金木天津菅曾を置並べて其前に侍りて天津祝詞の太祝詞事を宣申すなる由は已に講義に云るが如し 備此天都詔戸の太詔刀言は如何なりける狀の言ならむと熟考るに彼大同本記に御祖命詔久云々止詔天天忍石乃長井乃水乎取八盛天誨給久此時持下天皇太神乃御饌爾八盛文皇御孫命乃御饌爾八盛獻天遺水波天忍水止云天食國乃水於爾灌和天獻初又御作爾天降奉仕神等八十友乃諸人毛仁斯水乎令飲止詔天下奉支と見えたる此文の天忍水止云天と有ぞ謂ゆる天都詔戸の太詔刀言には有ける然ればこの詞を夕日より朝日照に至迄に幾回も辞返して宣れよと仰給へる者なりかし 天忍水と云て云々爲よと仰授給へる其事天都詔戸の大御命にし有れば此を太祝詞と云ずして何れをか天都詔戸とは云む此を以て中臣壽詞と大同本紀と其文は同じきなれども互に略る事有を知べくなむ 備天都詔戸とは天神の詔給ひし事を取て己が詞と爲て申す由なる事已に祝詞講義の卷首に云が如し天下の大御政を始めて有ゆる萬事其に皇祖天神の事依し授奉せ給ふ其大御命に本着て萬の規則は定る事にし有れば天神に法を取て天下に行はせ給ふ義也太詔刀言の太は徒に稱美の辭には非ず幾回も宣申す謂なる

事神代紀に廣厚稱辭術啓矣と有る廣厚に照し合せて曉る可し（萬葉十七に奈加等美乃敷刀能里等其等伊比波良倍と有は神代紀に乃使天兒屋命掌其解除之太諄辭一と有る解除の太諄辭を讀舉て其事を行ふ由也鎮魂祭の時に一二三四五六七八九十の布瑠の言を十度讀之と年中行事秘抄に見えたるなども思ふ可し）萬葉五三十一丁神代欲理云傳介良久虛見通倭國者皇神能伊都久志吉國言靈能佐吉播布國等加多利繼伊比都加比計理今世能人母許等期等目前爾見在知在と有は皇神の愛くしみ給て言靈の幸はへ給ふ今世人も悉眼前に見たり知たりと有を以て天都詔戸の太詔刀言の功驗の眼前に見るゝ事有を知べし又十三三十丁に志貴島倭國者事靈之所佐國叙眞福在與具と詠るも眞福在與具と旅行く人に對ひて事舉して此言靈の佐け有むと心を決めて云ふ也斯ゝ尋常の人の賀言にすら言靈の幸はへ所佐る者を況て天神の授給へし天都詔戸の太詔刀言の功驗は眼前に所見も所知も可爲事疑奉る可きに非されば今とても大嘗の大御政を行はせ給へらむ時に然爲させ給はゞ必天都水を降し給へらむ事眼前に見奉る如くなむ所思ける（此言靈の奇しき事は日本紀[illegible]傳有りしと云むとするなり詞前後なる大詔[illegible]等にも且々云ふは其後の思合せて看ふ可し）備次に麻知波と有る麻知は太兆の町と同じきに就て又思ふに右の天忍水を賜はらむ事を數度に申さむ事云も更なるが彼太兆の町形に吐と云ひ普と云ひ加美と云ひ延美と云ひ多米と云ふ五處の火折の兆を見はす所有り若て其太兆の卜事に仕奉る天津祝詞はしも右の吐普加美延美多米と唱申す事なれば此天津祝詞をしも合せて申せりけむ然るは天神の御量以て天乃八井を出し給はむ兆を占ふ事は由都篁の生出たる其處を以て定むる事なればなり此詞を俗に三種大祓と云る其說共に非ぬ僻事にこそ有けれ此詞を重みし傳へたるは事の意は知すながらに然すがに受る所有が故なる可し三種大祓と云事はしも太兆の卜事と神に祈申す時と解除を行ふと此三に通はし用ふる故に然號け傳たりし物なる事大祓詞講義に委しく註せる如くなればなり第十條第十一條に引ふ儀式祝式に御井を祓卜定ふ事も少か古意の存れる者なりけり（右の天津祝詞は簡にして其義甚深く妙なる文にして實に天神ならずは得も出まじき詞なるを然る心し、ひの人も世に聞えぬは如何）

如此告波麻知波弱韮仁由都篁生出自其下天乃八井出ﾂ此造持ﾃ天都水止所聞食止事依奉支

此は天都詔戸の太詔刀言を宣を受て如此も云り備麻知波の波ノ字は辭なれば小字に作る可し諸本大字なるは寫誤なればなり今改めたり（古事記傳に引るに麻知波の波を讀者に[illegible]古事記に麻知則（マ

（ナバ）は文を成せるは何事にか心得難き事なり　麻知は鈴屋大人說に神名帳に左京二條坐神二座太詔戸命神櫛眞智命神と有る眞智山有げなり此二神は大社の列にだに入給はざるに相嘗祭に預給ふは大嘗に殊なる由緣有る神なる可し（以上取意）と云れたるは寔に美たき說なり其は麻知は神名の眞智の如くして智は物を智識る由の古言なる事祝詞講義大御巫祭神詞の下に辨へたる如くなるが又的と云ふ義同じく太兆の事にして其兆を標的と成して事を卜合ふ故の名なり其は同式に大和國十市郡天香山坐櫛眞命神社（大月次新嘗）と有る下に元名大麻等乃知神と有を以知べきなり（同式武藏國多摩郡大麻止乃豆乃天神社有は右の櫛眞命神社に坐を萬葉十四に武藏野爾宇良敝可多也伎と見え和名抄に豐島郡占方郷有り一證に備ふ可）　借太兆は本居大平翁說に太眞似なりと云れたる如く其事の狀の兆に見るゝ故の名なり　古事記に內ニ拔天香山之眞男鹿之肩一拔而取ニ天香山之天波々迦一而令ニ卜占麻迦那波一而云々と有る麻迦那布は卜合擬ぶ由なり傳八一丁（三十）に雄略天皇御紀に彎レ弓欽明天皇御紀に彎レ弓占擬射落崇峻天皇御紀に擬射と見え新撰字鏡に擬設也度也萬加奈不と有り字書に擬揣度以待也と注せり今も此意なり」と有を思ふ可し（常も物に因准ひて其如く行ふを麻須布と云に此麻迦那布に當る擬字を用ふるは同意の言なるを以なり記傳の右の細註に今世の俗に萬事を取擬れて執行ふ處も又用脚を給ふも麻迦那布と云は語の轉れるなり」と有り）　若て右の太兆の鹿卜に在れ龜卜に在れ占兆を彫て灼くを町とも町形とも田町形とも云て方なる圍の中に縱横の筋有る物なり麻知は標的の義なる事上に云る如くなるが其兆を揣度りて待つ意有る事云も更なり姓氏錄に額田部湯坐連云々允恭天皇御世被レ遣ニ薩摩國一平ニ隼人一復奏之日獻ニ御馬一疋一額有ニ町形廻毛一天皇喜レ之賜ニ姓額田部一也と見え又額田部低田連云々允恭天皇御世獻ニ額田馬一天皇勅曰此馬額如ニ田町一仍賜ニ姓額田連一など有は太兆の町形に依れる勅言なり（此に田町と有に依て田地の町の形に似たる故に太兆なるをも借に田町と云かとも思ひしかども非思へば太兆の町の形に田地の畔の縱横なるが似たるに依て田町とは宣へるなり又市街を某町と云も太兆の町形に似たるを以てぞ號けゝる）　借此詞の麻知は右の太兆の町の如きには非ねども其天乃八井を出し給はむ處の兆に由都篁を生出しめて麻知と成し給はむとの意にて鹿卜龜卜等の町に其義相通へる者なり此を以て太兆の麻通と麻知と同意の言なる事を明らむ可き者なりかし（借麻通は眞似にて幽に適（マニ〳〵）の意を含め眞智は眞智にて幽に的の義を含み又麻知には意に適ふ意麻知の條理（スヂミチ）の意有など甚々靈しく妙なる者なり）　○弱韮仁の韮字は蒜字を誤れるならむと故翁の云れたる實に然る事なり借此は麻知に發見たる物にて實に弱蒜次なる由都篁の

箭に對へたる弱なり弱とは人は更にも云ず又草木などに云も未成固まらぬ意にて若櫻若栗林（ワカザクラワカクルス）など云に同じ木にも若木と云ひ草にも若草と云ひ其外にも若菜と云は記傳三國雅の下に和訶志とは物の未成熟（トヽノ）はざるを云て書紀などに幼字をも訓み中昔の物語書などにも人の稚幼きを云る事多く萬葉に三日月を若月とも書云々と有り　蒜は記傳廿七丁十に和名抄葷菜類に唐韻云蒜葷菜也和名比流揚氏漢語抄云蒜顆比流佐木　今按顆小蒜也　又大蒜和名於保比流小蒜和名古比流一云米比流獨子蒜和名比止豆比流澤蒜和名禰比流など見えたり明宮段大御歌に怒毘流と有は野蒜なりと有が如し　玉勝間に韮は蒜を誤れるならむと云れたるは甚々宜し然れども猶に據り借字ならむか　弱蒜とは正午前より前を云べければ上に至二刻日照[illegible]と有べきの時刻なる可しと云れたる實に東國の言に正午前を[illegible]と云事有れば然も有べからむとは一通に思ゆる物から此は天乃八井を出し給へる兆（マヽ）こを見ば[illegible]給へる事決けれど依難し予が心には夕日より朝日照に至まで天照[illegible]を宜る間に弱蒜と箇と二種の蒜知は見れて有事と所思るはや　此蒜に奇しき事の有は古事記に日代宮段倭建命還上幸時到足柄之坂本於食御粮處其坂神化白鹿而來立爾即以其咋遺之蒜片端待打者中其目乃打殺也と有は邪氣を避す功驗有が故なる可し御紀には此信濃坂にての事と爲り其文に食於山中山神令苦王以化白鹿立於王前王異之以一箇蒜彈白鹿則中眼而殺之云々先是度信濃者多得神氣以瘼臥但從殺白鹿之後嚼蒜塗人及牛馬自不中神氣也と見えたり古

事記明宮段に天皇聞看豐明之日云々爾御歌曰伊邪古抒母怒毘流都美邇比流都美邇和賀由久美知能云々と詠せ給へる豐明も大嘗に屬たる事なるに第十四由加物條に引る式に阿波國所獻蒜英根合漬缶（ヒルノフサネノアヘツケ）と有など彼此考合するに由有げなるは此水取の事に因て起れるなる可し　然れば韮字は故翁說の如く愈以て蒜を誤れる事決し韮を[illegible]名抄に[illegible]和名於保美良[illegible]萬葉十四に久君美良と見え字鏡には[illegible]とも見え[illegible]古事記[illegible]美良とも[illegible]とも云べけれども[illegible]北流なれば叶はず且右の二物同種類の物なれば[illegible]令本より韮字ならむからに比流と詠て有てふ事かは有む　○由都篁生出を本に由都五百篁と有れども鈴屋大人說に由都五百とは同言重復りて如何由都は即五百箇と云事なればなり」と云れたる說の動く可からぬに依て削去つ然るは後人の由都と云事を心得難て傍に五百の二字を註せしが混ひて本文と成れる事著明ければなり　記傳五に云く湯津石村を書紀には五百箇磐石と書り五百を約めて由と云り湯津[illegible]津爪[illegible]なども[illegible]　猶由都は五百箇にて弱蒜と共に幾莖も多く成出たるにて五百枝眞賢木及五百枝刺竹田國などと云ふ例とは異にて彼五百箇眞坂木八十玉串又五百箇野薦八十玉籤などの如し　五百箇と云時は幾莖も叢がり生る事を云ひ五百枝と云ふ時は枝葉の多く茂（シキコ）し榮ゆる事と成る也此差別に就て心得べくこそ篁は常に竹林を云事なれども此は決めて箭にて有べし其

は蒜にも弱蒜をも云へば若竹ならでは事實に叶ず如何にとなれば上に引る神代紀に投ニ湯津爪櫛ー此即化成レ筍と有を同じ趣なればなり同じ事ながら海宮段ニ取ニ嚢中玄櫛ー投レ地則化ニ成五百箇竹林ーと有は今竹を用ふる事有ての時なれば此は筍に非ず大目籠を作る料なるを思ふ可し漢籍に筍子の假字に有以レ水生と云事の有は少由有て聞ゆ此なるも其下に天乃八井を出し給へる其兆に生出たるなればなり ○自其下は弱蒜と由都篁と二種の兆の生出たる下にて天神の靈威を以て斯る物を一夜の間に令生出給ひて其下に天乃八井を出し給へる兆と成給ゝる也下字を鈴屋大人は母登と訓れたれども志多と訓む方宜しく所思ゆれば今從はず此は母登と廣く云所には非ればなり ○天乃八井出平の天は天都水を出し給ふ故にて當に天菓と云とは異なり下に此遠持天 天都水止所聞食云々と有を以曉る可し八井とは例の彌井にて天都水の水脈の長くして盡まじき由なる可し其は此と同じ神宮の傳に天忍石乃長井乃水と見えたる如くにて地中の代々の長く遠く流ながるゝを云なり地上より穿らて水を得むには大きにも小さにも又數を多くも心の任に爲べければ其は八事に有れば地下の水脈に就て云なり但し常には八井と云意は次に云り 鈴屋大人說に八井は神武天皇の皇子の御名に日子八井命又神八井耳命と申す御在り八井の意同じ事にやと有に令起されて其說をなむ得にたりける偖八井は長井と云事にて大井と云も堀井の大成由ならず流の大なるに同じくして上に引る記傳に天之眞名井は即安河瀨の中にて井と云べき處を指云るにて

別に常云ふ井有しには非ず古は泉に在れ河にあれ用る水を汲處を井と云りと有る如く天神の御量以て天安河の水を出し給はむと云事也其神八井耳命の御弟綏靖天皇の大御名を神沼河耳命 申奉る沼河も上に云る天之眞名井を神代紀に天眞名井と云と同じ事なれば此も八井と同義にて有此彼取合せて思ふに献火白檮原宮に初國所知看し頃は未山林田畑杯も今の如く治非りしかば此二柱御心を合せ給ひて專と畿内邊の水理を脩め給へりしかば其に右の如き御名は稱奉る事とぞ成れりけむ然所思る由は古事記に神八井耳命者意富臣之祖也と有に神名帳に大和國十市郡多坐彌志理都比古神社二座並名神大月次相嘗と有る今も多村と云に立せ給へる若くは此神の御名水知津彦にて水理を修給ひし由に依れるなる可ければ神八井耳命と備奉れるなる可し又古事記に日子八井耳命者茨田連之祖と有は亦名を二柱に傳へけるなるも雖其實に茨田宿禰多朝臣同祖也云々豊日推能古仁徳天皇御代造ニ茨田堤ーと有などは後の事ながら由有り此等は然しも用無き事なから皆迄に事な盡し究めずては天乃八井の古義を知に由無に云也 ○此遠持天 天都水止所聞食止事依奉支は宇都志國の水なれども今天神より出し給へる水なれば天都水止爲氐所聞食止と云意にて下なる天都御膳乃長御膳乃遠御膳止と有る止の止爲氐なると同じきなり偖此は既知として弱蒜と由都篁の生出む其下より天乃八井出む其は天乃玉櫛を刺立て夕日より朝日照に至迄に天都詔戸の太詔刀言を宣申さむ

むに應へて天忍石乃長井水を天降し給へるなれば此を以て大嘗の大御政所聞食せと事依し奉らせ給へる由なり其天乃八井の天都水を以て大御酒に釀り大御饌に炊きて天都御膳を聞食せとの御事なる由は次文に如此依奉志任々仁所聞食由庭乃瑞穗遠と有を以知べし偖此迄は大嘗の事を云述む序なり但此にて天都水の事の終るならず下に其用ひて成す物の事を註へれば末迄に亘る言なり（然れば古語拾遺神武天皇段に天種子命奏二天神壽詞一即神世古事類也と見えたる神祇令中臣奏二天神之壽詞一の義解に謂以二神代之古事一爲二萬壽之寶詞一也と有ば已に此時など古より其の名耳有て其實は行はれざりし故に此詞などの如きも唯に神代の故事を以て壽奉る事と思へるなり）偖大嘗の大御祭仕奉る料の天都水は如此くしてこそ得給へりけれ常に奉る御水の天下に在初ける事は此同時なりし大同本紀の傳に即天牟羅雲命參上天御祖御前爾皇御孫命乃申上給事乎子細申上時御祖命詔久汝爾奉牟政波行奉下天在止持水取政遣氏在介利何神乎加奉下牟止思間爾勇乎天志參上來止詔天天忍石乃長井乃水乎取八盛天詔給久此水持下天皇太神乃御饌爾八盛又皇御孫命乃御饌爾八盛獻天遣水波天忍水止云天食國乃水於爾灌和天獻初又御作爾天降仕奉神等八十友乃諸人毛仁斯水乎令飲止詔天下奉支即受賜天持參下天獻云々即時日向高千穗宮乃御井崇居焉と有れば是ぞ皇太神皇御孫命の朝夕の大御饌に奉り天下八十伴の人等の日々に用ふる水にて國土の荒水の初て熟水と成れる事起なるが此詞の天都水は殊に新世の大嘗聞食む料なる故に上に皇御孫尊乃御膳都水波宇都志國乃水爾天津水遠加比奉牟と有て後の御代と雖も大嘗祭の度每に天都水を乞求めて用ふる事なるが故に同時の事ながら別なる者なり（然れば此詞なるは殊更に大嘗に就て乞求る天都水にして神宮の傳なるは凡ての顯國の水の天都水の相和はりて熟へ成初たる事の起をば云なり）

如此依奉志任々仁所聞食由庭乃瑞穗遠四國卜部等太兆乃卜事遠持弖奉仕弖悠紀仁近江國野洲主基仁丹波國氷上遠齋定弖

如此依奉の依字本に脫たり大祓詞に安國止平久所知食止事依奉伎如此依志奉志國中に云々とも天之八重雲乎伊頭乃千別爾千別氏天降依志左奉伎如此久依志左奉志四方之國中豐云々とも見え遷却祟神詞にも皇御孫之尊乎天降所寄奉支如此久天降所寄奉志なども有る例に依て補つ（右は如此と上を受たる例なり大祓詞の中に天津祝詞乃太祝詞事乎宣禮如此久乃良波云々と有て此詞なるも然り又云々所聞食と如此聞食氏波云々大海原爾持出奈武如此持出往波云々又持々呑氏牟如此久可々呑氏波云々又氣吹放氏牟如此久氣吹放氏波云々又佐須良比失氏牟如此久失氏波云々など云ふ古文の條なれば決めて此にも依字を脫せるなりけり）若て此依奉は天都水をなり上に此遠持天天都水止所聞食

止事依奉支と有より如此と受たる文意を熟思ふ可し次に所聞食由庭乃瑞穗遠と有は天都水を以て瑞穗を物に調ふるに就て云なり下に天都御膳乃長御膳乃遠御膳止汁仁毛實仁毛云々と有を併せて曉る可し（最初に全體の瑞穗を云て次に天都御膳遠長御膳乃遠御膳止云々と云て次に天都水の事を委曲に云下し此にて又瑞穗の本に復りて又御酒御饌に供奉る事を云るなど妙なりとも妙なりけり）所聞食由庭乃瑞穗遠は天神の事依し奉給へる天都水を以て汁にも實にも和へて所聞食む齋庭の瑞穗を云々と云事にて上に千秋乃五百秋仁瑞穗遠平介久安介久由庭仁所知食云々と有に對へるなり（借上に天都御膳を云々と云て次に瑞穗を由庭に所知食と有は次に天都水の事を云むとてなり此は天都水の事を先云て此に其水以て聞食む由庭の瑞穗の事を云て終に天都御膳云々の事に及べる文意の妙在る事更に凡人の思ひ及ぶまじきは神の御作意に依れる者なり）借由庭は悠紀主基の齋場なる事上に註せるが如し此瑞穗は齋郡の御稻なる事下に大嘗會乃齋場仁持齋利波參來弖と有を以知べし（第六條に云る趣を考ふ可し借此の所聞食に天都水の事を云終めて此より下には瑞穗の事耳に成たるなれども其二事を兼て文を成せれば天都水の事を放ちては解難き者ぞ）○四國卜部等の事は大祓詞講義に註せれば今云限に非ず借第六條に引る式文に八月上旬申レ官差ニ宮主一人卜部三人發遣南國各二人其一人號ニ稻實卜部一一人號ニ禰宜卜部一と有て大兆の卜事を始て凡ての事に卜部の仕奉る事起は神代紀に且天兒屋命主ニ神事之宗源一者也故俾下以ニ太占之卜事ニ而奉上レ仕焉と見えたれば高千穗宮にては天兒屋根命及其子天忍雲根神等次々に仕奉られ白檮原宮にては其孫天種子命の仕奉られしより以來世々其職に仕奉られし故に垂仁天皇御紀に仰ニ中臣連祖探湯主一而卜レ之誰人以令レ祭ニ大倭大神一即中臣名城稚命食レ卜焉と見え神功皇后御紀に皇后選ニ吉日一親爲ニ神主一則云々喚ニ中臣烏賊津使主一爲ニ審神者一因以ニ千繒高繒一置ニ琴頭尾一而請曰先日教ニ天皇一者誰神也願欲レ知ニ其名一など見えたり然れば大古より悠紀主基の國郡卜定はしも其中臣氏人の仕奉り來る事なりしを天智天皇御紀に鎌足公を中臣內臣と有を八年十月丙午朔庚申の下に賜レ姓爲ニ藤原氏一自レ此以後通曰ニ藤原大臣一と有が庶流には猶中臣氏なるも有しを文武天皇御紀二年八月詔に藤原朝臣所レ賜之姓宜レ令ニ其子不比等承一レ之但意美麻呂等者縁レ供ニ神事一宜レ復ニ舊姓一と有れば此時などぞ藤原は代々大臣として公事に仕奉り中臣は神事に仕奉れりけるよ卜部は伊豆常陸壹岐對馬より召て萬の卜事は令仕奉給ひけらし然れば此詞にも大祓詞にも然改りける事は其頃よりの事なる可し（借伊豆の卜部は後に京に上りて今の吉田家の祖先是なり常陸なるは其國の風土記に占部某と云人名見えたる由なるは神功皇

后韓征の時に中臣烏賊津使臣の子孫などの遺れるなる可し和傳五に伊伎ヒな嶋に中臣雷之嗣と見え和名抄に壹岐由紀と有れば此島に神祭り坐とて齋忌レ事有けむ故の名にや有む」と云れたる如く其變に種々の神事共の有けむと所レ思ゆれば此時より遺れるなる可し萬葉十五に由吉能安末能保都手乃宇良敝乎可多夜伎弖と見え神名式に壹岐郡國片主神社見えたる右の事に依れば片は太兆ノ形にも有む對馬なるは神名式に下縣郡雷命神社有て其國の卜部は烏賊津使主の子孫にして世々卜事を以仕奉る由對馬龜卜傳に云れば右等の國々なるを被召る事なる故に四國卜部と云り 〇太兆乃卜事遠持豆奉仕豆は齋部卜定の卜事に仕奉るなり 本に乃を仁に奉仕豆の豆を留に作れるを今は古史徵に引れたるに從へり然るは玉勝間に太兆仁の仁字は乃を誤れるなる可し奉仕留の留字は豆なる可しと有に依れるなり 第一條に引る大嘗祭式に凡踐祚大嘗七月以前即位者當年行レ事八月以後者明年行レ事 此據二受讓即位一非レ謂二諒闇登極一 其年預令三所司卜二定悠紀主基國郡一奏可訖即下知依レ例准擬レと見え儀式にも其事を記して大臣奉レ勅召二神祇官一密封令レ卜二定悠紀主基國郡一奏壽訖即下知其國一と有 右の全文は首卷第一條註に引て又註をも物したれば此後見合せて辨ふ可なり 江家次第に云く卜二定悠紀主基國郡一事 或先被レ勘二卜定日時一天慶九年例又仰二外記一令レ召二神祇官一或仰レ辨 大臣以下着二左仗一藏人仰下可レ令レ卜二申件國郡一由上 或先公卿等定二申某國一 大臣奉レ仰着二外座一 第一大臣未レ在二外座一 仰二官人一令レ敷二膝突一召二外記一問二神祇官參否一 豫仰レ辨者可レ問レ辨〇今云此時未神祇官は召出られずして參れりや否やと問はせ給ふなり 又仰二辨官一令レ敷二座於軒廊一掃部寮敷レ座主殿主水設二水火一大膳奉レ坏仰二外記一令レ進二硯紙等一外記獻レ之 硯筥入紙四枚 仰二外記一令レ召二神祇官一神祇官引二寮官一參二

入自二日華門一着二軒廊座一 〇今云軒廊御卜次第に東第三間以西神祇官候西上第一間以西陰陽寮候東上以上掃部寮敷レ座主水設レ水主殿設レ火大膳奉レ坏と有り其本文に令レ召二神祇官陰陽寮一云々各着二縁下一參入と有り但陰陽寮を被召る事は古義に非ざれば内々の事の如しと見えたり此詞に陰陽寮云々と云事の無を思べし 大臣自書二兩國郡名一 毎國二郡凡故云 云々書畢後召二外記一令レ封レ之 不レ加二懸紙一外記具二小刀一參入封レ之 大臣取レ文入レ筥外記退出大臣召二神祇官第一人名一 四位召レ官如レ前 其人稱唯就二膝突一大臣作レ筥給レ之 〇今云四位召レ官如レ恒は軒廊御卜次第上卿召二神祇官第一人一の本註に四位召二官朝臣一五位召レ名朝臣一と有を云なり大臣作レ筥給レ之と有は儀式に大臣奉レ勅召二神祇官一密封令二卜定一と有る是なり右に引る軒廊次第の續きの文に稱唯進就二膝突一仰下其事吉凶可レ卜申上之由上還復二本座一次召二御卜陰陽寮一如レ前と有り右にて其筥を收たるは右に大臣取レ文入レ筥と有にて其を卜串とは云り同卜串次第に請書召二外記一被レ仰下可レ封二參卜串一之由上外記入二卜串三一於レ筥一など有り 神祇官取レ之復座卜訖返上復レ座 封下注二乙不合者合者一 不レ合者大臣又召二外記一令レ進紙書レ之令レ封令レ卜如レ初 大臣召二外記一令レ開レ之見了 留レ前 神祇官退出 〇今云軒廊次第に其二重仰二者官退出等卜返上二結外記一と有り合不合の事は宮主秘事口傳抄に見えたり召二外記一令レ開レ之は開卜串次第に不レ開二不合一と有り 大臣召二外記一令レ撤二硯筥一大臣召二外記一令レ進二例文並打レ界紙一外記進レ之例文進二大臣一入レ筥入下往代例文二卷神任二卷令度可二行事一人々交名一紙折レ界上進二參議座一大臣目二參議一々々進候大臣給二卜文並風記等一 入レ筥 參議取レ筥復座書レ之參議書畢入レ筥返二上之一大臣見了令二藏人奏一レ之 入レ筥作レ居レ座令レ奏レ之〇今云例文とは今時行るゝ例式の文書なり往代例文とは前例に任て今其に倣ふが故に此に持出たるなり神任は前例に任々々の行事の人々の交名なり入レ筥は前にある外記筥を云なり軒廊次第に召二外記一令レ撤レ之付二傳仰人一令レ奏と見ゆ 其下了大臣

先召二大外記一給二撿校行事文一人給例文等同入レ之（不合卜形等同入）之次又召辨給卜文（執手辨之次退出後日外記進二上不合卜形等於大臣一云々〇今云卜文とは右の卜合たる卜文なり以上軒廊御卜次二門二奉幣使卜串二次第等に引合せて其細事を見ても可し）と有り如此く事の狀は言痛く成れゝども四國の卜部等の太兆の卜事を持て奉仕れる遺制なり天武天皇五年御紀に九月丙寅朔丙戌神官奏曰爲二新嘗一卜二國郡一也齋忌則尾張國山田郡次丹波國訶沙郡食レ卜と有などは　然も事々しき事には非ると所思ゆ　其頃迄は神祇官に卜部を召て令仕奉給ひけらし　軒廊御卜次第に神　祇官卜部直氏卜レ之中臣氏相具と見えたり宮主秘事口傳抄に大嘗會國郡卜定者最初之公事也當家輔官氏人可二參陣一也と見ゆ然れば陰陽寮の交りて仕奉る事は表立たる事には非るなり（然ればこそ斬廊御卜次第に各盛勘文置二筥蓋等一進と有る本註に陰陽寮借二用神祇官筥蓋一とは見えたりけれ猶第一條に云る事をも見合す可なり）　〇悠紀に云々主基に云々遠　齋定ヱ　は今卜食の國郡を云なり備先悠紀主基の義を辨ふ可し天武天皇五年御紀に神官奏曰爲二新嘗一卜二國郡一也齋忌則尾張國山田郡次丹波國訶沙郡並食レ卜と見えたり齋忌次の字共に正字と見えて　齋忌此云二踰既一次此云二須岐一也と有り私記に師說次二於齋忌一也と云れたる允に然る可し此二方共に大抵京より東なる國を以て悠紀とし西なるを以て主基として其仕奉る物も事も少の差異も非ざれば次（スキ）と云べき理無に似たりと雖も總ての事悠紀は前に仕奉り主基は後に仕奉る故を以て號ざを給へるにて次の悠紀とも云べきを然は云まじき故に唯に次（スキ）とは云にて異なる意有に非ず（玉勝間に次は借字にして此字の意には非ず古は凡そたゞに同じければ字は意には拘らす何て書るに次（ソヽこ）た酒…と云るから言の同じき任に借て書けるなれ其任に書れたる者なり次の意に非ずと云故は悠紀と主基とは何事も二方全く同じ狀にして一事も少の劣り勝りの有事無れば次と云べき由更に無し天武天皇御紀なるは借字なる事疑ひ無き者なや主基は禊の須岐と同言にして濯（スヽキ）と云事なり身滌も身濯にて滌（ソヽ）ぐ濯（スヽ）ぐ濯と同じきを共に約めて須岐とも須岐とも云るなり然れば此も齋忌と同じ儀の名にして濯き清めたる由なるを」と云れたれども甘なひ難し如何にとなれば濯（スヽキ）とは物の穢れたるを洗濯ぎ清むる言にこそは有けれ清まりたる物名に非れば此な以て甘なひ難しとは云なり）　備齋忌は字の如く嚴（ユカ）に齋ひ忌愼しむ意の言成事云も更なれ共猶齋食の義成可し其は皇太神宮儀式帳六月々次祭條に御饌御酒御贄仕奉る有增を先云々と云て次に此以月十六日夜湯貴御饌祭供奉云々同日夜半仁人別令二備滿持一弖朝大御饌夕大御饌云々内院供奉と有て三節祭（六月九月十二月）共に此に同じく湯貴之神祭湯貴御倉なども多く見え止由氣宮儀式帳にも同事を記せるに始亥時至二于丑時一朝乃大御饌夕乃大御饌二度間量供奉と有る本注に此號二由貴一と見え其仕奉る事を湯貴　備奉所ㇾ　持參入と記され祝詞式な

る六月々次祭詞准之十二月に由貴能御酒御贄乎如二海山一置足成天云々九月神嘗祭詞に由紀能御酒御贄懸税千税余五百税乎云々と見えたる抔凡て年中諸祭の中に殊に此三時祭は重き御祭なる故に殊に深く齋清まはりて供奉る事なる故に由貴某とは云り記傳五巻伊伎島の下に齋忌は伊牟伊波布由伎波留山々志山豆伊豆など種々に云言なれば伊伎は若くは息長帯比賣命の辛國を征に幸行し時など此島にして神祭り坐とて齋忌の事有けむ故の名にもや有む齋忌者は大嘗にも與る可からず」と云れしは實に然る言なりけり然れば毎世一度の大嘗祭に限らず毎季一度の新嘗祭なるも悠紀主基國郡を被定る事は非りけれ神御の物は由加某と被唱たりけむ神宮朝廷共に其祭の根元一なりければなり第十三條第十四條に引る大嘗會式に凡應レ供二神御一雜器者云々の注に神語曰二由加物一とも凡應レ供二神御一由加物器料者云々の注に神語號二雜贄一同爲二由加物一とも有など悉くに上に註せる神宮に湯貴某と云に同じきを曉る可し然れば悠紀は由加とも活く言なりけり猶第十一條に由加物の事を委しく述き祝詞講義太神宮月次祭詞の下に由[illegible]の事を顯へたるを考合す可し備悠紀主基の字御紀には齋忌次の字なりし事右に引る如く神龜元年御紀には由機須機と作れ天平神護元年御紀には由機須伎と作れ其時の宣命には由紀須紀と有り何れも假字書也今の如く悠紀主基と書く事は儀式の頃にや定りたらむ其より以降の書には然定りて記せり

備高千穗宮の大吉には唯悠紀主基の卜定田共に大宮近き邊を以齋定めさせ給ひけらし神代紀御天降段一書に神吾田鹿葦津姫以二卜定田一號曰二狹名田一以二其田稻一釀二天甜酒一嘗（ニハナヒス）之又用二渟名田稻一爲レ飯嘗（ニハナヒス）レ之と有り嘗之の二字を爾波奈比須と訓るは新嘗（ニヒナヘス）之と云事なるを思ふに此文御子等生坐の後に序たれど若くは其は誤れるにて邇々藝命の大嘗の大御政の時の事なる可し然れば卜定田は天兒屋根命の被定しなる可し其を狹名田と云は上卷に天照大神以二天狹田長田一爲二御田一と有に准（ナゾラ）へ給へるなり渟浪田は長田の義なる可し此に號曰の言無れども上に讓て省るなり天甜酒は黒木白木の大御酒なる事第十五條多米酒の所に云るが如し御飯は即大嘗の大御饌なる事申すも更なり今又思ふに皇御孫命の御天降の初年に大嘗祭仕奉り毎年の新嘗祭にも然て仕奉り給へるも御子等の生坐しより後に[illegible]も此時の事なりしを以て如此傳はれるにや有む天神に奉[illegible]の田を[illegible]に定る事は出雲國土記出雲郡[illegible]に所レ造二天下一大神[illegible]命天[illegible]初[illegible]大御[illegible]田[illegible]御卜田と云事にて其田の卜食たるを卜[illegible]る由なるめり白檮原宮より以來は畿內にて悠紀主基の御田を被定たりけめども齋部は一國の内にても各國にても定させけめども御紀に傳はらざるを以思ふに總ての状甚く簡（コト）易（スクナ）なる事にて有けらし饒速日命の孫に日子湯支命と

申す坐せり其事に仕奉れりし名なる可し景行天皇は東國にて新嘗聞食し事第二十二條に高橋氏文を引て註せる如く神功皇后の御は上に云る如く壹岐島などなりしなる可し凡て其間の事詳ならず顯宗天皇御紀に白髪天皇二年冬十一月播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯於赤石郡親辦新嘗供物と有は悠紀主基の何方とも知られねども國司の供奉る事の正しく物に見えたる始なり（猶第二十七條に云る豐明の事と大嘗祭詞講義の卷首に神武天皇の大御代より以來の例を引て委しく記せれば合せ讀て事の心を得べきなり）天武天皇御紀には右に引る如く尾張と丹波と東西に分れて供奉れゝども持統天皇御紀には十一月戊辰大嘗云々供奉播磨國因幡國郡司以下至百姓男女並賜絹等各有差と見えたれば必然しも拘はらぬ事にて左方右方と云ふなりしなる可し玉勝間（萩下葉卷）に大嘗の悠紀主基は必京より東と西なる國を定めらるゝ様に見えたれども然しも非るにや神龜元年の度は由機備前國須機播磨國なり天平神護元年の度は由機美濃國須伎越前國なりき」と有り委しくは御紀に就て見る可し但神龜の度なるは左右違へるに似たり例を以考るに若くは書違へるにや（此を東西左右に取る事は式に凡在京齋場者預設南處悠紀在左主基在右云々とも凡造大嘗宮者云々中臣忌部二官人依次立率悠紀國司云々爲一列云々中臣忌部相別率主基國司以下亦同上皆單行各自朝堂院東西掖門入至宮地分列左右とも有注に悠紀在東主基在西とも兩國供物發自齋場向大嘗宮悠紀在左行主基在右行とも見えたるなど皆其定なるを以知べし）借其より以來今京と成てより邂逅に播磨國などの仕奉る事も有れども多くは近江丹波備中等の國々なり江次第國郡卜定條に悠紀近江滋賀栗太中賀野蒲生神崎愛智犬上坂田淺井伊賀高島主基丹波（丹波備中代充之）丹波桑田船井多紀氷上天田何鹿備中都宇窪屋賀夜下道淺口小田後月哲多英賀と見えたり後には播磨備中も止て悠紀に近江國主基に丹波國と定りて供奉る事と成れるは京よりの便理に從へる者なりけり（玉勝間（十二卷）に御世々々のたて歷代編年集成を引て宇多天皇の御より醍醐天皇の御迄を悉く擧られたり必就て見る可きなり）借此詞の近江國野洲丹波國氷上を玉勝間に氷上の下に一本には郡字有り若其に依らば上なる野洲の下にも郡字有べきなり」と有り思ふに無ても有なむ此は近衞院天皇の大御代に奏せりし詞なるが右の歷代編年集成に康治元年十月廿六日乙酉御禊十一月十五日癸卯大嘗近江野洲郡丹波氷上郡御屏風定信書と有て能合り（御禊は第四條に引る式に凡天皇十月下旬臨幸河上爲禊と見えたる是なり序に云ふ近江の名義は合水（アフミ）にて湖に依れるなり丹波は田庭（タニハ）なり庭とは家に在れ野に在れ海に在れ凡て平坦なる處を云なり應神天皇の大御歌に知麼能伽豆怒塢彌例麼茂々智儾屢夜珥波母彌喩區珥能朋母彌喩と有は千葉の葛野を見れば百千足る家庭も見ゆ國の秀も見ゆと云事にて家庭は國の秀にして平坦なる地を云なり萬葉三に飼飯

海之庭好有之と有も海上の平に和たるを云り丹波は古丹後と本一國にして後に和銅六年に分れたるが丹後國丹波郡より起れる國名なるが國内に山谷耳多在る丶其違なむ平坦なる山先なる故に田庭の義也萬葉十七に安佐備爾伊麻多知奈具之庭爾敷美多比良氣久と續けるも庭と平坦(タヒラ)と平之(ナラス)の義を合せ曉る可し○齋定ヨは上に太兆乃卜事遠持ヨ仕奉ヨより受て下に田志理伊都志理持恐美恐母美清麻波利仁奉仕利と有へ係る事なり備右の如く朝廷にて國郡卜定の御事有て後又齋郡にて御田の卜定有る事なり其は第六條に引る式に八月上旬申レ官差ニ宮主一人卜部三人ニ發ニ遣兩國各二人其一人號ニ稻實卜部一人號ニ禰宜卜部ニ到レ國各於ニ齋郡ニ大祓訖卜ニ定田及齋場雜色人等ニと有を以て知べし齋定とは此等の事に迄亘る言なり　其外齋場を構へ齋院を作るなど凡て齋清まはる事此より始りて在京齋場に至迄深く齋ましむ事なり其等の事共は第六條より次々に云り

物部乃人等酒造兒酒波粉走灰燒薪採相作稻實公等大嘗會乃齋場仁持齋參來ヨ今年十一月中都卯日仁由志理伊都志理持恐美恐母美清麻波利仁奉仕利

物部乃人等は武事を以て仕奉る人を母能々辨と云ふ其には非す唯何と無く朝廷に仕奉る人を廣く母能々布と云ふ其は物の部領を云る此も其類にして母能々布と母能々辨との差別など記傳十九に云れたるが如し萬葉一に物乃布三に物乃負十七に物能乃數十八に毛能々布など有りと記傳四十三に見ゆ

第六條に引る式に齋場雜色人と云る是なり故儀式には卜ニ定物部人十五人一と正しく記されたり卜ニ定田及雜色人等ニ歌人歌女卜造酒兒一人御酒波一人篩粉一人共作二人多明酒波一人已上童女稻實公一人燒灰一人採薪四人歌人廿人歌女廿人と見えたり　稻實卜部禰宜卜部及國司郡司等を合せて云るかとも思へど然にはず　○酒造兒は第六條に引る式に造酒兒一人と有る本註に神語曰ニ佐可都古一以ニ當郡大少領女未レ嫁卜食者ニ充レ之と見えたり未嫁ならざる女を以て充る事なる故に儀式には造酒童女と書て同じく神語佐可都古と謂れたり此即物部乃人等の綱領にして何事も此造酒兒を必先に立る事なり備此を佐可都古と云は字の如く造酒兒と云義なり　崇神天皇御紀に掌酒此云ニ佐介弭苦一と見え姓氏録に大田酒人眞人など云り姓有は掌酒(サカヒト)の義なる事云も更なり同じ酒公の條に天皇御世に有る何オニ負レ有ニ造酒之事一令レ造ニ御酒など有は常に酒を造ると云に同じ　第七條披穢條に引る式に卜部率ニ國郡司以下及雜色人等臨ニ田拔ニ之先造酒兒次稻實云々訖於ニ齋院ニ乾收先割ニ取初拔四束一四把擬ニ供御飯一自餘皆擬ニ黑白二酒一と有を以て黑白二酒の重き事知べし第十一在京齋場條に出せる式に凡在京齋場者云々先鎮ニ祭其地ニ先後ニ齋鋤ニ始掘レ地豎掘ニ院四角柱坎ニ卜部率ニ國郡司以下及役夫等ニ入ニ卜食山ニ採レ木即祭ニ山神ニ訖造酒兒先

執ニ齋斧ー始伐レ木然後諸工下レ手採ニ大嘗宮材ー之レ此又卜部率ニ部司以下雜色人等ー入ニ卜食野ー苅レ草即祭ニ野神ー訖造酒兒先苅次諸人下レ手苅ニ大嘗宮草ー之レ此云々其井二處卜訖御井者造酒兒始掘造酒兒井者稻實卜部始掘と見えたり此造酒兒井は儀式に童女井と所見たり此は造酒の用なるにて齋場御井は御飯の料なりと聞ゆ但齋場の齋院は云も更なり在京の儀齋場及大嘗宮を造るに齋部氏の預り仕奉らざる事は上古よりの儀なるを已に失へるなり此の造酒兒の仕奉る事多くは齋部の主る可き事な然らぬは中臣氏が恣に爲るより斯成たる事第十七條に云へるが如し　第十五酒米條に引る式に凡舂ニ黒白酒料米ー者造酒兒先下レ手次諸女共舂と有黒白二酒を仕奉る始を云るにて此ぞ造酒兒の主ト仕奉る職なりける第十七造大嘗宮條に引る式に前レ祭七日云々鎮ニ祭其地ー云々二國造酒兒各執ニ賢木ー著ニ木綿ー竪ニ院四角及門處ー訖執ニ齋鍬ー國別四柄綿以ニ布袋ー結以ニ木綿ー始掘ニ殿四角柱堀ー々別八鍬後諸工一時起レ手と有り在京齋場の状に同じ同條に引る儀式には此より前に十月[illegible]爲レ供ニ大嘗宮料材ー宜卜[illegible]司率ニ造酒童女物部人隨夫[illegible]ー向ニ卜食山ー祭ニ[illegible]ー云々祭訖造酒童女執レ斧伐レ[illegible]夫夫等終レ[illegible]向ニ齋場ー次各[illegible]ー云々[illegible]造酒童女[illegible]苅レ之夫等終レ之運ニ置等ニ向ニ卜食野ー祭ニ野神ー云々祭訖造酒童女執レ鎌苅レ之夫等[illegible]採ニ大嘗宮材ー苅レ此苅ニ大嘗宮草ー此齋[illegible]と有り式には卯十一條に[illegible]と云る故に[illegible]擧さるなり　第廿七條に引る卯日式行立次第に稻實卜部に次て造酒兒稻實公共に物部の人等の前に立て參入り廿八卯日條に引る式に造酒兒先舂ニ御飯稻ー次酒波等共不レ易レ手舂と有る此は朝夕の大御饌にて此にて終なり此は唯其御饌等の大旨を擧て云るにこそ有けれ其本文の續きを以て考ざれば違ぬ所多かれば其條々に就て知べし下此に倣ふ可なり○酒波は第六齋部條に御酒波一人多明酒波一人以上童女と有り儀式には大酒波一人多米酒一人と見えたり備造酒兒は黒白二酒を釀る長と成て仕奉るを其下に屬て釀み終るなる可ければ酒波の波は嘗にて釀と云と同じ意の古言と聞えたり多明酒波は大多米院の黒白二酒の事を掌れるなり有い御酒波の御は大の義なれば意富と訓べし多米酒波に對ひて大と云るなり備在京齋場なるは造酒兒の仕奉る事代の如くなるを大多米院にては其長として仕奉るなれば波は[illegible]其身の任として仕奉る事も約し造酒司式新嘗會白黒二酒料條には酒波[illegible]一人舂稻仕女四人耳有て造酒兒レ無に依は酒波と相作とて[illegible]仕奉る故なり　第七拔穗條に點レ田拔レ之先造酒兒次稻實公次御酒波次雜色人と有て稻實公よりは上に在り第十五酒米條に出たる凡舂ニ黒白酒料米ー者造酒兒先下レ手次諸女共舂と有る此に諸女と有は酒波寄走相作等を總たるが酒波は其上に立べき事云も更也第廿八卯日條に引る式に造酒兒先舂ニ御飯稻ー次酒波等共不レ易レ手舂と有り然るを行立次第に見えざるは式に稻實公の次に[illegible]女八人と有る儀式に次御膳足別案八脚と有る下に物部[illegible]と見えたれば此中にて仕奉るが故なる事第廿七條に注せるが如し○寄走は第六齋部條に引る式に篩粉一人と有て已上並女と有る其

一なり儀式には粉走二人と有を改て一人とは被成たるなる可し借篩師の篩字は義を以て塡られたるならむと思えて和名抄を閲に竹器類に篩和名布流比除レ麁去レ細之竹器也と見えたるが造酒司式なる踐祚大嘗祭供神料に絁篩十條と見えたる其を新嘗會白黒二酒料條に絁大篩三條の下に一條篩レ米二條篩レ酒と有れは白黒二酒を篩を以て漉して滓を去り又藥灰なも篩ひ漉す事などに仕奉れるなり又同式に汁糟一石粉酒一石と云事の有は漉して糟を去たる酒か粉酒と云と通えたり此耳ならず粟の殼を去たるを篩を以て殼を走らし去りて米と成し又搗たる米を篩ひて糠を走らし去て精米を分る等の事に仕奉れる也上にも引る第十五條なる舂二黒白酒料米ニ云々の下に諸女共舂と有れは其に仕奉る事論なく第廿六條なる造酒兒先舂ニ御飯稻ニ云々の事にも預りて仕奉れるを舂よりは篩ふの方其輕重からぬ故に省れたる者也かし第廿七卯日條なる行立次第に曰一瓶枠四枚箕四枚等の下にるは此料なる可くこそ然れば篩の篩も米の篩なる可し上云るにこそ其は舂口東二掛可し共に篩走と有る其下に依て當たる字歟又及此詞に粉走と有たる其篩に因れる也○灰焼は第六條齋部の下に引る式に焼灰一人と見えたり此は男を以て分供奉給ふなり灰焼を式にも第四十二條に引る儀式にも焼灰と有を同し儀式なるも第六條に引るには灰焼と見ゆ何れにも有べし第十六條に引る式に凡造酒司酒部一人率ニ焼灰一人駈使五人ニ入ニト食山ニ先祭ニ山神ニ焼ニ得藥灰ニ斛ニと有て藥灰は黒白二酒に混和る料也儀式には十一月上旬始醸ニ内院御酒ニ云々次各焼ニ藥灰ニ云々と見えたり第十七大嘗宮條に引る儀式に先レ祭七日鎭ニ大嘗宮齋殿地ニ其儀也神祇官中臣齋部ニ官人依レ次率ニ悠紀國司及稻實卜部禰宜卜部造酒童女焼灰等ニ云々干時焼灰率ニ造酒童女ニ參進童女始鑽ニ木燧ニ次稻實公鑽ニ出火ニ次焼灰吹レ火云々と見えたり此にては焼灰の方主と成る趣なり此を以思ふに焼灰は藥灰を焼耳ならず御火焼の事にも奉供るなりけり [illegible]の下に焼く木を灰木と云事祝詞講き又第六齋部條なる其[illegible]にも其[illegible]下にも且々云へりき[illegible]は第六齋部條に引る式に採薪四人と見えたり此も男なるか灰焼に屬て仕奉る者と聞えたり第廿七卯日條行立次第に引る式に薪十荷と有を儀式には長各四尺以ニ黒葛ニ東ニ兩端ニと有て常に正月十五日に供進ると其長同しきを以て思ふに此なむ大嘗宮の御竈にて採薪の仕奉れるならむを其も又卜食の山にて採つらめども具には記されざりける者なり第九禁守條に凡應レ採ニ大嘗殿材並御

膳拍二山及苅二菅草一野云々等八月上旬神祇官共二國司一卜定と見えたり（卜薪を卜食山に採つらむと思ゆる事は此に此文有を行立次第に薪十荷云々の次に槲葉二荷と有を以て知らる）○相作は本に後に作れるを鈴屋大人の相作なる可しと云れたるに由て改めつ第六齋郡條なる式に共作二人と有て已上並女と有る群也儀式には相作四人と有りしを後に二人には被改たる者也けり第十五酒米條に引る儀式に拔穗御稻幷雜物遷二納内院一次始各舂二御稻一造酒童女先レ之と有る割注に大酒波仕女等終レ之と有る仕女は此の相作なるを以て考るに造酒兒は其長と有れは酒波と相作とは其を補相て共に仕奉れる也此の文を式には造酒兒先下レ手次諸女共舂と有る共字を用ひて共作と被書たるを思ふ可し偖此共作耳二人なるは一人は酒波に屬て共に仕奉り一人は多明酒波に屬て共に仕奉ることと見えたり（凡て主たる者有て其物と共に物爲る人を相某と常多く云事也偖此共作は主々しき人に非るが故に造酒兒酒波等の事耳聞ゆれども共下風に在て何れの時も仕奉れりけむ事云も更なり造酒司式新嘗會白黑二酒新條に舂稻仕女四人と有も此の相作に同じかる可し）○稻實公は第六齋郡條に稻實公一人と有る此は男なるが造酒童女は黑白二酒の事に仕奉るを稻實公は御飯の事に仕奉る也（其は第十五酒米條に引る式に造酒兒先下レ手次諸女共舂と見えたる諸女は御酒波篩粉共作多明酒波等の女なるを稻實公は女ならぬを思ふ可し儀式には大酒波仕女終之と有り）第七拔穗條に引る式に凡拔穗者

云々臨レ田拔レ之先造酒兒次稻實公云々其拔訖於二齋院一乾收先割二取初拔四束一（四把爲レ束）擬供御飯自餘皆擬二黑白二酒一云々其行列者御飯稻在レ前自餘物次之稻實公著二木綿鬘一引道と有を儀式に就レ中以二先拔四束一別納二高萱御倉一（會日稻實公所レ負稻也）自餘爲二黑白二酒料一と見えて御酒と御飯との料を分たり第十一在京齋場條に所造稻實屋一字黑酒白酒屋各一字云々營造既訖收二御稻於稻實屋一但御飯稻者造レ棚別置と有て黑白二酒料稻も如此く稻實屋に先收置事也第廿七卯日條なる式の行立次第に稻實卜部一人在二中頭一次造酒兒と有て次御稻輿稻實公と引續て行立も御飯稻に仕奉るか故也第廿八條に引る式造酒兒先舂二御飯稻一次酒波等共不レ易レ手舂と有る御飯稻は右に引る儀式に納二高萱御倉一と有る細書に會日稻實公所レ負稻也と見えたれは御稻輿より下して大嘗宮の膳屋に持出る也けり（然れば此御稻は稻實公の舂へきを造酒兒酒波等の仕奉る事は此事に限らず凡ての事各々相助合て物爲る事なるが故に稻實公は其所に負て運び奉る耳なり偖此稻實と云ふ熟語を壽詞には唯に實と耳云り古文の巧なる事しるべし）○大嘗會乃齋場仁の大嘗會の三字意富通幣と訓へし偖大嘗祭とは卯日の神事に就て云ひ大嘗會とは辰日以下の宴會を云る事上巻の首に云る如くなるが其を祭と云ず其惣を兼て

大嘗會と云るも常に多在る此も其に倣るにて每年のも卯日新嘗祭辰日新嘗會なる事儀式式等を見ても灼きを又此彼を合せて常にも新嘗會と云か如し脩此の大嘗會は大嘗宮なとを指たるには非す齋場を云むとての序に云る耳也（古史徵に此文を引れて意富邇帶に會字を加へて書事は後なれば成文には會字を除きつと有は如何なる說ありての事なりけむ心得難き事なり第三十五條より次々に云を見る可し）齋場は在京齋場を云かとも所思ゆれども上に千秋乃五百秋爾瑞穗遠平介久安介久由庭仁所知食止事依奉と有に照應せて思ふに決く大嘗宮を云なるが此續きに持齋利波參來ヨと有は齋部より在京齋場に入事を云るなれば同じ事の重復（下にも黒）れるを以て此彼を合せて大嘗會乃齋場とは云也　在京齋場は（木白酒及大御膳奉る事は卯日の御神事と辰日の宴會とに二度奉る事なるを其一耳云ると此も同じ事なり）大御膳に供奉る稻實を收め黑酒白酒を其にて齋ひ釀り奉る所なり第十一條に引る式に凡在京齋場者預分設ニ兩處一悠紀在レ左主基在レ右兩國所レ進拔穗稻到レ京即先鎭ニ祭其地一訖造酒兒先執齋鍬始掃レ地幷掘ニ院四角柱一卜部率ニ國郡司及役夫等一入ニ卜食山一採レ材即祭山神一訖造酒兒先取ニ齋斧一始伐レ木然後諸工下レ手（採ニ大嘗宮材一准レ此）又卜部率ニ郡司以下雜色人等一入ニ卜食野一苅レ草即祭野神一訖造酒兒先苅次諸人下レ手（苅ニ大嘗宮草一准レ此）其齋場者分爲ニ內外兩院一以レ柴爲レ籬編レ木爲レ門內院所レ造八神殿一宇稻實屋一宇黑酒白酒屋各一宇云々外院所レ造多明酒屋一宇云々其井二處卜訖御井者造酒兒始掘造酒兒井者稻實卜部始掘其二院營造既訖收ニ御稻於稻實屋一但御飯稻造レ棚別置祭ニ御膳八神於內院一進レ上（其齋）と有て大嘗宮の齋場に立奉る物を調ふる所なるが故に此をも齋場と云事にて齋郡の齋院をも然云るに同じ（第八條に引る式に凡應レ採ニ大嘗殿材幷御膳柏一山及苅ニ萱草一野齋場地等八月上旬神祇官共國司卜定云々と有り玉勝間山吹卷に齋物は別に北野に於て其地を卜定めて搆造らるゝ事にて大嘗宮とは別なり九月下旬悠紀主基二國より齋參れる諸物も人も先齋場に詣て其所にて種々の事有て十一月祭の當日に至て齋場より大嘗宮に運奉る其行列など儀式に委しく見えたり云々と有とも此は在京齋場と大嘗宮とを兼て云る也熟々文意を探くり楽む可し）大嘗宮は天照大御神の大御命以て事依し奉らせ給ふ天津日嗣の瑞穗を萬千秋の長秋に聞食し始させ給ふ齋場也所以に神龜元年御紀大嘗宮條には齋宮と記され儀式には大嘗宮齋殿とも記させ給へり第十七大嘗宮條に引る式に凡造ニ大嘗宮一者前レ祭七日神祇官中臣忌部二官人依レ次立率ニ悠紀國司及雜色人等爲一列亦中臣忌部以下相別率ニ主基國司以下准上皆單行各自朝堂院東西腋門至宮地分列ニ左右一（悠紀在レ東主基在レ西）鎭ニ祭其地一云々二國造酒兒各執ニ賢木一著ニ木綿一竪ニ於院四角反門所一訖執ニ齋鍬一（國別門柱納以ニ布裳一結以ニ木綿一）始掘ニ殿四角柱

埳ニ埳別八鐶然後諸工一時起レ手其宮東西廿一丈四尺南北十五丈中分東爲ニ悠紀院ニ西爲ニ主基院ニ云々五日之内造畢即中臣忌部率ニ御巫等ニ祭ニ殿及門ニと見えたる是ぞ大嘗會乃齋場には有ける（然れば齋部なるなも在京のなも共に齋場と云ふ事はしも此大嘗宮を根本として云初たる事決き者なり）○持齋波利參來且齋部より在京齋場へ運び在京齋場より大嘗宮齋場に持參來る事を合せて云る也齋場と云より持齋波利と上下相應て云續けたるを以て重く嚴かに忌愼みて仕奉る事を知へし第六條に見えたる如く八月上旬齋部に於て大祓し御田を卜定め仕奉る物部の人等をも卜定め其齋院の地を鎮めて御膳八神を祭りて齋し九月下旬に及て御稻を拔穗に拔て京に至る時に麻并鹽水を以て清め假屋に收め第十一條に見えたる如く預て八月に卜食たる齋場の地を鎮祭り卜食の山野に入て各其神を祭て木草を採り齋場を造るに內院外院と分ち建て十月上旬に至て其內院に御稻を收めむ稻實屋及黒白二酒の屋共を造り又御膳八神を其に祭奉りて齋ひ第十五條に記せる如く其御酒を醸らむとして料米舂き井神竈神酒神等を祭り又十一月上旬に始て御酒を醸り始め第十六條に見えたる如く其酒に和る藥灰を燒としては山神を祭り第十七條に云る如く十一月中卯か七日先に大嘗宮を造奉る地を鎮祭り又木を採山草を苅野の神等を祭て五日の間に此を造奉り殿及門を祭て齋鎮め奉れるを十一月中卯日に至て齋實稻實共に持參出る事にて有故に持齋波利參來且とあるにて齋波利の言なむ最重かりける備參來且は大忌祭詞に今月某月諸參出來氐皇神前爾云々風神祭詞に今年四月諸參集氐皇神乃前爾云々と有如く大嘗の齋場に參出集ふ意なる也第廿七卯日條行立次第に云云と有は此の事を云なり（由庭と云ひ悠紀と云ひ由志理と云る由は何れも齋を深く忌愼みて嚴かに齋ふ由なるを合せ思ふに通ふ事有なも）○今年十一月中卯日仁は大嘗祭新嘗祭共に當日を被用る事甚々古き事と通えたり仁德天皇四十年御紀に是歲當ニ新嘗之月ニ云々又顯宗天皇御紀に白髮天皇二年冬十一月云々親辨ニ新嘗供物ニと有は何日とは無れとも十一月なる證也皇極天皇御紀に元年十一月丁卯天皇御新嘗天武天皇二年御紀に十二月云々侍ニ奉大嘗ニ云々人等賜レ祿と有は十一月なるを給祿を後に爲給へる也五年御紀に十一月乙丑朔以ニ新嘗事ニ不ニ告朔ニと有も日を云さる也持統天皇五年御紀に十一月戊辰大嘗神祇伯中臣朝臣大島讀ニ天神壽詞ニと有る大嘗は卯

日の祭訖て辰日宴會の時を云るなれども其祭の卯日也し證とは云ふへき也其次に十二月戊戌朔と有には十一月は大にて戊辰の朔なるを以見る時には十一月晦は卯日也けれども古例を改めて十月に行る可くも非るに就て思ふに十一月戊辰朔壬辰大嘗云々と有けむ然れば廿五日に丁（アタ）る、其は次に乙未賜宴公卿以下至主典云々と有には廿八日に當り其次に丁酉饗神祇官長上以下至神部卜部又悠紀主基國司以下至百姓男女并賜禄等各有レ差と有は晦なれは其月十二日と十三日二有を其等の理を取たる也卯日三有れは中卯を用ひ二有れは後卯を用る例の御定の如なり此より後の事は其御定遵はされば論ふ可くも非ねは猶深く上古を探るに天孫本紀神武天皇即位元年條に宇摩志麻治命十一月丙子朔庚寅初齋二瑞寶ニ奉ニ爲帝后ニ鎮ニ祭御魂ニ云々毎年仲冬中寅爲ニ例有司行ニ事と有を神祇令に仲冬寅日鎮魂と有れは既く文德天皇より以前に定有事の所知たるが僅に一御代二御代の例を以て例とは被定るましき事なれば實に其も神武天皇の大御代より始れる可きを大嘗祭式に凡十一月中寅日謂在ニ卯日ニ以前用ニ上寅ニ以前内外庶事整辨已畢御鎮魂一同ニ尋常ニと有て大嘗の年も新嘗の年も其前寅日に在て大抵並行はるゝ物の如くなるを以て推す時は神武天皇辛酉元年十一月丙子朔庚寅は鎮魂祭辛卯は大嘗祭也ける事著明し此事委曲に大嘗祭詞講義の卷首に云れば能々見合す可し丙子朔日より數へれば庚寅は十五日に當り辛卯は十六日に當れば中卯に當れり此年大嘗祭を行はせ給へり故に是年を西と云べきを爲ニ天皇元年ニと有る由等に

云るか如し　借其鎮魂祭こそは有けめ大嘗の大御政はしも高天原に事始給へる高千穗宮の舊き儀を受傳させ給へるなれば白檮原宮にて私に改させ給ふ可からざれば是ぞ決く天兒屋根命太兆の卜事を以て仕奉りて定奉り給へる者也けり凡て御世の例神武天皇の御世に創造れる由に記されたる事多きは總て中書に紀し給ひてたに其を弘め給へれはなれとも皆筑紫の大朝廷の傳式を行はせ給へる也予田に考得て大嘗祭詞講義に記るか如し但鎮魂祭は御世に始たるなれば此傚に非す此に平田翁の弘仁歷運記考に天照大御神皇孫邇々藝命を天津日繼の高御座に坐奉り給ひて天璽及齋庭の稻穗を事依し奉給ひて其天降り坐し初年彼賜はりし齋庭の穗をば御田に作て其十一月に初て大嘗祭有り是ぞ此御祀の起原也けり此は中臣壽詞の傳を以て云也是年太歳辛酉にて神武天皇即位元年辛酉迄通計二千四百一年なるが其間に日子穗々手見命鵜葺草葺不合命二御代は過ける也細井貞雄と云人の說に天皇命の御世所知看す初に天神地祇に御饗奉らせ給ふを大嘗祭と云て此御祀有し年を御世の始として大歳と云て此元年と數へ出る始也此を太歳とし稱ふは御世所知看て始て田御稻を所聞食し始め神等にも相嘗に奉らせ給ふ年なるが故に此を元年と數へて次々に許多の御年を行せ給ふ可き初年なるを以て太歳とは云也然るを神武天皇御紀に辛酉年春正月庚辰朔天皇即ニ帝位於橿原宮ニ是歳爲ニ天皇元年ニと耳記し

て是年也太歳辛酉とは無く此より前甲寅年の所に是年也太歳甲寅と有は記傳十八に五瀬命は葺不合命の第一の御子に坐せは父命崩坐てよりは此命ぞ天津日繼は所知看たりけむ然れば磐余彦命も此時は稻氷命御毛沼命と共に此五瀬命に奉仕て坐けむを五瀬命は未中州を言向終給はぬ間に早く崩坐て御業を終給はず磐余彦命其御業を成終て遂に天下を所知食ける故に彼命を主とし五瀬命を容に成て云るなりと說れたるが如くなれば太歳甲寅と有は彦五瀬命の大嘗祭有し元年也斯て神武天皇其御心を紹給ひて功竟給ひ後に大嘗祭を爲給へる年を指て天皇元年とは書せ給へり（古き傳書には此天皇條には彦五瀬命の太歳と天皇の太歳と太歳てふ事二所有しを書紀に撰取給ふ時始の太歳耳を其儘に置て後に所見し太歳をば元年と改給へれど猶舊に傚ひて爲二天皇元年一と斷り給へるは是所迄は彦五瀬命の太歳より數へ云る習例の殘れるを其任に爲二天皇元年一とは書れたりけむか）故是太歳を一年と數へて次々に二年三年と數へ崩坐迄を幾十年と計へ云ぞ上古の定格也ける」（以上取意）と云るは信に然る言にて日本紀は持統天皇に至迄即位の年の末に必是年也太歳某と記されたり然れば御代々々の元年即位の後に必大嘗祭有て其年を太歳と云ひ此を一年と數へ出る始と爲て其定まれる例なれば唯に太歳と耳云て殊に大嘗祭を行ひ給ふとは記されざる也倩邇々藝命の大御位は高天原にて天照大御神の即奉給ひし故に大嘗祭耳御天降の後に行ひ給ひ後の二大御代の太歳の事は物に所見ざれども此は定まれる例と傳滿し給へる者也（倩神武天皇の中洲を平坐る年の庚申又大嘗聞看し元年の辛酉なるが此より二千四百年前に高天原より葦原中國を平竟坐る年の庚申又邇々藝命の大嘗所聞看し元年の辛酉なりしに期らずも相符へり）と見えたる此二說甚美好く所思る任に此に用有る事の限を摘出たるなり中に信難き事も有は都て取らず唯邇々藝命の大嘗聞食と元年は辛酉にして神倭天皇の大嘗の大御政を行給ふ元年辛酉に至る迄二千四百一年と考徵されたるは神祇に質して違ふまじくぞ所思えたる（信難しと云說は天地未立さる間を一萬八千歳天地成定れる間を一萬八千歳二神國堅め坐し間を一萬八千歳天照大御神の天知看す初年を須佐之男命の國知す元年をも甲寅なりと云れたるなどは漢土の說には叶ふ方も有なめれども甚々恐き闇推なれば取らず大國主大神の曆術を始め給ひ定給へれば曆法の起神代に始りたる事は據べく又神代に于支の名有し由を知て事は足なむ）又天朝无窮曆に妙說有り其說に云御代御代の大嘗祭の時に中臣氏の宣る天神壽詞は邇々藝命の御世に始て此大祀有し後のを後迄傳來れる詞なるが其中に十一月中都卯日に云々仕奉利月內爾日時遂撰定弖獻留と云る詞有り高千穗宮の當昔大國主神の國避の時奉置給へりし年月日時に于支を配せる曆有し故に中都卯日とは云り（前に古史成文を撰べる時に月內仁と云より以下を取て十一月中都卯

日と云を後に加へたる詞なる可く思ひて捨たりしは今思へば劣(チヂナ)かりき其は此詞を御代詞々に用ひ給ふと爲ては其時々に定めらるゝ悠紀主基の國名又年號又此詞を宣る中臣の氏人の名などは替れども其餘の詞は皆往昔の任に古實を失はず傳はり來つる者なればなり偖天地の自然なる年の運の初なる冬至の日を以て歲の日數の始と爲給へるが建子の節即今の十一月ぞ高千穗宮に天下所知看し三御代の正月には有ける其は邇々藝命い元年辛酉歲より神武天皇の東征七年庚申歲迄二千四百年の間なり然れば其十一月中都卯日は今の九月なるが其朔は壬午にて大月なり神武天皇の即位元年辛酉歲よりして建寅の節即今の正月を以て正月と爲給へり以上六十五章七十章七十一章採要と有れば今の正月より數へて十一月に大嘗祭新嘗祭を行はせさせ給ふ事は白擣原宮より以降の例なりけり然れども皇大神に奉らせ給ふ神嘗祭は猶建子なりし古例を用給へりけむ今に伊勢太神宮のは九月なるぞかし太神宮の神嘗祭と共に祭らせ給ふ神猶有り四時祭式九月祭條なる伊勢官幣の次に御巫奉齋神祭云々御門巫奉齋神祭云々座摩巫奉齋神齋云々生島巫奉齋神祭云々右御巫以下諸祭並於神祇官齋院祭之と有り祈年祭月次祭詞等の講義に說る如し伊勢太神宮に次ては殊に齋奉らせ給ふべき神なる故に並祭らせ給ふるは自餘の諸神よりは殊に重、祭らせ給ふべき由有るべなり若て神名帳に此神々を並大月次新嘗と有れば此度を過て入而十一月に新嘗の官幣に預らせ給ふ事にて太神宮も此に同じ然れば建子の歲也し舊儀を存して九月に祭らせ給ふ上に猶又十一月にも其祭仕奉らせ給ふ事は高天原に事始定給ふ天津神籬の由に縁て殊に尊崇奉らせ給ふ事講義に說る條々を深く考ふ可き者なかりし○由志理伊都志理(ユシロイツシロ)は齋實嚴實にして上に大嘗會乃齋場仁持齋波利參來豆と有る物實にして下文に謂ゆる悠紀主基乃黑木白木乃大御酒と天都御膳との事なるが其は辰日の宴會に天皇命の聞食す直會の所の文なる故に此には重復れるを省て其物名は下に讓りて齋實嚴實とは云るにて彼高天原にて聞食す齋庭の穗を吾御子に御せ奉らむと勅給て事依し給へりし狀を擬はせ奉給ひて此卯日に大嘗宮の悠紀主基の齋場に天照大御神に薦め奉らせ給ひ皇御孫命の享給ひ天津日嗣の大御世始と爲給ふ物なるを以て齋と云ひ嚴と云て其實(シロ)を稱へたる也然れば此大嘗祭はしも先神に祭らせ給ひて天皇の受賜はらせ給ふ事なるを唯に御祀と耳心得たる人も有り又天皇の聞食す御事と耳心得る人も有は其一を知て二を忘れたる者也委しくは第二十八條を見て知るべし偖由志理の由は齋場齋殿齋服殿齋斧齋鉏齋柱又神名にも忌火武主比神と申し又伊勢の儀式帳には湯鍬湯種など有り何れも齋の義なると物に从(ソク)云は萬を齋ひ愼み清まはりて物爲る事上に悠紀の下に說るが如し故又神を祭る主たる人を齋主と云ひ齋戶忌瓮忌矢なども云り高橋氏文には伊波比由庇閇天と同し狀の語を重ねても云り又神今食を神齋とも書たり記傳三十に云々萬葉十九に水上者地往如久船上波床坐如大神乃鎭在國皆(イハヘルクニゾ)と有は同卷に大船爾眞梶繁貫此吾子乎韓國邊遣伊波敝神等と有に依て鎭在の訓を思定む可し同反歌に四舶早還來等白香著朕裳裾爾鎭而將待と有る此鎭字をも伊波比と訓べし十五に

（眞幸而伊毛我伊波比作役又家布可安須可登伊波比乎事多牟又伊波比之寶伊波比許曾都良奈牟之路多倍乃阿加許呂毛迺乎曾理掛加ヶ伊波敝云云又十九に立高香我伊麻左護之可島能人著和禮乎久伊波比氏麻多牟など猶多し）又物を造仕奉ル氏に忌部と云り古語拾遺に太玉命所レ率神名曰天日鷲命（阿波國忌部祖也）手置帆負命（讃岐國忌部祖也）彦狹知命（紀伊國忌部祖也）櫛明玉命（出雲國玉作祖也）天目一箇命（筑紫伊勢兩國忌部祖也）と有て玉作に耳忌部と云ざれども大殿祭詞に齋玉作等と見えたれば異（カハリ）無し祈年月次大嘗等詞の終に辭別忌部能弱肩爾太多須支取掛氏持由麻波利仕奉禮留幣帛乎云々の類例を考合せて此由の言義を曉る可なむ有ける（忌部と云は齋を奉る種々の物を造作り又然らでも凡て齋潔清まはりて事を爲る職掌に就て云るが次に持齋まはりと云て下に幣帛を云る文意を熟思はゞ灼然ならむ）伊都志理の伊豆は古事記伊豆能賣神の傳に伊豆は汚垢を滌祓て明く清まりたる意にて明津（アキツ）の約たる言也例ば神武天皇御紀に嚴瓮此云ニ怡途背（イツベ）ト註し又時勅道臣命令以ニ高皇産靈尊ヲ朕親作ニ顯齋ヲ用レ汝爲ニ齋主ト授以ニ嚴媛之號ヲ而名ニ其所レ置埴瓮ヲ爲ニ嚴瓮ト又火名爲ニ嚴香來雷ト水名爲ニ嚴罔象女ト糧名爲ニ嚴稻魂女ト薪名爲ニ嚴山雷ト草名爲ニ嚴野椎ト天皇嘗ニ其嚴瓮之糧ヲ云々又垂仁天皇御紀に以ニ天照大神ヲ鎭ニ坐於磯城嚴橿本ニ而祠レ之云々又出雲國造神賀詞に伊都幣又伊豆能眞屋又伊豆能席など有り是皆神を祭時の事にして齋ひ清淨つゝる意を以伊豆とは云なり又伊都久伊波布伊牟なども本は穢惡を除去て清明く爲る意なれば皆此伊豆より出たる言也又齋忌齋庭などの伊豆も同意にて語も本一也此神は御禊に依て穢惡き禍事を神直日大直日に直し清めて直く清く明く坐る御靈也（伊豆に嚴字を書紀に當用たるに就て伊都を嚴と心得るは誤なり嚴は健き事を云れば本より別なり嚴字なしも書たるは嚴くしく重く忌清むる意を以てなり云々以上採要）と有にて通えたり借有の説其に就て猶又思ふに由も伊都も本一の意より語の相近きは然る物から齋は忌愼みて汚穢を遠く避る意嚴は汚穢を滌祓て明く清まる意なる可くぞ所思たる（本より末を云と末より本を云ばかりの差異は有る事なり猶上に云る公紀言事の註及神賀詞講義に就て考合す可なり）志理は實にて大嘗宮の齋場に奉出す物を云て齋實嚴齋なりと云説は出雲神賀詞に神乃禮自利臣乃禮自登御禱乃神寶獻良久（登）奏と有と次に其條目を分て白玉能云々赤玉能云々など種々の神寶を並云て其終に御禱神寶乎擎持氏神禮自利臣禮自登云々と有は禮の實に物を捧奉るを云る也是を以て由志理伊都志理の志理も下に持恐美恐美云々と有を以て辭には非ずて物實なる事を知れる也（玉勝間に由は齋伊都は嚴にて共に齋清めたる事なり」と云れたるは尤なれ共志理は齋まはり清まはりの如き辭を聞えたり」と有は考漏されし者也けり若志理の辭（ハタラキコトバ）ならむには由志眞牟伊都志眞牟などゝも活へ待なれ共祭詞古今に聞えざる上に次に持恐美恐美へ亘れるは

崇字の以の意に非ず物を持の崇なれば崇理を辭と爲ては叶はず 備物に賓と云は崇神天皇御紀に取ニ倭香山土一裹領巾頭 祈曰ニ是倭國之物實一則反ヒ之物實此云ニ望能志呂一と見え雄略天皇御紀に三諸岳神の事を記されたるに此山之神爲ニ大物代主神一と見え又俗言にも代物など云る是なり然れば此なる由志理伊都志理はしも齋の物實嚴の物實にて第廿八條に見えたる卯日に獻る黑白二酒及御膳は更なり兩國の倉代物等をも合せて云事明らかなる者なり 由志理の事の委しき說は遣唐使時奉幣祠及出雲神賀詞講義の禮代禮白利の下に委く說るを見べし ○持恐美恐美毛の持は上に持齋波利參來且の持に同しくして由志理伊都志理と云る齋部より仕奉る物實を持擎るを云なれば常に以など輕く添云とは違ひて其意甚重し 常に其物を指ながら輕く云ふは古事記に[illegible]以伊都久神也と有などは伊都久神也と云所に以の言を添て其言を[illegible]に爲る持にて實物を具へて持い意には非るなり如此く同じ言ながら其用意異なるを思ふべし 例は祈年月次等祭詞に此六御縣爾生出甘菜辛菜乎持參來氐又遠山近山爾生立留大木小木乎本末打切氐持參來氐神主祝部等受賜氐事不過捧持奉登宣大忌祭及風神祭又伊勢の詞共に宇豆能幣帛乎令捧持氐大殿祭詞に本末乎山神爾祭氐中間乎持出來氐又出雲神壽詞に御禱神寶乎擎持氐と云ひ大祓詞に大海原爾持出奈武又持可々呑牟氐又持佐須良比失牟氐と有など罪穢を實物として持却ふ由なり下に四國卜部等大川道爾持退出氐と有を以知べし然れば此の持恐も大嘗宮の齋場に物實を持擎けて恐(カシ)懼まる義なり 同じ持にても上なる持齋波利などの如きは[illegible]利の方重きが故に持は[illegible]以伊都久の持に近かるなり大[illegible]に齋玉作等我持齋波利[illegible]波利なども同じ備大祓詞の[illegible]に天津[illegible]以氐云々など云るは用前の意なり然れ其時も以用ふ言の本に同じければ別なる義は無れども物に持と云と云に持と云と其[illegible]有る耳なり ○清麻波利仁奉仕利は上なる由志理伊都志理の物實をなり上に持齋波利と云るに對へて云るなり又大殿祭詞には齋玉作等我持齋波利持淨麻波利造仕禮留瑞八尺瓊能御吹支乃五百都御統乃玉爾齋內親王奉入時詞に依恒例氐三年齋比清麻波理氐御杖代止定氐進給布事波云々なども重ねて云り備も齋も嚴も清も同じ狀なる言を重ね云る物の如く我も人も思ふ事には有れども若同意の言ならむには然計り文を成て云べくも非れば猶別義有べく思成て考ふるに常も云如く清は穢と汚との反なりけり 孝德天皇御紀に[illegible]名一と見え續紀[illegible]十四詔に[illegible]汚奴止天[illegible]之奈波[illegible]未[illegible]我名[illegible]なとある[illegible]も[illegible]なと多く云[illegible]なり下に云を見べし齋と嚴とは已に上に說たれば今云はず 大祓詞に雜々罪乎祓給比清給事乎云々遺罪止祓給比清給事乎云々大祓爾祓給事乎云々遷奉太神宮祝詞に雜御裝束物云々乎儲備天祓清賣持忌波利氐云々又內外宮儀式帳共に職掌

條に右人行事補任日云々後家之雜罪事祓清弖侘人火物不レ食見レ目聞レ耳言語忌敬弖宮內仕奉と其人々の條下に云ひ月次祭神嘗祭條に大贄乃淨米乃大祓仕奉然湯貴備奉所爾持參入など多かり何れも罪に在れ□に在れ先解除て後に淸々しくなる由に云り唯物の潔き狀を云に伎與久伎與志と云とは同じくして異也萬葉二十に知波夜夫流神乎許等牟氣麻都呂倍奴比等乎母夜波之波吉伎欲米都可倍麻都里弖と有り今も掃淸むとも祓淸むとも多く云ふ事なり然れば此の淸麻波利仁仕奉は右の物部の人等の齋郡より在京齋場に到り大嘗宮の齋場に齋賓嚴實を持參出來て献るに重く齋愼しみて萬の汚き穢を祓て淸く嚴かにして仕奉るを云なり祝詞講義にも說たれども猶言の意を盡さゞりければ今は叢雜(クダクダ)しき迄に云を見む人怪しむ事勿れ

月內仁日時遠選定弖献留悠紀主基乃黑木白木乃大御酒遠大倭根子天皇我天都御膳乃長御膳乃遠御膳止汁仁毛實仁毛赤丹乃穗仁毛所聞食弖豐明爾明御坐止天都神乃壽詞遠稱辭定奉留

月內仁日時遠選定弖献留は上の太兆乃卜事遠持弖奉仕弖より應きて今年十一月中都卯日爾云々と有る是なれば其前に云べき所なるを如此有は如何にと云に今悠紀主基の大甞の供物を献ることそは卯日なりければ其献る迄の間の事は悉くに時日を卜定めて仕奉れりければ其事を合せて此に此言を置たるにて前後に少かの弛み無く文意上下に貫通りて奇異に靈しく整へるは天兒屋根命の高千穗宮に事始て仕奉り給へりし古文の任なればなり第六齋郡條に引る式に卜ニ定田及齋場雜色人ー第七拔穗條に九月下旬到レ京所ニ卜定齋場院之外預作ニ假屋ー暫收ニ御稻第十五酒米條に十月上旬拔穗御稻並雜物選ニ納內院ニ次始舂ニ御稻ニ云々十一月上旬始釀ニ內院御酒ニ次各燒ニ藥灰ニなど有を始として卯日に献るに至迄に悉く時を卜定めて仕奉らざる事無を思ふ可し然れば十一月中都卯日を以て大嘗の日と定め給ひ第卅二卯日悠紀條に引る儀式に亥一刻供ニ御膳ー四刻撤レ之第卅三主基條に寅一剋供ニ主基御膳ー進退亦如ニ悠紀ーと有る時剋等の御定有て萬千秋が長秋に改易させ給ふまじき常典と成れる事はしも豈少緣の所由ならめやも高千穗宮の御卜定になむ依れりける然れども卯日に至る迄は仕奉る御政は御世々々に卜定めて用ひ行はせさせ給ふ事云ふも更らなり今は卯日の事を云るなり　○悠紀主基乃云々は上に謂ゆる各齋郡の稻を以て在京齋場にて仕奉れる大御酒大御膳を献る事を申述に其國郡は上に云れば唯名目を出せるなるが悠紀乃國主基乃國乃と云むが如く又朝乃大御饌夕乃大御饌乃とも云むが如し如此考定て熟思ふに右の如く悠紀主基の大御饌仕奉らせ給ふ事はしも大小の差こそは有けれ神今食新嘗祭等に謂ゆ

る朝大御饌夕大御饌なる者なり其證は神今儀式新嘗同レ之に乗輿御神今食院云々神祇官中臣齋部引ニ御巫一供ニ奉大殿祭ニ云々亥一刻薦ニ御膳ニ云々寅一刻薦ニ曉膳一云々還ニ御本宮一訖祭ニ大殿一と見え第十七大嘗宮條に引る式に造畢即中臣忌部率ニ御巫等一祭ニ殿及門一と有て其より神祭有て第卅四還宮後鎮條に辰日卯二點神祇官中臣忌部引ニ御巫等一鎮ニ祭大嘗宮殿一と見えたる如く何れも其前後に大殿祭を令行給ふ詞なるが其詞別に皇御孫命朝能御膳夕乃御膳供奉流比禮懸伴緒襁懸伴緒乎手躓足躓不令爲氏と有を以て知るべし大殿祭は御殿の内に禍々しき事在せず平けく安らけく守給はむ事を乞祈て言賀ひ爲させ給ふ御祭なるに如此く御膳の事に就て祈り申さるゝは其殿内に於て大嘗を聞食むとての事なる由已に大殿祭詞講義に云るゝが如し備右の二の伴緒の采女と膳部を云る事其詞にても說き此第卅二條第卅二條に云り第卅四條に引る江次第に天皇還廻立殿之後采女進ニ南戸下一申云阿佐女主水夕曉乃御膳平爾供奉止都申云々寅一刻供ニ曉膳一と見え又上に引る儀式に薦ニ曉膳一とも見えたる曉膳は夕膳に對へるなれば夕乃御膳に對へては曉乃御膳とも申せりしにこそ借予常に云如く神廷朝廷の大御祭事一にして上古より以來易る事無く行はれ來つれば何事も同じきが故に太神宮儀式帳六月十二月月次祭條に十六日夜湯貴御饌祭供奉云

云同日夜半爾人別令ニ備滿持一弖朝大御饌夕大御饌云云内院供奉云々退以十七日平旦朝御饌毛如ニ上件一云云仕奉と有を神嘗祭條には同し事を亥時始至ニ于丑時一朝御膳夕御膳二度供奉と有り神廷にては亥時と丑時となるを朝廷にては亥と寅となるは御儀式共多く渡らせ給ふが故なめり然れば悠紀御膳は卯日にて夕乃大御饌也主基御膳辰日にて朝乃大御膳也引續きて豐明節會は直會にて中臣壽詞は其時に當て宜り種々の歌舞仕奉る事も亦神廷にも其狀有りて大凡異らざるは高千穗宮より水垣御世に至る迄は神と皇と同殿の内に御在しゝかば其儀式等（サシヒキ）も本は一也けるを互ひに世を經る間には時に取て取捨も有けむを後の例と成れる事も多かんめれば此を以て彼に校へ彼を以て此を考る時は甚々信もしくなむ知らるめる太神宮儀式帳月次神嘗祭條に十七日平旦朝御饌供奉云々於ニ大神宮奈保良比所ニ参入御食奈保良比爾宜大内人并ニ物忌内人等及物忌ノ母等戸人男女等皆悉參集侍然後奈保良比仕奉其歌云々供ニ奉御饌一と有り其奈保良比所は直會殿の事にて大神宮式に直會殿と有る是なるが朝廷の豐樂院トヨノアカリノミヤに同じ但此は事の序に皇大神宮のを以て云に此こそ有れ止由氣宮の式も如此くなる事此詞講義に記せる如し考成て思ふに職員令大嘗義解に謂下嘗ニ新穀一以祭中神祇上朝則諸神之相嘗祭夕則供ニ新穀於至尊一也と有る朝則云々は右の悠紀主基の國より供奉る夕曉の大御

饌を云ひ夕則云々は其直會の豐明を云なり然るは然るは引續きて行はるゝ故にこそは卯日と云れ主基御膳は寅刻なれば既に辰日の分なり淸和天皇實錄に貞觀元年十一月十六日丁卯云々親奉ニ大嘗祭ニ十七日戊辰未ニ鷄鳴ニ大嘗會祭禮既訖と見えたるを思ふ可し又光孝天皇御紀に元慶八年十一月廿二日己卯天皇御ニ朝堂院齋殿ニ親奉ニ大嘗祭ニ云々廿三日大嘗會祭禮已訖云々と有を以知べし若て相嘗とは天皇の新穀を聞食すに就て公事根源に云れたる如く伊勢天照大神を勸請申されて天皇の大御身自供らせ給ふ也由奉幣を奉らせ給ふを以知べし借淸和天皇實錄に貞觀元年十一月丁卯車駕幸ニ朝堂院齋殿ニ親奉ニ大嘗祭ニ陽成天皇實錄に元慶元年十一月十八日乙卯天皇云々自供ニ大嘗祭ニなども有て天皇の大御身親大御神を齋き祭らせ給ふ大御祭とは申す中にも天皇の御方を主として相嘗とは云なりけり（今も古も然にて神事を行ふに就て祝事を成し又祝事に就て神を祭る事常に多かり然れば此も然にて天皇ノ新嘗聞食す祝事に就て相嘗の神を祭らせ給ふなり）相とは相殿相作相伴どの如く其主たる者と共に並ぶ由なるを思ふ可し然れば神と君と饗を共に爲給ふ由なりけり其は下文に皇神等母千秋五百秋乃相嘗と有に皇神等母と有る儲にて知べし第卅二爲御膳料に引る儀式に采女六人各執ニ供神幷供御雜物等ニ又膳部六人各執ニ供神幷供御雜物等ニと有は相嘗奉らせ給ふ供神の料と大嘗聞食す天皇の御料なるを云り又薦享已訖撤亦如レ之と有る薦は相嘗の神に薦奉給ふ也享は天皇の享させ給ふなり江次第には此を細に云て御膳を立奉る所に最姬取ニ先所レ立之御箸ニ收ニ於本筥ニ更加ニ御箸於御飯上ニ天皇頗レ低頭拍レ手稱唯執レ之差レ飯如レ常最姬目ニ次姬ニ供ニ御酒ニ八度云々と有は天皇の所聞食すなり然れば右の朝則諸神之相嘗祭とは天皇の御事を兼たる文なること灼然き者なり是ぞ謂ゆる大嘗祭にいは有ける（同條に引る宮主秘事口傳抄に御箸六前と有て註に五前者神新一前者主上御新居ニ折敷ニ也なども見えたり先には第廿七條に引る延喜式に卯日平明班ニ幣帛於諸神ニと有る其は四時祭式十一月祭條に相嘗祭神七十一座と有る此を被祭るならむと思ひしは猶足らざりけり）夕則供ニ新穀於至尊ニ也とは豐明節會なるが此は神事を畢させ給ひて其解齋（ナホラヒ）の供御を聞食し又臣下にも賜はる事也光孝天皇實錄に元慶八年十一月廿二日己卯天皇御ニ朝堂院齋殿ニ親奉ニ大嘗會祭ニ先御ニ悠紀殿ニ後御ニ主基殿ニ王卿百寮小齋大齋宿侍廿三日大嘗會祭禮已訖天皇幸ニ豐樂院ニ云々と見えたる是也此解齋の節會等を悠紀國と主基國と更らに仕奉る事第卅

四條より第四十條に至迄に次に註るが如くなれば今云ふ限に非ず是ぞ大嘗會と申にて神事ならざる故に然は記されたる也ける先には此朝則云々夕則云々と有ばか曉共に天皇も新嘗聞食して神にも相嘗たる侍らせ給ふなれば文に朝則云々夕則云々と記されたる者ならむと思ひしは悪かりけり新大嘗祭講義にも且々云りき　○黒木白木乃大御酒遥云々は上に由志理伊都志理持恐美恐美母清麻波利爾奉仕利と有に應へて卯日の大嘗祭に皇神等に奉らせ給ひて天皇の聞食す御祈を云ひ下に天都神乃壽詞乎稱辭定奉留は辰日宴會の度の事なれば其に照りて大嘗會に天皇の豊明聞食すに就て親王以下諸司に宴を賜はする御祈をも合せて云る也此詞の中間に在て両方に亘りて其文紛らはしからざるぞ妙なりとも妙也ける然れども此は豊明節會の方を表にして云るが故に其方重き云下に云が如し卯日大嘗祭の方にては由志理伊都志理と云て上に名を顯はさゞるなり　借黒木白木と云へ黒白は正字にして木は假字なり儀式には黒酸白酸と記され續紀には黒紀白紀三代實録には黒支白支造酒司式には黒貴白貴と種々に作るは何れも假字なる故なり萬葉十九四十五丁新嘗會肆宴歌に天地與久萬氏爾萬代爾都可倍麻都良牟黒酒白酒乎と有は正字を以て書る者なり借酒を伎と云は米の眞氣を釀し成せる由なり佐葡と云も眞氣なる事云も更なり然るは米を蘖を以て欲くは飯と成る其を蘖と云を其體をば漉し其精を去て其氣を水に存めて用ふる故に氣とも云ひ貌體には眞氣と云にて漢字の音に氣と云と同義なる言なり然れば久志と云も氣汁なる可し下に汁に賓にと見え祝詞に汁爾母頴爾母など多在に照合す可し此等の事は大嘗祭祝詞大殿祭詞及太神宮詞條に註せるが如し記傳卅一久志能加美の下に横井千秋が説を載て久志は酒の本名にて御歌に由登富貴志の酒黒酒白酒など云ふは此久志の約まれるなりと云れたれは能も考ずして云はれたる者なり乎が意を以見る時は久は氣志は汁にて其は物の成立の本より云名久志と續ては奇奥(クシ)とも藥(クシ)とも成て其成立る上の作用を云とこそは所思たれ　借上古の酒は製樣の物に見えたるは彼神代紀に吾田鹿葦津姫以卜定田號曰狹名田以其田稻醸天甜酒嘗之と有る甜は多米都物の多米にて食酒なり古事記應神段に又吉野之國主等云々於吉野之白檮上作横臼而於其横臼醸大御酒獻其大御酒と有を神紀十九年條には以醴酒獻于天皇と有る醴酒とは實の濃き酒と云事にて醇酒の類なり然るを和名抄に醴和名古佐介一日一夜酒也と見え字書に醴甜酒也と見えたれば其同物なる事知れたり太神宮行事記に白散御饌御酒醴水入合奉留と有も其類なり萬葉十六十三丁に味飯乎水爾醸成と有を以其一夜酒なりし狀を知べし同一十三丁に味酒三輪乃山と連けたるな

ども味酒實と云事にて醴酒を云事本よりなり（和名抄に醴酒日本紀私記云甜酒多々佐介酒味長也と有る事を字書に長味厚味又醇なりと註し和名抄に醇酒日本紀私記云加太佐介厚酒也と見えたり然れば食す酒と云意を以て甜酒と云ひ實の厚きを以て醴酒と云ひ其狀を以て醇酒と云るにて如此く字は種々に書別つ事には有れども其同物なる事知べし字書に甜を占に作て甘美也と云ひ俗に云甘酒是なり）所以に臼を以てぞ舂たりける古事記（詞志比宮段）なる酒樂の大御歌に許能美岐袁迦美祁牟比登波曾能都豆美宇須邇多豆々云々と詠せ給ひ右の吉野之國主等の歌に加志能布邇余久須乎都久理余久須邇迦美斯意富美岐と謠ひ第十一在京齋場條に引る式黒酒白酒屋各一宇云々臼屋一宇と見え造酒司式新嘗會白黒二酒新條に九月二日省并神祇官赴二集司家一卜定云々即祭二其殿地神一云々祭訖木工寮造二酒殿一字臼殿云々と有を合せ考ふ可し第十五酒米條に引る式に臼四腰杵八枚を見え造酒司式踐祚大嘗祭供神新に織篩十條（別一尺）と有るなどは造酒兒の掌て酒波相作の醸れる御酒を篩粉の仕奉る新なる事已に註るが如し（皇太神宮儀式帳に清酒作内人云々禰内人作進二三口一仁礁二舂白御酒一備儲供奉と有をも合せ考ふ可し此を以て下には大御酒の事を汁仁毛と云り猶第十七條にも且々云る事有き）俗造酒司式新嘗會白黒二酒新條に官田稻廿束（畿内所レ進）云々其造酒者米一石（令女丁舂官田稻）以二二斗八升六合一爲レ蘖七斗一升四合爲レ飯合二水五斗一各等分爲二二甕一甕得レ酒一斗七升八合五勺熟後以二久佐木灰三升一（採二御生氣方木一）和二合一甕一號稱二黒貴一其一甕不レ和是稱二白貴一（其踐祚大嘗會遣二酒部二人於二國齋場院一以預二其事）と見えたる官田稻廿束は田令義解に得二米五升一也と有れば米一石を得る其を以釀る事にて右の二甕の酒と成れるなるが大嘗の時は此に准らへて其員數等の多きにて其釀様は此に同じきなり其は第七拔穗條に引る式に先割二取初拔四束一（四把爲レ束）擬二供御飯一自餘皆擬二黒白二酒一摠盛以レ籠籠別一束以二一籠一爲二一荷一云々令二驅使丁荷一每十荷子弟一人領レ之と見えたり其糟を去て二甕に得る所即酒にて謂ゆる汁なり（第十五條に引る式の第四日の下各二口黒酒新二口白酒新二口並大膳職所レ充と見え第廿二雜物條なる式に大膳職所レ備甕八口は兩國を合せたる數なるが口別酒一石五斗と見え第廿七卯日條行立次第に引る儀式に黒酒二甕の下に各納二酒一斛五斗一と有は右の造酒式の法にて稻廿束の米一石より三斗五升七合を得るなり然れば米一石五斗の酒五斗三升五合五勺計なり右の黒白二酒料米六石にて此稻百廿束計にもや成らむ然れば右の第七條に四把爲レ束と云ふ依れば一人持八把なり凡右の驅使丁百五十人計なる可し）俗黒木に久佐木灰を和合する事を兩宮儀式帳に攷るに其事見えず若しくは古事記（詞志比宮段）なる神の御諭言に我之御魂坐二于船上一而眞木灰納二瓢一亦箸及比羅傳多作皆々散二浮大海一以可レ度と有る眞は奥の誤納字は酒を誤れるにて此の黒酒ならむか其に箸と葉盤を添て海中の諸神を祭らせ給ふ可しと仰給へる者にて眞木には非る可くぞ所思たる又

は納レ匏の匏は酒なる事を箸ニと葉盤とにて聞せ給へるにも有べし葉盤は酒を盛並て饗するなる事第廿二條に註せる如くなり　和名抄に蜀漆和名久佐木一云夜末宇豆木乃根恒山苗也と有り第十六條に引る式に凡造酒司酒部一人率ニ灰焼一人駈使五人ー入ニ卜食山ニ祭ニ山神ニ採ニ得藥灰一斛ニと有れば藥とも成て人の病を除く可き能有にや又例の酒を久志とも云へは口久志に和する灰と云事にや何れにしても高千穗宮の昔より有やう有て如此く物爲させ給ひ來る者なる可し薩摩國八百山内膳成云けらし彼國と肥ノ國の界は山を以て爲る事なるも霧島の頂山を焼に峰を限として肥後の方には茶木自然に生ひ薩摩の方には蜀漆生て此と彼と少も交り亂るゝ事無しと云り若くは宮崎の朝御陛など大嘗の新に採らせ給へりし吉例を延て山神の奉る御貢と皇御孫命の長御代に令斯給ふか　白酒は右文に不レ和是稱ニ白貴ーと有るその如くなる可し中原康富記には二酒共に藥酒なりとして白者自其色也黑者上聊振ニ烏麻粉ーと有る黑酒のことは故實に違へる如くなれども白者自其色なりと有の式文に合り然るを第十六藥灰條に引る儀式に得ニ藥灰一斛ニ以ニ藥灰ニ和ニ御酒ーと有る本註に五斗和ニ内院白黑二酒ニ五斗和ニ大多米院白黑二酒ーと有は式文に合はず然れども造酒司式を以據と爲べきなるにや　皇太神宮儀式帳式には白御酒黑御酒と御酒とも白志乃御饌黑志乃御饌とも見え止由氣宮儀式帳に白酒を火無浄酒(ホナシノキヨサケ)黑酒を火向神酒(ホムケノミキ)と有り思ふに火無とは灰を和へざるを以て云ひ火向とは灰を和へたるを以て火を向へ入たる由の名なる可し太神宮六月々次祭詞由貴能御酒の下見合す可し　偖右の黑白二酒共に卯日の大嘗祭料と辰日の大嘗會料と二様に釀る事にて第十一在京齋場條に謂ゆる内院黑白酒屋なるは祭料なり外院多明酒屋は會料なり第十五酒米條に凡春ニ黑白酒料米ー云々は内院のなり釀ニ多明酒ーとは外院のなり第廿七卯日條行立次第に黑酒二瓱白酒二瓱と有は内院にて供奉れるにて卯日料なり其後方に黑酒十缶白酒十缶は大多米院にて仕奉れるにて宴會在度の料と聞えたり　大多米院の大は小齋大齋(チミオホイミ)などの大にて眞齋のよりは仕奉る職の嚴重ならざるを云なり若て右の内院の黑白二酒は第十一條に見えたる拔穗を以て仕奉り外院の黑白二酒は第十五條に其職ニ多明酒ニ者用ニ國御米卅斛ーと見えたる是なり五度の宴會は辰日に悠紀と主基と各一度巳日に悠紀と主基と各一度午日宴會とを云ふ右の神酒のに依れば此も一度に黑白二缶宛なるなり　○大倭根子天皇我天都御膳乃長御膳乃遠御膳止は上に天都御膳遠長御膳乃遠御膳止云々を受たる語なるが其には天都御膳遠と云ひ此には天都御膳乃と云は如何にと云に上なるは瑞穗遠平久介安久介所知食と有る其を指たるにて其物其任に高天原の御膳なるなり此は如此依奉志任々仁所聞申庭乃瑞穗遠云々悠紀仁近江國野州主基仁丹波國氷上遠齋定豆云々大嘗會乃齋場爾持齋和波參來豆云々獻留と見えたる其本は天神の事依し奉給へりし物なれども此國土に成れる物なるが故に天都御膳と所聞食せと申す義なれば同し云續けには有れども遠御膳止と有る止の辭究めて重くして天都御膳止爲氐と云程の心にて上なる天都水止所聞食

と見えたるに同しき者なるなり其は宮御饌奉の御膳常水は宇治君國乃水爾天都水還抓且奉仕と有る水に高天原に在る所の水なり下に此還持天天都水止所聞食と有は此國の水なれども其を天都水と爲てと云義なる例を思ふ可なり借此は黑木白木乃大御酒遠より受たれば酒を耳指が如くなれども然らず大御饌の事を本として右の二を兼たるなる事上文に天都御膳遠云々瑞穗遠云々と有を以知べし御酒の事は儀式に云く太神宮行事記に清酒作內人波白志乃御饌供備御酒は水入合せ云々又清酒作並酒造內人等云々清酒作內人御酒左方男桂氏備白志乃御饌手供酒造內人右方男桂副黑志乃御饌供也」と有などは其本に就て御饌とは云る者なり借此天都御膳はしも第六條なる齋郡の卜定田の御稻なるが第七拔穗條なる式に先割三取初稻四束一四把爲レ束擬三供御飯一云々其行列者御飯稻在レ前自餘物次レ之稻實公著三木綿鬘一引□道見ゆ御飯稻の重き事知べし所以に儀式には納三高萓御倉一會日稻實公所レ負稻也と有第十一在京齋場條にも內院所造八神殿一宇稻實屋一宇と有を儀式には高萓御倉一宇稻實殿一宇と有れば式より以前には別に御倉に收られたるなり第廿七卯日條行列に御稻輿籠三稻布袋・擔夫二十人稻實公著青摺衣木綿鬘次載三御膳案一女八人著布彩衣絲襷日陰蔓以蔓レ髻と見えたり借右の稻實公會日所レ負稻也は此所にて御稻輿より下して其稻を納たる布袋を臼屋に持出るなり若て第廿八條に引る式に造酒兒先舂三御飯稻一次酒波等共不レ易レ手舂畢倅造燧レ火兼炊三御飯一安曇宿禰吹レ火と有る此に至て出來謂ふ事なり其條にも引る宮主卜部等白侍始に行幸以前に拔穗御稻一春秋二方三升稻實者方三升御飯米稻也先々拔穗使申上云以千一百之御膳載之此稻事也と見えたり此詞即此詞を採て申せる者也々々第廿二悠紀膳殿條行立次第に釆女十人の中にて一人執三飯筥一と有は其に引る江次第に酒等取三御食一手傳置三御食薦之上一先置三八葉盤於御食薦之上外方一次御飯逼三御前一而供レ之云々と有にて是ぞ詞に謂ゆる天都御膳乃長御膳乃遠御膳には有ける委しくは其條に云ば其にて見べきなり此に如此叢陳しく云るは右の黑白二酒の事は始より事も多きに依て度々に記されたるを大御饌の事は然計り事も多く記されざる故には何とも書れざる故に自然に後れたる故に其實を顯にさむとてなり詞に初穗乎千穎八百穎爾奉置氐甕閇高知甕腹滿雙氐汁爾母穎爾母云々とも初穗波穎爾母汁爾母云々とも大忌祭風神祭詞に初穗者汁爾母穎爾母千稻八千稻爾引居氐とも有りて多くは汁の對には穎と云を此に實と云るは所謂有る事なり其由下に云べし猶如此し汁仁毛實仁毛と云ひ汁爾母實爾母と云事に究めて上古に諸なるに離れるにて今京以來には絶て云ぬ事なり汁とは悠紀主基乃黑木白木乃大御酒と有る其を指也今京に出來る祝詞には春日祭平野祭等に御酒者甕上高知甕腹滿雙氐などに御酒を顯はに云るを右に引る古文なるには甕閇高知甕腹滿雙氐汁爾と續て御酒と云ざるを以て汁は御酒なる事明らけし如此く

云は飯を以て水に漬し醸れる酒を臼にて搗き潤らかし篩を以て糟を去て其汁を用ゆる其即大御酒なる事上に云る如くなれば汁と云べきなり造酒司式に汁糟一斛紛酒一石新云々と有は和名抄に醪[illegible]語抄云醪毛呂美滓汁也と見えたれば其毛呂美なる可し此に汁とは滓に對へて云なり滓を去れば汁なるを醪（モロミ）は滓を濾し分たざるに依て諸實の意なるなり實とは謂ゆる稻實にて朝夕の大御饌に仕奉る御飯にて右の天都御膳と云ふ是也右に引る祝詞には初穗者穎爾などゝ云るを此詞に實と云るは先拔穗使を稻實卜部と云ひ御稻に仕奉る物部人を稻實公と云ひ御稻を收る屋を稻實殿など云は高千穗宮に事始て白檮原宮に此詞の成れる時より稻實と云來れるを取て右等の名とは成れるなれば實と云るぞ古かりける穎と云も本より神代よりの事ながら此詞の狀にては必實と云べき所なる事上に云るが如し○赤丹乃穗毛仁所聞食止は新年祭詞に皇御孫命能朝御食夕御食能加牟加比爾長御食能遠御食止赤丹穗爾聞食故云々大忌祭詞に皇御孫命能長御膳能遠御膳止赤丹能穗爾聞食皇神能御刀代云々風神祭詞に皇御孫命乃遠御膳乃長御膳止赤丹乃穗爾聞食須五穀物云々など有り赤丹乃穗毛仁の毛は輕く見べし玉勝間に毛字は衍なり[illegible]の意を加ふすして嘩上に二所にもとあるに倣ひて此にも加へたる者なる可し」と云れたるは上の二所の例に能く見られたるなンめり偖赤丹乃穗とは大御酒大御膳を聞食て大御顏の麗美しく照り赤らみ大座坐を稱奉れる也其事右の新年祭詞講義に說たれとも猶云むには丹と云例は古事記なる二柱神の御目合の御詞に阿那邇夜志と宣へるそれを神代紀には憙哉とも美哉共記され又妍哉此云二阿那而惠夜一と見え神武天皇御紀にも妍哉此云二鞅奈珥夜一と有る此を記傳に字書を引て憙悅也其好也其註し妍麗也とも美好也とも記して是等の字を以て言の意を解べしと云れたるにて明らけし穗は秀にて表に發るゝ言なれば此を合せて妍麗はしき狀の面に發るゝ由也玉を邇と云るも其光の照て外表に出る由なり思の外に表れて見ゆるた秀に出など常も多く云言なり萬葉にも丹穗面と見え中昔の物語書なとにも人の容儀の麗にしきを邇保比とも邇保夜加とも云る言多かり又色にも香にも邇保比と云言の多かるには其云知ぬ麗しく美たきに云などゝ思ふ可し言義は右の如なるが萬葉五丁九に久禮奈爲能意母提乃宇倍爾と有を一云爾能保奈酒一と有に依て思ふに赤丹乃穗毛仁の仁は辭ながら如の意にて新年祭詞講義に堅石爾常石爾は如二堅石一如二常石一と說る爾の如し然れば如赤瓊秀と云事にや瓊に秀と云事は物には見えざれども其光輝の上に秀出るをば然云ふべき狀なればなり又は色に取て赤きを丹と云ふ丹塗矢丹畫著などの丹にて赤丹は赤土を云が其色の勝れたるを秀と云べければ赤丹乃

穗爾は物に綵る赤土の秀なる如くと大御顏の照赤らみ坐狀を物に譬奉れるなる可し然れども言の本は右の阿那邇夜志の下に說る如くなる事云も更なり古事記（明宮段）なる大御歌に許波多能美知邇阿波志斯袁登賣云々和邇佐能邇袁波都邇波波陀阿可良氣美志波邇波邇具漏岐由惠美都具理能賀能那迦都邇袁云々麻用賀岐許邇加岐多禮と詠せ給ひて土以て顏を美しく畫きたるを稱給へり借右の如く土を邇と云中にも殊に丹字をしも書事は最麗しきが故に常に此を用ひて物に綵ることの多かりし故也出雲神賀詞には赤玉乃御阿加良毘坐とも物に譬奉るを以知るべし此瓊と丹と說は異なるが如なれども其光澤を以云と色を以云と趣一なり（右の大御歌は矢河枝比賣を娶給ふ時のなるが其を木幡の道に過し丶孃子と詠せ給ひ丸邇坂（ワニサ）の土（ニ）の初土は膚赤らけみ終土（シハニ）は土黑き故に其中土を黛（マヨカキ）に畫垂と詠せ給へるなり委しくは傳に就て見べし萬葉十六竹取翁に羅丹津蚊經色丹名著來（サニツカフイロニナツカシ）は眞土着ふ色丹馴かしなり又眞榛持丹穗之爲（マハリモテニホシ丶）衣丹は萩花を摺て染たるを丹穗爲（ニホシ丶）と云るなり孃子が和歌に墨之江之岸野之榛丹丹穗所經迹丹穗葉寐我八丹穗氷而將（スミノエノキシノハリニニホフレトニホハヌワレヤニホヒテヲラム）と詠るは住吉の岸野の榛に丹穗ふれとも丹穗はぬ我や丹穗ひて居むと云事にて翁の丹穗之爲と云に應へて色に染むと爲らめども色には染ずて我獨意（ニホ）ひて在むとなり又發語に佐邇豆眞布と云も眞土着ふと同じ意にて赤き物の上に置も右等の例なり此は然しも用無き事ながら事の序に云なり）○豐明仁 明御坐止は下に與天地月日共照志明良志御坐事仁と有へ應く文なり

借卯日に神に薦奉らせ給ひ天皇の享御在し坐御事は申も更なるが其直會の豐明は直に引續て聞食し御在ししが故に互に相兼たると云中にも神は相嘗にて天皇の聞食す御方重きを以て如此天皇の御方を立て申す事常の例格なり借上古には右の如なる故に卯日大嘗祭（オホニヘマツリ）辰日大嘗會（オホニヘノナホライ）と引續きて被行る事なりしかども儀式及延喜式の頃に至ての御定は辰日悠紀節會なり主基方をも附て被行る巳日主基節會なり其前に在と雖も主基は附て被行る也午日豐明節會なり以上此を五節と云ふ然れども右の五節共に古は一日の公事なりしを三日に五度に被行る事なる故に何れも豐明節會とは云なり三代實錄午日詔に今日波大嘗會乃直會乃豐樂畢日仁在と有を以曉る可なり（此等の事は第三十六辰日條第四十午日條に委しく云り五節の事など種々の說有れども何れも甘なひ難き事共多かり）借豐明とは大御酒を聞食す耳ならず大御膳を聞食ても其氣の身體に充溢れて殊に大御顏の照明らみ給ひ丹穗の如く咲榮え給ふ由なるが中にも大御酒のは此上無く勝れたる故に豐明と云へは酒宴（サカウタゲ）の名とは成てける故に古事記（明宮段）に天皇聞二看豐明一など有て聞二看御酒一とは云ざるなり（古は天皇のならぬ凡人のをも云るにや記傳に引れたる盧穗物語藤原君卷に七日七夜豐明爲て打上遊ふ」と有猶豐明の事は祈年祭大忌祭風

風神祭等の講義にも云りき偖此なる豐明爾明坐は下なる與天地日月共照志明志良御坐事と云に係りて天都御膳遠長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穗遠平久介安久介所知食と宣給へる天神の御壽詞の徵に依て大御世は千秋の五百秋に坐む意を含めたる者なりかし唯に大御顏の照明らみ坐耳の事と見ては上下の文の照應も何も無なりて可惜古文の妙なる所なも覆ひ隱るゝ者なれは能々心を着べき也○天都神乃壽詞遠稱辭定奉留の天都神乃壽詞と云は上にも注せる如く皇御孫尊波高天原仁事始天豐葦原乃瑞穗乃國遠安國止平久介所知食天天都日嗣乃天都高御座仁御坐天天都御膳遠長御膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穗遠平介安久介由庭仁所知食と見えたる是なむ天都神乃壽詞なりける其を本立と爲て又此に水取の御政を述て其より其瑞穗を以て大嘗仕奉る事の件々を演るが故に稱辭定奉留とは云るにて常に稱辭竟奉と云とは別なる事上に此詞の出たる下に注せるが如し古の此玉櫛遠刺立豆自ニ夕日ニ至ニ朝日照ニ萬豆天都詔戶乃太詔刀言遠以豆告禮如此告波麻知弱蒜仁由都篁生出牟自ニ其下ニ天乃八井出牟此遠持天天都水止所聞食止事依奉支と有る是も天都神乃壽詞と云狀には有れども此は天兒屋根命より天忍雲根神を奉りて申上給へるに就てなれば然には非じか其例は大殿祭詞に高天原爾神留坐須皇親神魯企神魯美之命以豆皇御孫之命乎天津高御座爾坐氐天津璽乃劍鏡乎捧持賜天言壽古語云二許登保企一宜志久皇我宇都御子皇御孫之命此乃天津高御座爾坐氐天津日嗣乎萬千秋乃長秋爾大八洲豐葦原瑞穗之國乎安國止平久氣所知食止言寄奉賜云々と有る此に言壽と云は壽詞と云に同じく此詞と彼詞と異ならざるは其原は一ながら中臣氏と齋部氏との傳に少差ひ有ける者なり若て下に天津奇護言乎以氐言壽鎭白久と云ひ次に事を述て終に云々言壽伎鎭奉事能云々と云下したると此壽詞と全同じ狀なるを思ふ可し

皇神等毛千秋五百秋乃相嘗仁相宇豆乃比奉利堅磐常磐仁齋奉豆伊賀志御世仁榮志女奉利自康治元年始豆與天地月日共照志明志良御坐事仁本末不傾茂槍乃中執持豆奉仕留中臣祭主正四位上行神祇大副大中臣朝臣清親壽詞遠稱辭定奉止久申

皇神等云々とは悠紀主基の齋場に迎參らせられて天皇の大御親大御手以て朝夕の大御饌を供らせ給ふ伊勢太神宮を初奉て天社國社の皇神等を申せり然れども天社國社の悉を迎進らせらる可も非れば皇祖天神を耳其齋殿には齋奉らせ給ひて自餘は卯日平明に幣帛を頒たせ給ひ殊に此事無は神祇令に仲冬止卯相嘗祭と有て其にも被祭させ給ふ事猶太神宮に九月神嘗

祭を別に奉らせ給ふが如くなり右の相嘗祭の義解に謂大倭住吉八神穴師恩智意富葛木上紀伊國日前神等類是也神主各受二官幣帛一而祭と見ゆ此時は然計り多くも有ざりけるなり四時祭式に十一月祭相嘗祭神七十一座云々右預二相嘗祭一之社如レ前十一月上卯日祭レ之其所レ須二物預申レ官請受付二祝等一奉レ班二酒新稲一者用二神税及正税一と見えたり此を伊勢の神嘗祭に同じと云は齋院式に相嘗祭神前二前下上兩社新南面東上五色帛各四尺酒二斗云々右毎年十一月上卯日鶏鳴齋王潔齋遥拜奉二幣於神社一夕時設二上件神座於齋殿一座別設二齋王供水座一祭レ之云々明日夕給二酒饌於院裏男女一云々と有て全齋王の神嘗祭の如く齋院にては年中の大祭なるを思可し偖右の相嘗は何れも酒を醸て供らせ給ふを主と爲らるゝ事四時祭式を讀て知べし偖此に相嘗と云ふ皇神等は第廿七條に引る式に卯日平明神祇官班二幣帛於諸神一謂下祈年奠二幣案上一者上座別絁五尺五色薄絁各一尺倭文一尺木綿二兩麻五兩四座置一束八座置一束楯一枚槍一竿褁葉薦一尺庸布一丈四尺前神除レ布と有り其祈年奠二幣於案上一者とは四時祭式に祈年祭神云々奠二幣案上一神三百四座宮中卅座京中三座畿内山城五十三座大和國一百廿八座河内國廿三座和泉國一座攝津國廿六座東海道伊勢國十四座伊豆國一座武藏國一座安房國一座下總國一座常陸國一座東山道近江國五座北陸道若狹國一座山陰道丹後國一座山陽道播磨國三座安藝國一座南海道紀伊國八座阿波國二座社一百九十八所云々前一百六座と有る此を云なり此は大嘗の年にも限らず毎年の新嘗祭にも有る事也同式に新嘗祭奠二幣案上一神三百四座並大社九十八所云々前一百六座云々右中卯日於二此官齋院一官人行レ事云々と有て異無し偖此奠二幣案上一神の相嘗に祓祭させ給ふと思ゆる事は其時の大嘗祭詞に高天原爾神留坐皇睦神漏伎神漏彌命以天社國社

登敷坐留皇神等前爾白久今年十一月中卯日爾天都御食乃長御食能遠御食登皇御孫命乃大嘗聞食牟爲故爾皇神等相宇豆乃比奉氐堅磐爾常磐爾齋比奉利茂御世爾幸閇奉牟止依志氐千秋五百秋爾平久安久聞食氐豐明爾明坐牟皇御孫命能宇豆乃幣帛乎云々稱辭竟奉云々と有と此詞と主客甚々明亮にして文意も亦同きに眼を着べくなむ有ける皇御孫命の大嘗聞食む爲の故に相嘗の皇神等相諾ひ奉て千秋五百秋に豐明に明坐むと云事なる事已に講義に説るが如し偖朝夕の大御饌は朝廷にて進らる可きを其社にても供らしめ給ふ御ことなる故に幣帛は其社に納奉らるゝが故に此班幣の事は有る者る者なりかし御年神の祈年祭詞に云々皇神等能依左志奉者初穗波千穎八百穎爾奉置氐云々汁爾母穎爾母稱辭竟奉牟又水分神祭に云々寄志奉者皇神等爾初穗波穎爾毛汁爾母云々稱辭竟奉氐遺波皇御孫命能長御食能遠御食止云々聞食故大忌祭詞に皇神能成幸賜者初穗者汁爾母穎爾母千稻八千稻爾引居氐云々秋祭爾奉牟山口神詞に汝命乃成幸波閇賜者初穗者云々奉牟風神祭詞に皇神乃成幸閇賜者初穗者云々汁爾母穎爾母八百稻千稻爾引居置氐秋祭爾奉牟なと有は何れも新嘗の官幣に預らせ給ふ神に坐なるに如此年穀を祈らせ給ふ其賽謝(カヘリマヲシ)の事を如此申さしめ給へる其此新嘗に非ずして何とか云む右の大忌風神祭詞に秋祭と有は秋實なりたる祈穀を以て祭らせ給ふ由にて其即此新嘗なる事論ひ無き者なり然れば

大嘗宮の齋殿に勸請(チギ)奉らせ給ふ天照坐皇大御神を始奉りて皇祖天神は申も更也其社々就て令祭給ふも皇御孫命の新嘗聞食む爲の故に奉祭給へるなれば共に相嘗と申す可く又大嘗祭詞に天社國社と有れは在ゆる國中の神々に迄に係る事也其は第三條に引る式に凡大祓使發遣訖即差下遣供二幣帛於天神地祇一使上と有る綱書に大所小所並諸社預二新年祭一者と見えたる大所小所は四時祭式に新年祭神三千一百卅二座大四百九十二座三百四座案上官幣一百八十八座國司所レ祭小二千六百卌座四百卅三座案下官幣二千二百七座國司所レ祭と有る是を云なれは普く天神地祇の大御祭を供奉らせ給はむとして大御使を進らせ給ふなる事知べし神祇令に凡天皇即位摠祭二天神地祇一と有る即此大嘗祭なる也鈴屋大人說に此は嘗の神はしも必しも其神社の祭事にも與らず必預給ふ可く思はるゝ神にも預給はぬ多し其際に尙有て預給ふは其給ふなる可し其中上十一座御在し坐て四時祭式に見えたり云々と云れたれども右の相嘗祭は新嘗祭に添たる者なるを混ひ誤まれたる者なり所以に中卯に非ず上卯に在り又毎年の新嘗は中祀にて相嘗は小祀なるなり已に右に引る義解に神主各依二自幣帛一而祭レ者て其も大嘗宮にて被祭と云にも非るをや ○千秋五百秋乃相嘗仁の千秋五百秋は上に千秋乃五百秋と有に照應(テラシアヘ)るなり猶上なるも大嘗祭詞に千秋五百秋爾平久安久聞食氐と有も皇御孫命の御事なるが此は皇御孫命の長御膳の遠御膳と大嘗を聞食むに就て皇神等も千秋五百秋の相嘗に着給ひてとなり此事已に上にも說き又大嘗祭詞にも註れば其に就て明らむ可し 相嘗の相は相共と云意なり鈴屋大人說に相嘗は阿比爾閇と訓べし爾閇を牟倍と唱ふるは後世の音便に潰れたる唱なり大嘗も大爾閇なるを大牟倍と云と同し此相嘗は天皇と相伴(アヒトモ)に新饗し奉る意の名にて俗に謂ゆる相伴の意へなり」と云れたる如く上にも說る如く天皇の大嘗聞食す御饗事に就て皇神等を相嘗に祭らせ奉給ふなり皇神等母と有る母の辭に深く心を着べくなむ嘗には神事を行へるに就て賓客の饗の有る此には此方は相伴なり此は賓客に就て神の被供給へるなれば都て神の御方相伴と云なり此類の事公私共に常多き事なり ○相宇豆乃比奉利は此も豐明爾明御坐止と共に下なる與二天地月日一共云々へ亘る語也大嘗祭詞にも皇神等相宇豆乃比奉氐と有は此詞と其本一なるが故也續紀第四詔に東方武藏國爾自然作成和銅出在止奏而獻焉此物者天坐神地坐祇乃相宇豆奈比奉福波奉事爾依而顯久出留多寶爾在云々是以天地之神乃顯奉瑞寶爾依而云々第六詔に此大瑞物者天坐神地坐神乃相宇豆奈比奉福奉事爾依而云々第十三詔に東方陸奥國乃小田郡爾金出在止奏弖進禮利云々天坐神地坐神乃相宇豆奈比奉佐枳波倍奉利云々顯自示給夫物在第卅三詔又第四十八詔に天日嗣高御座乃業波天坐

神地坐神乃相宇豆奈比奉相扶奉事爾依之豆此座平安御在豆天下者所知物爾在と有て何れも用たる狀同じ事也借右の如く上に物の出たる事を先云ひ次に神祇の宇豆奈比給ふ事を云ひて終に顯久（ウツシク）とか顯毛（ウツシモ）とか顯白（アラハシ）とか云べき定格なるを思ふに宇豆は現顯の義にて幽れたる所より物を顯し出し給ふを云なりけり萬葉十八丁二十に天地乃神安比宇豆奈比皇御祖乃御靈多須氣豆遠代爾可々里之許登乎朕御世爾安良波之豆安禮婆など有を考合せて曉る可き者也然れば右の大嘗祭なるは稻穀の爲に新年の御禱其の有けるに神等の相顯なひ給ひて千秋の五百秋に新嘗を聞食しめ奉るを云ひ此なるも上に天神の事依し奉給へりし天都御膳を先云て此には其天都御膳を聞食なるゝに相嘗の皇神も千秋の五百秋に相顯なひ坐て長く遠く榮坐むと也（然るを諾（ウヘ）なふと同じ事と思ひしは悪かりけり何れも右の如く假字書なるを以て思ふに宇豆乃比に正しく當べき字の未定らざりし者なり此は宇都志久宇都志など云ふ同じ類の語なれば顯字などや近からむ然れども然書る例無れば猶假字にて有べきなり）鈴屋大人說に「俗に神の納受し給ふと云に當れり」と云れたるは然る事ながら神の納受て物をも事をも成し調へ給ふ由なる事上に註るが如し借て辭の奈比を此には乃比と有り音の通へるなり（又物を愛しむなどの義をも包たる事奈比は並なる由など委しく大嘗祭詞の下に云り）○堅磐常磐仁齋奉豆利は下に與天地月日共云々と有る如く天壤と無窮く齋奉らせ給ふにて天都神の壽詞を以て言壽給へりし如く皇神等の大御世を賀て守護奉給ふ事を云也大嘗祭詞に皇御孫命乃云々皇神等相宇豆乃比奉氐堅磐爾常磐爾齋比奉利茂御世爾幸閇奉牟止依志氐と有を見べし借當には祈年祭詞に見えたる如く皇御孫命御世乎手長御世登堅石爾常石爾云々と云べきを此詞と彼詞との然らぬは御饌のことを主と爲が故に上に天都御膳乃長御膳乃遠御膳止云て其にて聞ゆるが故なり（如此く古文には少も遊びたる事無く言取れる者なり寔に言靈の幸ばふ國とは諾々しき事になむ有ける）○伊賀志御世仁榮志女奉利は大嘗祭詞に茂御世爾幸閇奉牟止依志氐と有て其下に註せる如し借榮志女奉利は此も當に幸閇奉ると云るを如此續るは神代紀なる大御詔に寶祚之隆當下與二天壤一無上窮者矣と宣給へる其寶祚を天津日嗣と申し奉る其即由庭の瑞穗を聞食す御事なれば其事を含め給へる者也此にて其事依し奉給り天都神の壽詞を結べるなれば等閑に見奉る可からず（若て大御世の大御榮と申奉したり萬葉十九新嘗會肆宴應詔歌に天地與相左可延牟等大宮乎都可倍麻都禮婆貴久宇禮之伎と有は此詞に依て詠る也又二に木綿花乃榮時爾七に志姚が榮之君之三に青丹吉寧樂乃京師者咲花乃薰如今盛有と有て榮と盛も通相近し）若て上に豊明爾明御坐は其に說るが如く大御酒大御

膳を聞食し坐て大御顏の丹穗の如くに照赤らみ大座坐事なれば其に應て大御世の大御盛を表にして裏に又大御心の咲しく御榮坐事をも含めたる者也記傳十一阿佐比能惠美佐迦延伎氐の下に源氏物語末摘花卷に老人共咲榮えて見奉る明石卷に見奉るより老も忘れ齡も延る心ちして咲榮て總角卷に女原口來打つぶやきつる名殘無く咲榮つゝ御座引繕ろひなどす竹取物語に笑ひ榮えてなど見えたり人の喜び咲は顏い榮ゆるなれば云り」と有が如し○自康治元年始弖は其當る年の御世號を用ゆる事成が其無りし以前は自此太歲始弖などぞ申つらむ（太歲は大嘗の大御政所聞食す年を云て其を天皇の大御世所知看す元年と立て御在位を其より數へ奉る事上に委しく註せるが如し）康治は近衞院天皇の御世なるが此天皇は鳥羽院天皇の大御子に坐て大御諱は體仁と申奉れには大倭根子體仁天皇と申奉る可き事此詞の始に例に依て大倭根子天皇と申奉るにて知らる凡て御世々々の天皇等の大御名上古とは違ひて凡人の狀に短く二字計の大御名に成せ御在し坐す事の甚々足はぬ心ちなりしを其は內々の御事にて神に對へては正しく然唱奉らせ給ふらむ御事と此詞に依て始て明らめ奉れるなむ可畏かれども甚も甚も心悅ばしく思ゆるなる（某仁と申奉るは一條院天皇を懷仁と申奉るに始りて後冷泉院天皇より以來常例と成て御世々々の御諱と成れるなり故今も大御諱を體仁とは申奉れり）大御兄崇德院天皇の大御嗣と成給ひて神武天皇よりは七十六續の天統を所知看さ せ給へり保延五年五月十八日降誕同七月十六日爲親王同八月十七日立太子永治元年十二月七日受禪同月廿一日即位康治元年十一月十五日大嘗會なる由當時の日錄共に所見たり然れば此康治元年ぞ此天皇元年太歲には有りける（鳥羽院天皇の大御子に坐て崇德院天皇の大御弟に坐けるが其皇太子と立給るは一歲の御時也其元年は三歲大嘗は四歲に成せ御在し坐ける時の事也此れより鳥羽院天皇を一院と申奉り崇德院天皇を新院とは申奉りける）○與天地月日共照志明志（良）御坐事仁　比豐明（爾）明御坐より受て天地と月日と共に長御膳の遠御膳と天都神の事依し奉給へりし天都日嗣の瑞穗を由庭に聞食し御在し坐む事を申せるなり彼神代紀なる寶祚之隆當與天壤無窮の大御命を始奉て續紀第三詔に天地共長日月共遠第九詔に與天地共（爾）絕事無久彌繼（爾）受賜利（牟）第十一詔に天（爾）與共（爾）長久遠久仕奉など見え出雲國造賀詞に明御神（能）大八島國（所）天地日月等共（爾）安久平久知行（牟）事（乃）志太米とも有り（萬葉十九新嘗會肆宴歌に天地與相左可延牟等大宮乎仕奉者貴久云々天爾波母五百都綱波布萬代爾國所知牟等五百都々奈波布此歌は殊に吉意を得て詠る也又天地與久萬氏爾萬代爾都可倍奉などに詠れたるは皆此壽詞に依たる者なり）照志明（良）御坐事の本據は神代紀素盞

鳴尊の天照太神に申給へりし御言に請姉照二臨天國一自可二平安一と有に始りて御世所知看す御事に申せれば此詞なるも豐明の事を兼て天地月日と共に長く遠く御世所知看む御事に申せり神武天皇御紀の大御命に謂彼地必當下足以恢二弘天業一光中宅天下上と有をも然訓べきなり綏靖天皇御紀に汝之光二臨天位一以承二皇祖之業一又崇神天皇御紀にも詔曰惟我皇祖諸天皇光二臨宸極一とも有る例し事なればなり續紀神護景雲元年詔に日本國爾坐天大八洲國照給比治給布倭根子天皇三代寶錄詔に朕我食國乎平久安久天照之治聞食須など有り萬葉十九左大臣橘朝臣宅肆宴歌に天爾足之照而吾大皇之伎座婆可母樂伎小里と有は此詞と同じく豐明を奉に就て詠るなり（倩神武天皇御紀に皇祖皇考云二乃光輝一と有も右の崇神天皇御紀に依訓べき也古傳には天下爾照坐氏など有けむを漢樣には記されし者なるべき事云も更なり）○本末不レ傾茂槍は延喜奏覽中臣本系帳に高天原初而皇神之御中皇御孫之御中執持伊賀志桙不レ傾二本末一中良布留人稱二之中臣一者と有り本末不傾とは本とは本系記に謂ゆる皇神等也末とは皇御孫命を申せり其皇神等の事依し奉給へりし壽詞を以て今の大嘗の大御政の事實に合せて天都神の壽詞を稱辭定奉りて皇神の大御命にも皇御孫命の大御業にも露違ふ事無く御中執持て仕奉るを云也是ぞ神代紀に高皇産靈尊因勅曰吾則起二樹天津神籬及天津磐境一當下爲二吾孫一奉上齋矣汝天兒屋命太玉命宜持二天津神籬一降二於葦原中國一亦爲二吾孫一奉レ齋焉と見えたる事の本末也ける此高皇産靈尊には神皇産靈尊も共に御在して此詞の首に謂ゆる神漏岐神漏美命に坐り（然れば本系帳に本末と云は此御紀の文に引當て心得べきなり如何にとなれば高天原初而皇神之御中皇御孫之御中云々は此に非ずして又何れに有とか爲む）茂槍は齋槿桙なり此は堅固なる木なるが故に古多く杖桙などに作れる物なるを以て大祓詞に天津金木と云るこれなり偖其金木の桙は本末共に太からず細からず平に作るが故に其中間を執れば本に傾かず末に倚らず此を以て中執持とは云り（茂槍を舒明天皇御紀に嚴矛に作る嚴は稜威の嚴めしき義を以て被書たるなり齋門親王卒人時詞には茂桙と有り茂字を書るは茂御世なとに此字を用ふるな偖たるなり猶大祓詞講義に云を見合べし）○中執持氏は皇神と皇御孫命との御中を執持て祭主と成て大嘗を始て凡ての神事に仕奉るが故に中臣は俗に云ふ亭主役の如き者なるを茂槍の中を執握て本末を傾ざる由也彼中良布留と云は神と君との御中に立て何時も仕奉る由にて中在經と云ふ意味也鎌足公傳に其先出レ自二天兒屋根命一世掌二天地之祭一相二和人神一仍命二其氏一曰二中臣一

と有る相ニ和人神ニとは神と君との御間を相和す事なり然れば鈴屋大人の中臣は中執臣なりと云れたるなむ實に謂れたりとぞ云べかりける（傳古事記傳十五中臣連條に云れたる説を見て知べし其細書に舒明天皇御記載る事を引て云く中を執とは賢貴にして令大神ノ義ニ請ニ下ニ於上ニ宣ニ上ニ於下ニ也ヽ言意本にて言語を……なりなどなどすは昔の鎔言を神に請る也太古の卜事を……るは神の御言を詔る者に宣申す中臣是中臣の……にて其祖に天兒屋根……主る神事……者也故曾ニ以ニ太古之卜事ニ而奉ニ仕焉と有て如何に命しき言なりける）○奉仕留中臣は姓氏の中臣を云に非ず此は職の中臣を云なり其も天兒屋根命の子孫には有れど其部に就て云る也神祇令義解に其中臣忌部者當司及諸司中取ニ用之ニとあるを以知べし（忌部にも氏な云と職な云との二有ることも又此に准ひにて知べし）大嘗祭式に大祓使及幣帛使を差遣はさるヽ事を中臣忌部前氏供レ之と見え又大嘗宮條に嘗畢即中臣忌部率ニ御巫等ニ鎮ニ殿及門ニと有り卯日理幣の下に差ニ中臣忌部官人各一人ニなども見え午日條に次神祇官中臣忌部及小齋侍從以下云々と有なとは中臣氏にして中臣の職掌に仕奉る部を云なり故今も其中臣の部の中より淸御朝臣の被仕奉るヽなり（記傳十五に昔の姓に其々業を取れると地名に依れると又事を取り物な取など稱ると種々有る中に此中臣などは其職業に因れる姓なり」と云れしは此なり猶大ニ臣の下に云べし）○祭主は伊波比怒斯と訓れたるに從ふ可し此詞の上に天兒屋根命皇御孫尊乃御前に奉仕且云々と有て高千穂宮の大嘗の大御政は其神の祭主と爲て仕奉給ひし例の任に中臣氏の其職に仕奉らるヽ事なるが故に祭主とは云り若て中臣氏は此壽詞を奏し忌部氏は其幣帛を主りて仕奉られしなり（然れども中世よりは種々の事の多く成に從ひて政事に遣へる事も少からねば中臣は大の事に仕奉らるヽ事には加れヽと詞は古の任にしては變改ざりしなりけり以て此詞の古き事を知べし）神武天皇御紀に時勅ニ道臣命ニ今以ニ高皇産靈尊ニ朕親作ニ顯齋ニ用ニ汝爲ニ齋主ニと有は此祭主の例なり古事記（白檮原宮段）に神八井耳命讓ニ弟建沼河耳命ニ曰云々僕者扶ニ汝命ニ爲ニ忌人ニ而仕奉也と有を傳に此の忌人は書紀にも吾當爲レ汝輔レ之奉レ典ニ神祇ニ者と有て天皇の御親行給ふ御神事を扶輔奉り給ふ職を云なりと有が如し神功皇后御紀にも皇后選吉日入ニ齋宮ニ親爲ニ神主ニと有れば齋主とは即神主と成給ふを云れば此も其例なり伊波布とは諸の汚穢き事を忌諱避て身を嚴にして愼み仕奉るを云ひ怒志とは人も多く仕奉る中に其長と爲りて仕奉るを云なり（當時にも三輪の祭主は……杉……十四に謂……なども見え十九に此者……智と有て和へて春日……伊都……三譜……有を以て伊波布と伊都……同じきな……伊波比主の下に云り）崇神天皇御紀に以ニ大田々根子命ニ爲ニ祭ニ大物主大神ニ之主ニ亦以ニ市磯長尾市ニ爲ニ祭ニ大倭國魂大神ニ之主ニと有なども謂ゆる祭主と成て仕奉る事なり又伊勢太神

宮式にも其年中四度使者祭主供之若有故者取官並諸司官人及散位中臣氏五位以上充之云々其以神祇官五位以上中臣任祭主者云々凡神祇官符無祭主署者神宮司不得奉行と有て中臣氏より伊勢の祭主に被任る御定なれば其祭主なる人大嘗祭にも祭主と成て仕奉らるゝ事と聞えたり（此なむ皇神之御中皇御孫之御中執持弖奉仕には有ける上にも引る神代紀に汝天兒屋命太玉命云々爲吾孫奉齋焉と有をぞ思ふ可き事なりける二所太神宮例文なる祭主次第に始爲祭主改祭官字爲主者也と有り）○正四位上行神祇大副は官位令に依に神祇大副は從五位下相當なり然るを位高く官卑きが故に行とは云り選叙令に凡任內外文武官本位有高下者若職事卑爲行高爲守と有が如し（然れば音にて行守共に讀に做ひて於古奈布とも麻母流とも正しく訓べきなり和名抄に正四位上於保伊與豆乃久良井乃加美豆之奈と有れば正四位爾志氏神祇大輔乎行奈布と云ふ定りならむと所思ゆ）神祇大副は職員令に神祇官伯一人掌神祇祭祀祝部神戸名帳大嘗鎮魂御巫卜兆惣判官事餘長官判事准之大副一人掌同伯と有りて伯は長官なり大副小副は次官なり大祐小祐は判官なり大史小史は佐官なり（若て長官を加美次官を須介判官を萬豆利古止比止なと訓み佐官は音に唱ふ可き由和名抄に云り然れども不比等公を史と書るに依らば布比止と云むぞ古言なる可き）○大中臣朝臣清親は文武天皇御紀二年八月詔に藤原朝臣所賜之姓宜令其子不比等承之但意美麻呂等者縁供神事宜復舊姓焉と見えたる事なれども天武天皇十三年御紀に中臣連賜姓爲朝臣と有れば本より藤原ならぬ意美麻呂等も私に藤原に姓を易つる事も有しを舊姓の中臣には令復給ひしなりけん（二所太神宮例文祭主次第に天兒屋根命廿一世孫可多能祐大連の男御食子大連公其子國子大連公其子國足朝臣其子意美麻呂其子清麻呂公なれば同じ中臣とは云ながら鎌足公不比等公の統とは本より別流なンめり）續紀神護景雲三年六月詔に因て神語有言大中臣而中臣朝臣清麻呂兩度任神祇官供奉無失是以賜姓大中臣朝臣と有は大祓詞に大中臣天津金木云々と有に因て諸の中臣氏の部より擢出て大中臣朝臣とは被成しなり（伊勢太神宮月次神嘗等祭詞に大中臣太玉串爾隱侍氏齋[illegible]奉入詞に大中臣茂桙中取持氏云々など有は祭主にて謂ゆる大中臣氏を云るなり此なも神語とも云へけれども此等は其より後に出來るなれば神語は大祓なるなり）清親は二所太神宮例文祭主次第に右大臣正二位神祇伯大中臣朝臣清麻呂公の末孫祭主永頼の末孫神祇大副輔清の一男にて保延四年十二月廿九日神祇大副に被任たる由見えたる此人なり○壽詞遂稱辭定奉止久申は第卅六辰日節會條に引る式に辰一點車駕臨豐樂院御悠紀帳皇太子云々參入立定神祇官中臣執賢木副笏入自南門就版位跪奏天神之壽詞忌部入奏神璽之鏡劍訖退出（若有雨濕即立奏之）と見えたる是なり（此事は其條下及此卷の首に云れば今云ふ要りに非るなり職員令義解に爲祭主賛辭者と見ゆ）借上に

天神乃壽詞遠稱辭定奉止久申は皇祖天神の大御命を申し出む序に置き中に云々止天都神乃壽詞遠稱辭定奉留は其天神の大御命依しの壽詞を本立として今の現在の祝言を文に定奉るを云ひ此は中臣の祭主と仕奉りて其天神の壽詞を申畢る由にて此所迄は天皇命に申上る詞にて此より下は其御前に侍らふ人々に宣る文なるなり

又申久天皇朝廷仁奉仕留親王等王等諸臣百官人等天下四方國乃百姓諸諸集侍止見食倍尊食倍歡食倍聞食倍天皇朝廷仁茂世仁八桑枝乃立榮奉仕留伎倍禱乎所聞食止恐美恐美毛申給止波久申

此又申久は上に稱辭定奉止久申にて天皇命に奏し上る詞の終たる故に其所何切と成て此よりは別章にて祝詞に辭別云々と云と同し所なるが故に又申久とは云起したるにて此より以下に其に侍ふ人々に聞ゆるなり天皇に申奉りし又申久と云には ます能々文字に付て心得べし第卅六條に引る儀式に親王以下五位以上入レ自二儀鸞門東西戸一各就レ版六位以下相續參入立定云々奏ニ天神之壽詞一と有る下に群臣皆跪と見え說て其退出の下に親王以下皆起と有を以知し此跪も起も中臣の天神之壽詞に就て物爲る事なりかし○天皇朝廷仁奉仕留は常に朝廷に奉仕る臣下など云とは輕くて此大嘗會を被行るに就て其行事に預りて御許に仕奉ると云意味なり大祓詞に天皇朝廷爾仕奉留比禮掛伴男云々など有に同し然れば其詞なるは上に集侍云々に係て見此なるは下に集侍云々と有に係て心得むぞ宜しからむ○親王等王等諸臣百官人等は小齋大齋の親王以下百官の人人の宴を賜はる限を云り親王以下云々の事は大殿祭詞大祓詞の講義に悉く註せり○天下四方國乃百姓諸々は別に百姓を宴に被召るにては無けれども悠紀主基に仕奉る國郡司以下雜色人は更なり常にも國々より在京して仕奉る官人及諸司の下司にも被召て仕奉る良民等をも合せて廣く云るなり續紀第一詔に集侍皇子等王臣百官人等天下公民諸と有を始として何れの御代なるも天下に廣く令する時には云例なり百姓の事は[illegible]に云り奴婢に對へて良人を云事にて[illegible]十に公民之徒[illegible]奴婢と有が如し又記傳廿四且波比古多々須[illegible]王二女王の事を淨公民と有る下に天皇の御上よりは貴人をも皆[illegible]公民と云事有り臣連伴造國造八十[illegible]天下公民など並へ云時は公民は下賤の者を云るなれども又皇子等しき天下の人をば凡て公民と云事も[illegible]皇御祀に凡國家所有公民大小所領人衆なと有は正しく官位を帶て人衆を領る者の人を指ても公民と云り又名々王民（オホミタカラ）とも有は朝廷に猶仕奉る凡ての人共を王民と云りと有○集侍は其所に侍ひて事を行ふ由なり此事祈年祭大祓詞講義に說るが如し○見食倍尊食倍歡食倍聞食倍は給倍と云祟むる辭也此食字を物を食事を多布流と云

る其給字の意なるに常に用ひが故借て書る也食倍の賜
又給なる事は高橋氏文成日代宮の宣命に此志乎知太給
比天云々内毛外毛護利太比家患乃事等毛无久在志女
太戸毛度奈思食止宣太麻布天皇乃大御命乎良麻虛川御魂
毛開太戸止宣と有を以知べし此文は攻事要略に引るを取れるか大字に書べきを小字に記せるなど甚亂りがはしければ今改て引て其本文は已に上に第廿二條に引りき見食倍は詞に悠紀仁近
江國野州主基仁丹波國氷上遠齋定弖物部乃人等云々
大嘗會乃齋場仁持齋波利參來弖今年十一月中卯日仁由
志理伊都志理持恐美恐美母清麻波利仁奉仕利云々など
有を云なり此事より始て辰日宴會以下の事共に嚴めしく殊なる状にも亘る可し尊食倍は詞に
高天原仁事始天豐葦原乃瑞穗乃國遠安國止平久介所知
食天天都日嗣乃天都高御座仁御座天天都御膳遠長御
膳乃遠御膳止千秋乃五百秋仁瑞穗乎平久介安久介由庭仁
所知食止事依志奉弖云々皇御孫尊乃御膳都水波云々
神漏岐神漏美命乃前仁申世波天乃玉櫛遠事依奉弖云々
天都詔戸乃太詔刀言遠以弖告禮如此告波麻知波弱蒜
仁由都篁生出牟自其下天乃八井出牟此遠持天天都
水止所聞食止事依奉支と有て皇御孫尊の大嘗所聞食
す元由をなり會には甚太と云事にて佗物事の及び着ざる由なり萬葉十九新嘗會肆宴應レ詔歌に天地與相左可延牟等大宮乎都可倍麻都禮婆貴久宇禮之伎と有も此詞より出たるかと所思り勸食倍は詞に悠紀主基乃

黑木白木乃大御酒遠大倭根子天皇我天都御膳乃長御
膳乃遠御膳止汁仁毛實仁毛赤丹乃穗仁毛所聞食豐明爾明
御坐止云々皇神等母千秋五百秋乃相甞仁相宇豆乃比
奉利堅磐常磐仁齋奉弖云々と有て事の取具ひたるを歡
べる是なり天皇の豐明り聞食ひ御心喜しく愛榮え給ふを歡奉り給へと云るなり又臣下にも良日以下宴を賜ふ事を合せたる可し聞食倍は詞に天神乃壽詞遠稱辭定奉止久申云々
と云續けて下に天都神乃壽詞遠稱辭定奉留と云る是
なり神祇令中臣宣祝詞の義解に宣布也言以告レ神
祝詞宣聞百官と有る如く天皇に奏す壽詞を百官
にも宣聞せればなり此にて一段なり玉勝間に聞食倍の下に弖と云辭を添て心得べし」と云れたれども此にて云切なり○天皇朝廷仁の朝を明廷を庭に誤れるを今改
む上に天皇朝廷仁仕奉に應へる所にて異なる事無ければ鈴屋大人の説に依れり○茂御世仁八桑枝乃
は春日祭詞に王等卿等乎母平久天皇我朝廷爾伊賀志夜
久波叡能如久仕奉利佐加叡志米賜登平野祭詞に親王
等王等臣等百官人等母乎夜守日守爾守賜弖天皇朝廷爾
伊夜高爾伊夜廣爾伊賀志夜具波江如久立榮之米仕奉
給登など有り此は上に伊賀志御世仁榮志女奉利と有に
對へたる也茂を伊賀志と訓は大殿祭詞に五十橿と有る其正字にて此木の高く立延て枝葉の茂く岡きを以て譬とは爲るなり
八桑枝は嚴桑枝にて此木枝の扶疏し榮ゆるを以
譬と爲るなり借八桑枝乃の乃は辭ながら如の意なる

事右に引るにて明らけし此語の解は其春日祭詞の下に說たれば今云に及ばず　○立榮奉仕志留倍禱乎は天皇命の大朝廷に中臣の仕奉る事を云にて大嘗の大御政の天地と長く久しく絶る事無く榮えむと爲て禱事に仕奉らむとなり前には立榮の下に志女の二字を脱せるにて右に引る祝詞の如く親王等以下の人々に係たる言ならむと思ひしかども中臣に壽詞を申して親王等奉ることそ有め然る人々を率る由無れば其は惡かり倍此禱と云るは右に云る天神乃壽詞をなり大殿祭詞には此壽詞に當る事を吉壽と云て古語云許止保企と有れば此壽詞即禱なる者也かし萬葉十八に□等伎保久等會十九に千年保伎保伎吉等係毛之□□□前任奉乎見之貴在又千年保久等曾六に禱豐御酒備吾藉術家里□□□□□記に云々此□保支白支など見え時續天皇御記に天神壽詞の壽詞を保岐詞と讀るなど多し　○所聞食止は親王等以下の人々に禱言を聞給へとなり王等聞に一本に稱辭竟奉止申久と有り此も惡からず」と云れたれども天皇にこそは壽詞を稱辭定め申されし自餘の人等に稱辭竟奉ると云事有べくも非ねば所聞食止と有る方叶ひて所思ゆ御世々々を經行く間には時に依て少の詞は換も爲べければ然も申せりし事の有より一本に然は有ならめども取難し　○恐美恐美毛申給登久申は辭別の文ながら天神乃壽詞に引續けて天皇命の大御前にて申す故に深く恐み恐みとも申すと也親王已下の人々こそは中臣より上等の人ならめ天下四方國の公民に對ひて恐こむと云べき理ならねば天皇に對奉りてなり然るは天皇に申す詞を百官に宣聞する由上に云る如くなれば此に又百官に宣る詞なも天皇命に合せて聞え上

る所なるが故なり

嘉永六年八月四日始之同廿八日終之於大瀧光憲亭滝留之作也巖樞本主人于時歲四十三

祝詞講義附錄

告祝詞講義竟宴之由於神祇詞

皇神等爾卜定氐大御世波嘉永四年止云年乃八月十日乎生日乃足日止齋奉利祝詞講義乃功成禮留懽比能御祭仕奉良久止爲氐出羽國乃御民藤原朝臣光憲我賢木舍乃眞乃小床乎齋處止齋定氐集侍人等乃犯都牟天罪國罪乃事乎明米白志清祓仕奉氐五百枝眞賢木乎里乃名爾負布大山乃山乃御陰爾截採利氐天八重榊止持齋比太玉串止刺立氐上枝爾波眞玉乎懸都中枝爾波鏡乎懸都下枝爾波青和幣白和幣乎取垂氐五百箇野篶乃八十玉籤乎毛刺榮志氐瑞乃神籬止林傍奉利伊豆乃眞屋爾飾草乎伊豆乃清莚止綴敷氐神御座止定奉氐稱辭竟奉留皇神等乃御名波白佐久高御座天津日嗣止玉敷伎平安乃大宮爾大座坐氐萬千秋乃長秋爾現御神止神隨天神乃御子止坐氐天爾坐神乃事依奉賜倍利志任爾天下所知食須掛卷毛恐伎皇御孫命乃大朝廷乃近守神止畏所爾鎭座坐須神風乃伊勢國百傳布渡遇縣乃拆鈴五十鈴宮止外宮乃度相爾坐神天照坐皇大御神止由氣大神止掛卷毛恐伎二所乃宇豆乃大御前神祇官爾鎭座坐須高御魂神魂生魂足魂玉留魂大宮賣大御膳都神、辭代主止八前乃大神乃大御前及此截爾捧持氐講義著述志仕奉留祝詞式爾被載氐四時祭臨時祭爾預給布天社國社乃皇神等乎始奉氐皇御孫命乃大御世乎手長乃大御世止堅石爾常石爾齋比奉利五十橿乃大御世爾幸奉給布大神等諸乃大前八雲立出雲國靑垣山內乃下津石根爾宮柱太敷立高天原爾千木高知坐須伊射那伎乃日眞名子加夫呂伎熊野大神櫛御氣野命八百丹杵築宮爾鎭座坐須天下作之大神止神事治看須大國主命二柱乃大御前白縫筑紫國乃海北道中及大和國鳥見神山止皇京下乃小一條止三所爾爲氐持齋久宗像大神三柱乃大御前吾天祖天照御魂大神乃鎭坐留鏡作佗田木島水主新尾粒保乃社々乃大御前我遠祖余利以降氐神大神止仕奉來留石上神宮乃大御前我產土大神止淡路國石田爾坐廣幡之八幡大神武藏國大江戶爾坐靈幸布神田大神吾本生乃地主神止仁井爾坐神國大神合氐三所乃皇神等及某甲我朝夕爾恩賴乎蒙奉留皇神爾爲氐此處乃產土大神止八尋桙椙尾社爾稱辭竟奉留級長津彥級長津姬倉稻魂月讀止四柱乃皇神乃大御前乎始氐吾本生乃國今住留地此出羽乃內止所々乃社々乃山綠有留大神等乃大前吾神牀爾坐氐妻子親族爾持齋延

坐氏夜護日護爾守給布皇神等及此賢木舍乃家處神棚爾
持齋久大神等乎始氏此祭興爾候布藤原光憲藤原重義藤
原光賢律清彥藤原定勝等余利以下乃人々波何禮毛某甲我家
業乎輔比助留功有留人共止倶世氏思賴乎幸倍給布其家々乃
守護神等乃大前我學業爾御靈乎請奉留津速產靈大神亦
千魂命與堅產天兒屋命亦名八意思兼大神乃大前卜庭
皇神太祝詞命橘眞知命乃大前及此祝詞講義乎著止須爲氏波
天地爾思滿波志氏其因々爾說明志仕奉留神等我幸魂奇魂
神乎始奉氏八十日日波在杼毛一日毛漏忌事無久遺事無久
御名思比御功仰氏持齋伎仕奉留天神千五百萬國神千五
百萬大八島乃國々島々所々乃大小伎宮々社々爾鎮座坐
須八百萬千萬神等乃大前及潮沫乃凝氏成留祁粟島乎常世
乃戎乃國乃八十國島乃八十島止皮薄爲別氏大國小國百
島千島止國巡作給比御手打掛氏引寄留事乃如久爾皇御孫
命乃大朝廷爾事依志奉給布大己貴命少彥名命二柱乎始
奉氏其各國乃國魂神乃御前乎毛悉爾招奉利令坐奉氏皇神乃
御靈祭世流神籬乃前爾穗積朝臣重胤鹿自物膝折伏世鵜
自物頸根突拔氏天乃開手乎八段爾拍上氏八度額突伎八
度拜美仕奉利種々乃幣帛乎捧氏齋波利滿波持恐美恐美毛
神祝爾祝伎奉利氏今日乃朝日乃豐坂登爾稱辭竟奉久天神波

天乃磐戶押張利見行志坐氏天乃磐門乎押披伎天乃八重雲
乎稜威乃千別爾千別氏天翔利國翔利天降利寄給比國神波
高山乃末短山乃末爾上坐氏高山乃伊穗理短山乃伊穗理
乎搔別氏祁陸往道波御馬爾鞍置伎岩根木根踏凹美氏泝志給比
大海原波秀留浪穗爾大船小船列々爾浮氏來向比給比天
津祝詞乃太祝詞事止稱辭竟願自須事乃由乎天香山乃天
乃眞男鹿乃耳振立氏乎久安久所聞看止申須天爾坐神等諸
國爾坐神等諸相諾比給比相穴奈比給比相助祁給比相幸閇給布
尊伎高伎廣伎厚伎恩賴乎蒙奉氏皇典乃學業爾功乎立皇神
乃大道乎說明米仕奉留事乎某甲我德止戴持氏仕奉利來隨
爾皇神乃御靈止天地爾思滿波志靈合氏曉志導伎給布事乃有
爾依氏不緩不怠勉結氏仕奉爾就氏波明米得思比得事日每爾
多久毛奈成行久爾就氏波前爾是止思定志事乃今見禮婆非在毛有禮婆
今說事乃後爾誤在毛牟又可知爾波不有止加怖禮萬比縮氏皇神乃大牟爾
御心乃辱久畏久後人乃評毛優久耻伎乎然有止氏點止有牟波
終爾何時乎待氏加我此志乎貫久期在牟止嘉永乃元年利負氣無
毛思起志氏天津祝詞乃太祝詞乃注釋書乎書記志明米夜止思成
氏其年乃十月廿四日爾事始氏出雲神賀詞波此八月乃晦
日利余書出氏末乎年毛爾不至文禮杼已爾今盛爾注須奈時利且腹
稿成氏有禮婆家爾歸氏後此年內爾波悉記乎氏牟今成留處廿一

卷有利此乎記畢氏卷數波廿二卷爾至利紙數波二千枚爾可及毛奈有乎如是留容易奴加良太義乃年乃四年止云毛半婆爾不足物爲乎多留速爾出來事毛波志獨我限有留智乎以能毛成得倍伎事爾非受奈毛波有婆部留皇神等乃某甲我身爾任給氏千名乃五百名爾負氏令仕奉坐事止預相輔相守給布幸魂奇魂乃神事乎戴持氏波我身爾爲氏我身爾非受吾心爾爲氏吾心爾非止自思自物進毛不知爾退毛不知爾嬉久尊久思爾由流令氏世家業閑伎乎著無久本無伎爾吾此志乎憐美氏光憲重義等諸事議利輔相爾依氏身毛寬爾在利心毛平爾在故爾出來留事爾志有婆此賢木合爾於氏此御祭波可仕奉伎理止思定米今日乃生日乎下定氏某甲我此年爾至留迄四十歲止言布齡爾爲氏某乎終倍猶今利余思立氏其下構爲留日本書紀傳乎毛著述志仕奉利初伎賀毛乎彙氏可物爲止久其此乃事乎数千等諸爾議氏種々乃幣帛及種々乃味物乎毛大前爾取並氏此飽海田川二郡乃學族其乃覚爾詠氏奉留祝詞乎諧氏爾詠留長歌三十餘利乎藤原光憲乎堂毛操莞爾捐上惠々良々爾歌上仕奉留止爲氏皇神乃御正志乎恐毛請奉留事在利其波此祝詞講義爾事擧爲流論乃世毛爾人毛爾異在波皇典乃條理二途有利古事記日本書紀乎始氏次々爾正史乃較略毛波志高天原爾神留坐氏事始給志比皇祖天神天地乎立給比萬物乎成給倍留事起

與利記氏天日嗣止皇御孫命乃御世乃繼々天神乃御子隨毛此食國天下乎召給比持給比氏天地乃依相乃極美所知食牟皇統止臣連伴造國造八十伴乎始氏天下ノ氏々名々人等乃出自止其仕奉留裔孫乃次々神止皇乃大道乎始止爲氏其被行來奴事實乎悉久記載多婆禮天下乃底寶御寶主止仰戴伎拜讀倍伎事勿論在我祝詞乃趣毛大旨其爾似氏然良受其波天地乃初時利八百萬千萬神止多在留中爾殊在留所以有氏其惟神爾立多留御功乃趣爾依氏其乎其神乃德止定米乎名乃五百名爾負持給比長久遠久其神止守坐須由乎以氏皇御孫命乃天降利來坐時爾神漏岐神漏美乃命以氏天津祝詞乃太祝詞事止申依志奉給氏長御世乃遠御世爾令行奉給布神事爾氏貴伎高伎大御政止食國天下乃公民乎調給比撫給比養給比治給布天津日嗣高御座乃菜波悉久爾此天津宮事乃御定爾法乎則世給比氏行始米給比來留物毛止奈有留然禮婆新年祭六月十二月月次祭大嘗祭止此四度乃祭波國家乃大事止最尊美崇奉世給布御政事在我其高爾高天原爾神留坐皇睦神漏伎命神漏彌命以止云氏緘爾皇吾睦神漏伎命神漏彌命以氏皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉止有波初國所知々志大朝廷爾爲氏行比始給我閒留故奈利此乎御紀爾比梭留爾高皇產靈尊因勅曰吾則起樹天津神籬降

天津磐境ヲ當下爲ニ吾孫ノ奉上レ齋矣汝天兒屋命太玉命宜下持ニ天津神籬ニ降ニ於葦原中國ニ亦爲ニ吾孫ノ奉上レ齋焉止見延古語拾遺毛爾其後爾宜太玉命率ニ諸部神ヲ供ニ奉其職ヲ如中天上儀上仍令ニ諸神亦陪從セ止有波其御世爾神籬乎樹氏大御身守護乃皇神止持齋久八前大神乎始止爲氏天社國社乃皇神乎毛共々爾稱辭竟奉給閇留證奈利又其辭別爾御年皇神止有波大地主神乃行定給閇利志事在乎大倭社注進狀爾御歲神波以ニ八握嚴稻ヲ爲ニ神體ト止有乎御紀爾稽留爾天照大神又勅曰以ニ吾高天原所レ御齋庭之穗ヲ亦當レ御ニ於吾兒ニ止詔賜比授賜閇留乎神體止爲氏齋給閇利止所知又座摩神波水取乃政事爾依氏高千穗宮乃御井乎定賜倍留余利齋比始米氏大宮地乃靈止祀給比御門神波其時爾降給閇留御靈實乎令坐氏四方御門爾齋給比生島足島神波大國主神乃瑞八坂瓊止平國之廣矛止乎獻給閇利志乎其神實止爲氏齋給閇留御名奈利御名奈利神名式爾所見多留大和社爾坐三柱乃中乃大國魂神八千矛神乎生國足國神止毛生島足島神止毛稱申世留乎水垣御世爾其圖乎模志氏大地乃靈止大宮内爾齋給閇留在利又同式爾大御巫座摩御門生島止廿三座乃神乎宮中祭神止載多留波高千穗乃皇大宮乃余利例奈利然留乎古語拾遺爾神倭天皇乃御世止爲波留中洲爾都乎作始給布因爾依利伊勢大御神奈留波彼往古乃神勅乃如久天皇止同牀同殿爾大座坐初多留御世乃詞奈利後乃太神宮詞爾此乎天津祝詞乃太祝詞止言比類聚國史乃伊勢大神宮乃部爾右乃天津神籬天津磐境乃事乎記有乎以氏所知多利御縣神山口神水分神祭波御眞木天皇乃九年止云爾當留可志其波御紀爾春三月甲子朔戊寅天皇夢有ニ神人ニ誨之曰以ニ赤盾八枚赤矛八竿ヲ祠ニ墨坂神ヲ亦以ニ黑盾八枚黑矛八竿ヲ祠ニ大坂神ヲ四月甲午朔己酉依ニ夢之教ニ祭ニ墨坂神大坂神ヲ止有氏其墨坂神波宇陀水分神大坂神波大坂山口神奈留由乎宣長我說有氏已爾古事記傳爾載留所正乎從後迄廣瀨大忌祭龍田風神祭止同月乃同日爾相並被行留乎風神祭詞爾夢乃御誨乃事所見多留波此度在倍久又大忌祭爾屬氏別爾御縣神山口神乎被祭留尋彼此思合須留爾其同時奈留事論無久毛思延多留倍年中乃常祀乃中爾大殿祭御門祭及大祓詞波日向宮乃大營乃豫爾行始賜比計武其波大殿祭大祓詞其爾天皇我朝廷爾仕奉留諸伴男乎舉留多最初爾比禮掛伴男手襁掛伴男乎載多留此伴男波神今木大營新營共爾朝乃大御饌夕乃大御饌乎仕奉留主多留長在我故奈利又六月十二月乃大祓波橿原宮爾行定多利止所思多禮抒毛其波日向宮乃遺制止聞由其故波大祓乃政竟氏鎭火祭道饗祭有留其詞爾皇御孫命波豐葦原

乃水穗國乎安國止平久所知食止天下所寄奉志時毛爾止高天
原爾事始氐皇御孫之命止稱辭竟奉止毛有氐何毛其月晦日
乃夕日乃降爾令行給布例在乎合世氐灼然伎所奈利鎭ニ御魂齋
戸ニ祭波猿女君等十一月中寅日爾鎭魂祭乎爲氐天皇命
皇后宮皇太子乃御爲爾鎭奉禮留御魂乎十二月爾至氐齋戸
爾鎭奉留奈利此波日向宮爾氐天鈿女命中洲宮爾氐宇麻治命乃
仕奉利行定給閇留所奈禮抒毛其歌毛詞毛御世々々乎經間爾沿革
禮利止見延氐其體古加良受然禮抒毛上代乃遺文波爾氐在奈利臨時祭
乃中爾出雲神賀詞波天穗日命乃天爾復命志言乎奈留天夷鳥
命始氐出雲臣止爲氐天穗日命爾次氐熊野杵築乃二宮爾
仕奉留次乃隨神乃禮寶臣乃禮寶止日向宮爾捧參向志全利以
降天皇乃御世始出雲臣我代始爾此吉詞乎奏來禮留者止見
延遷却崇神詞將天神乃行下給布所爾爲氐事無伎波爾常祀乃
道饗祭奈留乎已爾其事有氐波崇神乎祭和氐山川乃廣淸地爾
令移却給布御政奈利遣ニ唐使ー時奉幣詞波元來三韓乃日本
府爾大御使乎遣賜布時乃在乎其國乃往來止志全利唐乃戎爾
大御使乎下賜毛留爾用來禮留爾氐平宣長我說爾此詞乃古久愛伎
由乎云留爾合世氐思布爾詞爾皇神命以氐栅居波吾佐平止見延古事
記爾定ニ墨江之津ー乃事有禮婆此波高津宮乃大御世爾成禮賓乎止
許曾所思禮多若氐常祀詞乃中毛爾大神宮度會宮奈留其爾合氐九詞

有波平城宮爾氐成禮留所爾爲氐古代波爾彼天津祝詞乃太祝詞
乎耳被用氐許曾波有止米思由春日祭平野久度古開等乃祭
詞波悉爾久今京爾氐出來禮留我故爾古伎御令爾違事毛多在利若
氐年中諸度乃祭爾其神主祝部乎神祇官爾召氐其頒幣乃
事乎令行給布事波在爾抒毛古乃大御世爾波神止皇乃御際甚親伎
久坐々氐神物止官物止相別留爾事無久神事止公事止又別
々爾非留我故爾天下乃大御政波志毛此天津祝詞乃太祝
詞事乎以氐天社國社乃皇神等乃御前乎令ニ請奉ー賜比食
國天下乃公民乎教賜比趣賜比志加婆此天津宮事乎以氐天下乃
法則止立賜比敎賜比公民乎調賜比撫賜布愛伎大御政敎奈利
志故爾實爾古語爾所謂神在隨事擧不爲國爾氐有乎留都外國爾
往來布事乃始利氐余何時止無久薄惡伎風儀乃移氐比神毛爾皇毛爾
界乎立氐仕奉爾別々留事止成氐祝詞波唯神乃御前乃願言爾
用布爾物止耳思取氐天地止日月止共爾易伎爾自大御政乃此爾
根據氐立有止波朝廷爾毛不所知看天下毛爾悉久不知我如久奈留中
爾天津神隨乃大御政波此天津祝詞乃太祝詞乃中爾具備
氐命續久食物著物住家乃經營耳爾在我故爾四度乃大祭波
稻穀爾依利又神衣祭大殿御門等乃祭有波古事記奈留天神
乃御言爾修理固成是多陀用幣流之國止仰趣給乎留御紀
爾波循々之止有氐天皇乃天下乎持給比整給留御旨在故爾其

政言世賜布食衣宅乃事在利此古今爾貫留大道乃神隨奈留所爾爲氐其道乃立氐被行氐有奈利天地乃神等乃相輔比守給布所此爾氐彼人乃上乃善惡乎言痛久云喧久外敎乃類爾波非受奈毛有祁留然古乃大御世爾波神事止公事止一在志故爾國々乃宰波悉久爾其部內乃神主止有氐仕奉禮利伎故度相神主波伊勢乃國造爾氐大神宮爾仕奉利出雲臣波出雲國造爾氐大社爾仕奉留等成志乎離波豐崎宮乃御世爾國造縣主等乎廢氐國司郡領乎被置氐余利其氏姓爾波耳己曾古名毛遺多利祁禮古例波悉久爾移比被替志加杼毛猶國司郡領爾氐神主祝部乎兼有毛有志加婆公事爾依氐太政官爾召爾波國司郡領止宜良志神事爾依氐神祇官爾召爾波神主祝部止宜良須御定奈留乎又後爾波神主祝部波別人爾被任留事止成奴留余利愈々神止皇止乃御中遠久成氐高天原爾事始氐皇神乃御中皇御孫乃御中取持氐中在布留中臣神乃裔毛徒在我如久成禮利祁留故今此祝詞式乃事實乎定加爾說辨留時波高天原波青雲乃靄極美地下波底津石根乃限利覆此隱留限無久直久正伎古道乃詳明爾見禮氐此天皇我朝廷余利此天津宮事乎食國天下爾敷給比行賜波武其時運乎近美加毛皇神等乃我心乎開氐說明良米令仕奉給布爾在良之故此言立波我言立波我言舉爾波非受皇神等乃世爾毛曉佐麻久思行坐須大御心乎某甲乎爲氐天地乃底際乃內爾思滿志波靈相氐令二思

得二給止波久令伎廣伎大御靈波幸比賜留倍物爾在良志止欣威志伎爾就氐手俾比足乃蹈處毛不覺嬉美辱美奈毛御祭仕奉良久止爲氐奉物波明妙照妙荒妙和妙五色乃物御鏡御横刀瑞玉爾至麻氐豐年乃八握嚴稻乎嚴乃御水爾洗清志忌火乎以氐齋炊伎御笥器爾八盛氐取捧介此大山乃里毛居伎爾處毛狹伎迄家並爾饒比釀禮留清酒乎黑木止齋比甘酒乎白木止稱氐瓶爾八盛利甕爾滿並氐持恐美恐美毛清麻波利爾立奉久天津御膳乃長御膳乃遠御膳止汁爾毛實爾毛赤丹乃穗爾聞食志氐豐明爾明坐牟皇神等乃御心乃愛乃盛爾平久安久聞食氐御廚川乃鮎乃御贄加茂浦乃生贄干贄上津堤下津堤在留邊乃奧物渡島乃奧津藻菜瀧島乃邊津藻菜等山縣爾蒔留青菜畑子等我作禮留青瓜乎甘菜辛菜止獻利仕奉良久乎皇神等乃御心毛足比爾開食氐此祝詞式爾被載多留天津祝詞乃太祝詞事波皇御孫命乃大命以氐天社國社乃皇神等爾令申給布大御心爾坐世婆其言乃如久爾皇御孫命乃大御世乎手長乃大御世止堅石爾常石爾齋比奉利茂乃大御世爾幸閇奉給比親王諸王諸臣百官人等乎毛守惠美給比大君乃御命畏美東乃遠乃朝廷爾坐氐天下申給布大將軍及其率氐仕奉良須司々乃人等及四方乃食國乎治奉止任賜留幣國々乃宰等爾至麻氐天皇朝廷乃敷賜比行賜留幣國法乎過犯事無久己乖々不令在邪意穢心無久

淨伎明伎正伎直伎誠乃心乎以氐彌髣彌髴氐綾恐事無久天皇乃御稱止爲氐令仕奉給比天下公民乃手肱爾水沫畫垂向股爾泥畫寄氐取作與津御年乎八束穗乃茂穗爾成幸倍給比天下平穩志久公民富榮志米給比某甲我日每爾武久雄々志久正久直久勉結氐仕奉留祝詞講義日本書紀傳余利初氐皇御典乃學業爾妙爾細志伎美名乎千名乃五百名爾令負持給比許々多久忠爾功志伎功德乎立令二仕奉二給比此場爾參集比氐共々爾御祭仕奉留光憲重義余利始氐八十諸人爾至迄爾家爾毛身爾毛八十禍津日乃殃災在世受咎過在牟乎婆神直日大直日爾見直志聞直坐氐夜乃守日乃守爾惠美幸給比子給比子孫乃八十連聯爾至迄爾壽命長久世乃長人止令在給比皇御孫命乃長御世乃遠御世爾清伎明伎公民止仕奉利令榮給閇止今日乃生日乃足日乃朝日豐坂登爾祭主穗積朝臣重胤愼美敬比恐美恐美毛白賜波久止申須吾學祖神止日每爾稱辭竟奉八意思兼大神崇道盡敬皇帝命二柱乃大御前及礒城島乃金刺宮乃大御世爾不須也因目伎蕃神乎渡參來禮留時爾我國家乃天下爾王止坐波恒爾天社國社止鎭座坐須百八十神乎春夏秋冬爾祭拜美奉留事有禮婆方今爾當氐其乎持齋伎給波婆國神乃怒給波武止清明伎心乎以氐諫申志止給閇留物部尾輿大連公中臣鎌子連公又譯語田乃幸玉宮乃大御世爾佛法乃禍事爾依氐疫疾流支行禮氐國中乃惱志久在志時爾三栗乃中子乃像乎難波乃堀乃堀江爾棄氐國內乃汚穢乎掃除武止雄々志久武伎御功乎立給布物部守屋大連公中臣勝海ノ大夫令世處四柱乃大前平城宮乃大御世乃始爾皇御孫命乃日繼乃古語乎以氐古事記乎正久直久記謂給比又舍人親王止共爾皇御孫命乃大御世乃正史乎書紀志奏上給幣留太安萬侶朝臣命乃大前正敷平乃大宮柱太高敷志氐天下乃大同閇留大御世爾古語拾遺乎撰比奉利氐故事乃大古爾遂倍留乎改正志給波武料爾忠々志伎心乎顯志申給閇留齋部廣成宿禰命乃大前又皇典乃類乎聚米部乎分知氐萬事乎撰定給比氐皇御孫命乃大朝廷乃御爲天下乃爲爾廣伎厚伎御功坐氐萬世爾文道乃祖神止被持齋給布菅原太政大臣命乃大前古學乃業乎起志始氐世爾弘米敷給波久止其學校乎內日刺都乃邊爾建給波武事議利坐志荷田大人又其大人爾受繼志氐古學乎弘牟流業波今波東乃遠乃朝廷爾氐天下乃大御政乎中行比給倍禮婆天下乃人共乃多久輻湊流地爾在禮婆其地良波志武止大江戶爾住氐諸人乎率奈比導給比萬葉集考及此祝詞考毛貴久高久勉米物爲給閇利志賀茂大人御心乎吉野國乃水分大神乃顯御子止神風乃伊勢爾生出坐氐五十鈴乃川乃清伎明伎御心隨爾神世乃有狀乎眞淸明爾見渡志給比氐古事記

傳乎始氏何(ナニク)彼乃書典多爾記著志坐氏古爾毛類無伎大業乎悉久成志整給比氏天地止日月止共爾窮無伎皇御孫命乃長御世乃遠御世爾傳給閇流平宜長大人又其師說乎繼弘米氏古史止云乎著志給比我古傳波萬國爾毛古說萬國乃古傳波我國爾毛古說奈留由乎隈不落見徹志給比氏此乃古語爾滿多留古傳乃彼爾在波大己貴少彥名命乃萬國乎開闢米給比靈化乎含養志給比志時余利遺利傳留事乎見得氏儒止云波漢人乃造言佛止云波蠻民乃妖言奈留由乎明米正志給比見識坐氏千書八千書論比定給閇留我平篤胤大人合氏四柱乃御前又吾兄弟乃數多在留中爾皇御典乃有乃悉皆某甲爾授給比氏人親乃立留言立大丈夫乃清伎其名乎千名乃五百名爾負持氏祖名不絕功志美勉氏其學爾仕奉留倍伎由乃懇到奈留庭訓(ミナシヘ)乎物爲給比殊爾大祓詞後釋止出雲神賀詞後釋止二部乃書波傳命余利令傳授給閇留乎予幼稚久爲氏別奉志加婆其心乎得悟利奉良邪利志乎今此祝詞講義乃半成氏思閇婆此事爾專仕奉禮止仰給比授賜倍留物爾在可志止思比氏某甲波其任爾堪多留者止思志定給閇留御心止高久貴伎爾就氏返比思爾奉利劣久拙伎某甲我身爾餘留大義爾志在[illegible]天地乃神止諸共爾相預比在志氏此處波如此記須倍久此說波然論布倍志止分思得給閇留物止曾受賜利氐殊爾其御愛美乎起止波寢止波忘事無久其御靈乎仰伎戴奉留吾父穗積重威翁乃御前又吾母麗子乃大刀自乃現御前又此祭場爾參集流人共乃家々乃祖神等乃御前乎毛此神牀爾令坐奉利相座爾齋伎拜奉利又我子穗積光胤乎毛招氏此所爾令候留乎御前乃事執持氏今天社國社乃皇神等爾白上留事乎委曲爾傳申世止宣

嘉永四辛亥年六月九日癸於賢木舍作之同夜校

祝詞講義校寫竟宴後序

延喜式八卷に載られたる祝詞文はしも掛卷も綾に畏き天照皇太御神の大詔旨以て豐葦原千秋長五百秋水穗國に皇御孫命を天降し給はむ御裝束に就て睦神漏岐神漏美命の天神國社を齋ひ祭祀可き其法則を奉授給へる天津詔刀の太祝詞言にして此上無く尊き朝廷の大御政事になも有ける然は有れども高千穗宮より以降御々世々を經ぬ隨意增補へられたる言其の打交りて中今の大御世に以其文の分明からず成行て容易く撰別難きを近來皇典學起り初てより世に賀茂翁祝詞考鈴屋大人後釋など有れども未其根本を探索り得ざる說どもにて熟く說き負せたりとは云可からず爰に吾が嚴橿本大人祝詞講義を著述し給ひてより其訓法も又後に添加へられたる言も甚分明に成り初たりと云ふ可し其講義の出來ぬに隨ひ原書は賢木舍許に下されたるを次々に此を校合せと其翁より仰せを受て予も年月其事に仕奉りて終に成し竟たるを後に糺し見るに式に載せられたる祝詞文は廿三卷に落成ひ外に台記の別記に載されたる中臣吉詞三卷と通計二十六卷を合せ號けて祝詞講義となも云なる其原本は賢木舍文庫に秘藏りけるを吾友宮野直享更に懇乞願して先年より晝夜となく勤み仕奉りて許多の卷々成整しかは今は其家の底寶寶典となして子孫に傳ふる事とは成にたるを此を歡喜の餘りに其家處の名に負ふ瑞籬內にて祝詞講義校寫竟宴と云事を催されて天神地祇を祭祀られけるに予も又其席に列坐りて是迄の有狀の較略を演て祝詞講義の後序にとて書記す也

神武天皇即位紀元二千五百三十三年

明治六癸酉年二月七日

大瀧光賢

祝詞講義校寫竟宴之祝詞

吾八尋杵植尾乃神山爾賢利榮由留熊樞乎打折持參來弖此乃神牀爾神籬止林備奉利同社爾茂合布五百枝眞賢木乎御玉串止削立弖奉招利令坐奉留掛卷毋畏伎天社國社止稱辭竟奉皇神等乃大御前爾宮野直享愼美敬比畏美畏美毛申賜久抑天津詔刀乃太祝詞文波志毛高天原爾神留坐氐事始米賜比志神漏伎神漏彌命以弖皇御孫之命乃天降坐時爾天下乎治食牟大御政乃行比給波牟制度止大御口自事依志授奉給倍利志天津宮事爾志弖甚毛尊伎寶典奈留乎其波妙爾奇久議難伎神乃定米賜倍留詔刀言爾志有禮婆容易久解難久悟難伎事波言卷毛更奈利爰爾吾學乃師奈留穗積重胤伊皇學爾志深久殊爾八意思兼神乃御靈也立加利計武其祝詞講義乎仕奉利眞澄鏡乃面乎押露志弖見奉留如久甚分明志久書著述弖世乃爲人乃爲爾時乃行計良婆天皇我大朝廷爾奉良武乃心得爾毛奈有計留我其出來留隨爾大瀧光賢委曲爾校合志弖成志竟多留乎其原本波大瀧光憲我文庫爾秘藏利計留乎僕又乞求弖書入等毛有乎遺事無久校寫志弖年普久其事爾勞伎弖漸々爾書竟津留悅爾宴止云事乎物爲留爾就弖曩爾皇神等乃加比相守賜比助介賜比弖落成志米賜倍止乞祈奉利志禮代止今日乃生日乃足日乎吉日止撰定弖稱辭竟奉久波御饌者精米止作搗弖御飯爾炊伎玉倚爾八盛爾盛滿弖御酒者名高伎大山爾釀世留清酒乎瓺上高知瓺腹滿並弖鰭乃廣物鰭乃狹物奥津藻菜邊津藻菜甘菜辛菜爾至萬氐百取乃机代物止宇豆乃大前爾横山乃如久置足波志弖隨分爾奉出須種々乃味物乎平久安久所聞食弖言卷毋綾爾畏伎皇御孫命乃大御世乎手長乃大御世止堅石爾常石爾齋比奉利茂乃大御世爾幸倍奉賜比天下乎穩志久公民富榮奉仕志米賜比皇神等乃相宇豆乃比賜比弖皇典乃大御學乃業乎扶疏樞乃廣葉乃世爾毛廣良爾振比令起賜比天壤止共爾窮無久子孫乃八十乃連續彌茂榮爾功美仕奉志米賜倍止大瀧光賢大瀧光武等乎始弖同學乃諸諸共爾鹿自物膝折伏世鵜自物頸根突拔弖宮野直享恐美恐美毛申賜久止申須

辭別氐高千穗別言速結比命言靈豐光憲靈神瑞籬内玉串彥命止三柱乃靈號乎稱奉利留宮野直享畏美畏美毛申佐久上件天社國社乃皇神等乃大御前爾聞延上奉留事乃如吾嚴橿本大人乃著述賜倍留祝詞講義乃寫本乎書調牟止賢木舍乃翁爾乞請弖其許可乎得弖往去安政乃三年余利事始弖今年明治六年止云迄爾十有七年乃間朝那夕那神事爾仕奉留暇乃間爾日爾異爾怠乎事無久功美勤免留多

事乃不空氐書竟多留波專大人等乃御靈乃相輔介賜倍留事止其歡喜乃竟宴爾如此御祭典乎仕奉久乎御前乃事執持氐茂梓乃本末不傾乎久安久仕奉良志米賜比皇學乃業乎彌々益々爾令勉強氐起止波寐止波暫毛忘留々事無久心爾緩怠米布事無久梶乃瑞枝乃立榮由留事乃如久彌廣爾米令弘米賜比幸陪賜止倍宮野直享恐美恐美毛申須

延喜式祝詞講義竟宴歌集

嘉永四年辛亥年八月十日於賢木舍同詠

新年祭　大瀧光憲

天照皇大御神。豊葦原瑞穗國は。我御子の可知國と。大詔命を締ひて。明立つ天照宮に。高御座皇太子と命坐奉り詔曰へらく。皇我か貴の大御子。皇御孫の御世の續々。高御座太知坐て。依奉る天津日嗣の。瑞穗をば天津御膳の。長御膳の遠御食としも。千秋の長五百秋に。齋ひつゝ齋庭に知らせ。幸くして天津日嗣は。天地と極を知に。遠長に榮坐むと。事依し奉給へば。神魯伎と親神魯美の。命以て定たまひて天社國社と。稱辭依し奉らく。神吾は天津神籬。磐境を起し樹て。皇御孫の命の齋ひ。天上にしも始奉れり。中臣と齋部の神等。大前の事執持て。政こち齋ひ仕へて。諸作の神等諸。日宮の儀式如て。其職に供奉れと。言依し授賜へれ。高御座天津日嗣と。次來る君か御世々々。萬調奉る圭と。立奉る其業はいと。四方國公民の。取作る奥つ御年を。齋藏に貢奉出せて。天下明らめ給ひ。食國を治給はむぞ。

四方國調たまひ。大寶治給へる。神業の御旨なりける。天皇の神の御言と。天下公民の。取作る業を告して。御年をば初坐くと。新年に言擧坐すを。題には民の爲す業。其本を言以て行けば。天皇の貴の御手代。仕はせる由を以てし。皇神に聞え給へば。天地の神相諾なひ。御手懸て預相作り。成就しむる故に依てぞ。大神の御言の幸し。天地と易る可からず。著明き信見えける。然れこそ天社と。定めつゝ齋ひ祭らせ。斯れこそ國社と。治奉り齋奉れと。皇親神王命。事教へ奉賜へれ。天神御子の命の、神隨天津日嗣と。天下調賜ひ。食國を始め賜へる。神業を御政事と。天照す神の御世より。語繼言來る事は。天社國社の。祭より調給ひ。業はひを治給ひて。其餘の萬機は末也。本是天天津宮事。皇祖神の依せる御命。高千穗に初宮敷す。其御代に弘給ひて。天地と窮知えぬ。政事定り來らし。太玉命の所作と。横山なす幣帛捧け。天兒屋根神命の。太諄辭稱でゝして。新世に仕初てし。古の例の髓に。其職に裔孫を任て。年次の御政事と。新年の大御祭を。二月に行給ひ。年内の大祭祀。此をしも最初に成て。天社國社と。稱言竟奉らしめ。皇神を齋かせ給ふ。神事に今も見る如。天原覡戸の風儀。著明き祈年祭。多太く有けり。

御年神　大瀧光賢

御年の皇神等は。御佃の守護の神。豊受の御靈に資て。穀物成てし有れど。其作る業を知ずは。如何とも所詮無らむを。畑物出てし來れと。陪養る道を知ずは。生し立る事難けむを。其御祖須佐大神。天罪犯し給ひて。業はひの事を妨げ。祓には相せ給ひて。御心の清々し時に。豊受の神を相輔ふ。事をしも功しみ給ひ。持分て令知給ふ。御子神の多在る中に。其神の恩頼祐くる。守賀御魂大年神。其神の御德整ふ。御年の其皇神は。穀物作り育つる。事をしも守らす神と。新年の大御祭の。最前に齋かせ給ひ。天皇の知す日嗣と。天下公民の。手肱に水沫畫垂り。向股に泥搔寄て。取作る奥つ御年を。八束穂に成し幸へて。大年を守坐す神。豊年に幸はふ御靈。大地主神の御代より。齋ひ初仕奉れる。故事を天上に聞して。皇祖天神の御命。天降り初國知す。日の御子に傳給へれ。公民勤はく業は。皇御孫の朝廷に依て。

此神の輔奉れれ。國神の始給へと。顯世に行ふ所。天神授賜けむ。御年の神の神事。天上の儀式の如きを見れは。今もかも神代に在らし。此の御祭。

大御巫祭神　　鈴木重胤

天神神籬立て。事依し奉れる隨。齋戸の皇神等と。磐境を起し始て。二上の奇日宮ゆ。大御身の守護の神と。齋つゝ祭らせ給ふ。神魂高御魂は。天地を始給ひ。世中を立し皇神。天地の底際の内に。在と有る造化す神。此神の御靈の殖と。成出る物は多けと。其體を相凝結ひ。正身をは相成す所。氣と形と神を合せて。人身は斯しも成れれ。物皆は然しも立れ。天原薫滿たる。朝霧なす清き大氣の。物と成る始を云は。生魂神の御業。天地と日月と共に。足行む國の體以て。面足し正身を成すは。足魂神の御結び。天地に思足はす。玉留の魂神の配賦たる其魂こそは天地の神の恩賜。其本の然しも有れど。其末を日足す神の。共共に無ては非ず。穀物百の木草の。日の影に靡向ひて。出て來る生氣の實は。大宮賣造り醸せて。酒氣と吐納しめ。清氣を内に實しめ。濁氣を虚空に吹棄て働きも。立も動くも。氣息の機關る所。

食物は御饌都大神。絹綿を身に取裝ひ。家門を立て住るも。體を以て體を養ひ。其身をは保護しむなり神はしも正身の主宰。言語の事しも有て。天地に思足はし。靈合へは神に靈觸り。言語へは事し辨こむ。天なるや辭代主の。神からし掌れる所と茂梓本末有て。皇神の保せ給ふ。頗傾ては禍事有む。放さは病て臥さむ。齋戸に祭鎮めて。天皇の御身幸からむ。天津宮御政の。有る中に多太き。齋戸の神。

座摩　　羽田俊彦

座摩に辭竟奉る。五柱其皇神は。大宮の地の御靈。御井神御竈神と。神事を齋ひ定めて。皇天の神祖事依給ひ。高千穗の皇大宮ゆ。中洲畝火宮に。宮移り給ひし御世に。神籬を起して齋き磐境を立てし齋ふ竈と井の神にし坐せは大宮の内なる物を水無くは如何にかも爲む柴無くは住所たらじと皇神の御靈敷せる其物の豐饒なる地神隨見し明らめて天皇の瑞の御舍太高く治賜ひて祭來し由緣をし以て大宮の御靈と祀ひ祭らせる事し尊し生井はし行井の義大宮の內重外重御溝水絶せる神座摩はし井堤といふ言後世の溝なるらし岩間より沸り涌く水其こそは桑井の御靈地

の下底津石根ゆ左右縱に横に八百綱を延たる如く行水の水脈引分て津長井の神業立り御井神一つ御靈を三井とし諸し稱ふれ阿須波はし柴木の薪波比岐はし灰木の薪物をしも炎以て炊くに靈幸ふ庭火皇神大宮に齋給ふは天下四方の御爲是以其皇御の敷坐る其處に居して平らけく所知し食てへ太詔刀言

御門祭

久方の天の戸開き高千穗の峰に天降し天皇に御靈共へて天津神言依せ奉る石門別其大神い日の御門守る司と稱こち告別給ひ櫛磐牖豐磐牖と其御名に懸せる如く日經緯影面背面在と在る御門掖門を大磐を凝々しく立て岩構造れる如て疎び來る神をも防き荒び來る物をも退け晝夜と守給へは大宮は平に安く大殿は穩に在らし皇御孫の宇豆の幣帛。朝廷より始奉て。天下四方の守を。仰ぐ幣かも。

生　島　　清　宝　俊　明

大地は成れりと思へど。悉く成せりと云むや。國土は立りと云へど。成竟る物と云むや。神御祖二大神に。天津神御言詔さく。漂へる此國土を。修り理め固成せとし。大命仰給へは。伊邪那伎の神功畢て。天津國日少宮に。報命白し給へれ。八束髮作須良命。青海原潮の八百重を。知せとの御命を請て。根國を作給はむ。堆國を縫給はむと。陳り有る其を居らし。三身の綱打懸て。河船の徐々に。引給ひ國寄坐て。大神い御名に懸せる。國引の御言竟有り。大名持神の命は。生太刀を御父に得坐し。生弓矢依さえ坐て。御功を受繼給ひ。國作り大國主と。其御名に負持坐て。海月なす漂ふ國を。五百つ鉏取て。居り別作給ひて。山をしも其に置し。川をしも彼に通し。國形を善はしく爲り。鹽沫の留る極み大國を作り弘め。谷蟆のさ渡る限り。隈落す平に坦し。大八島國は更なり。海外なる島の八十島。漏落す伊行巡らし。狹國は廣く造らし。峻國平に成して。千萬の大國主の。御徳成れりし時に。天神御子の命に。此國を事避奉り。御身親杖し給へる。國平の其廣矛を。獻り白上らく。我こそは此矛以て。大國に功績立たれ。此を持て治給はゞ。必し平安く坐むと。奉出す其廣矛を。生國の神とし稱へ。是國の神と崇めて。天照す高天原ゆ。皇御孫に傳給へり。大地に在ゆる國の。八十國の大國御魂。天皇の神の朝廷を。師木島の宮

に別れて。大倭大國魂の。大神と齋ひ奉れる。御靈をば齋ひ携作して。天皇の宮の守に。生島と齋ふ事はし。漂在る國とふ如く。定らぬ國なるからに。堆國を作り足はし。足國と整へ坐る。是ぞ此天津日嗣と。天下知看とふ。天皇の神の神業。人をして令立たまふ。此を以て人に業有り。大國の公民の。爲業と人は見らぬと。大國主神の所業と。幽冥ゆ預相造り成給ふ。恩頼得てこそ。大國の甚豊饒に。成れれ。生國と申せる御名も。是を以て稱ふるならし。足國と稱ふる故も。此由の言擧ならし。大地の靈と仰ぎ。幣帛を捧る見れば。神代し所思。

辭別伊勢　　松山紀民

高知るや天の嚴處ゆ。神祖の御傳坐る。宮事の天詔言を。天社國社と。御命以て令宣給ふ。祈年の大御祭の。辭別に申させ給。神風の齋の宮は。天照皇大神の。敷坐る神の朝廷と。御使を更に任さえて。大前に申さ令らく。大御神照臨まして。押張し伊依せ奉らす。顯國四方の境は。天原壁立極み。青雲の靄限り。白雲の墜居る極み。天雲の向伏限り。萬調奉らむ國と。事依し奉の隨。海原は棹柁不干。舟の艫

の伊渡る限り。大海に大船浮べ。朝和に伊掻廻らひ。夕潮を伊榜渡らひ。國産持參來り。陸路は轡根割ひて。馬爪筑紫の崎ゆ。道奥遠き境に。至る迄長道無間く。立聯け荷前の荷緒。結締り貢の初穂。大藏も埋む計に。積重ね狹國廣く。峻國平に榮え。海外なる國の貢も。大御神御手打掛て。八十綱を打延給ひ。引寄る事の如くに。許多も伊寄せ給ひ。莫大も授け給はゞ。荷前をば横山如て。大宮の前に置居。殘りをば聞食さむと。祈年の禮質。大前に申させ給ひ。奉出す貢の初穂。神官に祭らせ給ひ。新嘗を聞食す日は。遺れるを賜へ所由。天照皇大神。天官に所知食來る。齋庭の穗依し奉し。事依し給ふる御靈の。其時に執はせりけれ。祈年の御祭事は。天津繼日繼の始。新世の御業なる如。思はゆらくも。

御縣　　鈴木秀直

天照皇大御神。高御座定給ひて。日の御子を降し奉ると。知看す天津日繼の。瑞穗をは賜ひ寄せれ。然れども主とし有を。一種に統たる御言。五穀の種子は更なり。山縣に蒔る青菜も。畑子等が植物等。天下の青人草の。物多に食て活へき。物をしも授けらし

き。毎年の四度の祭典。國家の大事成す。御祭に所崇給ふ。御縣の其皇神を。薦枕高市御縣。磯結ふ葛木ノ國。柝竹の十市の郡。志貴の里山邊の縣。添としも御名を稱へて。持齋き祀ふ事はし。御縣の六の處を。天皇の御縣と爲て。生出る甘菜辛菜を。長御膳の御菜と齋はし。遠御膳と聞し食し來れ。其をしも思ほし坐て。縣主齋かむ神と。神代より定けむ任。山城に京を遷し。縣宰る官替ふれど。古ゆ住來にける。大和にて祭らす古例。中つ世に御園と云ふは。御縣を召ける遺制。園池の司に在す。御膳津神其ぞ其神。御心を廣瀨の神の。相坐に四月七月。二度に招て奉るも。其同じ神の故かも。水垣の其大御世ゆ。御縣に祀はれ給ふ。六の皇神。

山口　佐藤章彥

敷島の天皇に。黑色の御楯御矛を。乞坐し大坂神。其こそは山ノ口ノ神。空見つ倭國の。御縣の六の處に。十餘り四座坐けれ。祈年に預り給ふ。大前は六の皇神。山祇の神の命も。皇神の敷坐す山の。遠き山近き御山の。大峽に立る大木。小峽に立る小木をば。山津見の奉る御調と。年毎に生し立てし。天皇の瑞御殿。取作る宮木と成せれ。扶疎すと芽む春へに。諾しこそ祭給へれ。宜しくも齋ひ給へれ。一本の木とし云へども。大神の御靈の外に。成出る物し無れば。百敷の宮木の神と。神代より齋けらしき。山ノ口の神。

水分　同

敷島の宮の大御世。大君の御夢に入りて。皇神の諭し申さく。赤色の神盾八枚。赤丹塗の赤矛八竿。奉り我を祭らせと。乞しける宇陀の縣の。墨坂の神の祭は。水分の神社を。小楯大和國に。祀ひ初祭れる始。神隨尊かりけり。天照す日嗣の瑞穗。生し立て日足し坐る。皇神と守給ひて。山々の口より落る。眞下垂り下れる水を。彼此に分配らせ給ひ。此々に引する神と。其御世ゆ祭加へて。吉野宇陀都祁葛木と。四處に齋ひ祭れゝ。四方國八方の里々。悉に幸へ給。水分の其皇神の。大御田を守れる御德。餘れるを足ぬに配り。不足るを餘るに取て。平げく配り幸へり。御田つ物生立ち延て。八束穗と長くし莫々然。茂穗と多も實りぬ。此を以て其初穗をば。皇神に立奉らして。殘をば天皇の。朝御食に安けく聞し。夕御食に平に召も。水分に齋奉れる。皇神の依せる

恩頼。敷島に初國しらす。天皇の御業停し。此政事

春日祭　紀　民

空見つ大倭國。高座の三笠の山。春日を春日宮は。青丹よし奈良都の。日緯の御門の鎮め。宮近く守奉ると。鹿島の天の大神。眞名鹿に打乗給ひ。山川を磐根凹みて。覔給ひ見し明らめて。宮柱太知給ひ。布都の神香取の宮を。相座に招かせ給ひ。又更に御使立て。平岡の兒屋根命。伊勢に坐携幡姫を神招し奉れる處。皇神の乞しの隨。宮定め仕奉りて。四柱の神の瑞官。然れとも本宮をは。移ろはし奉れるならす。常陸には國こそ隔れ。香取潟雲居放れれ。大神の遙宮處と。此にして齋ひごちつゝ。本宮の祭を兼て。祀れりし宮なる故し。春日に祭神とし。古ゆ言繼來れ。枚岡の神の夫婦も。相殿に齋ふを以て。藤原の家の氏神。大神の裔の。門の其族蕃息り。其官高き隨に。公の大御敬ひ。家々の門の氏神。氏々の名々の祖より。殊更に超過給ひ。鏡刀御弓御矛に。馬鞍も備へて奉り。神寶許多捧けて。天下申給ふと。暇無き官の人も。大神の祭の場に。侍らはせ給ふ御掟。然耳の山なりけめや。天皇の朝廷の御爲。經津主と武甕槌の。二神は國を言向け。不伏神をも和し。和順へし御稜威普く。大國を守らし給ひ。比賣神と兒屋根神は。皇孫を生奉らしゝ。玉依姫命の御父。御母神天つ日嗣と。日の御子に親しく厚き。因縁坐る神にし有れは。嚴に請し齋へれ。神進る三笠山に。動無き皇朝の守護。四柱を齋く神事。尊く有こそ。

廣瀬大忌祭　廣　瀬　嚴　雄

御心を廣瀬宮は。瑞籬の久敷時ゆ。齋ひ初祭る皇神御食持す大忌神。若宇加の命に坐て。穀物主坐す御魂。御膳都神止由氣宮と。同神一つ御靈を。師木島の其大宮に。天下統御ける。天皇の御夢に所見て。風神龍田と共に。同日に四月七月二度に齋はれ給ふ。御縣の御食津大神。十餘り四の御前と山々の口より下す。佐久那太理落來る水の。荒き水和水成せる。山ノ口皇神等も。相座に招奉らして。惡風努勿吹しそ。荒き水努勿溢らし。皇神の幸へ賜はゝ。初穗はし千稻引居。横山の置高成て。奉らむと拜み申し百數の大宮人の。參出つゝ齋ふを見れは。樂しきろかも。

龍田風神祭　光　賢

敷島の其大宮の。遠き代に初國知す。御眞木の天皇の。新代の始の間。天原雲路を閉て。風すらに往來無らし。天地の氣調はす。惡しき神悒かりけめか。時疫の相行はれ。人草の數多も死せれ。大三輪の神の心と。御誨の有ける隨。齋ひつゝ治賜へは。神氣は起らす成て。御世はしも安けく成れゝ。然れども大御寶の。穀物佃れる御田も。野に蒔る甘菜辛菜も。惡しき風損ひ破り。荒き雨降て萎むれ。年遍く然しも有れは。神隨思はし召く。天神國社と。神等を遺る事なく。持齋き奉りごたすを。如是損ふ神は。何云ふ神にか坐る。百千の物知人の。卜事に出むは其と。卜相事申させ給ふ。然れとも神の御心卜食に出以て來ずと。聞食し心安からす。思はして歎かせ給ひ。神等を漏る事無く。天ッ社國ッ社と。我御世に治奉るを。大寶作る。物をしも惡しき風吹き。荒き水に逢せて成す。傷るゝは何の神と。隱さはす悟し申せと。神床に誓給へる。其夜らの御夢に見らく。天下公民の。取作る。穀物をし片葉なる。小草に有も成すして。傷ふ神は吾御名は。天御柱國の御柱の神。我宮は龍田の立野。朝日の日向ふ國。夕日の日隱る岡に。宮柱定給ひて。我前を治賜はば。惡風愁無らむ。荒水傷ひ非し。穀物成幸へむ。大御代は豐饒に坐むと。事教へ悟し奉れゝ。毎年の四月の祭。時つ風雲居に吹て。苗葉を動搖し延ばへ。七月の後の齋ひは八束穗の莫々然ゝ爲と。仕奉る大御祭と。敷島の其大御世ゆ。劒刀皇子は更なり。刺竹の大宮人も。幣帛を捧參來て。倭なる六御縣。刀禰男女も參集はり。風祭り祈り仕ふる。事の宜しさ。

平野祭　大瀧光武

今木の大神はや。伊波禮毘古天皇ゆ。宇麻志麻治命に依て。令齋給ふ大神。布都御靈奇しき御劒。今木をば刺続らして。神離なす齋奉れゐ。其を以御名に懸せれ。白壁の天皇の。天津日嗣未知さす。潛龍の宮田村に在て。齋かせる山を以て。彌照の天皇も。玉敷の平安宮に。持齋き祀らしけらし。此祭仕ふる起り。石上神の寶庫に。御世々々の天皇の。御世累ね收給ひし。劒刀大刀小刀。種々の神ノ寶を。京邊に召上給ひて。御許近く坐まく欲しと。山城の葛野に移し。齋かせる時もこそ有れ。無故に御倉仆れて。

異しき事許太多かり。大神い懸り宣さく。當今の天皇の。御心と容易からぬ。寶庫をは動かし坐れ。天神に我訴さむとて。恚怒り祟り給へは。畏しと悔させ給ひ。願白し還し奉れる。跡處平野宮と。宮定め齋き坐けむ。言のみも名のみも留て。今木とし齋く御前は。草木も言問し時。山川の荒振る神を。掃清め國定てし。武甕槌神の御劍。神倭天皇の。三熊野の荒坂津に。毒氣に痒伏し坐せは。天照皇大御神。高木の其大神の。又更に罷向へと。事負せ給ひける時。我に代て降し奉ると。高倉下以て奉遣せる。奇異なる靈異き御横刀。大和には復り給へど。今木とし御名を留めて。玉敷の平安宮に。程も無き上林の平野には守給へれ。大宮の近き守と。持齋く神事見れは。大神の御言違はぬ。上代の多太き事實し。思ほゆらくも。

久度古開

天皇の神の守と。上林平野に齋ふ。相座の二大神は。大和平群に立す。久度神内膳司に。祝奉る三前の中の。竈ノ神忌火庭火と。並坐す平野件度と。大宮に齋く大神。一前を古關古開。由も無き御名を傳へて。佗名を云は誰が言。古開はし十種の寶。草恙み病しく有ば。此十の神の寶を。一二三四五六七八九十振へ寛々。寛々に振へと宣す。天神御言を以て。石上布留御魂と。齋來る神の御靈と。此にしも鎮るからに。相殿に鈿女命。亦名は大宮比咩の。鎮魂り始給へる。山を以て齋はれ坐れ。此を以て祝詞の狀も。齋戸祭の詞。比べ見て相も替らす。百不足今木神と。其々に石上より。祭來る事著明し。其神と四前を摠て。平野には祭らせりとふ。其の皇神。

六月月次祭　　俊　明

安見知し吾大王の。遠津神日知の御代に。神からし始給ひて。如是しこそ定けらしき。六月の月次祭。十二月にも二節なから。新摺の豊御穎の。御食つ物齋庭の穂とて。神授け依し賜けむ。天照す神今木とふ。政事開し坐くと。朔日の其生日より。日は八日を御贖祭。大御身を淸め給ひ。其月の初の日より。日並べて十日の御卜。大御身に令行て。前には大殿祭。後には御門ノ祭。先後に仰せ成しめ。三枝の三日の散齋。中つ日を致齋と爲て。忌男八男子有り。忌女八少女有り。襁掛る膳の臣。比襁掛る采女ら等。

種々の宮に儲て。朝の其大御饌を。平けく聞食すなべ。夕の其大御饌を。安らけく聞し食なべ。天社國社の。神主に幣帛分ち。祝部等に令祭らし。天津國高天原に。神留在す皇神。神漏伎と睦神漏彌の。命以て齋ひ依せる。高御座天津日嗣と。皇神の次給へる。御世次の彌年の毎に。月次の今木の御食と。聞召し行ひ坐れ。大嘗の御政事と。新嘗の其神事に。相並ぶ天津宮事。八百萬千萬神も。諾なひて守坐らし。天社國社と。晝夜に相幸へ。常しへに輔ひ奉る大御代は動く世非じ。國土は平穩に在む。月日の隈無き若已。年久に祝ひ來れる。祝詞言天語部に。依さずて直に傳はる。太祝詞事。

大殿祭

照井長柄

天知や皇太子を。高御座在せ奉て。天ッ神天津日嗣を。所知食せ神の命と。事依し奉れる時に。石根木根草の片葉も。言語て荒芒りしかば。言向て降し奉れる。天皇の神の命の。初宮を伊作奉り。大殿に鎮奉ると。大峽に立る大木と。小峽に立る小木を。齋斧を以て伐採り。齋鎌に荒艸木ノ根。刈退て平す磐根に。齋柱齋鉏以て齋部らか齋作れる。大殿を瑞の御舍屋。船とし御名を稱へて。其か任に神の神寶。靈代と齋く齋部が。天神奇し護言。齋はむと八尺の瓊の。御統に明和幣。曜和幣附て齋へば。敷坐る大宮地。地下底津石根に。至る迄下つ綱根は。昆虫の禍無けむ。青雲の靄く極み。天原御空高行き。飛鳥の禍無けく。柱桁梁等。動く事實非ざらむ。戶の錯鏁の錯も。鳴響く事し絕てむ。引結ぶ葛目緩ばす。取葺る萱も噪がす。天皇の神の御在所の。御床つ邊御許靜けく。夜目見れと稜威しからす。守り坐神の御靈を。久々能遲と木には鎮め。豐受と草に齋ひて。護言鎮奉れる。大殿の屋船神と。其體を以て號くれ。其用に預る御名を大宮賣神と崇めて。又更に稱ふる事は。大殿に塞給ひて。參來る人の選ひ。罷出る人の評。所知食し人は見えねど。神等の荒びば直し。伊参こび健れば和し。君臣の中取持る。天鈿女宮咩としも。相守り輔相負持る神の功の。本をしも知せる神と。足ノ坐せは。百敷の御門の內に。手ノ躓有ばこそ有。足ノ躓有ばこそ有れ。安けしと云むは常。寛けしと云むは愚。云も不得名も知ず。大殿に滿阻かれる。大神

の守の幸し。奇しきろかも。

御門祭　秀直

大殿の祭の因み。齋部の御門祭を。措並の次て仕ふる。神業の起元は。石根を引手力の。功以て岩戸押破り。大御神出し奉れば。太玉の神の。命の弱肩に襷取懸け。種々の齋部の司。任賜ひ伴長と爲て。彥狹知と手置帆負の。二神の仕へ奉れる。新宮に令坐奉り。大宮賣屋船神と。大殿に大宮仕へ。守坐し候ひ坐せば。御門には御戶開神。開閤る事掌坐て。百敷の衞門の府。左右持分衞る。事の如御名に係せる。櫛磐牖豊磐牖と。天にても御門の防ぎ。國にても御門の守り。湯津磐なす塞り在せば。日ノ宮の儀式を移して。高千穗の皇朝廷に。太玉の其神業と。仕來し祭に在れば。年中の四度の中祀。六月と十二月に祭る。御巫の神事有れど。其員の此は外にて。大殿の祭に屬て。御門にも祭らせるなれ。內ノ重と外ノ重の四方の。御門をば湯津磐成て。堅坐す神の御稜威の。四方八面に滿足はして。四方四角疎び見荒れ見。來る神に障り阻かり。出入の人の門々。家々の名々の人をも。問知し守り在せは。大宮の內は更なり。天下四方に足ひて。角さはふ岩根凝々しく。在立る事の如くに。守坐し明らめ坐を。何處にか隈門の有て。禍神の犯し入むよ。石門別神。

六月晦大祓　重胤

筑紫ノ海日向の小門と。天在や左々羅の小野に。身潔く事解除の法の。定りて天照國の。日御子に傳給ひて。高千穗の皇大宮に。大嘗の御禊始り。橿原の畝火宮に。夏冬の祓起れゝ。天下公民を。刑はぬ御政事と。祓召す大御使に。伴男を預遣し。國中の天益人。隱さはぬ清き心を。神隨明らめ給ひ。天罪國罪をも。過と見直し給ひ。贖物を置座に居。七相菅取割持て。中臣の太祝詞をは。云掃ゝ贖ふ罪はし。天地の神も受納き。祓戶の神相諾なひ。足曳の御山も清に。眞下垂り瀧つ速川。瀨織戶ゆ水門に出し。速かせは潮の八百會に。可々呑て氣吹き流離へ。天罪國罪はし。根國に底着き失て。天皇の大朝廷ゆ。百敷の官の邊り。四方八面の國の退々。行巡る海の隅々。遺罪在じとふなる。天津宮事。

鎮火祭

安見しゝ我大君。高光る我日の御子の。日宮に傳給

ひて。毎年に二度齋ふ。鎮火の奇しき祭太祝詞事擧爲らく。妹妖の二大神。相嫁繼御合給ひて。百八十の國生給ひ。八百萬神を生せる。最後の御眞弟子に。火産靈の神を生坐し。女神の御陰被燒て。石隱り其火徹りを。避給ひ七日七夜を。見行す事し無れと。禁むるに時もこそ有れ。此狀を見し淡めきと。忿怒り情耻かしと。御面をは合せ難々や。御心の思ひ成にし。下つ國我は知さむ。汝命知むは上と。別れつつ往す黃路の。平坂に思ほし召さく。我汝妹の知さむ國に。惡しき子を生て來にけり。荒びをば鎮めむ豫と。又更に返來坐て。尿放る水ノ神化り。尿放れは土ノ神化り。是を以て敎給はく。水神川菜を取し。土神匏を以て。此御子の荒ひ鎮めと。事依し定め置しさ。火の汚穢綾に忌々しも。迦具土の荒ひ鎮むと。六月と十二月の終の。晦日の夕日の降。御滌川其祓處に。罪咎の除り盡て。國清き時過さじと。大宮の外ノ重の隅に。齋火をば燧てし齋ひ。稱辭定め奉れれ。天下の忌火と云へと。穢るれば黃泉の穢火。火産靈の神し怨らむ。其事の過てらばし。迦具土の嫌ふ紛ひに。天下實善在しと。其鎮め齋く今夜ゆ。清まはる忌火牟須比の。御靈賜らむ。

道饗祭

葦原の水穗國に。手向すと天降坐けむ。天皇の神の御代より。薦枕高天原に。事始め定給へる。故事と傳はり來らく。夏の竟冬の終に。天津罪祓はせ給ひ。國津罪清め給ひて。天下四方國には。罪咎の除こそ盡て。御心の清々し時に。玉敷の都の圍み。四所の衢々に。磐村の五百重なす如。塞り坐す皇神等の。大御名を八衢比古。其妹を八衢比賣と。二前に久那斗神と。三柱を合せ齋ひて。稱辭事竟坐れ。伊邪那伎の其大神の。下津國豫美路に塞て。千引岩立て閇し。大御靈豫美戸に凝て。根國ゆ疎び來る物。底國ゆ荒び來る神。塞り坐御功在し。平坂の桃の眞枝を。杖として黃泉の妖神。防き坐す標に御立し。障ノ神久那斗の御靈。八衢に滿足はして。下行は下を守らし。上行は上を守らし。平けく齋給へと。天津神依す詔戸を。皇御孫の神の朝廷に。六月と十二月の終の。晦の夕日の降ち。告こたせ政りこつとふ。道饗祭。

大嘗祭

天原御空露かし。高光る日の大御神。大嘗の齋庭の

瑞穗。我御子に御せ奉ると。貴の御手以て依せれ。天雲に磐船浮て。日宮の磐門を開き。天降り國知しける。皇御孫の神の命。天傳ふ日向の國。高千穗に大宮柱。太しくも定給ひて。新世の初て知す。高御座日嗣の瑞穗。聞し食す其大嘗の。相嘗に諾ひ奉る。天神齋奉らし。國神齋始つゝ。悠紀主紀の黒木白木の。大御酒を汁にも。實にも丹穗なす咲ひ開して。豊ノ明リ明らし給ひ。御心の愛の盛に。情樂つゝ御世も平に。天津繼日繼の次。彌次に受繼坐て。所知食す践祚の年を。大嘗と祀給ひて。高御座太高知し。毎年の其新嘗は。所知食す御世の内にて。年次の次の業と。永御世を齋庭に計へ。聞し食す日繼の瑞穗。二月に御年初むと。皇神に申させ給ひ。其年の秋の初穗を。十一月の中つ卯日に。國々の社々に。献り豊御幣帛を。奉出し齋ひ給ひて。天地の榮ゆる時の。久方の天の足夜と。朝つく日昇る晨と。二度に新嘗聞す。相嘗に皇神等に。献り齋ひ給ひて。大御世は豊饒に在む。百姓樂しく有む。政事天津日繼の。御隆を賀ひ給ひて。天地と窮無けむと。大御神宣せる御詔。萬世に違はぬ見れは。神隨ならし。

鎮御魂齋戸祭

秋野重義

齋戸の此の祭は。瑞寶十種寶。底寶御寶主と。齋戸に鎮ひ振つ。皇御孫命の御魂。寛々に振ひ鎮むる。十一月の中つ寅ノ日。神祇官御巫猿女。相共に俳優き爲つゝ。瑞寶十の數をは。振動め寛かし計て眞十木綿に結ひ留たる御靈をは十二月の某日齋戸に齋へる祭天皇の大御壽を生麻なす長く久しく常しへに大座坐む生緒と齋き給へれ御眞木の天皇か御世に己が緒を盜み殺むの童謡を聞し給ひて禍事を遁ろへ給ひ水尾の帝の時に齋戸ゆ奪ひ出して大君を咒詛る事有り齋戸の八前神の大前に祭鎮めて齋はせる御靈に坐は諸々眞幸く坐む齋ふ大御身

鎮魂祭

長柄

天照皇大御神。岩屋戸に刺隱らせは。六合常闇なすを。新白し招奉らくと。天宇賣手草に結へる。小竹葉も騷ぐ計に。宇氣槽を蹈動かし。一二の言を延へて。甚樂し甚恂怜と。心足り十まて計て。歌へるも神懸りせる。舞へばかも石戸出けむ。鎮魂祭の起り。世中に是發なり。橿原の皇大宮に。神寶十種を捧け。

宇麻志遲齋ひ奉れる。其はしも中寅日。十一月に行ふ起源。百數の大宮人等。宮内の省に參り青摺の衣取裝ひ。眞木綿齋ひ取懸け。阿知女於介猿女於介とし。歌つゝ舞み奏み。天地の動る計も。鎮魂り振動かせば。天地に至徹りて。皇神の睦靈合て。心安く大座坐む。奇異なる此の御祭。著明く驗有とふ。此鎮魂。

大神宮祈年祭

二月の四日の生日は。新年の祭の足日。靈幸ふ神祇官に。國々の祝部を召て。天社國社の。幣帛を頒せ給ふ。其が中に五十鈴宮は。天皇の神の皇祖。八百萬神の主宰。尊さも並ひ無れば。殊更に驛使を。立給ひ遣し坐れ。驛路を驚蹕せ。鈴か音は下樋小川を。神國の堺と留め。多氣ノ川度會川の。祓戸に水潔を爲て。淸めつゝ進まひ來り。忌庤に入居て齋ひ析鈴の五十鈴宮の。大前に大幣帛を。先に立使丁に持せ御厩に奉る御馬を。後より舍人に牽せ。玉串の御門の外に。頸根突き八度拜み。手掌も檪亮にこそは。八開手を齋ひ拍けれ。中臣の祝詞を申し。宮司告刀を告れは。幣帛は東西と。相向ふ寶ノ殿に。大御馬は大御厩に。献り捧け畢りて。直會の庭に佇み。大御酒を賜ひ歡喜て。禰宜内人次の隨。大和舞奏白し。伊勢歌を歌ひ動みて。大宮の内にも外にも。饒ひ成す此神事に。五十鈴川淸き川戸の。夕浪も響き合せて。木綿花の匂へる時と。神路山山も轟みに。扶踈る五百重欄も。玉串を如て靡けれ山川の神も諸く來向ひて遊ふか如き。祭なるかも。

豐受宮祈年　　石井長之

大長谷皇大宮に。天下所知看ける。天皇の神の御夢に。大御神喩し給はく。天原磐戸押張り。見し國に鎮り坐ぬ。然れとも我耳坐せは。大御饌も安く聞さす。御饌津神止由居の神を。丹波より迎申して。我許に齋給へと。大御神乞しの任に。天皇の大命以て。度會の山田の原に。宮柱太敷立。稱辭竟奉らせる。豐受の神の御前は。大御神吾祭には。先立祭れと宣す。大御言例の任に。新年の祭よりして。幣帛は先に捧くれ。御使は先に參出れ。世中の青人草の。命續く豐受の神。八束穗の稻の。八百穎に立榮るも。悉く其大恩賴。千萬の木艸の皆も。悉く生立つ事は。皆からに其御惠と。大御神思ほし食て。其御許前に

祭らせ。御饌津神止由氣の神の。奉る朝夕の。大御饌は其御饌殿に。聞食す事と云なれ。諾しこそ此祈年の。渡遇の宮の。祭の前には有けれ。

神御衣祭　庄司照良

卷向の珠城宮に。天下知食しける。天皇の神の大御代。機殿を伊造奉り。八千々姫神の御裔。麻績服部二の伴を。事依し五十鈴宮と。荒祭神の宮とに。仕冬の御備と忌機の荒妙衣。和機の和妙衣。神御衣に仕奉れゝ。言卷は畏りれとも。勝速日神佐備坐し御荒ひの進る晋みに。天罪犯し給ひて。忌機の其神業も。生剝の爲に止てき。是以て日大御神。磐門閉隱給へは。相共に招奉らくと。荒和の大御衣の。事は未成竟ざるを。成し竟て奉れこそ。大御神諾なひ坐る。是以て皇大宮に。大御神齋ふ昔も。如此しこそ四月九月。神御衣を祭らしけむを。五十鈴川磯宮にて。整て奉出し初けむ。神麻績が齋ふ機殿。其後に移されけらし。皇我睦神漏岐の。御心と定まる例を。傳來て萬代迄に。年毎に奉るを見れは。神柄し尊く有けり。高機の五百機立て。織機の神衣祭。尊く有けり。

六月月次祭　秋野重業

度會の五十鈴川原と。外宮の度相縣と。掛卷も綾に畏き。大御神二大宮の。六月の月次祭。前ノ日は渡會宮。後ノ日は五十鈴宮と。十二月にも仕奉れと。大御神朝廷の例。前ノ日に禰宜内人等。物忌の子等も交らと。五十鈴川川門に降て。罪事を明らめ申し。清祓仕奉て。正殿に參り侍ひ。掃清め仕奉りて。八重榊齋ひ刺立。大宮の御垣の廻り。林をは餝らひ奉り。御饌稻を湯貴御倉ゆ。取出し浄め精けて。忌竈に炊奉り。志摩伊勢の神戸の御贄。取載る御贄机を。止由氣の神の御前に。取置て料理ごし奉り。黒白の御酒取並へ。大御饌を朝夕に。奉り其直會も。拆鈴の五十鈴宮に。御饌立と打なる膝は。大宮も動に響て。朝附日明る生日に。多氣宮齋王の。咲榮え向はせ給ひ。百敷の大宮使。宮司共に參出て。神主部物忌等。大前を八度拜む。木綿鬘安居に靡き。捧持つ太玉串も。八拍手の聲に響きて。天地に樂しき祭。大宮の内にも外にも。動み渡れり。

十二月月次祭　石田常成

葦原の瑞穗の國は。吾御子の所知む國と。言依し奉

給ひて。天降し奉給ふと。珍寶天璽を。取々し授け坐時。皇我か日嗣の初穗。聞し食せ神の命と。種物齋ひ依せれ。高千穗の皇大朝廷。初國の御政事と。國々に弘給ひて。食國を調給ひ。撫給ひ御世も平に。遠長く。所知し食來る。豐受の神の恩頼の。嘉禾の八束足穗の。初穗をば五十鈴宮と。度會と二大神の。神嘗に祭らせ給ふ。懸稻を湯貴ノ御倉に。齋ひ置日々の大御饌。獻り仕る中に。六月と十二月の。月次の大御祭と。定れる例の任に。十日餘り六日の生日は。豐受の宮の神事。翌日に五十鈴宮の。御祭の足日と爲て。奉出す祭主。二神の大宮司。神主部物忌等。大宮に參り侍らひ。內親王も齋宮寮も。其場に列り立し。年竟て初て來らむ。六月の月次迄と。一年を半年宛に領ち。二度に幣帛奉る。御祭に大祝詞言。神祝さき稱へ申さく。天皇の手長の御世に。生坐る御子は更なり。天下四方の御民も。平けく守給はむ。百姓作て食る。穀物豐にを有む。皇我親神漏伎の。大御言天津祝詞を。令申給ふ齋庭を。天宮顯戶押張り。見行し諾ない坐て。事依し奉らせ給ふ。大古の事思ほして。今世の大御榮を。嬉しみか聞食らむ。此御祭はや。

九月神嘗祭　　俊彦

天神皇祖の命。事依し奉給て。日御子を瑞穗國に。天降し給ける時。珍寶八咫鏡を。皇我御前の如く。齋かせと依せる御靈實。纏向の珠城の御世ゆ。足引の御山も清に。落沸つ五十鈴川の。磯宮大宮此處と。倭姫神の命を。御杖にて鎭奉れば。高行や白き眞名鶴。天翔り來居て鳴なる。其聲の異しくし有れば。其鳥の所を覓て。其狀を令見給へば。志摩國伊雜の方に。飛到り聲止ければ。葦原に八束稻有り。一本に千穗榮えたり。齋宮皇女の告さく。鳥すらも皇大神の。大御饌に奉ろふ物と。大年の社を定め。其稻を被穗に拔て。懸稻に奉出せりし。古の事忘れしと。大御田を定給ひて。我田には水草生ふさし。圭田に蛭住せじと。忌鍬を以て耕し。忌鋤を取て撥しめ。大神の御田作らして。神嘗の大御祭を。其時に行ひ初れ。三郡の御貢の荷前。處々神戶の御贄。黑木白酒二の御酒を。朝御饌に備奉り。夕御饌に仕奉りて。百姓取て造れる。八束穗の足穗の稻を。千稅餘五百稅懸て。九月の神嘗祭。幣帛は內藏寮ゆ。神

馬は左右馬寮の。奉出し仕ふる司。皇親の王使中臣は祭の使。相共に並發して。渡遇の大宮司。引列ね參り向ひて。齋宮其内親王の。中ノ重に候ふ跡に。神主部物忌部共内ノ重の御門の外に。玉串を取以て祭り。幣帛を齋ひ捧ぐれ。大宮に頸根突拔忌部らが其弱肩。に太襁懸て申すも。味凝の綾に畏し。天皇の大朝廷の。御掟式の變易る事無く。長秋に傳り來ぬる。神嘗祭。

豊受宮神嘗　　石寺直淑

度會の山田原に。宮柱太敷奉る。伊勢國豊受宮は。大神の御食津大神。大神の宮に准ひて。萬はも治め給ひて。其宮の御祭等。大神の前に仕ふれ。皇御孫の大御壽を。堅石なす齋給はむ。常石なす守給はむ天下四方の御民の。命續く宇氣護らせと。願白し祭仕ふる。九月の神嘗祭の。由紀の御酒由紀の御贄を。横山の置高成て。其神の宇氣の恩頼と。天津繼知す日繼と。國名に懸の宜しき。豊年の八束の稻を。懸税内にも。外にも。千税餘五百税懸て。奉出す其神頴を。茂穂の心足ひに。愛つゝか聞し食らむ。欣かしか聞し食らむ。大宮の調御倉も。物多に滿て榮ゆる。大御世は伊賀志の御世と。守らせる驗の有て。天下善くし調ひ。百姓豊に饒はふ。神嘗祭。

齋内親王參入時　　宮野直勝

瑞籬の大宮柱。太敷かす天皇命の。大御世に皇大神を。嚴檀が本に齋ひて。神籬を磯城に御立て。五百つ鈕豊鋤姫に。持齋き仕奉らせ。纏向の珠城の御代に。倭姫命を以て。大神を五十鈴宮に。持齋き奉らせ給ひ。書數ふ二ノ例の。長き代の例と成て。天皇の天津日繼と。知食す踐祚に。皇女を御杖と定め。大宮の内に一年。皇京より外に一年。齋給ひ愼み給ひ。否醜目佛を中子。死をば直る等と。七言の忌詞有て。内と別外と告分て。嚴重に憚り給ひ。卜定へば河頭の祓。臨行に河頭の禊。事竟て齋ノ宮に。參向ひ仕給へれ。都には勿赴きそと。詔給ふ御命持して。立奉る御杖に坐せば。天皇の御世代る迄。大神の齋に坐り。大御世の久しく有れば。内親王の齋きも長し。大御神守の隨意。天地と日月と共に。皇御孫の御世長けむと。禮實を齋ひ捧て。茂枠中取持たし。中臣の祝ふ壽詞は。君が爲こそ。

奉遷太神宮　　昭良

百八十と國は多けど。神風の伊勢國は。重浪の來寄る國。輛ノ音の聞えぬ國。傍國の可怜御國と。大御神頭戸押張り。天路より見渡し給ひ。五十鈴川清き川戸に。大御心靜坐と。大詔命誨し給へば。山口の神相諾なひ。宮木をば許多奉出し。菅野姫御靈幸ひて。高萱を莫太奉れゝ。八十伴の官を任て。齋斧を伊取取しめ。齋鉏を伊取々しめ。五十鈴原荒草木ノ根。苅掃ひ大石小石。庭平し眞木の大木の。本末を齋ひ切斷ち。中間を天御柱と。齋柱太敷立て。宮定め仕奉れる。拆釧五十鈴宮と。大長谷神の御世より。丹波なる與佐の神をば。足曳の山田に移し。外宮と稱奉れる。度會の其大宮と。玉匣々大宮は。木綿花の榮在して。望月の滿はし宮を。飛鳥川淨の宮に。天下知食ける天皇の大御心と。二十年に作改め。瑞宮の新大宮を。仕來る例の隨。古の迹を易せず。御裝束を五十種餘り。神寶二十種餘り。横山の横る成て。立奉り齋ひ収めて。右ノ物左に移さず。左ノ物右に移さず。有し任に本の如くに。移ろはし奉給へれ。朝附日日照む限り。夕附日御照す極み。常しくに傳はり行む。神の朝廷は。

遷却崇神　　常成

天照皇大御神。皇我貴の大御子。皇御孫の御子の繼繼。葦原の水穗の國に。天照す日繼所知せと。天降し依し坐時。千早振る神等澤なり。荒振るや神等多かり。何れの神か遣して。其國は言向ましと。神議り爲さす御旨を。負持て國形見せし。皮薄穗日命。天放る建夷鳥と。二神は國作らしゝ。大神を媚て鎭むる。其事を竟ずし有れは。復命申し後れき。其國に惡しき神共。喧けりと所思し定め。健き神天若彦を。今更に征伐の使と。波士弓を手握り持せ。眞鹿兒矢を手挾み取せ。天降し給ひけれども。其國の諫ふる神に。交こらえ國得てましと。負氣無き心を起し。歸らむの思ひも無に。八年迄猶豫ひければ。高津鳥翔り問しむ。啼聲の善からぬ鳥ぞ。射殺せと云ふ狂言を。言善しと相口會て。返矢の爲こそ終に。忽に身亡けらしき。經津主と健雷の。二柱既に討平け。石根木根言語ひ止て。宮柱太高敷す。高御座高知る天の。御舍に祟り坐神。大宮の内に勿住そ。山川の清き地を。吾處と主領き坐せと。天つ神高天原に。事始め定め給へる。法言を此にし演て。神直日

直し給へと。皇御孫の遷す神事。漏落る事も有むを。大直日直し給ひて。自此は四方見露す。山川の清き地を。吾處と其處主領けと。奉出す其幣帛は。受坐ぬ神し勿らむ。玩に物とし奉る。眞玉なす委曲に開て。荒び坐す心和らむ。鏡なす見し明らめと。劒太刀疾くも所知せと。種々の物等に寄せて。狀々に穪事爲れ。天神御量以て。愛しき青人草の。苦瀬をは救ふ神事。天皇の傳給ひて。大寳調へ給ふ。政事神とは申せ。如何背かむ。

遣唐使　　內藤昌蓮

足姫神の命。西海穴門國の。小山田に忌宮を。立給ひ大御身親。神主と成て齋はり。高幡を千幡立。琴頭に琴尾に置き。御誓ひを申し給はく。前の日に天皇に。御悟の有ける神は。誰の神の心ぞ。大御名を知將く欲しと。請白し請はし賜へは。橘の小門の水葉も。稚やけく出居る神。上筒男中筒之男。底筒男三前の神と。事敎へ御言告せれ。著明き命を得ては。默止有む事は畏し。手拱て何故有めやと。御軍を誘ひ賜ひ。大御船艤ひ發して。少女の眉引成せる。國をしも召給はむと。直渡り渡り給へは。三柱の大御神等。舳に艫に御立し坐て。和御魂御身に服はり。荒御魂御先鋒と成て。大御船御手打掛て。天傳ふ日の入方に。速々と導坐せば。時の間に到り着せれ。弓矢をは。千重に圍み。劒刀手握り持て。打向ふ事しも無きに。久方の天壓神と。奇異なる大き御稜威に。自然摧かえけらし。諸の韓の王等。忽に奴と爲て。御軍に伏ひ來れ。是を以て內官家と。內屬ふ國をら定め。天皇の遠の朝廷と。日本府を置て。其餘も許多有とふ。四夷八嶌も天皇の知さむ國。天皇の使はす王。御馬飼と出て參來ね。內人と來り仕へと。勢ひを示し給ひ。事竟て歸り坐時。住吉の其大神の。荒御魂押へと成て。足引の山田に齋き。和御魂守と爲て。渟長倉の大津に令坐て。往來の船路の神と。宮處定奉れゝ。諸越の唐の戎に。御使を賜はる事は。其國に成出る物等。朝廷邊に貢參來れ。其國に成れる物事。皇國に聞え上つゝ。御定を請けとに在らし。船居は神の御業と。住吉の三津をし以て。船居の所と成しゝ。薦枕高津宮の。故事を所思し出て。住吉に奉る幣帛。栲衾新羅の國を。言向の其迹をしも。此にしも用ふるならし。其馭戎。

出雲神賀詞　光憲

八雲立出雲國の。造が都に參で。內日刺大宮內に。伊豆の眞屋祝て作らひ。伊豆席清菰敷て。二宮の神の禮實。其臣が奉る禮實明神天皇命に。奉り齋ふ賀詞は。高天の神王命。天下依しける時。遠つ神穗比命を。國體見に遣しければ。天翔り復命申さく。豊葦原水穗國は。石根木立言問成て。喧く國荒ぶる國そ。然ども言向てむと。夷鳥の神の命を。導にて布都の神をは。天降し荒振神を。撥平け國作らしゝ。大神も鎮め和して。現事御孫命に。事避し奉らしめけれ。大神の申上らく。皇御孫の大宮敷む。大和國と申て。和魂を八咫ノ鏡に。取託て御和の御諸に。御子神は葛木奈提。飛鳥の飛鳥杜と。彼此に鎮り別り。御尾前の近き守と。貢り賜ひ置して。八百丹よし杵築宮を。日栖宮と靜り坐せれ。是に親神魯の命。汝天穗日の命は。大御世を手長の御代と。常しへに齋ひ奉り。茂世に幸へ奉れと。事仰賜ひし隨。御祭を仕奉りて。天路にし返事をば。白しける次を以て。夷鳥の神命は。大神に仕奉りて。其代より出雲の臣と。高千穗の宮に參入て。神吉詞奏し齋へれ。禮實の御幣の寶。白玉の御白髮坐む。赤玉の赤らひ坐む。青玉の水江玉の。行相に明御神と。天下に照臨まさむ。御横刀の廣らに堅く。大御世は長く坐てむ。倭文幡の心も慥に。天皇の大座なむと。現人の神の大御代。天地と長き例を。天照や日月と共に。其次繼て仕ふる。事の宜しさ。

當日行事

謝座　宮野直勝
散米　一同
身滌詞　宮野直勝
太玉串　一同
拜風神詞　宮野直勝
拍手　同
神降告刀

アハリヤ此天ノ八重榊ノ太玉串ヲ　ヒモロギナス刺立テイハヒマツル神クラニ　天ツ神チイホヨロツ國ツ神チイホヨロヅ　天ツノリトノフトノリトノミフミニシルシ　四時常ノミマツリ時ジクノ大御マツリニ　アヅカリテイツカレタマフ　天ツヤシロ國ツヤシロノ皇神タチ　天ノ石門ヲ押ヒラキ

八重ノ雲路ニ磐フネヲ浮居(ウケスヱ)マシテ　アハリヤ天降リヨリキマサネ　アハリヤ陸(クヌカ)ヂハ御マニノラシテ岩根木根フミサクミネ　海ツヂハ浪ノホヂフミ直(タヾ)ワタリ　ワタリキマシテ天地ノ神相トモニ　此ケフノ生日ノ足日　ミテグラマツリ大ミアヘタテマツラクヂキコシメセ　アハリヤケフハイカナル生日ゾモ　天ツノリトノフトノリトノ　トキゴトブミヂトキヂヘテ　イハフヨゴトヂ天地ノ神相ウツナヒ　ヂコシメス　天ノ足日ニ　天地ノ神相サキハヘ　大ミタマタマハラム日ノ生日カモ足日ナルカモ　アナアハレアハリヤウマシマツリナリ　アハリヤツドヒキマセスメカミクヂモロヽヽアハリヤヽヽヽ

神供

祝詞講義	大瀧光憲
洗米熨斗	秋野重義
白酒黒酒	大瀧光武
御饌	大瀧光賢
御水	清室俊明
鏡餅	照井長柄
鰭廣物鰭狹物	庄司昭良
同	秋野重業
同	鈴木秀直
同	石田常成
同	羽田俊彦
同	内藤呂運
奥津菜邊津菜	礒部守常
甘菜辛菜	大瀧光倫
菓	石井長之
同	石寺直淑
同	三浦經邦
頌題連署	松山紀民

次着座天津祝詞十二度　一同

直勝拍手退下

重胤着祝詞座

開手八段拜八度　一同

告祝詞講義竟宴之由於神祇詞　鈴木重胤

開手八段拜八度　一同

畢一同退下

直會祭

謝座

散米　宮野直勝

太玉串　同

短手二段拜　一同

告刀　大瀧光憲

八十日日波在止毛今日乃生日乃足日乎吉日止卜定氏神御座齋清米仕奉利神籬立氏稱辭竟奉留天社國社乃皇神等乃大前爾恐美恐美毛白賜波久穗積朝臣重胤伊祝詞講義乎著述志仕奉留其功竟留多賀乃御祭仕奉留次々其直會仕奉止久爲氏其祝詞式爾在留祭ノ名乎題爾頒配利氏種咏出氏聞上奉利此場爾候布人共毛諸共爾手掌毛樛亮爾拍上氏惠々良々爾歡喜咲樂氏神遊仕奉平久安久天地乃神等諸相諾奈比給閇止藤原朝臣光憲愼美敬比恐美恐美毛白賜波久止白須

祝詞講義竟宴歌讀者　同

御酒賜　秋野重寳

御贄賜　本間篤功

洗米熨斗　宮野直勝

一同頂戴

神送告刀二度　宮野直勝

アハリヤ此ナホラヒノ　豊ミキナタマヒヱラギ　豊ミケナタマヒタヌシキ　コノサマナ見タベ聞タベ悦コビタベ　モトノアラカニ天ガケリ國ガケラシテ　幸行テ　シヅマリツヽモ守リマセ幸ハヘタマヘ　アハレ　アハレ　アハレ　アハリヤアハリヤ

短手二段拜

畢一同謝座退下

次解齋一同讌樂

神事奉行　大瀧光賢

直會職事　鈴木秀直

以上

嘉永四辛亥年八月令清寫俊明書之同九月十一日於賢木舍大瀧光憲姪光賢及照井長稱宮野直勝等校之予亦閲畢

巖櫃本主人

室松岩雄

保持照次

井上頼敎　校

信田重並

十三年二月廿八日印刷
十三年三月五日發行

定價金參圓

編輯者　室松岩雄
東京市麹町區飯田町五丁目八番地
發行者　三里半七
東京市京橋區弓町廿四番地
印刷者　高塚慶次
東京市京橋區弓町廿四番地
印刷所　三協印刷株式會社

東京市麹町區飯田町五丁目八番地
發行所　國學院大學出版部
電話番町五百五十八番

國學院大學出版部